現代日本文學全集
XXXIV

歷史・家庭小說集

杉浦非水裝幀

改造社版

村井寛

「歴史・家庭小説集」目次

総序

歴史小説と家庭小説とは、明治文學史中の謂はゆる「最も面白い頁」を構成するものである。前者がその取材の關係上より多く舊幕趣味に傳統を有するに反し、後者は女子教育が進んで、家庭や戀愛が「神聖」視さるるに到り、婦人が文字に眼をあいた結果、創成を促がされた新文學である。

歴史小説の創作に生涯を終始一貫した作家は塚原澁柿園であつた。彼は自らも「兵馬倥偬の間に人となつた」と後年に述懷してゐる位だから、血の中のどこかに武士の魂が脈打つてをり、自然歴史小説に於ては後人の追隨を許さぬ獨特の境地を開拓した。外的に事件を記敍する側の歴史小説は、彼に於て最高頂を劃したとは一般の定評であり、明治に於て一時途絶えんとしたロマンスは彼の隻手に依つて辛うじて支持されたと言ふも、決して過當の褒辭ではない。

澁柿園以外に歴史小説を書きたるものは、龍溪、鳴鶴、南翠、美妙、紅葉、露伴、綠雨、學海、三昧、櫻痴、弦齋、浪六、麗水、水蔭等、必ずしも少くはないが、中に於て最も異色あるは勿論村上浪六である。

浪六の出世作は『三日月次郎吉』で、その、初め「報知叢話」に現はるるや、世は露伴の匿名ではないかと疑うた。蓋し、氣魄の迫る事強き點に兩者一味相通ずるものあつたからであらう。その後彼が矢繼早に出したいはゆる撥鬢物は、一時讀書界の寵を獨占して、硯友社をさへも後へに瞠若たらしめた位である。本書に收めた『元祿女』は中期の作で、或は世評の高きことに於て『三日月』に及ばぬであらうが、筆が老熟して初期の生硬と稚氣とを脱し、今日から讀んでは遙かに此の方が面白いのである。それに浪六の中から、珍らしくも女性を主人公にした作を選んだのは、澁柿園の作から男が中心題材となつてゐる『由井正雪』を抽いたから、それと照應あらしめようとの、若干の心遣ひからも出たのである。なほ浪六には『當世五人男』『八軒長屋』など、別の一面のある事を見落してはならない。

家庭小説の呼び聲の特に評壇に高かつたのは、明治三十年代の前半期で、蘆花、北星、幽芳、掬汀などが既成文壇に於ける主な作家であつた。併しその頃は新聞紙が常に懸賞小説を募集して、新作家を紹介し、そしてそれが文壇への有力な登龍門を形式した。

その懸賞小説の中で最も有名なばかりか、よく明治文學史に不朽の名を留めてゐるのは中村春雨の『無花果』である。基督教をわが文學に初めて有效に用ゐ生かした清新さは、今日と雖も大して銹びてはゐない。頁の都合上本卷には收め切れなかつたが、讀者もし大倉桃郎の『琵琶歌』を讀まるるならば、當時の懸賞小説の雙璧を併せて鑑賞することになるであらう。これは部落民の悲劇に著眼したもので、家庭小説のマンネリズムをなした常凡の戀愛談とは自ら選を異にする。

併し、もし、たとへば澁柿園が歴史小説に於けるが如く、その長き生涯を、家庭小説に殉じ切つた人をと求めるならば、村井弦齋をおいては、他に斷じて無い。彼の名を高からしめたものは『小猫』『日出島』『櫻の御所』『食道樂』など、十指を屈するもなほ餘るが、この『小松嶋』は彼が晩年、漸く小説壇に筆を絶たうとする直前の作たる點に異色があり、殊に今迄單行の書册となつて現はれた事が無いので、この集に特に收めることにしたのである。

由井正雪

塚原澁柿園

由井正雪

（一）

「大事ぢやは〳〵。彼騒擾は強訴おざるは。」

「見た人數は百四五十人、一手は今御山御門番が陣屋に寄せて、一手は此處へ推參するげに見え申す。」

七月の炎天、燃るが如き燒砂を蹴立てゝ、物聞の足輕兩人、息も繼ぎあへぬ注進の間もなく沖に轟く土用波の餘響に合せて吹々といふ吶喊、間々に聞ゆる竹螺の音。素破といふ間に、菅笠に身を固めたる血氣の百姓七八十人は「御願ひ、お願ひ。」「御助け、お助け。」の諸聲の裏に押し來りぬ。

押し來れるは駿州有渡郡大谷村の東端なる、大庄屋なにがしが家、今の足輕が主なる武士の旅館前なり。

奥の方には主なる壯き武士、

「ナニ强訴……寄すると言ふか！」

再回とは問はず、床に飾れる具足櫃より紺絲の小腹卷取て投げ懸け、緋羅の帷子を其上に套りて、長押に倚せたる九尺柄の槍を小脇にしたる、其人の年紀は廿五か六七なるべし、面の色飽まで白く、髪青く、脣紅ゐにして、天晴稀代の美男なるが、甫るに似ず、脊材は偉く、腕の肉硬くして、帶びたる兩刀も寸延の長刃、槍柄も日向樫の把握を太く、鐵具しげく製作せたり、加之も其の意地强く、耐へぬ氣象は、緊束りたる口元、勇氣を持てる眼裏、濶達を見せたる眉宇のかゝりにても知られぬ。

此の面貌と、身の道具、人馬の強健さとにて推すれば、此人大家の小姓立にて、殿の御寵と、其身の器量とに登庸られて、物の頭、奉行ともなりたる仁か？

觀る目は違はず、昨日建てたる此門の新らしき標札を見れば、此人は是れ、紀伊殿御内の牧野兵庫……もとは金彌とて、大納言殿（賴宣卿）御寵愛の小姓なりしを、目今は安藤三浦竝になされて老職の一人に召加へられ、權勢飛鳥を墜すばかりの出頭人なり。

馬牽ッ！ といふ言の下に、栗毛の駿足は牽立てられぬ、兵庫忙しく其の鞍壺に跨がる時、「御願ひ、……おざる、お願ひでおざる。御救助のお願ひ……御情のお願ひ……。」諸の叫號ははや門前に迫り來りて、鎖したる門扉を撲敲く響、板屋の霰と凄じきに、家内の男女は疾に逃失せて一個もあらず、殘れるは兵庫主從廿餘人、其餘は御宮久能山東照宮御修覆の御用として召作れたる大工番匠石鐫の工、なれど此等は事變の初發より頭を埋め脊を窄めて、只怪我せじと念ずるのみ。「ラヽ大門開い……奴原、推參！」勇める主に飼立てらるゝ家來とて、臆れたるは無かりけり、馬脇の士兩三人ばら〳〵と走り寄つて大門颯と押開けば、得たりやと大勢、むらむらと入らむとして、但見れば、馬上の兵庫、丹花の脣を一文字にして、黑漆の如き眉を蜂谷の上まで撥揚げたり、手にせる槍は我を芋刺にせむずる撲勢、左右に附隨ふ家來們も、新宮育ち那智生れの死生知らずといふ面魂、閾の中へ其の泥脛一寸とも踏込まば！ と疾視へ詰めたる……。

此の鼻嵐に噴かれて門外なる脚底は漂蕩きぬ、「こりやならぬ、迂濶と入るな、後勢を待たうぞ後勢を待たうぞ。」小頭らしき者は走り廻りて制すれば、後陣が中に叫喚く聲連りに發りて、「三四郎べえ呼べ。安居の背兄さ呼べ。」こ

こに此の嗷訴の來由を尋ぬれば、去年、寛永十九年、關東筋大旱魃して、伊勢以東、相模以西は田畑の立毛皆枯れたり、かくて七月の中旬より打翻したる陰霖の降り續けるもの、月を踰ゆれども歇まず、海道の川々悉皆く出水して纔に遺存れる作毛を押し流す、これによりて今年東國大饑饉とは聞えしに、其の翌年(廿年)は又春の季より瘟疫これらの國々に流行れて、人の病み臥すもの其數を知らずといふ。江戸柳營にても此の注進に驚かれて、救恤の使者を派遣し、所在の倉廩を開きて、飢を賑はし、醫藥の施行、さま／＼の手を盡さるれども、去年を承けたる今年なり、其事意の如くに行はれで、人心自然靜穩ならず。かくてはとの又僉議ありて、普く御領の國々に令し、反別壹升の過米を出させて彼の救恤に費えたる粮米の不足を補充しめらる、纔に疫に憊れたる人民、ひたすら其の難義を訴へたれども、有司は何の警戒むる處かありけむ、斥けて用ひず。然るに當國は、駿河の名におへる富士安倍藁科の川々の洪水に去年は暴され、今年はまた八丈島より潮風に乘りて來といふ疫鬼に祟られて、住民の難澁他所には逾えたるに、年貢御免とこそあらね、結句は過米を徵發るゝことゝたとひ首を斫さるゝとも能はじ、といふ數回の愁訴、其が聽れぬ果の、竟に此の嗷訴とはなれるなりき。

（二）

彼等の門内へは討ても入らず、此方も出でゝ蹴散さぬに、閾一つを敵味方の境界にして睨まへ合うたり。と看る／＼、平松の方よりして同じ蓑笠を身に着けたる、彼等が同類の一人と見ゆるもの、喘ぎ／＼走せ來れるが、其奴は聲を高くして、「無禮せな、其の御衆べえ手指しては濟まぬぞ。退け／＼。」

彼等が中に叫聲は發れり、「や、背兄が來た。三四郎が來た。」「已に任せろ、お主等は退けお主等は退け。」言ひも敢へざるに彼は竹笠をかなぐり棄てたり。

看れば其齢三十左右なる、鼻隆く、眼鋭く、一癖ありて見ゆる壯者。蓑の端を背後へ刎ね除け、一通の折掛狀、表面には御訴と筆太に認したるを青竹の尖に挾みて高く揭げ、さりともと危惧みて、待てろ／＼と支撑へむと袂を捉る許多の手を右左りへ拂ひ斥けつゝ、「やア殿方、聊爾ばし申さぬ。紀伊國様御家老様と見申この御願ひ。三十四ヶ村數百人の男女に代りましての御願ひ。安倍村の三四郎、兵庫様、御前へ出でゝ申上げまする仔細でおざる」と大音聲の大息切たる、其面には必死を見せたり。

驚破曲者！ 遣るな、止めよと牧野が馬脇はむら／＼と寄る。我が大將の取擒られぬと見て門邊に渦卷たる一揆等は、これを掩護むとどやどやと入る。叢々と混々とは一轉瞬間に衝突して、一場の亂戰、血雨の今や降らむと見る處に、「えゝ來な／＼。こゝは已一個！ 一個に任せろ。三四郎一人死ねば澤山ぢや！」かの青竹を遮攔にして押し戻す。這の理態を見たる兵庫、「やア汝ら待て。素奴まづ拘け！」

押戾されたる百姓、制止られたる馬脇、心ならずも然と分れて、寸後の容子伺ひと、又かの門閾を境にして疾視み合ひたり。兵庫は聲高く、「其處な三四郎とやらむいふ奴、申すといふ仔細は何事ぢや。」

馬の鼻に額づきたる彼の壯者は、先づ感激の聲を搾りつゝ、「あ、殿様、忝じけなうござります。御尊問、有難う存じまする。仔細、私不調法の口から申上げうより愚筆で認めましたる訴狀がござります。何卒これ御覽下されて……」

「むゝ、これへ遣せ。」

訴狀は兵庫が手に入りぬ。彼は槍を其馬の平首に引つけたる儘、表包を捨て、弓手に押開き、彼面を一目、此文を一目、鋭き眼に覽較

べつゝ、聽てすると〳〵と讀み了れり。
讀了りて兵庫、猶其狀を口裏に誦するやうなりしが、「三四郎、汝は不屆なる奴な。身の難澁の是非なしとは言へ農民の分際として天下の御政事を批判する……剩さへ御禁制の強訴を企つる……汝、御法の重いことを知りをらぬか。」聲色の猶激しきを見るより、馬脇は又も素破と眼を注ぎて手樂煉ひけば、門外は再び吶と喧噪き立てり。三四郎、此彼を一睨して、「存じ居ります。存じをればこそ一命は無いと覺悟してをります。」「ふむ、一命は無い？ 覺悟した？ 汝、それ程の覺悟で何故徒黨を組む？」「いや、三四郎徒黨は組みませぬ。訴狀にも見えたる通り、此の強訴は私一人の發意にござります。三十四ケ村の男女に代りて三四郎一人の致す所爲にござりまする。」馬上の人は耐へずして大喝せり。「やツ甘にすれば乘勢る奴！ 紀伊國武士を盲目にするか！ 先刻よりの門外の奴、彼等、何者ぢや！」礑と睨られても彼に臆せず、居丈高の毛胸を披きて丁と撲ち、「殿！ 彼等は彼等、我等は我等、徒黨も組みませねば申合せもせぬ、紀伊國樣御家老、御目明と存ずればこそ斯くは申します。」「えツ又しても兒童を瞞す……」「いや虛妄ではない。御領は違へ、駿河の者別して

は久能の御山御附の民、大納言樣御一家の御恩忘却のもの唯一人もござりませぬ。これに依て此の御訴も、紀伊國御家老たる御身樣の御着を待て申出まいた義にござりまする。」

（三）

紀州の家老、目明といふ謎語も、徒黨を組まずとの辯解も、此男、あの大勢の老若にかはりて身一つを抛げ出したる覺悟の口なるは既に解せたり、其の健氣さも殊勝なるが、さるにても我主なる亞相殿賴宣卿駿河遠江の御所知を替られて今の紀州に移らせ玉へるは、はや廿五年の往昔と聞く（賴宣卿、慶長七年の誕生にて、當時襁褓の料にとて駿州久能を賜ふ。翌八年常州水戸に封ぜらる、廿萬石、同き十四年水戸より駿府に移り駿河遠江二國を領せらる、五十萬石。元和五年駿府より紀州和歌山に轉らる、紀伊幷に伊勢にて五十五萬五千石。此の移封元和五年より今年寬永廿年まで廿五年。其の長久き間、彼等が餘澤を忘れずして仰慕し奉つること如是きは、そも什麼なる善政や施し玉へる、民を視ること傷めるが如き御慈悲は現今とても親しう見まゐらするも、是は又た今更なる奇談かなと、「やをれ三四郎、不思議を聞くぞ。汝、大納言樣御一家御芳恩を忘れぬから、猶其の御手にすがりて一同の難義を救はうとか？」問ひ懸くる兵庫の眼裏は、やゝ緩和びぬ。三四郎は語に無くて、首を低れたり。

「むゝ、お尊、紀伊國殿御恩といふを、それ程、眞實、忝けなく、目今も念ふか？」「存じまする。親子一家再生の命の親樣！ 寢た間とて忘失ませぬ。」

兵庫甚麼とか思考けむ、持たる槍を憂乎と棄て、彼の訴狀手にしたる儘にして、馬上より飜然と下り立てば、家來は急ぎ床几を直しぬ。

「三四郎近う寄れ。我殿を命の親といふ、其の仔細？ 次第によつては兵庫、其方らが後楯となつても取らせうぞ。」夢みし如き面色にて、三四郎は彼の面を瞻仰しが、「いや、心急ぎの場、御禮は後から……。先づ其の仔細。」彼は些しく身刷しつゝ、語り出づる其次第は、元和三年の秋の事なり。此年伊豆駿河二ケ國は昨年（寬永十九年）に等しき大饑饉して、豆、芋の葉は言ふに及ばず、山には葛萆薢、海には貝藻の類も搜索盡くしつゝ、人々は枕を竝べて餓死を待つのみの事となりしに、一日村の行人來りて、家内の者皆出でよといふ。三四郎の父母なるもの驚きて踊り出づれば、一挺の女駕に召されたる上﨟、其の駕脇の士して一人宛二升の米

麥を與へられ、悉くして村内殘りなく賑救されて御通りなる。彼方は、そも誰か、神か佛か、と俯拜む傍に村長來りて、お主ら知らざるか、あの御方こそ勿體なくも御領主樣御母親樣養珠院の御方、この程より中將樣（賴宣卿この時參議從三位左近衞中將たり）に御强求ありて、御化粧料二千石を五ケ年が間御庫より御借りなされ、難澁の我々をこの樣に御救恤下さる、今の御米、一粒だも粗末にせば、それこそは御罰が中るぞ！」……斯樣に觸れて去なれました。其時には親父も母も聲を發げて——子供の私さへ、一所に涕泣まいた。」と語ふ瞼には、古を想ふか、今を悲むか、ぽろ〳〵との涙を見たり。兵庫も覺えず感歎の首を傾くれば、馬脇廿餘人も耳を澄して、門外なる大勢も闃然となりぬ。三四郎は猶土に手をつきたる儘、「其後間もなく御小屋が懸りて、御粥の御施行となりまする。翌年は御年貢御免。其の翌年は檢見衆が見廻られて半個の上納といふ、其の七月……」門外なる大勢は、此時突如聲を揃へて、「……御知行替になりましたはよ！」三四郎又引取りて、「御跡に渡せられましたは……あの大納言樣――大納言樣とは、今の將軍家（家光公）御弟、駿河殿とて世人の懼れし忠長卿なり、此處は我も知る、寛永九年に大逆の罪をもて御身上減却に及びたる程の御方、聚斂、酷虐、其の徵發の苛重かりしも知れたる事なり、菩薩の後に鬼を得たる彼等が苦惱、そも甚麼ばかりぞ、と兵庫愁然たる眉を皺めて、「何とありしぞ、其の御成敗？」——申す迄もおざりませぬ。なれど其の御時代より猶苛酷いは、今の酒井殿……」「えッ御城代の御支配、非理いとか？」兵庫が未だ言ひ斷らざるに、彼處なる百姓原何物にか驚きたる、群鴉の噪ぐが如くに門內指して動搖き入れり。

（四）

三四郎は呵呀と愕く、兵庫、何事ぞと床几を放ちて門外に走り出でつゝ、但見れば、是れ先刻の注進が、御門番の陣所へ寄せしと云ふ彼等が仲間の人數なるべし、看る〳〵五七十人の百姓原は蓑笠も四度路に、久能の山の嶝沿を此方に對ひてさん〴〵に逃げ走る。其後より源氏車の小旗を振りたる一隊の兵、勝鬨いかめしく、突棒刺又槍長柄の獲物々々を手々に執りて、兎狩か等のやうに叩き立て捲り立て、一頭も遁さじとの勢もて逐ひ逼る。其の追擊を馬手に看做せし今一隊の人數百人餘は、切火繩の小筒十四五挺を眞先にして、海際の眞砂路を眞一文字の此の大谷村をさして寄する狀なり。「やア、彼は誰が手ぞ？」後に續きて馳せ出でたる三四郎、「山手のは御門番の榊原殿が手。海邊のは今申した酒井殿衆。」「むゝ事は急ぢや。さりとてお事ら……寡らすも可愛い。遁い、遁げい。」三四郎は連忙しく、「滅層な！……滅層でない。お事ら紀伊國を賴むといふ、紀伊國の牧野兵庫賴まれた。疾う落ちい！」慨然たる兵庫が面を瞻上げ、視下し、「あ、忝けない、御芳志は生々世々！然りながら落ちたとて迚も遁れませぬ、遁れぬを遁れうとすりや殿樣御難儀は眼前。其れよりも最初の覺悟通り私が身一個大勢の命に替ります、それ本望ぢや。訴狀は御手、思ひは置かぬ。駿河男兒の意地も覽て下されい。」

什麼其の決心の男らしさよ。其の男らしき決心の什麼彼們主從が胸を擊ちたるよ。彼們は只張裂るばかりに其目を見合せ、洟を啜りて、其瞼にはら〳〵と翻せる涙滴を拂ひも敢へざるに、音嚮は忽諸耳朶近く來れり。「遁、奴原、紀伊國殿御家老旅館へ入り替ッたぞ……擊て取れ！」頭人らしき士の下知に伴れて、先手の鐵砲ははたはたと火蓋を切りぬ。無法に驚く陣人より、堪らぬ兵庫が馬脇は吶と叫纏ぬ。「ヤア粗忽！紀伊國の士こゝにをりやるぞ。勞聯爾！」

鈍栗眼、附鬚、大奴頭の角鍔、何さま一揆とは見えざるが躍り出でたるに、寄手は倒ッて呆れたり。「こりや如何ぢや、強訴人と紀伊國衆と一緒になッたは！」叫纔く雑人原が背を搔き分て、現はれ出でたるは頭人なり。「是れは御城代酒井山城守が老黨、根方彌五兵衛。昨日の御案内にて承知いたいた、紀伊殿御家老牧野兵庫どの此家におざるか？」

彼の口前は禮ありて聞ゆれども、既に是れ個光景なるに些とも油斷せず、其身の周圍には、此方のにも劣らざる倔強の大奴七八人を五の目に立てゝ、乗馬をさへ引つけつ、猶且つ種子島の小銃三梃をも切火繩して持たせたり。兵庫、此體をぎろりと睨、「牧野兵庫は小生ぢや。根方氏彌五兵衛どの御身は何用あッて渡せられた？」「何用と仰せらるゝとは？」「兵庫が旅宿へ其の異體して。」彌五兵衛は、意得たりと逆はず、「支配地の民、測らざるに強訴を企て、御旅館へ推參と承はッて、御見舞として取敢へずの參上、見申せば大勢の奴原……段々の御無禮は改めて御謝罪の申上ぐる。御座なさるる場所の近間で此上の騷動、御氣色も如何と存ずれど兎角は此儘には棄置かれぬ者、一々に繩縛ち申す。御免なされい。」兵庫それをば後眼にかけて、「いや、御無用ぢや。」

扨こそ當時の强者として、江戸にても御心を隔かるゝ紀伊國殿、其の御威勢を肩に被て家老の兵庫すら横に車を推し歩くか、と彌五兵衛は驚きたり。

（五）

紀伊殿、いかに當將軍家の御叔父にましませばとて、其の家老の牧野兵庫、いかに其の御威勢を嵩に被ればとて、現在の犯人を眼前におきて、御城代の老黨たる士、此の横車を其儘には通させ難し、と彌五兵衛少時思案して、「無用とは仰らるれども、御大法の前……其の意趣の分曉ませいでは、拙者いかにも……」「迷惑とか？　これは當方への駈込者ぢやよ。」「えい、駈込者？　這奴原を？」と彌五兵衛は其眼を瞪れば、物の結果を如是と見し彼が伴侶は、いづれも其手に忍の鯉口を寛ろげたり。

主も此勢にや發揮られたる、俄に其肩を丁と張りて、「それで御分は、御貰しやるとか？」「一應、駈込者で飽まで貫す。」「駈込者でも苦しうない、這奴らは皆罪犯の者。御渡しやれい。」遁るをば冷笑ひて、空嘯きぬ。「紀州には駈込者を出すといふ法は無い。」「それは紀州の法……。公儀御法は？」「それは其方勝手の隨意ぢや。」「呀？　勝手の隨意？　然らば彌……？」兵庫、這回は回答もせず、首掉を掉れり。「……手籠にしても？」「やア手籠？　大納言殿家老牧野兵庫を手籠にせうな？！」

突然たる大喝、風雨の如きに、彌五兵衛は膽を奪れて覺えず二三間を丁步けば、供も組子も一つに崩潰れて十間餘りを吶と退く。這、口ほどにも無い奴、それで自己等が手籠になるか、と兵庫が馬脇は追うて出づ。なれど彼等は大勢なり、後勢を憑みにして逃げたる足を踏み直し、鐵砲直々と前に進めて、一歩近らば牧野も一揆も只一擊と勢ひ籠む。

それにも怯れで紀州方は躙々と倚る。此距離は五間に近し。時に半空の炎日は火鏡の如くに面上を射て、額に流るゝ膏汗の睨まへ合ふ眼に浸入るを、彼も我も拭ふ暇すらなき阿吽の咄嗟。

但見る、兵庫が手の背面よりして躍り出でたる赤裸の大漢あり、彼は雙方が間に割て入り、大手を廣げつ、仁王立に突立ちたりき。「各位御無用。紀州殿御手に駈込だは、斯くいふ安居村の三四郎、强訴の本人。幸ひの御城代御手、改めて御訴訟申す。何卒三四郎召作れられて御鞫問下されい。」これに驚きて城代が除も、

其銃口を稍空に向くる時。「やア汝三四郎……汝待て！」又もや叫喚は起りて、續きて馬を跡り出せる、是れ牧野兵庫なり。其れと見るより三四郎は滿面に莽と縛りて、「あッ殿、こゝは……此處は何卒三四郎めに。三四郎決して殿の御面皮……」「えゝい汝、斯くまでに面を虧せて！　此上に虧く面皮があるか！　汝憎くい！　兵庫が刀鈍しをッたな！」執り直したる槍柄も折れよと許りに、彼は憎き此漢子を散々に打擲する、苛杖の下に三四郎は聲を搾りて、「あ、殿、情ない。三四郎心底分曉ませぬか。義理知らずと仰ある、これが殿への義理、面皮を虧すとの御腹立は、大納言樣へ眞正の忠義を立たせて進ぜたい心底ぢや！」「えッ尚だ喑く？　殿への忠義、それを汝に……」とは罵ひたるも、詮も無き犬死はげに不忠なり、自己が躬を城代の手に委せて此場の危急を救はむとする、其心を摑めば我への芳志か、我を賴憑むといふ心の態て此の動作とはなりたるか。と念へば自然撻つ手も弱るを、彌五兵衛は敏くも見て、ソレといふ下知。意得たる彼が組子はばら／＼と倚りて、兵庫を隔離て、三四郎を中に包圍み、大濤の退くらむ如くに颯と引く。今まで其處に奮動きたる百姓原は、既に鐵砲に恐れ、兵庫に惱まされ、今又た首領の三四郎を失へるに怖れを爲して、疾く落失て行方を知らず。

（六）

此日強訴人として城内に捕はれたる者、三四郎を初として、其他に十三人、これに三十四ケ村の庄屋名主以下を加へて、都合百六十餘人とは聞えき。其張本は本人も自ら曰ふ安居村の三四郎なること何れの白狀も紛れはなし、これに依て彼をば重き牢舍を申附け、猶其れが妻孥眷屬一人も殘さず搦め來れとの下知を傳へて、城代は組子を發せしが、彼等は多時して手を空くして歸り來りぬ。其告ふ所を聞けば、曰く、彼は獨身にして、兩親は夙く死したり、殘れるは只一人の妹なるが、此女は曩に家出して在處を知らずと。與力同心ら便ち上司の命令を乞ひて、其女が人相に就き、普く支配地に索めしめたり。

夕づく日の落つる頃には、嚮に逃げ散たる市中の男女も鴉と共に塒に戻りぬ、其中には、盜賊の難に遇へるもあるべく、妻子の行方の猶知れざるに、血眼して噪ぐもあるべく、委しく問はば千樣萬態なるべきも、只此の城下の戰場とならざりしと、火災の無かりしとを歡喜て、此夜は街衢の口々に遠篝火を燒きて見張をす。況て城内をや、三之丸の囚獄には如法き大勢の囚虜あり、門々の守衛また嚴重ならざるべからず、加之ならず或る向よりは、今宵夜討の懸念あり、用意よく仕つりて其場に不覺すた、との沙汰ありたれば、素破といふ物の鼓躁き、人は上帶を些とも弛緩むる暇なくして狹間を走れば、馬は腹帶を緊束られたる儘にして飼につく、此の最中に、本丸なる廣書院にては、御城代酒井山城守を首座にして、大番頭、御目付、町奉行（何れも駿府在勤のもの）久能御門番たる榊原越中守をも其席に加へて、大事の評議は開かれたりき。

原來この強訴といふもの、當時の法としては謀叛反逆に準ずるの大罪、極刑をもて之に當らるゝ定規なれども、されぱとて彼の三四郎が振舞、多寡が窮民の一時を狂へる小事なり、生殺の權柄、既に江戸より當御城代其人の手に委任されたる以上とあれば、一應の糺問を了りて刑に名の宣告、何の躊躇かあるべきやう無きに、斯く大勢の職司をつどへて秘密の評議を凝らすといふ、當面る重議か？　されど見えたる敵も無し、抑何事ぞ、と仔細を尋ぬれば、思ひきや、彼の紀伊殿家老牧野兵庫が身上なりける。

兵庫が當日の擧動、其の奇怪なるは既に衆目の視る處、今更の詮議にも及ばず。而して彼が

其の如是く振舞へるは抑如何。竊に聞く、紀伊殿豫て思し召し立たるゝ趣旨ありて、柳營にても内々の御用心ありとかいふ。然らば、或は其の腹心の家老彼の兵庫に密旨を仰せ含められ、御宮御修覆の御用とあるを幸ひ、御舊領たる當國に來りて、人心を煽起ち、彼等がかの過米につき度々の愁訴の聽れずといふを機會としてかゝる珍事を挑發させたるなる歟。さらば彼の三四郎といふ奴、彼は指頭に翫弄ばるゝ木偶にして、其本人は離れて遠く黒幕の裏に在り。此の黒幕を引めくりて其の妖魅の正體を顯露すべき歟。

扨て斯くあるものと看做て、鞠問のやうを如何にすべき。一通りの强訴と見れば、彼等ははや其の罪犯の身に在るを自認したるもの、別に拷問の要も無きが、他に然る仔細ありとすれば、飽まで鞠訊して、其れが口頭より實を得む歟。之を得むは難からず、なれど其實を得て後の結果、これぞ今人々が苦心の處、談合の要も全く是れなり。藪を打つて蛇を見むはもとよりの覺悟なり。されど又それが爲に、柳營の御運を短縮め、天下の爭亂を速促るとありてはこゝ思案の要るところぞかし、既に先年の島原一揆、あれ程の奴原があれ程の人數を集めて、あれ程の小城一つに籠りてさへ、あれ程の騷動なりし、況てこれは御内高七十萬石に餘れる大名、加之も其の大將は例の御仁、それが御旗とあらむ程には海内の擾亂は如何なるべき、或は倖ひに然なからむも、此事公然となるに於ては、我々の此の微力者が御三家の一家を對手としての訴訟により、方々も知るあの殿があの御機轉にては、烏もいつか鷺となるべく、宿老達も時の勢を察られては、利分と見ながら非理に落す權宜の裁斷も無しとは言ひ難たし、戰場の討死、殉死の追腹、それらは我等分として辭せざるも、讒間の曲者と叫ばれての犬死は口惜しや、これはいづれも再應の分別なうては叶はぬところ歟。

席上の評議は斯く區々なれども、紀州といふ二字に壓されて議論の腰兎角に引立たず。其中に城代の城州のみは、一癖の强者、人を人ともの我慢の性質とて、紀伊國とて兵庫とて何條事あらむ、罪あらば引捕へて腹切らせうまで！　親疎上下の懸隔を立て、對手の强きに臭き糞に蓋する如きの政道して、かくて天下の御法が立つか！　況てあの百姓めら、然る不思議の心底もて嗷訴を企つる、肉も骨も挫ぐるまでに責め苛みて其泥を吐かせでやは、と叱られしが、衆議はひたすら穩便の方に傾きて、準ては江戸表向の上との事に一決し、此夜御目付の一人は時限りの早追もて駿府を發足ぬ。

（七）

酒井山城守重隆は、備後國福山三萬石を領して、小名なれども幕府に於いては譜代衆の歴々たり。此人、雅樂頭忠世が庶子といふ然れども未詳ず、今年三十五、血氣なほ剛きに、生得の癇癖は、頭の壓人なき駿府御城代といふ權勢によりて益募りて、輒ともすれば昵近の二尺六寸、秘藏の關の孫六に手の懸ることも屢々なりき。如法き荒者なれば、物の仁慈、寛恕などいふことは毫末も知らず、武士は命を惜まぬもの、農民は貢租に努むるもの、武士にして身を庇護ふは沒陰囊の腰拔にして、農民にして貢租に懈たるは郷黨を害ふ亂民なりとは、彼が座右の銘として、人にも常に告ふところなり、其の座右の銘に反るゝ亂民は今や目前に現はれ來りて、沒陰囊の評議は昨夜の議席に勝利を制しぬ。彼は熱腸の寸斷るゝまでに憤悶せり。「ヤア彌五兵衛、今日はあの强訴めら予が面前にて鞠問せうぞ。急げ、用意！」其見脈に恐怖をなせる根方彌五兵衛、急ぎ糺問の白洲を開きて、三四郎を初め、連坐の者一同を掬入るれば、掛りの與力（城代附）同心は既に其の場所にあり。與力は

机により、還摺り流しつゝ、それが可怖しき凶眼もてじろ〳〵と睥れば、同心は十手を把りて、喝とも言はゞ其乙骨揆摧ぎ與れむとの擬勢もて突道ひたり、白洲の四方十間が間は、城代の足輕にてさし固めたる、手にせる捍棒は羅刹の鐵杖にも似て、睜れる眼は惡虎の如し、傍邊には、搾木、抱石、浮利々々なんど、見るも恐ろしき拷掠具を山と積めるが、猶其器には、いづこの誰が叫喚の記念なるらむ、鮮血の痕黝く印りて、腥臭き氣は八萬の毛孔をして覺えず竦立たしめぬ。身は無きものと覺悟せる三四郎さへ戰慄せり、況て其餘をや、二目とは仰ぎ視ず、首を垂れて死人のごとし。「御城代、御出座ざふ。」一引聲は長く白洲に響き渡る時、三四郎が左右に控へし獄卒らは、其が袖を牽き、頭を壓して、彼們が額を砂利の上に着けさせぬ。三四郎は其の仰向せる頭の上にさや〳〵との衣服の颯響の停住ると思ふ間もなく。「口書、讀み上げい！」我が鼓膜を劈ざく如き、尋常とは異りたる甲走れる咄嗟、これや其の御城代かと、彼は微しく其頭を擡げむとする突端。「汝ッ！」壓搾板の如き掌は下りて、彼が額を突如に砂利に叩きつけぬ。砂利とはいへど其大さは拳頭より大なり。血肉を包める表皮の此の堅石に撲當られて何かは耐るべき、哀れむべし其額は忽ち破れて、鮮血は傍近を眞紅と染め做せるが、彼は此時いたく腦をや震盪せられし、此の滂沱たる流血の裡に俯伏して、人事を省らざるが如くなりき。

「む丶、好い態ぢや。其面を擡げさせい。」城州が下知に、獄卒らは、再び其頭を攫みて凶暴く扯起しぬ。なれど三四郎は猶夢幻の心地なるが、混々と流るゝ血を滿面に浴びたる儘、覽るともなき眼を半分瞪開れり。「ふゝ、好え面ぢや。こりや三四郎、予の面が見ゆるか？……ハヽ生根が無い？　こりや水與れい。」同心の一人はあッと應へて、傍近なる番手桶の水、柄杓ながらに持來り、彼が咬緊めたる齒を捩明けて注ぎ入るれば、獄卒は其の脊椎を碎けよと許りに撲てり。無慘なる犧牲は蘇息りぬ。彼は纔かに眼を定着て瞻仰れば、白洲の緣の端近う乘懸れるやうに坐せる一人、これぞ城代酒井殿其人なるべし、剃立の月代青黛を抹りたる如きに、面の赭紅きこと熟せる棗實かとも疑はれぬ、猪毛生ひたる腕は行短かなる帷子の袖よりぬッと露はれて、甲を出でたる龜の手の如く、腰に帶びたる朱鞘の脇差は普通の刃より寸延て、燒を應けたる赤楝蛇にも彷彿たり、一文字を畫く毛蟲眉、一徹の氣象を面に呈せば、矩形に曲れ●への字脣、其の短慮なるを我から見せたり、是を陣を破り敵を屠るの將とする、蓋ふに打應しきものあらむ、貧を惜み窮を賑はす牧民の職に在らしむること、我未だ其の可なるを知らず、と彼は思へり。太息をつく〳〵、三四郎は細縛められたる肩を窄むるを、城州は血を通したる眼に礑と睨めたり。「やア汝其處なる奴、汝此の强訴の張本と自ら名のるが、見た處不敵があるぞ。此の一件、原來の發意は何所の誰で、何人と其の手筈申合せた？」三四郎は初めて口を開きぬ、「御不審は何と仰せられます？……」「分曉ぬか！此の强訴を企てたは、誰人の指揮か白せと問ふぢやは！」城州が聲の荒きに[illegible]れて、三四郎が眉は愈顰めり。「御答にも困じますこと、誰人の指揮ぢやなど丶？……」「吐さぬかッ！　ソレ撻てッ！」吟味も法もあらばこそ、彼は白洲の罪人と謂はむよりも、此殿が泄憤の的となれるが如し。條りの無法に、彼は棄てたる身ながらも其寃を叫ばむとする折しもあれ、表の方より[illegible]れる根方彌五兵衛、彼は遽たゞしく城州が耳を扯て、「殿、來まいたぞ〳〵。あの兵庫めが！」

（八）

紀伊國殿家老牧野兵庫！　それが今突然に

驅け來れる、言ふまでも無き其目的は、目前なる三四郎等が身上なるべしとは注進の彌五兵衞のみならで、此座に在りと在る者が目と目を見合する面にも知られぬ。我慢の方には大晴れ他に一個と對手なき城州さへ、其の根強きには驚きしが、稍呆然たる色、其色を察て知る彌五兵衞は聲を潜めて、「火急の御逢と申まする。」何と返答…？」御用の都合、目下は御對面叶ひがたし、重ねて、とも追儺はむかと暗に諷するが如くなるを、傾慮むけたる城州、「むゝ……いや會はう。」「御別席にて…？」「いや、此席へと言へ。」

胸裏の成算ありや否や、斯く言ひ出しては金輪引かぬ主の氣は知りぬ。其は兎も角も、こゝにての對面、或は事の不利なるべきかと虞れたるも、時の趨勢是非なきに、彌五兵衞は卒く起て外方へ出でぬ。――と看る間もなく、彼は再びこゝに入り來て、緣側の端に控へさせしは牧野兵庫なり。城州は瞥るより疾く、「や、其方は兵庫な！ 予は山城ぢや。」「扨は御手前樣、城州樣？ 先づは御機嫌の體……」「いや機嫌は好くないよ。其の好くないはお主も知らう、這奴等所以ぢや。お主が人魂と聞く三四郎めらがする所爲ぢや。」扨は此殿、喧嘩を買はるゝか、もとより喧嘩を賣りに來し我們、面白ろし其義とあらば、と再び迂濶の口を開かず、其邊じろりと睨め回す其瞳子に忽地映れるは、彼の三四郎が血塗泥なる姿なり、さしもの兵庫、呵呀と叫びて其膝を寄せむとする時。「兵庫、お事は火急の用といふ。何事ぢや、其用？」兵庫、唾を嚥下みて、次で手を支へ、「恐れながら御政道の義に就きまして……」「ふむ、政道の義？ ハハ政道に無私いは斯くいふ山城が豫ての自讚ぢや。紀伊國殿褒詞もあるか。」「いや左樣にもおざりませぬ。此處に居る者共が愁訴の趣意、其の訴狀につきて一應の愚考仕つりましたるに……反別一升の過米と申す。」……「それが如何した？」「昨年の飢饉に續きて今年の瘟疫、これらは手前申上ぐる迄もおざらぬ。箇樣に疲困れたる窮氓に重々の御徴發、恐れながら御仁政とも……」「廢いと言ふか？ それが氣附か？ ハハ兵庫、其方も紀伊殿家老、それ程の事心附かぬは近頃の無穿議ぢやぞ。こりや熟う聽けい、過米の徴發は江戸からの御下知ぢや、城代の山城はたゞ一途に江戸の御沙汰を相守るぢやぞ。仁政の不仁政のと意見があらば江戸へと申せ。」「如何にも御沙汰、江戸表へも申ませう。然ながら駿府五十五萬石、其土地につきての利害は御手前樣御手心の裏にございます、例令江戸表御下知とございませうとも其の土地人民の難義難澁とございあること、御申達の趣意も聞えず、只一偏の御守り、是も近頃の御無穿議かと、憚りながら公儀御代官たる御役目の手前に對して、笑止の義……」言せも敢へず城州は、其血迸れる眼林と睨りて、「扨は我等を木偶と申すか！ 今一言、木偶なら木偶！」「いや、木偶とは申ませぬ。但し道理の當る處……」「えゝい道理が當るか、刃鐵が當るか、今一言！ 陪臣輩が！ 無禮！ 無禮！」「陪臣とは仰らるゝも御三家の御一人、當將軍家には恐れながら御叔父に當らせらるゝ大納言殿家老、牧野兵庫！」「うゝ其の大納言……納言殿を汝は御叔父……御三家の一人と言ひをるか！ 幕府御譜代たる予が目からは敵……」言ひ斷らざるに彌五兵衞は飛來りて、主の袂を暴く扯きたり。「枝葉の御事、無益しい御議論、然樣の瑣事に御隙取らるゝ……それよりも公儀御敵たるべき彼奴等が脅押人、……白狀さずば只今の拷問なされて。」太息吻いたる城州は、兵庫を後眼にかけたる儘再應は語を交へず、其膝暴かに此方に振向けて、「やア三四郎！ 汝、今訊うた強訴の後楯、疾う言ふまいか！」

（九）

城代が評議を逆へて其意を揣すれば、彼が屡訊ふ、我が愁訴の後援といふは、此座なる兵庫どの、續きては大納言様！ それが遁れぬ臈證を有ち玉ふ、否眞正の張本！ とは實に意外や！ 膽の潰るゝ！ 思ひきやの窮極！ と三四郎は愕きたり。

抑是れ故意か、誤解か、若くは讒人の其間に在りて有らぬ誣告を巧計たるか？ 故意とあらば詮なきも、誤想といひ、讒間とあらば、現犯の本人たる我口より此の證明發揮と立てゝ其の寃き御名を雪がで置くべきか。吁、さるにても其の誤解の原由、讒間の起因といふ、昨日の我が大谷にての振舞か。げにも邪推の眼をもて彼狀を看なば、然りとも見えむか、口惜しや斯うとも知らば最初より役人への教示に委して、到底死ぬ身を、江戸へ立ち違え、執政への愬訴、將軍家への御直訴と爲奉つらむを！ 分別の足らで此の破目に陷る、あら無念や！ 憤然として伸上らむとする頂邊に、「三四郎、強訴の後援、白ふまいか！」「唯、申します、申します、申ませいでか！ 三四郎が強訴の後楯は斷く申す三四郎！ 三四郎が三四郎に強訴をさせたのでござります、此外には誰一人、絲釐も、尻押腰押、談合した人はござりませぬ。はい、發揮と此義申上げます。」城州が眼は此時、爛たる鏡の如し。「白はぬな！ 汝、可、白ふな、白はずとも白はせでおくか！ ソレ撻ッ！」彌五兵衛は且づ暫時と和めつ、「や、三四郎、お主心得が惡しいぞ。尋常ならば我々式、又は支配の與力衆、吟味とあるべきを、此事大事と思し召せばこそ御城代御自身御調べともある事ぢや。其方は此の一件、只の強訴と思ふであらうが、其の汝に賄賂を飼うて此の珍事挑發させた本人はな、内々深い巧謀がある。其の巧謀が公儀御耳へ聞えたで、萬一の兵粮の御用意としてあの逕米も徴さるゝぢや。な、分解たか。されば其方、其の後援の本人、すなはち謀叛人、こゝにて明白に申立てたば恐れながら江戸上様にも御滿足、詰ッて禍害の根も失くなれば、此の逕米の御沙汰も息む。別しては其方、強訴の張本として磔刑にもなるべき處を、謀叛人訴への功によりて其罪御赦免あるのみならず、出格の御褒美も下さるゝぢや。さ、如何ぢや。其身、政府への御忠節者として、人にも譽られ、御褒美の榮耀に誇るが所好か、又は謀叛人同類として磔木に懸るが所存か今が分別の境目ぢやぞ。有體に白へ。……む、白ぬな。これ程に利害を分説ても？」「むゝ」彌五兵衛措け、撻んで白ふか！ 鞭て、撻てッ！」「お、お撻ちなされませ。撻たとて意にも無い御言懸の白狀は三四郎口に出ませぬ。」「呀、言懸けり？ えゝいそれッ！」と彌五兵衛も叫びぬ。獄卒は心得たりと彼を俯向に壓伏せて、一人は其の片塲なる足を扯り、白洲の上に[illegible]すれば、同時に桿棒は其背に下りぬ、劉々として風を斬る苛杖は容捨もなく其皮を破りて肉に及べば、笞片は寸斷れて、混々たる鮮血に交る肉の両四邊に飛散り、被拷者は既に聲失く、たゞ其の肩頭より下腹にかけて盪つ大濤の如き苦息の裏に、寃枉を天に訴ふるに肖たる可怖しき呻吟を發すのみ。凄極、慘極、惡態の目も當られぬに、兵庫、何をかな此一時を救護くる工夫をと、悶ゆる目に發見したるは、此の白洲の定法ならぬといふ一事なり。

「待て。其の拷問暫く待て。」ヤア城州に申す、此の御席に立合の御目付衆は御居やるか、御横目衆は？」城州より北に南無三との面せるは彌五兵衛なり、急所を衝かれて覺えず其遠慮申召するを兵庫得たりと其傍に躙り進みて、「根方氏、大事の罪人の拷問に御目付方の立合あるは御法の表ぢや。此の御席に然る衆も見えぬは何たる事？ 其の仔細……。や、御返詞ないは

ば御恩の爲め此腹一つ屠るぢやまで、と終局は例の脇差をさへ捻くりての決死眼。日本の氣質は誰も知りぬ、斯う破りかけたる横紙の場に出會したるが我々の不運！ 是非なし。然らば上司たる其許の御處存任せ、御咎めとあらば一つ刃、此方も後へは得引き申すまい、と一同も潔よく申し斷る。自他の恐怖しき約束は、往復の議論半日が後に其事と決せり。

安倍の河積、彌勒の町の西端に、廿間四方なる青竹の柵は此日の夕より翌日の朝にかけて結束られたり、是れ彼の三四郎ら十餘人が刑場なり。

時は七月の下旬、溽暑漸やく冷めたる秋陽は此の朝に影を斂めて其恩惠ある光を下界に與へず、例ならず薄寒きと思ふ龍爪の山颪、木枯の森の病葉音づれて悲鳴に似たる聲を立つれば、河口の海はこれに響へて、怒號るが如き波浪の響を轢と送くる。

富士は幾重の雨雲を身にまとひて姿も見せず、つれなしとの名におへる賤機の山松さへ、靄の衣に面を覆ひて嵐に咽ぶ、天地萬物悉く是れ黯澹の境に鎖されて、幽愁の造化の手は巧みにこれら悲痛の景を畫くかと見る中に、忽諸數千の群集の波を排開けて、紙幟は來れり。濕りたる空氣に、力なく飜へる紙幟の後より鬣も萎れて蹣跚と歩ゆむ馬の背に乘せられつ、綁手のまゝに首を前に低れたるは三四郎なり。これに續きて、其の同類と呼ばるゝ十三人。此れも一樣の獄衣を着て、鞍の前後に其の脚を縛げられつゝ、腕は背に、首は前に、獄卒に轡を取られてこゝへと着きぬ。

餘の者とても面色は失きが、猶其れよりも軀の苦惱、馬背にも堪へざるが如くなるは、三四郎なり。吁彼は其後ともに、石を嚼み鐵を喫する千百の苛責にや遭へる？

彼等は刑場の入口に來れる時、鞍上より扯下されたり。三四郎は起たむ、起たむと發憤れども、其腰は終に起たざりき。獄卒は其頭を拖りて狗兒の如くに牽摺れり。見物の不平は囂々たり。「其樣にせると罰が當るぞ――」「汝ら腕がへし曲るぞ！」

（十一）

彼等の徒黨の討手を遁れて、今に踪跡知れざるもいと多し、其の一家親族もまた寡少きにあらず、況んや兵庫は眼前の大谷にかくて在るをや、準備寸毫も油斷すべからずとて、竹柵の内外、河積の前後は、城代、町方の與力同心、并に城州が郎黨ら、數十騎、數百人、弓槍鐵砲にて嚴重に鎖し固めぬ。されば彼の三十四ケ村とかいふ村々の壯者原、内々は奪る手筈ども爲たり抔とも聞えしも、此の警戒の嚴密なるに怯れてか手指しもせず、痩狗の遠方にて吠らむ如くに只纔に其の不平を惡態にて泄らすのみ。

法場の内には撿使の横目法の如く、床几に踞れり。掛り與力の筆頭たる者三人、蹲踞せたる罪人を一々に面前に牽き出し、刑名を宣告す。

これより後は、永眠布、長休水、それ終ると看る間もなく、太刀音！ 血煙！ 幾個土壙の前に横はれる血髑髏！！ 數千の群集もたゞ目を掩ひてこれを見るに忍びねば、語むに辭もなし。

軈て粗莚に包まれたる十三個の沒首領死屍は、土塊の如くに竹柵の根に滾轉されぬ。今や巨魁三四郎が磔柱に上るべき時とはなれり。

「皆樣に御願ひがござります。三四郎にはあの目隱布を御容赦下さるやう御願ひます。」刑に臨める罪人の情願をば、法令に觸れぬ限りは許容すこと開初よりの規定なり。彼が意味あり氣の悃願は立地に聽許されぬ。彼は今其の素面のまゝにして磔柱に縛され、場の中央に押立てられたり。傍邊に倚せたる二本の槍は獄卒の手に執られ、彼等は試みの素突一つして兼てに身を構へ、突身となりて丁々と彼が眼前に穗尖を合

せて、ヤッ！と叫ぶ時。「宮！お宮アー―」不思議の呼號に獄卒らは其手を住めぬ。三四郎は眥に鋭く其巨眼赫と睜開き、吭も張裂むずる最期の悲聲振搾りて、「宮、在るかア！　此中にお宮は在るかア！　在るなら今乃公が言ふこと聽て呉れ。乃公は今御法で死ぬ。死ぬは厭はぬが、心懸りは過來の事！　兵庫樣御身の上！　過來の強願は私慾でない、村々の難義見棄て難さぢや。死だ後も乃公が心底忘いで、此の悃願ばかりは遂かいて呉れ。又、兵庫さま……」

従前嗷々たる叫喚も、此時寂然と鎮まりて、ただ悲涙を啜り、暗涙を呑み、聽耳を傾けて、彼が末期の、心血や凝塊りて成れるかと思ふ此の遺言の一句だも遺漏さじと聽く、群集の中に、編笠を眉深に、面を覆みたる一人の武士あり、左右に侍れたる七八人の大奴等に此時屹と目を咬せ、袴の股立手敏く掻い取りて、大刀の反一反うたせ、刑場目に懸けて驀地に駈入らむとする、其の後面に又た一個の武士ありて、前なる人の刀の鐺緊手と扼りぬ、低く力有る聲を徐に發して、「こりや、遣まるまい。」此方は耐らず、遽てたる聲、「何なさるゝ御身……」「急いては事を爲損ずる。先づ御待ちやれい。」「いい要らぬ世話：　其處御放しやれ！」「ほう！紀伊殿御家老ともある仁が、法場を暴らす罪人とお爲りやるか！　やさ、三寶に載るべき其首を獄卒らが手にお懸きやるか！」「呀！！」

前なる武士は、こゝに初て眼を住めて、此の抑止たる未見の武士の態を視れば、是れも富士形の編笠深く頂きて、其面をば露はさぬが、着たる衣服の立派さ、腰にせる雙刀の見事さ、一見して其の尋常の者にあらざるを知るに足る。彼が沈着て、低く、力有る聲音と、供の若黨に蠟塗の杖を持せたるとにて推すれば、其年紀は四十の以上なるべく、笠の間を漏れて見ゆる四方髪の、肩うつばかりなるを看る時は、或は是れ浮世を強拗たる大身の隱居、若くは功名を貨殖に換へたる大富限の浪人か？

此方は覺えず其の威儀に撃たれて、會釋しつ、「扨は御分は、我等を御存知か？」彼方は編笠なりに頷きて、「さらばさ。先づ斯うおりやれ。此處は御身がため、好うない場ぢや。」

時に南無阿彌の衆聲は河積に響きて、わッといふ悲叫は起りぬ。顧ば、呼、三四郎が刑は既に結了たり！

（十二）

彼抑れたる武士は、抑止たる武士の指したる如く、實に牧野兵庫なりき。兵庫たる者の今の遺恨や什麼如何。不意の邂逅に其意氣の投合せるより、彼は頼みつ、我は憑まれつ、其の訴願に、其の生命に、身に換へてもと思ひつる三四郎をば、眼前酷吏が慘刑の下に斃させたり。彼、其の最期に我を叫べるは、我に對ひて何事をか語らむとせる。彼が眼、半空を睨めるより看れば、我が託せられつる訴狀を等閑にするを憤るか、咬切れる其口より察れば、我が彼の生命を救援ふことを敢て爲ざりしを嘲けるか。吁、我は附託に背かず、又た救護に及ぶべき力をば盡したり。なれど余何せむ、暴官の威は暴風より暴にして、我舟を彼岸に達せしめず、凶人の心は豺狼より凶にして、好みて汝が血を啜れり。而も我が身と、名と、職とは、此の信友の爲に、其の凶暴に報ゆるの刃を手にするを得せしめずして、空しく悲涙の汝が不幸を弔ふに止めしむ。嗟乎、遺恨!!

憤涙は珊然として音あり、怒眼は瞠乎として閃けり、彼は仰編笠の紐、覺えず半ば牽斷りて、耐らず竹欄の根方まで倚らむとするを、始終の容子目も放たで注視りたる此方の武士、「むゝ道理ぢや、無理はおはさぬ。なれど此場は。ただお任れ。委細は此胸にぢや。」涙を攪る手に袖を控へて、隻手には輕ろく其胸を拍ち、更に

錦鯉に似なる奴に目を眩せて、暫時茫然と見惚れぬ。兵庫は一歩の歩むにも方なし。
　偖に案れるは府中の南方、青葉院を前にせる江戸町なり。こゝに一構へ廣大なる町屋敷ありて、丸に丁の紋の瓦屋の上には、兩竹の葉を隠なく打ちて、奥室には緑青の常盤樹を惜気なく植ゑたり、其邸構へは二階に井の間の長屋あり、窓青格子おほく開け、内には兵を隠けて、櫓門を構へるが、物見の如し、兵庫の注埠とも見えぬ。此の伝法と更に当時の長屋との間に家来門あり、柱いかめしく、扉大いに、花崗石の敷石打水のあと清し、緑青を溜れる乳鋲打ちたるに異ならず。門内には蔦立あり、何作の植物ありて、母屋とは六尺の土居、若松おほく植ゑたるに区画れり。
　兵庫が備への奴、担ぎ廣大な御住居や、これは抑も誰殿との問はむとする時、彼人の僕は背後ひて、「一人、御帰りざう、」と呼はれば、鬼をも欺むく八九人、武家に出迎へて首を下ぐ。
　彼の武士は、一應の會釋の後、さらば主人御案内、とて玄關を上り、更に兵庫に一揖して奥へと入れば、兵庫は客書院へ通されぬ。兵庫、これまでは、憤患の盈ちたる胸に、言ふべき詞も將蔓て發でず。此庫に入りても只無言の會釋して、無手とばかりに占座れるが、良有りて與と心つけば、從前は眼に入らざりし座敷の結構、其の善美を盡せるに驚きたり、但見三十疊の書院！　これに入側の廊をつけたるが、龍鬚の縁を表、繝縁を編みたる如きに、縁は悉く黄金の綾なり。正面の床、蒔繪の瓦燈には、殺人劔活人刀の六大字の大幅、宗純の落款もやあらむ、さらば桃山御殿の名物か？　清麗の御襖には頃名の作樂叢り、古淵の大襖には五葉の大松蟠居す。緑障子さよらかに建てたる勾欄の傍より看下せば、庭には築山泉水あり、築山には松樫楓、樹形異なるを面白う植ゑたるに、泉水は安倍川の水をや注ける、玉なす清流滾々として、鮎も躍れり。
　我も其昔は和歌山の御殿にて御道具をも預りぬ、其後江戸へ出でゝ麹町、赤坂の御館をも見まゐらせしが、其れにも斯う樣の調度、かくまでの數寄は稀れなり、抑御三家の御一人、五十五萬石の御大名にすら有らぬ御品、普請の結構は、此の主人、そも何等の大分限、大貨殖の者にて、箇程にはしつらひたる。往昔の紀一が流か、近世の今井が属か、何ともあれ窮めたる僭上人かな、と雙眼を凝らす傍に、「客人、いかう御無禮の仕つッた。」顧れば、向者の主人なり、主人の風采は、今見しよりも亦一段と高傲れり。

（十三）

　看來れば彼が容貌、雪白の顏面、漆黑の鬚髯、口は方に大きくして自ら大海の量を含み、鼻は隆く直にして偏に秀峯の群山を壓する趣あり、特に見る其の炯々たる眼は、睥下の紫電、人を十歩の外に射て、笑めるも猶侮るべからず、若夫れ其の眦を決して睥睨に森厳を露らさば、さ、流石に辟易せむずらむと覺えて、兵庫も思はずに其角を避けぬ。彼は、白き精好の法服地に、大嘴花鳥、鳳生の獅子をしも見せし、千筋高黄金の目貫出し鮫の小脇差、生絹の羽織に紫色の細ゆたかに懸けたるを套ねるが、其の對座に徐かに押直りて、「只今は列卒の際、殊に些と埓かるべき義もおはして拙者名字も申上げず、貴客も御口づから承はらぬが、——それには紀伊國殿御内、當時出頭御家をも落すと聞えし牧野氏、兵庫どのとは見まゐらすか？」微笑つゝ問ふにも、其聲は此方腹の底にまでも響けり。「貴察の通り、我等は其の兵庫、而て貴方には？」「これは名も無きもの、申たりとも御存知もおはさぬ者、」「いや初對面の——無禮は御免あれ、渾ての御樣子、天晴れ世に聞えたる御

仁？田舍武士の兵庫、御面見識らぬこそ口惜しうは存ずれ。苦しからずば密と……」「ハヽ、御詞は恐入れちや。たゞ我等は由井と申す……」「や、由井？」「民部介とは申す形の如き浪人おざるよ。」「扨は正雪老、民部介先生にておはすか？」と彼は遽がはしく瞳子を決めて此の主人を再び瞻つ、俄かに其人が平生に見るべからざる熱心の敬意を表して、「……扨も〳〵豫想外ない、轟く如き雷名は南海の盡處なる和歌山にも聞えて豫ていつぞや見參と期し申したを。——但し日來は江戸表にと？」「いや彼地にも、微小なる弟子分教授の道場は持ち申すが、……原來我等は此の府中のもの、仍て當地にも立ち越えて御覽の如き小廬をば營み申した。」

原來兵庫は、容姿も心術も衆に勝れて、それ十五歳の年熊野新宮の坊にて大納言殿御見出しにあひ、和歌山に召されて渥美某の預けとなり、當時の指南役村田左馬助が弟子に附けられたるが、十六歳にははや其れが無念流の中傳の允可を得て、兵法においては關西第一といふ和歌山の殿中にても其面に立つ者なし、されば武邊の一途にかけては假初の事にも人後に立つまじと念じて、福島浪人として召抱へられたる村上彦右衞門兄弟、加納五郎左衞門等の老功の士には常に親しうも交通ひ、又大阪兩度の御陣、墓なき島原の一揆にさへ、其の戰場に出でゝ「槍一つ、首一つの功名もありと聞けば其人をゆかしき者にして、其狀を問ひ聞き、其身が得たる道に比較せて、其奧を明らむるを慣ひとせり。尋常の人にすら爾なり、況して此の正雪に於けるをや、其名は遠く江戸より紀州にまで傳へられて、彼は武藝においては十八般の奧義を極めて當世の泰斗たり、軍法にかけては古の楠公が祕を搜りて、陣立築城、野戰攻城の術、いづれとして凡常に抽でざるは無し、それが贄を執りて此が門に遊ぶ士三千人、國主城主譜代外樣、今の諸侯三百家のうち、屈請教授を乞はざるものは其の什が二三のみ、只惜む、世平かに時謐にして其が功名を成すの地無きを、若し夫れ群雄割據の日に生れ合ひなば、織豐二家が撥亂の功は、或は此の人の手裏にも收めたらむも知るべからず、——とまでの評判は豫ても聞きぬ、あはれ如何ならむ紹介をも求め、時機をも得て、其人に只一目と、仰慕の念は皮肉の奇癢きをも感えたるまでなるに、抑天意歟、十年の渴望こゝに癒えて、一朝の會合、彼の人饑りて我に需つもの有るに似たり、其所以たる果是如何？　と兵庫は漫心に怪訝みぬ。

加之も、其の儀表、其の風采、我が豫て想見したるにも倍して鷹揚れるに、家の富貴にも亦た心を驚かしぬ、兵庫は宛然師弟に於けるが如き禮を取りて、膝の前に手を措きつ、再回彼が言はむとする語を、愼みて待てり。時に、兩碗の苦茗と一盆の時菓とは出でぬ。主客相讓りて、各碧汁綠玉の如きを啜る。腋下の淸風、客は心頭の煩熱を頓に忘れつ。

（十四）

主人は徐に碗中の茶を喫し了りて、話頭は漸やく本題に入りぬ。「兵庫どの、今日の御所作はいかに。男の意地か？」「眞個、餘義もござりませいで……」「御年には似合しい。人には依頼まれ、或る者には侮辱められ、存意は徹らず、加之も眼前にて那れ體の仕義。急刺るゝも道理ぢや。」扨は此人、我と三四郎とが事、城州との始末、其の逐一を熟知るか。そは兎も角も、忖度の言、同情の語、眞に知己たるの値に恥ず、と兵庫は稍面を揚げて、「短慮との御叱斥もおざあるかと存じの外、道理との貴意、感謝に堪へませぬ。」「むゝいや其の御感謝は御無用。道理と申たは貴方の御年紀、廿六七の人に合しては と言ふことぢや。然りながら其は一人一個。貴方は既に紀伊國殿御家老。家老とあれば

殿の御采配をも預かる士、御年は壯くとも御所作は老人風て見えればならぬ。」「至極の御道理。但し紀州の水を飲みたるほどの者、斯様の場には風として引かれませぬ。」「ほゝう。風として――何故に引かれぬ？」「前申す、男の意地！」「呀、意地？ 意地とは何物ぢや！ ヤア御分、癡呆た事！」突如として來れる一喝は、宛も是れ晴空の霹靂！ 耳を掩ふに遑あらざる兵庫は、愕きて其の持てる扇をも取落せり。主人は透さず畳み懸けて、「紀伊殿は名代、當代の御分別者。其殿が御内の家士に喧嘩稼業もさせらるべきか？ 御分が今領る知行六千石、それも其の馬鹿意地に身を果たす喧嘩料にと與れらるゝか？ 何を癡呆た！ 彼の、叱咤風生を想像せし彼が眼は、百煉の鏡を磨て、炫灼、爛ひ遁づくべからず。兵庫遁て、「いや然様の御難題、心外の至極。我等決して喧嘩稼業いたすとは申さぬ。たゞ紀伊國の風……」「紀伊國風が然様といへば、紀伊國武士は一人として主の先途に立たうとせぬ不覺武士。御分一人のみならで紀州武士を然様に言ふ、――こゝな不忠者。」「ヤッ不忠？」色を作せり。「不忠であるまいか。主の恥――國の恥――剛毅の恥をも曝らす……」其れが不忠か！」「不忠も不忠。國の賊ぢやは!!」怒氣心頭に沸騰りて前後の勘辨も失せたる兵庫、生得の締轄は應ふべき口より腕に起りて、忍術あへず、汝ッ！と言ひさま脇近の大刀素破と拔き、豫て得たる無念流の眞額碎刀、微塵になれと打下す電光の閃射に先だちて、石火激勢、物ありて我が眼光に潑！と發つと思ひしが、個は什麼、我が握れる刀柄は柄頭より刎上げられて、七尺餘り彼方に飛べり。ちえッ無念！と再び脇差の柄に手を懸くる。其腕を丁と抑止て、由井、「牧野兵庫！ 不忠に不忠を重ぬるな!!」「ヤッ。」「愆くて此場にて犬死すな。御分最期ももう切迫いは！」抑へ壓られたる腕は、千斤の搾木をもて壓さるゝ如く、骨橈み、筋肉痲痺れて、我腕ながら腕とも感えぬに、我慢も折れて、力限りの振絞れる苦聲、「な、何と言ふ？」「主の御馬前の討死、御分それ爲では叶るまいが？」兵庫は又更に驚愕きぬ。扼れる刀柄を俄に放して、「和主、ソレ何の事。主君の御大事？」「御大事！ 紀州家御滅亡、今年の内！」「御滅亡？ 今年？」と彼は瞠目して絶叫せり。

（十五）

「殿の御大事とて聞くか。其の御大事を速めたは御身が所爲ぢやは！」正雪は彼が腕を突放して大息しぬ。兵庫は、扨はと其意衷に了解れる面色あり、耐へ難き苦聲を顫はして、「酒井が手か？」「それ程に御知りやるならば、何故に向者の如き眞似お爲やる。知られぬか彼の始末は今早や城代が耳に入たは！」「一人たとか？ 御身ソレ何として？」「知らいでか、其が爲め我們は彼の後場に人を殘いた。其者今復歸ての注進には、城代町方の手に使役はるゝ目明とかいふ細作ども、御身や我們の蹤跡を慕うて見え隱れに河積を狙け、其中の一二人は城中を指いて馳せたといふ。手配はな、ハヤ其通ぢや。然る事をとも待設けたる彼の胸肉き役人共が左聞かば何とある？ 言ふまでも無い、牧野兵庫、同類の犯人三四郎[illegible]はむとして御法場に闖込み、既に世事も仕るべき處を此方警固嚴重の爲め、事無くて引取りたり、察するに此も大納言殿御内意か、兎角は御謀叛顯然！とも注進しをらう。江戸老中は待つに獲路と尾に鈴を附け、將軍家へ讒奏申さう。將軍家も固より其の御意衷！ 吁、最初が強訴の後押、中途には白洲の議論、其の結局が今日の爲體！ 如何もが御身は、紀州御家の滅亡を一年速めた。」

恨むが如くに睨み闘られて、兵庫は今更ら噬むも詮なき後悔の臍を抆せつゝ首を垂れぬ。

其の當惑の面を見て、此方は憐れみ、いと低ためる、重々しき語調をもて剴りに割れり。「如何ぢや、我等が心底察さぬ！　御身を不忠と罵ふ理由は此通りぢや。腹立は覺悟。堪忍がならぬとあらば存分にお爲やれ。正雪は衝はぬ。意地者の御家老！　紀伊國風を頽さぬといふ御家老！　忠臣と名告る御家老！　吁、然るにても、紀伊殿は天晴の好い御家老お持ちやれた！」日常ならば一寸とも泥すまじき此の冷罵をも、兵庫は何の屈託する處ありけむ一句も應ぜず、猶も無き疊をひたすら睨めぬ。主人は猶反復して、「地體が御身には、何の爲に此の駿河に渡せられた？　久能御宮御修覆の御用と聞いたが、それともに強訴の箝押、城代との暗嘩、それ僞いとの御内旨も受けられたか？　御身は右の忠義をもて播とせらるゝ。定めし紀伊殿思し召に無い事はせられまい。扨は我們が常に見たる御殿は誤解か！　紀伊殿御分別者でもおはさぬか！　御内の家老に爽、皮袴なんどいふ溢者らが爲よるやうなる喧嘩稼業させらるゝ。」推り兼ねてや兵庫、手を掲げたり。「ま、先づ其老、其の愁歎待て下され。」正雪は其れをも聽かず、「……果ては其爲め！——否、前以ての江戸表の御迷惑といふ好みて招かせて、御身上の滅却、遠くは大國の手頼の御上、近くは當所駿河殿の御成行をも御覽ぜられて！　嗟、然りとては！」「いや其等の事、大納言殿思し召で無い、悉皆我等一存ぢや！　我等が不忠ぢや！」「ふう！　一存？　其の一存で……主家滅却といふ程の大事爲出來て、只、其の不忠で御濟しやるのか？」「いや濟さぬ。江戸より此埒の御不審あつて、果いて御家御大事ともあらむ時には、牧野兵庫、此腹居て陳謝する！」「ふう！　其の不忠の腹居て？　怒られな、御身は活きて在られてが六千石。其死腹で五十五萬石、維持る事が能り申さうか？」「や、不思議の事！　我們爲出來いた不埒の段を、我們擔當て、我們が腹居て御謝罪する。原來の存知なき大納言殿、御身になん……」「いゝや、然で無い！」と正雪は、ここに初て冷笑せり。「とは何故ぢや？」急き懸る兵庫を後目にかけて、「牧野兵庫、氣の毒ながら江戸の御眼裏に無い。有るものは御身が主、大納言殿！　大納言殿御腹とあれば其れで事は濟む、百人の牧野兵庫、屠腹つてからが此の一埒は濟らぬ。」

十六

爰に至りて兵庫は一語無く、瞬もせで對手の面を睨み詰めたる、其限よりは名狀すべからざる一種の可怖しき光を放てり。其凄じきに引反て、正雪は頻りて彼が驚愕を嘲ける如く冷笑ひぬ。「ハ、何も然は驚かるゝ？　其れ程の事お知りやらぬ貴方で無いによ。今も言ふ城代が注進、底意は何事ぢや？　これが紀伊殿家老牧野兵庫一分の義ともあるなりや彼の豪勢の酒井殿、只見て在られうかや、日明も細作も要らぬ、たゞ其場に綱縛りて國元へ差立つるぢやまで、手間暇も費ぬを、其を爲ぬは什麼？　此義重大う見るからぢや。重大いとは甚麼？　前申す大納言殿御内旨かとも猜疑ふぢや、すなはち彼殿の御謀叛——國々に一揆を起させ、其虛を覘て御簒奪とも疑惧るからぢや。箇樣に疑惑は紀伊殿御身一つに集注る。されば百の御身が千の腹居たとて江戸では何の滿足せうぞや、只目指すは大納言殿御首一つ、それ所望なで斯樣煩悶ぐのぢや。」斯う樣に解出ての分說こそ聞かね、聞耳に觸れる謀叛の二字、自然我に暗刺けたる如き語氣には過般の白洲にて、彌五兵衛めが吻頭より聞きぬ、其際はたゞ我を忿刺せて法に陷さむとの巧計、淺々しやとも冷笑ひたるが、扨は其は彼等が一時の詐術のみならざりけり、然る會議の江戸にありて、彼れ主從は其意を承け、家老たる予に縋りて殿の祕密を捜

寵愛は眞に他に超えさせた。是れは彼の殿の御天稟怜悧う、勇武におはして、自然御振舞の御父様に肖させられたからの事とも存ずるが、いや又た御母たる正木氏、養珠院殿の女丈夫の御器量も一つた有る。されば其の御母親様御執成しにか、大阪の節も、御兄の尾州家へは御許可もない七本の指物の旗、御家の規模として嫡流ならでは叶はせられぬ大中黒の後幕をも下され、其後駿遠兩國へ御移封の砌も、權現様上意として、予の亡い後は秀忠、秀忠亡い後は賴宣、自然今の秀忠が男子（竹千代君、家光公）成長して、其もの將軍職を襲ぐとあらば、賴宣へは今の知行駿遠の外に甲府を加へ、都合百萬石として、諸事の格は江戸柳營同様の義たるべしとまで御沙汰なされた。然る程に其頃天が下にあるほどの大小名、第一は大御所様、第二は將軍様、第三は常陸介様（賴宣卿）と、御三所御一體とやうに崇敬申した。實に以て目覺しい御義、察ふに此れが彼の殿の頂上の榮花の御時節、——扨て其の御運の御落目が、元和二年の權現様御他界ぢや！」

兵庫は默して頷きぬ、其眼には遺恨の暗涙あり。正雪も歎息の聲を稍需まして、「其の御他界の節——御最期の御遺言にも、彼殿の御義、くれ〴〵もの御意ならせたとは、其際、我が膝を御枕にさせ申した今の久能の御門番榊原越中守の先代からも聞き申した、が、其後にて又聞けば、當時營中の評議といふは、御埋葬の御事よりも右の御遺言、百萬石の義でおざッたと喃！宿老の評議は二派に分裂れて、兎も角も大御所様御遺言、常陸介様に甲府の御領まゐらせらるゝが御死後の御孝道と論ふがあり。いや〳〵彼殿の鋭利い御器量、現今の駿遠五十萬石でさへあの威勢なるを、今五十萬石を增し、加之も江戸近の御要害たるあの甲府を進ぜられうこと、虎に翼、盜に鍵を與ふるに比しとさへ言ふ徒もありて、評定は上聽に立てられた。此時の將軍家は御二代様、篤との御勘考あらせられて、夜中俄に宿老の出頭、土井大炊殿、續いて井伊掃部殿召させられ、内密の御評議おはした。當時の御前の御模様、何とありしか、もとより他の存すべきやうおざらぬも、只、上意御道理、勿論の御義との兩所聲が聞えたとは聞き申したよ。斯くて御遺骸は久能へ御埋葬、其の御宮の御經營は常陸介様御一手！　剩も御造營繪圖面は江戸よりといふ……。甚麼と、これが、御遺言百萬石の御返報とは、ま、御分、何と胸算るる？　大阪の金銀散らさう爲にと高野の大塔、東山の大佛、北野の聖廟、御修理の造立のと本多佐州が計策はれた其の秘策、あはれ再び彼殿御身に降り懸ッて、——加之も是れは御指圖は江戸！　其の工事にして少々の脱落もあらば其を執柄として御咎との陷穽！　かゝる詭計を設けての老中が下知と、殿には御知りやッてか、御知りやらぬか、御孝心第一の御生得とて、資財を惜しまず、御苦勞を厭はせず、御自身御草鞋の御采配にて、見られい彼の大伽藍、金銀瑠璃の燦爛たるをあの御山に建てさせた。想へば、當時の御心中、想へば〳〵只涙ぢや！　江戸老中の猜疑、無念といふも餘りがおざる。」

（十八）

「論よりは證據」というたる事實を經絲として、正雪が舌頭の梭は間斷ず運行れるに、兵庫はたゞ默聽の首を俛けて、回應とては其句切目ごとにする歎息のみなりき。主人は俄に話頭を轉じて「御分、御年齡は？」「廿五おぢやる。」「むむ、然らばお出生は元和の五ぢやな。さらば其等の事、當時の光景はお知りやるまい？……むむ、おろ〳〵と故老に聞いた？　然もおりやらう。出生の以前ぢやもの。而て大納言殿、御口づからの御物語は？……氣も仰せられぬ？呼、有繫は御仁ぢや。御謹愼の深い殿。我們看

立に差はざる、名大將ぢや喃！　其の御口の輕からぬところ、到底が御父樣に酷肖ぢや。傳へ承はる、權現樣は、平常の御一言をも御腹中に再三の御思慮あらせて後、扨て御口外ありしとか。されば外見には御舌の吶るやう見えて、御應對は御不束であッたといふ、而て御眼力は只一目にて、敵の腹の、其底の底をまでも看破せらるゝ……。今の紀伊殿も同是其流ぢや。右の江戸の下知、必然其策よと其節に御看破きやれたに違ひない。御草鞋穿も其故ぢや、五十萬石の御身上全體を費けて御造營見事にもお出來しやれたも其故ぢや、當時江戸よりの檢分使も、其の結構には目の驚かいて、洵に手持不沙汰、笑止の體であッたといふはや。然る程に、老中輩は、御咎とおもうた手筈は齟齬ふ、御普請は成就する、百萬石の御遺言をば兎角と申し出るものもある。仍て、是非なく、其功を賞し、御遺言の沙汰を減し、殿の御鬱胸休めむが爲に、元和の三年、七月と記憶えた、從前は參議從三位左近衛中將でおはした殿を、中納言に執奏する。是れは言はゞの口塞けぢや。泣兒をすかす節の棒ぢやよ。斯くて此一埓も先づ濟み方と……見る程もなう、不思議の一大事又出來して、江戸老中に動顚の肝冷させた。此事が抑今日にいたる御不審の根元、御謀叛との疑惑の原由。是非もない御運の末で、紀州家御滅亡といふ端緒ぢや。と申す仔細を言はゞ實に根葉もない、御母親樣養珠院樣の身上からぢや。」

兵庫は倍驚きて、其肉を硬うせり。主人の舌根は、續りて彌鋭利うなりぬ。「言ふまでも無い、御身も存知の、かの御女性は、上總の大多喜正木どの御女で、御土地柄だけ日蓮宗の御信者ぢや。當時甲州身延の住持を日遠といふ。道德の高い聖人で、遠近道俗の信仰も格別おざッたが、女性には彼の僧が安房の小湊誕生寺に留錫の頃よりの御歸依とやらで、身延住持となつてからは御音信も間斷せず、上人、折節、當地沓谷蓮永寺へ參りの時は、城中へも請せられ、又た身延へ歸山の日は、微行ての御參詣もおはしたは我們物心知っての頃親しうも聞き申した。然るに其ころ、久遠寺身延本堂が大破に及んだ。もとよりの大檀那、右の修理をと上人悃願申されたに、女性には喜びての御承知にて中納言殿へ御頼み、有渡庵原の山々の材木許多を伐採らせて彼山へと運搬れた。是れが扨て大事の件！　江戸への注進あるか否や老中の仰天は以ての外の態、扨は駿河殿（頼宣卿）甲斐を御手に入られむとて、身延の坊主ども語ひ、本堂の普請に事託せて、彼山に城郭を取立てらるゝござんなれ、天下の御大事！　と、同肝膽を碎いた末が、折節廣島の福島沒落で、安藝は闕國、其手へ和歌山の淺野どの移いて、扨て駿河殿を其後へ……と斯樣の評定端的に畢ッて、五年の七月、すなはち御身が生れた年ぢや、五萬五千石の御加封といふを御規模に、南海の果へ哀れ島流とおなりやれた！　無慘の御事喃！　原來木の國といふ程の土地、國は廣いも四方は山ばかり！　既に御宛行の御米にも事缺るゝを、安藤殿（帶刀）より、紀州家御凋殺になさるゝか？　と手詰の、嚴しい訴訟せられたで、大和の吉野を伊勢に替へ、飯野飯高多氣一志で、僅に物ゝ十八萬石、それも同じく山のみの土地！　其後再應の御愁訴にて、白子其ほか、一兩所をば下されたも、其の土地は大學殿（藤堂）領分を中間に介みて、都て手乙甲——手乙甲にとさせらるゝ。是が柳營老中の手段ぢや。手も足もといふ其の趣向ぢや。」

（十九）

「其の趣向——手足も出させぬ局屈の御趣向なりや、寇に刃を藉すに比しい五十萬石の大祿何故に殿に宛行れつらう！　紀州御移封より今日まで廿五年、何故に其間を安閑と棄置れつら

う？」兵庫は不審の口を啓きぬ、主人は其問を待兼ねたるものゝ如くして、「ハヽ、其義ぢや。微妙も問はれた。」「御身は此の不審晴らさるゝ料持たるゝか？」彼は意表に正雪の論辯を怪異めるなり、何さま紀州御移封の魂膽、然る理由のありしかは知らぬも、萬一爾もあらば、朝夕御傍に奉仕せる我等、雨の間風の隙にもなど其の御不滿を漏させ玉ふ御氣色の覗はれぬといふこと有るべきや、さるに、啻に然る御氣觸のおはさぬのみか、朝は必ず卯刻の御目覺にて、御盥漱をまゐり、御袴と仰られて、寢殿の彼方乾の御間なる權現樣御神主に對はせられての御拜あり、次に東方に御向ひにて、遙に將軍家に御默禱あらせらる、此は日々の御勤にて今も渝らず、又假初の御話にも、事柳營の御上に及ぶ時は、召されし御頭巾を必ず脫がせ、御褥を外させらるゝこと、我れ十五歲にして御側にまゐれるより今年にいたるまで十年、此の長き年月の間、一回も措擧たせ玉ひし事なし。爾ほど無情くもてなさるゝ江戸將軍家に、如是き御會釋の能るべきものか。我等も謹て承はる、此の和歌山の御座たる、京攝はもとより、南海咽喉の重鎭として御三家の御一家たる當屋形を重々と居ゑられ、事有る日は尾州越前と相聯びて關西を扞禦め、九州の探題唐津殿（小笠原）と呼應して日本の西南方を控馭るの御趣意といふ、斯う幕府にも深く賴み思し食すゆゑにこそ、當方にても斯く眞心の御體意はあるなれ、されば御兩家へ幕府、紀州に御隔心なし、さまざま申すは只物知らぬ世上の愚盲が雜說のみ。其の愚盲が雜說をとりて兎や角といふ、察ふに此の浪人、何事かの宿意ありて斯く虛構ふるか？　我が若輩を見侮りて急迫すか？　城代への我が不平を、徑ちに將軍家への御不足と看謬りて詭辯を弄するか？　彼は自家駿河者といへるも、或は恐る、大阪島原への緣もや牽ける？　と兵庫は此時注意けるなりき。

「ほう？　不審とある。扨は今まで陳述たこと、詐言とか？」「詐言とは言ふまいも、大納言殿……」「何となされた？」「島流のなんのといふ。自然御不足、思し召すなんどのやうに……」「呀、其を御不足にも思召さぬと？」「勿論の事！」「ハ、其れを御不足と思召されば、恐れながら御虛茫ぢや、やさ、腹立無用、御身の安危も御遠慮ない、帳に巢くふ燕と同樣ぢや。いや、大納言殿、それ程の御盲目で無い。疾に御承知。されぱこそ御別心！」「や！　御別心。確と言うたな！」兵庫が面色は再回勃發れり、

正雪は空嘯きぬ。一言いでかよ！　其の御覺悟あればこそ彼の諸浪人……」「えッ。」「……大崎玄蕃、眞鍋五郎右、水野、河村、藪、三刀谷を初として四國中國奧陸奧までもの名有る侍三十餘人、いづれも本地、又は倍高にして御抱へある。就中あの村上彥右、福島浪人、他家の渡奉公する新參の士を御家の古參さし置かれて、總軍の武者奉行、總旋を御預きやッたは何の所以？　諸人も不審申たが、こりや天下の諸浪人、浮浪徒に、紀州殿は賴もしい御仁、器量さへある者なりや譜代外樣新古參の差別はない、其腕かぎりを御用ひあると、懷づけうが爲め！　是れ一つにて其の證據顯著いものおはさぬか？　其外にも御手許、御在所には參らずして、御志の御扶持合力を受くる者、伊勢大和河內和泉、近江山城津の國丹波、中國四國東國にも數知れず。こりや其中には將軍家へ御敵對の龍造寺主膳如きもあるぞ。其餘、高野衆徒を御手懷づけ、根山に御風呂を御立て、其の薪木の料として年々莫大の金子を遣はさるゝ。言ば更らなり、地侍、大庄屋、出家、山伏、梵論、町人の屬にまでも御入魂なされて、國々の色目、異變の事あれば直ぐ御手許へ內通申す、我們は御身が其の御執次申さるゝ事とのみ存じたに――御知りやらぬ

か？ 紀州の土未だ踏た事はない我們すら其程の事をば知るに、多年御傍の――加之も御家老？ 忠誠も譜代の牧野氏兵庫たる御人の御存知ないか？ 扨も〳〵ぢや！ なれども殿は斯に申す、當代無雙の御分別者、或は御身にも御遠慮あるか。其の御遠慮あればこそ今日までも江戸より手を附けられぬ。されど形の有る處には影が附す、形の有る所には響が應ずる、江戸老中とて昔より盲果もをらぬ。細作は細の目、物聞は殊に耳、甲府御手入とて動靜するも、其の動靜すべき理あつて動靜する。紀州川流も、流るべき由おはして流るゝ。但し、流す、流さるゝ、色目を見する、氣にも留めぬ、急迫す、窮屈く、臨時に無量無邊の種々の意味ともあるを、若輩とはいへ御身があの無分別、終に意外の破綻から此方の尻尾を捉へらるゝ如き手を出さず、時機を！ 時機をと今日迄に待せられた殿の此事聞し食さば何ぼうの御無念…想察まゐらするにも餘りがある！ なれど既往は追ふも及ばず、只先んずれば人を制すぢや。覺悟召されい！ 油斷とは？ ――ハテ後手に廻つぬ樣……とまで申すぢや！」

二十

我君を謀叛と謀る悖むべき隙かと見れば、無にても無し。其の御身上の危殆きを救護むとする味方かと見れば、備うにも非らず。言ふところは歴々として證據あるも、論ずるところは餘りに秘密を穿ち過ぎたり。虚か、實か、善か、惡か。既に其の言語の原由く所以を知らざれば、焉んぞ其人の意嚮の在る地を識らむや。要するに彼は兵法者なり、啃に風雲の際會を冀望ひて、我を干犯すか。又想ふ、彼は聞ゆる軍學者なり、密に反間の苦策を試みて、我を誘導くか。さりとては其の篤實の借上！ 其の人も無氣なる旨説！ 勝さに、些と、譯しても……とは思へども、彼が本事は我が及ぶ處にあらず、素性の詳も亦た我舌もて當り難たし、若かず目下はまづ彼が隨意にして、重ねて準備して、と兵庫は黙然其面色を繕べぬ。「高論の趣意はおろおろに會得申した。御助言添けなう存ずる。なれど此事如法の大事ぢや。一席の座談で到底お斷うと申悪くい。」「勿論の事。但し……」と言唱されて、兵庫、再び彼が面上を懐と視れば、正雪は息を飲めて、「……機を知るは其れ神乎！ 彼の密ふるを見るに先つ集るはあの目ぢや。幾微の在る所を逸くに愚人は其奇に驚けども、これを達人の目から觀れば、茶懐の日常茶飯の事。米を研ぎて飯炊ぐを知り、火を焼いて茶を煎ずるを見るも同樣ぢや。たゞ御身も静思せられい。默慮、工夫、熟ら天下の色目――別しては隣國の動靜といふ御覽ぜられなば、山を隔てゝ烟を見る、早く其火あるを知る端緒に達せらるゝも難うは無い。ハヽ今日の御話もまづは此まで。」其後は、風月の話談、兵法の論議等に主客の笑聲も快よう聞えぬ。

* * * *

一揆の騒動、安倍川原の磔刑、駿府の凡ては不測の濁穢充盈ちたるに、其を懼からで神明の御座所をいみな奉つらむこと其の恐懼あり、御用の御修覆、三七日を御延引御尤も實、と神原方より神官の申し状を副へて申し來れるに、兵庫もこれに同意して、工を延期す。待つ事もなき大谷村の旅宿にありて、たゞ城中の消息をのみ聽はせしが、城代も町方も其後の光景は宛然火の消えたる如くにて、徒黨の穿鑿も、遺米の徴發も、今はまづ沙汰止の姿といふ。さればこそ彼の正雪め、間合たさ隙の消息して、人驚かしの流亡呼はり！ さん〳〵に予を苦めみつる、憎さも憎くや。大惜あきたる工夫の、工案のと、自個甚麼の得たるところか有る、いで然らば彼を訪れて、咎を計とやらむ、いふ化皮引剝き、宗祖の定とかの三十棒、其の鼻頭に、

と競ひ立ちつゝ、一夕、大谷を出でゝ府中に來り、其の江尻町なる彼が玄關を音耗へるに、執次の弟子若黨立ち出でゝ、師匠はこの程、處用ありて江戸へと罷りぬ、留守中に牧野殿御來臨あらば、對面は此冬か、來春を期し候ふ、其の場所は思ひ寄らぬ所でこそ候ふべけれ、と箇樣に申して發足候ふ、と言傳す。

でこそ有るべけれ、彼も有繫に世間に面を賣る奴、兵庫に其頭を蹂躙られては立つ瀬もあるまじ、面會ぬも道理、と冷笑ひつゝ、立歸る途次も、猶懸念りなる城代が邸邊の光景、いかにや、と漫歩きに託せて大手前なる堀端を過ぐれば、個は什麼、其の表門は十文字の青竹もて緊く鎖されて、有る程の武者窓には粗板の目張嚴重なり。こはそも、こは如何、彼人は何の御咎？ 何時よりの閉門？ と敵とはいふも何とやらむ心許なきに兵庫は遽てゝ供を走らせ、近邊につきて仔細を問すれば、閉門は今日の正午ほど、然も御咎は城代一人のみならで、町奉行、御目付、其餘の役人殘らずなり、もとより詳細きは知れざるも、風聞には、此程安倍川にて磔刑に梟げたる其者が吟味違ひ、江戸御下知に外れたる專橫の仕置ありたるが故ともいふ、兎角は容易ならぬ大事、とのみにて正確との義も知れず。

彼れ火の滅えたる如しといふこと此故とは推せらるゝも、其の吟味違ひとは何ならむ、自儘の仕置とは何やらむ、三四郎らが上とあれば、其の御煞度の濺汁は或は予にも來るべき歟、可矣來れりとて悔ゆるにも及ばず、是は覺悟の上！ 但し其の物の用意は今よりして爲む、先は急げ。と傳馬町なる馬次の役場前にさし懸る端、京方よりして來りぬと覺しき早追の駕二梃あり。視れば、其提灯の印は見覺えある安濃津の藤堂家の徽章なりき。「ハテ大學殿早打、今ほどに——心許ない。」

（二十一）

と看る〳〵、其向側なる梅屋といふ軒行燈揭げたる旅店より、閃乎と出でたる一人の武家飛脚あり、彼も此の早駕の提灯を目に懸けてつかつかと走り寄りぬ。駕の戸に面さし附て、「安濃津御衆か？ 倘か桑名樣？」駕の内には「應。」といふ聲ありて、「然言ふは誰？」と問ふ語も、幽に兵庫が耳に入りぬ。飛脚は極めたる低き聲、「桑名樣でござりますれば僥倖のこと、私は和泉橋御上屋敷より釆女樣御狀持ちまして出ましたる者……」引戸は忽地啓かれて、中なる人は面を出だせり。提灯の燭光に透し視れば、三十左右なる、身裝立派の武士なりき。「いかにも予は其人ぢや。彼方書狀ありとなりやこれへ越せ。」「其外に御口狀もおざりまする。」「むゝ。」と武士は、半分回應て再び駕に身を躱しぬ。看る〳〵、燈と戸の簾に火光の射せば、手蠟燭もて今受取りたる書狀といふを讀むにやあらむ。良少時して、「―藤作！―藤作」といふは彼の飛脚の名なるべし。彼はあッと傍に寄りぬ。「其の口狀聽かう。次の駕の家來を呼べ。」後なる駕より立ち出づるは此の武士の若黨ならむ、遽たゞしく前進りて首を低れて主の旨を聞き、又た飛脚に會釋して口疾に談合るが、「……前面の梅屋は幸ひ御定宿におざりまする。那家にて……」「うむ。」と武士は起身ぬ。藤作はこれに隨行へり、若黨は其緣に腰懸けて、往來に眼を配りぬ。

此等の體を、目も放たず、耳を澄して偸視ひたる牧野兵庫は、此時暗に思ひたりき。安濃津が內なる桑名といふ、其人は我れ未だ面識ざるも、彼が容貌、彼が身裝、其の年齡によりて推するも大方は用人の賴母なるべし。賴母ならば大阪の御陣に討死したる彌次兵衛が末子、父兄にも優りたる分別者とて、今は國元の仕置一式其身一個に委任さるゝ程の男、其男が今斯う

火急の早打とは至重大事と察せらるゝに、又あの飛脚が江戸屋敷公用人たる藤堂采女が書通齎らして、秘密の口状まで副へたりといふ、什麼何事ぞや。関の一揆か？　我が和歌山を發途たるは近日の事、其節までには物聞の注進にも然る筋は聞えず、諸國の動亂か？　今の天下に見渡したる處、然る色を立つべき者有りとも覺えず、或は彼の城代の彌左兵衛、正雪らが言へる御家の御謀叛か？　其義ならば第一に聞かで協はぬ此の兵庫が夢にだも知らぬ事なるを、縦令ともある武士が、假初の世の風聞にかゝる狼狽たる暴動は得も爲まじ。なれど御家と安濃津とは年來の確執、間もあらば、隙もあらばと相互に睨み合ふ交なるに、彼等の談合抑も甚麼の秘密なるらむ、聴きたき事かな。

要こそあれ、と兵庫は一個、供を遠斥け、忍び足に小蔭を出でゝ、彼の旅店が掲行燈背向に睨つ、其邊を窺へば、其家に裏手へめぐり出づべき一條の路次ありき。天幸のものよと喜びて、我ながら怪しきまでに蹤を偸みつ、宵闇の暗きも好しと、暗を摸りつ、辛くにして庭口の垣のほとりに辿りつけば、此處に小さき竹編戸あり。是れ、庭の掃除口といふ門なるべし。這、此門も天幸のもの！　と兵庫は手を懸けて悄に壓す、其の壓すまゝに内よりも開く者あるかの如く、するりと明きて、但見る間に、半身を露はす者あり。

豪膽不敵の牧野兵庫も此體には愕けり。覺えず身を披き、屹と視て、聲も發てばと刀の柄に手を懸くる。彼も我をば盗賊とや見紛つる？　突如に其處に俛伏して、「あゝあ、もし。」手を戰かす、其聲は正しく若き女子なり。「汝は何者ぢや？」潜めたる聲に力を罩めて、兵庫は問へば、彼女も低聲に、「御免なりませ、私は此家の婢。今急用で大谷まで參りますもの……」

「ナニ大谷？　大谷の何處に？」「は、はい。」と口籠る。「大谷の何處にぢや？」一層に力を罩められて、彼女は戰々、「は――はい、紀州様御家老、ま、牧野様といふ御方へ……」兵庫は、實に愕然たり。

（二十二）

愕然たりし兵庫は、又倏忽にして事の便宜を喜びぬ、されども此の女子の果然何者なるべき歟を疑へり。「お主、其の牧野といふ人、面識か？」彼は誘導を試みたるなり。「はい、否え。」「其の面識でない人に、何の用？」「それは――其義は申し兼ねます。」此の問答の氣質を悟了たるか、垣の内なる離座敷の障子は披けて、彼の飛脚の藤作男は、其邊目をつけて看回すやうなりしが、闇は黒白なし、此方の姿の眼に入らぬに、軈て又其の障子を閉てぬ。呼吸を凝めたる兵庫は突如に進み寄りて、彼の女子の腕を捉れり。女子は如何なる憂目にも遇ふらむ歟を怖るゝ如くに、振換切て叫ばむとするを。

「叱!!　此方へ来い。乃公が其の大谷の牧野ぢや！」「えゝッ！」呆れし女子は、星光に彼が容貌を恐る〳〵透し眺むる、其耳に口を倚せて、兵庫、「乃公は確に其の兵庫ぢや。今此と、爾る仔細あつて此處へ竊來だぢや。原來がお主は何者？　乃公に告うとは何の用ぢや。言うて聞かせ。さ、聞いて呉れ。」

色こそ見えね、香やは隠るゝ梅の花、繙きしめたる伽羅の薫も闇ながらに衣に匂へり、一表の人物、立派の雙刀、東西を擦め婦女を欺す盗賊兇人の属にあらずと彼女も莢に悟りや得たる、身の戰慄もやゝ止りて、「そんなりや貴君が眞實、牧野さま？」「おゝ、乃公が實の兵庫ぢや。ま、此方へ來い。恐るゝな。」女子は摑れて、此處を離るゝこと一町、[illegible]だきて、露珠冷かなる田畔に來りぬ。

「何よりも聞たいは其の用事ぢやが――其事よりもお主はまづ何者ぢや？　こゝは見る通り闇

く人も無い。隠まず明せ。」女子は決心の口氣なり。「私は、貴君を、眞實の兵庫様、死だ兄が御恩ある御方と思うて申上げます。萬一私をお備りの城代町方の御役人なりや御遠慮なくお縛り下されませ。私は此程の强訴の張本、安倍川で磔刑に梟りましたる安居村の三四郎が妹、宮と申すでござります。」吁！宮か、三四郎が磔柱に梟けられての其最期まで、我と與に其名を忘れざりし其の宮か？ 豫ては想ひし、彼女をば兄の三四郎が差圖により一と遠く領外の境へも迯し遣りたらむと思ひしに、近き此邊に匿し置けるか？ 燈臺元暗しとも彼は思へるか？ 然りとては危殆かりし事！ と思ふに附けても、彼が義に勇みて一諾を專らとせず、徒爾に其身を棄てたる當時の感慨、自ら胸裏に急迫り來て、兵庫は漫ろ暗涙に暮れたりき、其の氣勢を覗知る宮も、同じ悲恨にや堪へざりけむ、袖を面に、洟を啜れるが、俄に涙聲を催として、「そんなりや貴君は眞實の兵庫様。其れなりや御詮議は後にして目下御身上にかかる大事の件がござりまする。」「其れぢや。お主、牧野兵庫不覺であッた。何事ぢや其の火急の用とは？」「唯今、あの梅屋に、津の衆の御徒脚が見えました。」「むゝソレ承知ぢや。乃公も其の飛脚と見て忍んだぢや。」「え、其なりや彼衆の密話、御聞なされて？」「いや、其話は聞うとする時にお主に遇うたぢや。」乙女は歎息して、身を摺り寄せ、四傍を回顧して聲を潛めぬ。「何をお隱し申しませう、私の兄は此の土地で先生様と申します由井正雪といふ御方の弟子、由井様も私兄をば格別にお引立下さるので兄は彼方を父御のやうに申てゐました。彼の强訴の十日程前、其方はこれから先生様御宅に參ッて御居間の用をする、總ては先生様仰の通りに立振舞ねばならぬぞと申しつけて、江尻町の御家へと伴れました。すると彼の騷動。兄は城代衆御手に遇うたと聞きまして、こりや如何なる事と途方に暮れて、泣てばかりの折柄、先生様の仰には、今度の事には大谷村にござる紀州様御家老牧野兵庫といふ御仁の御骨折はいかう有た、なれど其方の兄は此と逼まッた事為たで一命は助からぬ、其れは扨て是非ないとして、右の兵庫といふ御方志といふは忘れては濟ぬぞ、其について其方に、大事の義を申し聞くる、和歌山にござる紀州殿には此節御謀叛との風聞がある、乃公も駿河の者、紀州家をば餘所外のやうにも思はぬに其様と聞いては棄て置かれぬ。扨て其の風聞の原はと糺せば彼の兼當家ぢや、有る事無い事安濃津衆の觸れ散らすによつて其の風説も世に廣がる、殊に此節は津の飛脚ども、斷えず此の海道往來するが、何分にも懸念りぢや、就ては、幸ひなはあの梅屋、其の主人は乃公が弟子で、其方が兄とも仲睦うした者、其家が津の定宿ぢや。仍て其方を梅屋へ遣る。但し日陰者の其方がこと、餘の客へは出な、たゞ津の旅人と見ば武士町人に拘はらず給仕に出でよ、而て其の話氣に意を注けて、聞き出したる事あらば早速告げい、乃公が留守ならば右の大谷の牧野殿へ申せ。此は駿河男の舊主へ獻す御報恩、一つは其方が兄に替つて兵庫どの御為にする寸志。」と斯う被仰られてあの梅屋へ遣られましたは一昨日のこと。」宮は、口疾に告け來りて一息吐けり。

（二十三）

兵庫は音もせで傾聽せり、宮は猶語を續けぬ。「昨日から安濃津衆に待てをる處へ見えたは彼の御飛脚でござります。私が目を注てをるとも知らず、京方からの下り衆は未だ見えぬか、紀名様といふ御方は未だ立寄らぬかと頻ッて聞きます。御飯喫べる間にもそこ／＼、外方ばかり眺めてをる、所へ問屋場へ觸したたあの駕。提灯の御紋を見るより、サリヤと箸を投

構へて、一大公儀よりの御沙汰におざる。兵庫より國元にて屹度遠慮めされい。」

(二十四)

當時の安濃津の主を藤堂高次と申しけり、左少將高虎朝臣の男にして、曩に大學頭たりしが、寛永十一年に侍從になされき。されば公然たる場所にては安濃津侍從と申すも、世上にては猶呼慣れたる稱を用ひて、津の大學殿とは言ひけり。

原來、藤堂の家たる、高虎の御父源助虎高の代までは、江北小谷の淺井氏(備前守長政)が手に屬きて、江州犬上に住れたりしが、高虎の時にいたりて織田殿に隨ひ、豐臣家に屬し、關ケ原御合戰以後はひたと家康公御手に在りて、忠勤世に超えたるをもて、幕府にても貳なく賴もしきものに思し召され、御譜代の歷々井伊と並べて、井伊は關東三十三ケ國の旗頭、藤堂は關西三十三ケ國の旗頭、事有る時は兩家總軍の先鋒たるべしとまで定められたり。されば其の領地も伊賀一國に、伊勢五郡、これに山城大和の內九萬石を併せて、都合して三十餘萬石、勢猛たる大名になされし程に、高虎高次父子二代とも此の御恩に感じて、公儀奉公のほか他事も無かりき。

・高虎は寛永十七年に享年七十六歲にして江戶の邸に卒せらる、嫡子高次、引續きて向柳原の邸にあり、國元には藤堂宮內を初として、同く壹岐、桑名權掃以下の士をさし置かれ、國政滯りなく料理せしめられたりしが、元和五年に紀州家和歌山に轉封あり、伊勢四郡を其の御領と定められし時、一志一郡をばこれを二分して兩家知行となされたり、これに依て雙方の溝洫相錯りて年々の水論は水旱ごとに息む時なし、況して其後に御加封ありし河曲郡白子の町をや、同所なる紀州領は、藤堂方の領地を介みて犬牙の如くに錯綜りたれば、此の畔彼の畝の差別もつき難たく、我を侵せし、彼を掠めぬとの爭論の果は劫じて、摑ち合ひ叩き合ふ血を流す珍事さへも尠からず、されば農民は皆、蓑笠の中に凶器を匿し田圃に出で、家中の壯者らは百姓の警護と號して、竊に弓槍鐵砲など携へつゝ野廻りする、其の野等廻り壯者らの出過ふ時は、小競合めきたる喧嘩は端的に起りて、郡奉行代官等の早馬を飛ばすことすら折節はあり、此等の意恨の累り積りて、今は紀州衆は津の者を仇、安濃津方は和歌山を敵と罵りて、互ひに間隙あらばと覦ふまでの容易ならぬ狀勢とはなれりける。

かくてある程に、此の七月の初旬なりき。安濃津久居の町々に怪異しき風說の起ち始めて、紀州領なる松坂、田丸、白子の町に和歌山より多勢の人數を向けらるゝと言ひ騷ぐ。不思議の事かな、唯今の人數の催ほし、何等の仔細か、世には彼殿の御上につきさま〴〵の事を言申せど、其れは世間の雜說のみ、當方との確執といふ、それは下々の私情なり、此の太平の世中に何の珍事か有るべき歟、なれど事は隣國なり、兎角は其の實證を見てまゐれとて、宮內壹岐賴母の三人、心利たる足輕を撰て彼の三所へと派し遣りたるに、彼等は前後して歸り來りて、——彼の風說は實で候ふ、田丸白子には、其城に、陣屋に、さしたる結構は見えざるも、たゞ和歌山なる歷々の衆七八頭ほど、甲の町乙の村の寺院坊寮に宿陣の札打て候ふ、就中彼の松坂はあの城の普請といふをせらるゝやらむ、材木を運ぶ人夫石瓦を積める車の數夥多しう、町中には紀の字の半被を着たる者道も去りあへず、其等が酒屋へ入り、餅店に立寄りて、物喫ひ、醉とろけて呼號る口裏を聞き候ふにも、今度は天晴れの手柄して一廉の褒美にあり附かむ、目に餘る働きして御感に預からむ、兎かくは當代に二度と無い事、久し振の足手伸し、子供孫

あらが語り草にもせよやと勇み立つ。方々は何を共様に喚はるゝか、此の様子は如何？と問へば。ハ、猪狩ぢや、珍らしい猪狩ぢや、伊勢一國から、東海道、御江戸までの猪狩ぢや、と嘶う申す。伊勢一國、東海道、江戸までの猪狩！　何さま要あるべきことゝ爾様存じて馳せ戻ッて候ふ、とは彼等が同音の注進なり。扨は！　といふ三人の驚愕は大方ならず、兎も角も此義江戸上屋敷へと、急ぎ早打の飛脚を立て、猶ほ事急ならぬ先の用心にと宮内は安濃津、頼母は久居、壹岐は上野、伊賀、と三方に立別れて、紀伊殿、別事なき御通行ともあらむには格別、然らずば各其城を枕にして命を限りの一防ぎと談合しつ、有る程の人數を分ちて急ぎ發途つ。これを見たる津の市中の動搖は、何東西も名狀すべからず。

（二十五）

悠く世間の物騒がしきも御耳には入らぬか、大納言殿、七月の中旬過ぐるころ和歌山を御發途ある。御供の人數は僅かに百餘人。紀の川を上りに、名手、麻生津より先づ高野へ御參詣、こゝに五日の御逗留にて、山の靈場殘りなく拜み廻らせらる。それよりして吉野なり、春の花を緑にかへたる山の景色も、さすが捨てし人のよしとよく見し名所とて、自然他に超えたる眺望目がれずとの御賞翫大方ならず、吉水院を御旅館として、藏王權現へ奉納の連歌の御會もあり。やがて此處を出で立せて、大和と伊勢の國境なる高見峠を踰させらる。一武士の弓矢とる名の高見山、なほいくたびも越えむとぞ思ふ一とあるは此時の御詠とかや。かくて此の街道を彌見、大石、大河内と越えさせて、其名もめでたき千歳の松坂へと着かせらる。此の路次も、故蹟をたづね、名所を訪はせ、犬を奔らせ、鷹を使ひ、山の景色水の流曲の面白き所々にては御野立の御茶などありて、寔に太平無事の御旅、いと悠々たる狀態なりき。

　御先供として豫て松坂にまゐれる面々、水野太郎作、村上彦右衛門を頭にして、御城の追手に出でゝめでたき御着を祝し申せば、殿には殊に御心地よ氣の體、いづれも大儀、大儀、との御詞を下されつゝ、三の丸より二の丸、其れより本丸の御書院にと入り玉ふ。と見るが際、「宗佐、宗佐」　此の宗佐は千利休が付孫にて、其ころ世に聞えたる茶博士なりける。拜領の黑紗の羽織に水色の帷巾したるが、はッ、はッと御返辭しつゝ御前へ出でたり。一宗佐、豫て申しつけつる數寄屋は？一御給園の通り、御作覆出來にござりまする。一「ほゝう、然様か。予も其の修理、十分に出來させうとて故意と途中も急がぬぢやッたよ。一「炭は？一「添けなき御意、一支度、總て仕ッてござりまする。一「然らば。一

　殿には、御鷹狩袴を解かせしまゝ此の茶博士に案内させて、彼の數寄屋へと御座なされぬ。此の數寄屋は、舊の丸の一段下なる、百疊敷の御座敷の東向なる石垣の上にあり。以前は向者の城主古田織部が指圖とて、黑木の柱線に闇けく、茅の軒端、反古張の壁、寂寞を旨としたるものなりしを、賴宣卿御覽ぜられて、風流は然もありなむ、なれど武將の茶はかゝる室にて立つべきものならずとて、新たに宗佐して御修理といふを名に、其の結構換へさせたるものなりき、されば此の數寄屋たる、尋常の茶室の風とは日を同じくして語ふべうもあらず、先づ土臺をば、熊野丸太のしたゝかなるをもて井樓の如くに組上げさせ、屋根は野地をば神鉛にして、銅の厚き板もて其上葺れたり、明り窓には城の塀の狹間を用ひ、庭の變林は彈道の巡を其ものにして、數十丈ある斷崖に臨みて造り設けさせ玉へるなれば、是を甚麼と言ふべきやらむ、水を出し香を評するの時は、自然なる御宴として座邊に紅塵の舞ふをゆるさぬも、一旦風雲

[illegible]らの日は、誰か這裏に蹤して盧氏の經を繙く者ぞ？ これを經營せる宗佐の才も、亦三十文の賣茶錢に甘んずるの徒にあらじ。

「御修理、如何でござりまする？」「むゝ、總ては存分ぢや。好う仕ッた。まづ一服せう。」

殿は、彼方此方を隈なう御覽じて、御機嫌も大方ならず。軈て進らす一服を氣味好う召して、

「宗佐、汝に褒美取らせう。何なりとも望め。」

宗佐、把りたる茶筅を擱き、遽たゞしく座を退りて、「有難たき御意。附きまして宗佐一つの御願ひがござりまする。」「ふう、改まッた？ 何事か？」「別義にはござりませぬ、久能御山御普請御用として出向はれましたる牧野どの、――内々の御逢をと私へまで切ッての依頼にござりまする。何卒此義……」大納言殿の御氣色は俄に變りぬ。稍御膝を直させて、御聲低う、

「奴めは當所にか？」「さらばにござります。」「唯今は御咎の身、御前恐れ多うは存ずるも途中其外にて見聞の狀態、恐れながら殿樣御一大事と有やうにも存ずれば、宗佐内々にて御目通りを、と箇樣に餘義もなう……」「而て、今何處に在る？」「當御城下、龍泉寺に蟄居し罷り在られまする。」殿は鼓舌一打せさせつ、「ハテ癡呆た奴！」

（二十六）

癡呆め！ との御意に宗佐は恐入りて差控ふれば、殿も少時く御思案の御面地なり。

「予が大事といふ――聞つるか？」「いや、何とも。」「大方の事情は知る。江戸、駿河、海道の雜說。扨は津の者共が周章の體でもあらうが……」と猶御首を傾げさせらる。宗佐は頻りに手を摩みつゝ、「殿樣の御脫落ない、牧野どの見聞せられましたる程の事、疾う御聽にとは存じまするも猶彼方が切ッての御愁訴、是れも忠義を申上げられたいからの義とも存ぜられます。公儀御憚りは表向の御事、然るべくは今夜にても御内々……」「うむ、其義察せぬでもあらぬ。――然らば斯うせい。逼塞の家老牧野兵庫には目通り叶はぬ。其方が弟子分、以前の茶道とあらば逢うて取らせう。」「御[illegible]恐れ入りましてござりまする。さらば其支度の間。御案内へも……」「いや此室にて待たうよ。燈火持て。」

時は是れ申の下刻なり、御窓より眺望で玉へば、一方は名にしおふ伊勢の海原目もはるかなる、夕風に波さへ見えぬ海の面は遠く外洋の潮につゞきて、空か水かの差別もなし、一方は尾張の智多なる巴豆の岬、野間内海の韜く綠に、蒼きを含める山の色も、それかと見る間に暮れ初めて、紫に[illegible]き濃[illegible]の[illegible]手は、閉りて暗澹の名殘の餘光に目炫ゆき黃金の色を見せぬ。變幻百出、這の面白き眼前の景色を、殿は何と御覽じけむ、御歌をや案ぜらるゝ、世態にや看較べ玉へる、御傍に御小姓らが燈火もてまゐり、御夕膳進めまゐらすとも御心づきなげに注視り玉ふ御袖の下に、「殿、金彌め參つてござりまする。」金彌といふ聲に驚きて、背邊を屹と顧たまへば、見も馴れさせぬ青入道の、茶道の一人は蹲踞りぬ。「や、汝は？」「宗佐が弟子、御茶道の金彌にござりまする。」「や、金彌か?!」御覽ずればげに其者なりけり。日來なる出仕姿の華美なりしには引反へて、青き綟子の怪しげなる羽織の下に、鼠色なる麻の單衣を着たりける。「汝、其形態は？」「は！」御返辭は得うせで、只暗淚なり。「入道か！ ハヽ、好う似合うた。」打笑はせ玉ふ殿の御聲も、異樣に沈みて聞えぬ。「諸事は、金彌、恐れ入てござりまする。」「むゝ！ 壯氣の失措とは言ふべきも、汝、異な振舞しつるものぢや喃！」「定に金彌も異な振舞してござりまする。なれど又殿樣も、異な御振舞遊ばしたものにござりまする。」彼は悲淚をやゝ斂めて、恨めし氣に殿の御面を瞻仰げたり。殿は、霎時御眼を瞑させて、「金彌、一

訛りて、彼は遺恨の涙たるべし、其瞼を袖もて拭ひぬ。殿も有繫に愕かせ玉へるか、暫時は默然たりし御口をやをら啓かせて、「年端は壯いが、其方も牲の口端はやゝ利いつる者。右の樣誤謬ないか？」「何と致して……」「往にも無いぢやは！ 予が心底をば先刻も申しつろ。此の猪狩は只尋常の狩、家中の壯者らが足調練の爲め。又た熊野の鯨なんどを快船を出だして捕せしなど、夢にも知らぬ！ 其につけても其方が駿府で見たる柔名賴母――異な話ぢやぞ。何さま安濃津久居上野、それらの騷動は聞き及ぶが、これは彼等が常、予が參府入部の砌も、いつも斥候をつけ、人數を配り、事もあらばと狙ふやうなるは今に初めぬ。されば今度の狩といふ、其れ聞くか否、薄の穗にも戰るといふ臆病風の風說に怯氣を立てゝ、宮內は安濃津、壹岐は上野、賴母は久居に籠ったとは吉野にて既や聞いつるが。其の賴母が――一城を預かる賴母が――加之も分別は些とある素奴が、大事の城を棄て置いて自身の出府、可笑な話ぢやぞ、況て、江戸柳營の僉議、尸張殿前をも御前に召さるゝ、然る程の大事とあらば彼方にも老職は居る、用役は居る、彼等より時限の注進も無うては叶はぬに。縱し其等は箱根足柄にて抑留られらも、國々の飛脚も參らう筈ぢやを。――其れも來ぬ。全般が不審ぢやぞ。」燈臺の火を凝視させて、御思案は半晌なりき。と看る御眼を不圖落されて、「や、膳はまゐッて在るか。まづ喫めう。ハ、金彌、茶道の役、給仕せい。」

（二十八）

大納言殿は既に一椀を喫し了られ 今一椀と金彌に仰す。金彌は御椀を受けまゐらせて飯を注ぎ、御臺に載せて進めむとす。其間、何やらむ御箸にて物を畫き玉ふやうの御氣色見えたるが、彼がまゐらす飯椀を御手に取らせざま、「金彌、今憶ひ得たるぞ。あ、其れも奴原の手段ぢやな。――吁、爾うぢやは！」

金彌は驚きて、御椀を取落さむとするを辛くも取留めつ、「奴原とは？」「その安濃津の奴原ぢや。宮內か？ 賴母か？ 大抵は其名を詐稱せた賴母めが術であらうかや？」彼の新發意の青道心は、僞の錯案に、師の一喝を喫ひたらむが如くに愕きて、御回答もせで只顏に目を瞻りぬ。「ハ、驚くな。それは有る術ぢや。珍奇しうもあらぬ策ぢや。奴原の臆病心から世の聞えを太大うして、江戸御聽を驚かし、一つは幕府老中どもから狼狽た加勢ども送らせう爲め、一つには予に外聞の憚からせて、此の鹿狩中止させうが爲め、兩途かけての策略ぢや。ハヽハヽヽ、確に爾うぢや。」彼の膝は覺えず前めり、「それなりや何故に江戸までは參りませいで……」殿は徐に御汁羮一口啜らせつ、「其れがその、小才覺ある賴母めが所爲とも想ふのぢや。駿府には江戸役人も在る。彼等が耳に入れさへすりや、其後は其者らが手して江戸へ注進して與るゝ。況んや江戸へまゐるといへば箱根の關所を通過ねばならぬ。後日に此策、自然露顯に及んだ時も、關所破の其科に落ちまいが爲の遠慮とも見た。喃。大抵は此邊は外れまい。」愡く仰せつゝ、殿は猶更の一椀をと御所望ある。金彌は今、我が手に注げる飯ならで、甘々と一杯の手盛をも吃ひしかと思ふ無念さに、匙持てる手も震へて見えぬ。

兎角して御給仕は終了たり。「眞に口惜しうござりまする。金彌、面目も無うござりまする。」殿は御楊枝の御口より「面目があるとも言へぬが、致した事は諸事詮術が無い。其方は廿五、今が調練の最中ぢや。以後は獲物の猪か鹿かに熟う注意けい。」「はッ。而て此の御狩は？」「何があらう、箇程までに致したもの。たゞ狩らう。」御事も無氣なる體を彼は見るより、縮むが如くに眉を皺せしが、諫むるに其辭を得ざる如く．

訥り〳〵言ひ出だせり。「申すも恐れ、差出ましたるやうにはござりまするも、——術とは申せ、彼にも御許りの用意ども致しをる最中、其を強てとござりませうこと、私何とも心許なう。是は冀くは、右申上げましたる、思し食御止りの義を……」彼は既や、道理とは言ひ得ずして、只其情に、萬一の僥倖を冀へりき。「扨も念無い。それこそ其方が日常の氣質ともあらぬ事。但し予が身の上を案ずる、忠信は過分に思ふが、——予の考慮とはいかう違ふぞ。言ふ迄も無い、彼奴ら然程に事を企まば、當時在江戸の大學(藤堂)より柳營へも、有事無い事種々に譖しをらう。其の最中に、予が當所まで出馬しながら、狩といふ、其事をも爲で、たゞ空しく歸城する。然らば彼等は何と言はう？ 扨こそ紀州の殿、狩に事託せて松坂まで出向はれたも、此方の用心堅固の爲め、すご〳〵と歸城せられた、原來が狩なりや狩で、其狩を爲たうずものを徒歸られたは、謀叛の底意、顯然ぢや、謀叛々々、顯然々々と尾に鰭をつけ言ひ噪ぎなば、又あの不穿議の江戸老中ども、狼狽た評議に何樣の難義ども言ひ懸けうも知れぬ。或は山陰、四國の端處への土地替か？ 乃至は右に聞く熊野の[illegible]も事實となりて、用意を備り、[illegible]宮を殺ぎ、以前の大和十津川との難題か？ 又は松坂、白子を沒して、奥會津の邊へなど替地といふ、手も足もとの趣向ども爲うも知れぬは！ 其れも時の運、柳營御安意の爲とあるなりや是非ないも、只耐へ難いは、あの大學めぢや。日常は兎に角と口幅を利かるゝも、見い、紀伊國殿、我等家老が些ばかりの用心したに閙怯ぢやられて、散々に逃戻られた、あれ體で男が立つか？ なんども言はれなば予もはや其れ限ぢや。喃、されば此狩は、開くが樣では大事のもの、迂可とは中止られぬ。合點が行たか?! なれど又た其方が忠言、無下には棄てぬ。熟う考慮へう。——先づは退れ。」

御燈火を御手づから出居へと押向け玉ふに、金彌は是非なく御次へ退りぬ。二の丸より三の丸、追手を出でゝ、世を忍ぶ身の人無き方をと、堀端を迂回つゝ、鎭守の八幡の華表際を過る時、「兵庫どの。」呼ぶ聲あるに驚きて顧眄れば、一個の旅裝せる梵論字ありて、御神水の[illegible]際に佇立めり。

（二十九）

金彌の兵庫は、呼懸られて思はずに立住りしが、いや〳〵我は木茅にも心を隔くといふ現下の身なり。喚れしとて迂可と返答すべきかは、と後眼に睨て行過むとす。「御待ちやれ牧野どの。怪しうもあらぬ……」彼は冠りし天蓋に手を懸けつゝ、進み倚りて袖を控へぬ。斯く爲られては振切らむも流石なり、「と言ふは？」何者、と兵庫其身を捩向くる時、笠は早くも取棄てられぬ。「我們ぢや。はゝ、正雪ぢや。」「呀、由井殿か！」「扨も久濶しや、御變りもおざらいで——と言ひたいが、兵庫！ いかう變られた喃。」例の詼謔、はゝと嘲笑はれて、此方は面目もなき圓頂を撫でたり。「看て御與りやれ、此の醜態ぢや。家老の兵庫、今は茶道の金彌と化けた。」「化けたは同一ぢや。我們も此の行裝ぢや。」「さればよ、其の梵論打裝、」と兵庫は左右視つ、「……甚麼の趣向ぢや？ 最明寺殿。」正雪は微笑ひつ、應ぜり。「源左衛門常世を見繼うが爲め！」「や！」「彌、鎌倉の御大事ぢや。早打旁々、一言の末を貰うが爲ぢや。」「扨は江戸表は大事ぢやか?!」兵庫は、彼が江戸より來りしと想へるなり。正雪は其氣色を推知て遮し「如何にも大事ぢや。が、我們は江戸へ得う行かぬ。箱根から引返した。」兵庫は胸を礑と拍ちて、「關所がか？」「おう、其關所を鎖められた。下りは三島まで、上りは小田原まで、——領主の判形持たぬ者は箱根の通行

は到底能はぬ。それで我們も引返した。」是れにて解めたり、先刻殿の御不審ありし江戸屋形より注進の來らぬといふ、果然箱根足柄の兩關所にて抑留られつるか。扨は愈藤堂が讒誣に陷させて、殿は御謀叛と決りつるかや。無念や！ と兵庫は身を顫はしぬ。正雪も渋歎して「今更ら萬々は我們は言はぬ。なれど先頃御身に語うた、紀伊殿御大事今年の内というたは其驗がおざるがや。兎角は人も身の末の運となれば、弱り目に來る祟り目とやらむ、此回の御大事も、殿が不時の御鹿狩といふ是れ一つ、御身が强訴の腰押といふ其れ二つ、此の二派の壓水が一條に合うて、それで和歌山五十五萬石の田圃を押流す。無念の事ぢやが。――然りながら御身も好う途中の危難を脱けられたな。何か、道中から其態も名も變へられたか？」兵庫は又も呆れ果てたり、其身の逼塞、國元にての謹慎といふ、追ては何樣の裁許の品あるべしとは覺悟の前なるも、路次の危難！ 這は什麼何事ぞや、餘りに物も覺えぬ事、と星光の朧氣ながらに彼が面を疾視たりき。此方は不審氣に、「回答のお爲やらぬは我們推量、遶うたか？」彼は戈に息を出だせり。「遶ふ！ 途中の危難とは氣にも知らぬこと。」「知らぬとな？ 嗟乎、知らぬが佛かや！ さりながら御身の忠信を其の佛神の冥護られたか？ 然りとては……」「いや、貴老、其の危難とは何事ぢや？ 兵庫以後の心得ぢや。仔細聞いて。」急かれて正雪は、顧りて此と躊躇へるが、「何樣にも、爾う、以後の心得ぢや。話さうが……」言ひつゝ彼は徐に四邊を回顧しぬ、「餘りの往來ぢや。夜陰とは言へ。――此方へおはせ、恰好場所がある。」正雪は笠を手にして先に進てば、兵庫は藁草履しと〳〵と心許なげに後に續けり。彼等はやがて華表を入りて石階を拾歩ふこと三十餘級、椎櫟の下枝を分けつ、朱の珠籬を左右に見て、禰宜がさゝげし社殿の神燈の下まで行きつると見る間もなく、弓手に聳立し大楠の影にいたりて、其姿は忽然と消えたり。

（三十）

此の大楠は、鎭守の八幡の神木として、其の一枝を折るも神罰ありとて土地の民も畏敬れて近づかず、十圍にも餘りたるべき根方に注目繩引わたし埒を結びて、猶其の木精を鎭祭れるにやあらむ、大山祇の小祠を置けるが、此祠は蒲生殿代、初めて此城を築ける時より領主持として、三年に一回其の修理をなす、修理の時は必らず夜を用ひて、これに關はる大工番匠は重き齋戒、普請の中は神境の四方に張番を置きて、絶て雜人濫穢の者の入るを許さず、檢使の役人は晝夜に見張りて、祭收の日には又た神秘の祭式ありといふ。されば此宮を、宵寐の森、鎭守の境内より松坂の城にかけて其古へは一帶の森林なりし、此森を宵寐、又は四五百などいへるよし古歌にも見えたりと云ふ――の夜延の宮とは土地の者はいふとなむ、總この事の仔細は知らぬも、何さま由緒あるべき祠ぞとて、落葉掃く宮丁すらも其箒目をこゝに入れねば、半ば土と朽ちたる葉は既に石とも化るべき根の洞に堆丘をなして、下方には何物のあるやらむ見れども見えず、或は軍用金の埋め場所？ 等とも世には喰ふめり。

正雪と兵庫とは、實に此の夜延の小祠の許にいたりて、忽然として消えたるなり。看れば、小祠の八重錠は開かれて、牀板は刎除られたる、其の下方は方二間餘なる、底居も知れぬ洞穴なりき。彼等は今、實に、此の洞穴の中段、石甃の上に對向ひて在り。其の對座の中央には、軍用は紙燭といふ、正雪が工夫の早蠟燭を置けり。千歳日月の光を見ぬ洞中の氣は、森々として、一呼吸の幽微なるだも耳に響きつ、紙燭の影は黯澹たる暈を帶びて、鼻を衝く異臭腥さく、

覺えずして慄立つ肌膚は、何者の手して撫づらるゝが如き感觸せり。茲にいたりて魍魎物に怖ぢざる兵庫も、俯して洞を覗つ、仰ぎて四邊の狀を視つ、安からざる胸の不審を堪へ難たる眉宇に露して、自然聲を潜めぬ。「由井殿、此處は什麼……此洞は？」彼は、或は、此の目前なる淸人を、豪盜の張本かとも思へる氣なり。

對手は含笑めり、「はゝ紀州殿御家老樣が、其の御領分の大事の御要害御知りやらぬのか？」

彌不審なり、兵庫が目け徒灼輝きぬ。「眞實御知りやらぬか？　えゝ？　はゝこりや扨も／＼おや。此洞は蒲生殿此の松坂の城を築かれた時、太閤殿下の御助言もあり、自身も亦た工夫せられて、城の本丸、百疊敷の西方、大杉の樹の根元より外郭の石垣の下を透貫して此處へと穿られた拔穴ぢや。此の石甃をドりること三間にして平地となる、其處を北方へと進むこと五町、又東方へと進むこと一町、此處にて道は三條となる、これは萬一の敵を誘引く用心で、一方は行留り、二方はあらぬ方に通じて其終端は一緒に合ふ。眞正の本道は、兎手の半途に大石の蓋を天井にして置かるゝ所ぢや。我們も最初は、其のあらぬ方に迷行うて、一日を送つた。ハヽハ、ハ、ヽ、ヽ。軍學の修行といふも難辛い物なう！一扨は其の、軍學といふ、其の修行にか？」

何さま彼が、地理に詳しく、國々の風土に通じ、人情を知り、其の領地地頭どもの軍備の厚薄を諳記すること、殆ど神の如きものあり、又其の高足の弟子分に、城攻の法を敎ふるには、徒に口舌の末を以てせず、其れが工夫の、國々に現在せる城の起し繪圖といふを用ひて、塀櫓の高さ、堀空壕の深さ、水手、河道、領內の土質、石性までをも說き聞かせ、扨て其の仕寄、攻口の方につき、互ひに伎倆を戰はさすと聞きつるも實に眞實なるべし、想ふに此男の其眼中には、天下に、城も、要害も、物の備も、山も、川も無きならむ、彼にして或る土地を有ち、人數を持ち、機會を待ちて事を擧げなば、如何なる大事をか爲さずらむ、恐怖しき事かな、と兵庫は再び、以前の崇敬の念を反覆して、更に驚歎の膽を寒うしぬ。正雪は頷りて、然る氣勢もなし、

愈其の笑顏と語調とを續けつゝ、一條事は措きて、肝要なは御身が上ぢやよ。扨は御身、あの駿府城代はじめ町奉行目付ら、御番の閉門といふ、御存知ないな？」「いや其義は知る。其夜に我們逼塞と申付られて……」「直ぐ發足れたか？」銳く叫ぶに、「如何にも。」と釣込るゝ如くに應じぬ。「あ、危殆いこと！　直ぐ其後ぢや。久能の榊原殿に御內書が來て、紀伊殿家老牧野兵庫を捕込めい。直ぐ樣江戶表へ差送れ！と の事ぢやヤッたはよ！　吁、危險いこと。今一足で貴方との此の對面も、現世では叶はぬぢやッたに！」彼は其額に手を加へて、其の無事を祝すると與に、間一髮なりし危難の遁れる樣を告げぬ。聽く兵庫の舌尖も同じく戰慄へき。

（三十一）

兵庫が面色を變ずるを見て、正雪は其額なる手を胸に當てたり。自家も聲音を戰かしつ、「彼の手に御遇やらば、我們今生の對面も、實に、那時限りであッつらう哺！　江戶役人が拷掠の無慈悲なは、御身も大かた豫俯で目前に爲られつらう？　全體が役讎ぢや。理非曲直、悉皆が沙汰の限りぢや。況て御身かは三四郎ごとき末々の者でない。名にしおふ紀伊國出頭の御家老、大納言殿御謀叛も御身らが謀誘に究竟因由かとの御猜疑もある。爾らば其の拷訊、熱鐵であらうか？　烈火であらうか？　肉を剝ぎ、骨を削る、……吁、今ごろは其の憂目に御遇やらう最中ぢやに！」

鬼を談ずるを聞て、其可怖しきに戰慄く者は、親しく鬼に遇へるものなり、拷掠の恐る可きは、兵庫も實に當面にせり。彼は正雪の語るを

（三十二）

「御胸の泥？」——彼の其語の意味を用し難ねたる如き面色を見て、正雪は呵々と嘲笑ひぬ。「其の、御胸の泥。曉解らぬか？　さればこそ田舍人は話が遲いぢや。」兵庫も怜悧者、直ちに對手が裏を掻きて、「いや、御胸裏の祕密を打明けさせ申すとは疾に聞いたも、思案は、其の打明けさす此方の手段ぢや。」「ほゝ衛うか。手段を問ふか。——手段は、今もいふ、大事のものぢや。」

正雪は、苦笑、口を箝ぢて、復び考慮ふること多時。やをら其の太息を整理つ、「此義に、容易い事のやうの、難義の所爲。まづ覺悟が第一ぢやな。」「覺悟も要るまい。彼方に其の御心もあらぬものを、附け申す、其れにこそ。既に——御身が言ふ——其の思し召立ある處へ此方からして云々と言ふ。肺物の膿潰たるを針で刺くやうのもの、孔は端的に開かうもの……」「ハ、若輩い！　其れを其の我們がいふ。御身は全般に其樣の一途の料見すたるゝから、此程やうの爲損じもある、御の謀叛もする程の人、然樣の淺々しい考案で叶はうかい。今にして思へば、殿か、昔日からの御寵愛並ぶ方ない、現下は出頭株の重臣、牧野兵庫、御身樣に、此の祕密を御明しやらぬも御道理——と斯うも思ふぞ。武道の夜語にも聞かれつらう、明智光秀があの本能寺の大事思ひ立つ時、其の前夜まで、股肱の腹心、左馬助儀太夫四方田兄弟らにさへ祕し隱してたゞ內藏介一人にのみ談合うたといふ、今の殿と光秀とは、思慮の淺深、智慧の高下、天と地との差違がある。それに御身が其の分別では、內藏介は扨置き、左馬助儀太夫らにも迚か及ばぬ。是れは究竟が能はぬ事か喃！」進みかゝりし話說は途切れて、主も默すれば、客も默しぬ。中央に置かれたる紙燭のみ、あはれ此の不興氣なる二人の面を遠慮なく照らせり。

良有りて、正雪は、紙燭の燼心を些と撮去てつ、「……とありて依然に在られうならば、御身、又彼の恥辱に遇はうも知れぬ。それも最傷い。到底が亡い身ぢや！　御手討に遇ふ覺悟で、遣て御見やれ！」「御手討な？」「應よ。說しても御祕密あらば、强ても勸告むる。一命を懸けての御身が心底と御覽ぜば、或は其事、御明しあらうも知れぬ。」——御明しなくば御手討ぢや！　其れが覺悟ぢや！」兵庫が目は銳く灼耀きて、睨み消すばかりに紙燭を疾視めり。正雪は復た嗟歎せり。「英雄の主を持つ身はそれが辛いよ。英雄は我が慾の爲には他の生命を何とも思はぬ。人質を敵に與れて其の約束を破り、其者が流いた血を盃にうけて、勝軍の酒宴するなど、珍異しうも有らぬこと！　其れとは異なれ、殿も世間の色目によりては、出た杭を御棒と、大逆の名を御身に負はすか。或は公儀御使に御身を渡して、駿府一義は平頭以て御存知ない、紀伊國の忠義は此通り、江戸表の御沙汰とあれば祕藏の家老とて一言を申さぬなど陽言るゝか。憖くして敵に油斷さすか。後日の旗上の口實を造らるゝか。兎角は英雄の心事、到底が凡庸の我々には測量り難いも……ただ哀れといふべきは、其の犧牲——御供にあがる其者の身上ぢや。なれど其れも年來の報恩、臣たるの分とすれば斷念も成る。御身が忠義の心からはゆめ御恨みとも思はれまいが、只我們、紀伊殿に恩德も無い由井某の目からしては、朋友の牧野兵庫が生命を翫弄ばるゝを嬉しうも思はぬよ。……が、總ては今日の境遇、繰言も詮ない。主の御手か？　獄卒の苛杖か？　但しは御身に武運あらば、あの安濃津久居、言ふも愚かや名古屋より岡崎、東海道を眞平地に押下して、江戸御城の大手の橋に屍を曝すか？　其の三つ一つぢや。えい！　思案が要らうか？　當ッて碎けよぢや！　骨は我們が拾うて進ぜう

は！」

（三十三）

此夜城中には、水野太郎作村上彦右衛門以下、歴々の士を召されて、大納言殿、内々の御評議ありしとは聞えしかども、もとより隠密の義、御前伺候のものゝ外は絶てこれを知る由もなし　只宗佐のみ御茶の給仕に事託せて、密に其の御模様をば覗ひたりける。

夜も明くれば、城中城外の物の色目、昨日とは太く異れり。其は誰言ふとも無く、安濃津攻、久居攻、との風説、いたる處に喧噪しく、四五日以前まで藤堂が城下の士民の狼狽周章ぐを、狐にや魅まれし、通り魔にや魘はれしと嘲笑ひたる者、今は皆々血眼となりつ、妻孥をば那處に遁さむ、資財をば何方に運ばむ多氣の山中か、度會の神領か、船にや積む、車にや載すると犇めき合ふ。と看る〳〵、追手の御櫓に、太守の御旗、馬印、吹上ぐる濱風に翩翻として、御供の諸士が馬揃、今日午の刻！　と觸られたり。

あはれ事は大事となれり。馬揃――武者押――城攻？　事は愈大事となれり！　龍泉寺に潛みたる牧野兵庫は、此の光景に且つ驚き、且つ恨み、且つ憤懣りて、今は只言甲斐なしと見られたる此腹一つ、御前に掻屠き、白き血が出るか、赤き血が出るか、未だ腐敗れぬ臓腑、鮮々しき處を御覽に入れて、素性は卑賤しきも、氏は無きも、紀伊國家老の魂の入れ所、性根の在り所、斯の如し、と最期の御恨言を後日の記念に思し召知らせまゐらせてむ！　とは息卷たりき。彼は、御咎中なる身をも忘れて、供揃！　と若黨に命令たり。御茶道の役を返上して、以前の家老の職に復れり。女々しき企彌の名を廢めて、牧野兵庫紀長虎！　今日唯今、最期の出仕！

出仕の衣服は特に際立ちて打裝ちたり。下には白きこと雪の如き汗衫に、綃羅麻の無紋の帷子、裃をも有紋にしたれども、霰の粒細小くして、外見には無地かと思ふばかりの雙麻の折目高なるを撰てぞ着たりける。黄金作の雙刀、これは拝領の刀、下緒には師より允可の薄紫を曙に組たるを故らに附けたりき。黎毛馬の優れて逞ましきに、銀覆輪の鞍置きて打乘りぬ。鬼の如き供若黨廿餘人、一様の褐染の帷子に、一様の萌黄柄の大角鍔、一様に髻を七の椎まで端折らせて、一様の毛臑に一様の三里隱させたるを左右に立たせ、往來に餘て登城する。追々に馳參する馬揃の若殿原、華麗をつくして打裝てるも彼等が風采には蹴落されて、いづれも〳〵手綱を控へ、大道を讓りて眺めたり。

間もなく彼は追手に着きぬ。瞻仰ぐれば、金の御幣の御馬印、七本の皆白の旗、渡櫓の塀の上に立てられて、自然勝色見せたる、濱嵐をふくみて婆娑たり。彼は雙眼に暗涙をうかめて、佇立りつ、拜せしが、やがて本丸の玄關に入りぬ。「宗佐や在る？」

牧野兵庫の登城と聞きて、宗佐は驚きて馳せ來れり。出遇ひ頭に兵庫、「やア、宗佐！」彼が姿の、昨夜とは全然異れると、其の聲色の平ならざるとに、宗佐は太く又愕きたり、「これは御手前樣……何の、御出仕？」「何のといふか？　汝、あれ程、御前の模樣を賴み置きつるに……」「其義にござります。昨夜は丑の刻過ぐる迄の御評定。」「其の御評定、何故知らせぬ？　箇程の大事を。」「はツ。」「御合戰か？」「いや、只、御馬揃。」「御馬揃を其方に聞かうか？　御馬揃は勢揃、其の勢揃なされてから殿は何日、何處へ御取懸なさるゝ？　と其方に問ふぢやは！」「然樣の御義、毛頭以て……」「秘隱すか？　えい！」「滅層の事。それは御手前樣御邪推。豫ての御賴みはござりましたも此は和歌山でも折々見まする御馬揃、何も別段の

不思議の義とも存じませいで、それで御不沙汰。況て御合戰の御評議など……」

御前の評議は實に斯くありし。兵庫より豫て縷まれたる宗佐は只其見し儘を語ふなれども、奈何、彼は只顧隱すと惟へり、我が御咎の身を疎外すとも偏に想ひぬ、昨日より、昨夜より、今朝より、胸に餘んの悶々、壓へ切れざる憤怒、癇癖、憎惡、嫉妬！　這奴らにさへ侮蔑らるゝか？　と念ひ僻めたる無念の業火は一時に堪忍の嚢の緒を燒斷りて、爆發せる鬱勃の氣は右手の拳に洪濤の如くに漲り來れり、「汝ッ！」と叫びさま、閃めかす腕を彼は敏くも推知りたるが、身を跳らし、蹤を飜して御廊を彼方へと遁れ去る。「遁さうものか！」と齒を咬切りて、此方は追ふ。

跫躁の聲は、耳近く聞えぬ。耳聾ひたる如き兵庫は猶ほ狂奔ぬ。狂奔て進むこと二三間。「金爛、其狀は?!」突如として、長廊に響く、凜たる聲は、氣逆せたる彼が腦にも金針を刺たるゝ如く滲と感えて、兵庫、瞳子を決めて前面を視れば、個は什麼、其人は、大納言賴宣卿！

（三十四）

兵庫は殿と見奉りて、平伏もやすると思ひの外、つか／＼と御側に寄りぬ。「殿樣！　御恨めしう存じまする。」殿も日常に、彼が一徹の氣象をば知り玉へり、昨夜陳したる此の御狩を中止との義、其後御前の評議によりて更に決行し玉はむとの御沙汰の趣に歸したれば、其事をや聞て恨むなるらむ、恨めしと言ふは慮外なれども此も亦た自己が主なる仁の爲をおもふ、臣たるの至誠、憎きも可愛きぞや、と故らに御面色を和らげさせて、「然樣申すな。此狩の廢止がたい義、大學との意地、又た江戸表手前の事等は昨夜も那れ程に申しつる。其方が忠義の心底は好う斟み得つるも、これは是非ない。喞言を申すな。」「其れ程に心底御斟酌なりや、何故に御明下されませぬ？　先以て今日の御馬揃……」「ハ、馬揃、それを沙汰せぬを左右申すか。是れは其方も其身でなくば今日の帳の第一にも注すべきもの。なれど其の現下の身分ぢや、御咎の最中ぢや。遺恨であろが列に漏るゝを餘義ないと諦念めい。」殿との腹は合ひ難ねたり。兵庫、「益外樣待遇にせらるゝ事の口惜くて、遺恨の涙堰き敢ず。「も、も、何も申ませぬ。其れ程に御祕匿あらば……。も、何も申上げませぬ！」御前に俛仆して、號聲を放てり。茲に至りて殿も初めて驚怪かせぬ。「兵庫、甚麼と言ふ？　予が祕匿むと？　全般の事の體、――汝狂氣ばし爲つる歟！」彼は突然身を起して、「兵庫狂氣も爲て候ふ。如是體狂氣せぬ家來といふものござあるべいか！　三世と賴む――恆日來は死出三途も御一所と盟ひし殿に――箇樣に見棄てられ――御疎外の御沙汰蒙りては……」彼は復び、潸然たり。殿は、實に、其の意外の爲體に、幾ど御當惑の態見えたり。「汝は、實に不思議の奴！　目下の宗佐への擧動といひ――其の潸然たる體。やア兵庫、汝屹度承はれ！　其の淺はかなる心底で、汝、紀伊國の重職が勤まるか！　不處存の奴！」「如何にも重職は勤まりませぬ。殿樣御心底を存ぜぬ者が一日とも家老の職に在られませうかや。但し此の兵庫めを、箇樣の不處存の――言甲斐なき狂氣者に爲せられた――誰が御所爲?!」彼は礑乎と、殿を睨めたり殿の御手は、此時御胸に直と當りぬ、彼が眼光、彼が動靜、其の言句、其の語調を熟々と注視り玉へるが、やがて何をか頷かせて、「兵庫、其方は、何事か予に隔意のある喃？　或は他に――何者にか遇ひつる喃？　其れが言ふところを眞實と信けて、予を疑ふ喃？　其方は祕匿む、つゝむと言へど、予は祕匿ぬ。予

も秘隱ねば其方も秘隱むな。言ふことあらば言へ。聽くべき事あらば聽う。今は巳の刻、予が出座には何ほ間もある。寛々と氣の沈着て、徐々地に申せ。」打て變へたる莞爾との御笑顔に、此の所由有りける狂客を勦はし玉へり。緩和の劑は、逆の病者に適當の方なりき。彼は此の優降の一飲に充進りたる心氣も頓に下りつ、遺恨の涙は感謝の滴露といつか變りて、御前に平伏したりき。

彼が乞ひ申すによりて、殿は傍邊なる御書院に入らせぬ。もとよりの御人拂、御背後には神文の御小姓一人のほか、近習の士は皆遠く斥けられたり。殿は上段の御牀近う御褥に御座なされて、「兵庫。何事ぢや?」―「はッ。」とは言ひしが、御威光の凄じきに今更ら臆して自然口籠るを、彼の負じ魂なる唯一東西に策勵られて、正等に昨夜説かれたる覺悟の臍を纔に決着ぬ。―別義でもござりませぬ、今日の御馬揃其の御催しの御心底―奥の奥なる御趣意と申すを、秘隱まず御明されの程願はしう存じ上げまする。」「ふう?」―「右は昨夜も心底殘さず、私料見のほど申上げましてござりまする。大學領分へ只の一歩御踏入にござりますれば、直さま其れが合戰の端緒―其端緒開けますれば有無もない殿樣は御謀叛に陷ちまする。其義千百御承知とござりまするに、今日の斯う急遽なる御馬揃。概略の御心底恐れながら兵庫愚察はいたしまするも、猶ほ殿樣御口づからの御一言、斯うぞとあるを承はりて、到底世に存立れぬ身の、死後を心易う致したう―此のみ私今生の願望にござりまする。」一言ひ畢りて、彼は唾を嚥みつ、殿の御口吻瞳も放たず凝視へり。

(三十五)

世に存在れぬ身、死後を易う、今生の願望、といふ抑も何事ぞ、と殿は怪訝に堪へ玉はず、御膝も覺えず進みぬ。「合點の行かぬ事。仔細と申すは?」―言上も恐懼。すなはち私が此の剃髪の原因。駿府にて強訴の張本、安居村の三四郎と申すに連繋の義よりいたして大公儀御疑惑を受け、此の兵庫唯今は御搜索の者同樣の狀、現下にも公儀御手入ともござりませうなりや私は拷訊の責杖に斃れまするか、然なくば自殺! 到底が久しく殿樣御奉公もなり難ねまする。折柄に僥倖なるは此の御猪狩、別しては今日の御馬揃。殿樣の其の御一言にて、右の犬死せで叶りませぬ兵庫も天晴れ本意の忠死といふが遂られまする。」―何が忠死ぢや? 予に解せぬが?」御眉を皺め玉ふを、「いや、其の御心底の御一言!」―「一言とは?」兵庫は又もや急き込みたる、眼中は看る看る血奔れり。「えゝッ御秘隱しある、御一言とは其の―御旗上! 御出馬!」との御一言にござりまする。」「な、何ぢや、予が謀叛となッ!」狂人とて容赦まじとの御面色、御小姓に執らさせたる二尺三寸、分部志津の御佩刀に手を懸け玉ふを、彼は見るも瞻せざりき。「御謀叛! 御謀叛! 何樣なりますれば―此程までに申ましても御秘隱とござりますれば兵庫進ッて申上げます。如何にも殿樣御謀叛と見上げまする。御恨しう存じまする殿樣。此の御心知の兵庫に何故の御隱し立て。御心底今更御恨に存じまするぞ。安濃津領へ御馬が入りますれば直ぐ御合戰、其の御合戰は卽ち殿樣御謀叛とは現の今方言上しまいた。其れは言上までも無く殿樣にも疾う御承知の筈。其の御承知ありながらの御馬揃は誰が御謀叛! 御旗上で無いとは申さう? これは私一人の推量とは御聽せあるな。現に御城下の庶民、今朝より資財を負ひ、妻孥を扶け、多氣度會へと逃遁まする。上下一般、皆斯くの體。大略は昨夜の御評議、其れも其の御義とは存じまするに牧野兵庫只一人のみ何故に御疎

外？ 其れ程に言甲斐なき者と御覧じてか？ 但しは變心、裏切もすべき者と御懸念か？ 御情無うござりまする殿！ 私は其れとは存ぜず、只今言上の三四郎めも固より縁も由緒もなき者、其れですら殿様御恩を存ずる者、御慈悲を慕ふ者、三十四ケ村の男女、紀州の庇陰に立ち、過米の難義を遁れたい、頼む！ と申せば、身を棄てゝ、城代の士供とも立合ひまするを。……其程の兵庫、御國の汚辱を存ずる兵庫、何とて穢ない――殿様に御弐心など持ませうかや。斯程申して猶御意に濟ませずば、御手討！ 忝けなき仕合に存じまする。なれど猶ほ冀くは、其の御手討延へられて、汝兵庫、予は思ひ立つ事あるぞ、汝にあの安濃津攻の先陣の申付くる、敵に遇うて潔よく死ね！ 屍を曝らせ！ 何様にも仰せられなば、兵庫それこそ御目に餘る合戰して御覽に入れまする。華々しき討死して御心を安うして差上げまする。是れが兵庫一代の御願望！ 殿様！ 何卒、其の御一言、兵庫今生の御芳恩に下されたう願ひ上げまする。」殿は、彼が長々しき訴訟、其れが臉に溢るゝ熱涙を、甚麼とか御覽じ、甚麼とか聽かせ玉ひにけむ、御佩刀に懸させたる手を其儘に、突と立上らせ、「唯今の聽聞中より予は氣分の惡しうなつた。今日の馬揃延引と、然様に申せ。」御小姓に仰せ棄て、兵庫への御回答は何とも無くて、其まゝ奥へ入らせらる。兵庫は猶、只一個、口惜し涙に暮れゐたり。

（三十六）

空には星光の爛たるあるも、心は黑白なき如法の闇なり、目に面白き行水、耳になつかしき蟲の聲、肌膚に涼しき濱風も、其れが胸中萬斛の憂悶を解くに由なきか、龍泉寺の客殿、一間なる縁端に端座して、孤座兀然、枯禪の態を見せたる兵庫は折節に天に睨みつ、嗟くが如き洪歎を漏らせり。嗟、可憫、彼が前途は今漠々たる哉、雲霧は眼前に横はりて、岐路は脚下に渓れたる彼、彼の意馬は西すべきか、心猿は東すべきか、蓋ふに彼は前後に彷徨し、左右に躊躇して、其の立脚地の究竟皆非なるを看出だしたるらむ。爰に到りて彼の撰ぶべき路は、只夫れ一の死歟。

彼は軈て、自ら起て、料紙硯を持ち來りぬ。細燈の火影をやゝ明くして、紙を展べ、筆を染めぬ。眼には暗涙あり、手は戦へたり、動もすれば墨の薄うにじみがてなるを兎角して書き納めて、表封を緊かとし、更にこれを懐中に入れむとする時、「一八、死にやるか喃。」思ひも懸けぬ頭上に微笑を洩らす聲あるに、兵庫、阿呀と瞻上ぐれば、欄間の上にいつか人あり。「死神に魅れられたお侍、自滅も可からうず！」空嘯く聲は確に記憶あり、「由井殿か？」彼は竦然と下り立ちぬ。「如是畜生發菩提心！ 逆縁ながら引導申さう。さ、御構ひなく御腹を屠され。」兵庫は赤面の聲を顫はして、只一語、「さ、察してお哭りやれ！」「ふゝ、察せいと？ 何を察する？ 我們は未だ死神といふものを朋友に持たぬ。近附のない死神の意衷を察する――出來申さぬな。」嬲られて兵庫は急きぬ、「我等とて侍様の犬死甚麼爲たからう？ 犬死と知るく死なでならぬ心中を察してお哭りやれと斯う言ふぢやは。」「貴老とも無い！――腹立か？ ハヽ、氣毒な。然りながら何故に又た其の無理な犬死、爲らるゝのやら？――爲でなるまいがな！ 主には棄てられ、身の恥辱は遁る。其内一つでも死ぬべい生命……」正雪は半分を聽かず、庭の面に一つ唾して、其愚を嘲笑へり。「一到底も箆無き蓄生か？ 其程に好かるゝ自滅は御身の隨意に爲らるゝが可い。但し御身は斯う見ゆるが、其實は老人なゝ 然なくば健忘といふ病でも病まれたか？」彼に眉根を寄せられて、兵庫は愕きて眼を瞠れり。正雪は其面を後眸

に觀て、「其の業病にも懲られずば斯う言甲斐の無い筈はない。お主、犬死當な／＼と我們が言うたは什麼一度か、再度か？ 駿府の初對面、前夜の再度の會、過ぐる侍に云々とお主に告ふを、空耳に聞流すか、然らずば忘失るゝか、世諺にいふ豆腐に鎹、いかう締束の無い始末ぢや。御身は嘗て我們に言はれた、紀州士は意地が楯ぢや、紀伊國の水飲んだ程のもの、一旦思ひ立た事は必らず貫徹すと、其の意地も楯も同是右の健忘で忘失られたかや？」―冷評熱罵、愈出で、愈奇なるに、此方は回應を發だし難ねたり、徒其の闘牆なる口吻にのみ瞳子を注ぎて、更に其の意義の蘊奥を打聽せむとする如きを・彼は見ぬ、見さるの間に視て、愈其の舌鋒を研ぎぬ。「到底が其の意地忘られた？ と我們は見るぢや。が、其楯といふもの片端でも倘だ胸裏に御持ちやらば、――こりや熟う聽かれい。先刻の、御謀叛！ 御謀叛！ 兵庫、御謀叛と見上げまする！ と斯う言れた口狀、何故に眞正の御謀叛として進ぜ申さぬ？ やさ、一旦男兒が斯うと斷見て口外した言語、何故に其の實正として御目に懸けられぬ？ 意地といひ楯といふ、主親の前にも其の意地、其の楯ぢや。況て殿が、御身の言ふこと御聽納ともあらばこそ、あの通りの無情い御仕向、御佩刀にまで御手を懸られたあの御心、言はゞ主從の緣彼時に斷れたといふものぢや。内心に滿々たる謀叛を御持ちやれて、他人が言へば、何ぢや？ 予を謀叛とか？ なんどゝ被御る、其れが抑も水魚といふ君臣の交情か。や、兵庫、氣の確にせい。惡くもあらばお主は其の、血祭にも拘れらぞや！」兵庫は、其說の不可思議なるに驚くよりも、御人拂といふ嚴中の問答を、一も遺さず二も餘さぬ手際の鋭さに呆れ果てたり。

（三十七）

良有りて兵庫、「始終を御聞きやらば我等更めて言ふまでも無い。あの仕義ぢや。大事の殿を謀叛と申て御佩刀には御手が懸る。此上公儀より御使者もあらば、牧野兵庫、繩附にもならう。無益の死とお言やれど、存在て縛首打たれうよりは責てもでは有まいか。――但し其の‥‥」彼は言ひ難ねて聲を吞みたり。正雪は屹と顧向て「但し其の‥‥其の後向は？」「貴老なりや、甚麼と爲らるゝ？」「ハ、分別か？ 御身には分解ぬ。健忘の耳には到底理解ぬ。」「理解ぬものに、何故左は言はれた？」「老耄の性根も些と發揮うかと思うて見たも、やはり無益ぢや。猫に小判ぢや。」兵庫は其の蒼白たる面色を唇の色まで變らせて、震怒れり。と見たる正雪は哈々と微笑ひぬ。「其れでも御身、猫と嘲はれて無念な程の氣力は有つか、其の意地あらば些は話せる。いや今言うたる意地の講釋、分曉うもの。」彼は答へず、其鼻息のみ暴かりき。「分曉た筈ぢや。理解ねば叶らぬ道理ぢや。君臣の情誼を棄てゝ御身を謀叛の血祭までにせうとする人、‥‥第一が現下立つ腹を、何故に其人に向うて御立ちやらぬ？ 抑も御身に、此の犬死の覺悟せさせた、こりや誰が所業ぢや？ 其の犬死せで協はぬやうの羽目に陷した、其りや誰が所爲ぢや？」彼は、甚麼とか感じけむ、身を單慄かせり。「ソレ、其れが其の意地の覺悟の臍、楯の意趣ぢやぞ。鐘も撞木の當り柄、他吾に艱ければ吾亦た他に辛らしとは此邊を言ふぞ。有り樣斯うぢや。今は我們も根こそげ語うて得心させう。御身未だ知りやるまい。昨夜、御身に別れてから我們は復び穴に忍んで、今朝までも殿中に居申した。其の昨夜の評議といふは先づ箇樣ぢや。御前に出でたは、水野太郎作、村上彦右衞門、渡邊大學、久野三郎左衞門以下七八人。殿はまづ其の御意出されて、江戸表でも大義の計略勘づいて、兎角を申すげぢや、道中にても云々と罵ひ噪ぐと兵庫

めが來て言ひをるは、只今の機には何とであらう？ 銘々が意見は、と斯う仰しやれた。首座になる水野太郎作、到底もが御合戰は遁れぬ羽目、一日後るれば一日だけ敵に用意が成る、やはり此の機會を外されず……と言うた時、彦右衛門、例の鬚を撫廻いで、言ふ迄もおりやらぬ、此程の人數を集めて獲物なしに御歸城といふことが有るべいか、殊に今の御話では、尾張殿、越前殿、討手の大將、江戸で仰せ蒙られたげな、されど江戸から尾張までは六十里、福井までは百三十里、五日十日では大將御國へ着れまい、此方は其れが、と指を繰て、明日中に安濃津、久居を攻落せば、菰野龜山も其日の中に埒が明く、桑名は白子の御先鋒御人數に攻させて、殿樣は當處より直に海路を、熱田宮江にも御座なされい、すれば名古屋へ御討入、これも一日が間。其うち熊野の鯨船も吉田へは着き申さう。さらば東海道はまづ御手裏の物。京都にては例の衆徒、大阪も御存知の衆、尼が崎まで御手に入るは十日前後には、何の御躊躇。とあの大口明つるはよ！ 殿も其時御心地好げに兩人の申し條道理ぢや、大納言(紀州)宰相(越前)たとひ在國でからが其の手並は知れたるもの、彼等が衆に何に有らふ、況て留守中の防矢、予が家中の鎧に立つか、然らば明日先づ馬揃して津の奴輩に目を見せう、大概は其の擬勢で一攻にも及ぶまじいを、との御諚と聞えたぞ。何と兵庫、其の御諚と、あの先刻の白々しい御顏、熟う心の眼で看較べて見い！ 其れでも其の大事の殿か？ お主、忠義が……」―立つる立てぬは此方の事。其程の思し召立あるとなりや御人數も要る。兵庫、祿は六千石、國元にも飼立てた奴二三百人、現下供に連れたる奴も雜人を加ふれば三十餘人、これらは皆一廉の者、殿樣にも御存知。何故其れを御袖になされたか？ あれ程御先手と願うたものを？」正雪は、こゝに初て歎息して、兵庫が面を正眼に視ぬ。「それぢやよ。先刻から言ふ血祭ぢや。御見は謀叛人の謀叛人！ 殿は間者と御覽なさるは！」

（三十八）

間者とは！ 間者とは!! 思ひも懸けぬ我を間者と御覽ずるとは!!! 兵庫は眞に目も眩めくばかりに愕きたりき。「而て、誰が然樣に申し做したか？」―「大學ぢや。」―「渡邊か？」―「應よ、其の渡邊よ！」渡邊大學は、我と同じき小性立にて、當時は殿が御側の御用何くれと取締ふ權家たり、往昔我は介彌、彼は與三郎と呼ばれし頃より、殿は兩人を雛標とも、花紅葉とも御覽ぜられて、御寵愛の二人若衆とも言はれしもの、其後に我は宿世の幸優りてか、番頭より家老の重職に任ぜられ、祿高も六千石、彼はなほ千五百石の中士に置かる、なれど交誼は以前のまゝ、共に御衾の揚げ卸し申せし頃に變らずして、氏は異なれ、父母は別なれ、事へまゐらする主君は一個なり、兄弟とも思へ、思はむ、事有らば一所に死なむ、事無くば生涯を契らむと言ひつることは、此程の駿府への發途の夜さりにも反復せしに、扨は其の腹と口とは別なりしかや、嫉妬か？ 偏執か？ 然りとては彼が日常の氣質、さる表裏ありとも見えざるに、と彼は疑惑の膝を前めぬ。「大學が何と讒うたか？」―正雪は、一層の打沈めたる聲を、其の擤てる鼻より發だして、低く咳嗽つ、「斯くて評議も御馬揃に事の決して、人の口も途切れたころ、前刻より其吻をむぐ〳〵とした大學、御身が上を言ひ出いた。兵庫が心中、御沙汰の趣では何とも濟めぬこと、と斯う讒言した。彦右は聞咎めて、訖と視たれば、彼は駿府にて桑名殿と江戸客との密議を聞いたと斯う申す、什麼その密議は如何樣にして、如何なる方便で聽いつるやらむ、凡そ我々としたるでからが然樣の大事、迂闊と他人の傍聽べき場所でむさと

口外するやうなおぞらぬ、其れを然様仔細にと
申すこと、不締の一つ、又た第二には、これ程の
思召立ちし彼として存ぜぬ事あるまじきに、頻り
に道中御[illegible]の[illegible]といふを口實として、御出
馬御無用と諫言を申す、今迄も不審と存ずる
に、又た彼が[illegible]の中に道途のこと、其の謀母が
密話竊聞たる夜さりにて、いと遽たゞしう狼狽
たる態、何とやらむ意味あり氣なる‥‥察する
に彼は安濃津の[illegible]をうけて、殿様を威嚇し申
し、彼城の一時の恩義を述べむ爲に無い事を有
る様に、味方の鋭氣を殺ぐ様に、只管御狩御無
用と申すでは候はぬか、然あらば忠義顔する大
惡人、獅子心中の蟲、飼ふ主の手を咬まむとす
る畜生、想へば彼が素性、當人さへさま〳〵
に申すにて得知れぬが、或は最初より、間者、
細作の役を持ちて安濃津邊より回し越したるで
は候はぬ歟、我們豫て其意を以て親しく交通
ひ、折々誘導いては見候ふも、兎角は油斷のな
らぬ曲者‥‥と斯う述べ立てたはよ。實にも善
う喃! 巧んだもの!」此方は、あはれ血眼な
り。「而、而て、殿は?」一熟く〴〵と聽かせら
れたが、然ればよ、との御意ばかり。良少時し
て、彼めを近附けたは頼宣一生の失措か、大阪
の石田、御家にての大賀彌四郎、其の比倖か、
今にして想へば、彼に眞實を明さんぢやッたは
物怪であッた、但し先づは其儘に僞い、毒を以
て毒を制する、良醫の手段ぢや、たゞ追附け見
知らせて‥‥と御評議は其れで訖ッて、扨て今
朝ぢや‥我們、得も御身が發足‥とは心附
いで油斷をしたに、出仕と聞いて實驚ろいた。
扨は糺明か、討手かと手業掻引いたに、賤まで
御身を庇視られた殿は通常の御逆ぢや。これは
然も有るべいこと、殿は名立たる居物切の御名
人、假し討も手に入られたもの、兵庫、御身が
二人三人御手元に剰ッたとて這ふ蟲とも思はれ
ぬ、迚で御身があの口状、善う演られた。先
づ御急所の近うを衝かれた、で、殿も御急きや
ッた。御手討との色見えた。が、さすがにも其
の以前の御情誼を思し出されてか、半途に御色
も和らいだ、我們御障子の隙から窗て吻といふ
大息、吐き申たよ。が、御心は到底が解けぬ。
明日か明後日に血祭ぢや。血祭と事が決まら
ば――其前に自滅も可からうかや!」

（三十九）

心緒を訊ねて仔細に想見ば、着々として我が
胸裏に思ひ當る事のみなりけり。我が此の御狩
を抑止め申して云々と言ひつる時は、安濃津へ
の意地に託へて事の中廢べからざる理由を仰せ
玉へり、又た道中の雜説ども申せし折には、日
常にも似ず我口を信け玉はざるやう見まゐらせ
き。駿府にての謀母を代の者が衛なるべしと疑
ひ玉へる、獲物の鹿か猪かを慾う意して言へと
苦々しうも仰せられつる、思へば那時よりは…
既に我を誘導かむ、窘苦めむとの御心にや…
否此の御[illegible]といふ大事の御狩を思し召立ちな
がらに、我には知らせず、遠く久能の御修覆御用
にと遣はされたる、御心の薄愛きさまは此男が
言ふなるところと恰も其符を合すが如し、念無
や、扨も今までは、此君の御爲ならば火にも水
にもと思ひ執りて、一昨年の御病惱にもあの四
十餘日間、物の半刻と目睡みもせず、飯の一椀
とも快喫うせず、寢殿の御病牀を戰場の御馬
前と心得て御看護申上げたる、什麼それが間者
の、細作の、御仇ともあり御敵ともある者の能
べき事か、御爲を存ぜぬものならば其折に兎も
角も爲奉つらむは枯たるを挫き、朽たるを倒さ
むより易からむを、其の精神をも事實をも思し
召辨へずして大學輩が中傷の言に! 無念なり、
思し迷はさせ玉ひつること。抑もこれらをや言
ふ? 終天の怨恨! 畢生の仇寃!
想へば愚なり、かゝる主に忠義立する! 御
手討とまでも覺悟せる、喃! 甚麼たる意志な

りしぞ。今ははや此殿の爲に一寸の毛髪だも惜し。世をや遁れむ? 雲水にや出でむ? 左右に紀州の飯喫ふのは否なり。ふつ〳〵否なり。「貴老、厚意は忝けない。然りながら芳志もこれまでぢや。牧野兵庫、武士を廢めう。」「ほゝう。而て何者になる?」彼は慣涙の瞼に溢るゝを瞬きつ、「坊主になる!」「なると言いでも最う變容てをる。ハヽ、早手廻しな。」

彼は、此の形容を變へたる事も、今の恨めしき主の爲なりしを想起てか、抓毟るばかりに手を頂上に犇ぬ。「ハヽ、彌以て如是畜生ぢやな。雖然發菩提心は覺束ない。菩提の爲にもあらぬ出家、――それで安心の往生なるか? 未來は其の畜生道ぢや。」兵庫は既に、問答にも堪へざる如し。「畜生も可矣! 犬と罵はれた身の果ぢや!」「ふむ。可かは知らぬ。なれど武士は、來世を修羅道に願うてこそぢや。畜生とは無情い。」「其の修羅道の途も斷えたよ!」「え! 斷絕ぢや! えッ意氣地ない。よッ弱蟲! 武士の風上にも置けぬ奴! お主、其の這頭擲き曲げられても默ッて通すか? 其の這面、唾を吐きかけられても諦念てすッ込むか? こりや右にいうた意地と情、又其の氣象を失くしたか? え、こりや! 其の發心、何故修羅道へ、と轉へさぬ?」「……」「えい、兵庫! 蝮蛇に咬まるれば壯士自ら其腕を截く。物の決心一つぢやぞ。一念歸着の嚮ふ所は鬼神とて其鋒を避くるぞ。何故決定せぬ? あ復仇と、――何故決定せぬ?」「決定は爲たい。なれど蟷螂が斧……」「えゝ! 蟷螂が斧! 其の譬喩をお主も知るか?! 知て決心の踏切れぬは、其の小蟲の蟷螂――いや蟲にも劣ッたる魂ぢやぞ。彼蟲が其斧を揚げて隆車に對抗ふ、縱し轢き殺されて死でからが勇者たるの本意に背かぬ。況て萬物の靈たる人間、其の人間の長たる武士、其の武士の手本たるべき紀伊國の家老として――ヤア兵庫、御身、幕府で三四郞に一言を續まれ一こお、代の奴原が鋒口に敵うた時、其根性は甚麼とであッた? 安倍川原で彼が磔刑に梟ッたを助けうとした魂は如何お爲やれた? 其の蟷螂が斧を承知で、勇義の爲に身を棄られたでは無ッたか?! さ、其時の料見聞かう!」

風雨殺到、雷電破撃、魂を劈き、膽を碎くが如き舌端に挫ぎ附られて、兵庫は其座を失へる口裏より、才に一句を呻き出だせり。「謀……叛……か……よ!」石火の如くに彼は應ぜり。「謀叛。其の! 謀叛! 兵庫、汝れ言うた只その謀叛ぢや! お主も男兒、憎い仇、恨めしい讐の首を見る――此程の心地好いこと他有ると思ふか?!」「思ひはせうも……御身に其の手段?」正雪は、其間には應へず、指頭もて我が面上を指せり。「御分。此の正雪を何者とか覺る?」

(四十)

「むゝ、貴老。賴まれうとか?」兵庫が聲音の稍確となれるを見て、正雪は其の諸音を延べつ、只管彼が其膽を固むるに惕めぬ。「勿論ぢや。賴まれうとてこそ斯うは言へ。然も無うて甚麼のあの無禮の言が……吾儕は御免あれ、これも一旦の友垣を棄てぬ愚老が生得の信實ぢや。とばかりでは安心もなるまい。いでや我儕が素性から意衷、分限の程をも申す。篤う聽いて此の正雪を、天にも地にもの賴もしい者に思され。原來が愚老、民間に人となりて、氏素性もない土民の群とも思さうが、眞實は、申すも言語に餘る、南朝の忠臣、攝河泉三州の太守、從四位楠正成朝臣が嫡流ぢや、正行の孫末、足利に世を仇あられて駿河の國に潜でおぢや原郡由井の村に居所を構へて、今川に隸し、兵亂の代に美作守に任官して老職の一員となりたる由井正信はかく申す正雪が七代の祖ぢや。其頃より家に傳はる寶物がある。これは世に有無たる先祖の正成が兵庫之卷なんどいふ書

とは異りて、太公が三略にも倍したる秘本、其を讀み明らむれば實に延關の指導を視からなるゝと同じいで、百王の運亂、萬民の休戚、戰陣の進退、兵法の極意、宛然中天の月を盆にうつして天下に覩る心地のする。不肖ぢやが我儕、家門の榮として其書を讀誦すること二十年、今はなか／＼暗記じて其奧の奧までを得た。扨て、其の奧意の得て、倩思へば無念なは國態ぢや。後醍醐院、武家の專横を震怒り玉ひて元弘の御事ありしも建武に破れて其れより後は復た武士の世の中！　織田氏は其を反してや、王室を尊崇せられたも中途にして斃れ、豐臣氏これに續いだも自個が功名と驕奢とに一代を費して、扨て當代の御世とはなつた。なれど公家の御有樣は、建武、正平の往日に異らぬ。普天率土の王たるべき禁裏御領は僅に十萬石、所司代は公卿諸司の横目として只管武權を逞しうする、其の傍若無人の體、我們、延關の遠孫として——南朝忠死の靈に對して、徒爾には觀て在られぬ。哀れ今一度、王代の古に復してと、思ひ立ち申たは去る年の事！　爰に踏りて、彼は感奮の情に堪へざるか、堰り來る涙を袖にうけて、其聲を戰かしたり。軈て戰ける其聲を更に沈めつ、一されど、所領の一所も有たぬ浪人の果なさは、思ふのみにて其事も捗ゆき申さぬ。さらば同志をと看居いたが、幕府の天下も今が三代、基礎は磐石とゆり居ゑて、法令は天飛ぶ禽、地を潛る蟲すらも其目に遁れぬ。なまじひの事しては……と幾回か飜念さうとしても飜念させぬは、生涯の此日の憤涙ぢや。其の憤涙の間、不圖心に憶ひ得たは、御身が事！　こりや、御身は隱されな、御分が母は越前の一向寺の女、所縁によりて京都へ上りてなにがしの公卿御家に宮仕し、其折に姙身して歸國して、間もなく産聲あげられたが、御身ぢやろが？……や、驚くな、正雪、目指した人の身上、それ程の事は知る。其の公卿のお種の御身が、御三家の隨一、加之内々の思し召立ある紀伊殿が出頭の御家老！　津頭に渡舟ぢや！　海路に日和ぢや！　腹心の弟子をつけて御身が振舞に目の狙けさせたが、扨て壯年にお似やらぬ天晴れの人體！　正雪が欣喜は恰も旱天の雲雨を獲たぢや。然らば猶自身親近て懇親の結ばう、御身を紹介に殿の見參にも入り申さうと、陰に日向に狙け廻した其結果が、あの安倍川原の面會ぢや。打つけに餘りの親しさ、御身は異樣にも思はれつらうが此方には豫て覺悟のある事ぢや。扨て其後の萬々は要らぬ。とあつての其の進行が今日ぢや。が、全體を賴もしう思はれい。殿の御短氣、甚麼が有べい！　見られい殿も幕府の御一門、我們目から見れば同一い敵ぢや。殿に便らうと思うたも一時の方便。其の方便が外れたりや只一括めて江戸も紀州も討取るぢやまで。而て御身は藤氏の流裔、天晴れ官軍の總大將に相應しい。我們は楠氏の末、朝家御守護の武臣とならう。兩人心を合せなば大事は成就る。其の準備は、少分ともいへ、我們有金五萬兩、現米が八萬石、いづれも要所に貯蓄へてある。人數の高は今言ふまいも、大約の見積は——十三萬か嘻？一十三萬！　といふ聲の巨大なるに兵庫は呆れたり。一而て、其の人數は、御身が手下にか？一ハ、其積算は重ねて言はう。たゞ目下は、御身は其膽堅固にして、愚老が申す旨に就かれい。紀伊殿とて今こそ然樣なれ、又我們が掌裏に跳る手段はある。たゞ狼狽るな。官軍の總大將たる牧野殿。重々としてござなされい。」

（四十一）

追手の御櫓に御旗御馬印までも立ちたる馬揃の、斯うにはかに御延引と仰せ出されつる、果然殿樣御不例か、何ぞかの御手段か、と城中城外騷りて不安の眉を攢めて足を空に奔り步

く、雲の如き風説は種々様なりしも此日の晩には漸く消えて、伊勢の夕風やゝ静穏なる状態とはなりぬ。其の翌日も取り留めざる沙汰の中に暮れて、第三日の午時といふ、熾くが如き炎天を汗馬に鞭を擧げたる一騎、松坂の城の追手に乗り附けたり。何事ぞ、あの早打、江戸よりか、道中よりか、いかにと見れば、是れぞ安濃津との領境なる雲出の川端に出されたる物見の士なり。彼は轡際に馬を乗り棄てゝ、事有り〳〵と叫びつゝ御玄關に奔り入る。扨こそ大事! 藤堂の逆寄か? 公儀の討手か?

村上彦右衛門逸早く出で迎へて仔細を問ふ、斥候は息繼の冷水一口喫みて、「大事でおざる。何とも得知れぬ紀伊國衆と名のりたる騎馬一騎、徒歩の兵三十餘人、久居の陣屋に押寄せて今が合戰の最中おざる。」紀伊國衆と聞て村上も、魂消るまでに愕きたりき。「而て御内には誰と見たるぞ?」「いや其れが誰とも知れませぬ。大將は法師武者、手の兵は究强の奴。」「えい法師武者?」彦右衛門は二言と問はず御奥を指して走り參れるが、倏忽にして、牧野兵庫、久居攻! との沙汰、殿中をゆすりて響き亙れり。

其の響き亙ると同時に、又た不思議の風評は城下に起りぬ。兵庫どのが合戰は私の宿意でなし、内々は殿様御密意よ、されば此軍に出合ひたりとも後日の御咎なきのみか、功あらば御恩賞もあるべきぞ。然なきも紀州衆といふ彼人が不覺もせば彼人のみの汚辱ならず、出合へ、見繼げ、といふ聲は誰言ふとなく人々の口に出で、耳に入りて、扨は然様か、然も有るべき事、兎角は出頭の兵庫どのが手に附ての合戰、働きの程御目に懸けなば後日の批判惡しうもあらじ、さらぬも憎い安濃津の士共、此折に一薦酬けでは、と勇みつ纏きつ思ひ〳〵に後れじと驅せ出づる。城下の街衢は人馬の烟渦巻き騰りて、混亂鼎の沸くが如し。

來て見れば、既や合戰も終りたる? 雲出の川岸四五町が間は、青田の稻葉泥に塗れて、安濃津領なる農民の家七八軒は兵燹の爲にやあらむ墓なく燒ぬ。なれど手負の武者もなく、死人といふものも四邊には見えず、牧野どの本意やせられつる、北るを逐うて安濃津へも參られしか、然らば疾々御後を詰めよといふもあり。老功なるは此體に不審をなして、泥田こそ捏ねたれ、民家こそ燒けたれ、見たる處合戰ありしといふ體も見えず、方々、御存知の、此の陣屋には桑名網母といふ分別者の籠りたり、兵庫どの如何に擬勢を見めさるゝとも、人一人も討せず殺さずして陣屋を奪ることも奪らるゝことも得う爲まじきぞや、察するに敵や素引ける? 全體は不審なり、先づ斥候を敵地に遣はして熟く其様を見てこそ、といふに同意して、此所に馳せ集へる百餘人は其中より物見三人を撰り出だす。撰られたる三人、騎りたる馬に輪をかけて川中の淺瀬を見すゑ、水烟さツと押渡さむと乘り入るゝ――其時遲し! 對岸の葦の叢中より擊ち出だす鐵砲に馬の太腹射貫かせて、主は堪らず摚と落つ。「や、扨は敵ぢやは!」

（四十二）

敵は此處よと叫ぶ間もなく、對岸なる蘆葦の叢茂より四五挺の小銃の響再び摚々と轟き出でたり。されど此所は川幅濶くして七十間にも餘りたるに、此方には避水堤高くして、加之堤の外方、河原の表面には杞柳の太きに交れる漢竹の藪疊すき間もなし。人は皆ひた〳〵と馬より下りて此堤を楯にしぬ。擊ち出せる鐵砲の彈はこれに障へられて空とはなれり。「えい、これ程の足輕鐵砲何程の事! たゞ驅けう。」「道理!」と若き人々は再び馬の鞍に手を懸けぬ。「いや、待て。」と老功の四五人は伸上りて、「右に言ふ此の合戰は不審が多い。牧野どの手といふもの看互すところ一人も見えぬに、敵は却り

て此處に出向ふ。察する處、此方御馬揃の延引といふを懸念して賴母めが一手段したでは無き歟。さらば荒るな。今見い、此方に人數が嵩まば敵は見怯れて引退くべいぞ。討たば其處を討て。機會が早い。」計らふ語も道理あり、兎やせむ、斯くや、と紀伊國方は槍を引つけ、陣笠の緒を固め、敵を睨みて其の機會、其の機會をと待つほどに果して十人、二十人と逐かけ引かけ走せ集まる勢は既にして三百餘騎なり、此勢にては不足なし、あれ程の奴原を何時迄か瞻上げてあるべきや、たゞ蒐れ、鯨波を颺よ、といふ衆議は幾ほど一致せり、老功共も其を無下にとも制し難ねて、さらば先づ鯨波を……といふ。言の下に鯨波は颺れり。先陣後陣と二手に分れて眞平地に河原面へ押下せば、久居方も亦た徐々と川端に人數を出だして、箇手をあげて我を招ぐ。其の言ふ處を聞けば、此瀨は淺し、疾く渉せ。勝負せよ。といふなりけり。殊勝の奴かな、見逃げにもすべしと思ひの外、猶合ふかや、瀨は淺からむも深からむも厭はず、只一當に捲りつけよ、と馬强の若殿原七八騎、あはや其鋒の鼻は川波を蹴立てむとする瞬間なりき、忽ち見る松坂の方よりして扇を揭げ、宙を飛ばして驅せ來れる一騎の武士あり。「御沙汰ぞ。逸まるな。村上彦右衛門其所へまゐるぞ。御諚ぞ…御諚ぞ!!」紀州の風として、殿の御下知といふを聞ては、鬼も小兒の如くとなるなり。逸りに逸れる先陣も村上彦右衛門御使者とあるに、掻繰れる手綱を引締め、嘶く馬の前脚に砂を爬せて控ふほど、彦右衛門義清、端的に乘り附けたりき。「ヤア人々粗忽！ これは什麼何たる事？ 殿の御氣色以ての外ぢやぞ！」老功の一人、坂部佐左衛門、進み出でたり。「以ての外と申す御氣色？ 而て如何なる御氣色に」「御氣色も御氣色、以ての外ぢやは！ 彼の者共は抑も誰が下知で斯樣の粗忽振舞ふぞ。狼狽者！ 急ぎ引返せ。返さずば一々其場に首斬て棄いと被仰るは！ 原來が御身達、甚麼の意趣で斯樣に噪ぐか？」「えい意趣とて……たゞ兵庫どの見繼うが爲め。」「其の兵庫の催促うけたか？」「いや、只、牧野どの、久居攻お爲やるといふで……」「其の久居攻、御分は目擊か？」「いや見申さぬ。眞實はそれにつき不審の評議――若殿原の逸るのを抑止おきまいたが今はゝや制し切れいで……」村上彦右衛門、大音聲にて、「此の合戰せうといふ者、殿へ御謀叛同樣ぢやぞ。見繼ぐといふ牧野兵庫は松坂に寺籠りぢやぞ。狼狽るな!!」

慴れたるは三百餘騎なり。牧野兵庫、大人しう松坂に寺籠り？ 其の寺籠を久居攻とは誰が言ひ出しつる？ 念無や通り魔か、晝狐にや魅かされしか？ さらばあの見えたる敵も貉の同類か？ 或は彼等も我と同じく其の變化にや魅まれたる？ 馬鹿々々しや、面目なや、と塊れる肩臂の力も脫けつ河原の面を再び堤上へと引揚ぐる。其體を甚麼とか見たる？ 川向の久居勢二百餘人は、看る〳〵勝閧を颺りかけて川水颯々と押し亂しつゝ、足輕鐵砲二三十挺容赦もなく連發てば、生命までには及ばぬも腿を打たれ、脇を削られて、矢庭に薄疵淺疵を負ふ者七八人、

此の追擊にさしもの村上も闇々とは退き離れて、是非なく馬を引反せり。況て諸士をや、大濤の潮湧つ如くに打囘して、大河を半ば渉せる敵の人數を左右より圍繞むとす。扨こそ眞正の合戰の開緒！ 兩軍の勝負や什麼？

（四十三）

吶喊は銃聲に交りて起れり。寄手たる紀州方は急遽の事變とて、騎馬の槍は多けれども鐵砲とては一挺も無かりけり、久居方は又た足輕を繰出だして再度の寄手の埋伏をさせたるなれば、鐵砲はあまたなるも槍は少なし、退くを追

蒐けて揚口の勝利をと目指しつるもの、今は堪りて大返しに返されて川中に圍纏まれむとす、此方の陣に入れ立ては大事なり、此處を撃て、彼處を壊れ、と此隊の大將、叔母が甥なる桑名彌二郎、八方に眼を配りて隙間なく下知すれども、日來の遺恨、今日の鬱憤、此時をと期したる紀伊國勢は陣笠を傾け、馬の障泥を楯にして犇きつ叫びつ進み寄れば、防戰ほと／＼難義にして河原を東方へあはや崩頽むとする折柄なりき。但見る、寄良須濱の方より此の川瀬を背かで、眞黑七八騎を急がせつゝ、戰場を指して來る者あり。其の同勢の眞先なる一騎は栗毛の太く逞ましき荒馬、其れより稍後れたるは宿次の駄馬を裸背にして早道の鐙手綱をかい繰りたる武士五六人、其の御合戰暫く／＼、我們申すべき事の候ふ、暫く／＼と喚はりつゝ、川水へひたひたと馬を乘り入れ、漸くに味方の中央なる槍合の場所を押隔りたりき。叫ぶ語は、必死と撃ちかくる銃聲、先達と叫ぶ吶喊とに撲滅されて聞えざりしが、兎角は異形の人物の、異形なる打裝して、兩陣が間へ割て入れるに雙方は驚きたりき。なれども桑名は好き圖へ好き者と思ひたり、村上も究竟には好き機會と勞へたり。兩將の意見は一つに、各其の射方を制して、「一發銃な、其の旅人に怪我さすな！」「一蒐くべからず、合戰は重ねてぢや。」交互に吶と勝鬨さして東西の岸へと別るれば、此奇異なる仲裁の騎馬の武士は、彼方へ三人、此方へ三人、半數に立ち別れて各其の合戰の意趣を問ふ。

此時、急がせたる旅輿は同じく此の河原に集ひて、其中一梃の、殊に勝れて巨大かに鮮麗しきを、列を離ちて西の岡の端に押居ゑぬ。輿の背後には槍あり、挾箱あり、合羽籠あり、引戸の傍邊には鷹を据ゑ、犬を牽せて、鬼の子の如き倔強の供若黨、草履持、杖持、傘持、總じては十四五人も蹲踞したりき。猶其の後邊に雜人小物宿次の雇夫、樹の陰藪の根方に日影を遁りつ眞黑に塊りたる、夥多しき鬮目も醒るばかりに見えぬ。

此時に、彼方へ赴き、此方へ來り、一々に彼の輿の中なる人の下知を領て奔走する六人の使者、雲出の川を幾回か渉しつ越えたるが、總て其の輿の主人は兩陣の大將へ見參との義となりて、西方よりは村上彦右衛門、東方よりは桑名彌二郎、騎馬いかめしく此處に集合ひぬ。彼們が將几に踞るを見て、輿の戸は明きたり、中より出づるは年四十左右の四方髮、病氣とはいへど面の色光澤しきが、彼の若黨四五人に腕を扶けさせ腰を押させ、然も重々しき爲體にて立てたる將几にかゝりたりき。其人は別人ならず、民部介橘正雪。隨即、一昨日までも旅の梵論として松坂わたりを徘徊しつる、其の正雪！

[illegible]く、其人は異ならねども、其の行裝は宛然別人の如くなりき。彼は前日の汗に腐れし鼠色の帷子とは引反に、今日は縮羅を卵黄に染めたる浮き單衣の襟高う引立てたりき、顯紋紗の胴服、紫の色香に鮮美なるを寛濶に羽織りて白の精好の法眼袴に白茶の縁取りたるを穿き下せりき。黄金作りの伊達をつくしたる小刀、前下りに指し反らして、黑漆の骨に金泥める中啓馬手に把り、三鉄輪の一角なる地位に裕に坐を占めて、驚揚たる一揖を兩人に施したる後、彼は其の威儀ある口を徐々開きたり。「それは初度の對面。我們は今使者口狀して申し述せた由井民部介。扁者病氣保養の最中とて邀迎も得う仕つらぬ、無禮は御免。」

由井が聲名は我們が耳朶にも熟せるところなり、村上も桑名も相應の名對面して、殊に其日[illegible]の[illegible]る也、桑名彌二郎、突然として詞を放ちぬ、「[illegible]寺中老、今日の此の始末は眞正に思ひも寄らぬ仕義、委細は唯今御使者へまで申し通

じた。仔細御合點のおはしつらう哉？」「如何にも其の合點。」と正雪は中啓を笏に執り直しぬ。

（四十四）

「たゞ案外とよりはおざらぬ。」正雪が打傾けるを見て、彌二郎は詰め寄せたりき。「いかにも案外！　此の治亂の天下、御置目等すべて廢り無い世間に、誰あらう御三家の御一人、紀伊大納言殿の御家老牧野兵庫ともある御仁が、強盜山賊の爲るやうな白晝の燒働き——眞實に案外とよりはござらぬ。なれど此は案外とのみで濟み申さぬ。正雪御老、貴所も名ある仁、此場の始末親しう御覽じたとあるが僥倖ぢや。仲裁も頼み申そが、——證人になッてお呉りやれ。」「勿論、證人、なれど、愚老が案外と申したは、御言の意味とも些と差違ひ申すよ。」「彌二郎、不肖、貴命誤解り申たか？　さらば今一度」村上彥右衞門、喙を容れたり、「桑名どの、御疑惑も道理ぢや。が、只今の御沙汰、當家家中牧野兵庫が狼藉仕ッたるとあるは物の齟齬、右の兵庫は氣も存ぜぬこと。正雪の然申さるゝも大方は其等でがな？」

言せも果てず桑名彌二郎、大音聲！「不具者にお爲やるか!?」「や？」「さ、安濃津の士、耳も目も無いものにお爲やるかと言ふ事よ。知られぬか、今曉の黎明何處よりとも知れぬ勢三四十人、久居の陣屋の追手に押寄せて鯨波を作り矢を放ち、無二無三に攻入らうずる勢、待設けたる我等、狹間を開いて散々に防ぎ戰ふ。其時此の我等、來れる者は野武士か山賊か、名告れといへば、其の眞先に立つたる騎馬の法師武者、これは紀伊國殿御内の牧野兵庫よ、些と存ずる仔細あッて此の陣屋を借るぞ、異議なく明けい、然らずば今に大軍を以て堀も塀も蹈潰さうぞ、後悔すな、落ちよといふ。默れ汝ら、此の陣屋は江戸公儀より御預りのもの、紀伊殿御所望とて自儘に借すべいか、攻めよ、奪らば力にて奪れといへば。憎い奴と叫ぶ聲のして又一頻り矢の放いたが然のみは攻めず、二の見を待て〳〵とていつか此路を引て退く、其の途中、民家に放火し、青田を刈り、卑怯無慚の振舞して逃吠の置土產して往に申した。其等の體は日本の賊やらに好う似てもをり、別してはこの見といふ其兵と其等をもて、渡津の頭端をちと擊ち申した。……が、扨は其の兵庫どのに御身達は未だ遇はれぬなり？　先陣の大將逃路を失なうて疾に逃はれたか？　其れにしては噂う其の松坂に參籠りしてお居やるとの事御存じな？　敗軍の寺入り？　ハヽ、奇異しうもおりやらぬ事。而て其の寺は何といふ寺院でおざるな？」散々の蹴散、彼に在る限りの毒舌を敲かれたれども、此方は只、然にあらず、何の誤謬、兵庫に於て記憶なき事と陳疏に止まりて、臆色見せたる只今の合戰も此の對手口なる賊軍の爲には、紀州方、或は不敗とならざる可らず、時の不祥、是非なしとは言へ、反證の確たるを有たぬ右衞門は、今や彼に與へで協はざる返答の一つにて、嘲笑はれて男を籠むるか、二途の一途を撰擇はでは叶はずして、寧ろ思ひの隙端を煩はさむより劍刀の勝負に理非を決する、其の早手廻しなる方を取るべきまでの運とはなれり。彼は急き立ちぬ。目色も漸變りて見ゆるを、「桑名との、曲ならおおやる。」正雪は、笏にせし中啓を執り直して、更に我に緩々地なる拍子を取りつ、「斯くては愚老が仲裁の意義、詮もおりやらぬ。先づ熟う慮うても御覽ぜ、村上どのも廣島以來、今の紀州家にては歷々の衆、其の御仁が先刻よりも口を極めて、初度の城攻は彼方に於て毫頭も御存知ない事、昨夜の合戰は只往懸りの錯合、紀州において安濃津衆に別心なしと我們使者にもそれ程に申された。さらば御

身にも其の讒言信けられて、此所は只無事、特
の不思議と御覧じて迎かるゝとも仕開怪しう
もあらぬお仕義ぢや。又紀一か、其の紀州御家
老の牧野兵庫、あの大身で、其の御高屋攻めら
るゝに軍勢が僅か三四十人！　浚道理説話な？
況て攻め懸けた者を其儘に徒引返す、悉皆狂
人の所為、……眞實を申せば御身の讒言からし
て雲の如きもの。噺。されば此は御分仰せの、
眞正は山賊強盗の所業、其の狼藉の後に紀州衆
不時に通り合してかゝる不祥の目に遭はれたの
ぢや。不審はおざらぬ。正雪は必然と其を申
し斷る。御分も武士、先づ御身の心頭に較べて
諸事判斷を下されい。」

（四十三）

彌二郎は斯くても偏者は白面色、「貴老、そり
や偏へおぢや。其則にも聞ゆる……」「何と被仰
る？」正雪は如何なら顔色を目に見せたり。
此方は眉せず。「然では斯れに、牧野兵庫を此
の一件に關係なきものとお符やる。斯る傳聞の
仲裁——仲裁の哭かおざらぬ。彌二郎不案知ぢ
や。」言ふた今は勝ずして、正雪は崇ぜさぬ。
「隠密なる者を關係なき者とする。不思議もお
ざるまい」彌二郎は大に嘲べり、「いや其抹
がある。當方には！」「や、牧野兵庫、其の犯人
といふ證據でもあるか？」「有る、有る。彌次には
ゝ確に名告ッた！」「其の、相手でか？」「應。
其の斬際で名告ッた時、彌二郎、面體をも確に
視た！」「而して御身は、兵庫とは面識か？」「む
む、いや、面識とは無いれども其の年齢、恰好、
況て彼が昨今の剃髪、大納言殿前を損じて松坂
の城下愛宕町なる龍泉寺に蟄居する、其運を
も確に聞く、又其の召伴れたる供廻も雜人を
合せて三十餘人、其も仔細あッて疾くに存知ぢ
や。斯く其此の符合する上、今方の注進、即ち
街道に狙け置いたる斥候の士の早打にも、牧野
兵庫、諸殿かの密意の承けて先陣として久居へ
立ち越えた、それにつき彼の城下、上下切ッ
て鼎の沸く如き騒動とは確に申した。現の證
據は當方で無い、紀伊國方にも正確に有る！」
千引の盤は動かすべきも、此の證據のみはい
かな、いかな、手力雄の御神なりとも掘りもさ
すまじとやうに彌二郎は勢込たりき。なれども
正雪は、合せみたる頰の猪を撫でるのみ、感
服の色もなし。「證據は其れか？　むゝ貴方、
貴方は武勇はお得意ぢやらうも、公事はお下手
ぢやな？」

驚きたるは彌二郎のみならで、彦右衛門も正
雪の面を瞻視たり。正雪は仁其の微笑を續
けつ、「證據、證據と事々しう言やれども、
其の證據、一個も現の證據におりやらぬ。其
の名告たが嬉いで兵庫か？　其の法師武者が黒
いで牧野か？　夜目遠目笠の内、暴夜の薄
暗い、如之闘遁、隔てたる楮と斷話よも御
身、見違へなど作されたでもおはすまい。其の
恰好が人傳の聞いたるに似たればとて、其の聲
柄が復傳の噂のものに其儘なればとて、其れが
兵庫か？　況て御身は其人に面識もなし、縦し
有りたればとて其者を捕へぬ以上は茜喚と確認
さう？　悉皆雲を摑むの空議！　水掛の論！
其の斥候の注進など、只是れ市中の雜説を申す
に過ぎぬ。例へば道中宿驛にても紀伊殿の此
の御通行、それにつきて種種に言ふ、されど紀
伊殿、此の頃謹の天下、幕府外備の御身柄とし
て然様の事あるべきものか、是れは御身とて、
然無しとは確に申されう。今日の事も其れぢ
や。いかに兵庫と名告ればとて本人は松坂を離
かぬ。生目の一人もある筈か、其れも御手に無
し。只何者かの兵庫名を騙れると、取留なき
の風説とを直に信けられて、他領にも一場を作
せ、其處に來かゝる他家の人數に合戰を挑まる
る、其們奉行として裁判の下まけ、或は御身を
其の謀叛の思ひ立ち、不思議の企圖、我と手に

無き罪科を、作て他に誣る骨頂の罪人として檢斷を爲らるも知れぬは、ハヽ、然かれな、此は譬喩ぢや、されば其の御身も、風說の信ぜられぬ、彼の紀伊殿を云々と申すにも徴せられて兵庫の疑念を解かれ、又稙忠の合戰めされた身の過失をも些は償い、理のあるも申張られぬ温順しき紀州家手前をも憚かられて、こゝは愚老が仲裁につかれい。惡しうは申さぬ。御身が御爲ぢや。」彼は諄々と言ひ畢りて、其の中啓の要目を弓手の爪甲の上に走らせつゝ、此方の面上を注視めぬ。憎くきは這奴の强請なり、然りともあれ謀叛の證據は、我兵を損ぜられても兎角を爭はぬ村上が斟酌にても知らるゝものを、其の負門を追詰め衝詰め、突入らば、彼奴ら果して馬脚をや露はさむ、遁辭窮りて背をも見ぐべきかと、彌二郎、胸には泛びたれども、遣恨はたゞ兵庫にかゝる彼が手兵一人だも捕へぬにあり、彼の言ふ水掛論はけに當方の不利、口先の爭論は我が此の古狐に企及ばぬ處、縱し一時を遅緩うするとも此件の此場にて立消たるにては無し、罟を設け、餌にて釣らば、變化の正體見顯はさぬ事のあるべきかと黙念しつゝ、是非なき彌二郎は、沙汰は追て、委曲は當方が使者の口狀に、と詞を殘して立ち歸る。後に、村上は正雪の手を執りぬ。「正雪老、御芳志は一代ぢや！」

（四十六）

運命是非なく、腹居るか、男を廢るか、其場に稠詰へて結果るかとまで覺悟せる村上彥右衞門、助くる神の正雪に面目を拾はれて、人數さへ損ぜず、生命をも虛しうせず、合戰の勝利と論判の利運との榮を擔ひて引返す、彼、這の恩人に對する心中の感謝や如何ならむ、路次は正雪の乘物を中央に立てゝ、彼方の同勢と此方の人數とにて警衞せる、宛然大名を得たるが如くにして、松坂へは着きぬ。正雪が此の旅行は、昨年より今年へ懸けて必死の重病に侵されたるを、伊勢皇太神宮へ祈誓し奉つりたる甲斐ありて不思議に平癒しぬ、これに依りて御禮の報賽の參詣といふ。さらば急がるゝ道中にでは無し、寛々當城下に御保養ありて名所の見物ともあられ候へ、旅宿萬端御馳走申さむ、いでとて、彥右衞門、先づ此の主從を城下隨一の大寺、淸光寺に案内せさせ、自家は途中より引別れて只一人、大納言殿御前へ出でぬ。

「彥右衞門、甚麼とありしぞ？」御病氣の御披露とて、殿は薄羅の御衾に凭かゝらせ、小蔀半ば下ろさせたる薄暗き御寢所の内に御座なさる、兒小姓兩人、團扇もて御背を扇げり。大學殿遠くも侍座せり。彥右衞門頓首して、「先づ無難に。」「人數は？」「雙方一人も損じませぬ。」「此方の士、大學が領へと越しつるか？」「私參りて引纏めまする際、久居の兵附纏ひまするやうなるを追返して、川中過ぐるまで追込み、其儘引揚てござりまする。」大納言殿、御氣色いと麗はしく、「扨は失敗は取られぬな？好う仕ッた。現在の際會、雙方に人命の損傷あり、又た紀伊國の士、大學領へ押入ッたとありては後來の都合、面白からぬに、川中まで追棄てゝ人馬に過失させなんだこと、又た其方の功績ぢや。善う見切た。——然りながら彼奴原も猶ほ東方の岸に在らう。手當は何とした？」彥右衞門は先づ殿の御諚を謝して、躊躇せず此問に應へ申せり。「……右には年長しき者百五十餘人、三手に殘いて、後度の手筈をさせまいたが。——猶仲裁の仁おざッて、當座の和談も成り申した。其の和談も先づ、當家、存分のものにおざりまする。」聞くより殿は、御肱なる御脇息押斥らせて、「や、和談？其の仲裁とは如何樣の仁？」殊に御面色を正させ玉ふを、彼は猶何心もなう、「それは殿にも名は豫て御存知の者、由井民部と申す兵法者……」「呀！」

其者が仲裁人？ 而て、其は大學士、讀んだか？ 得も其方から？」爰に至りて彦右衛門も、初めて仲裁其人を得ざりし過失に憶得たり。彼は巧みに摺着たる額を又擡けて、「吁、殿。彦右衛門一代の不覺！ 噫、残念！ 一心付いたか汝、――扨も／＼ぢや！ が、其の發端が心許ない。仔細う申せ。」

彦右衛門はしとゝ滴る額の脊汗を拭ひ敢へずして委細を陳しぬ。殿は此間、御目を瞑ぢつ、御耳を傾けさせつ、無言の裏に千萬の諸審を御胸に凝らさせ玉ふやうなりしか、彼が言上を聽果てさせて、「……何と申すも詮方が無い。其方が身の過失、知る以上は別にも言ふまいが、――こりや大學、渡邊、其方は年壯の者、以後の心得にもなる事ぢや、熟う聞けい。凡そ物の仲裁、――就中弓矢にかゝる仲裁は大事のものぢやぞ。予は今從二位大納言、家格は三家の一人、其れが仲裁を頼まう者は、尾張、水戶、越前、其外には見も當らぬを。彦右は老功の武者、然ですらも斯様に不意の過失のする、其方らは若輩の士、萬事に目を配らぬと予が面に泥も抹けうぞ」仰せ棄てゝ、又左右の御思案ある。彦右衛門、あはれ今は絶體の御日とはなれり。渡邊に仰せて御諚は一々我耳に御聽せある御折檻、其れも外樣の役目もなき士ともある事か、御眼鏡もて總軍の御采幣をさへ預けさせ玉ふ身を此儘に甚麼活目々々と在るべきや、想へば身の讐たる正雪討て、後日の口を塞がむか、自己切腹して此の恥辱を亡屍の上にて陳疏むか、其れも拙なし、此も無念、兎やすべきと心一つに悶念らふ、眼中も自ら血走りて見えぬ。

（四十七）

「只今の大學へ御意、彦右衛門□□の耳に一々徹して覺えまする。箇樣の不束仕つるべき者とは我ながら今迄は存じも懸けず、總軍の御采幣、御辭退も申さで下さるゝ隨に御預り申上げたる、千萬の不覺。其は改めて今日三軍、返上つ仕つります。猶一つは、彦右衛門、身の御暇を下されたう、御許容ひとへに願はしう存じまする」――ふう！ 不思議を申すの、身の暇を乞うて甚麼と爲る？」彼は遺恨の涙を拭ひて、「其後の事は又私料見。――只今は唯何とも濟めませぬ。」殿は其には應へさせず、徐ら大學が方を顧みらせて、「其方、現下の彦右存分を何とか思ふ？」彼は只顫恐惶して、徒、は、はとのみ言へり。「いや、萬一、其方、彦右なる處の羽目に當たりや甚麼とする？」「何とも濟めませぬ。大方？ 退身の仕つりませう。」「退身のして甚麼と爲る？」大學は益窮せり。「はっ。これは其身々々の身分にも依りまする事。兎角は御難題……」「難題で無い。主の奉公爲る程の士は平年より然るほどの覺悟は有るべきもの。――大方其方が料見などでは、切腹して陳疏するか、事に托へて正雪と謂ふか、自個が手の兵を引伴て舊の戰場に立ち返え、再び津の兵と合戰して切死の意地を立つるか、先づは其等で有ろ？」彦右衛門は、摚へたる手の隻方を膝に上せて、蕪けるが如くに屹と面を揚げぬ。「眞箇に御推量、寸分も差ひませぬ。切腹も無益、正雪と結果るも無道、津の奴原と討死仕つるも狂人の沙汰とは存じますれど然りとて其他には殿への御陳疏、爲む様もござりませぬ。たゞ其も御當家御内とござりませで、浪人の村上彦右衛門、一分の意地を果たす、それ實でもと御覽じ下されて……」「むゝ、心底、先づは過分ぢや。が、其れは唯其方一分の事。予の身には只恥辱が殘るぢや。粗忽の家來持たといふ汚名が添加るぢや。」彦右衛門は再と一句も無かりき。首を俛れ、額を痛せ、胸を碎き、腸を推る、無量の苦悶も終に過の寛濟の如き主君の御慈悲に報ゆるの方便を得ずして、前路の方向、其の東西と南北とに迷ひぬ。彼は苦吟

の[illegible]を明させて、一[illegible]屋とお[illegible]申さうか？ 身を立つれば殿様が御立ちなされぬ、其の殿様を立て申す——思案といふが、些と着かぬ！ 大學、善い智慧は？」大學も唸きて、應へぬ。「我們とて……。なれど彦右どの、御身は既に事を棄てたと御申しやる。棄てた其の軀を殿様の御随意にして、恐れながら其の御分別、御智慧を願ひ申されては？」「何さま！」と彼は横手を拍て、再び殿の御前に首を下げたり。「右の通りにござりまする。何卒御慈悲……」殿は哈々と笑はせ玉ひて、目をもて其れと見し玉へば、御背に參れる二人の兒小姓は御次へ立ちぬ。「近う寄れ。其方らも目は見えぬな。予が此の恥辱かいつるは誰が所為ぢや？」は、と兩人は惶まりぬ。實に意外の御問なりしなり。兩人は只目を交視せぬ。「いやとよ、予が敵——此の紀伊國を危殆うせうと企図む敵は、何處にあると申すのぢやは。」益所し断ねたる兩人のうち、大學は恐る恐る「安濃津の士？」「はゝ枝葉な！」彦右衛門も、捻りたる首に、眉を皺めて、「江戸、老中衆？」「遠いは、火は！」と再び呵々と笑はせ玉ふ。兩人はやゝ憤氣となれり、覺えず暗合の口を揃へて、「扨は、今曉の兵庫名を騙りし賊？」殿は、吽との微なる笑を漏らさせつ、「[illegible]其の仔細は？ 憶ひ得つるか？」兩人は憶ひ得ぬなり、眞實はたゞ出放題なる、闇に放てる鐵砲の思はざる的を徹れるなりき。「憶ひ得つるか？」——は。」嘱と塞りて、彦右衛門は眞面目に篩張れり。大學は甚しく怪惟て、御氣色を覗ひたりき。

（四十八）

彦右衛門は堪らぬ態なり、膝を前めて、「然御意ある、殿には御存知か？」「予とても知らぬ……」兩人は眼を斜にして、御自身さへも其の通り御存知あらぬを、我等を何様に御責なさる、これは御無理と申すもの、との面進するを、殿は猶打笑はせて、「……が、烟を望みて火あるを知り、角を瞰て牛あるを知る、譬喩も今更ぢや。お主らは彼の正雪を何者とか想察ふ？」御諚の滑やかなるに、大學も惕けば、彦右衛門は特別て仰天したりき。

我が、剛纔、彼と組で結果むとしたるは、彼は名を衒ひて江湖に賣り歩く浪人、何さま殿の御意通り、寛永の廿年七月の某の日、我が伊勢參宮の節雲出の川にて紀伊國衆と安濃津衆と撲戰ひ、殊に紀州衆は難義と見えたるを、我れ由井民部介橘正雪、見るに氣の毒と其場に仲裁して其隊の頭人村上彦右衛門某といふを助けたり、かゝれば[illegible]、安濃津[illegible]萬石の今日に現存は、全く我等が斡旋の庇陰よ、なんどゝ言はゞ、義者、一分の面目は措くも、殿様、否、御子孫の末代、紀州家在らむ限りの御恥辱なり、然れば一旦の恩誼はあるも、其目を杜ぎ、其喝を掌り、是非なき彼をこゝに討ちて後日の口を閉鎖むと只念ふ一途なるを、思ひきや、彼が其の紀州家に寇する——此の一埒の張本のやうにも仰するは何たる意味ぞ。大人の心算もとより量り易からざるも是れは又た餘りなる御目の的けやう哉、彼の不祥も餘りなる哉、と彦右衛門は惘れしなりき。

「領受れぬ面色と見ゆるが、——彼を何者と豫察はぬか？」「御沙汰にはござりまするが、彼めは只一個の兵法者、浪人の時を得ましたる者……」「むゝ、それは彦右言ふ通りの者……扨て其方達は、あの道中の雜説、江戸表にての風説、予が身に罹る批評ども聞いつるか？」「いかにも其れは。」と言ひ罷して、大學の眼は目瞬しげなり。「其の批評の流布の原、雜説の起因は、甚麽と胸算む？」其話頭は定に大事となれり、彦右衛門、精神の有る限を雙の眼に攅めたるが如くして、「それは唯殿様御智勇、御拔群に渡らせられて、加之恐れながら權現様御愛子、

例の百萬石の御進言などござりまする。其等原因と相成りまして右申す江戸老中衆が……一其義もあらう。なれど右は元和五年の當所國替前後の事で、今よりは廿四五年――二紀も既往の義ぢや。其間には御當代樣御代替(三代將軍家代替 前將軍家の御薨去、九年 寛永)には駿河の騷動(忠長卿こと)十四年には島原亂、其他にも天下の色目動きさうなる義も少小うあらぬ。其節にはそれ然もなうて去年の關東の饑饉から、過米を徴すの、所司代(京都)城代(大阪 當所山田の奉行への奏書の下るの、兎角は予にかゝる批評の多い其上に、又候ふや今回の騷動。予の鹿狩も一つは右等の意味もあるが、道中宿驛大變との事兵庫口から聞いつる時は案外との念も偽た。最初は例の大學(藤堂)めが幾許かとも想うたが、熟く察れば然も有らぬやう。何さま此の二三年、不思議の曲者世中に徘徊して非望を企圖つる者ありと覺ゆるぞ。而て其の非望の的になつたは予か?とも想ふぞ。」御辭は愈肅瑟なり。大學は傾聽ほと／＼感に堪へざる首を正して、「さては、右の曲者を ―彼めとも?―「いや、未だ……」「倘それ、其の御懸念ござりませうなりや彦右どの迄もなし。大學、罷り向ひまいて!」「遊くな、彼等ほどの者じ、況て其程の大事とあらば彼奴一分の義ともあるまい。外に其の大將たるべき――然るべき者?―大學は其功を建てむとするに急なるか、其の勢込ある腕を扼り敢へず。「とはござりませうも御家を狙ふ曲者、天下に仇をなす逆賊とござりましては大學、片時も棄て置けませぬ。縱し然で無いに致してからも浪人の兵法者、其れが僞體の僭上、大名高家の眞似仕つりまするは兎角は世の賣主の流し打殺しまするは天下の御爲!―ハ、其の汝が若張の其腕で……。爲損ぜば諸が面皮ぢや。可矣、予が遇はう。遇うてこそと試いて與れう。彦右、其方は善う饗應せ、今は猶ほ其方には恩分の者、氣にも惡しい面色するな。穩便ぢや。諸事は予が指圖の待て。」

(四十九)

正雪が眼に映ずる、當時天下の英雄と稱すべきもの兩個あり、其一個は、備前の新太郎少將 光政朝臣)にして、他の一個は卽、紀伊大納言殿におはしき。這兩個は與に彼が仰慕し、畏敬し、且つ恐怖するところなりき。雖然、彼の少將殿は、學を好みて、文を尙び、民の休養を專らとして、風俗の美を庠序の中より發さむと爲たまへり、廢れたるを興し、荒れたるを復すの善政、觀るに見るべきもの多しと雖も、諸事儒者臭味して、西達成敗の氣に乏し、加之ならず、其性の豪行に拘り玉ふこと多きよりして權現樣御外孫とあるを此上もなき榮譽として、只幕府への忠勤、將軍家御爲とあるより外は西も東もわからぬやうなるが口惜き。其れとは反りて紀伊大殿は、天晴れ稀代の豪傑にまします哉、我が鑒たる眼にして過たずば、此殿は是れ、豐太閤が智略に、東照公の勇武を兼ね、猶ほ安土殿の經綸を一緒にして、餘りありとも見え玉ふぞや、其の洋々として巨海の如く百川を收容に濁らさゞる寬度、撓れども撓たゝず、抑ふれども滯らざる大江の如き雅量、時ありてか輕飄睫發、其疾きこと風の如き、時ありてか沈重寬閑、其靜なること林の如き、古に謂ゆる神龍、變幻窮極なきもの歟、然も此の神龍、今や蟄して九淵の底に在り、果して風雲相會の日を待つには非るか?

風雲なる哉!風雲なる哉!!彼の龍にして果然其物を待つとあらば、我は其の浪を鼓ち雲を行るの風ともならむ、電掣めき雷鳴るの雲ともならむ。況んや看來れば彼の神龍、此機を驅せむと欲すれども未だ得ず、田にあり野にありては螻蟻の爲に苦められ、淵にありては魚鼈の

爲に窘めらるゝ如きものあるをや、磅礴の氣、宛然目これを視て、耳これを聽くが如きあり。吁・誰か此の神物をして天に御するの日あらしむる・今の時にあたりて我を除にして其れ誰ぞや!? 正雪は、實に如是く想念へるなりき。彼の箭は、確に此殿の胸臆に跳る怪物の眞直中を射徹し得たりと想念へるなりき。彼の中國なる狻猊はこれに狎れ昵づくべからざるも、南海なる鯨鯢はこれを補佐誘掖すべしと想念たり。或はこれを網裏の獲物として我が掌上に弄ぶべしとも想念たり。蓋し同氣相求め、同臭相倚る、倖ひにして一旦其面前に咫尺するを得ば、相見ることの太だ遲かりしを恨む、面白き御諚をも承はり得べしと彼は想念へるなり。

從前に彼が計畫るところは、一々其の侯的を差謬らずして、着々と其の會見の步を進めたり。これが爲には或る一人をも磔柱に梟げたり。或る一人をば主に叛くの逆賊ともせり。或る者には其腹を屠せむともしぬ。或る者には其男を廢させむともしぬ。雜說もこれが爲に湧き、騷動もこれが爲に起りぬ。なれども正雪の眼には此等を見ること、淵の爲に魚を驅る獺が癡呆たる所爲とも見えて、其の衆々が叫喚苦惱、煩悶を聞く、虎を釣るの餌となる漁術の悲み吠く、ほどにも感えざりき。此の無情なる大膽は、果然恁麼處より生れ來れる? 王政の古に復して其の祖先? の英靈を天上に慰めむとするか? 幕府の秕政を矯正して萬民の鼓腹を畫るものか? 抑狼戾の野心を逞うして、非望の途に奔馳するか?

善惡、忠奸の分別は姑く措きて、彼の得意今方に窮まれる正雪は、又た渡頭舟を迎ふるの歡ばしき使に遇へり。其使節は彼の村上彥右衞門、其事は明日の會見! 一先刻の一塲、主人御耳へ立てまいたが、貴氏の挨び蘭端殘る處なしとの御意おざる。就ては病中、大儀とは存ぜらるゝも親しくおはして御逢なされたきとの御事・御返簡は何とおざらうか?—

故意と驚きたる正雪は、一應の辭退を申して、再應の勸告には餘義なげに承諾したりき。此夜、彼が旅館のうちは、衣服調度の撰擇、供揃の支度に夜半の鐘の鳴るころまで犇めきたるが、其れも過ぎて、正雪が居間なる處には腹心の面のみ揃ひたり。

・折柄、外の方より立ち歸る師の面を見て、上座の一人は祕かに問ひぬ。「別條おはさぬか?」「うむ・無事ぢや、明日の見參は、本意あらうな?」

其の衣服の常に異れる、赤土の泥に塗れたる痕あるを見れば、彼は窃に彼穴より城中に忍びて、其の用心に有無如何を認たるにやあらむ。有形の準備は如是く探り得ぬ、無形の心地は、噫、果然奈何。

（五十）

明くれば寛永の廿年八月朔日、此日は彼正雪が此の大望の前途の運命をトすべき其日にして、彼が平生の努力、機智、辯舌、其れが軍學の奥旨といふも、兵法の極意といふも、此期を外にしては亦た殆ど其妙を用ふるに處無かるべき程の其日なり。

彼は此日、巳の半刻の登城といふなるに、日高うなるまで臥房を出でず。日常は曉天未だ明けざるに先ちて必ず起きて、弟子們が禮を受け、其日の業を課するが例なるに、今朝に限りての朝寢、心得ずなんど呟ふもありしが、兎角は師の爲す隨意にして驚かさず、衆は皆今日を晴れなる供立の準備せり。

彼は軈て起き出でゝ、面を盥ひ、口を嗽ぎ、徐に庭に下り立ちて、城中の森の樹梢を瞰望ること多時して、やがて引入りて朝餉を啜めぬ。其間腹心の弟子、金井半兵衞、松田彌五七、鵜野九郎左衞門等出で來りて對面したれども、挨々

しう詞も懸けず、只、然るかたより御使は無き歟、とばかりにて、只顧思案に沈める氣色。其の思慮の什麼大事のものなりけむ、箸に貼れたる飯粒の膝に落つるをも知らざる態なりき。

金井半兵衛席を進めて御氣分の儀におはさぬ歟、御氣色何とやらむ心許なう、と序を開けば、松田、鵜野も、昨夜とは樣異りて御見え候ふ、今日は如法の大事の日。御氣分の進まぬところを強てとては勿體なし、何の苦しう候ふべき、豫ての御所勞再發の御屆、御使は我等、と言ふ。

いや、さる程の體にても無し、些と物を深う案じて方々に怪しめられたること羞恥しけれ、臆したりとは覽玉ふな、油斷は大敵ぞ、と顧りて笑ふ。其の深う案ぜらるゝこそ大事とは見て候へ、敵も敵に因り候ふ、尊びて後の御後悔には千本の杖も詮なく候ふ、たゞ今日を御延へにて容子をも搜らせ、我等とも謀との御談合あらばや、と半兵衛重ねて抑止むるをも正雪は聽かず、萬事は委されよ、其場にて樣惡しくば、と打笑ひつ、其後は元氣を復して屈託の面色もなし。斯くて風呂に浴り、身を潔めて、軈て衣服を更めぬ。今日は八朔の御祝日といふなればや、彼は白帷子に打裝てり、[illegible]の[illegible]服に、[illegible]袴、黄金作りの雙方、目覺むるばかりの行粧して、其の旅館淸光寺を出で立てるは巳の上刻に近かりき。

城中にての準備は什麼？ 是れは大納言殿御料見にて別段の御用意とても無し。只、御不例も今日は癒らせぬ、旅中ながらも當日の御祝儀を受けさせらるべしと觸られたれば、家老水野太郎作、奉行村上彦右衛門を初として、御供なる近習外樣數百人、彼の本丸なる百疊敷の廣書院に祗候して拜謁す。

諸士の御禮相濟みて後、正雪への御對面とは豫ての御沙汰なり。龍侗として端涯も知られぬ長廊を引續き、追續き、簇ちつゝ引退り來る諸士の肩と踵とに、傍眼も觸らず、御廊の中央を彼の宗佐に案内させて、御廣間を目に懸けつゝする〳〵と行く人、其の骨相の凡ならず高尚りて、射出だす眼光の面を向くべきやうも無きに、あれや！ と衆皆も歩を避けて、「誰人か？」「正雪よ！」然りとては可怖しのあの眼光や、殿樣の御眼中も折節は炬火のやうにも輝やくが、是は又た掣電ぞや、彼の目と目と會はゞ什麼ならむ奇觀にあらむ、御執次する大學は銳光に射たれて盲目にやならむ、兎角は珍事出來のほど心許なきに、下坐すな、詰所に在れ、と正語きつ、後影を凝望むる、いづれも視線の裏に彼が影ははや御書院の襖に入りぬ。

「由井民部介、御目見にござりまする。」とは渡邊が披露なりき。正雪は此の披露につきて末座に恭しく首を下げつ、未だ一言をも言はざるに、上段の方に凛然たる御聲ありて、「正雪か。近う進め。」「御意におざるぞ、民部、御近う進まれい。」これは聞熟れたる彦右衛門が聲音なり。彼は此の會釋に隨きて毫も惡怯れず、御疊十疊がほどを膝行て、大學が一咳を暗號に、再び其處に着席しぬ。首を擡ぐれば、我は既や御前御間近の地にありて、御面は鮮明に視られたり。

御側には、右方に水野太郎作あり、左方に村上彦右衛門あり、渡邊大學は我と殿との中間になりて、是れは執奏の役と見えたり。御背面には年十四五なる兒小姓兩人、蠟塗に紫銅の鐔うちたる御刀と、白綾の服紗もて包みたる函とを持ちぬ。御疊の目を波と見れば、廣々たる海の如き御座敷に主客五人。言ふ聲音は一々四壁に響きて奇異しき谺を耳底に反射せり。

（五十一）

正雪は、其交へたる手を大學に向けぬ。「民部介、測らざる御目見、冥加至極の仕合に存

じ上げまする。」―むゝ、見事、予も其方名を聞くは久しいぞや。今日の對面、本意に思ふぞ。別しては昨日の宗田川一騎、群臣選分ぢやぞ。」「は、忝けなき御意。」と首を下げしが、再び仰ぎて、屹と御面を瞻上げたり。彼は、當初は瞻上げたれども、宛も是れ壁立千仞、齊に攀づ可らず、搖かす可らざる山嶽の御儀表のみならず、此時礑と瞰下し玉へる、其威稜々、白日闇を破るが如き御眼の光灼は我が肉身を透して肺肝に徹する如きもの有るを感えて、正目にとは覗ひ得ず、直と面を伏せたりき。

　彼は、實に案外の想したりけるなり。彼は此殿が御前にとては眞に今日が初度なれども、其れが得意る或る手段によりて、物陰よりの偸視は從前も數囘したりき。御智慧こそ勝れ玉へれ、御武勇こそ優り玉へれ、恁くまでの威嚴、是の如き氣力を有ち玉ふべしとは實に現今の現下までに豫想も懸けざりき。或る時は實に此殿を、我が藥籠中の一物、使役たゞ我が隨意とも想ひしなり。然るを今は、善うせずば、我は怖ろしき彼眼の爲に此の御座に睨み殺されなむず。過たば、我が年來の秘望も一喝の下に粉韲と碎かれなむず。我は只猫兒の如くに頸に繩をつけられて牽囘されむずとも想ひたりき。とは思ふも、然りとては口惜しや、正雪從前かゝる無念の目に遇ひたること無きを、殿とて何物とて！何條事！！と一身の勇氣を臍下より喚び起さむ、喚び興さむとは急れども、我が心、我が力は何處へか匿げつる？只□□を其背に□に壓し重ねらるゝやう覺えて我と我れを怪異むまでに、頭は下り、肉は震う、心戰きて畏縮みたりき。但此る時、彼は忽然として大悟しぬ。我は過矣。此殿は實に我には有勝りの角力にておはしけり、手の優れる角力には勝たむとは抵るべからず、負けじと組むべしとは斯道の秘訓なりけるものを。眞實を言へば、今朝、此頭に深く考慮ひて、猶ほ庭にて城内の森の樹梢を望つる折に、不圖眼裏に映えたるものありしが、此れが前兆かや。但し負けじと懸むほどには此角力は持なるべし、持の角力は却りて後日の花を開かせむ其の地盤ともなるべき歟？　恁く決悟して、彼は只顧肉の壘塊を去れり。持たむとする氣を抑へて彼が蹴むとする透隙を狙へり、無口の禪に定じて衲が說法の破綻を待てり。燃犀の明は、疾くも水怪が胸中の祕を御覽じ知りたるが如くなりき。殿も少時彼が面上を睨め玉へるまゝ、再應の御沙汰とても無かりき。御心に念ひ玉ふやう、倔強なる奴かな、今の顔色か面を覽つる眼光の鋭利、骨肉に徹りて透えよ。誠とや這奴、古の楠廷尉が末葉とて正雪と名のり、其れが秘鑰を傳へて、諸家に出入りし、其の弟子たる者の數も三千には餘ると聞く、分限の富裕、起居の奢大、當代に稀なる浪士とも聞きつるが、何さまにも素奴が容態、天下に望をも懸け離ねまじき然る曲者とは覺ゆるぞや。一條索では繋ぐまじきに、何樣にして降さむ、迂濶と物言て脚をも捉れなば大事ぞ。甚麼とや問はむ、什麼にや答話せむ、御思案の區々なる御眼は頻りに灼爍て、只顧彼が面上に注がせたりき。正に是れ嵎を負ふ猛虎を覗ふ潭底の龍、洞に潜む毒蛇を搏たむとする鷲頭の鷲、其爪を磨ぎ、其翼を刷ふ、呼吸は甲乙相迫りて、今や電激し、雷發むとするの形狀！

　侍きたるは水野、村上、渡邊なりき、彼等は此の奇觀と謂はむよりも凄景、凄景と謂はむよりも素破の惡勢！　危急！　御大事！　咄嗟、瞬間、彈指の間に逼り來らむとするを見るより、脇差の柄に目を注ぎ、御意の際に耳を澄して、更に正雪が呼吸如何に心を配る時、御聲は倏然起れり、「民部、其方には聞きおくべき事も多くある。なれど斯う改まりたるまでは意中に盡くせまい。大學、時分ぢや。湯漬の用意。

なり、便ち寛永の十四年なり、卽ち島原の亂の際なり。此時は我れ實に然る不同義の暴動したりき。設ひ其表面は土民百姓の一揆とはいへ、內々には關ケ原大阪以來の宿恨を飲み、憤懣を抑みて、こゝを死花と思ひ斷たる爾る古兵も多く在り、加之尋常の苛稅に苦しみ、聚斂に傷れたる窮民の爲なるものとは樣變りて、一つには宗旨の上なる事と聞けば、或は外國の後援といふも有るべき歟、然らば事萬一敗れむ時は、彼の蠻船にも飛乘、瑪港、呂宋にも航りて、往昔の八幡船（明時代にいふ倭寇の船には舳先に八幡大菩薩の名號を認せし旗を建てたり）仍ての八幡船といふの大將とならむも易し、と思ひて、眞實は其際、城中へも入りたるが、豫想にも似ぬ彼等皆烏合の衆にて、賴憑みたる異國の加勢といふも無し、到底大事の成るべからざるを斷見りて逸早く其處をば出でたるが、此事、我が腹心の弟子三四人がほかには漏說さゞりしに、殿は却りて何時什麽にして聞出だし玉ひにけむ、其の委曲を御存知あるやうなるが恐ろしや。然る程の大事を疾くに知らせながらに、我を一揆の餘黨とは御存知ながらに、其の刺針の如き御意をば下されながらに、鞠問もせられず、縛繩も打たれず、虛知らぬ態に、懇う親しう打開けたる御待遇？　あの御微笑の裏なる御刀の切味、凄まじう、恐ろしきは言ふも更らなるが、然りとては其の底意つかはせらるゝ御中心の無銘か否かは鑑定申すに難からぬぞや。果然殿は、爾る思し食立ちありけるなり、仍て我を一方の任とは頼ませて賜ふなり、晴に局量の大を見して不言の默契をば結ばせたるなり、と見るは僻目かな？　よし、損得かじ！　流石此殿が、我に國々の風景を語らせて歎乾の粹にともなさるゝ事か！　想へば其の御苦心の程も好笑しや。されば此の不思議なる風景談！　今の、如何やうなる景色が目に殘まるかとの御諚に對して、某の存ずる日本第一の絶景は、江戸御城、富士見のいなる御天守の眺望にござ候ふ、此櫓に御座まし〱て、日本六十餘州の青山村里、目の下に御覽ぜられむは什麽ならむ須磨も明石も物かはと申上げむか、大方は御意にも入り、御話說も申う、埒も隙も明くべきが、或は恐る　斯樣に御心深うましま す殿、他人は知らず御心知りと自身は言ふなる兵庫にさへも御心底御打明あらぬ程の殿。こゝなる水野村上輩には定めし何事もの仰せ合されは無きならむ。其の仰せ合されなき端に、斯樣の大事迂闊と申さば、人々の手前、惜しきながらも此の正八幡を安穩には置かせ玉はじ。されば殿も御納得、我も合點、此の人々にも自然其方に惑惜する如くにして、扨て此の御座敷のよろしからむやうの御答、甚麽とか有らむ？　と、彼は躊躇ひて、看過したるなり。彼は思考する一邊、屹と心に憶ひ得たり。「其の、私日に睦よりまする、其の景色は、先づ第一に御在所鄰欧の浦、續いて大宮、屋が崎、別しては御暫側なる駿州の清水、薩埵山、天龍、大井、富士川の五月雨の眺望も上の空には看過しも得なりませぬ。なれど、與に其の胸臆に沁むは、富士の雪より、田子の浦より、府中、高田、福井、廣島、熊本なんどの古城の月！　其の人世の無常き興廢の迹を映しまする示、不風雅と仰せの眼にも自然暗涙さし濕むまでに感えまする。」ほゝう、古城の月？　何とま歌にも、月は世々の記念ともいふ。感慨の情も然ることぢやが、其の駿府福井高田などの月影が、何故わきて心に沁むたな？」「國敗山河在！　壁櫓は依然なれど、舊主はおはしませぬ。月のみはたゞ昔しの影！」彼は言ひ罷して、其月中の滴露とも見る涙の球を、其の瞼毛に置きたりき。殿は其れをば御覽じつけざる如くにて、「其方は異な事をいふ。月のみの昔しの影ならば其等の城にも限るまい。當

松坂とて、初代が氏郷、次が一忠、服部、次が古田、斯ういふ予は四代の主ぢや。其の氏郷も一忠も織部（古田）も今は現存ぬ。其方は此處の月影にも、其の懷舊の淚とやらむを殘すかな？」
「繼さぬにも限りませぬ。恐れながら殿樣が現今の御立場、好うも右の駿河殿、越前殿、越後殿、又た福島、加藤等お身上に似させらるれば……」
「あ、這は什麼なこと、暫く！」と水野は制しぬ。村上も渡邊も、此と同時に遽がはしく眼を働かして、一方は殿の御氣色、一方は彼が口吻に意を注れり。

（五十四）

此時の殿は、正雪が詭怪の論に御耳を傾け玉へるか、又差して水野が諫止を禁めむともし玉はざりき。水野は再び口を續けて、「民部には此の御座敷を何樣に心得らるゝ？　容易ならぬ言上、不祥の御事、何やらむ呪詛がましうも聞えて、忌々しう、初度の見參には甚だ其意を得申さぬ。」彼は苦々しく難じたりき。正雪は、然ればこそとの顏色、「はゝ、呪詛とまでの御懸念、なりや、も、其樣は何事も申さぬ。なれど元朝元日に祝ふ七百歲の祝言も口ばかりで、誰一人然樣の長命した者もおざらぬ。我們は殿に、千歲の坂と言祝ぎ申す代よりも、尊ばぬ先の御杖と申すを差上げたが、結句は御身の爲、御家門繁昌の基と存じて……」と臉に見するは冷かなる微笑、眼に競ふは殿の御氣色。

殿は苦もなく引取らせて、「さればぢや、民部、其方が申すは至極の道理ぢや。物忌ひは婦女子のする所爲。なれど又た主家の武運長久と祈るも家來たるの分、惡しうは聞くな。たゞ予は厭はぬぞ。其の仔細は？」一物ともし玉はぬ御口風に、彼は却りて先を打たれて、扨も〱とばかりに、底氣味惡う、口を箝默て瞻上げたりき。

「これは甚麼とある？　民部とも覺えぬ。忠言には古へより耳に逆ふ。諫言はもとより不祥の事、めでたいとは好う言はぬものぢや。只其の不祥を不祥として取棄つれば殘るは皆吉祥ぢや。予が行狀に忠長（駿河殿）一伯（越前忠直卿）正則（福島）忠廣（加藤）にも似たるやうの所あるかや？　有らば言うて呉れ。申して呉りやれ。」

一面は正雪に仰せ、一面は水野村上渡邊等に惰と御目を配せ玉へば、彼等は其れと心附きて、や、苦りし面を緩うしぬ、憎さも數の知れざる殿、怖ろしきも數の知れざる殿、慕はしさも數の知れざる殿！　其數の知れざる底を叩きて此殿の本來の意を吐き發させ申さむには、從前の蒐り口は不利なりしぞや。善く攻むる者は九天の上に動く！　九天は無形なり、無形に居して有形を制す、何と戰うてか勝たざらむ、とは我が居常にも言ふことなるを、忘れて危機を踏みける事の愚かさよ、と彼は其の鋒鋩を直地に更めぬ。「御行狀とは如何で申さう。私は只御立場の　と申上けましたる迄のこと。」

「ふむ、其の立場とは？」「殿樣には、只今の御身上を、先づ何樣と御覽ぜられます？」「ン、賴宣は三家の一人、柳營の肉親　」正雪は、故意に此の問答の間を隔きて、御面を瞻つ、「忠長卿、忠輝卿、忠直卿は？」「言ふにも及ばぬ、將軍家御親族。」「其の、駿府、高田、福井の沒收は？」「申す迄も無い、將軍家御思し食に協はせられぬからの事。」「何樣の義かおはしまして、其の、御思し食には協はせられませぬ？」「大逆無道、謀叛、驕傲との趣ぢや。」彼は突如、眉を顰めぬ。「其の、大逆無道とは緊束ませぬ御罪名。驕慢と仰せられまするも、是れ、一事に附きましてはあらぬ御名。只其の御謀叛。右は確に其の御結構ござりましてか？」殿も些しく蹶躓ひ玉へり。「其れは、正確には存ぜぬも、老中の僉議、然樣申すぢや。」と仰せつゝ、「一寸御思案ありて、一ト學、茶を一つ。」正雪は其の御猶豫をも與へ申さず、驀直に讚入り

ぬ。恐れながら其の執政衆の御僉議――道理を盡されましたるものと御覽じまするか?」殿は、御茶を啜らせながら、「兎にも角にも御眼鏡をもて、天下の成敗を料理する程のもの。粗忽の僉議いたすべき筈もない。」「然らば、殿樣にも右の僉議に御同意とござりまする哉?」「應、天下太平の計ひとある程に、同意致した。」「天下太平の御計ひ……?」彼は低く口裏に呟きつゝ、從前息込める脫兎の勢もやゝ挫て、悵然たりき。

(五十五)

彼は力無き唸聲を罷むると與に、對手なき喞言を一座に語れり。「嗟! 如何にも天下太平の御計畫。些少にても世に圭角たる御振舞ある方をば大逆とやらむ、謀叛とやらむ、驕慢とやらむの罪名附せられて、御身上御取潰し、何さま其れが天下太平の御計畫? 民部、何樣の申さう義もおざらぬ。但し唐土の口諺にも申す、飛鳥盡きて良弓隱れ、狡兎死して獵狗煮らる! 其の煮る、隱す方は自ら又た其道理のおはさうも、隱さるゝ、煮らるゝ狗や弓は、いかな無念? 其の心底斟み申せば、晴れたる月も陰りまする。」此の感慨の其機に投れるか、人々の面色は稍搖き初めぬ。殿は何とも御意無かりき、正雪は重ねて其の歎息を續けたり。「是れは殿樣には恐れ。民部たゞ心中に存ずる所を各位方へまで申す。御取捨は存慮の隨意。倩ゝ先蹤を考へ申すに、源平藤橘、四姓の中に源氏ほど猜疑の深い姓はおざらぬ。源右府の蒲殿、判官殿、又た木曾殿御父子における。賴家と實朝、公曉、一條、平賀、安田が流。或は上下相剋し、父子兄弟叔姪相賊して一人として其終を全うした者もおざらぬ。其の血流を相續でか、室町にては御先祖の尊氏、直義、義詮、直冬、基氏の御有樣。東山殿と今出川殿。義植、義澄、義晴の御確執。誠に御一家御親族と申すは名のみにて其の嫉妬偏執。互に我有を奪はれじか、掠れじかと啀む狀態、只是れ餓狗の肉を爭そふにも似たる醜態! それと一緒に申さむは憚りの義ではおざるも、御當家にても淸康樣、廣忠樣御代には、內膳殿(信定)藏人殿(信孝)御勘事あり。又た現には信康樣(岡崎三郎殿)の御不幸、引續いて忠輝樣、忠直樣、忠長樣の御變事。こりや各々には右を什麼と御覽ぜらるゝか? 御女子は扨置き、殿樣、御男子御兄弟樣御十人のうち、萬千代松千代仙千代樣御三方は御早世、殘らせての七人の中、御兄の岡崎樣、高田樣は、右申す、或は御生害、或は御勘氣御身上沒收の御身、又た御兄秀康樣の御嫡にて、加之御二代樣最愛の御姬君勝姬樣御緣附かれた忠直樣、すなはち殿樣第一の御甥なり御姬婿なりに當らせらるゝ越前樣は、同じく右の大逆の謀叛に陷ちさせて御滅亡。忠長樣も御甥ご樣。福島家の滅却は我等申すまでもあらぬ村上どのは其の故主の義。又た殿樣御簾中樣御實家方なる加藤家(熊本)の御取潰しも水野どの渡邊どのは熟う御存知の筈。斯樣に、殿樣、御簾中樣、各位方にも遁れぬ御緣故の諸家方の滅亡御覽じて、各位には何樣の感念の涌されたか? 其れともに、其の大逆、謀叛、驕慢といふ、漠然たる老中衆の御僉議に任しやれて、腹の覺悟、臍の分別も別段にお決きやらぬか? 但しは右に天下の太平お謳歌やるか? 嗟! こりや、兎死すれば狐悲む、其類を失へばなりと申すもおりやるぞ。是れは其類如きにあらぬ當面での御肉親、御血を分けさせたる御兄弟。猛火は既に頭上にかゝるを未だ其の焰烟は御目に入らぬか? 九寸五分の腹切刀は三尺の眼先に迫れるを三寶に御意注かれぬか? 水野どのは又不祥――呪詛とも御言やるか知り申さぬが、某はたゞ右申す是れが怖ぬ先の御杖! 先づ試みに此杖にて殿樣御地位、各位方立場、叩いて御覽

ぜ、其響は昨日の雲出の鯨波、彈音にも反射申さうに？」一句は一句と逼り來りて、宛然快刀腸を抉るが如き辯論に、悚然として毛髮を立つるものあり、慄然として其唇を戰かすもあり、兵庫が面たりに見、親しう耳に聞けりといふ宿驛の雜說、江戸表の風評、當家御謀叛といふことの今更ら我が耳根に囁き、叫喚き、罵叱る如き者あるやうにも感えて、醉るが如く、口を噤みて、只顧彼が面をのみ凝視たりき。

殿は？　と覗へば、これは又た案外なる御氣色なりき、何さま彼が舌頭には御耳を傾けさせたるがやう見ゆるも、さして御色も渝させず、御膝邊に飛び來る蠅を、折節は御團扇もてはたり！　正雪も閑際者なりけり。殿が此の御容態を見るゝ猶ほ見ざる爲して、御前をば背向に、今や再び三人が方へ膝おし向けたり。

（五十六）

一大逆といふは果然甚麼か？　君を弑し、父母を賊し、神明を畏れず、佛陀を敬はず、國の法令を蔑如にする、是れを古へより五逆の罪として無道の惡といふ。忠輝忠直忠長の卿、加藤福島其餘の諸家、公沒となれるもの、御取潰しとなれるは、果いて右等の五逆大惡を犯された歟。御知りやらぬか彼の忠輝卿は元和元年の夏御陣の折り、駿州藤枝にて御旗本の士衆と物喧嘩し、其等が無禮を憤らせて其場に御成敗ありたると、五月六日の道明寺口の合戰に政宗衆に路次を障へられ、捗々しき御功名のおはさなんだが御勘當の意趣といふ。なれど熟ら御聞あれ、彼の御方は大將軍家の御連枝、御官位は從四位上總介、江戸御旗本の士ともあれ申さば御家來同樣のもの、其の士共が無禮を咎めさせ、御手成敗ありたりとて甚麼の御曲事？　結句は御壯年に似合しい御勇武のほどを御褒賞ありても然るべきぢやと我們は思ふ。又道明寺口の合戰といふも殿には大和口の總大將、旗本容體におはします。されば御手配も、一番は水野衆（勝成）二番は本多衆（忠政）三番は下總殿衆（松平忠明）四番は右の政宗衆、殿は五番にて最後におはした。凡そ軍陣の慣例、組々隊々の順序を亂して軍目附、使番を置き、押前に用心せられてさへ兎角は拔駈、忍押、に亂雜とはなり勝てのもの、況て其の大本を締括らるゝ總大將が自身の功名にのみ目を奪れられて、番手を守らず、先駈とおはさば甚麼とあらう？　誰が旗本の采配を見て進退いたさう？　但し是れは時と場合、一樣には申されぬも、此の御軍など、天下の大軍で裸城一つを攻らるゝ際なんどは別して右の約束が肝要ぢや。然れば殿に御脫落はない！　加之も此軍には、殿が進まうとなされたを樣々に故障申して御意の儘にさせ申さんだ輩もあり、旁々ぢやを、其等一應の御穿議もなく現に朝熊（伊勢）に御配流の御身、剰さへ大逆無道、御驕慢とは、此りやそも甚麼たる理不盡ぢや！　其の合戰に後れたが御勘氣なりや、此の御陣に追首一級お取りやれなんだ尾張殿は甚麼？　又た其の尾州と御一所におはした當殿は？」突如として高めたる彼が一調子は、殿が御耳に何とか響きけむ、殿は其の蠅打の身を停めて屹と御眼を凝ゑさせき。

抑や此の御陣に、御心ならぬ後陣におはして、合戰の手に遇はせざりしは一代の御恨事として、今に折々、事物に託ては、御無念の御意あるをば承はれり。其れをば知らでか、但しは故意にか、御座をも憚からぬ素浪人の放言、結句は御恥辱を表露すもの！　御內意の旨趣はあるも今は容赦せず、引立てむか？　但しは御成敗？　と三人の二人は御面を覗て、一人は正雪を睨詰れば、殿は、看る〳〵御面を和柔げさせて、一言の御意だも無し。正雪はと覗れば、此れも鼻をも蠢かさず。平然たる彼正雪は、猶

も其の御揚自在なる舌を弄せり。「……なれど、殿様には御勘當どころかや、年々の御加増、御昇進、從二位の亞相にまでも成り昇らせて、御繁昌思し召すが隨意なるは、何故ぢや？　同是御手配の御法善う守らせられて其節我意の御振舞なきからぢや。されば柳營にも前後紋列の御法はある。其の御法はあるものゝ、御一個は御罰、御一人は御賞。其の賞罰の根本、何處にあるやらむ皆暮れ分解らぬはこりや我們不肖の所以でない、執政衆の盲目ゆゑぢや。否、眞正は依怙ゆゑぢや。愛憎からまゐる贔屓の沙汰ぢや。贔屓の沙汰の可怖しさ、愛憎の依賴まれぬは我們申す迄もない各位にも御存知のもの。恐れながら殿様には、其の以前は權現樣御愛子、駿府御在城の其砌は御威勢旭日の昇るが如く、既に甲府――百萬石の御身代とまで御沙汰あらせたを、元和二の御他界以後は甚麼とならせた？　江戸表の御待遇はすきと變らせて其後は久能御宮御普請をはじめ、五年の御所知替、總ては御無體の難題ばかり！　すりや其の竈に媚び申したさもしい贔屓が手を飜す裏と出て、今は箸の轉んだことまで目拭ら立つる。旱魃する――これも紀州殿御所爲、飢饉がある――それも大納言殿御處作！　御身上御取潰し、御配流、御切腹！　あらゆる惡事と御災厄とは恐れながら御身の周圍を圍繞きる申すぞ。前申した、猛火。九寸五分。其藝と各位が頭上、眼前にひろめき居ると……こりや我們覺悟定へか？　民部、虚妄は得申さぬ、有の儘ぢやは。」彼が辯論や、盡きたるを御覽じて、殿は徐々地に唇を綻させぬ、一心底は先の聽き置くぞ。轉ばぬ先の杖、屠腹刀、品々の進物過分におもふが、目下は不用ぢや。且づ返却す。火事も、地震も、遠流も、配所も、柳營沙汰とあれば予は辭はぬ。天下の靜謐は予の所望ぢや。喃、民部！」

（五十七）

謹穩もなき殿の御諚は、疾風土を捲くの猛勢もて遮り來れる彼が辯論に大頓挫を與へぬ。彼は重來の勇あるも、其の再襲の手段を得ざりき。御座敷に虛しく平伏しつれども、涯際なき睨み競に、たゞ其場の白けに白け亙るのみなるに困じて、御暇を乞ひ奉つりぬ。怎くて少時して、正雪が快々たる下城の姿を見たり。

其夜、更闌け、人定りて後、兵庫が閑居せる龍泉寺の奥の間に、僧俗二人の調語ふあり。俗なる方は低聲喃々、切に說く所あるが如くなれども、僧なる方は、頭を垂れ、息を斂めて、其の思慮を心中に描くものゝ如し。

彼等は什麼謂ぞ？　言ふにも及ばず、俗といふは正雪にして、僧形なるは剃入道の兵庫なり。兵庫、眼は頻りに輝きて今や、大事の對目に迫る如くと見えたり。一時、兵庫、到底も彼の殿は我們が大事の前途を妨げらるゝ茨垣ぢや。大道を履まむとする其の障碍たる茨垣なりや、根を斷て葉を枯らす、こりや是非とても無いではないか？――是非ないと言はるゝは、――扨は其の、彼の殿をか？」兵庫の聲は太く戰慄へぬ。「我們は、眞實、此義に是非ない事ぢやと念ふ。原來暗殺、毒害なんどの武士としての面目にあらぬ事は我們も知る。なれどこりや是非も無い。今日の御座敷のやう、到底が此方がなんどに動搖さるべき人で無い。人で無ければ目上の瘤、又た彼れに越す人は無い。たゞ是非も無い。お決行れさ！」と正雪は扇もて空中を斫る容態をしぬ。其呼吸は極めて暴かりき。愕くべきは此の結構なり。彼は、實に、此の腹心の黨與を指嗾して、其れが大恩の主君の御命を短縮させむとしつるなり。

正雪は實に念なぬ、世に畏憚るべきは今日見參の彼の殿なり。其の心中に思し企立つ事の有りや無しやは知らざるも、兎に角我が大事の爲

に邪魔たるべき者は彼の殿なり。假りに、殿を、我が一胸襟の人として、其の心腹を委ねむか、彼の器量、彼の氣力にては我は只犬骨折るのみの事にして、獲物はいつか傍に奪らるゝ癡呆なる目に遇ふべきは方今より推知たり。加之其の大事成就の日に、我はなほ功狗としての一嚢の肉の分配に與かるべき歟、否、猶言はゞ、我が此の首領すら滿足に保たるべきか？　越王の大夫種、源右府の判官、先蹤は和漢に歴々たるをや。なれど其は猶事遠し、若しそれ然なくて、實に今日の御沙汰の如く、只管幕府への忠勤、他事なしとあらば其れぞ禍害は目前なり。[illegible]權の事を申て彼の人々の耳朶に入れつる、擯斥られての江戸表差下しは火を賭るよりも明瞭ならむ、さう言ふ此身も、誅戮か族滅の要せらるる心地するぞや！　是併は正雪が此時に抱る疑の人、其心の暗闇本意、胸裏に往來の有りや無しや、寛無目に見て指すの術、自身秦鏡の明をもて許しもの其彼の殿にのみ許顯れにけり。面を接すること半日、言を交ふること幾干ぞ、其れにても竟に甚麼の看破せるところ有りけりき。彼れは斯る人、許に罪は申さむは疑惑の眼、一行りて見た、これを偏すに犯と手を下さむは策の得ざるもの！　若かず、彼を

敵に穢り、毒を制せむには!!　と彼は可怖しくも其肚を決めつるなり。

彼が爲の毒となり、糧となれる兵庫が分別は今甚麼とかある？　彼が殿を恨める時、其友を憑める時にも有繫に此の大惡の決行には舌を震ひき。本心の善は猶豫なく彼に首掉を掉らせぬ。「それや叶らぬ。無道ぢや。假初にも我が主と名のつく仁……！」「主！」と正雪は氣色を變へたり。「…御身は王室の忠臣、官軍の大將、賊徒追討をもて任とする仁では無き歟。既や心には江戸幕府、それに絆がる一家一門、紀州とも尾張とも水戸ともあれ、叛賊の徒黨、古への尊氏が族類ともお見やる人では無き歟。今の『主』とは誰を指す！一言はるれば其樣なもの……。なれど大恩の殿樣……我等が手して。一討たれぬとか？　御刀を賜はる官軍の大將、賊徒の首が斬られぬか？　斬られねばお主も賊ぢやが！」「それは無禮ぢや。戰陣の上なりや兎も角も……方今の時節……」彼は愈首垂れて、氣息死せむとするが如し。

（五十八）

死せむとする氣息、燃えむとする怒眼、此の兩間に介まれたる一穗の孤燈は兩者の姿勢を壁上に畫きて、首山に對する案山の如き黑影を映せり。

案山と首垂れたる兵庫は、呼吸の迫れる聲聲を微に漏らして、「貴老、左思右考が無體ぢやよ。近世、坂崎出羽が家老が其主を討ッて出いた時、世人は甚麼と言うたか。當人は勿論、主を討てと内意した執政衆をも人で非いやうに罵うたで無いか。況て我們の、堂々たる王師の御魁をもせうずる士が……」「能らぬか？不忠とか！」引取りたる正雪の聲色は風雨の如し、「…えゝい、天に二日無し、國に二王無し、普天の下、率士の濱、論ふも陳いが、不忠とは、一天萬乘の君に背き奉つる——其れが不忠！　其の君を窘苦むる幕府の一類を誅伐するに不義も不忠も甚麼が有らうか。王事盬いこと無し。昔しの義朝は、現在の父をすら斬つるは！」一呀！　其父を斬つるが忠臣か？」「はゝはゝゝ。人の言ふ、大義親を滅するぢや。甚麼の怪しいこと。阪崎が家來の主を討つと、御身が殿を亡うするとは道理が違ふ。」「なンの違はう、彼も我も家子ぢや。」「やさ、其の家子、——主が扶持の恩といふ、迷の甚ぢや。二千年一系無窮の御恩と、五年か十年扶持の恩と…扶持の恩とて、恩では無いか？」正雪は冷笑せり。「其恩、それ程に念ふほどなりや先づ其身

の根本を探らねい。御身を現世に産み出いて下さされたは父母の恩。其の両親の一人といふ父ごはいづや？ 其代にも随はず、其時にも悪しず、現に朝廷の御聖の下に立つ、三代の臣——其方ではおはさぬか。彼の者は王室の忠臣、藤氏の流裔、其血を受け給はれた御身が武門に頼宜に畏屈を持つ。これ程への御不忠のみならず、父ごに対しても大不孝！ 不孝の子、不忠の臣、——落つる先はお前は今の間ぞやぞや。日来の意地は何様傷されたか？」語句を徐かに、呼吸を整へず、滂沱流水の如くなる間に、断續鋭く我が肝膽を射る巨眼の光は、鷲鳶も為に鑽貫されやせむずると、あはれ兵庫は堪らぬ額を歪へたりき。可憐、可憐、彼れ兵庫は、前心に思考ひ、後慮に攻案ふるも、彼の殿をばいかで殺手して——忠といひ義と言むも、失ひ奉つることのなるべきかと思ひ悩みぬ。憎こき師上は申すも畏懼。たゞ父は彼が言ふごとく朝廷の公卿たり。其の産みの恩は深し、子としての孝は忘失るにあらず、なれども其父が果然衛る思し食立あるべきか、彼は生れて廿五年、未だ一回の御顔をすら見ず、又彼とても甲某の卿、乙某の君に、面りの内命蒙りたりと言ふにゝ非ず。畢竟朝廷の賊臣として彼の殿を討ち奉つるが忠か？ 其れには引反へ、我が殿が我への御寵愛、想へば滴出し皆ならぬぞや。産みたるは父なれども、我を人に為されしは誰か！ 先程の誠事と言へるも、我が當の殿と見るは大學のみ。大學は討つべし、我を間者の御作のと迷ひたる奴！ 彼の首見むは兵庫命に替てもと望むなれども、其を寵愛せしのみの殿——殿をばいかで。——其魂を信受れ賜ひつる御根こそ確とは申さめ、御命までとは、寧奈！ 加之で、其の譴責といへるさへ、我の耳に眞と聴けるにも非ざるものを。天にも地にも我を懲めと言ふ彼が言とて、怨る大事を、什麼むさとは遂行せむ。然る事の又た能るべき義理か！ 彼は實に、其の千心萬考の思案に昏れて、彼の狭しき額をのみ歴へたり、一如何も能らぬかな？ 能らぬとあれば是非も無いぢやが、後悔は又眼前ぢや。豫ても解ふ血祭、昨日其の戦端も啓いつるが……」兵庫は聞くより、僅に其色を新たにせり。「や、其事、それ先づ聞かう。昨日の働の兵庫が影武者はあれや誰人ぢや？」「はゝ、其れは其の然る者ぢや。是れは世にも秘密のこと。只正宗が為る事は全般彼れ程の手際、天下の事謀るとして行ふとして一個も随意ならぬといふは無い。お主も何頼懸れて、什麼ぢやな、今の大事、お洩行る気は無いか？」兵庫は復も口を噤みき。時に鐘声五更を告げて、金星東の天に白し。

（五十九）

暴雨といふまでにはあらざるも、菁祭八朔の昨日たるを見する雨の気色は、午過るほどより空に知られぬ。一時の南風は反りて北風となれる、寒温の激変にや撃れたまへる、大納言殿は今暁方より風邪の御心地とてうち伏し玉ふ。何々然ばかりの事にはおはさぬも、御旅中と申し、別しては内外の事変多き折柄なり、呉々も御大切とて、醫師は御療治に油断なし。今日は或る向の事、然る節々へも申し聞て或る様にせむなどの御計略あり、強ても御表へ御出と仰するを、水野を初め、重職の者ども禁めまゐらせて御寝所にての物頭以上會合とは觸られぬ。折節、江戸御館よりの早打の飛脚参着す、持て参れるは諸家老水野對馬より御直宛の書簡なりき。

如何なる大事をか認めたりけむ、御座敷の密議は此時より愈凝りて、空なる雨雲にも似たりき、前地との風をも通さず、御襖は礑と閉め切られて、颯と降り来る雨脚の音さへ此所には微かなり。

は、殿の御氣色の事も無くておはしますに、安堵の胸をば稍撫でつれども、猶ほ大學が血眼なるに心もいとゞ心ならで、四邊に眼を配りつ畏まる。

「騷ぐな。只今雨戸の吹放たれつるやうの響音したで大學を召したのぢや。物も無い。大學、其方は其邊一遍巡視て……な、やがて言上せ。表方へは知らせな。衆皆も意得い。」

夢幻の如く、謎語の如き御沙汰なるも、事有りし際にはいつも箇樣の御意あるが此殿の御極なり、又其の御意に隨ふ時は、何時も事好く納りて、後の過失無しといふも從前の例なれば、人々は只靜まりて御前に控へぬ。風さへも時に加はりたればや、雨戸にあたる雨の音、煎豆の鍋に爆ぬるが如し。

紙燭して只一個出でたる大學、少時て濡鼠の如くとなりて復歸りぬ。「大儀。……ぢや然う？」と御首を傾け玉へば、「……でござりまする。」と彼は其意を見せ奉つりき。「むゝ。諸士次間へ。」

和尚と沙彌が問答めきたる應對の裏に、諸士は皆御次へと退出れば、御寢所の中には、膝を交へたる君臣のみ。「果然て、彼の拔穴か？」「御推量通り彼の拔穴……現に足痕も印いてござりまする。就には此城の案内、委細うも熟知たる奴、何とも心の緩めませぬ。御許可とござりませうなりや其の足痕を蹤跡へ、人知れず討果すか、搦め捕らうとも存じまするが……」

彼の血色はいと急きて、可矣とも仰せば直地此の御座よりとも言ふ氣色。殿は緘りて御思案の色。「むゝ、いや……明日に爲い。」「明日とはござりまするも、今晩の大雨。直下蹤を狙けませいでは其の足痕も？　出口は例のあの森にござりまする、落葉の泥濘を流はれまいては……」「いや、……然程にもあるまいよ。曲者をば良看認めた。」「え！　御見識にござりまするか。」「而て傴僂樣の奴？」「むゝ。先づ、傴形の奴。」「や。傴形？　其の年齢は？」「されば。……廿五六か喃。」「什麼なる面體？」「爾樣おや。色白く、眼涼しく、脊は尋常より些し偉大か。」大學は、御面を直地と注視て、仰せの容貌を口裏に反復すこと一遍、俱に心許なき眉を顰めて、「御沙汰のやうでは、……些と肖た者も有る樣にござりまするが。」殿も徐かに頷かせて、「其れぢやでの、明日でも可いと……。」大學は覺えず叫べり。「扨は兵庫？」殿は、叱！と、傍邊を屹と疾顧せて、「狼狽者！　誰が彼者と申した。大事の義を！　予は不德ぢやが、未だ家來に寢首狙はるゝほどの卑怯で無い。叱咤るな！」何時になき御叱斥に、大學ははッと氣著きて、遽に其口をば噤みたれども、其の心中の驚愕と忿怒と疑惑との爲に目も昏みて、身も戰慄と顫へたりき。「先づ穩便にせい。箇樣の時は遽つるな。予に分別がある」其の御分別とは果して甚麼？　御糾問か、御手討か、將又か、と他人の上とも思はれざる大學は一向に呼吸を呑みたり。

（六十一）

彼の曲者、果然兵庫なるべき歟、將た否らざるべき歟は、當面たる第一の疑問なり。良確かには御覽じつれども、猶ほ夜目遠目なる、加之咄嗟の、急遽の際なり。擧止、恰好、面體まで、姑且く其者とは假定るも、扨て其の兵庫が、何故に今、恁くまでの大惡事を爲出でむとは企圖たる？　或は、此日の、彼に屈辱せむとの衆議を漏聞て、恐縮さの餘りに發狂やしつる？　なれども彼の談合の席には、もとより外樣等の士を交へず、水野村上を初めとして皆是れ譜代、重職の者、廿一枚の誓紙に權現（熊野）の荒靈を驚かして、牛王の寶印に肉身の血を濺げる者！　其主を彼に見換へて彼の密議を漏泄すなんどの不覺者あるべしとも覺えぬに。猶言はゞ、怪異

る者は、躬に被ひたる筵薦を抛棄て、會釋もせで、座敷に入る。入るが否や、内なる人聲は闃然に俄頃に鎮まて、龕燈といふ提灯の火、一時に燦と明うなりしが、其火も撲地と倏忽滅えて、今見たる人の面も再び舊の黒漫々裏に沒せられぬ。爾く、此の明暗一刹那の瞬間なれども、這裏に瞥見られたる人々の面は、確に七八個、十個もやあるらむ、其の床間を背後にして正面に座を占たるは正雪、右なるは金井、鵜野、左なるは松田、岡村、其中にて今來れる三郎といふ壯佼は、僧形にして衣服は黒色の忍打裝、其の面體の牧野兵庫と瓜二つとは未可のこと、其者を其儘に見るやうなるは――扨は彼の曲者か？

恁く奇怪なる大勢を籠めたる座敷は、又奇怪なる沈默の裏に閉鎖されて、纖塵一片だも搖かぬ氣勢、闃然たる戸外には、風雨の愈暴れに暴るゝのみ。但見る處に、低めたる壯重しき聲は座上に起りぬ、是れ疑ひもなき正雪なり。「熊谷、首尾は？」扨は此の三郎とは、正雪が股肱の一人、美男の聲世に高き熊谷三郎兵衞其者か？「先づ……」「太刀は撃けたか？」彼は遽かに舌顫ひせる氣色なり。「何として、太刀なんど？」此方は其言を首肯くごとし。「むゝ、然もあらう。彼の殿には貫、我們ですら太刀打は覺束ない。況して其方が役僧、憖な所爲して爲損ぜうより無事に歸來たは手柄ぢや。が、面は見せたか？」「如何にも。面は屹と見合せて、曲者ツ？　との詞を聞いて……。」「逃げ戻ッたか。」と言ふ聲は、鵜野に似たり。其主は更に冷笑の氣を見せて、「……什麼物の恐怖しからうと言はゞ宿鳥を鎖すでは無いか。忍び寄て只一撃！　自家ならば羽搏きもさせ申さぬを。お主、忍術に未だ鈍いな。」「えゝ。」と熊谷は目を瞪れる容、「自個とても其の一撃と思はいでかや。大事の手柄、殿の御首をと目指いたも、御威風は扨て可怖しいもの、自然と身は竦む、脚は震へる、其うちに音でも立てたか、疊廊の三間といふ所で不圖御眼覺されて、枕刀を執るより早く、「曲者ツ!!　其の御聲の恐ろしさ、雷とも石火矢とも、又其の御眼は、電光とも光怪とも、既に腰の抜けうとしたを踏耐へて、一散に馳せ戻ッて來た。今想うても此胸の跳悸るほどなを、お主が陰辨慶の巨燵水練、叶らば手柄ぢや、遣てお見やれ。先生すらも彼樣仰せらるゝ程のものを。」と其胸を拍つなるべし、響音は一打せり。金井らしき聲は其を慰めて、「三郎衞の言はるゝ悉皆道理ぢや。其の古へ入鹿の大臣誅伐の時、討手の令旨蒙むられた朝廷を守護の勇士ですらも、一睨みの威に懾伏れて覺えず身體の畏縮んだといふ。當時は加之も大勢、只今は唯の一人、彼方は官人、此方は地下、況て入鹿と彼の殿との威風と武勇は日を同じうして語るべうもあらぬ天地の相違ぢや。三郎衞が今夜の出來は先生も御稱美の最上のもの。但し先生の只今仰せの、殿との太刀打心許ない？　とかあッたるは、ありや御謙下ぢや。憚りながら紀伊國殿とて先生の御太刀先に御向やッたりや、はは其れは、長老が前の沙彌同然ぢや。御一拳にも足るまい。それは半兵衞政教が保證申す。扨て右等の枝葉は擱きて、此より以後の御分別は？」彼が其師に問ふなる如き其聲の斷るゝと與に、一座は再び寂として呼吸だに無し、良有りて、正雪が聲、其聲は考慮に深く沈めり。

「臨機……たゞ臨機ぢやな?!　但し彼の殿が、正雪を召さるゝか、兵庫を召さるゝか、いづれが先ぢやか？　倘し兵庫が先ならば直地發途て。某は神宮領、半兵衞は安濃津領、二方に別れて紀州の息のかゝらぬ地へ、疾う退から、又某が先ならば各位は緩々遊興べ、心配は無い。たゞ其の見星は僻たるな。油斷もあるまいが、大敵ぢやぞ。」

（六十三）

夜も明くれば雨風も寢みぬ、うち晴れたる日は高く昇りて巳刻も過ぎ午刻には近づけども、城内よりは、民部召すとも、正雪まゐれとも言ひ來らず。兵庫はと搜索すれば、これも事無く寓に在りといふ。鵜野松田らは、それとは無しに師が吩咐なる出立の用意して、左右次第と手藥煉をば引きたるも、餘りに物の穩便なるに拍子拔けして、此日は此寺の所化寺男どもが、昨日の暴風雨に倒れたる塀垣を起し、芋頭を踏むなんどの手傳ひしつ、扨て暮しぬ。

此際、獨り肝膽を碎けるは正雪なりき。油斷のならぬ敵の軍配、抑甚麼とかあらむ、何かは措きて今日は必らず兵庫方への沙汰無くてはと思へるに、風の吹けるも雨の降れるも虛知らぬ顏なるが心憎しや。城中の模樣は如何？從來ならば彼の隧道より忍び行きて偵察はむも容易きなれど、今ははや其事も危殆し。兵庫に會ひて物の樣を問はむかなれども、亦た彼が未だ死地に陷らざるに先ちて右左を言はむは、智慧無き兒童に智慧を附くるといふ俚諺にも似て、或は大事を失錯つの根本たるべし、臨機も其の機先を發見さでは神妙の算も得難たきに、我たゞ彼が爲す隨意を恁の如くにして死視をらば、或は爲に一着を先んぜられむか？ 要するに、昨夜の手段たる、九華の樞門に鍼するものなり、死活の決を此の一鍼もて斷ずるものなり、兵庫にして斃れずんば隨便殿を蹉さむものなり。兵庫の我言を肯かざるも憎くけれども、然りとては又殿が、あれ程に知れ切たる底意を蔵匿して、天下の御爲の、柳營の思し食すが儘のなんど、表邊の、看透ける、贋忠義の垣を築き、可惜ら我が口に風を引かされしこそ面憎くけれ。可矣々々何程も正雪に肝をお煎らせあれ、其代には、今、脫け出づるほどの目に物を見せ申さむ。御待ちやれ、殿！

思案に彼は此夜を寢ねざりき。然りともあれ明日は、といふ其の一日目も亦た沙汰の無し。此日、たゞ耳立てる風說といふは、殿の御氣色今に捗々しうましまさず、これに依て今回の御狩は御延引、當冬か、來春、重ねて――といふなりける。げにも然あるべし、鹿狩の延引とは道理のこと、但し箇樣の紛際こそ目下の我們には可怖しきもの、人脚の如何に動くか、動かぬか、又其が動かば西か、東か、疾う覘て來よ。とて出だし遣りたる鵜野松田等がまだ歸りも來ぬに、旅館の門前鞍馬にはかに躁がしくて、城内よりの御使は來れり。

使者は彼の渡邊大學なり。金井半兵衞先づ出でゝ其旨を問へば、大納言殿御所勞によりて明日にもか和歌山へ御歸駕あるべし、就ては今宵御名殘の御茶あるべきなり、民部どのにも其の一客として請待との御沙汰なれば異議なき御請は某にも望むところ、此旨御取次といふにあり。先づは忝けなき御意、折ふし民部所勞には候へども御名殘とござ候はむには力めても祗候候ふべし、但し今は發熱の氣味にて休息候ふ、折返して御禮の使者まゐらせむ時、全體は貴方まで御意得申さむとは、半兵衞が卽座の返答なり。此の不思議なる取次の口狀を、不思議ともせぬ不思議の使者は、さらば後刻との詞を殘して歸り行きぬ。使者の役目に外れたる其の不思議の擧動は、自ら今宵の不思議を意味せるには非ざる歟、と不思議を怖れたる不思議の評定は、正雪が居間に區々なりき。斯る處へ鵜野、松田は歸來りぬ、其の密告に據れば、先隊の駄馬は何さま當地より西方へ、紀州街道を大石、粥見とさして押す氣なり、又白子よりも先發の人數の引返すか、參宮の街道を當所へ來る氣勢あり。其驛馬次の用意にか、城下の入口、又た中の町の驛役場の前後には人夫數多あり、役人らしきものも見ゆといふ。其の人夫ら

しきが果然人夫か？ 役人らしきが馬衣を被ふものか？ 何さま是れも或は其の不思議の手品といふもの丶一つには有らぬ歟と、思ひ離れたる眉を正雪も顰せぬ。なれど、其の不思議といふは！ と彼は直地に想ひ續せり。單是れ局面の變れるなり、局面の變るといふも、只急遽に御發駕といふのみなり、人數の來る、人夫の躁ぐ、もとより有りぬべき理のもの、此を不思議とは抑も甚麼をか言ふ？ 况んやあの使者、若葉の使者、役目の匆忽何か有らむ、想ふに今夜の御茶といふ、或は是れ前に剣せる、殿の思し召返させて、正雪が胸臆を再び聞し食さむとの吉祥の會ならざる歟、されば故らに夜陰といふを撰ばれたる歟、其れも知れぬを憶せるが如きは我ながら女々し。往哉、往哉、彼の驪龍の頷下の珠、或は今宵の天目の裏よりして出でなむを！ 「半兵衛、大儀なや、民部は今宵參上と旨、大學許まで通じに來りやれ。」

金井が出で去りたる後、多時しして、豫て龍泉寺下に狙け置きたる岡村は遽たゞしう來れり「先生、今夜兵庫も御召になりまいたぞ！」

（六十四）

根に有つ御謀叛を甚麼が所以にか我には祕し隱しにし玉ふ御心は恨めしきも、然りとて正雪が俟ふ如くに、我は官軍の大將、殿は總帥の一門、漢賊の兩立せざる其刀を御胸に剣てて、御命を短縮むなどゝは兵庫が懸けても想はざる所なり。其の肚裏に竄入りて、諦く其の胸臆を捜索れば、彼は實に如是く思念るなり。抑殿が此の御謀叛たる、頭初より其れが御思し食の在る所には非ずして、たゞ彼の、與量の、嫉妬の、猜疑に深き、我慢に募れる、幕府の城代酒井が同臭味と看做すべき、江戸老中が激成に因由るものなり。往古より謀叛といひ、反逆といふ、天慶の將門純友、平治の信頼義朝、近き世の三好松永明智が黨にいたるまで、皆是れ利の爲に非されば、慾の爲にす、祇我が殿は否らず、我が殿は仁義の君なり。忠誠を旨として、苟も恥辱に遠ざからむことを念とし玉ふ、只其の事の爰に及へるは、眞個御據ころなき所由にして、言はゞ我が頭に蒼く蠅を拂はむとし玉ふものなり。這の打蕪くる刃を奪ひて其讐を斃さむとし玉ふものなり。かゝれば我が殿に御罪は無し。罪は全然其の蠅たり寇たる江戸老中にあり。其の老中が、憎き耳、無情き目に、凶器を見せ、警音を聞かせむは、同じ憂目に遇ふ我が一代の所望、君辱めらるれば臣死する紀州武士が意地。百萬石の御違約、和歌山の御移封、粮米の徵發、諸家諸司への內旨、我が疚からぬ肚を穿鑿て、殿の御胸に釘を撃ちたる彼等への返報！ 其の返報を朝命のあるものに混淆して、王師を關東にさし下す……其れは又た或る權謀の一つとしては論ふべきも、正雪が言ふ如き玉石共に燬く、殿が御上をも其の賊臣の一個といふに至りては否なり。父は兎もあれ、我は紀伊國の者、紀伊國に成長りて、紀伊國の殿に仕へ、其の御恩に憑りて、其祿を食めり。されば官軍の一將として日月の御旗の前に立たむよりも、願くは紀伊國の一騎として、皆白の旗の下に冑の緒を締めむ。否、倘し彼が言ふ如くに、自然は官軍、我が紀州に下向との運にも遭はゞ、我は寧ろ賊醜の一人として殿と一所に此首を獄門の木にも梟けられむ、生死は只君命の一つ。進退は只仰せの儘！ たゞ翼望ふところは、殿の思し食立を啻に公儀のものとして、正雪が申し勸むる旨趣に就き、古への新田が如くにして、更に御本意あらむ事なり。彼は楠の裔とは稱へど、其の實否を我は知らず、此は義貞の流として世に紛れもおはさぬをや。縦し、其の有無は姑く擱くも、彼も如法き剛健者なり、彼と殿と一緒にならば、建武の再興、覩るところ難うもあらぬをや。

其れにつけても惜きは大學なり、邪魔なるは素奴なり、殿の御前迄をも或は過錯せ申すべきは彼奴なり。彼奴、他を安濃津の細作といふ。自己が心に引當てゝ人は物言ふものとすれば、奴め、或は江戸の間者か？　道中の風聞も、諸國の雜說も、江戸の取沙汰も、或は彼奴の肚裏より出づる綾謀には非さる歟。正雪は彼夜はじめて我を讒せる惡くには言へるも、殿が全般の御仕向を想見ば、奴め、兼てより我を誣て、我を疎んじ、我を遠斥け、我を御傍にさし置かせ玉はざるやう殿に勸めまゐらせたるものならむ。されぱこそ御饗待御延引、明日か明後日に御歸駕あるべしとの今日にさへ、我には何も、物の一つの御沙汰も無し。彼邊はかくて有らむも、日來は隔心なく申し交せる水野、村上、彼らさへ素奴が讒口に中てられけるかや。頼憑れぬは人の情、あの御智惠の殿さへも恁くあるを想へば、自餘の太郎作、彦右衛門輩の然あらむをば深う論ふにも足らぬかや。

歎息つくづく、緣に出づれば、暮れ方の空に星一つ見えて、四日の月影、何をおもひに羸瘦れけむ、心細き光の線を幽かに引きぬ。露も涙も讀るゝは此ごろなり、軒にすがゝく笹蟹の蜘のふるまひ、待つといふ今の身にもあらぬを

と眺むる時、――其れか、それか、かねて知るしも！　其の驗しか？　殿の御使は端なく來れり。是れ、今宵御名殘の御茶賜はるべしとの御沙汰のものなりき。驚喜交臻れる兵庫は、御案内の時刻には些し早きも、疾く參りて懷かしき御左右の樣を、と慌忙しく衣服を改め、供を急がし、立出でむとする玄關の鼻に、「率爾ながら御手前樣、牧野殿？」看れば、立派の武士、加之一癖ある面魂！　「いかにも兵庫。貴所は何方より？」「我們は金井半兵衛といふ……。」「呀、金井どの？」金井が名は、兵庫も豫て正雪より熟聞ところなり。其の半兵衛が急用とも見ゆる口狀の振。此方は其胸を先づ轟かしぬ。

（六十五）

倉卒ながらに主客の座、定まりぬ、兵庫は先づ其の來意を問はむとせり、金井は其に先んじて、「御家來はいづれも腹心の衆。然りながら些と大事とおざるが……？」扨はと思ふ兵庫は眼を睨廻して座邊を視れば、茶の給仕に出でたる近侍らは皆其影を次室に潛めぬ。「大事とは何事おざる？」半兵衛は猶ほ餌を竊む鳥の如くに四傍を顧眄て、「御身樣は今夜御登城な？」「いかにも只今出仕の端。」「さらば御茶の？」回應をするも待遠しと彼は只首肯ぬ。半兵衛は突如に其眉を顰せたり。「それは餘りの御大膽？　萬一と其師の正雪も同じく只今登城の際に、」と言ふ意味の此方には解み得ざりき。甚麼ぢや？　金井殿。」意不意る狀態を、「甚麼とは？」と反問しぬ。「解し得申さぬ。」「御隱しあるな。」と金井は無情く苦笑ひせり。「いや實に我們甚麼も存ぜぬ。但し兵庫身に讒人のあるは存知ぢや。其奴また御前を左右言で捺めたか。兎角は我們身に關る義とあらば告うて下され、覆藏なう……。」恁く乞はれても彼方は猶ほ躊躇へる面色、更に鞠問の語勢を取りて、「然らば、一昨日の夜陰の事、御存知ないとか？」「夜陰とは？」「御身が御寢所へ忍ばれた事？」客は聲を潛むるを、主は飜りて大いに叫べり。「我們が御寢間へ？　し――し――忍び申したと?!」看る／＼面色烈火の如くに、口は吃り息は喘ぎて、眼中も血迸り來れる、兵庫を柔し懸る如くに、詰寄せて、「……忍んで我們何事を致した？　さ、甚麼事を爲申した？」「其れを我等が何で知らう。只今朝の風說には……。」「風說が甚麼と申した？」「殿の御首を狙はれたを、殿が疾く御目醒で、御聲を懸させられたに喫驚いて、逼失られた……。」「えい

其は誰が？―御身様が！―此の兵庫が？―と餘りの思ひ懸なさに、彼は急迫たる氣力も脫て、只顧に惘れに呆れぬ。其面を右視左覰て「兵庫殿、先づ御心を鎭めておはせ。右につき半兵衛は使者に參つた。抑や其の風說を聞かれてより師匠心痛は大方のものでおざらぬぞ。兵庫に限つては決して然る兇行せらるべき仁で無い、其れは我が確實に見屆けた、然るをかゝる風說は眞個に以て心外の至極、察する處御前間近に侍る曲者ありて兵庫身上危殆めむとする結構か？ 我們ははや彼の殿に用は無い、今宵の御茶も、所勞ではあり、有り樣御辭退申さむが勝手なれども、只朋友の兵庫、有樣の横難に罹られたを看過すで無い、依て登城して實否を諦白め、其の寃罪たるを發見さば身を捨てゝも證明を立てう。但し人心は旦に夕を測られぬもの、兵庫實に然る振舞したりとあらば、御沙汰を待たで切腹させい、某介錯と思ふなれど、其暇も有るまい、半兵衛其方代官に爲い。又若し兵庫彌以ての無實とあらば、今夜は强勸て登城さすな、一埒は我に御託せありて安心してござなされと申傳へよ。事に寄らば組手をも伏せ、不意に起つて有無もなき理不盡の擧動もあるべきに。――と箇樣申して去れましたは。されば委細の事情は存ぜず、たゞ目下のところ、御師匠忠告にお任せありて今宵は御辭退の事、御尤も歟。無禮ながら只今の御口上にて寃罪との御義は某とても見上げ申す。只此上は御身が御大切。逸まりての御後悔は臍を噬れても其詮はおりやりますまい。」

彼は諄々として師命を告けぬ。稍其心緒の沈着たる兵庫は、其の面色を覰れば、誠意？）は溢れたり、其の言ふ處を聽けば、道理は貫ぬけり、只其の事實、其れが奈何は知るべからざるも、斯う突忽なる御歸館、其れにつけての思ひも懸けぬ御茶！ 熟慮へば、我は是れ今や御處刑にも遇ひぬべき謹愼の身分なり、其の謹愼の臣下へ御遊醼の御相伴。想へば此れには所由なくてやは！ 辭哉、辭哉、彼が言ふ隨につきて、今宵の御茶は御謝絕の使者、進らせむ哉！ とは想ふも亦、今宵參らずば、臑に瘡有つからにこそと大學めに譏せられむ、殿も亦果して然か御覽じ玉はなむ、正雪が證明といふも此方に反證のあるに非ず、彼が辯口も猜疑の耳には駑馬の嘶鳴に均しかるべし。さらば今宵參向ざらむは、結句は寇に刃を藉すもの歟？ 淺瀨を得むとして深淵を履むものには非ざる歟？ 思ひ難ねたる彼は、其の烈火の色もいつか褪去て、面上は蒼白く、脣邊は戰けり。

（六十六）

一暴風過ぎての後は、暖國といふ南伊勢も秋意の颼蕭たるものありて、海の音、松の響も自然平ならず、肌膚を摩づる夜寒の手は重幃の裏にも潛り入りて、淺猿しきまで朧朧しかりし綿入の衣も、肩に重きを感えぬまでになりつ。桐火桶に御手を翳させ、竹製の風流なる三脚に長燈心末尾ながら垂れたるを斜向にして、御物語のいと打解けて見え玉ふは紀伊殿なり。御前には正雪只一個、他には侍坐の士もなし。扨は御茶も畢み、懷石も了りて、今や御餘談の折と見ゆ。「民部、喃、この程は、面白き風景談を予に話て聞かせつる。然りながら那麼樣な話說は、風雅の志無きものにむざといたしては聞かせぬものぢや。山には谷神あり水には潭靈あり、其の響音が不圖餘所に漏れたりや、俗人の耳を驚かいて、山靈水異の迷惑にもならうかや。喃、其れ故今宵は對向ぢや。遠慮いたすな。」驚くべき御諚！ 自然我が機先を制せられたる如くに感えたる正雪は、從前の舌も畏縮みて礑と御返辭に差塞へぬ、殿は微笑せて、「遠慮いたすな。但し其の、風景に託へての談話なんどは未だ馴染も淺い時節。慿う入魂の以上、殊に他

を交へざる今宵の如きは、然、迂遠な手段も要らぬ。打明て申せ。其方、十分の肚裏が聞きたい。」「は。」彼が猶ほ動かぬを、殿は再び笑はせて、「はゝ、詩歌の達者も題を得いでは詠吟れぬとやら。さらば予が題の出さう、其れについての意見を申せ。此程も其方が申した、一門には忠輝、忠直、忠長など、又た他門には其の福島、加藤、蒲生を初め、御取潰しの大小名は數も算へぬほどである。特には當將軍家へ三代家光公の御代知らせてから格別に御沙汰の嚴しいやうぢや。右は其方の見る所、柳營御捌きが御道理か？ 但しは御非道か？ 御非道ともあれ箇樣なうては天下統一あるまじきか？ 御政道も行はれぬか？ 其れにつきて國々の大小名は甚麼とある？ 恨むか？ 懾伏るか？ 其身上持耐ふるのみを御恩として忝けなく存ずるか？ 又た其れにも、譜代、外樣、國主、城主、其の際の高下と、家柄の殊別なるによつて氣分の差違ふか？ 予は我が封疆の内の義は仔細に知るも、其外には目の達かぬ。是れは詳悉う其方の指南をうけたいぢや。」

御底意を其れと知ればこそ、此の御問訊も深遠きやうには思へ、然もなうては此殿には不似合の問條、又實に悉樣の事情、知らせ玉はずとあらむには呆れたる御虛氣。凡そは我が門下に入る程の士、中材といふも一年にして斯程の事實は說き諭らむべし、況んや高足の材におけるをや。世に聞えたる紀伊國殿として、又た我正雪としてかゝる問答は不足かな、と彼は想ひぬ。なれど又た、悉る既知たる事も未知として、猶其奧を問ひ玉ふが名君か。否、或は、人に物問はむとならば先づ我が知れる事を問へとある廷尉が祕胸を得玉へるか。さらば或は此の御問には繼りて注意すべきもの歟？ 否、此の御問の正雪が心を牽試たまふべきものなるは其の御詞の末に含れたり。予は封疆の内をば知るも、其他には目の達かずとある。其餘に眼光の達かぬ殿、封疆の内なる人が、好くも〱我が島原の祕事を知らせつる！ 其人が、はゝ、百も二百も甚麼事も御承知ある其の老狼が！！ 但し我は、目下其の穽にも陷るべし。山川の末の豫設ならぬも身を棄てゝこそ浮む瀨もあれ。念へば驪龍領下の珠！ 其珠に今我が指頭の觸れむとすなるをや。彼の調子はいと肚重しかりき。「是れは大事の御下問。いかにも右につきては些と講究の愚案――仕つりましたること無いにはおざらぬも微賤の者の憚るべき義……。」「はゝ、甚麼ぢや、其方。前日は那程放言て、今日は羞噬むか。予の頭に火粉の被ぶる、眼前に屠腹の小刀がある！ それ程に注意て與りやれた其方が、右ほどの指南を辭ふ。予は不合斷ぢや。」又一つ先を越されぬ。

（六十七）

「いや御辭退申上ぐる――甚麼と然樣の義がございませうか。さらば私年來の記憶と、愚存の盡とを只當座の御談話までに申上げまする。ゆめ御指南など……」彼は猶ほ只管謙下して、漸くに扇を膝に執り上げぬ。殿は御火桶の火筋に雙掌を撑へさせて、頷き〱、御餘念もあらぬ體。「一劈頭、何よりをか？ それ〱御問につきて諸家滅亡の概略より申上げうず。」彼は首を傾けて數回其指を屈伸めしが、「御當家樣御代知ろし召したる最初は、申す迄もなく慶長五年の關ケ原御一戰にございまする。なれど此れは尚だ征夷府の宣旨を仰せ蒙られざる以前、續いて同じき八年に大將軍家の宣下ござりましたるも猶ほ此時は大阪と申すものゝござりまする。申すも恐懼にはござりまするが、故老の談には、當時天下の者、御當家樣は將軍家、大阪は關白家と箇樣申して、自然海內に二人の執政者ある如くにも申し做したと承はります。されば元和元年までは御一統の御代、蔟

府御治世とも申し難き歟、勿論それ迄とも、慶長七年の筑前黃門秀秋卿、同じき十三年の筒井伊賀侍從定次、伯州の中村(忠一)越後の堀(忠俊)伊賀の富田(信高)安房の里見(忠義)其餘廿餘家、除邑滅亡とはござりましたも、此等は大方家主の早世、家臣の訴訟、狂亂自殺、謀叛露顯、すべて世の聞も人の手前も是非なき義どもにござりまする。斯くて元年に大阪も落着、翌二年に故御所樣御他界、當時の宿將老臣らも追々に老衰死亡仕つられましてからの除邑と申すは、實に只今御沙汰の如く、眞個夥多しい義にござりまする。其れも猶ほ御二代樣御代には、元和二以來、御治世七年が其間、滅亡の大名六家、小名六家(當時猶十萬石以上を大名といひ、其以下を小名と稱べるが如し)合せて十二家にござりましたが、當御代樣にいたりましては目覺しとも愚か、物凄じい程の義と見上げまする。卽ち寛永元年御政治の御初より當年にいたりて二十年間、大名小名御取潰し都合して三十三家、此の總高四百十九萬六千餘石。更に元和二年より當寛永二十年まで廿八年、此間の右絶家を算へますれば四十五家、此內御一門三家、御譜代十五家、外樣廿七家、大小を合しての總高は七百三十二萬八千五百三十餘石とは聞えまする。一御餘念無げに見えたる殿も、茲にいたりて御氣色はやゝ動き初めたり。絶家沒邑の大小名四十餘家、とまでは其以前に御承知なるも、其が年歷、其が石高、御代を分別てまでの算當は從前實に遊ばしたる事無かりき。況んや恁う委細なる調査を諳記じて、斯う明白に記憶より申さむもの、恐らく柳營の右筆、御記錄の役といふとも絶て無くして稀に有るべきものなるをや、抑彼由井民部[illegible]者ぞ、一個市井の浪人として、其術を賣り、其口を餬ふ者ならずや、執何の暇、甚麼なる時に彼は恁く迄の舊記を討ねて、其心胸に秘藏たる、想へば可怖しき奴かな、と御舌も不覺に顫はれぬ。誰か知らむ、這個の事は彼が尋常の茶飯なるを、彼は恆に其の弟子を教授る手段として、國の分限を熟知せ、家の興廢を諳記せしめ、其家が軍用の多寡、士氣の强弱、民心の向背上下の意嚮といふに就きて、攻城野戰防守等の成敗利鈍を宛然實地に臨む如くに講究せしめき、されば此の御回應は平常講述する或る東西の或る一部を纔に御耳に入れたるなり、彼に取りては妙法蓮華經の序品第一たりしなり。一委細好う存知たものぢや。而て其の四十五家の家士、これは其の七百三十餘萬石に割當たりや直地員數も明了らうが、其等につきての當時の浪人、未だ諸家の扶持に有り附ぬ者の數、何程ぢやらう喃？一此れをこそ我が言ふべき處と、正雪は膝を進めぬ。一其義も些少愚考仕ッてござりまする。先づ此の浪人、右、萬石につき五十人と見積りまして、當今猶は浪々の生業を得ませぬ者、大約に三萬七千人……四萬人ともおざりませう歟？一其ればかりか喃？一いや、右の外に猶大分ござりまする。一正雪は含笑む、殿は切りに御耳を傾けさせたり。

（六十八）

一大分と申す、其の大分の者は何浪人ぢやな？一

一されば、にござりまする、一方には大阪の浪人……又其の他方には。一島原か喃？一殿の御目は閃耀と晃りぬ。正雪は其れにも臆せず、一如何にも其の島原の殘黨にござりまする。一而て、其の大阪の浪人、右は何程と見積つたか？一正雪は、これには容易く應へざりき、面をやゝ凝視て、「私儀は戊の歳にて慶長十五年の誕生、夏御陣の節はまだ六歳の小兒にござりまする。殿樣には其時たしか御十四にて親しう戰場にも臨ませられたる御義。當時城に籠りましたる者の數、大約は何程との御推算にござりました？」一されば…、予とても同一少年の

事、詳細うは知らぬであッたが、其際に聞いたは十五萬人。後に聽いたは八萬餘。」――彼は些と首を斜めにして、「甚麼人が然樣には申上げました？」――むゝ、其れは、其の――或る者じや。」「承はりまする旨に據れば、御家には、彼の城中の事、餘程詳細に存知の士もこれ有る歟のやう……。」其隈をば防むる如く、其等をば竊むが如く、其語氣は詰責るが如くし「、彼は屹と問ひまゐらせぬ。其の問意の什麼なる旨趣か、其士の果然那麼者かは知らざるも、殿は俄頃に御笑を淀はせて、「はゝ、世間では然樣申すか。予の家來も多い。末々には城中の奴共の一人三人在らうも知れぬ……。但し其の員數は違ふかの？」――「えい！」と彼は目を瞠りぬ。彼は島原の返報を見事日下傷損じたるなり。殿は追擊に睨み臆させて、「員數は什麼ぢやの？」――「私、密算によりますれば、五萬五千より六萬。」――彼は諄々に應へぬ。――むゝ。すれば諸家の首帳の載する處、萬二千五百餘級、但し此内には雜人百姓町人もあらう、又た彼の如き斷殺の合戰には味方討も多くあらう、假に城中の士分以上の討死の數、其の首數の五分が一とすれば二千七百ぢや。總勢五萬五千人より其を除けば、殘つて五萬二千三百人。其中扶持方有り附の者、又た病死の者、島原の一亂に管係つて討死處刑の者を一萬人と見積るも、大概は尙だ四萬內外の者は在るな。其れには其子、其弟、其の甥、徒兄弟、從者の類、一亂以後に生れた者までを算へなば此れも寡少からぬ員數であらう、其等を合算すれば、假定七萬か喃？　其上に彼の島原が餘黨、これが四方に散浸したもの大約一萬と見ても違算はあるまい。それに其方如き浪人を立つる者。主人手前不首尾等にて退身の輩、乃至逐電脱落の者、何さま其等合請を合せなば凡そは十二萬！　呀、民部、此等諸國に漂客なをる諸浪人を嘯合なば！　「一眞麗がる哉！」殿は御火桶を推斥させて一膝侍らせぬ。正雪が胸裏は、此の御意の下に覺えずして淘湧ちたりき。素破こそ！！　御思し食立御だと、然う！と言はむと吻端へまでは出でたるも、否々と又た一步を退却けたり。兎角に可怖しき此殿の御心底、今些し其の確實なるを審定めでは、――爾も迫ふべからざる口の過失。迂闊とは奈何、とは思ふも此期を外しては又何時の日をか待たむ、從前の苦心も只這れ個一事のみ、渾圓の玉を見ながら其に指を着けざるの愚、こゝにして意表を盡くさずば今日の企謀を目して此處に來れるも甚麼の要。俚諺の當りてや碎けむ歟?!否！　未可々々。今宵の御茶に我一人の御招きとならむには然も有らむ、現在兵庫をも召させられしを。殊には殿が日下の御地位たる、御旗揚の御意どころかは、御身邊の御用心專一として他に御遑もあらざるべきを。係う侍坐の一個もなき對向の御座敷すらも不思議であるに況て斷う樣の沙汰、藪主に化けたる老狐を釣らむとての揣摩か？　否なり／＼、誰か其の一喫の燒餅に喉を傷かむ。恐くは想へど彼は猶其の執着の羈絆を斷ち得ずして、風雲の會といひ、水波の交といふ、千思未盡萬考猶繞る話柄なり、遙かなる御廊に、平ならざる衆人の叫喚！　「呀？」――

（六十九）

正雪は覺えず聽耳聳立つるを、殿は然り氣もなき御容態、「甚麼事もあるまい、卅者共が出立の用意でもあろ。……那麼ぢや、民部、其の在の諸浪人、蒐むる工夫は？」「彌御本懷を進ませらる。」「御沙汰にござりまする。其の工夫――無いとのみにも涯りますまい。」「左樣御名前ともござりましたりや……。」殿は事も無げなる語調をもて、「予の名が何用か。其等の輩、皆是れ世を恨み人を憤り、死花の機會もあらば、思ひ出の時節もあらばと舊恨の術を胸に、戰場の夢を現に見る奴、其等血膽さい風の臭を

そよとも嗅かば、蒼蠅の如くに群がり起つて其の久しう啊らした喉を馳走の肉羹に沾らさうと飛び集まらう。工夫といふは只其の飯羹を調製るまでのこと。若し夫れ豪傑の士は文王無しと雖も亦た起るぢや。是時に當りて從二位大納言賴宣の名が何用をなさうか、由井民部で澤山ぢや。」あはゝゝゝと御笑ひある。風雲の機は歩一歩と迫れり、正雪も突きたる手を内膝に揚て「何さま其れは民部名にても……なれど江漢流力を仰せましたりや其水の脅勢は甚麼大のもの？」言ひ懸て彼は甚麼とかせし？ 笑一笑ひぬ、「はゝゝゝ是れは御座興に身の入りまいて、怪しからぬ御話說。」「はゝ座興……然りながら小唄戲談も思ひの果、其方が過般の忠告も尋常一遍の賴宣が身を案ずるとでも有るまい。病症を診察てゝ藥劑を投らぬ醫師もあらぬもの、予が目下の藥養には甚麼といたすか？ 身に罹る病痾を避けて天然の壽を保つ、然やうの神藥の方どももあらば教へて吳りやれよ。」殿も煩悶きか、仰せつゝ額の汗を拭はせ玉ふ。「いかにも其の天壽保元の方、仙丹神藥、私ずんど心得て居りまする。なれども右は、其の醫師に信を御取りなされねば……。」「信をも取らう、行をも倚さう、甚麼事も其方が申す隨意。」

「然らば先づ……御身の內何處か苦悶しうましますか、御外邪の氣は何所を冒しまゐらすか、其の御容體熱と御沙汰下されて。それにつきて又た御療治も種樣にござりまする。」殿はこれにも惱み玉へり。「難かしい。其事は醫師が診察の隨意ぢや。腫物なりや切て棄つるか、灸治で癒すか、內臟なりや服藥するか、素人たる予は只醫師一任ぢや。」「吁、我決矣！ 什麼や此殿が恁くまでに仰する上は、誰か是を眞實本心の御沙汰ならずと謂はむ、此上に狐疑を介みて逡巡はゞ、それぞ大丈夫の面目を自家より失ふものにして、翻りて殿に女々しき者、思ひしにも似ぬ臆病の奴かなと嘲笑れ申さむ、那の自ら守るにのみ忙はしくして利運の到來を知らざる者を、菩提を妨ぐる小智、とも廷尉の誡め置かれつる、或は這們的か？ 想へば、從二位大納言、柳營御三家の御一人たる殿が、賴宣思ひ立つ事あり、民部荷擔人仕つれとは、未だ御馴染も薄き我們に對して有繫にも仰せ難かるべし、其れを我們が申し出でずば此の御心深き殿、其儘にして御沙汰も休まむ。何ぼうの無念、正雪一代の不覺。爰許目下ぞ大事の成る成らぬの機！ 只是れ斷。我は決矣、唯一の斷！ 彼は恁く一心に決意めて、隻手の膝に雙手を揚げたり、兩眼を瞪開き、呼吸を斂めて、「御謀叛！」—と發語でむとする其の刹那、御次間の障子紙襖はばた〳〵と倒れて、苦すと叫ぶ人聲！ 正雪も愕きて、斜向に開きて居合腰に屹と睨れば、殿も御膝を立させて、「誰ぞ？ 甚麼事ぞ！」一由來好事に魔障多し、殿が半日の御苦心もあはれや爰に一爆水上の泡とは消え訖んぬ。

此の屆たる者、抑是れ那個者ぞ？ 三面六臂の鬼神にはあらざるも、猶是れ寃を銜み血を含む牧野兵庫！

(七十)

但見る、顖頂にして盛服せる壯佼の大脇指拔き持てる其の背後より、社袮の肩は脫れて腰ばかりなる一個の壯士、雙の手を腋下よりして胸頭に回して羽翅搾といふにしたるが、搾られたる壯佼の脊力や優れる、搾めたる壯士は御廊を今牽引られつゝ行くめり。

言ふにも及ばず、拔刀狼藉の壯者は兵庫にして、其を組留めむとして組留め得ず、危殆き繩索の奔牛を繫がむとするにも似たるは大學なり。大學は、薄傷二三ケ所負ひたれども屈せず、力を窮め、曳聲發して、只顧彼を御奥へ入れ立てじと骨力たり、兵庫ははや乳狼の狂せるが如くにて、眉は激昂り、眼は逆吊り、口角火を噴

さむばかりにして罵り狂へり。最初より兩人が爭論を仲裁せむとしたりし諸士も、兵庫が斯くまでの氣遄さとは思ひ懸けず、刃の光に一時淺と退きたるが、再び叢々と盛り返し來て大學に力を戮せて此の狼藉を取り鎭むとす。なれど其の場所は狹隘し、兵庫が刀影は前後左右に石火の如くに閃めけり、競するとにはあらざるも容易く其手を下だし難ねて只纔に一寸の隙もあらばと覘へりき。

時に疾風の如き的あり、人か物か、其影も分かざる間に飛び來りて、兵庫が睨に觸るゝよと見えたるが、紫電の光は驀直はらりと地に墜ちて大學も乃其、人は諸膝折て伏しぬ。物的は兵庫が腦頭を隱し竦めて、「狼藉！　由井民部はや鎭めておざるぞ。各位裝う渡邊どの負傷の手當。握は物的は、御前に見えたる正雪か。是れが聞ゆる其の正雪か、殿樣ならで殿中に手に立つもの無しといふ兵庫どのを馴程に攪伏きたる伎倆の鋭利き、人間業とは覺えぬぞ」す、目漉しす、と舌皷ひしつゝ大學を先づ退けむとする、前面の御紙襖さッと開けて、「民部、大儀。大學、我輩は先づ御禮なすぞ。葉を與らせ」御するは大學殿。殿は御手提の漢籠を取らせて兒小姓に塞與し玉へり。見るより兵庫は、當の敵を討損したる無念の面を直地と擡げて、切れる齒を戰慄せつゝ、「殿、と、殿ッ！」殿は端と、此麾の主を睨ませぬ。其の御面には、終に從前見上げ奉つれることの無き御無念の色を見たりき。「殿ッ！」彼も甚麼どの寃あるか、後句をば言ひ得ず、彼の印籠と殿の御顏を一目に睨みてはら／＼と血逆る怒恨の涙を流したりき。「こッ、こゝな不處存者！」御聲は雷と鳴れり。「不處存とはござりませうも是は武士の意地。殿！　是は意趣討にござりまする。」「意趣とあらば何故汝予が裁許を得ぬ。汝、予が、予が面に泥を抹る！」「そ、其御咎みは只、私　御場所を辨へませぬ迄の事。大學め討損じましたる迄の事。切腹仕つりませぬ迄の事。殿樣御面を潰しましたる不埒兵庫未だ仕つりませぬ。喧嘩兩成敗にござります。大學めのみの御片贔屓、兵庫御恨みに存じまする。」彼は漢籠にのみ眼を注けり。不幸なる君臣の間に、突に全然其の歸處を異にしたりき。彼は只我殿の、邊日眞の如きを容させられて我が意趣てふをば些かも御採入なきものと思ひたり。殿は又た、彼其の隱に挾持つから、最初に予が招きの茶會を辭み、後には復た甚麼と分別を傷面してかこゝに來りて、此の重要の曲事を行す、憎き奴、獅子心中の蟲、飼ふ主の手を咬む獪！」と只管に御忿怒あらせしなりき。猶言へば、殿が今宵、彼兵庫を召させられしも、前に正雪が兵庫の出仕を抑止たると籌畫る處は同一なりき、便ち殿は、此の兩人を一所に坐きて、其の言語を察、應對を御覽じて、扨て其上に或る別樣の御手段をも行はせ玉はむの御籠略ありしなり、されば兵庫の參らずして最初の心算は狂へるも、猶ほ其れが木偶の傀儡なるべき彼を間落さむとては、苦悶しき汗をも搔き玉へるなり、其れが功、今や一簣に成らむとして忽諸破れぬ、而も其の前夜の光景を其儘なる小賊頭は、顚りて其の大賊頭とも看做すべき漢子の爲に提はれぬ。彼か此か、此か彼か？　さしもの殿も此の疑惑と、驚異と、御遺恨の是非なき御胸とに迷はせて、其の御擧止もやゝ平日の沈着とは異りて見えき。

（七十一）

御漢籠を凝視めたる兵庫は再び其殿を御面に轉して叫びぬ。「殿ッ、此の大學めは讐人にござりまする。彼が申すこと一切御採用は御無用にござりまする。彼は罪人にござりまする！」

「甚麼をッ！」

大學は耐へず突と寄るを。「いや、御無用。」兵庫は倚ほ餘ほど逆上ても見え申す。かゝる際

て曲事の謀叛のと仰するこそ餘ほど道上ては見上げまする。殿様こそ鎭めて仰せ！」彼は傍邊に囁きたり。「怪しい奴、其の嗜撃の相客といふは、大學のみか、予が第一に睹つるぢやぞ！」此時の御眼光は、特に兵庫が面上のみならで、御座敷に隈もなう閃きと見えけり。「殿樣御覧になりましたるとや？」彼は目眩しき眼を揚げて、不審げに忙しう問ひぬ。

（七十三）

「いかにも予が確實に睹た。」「而て其者は甚麼樣の奴？」「僧形の、黑き衣服に、武者草鞋した者。」「年齢は？」「廿五六。」「面體は？」殿は此時、一段と御聲高く、「其方に酷う肖てをッたぞ！」兵庫は聞くより直地と其首を垂れたり。其心に謂へらく、あはれ從前事の全般を、大學めが讒言とのみ念ひしが、念無や扨は、殿の謬りて我を擠陥さむと爲玉ふなりけり、法師頭の、廿五六の、面體の我に酷肖たりと仰せある、即ち其の曲者は此の兵庫也と仰するに齊しからずや、昔より瓜を二つの、即身卽是のと言ふなるも、御家中は抜置き、兵庫從來人を多く見つる中には面體恰好然る程に酷肖たるといふを見たる事なし、況んや僧形の、年紀まで似せて我殿を討たむと巧む、かゝる者の世に有るべき道理かは！　癡呆たる御讒言やな！　耳聾ひたりと思ひし殿は、御目さへも盲ひたる殿なり、其の御雙眼は鋭う見ゆるも、御心の眼は盲ひたる殿なり、臣下が忠否も得鑒別たまはざる瞽目の殿なり。耳の聾せる者、目の盲せる者には聲と色とを論ふべからず、心の濁れる者、怎麼ぞ物の事理を解し得む、餓鬼は水を見て其を火と怖るとやらむ、我が忠義と思ひし事も或は此殿には不忠と見えつるか？　唐土には日を見て吠ゆる犬も、有りとかいふ、尋常人には然も無きものも此殿には太う奇怪と見え玉ふか？　瞽者は聲に驚き、聾者は色に愕く、或は我が心頭にも留めざるものを殿には甚く猜疑ひ思して、終局はかゝる兒戯にも似たる御企巧をさへなされしやらむ？　要するに、彼の大事といふ、思召し立せ玉ひし後は、木茅にも御心の隔て有らぬ人には變化玉ひしなり、其の御配慮の一つの種なる牧野兵庫、首召さるゝなり、腹屠らせらるゝなり只思し食す隨に委せむ。然りながら此の返報をば、生死ともに、祟と爲て見せ申さうぞ！「はゝ、扨は其の曲者は、某でもおざッつらうよ？　陳謝も甚麼も爲ませぬ。只殿樣、思し召す隨意。あッはゝゝゝ！」彼は其の頭を擡げ、怒眼を回轉して、憎さげに一つ嘲笑へるが、再び面を低れ、口を鎖て、死默せり。

人々は扨こそと乘勢むが中に、大學は倒りて驚きて、殿の御顔を正目に、正雪が面を偸むが如くにして覬へり。其れと、屹と目を瞬合せ玉へる殿は、何やらむ頷かせて、「兵庫！　其方が白状……怎麼然樣か？――……。」「こりや心得て白せ。冤罪とあらば仔細を言へ。」「……。」彼の決心は金輪奈落不言に在り。大學は耐り難ねて、「兵庫、兎角は御返答。今の白状は言語甚だ濁って聞ゆるぞ、淸しう申せ。」「甚麼の汝ぢや、同穴の……。」「御首を狙ふと仰せば、狙うたまで！」唾むが如くに言ひ放ちて、復た目を鎖ぢぬ。其の、予も觸られぬを殿は猶摩する如くに、一言はゞ其れ迄とは合點の行かぬ。「こりや兵庫、過日の久居での騷動、彼の折に其方名を騙りたる者ありつるが、……其等熟つ勘考して見い、其奴も僧形の、廿五六の壯者とは聞えたぞ。」其事は我も知了たる事なり、是非なき御謀叛に殿を隳し申さむとて我と正雪と談合して爲つるなり、猶其上にも正雪は、其身の大望の邪魔として殿を殺せと我にも勸告たり、我が固く執こ肯かざるに彼も本意なく、其場は歇みたるが、仰すれば何さま――扨は其の正雪か？　彼が所爲かな？　と兵庫に

心着きて彼が方に目を注ぎぬ。

（七十四）

視れば正雪は平然たりき。或は怨じ、或は騙し、或は和め、或は嚇す、剛柔變化窮極りなき殿が鞠問の其結局は、竟に此地まで將來たさでは休むまじきといふを彼は悟了れり。其れに應ずる手段といふも既に獲たり。故に彼は自若たりき。其の自若たる顔色を見て兵庫は又た思ひ惑ひぬ。彼正雪、什麼ぞ大斗の如くなりとも、其身果して此の曠古の大惡事を行へりとせば、此際に瀕みて些の神戰き氣沮むといふの色莫からずや。其之れ無きは畢竟果然此事を知らざる歟。久居の事は我も彼も一胸襟たり、其の結果は左も右もあれ、慮るところは偏に殿の御爲を念ふ。心に於て毫末も疚しきものなし、其を此際に甚麼の意地弱う、陳謝がましう、我と御聽に入るべきや。又其の我名を名告れる者も果して僞形か、甘在か、兩通の我に符たる歟、否らざる歟、其名さへも知らざるものを什麼と指すべき。たゞ其の殿を毀害むといふ、正しく彼が主張せるもの、なれど其も亦た我が意を納れて當時に其の初念を飜轉したりとせば、其れ迄の事、甚麼の要にか今更に其の前事を追究せむ。獨熟く思へば、今の御責も、例の手段の御誘惑か、有らぬ方にも罪を嫁りて意外の獲物をとの御方略か、思へば兵庫が目下の場合たる、言ふも非なり、言はざるも亦非なり、其の同一非に陥つるとならば寧ろ不言して他の胡盧とならざるに若かず。甚麼の無用の舌根を叩かむ。

「久居の騒動、其の私名を騙れる者、右はいづれも私存慮の外の事、別に勘考いたさう様もござりませぬ。」—むゝ、悉皆右は知らぬといふ。是非も無い、が、兵庫、予は其方に問ふ事がある。主と友と、其方は孰れを大事に思ふ？」兵庫は再び鮮血の滴れむ許りなる眼を疊に注下て、俯いたる下を其肩頭より戰かせり。—や、兵庫、其方は孰れを大事と念ふ？—「主も主に由りまする、友も友に由りまする？」彼の語氣は實に決心の的なりき。—十五の年より十年以上召仕はれて、譜代にもあらぬ者を譜代の上席に列き、六千石の祿を食ませて家の重職にも擢んでつる其主と、一年半歳交つたる其友と、汝は抑、何れをか撰ばうとは爲るぞ」秋霜烈日も翅ならざる御氣勢は、直地に彼が肺腑を破せり。なれど彼の一轍一途なる心肝は此の規鐵をも受用ざりき。「十年の御恩も一朝の御恨には、兵庫、換へ難う存じまする!!」

可憫、可憫、此の一句に觸着れて、殿もあッとは衝れにけり、正雪さへも愕きたり、げにも彼が此の一語は、不見不識の三四郎に只頼むとの一言を託せられて、水火の裏に身を投ぜむと誓りたる其的なりけり、思へば可怖くも、可傷くも、賴もしくもある心根かな、と正雪は覺えず其眼に暗涙を泛べぬ。耐らぬは大學なりき、彼は手を戟にして詰め寄せたり、「兵庫ッ！汝、其の一言、本心かッ！」—「……」—「殿、這奴、只今の一言にて其の本心の所在も察せられます。斯く迄の逆賊、白さずとて白させで置きませうか！　何卒拷問……拷問の義を御允許、偏に願はしう存じまする。」—えい、汝、拷問か!!—兵庫は其眦裂むとする眼睛を大學に直注て、捉れたる袂を振拂らむとす。拿住れる上は起せじと角力り。大學は目を瞋して、「拷問に甚麼があらう。汝は殿に御敵對ふ如形き大逆賊！　武士とは見ぬぞ！」—「待て。」と殿は御聲を打一打せぬ。「大學申しは然る事なれ、何さま兵庫が仔細は措きて惜むべき奴。但し只今は彼、公儀御沙汰中の奴、家來とて手成敗は其の憚りもあらうか。先づは牢舍？　然樣にも計ひ置けい。」

（七十五）

大納言殿は其の翌日松坂を出立たせぬ。豫て

は此の御狩には、物頭奉行が采配の採り方、家中の壯士らが進退の風體、平生の心懸をも御覽ずべく、今後の覺悟をも御沙汰あるべく、兼ては隣國への威風を見せ、御領の農商へも御弓矢の味を知らしめて、猶且つ外樣輕輩に潛める異能奇材の士を御發見もなさるべきとの御概略、其餘にも其事よ彼事よと、御胸に餘んの結構は千種萬樣にもおはしつらむを、事は全然御心と違ひて、家老總中にも仰せられぬ此の臨時の御催しは、測らざる兵庫が御恨みの種子となり、それよりして雲出の合戰、城下の騷動、剩つさへ刺客の大變出來して、終局は刃傷の珍事も見せぬ、襟度の濶き、御智慧の深き、伊勢の海にも比較つべき殿の御胸も、風雲躁ぎて御氣色自ら平穩ならず、御遺恨を累ぬる、其の御遺恨の最も堪へ難う思し食すは正雪が事なりき。兵庫は固より最愛の御家臣、其の器量の程も見處多く思し召せる上、其れが箇樣なる情態となれるは、果然彼れ民部といふ惡魔の爲に深うも魅せられつるものならむ、然らでも素奴は島原の殘黨にして、猶恐ろしき其の非望を天下にも懸くべき者、我家の仇といひ、天下の賊といひ、討ても棄つべき奴なれども、惜むべし其の確正なる證とすべきもの猶ほ有らず、證無きに討て棄てむは、天下の御法、自ら憚かるべき處あるに、又た我が思慮の未熟なるにも似、且らは彼奴もあれ程の名有る奴なるを、暗撃の如くにせむも武夫の意地として可愛し、誑つて搦取り、拷問に懸むかとも思へるも彼の辯口、剛膽、機智、なまじひ責めたりとて、誘惑きたりとて、其術にてたやすく白狀ぬべき奴輩ならず、只彼に其口より自ら言はせてと計畫みつる、其れもあの馬鹿者の爲に破られて、百日の營も虚とはなれり、なれど其の馬鹿者も馬鹿とおもへば可憫きにと、昨夜なほ、彼が入魂なる彥右衛門して再應の利害を說せつるにも、目下の身となりて甚麼をか言はむ、只速かに御處刑を、といひて實情を白はず、さらば民部めを責ては和歌山まで牽て、緩々地穿鑿らむと思へるも、彼は辭して、兎角は參宮を終りての後ならではと言ふ、蛇をも捕らず、蜂をも拿らず、翻りて其蜂に泣面を螫されしといふ予が無念、あら遣る方も無や、とある御鬱胸、其の大概を察しまゐらすは御傍の大學と、今一人は、其の正雪か？

正雪は、此日も朝夙く、城下盡處の松列木ある所に出でゝ、御駕の來るを待てり。軈て巳刻過ぐるころ、水野太郎作を御前驅に、同勢百七八十人、御乘輿を擁護みて來るを、彼は御傍なる渡邊大學につきて御乘物の披露を賴みぬ。御乘輿は駐まれり。「民部か、此回は不慮なる義どもで本意なうあつた。參宮終らば、下向を待ちをるぞ。」「忝けなき御意。必らず祗候仕つりまする。」「滿足ぢや。再會を必ず待つぞ。」重ね重ねの御諚を殘させて御駕は過ぎぬ。彼は戀々として暗涙に咽びつ、低回顧望、其地を去る能はざるものゝ如くに見えき。

獨り憐れを停めしは兵庫なりけり。彼は松坂の城中、一室なる所を假の牢獄として其中に投れられぬ。警固は村上彥右衛門、是れは猶ほ彼を說諭して其實を白はしむべく、兼ては雲出一埒の事、兵庫名を騙れる曲者の穿議、其れ此れ共に油斷なく奉行すべしとの義によりて殘されたるなり。なれども其後久居よりは、何事も言ひ來らず、曲者の蹤迹も雲を的なり、折ふしに兵庫が一室を音訪れては、殿の御仁惠、其の思す御心のやうをも說き聞かせ、彼が正雪との交情、大學を恨める仔細、暗殺の顚末など、我よりも語り、彼にも問ひ、種樣に事の端緒を得むものと勗めたれども、彼の片意地の頑強なる、餘の談話には快よく物語れども事其件に及ぶ時には、口を鉗み、頭を低て、植たる儀の氣息

すら泣きに彷徨たり。其の執念きには彦右衛門も恐れて、近ごろは其の訪問も稀々なる、八月も過ぎ、九月も經ちて、十月も中旬といふ、或る日の事なりき、和歌山より御用の狀彦右衛門所に到來しぬ、披き見れば、駿府城代酒井山城守、江戶御下知違犯の罪により備後福山三萬石の所知を沒せられ、備中松山水谷彌七郎へ御預けの上、切腹。連坐の町奉行目附、諸役人とも悉皆改易との趣なり、就ては兵庫身上にも何樣かの公儀御沙汰あるべきか、當人一身構へて異變の事なき樣、念入れ警固尤も、との事なりき。

（七十六）

昨日今日は神無月の空、時雨初めて、軒にさす薄日の影も物淋しう、落葉を弄ぶ風の手は、障子紙襖に簌々と音立てゝはやく三冬の來れりと告ぐ屈指れば此室に籠められてより既や三月なり、世の中の狀態は甚麼となりけむ、近き頃まで人も來つるが、其れ將た、此方の問はむとする事には答へで、罷りて聞きたうも無き身の窮厄を穿鑿るゝが可厭さに、四五度沒義道に待遇ひたればにや、懲りてや再囘とは訪ひも來ず、峯の嵐谷の音、一心三觀の禪士が局にはあらざるも、兀坐憫然、語合ふべき友も無ければ、吾はむとするに術をも得ず、外見には這個六尺の長大身、決めて枯木死灰の如くに見ゆらむも、嗔恚の業火は二六時中間斷もなく其の苦惱しき臭骸を燬きて、身已にすら淺猿しき無念の涕涙の垢膩ける袖に拂はるゝは、あはれ兵庫が現下の軀なりき。月代なりしも凄じきまでに髮は生ひぬ、剃痕の青う鮮美しかりし鬚も藻屑と紊れぬ、目に光見ぬ額面は白きが上に蒼味を加へて、紅色なる脣も中々に凄愴し、雙眼を閉ちて太息を噓き、瘦せたる腕を胸に拱みて、頤骨の露はなる腮を襟の裏深うさし入れたる、其肩頭を悄と叩きて、「兵庫、彦右ぢや、彦右が參つた。」

叩かれたる人は面を扛げぬ、其眼瞼は紅う腫れたり、腫れたる底より凄き眼光を射出だして、「甚麼と思うて？」再び其眼を閉むとするを。「いや、兵庫。今日の彦右は、御身を警固の村上では無うて以前の朋友の彦右衛門ぢや。一樽を持參した。快よく喫まう。御身も隔意なう……」笑ひて座に着くを、彼は再び眼を側てゝ左視つ右視しが、自然其意に悟了れるものあるかの如くに頷きて、色さへ和けぬ。「芳志ぢや。甚麼にも思ひ出の酒盃受けう」「思ひ出？ 又た邪推すか！」「はゝゝゝ棄てた身ぢや。氣も措さぬ。邪推す、肝の煎る、皆現世に存在たいからぢや。我們が甚麼の……！」言ひ罷して莞爾と含笑ぬ。

彦右衛門は此言を、鳥の將に死なむとする鳴聲の如くに傾聽りき、物をも應へず、首肯き首肯き、褫みたる服紗の中より一升も容るべき大瓠と、取肴二三種を取り出だして、自家先づ盞とりて泛々と喫み試み、いざと一ト指せば、彼も辭はず其盞を把りぬ。悠々て獻酬二三度せり。「彦右、扨て、處用は甚麼ぢや？ 邪推では無いが最後なりや其事といふて聞せ。其の支度もある。」問ふ口を押へて彦右衛門は更に一ト酬しつ、「未だぢや。が、有り樣程遠うもあるまいよ。」「えッ!!」有繫に其面色は鼓躁て見えたり、「……御沙汰もあッつたか？」「いや……。」と彼は言はむとしつゝ其語の着端に迷へる如し。「扨は執念くも拷問か……」兵庫の懸念るは切腹にあらずして拷問に在り、其二六時中、夢寐の間も胸に忘れて、口惜くも、情無くも、無念にも、遺恨にも堪へざるは、大學が拷問と言ひ、我を武士と見ぬと言ひ、殿の其言に御同意ありて御氣色の動きたるが如き其事なり。罪に其の無念、遺恨のみならで、又た眞實に、毛髮も悚立て可怖しきに、其の拷問なり。現に其の

らば孰方にも亡い體、亡い體となりや潔よう仔細を申して、殿の御胸を安んじ申し、紀伊國を安泰にもせい。友への義理も好い程ぢや。」兵庫は突如叫び出だせり。「殿も、和主も、友、友といふ。友とは誰？　誰をか指す！」「言はれなよ、正雪を、お主知らぬか。」「其れは知る。面識人ぢやが――甚麼とした？」彦右衛門は冷かに笑へる面を横向に掉れり、「いや、面識人とは一樣の事。お主と正雪とは刎頸の友、猶言はば……。」兵庫の膝は覺えず前みて前なる盃を飜倒しぬ、其の流るゝ酒の泉に膝頭を浸して、猶進みに進めつゝ、「甚麼ぢやッと？」「……一味の黨！」「た、誰が言うた？　誰が然は言うた？」「正雪が……！」其人を指さずしては遁すまじき彼が氣色に、聽したりとにはあらぬも彦右衛門は愡く、思はず發言り。兵庫が憤怒は烈火の如し。「ナニ正雪が?!」

老練なる彦右衛門は、我が此の不意の口過と、彼が火の如き忿恚とを勿怪の倖にして、飽くまで功を收めむとせり。「おう、正雪は一々白した。牧野兵庫は我等一味の黨。久居の事も某が部下の所業……。」「え!!」愕然たる兵庫が舌頭の未だ縺縷の解けざるに、一人の廣間役は慌忙しく此室に入り來て、「村上殿へ申します

る、由井民部介使者金井半兵衛、久居の城下を騷がせましたる盜賊を生捕て召連れたりとて町奉行へ訴へ出まいた。右は何樣の御計ひ？」

（七十八）

聞くが否や彦右衛門は、盃も指し棄て、物も言ひ棄て、呆れたる兵庫を其場に置き棄て、放下し棄て、鼠の舞ふ如くに此室を出でたり。什麼げにも彼は、愡くも爲では協はぬならむ、今しも久居の騷動なる表裏にか口の跳躍みて、其の張本と自白せる如くに語へる正雪の、其の使者は、突如として現はれ來りて、剩へ其者が、其の、彼の折の盜賊てふ奴を擒め取りて參れりとは！　彼は我が役義の上なる歡喜よりも、目前なる兵庫の手前、武士にあるまじき虛言の面目なさに只理由もなく、我をさへ知らで一散に躱避たるなりき。廣間の者は喘ぎ喘ぎ追ひ來りて、「如何計ひます！」漸く落居たる彦右衛門、「然樣ぢや其の使者、盜賊とも〴〵城中へと言へ。」

* * * *

間もなく、町奉行同道にて來れるは金井半兵衛、案内の坊主に導かれて表書院へと打通る。いと倉卒の間にはありけれども、雲出の際には河原にて一應の名對面しつる者なり、彦右衛門は先づ久濶の情を敍して、晤談ははやく要件に入れり。彼れ半兵衛の言ふ處を聞けば、其師なる正雪、兵庫とはかの三四郎が一時に依りて駿府以來の面識たり、然るに彼の交さり、餘義なき羽目の是非なさに、其人を自身手して拿へたるを、一代遺恨、交甲斐もなきやうに自己ですら存ぜらるゝに、又其れよりして久居の事、御寢所の事、すべて彼の人の身に連繫して思ひの外の御勘當さへ被られつる、怨嗟詞にも盡し難くして、悲歎腸を斷つばかりなり然りともあれ紀伊國殿は名君、寛弘と知りて其人を咎め玉ふ如き事はあらじ、只此上は正雪身の面晴れとして其久居の兵庫名を騙れる奴、幷に其御寢所の曲者と云ふをも捕拿へて彼の御家にまゐらせむか、但し予は猶ほ病蓐にある身、其の方師たる我に代りて此の事を好うはたせ、其れ若しさもなき者なれば正雪再び恥ある武士として世の中にはたゝるべからず、究竟予が一期の瀬戸ぞ、構へて身も命も惜むな、箇樣掟てゝ候らひし。もとより師が申す處は義理の極所、我等も然ありたきは望むところ、乃ち附屬られつる朋輩十餘人と乞丐に身を變扮し伊賀伊勢より尾張美濃三河までの海上陸路、山河村里曠野の末までをも穿鑿れるに、近頃伊勢近江の境なる御在

所が嶽の岩窟に怪異き者の棲むといふ、此由を傳へ聞ける我等、さもやと彼の高峯に躋りて山中隈なく渉獵たりしに、果せる哉、瀧川の上流、兎ある岩洞の奥なる所に廿餘人の山賊らしきが潜み息るを發見たり。ござんなれ逃すなと我等十餘人、穴の前後を押取り閉めつゝ、紀伊國殿御用！　紀州家御用！　と呼はツて切ツて入れるに彼等眞正の緝捕使とや懾れたりけむ、一支もせず其の奥なる活路より遁むとするを、追懸け、追詰め、其の内七八人は切伏せたるが、卅倭の忿無さ、皆悉く深手を負せて其場にて息絶させ候ひき、然るに兹に最も幸ありと覺ゆるは生捕の一人なり、素奴引捕へて面を視れば、兵庫どのに生換し、加之頭さへ剃り毀ちたり、散々に勒虐みて候へば、彼最初は白はざりしが終局には堪へで、いかにも其の久居にて紀伊殿御内の名を騙構り、城を攻め、民家を焼きて、其の資財を掠奪れるは我が夥伴なり、然も我は其の面の肖たるといふより兵庫どのに假裝たり、其事の味好くまゐれるが面白さに、次回は大納言殿御寢所に忍びたり、然りながら其回は不造化に甚麼東西も得盗らで候ひき、かゝれば久居領にては悪事しつれども紀伊國御領にては何事もせず、偏に御たすけ／＼といふ。助くるも助けぬも奉行衆の御心、兎角は大人しく引かれよとて、素奴なだめつ誘しつして只今當所まで召件れては候ひし、いでや一應御檢分と始終を詣る半兵衛が狀態、いと氣色はみても見えたり。彦右衛門は扇を揚て扇ぎ立て／＼、「半兵衛殿、芳志過分ぢや。骨折といひ、お手柄といひ、申さう樣もおはさぬぢや。いでや其の盗賊を。」半兵衛は式代しつゝ、「簡程の小功、御過稱は恐入りにおざる。但し紀伊殿御用と申した僭越の罪は幾重にも御容赦、後日に自然御沙汰ともござらうならば……。」「なんの／＼、甚麼の苦しいことござらうかい。倘か兎角の義あつたる節は某指圖で紀州名前を名告たりと申されい。其れは先さし置て、右の奴を疾う坪に拘かれい、彦右衛門檢分せう。」

七十九

歩め！　叱！　出ませい！　との叱咤に追はれて蹌踉々々おう／＼と書院の坪に入るものは、彼の捕拿の盗賊なりき。看れば高手小手に縄縛られて、軀には盗楞の襤袍をまとひ其の領及手足にはかの緝捕の際の負傷なるべし、赭く、黝く、彩れるがごとき痕ありて、見るも可厭きが、何さま頭は坊主轉の毬栗とふものにして、存の恰好さへ兵庫に酷肖たり。但し此奴猶其頭を襟にうつめて面を揚げず。縁の正面には村上彦右衛門、其次には當所町奉行、それと對面て金井半兵衛並びに今座敷に入れる武事が弟子十餘人あり、盗賊をつくばはせたる背面には縄取の獄卒、其左右には町奉行の足輕、袴の立役いかめしく、樫木の桿棒こゝを先途と突き立てぬ。

村上彦右衛門、威儀嚴重に扇笏に把り、引据ゑられたる賊が額を礚と睨みて、「其處な奴、面揚げい。」彼は、其の擡げたる面を看一看しが、忽諸呵ッと呆れたりき。實にも／＼、今半兵衛が語へる、兵庫に肖たりとは事も愚かや、其の眼其の鼻、其顔色の蒼白き、面の容額際、年齢の甲乙迄、只是れ其人を其儘なる、寸分は扨措きて厘毛の差違だも無きが如くなるに呆れたりき。扇を銜き、肩を反らして、むゝと一息、彼は覺えず感歎の聲を呻き出だしき。かく彦右衛門に詫異の歎を發せしめたる其者は言はでも知る、彼の熊谷三郎兵衛。

彦右衛門は良少時く其面を注視て、更に其眼を瞑り、甚麼にかあらむ其の胸に一思案の、小膝を一打ち丁と拍ちて、「こりや其方は、生國は何地ぢや？　名は何と稱ふ？」賊？は初めて聲を出だしぬ其の聲さへ、此方の耳には其の人

かと怪異まれぬ。一私は、生國は存じませぬも生育ましたは當國の白子在、鼓笛村、名は虎松あの仲間にいりましてから虎丸と人が呼びました。」其の日のみ働きて、其耳の機能の鈍れるが如き彦右衛門は、纔に白子在と云ふに注意て、「ふむ白子とか。然らば御領ぢやな。御領の民が殿へ對して勿體い事をしたものぢや。衛る程の兇事を爲る奴、定めて强盗殺害、放火、人命を損傷したも尠少らぬであるまい。兎角は大罪の犯人、一席二席の白洲にて落着すべきとも覺えぬ奴、況んや其の徒黨もあり。依て行衆三の曲輪の牢獄へ繋ぎて、嚴重に御沙汰なされい。但し素奴が夥伴の賊の奪ひ還すべき恐怖もあるぞ、旁、往來をば編笠着せ遣らせて其の面を見せぬ手當が肝要なぞや。先づ當時は是れまで。」挨合其に、牛兵衛が口供にありとするも、彦此賊に對して一應の鞫問、其の同類多寡、犯罪遂意、目的、討漏らされたる奴原の棲息る處、其等仔細に糺し訊ねて討手の手當等あるべきが當然なるに其等の理由もなく牢舍とは不思議かな、仕置なる事、と町奉行は訝しみたれども此場にて其を兎かう爭はむ様なし彼等は只唯々として彼賊を拘き立て編笠うち冠せて三の曲輪の牢獄へと行く。牛兵衛も續て其場を立たむとするた。」と、金井どの、彦右衛門どのと申し談じたい義がおりやる、少時此座に。坊主ども方々へ案内の支度せい。」と言ひ置きて彦右衛門は去りぬ。間もなくして膳は出でぬ、中酒さへ添たるに人人は皆歡喜びて打喫へども、獨り牛兵衛のみ深うも喫へず、自然物案じ氣なる容貌。誰か知らむ其胸中には、目前の料理もあらず、美酒もあらず、只彼の鐵鎖繋縄の憂落めきれたる三の曲輪の牢獄の光景のみならむとは。

是れと同時に、彦右衛門も、不思議の考案を胸裏に描きぬ。其の不思議とは果して甚麼ぞ。彼は原來兵庫とは交睦りしなり、其の牢舍の頃初よりして、汚辱を蒙てゝも身を全うさせむとは思はざりしも、此時丸命活くべき方あらばと念ぜしなり、雖然彼は其の不思議なる日の邂逅より不意き殿の御恣意を招きたるさへあるに、彼賊の頑强より其を射び啓つらむとも其の御疑惑を解き申さむともせず、物言へば舌を鳴らして人を威嚇す、備に謂ふ手も繋られぬ手負猪の狂へるが如くとなりしに、今謀らずして彼は其の猜疑の端を見出たり、これによりて彦右衛門は其の不思議といふ一片の疑陶を案ぜるなり。

（八十）

書院にての膳も終りぬ。金井どの此方へ、とあるに牛兵衛導かれて奥へ通れば、彦右衛門は一間なる小室にありて、「さ、先づずッと此方へずッと此方へ。」

小坊主が持て出づる薄茶一服を互ひに喫りて彦右衛門は要有り氣に、「金井どの。…は、一彼は彼に其儀を潜めつ、我等近ごろ無心が有る。」「はッ、これは又た改まりましたる、御無心とは甚麼様の事で。」と金井は坐容を良正し、「いや、然様に改容られては我等倒りて申し悪いが…、究竟は斯様ぢや。御身彼の賊を追捕の功で御褒美ともありたいか喃?」何とやらむ面白からぬ、胸に一物有る如き問條と、牛兵衛は其返答に躊躇へり。村上は然もこそと、「いや甚麼と不審はあらん、彦右衛門備折てお話し申すが、金銀とも御所望なりや、應分我等手許より進じ申そか…。」牛兵衛聊しく氣色を變へぬ。「異な御言、我們は只聊の一時に兵庫どの身の寃罪を雪がうと存ずるばかり、金銀の御褒美など然樣の念慮、毛頭身褃よりおざらぬよ。」無情く言はれて彼は赤面もやするかと思ひの外、猶其様を近う前めて、「然様の心底存じの上にて彦右衛門實は然申したもの、無心といふは別義でおはさぬ。兵庫が身の寃の然ほど御詮議りやる所存とあらば彼の罪賊、我等には聊らぬか」牛兵衛其の

意を得ざりき、眉を顰めつゝ「とは又た甚麼樣の事？　既に彼の賊、御手前御手にござある以上は……」「さ其事ぢや。意餘りて詞が足らぬが。其の、彼の賊なる奴、御身等が手して會捕つる事、無い物にして欲しいと言ふぢや……いや其の不審道理ぢや。有り樣、是れは、其の兵庫を助命たい某が苦肉の策ぢや」「苦肉の策とは？」面を注視て傍立つる、半兵衛が身側に坐倚りつゝ、彼の囁語く、其の心中の祕を聞けば、實にも然は然る程なる驚くべき謀なりけり。

半兵衛等が功績によりて、久居を騒がし、御藩所を覗へる其曲者は提へつ、兵庫、身の證明は既に完全く立ちたれども、其れにも管らず彼が一命是非なきは彼の駿府にての一事なり。閣下既に切腹とあるをば太く權喜て武士の本意たる如くには言ひつれども、且生慕死の蜉蝣とやらむいふ細蟲さへ其命をば惜むときく然るを五十年の定命、未だ半期にも到らざる彼れ兵庫が餘義なき義理とはいへ、甚麼と好みて其の可惜き腹居らせたう無きものなり、苟にも紀州武士の意地を見せて義理手本となれる兵庫の惜き腹腑の血、むざ〳〵流させたうなきものなり。雖然、公命一回降る以上は其れを拒まむ術あるべからず、殿といへども大公儀御仕置の前には御命も御知行も無きものと御諚するを、況て彼れをや。吁不幸なる哉兵庫！　今其究竟の方を得たる疑獄の方ならば、那麼樣殿に詫び奉りても其の救護の方便もあるべきが、駿府の一事にいたりては、亡矣、亡矣、全然亡矣、其の之れ有るは只苦肉といふ、彼が代命兒たるべき者を索むるの一事のみ。然るに、天も彼が義死を愛惜むか、圖らざるに其の恰好なる兒を我に獲させぬ。其兒とは誰？　瓜二分といふも啻のみならざる彼の新捕の賊！　なれども此の祕中の祕を術好く行さむには、更に一件の要項あり。甚麼ぞや？　曰はく、金井等が領得なり。其の領得とは、彼等が御在所獄なる功を衒はずして捕賊の事を世に知らしめざる、其れにて足れり。其も此の功勞に酬ゆべき金銀、錢帛、其等の如きは我が能く之を辨じて、猶且つ前途を賴まれつべき約束とせむ、師の正雪へは我より內書して其の仔細を告けむ。

只這個一大事、殿が耳に入れずして我が私に計らはむこと其罪遁るべからざるが如くなるも、紀州は遠し、往復に日を費やさむうち此事世間に知られなば、徒勞ならむのみ、仍てこゝは我が一分の腹に收めて時宜を繕ひ、扨後日に云々と申上ぐべき心底ぞ。若し夫れ是を僭越の罪として御氣色變らば其れ迄の事、一人の義士を助けての御勘當、彥右衞門、男の意地として甘きこと鉛の如けむ、我が心は既に決せり。御身も亦好く此の切なる意衷を酌め。」

彼は此の胸臆を祕ますして金井に語りぬ。金井は甚麼と感ひにけむ、事の意外に愕ける面地して遽かには返答もせず。

（八十一）

半兵衛は實に其意外さりしに愕けるなり、彼の意はもとより彼の賊と[illegible]たる三郎兵衛を棄つるに非ず、兵庫をも拯ひ、熊谷をも奪うて遠く其の影を埋沒むとするにあり、頭初より此締の、條索の危ふき甚たるは知るも、竿頭更に一歩を進むる師の妙籌を領けて、事大抵は成るべしと想へるものゝ、其の變算を來せしに愕けるなり、雖然這の場合、返答の躊躇を容さず、彼は猝くに胸を決ゑたり。故意に感歎の態を假裝ひて、

「然りとては御心底甚麼と申さうやうも無い、事こそ違へ兵庫御命を救ふは一途、彼人の御爲とあらうこと師匠承つてからが否を申さう理由もおりやらぬ。但し彼の賊を贋者の兵庫に打扮す御趣向は什麼？」此問ぞ目下の緊急第一義なり、然りとは知らぬ彥右衞門は甚麼の意も無く、「其は難義ともおざらぬよ、面體、恰好、是

れには目撃るとほりの的、只其の意念は言語の眞ならぬこと、其は又我等考案がある。」「とは？」と半兵衛は意ならず。「水銀を呑すか、漆汁を飼ふか、兎角に素奴を瘖瘂にするまで。」

半兵衛は、彼の賊ならで、我既や其瘖瘂になりたらむ如くに聲を呑めり、什麼後來の望を屬けつる兵庫其者の爲とは言へ、我が貳なき友の同志の一人熊谷三郎兵衛といふ武士を不具の發疾と我から爲すに忍びむや。「御趣向はげに然もおはさうが、さりとては彼の賊なる奴、此方が大事の用に立てらるゝ其以上に瘖瘂までにさるゝ餘りの不憫にはおざらぬか。」已を得ずして彼は其情に訴へぬ、此上は寘の應報を說出むず氣色。なれども此說法は效果一發の價もせざりき。「何の狡しい事のおざらう、到底も首を斬らるゝ奴、其者が假令にも立派なる武士に爲られて、城中に伴ひ、美衣を着、美食に飫て、終局は作法の切腹に死花を咲かす、甚麼の不憫も最傷しいもおざらうかや。」「げに、其れも然う……」と彼は更に頭を傾けて、「但し、其の兵庫どの切腹は、何時の日？」「いや夫れは未だ事定らとも。此方は勞息へ出でたれ。「事定りもありもの」なりや然迄の御急ぎにも及ばまい、彼の虎松め御召作るゝ途中も溫順しう白狀も素直にして、賊ながらも最傷氣な奴におざる。」と、御言やッても賊は賊、世に申す狼子野心況んや小の蟲に大の蟲ぢや、愁ひの慈悲心立は結句大事を錯誤る基、のみならず、愈切腹との沙汰あれば警固は倍す、出入も增す、或は其沙汰の直ぐ其の日其場といふ、間隔とては僅に沐浴食膳の猶豫ほどのもの歟とも存ずるに、旁氣の急いて、先刻の韻問も卒忽々々彼に語を多く言はせず、又其面をも見せぬやうに計ひまいた、是れも皆行を急ぎ、事を謀するからの事、秘事の緩慢いは酒燗の微溫いよりも御惡ろいと人も申すぢや。喃、はゝ、金井どの。」

是れも敗れぬ。なれども彼は猶屈せずして、三たび其角を起せり、「如何にも、御道理、とは申せ兵庫切腹、果然然やう御沙汰のおざらうか。」「城代酒井殿切腹はこりや御下知の違犯。言ふ迄もなく御下知違犯の罪は反逆に準せらるゝに、況て輕罪を重罪に執り行ふは大逆無道の名を以て御憎惡も格別とか、酒井どのは其罪此方は又た、本人の三四郎さへ江戸御下知は尊常の死罪。從はすべて首よりも一等を減ずるが例なれば兵庫一命は或は別條あるまいか、と我等は存ずる。さらば左樣に事を運て……。」と說く時、再度追追の和歌山よりの急狀は着きぬ、彥右衛門急ぎ披見すれば、曰く、「兵庫切腹！猶家老中の添書に云ふ、兵庫身上、當表において心許なき沙汰有之につき、此狀着候はゞ直に腹切らせ首のみ檢使に見せ申さるべく……。」嗟乎、事は罷矣。

（八十二）

兵庫が死首を檢使に視せよとまで急せられたる大納言殿の御胸裏は果然奈何、彼への御慈愛は懇有し後も猶變らせられずして、久皆、御寢所、兩所の曲者の其者があらぬかを好く探ねよとて、彥右衛門へは度々の御催促ありつれども、猶此の疑獄の故をもて其れが首を召さむとはし玉はず、只彼の駿府の強訴の一事は有繫の殿にも御法の前、御陳謝の辭もあらずして、只管に思ひ憚ませたる、折柄に、城代の酒井城州切腹との江戸早打あり、追續けて來れる早馬、其の家老牧野兵庫、強訴人一味の科其罪輕からざるに依て、急度も仰付らるべき所、格別の御憐憫を以て切腹、との御沙汰、江戸詰家老へ達せられたりとの注進を聞かせて、今更のやうに憐み、歎き、思召せしが、此上は餘義なし、只彼めに華やかなる切腹させさせ責ては亡骸の死花をと思はせつゝ、既に其の御沙汰あらむとして忽然に又た否々と思召し續させしは、正雪が

事なりけり。[illegible]もとより世間を憚う、關東[illegible]の沙汰をも、[illegible]ことは細かし仔とおく、[illegible]との事を聞き出たさば如何なる方便にもして其の後をなでおらむとも巧計みてせむ、只取にこそ彦右衛門も然るものなれ、[illegible]の頭首には彼が證手には足るべうも覺えねど、悪かなる行儀沙汰は倒りに彼等に驚異を與はるゝ端ともならむ、然らば遁れぬ兵庫が一命を可愛きながらも、一刻も救う短縮て、正等が先た[illegible]、只[illegible]の面目に玷損られざらむことを専とすべき與、備らば迸る達の狀書け、この御を提こみ、故と家老總中の連署として死首云々との火急の内書を添へたるなりき。

倚様に透間もなき御手當なるをも、知らぬは是非も無き彦右衛門は、豫て思ひ設けしよりも層に悠急の御沙汰なるに一圓は愕きたりしが、否や／＼我が計畫の上には檢使も無く、死首とあるが中々に便り好けれ、さらば水銀も漆汁も要らず、たゞ今夜子刻といふに引出して人知れず彼の賊の首を刎む、金井どのには其の以前兵庫を具して落ちられよ、但し此の策略の仔細の義は有耆に預りの頭人たる我が口頭よりは告げ難たし、其等は御身より然るべき傳達を賴みまゐらすぞ、只兵庫、此城を落ちてより後多時は、其迹を晦め、其名を匿み、江戸へも趣きて由井殿が居所にでも在よかし、然らば我等、此事の餘熱の冷めたる頃を見計らひ、御上への首尾好き樣にして再び新に御召し抱とあるやうにも取計らむ今般はよしなに／＼と云ふ主客の密談漸く果てゝ、彦右衛門はいさゝか起座ば、半兵衛も辭して其の旅宿へ入る。既に酒に酔ひて、腹の張れると閑談の長きとに、欠伸と睡氣に落目ある彼の十餘人も、同じく其後に引添ひたりき。

＊　＊　＊　＊　＊

「火事ぢや。火事ぢや！」――「火元は何處ぢや？」「三の丸。牢獄ぢや！」言ふひまに城中には火急の太鼓を連打つる城下にては版木拍子木彫を揩りつ變事を報ぐる。と看る／＼、火光は忽諸閣を照らして、黒烟の渦卷く間より大蛇の舌に像たる炎焰は、閃々として天を舐め、地を掠めたり。

阿呀と愕けるは彦右衛門なり、剛下兵庫を金井に託與して搦手の石垣より落し遣りつ、此よりは彼の賊を手本に牽き、代命の首を打たむと構へたる其牢獄より火出でぬと聞たるなれば、目も眩めくばかりに慌忙て騒ぎつ、馬牽けツと呼はりさま、逸物の駿馬に打騎り、驀地に驅せ着けたるが、什麼其火の旋り方の迅かりしぞ、巨大なる角材を縱横に組みて、猶且つ其の所々に黒鐵の厚板を張り、擎つとも撓けず、燃すとも容易に燃えすじき牢獄の圍は、此時疾く一面の猛火となりて、其の外圍の右左方に建並べたる番卒の小屋、四戸が四戸ながらに既や燒崩れ、人は死したるや遁れたるか、傍邊に見えず。牢獄の中には彼の賊を併せて三人の囚徒ありしが、其れも遁れたりや、將た燒けたりや、叫聲も聞えず。

然ばかりの彦右衛門も此の光景には只悍乎として、面ひ近づくべからざる炎焰を睨みつ、茫立たる折しも、山風此しく吹荒ぶよと見えたるが、其風に此火や飛びたる、二ノ丸の高き棟頭より火の光微々と顯はれたり。「阿破と衆皆の慌遽る呼聲に、吹驚に錯愕を累ねたる彦右衛門、馬に鞭ち、一散に取て返して、あれ消留よ、水を持て、梯子をと叫きつ號べど、虹蜺を摸せる御殿にわたせる梁は高し、箱棟は峭立てり、人の力も水の力も此の高處の火を撲滅むるには不足して、無慘やな、さしもに三葉四葉の榮えと建列ねたる殿造り、高樓巍閣も只紫色に黒色を交へたる渦卷く烟焰、紅色に丹色を彩れる

「ア汝やア占者けえ？　盗人では無えのけえ？」

盗賊と看られたる武士は、一聲高く哄笑ひて彼の覆面を搔ぐり棄つれば、年紀は五十四五、半白みたる頭髮、幾條か刻める額の皺にも、其の分別の練れたると、惡人ならざる容貌を見めしぬ。「はゝゝゝ盜人でも無い、占者でも無い、乃公は當紀伊國家中で然る筋の役を勤むる吉見喜太郎といふ士ぢや。こりや女子、其方の居村は久能の安居、兄をば三四郎と言うたらうがや？」

（八十五）

彼女は有繋に愕きて言句に塞りき、只其の鈴の如き眼を睜々とさせつ、頻りに背後を顧視るは、隙もあらば遁れむとするにや有らむ。彼女は實に安居村の三四郎が妹、かの駿府の梅屋が許に預けられたる宮なりき。彼女生得て女子に似氣なく心術の雄々しき上に、猶ほ正雪に取り飼はれて劍法、柔術の一通りは教授せられつ、夜は兵學の講義の席末に列かれて、門弟らが討論をも傍聽しめられしが、彼女は其兄の、膂力と、悍力とを受領へにけむ、處女に不相應なる膽節はあり、身材は巨大し、思慮さへも其れに伴れて尋常なる十四五の少女の比にあらず、物の道理の心に通悟れて、世間の是非の辨別の着くが隨に、兄が死狀を只管に傍觀て暗に城代に復讐せむずの志あり、正雪亦た衛る理由の事を或る方に說き曲て、愈其意を固うせし程に彼女は其の師なり主なる正雪が爲なる事を、我が宿執を霽らすが爲に行し畏るゝ顏のやうに心得て、先は我が身の生死の寃家たる柳營の一門、味方とあらば此上なう賴憑しきも、敵とありては又第一に可怖べき紀伊國殿の容子偵察に來れとの命令を領承き、存觸れたる順禮姿に身を假裝して、一本の柄杓、一領の笈衣、松坂までを半兵衛に送られて、彼の事變の後は膽大くも紀州街道を獨り辿りつ、故意と尾鷲より那智にかゝり、紀三井寺より粉河に詣るものとして、今此の吹上には來れるなりけり。

かゝる剛健なる少女なれども剽賊山豪と思ひ侮れる我が目的はからりと外れて、紀州殿家士吉見喜太郎、加之其人が一癖あるべき立派の武士・我が額に書きてあるかを讀むかの如くに直地と我が居村、兄、自己が身上まで指されたるには愕きたり、餘りの可怖しさに思慮も失せて彼女は實路を奪うて逃遁むとしたるなり。誰か知るべき、吉見も眞實は其の案外なるに喫驚たらむとは。彼は其の平生より得意とせる、罪人を操縦る誘導てふ方便を纔かに用ひしに無意にして掛けたる罠は、偶然吾に其の獲物を獲させむとせり。彼は益々疊み懸けて、「女子、什麼ぢや。其れに相違は有るまいな！」猶彼女が猜りもすべき氣勢と視て、其の利腕を無手と捉りたり。捉へたるは二の腕の急所なり、女子は其の提所の法に協ひたるに等閑の敵に非ずと了悟れるか、但しは愛嬌を視ふか、身動きも爲で月明に此方の眼睛をじろ〳〵と覰つ、「殿樣、妾を縛るのけえ？」「いや細縛はせぬ。又た細縛らぬとも限らぬ。其もじ、我們が問ふことに善う回應て、有體に物を言はゞ那麼で細縛るか。なれど然も無くば……。」馬手にて捕繩の端を微と見せたり。「妾、はア縛られる因緣は無からすやア！」「因緣は無くとも此方にて胡亂の者と看認れば容赦は無いぞ！　汝は其の、今の、有渡郡安居村の三四郎が妹で有るか、又無いか、有體に匿まず發揮と曰へ。斯ういふ吉見喜太郎は、和歌山が家中の町奉行ぢやぞ！」彼は語氣を稍暴くして、彼女が面を礑と睨めたり、月光を浴びて飽まで白かりし處女の色は倘時に漸蒼味を帶びぬ。「白はなきやア縛ると言ひなさる。白ても大方縛りなさろ。妾の兄樣御倖で死だ其の妹だから……！」傺くと聞くより吉見は、忽然眼を睜りて、言下に說破すべき與の體なり

しが、又俄頃に其の氣色を換へて、一其の心配は
すべて無用ぢや、其も兄の御咎になつたは駿河
の事、當紀伊國では毛頭以て差構は無い、いや
構への無いどころかや、其方も存知ぢやらう當
家中の牧野兵庫、其もじが兄の腰押の科で、此
ほど松坂で切腹した。其の兵庫は殿の御愛臣。
兵庫最期の際、呉々も其方が事を申し遺いて、
萬一三四郎が妹と名のる女、我們を尋ねて和歌
山へも來ば善う見繼で遣はされい、彼女は駿河
に在らうと思ふが其後は便りも聞かず、定めて
活計にも困るであらう、自然參らば何卒其者が
一生を見棄てずに……と斯う申して相果てた、
因て殿にも、右の次第で萬一其方が見えたらば、
と有難い御意なされて、我々も其れとなく配慮
いたした最中ぢや。處へ、其のお主が容貌の三
四郎面體に酷う肖てをッたで、倘やと箇様に訊
うたのが不思議にも的中たぢや。喃。されば怖
い事も恐ろしい事も甚麽も無い。結句は殿より
御扶持米戴くやうな結構な身にならうも知れ
ぬ。疑念にも及ばぬ。愈然樣ならば身と與に
城下へ參れ。」話の中より處女は潸然と泣出だ
しぬ。其の涕泣の仔細を問へば、彼女も眞は兵
庫を便りて當所へ來りしに、其れが既や世に亡
き人とは力も身も落ちたりとの事……

（八十六）

「彼女は怜悧しき奴ぢやの。」と殿は御言ぬ。
「いかにも怜悧しき、甞き程の奴でござります
る。」と喜太郎は應へぬ。「はゝ、悄いとは申す
な。彼女が少齡で、獨步敵地へ入る、思へば那麼
ほどに悲傷しい事か。吁有爲奴ぢや。可愛い
奴ぢや。」殿は感涙の御眸を暗に瞬かせつ、稍
うち傾首け給ひしが、一芸を業に使役ふといふ
は、醫師の良ぢや。然やうの奴は驅使方で、
案外の役に立つもの喜太郎其方、自宅に養きて
愛傳りて取らせ。さるにても……予も看よう。」
「御覽ぜられまするは御尤も。然りながら、御油
斷はなりませぬぞ。」と彼は危惧むものゝ如し。
「いや、其方は、いかう心底長怖たものぢや。は
ゝゝ案ずるな、然る程の小女郎、多寡がち
や、多寡がちや……」殿は同じ言を反復させて、
御嘲笑の氣に見えぬ。「いや其れが其の……」と
又申すを。「ま、可いは。召伴れ參れ。但し衣服
も昨夜のまゝ。其姿なるが所望ぢやぞ。」

* * * * *

彼は、彼女を女駕にうち乘て御廣敷通りを
御奥に入れつるなり。大納言殿御常間は、五十
五萬石の格に比して、然のみ美麗といふにはあ
らねども然りとて紀伊國の太守、御三家の御一
家、黄金の砂子を濃き塗けたる御襖には、金襴
金の御引具、紫色の厚總はそれに垂下れり、雲
繝縁の御疊敷も二重敷れるやうなるに、金蒔繪、
御紋散しの御手箪笥、料紙硯、御曲彔。御刀懸
は御褥後にありて見えねども、それも同じき御
品なるべし。但見る一間、十餘疊の天地、金光の
燦として、銀彩の爛たる中に、殿は白綾の無垢衣
に、唐織の御服を召させて白き厚綿の御褥の上
に御座なされつ、御膝には大形ならぬ銀の手
爐と云ふ物を安かせて、徐かに御掌を焙らせら
る。御年齡四十一二、只今は御燕居の時とて然
ばかりの威嚴は佩はせ玉はぬも、天然に領け得
させ玉へる相貌は堂兮威風凜兮、設ひ什麼なら
む膽壯く、魂健かなる者なりとも、這個御容
儀に對して、狎れ呢づきまゐらすべき樣は見え
ざりき。

駕より出されたる宮は、今此の震慄しき御前
に在り。喜太郎に叱、叱と注告れ、抛け出す如
くに其處に四乎と平坐れるが、怯めず臆せず、
瞬もせで、銀燭の目眩しきまで灼ける耀光の
下に殿の御面を穴の明くまで注視りつ、「はア
御前樣は殿樣かアえ？　妾、お初に御目に懸り
やす。妾、駿河の有渡濱の、久能下の安居ちふ
村の宮といふ女でおざるがやア。」

にして、深くも謝せず、切りに其の御菓子を注視りて念ふ樣ありたるが、軈て無作法に掻攫みてむしや／＼喫ひつ、「殿樣、お茶一杯。」「はゝ次の釜前にて、獨服にせい。」「え。」「もう廢止やれ其の駿河訛、田舍行儀、見たうも無い、以前の民部が傍婢の宮になれ。」「あんだッて？」「甚麼とは未だか。汝は故意に田舍女を假裝ひ、無禮を、無禮をと振舞ふが、其の今の饅頭の給べ樣を見い、附けて取らせた楊枝もて四片に割り、扨て掻攫みて打喫ふ、農家の小女郎が左樣の物の喫ひ方するか。されば獨服で喫茶えと申すぢや。然りながら宮、其の苦心も悉皆徒勞ぢやぞ。正雪めが行爲すところは皆天理に逆うて居る。人を陷し、人を苦め、人を損傷ひ、世を攪亂す、いづれも天道の與せぬ所ぢや。其の順逆の理は追々に予も説て聞せうが、先づは喜太郎に在りて人間の履むべき常道といふを聽け。今日は是れにて退れ。然りながら、あゝ有僞奴ぢや。」此の御意の半より、彼女は拋出だしたる足を斂め、崩したる膝を改めて俄頃に其容鞠躬如たりき。肅敬みて手を支へ、頭を下げたる、口狀も叮嚀に、「では御暇を仕つりまする。喜太郎樣、御前宜しう……。」今更ながら喜太郎は直迹と目送りつゝ、此の化性の女を睨めたりけり。

（八十九）

寛永二十年は暮れて、廿一年（此年十二月正保と改元）の春とはなりぬ。去年の暮より雨寡くして西北の風多く吹きたるが、江戸にては咽喉の腫れ塞がる病疫流行れて、爲に死する者夥多し。將軍家にも此病に罹らせて、奥表の御醫師等、種樣の御治療を申し上れどもはかばかしき御氣色なし、結句は御大切なんどの沙汰、世間に聞えしほどに、麹町の御館なる江戸詰の家老水野對馬は驚きて、取敢へず其の趣を御國元に注進す。此使夜を日に續ぎて和歌山に參着し、委細を披露したりし程に、殿には以ての外の御仰天にて、恁くては當所に安閑として在るべきに非ず、此の三月は參府の期なり其を二月早めて急ぎ出府すべきもの歟、其れ前の御他界とあらむには是非なきも、萬一御存命の間に合はゞ御病床にての御目見、御遺言の樣をも承はるべしと思ふは如何、との御諚なり。重職の人士口を揃へて、げにも此の御儀、御尤もと伺ひ奉つる、若君樣（竹千代君、是れ四代將軍家綱公なり）既に御誕生ありしとは申せども、是れは一昨々年の八月（寛永十八年）にて、未だ御丸にも入らせられず、當年纔に御四歳なり然らば其の御後見の義、當御家か、尾水兩家の中たるべし、其の節には御在府と候はざらむも如何、其の餘にも仰合められの數にも候ふべく、然なきも天下の御大事、殿樣ましまさでは宿老中にて決し難き義もござあるべし、是れは火急の御出府、といふ衆議は一同決せり。然らば有の何の急使をまゐらせよ、誰彼と言はむよりも大學參れ、との御意によりて、渡邊大學、其座より宿所にも歸らず、御判の物頂戴して打ち立つ是れ正月の廿日なりき。和歌山より江戸までは、百四十六里餘なり、一日五十里を走るとして、三日にして着府なるべし柳營にての僉議一日、即日彼地を發つとすれば、遲くも當月の晦日までには其の左右のあるべきものと人々の待つ其日は過ぎたれども大學は勿論、飛脚も來ず。什麼にやしつらむ、此の冬涸に川留とても有るまじきを、其ともに大學自身の病氣か、或は將軍家眞正の御大切（薨去の事）とならせられて執政衆物も手に着かぬなる歟、兎角は途中までの追懸の早打を出だせといふ其の評議は二月の二日なり。

朝より雪は萬字と飛び、巴と卷けり、衣に落つる梅花にあらで我魁けといふ壯士等はいで

ゐらするも、其件の大か小か、緩か急か、といふに胸を惱めつ只管御緘なる彼の長文の狀なるものに瞳睹を注ぎぬ。殿は良有りて、「大學、扨も意外の義ぢや。此狀は柳營老中共より渡したか！」はら／＼と纍せし憤涙を揩き拂ひて、大學は應へぬ。「御沙汰通り、憎くい奴！　其狀は伊豆殿（御老中松平伊豆守）御下渡とて、其の公用人奧村手より……。」「訴人自身が持參つたとか？」「いや其れは封狀に、飛脚持參、右公用人奧村方へ達したるもの。其の飛脚は名古屋の三度屋（飛脚屋）京屋が夫と申しまする。されば此狀は、もとより以て出所不定、表立ての御取上には相成らぬ物、且つ毎事公儀を重んぜらるゝ紀伊國殿御所作として有るまじき義とは存ずれど、たゞ其の、此のほど松坂にて燒死せしとの御申立ある牧野兵庫が猶世に存りてかゝる曲事を行ふといふ、奇怪の至り、且つ右の狀中にある事項の上に於ても、當方些少か聞込みの義と符合するかの事あるにも存ぜらる。旁以て然るべき衆一人を急々に差上せられ、目安き虚實、伊豆守目前にて眞直の御申開き、御光も數……と右の奧村、傳達にござりまする。」「むう。而て伊豆守、同列にも相談とか……上聽にも達せしとか……いふ如き氣觸も見せつるか！」「いや。然様にも。……なれども奧村が口氣、好意、好意と申すうちにも自然喝破がましう、天晴れの御大事ともござあるやうにも聞えまいた。」「むゝ、扨て參府の義は？」「上樣御不例、追々御平常のやうに渡らせらるゝに仍て只今御急ぎの御出府は……」「無用とかむゝ！」殿は御胸に掌を中てさせ、御苦悶の體斜めならずに見え玉ひしが、「こりや、誰ぞ。老爺を喚べ。」老爺とあるは、田邊に在る、安藤帶刀直次なり。

（九十一）

安藤帶刀直次は、前名を彦四郎、又は彦兵衛といふ天正十二年四月、尾州長久手の合戰に池田勝入父子を自身槍下に討つたるを初として、其前には姉川、長篠、遠州の犬居、其後には大阪冬夏の兩陣にいたるまで一代の武功數も知られず、故御所樣（家康公）にも殊に御心易き交ではあり、其の武勇を稱せられて御愛子常陸介殿－賴宣卿－の御保傅となされしより爾降、外に對ひては紀州男が面を磨き、内に在りては是非賞罰を明瞭かにして、其君と治を籌ること三十餘年、今は行年累りて七十八歲、昔日の元氣は喪せねども、流石に老病に身を冒されて和歌山へも出仕せず、其の居城牟婁郡田邊にありて餘年を樂しむ。

偖く、年老い、身憊れたれども、今も猶ほ紀伊國五十五萬石を鎭定うる要石として、上下の重望は其の肉落ち骨露はなる雙肩に懸れり。されば殿が時ありて、老爺をと召す、其の老爺とある御沙汰の中には、自然國家の大事てふ意味を含めて、帶刀どの出仕とあれば城中城外、農商の諸民、出家山伏方外の輩にいたるまで、先づ其の件の甚麽なるべき大事ならむと、此の老て忠なる人の方寸に頼て術好く落着らむを疑はずして、安堵の胸を撫るてふ。想ふに、這個老將が鐵の如き冷然なる眼光を彼等は視て拔苦與樂、慈悲圓滿なる彌陀の白毫とも拜むならむ。

此日の、老爺を！　も亦た形の如き大事なりき。なれども和歌山より田邊までは二十里にして遠し、此方よりの御使は明早までには到着くべきも、彼老の參着は疾きも猶三日の後たるべし、目下に差懸れる急變とにはあらざるも猶一刻も疾う御對面をと思し食す殿の御氣色を、水野は覗ひて、「兎角は往返の口程、御待遠に渡らせらるゝ。倘か其の御狀、私持參仕りまして帶刀意見を聞き、右を一々早馬の書通にて啓上とござりましては……？」甚麽こそ、

とはあるも偖其の勘考の御首を傾けたまふ時、御近習の一人は遽たゞしく走せ來りぬ。其者が手を支へ、何事をか言上といふ隙も有らせず御納戸衆瓦落々々と引開させて、突然たる哄聲、「や、殿、帶刀こと熊野の靈夢を案つて參上しまいたぞ。聞けば大學、只今の下着さうな。訴狀についての評定は甚麼とでおざツた、あはゝゝゝ餘りに殿が自個怜悧う振舞はせらるゝから箇樣の失措も果には起る。偶には些の灸おめさるゝも好い鍼砭ぢやろ。はゝゝゝ。」彼は其の臑肉ばかりの口腔を張開めかしつゝ死なでは休まぬといふ名代の讒口を纏き立て、殿中御免の杖に腰を伸し、えいやとばかりに殿の御傍に座を占めて、「あゝ好い氣味ぢや。前途は長遠い。今から懲りるも遲うは無い、善くおざらうよ、あッはッは。」憎きは憎きも猶ほ懐かしきは恭敵と、談合の敵とかや。況て今の此の老爺が蔦かるゝ迄なる不思議の參着は、甚麼さま其の靈夢といふ權現の影向のやうにも御覽ぜられて、彼の戯謔をば苦笑ひし玉ひながらに、殿、「久濶しや老爺、此雪にも負けいで健勝は重疊ぢや。什麼にも今ほど……然るにても、權現の靈夢とは?」彼は痩肱を二つ三つ撲きて、「那麼の雪! 是ればかりの小雪! 遠州の大居の陣には廿日餘、丈に餘る大雪の中に埋ツて、四郎武田勝頼が粉と自慢した直次が、負るのなんの!」太郎作は其歡びの口狀の執合しぬ。「やと、老人の御元氣は今に初ぬ。眞實は、其の、有について只今拙者、御分在所へ推參と致さうと存じたところ、折柄の靈夢は何寄りぢや。但し其の靈夢如何やうの神告? 仔細衆う。」帶刀は啞然として大笑せる面を轉して、「あッはゝ、仔細も無い神の御告。いでや殿へまで……。や。こりや人々、乃爺が神託を聞かうものは、殿と太郎作と、疲勞は爲つらうが大學ぢや。自餘は皆退いた〳〵。」我鳴られて諸士は皆御次へ遠慮しぬ。殘れるは中奧の御黄書院に主從只四個。其中に得々たるは獨り此の奇異を銜へる老將にて、他の三人は思ひ兼ねたる其の眉を比しく寧めつ、彼が訴狀の顚末を知れる理由と、不思議の神託といふ吉凶の什麼に唾を吞みぬ。

（九十二）

「殿、神託の本尊は江戸にぢや。」「江戸とは? 關東とは?」と水野は驚きぬ、大學は其の疾速に呆れぬ、殿のみは然もこそとの稍御合點はまゐれる樣なるも、猶疑訝の御色は霽れで其面を注視せ玉へば、帶刀は頷きて、「豐後からぢや、內實は阿部豐後の手許からぢや、豫て箇樣の事變もあらばと囑託で置いたが……那者は律義の奴! 散々と家來を早打にして危急を告げた。」老人が目を瞋るを、殿はされぱとの御笑顔、「でも在らうかや。然もとも思うたが……。で神託か。神託とは好い。」老人は其の御口を罷つけて、「直ぐ又た然樣の事を仰しやる! これは神託。眞實以て熊野權現の神託ぢやは。便ち、權現は豐後の口を託りて宣せらるゝ此の老犬は又其の託宣を夢の中に承はる其の道理ぢやは。殿は日來に佛神を崇敬々々と言はせらるゝも、表面の虛信心、眞實の御心が無い。其故に箇樣の時も神明の冥護を被られぬ帶刀は口には言はね、誠意に權現を信仰する。おぢやに依て斯樣の御加護とある理由ぢや。諸事自個怜悧う思し召す、甚麼のそれが凡夫の料見! 誤謬の頂邊ぢやは!」頭顱粉虀に取擎けて苦笑ともせぬ老骨の硬さにはさしも上手の殿が御手にも自然餘りて見えぬ。水野は其れを執做し顏に、「御老人、それは枝葉ぢや。御折檻は後事、只今の此の訴狀について……。」「いや。」と彼は頭を掉れり、「……其の料見御改悛しやらねば、諸事が無駄ぢやよ。今の言ふ自個怜悧うに振舞れては、事を爲損じ、其の爲損ずる度每に、ソレ

老爺！ヤレ老爺！ 樫様の御世話をさせらるる。成る程此の老爺は保傅ぢや、其の果實の世話するが本人の殿の爲ばかりで無い、故御所様御爲とも存ずるで、爲るは敢て不足は言はぬが、我等當年七十八、何時まで、の餘命とおもふ！ 其の我等亡い後に又其の花やりの料見で爲損ぜられて、ソレ老爺と召されてからが冥途からの出仕となるまい。それで紀州の御家滅却！ 其折に滅却なりや今爲たとて同一いぢや。肝煎るも馬鹿々々しい。一頻りに強抵られて、殿の御手も已むを得ず額に加りぬ。「道理ぢや。赦せ。追想ば予の爲損じも大分ある……有るやうぢや。」一有るやうぢやかえ？ 御覽ぜられ、兵庫訴狀は皆尤もぢや。三十七ヶ條、一々道理ぢや。帶刀が老中ともありや、彼の一二ヶ條でも殿を平穩は措き申さぬ。但し其の根元はといへば殿ばかりで無い、第一が御母親様（養珠院殿）其れが不覺悟で渡せらるゝに故御所様も宜しくない。たゞ殿を末子の、血の餘りの甘凝嬌放題の、我儘一途に育てられて、——それが可く無い。」一いや、謝び入るよ。もう申すなよ。父上、母者御事など言うて呉りやるなよ。悉皆予が不肖ぢや。」彼が首は粗忽にも擲り止まず。一と言はるれば、殊勝に聞え申すが、いや中々油斷がならぬ、第一が、其の御身の口頭の甘が苛い御殘酷ぢや。後々聞けば、御身は、故織田殿の敏智さ、太閤の膽の太さ、故御所様の御武略とを一緒にして、攢めて有たるゝなど、或る馬鹿者の阿諛たことを眞に受けられてか、御自身も然思はるゝなど評ふ者もある。これ實ならば以ての外、沙汰の限りぢや、織田殿と太閤とは我等傍近う在らねば知らぬが、故御所様と御身、比較も！ 事も愚かや結局は父と子ほどに差違ふ！ 故御所様は御機轉染みたること、竟ぞ何時しか御せられぬ。御身は其の機轉を鼻尖に懸けらるゝ。是れが天下取と和歌山の領主との天然の差違、是非も無いのぢや。天下の大將に御口不調法も一つの藝、他に實行を見積られぬが何寄りの德、さればこそ太閤在世には、二代の天下は前田殿（利家）と誰も人も皆思念て、江戸殿といふものも無い。あの目敏快い蒲生（氏鄉）すらも、なんの彼の三河の吃口殿、何事を爲得らるゝかと嘲笑うた程の事ぢや！ 其れが何時か、人の見ぬ間に、身上を肥太されて、世間の目の注くところには木挺でも動かぬ大將と御成りなされた。御身様は其事が什麼か？ 小刀利の小細工好ぢやで、何一つ色立つた事なされぬ中から、ソレ謀叛の、ヤレ旗上のと、目抉ら立てらるゝ。手拙足拙八重縄を身に纏られて何事が成就る？ 現の證據が、あの領内の鹿狩をお爲やる、首様薩國の安濃津では籠城の支度する、これで甚麼の大望か？ はゝ及びも……思ひも寄らぬこと。と言うて其の生得は變改されぬ今更ら其の御所様の吃言の眞似などなさらうと思ぼすなよ。實地は遣てが駄目ぢや。たゞ天然の本分を守つて身に着いた和歌山五十五萬石を大事に懸けて浪人ぞせりなど以後は爲られず、江戸の御爲を眞實無妄に存ぜらるゝなりや、我們、這回の一埒を什麼にか擔當けう。然なくば否ぢや。公儀御無度までも無い、帶刀、此場から浪人する。」

（九十三）

今は四十二の可老爺になり玉へる殿が、尚だ了愛可愛ゆう、ちよこ〳〵走りの五六歳の頃よりして、御傍にまゐりて、和子さまと申せば、彥四やと何する、君臣よりも兄弟、否叔姪、後には寧ろ父子の如き御待遇なる久しき交の帶刀とに申せ、然りとては詰びたき隙、稱きたき儀の惡口、餘りなる無禮、過言、と水野と渡邊も最初こそは目も瞋らしつれ、終局には自己さへ背に冷汗の滲み來る、耳痛き偕杖打たれて、太郎作、肩を竦むれば大學も領を縮めつ、其の霧煩に殿

はと觀ずれば、眺むる暇さへ、此途にかく佇られては拝辭も無能、分疏も無益、たゞ其れに思ふ儘を心の行く限りに霽かせて、自然なる物の鎮靜を待てやとばかりなる御拔首、誰人ぞ味み得て好き。苦しくも降り來る雨か三輪が崎、佐野の渡に家もあらなくに！　げにも老人が此吐言を驟雨と見れば、曠き野中に笠宿りする樹陰さへあらぬ人々の形態。

漸くにして、口角微しく顫ぎて、雷と轟ろきし彼が吼鳴も鳴り歇みぬ。雨人も稍蘇息でたる心地。目を見合すれば、殿は纔りて御眞顔なりき。御太息を稍多時吐かせて、「大望といふ！　其方すらも然言ふは遺恨に堪へぬが、これも右にいふ予が不肖ぢや。——が、案じ事すな、予は以前の常陸介ぢや。上様の御爲を存じて柳營の御代萬歳を祈るよりほか別心も無い。其の萬歳を祈らうが爲め、上様御爲を慮らうが爲に些少武備をと心懸けたが結局今日の迷惑ぢや。此義は其方熟う心得て然意得て、萬事好なに善う頼む。」彼は俄頃に唸き出だしぬ、「併むとあれば……それは心得て賴まれも爲申そが、只前以て斷わるは、訴狀の反證！　其れが見事に立つか、什麼ぢや？」殿も、有繫に此時は、眞實に其驚愕の色見えたりき。御側なる兩侍は、今更の様の嘆めしき、甚麼の汝が其の二の足て蹈□の□想、ようも他には吐た義理と以相むを、彼は臆しもせず其□□を當□めて、「仔細はぢや。彼の濟後が口狀の意衷を熟う□ふと、兎角は此事容易ならぬ……。彼の□、實は老中同列の評議にかゝつて、猶ほ掃部（井伊直孝、此時大老たり）が耳にも入つて、□さへ上聽にも達したらしいぢや。處が、當家謀叛といふは、其前よりして江戸市中、殊に近國の評判にも上つたもの、謂はゞ彼の狀は其の評判に、實事の注釋を加たもの。於是御前の詳議といふも種々の差あつたと思ふが、結局は斯う落着したらしい。第一が當家重職の一兩人を召し上せて、嚴重の鞠問して、實を白狀さ。其れに依て然度の事あらせうといふ、是れ一つ、第二が、訴人の兵庫を召捕て、吟味を遂げ、品に寄ては當方者と突合せの白洲をも開かうとある、是れ一つ。先づは此二ケ條らしい。さ、其處にてぢや、將軍はもとより剛健の御氣象、御身が前なれやが和歌山の謀叛ぐらゐを其實とも思さぬ、事有らば太平の代の恰好目覺し、御一代の弓矢の根締、とも御覺ぜられう掃部に讃岐（酒井忠勝 是れは御身様と御入魂、思し食の程も合點の筈、爾後は又た我等子分當家において異朋の條ないは此の老等より日來熟う申してある。依つて御□□□……あの伊豆ぢや。是れも御身見るやうな小□□ぢや、いや油斷のならぬ曲者。彼の百萬石の御違約から兎角に當家を鬱悒いものにして、何ぞは、角ぞはと目を注くる、其れには又御身が、彼の壺に嵌るやうの事御仕出來しやる。で、旁、鵜の目鷹の目ぢや、其の鵜鷹の目を見ぬきをッてか彼の兵庫めも他所へは遣らず、伊豆が許へと與れたと見ゆる。是れ一つ、當方が苛い難義ぢや。なれど其は又た我等の使ふ方便の箆がある、伊豆め、毫も我等目からは畏怖ぬが、窮るはあの馬鹿者の兵庫ぢやよ。それが今後の成行で、彼奴め自身に出頭て物を饒舌るが、一條二條なりや睨め殺すといふ法もあらうが、三十七ケ條是れには我等も遊却しつるよ。元來が、又た、甚麼とて然様に許多の矢策は造られつらう？　彼れほどの氣に召された者に、恁麼とて然は恨まるゝ様の事御爲やッたか？」帶刀が根掘葉掘の問に殿も甚と御面目無氣の體なりき。

（九十四）

此の訴狀たる、木偶たる奴が傀儡なる者に使役はれての所爲とは早や御推量ありたるも、其の木偶の兵庫たる奴、彼抑甚麼理由に、從前

の御恩を餘所に、御仁惠を仇に、恁う執念くも、怨恨、忿恚、禍祟りまゐらす賊といふをば、神ならぬ殿の知ろし玉はで、御自身すらも物の御不審に堪へざりき。殿は已むを得で、彼が駿河にての一埒より、公儀御咎め、其れが松坂に微行び來りて御謀叛を强勸申せし事、續き久居雲出の事、正雪の出現、其の仲裁、謁見の始末、問答の概略、扨て御在所にての變事、其の曲者の兵庫に肖たりし事、彼と正雪との關繫、其の親しう、御覽ぜむとての御茶の會、其夜における彼が狼藉等までを、詞短かに要を摘み一語らせつ猶且つ、彼が切腹との治定の際、或は正雪めに欺騙らるゝ事もやとて云々の旨、密に彦右衞門へまで仰せ遣はされしが、其夜測らざる松坂の燒亡、然も其の火災のやう、御合點のまゐらぬ事のみなるに、當和歌山もと、吉見喜太郎して城下を警戒せしめられしに、思ひも懸けぬ正雪が者、宮といふ少女を奪たまへる事、それらの全般を一わたり御意なさるれば、太郎作も大學も、御詞の遣ちたるを拾ひて、缺げたるをばおろ／＼に補ひぬ。殿は恁くして、「されば喃、彼奴が心底、予にも解せぬよ。倘くば其の松坂を燒いつる奴、其夜に彼を奪取る奴の中途の讒構かとも想ふなれど、是れとても證は無し。甚麽と手の着けやうも無いには礑と困却るよ。」「いや、其の御手の着け方、屹と案じ出いてござりまする。恐れながら、右につき、私に永の御暇、下されたう存じまする。」思ひ切たる體をもて言ひ出づるは大學なりき、彼は這回御大事も、自然我と兵庫との確執に起因るかのやうに感えて、身を棄てゝ其の所志を果さむと決意せるなり殿は驚かせて、「爾て其方は甚麽と爲る？」彼は毅然として其腕を摩り、「君、辱めらるれば臣死する！ 已むを得ませぬ。唯今の御諚、私分として其儘には伺はれませぬ。察するに兵庫め、正雪許へも躱れて在りませう。先づ其れを屹と探索し、品にも寄らば正雪をも召捕り、訴狀の虚妄、讒人の根元、江戸役人中の耳にも立てうかと……」帶方は俄に遮止りて、又彼の鐵頭を大地震の如くゆらゆらと掉りぬ。「ならぬ／＼。志は殊勝なも、若い／＼。手段は知らぬが大抵其許なに、正雪が屋敷へも押寬て膝詰の論判でも爲るのであろ。未可い／＼。兵庫の出頭ぬは前にも言ふ、當方の僥倖。正雪を今せゝるは、恰ど蜂の巢を毆つやうのもの徒爾に敵のみを倍す、不可らぬ趣向！ こゝらは其許如きの壯者では行かぬ。此の老夫が往懸の駄賃、先づ温順しう見て後來の話柄ともさッしやれや。」彼の手段は、果然其の談判にもありつるか、赤面せる如くして大學は默しぬ。雖然心許なきは、其の獨自瞧下める老人の趣向といふなり、往昔は然こそ有りつらめ、騏驥も老てはなる現下は七十八の老翁、口頭のみは達者と見ゆるも、其肚裏に入らば昏耄もしつべし、かゝる爺に此の一大事を委任せ措きて、一旦過失たらば甚麽とかせむ、世の胡盧のみにて罷了ことに非ずと水野は良膝を寄せつ、「後日の話柄は又其れとして、御手段といふ、甚麽樣の妙案におざるやら。我等重職の分として一應は承はりたい。」殿にも此需には御同意との御氣色なりき。老人の眼光は、端無くも睨焉と晃りぬ、「我們に言へとや？」「はッ。」「殿の我們を御喚なされたは、只其の談合を御爲る爲か、但しは此の老爺を其役に御使役もなさらう爲か？」殿は、失敗ぬ！ との御色を忙しく、「いや、其方を賴まう爲め、今言ふ全般を一任さう爲ぢや、紀伊國の存亡は只其方の方寸一つ、手段は問はぬ。」「ンむ、然もおざらう。凡そ此の御使者、見た處此の老夫に優らう適當仁のあらうとも覺えぬ。又た手段は際に出て轉化すぢや、疊水練の傍目評定甚麽にかならう。其の手段を强て此所で言へとあり

や、此の老夫に爲損じて、腹切れと言はぬばかりぢや。何故と申しやれ帶刀も男兒、一旦此座で口外た言は金輪變へぬ、されば案外の敵に遇うたりや討死する迄のこと、四郎が長篠の無理戰を再演るぢや。」「然樣の事は廢止て欲しい。」上見ぬといふ鷲鼻を、嘲笑む中に蠢かしつゝ、彼は傲然として其邊睨めたりしが、「では有るが、一方の方略は和殿らにも見せる。殿、其の正雪が者の小女郎喚で下され。」

（九十五）

雪は閑みぬ、澄滑たる雲は濱風にいつか吹拂はれて、瑠璃を流せし如き夕暮の虚空には、金色の光を甚と爽冴に瞬かする星の影、六つ七つ、五つばかりも晃めきぬ。御庭の築山、常磐木の茂れるわたりは、枝毎に被る綿帽子の姿、清げに、羞恥を含めらむ如きが面白く落葉せる方の森には、たまらぬ枝にまた風情を見せて其の千百の又なる所に纔かに殘れるが、些し融けて、又氷柱となれる、昔し誰が捲ける球籠の記念かと可懷かし。今までは聲も無かりし御池のあなたに、瀧の音の潺湲と旣や響初めたる、さすが暖國の下溶の早きも知られて、中洲の島をば眞白に包被みたる鴛鴨の床へ白練の帛きせつるやと見られて好笑し。

「此處は御庭ぢやぞ、平人の拜むことも叶はぬ御場所の上に今夜はまた珍らしい此の雪景ぢや。熟う拜見せい。」彼處の池、此處の樹立と指示しつ、案内顏に進み行く老人の迹より、「ほんに御見事や、清水の港の雪景色を、久能寺の觀音山から眺るやうでござります。」幽淡に回應つ、蹤踏と附添へる娘あり、頭髮は、此ころ江戶より渡來ぬとて、和歌山の家中の娘が持囃やす、砧とやらむいふ人品好き島田に結ひて、前髮の端をば長う、髷と髱との間に引けり其の髮飾とては白銀の打延の簪只一根。其の飾らぬは憖ひ事太く修飾れるにも優して、彼女の豐肥かに、可愛ゆう、凜々し氣なる若衆顏といふ瓜核の面に善く相應りつ、身には紫色の曙染の振袖、それを合品てふ下襲の上に被て、黑き織物の帶を背高う結びぬ。彼女の面色は今見る蒼空の淸きより淨くして、其眼は其空なる夕星の影よりも冴けかりき。

彼女は宮なりき。彼女は去歲の暮、殿の命とて彼の吉見喜太郎が方に預けられしが、今は旣や三月も經ちて、年齡も亦一歲を加りぬ。去年ですら齡よりは太と大人て長大う見えしもの、今年はする〳〵と背材の延て、手脚肉肥き額色整調ひて、其美は更に幾層をか倍したり。家中擧りての評判娘、なれど當人も素性を匿み、喜太郎また彼の夜の事を人に言はねば、或は吉見が隱兒なりといひ、又た追ては彼が變妾にする、其を今飼ひ馴らす最中なんど不思議の評をさへ立てたるが、什麼にして又何處よりか漏れけむ、殿が御前にての事、其折の御待遇のいと御懇切なりし樣など微々とほのめく程に、扨は然る貴人の世を忍びもおはすなるか歟、實にも彼の氣高き御有樣、尋常とは見えざりしが、大阪の！　御落胤か？　但しは浮田殿、八丈島にて設けられつる其の姬君か？　兎角はあの眼中は、など此の奇異なる人に附たる奇怪つ評は城の內外に隱れなく傳播られつ、有爲轉變の世態を喞つ老人がさし漣む淚、瓊桃木瑤の巧をといきたる壯年が評議の涎は思ひ〳〵に流されき。

閑話休題として、彼女は今夜御前に召されたり、今は娘と喚び、父と呼ばるゝ喜太郎も差添として出頭ぬ。毎もの御密議とおぼしくて、其の御場所は築山の御茶屋なりとあるに、御庭口より相伴ひて入る彼們は今其の途中たりき。池を回ること一遭、老人と處女ははやく御茶屋の入口にあり。

「おゝ宮か。好う參つたぞ、おゝゝ去年より又

一層成長うなつたな。」いと御心易う、杉の苗でも譽め玉ふかのやうに仰するは殿なり。其の御次には豫て見知れる水野太郎作、これは仔細なし。たゞ其れが前面に在る、殿と斜方の御對座と見えたる老人が眼光の鋭嚴さ、宮が身には毛髮悚立て感えぬ。言ふ迄もなく、是れは安藤帶刀にて、大學には休息の暇を與へ、太郎作と二人、殿の御供して御書院より此の御茶屋へと今がた來つるなり。老人は此の處女に先づ鋭尖しき一瞥を與へつ、喜太郎を顧りて、「吉見、什麼ぢやな。お手前も最う六十か、我們は八十ぢや、斯う年を老ると不可ぬな。廿年前の冬陣には何だ元氣ぢやッたが喃。」喜太郎は會釋せる面を扛げて、「何さま、廿年！ 雖然其際と今日と御元氣に御變りは無いやに見上げまする。」「いや我們より、御身は……何が未だ元氣な事ぢやの。其の凄い眼など持たれて。あはゝゝゝは」此時に、宮が心に、漾々不好ぬ爺さま！との不快究まれる感を起しぬ。

（九十六）

不興の色を見はせる宮が面を、彼の不好ぬ爺さまは又た靜々と凝望て、「何さま是れは見事な容貌ぢや。其方は喜太郎が娘かや！」宮は無遠慮なり、「いえ妾は駿州の生立、紀州者なんどではござりませぬ。」彼女が語は、此の心も憎く面も惡き爺樣の頂邊に一根の探針を刺れたるなりき。とも知らでか驚きたるは喜太郎なり、殿の御前、國老が手前、彼女が無作法は其れを預かる偏に我が落度と、突如に袖を扯き眉を顰めて低聲に叱々と警誡むるを、殿は、例の、面白げに只微笑はせ玉ふのみ、帶刀は猶其の可怖しき眼を彼女に與れつ、「紀州者なんどか喃！ 然言ふお事は、駿河者かな？」此の不思議なる問の意を、彼女は容易く解し難ねて首を傾げき。「……眞實の駿河者なりや、當家の事を、然樣には侮蔑ぬ筈ぢやが！」と爺樣は嘯きぬ。哎呀！ 駿河者。甚麼さま駿河者、其の駿河といふ中にも別て我は久能の者、其昔しの大饑饉には此殿の御母親樣養珠院の御方とやらむに一村の生命を救はれまゐらせて、人種の盡滅のざるを得たりし者、其れが御陰に父母も幾年の壽命をか生延び玉ひて、兄も成育ち、我も現世の人とはなりしもの、甚麼樣其の駿河者！ 寢るにも紀州へ脚を向けては濟まぬ義理なる駿河の者！ げに我は然樣の御由緣の者なりしを。と今更にや悟れる、處女は權然たる眼を諦上げて彼を視つ、又俛して我事能ぬる、絲の如き太息したりき。

（九十七）

「然りながら駿河者にも多種ある。久能の山下がものゝやうに當家舊恩を目今も忘れで、只顧紀伊殿々々と慕ふもあれば、又其ほかには、自己が梟惡い巧計のために當殿を讐敵と狙うて種樣と調略する輩もある。一概には言へぬが喃……。」と其の可厭なる眼を斜向にして爺樣は再び此方を睥めぬ。處女は其れを視むともせず禁々の呪に遇へらむ如くに舌を緊紮て、疊の表皮も對撤さむばかりに其膝の前に眼光を凝注き。「……が、駿河者は一樣に義理固い、故御所樣が、彼國を御座所と御決めなされて、又た御愛子の當殿を其の御領主に御仕据ゑなされたも其故ぢや。な、其の賴もしい氣分といふを御存知からぢや。其方が其の妙齡で、この老爺に何ぢややら楯突くやうのことするも同是其の氣分であらう。面白い。」何やらむ得體の知れぬ老人が說法に侍座したる水野太郎作の心許なさは限りも無し。心竊かに以爲らく、此の調子もて大事の江戸の御使に立たむといふ、其れが其の老耄の老耄たる所以にして、他には論はず、自己のみ獨り合點頷する例の頑癖にはあらずやと、其面を凝望すれば、起初より事の情も知らで控へし喜太郎は、分別に倦ねて、疑懼の眼

を只虚呂つかせぬ。老人は其等に些少の頓着とも與れずして、「けれども喃、其の氣分も喃、善い方に向くれば至極善いがの、凶い方に役ふと又た木挺にも行ぬ。那の去年の夏であつたが、不條理ぬ徵發の行懸りから城代の奴等と爭論もうて、有渡濱あたりの馬鹿者めらが騷ぎ立てた。其の頂本の奴は、あゝ何たら言ふな、一分健氣には聞えたが、死なでもの事に身を果いて、當家に迄も迷惑かけて、――あゝ其奴の名を、お主は知らぬかや？」酎へ難ねたる處女が舌は遽に動きて、「其れは安居村の三四郎。其樣に訇うて下されまするな、妾の實の兄でござります。」瞻仰る瞼には、懷舊か、將た當座の遺恨か、睫毛に藏き餘れる露濁の痕あり。「おゝう然樣かや？」と老人は今めかしう小膝を拍きつ、「はゝあお主が其の三四郎が妹かや。其の兄が處刑の時、磔柱の上から遺言を受けたといふ其の妹の宮ぢやツたか？」事々しげに彼は此方の面を注視し、其眼を又上座へ轉けて、「殿、不思議の女を御扶持めさるな？　喜太郎、其方は此の宮の預人か？」此の不思議なる狂言の邪魔すまじとや、御回答もなくて殿は只首肯き玉ふ。喜太郎はあツと頭を下げたるのみ。「御扶持なさるも善し、御預りも不承は言はぬが、喜太郎、其方が日來の養育、然で無いとは相見ゆるぞ。日下の一言、紀州者なんどといふ。右の久能、三四郎が妹の口狀として耳に觸るぞ。何故に然樣の耳立つ口狀言ふやうには待遇うたか？」思ひも寄らぬ濺汁の、日ごろ父とも見る其人の躬に懸れるに宮は狼狽ぬ、「あ、申し、然樣のお叱言。右は妾、只當座の申し誤り。殿樣の御慈悲と申し、喜太郎さまの御慈愛といひ、なんの〳〵不足がなんど……」「いゝや言はせぬ。一時の申し誤りとて心に無いことは得言はぬものぢや。殿の慈悲、喜太郎が慈愛が然る程なりや、是れには又別の仔細――然言ふ意趣の無うては叶はぬ。汝諦う聽け。汝が兄の理由ない賴みで、當家では、大事の家老牧野兵庫といふ一人を失はれた。其上にも江戶よりの御糺度、殿をはじめ一同が寢食を忘れて心痛するも皆こりや汝が兄の所爲ぢや。其れ程の事見えぬ汝ともあるまいに箇樣の事を言ふ男子ともあらば帶刀平は措かぬ奴ぢやが！　汝は其の少女。但し汝は何者にか囑路を飼はれて紀州を惡しざまに、當家を善からぬもの樣にも言はれしな？　大抵は然であらう。然もなうては汝が然言ふ奴で無い。さ、誰が然は言はせた？」一曲扳れかゝる問訊に遇うて、處女が面は看る〳〵颯と發紅めるが、又た遽かに其を冷笑に轉して、「仰られますれば、いかにも、然る人が然樣に妾には申させました。」

（九十八）

瓶水倒建たる彼女が一句は、一座の耳根を驚かしたり。其の彼女に憖く言はしめたる然る者とは問ふにも及ばぬ正雪其奴なるべきか、扨其の正雪が何故かく迄には當家を狙ふぞ、其蔓を搜りて其の根に及ぼさば事情は或は知られむも、然りとては又此の小女郎の從前の猛々しさよ。其の手に乘らぬ死太き牝駒に轡を筷げつる老人の伎倆も凄まじきが、又た箇樣に手もなく落ちる、怜悧う見えてもやはり兒女か。縱し其れは甚麼ともあれ兎角は老人の手柄、と喜太郎も太郎作も膝を進むる、其を後眼にかけて得々たるは帶刀なりき、「誰ぢやな、其の本人は？　隱さず申せ。當方にも大抵の標的はあるぞ。」彼女は憎きまで可愛き片靨に微笑を見せて、「申しませう。妾に申せと御教へになりました其人は……」「むゝ其人は。」吻々たる笑聲を彼女は漏らしつ、「第一が殿樣。次が然仰せられます帶刀どの、貴老でござります。」

呀、這の業畜、又其の網器を脫けつるな！　設ひ心に甚麼樣の意趣あらむも御前を憚からぬ

無禮、惡題、重々の過言、爾は預人の此の喜太郎に日來の恩を仇もて報いて、無念の腹居らせて、家名斷絕さする處存か、憎くい奴、疾う下れ、」と吉見喜太郎、さしも老練の名物男も差當る殿の御發瓘、其の身が身上の一大事といふに勘辨の胸もや沸ける。黑烟も立むばかりに息卷き猛りつ彼女が長き振の袂を搔摑み、斷切れよと粗暴く引立つる。「あゝ待て、然は手暴うすな。」殿の御聲は遙かに懸りぬ。「ではござりませうとも到底這奴御用には立ちませぬ。箇樣と存ぜば先度の松原で斬てても棄つべき奴。殊に只今は御家の御模樣御要害の槪略、大抵見聞も仕つりましたると存じまするに、御憐愍の御沙汰は結局盜に鑰の比喩。這奴一分の義は何とぞ喜太郎めに御委任のほど……」「いや。然は申すな、今宵の此の召は帶刀所望ぢや。諸事は老人胸にあらう。先づ控え。」

御諚を聞きても老人がへの字口は俄に開くべう見えざりき、其の銅鐵の如き面に大濤めく皺を見せて、默睨すること多時、卒然として、「やア小女郎、何故殿が然迄の不足を爾ほどの奴に買はせられた？　又帶刀が、陽、爾何とて然樣に見た？」雷霆を欺むく大喝、掣電を壓する眼光、天魔鬼神も面を向くべき樣あらぬ叱咤も、身を亡きものにしたる少女は微笑もて之を迎へぬ。「ほゝ其の可怖い顏、何ぢやとて其やうには御叱りなされます。殿樣も御前樣も御自分から紀州者の汚穢しい根性。」「え、汚穢しい？　爾確乎と其證あるか。あらずば其頰桁、これ、此刀ぢやぞ。」老人は其小脇の柄、把れる拳もてしとゞ叩けり。「なんの駿河者、其の今の御詞の義理問い駿河者、女子ぢやとて譃は吐きませぬ。其の譃吐かぬ駿河者へ紀州者の皆さまが虛言を仰せられます。それが其の見下げた根性。證據は何程もござります。」「聞き事ぢや。む、聽から殿は扨て置き第一に此爺が不足から言へ。」皺膝のしく／＼と押進むるを。「然樣になさらいでも申します。先づ手近いは！　只今の其の御口狀、兄の三四郎御賴みの爲め御家老の兵庫どの御果なされた、續いて江戶からの御沙汰もあつた、殿樣はじめ皆樣が寢食も忘れて御心痛ある。——こりや御本心の御詞か御誓言にて今一度妾へ仰せられたうござりまする。」牧野兵庫が松坂にて腹切たり、世に亡き人になれりとは殿も曩日には宣へりき、是れは一種意味の御詭計にて、彼女が果然駿河より來つるか、又た松坂に潛伏ゐるか、其れが容子を其の口裏にて誘引き見むとの結構にはありつるか、其事を詐謀と強ひて申さば何さま御欺謀に相違なし、況んや今の帶刀が言はゞ彼女が兄なる者の爲に紀伊殿の對義を牽起せしを事過大く言ひもて聞せて、扨て云々に說落さむと計りたる、一時の口狀の表裏なるべきを、憖う柄を執られては什麼ぞや、と心も心ならざる一座は只老人の返答を其面に了得むと焦燥ちつ、握れる手掌に我知らぬ淺濡との滑を感えき。

（九十九）

什麼にや返答はと見る咄嗟！　一瞬くなッ——爾。其の兵庫の果ざるといふ仔細誰から聞いた！　思ひも寄らぬ老人が反問に裏を搔かれて、覺悟の宮もはッと狼狽ぬ、其を獰眞向より疊み懸て、「問ふに落ちで語るに墮つる、爾此の野狐、正體見すまいか！」睨み着けたる眼光は、彼照魔鏡の水を出でゝ世界の魍魎を照らすにも彷彿りけり。宮は益々色を失ひて其眼のみ凝視ぬ。「察するに爾は近く其の兵庫に遇うたで有らう？　さ、其の會うたるは松坂か、名古屋か、先づ其の土地から白へ。」物の光景、時分好しとや御覽じけむ殿は徐かに御扇ぬき出させ、唾みかゝる老人を暫くと遮斷り、俛向ける宮が前なる御脇をはた／＼と打鳴らさせて、「宮、もう可いは。箇程までに當家君臣を窘責んだりや民部

への義理といふも十分ぢやろ。喃、此れよりは其意を飜へして其方が親兄の心になり、當紀伊國を可傷と思うて當面る難義の爲に一分の力を盡くして呉れ。予が頼むぞ。」「いゝや殿。」と老人は憎さ氣なる目を轉せり、「又御身が其の慈悲立の甘騙し、然樣な術で行く女郎かえ――まづ見ておざれ。さ、小女郎、兵庫とは何國で會うた。其折り甚麽樣の談合した？」「ではあらうが喃、爺、然までにはすな、此程の女子、謂はば敵中へ身を投げ出して來るほどの者、白へとても白ふまい。又予は其事を聞かうとも爲ぬ。こりや宮、其方が紀州者の根性と今言うたが喃、何さまこりや予が惡かッた。兵庫は松坂で腹も切らぬぢや、切らぬのみかは何故か當家を仇として、予を謀叛と誣ひて、三十七ケ條といふ長文の訴狀を江戸老中へ差出した。もとより其狀の讒誣なるは言ふに及ばぬ、辯疏ば證明の立つは瞬間時ぢやが、然りとては予も遺恨ぢや、彼れ兵庫めを當面り視て、其の意趣をも問ひ、物の實否を明白にして公儀へ申解も爲たいと思ふ。今爺が言ふ、紀伊國君臣寢食を忘れて心痛すも其事ぢや。就ては其方に……」と帶刀が方を密と覽たまへば、彼は猶不興氣なる怒聲、「此の御家も御身が所有、此の小女郎も亦た御身が扶持の者、起すも倒すも殺すも活すも皆御身が御意任せ、此爺は兎角う言ふまいが、慈悲を施れば屁放るゝは現今の世の人情、況してこの狡黠しい野狐、恩も情も得知らうかや。其れともに斯う僞はるゝが口惜しうて、我等は江戸へ行く、這奴は其の一方の御用擔任て御身が役に立ともあらば、重疊のみか、其れが其の義理と意地を知る駿河者の本性、天晴れ御身が御母親の這奴が亡い親達を救はれたる御餘光も立つといふもの、ぢやが……はゝ覺束ない。やはり正雪めが方人して、不義の徒たる兵庫めらと一味して、盜賊の提灯を持つゝと云ふ程の所作が相應ぢやろ。喃、小女郎！」散々に罵倒れて、宮は戰々と身を顫はせたる口惜涙を嗚咽り上げたるが、屹度容姿を換へ、「殿樣へ申し上げます。今宵の御召は右の兵庫どの所在を申せ、妾が正雪の方人たる其理由を白せとの御用とは承はります。其義ならば何故に早うは仰せられませぬ。父母の命兄の腰押、其れが最後の所望と申す過米の御徵發、御公儀の御免除となりましたるも一つは御當家御助勢ゆゑと豫て喜太郎どのからも承はりをりまするに、此回は斯う〳〵の難義がある其方身を棄てゝ一働きせいと御意あらば、正雪どの身につきましたる事のほか、宮が生命の有らむ限りは如何樣の御奉公でもいたしまする。其れを何やら御邪推を廻されまして……」「やア言ふな、其の甘い口。其れ程に當家恩分を知るものが何故に紀州者なんどと言うた？」老人は猶俄鳴りつくるを。「それは物の行懸り。其の行懸りは御身樣の爲され方の惡しいから……」「然らば何故正雪めに使役れて、當紀州の犬となッたか？」「其んなりや御身は當殿樣の御謀叛とあらう時、討手の軍に加つて和歌山を御攻めなさるか？御家老の御詞とも覺えませぬ。」「ふむ、先づは殊勝ぢや。然らば殿の御用勤むるか？」「殿樣の御用となりや……。なれど御身が手に附くのは否ぢや。」「えい乃爺もぢやは……。さらば乃爺は江戸へ行くに、爾は何方なと勝手に失せい。やア殿後事は一任せ申すぞ。爾、小女郎、」起座ながら礑乎と睨めて、「此の御用は帶刀と其方と兩人ぢやぞ。張合の軍、張り負くるな！」

（百）

柳櫻をこき交ぜて、春の錦といふ其候には尚だ日の遠けれど、さすが都は人の心も寸延て、冬の日暮も餘所よりは長閑く見えぬ。況て錙銖の利を爭ひて朝三の計を營むとにも非ず、汗水浸と絞りて暮四の助を得むと急逐る人

にもあらざる此家の、晨には北山の雪をながめて、炭焼く翁が寒さを思ひ、暮には行水の氷るを聞きて鴨川の千鳥の鳴く音をしのぶ優にやさしきを家職として、哀れに強からぬを心とすなる其の主人をや、師走の此ころも、人の口にのみ世の忙しきを知りて、身は歌膝の足許に春の近づくを樂しむといふ、阿呆果報の中間に處りて、織らず又耕さず、富むにはあらねど貧しからず、世にはよしや世の中の穀潰しと嘲笑るるも、米飯の糊の篦める筋一本に生涯を託して、願うても叶はざる其多を顧みざるは、太平の逸民か、淸世の隱士か、御 雲上近くして位山に棲とし言へば、塵芥に棄てたる仙客の群にやあらむ。

斯くいふ其人とは什麼誰ぞ。京の今出川に、低からぬも殿造いみじう立てゝ、多からぬも七百石の祿を食み位は三位にして、時めかぬも亦た其の氏人の長老として崇敬はるゝ織澤の康章卿にてぞありける。 卿今年は五十七八、世の煩累きを厭ひ玉ふ御性質とて、常は下鴨の別業にのみおはしゝが、此程より珍奇しき客人の東の方より詣う登りしとて、今出川の館に在り。今日も日暮より其を饗應の用意にとて、昔のほど錦の襴へ御使の立たるに、やがて、魚籠に恭しう納れもて戻る其蓋を開れば丈三寸ほどなる赤目鯛只三枚、此を三片に卸下して頭の方をば汁にせよ、尾の肉は膾に截りて胴をば羹に、煎酒を多く物すな、醬油こちたう費すな、膾は大根を好う盛りて肉をば上に竝列ぶるものぞ注意せよ、なんどゝも家司の少尉某召して御身自嚴かに掟てさす。斯程の綿密なる御容態にて世事の煩厭はしとは、手爾波の違へる、判の詞の不審重々とや人の言ふらむ、あら心得ずや。

物の目は儉約きも、景色の目には饒富なりけり、館の御庭には鴨川の水の堰き入られて、築山のあなたより玉なす流れは珊々と颯々と落つめり。松楓櫻なんどの面白きも流石撰好う所所に植ゑられて、霜に枯れ殘る御池の莖に自然の澳瀞を見せたる、いと巧なり。此の景色春ならましかば。否夏ならましかば、などいと奥まりたる亭の内に聲のして水に映ろふ花の笑容も嘸かしな、輕躁激して影唇を動かすとも見るべきに、と戯るればされば彼の水草に一つ二つの宵光も見えば、簾葭水暗うして螢に夜を知るとこ歌はましを、とこれに應ふ。いや其の春夏より秋こそは觀物で候らへ、御手近の明り障子よりそと外を御覽ぜよ、眞向ひに見ゆる如意嶽の大文字の火、其れが七月十六日の夜は、黃纐纈の林は寒らして葉有との朗詠もおのづから打誦せらるべく見え候ふぞ。と取合して誰が明けたるか緣端の障子をさと開らける、座敷の内には三人の者なむ居たる。

其の一人は四方髮、一人は一束切といふらむ如き茶筅髮、一人は總髮の男にて、これは家司の左近衞少尉としかつめらしく名のる前波の某 扨前なる餘の兩人は、別人ならぬ正雪と兵庫となりき。俗は知る、彼等はかの松坂より船に乘りて吉田へや着き大阪へや赴ける、兵庫が實の父といふなる此の織澤の三位卿を便りつゝ、此の今出川の館にとは來れるならむ。然も其の來つる意趣は、今は天下に隱れ家もなき兵庫が一時の竄宿りにとか、將た彼等が大望の何事かの手蔓にもとか。其は未だ主人の卿にさへ語らぬ氣なれば、餘所人の知るらむやうなし。

景色の噂談に餘念なき折り、主人の卿は出で玉へり。白綾の無垢、朽葉の御袴、なれど其白綾も十年餘りの昔しの白色にて、御袍は油黴に烏帽子の緣塗の色見せつ、御袴は色の朽葉より地の朽破たりき。色白う、小形に含み玉へる鐵漿のみけば〳〵しう、門齒の一つ脱けたる

迹さやかにも見せ玉へる翁様。いと愛想好く、「嗚退屈でおりやらう喃、折から冬枯で華洛とて觀る物も無い珍奇しからぬが一種調じた。それ少尉、此座へ持て。」彼の鯛やらむ大根やらむの御饗は出づるなりけり。

（百一）

此卿が世を煩累しとて、別荘籠りし玉ふなるは、一條には客を愛し玉はぬなり、便ち世人に交際ひ玉へば思ひの外なる入費かゝりて、辛やなる金錢をも費はで協はせ玉はざる所以なりけり。然りや、爾る卿の甚麼故に正雪等をば駐め玉へる。流石に兵庫との父子の恩情は、失費を厭ふ心も壓して、可愛きものとして將た珍奇きものとして、奔走もし玉へる贈爲に綾錦、斷まく惜しき財嚢の緒を截ちて、錦の棚なる小鯛三枚を惜し氣も無う調し玉へる歟。なれど、得て箇様の翁は、疑惑の念深きものなり、我財を損ぜしと思ふ念より、他の言ふをも容易くは信けぬものなり、子とはいへども其の母なる女に音信不通との契約して、其れが故郷へ還し玉へるより既や二十五年、二紀の日を音信一つもせで經ぬるものに、甚麼を明證に、甚麼を目的に、父子の對面をやし玉へる。加之形の如くに、甚麼な所得に大根膾の饗應までもや、爲玉へる。雖然記憶せよ、此類たる吝嗇の人は、我子とは言はずもあれ、親族とは名告ずもあれ、凡そ錢ある者といへば、××、××、宇留麻、承古利の外客とあらむも、我心の誠の有る限りを傾注け盡して、其の眞正の妻孥よりも親昵うもし、又親孥うせられむとも努むるものなるを。卿も亦た其れに同一じ。況て其者等よりはしかすがに懷かしかるべき我子、殊には既や還曆の頽齡にも逾かるべき御身におはすも、兒育といふもの乏しうて、其後に娶へ玉へる御臺盤様の御腹に二人の公達、一柱の姫君は産せ玉へるも、兄の御男子は七歳といふ年に失せ玉ひ、姫君はそれより先に、襁褓の裏に永き訣別を仰せぬ口にて家尊家内の御許へ告げ玉ひぬ、目下殘れるは末の御子の、今年十歳にもたらぬなり。母君も此の御子産み玉へるより血の氣とて打臥し玉へるが、二年餘り、去る年の秋風に吹かれて、一葉より先に脆くも散りて、人の悲歎を塋の底に心强うも安らかに聞きたまふ。かゝる容に、さしもの卿も、躋り惱しき老の坂のいとゞ艱くて、御腰もめきめきと歪み、御齒もほろ〱と脱て、行末の頼みの綱を、竹馬の手綱に遊ぶ幼稚き御子に著け玉ふ、弱竹の御心細う、河竹のかは誰しも物の懐かしき御交際なり、見れば彼の武士、今は未だ取らねど世に聞ゆる由井民部が高弟として五千六千の高禄にも召抱へむとある諸侯の口は、繼みの日の數限りも無しとかいふ織澤左門。我等殿の御子なり、久しう越前の故郷には候ひしが後江戸に出でゝ、兵法軍學の修行に年を積めり、既往の事は定めし御心に御記憶もましますらむ、好き序によりて誘ひ上りて候ふぞ、いかで御目見を賜はらばや、と玄關より踊り込めるに、最初は憫然とし玉へるも彼が見參の禮物といふ白銀百枚、卷帛十卷、紺綿、白髮苧、柳樽、干鯛、鰹魚節まで相添て白木の臺を遠侍に山とばかりに積み累ねたる、此れに又御胸の潰れて、先づは取敢へずの對面を賜はせたりしが、此折り御次に隙見させつる老女なり、いかにもいかにも彼の左門といふ邪侫こそ御胤に紛れ候はね、御目許口元は母ごにも酷う肖て、額の邊り顏つき御前様に丸摸しなり、況て其の同伴なる由井民部は前波の少尉が江戸に見たる正雪其の者で正確に侍ると申すを、彼の正雪は殿も聞かせ玉ふらむ、今日本に一人と算へて二人となき大貨殖の兵法者、家の活計は十萬石の分限に侍るとやらむ、げにも其供立、馬鞍の美々しさ、御様のものゝ御館にまゐるは、福

の神の影向とも拜ませ玉へ、何と[illegible]しう侍るべき、和子様の好き御後見、御前様の御談合敵、旁、御父子の御名皆、内々なりとも遊ばされむが御尤も、と此[illegible]に侍つきまゐらする此の老女とて、[illegible]に[illegible]けむばかりに苦慮に[illegible]め申しぬ、彼に聞けば、此局の許へ、前渡が方へも白銀廿枚、卷物[illegible]反かは恙う廻さるゝ、口車の音、滑かなりしも所由ありけりと覺えて好笑し。

箇様の順序にて、兵庫の左門へ卿より改めての御盃、品好う濟みて、正雪への御會釋も殘る方無かりき。家[illegible]隔ければ、供までは難かしからむも、東の[illegible]は見晴しも好し、正雪は左門と一所におはせ、貧乏といふ我黨に饗應御身らが上には然こそは不足勝なるべきも、金錢ならぬ身上の談合とならば膺も乘らうぞ、民部介を少輔にもするか、其等の義ならば涯分に肝煎らうよ、なぞ早や有難き御意、下座にも置かれず。「いや、なに、苦しう無い、其儘々々、其儘おりやれ。堅くの席、甚麼の遠慮!」と正雪が下りむとする裲を押へて、卿は今強ひて客の座に彼を上させぬ。折から少尉と彼の長女とは煤竹たる三寶に菓子、土器、禮儀は恭々しう持て出でたりき。

（百二）

「[illegible]はもとより其の家の人にまします、其れが敷島の歌物語は、貴しき[illegible]には違いて耳を傾くべき新話も多かるべく、正雪も亦た所好の道とて、此の御話には餘念も無げに[illegible]ともなく三獻より五獻、七獻より九獻と盃[illegible]酌も既や累なりつ、更に今一度の銚子を換へにと酌に侍せる少尉の御次と退かる時、正雪も無禮を謝びて用事にと立つと見えしが、暫時して再び入り來て、這回は又た國々の名所故蹟の歌枕の物語にと移りぬ、彼は今めかしうも、新たなる會釋を施して、「箇様の風雅の御物語へ、潰穗もなき金銀の御話を交へまする、異な事との御恐れはござりまするも、亦此物は世寶の第一、其れ無くては上下立行も得成りませぬ。就きましては微少の不審。」と扇を膝に引つゝる繊穗もなき金銀の談といふさへ實に異な事との御恐れはおはすに、彼が面色の稍改まれる如きを御覽じて、卿は覺えず、いとけた無くも御膝を跳らせつ、「何事ぢや？ 不審とは。な何ぢやな？」「はゝ、いや別義でもござりませぬ。萬葉にか見えて[illegible]の御[illegible]、[illegible]陸奥[illegible]や[illegible]山に[illegible]金花[illegible]……」それは[illegible]葉の十八にある長歌の反歌、皇の御代榮えむといふ歌ぢや。其歌が如何した？」「はい、其歌[illegible]に[illegible]て、金の[illegible]心を言はるゝにやと只顧に惧れ玉へるなりき。正雪は御推量の[illegible]きに可笑しく果れつゝ、「いや、私申様が[illegible]いでかなかりましたか、私は只其の花さくと有る陸奥山の場所の不審御家の御傳授など、或はこれ有るかとも存じ做しまして。」「おゝ爾様かや。御然様の事か。爾は又た……はゝゝゝ。」胸の漸く下り居たるにや、冷たる汁を一口すゝうと吸ひ玉ふ。我父ながら見まゐらすると氣の毒の様と、兵庫の左門は庭なる方へ面を向けつ、正雪は忍び敢へぬ冷笑を辛く咳嗽に紛らして、「不審はたゞ其義。其の花さいたる陸奥山を、おろ／＼古書にて見ますれば小田郡とござりまする。なれど當今は陸奥一國に有り、郡名は見えませぬ。地名の變遷は古今珍しからぬこと、天平の古の小田は今の遠田か、若くは牡鹿か、それらの仔細。」「御意得難[illegible]は幾回か頷き／＼、「はゝ、然様かや、何の其の事、家傳も祕授もあらうかや。其の小田は今其の牡鹿で陸奥山は御事も知り[illegible]金華山[illegible]む、何かや、其の陸奥山の故蹟を尋ねて、その御身が鑛穴でも掘らうとてか[illegible]御身も

が武邊手柄も金銀無うては無らぬ事。いや、然様の遊間なりや何だ彼所にもある、大和の金峯山、これを黄金の御山といひて、此の御山にある黄金の蔵王權現の御物たるは、盛衰記にも、蓬莱抄にも、名文がある、又駿河の庵原郡多胡の浦に砂金を得て獻じた事も續日本紀に明記がある。いやまだ〳〵、古來歌にも詠む那須の淘金。あゝ何とやら？ おゝそれ〳〵、歌枕名寄にか、下野の那須のゆり金七はかり、七夜はかりて逢はぬ君かな。逢ふことは那須の淘金いつまでか、くだけて戀に沈み果つべき……とは見えたと思ふ。此歌の本據、淘金の事は八雲御抄かな？ 否、待ちやれ〳〵。」卿はいと樂し氣に、いと誇らし氣に、其の御心に得たる所有るかの如くに御首を掉らせつ、又澁はし氣に御次間の閾の際に控へたる局を御覽じて、「あ、こや、麿が常間の文車の南の二に續日本後記といふがある、其を三卷四卷……と、又東の一に式——延喜式——。いや、これは大部ぢやで其方に鑒別がむづかしい。可矣々々。其の後記の方のみで好い。扨て民部、其の淘金とは、砂金を水に淡して淘り分るぢや、小ゆるさの殻なんども■■の滴水に淘らるゝからぢや。今は無木の胡■記■ぢやがの、其の那須の淘金は、民部式に、下野國砂金百五十兩、錬金八十四兩なども有たか喃。現今の佐渡、駿河——むゝ其の猪川、梅が島のよ、又伊豆から出づる額に比せては瑣細のやうなも倘も是れが麿らが所有なりや、いや中々過分ぢや喃。はゝゝゝゝ。折ふし徴されし後記は來れり。卿は猶夢中に爬舌り立てらるゝ其袖を牽れて、一おゝ參つたか。むゝ可し〳〵。むゝと、承和と。えゝ其りや此處ぢや！ 其の證文、熟うお聞きやれや。承和二年二月戊戌、下野國武茂神奉レ授二從五位下一、此神座下採二沙金一之山上。なんと如何ぢやえ？ 御國の正史に倚様に明白に記いてある。え！ 如何ぢやな？ これが山金を掘鑿のぢやなりやぢやが、此處のは砂金ぢや鍬一梃と布一反ありや、何程に寡少うても一年五百目以上の金量は獲らるゝ。如何ぢやいな、お身、此の談合は？ 企方さへ御身が爲るなりや、名名目は宮なり、門跡なり、我が味好う計らうが喃！」

（百三）

坐ながらに知る名所もあらむと其の強記と博覧と、今一つは其の御慾の淺からぬとに正雪も只管感じて、竊かに目を瞠かして兵庫が方を覘へば、彼は、在るにもある可らざる父が仰せに、朋友の手前も羞恥しとや、背れる面に赧紅を潮しにも堪へで、庭に向けたる眼を、再び池より出、■立より築地の外へと成る限り遠く放ちぬ。とも知らぬ卿が膝は、愈進みて、笑容嘻々たる御面色もいと冴々しう、其の話出の端緒をも既や獲玉ひたらむがやらの御人顔にて、怪しからず激りたる御鼻息に、奇しう凄じき御眼の光輝さへ射し添りつ。一喃。如何ぢやなう、其目論見は？」と御膝を丁と拍ち玉ふ、正雪は笑顔をもて是を迎へて、「扨も〳〵御屈託の無い。民部、其の銀方仕つりまするは何より容易いこと。」「え、容易とか。擔當てお哭りやるとか。あ、然あらば此隱もぢや、はゝゝゝ其庇蔭で浮み上るぢや。有り樣は此態で在ッては年増に肉が減るのぢや。何でも勤むれば又た少々の所得もあるが、非役では御宛行の祿高切りというて其役に有り附うには又夫れ〳〵の人情も費る。扨それも此年齢してと、諸事目を瞑つて、無い運と斷念て、山棲の氣になつて、總ては世の事を投下し措いたが、これは誠に福徳の三年目ぢや。」ほた〳〵との御喜悦を、「いかにも其の福徳の……ではござりまするも、其出額が其れ許りでは何程の御禄高にも……」「いや遁ぎやんな〳〵、」などと口實て逃げうでの？ 卑怯ぢやぞや〳〵。」卿の御眼は、射外し

差上げませう。これも觀物の役、願くは其の御流盃、侍坐の衆へも下されまして。」むゝ、いや、其れも然る事ぢやが喃、此は末代の名寳、此の銚子は家の寳として此儘に祕藏ひ置かうよ。あ、尊とや。」と彼の土器の縁なる滴をそと舐指に漬させて、御額に點ぜさせる。苦笑なさる少閑よりも局は女氣の、泣かぬ許り、色見せて恨めし氣に主の御顏を疾視げたりき。「は、父上、然樣にはなされぬもの。民部が奇術では其の銚子に五杯七杯の黃金どもを直き取寄せて進ぜませう。兩人へは勿論、其の御流盃御內の男女總中へも遣はさせ。何た其の互大いな配分が……。喃、民部どの。」兵庫は、見るに堪へ兼ねたると、正雪が後談の緒を啓く爲との、二途かけて怨く言出でたり。此方は直地に其を引取りて、「いかにもぢや、未だ其の那須の[illegible]に其の在額の藏が一も採りませぬ。其金を採り盡したなりや手近い場所で金峯山、田子の浦、續いて追々と其の陸奧山の鑛穴をも掘鑿いて皐の御代の御榮えをいたしまする。いや、其の迂遠い、舊穴の下地の黑金を招びませうより幸ひ江戶にて御手入の其の伊豆駿河佐渡の黃金、其の掘出いて灰吹にも懸けましたるを何程たゞ取寄せても進ぜませうか。や。其れよりも、喃、左門どの、我等が存命、既にして全く信仰なりや、目には由井宗の術、合せ金屬ぢや、昔其の御嗣入りともならせらうこと手掌を飜すよりも容易いこちや！ 然に思さぬか？ 何さと父へに、勿體の言、其れは御匠の御心にある。なにと父上、其今聞し召す通り、其の御宗の爲天下の爲、由井宗の信者とは御爲りなされぬか。御子孫の御爲ぢやが。」兵庫の言ふ由井宗とは何者かは知らざるも、現在當面なる宗祖の正雪が言ふところを聞けば我宗の信者とならば、日本國中津々浦々の金銀までも皆吸引て、此家の藏入にせむと言ふ、小夜の中山無間の鐘の故事には似たるやうなるも、これには覿面の靈驗を見ぬ、八萬奈落の底に墮ちて後世には蛭責に遇ふべきも、血を搾るやうなる世間に欲しきは目下の金銀ぞかし。とは有るも此の眼前なる銚子の中、確に十兩には餘りて見えたるを。

彼等にむざ〳〵と、と分別の峠に迷はす父の卿が御足元を見るより疾く、「何事のおざらう、此程の砂金。それ兩個の者父の賜はすぞ。疾く持て去ね。內の男女誰彼にも分配せよ。好う致せ。」兵庫は突と起て、重げに提げたる彼の銚子を少閑に遞與せば、喉を鳴らせし男女の者は、鼠の如くに舞うて去りぬ。折から梵音を長く搖る暮の鐘あり。卿の耳にはかねといふ文字の通ひも畏めしきに、會者定離の理を目のあたりに見せつけられたる、寂滅爲樂の其響を何とか聞し召し玉ひにけむ、御首を頭垂て、「あ、無常は迅速ぢやな！」

（百五）

「無常迅速？ はゝ甚麼が無常でおはさう。世間は然樣な果敢ない物でおはさぬ。あツはゝ。」と正雪に笑はれても卿の御氣色は太だ引立たずいと力無くて見えたり。「ではござりますが、喃、又其の世間を無常と御覽なされまするも可うござりませう。人間の軀命も無常、物の積聚も無常、全般の世事無常と觀ますれば、天下の權柄の所在も亦た無常いものでがなござりませう。卽ち王朝の古、これは申すも恐悚にござります、續いて藤氏の專橫、朝政を己が隨意にして望月の虧けたることも無しと歌ひましたるも無常、平氏の暴虐、人主を自家が手の者やうに虐遇ひましたるも無常、鎌倉も無常、北條も無常、建武の中興も同じく無常、九五の尊を犯しましたる足利の無道も亦無常、織田の無常は一代の中に[illegible]はれまして、豐臣の無常は二代の後に、殿も御存知の果敢ない有樣にござります。扨て其れに代りましたる只今の御

帝、殿は其を左様に御覧ぜられまするか…彼の筆は奮ひ紙まりて、と稍ゝ其眼には、一種異様の光華を帶びぬ。焦かせたるは罪なり、只管に身の大事と思し返せて、御胸を鎮めと動かつ、御面色も共と逆上せて、御手も措處さへ無しに見えき。と言うより彼は忽諸其面を和らげて、はゝはゝゝゝ、殿、今は座興、一時の心無い御物語にござりまする。雖然、萬事は只無常、盛者必衰と浮屠氏の説れてござりまするなりや、茉は又た、衰者復盛とも申さう哉。天運は循りて環の如し、春行けば夏到り、暑去れば寒來る、これを人事に見ますれば吉凶悔吝、生老病死、すりや天の四時運行、世の盛衰禍福と甚麼の差違のござりませうか、王朝御式微とならせてより既や六七百年、大禍の厄こゝに竭て盛旺のお萌芽今が勃興らう時と存じまする、殿はもとより和漢の御博識、異朝にも其の六七百年、一姓もて續きましたる長久い天下はござりまするか喃?」卿の御應は澁々なりき。「いや其様なはないと存ちやよ。周王の盛徳ですらが西東併せて八百年、其餘は五十年百年、乃至百五十年、三百年と續いたは幾ど無い。但し其は皆[illegible]て、國を立て、其君は帝王として萬乘の一位に[illegible]の間ふなるは……」「人臣とも仰するか? 否、私は一國の權柄を握れるもの、其定むる所は律となり、其命ずる所は令となる、死生與奪只其の己が好む隨意に仕つりまする者、是れを國王とは申ますする。又た其の一姓と申しましたは藤平氏は姑措て、鎌倉以後は只一樣の武家天下、これを公家御衰敗の天下に[illegible]て一國の[illegible]位執權者とは申しまする。愚く論じますれば、恐れながら王朝は……。」彼は愚く説き來りて、其悲憤に堪ざる如く、卒衝に首を俛れて、歐然として涙に咽べり。然も其の口は吶りて、再び言ふ能はざるが如くなり。時に猛然として虎の如くに哮る者あり。是れ兵庫の左門なり。彼は手を戟にして面前なる膳を[illegible]と撲ちぬ。「父上! 御聽きやらぬか師の言ることを。由井どのは浪人、王臣と名告る人にはおざらねども、朝廷の日下の、此の淺猿しい狀を[illegible]かれては箇様に悲涙も飜さるゝ。父者は其[illegible]縉紳の華族とやらむ稱はるゝ仁、朝廷と其の休戚を共になされでは協はぬ仁、其れが斯くまで冷膽なる心を持たれて、隣家の火事を見る程にも思はれぬは、甚麼たる所以ぢや。今の其の、[illegible]の中とされた、王・朝・はとの三字の後には、甚麼と云ふ字を尾けて御覧じやる!」

(百六)

「待て呉れ。まゝゝゝゝ待て呉れ。」と留め玉ふ卿が御手は、今や[illegible]家の重寶たるべき[illegible]朱の椀を保さまに捧げ[illegible]みて、微塵と碎破かむと振擧げたる兵庫が腕を、綿る如くに押止め玉ふなりけり。「な、何と爲るぞよ、此[illegible]が何事も知りはせぬのに!」と言うて予ぢやとて何事も知らぬに。」[illegible]といふ口畫き玉ふ、兵庫は然もこそと纔に其怒を和めつ、「然りとては御謂甲斐ない、御身が然樣に御卑怯にござらしやれては我等師に對して合せう面目も無い。我等は既に由井宗の一人、朝家の御爲に[illegible]東へ弓……」といふ口を快く抑へて、「あゝゝゝ滅、滅相な!」卿の御色は疾く喪せて、抑へたる御手さへ戰慄き、今少腐らが退りたる出居の方、御庭の彼方にさへ竊聞く人もやあるとやうに御腰を伸させて、覺束なげに御覧じつゝも、螢盛の如き聲、「滅音な、其方、然樣な大事を其の咄聲で。知らぬかや所司代が鵜鷹の目を! そりや予とても京都の御衰微を慨かぬでは無い、が然れば[illegible]俗に[illegible]ふ用作の切歯ぢや。何樣にならう? [illegible]公家どもが、[illegible]御眼のみ[illegible]、[illegible]位、中[illegible]

納言に中將をも兼ませて、其昔ならば節度の大將ともおはすらうものを！ 然りながら現今の時代其の御達懐御無理ともおはさぬ、とは申さうも好う聞し召せ、是も俗の諺の猫が鼠種は生まさぬ、我等が申すは何も其の畏の御首に、御兜を召させ、御手に御鉞まゐらせよと申すでは無い、合戰となれば其りや將武士に命するぢやが、只戰は其前に其の……を退治の種子、喃、其の諸國に播かせらるゝ。第一に、其の好機に、な、某等が顯爽、首と階下になと仰せ上らるゝ……では何ぢやな、齊は其の嫌ひか、ぢやな、嫌嫉！ ……はあらうも、御が其事鬱憤とならば、元弘の叡嗣、後其。これは巨大い大役ぢやな！一御農根はせゝ止めるも、先づ胸に泛ぶ前途の艱難を想像させて、頻りに小首のみ傾け玉ふ、煮え切れぬと看て取れる正雪は、兵庫を偸視て暗號の咳嗽一つしぬ。「父者ッ！」と叫ふ彼が呼息は復た粗暴げかり、「何事の御考慮！ 遅い／＼。甚麼様に案ぜられてからが御身はもう我等が黨ぢや、えい何故ぢやとて江戸の置目は謀叛は其の三族まで！ 御身も我等と父子の名告りせられた時に其の御首には最う繩か附いてある。えい御卑怯！ 是よりは只、其の繩縄、切り解いて敵に懸くるか、但しは運盡きて殺らるゝか、二つ一つぢや。甚麼の女々しい、先祖を其の日野殿なんどに御取しなさるゝ。こりゃ此座なる我等が師匠はな、其の元弘の業の忠臣楠判官正成が末葉おさるぞ。往昔の正成は如何ですか知らぬが此の由井殿は確に當代獨歩の一人、加之も判官は河内の赤坂で在り時の分限たら書に見えたが、是なる師には死生を契つた弟子分三千人、其外諸家諸侯の方人とては數も知れぬぢや。若し夫れ然る方の御沙汰ども得て思ひ立ち召されうならば、御本意は眼前。なんと其の御懸念の事！ 一我を死の囹圄に投れたる宜爺は彼が手に在り、扱は我既に其の謀叛の黨類となりけるかや、甘き句喰うて油斷せなの俚諺は今將に思ひ當れるも、爾も否に及ばさる父子の名告は甚麼とすべきぞ。然るにても父の頸に繩を附けしを手柄顏なる我子の心こそ、聞たけれ、抑も我は如何なる苛世ぞ、持たる子も持たる子も、或は病寄し、或は失せ、僅に壯健なるはかゝる行ならぬ非道を我に強て、年老れる齊を惱ますぞや、親は然は思はぬを、子の心ほど淺ましきは無かりけり、あら情なや、と燒野の雉子の聲ならではほろ／＼といふは鬢の霜なる御瞼に墜る悲淚なり。左多々々と引返過かして、倏ち聞ゆる紙襖の外に濁たる聲、一これは扱て目出たき御事、少尉只今其れへ參りて委細を申上げ候はむ。」

（百七）

軈て明け懸たる紙襖の隙より其顏を半分さし出して正雪が面を見遣れるは、彼の少尉なりき。彼が莞爾と打笑める面を、憎かせたる猜は礑と睨させて、「聞いたか、其方は？」一いや怪しうもござりますまい。前後どの此座へ。」と摺。く、何時の程にか正雪に彼や語はれたる、少尉はする／＼と辷り出でつゝ、「殿、扱も目出たい御義、甚麼の御疑惑？ これは私の御宿意ともござりませぬ、只今左門様御申しの天下の御爲、御家の御爲、御子孫の御爲でござりまする、御一味の御誓文只疾う。」と彼は其襟頭を突き出しつゝ、殿と正雪とが面を等分に睨較べたる、何時變りて其太々しき面構は何さま其古へ江戸三界を股に懸けたる渡り徒士の、流石にも和にも喰はれざる强鷹者の本性を善くも見せたり。無情、ざつとも味方と頼ませたる少尉すら如是の體なるに、爾は四面楚歌の聲に圍まれ玉へる御心地、世を棄たる從前の遺恨の御淚は引返りて、今回は悲痛の御泣聲も出でもしぬべき、座らで御座を起たむとし玉ふを、「殿これは何方へ？ 少尉進つて申上げます。貞に

わらなりす、織澤の此の御家に取りて此程のめでたい事は有るまいが。既に三千歳に實るこふ桃の御運の花の開くる只今ぢや。其様に無い事申すな。忠は然る事ぢやらうが、無理ながら其れは女子の業らぬぢや。」彼女はもとより然る程の忠義の女子にはあらぬなり。慾をも知れり、得をも知れり、最初は少聞が口頭を信じて、得も知れぬ兵庫の左門に父子の御名借り遊ばせし殿へも御告あたる程の女なり。なれども其は替譜代の御家好かれ、續きて其身にも幸福多かれと念ふが一途にて、今は此事跡も、大事の殿を名のみ門徒の方人として、御身、御家、亂さ、無くば御曹の端までも變異ることとなかるべきも百石の喉を併せて、尖は、申さむことの恐ろしくてなりき。然るを、其様に本に餅の實るらむやうに欺かれて、彼女は些しく途惑ひたり、「大閤の御領主ともなられまする、其れは什麼も目出たい御義とは存じまするが……其の大義とやらが必然に成功ませうか。又其の御企圖、何程の御味方がござりまする哉。此間に對せる正宗が谷を、彼女は表現の卜筮と見て得たりき、要らぬ少しは隊を布せり、一馬念な！ なるのならぬの御當木に生栗の樹を植つやうな、味方なんどゝ、事も愚かや、西は九州薩摩潟、東は蝦夷の千島の滸、總ては普天の下率土の濱ぢや。怯氣を開くるな、局は死ぬかはの窮き鼠をもて猫を喰めむ、正宗は之を觀して、「其の人には道理ぢや、成功不成功は其れは知らぬが、味方は大勢ぢや」一大勢と申さるゝも、天下を敵手の御事にござりまする、先づ大名の首立ちたるは？一紀伊國殿！正宗等の應は讀み無かりき。彼女は呆れしが、籍執念く、「紀伊國殿？ 而て其の御判は？」「え、判とは？一只今殿を御責めなされた、其のやうな御判の物、定めし生下へ御自筆のがござりませう、其れを何卒……。」見せいとか？一いかにも、殿様並に妾も決心の爲め、目下此座にて。妾どもの辨解と逢られたる正宗は、微しく窮せり。殿下に執傲して、なれども、其物は、表實の本當ぢや、はゝゝゝ、開帳は濫りに出來ぬ……でも、妾も既や御荷擔の一人、拜見の協らぬとあるは何やら御心もじの解けぬやうな。殊には御口で承はるも、正物を拝見しまする。同一事、目で見まするも耳で聞きますも同じく從ゝは存りませぬ。京女蘭の薫り口に喚り立られて、然ばかりの正宗、今は歎なき受太刀とはなり乾んぬ、平生の手練の中要なき口許も四度路六度路に、一はゝ、いや然様に申されては心外ぢやが喃、存り様只今は持ち合さぬ。只我等が申すことを信けられい。」「むゝ、御持参が……？ さらば江戸にでも？」「されば江や、其の江戸に。」「えゝ？ 其江戸に？ 江戸には何某の御用どもにて拋棄された。其の御判は今も御せし此の御大義の本尊ではおはさぬか。權僚たる大事の御判を何故に其の本願たる御身様が御手離された？ 然様な迂濶な民部どのもござりますまい。又彌然迂濶なりせば此の御大義が何として成功う。甚麽としてノヽ其様な御人の手に此方殿様御判なんどが……思ひも寄りませぬ。恁くまで手苛く穿責られて、いかに千枚の皮もて張れる堪忍袋も破裂やすると思ひの外、彼は猶若ら打笑めて、然までに御訝やれば詮方がない。實は此の左門殿、此れが紀伊國の御判の代物ぢや。此方下に、兵庫が面色は太く變れり。

（百九）

松坂以來の兵庫は、有りし程の人とは異りて彼が稟性なる鋭敏き感情は愈其の狂發を住め敢へぬまでなるも、殊勝らしき涙の泉は胸に涸れて、只善く疑ひ、善く恨み、善く怒る、三毒の業火の炎焰に間えず身を燬るゝ魔とはなりぬ。彼は身に負へる怨恨を晴さむとては、天

一人は、かゝる珍事の中にありとも知らぬ顔に、五器の音鏘々と膳を洗ひ、今一人は燈下に、春斎をねだる郷家への文にや、巻紙を巻繙しつつ一心に筆を走らすを徒然に堪へ玉はぬ御曹子の和子も、面白きもの御覧ずる様に餘念もなう凝視め玉へり。庖厨さへ恁くてあるを、門に並べる小者が部屋には、此ほど貰ひし零銀の贏れるを酒に除へて、三人團欒の小宴、舌鼓うち興じたる鼻唄の颯々ざに、餘所には風の吹くやらむ、雨の降るやらむも知らず、此等の爲體を確乎と見澄したる少尉は、何處よりか擔げ來りけむ柄細の鍬もて、やがて築山の陰、陽光の達かぬ隈をはかりて戞々と掘り初めぬ。其傍には兵庫ありて、彼は、山梔の圓蓋に作りたる其根方に、怪しう蒼白く、萎縮びたる老媼の足の星光に物凄う微露れたるを斷えず睨めつ、聖乎との音にも素破との氣勢して、彼の怒眼を配れり。座敷はと看れば、殿は幾ど赤裸の、御下帯一つ被はせたるのみなりき、寒さと怕さとに齒根も合はで、うち戦慄てのみおはすを、正雪は片隅に蹲踞せ申しつ、自己は下緒の襷懸に、殿の御衣、局が裲襠、兵庫が羽織、少尉が袴、すべての鮮血に抹れたるを押圍めては襟に粘ける血を拭ひ、御池の水に滌ぎ出だして、又搾りては又拭ふ、恁くすること七八度、其たびには五六枚かほどの疊に塗れる血淋漓に、什麼に可怖しかりけむよ、四方髮せる大の漢子の此處したる、什麼奇異しう見られむよと思ふにも、燈火も無きを暮夜の座敷は結句に諸事の都合好くて、こゝ、御座敷も出來申したは、はゝゝゝ、旨い首尾な。彼が笑ひつゝ坐する時、事爲果てか、少尉も兵庫と共に此座に入り來て、徐に袂より、燐寸を取り出で、腰に着けたる燧袋を搜ぐりて燈を點じ、「明からなるに、何もおづおづ、其邊這ひ出で玉へるが、見るに淺ましさ、口惜しさは、寧ろ此世の無くもがな、此座敷の闇黑にてもあるべきに、物の目も見えぬ盲目ともならましかばなど思し食す得なりき。此御館の重寶たる彼の堆朱の椀は、御秘藏の根來折敷、年來召し馴れたる高坏と與にあはれ打破りてか棄てられけむ、十年このかたの可懷しき白練の御衣は剝賊なんどに遭へらむやうに剝り奪られて、暫時嬉しと御覽ぜし土器の砂金は、行方も知らず、朝夕厭かず見たまへる土佐の某が丹青の紙襖の繪は、影もなう剝げ落されて、總この御座敷、御調度、野分の日、地震の後とも掻擾されつ、殘れるは可怖しき血痕と、腥ぐさう、胸も溜らぬ不祥の氣のみなり。此らを見玉ふにも悲しきは彼の侍女なり、其實とあらむも彼女は予が爲には忠義の女なりけるを、其の亡骸にも葬禮の一句だも與へで、鬼處らの隣に、這奴らの鬼畜が手して葬めさせつる、妄執の一念凝りて、或は雨の夜風の夕に其の亡靈の秋きもし叫びもし、或は鷄の穿り犬の發きて、自然に事の發露れもせば恁麼と爲べきぞ。否其迄もなき、今宵の事を他の聞きて所司代の耳へも達れば、明朝をも待たせじ。縱しや然は無からむも、此の羅刹にも比しき奴原の何時までか予を遁し置くべき。と有りて自首せむも神文は彼が手に在り、況て眞正の兒ならむには、惡徒ともあれ左門といふ兵庫を、實親の口より刑罰に遭せむも可哀き歟。到底諫めむにも力及ばず、拒へむにも勢の足らざる予は、只空しく此等盜賊謀叛人らが夥伴に墮て、刀鋸の頭に落つらむを待つのみなるか。織澤の家の破滅を麿が代に期するのみなるか。と悄然として燈火の小暗き方に身を潛め玉へる卿の御耳に、聞きたうもなき彼等が匪謀は釘を打つやうに斷えず響きぬ。「……然らば紀伊國元御家來たる兵庫との御名をもて、目安を郵送りて、詰腹にても可し、否應なき御謀叛にても可し、兎角は彼殿を陷し申す歟。」「然樣ぢや。然もせば父ごか殿下へ此義を說かれうにも根據が

有るといふもいおそ、案内は無事なされい。」
「只を枉げて身を顧らず、大義の爲には衞る詳詳も是非無いかや！」

（四十一）

三位の卿は其明朝より惱目の御心地とてうち臥し玉へるに、御藥をも進らすべき長女の局は前夜微に其影を隱したり。檢れば、由井が贈の荷物は攫掠されて、用度の金銀も多く紛失ぬ城主は彼局あらぬ慾に眼眩みて、奥なる御酒宴の其間に、邪曲き所爲して逐電しつるにや、御館の結束する局ともあらむ彼女が、憎しや、など少尉は獨り息巻て、三日四日其處此處と穿鑿り歩き、齎下の神圖のと騒ぎたりしが、其等も此の手懸りなしとて漸やく歇みぬ。御内の男女は、只事の有り得べからざるやう覺えて、途に迷へるのみ。醫師の藥方も驗なくて、卿の御熱は日に増すのみなり。折々は怪しき譫言なんどして、鬼に魘はるゝ如き態し玉ふに、此事他に漏れては父上の御恥、家の不面目、子たる我分として忍ばるべきに非ずとて、兵庫は家中の者を近づけず、晝夜御枕に附添ひて看護をす。かゝる状況なれば、年立ちかへる元三、七種、御藏開の御祝ひも此館には總て無くて、世は花鳥の春となれるも、こゝのみは荒涼じき冬の光景なり。其のみかは、太も可恐しき風說の何時かと近傍に立ちて、今出川の妖怪屋敷なんどとも誰とは無く言ふに、二人在りし端婢の一人も怖れて逃けば、一個なりし小者も一個となれり。結句は其れも可しとて、正雪は我供のうち、心利たるを三五人呼取りて、朝夕の諸事を賄はす。日常の事はかくても濟むべし、只心許なきは卿の御身なり。凡慮く思案あきたるには、醫師の藥劑よりも靈社の祈禱などこそ可けれ、尾張なる熱田の宮は日本無雙の靈威なる御神にまします、少尉、御身殿の御爲に、病難退除の御守といふを乞ひ來らずや、と正雪が勸告るに、彼は心得て卒忽々に發途ぬ。是れ正月の中旬なり。

二月の但有る朝、彼は蒼皇と歸り來れるが、神宮の御札といふは什麼にせし、持ても來ず、只正雪と兵庫に對ひて慌忙しう甚麼事をか囁くやう見えたるが、其の夜の間に正雪は供士僅少を將て、消ゆるが如くに忽然として京を去りぬ。其の前途は熊谷松田の大將分たる士すらも知らざりき。「すりや師匠は御發ちやれた。」「嬉しや水、其水も是からは我等が自由ぢや。あツはゝゝ。」正雪が此の發途を、天に歡び地に喜びて、躍るばかりに狂へるは彼等なり。戀とも言はず、情とも言はず、行くを見送る袖の上に一滴の露を濺かむは尋常の人の別離とても然なるを、これは什麼、師の首途に其嬉しげなる笑顔、と知らざる人は奇異まむが、彼等に取りては亦其所以なきにしも非らざるべし。

起因を討ぬるに、原來彼等十幾人は、其の京着の前、竊に師に誡れし旨ありき。今の所司代周防殿板倉重宗は父伊賀守勝重にも勝りて可怕き人ぞ、其事ごと指しては言ふべからねども、我が擧動には自ら其眼を狙くると覺しきに御身等此地にて自然の爭論ども牽出ださば或は其等より年來の秘事の露顯もしぬべきぞ凡往昔より大事といふを蹉跌つもの、酒と色とに過ぎたるは無し、就中酒は我黨の大事の爲には大敵なり、我を師とも思ひ、此の宿望の成就をも願はゞ、御身達、京に在る間は酒を飲まれな、如何にや此義は、と正雪に言ふ。甚麼の異議の候ふべき、師の命とあらむ程には、我等此地に在るが間、一切禁盃!!

かく誓詞は弓矢八幡、摩利支天の二柱を證人に、潔よくは言放たれしが、扨て辛類きは其の後なり、二條寺町なるさる寺院の奥の間に押籠られてより茲に四十日、師が監督の眼の恐ろしきと、さすが誓詞の表に憚てか、酒のさの字を言ふと共に嚥下て、男子の辛抱、性根場と耐

へしが、張り重ねたる一人、如何ぢやお主は未だ息はあるか、と問へば、ミヽ情無い言ひ草を經しものを、ぢやが見やれ、贅肉も五寸がほど減たであらう、と、打嘲つ[illegible]道理ぢや、然るにても斯う動氣の疲れては萬一の大事に得意の二尺八寸も振られまい、師も醉狂ひに我の露顯を氣支はれてなれ、養生の爲にする我が水なりや、三宵を限ッて、内々：：と耳語く、内評議に矢も楯も堪らぬ面々、既や色めいて立つ足もなく、崩れかゝるを哀れを知らぬ下戸黨の何に何も否々と盛返されて、口惜しき鹽酸を只々しき舌鼓に逆らず折なり、斯う遥ただしき師の後言は彼等が爲には鰻鮒が大江の水を得たる思ひ、頭も、咽も一所に鼎卑々と動かして、熊谷松田を謀叛の張本に、「いで喫う！」

「勿論ぢや。」

（百十二）

久旱の慈雨を得たらむが如き彼等の腸は、喫めども饜かず、溺れども足ることを知らず、飲みて飲みて飲潰れし、其夜は止みたるが、其れよりは夜毎に飲む。飲めば泥醉て倒るゝまで必ず喫む。なれど、飲み而、醉ひ而、眠る而已にては、隴を得て未だ蜀を望まぬなり、忽諸にして議は起りぬ。「島原とやらは如何ぢやろ喃!!」

伏見の中書島、清水の五條坂、それらは古く世に聞こえたる遊所なれども、東の吉原を目のあたり見たる眼にては、汚なくして屑かずならず、殊に其の島原は、去る午の亂（寛永十四年の天草亂）の折り、始めて朱雀野の露をわきて、戀草の種を播き初めしより、其の根ざし年々に蔓延り行きて、今は大阪の新町にも劣らず、かの吉原と竝列て、三都隨一の遊里とはいふなる、げに其の一見も妙なるべく、憾有るを殘さむも本意なかるべし。傳へ聞く、建久の昔しの和田酒盛にも、虎といひ、少將といふ遊君を請じてこそ、末世の今日にも其風流に好客の感涙をば流さすれ、彼の老人の酒盛すらも其の一番盃を爭そひては、齡も人前も忘れしものぞ、況て此所なる若殿原の遠慮は不沙汰、謹愼も時によりては臆病の嘲笑に墮つべきぞや、いさうれ方方！　熊谷松田を佐々木梶原にして、先陣を爭そふ壯侍們は、其の朱雀野の露の浪に、鐙にあらぬ後朝の袖を絞り初めてき。あはれ鬼の留守なる洗濯てふ蠢愚なる彼等が念頭には、其鬼よりも可怖しき魔てふ怪物の既に魅したりとは知らぬなるべし。

＊　＊　＊　＊　＊

なに喧嘩とか？　爺さまの順禮を卅き武士が揆つたとか？　何處の赤鰯か叩いたござませ、敎うてやれ、と囂き合ふ俠客が中にも、さすが京と二物氣勃ましうは見えねども、着衣汚されじと奔り躱るゝ素見の類道には今[illegible]りの彌生の夜櫻も桃らで散るめり。揚屋が店頭には、上框にて顫繚せ、銀燭萬盞と點けさせたる中に、寛々たる寛濶風の見事なる大[illegible]、此廓ばかりには御免とかいふ淡[illegible]姑の喜[illegible]捨てふもの裾いとにかゝりけるを膝に袞きて、雙刀のまゝに大胡坐かけるがありり、頭は左右に瞰睨りて、際聲暴かに、「緩怠なる老耄奴。」ヒッと揆て、揆て！」引摺ゑられたる老人は四國の順禮と見えたり、雨霰と降る無法の鐵拳を彼は拒ぐに力無きか、躯を大道に投仆して、其の着たる負摺しいふも散々に扯破られぬ。御免されて、と其れが謝ぶる聲もいと細きに、動搖みに紛れつ。誰も揆たむと立騷る暴漢等が[illegible]頭は、仲居らが管々に遮止め得たるも、其の濁聲をば尚ほ歇めず。「爾は何者ぢや？　む、四國の札所うつ順禮ぢやと。其態ならば僞禮でもあらう。が、其の眞正の順禮ならば何故手の内を乞うとはせで那處なる御仁…：否、大盡の御顏のみ視る、何故沁々視る。やい！　こりや察するに傾は大ぢやな？　一丁囊に肩を揆たせたる彼の大

せ合せて撃たむにはと、齒軋鳴らして射方の氣を勵ましぬ。醸酒桶の如くに圍める見物は、再び此幾勢に攝れて箍の破れたらむが如くに一度に逃げたり。なれど亦、處女と老夫の安否を氣支ひて去りも得ぬあり、宮が憶せぬ勇氣に呆れて膽を消すあり、喝采るあり、危惧むあり、武士等が意氣地なきを嘲ひて冷笑すあり、詈罵るあり、石瓦の投礫なんども追々に交る中に、嘸さん危ない、あの喧嘩の間へ入つて何様する、傍杖ぢや、退いた〳〵、と抑止る腰をも牽く袖をも振捩切て、「途方もねえ、彼の衆らに彼女を殺して、手籠にさして。」と肯も無き隄堤に腹立しげに獨語きつゝ、突く杖擢齪と走り寄る一人の婆あり。婆は突如に喇叭く如くに、「こりや此方衆は有らう事かい、其の馬のやうな頭髪して、この最優しい娘子を何うする氣だえ？　此の宮どのは私が村での大事な人だ。今日濁アずも途中で遇て、案内頼んで此里さ來たのを、今此方衆に此所で何でも負られちや私はア村へ何の面で歸られべい。爭論の對手なら私爲りやすべい。其れとも婆で否だといふなら、娘さ呼出して進ぜますべい。私はア此態でも、娘さア、當時此の島原で全盛の、奥州屋の信夫といふ太夫でおざるは！」

（百十五）

老婆の出現しにさへ驚きたるに、絵聞けば、彼娘は、奥州屋の信夫太夫が實母といふ。然も此の太夫といふは、近ごろ花木、熊谷が有頂天の其の上にも昇り窮めつゝ、既に寡少からぬ淹留の金銀をも抛てたるに、猶ほ巨多の身料を賠償うて宮の妻になど言ひ騒ぐ妓なりける。其妓が實母、すなはち大膽にも敵ては匹者たるべき此の狂媼を、何にも手籠むとしたる花等、其返報の眼球は？　と恐る〳〵窺ふ壯者輩を見て、有繁に熊谷は何とも言はず、苦笑つて面を背けて再び了義に、「こりや、歸るぞ。」彼は猶ほ照れ隱しに思ひてもあらむ、武者若衆頭の裝飾り遣る瀬も無きは、哀れ彼の松田なり。彼は全幾の、馬鹿の目見たる、忌々しさの八方當り、に其遣た罵々と跳ね廻しつゝ、没理由に擾て酔も醒めたは、こゝに見えた彼も宮も、爺も娘も、花木、添皆其方に委託くるぞ、皆來よ〳〵、彼方へ往て濯ぎや〳〵。と怒叫きつゝ入る後に跟きて、好潮得たる蝦雑魚の輩は皆ぞろ〳〵と奥へと立つ。其隙を、得たりと視たる、宮は喜太郎に目を喚すれば彼も疾くより其心なり、具路栗々々と回踵りしつゝ、穩て見物の間隙ある陰を目に懸けて突然に躍り入らむとする、其狀に喚めて怒詰きたりけむ彼の老婆は「ええら！嘉助どんで無えけえ？」一言ふよりも疾く、彼媼は彼爺が袴褶の裾を攫みぬ。嘉助とは彼が足輕より其の小頭となれる時の名なりき。思ひも懸けぬ我が舊名を喚ばれしと、狼狽とせる端を抑出られしに、何事と叫びつゝ彼は其と顧れば、あな無慚、げにも其女ぞと見覺えはある、駿州有度濱に安居村なる六兵衛が後家、おさあと言へる者なりけり。彼女は太くも老朽にけり、既往、今より廿四五年の以前は、眉目好といふにはあらねども、亦た醜陋とにもあらず、豐實しう、豐肥々々と肥りて、偉大なれど愛嬌もある年増女なりしが、今見れば有りし昔の面影も留めで、齒といふも可恐しき穴目々々、卒都婆負ひたる枯骨の如し。彼女には我も、些と逢ひては不味きところあり、從て此場をも、と有繁に喜太郎頭を抱へつゝ、愈々其身を逭れむとするを、娘は怨む泣聲して、「主、そりや薄情といふもんだよう。此方も此所へ來さしツたは娘に逢ひにだろ。其娘へ逢ひもしないで逃るかふは……。」突貫の一言、喜太郎は仰天せり、宮も呆れたり、熊谷も驚きたり、他物は全く其の事の何要なるにれや〳〵と佐呼けり。「此方と不[illegible]描したは、あの殿様が紀州へ移封しやれぬ以前の事、

其時乃嬶がおッ爭んで出來いた兒は今程がいふ太夫だよう。此方も其事何處で聞いて度々逢ひに來ましッただろ。其娘にも得う逢はねえで乃嬶來たとて迯るちふは怎樣たら怪事だえ？ 宮どの疾そ呼んで來よう。爺嬶等が娘の太夫さア疾そ呼ッて逢さッしやろよう！」彼嬶は繰車の轢るが如き泣聲を舉げて、傍下も管はず、且つ怨じ、且つ叫びたり。之を、進退其據を失ふと謂はむ歟、手足の措を知らずと謂はむ歟、喜太郎が目下の、驚愕、周章、狼狽、奇異、不可思議の感は、恐らく千百の形容を以てするも盡く盡さじ。彼は實に茫然として自失せり。何さま念へば其昔も疎薄く、家も貧しく／＼、妻も無き寂寥さの出來心に、不圖此のおさめ後家に語ひ寄りて、其れが腹に懷孕らせしよしも聞きたるが、其の子の其れが其の今の太夫ならむとは、實に思ひも懸けざりしなり、個は什麼！此は／＼、唯許りにして彼は當面る面目なさにや躬を僂まして頭より其簑褶を被れり。

　狂言にとて見る可らぬ此の好笑さに、彼の猿眼せる老婆を外にして、宮も笑へば熊谷も微笑ぬ、況て見物は吶と囃せる、其背後の方に、忽地、「さ、往來ぢや、往來ぢや、退かしやれ／＼。」桿棒持ちたる前掛の男の制止聲いかめしきが跡より、插懸傘の影は見えたり。是れ道中といふ事すなる此廓に太夫の來れるなり。

（百十六）

人の山のぱッと崩れて、一條の大路啓くる處、馥郁たる蘭麝の香は夜風の隨に／＼先づ左右に垣と竝列べる見物の鼻を撲てり。續いて來るは箱提灯にして、其次に見ゆるは插懸傘なり、傘の下には儼然たる慈救の倚容、遠方ながらも威儀氣高う拜まれて、白地の手巾もて覆面せる白象の如き若者の背に、普賢のやうにも乘り玉ふ五人の遊君あり、是れぞ當時此廓にて五軒とか名告る其大家の太夫なるべく、信夫も蓋た道中に在らむと、此場なる男女も心々に、或は其息を凝め、又は其の眼尻を垂下るもありき。宮は豫て、おさめ婆の迷惑ひして、有らぬ人に粗忽せむことを惧れて注意けたり。御身が娘のお道女、今の其の太夫どのは、妾も昔日の友達の舊知間なり、それがおはさば情と袖牽きて通知すべきに、其れ迄は胡亂に高聲など舉げたまふな、賦出で、縛るなんど勿論禁制たるべしと捉てたるを、彼婆も納得して、彼の情無しの素助どんを一心に番せり。

　遲矣と待つ衆人が心も知らぬ頬に、一歩を半歩と遲りに邌る行列も漸次に近づきぬらし、留木の薫は愈々氣爽かに、提灯の紋も定着となれり。其眞先なるは一輪の紅花に、蕾二つ三つをあしらひたるもの、浪華屋の梅が枝の君！と傍邊は一樣に動搖き立ちぬ。宮は、今が妙齡の、加之これ程のめでたき眉目持ちながらも、從前髮化粧磨琢きに意を須ひたる事もなし、況て他人の容姿の美き醜き、衣服の色目模樣の流行廢止など、目にも停めず、耳にも懸けざるが、これは流石京女郎といふ、其都の粹を盡せし島原の遊君達なり、抑も什麼なる韻裝にてやあるらむ、其人は清水の御堂の天上なる天人のやうにてか、と竊に眼を凝らしたる、其瞳裏に先づ入れるは彼の梅が枝なりき。魁の名におへる彼女は、其齡も若木の容姿もの／＼し、風餐虐も甚麼かはといへる苦界てふを、屑ずともせぬ顏色凜として、張ある目許、瀟洒たる風采はげに此里の名物なるべく、髮は、洗ひ立てたるをすべらかして、素き髻一つを懸けたり、白紗綾に銀の摺箔せる補襠を被れる、人は皆喝采と稱揚れども、宮は、たゞ其の羸形に物寒しきが哀憫ましう、兵學に曰ふ、糧道絕て、日に其釜を減ずといふ如きものあるを傷めり。恁くして梅は過ぎぬ。次に來れるは奈良屋の櫻木。これはまた八重なる花の濃艷せる扮裝、臉

疊滿に紅るを濺して、今が開くべき蕾の露を含める眼は、此上もなう愛狂しう、けふ九重に其名の匂へる全盛の遊君とは見えて見物はただ現を拔かすが、彼女には彼の兵法に忌む、虚形のみありて實勢無き、浮太刀てふ太刀筋の心地せられて慊かしからず。三番目なるは、住吉屋の常磐、松の位は十分ながら、綺羅に高倚りて些猾き方もあり。四番目に打てるは龍田屋の秋色、二月の花よりも紅ゐなる、其の眉目は勝れたれども、散る急ぐ、前途の日脚の、やゝ短きがやうなるぞ齢の薄なる。

見ゆるも〳〵其人ならぬに、老婆ははや泣顔なり、「宮どのよう、此人でも無え。でも此人達も傍菴だらうに後問屋で見れさッしやろよう、其奥柏屋の太夫だちふッて。」「まあ急迫しない、其樣に言はしやらいでも、それ道どのは那處に……それも其處にだや。」「え、何處に。」一氣を奪られて婆は覺えず其手を遁うせり。鬼一口の大蛇を遁るゝは此時と、韋駄天の如き逸勢もて喜太郎は其の纏袂の傍袂を曳ね出でぬ、あッと叫べる婆は道觸る、見物に又た驚波を揚げたり。「爺さまお悲い、薄情爺だや、逃がすな、捉まへて遣れ、見物は皆ぞさまの味方だや。」哀れ白龍の魚服せる貴は、和泉町の町奉行、吉見喜太郎として迎へられずして、順禮の喜助として遇せられたり。紛れむとする隙間は皆故意なる彼等が爲に閉塞がれて、氣の逸きは竹槍の如き拳固さへ出すに、宮は遽てゝ婆を和め、爺を閹い、見物を防ぐ、思ひの外なる騷動の際に、最後の、殿なる。太夫は來れり。是れ奧州屋の信夫なり。

倉遑しき折とて其人は未だ熟く見ざれども、宮は快くも其紋章の忍草を認けて婆に指示しぬ。「婆さま那的だや。」百に餘れる素見の口も、一齊に彼婆に氣勢を加けたり。「今度のがお的だや、太夫だや、婆さま緊確り……顛倒るな。其の元氣で遣れ。」

（百十七）

お道といふ女兒の有度濱切ての好標致なりしことは我も片心に記憶あるが、今觀れば、其の荒磯の潮風に吹かれし折とは事異りて、名にしおふ都の水に洗ひ磨げたる、面は眞玉の瑩徹るばかり淨潔中の涼しさ、昔し忍ぶの其名を聞きても其人ぞとはいかで想ひ得べきと思ふばかりなる美容、此の下萌の小草のためには今を盛りの勝も裾も、見る影もなきまでに壓伏れたるに、宮も呆れぬ。況て素見の見物をや、萬口の喧擾は[illegible]の如來の後光を拜みたらむが如くにて、西より東より南より北よりせる、其嘆しきこと雷の如く、六種震動、雨曼陀羅華の奇瑞、末法の今日にも只當面こゝにのみ、と見る中に、獨り宮の鼻尖聳めかして、依然に廣大にせる我は額より目尻の垂下ること六由旬と見えたるは、彼の熊谷の花木なりき。其の以前より待受けゐたる仲居了蠻十幾人、かく〳〵と見るより一齊往來へ趨り出でゝ、「お早う。」「此方へ。」一樣に會釋すれば、太夫は只其を冷嘲に見遣れるのみ、總て此の圍繞せる羅漢の如きに手を執らせつゝ、如來は其の寶蓮の座にあらぬ若者の肩より下りぬ。揚屋の女房はさし心得て、敷きたる氈の塵うち掃ひ、いざとて薦むるを、これには情と手を遮べて式代し、徐ら其手を補襠に、唯懸けたると見る間に渋く拔きて彼の大盞の上座に座れり。神やらむ、佛やらむ、其の光景の只微妙じう、赫灼ばかりなるに、衆人は皆、眼睛の目にあるも、魂の軀にあるも忘了て恍惚如たりき。彼の今までは、逸りに逸りて、其人の來ばも着くべう怪惧まれたる母の媼すら茫々焉として其の肥近くべからず、冒瀆すべからざる威嚴に恐縮たるのみ、女房は更に心得て、彼の煙草一ふくみを烟管に裝ひて、火を點じて、「もし、太夫さま」彼女は

織手にこれを接て、更に一喫きて徐に差し更に今一服を與ふるを、一喫して、「あゝ」太夫は此烟を與へたるなり。彼の花木に遣りたるなり。此の千金にも値なすべき一服を獲たる彼は蓋ふに其烟より先に其魂や消ゆらむ。此を見るより、「罰中奴！」其顔は、彼の艶衣、唾液の其頤に滂沱たる見物の中にあらずして、思ひも寄らぬ奥間を隔ての暖簾の内にあり。女房は、「えー」と驚き視る其端へ、其を推排てのさ／＼と出で来るは彼の椿木といふ松田彌五七！　彼は其の蹄名の如くに枝節曲頑しら、太夫と花木とが間へ無手と坐りて、「あゝ酔うたく。」こりゃ太夫、醉覺の水でない其の烟草とやら、一服所望ぢや。」彼は酒上もいと醉きに、先刻來の面白からぬは醉ふに隨ひて益其の面白からず、今も奥間にて、酌に立てる婢女、我が部下の乙弟子原を散々に窘責み着けて、不平の鳴を其盃の破るゝ響にも漏したるが、幸くの神輿は上りて醉覺と此所に來て見れば、猶更に面白からぬ此醜態、其の見たくでも無き此醜態、武士とも有るまじき此醜態！　といふに法界とやらの悋氣か、否ぬ歟、沸きたる業腹は愈煮えぬ。「えい一服所望といふに！」女房は透さず、「檜さまとある事がえゝ御安い御用。申し花さま、」すと其の御煙管お借しなされて。」彼女は花木が手に持ちたるを乞取りて、愛想と烟草を等分に、「あい。」「えい老婆、無禮な奴！　誰が爾が半喫のもの所望というた？　馬鹿者めッ！」彼は突如に諸扱り奪て上框に礚と當てたり、可恐、此所にては其祟り煙管に加りて、神罰眼面、羅宇は兩斷に、雁首は前にぞ飛だりける。此方の熊谷も酒氣十分なり、稟性の癇癖むらむらと發りて、額上の青筋如龜と現でしが、良暫氣して、「太夫其の所望……。」不好たらしい奴なるも其人の吩咐と、太夫是非なく喫着て、「あい。」此のあいは前とは異りて、斜めならず神慮に叶へり、三度頂戴して彼はすッぱと吸ひたるが、酒には醉ひたり、喫熱けぬ烟草なり、什麼強くも吸息たりけむ忽然に烟管抛げ出だし、胸を抱へて、「えッへッへ、えッへッへ！」往來は吶と嘩笑せり其の中に獨り困ぜるは彼の婆を抱へし宮なり、彼女は出づべき機會の無きに切りに其心を惱めたり。

（百十八）

酒興ともあれ、罰中奴と呼び、戀中を隔て、女房を叱り、烟管を折る、面當がましき振舞は花木が腹にも十分徹へぬ、其奴が今強奪の烟草に中てられてえへ／＼と咽逆る態の朋友ながらも小氣味好き、且は可笑き、自己が顔に泥す神輿にも背離の御蔭の其の中るといふを些しは意へよ、と彼が微笑むを、「唠、お主は？」一誥問涙を才に拭き拭へる椿木は、忽連看取て其の三角の眼を六角にせり、「お主は／＼……朋友の災難を見て嘲笑ふな。衆人の面外に恥辱かいたるを面白しと見るな？」未だ咽吭の檻しくてや、彼が平常の破鐘の嗄れて、火の用心の鄙子引くにも似たりとて仲居らは笑ふめり。花木は又、其人の手前、其れが心を傷めむも最惜しう、且は這奢漢に取合ふ際には後刻の苦舌の種子にても考案ふるが優しといふ如き風情して、神妙なりき。其神妙が猶此方の小癪には障るなり。「やい、花！　貴宗は和主は審笑するぞ、や、汝他は今太夫に其の目授しをツたやうちやが、扨は何かの巧計して其の烟草に乃公を咽逆さしたな？……否、咽逆さした！」ま、途方も無い難題と、了簡は眼を圓うしぬ。時に見物の中に聲あり、「爾うぢや、其の色の生白めが咽逆さした。」「恥面の赤面奴！　腰が弱いぞ！」「刀の手前、毆打せ／＼、毆打いて其の生白奴を烟草蒸にせろ！」

嫖客の口嵐は益募るに、これに椿木の火の手を煽動しては華麗盡めの店の内も落花微塵、

こりや叶らぬ、と滑る如く亭主は奥よりして舞で出でたり。「こりや此方衆は、見る物で無い、疾と退らしやれ。これ喧々、何故此方は其の迂踈りと……なぜ早う其の奥へ御伴せぬかい。こゝな迂闊奴！」「えゝ迂濶てゝ、太夫さま御出入りには式作法もある、其樣に此方が言ふそうに……。」「言ふやうにて、此騒擾目に入らぬかい！ 花の無い馬が嘶ねまはる。駒が騒けば花が散るわやい。此盲目爺！」「なンの盲目ぢやッ——おゝ商賣に盲目かやで！」言はすれば此鶏婆！」悠長き京も此廓はさすが競勢の土地なりき、亭主は氣逸く此婆に攫みかゝるを、餘所の喧嘩に技ン支きたる高砂の松の爭論、これはまた如何な事と人々に押分られて亭主、今更ら面目もなし。「えい往生い檜木愛か！ いやさま、帯と御奥へ……えい久しても!!」霹靂の如き一喝の下、雷火の鐵拳は疾くも飛びて哀れ老爺が頭は頭とばかりに喫ばされぬ。「こりや、ま度寄い！」押隔る亭主を檜木は睨附て、「くわ！ 彌めかへ太夫は身が郷出た！」「太夫と言はい」 猛然たる問喚は迸りて、喧嘩は挑る、花木は血相を變へたるなり。「むゝ、然らに意地を聞し」 花木は大いに嘲笑へり、「[illegible]に調進たのか？」「むゝ、いや其で無い。御萩草を異れたは客待遇ぢやゝ 其の意趣を聞きたいぢや。」花木は愕きたり。「檜木、其方は狂うたか？ や發狂したか？」「何の氣の狂ふべい、ずんと正氣ぢや。」「正氣の奴が其樣の事言はれた義理か？ 此女は身が……。」「宿の妻か？ でも未だ無からう。はゝ御身は客、太夫は傾城、一夜妻！ 賣物ぢや。其の賣物を金で買ふ。やさ乃公か其金！ 揚代出いて買ふといふに御身が甚麼も、要らぬ世話ぢやは、あッははゝ。」憎々しくも彼が言ひ放てる一言は、酒興か、故意か、彼が此揚屋に來る毎に、酒をば喫めども徒笑うてのみ歸れるは如是き心ありての所以歟、固より一座せる客に相見えぬは此廓にての掟なれども、扨て此の仕樣を太夫は什麼聞け玉ふ、と一座只其の痛心の答を倚める傷心の眼睛を其人の身邊に注げる時、突如として伽羅の香の芬として肉を撲つあり。瞬見れば、太夫の其座を起てるなり。「待た！」檜木が其裾を捉ふると同時に、「お退よう！」と淀く如き聲は廊外にあり。

（百十九）

「待た[illegible]」[illegible]との[illegible]も[illegible]肉をなして、[illegible]と[illegible]花木[illegible]目を[illegible]でぬ。此者は、檜木が從前に聞ける的の中にて最大的異常なるものなりき。彼は[illegible]なるも從善く其を儲けして之を避れに、[illegible]！「一條の紫電は我が頭上に奔くり。物々し！」と言ひも敢へず猛然と身を退けば、其刀は空を斫りて彼が捉へたる太夫の裾を素破と斷ちぬ。往かむとするを扯出られたる彼女はこれに身の自由は得しも、牽きたる力に否と縺されて[illegible]の半らず頭々と倒るゝを「やれはア負傷れたか!!」一目前の急に趁かむと焦躁る老婆は、危殆しと禁止る宮が手を[illegible]もぎばかりに掻除けて、上框に纔び上れり。此方には、[illegible]刀を引拔きし花木の、拔合せし檜木が大[illegible]を丁と拂ひて背樣に背けつ、今一太刀といふ其太刀の下、忽諸目に入るは老婆が姿、耳に聞くは其者が絶叫！「[illegible]、自己が太夫[illegible]！」喜太郎も我が血を分けたる其女兒の危急とあるを傍に見ては居られぬなり「宮續け！」と呼ぶさま、石火の如くに躍り入りて彼女が着たる[illegible]を手快く[illegible]せ、切結べる太刀の上に投懸て、[illegible]る太夫を小脇に引抱き、奥を目がけて突と入る「[illegible]！」といふ老婆が叫喚は[illegible]うたる彼等が耳にも煩[illegible]の[illegible]くに聞けり。[illegible]は[illegible]に怯[illegible]せしか、彼女は負傷しつる[illegible]と[illegible]付けず[illegible]る兩人が

拳の上に、何物とは知らず颯と懸りぬ。其物を便りに、其躬を腰石にして緊乎と引敷かるゝに、彼等は脆くも小膝を蹋きぬ。引敷きたるは宮なりき。然ばかりに廣濶かる店内も、衆は皆此の騒擾に殘りなく其影を躱して、萬燈と耀れる銀燭の下に今在るは、此の四人のみなりき。看得たり、其の一人は、頭巾も脱げて、蒼白き面に血迸れる眼を瞋らせたり。一人は、鈍刹といふ奴頭に、團栗といふ眼を瞪らせたり。一人は、澁紙の面に歯も沒き口腔を呆閑と明きつゝ、後さまに反り仰りて、惘れて魂消たり。殘れる他の一人は、言ふにしも辭の足らず、見るに目覺るまでなりき。看得たり、彼女は、身も薫るばかりに燻き籠めたる唐織の白無地に金銀の絲と箔をもて忍草を繍ひもし押しもしたる、其紅裏も燃るやうなる裲襠に躬を蕚かけつゝ、異しう、垢賦ける筬揩てふ纈纈の着衣を千草染の布子の表に被れるが、身形に似ぬ容姿の花は微妙にして、其の島田髷の解れて、一本插したる銀紙の薄の簪に攪れたるも可愛う、力味ある眉に、愛の滴下るばかりの目色、凛しき口、素直に透れる鼻、白き微紅ゐを帶したる肥ず亦た痩せざる頬！　それさへ有るに、夜風に吹かれて六片七片舞ひくる花の、意有りてか戰げる鬢にちら〳〵と懸れるが又、得も言はず艶に、つき〳〵しう、其鮮麗さの幾層をか加へたる！　其が容顔、此が風情、眞個に繪にも筆にも及ばぬ、彼の言ふに辭も足らぬ、見るに目覺るばかりになむ見えき。

觀來れば、前なる佳人は、猶桃李の媚を銜へる色界の魔女たるに過ぎざりき。今なるは天眞の素地を露はして毫も脂粉の汚膩たるを藉らざる、宛然兜利の天女たるが如き觀念あり。加之此の美人の、膽力、伎倆、力業、男子も幾ど及ばざるべき如きものあるに、黒山と圍める見物の老若、男女貴賤、一は其美に看惚れ、一は其勇氣に呆れ、且感じ、且歎じて、少時は其聲をさへ作さで潛めるが、纏て山の頽るゝ如くに、海の湧く如くに、河の決する如くに、一齊に喝采せり。「頼むぞう、自己がなウ！」「太夫さんより艶麗ぞウ！」「天下一の大明神さまア！」「其手を放すなア！　いつ迄も見せて呉れえ！」前代未聞の此の景色は、げに觀るにも優かじ吉野初瀬の花紅葉の一時ならで、常盤の松か、碇石の其儀か、千引の石の引かれぬ喧嘩を此の島原の有らむ限り、此所に斯くて在れとは、彼等が一種の冀望なるらし。傍目の見物すら既に怠く惘れしを、況て其局に當りて膽の潰るゝまでに愕きたる彼の兩人は、辛くに聲を出だせり。

「宮、汝甚麼ぢやとて？」—「武士の意地張に邪魔するな！」彼女が花の脣は初めて搖けり、「ほゝ何ぢやとえ？　其事が意地ぢやとえ？」

（百二十）

其れが意地かと詰問られて、物に狂せる如き熊谷も有繋に其回應に塞れり。強情なる松田は怠くても猶痿まずして其口を喑かむとするを。「これ程の不檢束しても、御身は何だ何か言ふ氣かえ？」宮は窘責むる如くに睨めぬ。「えゝい洒落臭い。汝、ンむ、其の小女郎の……。」と彼は掙扎つ、焦躁つすれども、壓住られたる刀も脱れず、又其の返答の語句をも得ずして口にも腕にも不覺を取れり。「小女郎のなんぞと言はれた義理かえ、他を犬の畜生のと先刻には自はしやれたが、妾から見れば儞等の方が余ほど畜狗ぢや。一人の女子を二人して奪合て啀み廻る、怎麼たら醜事ぢやえ。殊に此の喧嘩の根も檜木、御身さまぢや。」「言ふな、胡亂言。まづ這處放せ。」「いや放しませぬ。妾は此兩刀をこの儘持て行て師匠樣に言告る、さ、師匠の御在らしやる場所は何處ぢや。」見物の喚聲は疾風驟雨も啻のみならざるに、宮が膂力は益加はりて刀は磐石もて壓れし如し太夫が身上も心に懸れり、我が面皮も如是る際に曝したらな

し、と有りて此儀猶遁むも流石なり、自ら作せる瓢なる羽目に我から陥たる熊谷は、酒狂も憤怒も今は醒覺て、只管に困じ果てたる顏色を蒼く、「こりや宮、も可いは。可いは、措け、放せ。」「可かおざん無え。此人達は他人の女兒に色傷させて可も無えもんだ。宮どのまツと壓へて哭させろ、自己が敲べえ撃つ！」勢込める老婆も昔し把りたる武俯の掌に唾せり。此の見賑に喫驚たるは彼等なり、彼等は此の名も無き敵に組れては兵の上の恥辱と慌忙たり、就中當の敵と目指されたる熊谷は、其先祖の猛者が一谷の一二の魁を反對にして、廓名の花木の落花微塵と搔ふつて逃むとす、遁さじと此方は追蒐る、其機勢に彼が脚後なる燭臺を撲地と蹴飜せば、莫慘、百目に近き大蠟燭は燃えたる儘に猶上りて一方に懸ける松田が小鬢に爆と着く。火に緣のある檜木とて不動の護摩木と身を做しては甚麼堪るべき、「あツ、ゝゝゝ！」力任せに拂ひ去けたる其蠟燭は再び飛びて傍邊の御簾に包裹りぬ。只見る間に閃々と燃え上がれり。素破喧嘩は火事に化れり。白刃の怕さも鐵拳の怖ろしさも、今は論うて在られざる亭主は阿呀と叫びざま、座上れり、女房も跟けり、仲居も續きたり、丁鬟は號泣り、犬は亂吠たり、見物も綜波をつくりて一度に動搖々々と竄入りぬ。是より先き、奥の間に酒呑みゐたる花木と檜木が一群の壯者輩は、彼の喧嘩と聞て得物押取り逸早く廊下の口まで出でたれども、日頃より大器面する熊谷、今方自己らに散々に呆けたる檜木めが弱りつ呻きつ顏色も無き迄に宮に退治らるゝ其態の好笑きに、取支へむともせず、小氣味好き哂笑を竊びて潛語き合たるが、是等も大事と見て躍り出でたり。固よりの不平は滿々たる、腕節は夜に日に鳴れり、何をがなと待構へたる彼等の動作は實に天狗の如くなりき。看るが間に彼の萬燈と耀やける燭臺は悉く撲滅されて、有り合ふ障子、紙襖、衝立、子遺なく扯破られつ、果は奥間に取て返して酒器、膳椀、花瓶、香具、衣桁も枕も夜具も、當るを幸ひ、觸るるを獲たりと、取ては拋け、攫みては棄て、引出だし、投散らす、彼等が其狀景は又旋颺の舞入れるが如くなりき。

仰天せるは又亭主夫婦なり、「こりや、如何ぢや、撲毀ぢや。貴郎方は、こりや、ま、土臺……。」「えゝ火事の手傳ぢや。邪魔するな。退け〱。」「いや火事は疾の昔に。」「消たらば又た己達が出來いて遣るは。」「與？」寧ろ勢に乘れる彼等は、拒ふる亭主泣號く女房を突退け、踏近めして、又、火鉢、炭壺、竈の灰、手に當るが隨に拋散らす、此に撲たれたる見物、目潰を喫へる徒輩は、腹立紛れ、意趣返し、一つには亭主が急を拯はむとて、進みて戰ふあり、退いて急を報るあり、適も味方も暗中爭を採む如くに、又豆を煎る如くに、亂鬪、混戰、奮擊、廝殺！　既に喧嘩に接ける刃傷、刃傷に續ける失火、其に繼ける亂暴、狼藉、珍事、重要に愕ける廓會所の番人は、此時町方の出張を得て、突棒、刺叉、階子、捕繩を手々に、肩に、擔ひつ、擔げつ、がちやくりんと押し出しぬ。其先頭なる高張提灯の影を遙に見るより、「や、奉行所ぢや！　捕吏ぢや！」一聲は萬響を一時に鎭壓たり。今迄の縺いつ、叫びつ、組づ、綻れつの彼等は、只胸子を散らす如くに、潮の退く如くに、風の過ぐる如くに、聲も音も、影も形も一度に斂めつ、あはれ跡には夜櫻のちらりほらりと、朧夜の月影に散るがあるのみ。

（百二十一）

今出川の館にては三位の卿の御病惱やゝ瘥りて、かの物怪の氣色といふも薄らぎつ、御食なども折節は喰るに、兵庫の左門が御看護の間も出來ぬ。とはあるも、其面は世間に公然晴れは出されぬもの、彌生のこのごろの麗閑さにも、

飛ぶ螢の狩のいそがはしきに花の盛りを想像りて、祇園清水の賑はしき、只人傳に聞くのみ。閉籠めたる室の中に晝夜心頭を惱むるは、曩に出せし江戸長への目安、抑も其成行は如何やらむ。之に對する紀伊國の處置は又如何と有ることやらむ、田邊なる帶刀の二月の初旬に參府との事は聞きたるが、其後の彼が消息は未だ得ず、然も由井が書通といふも其以來は無し。彼人、今は何國に在る歟言ひ遣るべき事、照會すべき件も多くあるに彼の二條寺町なる松田熊谷らが旅宿には便宜も有る歟、孫は、訊て來よ、とて彼の少尉を出だし遣れる前の島原が騷動の中一日隔ての夜なりき。間も無く少尉は復歸れるが、彼の眼は圓く、呼吸も暴かりけり、「若殿、や、扨も〳〵ぢや、彼の雙子めらが稀代の珍事爲出來しまいて喃……。」苦々しげの面は、例の無人相に、不平の色の上塗をせり、兎角は平事ならずと見たる兵庫、其膝を近う、仔細什麽と自家も遽つるを。「いや、其の仔細、其本人たる奴の口頭から聞さしめ。我等が申すより興がおざらう。」彼は言ひ棄て〻次へと立ちたるが、少時して一人を伴れ來りぬ。伴られたるは彼の松田彌五七なりき。視れば、彼は、其の片臉より小鬢に懸けて、痣にやあらむ、傷にやあらむ、地體の褐色を紫赤に變て、一臉實に水膿といふを有たせぬなれど彼は疼うも無きか、又其疼痛にも換られざる身に過失あるか、只顧に額をもて疊を摺れる、泥に潛らむとする鯲のごとし。兵庫は彌其心も心ならぬなり、「見えたは御身一人か。熊谷は？—「其義でおざる。三郎兵衞は逐電しまいた。」え〻！ と叫喚て、此方は反顚らぬばかりに仰天しぬ。大事の訴人かと疑懼しなりき。彼は極て面目なげなり。「他人の不覺、自身の罪過は、今申すも面無うおざるが喃、何を匿さう、師が豫ての命令に違背して二人が發起で、鬱散の酒盃を把り申した。」兵庫は直地に、「では其の酒興の口論の劫じてな？」「いや。ま、聽せられ。其實は、醉うての餘りに衆皆の魂が浮羅めき出いて、誰が發議となく、島原の廓通ひとなりまいた。」兵庫は直と呆れしなり。何様にも孫八が罵へる這の雙子めら！ 目下の現態、師は師とて、友は友とて、危ふき瀨も潛り、恐ろしき灘をも航りて、只顧此の大事を、大事をと、夜間の夢すら易うは結ばぬを、何事の面白うてか酒飲みて、醉狂ひて、果は島原通ひして、逐電までも爲る！ 言語道斷、沙汰の涯限、我黨の風上にも置くまじき奴、如何して與るべき！ と息卷たるが、猶有繫に討果すと迄は無くて、睨に睨めたり、一然、腹立も御道理、はや何と辯疏の爲むやうも實おざらぬが喃、眞は我等も只一時の興、當座の花やるとのみの心得で三四度は同件まいたに、有らう事かや、那の熊谷めが、其の對手の女郎に恍惚で、預けられた師の金銀を湯水と使うて、終は一人で我等にも隱いて、通ひをる、扨も苦々しい、怪しかるとは思うたなれど、其初發は我等も同類、強うは異見もならぬもの、と有りて此遮行では、と心底好い程に諫めたなれど、彼奴め聽かぬ。中々に聽き申さぬ、のみならず益募つて、其の女郎めを落籍せうといふ……一「落籍？ み落籍！一聞くに堪らでや、兵庫は、其膝頭に疊を蹴て、嚇と傍に唾吐けり。「や、若殿、ま〻御道理ぢやが且づ待せられ。然りとては又三郎兵衞も苛い陷りな。其の女郎は太夫が端か？ 何屋の誰といふ？」少尉が眞切立て問ふに、彌五七は頭を爬きぬ、「奥州屋の信夫といふ……。」「ンむ、あの太夫か？ や、彼女は評判の艷麗的ぢや。むう、あの信夫を喃？」馬鹿と笑つた其の馬鹿の一人で有るらしき、彼の口氣。謝言の席は惚氣の會ともなり氣なり。

（百二十二）

憤懣る兵庫は其面を烈火にして、「默れ孫八、

[illegible]　松田、其の熊谷めは何様にして逐電した？」「眞に申すも面目無う……。」「面目無いは言はでもぢやは！　仔細疾う言やれ。」「逐電の様によつては由井殿へ急使馳せではなるまいが。而て何時其の逐電した？」「昨夜、昨夜のその子刻過ぎ。」「其の今の落籍とやら爲た後か？」「いや其の落籍までは未だ爲まいと存ます、……が、預りの金をば悉皆掻攫うて……。」「えい悉皆と？　其額は？」「大約は五百兩！」兵庫は父背に呆れ果てゝ、遣る方も無き遺恨を其の歎息に長く吻けり。少閑も同じく、其舌を吐けるが、彼なるは彼の罪惡を憎めるか、將た其の大金を思ふ儘に使用へるを羨むか、「苛い事爲て退けた喃！　さらば遊興も華麗ぢやツたろ？」苦たなせる彌五七は爲う事なげに頷きぬ。「でも有らうよ、彼奴はもう大盡氣取て、花木たら云ふ名とかを喚ばせて喃……」「ふう！　苛い保養しをツた喃。而てその彼里での喧嘩とかは其の前晩かや？」彼は遂に其の小鬢の傷を撫でつゝ、「前晩、一昨日の晩　此傷が其の彼奴めと行ひし喧嘩の記念。あ、また疼い。」兵庫は重疊なる驚愕の面色して鞠問はむとするを、彼は押かて膝を前めて、舌無摺りの委細を語りたる、「前聞きされ、殿、實は其の昨日の晩、我等、三郎衞と彼廓で爭論して見らるゝ通り此の片小鬢へ此傷を負ひまいた。すなはち右の放蕩の異見、何うしても聽かぬので、是れは寧う彼の太夫といふ女郎の面前で懷裏を破て、是非なくば彼奴に恥面掻いてもと斯う思うて、彼廓へ出向いた。折柄が夜櫻の盛り。彼奴め、右の大盡姿で揚屋とやらの店先で、道中たらいふ爲して來たから、太夫を引着て、仲居丫鬟らを侍して、花を眺めて、大道を前に馬鹿面しての酒宴。處へ我等破て入りて、其方の此遊行は何事ぞ、今は師匠懸りの修行最中の軀ではないか、太夫聞かしやれ、こゝな男の金は悉皆師匠の預りの金、其金を斯う濫費さして貰うては終局には此大盡、首縊るか、身を投るか其外は無い、此男可愛いとおぼさば何卒此夜限り呼んでも客にしても下さるな、と事理言うたりや、彼の太夫は感心な女、然いふ次第なりや斷緣うといふ。處が彼奴めは男子にも似ぬ未練で、斷緣るとは誓詞は虚言か、起請は反古かと、やも耳にも堪らぬ程の罵詈の數々、焦躁て煙管を折る、火鉢を蹴飛す、果は面色まで變へをつて刀の柄に手を懸くる。驚いて抑むる亭主と女房、仲居丫鬟らを叱斥くる、踏迚めす、其亂暴はいや發狂の沙汰！　見ても居られず引離つてと起向ふ我等に燭臺を抛附て此通りの傷を負はせ、何やら角やら泣く喚くの夢のやうなる騷動を起しまいたが、其れも辛々取鎭めて、駕に乘て、連れ戻つて、扨て事の醒させて見りや、愛に悲して何と言ひ譯も無いといふ。以後は？と推せば、ぷつりと誓言する。彼奴とても武士、よも虚言はと氣の弛いたが我等の過錯、昨夜、人々の寢定まツた子刻過ぎに右の五百兩、我等も知ての萬一の用意にと師の發途るゝ折、封金の儘で渡されたと、其他に些許りある日用の賄ひの代まで攫ツて、臀喰へぢやや……で跡に殘された十幾人は陸に揚られた河虎の體、喫うにも喰うにも其の飯米の料すら無い。據ろなう所有物少少賣拂うたが、扨此上は何と爲う！　如何せう？」といふ舉句か、兎角は御身に談合して一時の御扶助を、と斯う言ふ折り、孫八の見えられたで幸ひ、の參上ぢやが、甚麼と此が武士の所爲か。此方も阿呆ぢやが彼奴の人非人。御察して下され。」彼は、且つ悔み、且つ恨み、且つ憤りて、果には其の眼瞼さへ抹ふた。這奴が言ふ事、一々其の眞實とも覺えねど、兎角は敵手の熊谷といふ者なきに、韜晦の術もなし、といふ如き顏して兵庫聽き居たり。此際、獨り其の晴笑を鼻尖に漏らせる如きは彼の少閑

なりき。彼は我は額に座を進めぬ。

（百二十三）

「何さまこりや度許い。や、若殿、此の處置を如何とお附なさるゝ？　こりや疾う手を廻されぬと師匠の一大事となりませうぞや、昔にも有る術ぢや、色と慾とに目が眩んで、贓作を賣て、其の身の罪惡を塗抹す。こりや的切り彌うぢや。因で我等が料見には……」少隙は言ひつつ座を看廻して、「……彼奴は今、島原か、所司代か。ぢやが其の大抵は島原と想ふは如何ぢや？」—座は聲を呑みて其の語に目をのみ注けり。彼は猶、「……到底が其の贓金は落籍が目的ぢや。我等が身にも記憶あること、一旦其女に惑溺ふとなれば一寸先の闇といふが一分先の闇となる、其の情婦といふ其奴の顏見ねば臀も落着かぬ、座にも堪らぬ、大事も忘却るゝ、主親朋友の分別も欠くなる、全然物の發狂ぢや。されば彼奴も其の發狂の眞中、彼大事の訴人よりも先づ其の居ても起てもの女子の袖引して、頻情を休めて、扨て後段の所作とも懸らうが、すれば今頃は　いや道うたりや其の昨夜の中に落籍結了て去んだも知れぬ、あ、恁う言ふ間〆最う遲いか？　喃、松田！」彼は小膝を丁と拍てぐる〳〵と眼を瞪りぬ。げにも言へば然も有るらむ、然ありては、彌五七應も待たで兵庫は急きぬ、「孫は、さらば此を何とする？」—追人ぢや！　備ぢや！　彼女を奴めに伴出さいては、おゝ然うぢや。」遽かに狼狽たる彌五七は頷く如く、獨語く如く率爾たる面色をもて其席を起むとするを、「いや遑まるまい。追人ぢやとてが此方が世間に公然の面出さるゝ身でも無し、究竟は山賊の罪科を滿贓が糺明す、惡しう振舞はゞ彼も我もぢや。當向たとこの心配なは所司代が方、彌五七御身は其の所司代と町奉行が方へ行て其動靜を篤と探りやれ、我等はこれより島原へ忍んで彼の太夫が在るか在らぬか、彼奴めが立廻つたか廻らぬかを熟う檢よう。頓向は其れからぢや。」孫八は獨り頷得あり、彌五七は悶かし氣の臀さへも既や坐らぬなり、「げに備、其れも備う、さらば御身は其の所司代へ、我等は其の廓里へ。」彼は冷笑つゝ、其の手を掉りつつ、「いや不可ぬ、貴公は一昨夜の不始末もある、行でからが甚麼が檢られう、侍ひの面體識られぬに其方へお行にやれ。」「いや我等は所用もある。」兵庫は直地に聞咎めて其面を屹と覩れば、「いや、其の物ぢや。えい其の一昨夜の諸挿もある。」「うゝ幸ひぢや、挿金なりや我等預からう。」彼は忽地目を苛げたり、「なんの汝、其金を持て遊興ばうでが喃！　や、殿、這奴油斷がなり申さぬぞ。其の島原へ行なうといふは此事を物怪に蓋た自己が花やらうでか？」「呀、お主！」と目は張開しが、彼が遽かに吶れるが、「いや不屆な。此方如き御國の大事を抱へた者に！　や、汝こそ、先刻から聞けば汝が非を棚にして熊谷一人に其の罪惡を塗着くる、若殿、聞かれい、這奴が島原々々と強て望むは、其の太夫、信夫とやらに執心して、其れで其の一昨夜の喧嘩といふも起つたと聞き申すぞすりや其の五百兩の金たらいふも熊谷が持出いたか、這奴が鼻棒で費消うたか得知れ申さぬ。昨夜熊谷の逐電といふも裏面には那樣な機關があるか、縱し無いにせろ、今迄は這奴も同穴の貉。汝こそ油斷も間隙もぢや！」—「え、えゝ、なゝ甚麼ぢやと！」一臀を破られし彌五七は立懸れる堪らぬ膝を詰寄て、居合腰の只一擊と礑と睨るを、孫八も負けぬ氣の睨め返せり。「えゝい汝等、憎くい奴等、それで其の由井殿が大事に立つか。えゝい情無い奴！　汝等如き奴はもう賴まぬ。嗟、由井殿も……」兵庫は、此の實に、賴み甲斐なき徒輩の爲に其の一身の大事を破綻れむとするを恚るか、正雪の前途を想ひて懊恨に堪へざるか、忿れる眼に悲憤の涙をはらはらと流して、

睚みかゝる彼等を睨み居るつゝ、拳を握りぬ。

（百二十四）

本意無しとも本意無かりしは彼女の宮なりき、彼女は折角に其日的の蔓として探求らむとせし熊谷と松田の跡を、不意き行懸りの騒動に失ひて、多時は彼方此方と索ねたれども終に獲ず、是非なくお道の信夫がもとを訪ぬれば、彼女は其實母のおとの妻と相携きて不思議の逢瀬に唯泣くのみ。喜太郎もはやく此の一席には在れども、彼は猶ほ足輕小頭の容助なり、太夫の無事を賀ぶと、狼藉の始末を告ると、茶を勸むると、盃を侑むるとの出入る男子はいと多きに、我が語ふべき筋は憚りあり、況て太夫といふ其女の肚意も知れ難きに迂濶と此人を和歌山の町奉行吉見喜太郎として表明すべくもあらず、只其座の樣を見繕ひつゝある程に、何事を言ふべき機會も無くて其夜は歇みぬ。

抑も當時の宮は、眞實無二の紀伊國方となりたる實、心底太だ知り難きものあるなり、其は彼女が和歌山を發途たるは、彼の憎ましき帯刀の老爺に一つは張合を懸けられたるなり。勿論、其後に、睚、又は喜太郎よりして、兵庫が叛逆の罪人たること、現在の故主を死地に陷さむとする悪徒たること、其の不義、其の無道の逐一を擧げて、深く、這の人面にして獸心なる狗斎にも劣りたる匪奴の成敗の助力をとは纏憑れつれども、尚彼女が胸裏には其師たる正雪が身上をば忘失れざるなり。然ればこそ彼女は明言つれ、「其方身を捨てゝ一働きといふ御意あらば、正雪どの身につきましたる事のほか、宮が生命の有らむ限りは如何樣の御奉公でもいたしまする。」彼女は大膽にも憚く言ひたるなり。

雖然、這は彼女の言損ねにはあらざる與、兵庫は既に正雪が無二の股肱たり、其の股肱たる兵庫を殪して然も師の爲に悪しうせじとは、其衣を剝きて其膚を凍寒さじと言ふに似たらずや、淺き女子の其處までには思ひ鋳らざりし實、鋳たれりとするも當座の羽目にて言ひ爰には違べる實、什麼彼女は佛菩薩の妙智力にも及はざるべき這の二途の難關に臨みて、果然如何なる方便をもて、其を透還し得むとするか。彼女は他無かりき、師の此大事を擧行はむとするに、浩る不義無道の罪人を其黨中に援かむは設令其事の成就る日にも、太甚しき士道の不面目にして、其身亦た其の不義無道の汚穢たることを免かれざるべきを感ぜしなり。されば彼女は又帯刀の老爺に言いて、「さらば御身は、當殿樣の御謀叛とあらう時、討手の軍に加つて和歌山を御攻めなさるか？」と反問せり。彼女は不斷に其心なりしなり、縱令其主は什麼あらむと一度君臣の約を締びては其心を變ずまじきもの也と確く念へるなり。故に彼女は、躬ら主の身に刃を向て、其首に繩を繋がむとする如き彼が擧作を見て、太くも惜めるなり。彼女は師を愛す、所以に兵庫を除かむとせり。彼女は紀州の舊恩を思ひて、君臣が眼前の窮隘を見るに忍びず、所以に兵庫を僵さむとせり。這の二個の因由相合し彼女は兵庫を我が讐敵の如く疾みたりき。

噫、去年の秋なりし兵庫は、彼女に産土神の如くに拜まれたりき今年の今なる兵庫は、彼女に餓鬼、畜生の如くに憎惡まれぬ、嗟嘆爲ぞ人生愛惡の常無きや。而して此の愛惡の地換させつるもの、果して是れ誰が處爲ぞや。吁不幸なる彼よ！人は又た彼が爲に一掬の涙無きことを得じ。如是くにして宮は京都に來し、不思議の際會とて彼女は熊谷と松田に遇へり、師の居所を仔細く問むとしつれども、彼等が儘りに馬鹿氣たる擧動は彼女に其を訊はする機を得せしめず、彼女は片時の間に相爭ひて、混亂の際に其蹤を失ひき、本意なし、本意なし、本意無きは遑りなし本意なかりしかども、猶ほ彼女は彼等の逸早く逃去りたるに安堵の胸をば撫でた

りき。自個も疾く其姿を隱して、扨て奥州屋に來りて、彼の者共が宮はと問へど誰も熟く知らず、只上京の方よりと言ふ。知らさらば知らぬも可なり、江戸を十にして其の一二つよりは無を集覺き京都、探さばなど搜し當てざるべき。其の思ふ旨を喜太郎にも私に語りつ、其の翌日は一日三條より北方を尋ねぬ。搜索にも搜索ても些許りの手懸りもなきに、今日も倦厭て島原のへと立戻る二日目の夜なりき。春とはいへど風猶は寒き朱雀野の夜路を、總て、ふ熱の暖かきもの身に搾たるか、流行唄勢ひよく唄ひ連れつゝ、叫喚き行く嫖客の中に、編笠深く面を蔽みてこれも足疾ら歩む一人の武士ありけり。宮は不圖覗たり。彼の武士も、唯目を駐めつ、「宮では無きか?」

（百二十五）

彼も不圖覗つ、彼も唯見つる編笠越に、不意ずも我名を喚ばれて宮は喫驚きたり。ちよこ〳〵と歩り寄りて、朧夜の月光に透かして下より覗けば、背たりとは想へるも流石に其れとは思ひも懸ざりし彼は其人なり、夜目にも紛れぬ我が搜索る其人なり。咄、彼は實に兵庫なりけり。其人と見るより彼女は躓ける如くに走り蒐りて突如に其袖を攫みたりき。遁さじと爲るなる歟、齎來たるに圖らずも遇へるを歡べる歟、大事を目下實、捕むと歟、頼むと歟、兎角に彼女は其目も嚴しくばかりに燃えて、其手も震顫き、其聲も塞るを、彼は再び、「宮ぢやッたか！」二度喚名れしに、彼女は漸喉も咽喉に通りぬ「兵庫さま、ま如何なされて？」危ふしとも危ふき彼は、此の鮮麗しき處女の懐裏に可怖しき刃有りとは未だ知らざるなりき、彼女が我袖を捉へつゝ懷しは其の可懐さにと想へるなりき、駿河以來曾緣たることは四五度なれども其兒との淺からぬ緣もあるに、我が實妹とも可愛くおもふ其の宮なり、彼は擢まれたる袖包みに其れが手を還と握りて、「無事がやッたかよ。」而て何時當地へ？」「あい……は半月ほど前……」彼女の氣息は猶喘めり。「何用で？」「あの、其の用事はな……あの貴君に御聞き申したりや分明ませうか師匠様はえッ……」「あの御人か、其れも去月初旬紀州へ往れたが。」「え！ 和歌山へッ」彼女は、其の紀伊國へと聞て、他の身上より其の身の大事と愕きたり、彼の神變を得たる如き師が彼處へ行きて、城下隈なく探索られなば、得も我身と吉見が上を聞出されぬといふこと有らじ、聞かれなば此の兵庫へ、内通無しと言ふも有らじ、這漢の悉く何氣なき、寧ろ親昵き、氣味惡きまでの打解顔は其は人に篤す有らむ歟、我を誘惑して吉見が上をも確知て一所に討て取らむと歟、これを想へば一昨夜の夜に[illegible]の松田らが、大よ細作と此方の身上を怪訝あるは、其の意味歟、而て機密を漏らしたる歟、然もあらば此處にて迂叮と手を……否々迂まらば遂其の基。と竊に挑ある身は暗に閣下の進退を窺りつゝ心におそろしき此日前なる敵を熟視たり。雖然、其隈にも、面にも、異むべき色も尤弾もなかりき。「お主も確か和歌山ぢやろ。逢いでか？」「逢ひませぬ。逢いでから遥たつて當地へ来ました。」彼が面色は初めて動きぬ、此方は素破と覺悟せり、寧ろ急ならば先んぜむ歟、と視れば猶然もあらで、「宮、まづ此方へ來よ、些と聞きたい。」這處はもとより朱雀大路の、京の薄昏を呼びまはりて山崎へ歸る油賣あり、内野の商ひに荷を空にして壬生へ戻る節裝賣あり、それに交りて、月に啼き花に叫く嫖鴉といふ黒羽織の尻尾の短かき、目ばかりを圓う明けたる奇特頭巾の、一名を梟とよべるが虚ろつく眼も、猶ばたきも間斷なきに、大事を決行ふべき場所にはあらず、いづれへ行くにやと宮は視れば彼は西方なる野原の、去年のまゝなる枯草を踏しだきつゝ進み入ること四五町にして、但有る葛

石の平坦なるに目を注けつ、軈て其傍を取りて泥塵を拂ひ、撫手と爲したり、此奴は、外見るところも筋太く、骨逞まし、幼稚き頃よりあの殿に飼立てられて和歌山にても名譽の劍客なりと聞く、遮莫、一個と一個の勝負せむに何程の事かあらむ、師の一の太刀の心は私に胸にも覺えあるものを、と今や彼の剛健なる體に反れる宮は些も臆めで、只其の默時の動作き方にのみ目を注むるを。「はゝ、怪訝むな、斯様な場所へ伴れて來たとて其方に何も無禮は言はぬ。久た言はれてからが恐くやうな其方でも無い。聞きたいのは其和歌山の形勢ぢや。」其の想ひ懸なきに彼女は我と我を嘲笑りき。何事でござりますか、其様な事に……」「箇様な場所を撰たといふか、馬鹿な、其事が乃公の身上ぢやは。」

（百二十六）

彼女は瀧に意注ける如くに聲を潛めぬ。「爾うぢや、和歌山は……。いや彼方は大騷動でぢや。」妾、其事を師匠様に告はうとて來ましたの。」「騷動と？ 而て何様に騷動する？」「え、では未だ師匠様から……？」書通はと裏問へば、「無い。」と彼は首を掉りぬ。宮は猶其尾に接きて、「而て、目下何方に在られますぢやろ？」「其事が知れぬぢや。予も其れで當惑の最中ぢや。」虚談も有らぬべき彼が額に寄する皺の、月影に明白と見ゆるに、彼女も今半分其心の落着て、覺束な氣なりし語尾もやゝ確乎となりぬ。なれど猶油斷はせぬなり、「でも那程の騷動を……？」再び彼が面上を覗れば。「えい騷動とて何様な騷擾ぢや。心の急く、疾う聞かせ。」「御家老の、安藤どの、和歌山から火の燃くやうな御出府！ 其れ御承知か？」最初に彼女は實事をもて問ひたるなり。彼は果然其事を知れりき。「其れは存知ぢや。」「誰から聞かしやれた？」「え、え？」彼女が眼は覺えず燿きたるべしと彼女すら想ひぬ、されど是れが白晝ならましかば、薄月夜の影を負へる彼女が面は晴くして、燿きは其れとも看咎められざりき。兵庫は猶然り氣もなう、「それは彼の御人から！ 和歌山からぢや、が、其限りに音信も無い。」「では、水野どの名古屋へ御出なされた事は？……御城下の人改めの嚴密い事は？」「いや知らぬ、知らぬ。甚麼ぢやとて其様には爲る？」彼が誘引を眞に信けたるに、彼女は再び我が僞猾しを肚裏に嘲笑へりき、今は心易しと思へば一ばいに其手を廣げぬ。「それは妾も熟う知りませぬが、迫ては江戸から御使も越されるとやら、其の御上使は殿様が御腹召らしする御檢使とやら、何やら角やら御城が上がるとか、御領地が沒れるとか、御家中が分散とか、もう種様の風説ばかりで誰も物も手に附きませぬ。檢査は嚴しくなる、妾等も寺の門番借りてゐたを追立てられる、御飯も給べられず、水も飲まれず、飢類へたりた捉へて斬られもせうか、兎も角も師匠様に此體を報告せて又好い分別の指圖も受けてとそれで逃げて來ました。え、もう其の騷動ぢやたらお話にも何もなりませぬ。」彼女は思ふさまに其謀を開けて、其の恐怖るべき光景を手勢もて語りぬ。誰か知るべき、此の可愛く他氣なく又可懐しき花做す唇、露と見る眼のうちに、潜める大逆しき機關のあらむとは、兵庫は聞惚れて自身にさへも禁め敢へぬ得意の笑顔に餘念なかりき。何とま此處女の言ふ如くに城下にては然る騷動も爲つゝあらむ、水野が名古屋へ赴きたりとは、江戸への御陳謝を尾張殿の手して頼む策、然らずば彼の目安を彼地より讒へて出さしたれば其等の穿議、後走に爲るにや有らむ、其れは扨て何様にも隨意にせよ、只あの帶刀が強辯も尾州が仲裁も、我が訴狀の三十七ケ條を全潰とはいかで爲得べき、黙し四五ケ條は言開かむも其半分にして陳すべき口の無くば今の紀州殿の御切腹、城地の沒收、家中の離散、其

はもとより然有るべき理由、然無うては又叶はぬ結局にて、謀る事は手につかで乍路々々と狼狽つといふも目前に見ゆるやうに覺ゆるぞや。然る程の好き事を彼人はまた何故に我許には疾う告げ越されぬにや、或は其の事據を聞きし城下へまでは行かれざりし歟、其れにても風聞だけの消息とては有るべきものを。可し／＼其れも今は要なし、此者の確實なることと此女が口より聞きゝれば、兎角は心地好し、今ほどは那れ迄に情無かりし我への御仕向を後悔でおはさむ歟、餘りに禍の嚴しきに魂消てやましまさむ歟、はゝ面白し、恁う申す兵庫が隨の罰利生とは御覽ぜ！」もし何言はしやります、獨語：

「え、獨語？ 予がいうたか。あッはッはゝ、出來いた宮！」「小氣味の惡りい。其れよりも御前樣今何處にござらしやる？」

（百二十七）

「予は目下上京の噂、」乘勢める彼は恁く言ひ懸けしが、急に傍邊を看回して、「壁にも耳ぢや。其れ又重ね言はうそれよりもお主今何處に居る？」「妾はいつでも野宿します。昨夜もな、あの清水の御堂へ寢ておぢやが夜半からのあの風で、寒うて眠られず、凍死ぬやうな難義しました。」宮は其同情を牽かむとしてか、只管其鼻を瞻りて見せぬ。彼は數回頷けるのみ。「む、、胸算の紛斷へ、「彼女は投首して、「あ、島原へでも。」「え、島原。其方は島原の案内知つてか？」其問の甚だ其意を得ざるに宮は只首肯けり。「其の奧州屋たらいふを其方は知つてか？」扨ては一昨日の夜の事を、熊谷らが彼に語りしなと想へば彼女は今更に躊躇がれたりき。「其家の太夫に信夫といふが有るさうなが、其女を知らぬ歟。」宮は彌、口を閉ぢたり。「知りやらぬ歟。」彼女は突如として、「お然うかえ？」兵庫は卒ち其頭を聳まして眉を昂げたり、「馬鹿！ なんの予が其の傾城買！ 一でも好う行かしやる御人が有るやうぢや。」「や、すんなりや熊谷や松田に會うたか？」「噂！ 何時？」「一昨日の夜。」兵庫は覺えず其眼を睜めて、用より外に聞く者も無しと見る前後を隈なく顧視りぬ。「宮、其の一昨日の夜に彼奴らは何か不思議の爭論したさうなが、其れは且づ言はでも可しとして、眞は其れより熊谷めの氣が狂うてな、昨夜由井どのから預かつた用金攫うて逐電しをッたぢや、え、其の五百兩といふ大金持てよ。其れも大方あの太夫を落籍せうとて此里へ失せたかと恁う言ふで噂、身が今其れを穿議せうとて出向いたぢや。が、彼廓の爲體は今まで見聞した事も無い、實は其の當惑の折柄ぢや。御主其の案内知るなりや其の信夫たら太夫のをる家を教へて、今一つ彼の太夫が根引されたか、熊谷めが今も猶其處に在るか、又は何方へ落ちたかといふも捜索て吳りやらぬか。金銀もおぢやが、猶其れよりも彼人の大事を訴人しはせぬかとも想ふでから喃。」聞くうちより宮は且つ呆れ、且つ驚き、且つ惑へりき、熊谷が振舞の馬鹿々々しきは只呆るゝの外なきが、又其れが師の大事を訴ふべしといふ人々が心配も一理あり、其れよりも差當る處置を如何着くべきかに當惑するは、此の兵庫が奧州屋へ案内せよといふ一事なり彼の家には喜太郎あり、其れと面を合さしては全般は事罷矣なるが、さればとて今急に彼に意を得さすべきやうも無し、兎してや可らむ、如何でも這奴を今彼處へ遣りては、と肚裏たゞ煩悶たる間に、「それぢやで予も心が急く、お主疾う案内しやれ。」彼は袴の塵うち拂ひて既や起むとす。「あ、ま、然う急れでも。」「え、急て何故不可ぬ。」「いや何匿しませう其の信夫どのは妾が呢友！」「えい呢友？ 猶更らぢや。疾う／＼せい。」「いや其ぢやから急いでも可い。妾が此から熟う捜索て熊谷どの在やしやる歟、太夫が落籍れた歟、其の

否や通知せませう。」「いや其様な！　既に斷ッ談話の間にも奴に先を制られぬかと氣が氣で無い。其方が歩んで又引返して乃公が又行く、其隙に逢ならば三里も走くは。」彼女は猶ほ煮え切れぬを「さア疾うせい。師の大事ぢやぞ。訴人されて如何なる事。お主が平生の氣象とも無い。」我袖を捉へて無理に押立て、編笠を目に深して彼は軈て大路へ出でぬ。刺さば如何程も刺すべけれども、悪人ともあれ油斷を撃つは！　況て其れが討手の正使は彼處に在るをやと逸るを鎭めつ、彼女はおめ／＼として拘れ行けり。

（百二十八）

今がた焚きたる煉香の煙、長う曳きて、其終末は引方なう消ゆるところ、釣舟の花瓶に山櫻のあはれなるが插られて、其の花片のおぼつかなく散るあたり、古き物語の巻、小唄の草紙、二三册ひきちらされて、料紙にむだ書の跡も媚めきたるに、折からの薄月夜を朧めむとか、小蔀すこし明け殘して燈火をわざと衣桁の陰にかくしたる、中々に心憎くしや銚子、盃、撮みすてたる取肴、枕、夜衾、彈きさしたる三味線、序次も無う、妻戀ひつかれて睡る猫の傍に、ほいやりとさし向へる男女二個、座頭も居ねば、禿もをらず。これは島原の遊廓、奥州屋が奥なる信夫の座敷にて女は言はでもの太夫、男は例の花木の熊谷なりき。花木はいかう退屈ぬ顔なり、「昨夜からので酒も飽いた、三味も聞きし、あの仲居のかや呼んで又た毎もの若盛りの若様行でも聞かうかや。」彼は傍邊の枕を引寄してごろりとなれり、「あれ、ま、臥さしやるなりや其枕よりも此方のにさんせ。」嫣然として微笑る太夫は、彼が頭を我が膝にうつし、亂箱なる鬢櫛を取らむとすれど手の遠かぬに、「さゞれや。」さゞれとは蓋し禿の名なるべし。喚べども應へぬに、「何とした喃？」「何ぢや、用事は。」「あい、其櫛を。」彼はやをら其手を伸して彼の箱を掻き寄せ、「此物かや。」「お憚りさま。」彼女は嬉し氣に其手に受けたり。「今は人が見で可いがの、女房に使役はるゝ亭主の鼻毛はいかう延て見憎いものぢや。」「なんのいの、餘り亭主を大事に慇くる女房の器量も劣りて見ゆるもの。些とは邪見も可いというてぢや。」「え、邪見？　女子は如何でも蛇身なから歟。」「ほゝほゝ、なりや男の料見かいな。いや其笑ひ事ぢや無い、此方其の料見、早う決めて下されや。さらねと妾や外家へ嫁かねばならぬ。嫁けば妾や生存てはゐぬ。」手に把れる櫛を取上げて、彼女は男の鬢の毛を梳てむとしたるが、水ならで一滴の雫を膝なりし頬の上にはらりと落下せり。「落籍のか？」「唯！」といふ彼女が應聲は曇れるながらも力有りき。「分曉らぬよ、其の討手が。」「分解いでもおぢや、落籍は落籍ぢや。妾の身を退せて伴れて往なうと思う言ふのぢや。誰に退されてが此方のに離れる味は一つぢや。」彼女は堪へ難ねてか彼涙の面を、彼が頬に押着たりき。忍び音ながらもよゝと泣きたり、男は只、疊に棄てたりし手を胸に扛げて、其雙眼を鎖せるのみ。押着けたる面を彼女は猶依然にて、「それも今日か明日かといふ、殊に寄らば今宵が此方のと其の別時ぢや。此顔を見るも此限りぢや。」言ひ了りて再び其聲も無かりき。　男の耳に聞ゆるは、唯、其人が可愛ゆき胸間に纏縺へる涙の瀞音と、躬に徹ふるは、頬に熱き情熱の蒸氣とのみ。

素見の騒鬧きは、黨りたる此室に、遙に盈潮の如くに聞えて、雨氣を含める大佛の鐘は、東風に吹れて尾聲を曳く、夜半過ぎたらむやうに響けり。雖然、這は甲夜の酉刻の梵音なり。蹶然として彼は危坐せり、而して其の眼を瞪れり、「其の田舎客とか言ふ、其もじは識る人か？」泣作れし彼女は首掉を掉れり「識らぬとな！　然らば會ぬの歟？……え、初手から？……。然ら

ば只親方の、只詰し喉と！えい緊確とせい。次第によッては此花木にも覺悟が有る！一彼は卒爾に推想して其人が何より其顛末を聞得たりき、其身受の客といへるは只の一回も會はぬ人、唯道中の艶麗なる姿を一目覩て根引して其家に伴むと言ふこと、加之其談判は今朝起初りて、其の身價三百兩の手附金百兩を今夜にも授與さむと焦躁れること、全般其の處置の奇怪にして、自ら魂膽の這裏に有るべきことを聴き得たりき。彼は一回は憤然として腕を拱るが、又俄頃に憂然として身を慄はしたり。恁くして深く思案に沈めり。

（百二十九）

色てふ敵に囚虜にせられて、戀の奴と身を做せる熊谷は、既に彼も曰へるが如く、昨夜よりして此の奥州屋の奥座敷なる太夫が許に入り浸れるなり。一昨夜の夜の不意の喧嘩は、彼と松田とが間に大方ならぬ不快といふなる溝渠を鑿ち得たりき。彼の場所より四散八落に逃げ戻りたる落合ふ穴は、同是一つの某町なる旅宿なれども、彼等は互に其の意地を緣先に流るゝ鴨川の水に去てむともせで、翌朝の朝餐にも摺れ合ふ膳のがたりびしやりと角をば除らざりき、赤鬚ぬく毛拔の手も挽きばかりの長々しき此の彌生の永の日を、鏡の中に睨まへ合ふ背中合せの白眼競に睨み落して、燭火と與に毎とは團欒の座中に出づる銚子も今宵は放下されて片隅にあり、喉は鳴らせど誰も憚りて其れぞとも呼ばぬ盃の手持不沙汰に、夜食の湯漬さら〳〵と不滿なく了へば「もう寢べい！」一臥床には入れるも、夢は扨て置き、瞼も合はず、痛き木枕に耳根あちこちと轉輾して、猶強て眼を閉づれば、彼が目は又更に昨夜の光景を眼前に有り有りと見せて、腹立たしさ、口惜しさに涯限も無し。涙さへ指含るゝ遺恨の眦を赫と睜開きて其邊瞶はしつゝ熟思へば、天井の板は忽然として我に語れり。昨夜の松田が擧作は酒興ではあらぬぞ。和主と太夫が戀中を隔離る嫉妬の意趣ぞ。法界の悋氣ぞ、油斷すな、横奪さるゝぞ然矣！　固より我も然は念ふなり、嚬づくにても金づくにても、男振にても素奴に負くべしとは思はねど、兎角は彼奴も言ふ、寶物質物！彼女はまた河竹の無理なる水にも靡かねばならぬ流の身！　と思へば又た心も心ならぬなり、身は此處に在るにも在られぬなり、疾く逢ひて彼女にも其意を得させたや、其願をも聞ひたや、根をも推究たや、戀しや、床しや、悲しや、辛らや、見たや、逢ひたや、と何やらむ角やらむ漫心の頓悶せる彼が胸は先づ魂を彼處に輸りつ、更に其の駿驚の颯なる六尺の軀に宙を飛ばせて、其女が許へは遅れるなるが、思ひも寄らぬ田舍客の身受といふに、其胸は先づ潰れ、魂は消え、軀に更に戀の重荷の擔ふにも得堪へずして、途方にも仕儀にも暮れたるなり。

世には往々有る例とか聞く、親元の故障とやらむいふを種子に此の切迫れる焦眉の急を、彼の老父母の口を藉りて、一時を緩寬むる工夫は、と問試めるが、道理の理解る父なる人は今朝國元より飛脚の來て、「大事の納者ありとか言ひて發足たれば間に合はず、殘れる母さんは、此話を聞いてより物も手に着しやれぬほどの歡喜、故障どころかは、言うたらば狂者にも做られませうと彼女の泣くに、其れも甲斐なし、思案もなくば寧そ汝が身を棄てゝ、といふ面色は、げにも鞘刀を手に僞離れまじき氣色なり。噫、可愛や、不憫の嬌や、然る程の眞實を仇にも見ば、八幡！摩利支天！　花木が武士は廢ッた！

他に根引きせらるゝも廢るなり、我が落籍するも廢らせ方に自ら分別の無からずや。然矣、分別は有るなり、時の用には鼻たも殺ぐなり、面皮といふも雙刀を腰にして、恥辱の吟味といふ枷械に束縛るゝ中の事なり、既に其鼻を殺ぎ、

耳をそぎ殿といふ武士の面目を喪はずとならば、那麼か有らむ！　而して彼女が貞實は、予が今の其の面皮にも換へ難きなり。殺がむ、殺がむ、我耳も耳も殺がむ！　其の殺がむといふ、時の用なる目的物は？　他に非ず、彼が曾より預かり置ける掛金の五百兩なり。彼は恁く思ひ決めつゝも、猶一回は慄然として怯れたりしが、現に目前なる彼の泣濤、歔欷、嗚咽、慟哭は、或は我心に鞭撻を加ふるが如く、或は我肉に熱鐵を注ぐが如く、其の決心に撃たれ、其の面色に勵まされて、彼は三回にして斷乎として臍を決めたり、未來の痛苦は、此の現在の苛責に換へ難しと。

彼は竟に親方に談じて、彼女が身受を我が方にて爲べき由を言ひつゝ、鎮まる〻島原を後にして、睨むが如き寺町の旅宿へ歸れり。視れば憎き松田は在らず、此も何彼の都合好しと、我が行李の錠を開きつ、更に中なる其金包を出さむとして胴卷を捜れるが、忽諸血も逆らむ許りの叫聲して、「阿呀!!」

（百三十）

斯うしては在られぬ氣、[illegible]庫が先へ觸らいでは我が罪惡の破綻、と身も卒破々々と起たむとする彌五七が袴の裾を、待たと捉へて放さぬは二八なり。彼は、蝦蟇を飲入れたる蟒蛇の如くに眼球を炯耀して、喝とも言はゞ一呑といふ氣勢せり。「逃ぐるな、彌五七、まア下に居れ」一方は既や弁答も無益と、太刀を折りたる三保谷の如くに逃れむとす。「こ――れさ」備う引張ては袴が斷るゝは。斷れたとて腰の骨の強さと誉るもあるべいか。其の頑骨より鷲性骨の太さを見抜れた乃公には、はや兜の紐いで降參せい。や、あッはゝゝ。」嘲笑れて彌五七は屹と回頭りぬ。「降參ぢや？　汝こそ屁でも景清ぢや。こゝ放せ、遲うなる。」「遲いが苦か。逢う往たきや疾や分前與せ！」「呀！」彼は驚きて立竦みとなれるを、此方は愛ぞと乗り懸れり。「あはゝゝゝゝ、隠すなよ。備は、三郎衛めを結果いた喃？」「なに、乃公が？」「はゝゝ、狼狽なよ、然ういふ面上に證據がある。縱し其の奴めは結果さいでも其五百兩。……其金は確に着服した喃？」彼は愈々驚きて其眼をのみ瞠れり。「えッこりや如何ぢや、四通しの法印ぢやろが？　お主が其の今道人と騒いだは、此の法印樣見たところでは、萬一為めに彼の太夫、連れて逃られうかと懼つたので有う。又其の一昨夜の罪擬と吐いたは、はゝ其の三興の借金では無うて、盗した國金で身受の用意か？　或は恁う其事を訊むる？　え、こりや如何ぢやえ？　恐れ入たか。」「馬鹿！　何をいふが。縱又た其れが然で有らうとも汝等が口入は受けぬ。すッ込め。えッ放さぬか！」一心危くまゝ、裾は斷るゝともよ無理にへけども厚地なる小倉織の木綿袴は無情うも善う堪へて、曾我の五郎が草摺の樣にもあらざりき。況て逆奴が、強ても爭論はゞ、和田の一門を喚立てても爲離ねまじき氣色なるに、畏怖のある彌五七は是非なくも其座に坐れり。なれども心は煩悶と、逆に坐せたる面は海老色の紫黑を丹赭に染め返せるを、彼方は愈々あつゝ、彌其手を嗤刺さむとか、故意に粧へる悠々たる態度、袂をかいぐり、鼻毛拔取り出で、甚麼の目的か其の睫毛にて鬢を修飾ひつゝ、「若い、お主は未だ其の盗人の法を知りやらぬ。凡そ盗人の法と謂ば、我が盗したを其の件に知らるれば運分と號けて何程の分配金を出すとのおぢや。況てお主がは尋常とも違ふ、雷件同の金を盗する。いや大將が大切の用金を盗する。盗するを其商賣とする彼盗等が、其件でから不審はならまい。其ならまい喩へといふを聞き流いて見逃いて遣る、すりや自己とても同罪ぢや。同類は覺悟！　お主今此を嗅けと言ふ、彼の其件でいふ其れちふを如何にも嗅ぎ付はう。兄百の

悪事は獨にせう、傍へは、道連は愚か、兄庫どの道こととならば道連其處を借しもせう。な、これ得め己が心中でや、憎うは有るまい。いや憎いどころかや、獨もしうも思やらう。然思ゃ其の分前を與せ。それも其の澤山は要らぬ。」――語りつゝ、抜きつゝ、彼は其舒に其の憎き顔自慢げに突き反らして、其の間背もて洪鐘の尖なる賊肉を咬へり。説れ其道理？ にや服せる、彌五七は得心の體を丁と拍て、や、倦首たる頭を擡げつ、「可得た、いかにも其の黄金の道分せう。然し乃公も、もう隠さぬが、其の、那處でも要用もある。澤山は與られぬが……少額で可くば。」「勿論ぢや。多額は要らぬ。」「而て幾許か喃？」孫八は儼然と冷笑て、「半分與せ。山分ぢや。」「え！」「面倒で無くて可えぢやろ、其山分が。」「甚麼吐かすぞい！」「ほう、其面色は？不承知か、な？」彌五七が面は、實に今其の海老色より烈火となれるなり、「誰が――己に――其半分……」「與れずば廢すさ。己も其同類にならぬぢやまで。」「同類になりをらずば？」「ハテ知れた事、お主を此處で引縛る！」

（百三十一）

孫八の少時が其の太々しき面、其の油断無き眼、其の小氣味悪ろう沈着きたる擧動は、敵手の氣勢を挫きたれども[illegible]に先ちて挫きしが、彌五七は急きたる聲を逆に鎮め、其聲を低で、「お主、眞實己を賣る氣か？」彼は毛抜の手を休て、輕く應へぬ、「何もお其方の料見ぢや。」「所望を聞かば其れで可おぢやな？」猶彼は頭を喰ひ反らし、其頸窩に鑷の抜毛を拭で遁しつゝ、「まづ其様なもの。」「其様なもの？ こりや氣の毒い返辭を爲なよ。お主、眞實其の味方になつて與るるなりや、所望通りの山分せう。」彼は打て眞面に向けり、「聽くか？ 所望を！ 聽かば與う、兄弟ぢや、味方ところか。」「山分ぢや、總まう。」「額まる、、其金は？」「此處に在る。」「早う、疾う見せ。」「はゝ、忙しない奴。」彌五七は、詰ひつゝ、探りつ、其懐中をもぞ／＼さして僅に手繰り出だす胴卷を、對手の面前にづしりと置けり。金を孕みて円満たる胴卷は、紺紫子の二重なるも、猶其の堆高と重量とに堪へずして激裂れなむ許りなるを孫八は睨つゝ、其眼を再び見耀かせしが、其光は前の燦々たる灼鐵の如きとは異りて、鎗嬢けたる鉛の正體なき様にも見えたる。彌五七は徐ら其の結目を解きて、金包を一つ／＼に排列はじめぬ。排列たる數は都合[illegible]個！ 彼は先づ其の二個を、垂涎のはや滴れて流れて傳はるまでなる孫八が睫前に突つけつゝ、更に其の二個を我前に置き、殘れる一個の封緘を今や切むとせり。切むとして彼は些と躊躇へるが、忽地觀念せる體にて、はらりと斷れり。彼の燦たる光耀は映る燈火にいと美色を増して、山吹の花散り亂るといふ如くに座に溢れり。孫八は覺えず其の散りぼへるを俛き搜めぬ、彼が猶記憶せる與、此の座敷は一棟の室なるの東の亭にして、今より僅か一月の前なる其夜には、彼れ正寶が砂金の手管の羽助とこゝに篤つ、其の終局には彼の長女の局を無慚の刃に我が試果したる其の場所なるを。今や再び黄金の光は同じ所に見めきたり、其れと同じき白刃の光は閃くまじきか？ 嬉しさに既や心の惽れて、目も鼻も耳も、用心も無う、翻れたるを掻き集する孫八が頭上に、「覺えたか?!」一聲の叫喚の耳根を劈くと同時に、彼は左方の肩頭より乳の際まで破り附られぬ。然ばかりの惡黨なれども此の重傷に堪ずして吽と俯伏るを。「覺えたか！ 汝、覺えたか！」彌五七は更に二刀斫り附て、三太刀目に其の鬢首丁と打落し、「む、脆い奴！」猶手足を蠕動かすを脚蹴に蹴轉して、急遽しく彼金を取り、再び胴卷に捻入れむとする其の刹那。「盜人!!」大喝は彼の庭口の雨戸を嘩開く響と與に發りて、旋風の如く

に衝入れる一人を、誰と視きて目を注けば、熊谷なり。「や、三郎兵衛、汝何しに……何處にあるか此の盗人！ そ奴等……オ、彼奴……八まででもな！」既や其間答は要らぬなり、熊谷は其彼奴を奪はむとす、松田は其を奪ひ回されじとす、手中の刃は早く其主が慾を扶けて互に鎬を削り合へる、其の物音を聞附けたる表方の壯俊輩は鬼角は珍事と走り寄る、出合頭に、「三郎兵衛めが亂暴ぢや、討て取れ！」一叫び棄てゝ驅け出づる嬶五七が後より、「其の盗人、疾う捉へい！」縺いで進む續くは其の三郎兵衛なり。亂暴といひ盗人といふ、孰れを其れとも分き難きに、兩人とも凶刃は持ちたり、彼等が本事は日頃より熟う知れり、悪しう敵對はゞ我が一命、と彼等は等しく閉籠する間に、兩個は鴨川の河原を下りに、奔り去る見えたる後影も留めず。

（百三十二）

今出川の館なる騒動のおこりて候へば、兵庫が宮の手を拉たてゝ島原の大門潛れる、恰も其の時刻なりき。宮の心は今推往來なり、彼女は一面には、此の目前なる人を這處まで伴れたるを、我が方人に疾く告知らすべき大役あり、又其の一面には、其人が身邊に附纏ひて其の宿所を突留むべき重任あり、宮は茲に今一層の宮の欲しきなり、あはれ我が鏡て言へる、分身てふ奇術を習ひも得あたらましかば您有る時の用に、など無稽なる禁言を其胸に繰り返しつゝ、辛くにして奥州屋の門に來れば、「宮どのけえ？」不意に喚ぶが有り。戰競らぬ心に驚と驚きて、能と覗れば、おさめの姿なりき。彼女は誰人を待つにやあらむ、店前に其躯を鶴くしたり、「えら遅かつたねえ、主に渡す手紙が有るけえ。今朝嘉助どん、國元へさ歸らしつての……」此の消息は宮が耳に鐵槌を加てたる如し。「え、嘉助どの歸國しッたと？ 如何して、え？ 如何してね？」「置手紙があるだよ。急病人さ出來たとッてね。」姿は其帯を捲りて、八重封せる手紙を出だせり、病人とは？ 急病人とは？ 彼女は心に如何ならむ苦痛をか懐きたりけむよ。手も惜しくばかりに見たきなれど其の手紙は見られぬなり。見しておみかは嘉助てふ名を怪しみて萬一は氣取られもやらむ賊と、彼方を偵視に、編笠越なから後は其に驟ぎたる氣も無きやうなりき。善悪は知らず當座の難を先づ遁れしに、彼女は其の顔を窺み得たる小兒の如き心地しつゝ、手紙は手早く其の懐の裏に引懸して、「お母さん、太夫どの、部屋にかえ？」太夫と聞くより彼媼は面を顰れむばかりに笑片曲げぬ、頷き頷き、「宮どのよ、聞いて呉れせえ、彼女はア今夜か身受されるで、私はア何だか嬉しくッてよ！」急病人に惱ける宮は、又此の落着に魂消たり。扨は翩々？ 扨も扨も！ と且つ歎じ、且つ呆れて、急ぎ此方へ走り寄る、其れより疾く、「宮、果然でおぢやな。えゝい人畜生！ 然りながら其者は……宮、三郎兵衛か、問へ。」兵庫は既や彼等が前に在り。宮は濟らず、「儕うぢや、其人は……もし母さん、其御客は花木どのかえ？」「おうよ、其の花木さまに、何だ其の一個有らしやる。宮どのよ、私はア兩手に花、錦衛の重寳、何だかもう其の嬉しくッての、今其の左右を……」彼媼は手を揉り、肩を聳かし、目も口も一様の皺にして歡喜ぶ間に、不圖編笠を見入れたりしが、滿面るばかりの皺を揚げたり、「そーりや皆の衆、御大盡樣ござらしうたぞ！ やアはアこりや御出迎へに、何故こねえ。え、宮どの、老婆の氣も知らねえで、散歩してつ！ 花木どのかえ？ 何嘘な事だ！ はア、これもし御大盡様、太夫べえ先刻から首べえ長くして。まア、さア此方へ。」彼媼は天知に袖を捉へ、袴に縋りて、老が意氣の渓聲、傍目も觸はず運び立つるに、旋轉きたる兵庫は不意を撃たれて、餘か

は知らず、我にもあらで、門[illegible]門を潜出たり、宮も遂て〻取交へむとする其[illegible]かりき、[illegible]來なる暖簾の内より月代の寢萌[illegible]若者四五人、[illegible]が叫喚にはら〳〵と現れ出で〻、「これは〳〵御物體、へ〻御調謔、さ〻先づ彼方へ、太夫様お待兼ね、御用意萬端整うてござります」[illegible]等は不作法にも笠を覗きつ、[illegible]笑ひつ、頭を[illegible]めつ、手を採みつ、老婆を稱けて其れか前後と左右とを押取籠めぬ。不審さは勿論ながら、[illegible]其の好笑さに堪へざるは宮なりき、彼女は可愛き掌に胸を抱へて、「あッは〻〻これいのう[illegible]の衆、其りや人違ひぢや。これ母さん、其れや花木でも、あッは〻〻身愛の大事でも在りやしやらぬに。」「え〻又してもだ、私女は默つて、え〻此を殊に酔はせるべえ面白えのか。こりや御大[illegible]様、此の老女が汝面べえ見えましねえか。拜むのさア目に入らしやらねえか。」[illegible]は怒る、泣く、叫く。兵庫は驚く、呆る〻、處置に困ずる。宮は笑ふ、轉くる、腹を抱へる。若者はまご〳〵、見物はわい〳〵。人面の垣は漸くに築かれ來るに、兵庫も竟に得堪ずして、且づ其の暖簾の内へと入れり。

(百三十三)

千軍萬馬の潮と湧き山と崩れ來らむも、闘ぎもすまじき兵庫なれども、此の不意なる光景には吃驚きて、彼は[illegible]州屋の奥なる[illegible]に突と入り苦々しき面に大息吐きて只管其[illegible]を睨め回しぬ。其の編笠を[illegible]しく蓋ける、雙の眼に二星を懸けの一文字を[illegible]りたるを見れば、其れが[illegible]眉たらむがやうに見るも涼しき、唇の朱く緊縮れる、色の凄きまで蒼白き、頬の稍痩せたる、黒漆なす髮を短かく一束茶筅といふ髻に切りたる彼の大膽の花木と同腹の兄弟、寧ろ攣兒とも見ゆほど酷肖たれども猶何とまア熟う視れば、今方歸りて又後[illegible]にと約しつる其人ならぬ差違とても[illegible]處やらにか有り、更に這處なるは品格の高向りて、加之日下痢癪紛れなる威風は目覺しきまで傍邊を拂へるに、繍[illegible]兒の如くに押合ひたる若者らは、恐れ、愕き、縮み上りて、一人逃げ、二人遁げ、終末にははッと起つ鳥の影をも留めず、取殘されたる老婆は、今は可怖しき手討にも遇ふかの如き震へ聲して、「こりやはア[illegible]でも無え御無禮しやしたよう。宮どのよう、好う主からよう。」泣くばかりなる[illegible]なるを、「まア好うござります、御前は私から、心配せいで彼方へござんせ。」宮は遂斥りつ。折柄一個の小女郎ありて、銚子盃を持て出でたるが、兵庫に睨められて、[illegible]る〻如くに其處に[illegible]下して逃入れるを、彼女は目送りつ〻、自身把りて、「ほ〻〻〻其樣な怖い顏まア欲て、さ、ま[illegible]一盃」彼が憤怒は[illegible]まらぬなり。「否ぢや。擱け。」「でもさ、折角ぢや。お一盃だけも。」「えい否ぢや。此席へ來て其樣なる盃手に把らば彼の畜生奴と何處と相違ぞ。墮落は那奴めが好手本ぢや。兵庫、然程まで未だ武士は墮らせぬ。擱つ！」宮は復笑ひぬ。「然ては此家が氣の毒ぢや。」「氣の毒は此方が除計して在るは！」「座敷に困らう？」「其料の金子は與らすは！」彼女は徴しく首を傾げて、「それでは太夫に逢しやらぬかえ？」「逢いでも可え！ 身受の奴、熊谷と決まればもう澤山ぢや。汚穢はしい、寶帖なんどの醜面さ見て！」彼は生唾を一つ吐けり。宮は更に調諫ふ如くに、「でも、勝處うござんすがや。」「え〻い申すな。兵庫は武士ぢや！ 此れより彼の大門とかへ行て奴め來をらば引捉ふる。萬一又た外方から來ば、其方、内通せい、何事も師の御爲ぢやぞ。得う滓るな。」彼は慍く言ひ棄て〻、編笠再び引冠り、小判二片見送る若者が這面に叩きつけて、回顧もせず戸外へ出でたり。

* * * * *

待ちても來ぬなり、其人かと覺しき裾すらも

見えぬなり、彼は大門の際に立ち、石に腰懸け、草臥れては東さまに行き、西さまに歩みつゝ、編笠越の目を皿にして出入る者の一個をも見落さじと心を注むれど、武士、町人、百姓、出家、按摩盲引御駕の夫、老たる若き、貴き賤しき、女子も男子も其數は算へ盡されぬまでに繁かるも、竟に彼奴は見え來ざりき。物の斉忙しき際なりければ、其者の我とは入れ違へに、這里を去りて、今程に又た、と緊く約ひつる其の顛末をば彼店にて聞かざりき。ほうど厭倦て、漸くては今宵は來らぬにや、我とても物の包ましき身上なるに恁して此處に何時までか在らむ、先づは宮に心得さして、其の一左右もて重ねて出向くとの事にもせむ歟、兎角今一度彼女に逢ひて、と獨言は再び其の歩を廓内にしつ、今宵ぞ盛りの最中なるべき夜の、凝れる雲、匂へる雪と見る樹下をゆらり／＼と以前來し路へ引返せば、折柄行途に鬨といふ動搖みは起りぬ。喧噪にてもやと傍邊なる人に問へば、否々あれこそ此廓第一の名物、京師の花の其花といふ太夫の道中をすなりと答ふ。げにも大勢の群集はあり、かゝる中にぞ素見もや行らむ、慮にやは、看過すべからずと彼は編笠を引傾め、ひしと繕へる人の垣を押し破り、搓と寄する人の浪を押分けつゝ目を配り、意を注けて進みつ行けば、彼の[illegible]美々しう、留木の馨りを四邊に[illegible]せる、道中といふものに礑と會ひたり、雖然、彼は其を見るに心は無きなり、爾く心は無しといへども、衆の悦びて見る程のもの又人の目を牽むとて恁る行粧するもの、其の艶美しう華麗やかなるに、彼が其の無心き眼もいつしかと其れに移りつ、自らに凝視られたりき。

（百三十四）

兵庫は、彼の道中といふを見つゝ、何とは無しに今や又た奥州屋が門に來にけり。彼家の門口にて[illegible]、其の歩は停りつれども、彼はかの宮を喚出さむとにも非ず、又熊谷の消息を問究さむとにも非ずして、今は其の何が所以に這處に來しかをも忘了しやうなりき。彼は、狂蝶の香を慕ふ如くに、物とも無しに嫖れ／＼て、心も空に或る者の跡を逐ひつゝ竟に再び此の門には來つるなるか、目下は其家の、剛緣訪へる奥州屋といふも知らざる如く、茫然として只突立ちたりき。其の或る者とは、何女たるか、彼は未だ知らざるなり。只其の甚麼やらむ目離むばかりなる色好き美衣を着て、插懸けたる傘の下にありしを見れば、蓋た其の太夫といふものなるべし。と其想ふも、未だ其名をも知らぬなり。

唯彼は、夢の如くに、我心の異しきをも[illegible]とは想ひ到らで、何事を念ふとも尚だ意注かず、其の身の何處に在りしとも覺へぬ氣に、身も忘れ、魂も忘れ、場所も忘れて、只忘れ得ぬ其人の面影を、編笠越に直地と凝望めつ、其女が入りたる門の内を唯可懷しう、將た恨めしう、瞬もせで覷入るなりき、咄、彼は何物にや化れる。石にや、木にや？　否々、牧野兵庫なんど！　立派なる名は名乘れども、田舍武士の悲しさ、感情に生死せる一轍の氣風の哀れさは、[illegible]の緒切ての最初なる此の美麗さと、彼の妖艶さとに撃たれて、彼は木乃伊取の木乃伊とは化れるなり、盡未來際と願へる菩薩の尊容も、紫雲にあらぬ柿暖簾の裏に隱れて、乙女の姿しはしと[illegible]ける天人の面影も、虚空にあらぬ丹の格子の内に沒せぬ。烟の中に亡姫の幻容を失へる[illegible]の恨を彼は今身に占めたるも、愛妃の[illegible]宮に訪せし唐皇の手段に未だ考へ及ばでか、嬉ては彼は快々として[illegible]り、去りしかと見れば、彼は再び取て返して、又彼の[illegible]の門に立ちたり。なれど這回は[illegible]心の附きたるにや、近くへは[illegible]方より凝望めたり。凝望ても人は[illegible]文字を覷たり、蓋し此時、[illegible]には入れるなら

が、奥州屋と筆太に染抜ける三字は、彼に何處なる感情をか與へけむ、看る〳〵其顏の動搖くやう見えたるが、彼は遽に踵を回して、迯ぐる如くに、半町を趨りて、但有る花の樹の眞暗りなる陰に倚りぬ。

　天上の月も、猶忍ぶところ有るか、彼も同じく樹を楯て、花蔭に其影を地に敷きぬ。彼は此影を眺めつ、仰ぎて其光を瞻つ、顧みて我姿を視て、憺々として歎息せり。世の中に成功といふもの無くば、身に負へる大望といふもの無くば、宮なる女に嗤笑るゝといふ僥倖なくば、とも彼は怨へるか、或は彼女との温かなるべき今宵の夢を、我が歸寓ての孤衾の寥しさに想像りてか、彼の歎息は一度ならず、二度三度も漏れたりき。低回顧望、多時は去るに忍びざる體なりしが、辛くに觀念せしか、彼は此の花を棄て、月に送られて歩を移しぬ。なれど回顧り勝なりき。其の回顧れる眼の中には、蓋し又前とは異なる或女の影を見たりしならむ、されど今の彼には其を看認め得ざりき、心茲に在らざればならむ。狗の尾をも履みたるべし、往來の人に、觸犯たるべし、然れども彼は其を顧視も、心附きもせざるなり。前むにもあらず、却くにもあらず、歩むにもあらず、停るにもあらずして彼はいつしか大門を出て、大路に沿うて、北に行くこと十餘町、何物にか醒されたりけむ、不圖佇立りて、一方、己は……呆然として四邊を見たり。

（百三十五）

　此等の光景をば、其の夢に夢見し如き其人よりも、寧ろ確實に熟う視たるは宮なるべし。彼女は兵庫が奧州屋の門を出づると頓て、其の笈[illegible]姿を尋常の端婢樣の形に變へて、或は遠く、或は近く、着きつ、離れつ、見え隱れと其跡を狙けたりき。夜目遠目笠の内なる彼がかの太夫の道中、就中其の信夫の艶姿を見つるより、漸く魂の身を脱出でたらむ如くとなりて、足許も四度路六度路に、笠の形も動搖々々と、人には行當り、籬には突掛り、跡を逐ひ、影を慕ひて、旋り〳〵て又以前の奧州屋の門に來りて、醉へるが如く立竦める態を見し時は、側は什麼と可笑しきよりも呆れて魂消たり。恁くて幸くに去りぬと見れば、又來り、歩むかと見れば、又佇立む、其度に我も同じく、歩みつ憩みつ、往きつ、來つ、狂人を逐ふ不狂人の馬鹿々々しさに、且は厭倦ねつ、且は腹立ちつ、疲勞れもしたれど、此際に懷中なる彼の喜太郎が置手紙は讀み果てぬ。

　呵呀と驚かれぬるは、其病者なり、病者は思ひも懸けざりける大納言殿にまし〳〵き。年來の御辛勞の發出でたるにや、最初の御熱邪と見まゐらせしもの俄に重りて、今はほとほと頼み寡うも見えさせぬといふ、一刻の猶豫もなり難きに御身には前のあたりの暇をも申さで發途つなり、彼樣の上は僞り有るまじき其許の[illegible]に任せまゐらすぞ、但し、縱し其を詮究めたりとも危ふき所爲をば爲たまふな、彼も然る者なり、遁りて大事を誤ちなば、主君の御恥、我等の恥辱、後悔も其に有るべからず、構へて〳〵諸事は我等が歸り來る日を待ちて、云々と書きたりけり。口惜しや、折も折なり、只半日の蹉跎にて恁くあることよ、無念さよ。那の放心たる態した物生捕らむは我が手一つにて難かしかるべきも、刺むには掌裏の物なるべきを。刺む歟、討む歟。想へば這奴も何だ壯盛りの、病氣も無きやうこれは今暴かに死もせじ。否、とは言ふも、熊谷を逆捕ふといふ大事は持ちたり、然なり熊谷も剛健者なり、然もあらむには得も今日汚目と拿捕れもせじ、萬一に彼奴めに返り討たれて此の當の者を他手にも懸けさせなば……。

えい、刺む！

恁く決斷めたる場所は、大門を出でゝ、朱雀

を北に行くこと十條町、三條の大路に既や近きところなり。眼を決めて屹と視やれば、彼の猶搖搖たる影は、朧ながらも空なる月に照らされて、手に取るごとし。小褄掻取り、懷裏なる刃拔側めて、走り蒐らむとは爲たりしが、否々と觀念せる如くに、彼女は突如に小礫を拾り、はたと投ちたり、是れ彼の實に放心したりしや否やを試みむとての爲なるべし。投礫は飛んで、彼が歩める傍邊なる小溝に落ちぬ。水音ありき。彼は果然停立れり。而して甚麼やらむ獨語ちたり。

唯見む折柄、大宮を横斷に、進足にむら〳〵と來れる大勢ありき。彼等は兵庫が佇立めるを見るより、「や、若殿！」其の慌忙てたる聲は宮の耳にすら荒涼じう聞えぬ。若殿とは？ あの叫聲は？ と彼女は小暗き方に躬を倚せつ、忍び足に近づきて再び彼等が告ぐるを聽けば、愕くべし、彼が留守中の騷動！ 熊谷は家司の少闘といふ討ちて、松田を追ひ、河原面に出でたるまゝ生死も行方も知れずといひ、猶其場所には、四百兩に餘れる金の散り亂されて、[illegible]卷すらありといふ、其の注進はいづれも目を血にして我一句、彼一句と、兵庫を圍繞て叫めきたりき。往來を隔てゝ、彼も我も只魂消ぬ。兵庫は突忽袴の股立高く搴りて、驅出だせり、大勢も續けり、宮も同じく其後より、小陰を辿りて。

＊　＊　＊　＊　＊

月、天心より傾きて西山の高峯に懸る處、建仁寺の百八鐘白う響きて、曉の霜又寐の夢に寒き時、四條の磧に蕭然と立てる女子あり、是れ彼の甲夜に、小陰を辿りて今出川へ赴ける其女なりき。彼女は、宵なりし男氣もなく鬢の亂れ、臉は霑りて、霜を吹く河風に身も不堪ぬ氣に見えたり。彼女は一根の木片を手にして、其邊なる石塊を除け、辛く一所の巨穴を鑿ちたりしが、軈て一個の或る東西を扛げ起して其處に瘞め、更に上より大きなる小さき石をもて緊と盈て、砂を盛りたる土饅頭樣のものを作り出せりき、猶甚麼をするやらむと視れば、彼女は河瀬の杭に繋れる樒やうの樹枝を拾ひ來つ、それに手向て、「南無、幽靈頓生菩提。俗名、熊谷三郎兵衛！」噫、彼女宮は、我が師の爲に、又た友の爲に昔の好誼を棄ざると、後難を避るとの意をもて、彼が最後の亡屍を埋葬せしならむ。恁くして彼女は、猶其の眼瞼の露を拭ひつ、回向に時を移したりき。

（百三十六）

彌五七が死骸は、彼の夜の中に二條の河原近き所にて發見したれば、兵庫は人々に指圖して人知れぬ中にも我が邸に取入れさせぬ。軈て又彼の築山の陰といふに鋤鍬の音したるは其の亡屍の、少闘が骸と共に、前の主なる局が骨と一所に永眠さるゝにやあらむ、恩怨不二、親讐一如、不思議なりける宿世にこそ。其の迷夢も頓に醒めぬ、此變事を他の身上とも思はぬ迄に心に懾れ、且つ戰慄けるは兵庫なりき。人前には然り氣もなう、此れ程の大事に荷擔して一方の大將たる任を承けつる者が、酒に亂れ、色に狂ひて恁有る事爲出したる、口惜しやなど言へるも、其の昨夜の我心といふを、今朝の我胸に敲けば、彼は實に總滴に汗するを覺えぬもののありき。什麼何たる虛呆さぞや、恁くては我はあの熊谷に輪を加けたる蠢漢なりし、それにつけても此心の咎を由井どのに謝ぶる其の術[illegible]には、彼の金を盜み、友を害し、其身逐電して命を竊む熊谷めを拿へ來りて、一つには彌五七孫八が寃を報い、二つには此大事の露顯の端緒を斷つ、其れが外なる手段もなしとは急躁れるも、然りとては自然に慚愧ある心の疚しく、又可恐しく、再び彼處に向ひて彼を搜索むとの勇氣も出でず、さらば宮に消息してと、其夕人を遣りて彼の乙女を訪ねさせつるが、彼女は昨

夜家を出でしまゝ今日も歸り來らずといふ。大く望みは失ひたれども彼は其に止むべきに非ずとして竊に人を狙け、朱雀の大路・大門の邊を徘徊させぬ。

十日餘りを經つれども、些の手懸りをも得ざりき。心變や、設令彼奴、其詮める命は我實に棄て行きたりとも、那れ程に惑溺へる心、痴れし根性には彼女の色香を忘れ得で、必ず彼の廓邊に立廻りもすべきものを、看留得ぬとは這奴らも亦た素叫つ狂興つ、自己らが悦樂にのみ耽るにや、兎角は人託みほど物の捗の行かぬは無し、是非なし今は我躬ら出向ひて、と彼は心の苛立つ儘に、一夕へ、再び彼の大門を潛れり。

七日といふ其花の盛りも既や過ぎて、枝なりし錦繡は今は地上の泥土に朽ちぬ。無常迅速は獨り人の身上のみにはあらざりけり、然るにても彼の孫八彌五七が變事は、此前に來つる其の夜なりしを。

惜しや吾、彼夜這里をうろつかで家にも在らば其場に彼奴めを討て棄てゝ、胸も安く、心にもあの如き汚穢を宿さざらましを、其れも皆我が此の眼の咎與、礙まれぬ心の罪與、と想へば、異しき哉、其の眼の咎といふ道中の華麗なりし態、其の心の罪といふ彼女の艷美なりし姿の何とは無う胸に泛びつ、と一時に再生なる床しげなる絃音、聞ゆる人の俤に我耳を鼓ちて、激るばかりに胸は躍れり。實は淺猿し、我ながら甚麽たる事、我は既や彼の事は忘れしものを、直地と忘了しを！今更想起す、絃音なんどに誘惑るゝなど、えい、我は然る意甲斐なき士では無し！一たび誓つて又其罪過を再びする如き奴では無し！悄くい奴、えい、心にえゝ憎く！

彼は慌忙て、我と我心を叱咤つくれど、生憎や其處とも分かで來る留木の薫り、有りしとも見ゆる人の面影、其の家、其の門、其の夜の光景を依然にて、髣髴なら、怪しう、心悸くか否と否を今は闇止め難ぬるやうたるに、彼は耐らで、疾く此の魔境を去でむと門前なる大門を望みて、驀直に、脚をば前めしも、後髪は既や何者にか捉られて、彼は竟に其の一歩をだも進し得ざりき。自ら苦み、自ら悶えて彼は夢に魘はるゝ如く摸搔きつ、喘ぎつ、叱りつ、勵ましつしたれども、磁石に吸はるゝ塵の如くに、いつしかするくと其方にのみ牽かれ行きて、心とも無く、物とも無く、渦流に卷ゐる木葉の如くに、彼の惑染の暖簾の内に、くるくと彼は卷込れたり。同時に人の聲は聞えぬ、「好う入らせ。」「宮は在るか？」其後は店外の騷搔きに紛れて聞えず。

（百三十七）

常州屋の表座敷に、老若の男女の二人さし向へるがありけり。男は今來し客なるが、女はかの太夫が母なる者なりき、老はいつもの元氣もなく、只哀れに憔悴て、一向其の眼をのみ拭ひたり。「宮どのゝ御尋ねなさる、この宮も彼の晩けから何方へ往んだか、歸ッて哭れませず、私らもはアさつぱり氣落しましたに、嬢は其れ今申す身受は夢の樣、人は來ず、的は外れる、さ苦に病んで、三日目からばツたり寢まつて、今に臥牀に着いた儘、……一度でも御目に懸つて宮どのと御親昵の貴君さが顏見せて下されたは那程かの心丈夫におざります。それにさ、嬢もさ。何卒、ま、汚穢うても奥へおざツて、彼兒をも見舞うて遣らしやれて……。」涙の間は泌々との話なり。虚僞も有るまじげなる此の愁歎を熟聽て、今や微しく其心の定着りたる男は再び思案しぬ、慫ては眞實に熊谷も來らぬと見ゆ、彼奴果して如何ならむ土地にか身を藏しけむ、又宮といふ奴の料簡なる、さりとては人の依賴もうち放下して何處へか往れる。其は且づ其れとして、今日前に見たるところ此家の

態こそ哀れなれ、其娘の太夫といふも可愛けれ。其も扨て其れとして、其の女児のといふが、抑彼女――彼の君か？ 然にてもあらじ、如何に鳶が鷹といふ俗諺はあるにもせよ、此の賤草茶婆の彼の玉のやうなる人をいかにして産出すべき。さらば此の太夫と彼君とは傍輩歟。傍輩の其の太夫に逢うて餘所ながらに彼君の態をも聞く。可らむ歟。否々其れも煩悩の種子。とは言ふも此處まで來しものを。否、然らば、其の消息も付く且つ其れとして、一層な旨とする逢女の習ひ、其者が陸たる此の老婆、熊谷めに依頼れて何人には係く言ふ歟彼奴め身受せむには金の無し、逢たさに戀しさに、此家へ忍びて、太夫といふも、去しとも無さに、放しとも無さに病痾と亦た詐はる歟、其れも知るべからずと道理を附くれば、我が此の太夫に會ふといふは誰が聞きたりとも怪しいとは得う言はむや。然矣、此も由井どのの爲なり。大事の爲なり。影護さの良心を強て彼は種様の道理を捏造りぬ。老婆は漢の手を扛げて彼方へと勸めぬ。小判二枚を此以前に掴附けられたる若衆等には、恣る〻出で來りて處々と請じぬ。仲居といひ、下女といひ、いづれも手を取り腰を押して、「さア、一寸とまア彼方へ。一太夫さんも逢ひたいと待てゐやしやります。」取られて、押されて、請ぜられて、勸められて、加之自ら其の一時の良心を壓服くべき道理をさへ捏造り得たるも、纔かに兩夜に宮に言ひたる、我は武士なり、墮落はせぬ、熊谷めが好手本、此の潤はしき場所、賣妓の面。加之ならず、生唾、席を蹴立てし！ なんどの擧動の、言質の、我を刺し、我を罵り、我を恥しむるやう此際にも目にも見え、耳にも聞えて、猶且つ宮が我を嘲笑り、正雪が我を怒る面影さへ幻に隱顯くに、彼を怕れ、此を慮へ、且つ耻ぢ、且つ懼い、且つ自ら責て、彼が決心の階も今更に飄搖とゆらめく腰を頓と突れて、「さ、まア此席にございません。申し太夫さま、ほゝ彼の御方を。」「こりや道よ、あの花木どのに付てござる御客さ連れ申したよ。」

但見る、九尺間なる床の前に、緋子の夜衾の三つ四つを重ねて、素き綸帛の鉢卷しつ、色絲もて括れる唐繪の枕に身を托げに凭せる美人あり、是れぞ彼の太夫なるべし、涙に窶れて、愈其の白う、痩りたる頬を徐らふり向て、嫣然としつ、「皆さん、お辱けなうございんすえ。」一言は、只、其の聲に聞かれたり、驚くべし、彼女は前夜の其君なりき。最初には天女と惑ひ、次後には惡魔と怖れたる其君なりき。天女か、惡魔か、菩薩か、其は知らず、たゞ目下の彼が身は、天上へや昇れる、魔界にや墮ちたる、淨土へや生れたる、兎角は從前の人間界ならぬやう彼は想へり。

室の灶のほの〴〵と薫れる、衣服夜衾の鮮美しき、最初の調度器物も媚かしう、目に熟れぬ、彼は只今體に心の跳るのみなりき。況て其君の體容をや、近優りして艶婦妍しき其面は、病に痩せたるに一層の情趣を加へて、今の嫣然たる一笑は、身を爬搔らる〻如く惑えぬ。噫乎彼は、既に其身も、其心も忘れむとせり。況んや正雪をや、宮をや、熊谷をや。

（四三・八）

此夜の移り香は、いかに淺々と其の俤影の别れの袖に留りにけむ、其翌日より兵庫は又た有らぬ樣の人となりけり、去年、彼の松原を出でし後、獨身戀ふる無き人と化れるは、彼が爲に障むべく、將た慈むべき涯限なれども、其れは猶ほ彼の是非なき意地なるものにて、偏僻りともいへ、頑陋ともあれ、一方より言はゞ頼母しき節はありしならむを、今や否らず、其の一徹すべからざる意地、蓮華汨むべからざる気力、雙刀に賭くるといふ氣質、死をもて誓へる大望、其等を負へる身も魂も何處にか放下し棄てつ、只行方なき戀てふ風に吹かれ〳〵て、浮萍々々

と上の空なる、其の齒窖に浮遊るゝ沙盆球の如くとなれりき。
端唄か浄瑠璃もうろ記憶ながら口吟まれて、禿への憎口もやゝ言ひ習へる此頃は、面白うもなき庭の造り付け假山を眺めて、いつも同一の景色なる東山の青葉の緑を一日の友とせらるべきには非ず。今朝の太夫が湯の面の今もなほ目に眼映くに、仲居とが約束も果さでは心の濟まず、其れよりも、猶心の濟めぬは昨夜の口舌なり。我を何ゆゑ斯うは傷しうしやるぞと問ひたれば、汝が先の情夫に肖てといふ。其の情夫とは誰ぢや？と直問れるに、彼女は泣いて、今ははや世に亡き人、妾を棄てゝ冥途へといふ。扨は其人に心の遺るか、あら嫉もしからずやと辟口れるに。たとひ其人が世に存ればとて御身を棄てゝ如何なるべき、御身の爲には山礪河帶の誓約はもとかは、指にても髪にても、たゞ思ぼすが儘といふ。猶其を押してと思ふうちに夜の明けたるが、想ふに其の情夫とは熊谷か、彼奴めの死しとは耳新らしき話なるが、實例然らば自ら我が責任も了める譯にて、殊に今は要敵なる心も安し。紀州といへば彼の形勢、評判一通に嚴の御腹をも居し玉はじ座頭の借銀を皆女が拂うて見るゝなり、正雪が旗上といふ其旗も、大概は五月幟に武者人形見る程の事にて終らむ興。さらば例の彼女が心を今宵は見拔て、座講の西涼しうもあらば、彼の今にて！然なり、半分は消費したれども猶根引の額はあるべし、總て浮世の野暮をば棄て、いし百石の年季買ひて、親父が加茂の別莊へ彼女めを伴れて、當分は隱居！　其事か、其事か。
今の兵庫が肚底は、大略は此邊なるべし。
衣服美々しう、流石に其物までは未だ忘れぬ細身の大小腰にして、出でむとする、其端へ、一若黨、江戸からの御客、丸橋どの見えられておざります。丸橋とは、豫て正雪が許に聞ける江戸の大將、槍法の達人、忠彌其人か。今は扨て何の用？　いや何の用なりとて逢ふ要も無し、妾の無きのみならで會うては不味し、と彼は僅に鼻を皺めつ、首を掉りて、「予は不在ぬと言へ。」「いや、御在宿の旨申してござります。」
「えゝ、差出た。さらば不快！　重ねてと言へ。」
取次の若黨は叱られて、其の默らせし面を紙燭の末へ引入れむとする、其れより疾し、「不快なやとて、面識の叫らぬ程にもあるまい。由井兵庫へ推參する、免されい。」一聲を叩く玄關の聲は一室に徂りて、ぬッと出てたる其人を見れば、背丈は六尺に餘りて、其の總髮なる髷は鴨居へも觸れむばかりなりき。鍾馗の顏、猪毛生ひたる腕、虎髯左右に轍かして、朱鞘の大刀擦めるまゝ無手と兵庫が對座に坐したり。「初めて御意得る、御分が其の兵庫どのか。」しかすがに心疚しき兵庫は、天狗鳴動といふらむ如き其の聲風に搏れて、身も竦むやう覺えき、
「いかにも我等、其の兵庫ぢや。貴方は丸橋どの。而て由井殿は？」「うゝ由井といふ名苗字、御分は未だ忘却である歟。」「吾は縱し故の吾ならぬも、初對面の會釋も了まぬに傴く横車を押懸られては素直には通せぬなり。「不思議をお言やる。兵庫、由井殿を忘失るゝほど未だ老耄はせぬ。」「老耄おしやらぬもの、何故大事を忘却た？　大事を忘却たは即ち正雪を忘却たぢや！」「今の兵庫は、却りて他を欺瞞むとする巧舌を有てるなり、「靜まりやれ忠彌、御身こそ其大事を忘失たぢや。其の憚からぬ高聲は？」
「甚麼を言ふ！」「壁にも耳。傍聽人あらば如何おぢやる。三思して行へ。京の者とて皆聾者にて癡者にてもおりやらぬ。」彼は苦笑ながらも偽笑ひぬ。

（百三十九）

意外の來客、忠彌といふ名聞ける時より、既や我が近日の擧動を寺町なる旅宿の者より聞

知りて如何ならむ難題をお持懸くるならむと想ふ差はず、細作識の口前も未だ終らぬに、大上段の眞二つと眞向より拉ぎ附られて、我はや微塵になりたるかと狼狽しが、倖ひにも、敵にも些少の破綻あるを疾くも見出して兵庫は辛くも受留めたりき、受留は留めたれども、我心に背念あると、彼が劍脈の荒涼じきとに既や神衰て、二の太刀に切反すべき氣力も無し、只僅に彼が呼吸を窺ひて自身の防禦に早速の進退を謀るのみなり。敵手は手負野猪の如くに突懸れり、「盲目でも聾者でも無い者の面前に、身をも忘れて何故其の遊所狂してお見しやる。其れが三思して行へか。」「これは扨て近頃の難題。我等遊所狂するといふこと……」「えゝッ無いとか? 無いと言ふか・誓言立てゝ斷言めされる哉?」「それは其の物でおぢやるよ。遊所へは參つたこと得ら無いとは申さぬが。なれど其の狂ふなんど……。」斷無とも言はじと忠彌、其刀に手を懸けたるが、彼が猶其の良心に訴てか、或は我が威勢に懼れてか、其の實情を自白し懸けたるに其の背けたる眼を確めぬ。「むゝ、遊所へは往かれたことな。むゝ、而て何用あつて參られた?」卑劣なる兵庫は、彼の氣色の稍和れるを看て、再び身の罪惡を掩蔽むとせり。

自ら忙しく其の膝を進めて、「聞れぬか彼の珍事、松田熊谷併せて我が方の前波が刃傷、横死といふを。」「いかにも聞いた。聞き申たが其事が何と?」「其事である、其れでおりやるで。其の刃傷の起初、横死の根本と申すも由井殿の誡あられた飲酒を破つて、興に乘して島原の遊所へ渡つて熊谷めが其の馴染の太夫信夫といふを根引せうとしたからの事、果に三人口論して松田と前波は其の場に斃れ、熊谷めは影を隱いて今に其所在を知らぬ。それで其の我等案ずるに、女子の髮條にて綯れる綱に大象の強きも繋がれ、其の足駄もて造れる笛には秋の鹿も寄るとやら、彼奴めたとひ何樣に身を匿さうも其の太夫といふ許へは必ず折節に忍ぶであらう、其れを捕へて一つには松田前波が仇、二つには此の大事の破れるを防ぐ。斯樣の思案で島原へは、何さま參りは參つた、が其の狂ふの何のといふ、氣もござらぬ事。」「ふう、而て御分は、其の熊谷が所在を探知れたか?」「いゝや未だ……。」「市中をも歩かるゝか?」「歩くとは? 彼は危惧あり、近日は人目に觸るゝも憂きに、彼處へ通ふも只夜をのみ雇へばなり。寺町の者が參るも計れぬとか、其の間には當家に附け置く只今の若者らをば喚るゝか喃?」彼は此にも答へ得ぬなり、明暮は只太夫が事のみなれば、貴賤き彼等をば身邊へも寄せぬなり、況んや其者との暗談をや。一人をも寄せず、市中をも歩かれず、初終島原に入浸りて……。原來が何事を探聞るゝ? こりや兵庫、其の熊谷めはな、死骸になッて四條の河原に埋れて居たぞ」「呀?」「此の七八日前、大雨の後、土地の者がそれを發見いて既や町方の檢視も受けたぞ。初は誰とも知れいで有たを其の島原の紀州屋とやらの若者が通り合せて、未だ腐れでもある奴が死面熟と視て、花木たらいふ廓名の客と申し出いたで其實名知るゝまでと、三條の大橋に捨札となつて立てられたぞ。おぬしが今言ふ盲目聾耳。原來が誰を言うた? 然言ふ汝が其者では無きか。其のみかは其の熊谷めが奪出いたといふ、百兩の用途、松田らが死骸の傍に棄てあッた金、何と爲た? 先づ其金見せい。」猛然として彼が起せる叱咤の聲は百雷の轟くといはむも今更なる、兵庫が耳根は碎けて飛るかとばかりに思はれき。一々に急所を捉れての難問に、彼は再回甚寒と反すべき言も無く、虎の前なる鼠の如くに只慴伏して見えたり。

（百四十）

忠彌は益々に憤れり。「さ、其金見せ。見せ

に斬れむとすること有る時、其が悲歎や如何ならむと、彼は又其子に想及ぼせり、人有りて萬一彼を殺さむとしたる時、我が驚愕と悲哀とは如何ならむと。竟に彼は悄然として首を俛れ、其腕を拱きたりき。

(百四十二)

丸橋が躊躇へる面色は、突然忠彌の御眼に三寸を前ませぬ。「拙は腕が頼みといふこと聴納て下さるな？」「否と申すではおざらぬが。」「金か、金かや？ 金ならば腕が如何とも爲ます。白銀も黄金も玉も何せむに、勝れる寶子に若めやもぢや。腕も勝手は見らるゝ通りの不如意ぢやが、知行もあります、知己も無いでも無いぢや、出入の町人用達の者から借受けても其金は何樣にもする。したが、其金さへ進ぜたりや、今後は緣切にもして下さるかや？」忠彌は目を瞪れり、「緣切とは？」「緣切とはな、あの可怖しい……」言罷て、左右を瞰む如く顧玉へり、「……企圖な。あの方の肩拔さして貰ひたいのぢや。私もな、今些し齢でも若くば又何か其の働き方もあらうけれどな、此通り半死の病翁ぢや。連中に加つてゐてからが足手絆ぢやろ。又た左門もな、斯う見えても酒家は病躰ぢや。正雪老との約束は、一旦は何樣にいたしたか知らぬけどな、其れも其の是迄の事と諦念でな、何ぞその仲間より除してな」此一言は、忠彌が有てる逆鱗の上に何とは響きけむ、看る〳〵彼が毛髪は倒竪ち、々と齒噛き鳴けしが、又徐に面をさして、空嘯きて、「如何となされ。」「いや其樣に情無う言はれては此方が氣の毒ぢや、別かるゝにも快よう噺。」彼の酷らぬ大喝は其口を衝て發でたり。「金銀で約束は買はるゝか！」「冷り！」一喝に其金は誰が金か。其の誰が金た誰が消費うた實。知れ切たる事！ 我等は御身らが懷中の金一錢たりとも與れよとは言はぬ。由井が金を見せいと言ふぢや。」彼等は默せり、落魄の後なる小金の如くに、忠彌は仰ざて、更に長大息を洩らしつゝ、「由井めが老耄。あ、恨めしいは正雪が眼の腐敗ぢや。倚樣の奴等を味方として大義の軍を起さうなど！ 今更に言ふも無益しい、恥辱の恥辱を曝らすぢやも。責て汝ら、其の人間らしい料見もあらば耳の底に留めて置け、我黨は實にお主等父子を嫌悪んだぞ。されば汝に彼の狀を書せて、由井は直さま和田山に立ち越て、彼處の樣子を如何ぢやと探聞れば、帶刀の老人が儀に江戸に出向くといふ。取る物も取り敢ず其の跡を追ひ、江戸へ着いて、種々の手に手を盡いて、扨て殿中の樣樣はと聞けば、老人が例の短氣で執政共を怒鳴り捲いて、お主が三十七ヶ條の其の大概は空議の手にも懸らぬといふ。由井は驚いて、恐くては我黨の胸算が齟齬ふ、是非に紀州に溫を吹かせて、彼の國に謀叛起さすか、腹を切らすか、孰方の道にか傷いではならぬ 其れには今一度兵庫をと、斯う言ふで、由井は進退に困窮の無し、金井は在らず、傍人は使役ず、それで乃方が自ら望んで、謀合なり、手管なり、遣へなりに來たのぢやはよ！ 來て、傳馬町の旅宿へ着て、彼奴らの話を聞けば此の傷口！ えゝ、いもう後は言ふまい、原來なりやお主の其の素首、胴へ附け置くべい物で無いなれど父の歎が不憫さに……えゝ、言へば言ふ程の口の汚穢、腰拔なり傍聞拔なり手にせい。呼嗟、靈まれぬは人間。義理知らず、恥知らずの畜生、人面にして獸心の奴輩！」散々に罵り棄てゝ、彼は大刀杖にして座を起むとす、卿は慌忙て、「金は？ か金は？」忠彌は冷かに回顧りて、「御身に進ぜるは！」「誓詞の事も序に喃？」「人をお越しやれ。何時でも返却す。」卿は滿面に汗を湛へつ、掌を合して、「丸橋どの、辱けない、罪ぢや〳〵。これで死でも往くところ、往生ます。」俛するをば再び顧らず、席を蹴立てゝ去らむとする時、今迄は死せしか

を捜るが如く、倉裏の盗を護るが如く、彼の島原なる泉州屋の表裏に於ける十手を隠し付ての捕吏十餘人、其處徘徊して内外の様子に目を配る其中に、頭と見ゆる武士一人あり、是れ吉見喜太郎なり。彼は今、其の裏庭の籬際にあり、傍邊を覗ひて咳嗽一つすれば、内より縁先に出で來る者、思ひきや彼の宮なりき。見るより喜太郎は、「如何ぢや彼奴は？」「今酒事でございます、が、此程も御前で仰せの、彼人は生擒るまでも無い、死首にしても可いのぢやな：」「勿論ぢや。江戸表は上首尾で落着も近い、其處へ彼奴さへ出ぬければ其れで可いのぢや。今更ら生命を要る、其れにも及ばぬ：：處かは却つて面倒か。其氣で遣れ。」此の問答にて其大概は知らるべきか、猶熟く聞けば、宮が彼夜より島原へ還らざりしは全く和歌山へ釣れるなり。彼女は夜をもて晨に繼で彼里へ着き、先着の喜太郎もて、兵庫が所在を探知めたること、其餘寺町の旅宿のこと、熊谷松田らが刃傷の始終をも聞え上げたるに、殿の御喜び大方ならで早速に御病間に召されぬ。此處には御不議として簾中の御方も在しけり。宮、謹みて見まゐらすれば、御容體は甚しく御話手紙にて見けむやうにも非ずして、御湯藥、御菓子、諸寺諸山の御祈禱の札、御枕邊には所狹く排列べられたれども、御本人の御色澤はいと光澤々々と、簾中と倶に在たまふ以所か、去る頃よりも翻りて壯々と見え玉へり。これも所由ある事なるべしと宮は強ても問ひ奉つらず、今朝に變れる自己が鐵漿黛形好ふ突場るを、遁うと佇させて、いつに變らぬ其方が氣働きの神妙さ、お主ならでは誰か恁く速かにかゝる功績を奏はし得む、但し喜太郎より聞くところにては、彼奴め目下の隱棲とするは公卿の邸とか、又た其の寺町の旅宿といふにも十餘人の荒者ありといふ、旅宿の荒者は憂ふるにも足らぬが、只其の公卿の家といふが他診せけれ、其方は未だ知るまじきが、現今は然る所以ありて武家に公卿は禁物なり（當今の英明に渉らせらるゝ抔の御意にか）現にあの所司代すらも成るべく手を退きて公家には戰觸らぬ態ぞといふ、されば其方、此事好う偽原せむには十分に捗針を須れて、彼が他出の折を見て漏らさずに搦めて捕れ、萬一手に餘らば討棄にせむも苦しうは無し、其には心利たる組子ら三十人を撰びて其の補翼とせむ、大抵なりき、先づ斯くれとて喜太郎が家に歸され、御料理、御菓子、金絹なんど數多を賜はせしが、其より半月は猶恁くて在りき。彼女は心苛立つ催に喜太郎を疾く／＼と促せば、老人は聲を潜めて、其處らに御問落ある體と思ふか、組子原ははや疾くに發途して彼奴が歸には鐵鎖の附きたり、只其の我等の發足の後るゝは、生擒にすべき歟、死首にすべき歟、彼が身につきて自ら思食の有ればなりといふ。扨は什麽にと彼女は問へば。愚なり、江戸の御模樣志しからば、是非とも彼奴を生擒にして其の目安の證書たる由を白はしむる要有るに非ずや、若し慥かに帶刀殿の首尾好くば、たゞ彼を討て後日の幾日を防がむも可し、又た生擒て衆人の見懲しとせむも可なり、此等の御進退ある故といふ。其の御計畫の深く且つ遠きに、宮は舌を巻きたりき。かくて和歌山に在ること一月、或る日帶刀の進らせたる江戸よりの早打來れるが、其の書狀には、殿の首無事、の五文字を、大きなる紙に小兒の書きたらむ樣の筆して認れりき。なれども此の五文字は餘の千萬言にも優増て尊きなり、御傍は早く城中に傳へぬ、城中はまた城外に播らせぬ。殿の御身は御無難、紀伊國の御家は御安泰、千秋萬歲、めでたやと謳ふ聲は其日より和歌山の市中に充ちたり。かくてこそ喜太郎は宮と與に發足るなり、御暇の折の賚物も數々ありて、彼女は和歌山の城を立ちぬ。其が京都へ着

せる日は、即ち兵庫が江戸へ立たむとする其日なりき。噫、此の一日！　若し此の一日を過ぎたらば、彼等は竟に千載の遺恨を呑んで、更に百年の悲愁を免かれたらむ歟？　知らず、什麼。宮は闇夜の手探りに暗を摸みつ、「到底も今夜ぢやが、子刻に此處を發つて大阪から船にせうといふらしい。但し彼々はなが際にぢや。手緩な事構へてなさるなや。」彼女は言ひつゝ尋思せり。時に叢雲のぽッつりと雨點を滴らすあり。明朝の出船ははや延引と彼等は苦笑ぬ。

（百四十四）

彼の宮が聞き得し如く、兵庫は今夜子刻に京を發途て、大阪に越え、川口に纜せたる正雪が手船に乗りて江戸へ行むとなり。今は既や戊刻なる、此の僅の間隙を竊みて、彼は悲しくも永き訣別を信夫が許に告げむとて來つる歟。迷の夢の既に醒めたりと言へる彼は、口と心と表裏なる、猶其の太夫が白無垢の肌着に魂を繋まれて、小唄に唄ふ出口の柳に後髪を牽るゝ與、女々しや何程の腑甲斐なき心にて、と他は嘲笑むも、請ふ且く聽け、彼と信夫とが恩情たる、相呪るゝ日は淺きも纏綿として尋常のものならずなむ有ることを。彼は起初は此の子の顔色をのみ愛でゝ、又無き美人と想ひたるが、逢うての後に扱て熟く其れが擧止を見れば、起くるも伏すも只其日の水の心といふ河竹の慕なき身上にも似ず、又た毅然として折れず撓まざる心に憎悪しき質のあり。此の一事を物に、事に、看得たる時ぞ軈て彼が河竹の心に空虚となれる日なるべき、其れよりは只寝ても寤てもの、現にも夢にも彼人のみの上なりける。

想へば想はるゝとは誰が言ひ初めけむ、信夫も亦た其最初は、只我が情夫の熊谷が花木に言ふ似し人の來しといふに、戀ふなんどの心はあらねど唯其の面影の如何ばかりか似たると言ふを見まく欲しさの念無きにしもあらざりき、されど此は熊谷が根引を無承に觸りし夜なり、其後に想ひ忘られて只彼人に來るを何時と待ちびたりしに、其人は什麼かしけむ、花の木に花は何處の仇風にや吹れて散りぬる、其夜をはじめて、來る日も、又其の翌る日も待つに、來なきいそよとの香をも齎り來らず、悲しうもあり、戀しうもあり、腹立しうもあり、廓の評判、主人の不機嫌、傍輩の譏口、聞けば聞く腹の禿らが來て皆ければ、母親は其度に怒りつ泣きつす。泣たきは人より我なり、彌や根引を落放下しは仮令の情こかしを嗅ひしにも勝り一世に存在ねまじきまで口惜しう思ふ事なるを、其等に捐てたる内外の沙汰は、あはれ信夫がしのぶに餘る涙の種にて、それよりは氣病にふし、長引かば昔の太夫も終の苦となりぬべき病となれり。見つ聞つせる母親の心配はまた大方ならざりき。今は空花の恨めしさも言うてをられぬ花さどの、いいでも元木の梢に活して枯木となるべき此方の枝に今一度の花を咲せて貰はではと、娘が陰に聞き聞けるを便りに、二條寺町の旅宿といへる彼處は出向けるが、此處は今は彼の恐ろしき鬼共の棲處なり、花木ぢやの藁木ぢやの言ふ其樣な者は此方には在らぬ、我々は杉木を友達の一人持共ぢや、早う去なんと胯足引拔て生胆も取て喰ふべいぞと嚇されて、彼嫗は命辛々に逃歸れるが、扨てこれぢやはア花木どんが生も實も、恨みの綱も切れ果てたアよ、其ては彼女が彼の樣に戀しがる彼人の名代へも御聞こえが、それには日外宮どのが伴て見えて兇悪義怨りもて歸つた彼の人だ、彼なら似合の恰ど好が、それもあの兒があれ限り寄附て、くれねえでからが、方も無い、こんげな時にや神佛さの力より外には、と彼嫗は其れより一日二日は洛中有る程の神佛に參詣して祈念を凝らせる、其後二日か三日しての夜なりけり、佛神の擁護あやまたざるか、兵庫が護摩壇の祈の如く、くる〳〵と渦

巻て、錦繍筐の内へ巻込れしは、何さま見れば見る程に、花木の其花と見し面影とは一つ花臺の排べる花瓣とも見ゆるなるが、白馬の白も白石の白も共白たるに於て異なる處無かるべしとは古人の窮辭にて、牡丹の紅は紅木瓜の紅と自ら其紅を同じくせず、大小のため附、衣紋の竝、坐作進退總て是れ應揚にして品位あり、なれども猶彼女は、其人の眉目の肖たるをのみ不思議の事として、只我が戀人の、活て動く寫畫とも見て眺めゐたるに、一回會ひ、二回會ひ、三回四回と其の會ふことの重なる儘に、彼が心人の淺からぬも知られつ、又其の高尚れる品柄の、愈氣高きに思ひも沁みつ、彼の想へば想はれ、想はるれば又想ひて、今は中々彼方より此方に棄て難き想あり。なれど其の棄て難き想をして隨意ならしめざるもの一つありき、花木との起請なり。其の起請の主、花木の花は、四條の河原の砂に埋れて既に全然黄泉の根に還れるものと知れぬ。彼女は一時は其後を追てまでもと突詰めたる悲歎を辛々に飜念して、此よりは今なる人を其の植繼の花木とせむと想ひぬ。其想は又叶れたり、彼は今宵京を立ちて江戸に赴き、久しく歸り來ざるべしと語げぬ。然らばこれが一生の御別離か、と驚きて問ば。とも有るまじきが先づは、と應ふる血色も平ならず。醉を役ひて頻りに其の苦惱を忘れむとする、其面影も哀れなり。時に、道やアと呼ぶ聲は障子の外にあり、母に從順なる彼女はかゝる際にも否み得ずして霎時と暇を乞ひつゝ出でぬ。

(百四十五)

母屋とは小庭一つを隔てたる茶室樣なる小座敷の中に、太夫は其の疊る紙を面にあてゝさめざめと泣けば、母の老婆も鼻酸らせたる聲を潛めて、諭るが如くに語れり。「其處だでよう、汝、熟ら胸で落着て分別のさつせえよ。汝にも可愛え容㒵たんで、私にも大事の婿さまのやうにも想はれるけえ、其樣だ日に遇はしたく無えは山々だけんど、身から出た鏽ちふもんなら爲方が無え。の、道よう、此處を熟う一つ考へて、嘉助どんの手柄に成らアずやう、汝も其の御褒美さ紀州樣から頂戴アずやう肝煎てよう。」言はでも知れたる兵庫捕拿の手引といふを、信夫に爲よと迫れるなり、其の迫れる婆が肚とて、兵庫憎しといふにもあらず、只恁くもせば、自然、紀伊の殿樣御聲懸りとも言ふ如き條由なんどもて、苦海の淵に足洗ふことの叶るべきやなど、お婆相應なる目算を建てたる、其れも是れも只我お道の可愛しと思ふ遣る瀬なき心の一つなりける。「折角のお頼みぢやけれど、妾には其樣な事は出來ませぬ。」彼女は單恁く應へぬ、其聲も彼の疊う紙を纔に漏れて出づるなれば、耳遠く、然も稍周章たる老婆には善く聽取れざる程なりき「如何爲たら出來ろと斯ういふけえ？ 何も角もねえぞらやア、彼の人の腰にへえ爲てる大小隱いて、まッと御酒をいかく喫して、恰好今雨も降て來たけえ、今夜の發足は見合せなさろと、好工合にも言てもよう。」「いゝえな、妾には其樣な事出來ませぬ。」と恁う言ひますの。」「否だちふ歟。」老婆は口を尖らし、眼を圓くして、甕に蕫ける蛸の入道の牝雄ともいふらむ面したり、數口氣を長く引きつゝ「ほいい、いいい、ほんね、汝ちふものも慾べえ知らねえ遲鈍兒だア。汝の其の艷顏さに惚れて海鼠のやうべえ化ちよる彼の人を、手玉に捏ッて天井の逆遁さしてからが否だちふめえのを、其の大小此方へおこしやろ、お酒を浴びめさろ、今夜ゆッくり眠ッてお行きやろといふに、甚麼がへえ趣意さ聞くべえ。其の極些の芝居さ演てば、ありや紀伊の殿樣から御褒美は出る、よしか其の褒美も齎ずに濟むか、否だ〳〵ちふッて錢もへえ泣面べえして出る道中も不爲でも好か、極

手を伸して我女の襟を無手と引捕へ、摩耶の姿と一ツにして縛めむとする、彼女は今絶體絶命なりき。「父さま、無慈悲……」「無慈悲で無い、これが慈悲ぢやは！ 其場へひろめいて怪我などさしては……。こ——りや非常……。」「非常てゝ、趣意も言いで。」「えい言いでか、默程告うたに。」「聞きませぬ。其の罪科の何事ぢやといふを。」「や、罪科？ 其れ聞て何にする？」「と罪科……其罪科の次第によつては私もお前の加勢しませう。」「え、加勢？ 加勢しまする、罪科の次第で……！」「ふゝ、相違は無い歟？」「誓文ぢや。」「いや、遊女の空誓文、當にはならぬ。何ぞと言うて時刻を延いて其中に如め逃さうでがな？ やはり締縛いて邪魔させぬが……」「無道理！ 父さん、誰が其の空誓文する口惜しい遊女には爲らせたぢや。趣意も言いで其様な事なされると聲立てますぞ。」彼女が柳眉は瞋恚の炎焔に煽られて逆立てりき。「聲なと立てば！ 立てても見い、一撃ぢやぞ！」此方は飜りて其低聲に、四下を憚る力を籠めぬ。「覺悟ぢや、手撃。すッぽりと討て下され。」喜太郎も實に案外なりき、日頃より柔順の性質、召使ふ女にも好う目を懸て、逢ふ客にも情あり、我等申す程のこと毎も善う聽て吳れまする、眞に此の長州侍の小頭、貴方にも好いお女を持たれて、と先頃も亭主の言へる、嘗らるゝのやらむ、辱めらるゝのやらむ自身判斷も附き難きに、只腋下の冷汗のみを拭へるが、兎に角にかく無慈悲の親をも親として數日の少間ながら孝行の成る程を盡しくれたる優しき兒、それが縦ひ我客なりとも我が依嘱とあらむには、否も應もあるまじとは思ひの外なる、手強しとも〳〵、命一つを我方の前に投出しての覺悟といふに、且つ驚き且つ呆れたり。なれども彼が何の機嫌は、其の憤怒を左廼に嘲笑に紛して、はゝゝゝゝ心底見えた。其の一命惜まぬ程の覺悟で無うては頼まれぬ。善し、話さう。」彼は悠然たる態度を假粧ひて、座に就く時、彼方の座敷、すなはち我が部屋の方にても突如喧嘩しき聲は聞えぬ。聽けば兵庫の何事をか罵るなりけり。信夫はこゝ在るにも在られず、只心中に念ぜらるゝは彼の觀音の力なりき。

（百四十八）

哀れ單一個、太夫が部屋に取遺されて爲す事もならぬ兵庫は、前途を想ひつ、有合ふ銚子を自ら酌みつ、尋思の首と盃とを幾回か傾け盡して待ちたれども、其人は歸り來らで不意き雨は却りて音づれぬ。個は什麼、かくては明日の首途といふ、心許なさよ、抑も此雨も、日來にてあらましかば太夫が膝を枕に聽かむこと、いかに物の蕭悲に、樂しかるべきを、今は恁うと決念めたる身の中々に心焦れなる。然るにても彼人、何處へ往きし歟、遲くとも亥刻までには家に歸らでならぬ身と知らでか、毎に似ぬ待遇の然で無さよ。など其れぞとも無く耳聳立つれば、怪しや此室とは小庭一つの前面なる小座敷の内に平ならぬ物の音、忍音ながらに泣く聲と呼合ふ聲も聞えて、然も其聲の中には此室なりし人のも間雜るなり。彼は其を自家が身上に關る大事とは流石に未だ知らで在りけり。彼女の母が呼くりし樣子、内の論判の斯く長時間、加之ならで泣きもし怒る、萬一は彼の曩に聞きたる田舎人の根引などいふ其の談合の再び發れる歟、昨日迄の我ならば、土臭き奴の僭上過ぎたる、太夫引くより汝等には大根なと引けとも叱斥て嚇さむも、倩々思へば其の落籍た今の我には倒々に心易き歟、若し我先つ其の論判の所由を聞きて、倘し然もあらば理解をもし、彼女が生涯を安穩の地に置きて與らせむには、と恁る際にも親切は隈無かりけり、彼は鼠路栗と起ちて鼠路栗と明くる、間の紙襖の出邂頭に「兵庫さま。」彼は其の思ひ懸なさに、えッと一

歩、後へと踏みしが、彼眼睛を扨く働かして、「宮ちやッた歟?」「あい、妾で。でもま御前さま好う御無事で……」「無事では無いは、散々の事になッて喃。」「如何にも散々な。それで此屋が其のお隠棲所?」「いや此方は其の隠匿るの、微行のと。あの熊谷めよ。」「え、そんなりや御話は熊谷どのゝ……?」「甚麼を言ふ、お主は又誰人のを為る。」「誰人のとて? 御存知なしかえ?」彼女の我を驚く如きに、我も亦た彼女の喫驚に驚けり。「知らぬは何事も。何事か聞出たか?」「では未だ江戸からは沙汰無しぢやえ?」「沙汰は有た、由井どの名代に丸橋が来た。其は措てお主聞いたは何事ぢや? 予が身上か?」「身上とは愚か、お前は今御主への謀叛人とて公儀からも、紀州からも、草を分ての穿議の人ぢや。」其は固よりの覚悟なり、なれど只其の大公儀より謀叛の名をもて厳重の穿議とある、其のみ微しく耳觸なり。「お主は其事を何處にて聞いた?」「和歌山で。」「えッ扨は彼時から紀州へ往たか?」「往て、今復帰たの。」兵庫が眦は瞬えずして前むこと一尺なりき。「聞せい、仔細疾う聞せい。先づ其方、何しに彼處へ往た歟?」「師匠様に逢ひたうて。」「むゝ、其りや其れで可し。而て彼處の江戸の沙汰は?」「其事ぢや、今告うたのは。」「江戸では何と? 帯刀の早打でも来た歟?」「来た段か、来てから和歌山は祭祀のやうぢや。お前の出された目安とやらが江戸殿中で悉皆敗潰れて、帯ノどの大手柄。其れでお前は自己が主を謀叛人と讒言する反逆人、紀州はもとより江戸公儀でも棄て置れない悪人ぢやて、草を分ての御穿議ぢや。今頃はもう海道筋には人相書の出たも知れぬ。それで妾がお前の顔見て魂消た其上に、……もし兵庫さま。」彼女は左右を回顧つゝ、再び告ぐる處有らむとしつれども、此時彼は憤るが如く、慨くが如く、恨むが如く、惜むが如く、長歎、低息、呑嗟、呻吟して、我の吾たるをも知らで在る體なりき。

彼は天をも怨みたるべし、亦人をも尤めたるべし、縦其の事の齟齬せるを否りては、我身の世に存る甲斐無さを歎き、穿議の緊急きを想像りては、前途の縲絏の辱めを惧れて、江戸に切後れし此骸を、此京にて屠らむ歟とも我から思へり。雖然其の最後の決着の辨を断ぜるは猶少時の後にありき、曰く慣はぬ逆も賊を刺む!

（百四十九）

「無念ぢや、遅れたか!」と彼は徐くに呻き出だしぬ。宮は傍より、「もし、未だ遅れはしませぬぞえ、危うい間なりや……」「いゝや遅れた。あ、無念ぢや。今半月速からうなら!」「半月の速いより半時の遅れが今の御身の大難ぢや。遅れぬ内に疾う為され。」奇異なる乙女の、此の奇異なる語は、韓びたる如き兵庫の耳にも纔に通れり。彼は不図眼を注射けて、「遅れぬとは? 宮。」「腹切らしやると言ふであろ? 其れならば……」「むゝ。いや。」と彼が頭は、苦笑の戴て、横さまに掉られぬ、「奴原の手に遇はぬ先に、切腹とも思うたが喃、思案し替た。兵庫命は滅多に棄てぬ。」危くては、と宮は血相変て、其眸を稍詰寄せたりき。此時の彼女が衷情に曰く、紀伊國殿の御武威めでたく、此の逆賊は既に檻内の獣として取籠められぬ。然りともあれ、彼も亦た牧野兵庫、些は人に知られし武士、これを尋常の無宿非人の盗竊欺騙したるかのやうに強制に、情無う遇はむも可憐い歟。況て其を獅子心中の蟲とも御覧じて、罪をも人をも憎悪ませ玉ふべき彼殿さへ、成るべく事を穏便にして彼が面皮ある如くに計らへとも仰するをや、生来未だ微の私寃とては無うして、翻りて服るべき恩分はある安居村の三四郎が妹の宮が、其を抂意に、忠義立にせむ要の甚麼かあるべき、加之にも、此所へ来て、あの姿さまよ

り開て鰲て入りたる太夫との交際、將來は如何やら夫妻ともあるべき約束、其人の面上にめでても此人の亡屍に死花といふ墓なき花も責ては咲せて遣りたやとは思ふなるに、然りとては心にも似ぬ、思案は替ぬ、邊りには此腹切り難しなど、今言ふことの憂情やな。とありて此の虎口、殿の爲にも、吉見の爲にも、師の爲にも、一寸とて緩弛むべからず。所詮は只、彼が身の利害、事と正邪を明白に說破て、否應なき詰腹か、然らずば是非なし、引寄せて刺殺す歟。併ながら是も亦た我が報恩の寸志、俗に謂ふ慈悲の殺生か。「棄てぬといふ其命を、如何なされます？」「はゝ、如何もせぬ。暫時は大事に保つ。」「保存れた以上に？」「所望を貫徹す。」「とはえ？」彼は四邊を睨回して、「汝は腹心の女、聞まず告らうが。……此の鬱憤、如何あつても已み難い、此備で已まば、兵庫また武士で無い。正雪に誓うた口狀、近く忠彌に欠へた約束、旁以て。……兵庫單一個、此回こそ實に御座所へ忍び入て。喃！」流石の宮も、其決心の剛健なるに呆れたり、彼女は其口いと忙しく、「大それた！」兵庫は、弓手に敵を押へ、馬手に其の心元を刺貫ぬける摸形談を猶依然に、「甚麼を驚く？ 敵を斃すは我黨の本領、お主も蔭で其の恩情……でもお前、あの殿様は御主人様じや。其の恩を言ふ一家も敵、必死の敵！ 縱し其れは如何に措くも、お主が師正雪も同じく天下の主といふ、其人に弓引うで無き聲。」「いや違ふ。師匠様は浪人、誰人からも麥一粒貰うては居やしやらぬ。江戸ぢやらうが紀州ぢやらうが、尾張でも水戸でも我心に合うたは味方、其胸の協はぬは敵、其を擊うと斃さうと只其の思はしやる隨のこと、お前は違ふ、今日でこそあれ昨日までは紀伊國に六千石の御家老衆、諸事は措て置き二つ無い其の一命すら殿へ上さしやれた人では無い賊。其れが其の假初の根みとか根に持て、重々の惡事、殿を苦しめ、人を泣かせ、剩さへ其の御恩に仇を果には手して報さうと巧計ましやる。其れでも武士？ 武士の意地とは其様なもの？ さ、兵庫どの、武士は潔い御恩といふを遺失まうても好い者賊。如何でござります。」

（百五十）

這の小魔洒落れたる小女郎、甚麼をか云ふと如くに、兵庫は其可怖しき眼を宮に注ぎつ、緩みたる帶を搭り直して、「宮、太夫を喚べ。」「遇うて如何さしやる？」「別離を告ぐる。」「何處へ去なしやる。」「何處でも可え、乃公が足の向く方へ行く。」宮が目には忽地黯然たる悲愁の色を露したりき。「兵庫どの先刻から告う〳〵として間の無いに、告ひ損ねたが、最う其の聞が何方へとも向けさしやれぬ。此家の四方は和歌山衆の捕吏といふが、寸隙なく取圍んだと見えますぞや。」「呀——甚麼、捕吏？」事の意外に驚愕きし彼は、一回は彼女が調謔かとも思へるが、又其の此家なる宵よりの體、絲竹管絃も閉えずして、人の腰も居坐らぬ！ 扨は然るか？と鑑ふれば俄に胸の躁がれて覺えずして狼狽たり。從前の沈着めたる態度をも失なて、既や其座にも堪らで見ゆるを、宮は制して「これ然う周章て……、兵庫の御名が惜うない歟。牧野兵庫、徒に事を傷損ずなぢや。」「むゝ、如何にもぢや、が兵庫此處は是非殺脱けたい。今闇々と果たら無い。方便は無いか、宮。方便は？」宮が面色は、愈濕りて、今か雨らむとする山の如し。「未だお前は執迷うてござらしやる。苟にも生命を惜むなど、唾にも吐かれまい其の御口で然う言はしやる、蓋たは今の其の紀州の殿も、太夫への未練ぢやろ。愚かぢや〳〵、恩は仇も此場になつては要らぬ穿議。人はたゞ名こそ惜しけれ、其名も、最期の、目下といふ其の刻下の名が一致大事ぢや。悪い事は言ひま

せぬ、斷念らしやれ。」當道の大善智識が一偈にも劣るまじき此一句も、猶其の口嚼ぎ、息急みて、其心神の靡下に在らぬ彼が耳底には熟う入らざりき。「其れは協らぬ。如何にも其の紀州の人、其を一太刀恨まうまでは兵庫生命はいつかな棄てぬ。釋迦が說法でも此事は罷念さぬ。況てお主等が……唯兵庫、此の太刀の切たか切れぬか熟う視置いて後日に由井殿が耳に入れい。なんの和歌山の——然りとては誰か向うたか？」流石に彼なりき、思ひ切ては中々、腰なりし二尺八寸するりと拔て、すはり〳〵と鬢の毛に當て、燭火に照ざして其の燒刄を檢る。陰々たる殺氣は座に充塞たれども人は黙りて其脣を緊結びて、吐く息の外は物語もなき一室の內。降しきる宵よりの雨は此時や〻小歇となりて、軒の點滴の間遠に落つる音、彼の小庭を隔てたる小座敷の話の文に、句讀の點を批つやうなりき。

默過少時。彼の耳は不圖此聲に傾きぬ。「あの聲は？」げにも彼にも記憶あるべし、其聲は吉見のにて、彼は今、我兒の太夫に、物の利害を云ひ聞かす處なり。彼の力强く幅ある聲——其の剛健なる聲音は、此の闇夜の、折梢なる寂寥を透して、手に取る如く其言語を此座に齎りぬ。

「な、聞えたか。其方が甚麼と辯ふとも彼の兵庫は右の遁されぬ罪人。それは固より竊盜の放火のと武士に有るまじき卑污しい所行したとは無けれども、名にし負ふ反逆といふ、主の御軀をも危ぶめうとした大罪人ぢや。な但し其方が其心……彼を本夫といふ其の料見では、到底が父の己が手引しに彼の者捕拿へさせようとは云ふまい。又た己も其事を望まぬ。想へば此れも何かの宿世ぢや、其方に本夫なりや己にも壻ぢや。壻舅の情誼。それを公の私にして、己も踏込での情無い目をば見すまい。が右にいふ彼をば一足も戶外へは出させぬ。出さば早や所司代ぢや。紀州の彼を和歌山の己が向うて、其れを所司代に捕拿へさせには、吉見喜太郎一つの腹を三[illegible]に切ても追附かぬ。な、それで其の其方は今、予が好意を彼に傳達て——切腹させい。腐つても牧野兵庫、恁ら云はば欣んで腹を切りやらう。萬一それ斯う云つても引澁らば早や是非が無い、其時は武士としては遇はれぬ。其方も其の一門の瀨戶ぢやぞ、大事の本夫を武士にする歟、非人にする歟。死後に憂名を流さす歟、然も無い歟、分別は今の程ぢやぞ。此れが脫げ得るものならばぢやが、其れが協はぬ、此家の四方二町は予が手して取り圍む。其外に所司代の手、其又た外方が町奉行の手、伏見にも淀八幡にも手當は十分ぢや。切死なりや街可ぢやが、雜人の棒づくめに捕へられて可惜ら武士に繩目の辱、拷問の責苦にも遇はす、壻とも想へば己も最傷しい。其れよりも見事の切腹——然ら僞せたいが喃。」これに續きて聞ゆるは、哀れなる太夫が嗚咽ぶ聲なり。

（百五十一）

兵庫は拔いたる太刀の柄を膝頭に突立て〻、思案に昏れしが如くなり。可憫、可憐、既に檻中の獸たる彼が、目下の分別は扨て什麼？　切破りても脫れむと思ふ其の前路は、疾や彼等に塞がれたるに、又た喜太郎が云ふ如く、一歩を過錯たば繩目の辱なり、然も其の汚辱を受けたる以上は、想ふにさへも可怖しき彼の拷問といふ獄吏が鞭撻の下に蹐跼ざるべからずして、恁くて[illegible]苦しみの生命を翫弄ばれたる其果は、河磧にての磔刑なり。敢なや彼の三四郞が血泥、慘形を我が此後の實形にして、××の銹槍に刎はれし亡骸を無緣の墓穴に瘞めらる〻歟。縱し其の死後は甚麼とあらむも、生前の侮辱、苦痛、是は竟に忍ぶべからず、其の恥辱を拯ひ、苦痛を[illegible]はむといふ彼れ喜太郎は果して我に翁壻の[illegible]を作する歟、然るにても不思議なりける

宿世と謂はゞ、我と太夫、太夫と彼とが間柄かな。敵同士の夫妻、血をもて終始すべき父子、抑も斯くまでに無情を目の前に見する天道は、果然人の圓滿なる幸福といふを嫉む歟。將た從前の予が行爲を罰して其の餘殃を彼等にまでも授く歟。但しは信夫が其母に盡せる孝心を賞めて、係る場合もこ前途の好運といふをも誘ふ歟。想ふに我が此首一つをば、和歌山なる人は千金に換へても見たきなるべし。其の見たき心を利しこ、我は沽らむ哉。既に江戸の白洲にてと思へるも時後れたり、と有りこ他の金銀を私し、有るまじき色に溺れて、彼の大事を餘所にしたる身の、汚目々々とは再び正雪にも合ひ難たし。兎ても角にも棄つべき身とならば、我は信夫が爲に沽らむ。彼女が其の切なる好意は、日來もぞあれ、今とても其父が手引といふを拒否ある如きにても知らる。瓊瑤とやらむ、木桃とやらむ、彼女の至情に酬ゆるは我が此の首一つなり、此首一つを彼女に與へて其の恩賞を彼女に獲させむ、係くせば彼の喜太郎が隱ながらに我を庇護へる其の厚志にも自然相報ゆるに當るべきをや。我は信夫の爲に死なむ！「宮！」「あい。」と應ふる際も彼女は此とも油斷せざりき、間合を計りて、「聞かしやれたかえ？」「むゝ聞いた。甚麼とか思ふか？」「お前は先つ！ 何う思はしやる？」「道理の據にも思ふ。」「據にもおや無い、今の御説は一々御身の爲め、増男とある其の親實ぢや。ほんに〳〵其の棒づくめ、階子づくめ、袖搦刺又で捩られて、引据ゑられ、犬畜物の犬見るやうに其頭に繩附けて引立られては男ごの身として何と見てをられうかや。腹切れと太夫さんして勸めらるゝ、是れは至極ぢや。」「予も然は思ふ。就ては其方に頼みがある。」「え、爰は見事腹切らしやるかえ？ 其の覺悟、天晴となされたかえ？あ・お前も・・兵庫さま！」心は猛きも女子なりけり、彼女は今死すべきといふ其人の、心を善道に囘向したることの嬉さか、將た其永訣の悲しさか、兄の惡因果が當時を追懷るか、其恩を恩とせずして報りて仇もて報ゆる如きを恨めるか、其膝に縋り着きてよゝと泣けり。「泣くは未練ぢや。たゞ其のお主に報う事は、由井殿への遺言、兵庫、是非ない羽目に陷ちたと、今一つは、予が死首を信夫へ取らす。な、其の太夫と喜太郎へ云はうには、牧野兵庫、百萬騎の大敵に圍まれたりとも汚目々々と腹切る士で無い、死人は山を築て見せう其時は確に覺えがある。が、其れを働かさず、人手る手して自己が腹切つること、只彼女が我等に盡す好意に愛でて其の前途を好かれかしと思ふが所以。されば大敵の兵庫を討たは信夫が功、御家の人數も損ぜずて本意遂られたは道が手柄、其邊の穿議篤とありて其の恩賞は必ず彼女に遣はされい、と斯う云うて吳れ。嗟、念へば夢幻！ いでさらば出離生死の大道に邪魔碍道の入ぬうち！」斷念ては潔よき紀州育の牧野兵庫、熊野の御山の深雪と見る白き肌膚を押袒ぎて、無手と座を占め、拔き設けたる太刀の切尖ずばと疊に突立てゝ、鬢よりしていと徐に撫で下す、と看る時彼は突如嘲笑るが如き聲せり。「和歌山の殿。兵庫、死出とかにて待ち申さうぞ、やア宮、其太刀にて介錯を！」

（百五十二）

床なる香爐の埋火の灰かきおこして有合ふ留木をしづかに燻らせつ、衣桁の白無垢とり卸して其人の座に敷せつ、後にも恥かしかるまじき最期の準備心濟たゞしき中にも遺失なくして、今は涙をも搔拂ひつ屹然となれる宮、「心得ました。さ、稱名徐かになされて……」「應、何から何までぢや。然らば頼むぞ！」宮が背向に、南無と唱ふる其聲を聞棄てゝ哀れ兵庫は、其切尖を、其の弓手の脇腹一寸が程に突入れたり。

歯を切りてきり／＼と引廻さむとする其の刹那——彼方の小座敷にて、「あゝ道よう——」狼狽たる逆聲さへ雜ざるは母の聲なり。「失敗したり。自害せでもを！」遺恨の腹を斷つ如きは喜太郎なり。驚きたる宮は、太刀執たる手を捺へて其方を覗れば、手代も疾く間斷にこそ、「宮、太、太夫は？」彼女は涙の顏を擦れり、「お前と一所と見えまする——」「無念だや、宮！　己、己は犬死となつたかやい！！」彼は引廻さむとする其手を停め、傷口を雙手に押へて蹌々と起上らむとす。さしもの宮も此體には慌てに忙てぬ、「これ！　あゝ何の犬死、何の其れが犬死ぢやらう。今死損られては其れが却つて犬死ぢや。迷はずに　コレ迷はしやらいで！」「迷ふで無い、道をも殺し、己をも死す、恨めしいは賊と喜太郎。責て其喜太郎に一太刀恨んで。宮、お主も……お主も……」一聲咽れたる聲悽愴く、無念と怨れど太夫の重傷ははや進退の自由とも得せしめずして、彼は枕の居に攫と倒れつ、切に宮の援助を乞へり。其言の無道理なる、其軀の血迷へる、其の苦悶、其顛倒、寧ろ最期の一太刀といふ、其れが慈悲の終焉なるべく、機嫌を斷つ痛みの刹那、と思へども亦た流石に、此儘に顛沛を走らせて後生の熟所を得せしめざらむも未だ惜しく、永劫き怨恨を人の身に牽せむも悲しと、逐つ逐つの宮は、刀の嘗毫にも眼の暮れて再び泣けり。一轉する彼が氣象は此時に及びても猶一途なりき、「此宮、喜太郎を喚べ。此首、喜太郎で無くては渡さぬ。喜太郎！　吉見喜太郎！」聲に應じて次なる紙襖は披けたり、「兵庫、吉見喜太郎參つたぞ。御分は好も斷念たな、斯くてこそ女が本意も貫け、父殿が御意の旨に立つるは。」云ひつゝ出づる其人の姿は昏眩める眼にはや見えぬが、涙に濕める其れが聲をば纔に聞き覚てや、彼は這寄らむ、寄らむと焦る。其傷口より流るゝ鮮血は瀧をなせり。頭に無念の胸を鼓動して、「み、宮——み、や。」喜太郎は懼れず、其身傍に突と倚りて、「其心なればこそぢやぞ。こりや兵庫。喜太郎を仇なんどゝは門違の沙汰。況て殿を恨み申すは狂人の……」脣も手指も戰く斷末間にも、耳は猶微にや動擬く、彼は否と其首を掉る如きを、「いゝや熟う聽け。殿は汝に最初より御別心をば持せられぬぞ。汝が殿を恨み申すは彼れ者の讒訴を信けての所以。されば汝こそ汝が松城を出でたる後も、道人の御沙汰にも及ばれず、汝が日安を公儀に出だして投後にこそ召捕の餘儀となつたるは。それにも猶御不審の顏へられて、假令召捕るとも手荒うすな、國元へ差下さば相當の仕置も爲でならむに、成るべくは其の場所にて腹を切らせよ、さらば予が爲、彼にも仇ぞ、と斯うまでの御意あつたぞ。されば其意を女にも云ひ、お主に切腹をさせうとしたに。こりや女はな、お主に口頭にては勸められぬ、死首見せて其心を勵まして斯う云うてな——自害のして三途で待ちをると斯う云うてな——果てたはや！　既に殿は其御意我等も酬うはせぬ心底、女は況てお主に心中を立て徹す。や、こりや兵庫、何だ些し云ふべき事あるぞ。こりや兵庫！——これい喃、兵庫どの、今暫時……」斷つ續はる男女二人は、牧野と呼び、兵庫と喚ぶも、彼の耳は既やこれを解れぬなりき、其口は言へぬなりき、彼は果して其の最期なる、殿の御意、喜太郎が心底、信夫が生死只同一と誓へる其言の本を今うしたる始終を聞き得しか否は知らざるも、可惜しかりし眼は瞑ち、苦しき氣なりし呼吸は斂りて、其軀を宮の膝に凭せ、其れに糺しあられし合掌の手を依然に、點頭く如くにして僵れたりけり。

（百五十三）

喜州屋の奥の間には、彼の二人の亡骸を同時にして牀頭に揃ひつゝ、香花をば纔に手向たれ

ども、喜太郎も、宮も、猶ほ心の闇の行方なう、夢路を辿るらむやうに覺えて、只管を踏み、其音頭を使れたるのみ、泥て寄る邊も知らで、唯手の裏の物を奪ひ去れたらむ如き心地せる時に、姿をや、聲の限りを絞り、變り果てたる女の顔に己が頬を押當てゝ、道よと叫ぶ。其の哀れさを添へむとか、此時また雨の降り出でゝ、折柄なる夜半の鐘も悲しう響くめり。其の方には喜太郎が手の捕吏十餘人、これも流石にうち濕りて、額を交へたる十手の總さへ異しき露に濡ひたる、と有る時、店の格子を蹴破る如くに引拔けて、破鐘の如き聲は起れり。牧野は此家にか、兵庫はッ！」組子原は驚きたり、同一其頭を擡げて、甚麼者かと瞻仰れば、もとより其足場を故意に暗うせる、闇は黒白なし熟くは覗えれど、雲突くばかりの大漢の六尺に餘れる大小門にしたるなりき。「御事らに問はう。此家に信夫たらいふ太夫は在るかつ。」と云ふ御主は甚麼人ぢや？」短燈といふ忍び提灯、此時一度に取上げて此武士を照らしたる。其體に彼は一歩を退却きて身構へせり。「や、和主らは？」御身は誰人？其の太夫を問ふは。」用事ある者。」其用事は？」彼は益其不審の眼を圓くして、一斯う仔細に問ふ、御身らは公儀衆、か？」「いや其れは名告いで可し、只御身が性名と某此の意趣を申されよ」一公儀衆ならぬ者が此際へ来て、然様に人を吟味する、お主らこそおさぞ頭人出せ」組下等ははや其人と悟れり、其の姓名は未だ知らざるも兼て聞く彼の平雪が黨類、二條の寺町か、若くば今出川の館にをる兵庫を警衛の者ならむ、かゝる奴の後詰も有るべし、自然は其の用意せよとは先刻にも吉見殿より懇ろに申含められぬ、縦し捕拿よとの下知は無きも、此奴も拐爪かば甚麼のか種子は得がるべし、殊には然りともと想へる兵庫の手も無く自滅して、手持不沙汰の本意なくも思ふ折柄、あはれ好い獲物、いでやといふ壯佼輩は進に目を相喚して、其中の一人は故意に縢手しつ進み出たり。「これは此方近ごろの出損ねぢや、貴と我等は西國の或る家の家士、家中の人討て立退いたる者を狙けて倚様に當所に網を張りをる。固より貴所には然る嫌疑は無し、頭人も今大門口へ去に申した。但し其の兵庫とやらむ信夫とやらむ云ふ太夫は、此家に在るならも在ぜぬが、御用とあらば奥の間へ案内申そ。いざ斯う。」といふ先に立つ風は餘義も無けなり。彼も今論は好まぬ、既や打解けて後に跟きつゝ、中の間の暖簾を潜らむとする僅少の間隙を、覺たりとか、前後齊一く、「曳！捕た！」組めりとは見えしが何とかは投げられたる、一番手なる二人は一間餘り蹴仆されて、一人は前なる柱に、一人は上框に、鼻と膝とを撲搭かれて起も上り得ず蠢動いたりき。「すは曲者！」ばら／＼と蒐るを、彼は其の大の眼に撲地と睨めたり。「甚麼が曲者！汝らこそ！」眼の光輝は、彼の短燈の灼耀に映じて、百錬の鏡ともいふらむ如くなり。「やア汝は兵庫が黨、加勢か、助太刀か、知らぬか奴めは早や此方が手に落ちて自滅しをつた、其の死骸を惜しいとも來たか。會ひたくば其腕を曲げい、一目は見せうは。」前後を圍繞てわや／＼と階けども、今の技倆に流石は怖れて、一番手として我組まむと云ふ者も無かりけり。其喘めきを聞て、彼の吐く息は炎焰と見えたり。「えい汝らが、あの馬鹿者を！ちえ、無念。然るべい事も有らうかと…」彼は遣に其の奥間を目懸けてのし／＼と歩みたり、組子原は今更に吉見が身上を危惧みて、紙襖を叩き、障子を鳴らして、吶と注進(？)の鯨波を揚げたりき。「喋がしい、何人のある家に。こりゃ其處な奴いづれ、御通りやる、我等は頭人吉見喜太郎ぢや。」惡く直路に立寒がられて、前なる漢も暫時は其歩みを停めぬ。

るも遅し、口喰に死首は弗と斷れて、遠く〻彼は其の小脇に掻込れき。あらつ　と叫ぶ老婆が聲に先ちて、血相変たる喜太郎が形は既に疾く鑽き入りぬ。「汝、待て！」

（百五十五）

彼も前波も、同じく其聲を聞げたり。「喜太郎、好う失せた。千萬要らぬ。主に仇たる汝が素首も此首と一つに貰ふべい。」喜太郎ははや問答も無益と見たり、無益なるに非ずして實は其言を得ぬなりき、毒喉は眼までなる此の家司といふ奴を此場に討て、後日の口を滅し、倘し敵はずば當座の喧嘩に執做して、一分の生命を棄つる迄よと豫ての覺悟をこゝに決着ぬ。此方も亦た入用の首、汝に渡いては喜太郎一分が「一道理ぢや、主の首なりや汝も欲しからう。此相立たぬ。欲しくば腕で取れ。此首も一所に與れうは！」吉見は我が首頸を叩けり。「好覺悟。其の頭！」拔かれたる前波が刀は、喜太郎が横鬢かけて、其鋭利き刃鐵の味を現はさむとする石火の晃きに先ちて、やつと云ふ懸聲！一根九寸の短刀は紫電の空を駛る如くに飛來りて、彼が向脛にずばと立てり。急所の重傷に思はず其刀を取落して、驚きつゝ回顧る彼が耳元に、「首盗人！」「呀。」「大騙賊――兄者の名を詐稱る大盗人。其處退くな！」叫ぶまゝに躍り出づるは、什麼ならむ□□、かあしき猛者かと思ひの外なる、纎も可憐き少女なるに、前波は徒々惑けり。「稚女には什麼……？」「ヤア猛々しい盗人。こりや、汝はな〳〵、好うも好うも妾が兄さま少將殿の名を騙稱て、何の遺恨か大事の左門様の首を其やうに斷う切りやつた喃。汝こそ兄樣の御身に刃を當てた主に仇。其處一寸も退かすまい。先づ名を名告りや。」「なにと稚女は、あの孫八が妹、妹？」「おゝ、如何くな、前波の少將、孫八が妹いと、いきのぢや。」「えゝい知らぬこと……」「知らぬとて、汝、兄ごは此度京來ど死亡なりやれたに、其名を詐稱る……。」「京來彼が其方は何處からぢや、京か？江戸か？」彼は、其衣を咬裂て、腕なる傷を緊と結びつ、「む、江戸からぢや。」江戸よりと云ふに、今しもいゝきのと名告れる宮は、愈其の幕府の細作なることを信じて、此とも油斷せず、拔いて棄てたる自己が短刀を手快く拾ひて暗に其足場を計る、眼の動作の凡庸ならぬを瞥て、彼は呵々と笑へり、「きのどのか、何さまお主は……。いや、其の前波が妹とあらば怪しうも思ふな。我等も自ら然る方の者、兄ごの名を借りたも、兵庫死首を手に懸けたも、何も物に祟らうでない、況て遺恨か、只顧の好意ぢや、喃……扨て其の此の始末をお主如何する。差向つたる主の仇、喜太郎を討たでは置くまいが？」「勿論ぢや。主の仇は確に討つ。討つは討つが、其仇は今は兩個。」「其の一人は？」「然ういふ御身ぢや。何と隙うと死首掻いた意趣も云はず、名告れといふ其名も名らず、怪しう思ふなとて、好意ぢやとて誰が其れを眞實と信けう。其の意趣の次第によつては吉見か、御身か、孰方が先か？」彼女は躰を摺つくる許りに倚せたり。「お主！あ、喃に、後悔すな！」「なに後悔せう、後悔せぬ僞に斷う念に念を入る、ぢや。」彼女は只、此の奇怪なる漢子の身元と、姓名とを知らむとせり。其の知らむとする漢子といふは別人ならぬ、彼の丸橋忠彌なりき。前にも云ふ、忠彌は江戸の大將として箱根より西方に到らず、宮は又た駿河より西方を蹤めども江戸へは行かず、これに由りて此兩男女、未だ相會するの期を得ずして、惜く口惜しき物の齟齬に、互に心を懊惱るなりき。なれども忠彌は、猶孫八が妹として、宮を我が荷擔人の一個として見ぬ。宮に有らず、只管彼を敵と視たり、敵と視られし忠彌が所爲は、亦た一々に其の敵たるを證據立てゝ、今出川の館を捜りては家司の前波が名を

騙り、兵庫が死首を奪ひては紀州が專横を所司代に訴へ、我に害を加へては、其身が當座の難を遁るゝ、此は細作の本色なる、怪しむべき事ならねど、憎むべき詐とをもて其身の周圍を包めるやうにも見られつ、最初に我黨？と想へる眼の、其力足らざりしを今更に悔い、且つ恨める程なりき。

（百五十六）

我も由井が道場にて古く其面を識れる難波孫八、其者が妹のきみといふに我が丸橋忠彌なることを告ぐる、甚事かあらむ。されども此處にて名告れるは彼に嫌疑立てをる遠藤喜太郎を初め、組子原が、一人ともあれ逃歸りて主の大納言其人に云々と告むことの可恐きなり。彼の、かゝる事には自ら既落無しと誇れる正雪も、此回の訴状につきては總て陰の武者として動作くなり。これは我も同意にて、去年の秋、彼が彼殿に松坂にて訣別し折も、挨拶好うして、重ねてとの詞さへのこして袂を分ちたりと聞く、其の合體振よりするも總く擧動にて協はぬ事にして、左右は今は、紀州か、紀淨か、二道懸けたる其の間心を采るといふ人と聞かしき經路なるに、其の正雪が隨一の黨たる我れが彼れ、兵庫の首を拜ち、其の死首をも奪ひて、紀州の手の者に敵對へりと云はゞ、拜も無し、百日の彼が苦心も一朝にして水泡と消失せむ。それも敢なし、されば名告れず、此處にては丸橋といかで名告らむ。とは云へ、荷にも我が顏を覗まれたる其友が、亡骸の恥を、透囲まで曝させむとするを見ては默止れず、彼が家門の名を惜りてと思へるが、知らざる女の口よりして其は破れたり。されど其の敗れしも惜しうはなし。彼女にても誰にても只彼が死恥を隱すとならば其にしても可し。但し逃されぬは此の喜太郎なり、此の處女にして此者を討ずとならば、是非なし、我が手を下してもと忠彌は其の左右の肩までたくし上げ、傍の股立搔取らむとする其顏を見るより宮、一逃るか、お主、逃うと て…。貴官に其名を名告りや。一可厭いは。味方葬すな一味方？ え味方！ お主は大方、江戸からの細作であらうがや？一忠彌は、彼女が執念く纏絆れる其の意味を初めて知り得たり。なれど物も物なり、人も人なり、其の江戸よりの細作、間諜、と見誤まられたりとは、と彼は實に啞然たりき。一迎ならぬは的切り然様なぢやろ？ 江戸からは僅者どのがすか 其後どの人か、東角は當處に所司代とも引合うて我々が様子を搜り、家には紀州が行事を窺ふ曲者に相違ない。さ何とおぢや。一言ふ尾に接き喜太郎も詰り寄れり、一難波が妹、善う見された。江戸からの細作とは我等が目にも確に見ゆる。細作なりや細作と白へ。公儀のお人、紀伊國の士惡しうは當るまい。然らずば盜賊、盜賊として繩目に繋けう。一何の一轍、甚麼と媒るべき騙賊盜賊、繩目に繋けむと罵られて忠彌は傚に急立るが、然とては念へば亦た、我も白ら其罪は犯したり。勝負は時の運、這奴らが手に討たるべうは思はぬも、萬一討れば、我は此の兵庫が身の上より淺ましき盜賊の汚名を其死骸に附せらるべし、此は難義かな、と思へばはや彼は些しく其の勇氣の挫みぬ。と見て取る兩個は、一公儀衆か？ 盜賊か？一遁るを睨つけて、一公儀衆なりや何樣とする？一一紀州へ作るゝ。一兵庫死骸は？一宮は首肯て、一妾が引取る。一其の仇討は？」一吉見どのに頼まれた．和歌山へ歸りてまで延引て吳れいと。」

忠彌は甚麼と案ぜしやらむ、右に左に彼等が顏色を熟視つ、一むゝ、其れも可からう。乃公が公儀衆も面白からう。紀州へ行て大納言殿にも會はう、然らば喜太郎、我等を伴れい。」

（百五十七）

此時、江戸市谷加賀屋敷の家にありて、日安

の一條に弁走油断なかりし正雪は、京都の騒動かゝるべしとは哀れ夢にも知らざりけり。彼は兵庫を迎へん爲に丸橋を出だし遣りて後、其の歸着の日を待つより外他事無かりき。日に日に品川に人を出して我が手許の帆影の見ゆるを伺はす、當時の心中實に次の如くなり、なり、兎角にこゝにて唯一の杖柱と頼むべきは彼の兵庫なり、其者が來らば衆の一議の彼が逆氣を更に指嗾して彼の駈込の訴訟といふを爲すべきが。其の時機は又た我が弟子なる奥村八郎右衛門、七郎右衛門兄弟の者に一任すべし、彼等はかの伊豆殿（松平伊豆守當時の老中）が公用人奥村權之丞が弟共にて、從前とても其等によりて殿中の評議の樣を探り得つるが、猶は今後も其れが口に就き、時期の恰も好しきに投じて内外より相應せば、彼れ兵庫をしてあの帶刀の老爺と對決せしめむも難からじ、況んや彼の八郎右七郎右衛門より兄の奥村へ、紀伊國御謀叛との事は内々したゝかに吹込を置きつるをや、語ふに伊豆殿も其人より聽取れて、其胸には疑と極印を打たれてや有るならむ、只今日まで幕中の吟味の執行かざるは、本人たる兵庫の出でざる證據なき片言の訴訟なると、今一つは、彼の帶刀が其の老功風を切りに吹かせて若手の執政らを叩き廻はす、此の一個條のみといふ。然る尋へ彼の兵庫の出現れて、有無虚實思ひの儘に云ひもて爭らば、いかな長久手の先陣も大阪の後殿も其威を失ひて、三十七ケ條、其うちの何者か一條は其の返答に行塞らむといふことの有るべきや。然らば其事にて彼の老爺は自滅、殿は遠流、和歌山五十五萬石は減封たるべし。あはれ其れ、それが我が大事の時機到來の其日なり。其の沙汰を受けて彼の殿、是非なき謀叛とあるも可し、其の御腹を召されし後に家中の從輩の死狂ひに、亂暴なんど爲むも可し、或は江戸に屋敷に火を放けて、彼奴らが切て出つるほど、我が爲には頗る妙ならね。兎角に其事一つあらば畿内、東海、南海の三路、別しては江戸の混雑といふ、喉頭を煎るが如くならむを、其虚に乘りて江戸幕府、名古屋、京、大阪、堺より和歌山と應けて一手段をば、前途の成敗は知らず、一旦は我が宿望も想ふに大概は成就るべき與。かゝれば是又、我が由井民部が名を末代に傳ふるには、あはれ時機は刻下といふ其の刹下なるを、と心切に苛立ちつ、又其手の達くばかんなる妄想の興に驅られて、只顯に其の手品の種なる兵庫の來るを今やと待つ。

折柄なりき。京よりの急飛脚は來りて書狀を呈せり、見れば丸橋が書通なり、忙しく封おし折きて讀み下せば、可憐、可憫、熊谷松田前波等が横死、兵庫が墮落、用金費消の事までをも委細に書けるなり、さしもの正雪も、其事の案外に洪水、寧ろ奇禍に手を嚙れし如きに呆れて、肚の裏に、畜生――外道――と罵ること數回なりしかども詮も無きなり、たゞ丸橋が兵庫を伴ひて今夜に京を發ち、明日の正午に大阪を出船して歸府すべしとある其日數を僂指ふれば、着船の今日か明日なるに稍心を復しつ、品川に過繼の人を出だして、着とも云はば正雪自身出迎へに向ふべしなど其の支度も取り取りなる端へ、特に火急の要用とある時限の飛脚又た來たれり、加之其の書狀の主は忠彌にあらぬ牛町なる肝者の甲乙なるに、見ぬ先より先づ胸を撃たれし正雪、扨は急病か、兎角は丸橋が兵庫が變事、と讀めば敢なや、其の變事も這は什麼、何たる珍事ぞ、和歌山の家士吉見某といふ者に遮られて、島原の驛にて兵庫は自滅し、其を追うて同じ驛に駈けつける忠彌も同じく彼の吉見に取籠られて和歌山へと拘れぬ、兵庫亡骸は其家より今出川の館へと送り越せしが、其を御覽ずるより一位の卿は悶絕して其儘に命終せられたり、兎角は闇夜に燈を失へるが如

き周章ゝ、急ぎ然るべき仁一人を差遣はされて、とある狼狽たる時は其の書面の文字の亂次なるにても知られぬ。けにも彼等は闇夜に其燈を失へる如き心地も爲なるべし、山は頽るとも海は湧くとも毛髪ほどだも此膽をば動搖さじと念へる我すら、途方の闇に昏るゝやう覺ゆるぞや、此上の過錯せさせぬ爲め、半兵衛は疾う行きて寺町に殘れる者も、今出川の館なるをも引纏めよ、予は今は何事は措きても忠彌を救はでは、と夜の出迎への供揃を彼の旅行にして、正雪は和歌山へと其夜發途ちぬ。

（百五十八）

這回ほどなる不愉快の道中は、あはれ彼は身に覺えぬなるべし。其は從前とても彼が旅行は、金銀持たる隱居の伊勢參する如き心長閑なるものにてはあらざりき、夜の刹那に江戸を發足て、夜曉ぬ前に川崎を過ぎ、神奈川に書餉して提灯點ての小田原入などは、珍らしからぬ例なりき。なれども其等は、皆前路に面白き花の山あるを恃みてなり、前途の階段を踏む心勇めの旅行なり。今や然らず。胸の機關は全て外にて、動きへ通はれぬ灰色の不思議なるものは身に降下りぬ、噫、月待つ夜半の風雨、然も其の風雨は暴れて我が花のある稔實の秋を奪去さむとす、其急に翅かむとする彼が心事は想象るさへ憫然なるもの有るなり。雖然彼れ正雪が堅忍の本性は、此際に臨みても些も其の集雜しき態を見さざりき、彼は忠彌が身上を想ひては其身に羽翼も欲しきならむ、然るを彼は、出立をこそ急ぎたれ、道中をば悠々と打たせたり。曉寅刻に市谷なる家を出でゝ、此日は行程六里にして川崎の宿に泊りぬ、宵には酒宴少し僞てやがて臥床に入りたるが、其の鼾息は折から吹く濱風より高かりき。此風は曉方より雨を誘ひぬ、雨は漸次に其の降を倍して、鶴見の浦の横頻吹には笠も桐油も堪り敢ず、神奈川の臺に着ける頃には行く足許も見え分ずして、此雨にては馬入、酒匂川も止らむといふ。此時六郷の水嵩は増して五合との注進ありき。

今夜の宿は平塚と豫ては定めしも、六郷の水量五合とあらば馬入も蓋たは止りたるべし、さらば先づ戸塚なりとも藤澤なりと行着かむ所まで行け、と云ひて道を急がず、直落着きつゝ此宿を出立てるが、果して藤澤の問屋場には川越の荷山をなして、馬入は今日未刻の川止と役人には日々に叫けり、されども雨は歇さりき、此夜より翌日までも降り徹して、辛くに三日目にして霽れたるが、猶川水は減ぜずして、空しく此驛に更に一日逗留せり。

卯月の末の日暖かに照長き一日を、霖雨の後の旅人には、逃れて噺客拭ふが如き下に兀然として、川明の注進の未だ來らぬを所在も無う待つ者、空に環を書く、蔵の事も忘々しくて、煎豆の茶に空腹の要るさへも恨めしく、況て急用を抱へられたる師匠の機嫌、さこそは不印の眼色さへ変りておはすかと窺へば、こは如何、南向なる日昇の窓に總に坐して、見臺を控へたる、書見に餘念も無き態なり。

といふ端に日も稍暮れぬ。發足は明日かと各々も、京のやらむ、大阪のやらむ、甚窮に見飽きたる夢の續足を更に見むとや、臥衾敷き設くる折こそあれ、驛内忽地響といふ騷動して、川は明きたり、今暁用物の一番が渡りしぞ、後れな、疾やと驚、長持を我先きに擔ぎ出す、宿の亭主は飛で來りて、「これから御發足にならしやれますか？」「勿論ぢや。」と供頭の一人は云ひ棄てゝ、正雪の前に出で、「大磯まで一ト御進か、と指圖を待てば、「今川は危険い、況て此際ぢや、發足は明朝にせい。」燈火を搔き立てゝ、道でもせぬ其の書見の靜々然たるに徒等は呆れて、穿き懸けたる草鞋の紐を又た解き、擡げ出さむとせる乗馬の轡を再び棄てゝ、只往來の立

薫ぐを羨ましげに眺めたる、其の群集より、紀伊大納言殿家來由井民部之介殿宿と打てる標札を望みて、門の内につか／＼と入り來る處女あり。彼女は質素な姿に、一本柄杓を手にしたり。「もし此と頼みましよ。民部さま御供の衆がござるなら、鶴様御知人の宮といふ女ぢやとて取次で下され。」供頭といふは例の鵜野なり、宮と見るより、「や、見えたか宮、何方からぢや。」「おら、西方からぢや。師匠様はや？」「ござらしやる。川北に其方も逢うたか。」一も、氣が迫いて、萬一其方へもござらしやるかと宿々も氣を注けて見たが、果然ござつた。先は嬉しや。」彼女は我が觀測の中れるを誇らし氣に、草鞋手早く遠く脱棄てゝ、踵につきたる砂、腰より拔き取る袋手拭の端にて二つ三つ掃きつ、遠慮も無げに上へと昇る、旅馴れたる動作と、其の快活なる擧止と、日焦の褻さへ目立たぬ眉目の優れて麗きとは、其邊に集へる供を名とせる者共の眼をすら驚かしぬ。

（百五十九）

「宮か、好う見えた。其方が身上は大抵予も案じた事でない。まゝ近う寄れ。兎角は好う見えた。」正雪は燈火も膝も一所に其方へ押向けて、我が愛女の旅歸りをも見たらむ如くに、其の息氣の面を眺めつ、只嬉しく心嬉しげにほく／＼と微笑めり、宮も久濶なる我が父親の膝下にも這ひ寄れるが如き心地、覺えず其眼を瞬り紅めて、少時は彼が身體の安否を訊ふより他無かりき。色好まぬ彼が目にも、世ならず麗美しう見ゆる彼女が面と、肉親とても及ばざるべき親實の籠れる其人が懇話とは、彼が此の四五日來なる滿意の悶邪苦邪をも、忘了しめぬ。彼は先づ膝元の菓子簞笥より菓子を取り出で、更に宇治茶の芳香好きを煎じつ、彼女に與へ、自身も喫みて、打寛ぎたる、去年の秋松坂にて別れし以來の事、其れよりも先づ當面なる彼女が今回の悠う慌忙しき下向の用向を問はむとせる、其間に先ちて彼女は却りて問ひたりき、「師匠様、今門外の標札で見ましたが、御前は彼の紀州様御家來に何時成らしやれたえ？」師は此間を有らずもがなとの面色して、其笑を些しく苦めぬ、「いや、其れは其の些と仔細ある事ぢや。眞は去年あの松坂での……」「あゝ彼の和歌山へ出向く折かえ？」其れはぢやがもう師匠様、紀州の殿様は此方の大望を疾く御承知で、御前が事をも散々に言はしやれましたぞ、其れが御前を其の御家來とは？」彼女が不審は、此方には猶不審なるなり、「散々に云うたとある、扨はお主は彼の大納言殿面前へも出たか？」「出ましたよ、五度も六度も。」「甚樣として出た？」「和歌山の城下、町上の觀音堂に寢てゐたを、彼所の町奉行吉見といふ人に見咎められて、安居の三四郎が妹といふを識認られて。」「え、吉見に……喜太郎にか？ 而て拘れたか、和歌山へ。」「あい、其の喜太郎どのゝ家に暫時は寄食てゐました。其折殿様が妾を召されて。」「な、甚麼と言はれた？ 正雪細作とも其方を責めたか？」「あい。」師なる人は益急けり、「白状たか？ お主。」睨殺さむばかりなる氣色を見するも、彼女が笑顏は變ぜざりき。「ほゝ何のい噺、責られたとて白狀るなんどの宮ではござんせぬ。彼方には散々物を言はせて妾は只聽たばかり……なれど妾は云はいでからが彼方では今云うた皆承知ぢや。殊には彼の兵庫どの事……」「おう其の兵庫、其れが仔細疾う語れ。」「未だ知らしやらぬ氣？」「いや一埒は書通で見た。金井をば疾う遣たが猶心許無いに予も品に寄り京都へも行うと思ふ。」宮は遽に手を拍れり、「危險い。今は火の中ぢや。」正雪は又た驚きたり、「火の中とは、其顏手は、紀州か、所司代か？」「甚麼の紀州！ 其の紀州も今江戸からは御不審の目を注けられてぢや、現に吉見どの、此程

捕へて和歌山へと伴て行なしやれたも江戸からの隱目付ぢや。今御前が紀伊國御家來とて其地へ往なれたりや鵜の目鷹の目、其の住處に狙け廻されて。」彼女が猶手を掉りつゝ眞面に語るが、何やらむ其事かとも心許なきに、「むゝ、其の隱目付といふ其奴、江戸からと確に白うた與？」「いや未だ其れは確には白ひませぬ。なれど其の人相、身長、言語、物の應對、今般の暴動まで妾が目にも蓋た其者とは。」「見ゆるといふ其の人相は？」「緋紅顏の鼻の高い、惣髮の、天狗見るやうな偉大な人。」「其の捕へられた其の場所は？」「島原の廓で兵庫の腹切て死なしやれた其場、然も其の死首を無慘に搔いて、初は兵庫どの家來ぢやとて彼の前波が名を騙稱り、後に其で無いが露顯れてから、種樣の言うて逃うとしました。」「やア扨は、お主其場に在たのぢや喃！」「在た段か、妾も手傳うて捕へさせたぢや。」「お主、其の吉見に手を借して?! ちえゝ無念！」「え！」正雪は此の宥恕すべからざる過失を犯しても猶平然たる處女の顏先を、撲曲むとして拳を握れる――其は纔に耐へ得たるも、忍ばむとして忍び切れざる憤怒の聲は其胸閣を衝破る如くに、「丸、丸橋忠彌ぢやはつ!!」

（百六十）

彼の曲者を丸橋と聞て、宮も一たびは喫驚きたりしが、又た濃束なげの眉を顰めて師の面を凝視りぬ、正雪が語氣は愈暴らかりき。「知らぬとあれば是非無いものゝ、然りとては汝が其目で其耳で、應對の言、人物の樣を視聽してから其者が其の江戸の細作か丸橋かといふ、其れ程の鑒別は付うずものを。關々と生擒して、加之自己が手傳うて予が片腕を捥ぐ。知らぬか予が此の道中も忠彌身を捨はう爲に是れより和歌山へと趣くぢやは。吁、沙彌が放た糞を長老が舐ぶる――さりとては心外ぢや。」其語氣の粗暴なき、愚癡も交れば、無理さへも搗加たる、平生の師とは非ぬやうなるに、宮は且つ疑惑ひ、且つ怪訝みて、悲しくも亦た腹立しくもありき。「其りや御前、何事云はしやります。妾が人相見か占者では無し、告へといふ名も名告いで、明ら目を剝いて狼藉する、其人が此方の大將分なと甚麼知りませう？ 殊には自個で何時の間にやら細作に落着て、自身と搦かれて去たしやれたも。お前の言はしやるのは皆無理ぢや。」我と自個して細作に落着たりとは、彼の耳に又た異樣の感を與へぬ。忠彌たる者抑如是き懷抱、彼は意地には不耐ぬ者、細作などいふ汚名の下に汚目々々と羈目の辱を受くまじき者、多勢に無勢、刀折れ勢窮りて、自殺の間隙も無く、組れて落ちて扨て後に擒められたりと云はゞ然も有らむも、我から降りて喜太郎連に拘れたりとは果して如何。唉、彼も亦た兵庫に等しき豫想しには似ぬ役鴨漢歟。とくた今更に人の惡まれぬ、我が目の違かぬ、寧ろ其目に欺惘かれたる如きを責むる彼が胸は、哀れ裂裂なむ許なり。」宮、扨は忠彌は、刀にも手は懸いで與？」其れで怒も今以て其の不審に思ふ。曾に聞えた彼の人が、最初の勢何處へかやらで、公儀衆か、首盗人か、公儀衆なりや惡しうは當るまい、盗人なりや羈目に懸けうと彼の喜太郎に成嚇されて、其儘ぐた／＼とならしやつた體、到底が彼れが武藝の達者といふ忠彌どのとは……」聞けば聞く程其力も折け膽も落ちぬ、從前なる背れていれて耐らぬ意の駒といふも、張りて／＼堪られぬ胸の弓といふも、哀れ今は弦の斷れ、脚の痿えて、纖々となれる樣にも彼は發たにき。抑我が此の苦心の道中、彼の夜中に慌忙しう江戸を發でたるを中途に憚いて、今は故意に其路次を急がぬ道中、心の逍くを其面に綽々たる餘地を視して、海道に間配れる紀州が細作の目を眩惑さむと籌る道中、かゝる大方

ならぬ配慮の道中も、只彼の忠孄其の者を術好く拵ひて此の希望を他日に達せむと思ふにあり、然るを其の本意たる忠孄にして知見くば、齋食なき法會に驅り出されたる和尚の勇みなきにも我心の似たるぞや。寧そは棄擲むか。屠腹を念はで生命を惜む、然る徒輩の頭顱を何程に揃へたりとも甚麼にかはせむ。さる奴の爲に心を焦刺て此の可愛き宮に無理と知る／＼悶懷を云ひつる、今の振舞、想へば我ながら慚羞しきぞとよ。」とは念ふも遣る方なき彼が遺恨は、中中に散ぜぬなりき。彼は天を仰ぎて大息せり。「無念ぢや、宮。人といふものは憑まれぬ。熊谷松田前波らが仲間討、是をこそ手柄と思うた兵庫が自滅、又た寛とも腹とも頼うだ丸橋が今の醜態。全般は恩も義理も無い。想へば無念ぢやよ。」些少くも同じ情の歎息に打萎るゝかと思ひの外なる宮は眞面目に、其膝をやゝ正しうせり。「師匠様、其の御言は本心かえ？」「本心とは？」師は太くも愕けるなり。「兵庫どのを賴むと言はしやる、其れが其の本心かえ？」「不思議を言ふ。賴めばこそぢや、あの松坂から扶け出いたぢや。」「其時の兵庫どのはな、或る者とかに讒言されて、殿様に棄られて、檢使も無い切腹をさせられうとするを氣毒とて救助さしやれた。其れは武士の義理、朋友の見繼、妾も好う合點ぢやが、其後の兵庫、御主の殿様の有る事無い事背付にして謀叛を起した彼の兵庫めを、御前は猶も、あの賴ましやれたかえ？」「聞くより正雪は扨はとの氣色、電光の如き眼睛を激勵かして、「其れで留めたは！ お主が先刻からの口、扨は殿に見らはれ、喜太郎と一所に、あの兵庫に自滅させた喃！」

（六十一）

宮は些しも錯愕かざりき。「あい。如何にも兵庫めは妾が手で自滅させました。恩こそあれ恨の無い彼人に恐ろ腹切らせたも外ならぬ御前の御爲ぢや。」誇り顏なる如き彼女が容態に、餘りに惘れて返辭も能らぬ師の面を處女は睨視つつ、「御前は苛う腹立たしてる氣な？ 妾は御前の御爲と想うたに。」「爲。 爲も何も有るか、有るかッ！」堪忍こふ袋の緒も斷れて、擲開る如くに罵らむとせる正雪は、同時に屹と意の注きて、今は全然の紀伊國方なる此の小女郎が態を熟と視めたり、宮は猶自信を枉げずして膝摺り寄せめ、「師匠様、何故に簡う腹を立たしやる？ 兵庫を討たが御心に協はぬかえ？ 惡い事したと云はしやるのかえ？」「むゝ、いや、其許には手柄であらうよ！」怨く一句に云ひ放ちて、冷然たる脣を緊鎖ぬ。「分曉りませぬ師匠様、扨は御前は彼の兵庫めを主に刃向ふ大不忠大惡人、恩知らずの大畜生とも覽さゝやらぬ莫、え、もうし師匠様、御前はいつも何と言はしやる、世に四恩といふが有る、師の恩、主親の恩、國土の恩、其の中に物教ふる師の恩が一致重大い、其次が身を養ひ身を産んで下された主親の恩、此の二つの恩を忘るゝものは犬猫ぢや、然る惡人を存在くは世の災禍ぢやとまで仰しやれた。それが妾は彼の兵庫めを其の主君の御恩に背く大畜生、其の畜生を彼等の仲間へ入るゝは一同の恥辱、結句は御前の御面皮、成就にこからが大望の瑕瑾と斷う念うてな、詰腹を切らせましたは。其りや如何にも紀伊國様から賴まれました。けれど其れは一通りの事。只彼奴に自滅させたは師の恩といふ御前の御爲を念うての妾が働きぢや、もし師匠様、其事が惡いなりや惡いと言うて……妾は何の様にも謝罪ります。謝罪でも濟まぬとならば、自害も爲ます。目前に死で陳謝もいたします。え、もし師匠様。」且つ泣き、且つ慕ひ、且つ謝び、且つ責ける、愁霜凛たる其口よりは淋漓たる慷慨の音を發して、春花の妍たるが如き其瞼には堪へぬ眞實の涙滴を見せたり。正雪も、此の非々く

其人民部」「うゝ此の矮漢か？やア其處な者、其方が由井民部か。」「悉皆が狂人の態度なるに正雪は又た呆れぬ。なれど、愛に疑ふべきは、此の狂態の馬鹿々々しきまで無作法なるが、此の老爺の眞面目か、否か疑なり。蓋し此の惡戯翁は、主の紀伊殿をすら我兒の如くに叱咤けて、江戸老中をも小沙彌過ひに叩き廻はす、當代の頑張翁、殿中切つて持餘し者と稱て聞けるが、今見るが如くならば實に然もありぬべし。雖然、いかに小才覺の、小鍋炊の、小刷怖立する老中とて執政は執政なり、將軍の御目眞似をもする程の者が、老功ともあれ如是る狂者を狂者の儘にても通すまじ、況てあの畏怖しき紀伊殿をや、其人が大事の家老の首座に這奴を据られて、國政の相談、寧ろ其の指示を仰がるゝ如しといふも如是體にては有るまじき沙汰なるに、又彼の、人物をば流石に善う御覽じつる故大御所が、衆多き諸士より故々と撰て、爾樣の馬鹿者を最愛の御子の保傅とはなされも爲まじ。恁く考ふれば此の狂態は有意りての狂態にて、其の無作法も、傍若無人も例の傳なる、頂邊拉ぎに我を拉ぎ着け、有無を云はさぬ兵庫同樣の詰腹をと歟。然も其の瀬踏の間者に宮を先づ入り込ませし歟。」と有らば、氣毒ながら、其は大きなる目算の違へるなり、正雪が三寸の舌、五尺の躯は、威力をもても來よ、辯舌をもても來よ、然る淺墓なる手段にて唾の一滴をも要の一條をも、反させも牽せも爲べきかは。あの狼狽者の兵庫忠彌らと一樣に御覽ずる、は、笑止なが然樣には參るまい——恁く腹裏に冷笑へる正雪は、此の老人が勢猛に立蒐れる態を、竹田傀儡の人形見るやうに爲做して、扇の蟹眼を膝の上に弄らかしつゝ莞爾々々と微笑て、只突い居たり。老人は立跡かれる儘、「やア民部、汝無禮者——禮義を知らぬか！」此の無禮なる老爺は、倒りて他の無禮を尤めぬ。なれども正雪は猶一言をも發さゞりき。「無禮者！帶刀が參つたに何故出迎はぬ？」

（百六十三）

正雪は屹と視たり、「御身は甚麼人ぢや？」「甚麼人とは？這奴が、耳は無いか。彌程言うたに。」「安藤とか？」「目を清いて視い。帶刀といふ爺は乃公ぢやぞや。」「紀州の御家老か？」「田邊の城主——音にも聞つらう。」彼は忽地空嘯きぬ。「亭主が出迎はぬに他の座敷に押入て叫めき立つる、然る無法者は我等が紀州の家老には無い筈ぢやが。」客は聞くより大喝せり、「其の家中が者として其の家老が面を見知らぬ、不屆の武士が世に有るか？」素破、其は軍門に墮ちぬ、失敗たりとは思へるも正雪は猶快まで、「我等は大納言殿直參ぢや。軍行らば麾が御旗の下に立つ。田邊とやらの安藤殿が面を見る用は無い。」彼方は拔けぬ、大口開て呵々と笑へり、「民部、窮つたな？揺け、揺け。汝も由井正雪として一流を立つる人、然樣には悪しう申すな。負惜みは武士の瑕瑾ぢや。潔く謝罪れ。」此方も即座に色を和して、「はゝゝゝ御家老の手剛、行懸りの御無禮は御容赦下され。民部改めて御禮申す、行末とも御見知り置かれ下され。」「あつはつは、善う言うた、流石汝ぢや。然るにても乃公が長々の在府中、何故に一度も訪來れなんだ、恨みぢやぞや。」客は言ひつつ、主人が眞向に撞乎と胡坐せり。茶色の革柄に朱潤みの海老鞘、寸延びの大小を十文字に打交へて、老松の瘤見るがやうなる日焦の毛腕の其柄半に靠せかけたる、齢は頽たるも背は屈まずして、但見る例の長久手風は其鬢の邊に戰げり。「ぢやが喃、正雪、聞いて呉りやれや。彼の兵庫といふ不心得の奴。む？知らぬと見。」「存じませぬ喃。」「はて扨其方も記憶の惡るい。あの松坂で其方が捕へたといふ壯年の發狂者よ。な、想ひ出しつらう、其の發狂者め

ふ、何者かの[illegible]
る様舎を先に[illegible]、我[illegible]と申たり、[illegible]
は[illegible]何者[illegible]、[illegible]兵庫[illegible]
汝に、其の兵庫に腹切せた[illegible]見[illegible]
帯刀どの。」「何様の罪兵中にありて、其者に
腹切せいと申された？」「殿様を御謀殺と誣ふ
る大罪人！」「而て其の罪人の討手に向うたは、
汝一人か？」「いや町奉行の吉見どの。」正
雪は然も爲得顔に打笑ひて、「はゝ御老人、證
人の口は塞り申した。まづ此れ丈おぢや。」帯刀
も亦た嘲ける如くに笑へり。「民部、其事が甚麼
とした？」「其の兵庫が自滅したのぢや。」「いや自
滅したのでおりやらぬ。牧野兵庫は、これな
る宮が手引によつて、紀伊國殿町奉行吉見某
が詰腹を切せておぢやる！」「ふむ、其の詰腹
を切せたのが……？」「何故に拘引召されぬ？」
「汝も武士の法に暗い。大罪ともあれ彼奴めも
其以前は紀伊國の家老、況て殿が御傍近くも召
された者、何かの御不興を恩し食されて尋常
の切腹と沙汰せられたおぢやは、其れが其の武士
の情誼、一つは紀州家の外聞な……」「聞はる
ると既？ 否や其れは内々の事、此場には公
の私は奪れ申さぬ、況んや殿が御不興とも御
憐恤ともあるべきは、御家の祿を食みて御恩の
下に在る者[illegible]、[illegible]今に[illegible]
人おざる、浪人の[illegible]、[illegible]町奉行、[illegible]
奉行を差[illegible]かれて、自儀の[illegible]は、[illegible]
得ず、武士の法には暗い[illegible]ぬが、天下の御
置目には明るくおざる。」

〔百六十三〕

浪人は町方支配。其が支配の奉行が沙汰をも
得たず手をも下ずして進退するは成らぬ事、此
公儀御置目に違背の罪を何と申し聞かるゝ歟、
とはけにも紀伊國浪臣が致命の急所に一針を下
し得たるものにして、老功の口強馬も甚麼と此
の鐵轡を銜ふ外づし得む、と想ふには引返た
る老人が頤は外れむ許りに高く笑へり。「うゝ
お主がよ、其の自慢の天下の置目には明るいか
知らぬがよ、自己の主家の由緒には暗いは〳〵。
正雪、汝は紀伊國を甚麼様の御家と思量ふ？」
正雪は此答に困あり、是れ其言葉ならば、或る
破綻を自家と暴露すべき懼れあるを慮りてなり
き。猶彼は肚底に、此の老猾の強詞當るべから
ざる如きもの有るに驚きたり。「這馬鹿者めが、
汝がやうなる奴は一つを知りて二つを知らぬ、
一文字に今一畫足さば二文字となるといふをも
知らぬ奴——紀伊國の御家を尋常の平大名なん
ど、同一に思ふか。」彼の狂態は又徐々と激じ
[illegible]、其[illegible]、学に汗を
[illegible]は、[illegible]なりけり。「こりや、紀伊國
[illegible]といふはな、[illegible]、[illegible]と同格たる
[illegible]故大御所[illegible]られた。其事を汝未
だ知らいで有る歟。其家として其の主家の由緒
を知らぬ、[illegible]家の系圖を調査て自己が父の戒
名を忘失るゝ薄情と汝は同一の馬鹿者ぢや。」
正雪も遂に捌る難ねたり、況て其れ位の由緒
といふを盡々し氣に、と彼は良居丈高に、「馬鹿
か癡漢か正雪存ぜぬが、其の大御所の掟と申
すも大公儀御置目と紀州の式目と別條ならぬと
迄の義におざらう歟。公儀と紀州と兩樣！ 個
個別々の御制度とは、得も……？」「分解ぬか！
未だ！ 例はゞ公儀直參の武士が將軍に不足を
構へて祿を還して浪人する、其浪人が更に將軍
に野心を懷いて御營の事を惡ざまに言ふ。此時
將軍は甚麼とお爲やる歟。見當り次第召捕へ
て、斬罪にも、死罪にも、切腹にも其罪の輕重、
其科の大小、其の舊功の有無とによつて思し食
の沙汰あらう迄ぢや。其の成敗の擬を、紀州も
公儀同樣と大御所の格別に掟てせられた、其の
意趣は深遠とあつて汝等には言ふまじき事なれ
ど、究竟は將軍の我儘を掬禁られうが爲め。其
等の事の穿議もせいで、甚麼の汝が、彼奴を拘引

精神の全幅を罩めたる、不惜身命の抗議を聞き、他方には正雪が從前の恐怖に引反りたる平然たる態度を視て、何とか爲たりけむ老人は些しく其首を傾けぬ。蓋ふに彼は、兵庫が目安を打破りたる餘勢に乘じて、其黨類にして然も巨魁たる正雪をも一網に擣盡さむと思へるならむ、雖然彼は公然での面を出せる者ならぬに、老人は太くも慮を苦めたり、竊に其の細作を放ちて彼が動靜を疑はしめたるに、忽地にして報を得ぬ、彼は恣に大納言殿御家來との名を稱へて東海道を西方に上りぬと。此報は老人が爲に待てる海路の日和なりき、軈て此驛の逗留の場に追附けるが、猶彼は正雪の剛健者なるに苦心せり、因て最初は物の謎語に託けて其の語尻を捉へむとも籌りしに、事果して成らざりき。更に故意に狂意を演じ出しつ、彼が憤怒を激成して釣込むとせしものも、徒爾なる爭論の末に趨りて其機を失ひぬ。爰に最後の詰問をはじめて、有無云はさず縛細らむとしたりしもの、亦た其功の成るに垂むとして思ひきや宮なる奴の爲に妨害げられたりき。なれど、其妨害は有力るものには非ざるなり、彼等が父子といひ、其女が主家の家來分なりと云ふも甚麼あらむ、功は輕くして罪は重し、況んや其大姦を此に縛めば後來紀の海に風波絶えて、熊野の御山と君家も動きなくおはすべきをや、さらば彼が云ふ筆元檢めの其人ならざる、宛名の式に外れたる、其等を飽までに糺問ひて、此場にて罪に服さむ歟。否、待て。と首を傾げしは此時の彼が思案なり。彼は什麼か尋思せる？ 其臍は知らざるも彼は俄かにして色を和せり、「む、小女郎が、想も變らぬ口巧者な。但し其の紀州の水を飲むほどの者、汚辱に一命も惜しまぬといふ今の口狀が氣に協うた。因て此處では其方が親が縲をとゞめて國元へ召伴れう。如何ぢやな、異議なく參るか喃。」宮は早速に應へ難ねたり、正雪は冷笑つ首肯て、「何事かは存ぜず、固より紀伊國の御内の者、其の重職の御不審とあるに何處までも推參は勿論の事。はゝ何の異議。女義も確に召伴れまする。」

（百六十七）

大納言殿の御不例は何全癒にいたらせられでか、御籠殿をば出で玉はねども、彼の、殿の御首無難といふ驚くべく喜ぶべき注進を初めとして、追々に來る江戸よりの早馬は、將軍家の御氣色、帶刀が首尾、すべて宜しきを報げまゐらせぬも無し、之に加ふるに、最も御懸念に思し食しつる家人の兵庫も、喜太郎と宮とが働きにて、備好う自滅し、其父織澤の三位殿すら敢なうも世を逝り玉ひたれば、生日の面倒も、死後の故障も今は全く根を絶ちぬ。奥州屋には大阪の藏屋敷より其事となく物許多を與らせられ、信夫が跡をも懇切に弔はせて、總て内外を、情深う、微妙に處理せ玉ひし程に、黄なる金、白き銀の光る前には理も非も要らぬ此郷の習癖とて、苦情も起らず、難澁も申さず、哀れ死ぬ者貧乏なる、兩個が最期を嫖客と太夫が情死として主人より訴へたれば、其の内々を知れる所司代、又た町方よりも公然ては一言の挨拶をだに和歌山に申し出づべき樣も無し。委曲を知し召したる大納言殿の御滿足は、只如意寶珠を御掌に握らせ玉ひたらむやうの御心地。世は早や我が有と思ぼす御權喜の最中に、帶刀は例の意氣揚々たる、紀伊國五十五萬石の米粒咬る蟲蟲めら、此の老爺が騎る馬の蹄の痕の土をも頂きて守護にせよといふ如き面色して下着せり。和歌山の追手の門も、今日の彼が面を入るるには餘りに狹隘かりき、御玄關の鏡板、其れが喰ひ反らせし顔鬚の影も映るばかんに淨拭へるを、撓々と泥足に踏み鳴らして、御白書院より中奥、御黒書院と打通れば、御小姓頭出で迎へて軈て御寢所へと案內す。其れと御覽ず

るより殿、「や、老爺か。日本晴ぢやな！」彼は突如に立起りて、御夜具を刎ね除け、閉籠めたる御障子御紙襖を瓦落々々と開け披げて、「日本晴といふ殿が寝てござるといふが有るものか。さアさア御起牀やれ。こりや面々、御夜具を除け。而して御髪を……。えゝ七十に餘る老奴が百五十里の江戸下だりから歸ッて來るを五十にも足らぬ御身が寝ころで御待ちやるか。さア御起牀やれ」殿は微笑ひて御牀より起せ玉へば、「此の厚衾！五月中旬に蕈でも萌らうとか。甚麽の此ばアりの風邪を感れたとて冷水の三杯も浴れば直ぐ癒る。這樣な虛弱な殿を提らへて謀叛呼はりする奴も奴ぢやが、眞に信けて不審する老中も老中ぢや。こりや殿聞かれい。江戸の奴等はな、殿を怖がッて人啖ふ鬼のやうぢやと吐す。斯樣な鬼なりや此の老爺が倒ッて捉て喰ふべいぞ。あッはゝゝゝ。」其の傍若無人なる語の中にも、自ら一種意味はあるなり。殿は早くも悟らせて、「甚麽、汝が、[illegible]には猶其が大事ぢやは、然し此程は馬に騎るのも大儀ぢやよ。予が身の養儀を思ふにつけて、老爺、這回は大儀ぢやッた喃。好う元氣で歸國て吳れた」御睫毛に沿はれる感謝の淚滴には、彼が鐵腸も碎けて無る思なるべし、帶刀も多時暗淚に暮れたるが、「眞實を言へば、今回の義は、此の老爺なんども力には及ばぬ事。只日光の御神靈の殿を御贔負の御力と、二つには當御代（三代將軍家）の大腹量にて、叔父ごの殿を大切に思し召すからの御事ぢや。されば陳辯の附うやうない城内、御詮議も、鹿狩も、雲出の事も、熊野の大船も、此の老爺が一途の強情と、出放題の申條にて、さしもの伊豆殿が兎角に申すをただ好し／＼と、上の鑑りで御調停なさるゝ體。も、勿體ならで辱けなうて、又た嬉しうて、恁くてこそ徳川の御家萬代と、歡喜淚やら有難淚やら老爺が袖は辱口もおぞらなんだは！其れにつけても紀伊國五十五萬石と此の老爺が皺腹は、上が御恩の拾ひ物！殿も此から仇等閑に思はしやれな、眞實以て濟ませぬぞや。御身が一代、御宗家の末代、其の骨を舍利にされても忠勤の盡されでは協り申さぬぞ。噫、尊とや！上が其御心も偏に日光神靈の御感應。あら有難や！」一彼は淚の鼻を擤みつゝ、突と御前を起ち、御椽なる水盤にて口漱ぎ、手を淨ひ、遙かに東方の空を望みて默禱に時を移せる態は、從前の頑固爺とは物の變れる、天晴れ此國誠忠無二の忠臣と、看る者の毛髮も竪ろ竦立ちて感えたりき。

（百六十八）

良有りて帶刀は殿に對ひ、「拾ひ物といへば、今度途中で不思議の物を拾ひましたよ。あの正雪と宮、其れを藤澤で拾うて來申した。」殿は微笑せて、「聞いた。其事は例の七里の者（七里日付とて街道七里毎に置かるゝ細作）から注進も有たが、彼奴が予が家來として往來するは今に初めぬ、疾からの義ぢや。」異みも爲たまはぬ御氣色に、帶刀は呆れぬ。「では其の、松坂でも抱へられた歟？」「いや抱へはせぬ。彼奴め自儘に名告りをるのぢや。」「其の自儘を制止もされいで歟？」殿は微笑ひつゝ、首領せつゝ、「其義にも及ばぬ歟。是も後日の手段にならう。」「えい、手段？」と彼は怪眼を瞠るを。「然樣にも愕くな。彼奴が首に繩を繫くるぢや。」「又しても其樣な！今度の事にも御懲りやらいで歟。御身が手段は毎も／＼、最初は物を手に唾る様にして後には爲損じて周章かるゝ、去年の鹿狩が好い手本ぢやを。其れにも目の醒めで又あの惡黨を手に御扱ひ置く。何たらいふ猫大の虎を饜けて後に其れに喰れたといふ話と同じでや。[illegible]代も無い！」苦笑ともせぬ彼が此の强異見に、殿は逆忤もせられぬなり、然りとて其を承諾も爲玉はぬなり。「一通りは道理ぢやが喃、

其れには又予の考慮もある。結句は宗家への忠義ぢやよ。」「口の減らぬ！」と彼は言下に唾棄する如くして、喚き出たせり。「惡黨を飼ふが宗家へ忠義なりや、我等を初め忠孝に身を殉るゝ士を養ふは不忠にならう。其れならば何故彼の兵庫を成敗召されたッ？　兵庫より一層上の、然も今度の大將たる鄂奴を飼ひ置くを忠義なんどゝ……御身が其意なりや此の老爺が皺腹賭けて今回の出府も爲なんだものを！　但し其の忠義とは甚麼が忠義ぢや？　言ツしやい。」彼は勃氣なりき。勃氣なる彼には殿も其の御胸底の底なる、秘中の秘を明かし得玉はぬなり。と有りて彼が一旦口の外に發したる事、是非に徹貫させで置かぬ氣風を知り玉へば、甚麼が忠義ぢや？言ツしやいの一語を既に聞せし以上は、彼が首の揚ぐる迄は窮追して措かざるべきをも知し食したり。然して又此の一義をば、彼に意得させ置き玉ふべきの要有るなり。勃氣なる彼、我が意を得さすべき彼、其の中間の適好處をとりて、逸らせず、駛らせず、騎手の意を好く知りて我が目的地に達らしめむとする手綱の捌き方は扨如何、と殿は少時案じさせたり。「いや、其義には此方よりお主に言はうか喃、お主は又甚麼様の考慮で其の正雪を拾うて來た？」彼が胸中を先づ探問むとなり。彼は直地に、「成敗し申さうとて……」「何故又、其場で成敗せぬッ？」「其義ぢやで。殿。眞實は江戸にて、彼奴め當家家來の名を詐稱て海道を上ると聞き申したで、豫て目を注けつる奴、此等こそ有無を言はさず繩縛うて成敗せうに外されぬ時機と直ぐ江戸を立ち、藤澤で追附いて扨て糺問の始めたに、流石の奴も誓詞の事から尻尾を出いて、松坂にて召抱の折、筆元を見届けたは水野太郎作、宛名は殿なんどゝ嘯きをる。固より筆元は物頭に目附兩人、宛名は家老中であるべいを倦く狼狽て、其れにても不安心と心附いたか覺束ない面色したを、這處ぞと繩捕に着手た時、支梧たてしたはあの宮ぢや。彼奴、正雪とは父子、其子たる妾は當家の家來分、其父が殿御家來と名告るに不思議かなどとも言ひ爭ふ。其の爭論は孰るにも足らぬが喃、帶刀案じたは彼奴ら兩個が面魂ぢや。親父の奴めは沈着き拂うて如何にも丈夫に刀に柄をも握るべい體、女といふ奴は敵に遇うて確に耦刺へも爲べい態。惡しう成敗せば血雨も降らさう。然りとては今公儀の御不審の解けつる端に、又た此處にての騒動も世間への外聞、一ツた江戸への恐惶とも慮うて喃、扨て斯う當地へ兩人を召件れた……が、いや心太い奴、道中の傍に父子交る〲老夫が身傍に來て、親父めは四方山の談話をする、女の奴は腰を摩む、肩を叩く、やも全然で帶刀を小兒扱ひに爲をり申した。其の惡黨、殿が銜でも頭かしい。此よりは其の父子といふ素原を問ひ、其の作術の根元を鞫いて、正雪めは只成敗ぢや。」彼は頻に殿が御意に不同意なる首掉を掉れり。

（百六十九）

此時近侍はおほく退りて、御傍には渡邊大學と童小姓四五人とのみなりき。殿は老人が始終の言上、其の意見、其の首掉ふる態とを聽つ視つし玉へるが、然も有らむとの御氣色、我が符に合へるを微妙とも思し召したらむがやうに、「其、其れぢや。其體ぢやでの、予も迂可とは手を下さぬぢや。彼奴が剛健なるは其方が視た通り。又其の腹中には甚麼樣の計畫があるか予にも悟得ぬ。今の分、予を押立てゝ大將として、天下に旗を擧げうとの考慮とは知るも、亦た京都へ手を廻して織澤の卿を籠絡めたから案ずれば、萬一彼の關白殿など挑撥いて喃、事を起す、其の手段無いにも限らぬ歟。もとより島原の殘黨なれば、九州にも一味はあらう、又軍學の師範として諸方へ出入れば、一城一所の主たる者

と力とを具へざる賊、身に寸鐵をも佩びざる賊、抑亦たきのといふ宮に細作と疑はれ、喜太郎に騙賊盜賊と罵られて、繩目に懸けむと脅嚇されたるに膽落ちたる賊、然りとては其一轍の氣象、鍛錬の武藝といふも亦た甚だ頼み甲斐なきものなる哉。焉んぞ然らむ。彼は汚辱を嫌む疫病を恐るゝが如き士なり。故に其の細作と喚れ、騙賊盜賊と怪まれし時は、餘りの不意なるに一回は驚きたりしが、亦た其の驚駭は渾身の勇氣を何時迄も沮喪はしむるものには非ざりき。彼は又た正直に過ぎて信義に厚し、時としては敵の言をも眞實として身の過失を省慮ること有るなり、即ち首盜人と責められたる際、心太甚だ狹しと思へるが、其も暫時にして我が此の所爲の敢て非理ならざることを自覺したりき。既に彼は勇氣を復せり、亦た其身の正道を履みて亡友の爲に力を致せる、俯仰天地に慚ぢること無きをも悟了れり、達辯ならざるも事理を論辯ふる程の口は持ちぬ、力は彼等十人を合するも好く敵すべし、腰間の白虹一たび晃めかば其れが百條の鎖千條の繩もこれを斷つこと草を薙ぐが如くして、紛々として毛髮の如く飛ばむ、猶甚麽の脅迫かあらむ、威嚇かあらむ。然るを彼、一も是を爲さずして、只喜太郎が言ふ隨に汚目々々と捕れて彼の一室に取籠めらる。忠彌たるもの汝は果して癡か、狂か。爰にいたりて其奇は既に怪となれり。癡に非ず、狂に非ざる彼が所行の怪訝きは、亦た其友の爲に危險をも冒すものなりき。彼は以爲らく、馬鹿者の兵庫は色に溺れ、財に昏みて、剰さへ今や身を敵の手に喪へり、彼が父の卿、亦た卑怯の小人にして與に大事を謀るに足らず、然らば今後に我が兄として見る其人の大望を贊けて、其れが宿志を成さしめむもの、唯其れ紀州か。紀州は惡むべし。然れども予は未だ彼殿の風丰をも識らぬなり、其の政治の良否、武備の整不、士民の上に懷けるや、國の富るや貧きや、山河の形勢、國内の險要、運漕の便利等をも未だ熟く知らぬなり、其等の事にして我意の如くば、こゝに初て我が丸橋忠彌なることを告て、松坂の再會を殿に勸誘むか、或は猶彼等が言ふ公儀衆として其心底を誘き見むか、其は姑く時の宜しきに隨ふとして、兎も角も好時機なり、若かず彼が言の儘に曳くまでも其地に臨み、可成的に其の内情を搜らむは、と可怖くも其臍を固めしなりき。

來て見れば、些しく其の所望は外れぬ、只一牢所に閉鎖られて、一歩も其外へは出づるを得ざるなり。殿はと問へば、不快と應ふ。責て喜太郎をと尋ぬれど、これも公用繁しとて其後は面を見せぬなり。雖然、其の京都より大阪、大阪より堺・岸和田、信達・山中、山口と踰えて、和歌山へ來れる途中にて、岸和田・貝塚の古戰場をも訪ひつ、千石堀・積善寺・濱の城の殘址をも見つ、山中越の地險には攻守の勢を籌りて、紀の川の天塹には防禦の法をも案じたり、其を再び肚底に反復して右さまに思ひ左さまに慮ふる程に、太だ心に獲るものありき、其等の事に慰められて卯月の長日も徒然ならず、此上に猶ほ此城下を徘徊して民風を觀り、士氣を探り、兼ては城の繩張の樣をも視ばやと思ふ、彼は暗に其機を覗ひたりけり。

（百七十二）

突然として吉見は來りぬ、彼は殿が御不例の全癒にいたらせたる事を言ひ、汝につき親しう江戸の樣子をも問せたう、客人に御逢との義を仰出だされぬ、苦しからずば今宵といふ、其辭もいと鄭重なりき。忠彌は内心の歡喜を隱して、只然るべうとのみ應へぬ。吉見は怱々にして去れり。忠彌が心は今しかすがに悸めきたりき、されど豫ての望みの一分を測らずも達する、今宵こその勇氣は其れをも壓して、只管

に其の案内の時刻の來るを待つ。手束ながら髮をも結び、湯浴し果つれば、用意の衣服とて𧘕𧘔に袷小袖の新裁きを二つ、廣蓋して贈り來ぬ、其れを着替て儼然に座に着ける、勇士の身嗜み、美人が靚粧を凝らせるにも增して天晴れなり。

「ほゝう、支度は出來申した喃。」と吉見は其の座敷に入れり、「就ては御前への御身が披露ぢや、何と名を申さうか。」手輕く問へば、手輕く答へぬ。「權兵衞とも、八兵衞とも。」「はゝ權兵衞か喃？ 似合の名ぢや。はゝゝゝ。」老練なる吉見は、再度ゝ彼に馬鹿にさるゝ程の馬鹿にはあらざりき、腹は立ちたらむも笑譃に紛らして、いざとて案內す。案内につきて來れるは城の追手なり、但見る此城、東西は七八町、南北は五六町もやあらむ、今の殿が身上に比べては敷地小さく、然も平城の、要害とても然ばかりは有らぬが、其の結構は微妙くして江戸城のものに髣髴たりき、古傳には天正の末、桑山果樹院の築くところと言ふなれども然にてはあらじ、塀、石垣、塀のはげ方、狹間の切り方も甲州流とは確に見ゆるぞや、然らば小幡景憲か、いづれにも其の一派の經營にてあらむなど、彼は眼を偸みつ窺ふ端に、橋にかゝりぬ。「權兵衞、急歩がれい。」喜太郎に急つかれて忠彌は驚きしか、早足に追附かむとして忽地爪先に小石を蹴つけぬ。石は轉々と轉がりて堀に入る、井といふ水音高し。「廢！」喜太郎が眼は電光の如くに彼を射たりき、忠彌は一言をも發せず、空知らぬ面して續けり。恁くて到り着きたるは、殿中にあらぬ御城の築山の御茶屋なり。奥の方には御話の聲、又た打興ぜさせたる御笑も時に漏れ來ぬ。待合の腰掛にやゝ待草臥れたる忠彌は、扨は予が外に待客人やある、人ありては物惡しや。と思ふ折柄、喜太郎は又出で來りて、「權兵衞、此方へ。」可厭き權兵衞々々は今は中々我耳にも觸犯るなり、半は不買つ、「應！」と應へて後に跟けば、此の意地惡き老爺は仔細らし氣に御前に出つ、一層高聲に、「御召によりまして例の者、權兵衞參上！」「むゝ、例の者か、權兵衞か。苦うない、其の權兵衞、近う。」御嘲笑も交れる如き此の御意は、床の正面なる殿の御口より出でぬ。權兵衞さへも忌々しきに更に輪を加けたる例の者。例の者とは江戸の細作とか、首途人とか、扨は此の主從、我を捉へて彼の意趣晴しに翫戲物にすと覺えたり、然もあらば片腹痛や、此方も忠彌、曲者の丸橋とは御存じ無きか。惡しう戲謔で後悔の目御覽ずな。と腹立つ隨につか／＼と御敷居の際まで進みたる忠彌！ 彼は什麼、此時何とか爲たりけむ、臆きまで點されたる燭火の影に、心許なげに此方を顧眄れる或る二人の面を見るより阿と逡巡きて、棒縛に遇へりし畑盗人の、眼のみ働くが如くに突立ちたりき。

（百七十二）

立竦みとなれる權兵衞の忠彌を見て、殿の身邊に扣へたる老爺、これは又た喜太郎には變に絕して面色嚴めしう、眼の光、明星の燗たるが如き老夫は、突忽錫鑼を敲く如き哄聲して、「其處なる者、控へい。喜太郎、それ！」「權兵衞、御前ぢや。先づ其場へ。」彼は忠彌を正坐が隣席へと坐せしめぬ。殿は御座いと泰らかに、又た莞爾と、「權兵衞か、疾くに其方へも目通りを申付けうと思うたが、不快ぢやで。如意ならなんだよ。此盃取らせう。」御盃を擧げ玉へば、大學は受けて彼に與へぬ。彼の明星の眼なる老爺は、「宮、躾せい。」唯と應へつ彼女は起ちしが、口惜くも臆れて、其の手許の戰へに慄へて、銚子の嘴の盃の緣に戞々とあたる音、我ながら淺まし、と思ふ程なりき。其れをも殿は御覽ぜぬ態、「一民の、其方が其の隣席なる彼の參の男。其人を見知り識るか。」如是る御意の有るべきとは、彼は其の權兵衞なる者を瞥つる

時より肚裏に暗知り、毫も騒がはず、一面識りませぬ。」一權兵衛は如何ぢやな。其れなら民部と識らぬか喃？」一彼が意氣は潰然たりき、彼は惑ひぬ、既に恁くまで我が腹底の底までをも看透されたる以上は、我が權兵衛の丸橋忠彌なる事を知られぬとは得も有らじ、然りとも知らば怪しなる假名など名告で實名明々地に告げ、天晴れ武士よと稱はさすべかりしにと思ふ程なるを、又今更に何を恐れて我が兄上と見る人を看識らぬなんどゝ詐譌るべき、况んや當時江戸においては三歳兒だも其面を識る正雪、其を知らずと言はゞ徒に彼等に侮蔑れて、愈其の汚怯れたるを嘲笑るべきをや。と彼は其喫を耻り、更に下されたる盃つらりと喫して、一存知でおぢやる。由井民部とは看認り申した。一白髪なる老爺は初めて微笑みて「むゝ看識たか？好う看識た。宮、今一獻。それよ、其方は此の權兵衛とは馴染ぢやろ？一思ひ懸けなく詰譏れて、彼女は只さし俛首ぬ。宮と喚ばるゝ此の處女、扨は其女かと忠彌は心に怪訝めるも、今は倘だ其を問ふに遑あらざるなり、唯彼は一途の悶邪苦邪に驚愕も危懼も忘れて、例の無遠慮の本性、醉ひて一番御意得むとて彼の盃を下に措き、睨むが如くに顧回して、一げに御事は彼夜の如ぢや、度々の酌も面倒いおやろに其の銚子を與せ。宮は茫愕て遽に正雪が面を偸視ば、彼が眼は、勿體くして、と點頭けり。「いや其の御心意には……。何程にても御酌しませう。」「はゝ、然らば兎でも角でも下賜れの御酒、今些し大盃でな。」斜めならざる殿が御氣色より、彼の老人は躍り上らむばかりにして滿悅びたり、一有難々々、權兵衛天晴れぢや、面白い。大學、それ其の三組の下の盃、三合入か。可い可い、取らせ。」猩々の高蒔繪せる大盃は彼が手に在り、忠彌は滿面に笑を泛へて、いで酌をと突附たれども、宮は逡巡ひて起ち難ねたりき。げにも彼女は起ち難ねたるべし、此の巨大しき大盃、一盃を喫さば今一盃とあるべし、其盃を傾けば又一盃と强ひむ、三盃四盃と果ね、六盃七盃と過ごさば、彼什麼大酒とあらむも爛醉でやは。さらぬだに這奴の所爲たる渾て心底の濟めぬものなるに、其が醉はゞ抑も甚麼事をか饒舌り出すべき？ 彼方は固より其を自白すべき謀計とも見るを、其術と知る／＼我が此酌に起むことは、好みて師の首に刃を擬るにも均しき業、咄此の毒水我が師を屠する水！寧ろ此酒が眞實の毒ならば彼に與へて、端的に其禍害の根をも斷つべきを、と彼女は涙含むまでに思ひ屈したり。時に正雪は儼然たる面を正して言へり、一權兵衛どのとやら、其の大盃は御分別あるべきもの歟。此の御座敷は貴人の御座、自然に尾籠の事ござあつては御自分のお爲にも成り申すまい。由井民部意見を申す、用捨召されい。」

（百七十三）

一其の遠慮は無用ぢや、給べ／＼、予が容す。」「はゝ、殿が然は御免さるゝ、權兵衛喫れ。」「拙者御酌にまかり申さうよ。」と殿と老爺とが言の下に大學は起座ば、一珍客の見事の風、見せ申されい。」と喜太郎すら挨拶しぬ。多勢に言勵められて正雪が苦心も今は畫餅なり、彼は是非なき口を噤みて差控へぬ。「あはゝゝゝ由井どの案ぜらるな、權兵衛といふ男、此れ程の小盃、五盃七盃傾けたとて醉て尾籠を振舞ふほどの腰拔でもおりやらぬ。然るにても江戸に名高い正雪老と、此の和歌山で御目に懸るも不思議の縁ぢや。地體和殿は、何用あつてか、此邊くだりへ渡せられた？一問ふ端に大學は宮の銚子を引取りて、隻手に突出したる忠彌が盃に泛々と酌せり。其を一睨せる彼は、鯨鯢の潮を吸ふ如くに苦も無く一呼吸に喫盡して、けろゝ閑たりき。呆れて大學は又注ぐを、高野聖の

大般若繰る如くに息をも繼かず彼は又た喫干して、平々乎たりき。愕きたる大學、意地にかゝりて這回は更に溢れて散るばかりに注て取らすを、彼は猶渇ゑし餓鬼が菩薩の功德水を得て競爭ひて飮む如くに、喉を鳴らして一滴も餘さじとばかりに傾け了り、舌鼓いと高らかなりき。此の荒涼じき體を見て、呆氣に奪られしは喜太郎なり、微笑ませたるは殿なり、故意に笑面を假裝へるは正雪にて、既に覺悟の眼を凝ゑたるは哀れむべき彼の宮なりき。其中に、小躍の膝を拍きて扇颯と開きたる彼の老爺は、「好氣味! 好氣味! 男振、盃振、天晴れぢや。今一獻喫るか?」既に大小四盃の酒、其量大約一升を喫して有繋に些しく眼邊の帶紅める忠彌は、高かなる舌鼓と與に其の脣端を舐回して、「えい、此の結構の御酒、喫めとあらば何程でも……但し御老人、肴が欲しい。」「むゝ望め望め。帶刀近頃に此れ程の小氣味好日見た事がない。何なりとも肴せう。望め〳〵。」帶刀と聞て、看得たり、赫と彼が其眼を瞪れるを。「扨は御身が安藤殿か!」「うゝ、身が安藤ぢや、其の帶刀ぢや。」「扨は江戸で、本意召された帶!」「本意も本意、十分の本意して歸國た。」彼は其膝を一押前めて、「むゝ、安藤殿なりや我等肴に所望がある。先づ喫う。」彼が氣色の變れるに、大學は其銚子を擱きて稍身構ふれば、喜太郎も素破とも言はゞと目を凝ゑぬ。宮も身を正雪が傍にして、此の不思議なる男の擧動を一向注視れり。其の者共が爲體を尻眼にも懸けぬ忠彌、再び盃を擧げむとするを。「お待ちやれ。」と扇して其手を駐めしは正雪なり、「さればこそ和殿、早や酩酊ぢや。御身も其の公儀衆とか言ふ。公儀衆なりや公儀衆だけの禮義作法も御守りやれねば成ぬもの。安藤殿は名こそ紀伊國御家老なれ、身柄を申さば五位の帶刀先生ぢや、殊には公儀の御附人、當殿の御保傅、故大御所の昵近の舊々、然も天下の古老として幕府の御待遇も從常ならぬ仁。かゝる御仁に肴の所望、其の居丈高の高聲、公儀人には不似合の上に盃の振も我等眼からはいと無禮ぢや。前非は是非なきも後罪を重ねぬ先に早や御退りやれ。民部實心忠告する。疾う御下りやれ。」目をもて吃されて忠彌も漸其心となれるか、把りたる盃を膝に措き、首を俛れて打案ぜり。「さ疾う〳〵。」正雪は更に急立けて、顧て宮に目を注けば。「さ、妾がお供しませう。疾うござらしやれ。」「むゝ、由井殿が忠告に背けないが、此れなる小女郞は甚麼者ぢや? や、貴老、這奴は京で織澤の家司前波某が妹というた奴、今見れば當家の奧をも勤むる模樣。……や、小女郞、汝は抑も何者ぢや。」執られたる手を振拂ひて、起つにも非ず起ざるにも非ざる忠彌は、往昔の駄賃といふ如くに、其の不平の瞥を宮が上に向けたりき。正雪は打笑ひて、「何者でもおりやらぬ、某が最愛の一人娘ぢや。」「えい御身が?」「されば! 某も其等の緣で今は當家の御家來分ぢや。」「えい、實たか!」彼は絶叫べり。「甚麼を?」と正雪も驚きて問へば、「某を!」彼の虎鬚は戰々と顫へり。

（百七十四）

正雪と忠彌とが爭論は紀伊國殿君臣には思ふ壺なりき、是れに依りて彼等が謀計の臍も知るべく、思はぬに得つる自然なる對決の場ともへば、殿も帶刀も秖私に暗笑の目を迭しつ、其れが擧止、言語、行目までも一事も遺さじと矚視らるゝのみ。其の君臣の愉快なるだけ其丈に苦惱きは正雪なりけり、縱令其の途中に、遁れ得、種樣の事情といへるが起れるにもせよ、江戸を發達たる初一念を討へば、只此の目前なる、忌々しき、我を悶死もせしむべき程の奴が窮阨を救はむとてなりき、其窮阨を救はむとする奴、次第によらば我が一命を賭けてもと思へ

る奴、兼ては兄弟とも契れる奴、大事の有る限りを打明つる奴が、今は中々我仇となりて、從前より癖惡きを警誡めつる其酒を使ひて、兎毛の末にかゝる微塵をも看徹くべき怖しき人の面前に、戲けたる醉醺の狂態を盡さむとす、若し其れ駟も舌に及ばずといふ一言をこゝに過失たば、我が宿志も其れ迄なり、恁くとも知らば俗に謂ふ大の蟲に小の蟲、這奴棄殺しにしても看過したらむを、隣人の火を救うて其身を燒亡へる愚を我から好みて演じたる落度は今更ら恨むも愚痴とは言へ、然りとては憎き奴かな、と餘んの憤怒を胸に包藏み難ねたる正雪は、流石に其の面色も變りぬ。と見たる宮は、阿呀と愕きぬ。「父さま、甚麼たる事、御前……御前ぢや。此の一埒は御前は知らしやらぬ。まゝ全般は妾に任せて。」「いや、子の汚辱は父の汚辱、父は知らぬが其方が人を欺騙たとありては殿の御前、一分濟めぬ。不憫ながら其方を討つか又權兵衞と勝負するか、兩個に一個ぢや。然意得い。」「好うございます、妾も御前の兒、殿樣の御家來由井宮ぢや、惡怯れた事はしませぬ。善惡が生命一つぢや！」彼女は健氣にも、慇然にも、軀を大望の犧牲にして、義父に代りて當敵と耦刺へてとは覺悟せるなりき。敵手取られたる忠彌は案外なり、彼は宮を快よしとは見ざるも、亦た其女と決鬪ふべしなど懸けても思はぬなり、況んや鬚喰ひ反らせる大の漢子が、隻手にも足らざるべき此の處女を對手とする、日待の不動が童子を追うて鬼事する聚落扇の狂畫めきたる猿樂も得爲られぬをや、と彼は呵々と哄笑り。「擱つ！」「擱きませぬ。妾は何時御身を欺罔たか?!」「欺罔たで無いか、前には前波が妹といひ、今は、民部が女兒といふ……」「はゝ其事ばかりか、前波が妹が由井殿の義女にはなられぬ歟。養女養子といふ事を御身は知られぬ歟？」一句の下に論伏せられて負じ魂の忠彌は些と急きぬ。「むにや其事ばかりで無い、お主、島原で何と言うたか……主の兵庫が仇討を和歌山でする！ 其の仇討はお主何時爲た？」宮をばもとより、彼は喜太郎をさへ等分に睨めたり。喜太郎は今は默止されず、「其義は濟んだ。」彼は御前も憚からず、開き得るだけの大口開て、發し得るだけの笑聲を爲せり、「うあッはッはゝ紀州の仇討は小兒の飯事か、木偶坊舞しの切合か、濟んだ仇討の雙方が生存て物言ふ！ 但し御身は幽靈か。いや腹筋ぢや！ あッはッは。」「いや、權兵衞。」と喜太郎は色をも變へぬなり、「和主は先刻、追手の橋で爪突て、足元も惡いと見たが、目も病い、耳も聾いな。今宮は何と申した？ 紀州の家來！ 既に當殿の御扶持人、御扶持の下に立つとなりや仇討なんど有るまじき義ぢや。況て御事が當地へ見えたは其等の事に管からぬ義、只某が公儀衆として伴れ申したを、惡らぬ穿鑿ぢや」喜太郎は愍く回護し呉れたれども、宮は有繋に其の一言の末の違へるが訝しきか、口惜を眼に湛へたり。

(百七十五)

「要らぬ穿鑿？ むー、然らば其義は隨意にもお爲やれ。ぢやが此方には些と要る穿鑿が有る。」二回の候的は既に念無う射損じぬ、こゝ三度目の大事の際とて忠彌は滿を持して發せぬなり、少時は四邊を睨望せるが、「喜太郎、和主は今公儀衆として某を伴れたと言ふ。公儀衆たる我等を何と爲うとて伴れ召された？」和殿は又た何事を爲うとて伴れられた？」意外の反問に彼は太く愕きぬ。「何事を爲うとは？」「伴なはるゝ趣意無くば、縱令某が伴れ申さうとて伴れらるゝ其許で無い。十王が勸進もくはうが爲め、盜人の晝寢も夜稼の目的、和殿は何事の見當をつけて此和歌山へは伴られた？」有繋の彼も度を失うて言句に塞れり、喜太郎は猶

疊み懸けて二橋から端へ投石しもして遊戯ぶとか？一耳を澄せし正雪は突然、笑と喚かけぬ、一吉見どの、是れなる仁が御堀へ石を投げ申たとは？一問はるゝに澄と意注く時、殿も異樣の喉音一つし玉へり。喜太郎は笑ひに執做して、、いや、物でもおりやらぬよ。只權兵衞が戯傷、小兒の樣な、はゝゝゝ。一言ひ消たれて口をば噤めるも、扨は這男？と正雪が忠彌に注ける目の、彼が視る眼と屹と合へり。此の相合へる眼裏には什麼なる意味をか通じたりけむ、其の奇妙不可思議の機は、彼等二人が胸中の祕に索むるの外、決して他人の窺ひ得まじきものなるべきを、黙りて殿と帶刀とが四隻の眼は彼の秦鏡の能を照らすが如くに輝きて、彼等が其の刹那の目語を手に執る如く、耳に聽く如く悟られたりき。而して殿は其の失望の數息を竊に泄らされき。失望せる君臣に引反て、忠彌は今や百萬騎の味方を敵中に得たる如くに勇み立ちぬ。一小兒の戯傷も要り申さぬ、爪突かば石も轢けう、棒かゝば堀にも入らう、堀に入たが甚麼と付る？ 然樣に公儀衆の我等を懸念ある紀伊國衆、扨は何事か思し食し立つ義どもが有りて御用心專一な？ アア權力の御老人、權兵衞への御肴は未だ賜り申さぬ、其の御肴には有用心の仔細御語りやれ。公儀人とて然ばかりに聞たい者にもおりないよ。はゝ先づ喫う一彼は盃を把りたるも、宮はもとより、大學も唯眼を瀨視ゑて、酌取らむともせざるなりき。彼は其を右視左視つゝ、一はゝ、御酌が無い？ 紀伊國殿御前の獨酌、前代の珍事、然りながら多い寡いの不足も無うて好うおざらう。あッはゝ。一彼は手近の銚子を取れるが、父た舌鼓して、一結句は醉ふが詮、盃も面倒いぢや。獨酌も氣の濟なに此物で賜らう。一無作法にも銚子を擡取り、彼は其縁に口を着つゝ阿呀と見る間に、一升入、涓露も殘さず傾け竭して、しゆふうと息を吻き、一御免候へ。一老人は見るも猶見ぬ振なり、忠彌は躙り寄。一御家老！を喫ッた。所望の肴は？一遣れぬはッ！一大喝せり。なれど彼も聽せぬなり、一仁禮に無い！武士が一旦口外したを。一汝が汝なりや、己も己ぢやは！一二等、では賜さぬか？ や、御酌も下されず、約束の肴も賜さぬ。奇怪の事！一一奇怪で無い。無作法の醜態、さる眞似する浪人風情は獨酌で過分なぢやは！一浪人と言はれて喫驚くかと思ひの外なる、彼が神色は自若たりき。一はゝゝゝ 如何にも浪人。其の浪人が甚麼しまいた？一喜太郎は耐らぬなり、睨めたる眼に角を立てゝ、一こゝな大騙賊！一や、騙賊とは？一公儀衆の、權兵衞の……何故最初から江戸の浪人丸橋忠彌と在識にせぬ？一彼は父た大いに哄笑へり。一それ扨無念の事。其の公儀衆も權兵衞も、名附親は誰？ 然ういふお主が勝手に附て……一と、言はるれば何さま、京にても、彼は公儀衆と躬ら告げざりき、權兵衞も亦た其の稱詞を我が拾へるなり、老練の喜太郎も爰に鎖りて些と赧面せり。

（百七十六）

吉見が赤面に御前は白けて、殿さへも良案じ顔は玉ふ體と見るより、如是る事には小膽の如き素快き眼の正雪は透さず其問答を引取れり、「これは／＼其許があの、御身が其の丸橋忠彌か、御茶の水なる御仁かや、これは／＼。」と故らに座を改めて、一我等は今も御存知の市谷の由井民部介、御身が本郷の忠彌どのなりや鎌寶藏院の槍術の手は、未だ見ぬが、耳には雷のやうに聞えておぢやるぞ。好い場所で御意得た。然りながら最初より斯くは仰せで、はゝゝはゝ愚老に太く失禮を爲せ召された。一御免されい。但し以後は親和にな。餘りに白々しき挨拶風には、傍若無人と跋扈り反れる忠彌すら烟に捲れて返答も頓には出でず、胡坐も搔き

かねまじき膝を窄めつ、いと赧顔たる、「義弟とも御看做されて……」「はゝ兄弟か！　民部と忠彌、其れが兄弟とは車の兩輪ぢや。何と老爺、民部はや予が家來其の義弟とあらば忠彌も當家に由緣の者ぢや。召抱へうか？」可怖しきまでなる殿の御意に、大學喜太郎らは言ふに及ばず、事情を其か、と悟れる宮さへも、身に冷水を打浴けらるゝやう感えて思はずに毛髮を悚立たしめたりき。帶刀は飜りて事も無氣なり、「好うおざらうの。」「やア忠彌、其方は予が内に抱へられう喃？」「や、待ツしやれ、彼は未だ忠彌とも丸橋とも名告り申さぬ。此者果いて其の忠彌か、又た然る手者か、或は尋常の酒飲家か……」一方には殿を抑へ、一方には忠彌を睨めたる老人が眼中に、突忽彼が炬火の如き眼光を見たり。「やア御老人、忠彌は酒を暴喫ひもする。醉もする。なれど前にも言ふ此盃の五盃十盃、其酒の三升四升、飲だとて舐たとて爛醉て不覺する程の骨無でない。視申され、此腕！此の腕節は鐵で鍛へて岩で固めた。十本の指、左右の臂、此れには開祖覺禪坊胤榮法印から禪榮坊胤舜權律師、覺舜坊胤淸法印、覺山坊胤風權少僧都の流祖代々の精神が籠つておりやるは！　熟う視て其の物を申されい。」老人は打傾首たり。「ふう、何さま鎌寶藏院代〳〵の系圖には明るい。ぢやが其の系圖は、他人の傳授一卷を偸視でも饒舌りは爲るゝ。又た其の鐵や岩で固めた腕、其れも乃爺には珍らしう無い、今でこそあれ既往の三河武士は、五體全身劍瘢で固めて、胯は鞍摩れ、蹠は小砂利で塡めて師走狐が鳴く聲といふこん〳〵鳴る。甚麼の其式の！」「では我等が腰拔とか?!」「腰は立たう、はは足も利かうは。其の小石を蹴轉ばかいた樣子では。」「技術が有るまいと被仰るの歟?!」「未だ見ぬうちは。」と首掉を掉れり。忠彌ははや爭論ず、徐に正雪を顧視て、「兄者、我等に就ての全體の不審は融けつらう？　今は見らるゝ通りの仕義ぢや。抱へらるゝ、抱へられぬの穿議は扨置いて、倚樣に申されては我等藝道の手前に對して一分濟め難い。なれど早や御身を義兄と立てた以上は諸事は御身次第、善惡裁判のしてお異りやれ。」此間は正雪に取りて有らま欲しかりしものなりき、彼は數回首頷きて、袴の稜角を引立て、殿へ申上げむとして其の御氣色を窺へば、今や何やらむ御思案の爲體。序如何と差控ふる時、殿、「民部、忠彌の義を如何と存ずるの？」「餘義ない義とも存ぜられまする。」「では有るが喃、其の敵手ぢやで。」殿は又た御首を捻らせ玉ふ。正雪が肚底には、其の敵手と仰するに欲しき者一個あり、其は此の上座なる全般につきて憎疾しき老人にて、彼を忠彌が對手に立たせ、散々に不覺させて以後何事の容喙をも成らぬ如くに恥面爬せむ、とは得ならず彌猛に思ふなるが、亦た彼が身柄といひ、今の殿の御意といひ、況て新參の我口より無二と然る事をば發議さるべうもあらぬなり。啞。如是らば、忠彌、慭ひの禮義立せで、御身と勝負！と眞地にも言ひたらましかば、常に似ぬ優順しき心根と思へるものも今は中々其機を失へる仇となりけり、など彼は其の悶惱しさに得耐へで、只管殿の、老爺起てとの御諚もあれかしと念じつ、御面をのみ注視き。

（百七十七）

一先づ型かな？　民部、忠彌に型をと申せ。寶藏院の型は神妙の物ぢやと聲くに。」正雪は此の御意を得て心中の本意無さ限り無きも、然りとて其をもどかむ術の非ず、忠彌にそれよと目を咬すれば、彼は一言をも言はず、其儘身を起して巍然と御庭に下立てり。御座敷は俄に動搖き立ちて、御兒小姓らは手に手に燭臺を擡げつ、御緣に近く居うる程に、宵闇の庭の面も、芝生、飛石、隈も無う見えて、其中央にぬ

ツく起てる忠彌が形相は、天晴れ一個の大巖の地より湧き出たらむとも見えつ、或は大峯熊野の天狗の此處に舞ひ下りたる歟とも怪訝れつ。「見事であるな、好い男振ぢや。誰ぞ、彼に道具を取らせ。」意得たる大學は二間柄の華毯附きたる鎌槍を持て出でゝ、いざとて遞與せば、彼は受けて地下に置き、先づ蹲踞うて、惰と會釋し、裃の肩をいと緩弛め、袴の股立を高く揭り、胸を撫で、精神を鎮めて、頓て一聲の懸聲と共に起上れるが、其の突出だせりと見る槍は人の目にも留らぬまで快速くして、突忽又た以前の姿勢に復せり。「手際ぢや！ 流星。善う使うた。」殿の御褒を得て、忠彌は屹と回顧りぬ。「御存知か？」「むゝ、奧允可八本の内の流星と見た。但し損じた歟？」忠彌は愕然たる其形容を正して、「恐れておざりまする、如何にも其の流星にござりまする。」「扨は損ぜぬな。今一手、十二本搦！ えい！」十二本搦とは、此も允可のものにして、敵の槍を打つ張つ、左右より隙なく搦めて突出だす間を得せしめざる、鎌槍の神妙を窮極し術なり。忠彌は益愕きて些と躊躇へるが、御詞の曳！ と懸れるに、物をと見れば、傍邊に垂枝梅の嫩葉濃く、其實の多く實りたるが一本あり。

彼はする〳〵と進み寄りて、槍の柄取り直す、と看る間に、「呀！」彼は此の垂下たる一枝を敵の槍にして、打張を懸けたるなり。打張は懸けたれども、眞正には懸けずして、枝との間隔一寸を措て懸けたりき。電光、石火、槍の穗尖は視る目も分ぬまで閃けども、觸らぬ枝は餘所を嵐の吹く如くに、葉も戰がず、枝も動かず、實の一顆だも墜ずして、危ふき鎌の其間に快よく眠れるが樣にぞ見えたる。爲たり、爲たり、の動搖きは此方に起りて、殿も御座に堪らせず、御緣の端に突立たせて、はや御現の、「出來たぞ忠彌、次は切鎌！」拍子をつけたる御聲は疾風のやうなり。敵の槍を鎌に搦みて、拯ひざまに冴をもて刎起すを、此流にて「切て棄」の手とはいふ、切鎌は其の微妙の神術を現はすものにて、彼が平日に最も得意とする其手の一つなり。彼は、他流の試合といふ武術の修行者の來る每に、自個の九尺柄の本も末も無き程なる太大なる短槍に、三寸の鐵の鎌の附けたるを持ち出でゝ、其が突く端を搦みつけ、切て棄れば、大方の槍は一刎にて其の螻蛄卷より折るゝ、といふ。既に先年正雪との最初の手合せし時、彼が槍をば此術にて遞たず折たれども、折るが否、彼が小太刀に眞甲を擊たれ、紕むを其場に投伏せられて、遂に彼が義弟とはなりけるなり、雖然、槍は忠彌が技の勝れりとて、正雪は猶是れを七分三分の勝負とは稱ひて恐れき。如是る本事ある忠彌、其の最も得手たる切鎌の御所望に遇うて何かは猶豫ふべき、今方に其の演武の興に入れる十二本搦の手を過めて、弓手に指出でたる松の下枝の、周圍三寸に餘れるものに立對へるが、「曳！」一つ搦みて、撲地と切れば、驚くべし、其枝はぽッきと折れて、凜たる穗尖は彼が睨める眼と共に其幹に向へりき。爰に到りて滿座聲無く、大學喜太郎も只其舌を戰かすのみ。

（百七十八）

既に我が十分の本事を視して、猶且つ人々が十二分の喝采を博し訖んぬ、今は是れ迄と氣色ばうたる忠彌は、彼の槍を小脇に挾みつ、徐々地と御緣の際に寄り來る時。「待て、忠彌！」喚往つ、閃乎と芝生に下立てる人のあり。扨は大學か、但しは御次なる若侍等か、兎角に優しや、と顧眄れば、思ひきや然はあらで、其人なりき。唯、我が目指せる其の老人なりき。然も老人の其手には、九尺柄の無き鎌槍あり、疑ひも無く彼は我と此場にての試合を望めるなり。我も固より望む處、先刻の氣色より察れば、正雪

も亦た此の憎さ老奴を我に一突させばやと思ふ面色なり、汝以て願ふに得つる哉、素奴、あの持たる槍、一刎に刎ねして胸板を一つ突く程ならば、鐵壁とてなじかは！ と思ふ色ははや眉に動きて、彼は覺えず力足を一つ踏締めたる、「御分、敵手に御立ちやらうと歟！」「うゝ、餘りに所作が面白いでよ。」「其技を我等に習はうと歟？」「うにや、太平の座敷槍、曲藝は其れが與多らう。戰場の死活の槍、其樣な彫鏤い事では。」「人が突留らぬ歟？」「人は愚か、犬でもぢやは。はゝゝゝ。」耐らぬ忠彌は迫きに迫きたり、然言ふ頬桁を、と侍らむとするを。「忠彌、惡しいぞ！」屹と顧れば、其聲は正雪なり。正雪は眼を角にせり、「忠彌、御事は！ 大事の勝負に迫くとは何事ぞ。されば こそ御事は醉ひつるな？ 此處にて不覺せば日來の名も其れ迄ぢやに。迫て可うか。ま、此水を喫め。」彼は御手水鉢なる柄杓に泛々と掬取りて、此の大切なる仕手に氣附を與へぬ。何さま急躁は我が稟性ながら、一つは酒の咎、げにも此處は迫るべき場所にあらず、疾く醉を醒してこそ、と彼は其の一杯の冷水に熱腸の耐難きを鎭降め、更らに臍下に氣力を充實さむとは試みたるが、生憎や、物前に遇へる掣肘の手と、自己が醉に注心ける戒懼の念とは、其の猪突の躁進を制して、聽するとには非ざるも稍我が勇威の殺減たるを感えき。雖然、如法の剛强の僻者なり、彼は聞きつゝ呵々と哄笑て、「甚麼が、兄者、迫き申さう。結構の御敵手、其の被仰る戰場の槍とは、突くものか撲つものか、其も見たう。又た我等が座敷の槍では、猫も突ぬか犬も留ぬか、但し人には中らうと思ふ程に、些と其を御目に懸うと存じて喃。」「勿論ぢや、其方も一流の者、覺えの術は音にも聞き、今も見た。えい、其の氣力一杯に諍う仕つりやれ。さらば、えい！」忠彌は遽てず、故らにのさ〳〵と歩みて、再び以前の閾裏に入れり。

此時の殿の御懸念は、また正雪が樣なるものにては非ざりき。彼の老人は、言ふにも及ばぬ當家御家老なり、御保傅なり、又た槍術の御師範たり、彼が鎌槍に巧て、既往の長久手の功名、其餘戰場にての數度の働きは親しう御存知の上ながらも、其は今より三四十年の以前にて、恁う皺も波らず、足腰も屈まざる際の事なり、今や七十、什麼氣力は衰耗へざらむも、癈るのみなる老の坂には既や杖を力の爲體なるを、敵手たる者は三十左右の血氣の奴、然も其の武藝、其の力量、音に聞けるよりも夥多しきをや、彼のあの雷の撃つ如き刃尖をば如何して停住め得む、住めずば軀も耐らじ。然りとて老爺も、敵の虚隙を確に認め得て、我が必勝を熟知ての上とは思ふなるも、或は其の毫心に惑ひしか、千鈞の弩を鼷鼠の爲に放てる愚には非ざる歟、老人の冷水とかいふ俚諺の嘲笑には陥ちざる歟、坂東一の猛者と聞えし實盛も、老ては手塚めに討たれしものを！ 萬一然もあらば此の仇、押取籠て討つべきか、其も究めて兒戲きたり、汚目々々と在らすも本意無し、扨甚麼とせむ、と千思萬慮苦悶ませ玉ふ御心には、自ら熊野三社、八幡、摩利支天も念ぜられつ、今更ら抑止め敢へ玉はぬ勝負如何と御覽ずる時。呀！ といふ懸聲は聞えて、兩條の槍は戞乎と合へり。

（百七十九）

合ひたる槍は、又忽地離れぬ、是れ忠彌が一歩を退却れるなり。彼は何故に退却れる歟。今の帶刀が形相は實に愕くべきもの有りき、其れが屈めりと見えたる腰の、生ひ立つ若竹の如くに伸びたる、踏みたる足の、鐵の柱の地より拔出でたらむが如き、其等は扨其れにて有るべ

きも、一種名狀すべからざる不可思議の神威は渾身間隙なく充溢して、剛さ、從前にすら怖ろしかりし彼が眼は、太陽に對へる鏡の閃くなんど言ふ如き類にあらず、是ぞ彼の兵法に言ふ、先づ勝而後進むといふもの與と驚ける忠彌、逸早く一歩を退りて、彼が出る端の徵をと狙へるなりき。退歩るを得たりと狙入むとしたれども、彼も亦善く其術に識れて、此の破綻をも見せざりけり、加之ならず彼が眼色、後先の先をと心懸る體の見えたるに老人も其勢に乘り得ずして、看る〳〵其が爲す隨に委せり。

今や雙方の吻く呼息は暴風の如くして、額より流るゝ汗は驟雨を浴みたる如くなり、此の悽愴じき勝負を視る者の眼も、同じく雨條の槍尖に釘もて釘着けたる如くとなりて、其の呼吸も喘げり。然有れども彼等が四隻の眼、四個の肱、四根の脚は分寸も動かぬなり、最初こそ一聲二聲の誘引の懸聲といふを聞きたれども、後には只、忠彌が虎鬚の顫々と戰くと、帶刀が白銀なす鬢毛の蕭々と動搖くと觀るのみにて、一方の眼中は漸次に血走り、一方の瞳子には益々荒涼き光輝を増しつゝ、如是てならば此の兩雄、但是れ兩箇の巖石と化りて、立竦める儘に果てなむ與と見る折柄なりき。何者とか發見されけむ、「見えた勝負!!」此聲は不思議にも殿と正雪とが兩つの口より、恰も同時の、其の刹那に出たりき。疾しや遲しと驅寄れる大學喜太郎、透さず其の兩條の槍を押へて、「御讓ざふ!」「何を御讓?　要らぬ世話、えい放せッ!」「いや老爺、好え〳〵、是れ逆ぢや。まゝ此方へ斯う參れ。」殿は御手に額の汗を拭はせつ、胸を撫でつ、莞爾たる御機嫌斜ならず見えたるにも、老人の不興は收らずして、「殿、甚麼ぢやとて邪魔お爲やッた。武道の面皮お缺きやつた!」殿は其間をば其方退にして、「民部、勝負が見えたといふ……何と視た?」「御家老の御勝利にござりまする。」「むゝ、而て其の裁判は?」正雪は袖搔き合せつ、「老人が眼の据り、忠彌が眼の流れ。批判は爾樣にござりまする。」「むゝ、善う觀たが。」と殿には俄かに打案ぜさせ玉へる氣色して「其の眼星の動く否ぬは予も同意ぢやが、忠彌眼の注け方は、老爺より少し早うは無きか?　兎角は是れは對々のもの、予に言はすれば相突きぢや。然るにても忠彌本事は大晴のもの、老爺、彼を召抱へうに不同意はあるまいな。」彼は此の御批判に不足してか、益々其顏を嚴まして、非ぬ方を南向たりき、殿は窮めて御本意無けなり、正雪は其れと見て徐と忠彌に目を授せぬ、忠彌は莞て罷り出でたり。「殿、其義は御無用になされい。」「ふう、何故ぢや?」御機嫌は太く損ぜり。其にも彼は頓着せず、「忠彌、突負けたとおざりまする。負けた忠彌に御用どもおざりますまい。又我等も負けての仕官は餘り面目とも存じ申さぬ。旁是れは御無用の方、好うござりませう。」膠も無く言ひ放つを、押返させて、「要らぬ遠慮ぢや。予が見込で召抱へうと思ふもの……但し主に不足な歟?」御聲は稍暴やかなり。

（百八十）

忠彌は倒りて呵々と笑ひて、「殿は御三家の御一人、當將軍家の叔父ご、從一位の大納言、御身柄に取っても御官位においても忠彌主と仰ぎ申すに何の不足かおざらう歟。只我等は。」「えい其のお事は?」「主取するが否でおざる!」「いや、然は言ふな、其の否ぢやといふ、定めて今の勝負であらう。勝負は運ぢや。況てお事の負というたは正雪が當座の會釋ぢや。予が見たるは、老爺が其方の面上を突かば、其方は老爺が胸部へとまゐる、民部は眼の流れと申せども、予は却りて眼の動作と見つるぞ。兎角は相突、無勝負ぢや。凡そ既往の長久手以來、今の世に功名名だゝる槍取りの老武者安藤帶刀と

相突とあらば、不足かは知らぬが、甚麽も其方が不面目とは有るまい。不面目ならずば其不足ないたと其方も言ふ予が家士となれ。な。其方が義兄といふ民部すら既に家來ぢや。其の義弟たる其方……。予は其方ら兄弟を竝べて、梅櫻として見たい。」身に餘り、心に餘れる御詞の有難さに、忠彌は感奮して、兩眼に溢るゝ熱涙を禁め敢へざりき。げに眞實、士は己を知る者の爲に死すと言へるも、今の我身に想當れり。恁くまでに我を熟知せて、我が面目を贔屓たまふ此殿の爲には、忠彌が六尺の軀を唯今御馬前に抛出して、此の憎體の豁首、御用とあらば進らせなむも露塵惜しからず、其のみかは、現に仰する、義兄と立つる正雪も其の御内たり、義弟たる我が同じ御恩の下に在らむも甚麽の怪しい事。寧そは！ とまで念へるが、否、と彼は又た飜念せり。待て暫し我心、義兄なる人の分別は知らず、此の忠彌は潔癖なり、恩を受けては其恩の爲に死せざる可らず、祿を食みては其祿の爲に役せざる可らず、既に江戸を敵として一たびは天下に旗をと思ひ起てる身の、什麽然は貳くも。其の敵の一家たり親族たる此殿の御内とは名告らむや、忠彌は男兒なり、一回心頭に誓へる事は身を卒ふるまで渝じ、目下の辱けなさは骨節に徹りて覺ゆるものゝ、此の新恩の爲に、黨の舊盟は棄て難し、と彼は齒を切ばれり。

彼は漸くに感涙を拂ひぬ、「御意誠に殘る處なく、忠彌心魂に沁みて覺えまする、恁くまでの御諚の上は忠彌亦た心底隱まず申上げまする。原來が此の忠彌といふ奴、御覽ぜらるゝ通りの我儘者、頭の支ふる御奉公など身においては到底が成りませぬ。憚りにはござりますれど、椀持ちて飯食ふほどの甕、母子に妻女、飢ず凍えず過ごしまする程の代は些少ながら身に有ちてござりまする。其れを活計に、主も持たず、家來も使はず、只思ふが儘に世を渡る、天下に苦勞知りませぬ浪人の氣散じが忠彌め身に相應かと存じまするで……折角の御意にはござりますれど……」殿は唯、御嗟歎のみ。彼が本性、果然其の閑雲野鶴の生涯に安んずべきものならざるは御存知なるも、亦た其の豪宕不屈の氣は、竟に撓ますべからざるを奈何せむ。「むゝ、其れで其の主取は否、といふぢや喃？」「其通りにおざりまする。」「むゝ、然りとては是非無いが、遺憾いぞ。忠彌、何か所望は無き歟？」彼は重ね〴〵の御芳志に、はや以前の「御用心の意趣」聞かうとも言はぬなり。

只管感涙を拭ふ樣なるを、正雪、「忠彌、折角の御意、辭退は恐惶ぢやぞ。」「も、何物も要り申さぬ、只此儘の御暇……」「彼奴は尚樣に申まする。恐れながら其身の面目ともござりまするに、御褒美の御狀など……」殿は首頷せて、「む、感狀、道理ぢや。老爺、如何ぢやな、其狀を取らすは？」彼も點領きて、此事には然のみの故障をも言はざりき。然らばと殿は大擧して其の御狀を書かしめらる。槍術一見之處、拔群之手並感心淺からず、神妙に思ふもの也、年、月、日、とある其下に、御名、丸橋忠彌へ。「恐れではござりまするが、何卒、御判の遊ばされて。」言ふ正雪が面を、殿は早焉と睨めさせたる、其れをも空知らぬ顏、「彼めが一代、子孫末代の家の寶物にござりまする、何卒、此の願意聞し食し入られて……」其言の道理あるに殿も否とは仰せ難ねぬ、御首は暫時傾けるが、軈て虎といふ御判は据れり。正雪は忠彌に代りて三度額に押戴きぬ。此時、帶刀は用事に立ちて、御前に侍せざりき。

（百八十一）

天意の棄てざるか、人智の勝れるか、さしも一期の際と見えたる紀の關守が鰐の口を、たつか弓、征矢のはづかに遁れ得て、正雪忠彌らは數

日の後大阪へと發途ぬ。甲斐無しとも、甲斐無かりしは紀伊國君臣が上なりき。大納言殿の御胸算にして、帶刀の老人が計畫にして、偶か一致の運動を執らば、既に網裏なる魚を捕う易々と逃しも爲べからざらましを、君は臣に憚かる所あり、臣は君を危ぶむ所あり、遂に進退合期せずして、彼の檻に繋げる猛虎を看る〳〵野に放ち、其の一層の害毒を橫恣にせしむるに到れること、抑、天か、否、之を人爲と謂はむ哉。

殿の御思し食は、最初より、彼の師弟たり、父子たり、兄弟たる男女三人を御手許に引附けさせて、俸祿の餌に饗せ、邸宅の檻に鎖閉て、御恩の桎梏に手足を緊縛めむと爲たまふに有りき、如是して、彼の悪獸らの、首を低れ、尾を伏せて、生涯を委せ奉つらば扨て其儘にて措かれむ、然なくば既に君臣の名あり、主從の義あり、縱令其れが爪を張り、牙を磨がむも、之が肉を屠り、皮を剝がむに甚麼事のあるべき、とは思し決め玉へるなりき。老人の慮ふ所は然は有らぬなり、我殿は今の世に兩個となき可怖しき人にておはす。其の御武略は父の子とて自ら故大御所にも肯させ玉ふに、又其の腹量の太大なる故太閤にも優れ玉へるもの有るやうなり、今こそあれ、我が亡き後、又た江戶將軍家に變事かのおはしませる時、果然不思議を思食立つこと有るまじき歟、否ぬ歟、龍となり蛇となるの變化は今よりして誰か善く之を豫測り得む。御一個でおはしてすら然あるを、況て彼奴らを御側に附け置くをや、猫に木天蓼、狂漢に刃物といふ俗の危險を言ふ比諭も中々に愚かなるべし。されど彼奴らを散々に窘みつけて、再度と此の紀伊國領へ足踏の協らぬやうに爲る、機會を見て殿に强便の强異見する、此の兩條こそ此の老奴が衆士の中より御見立にあづかりし故殿（大御所）への御奉公、予が亡後に長福（大納言殿御幼名）が前途を賴むとありし御遺言に對する服務、天下の靜謐、海內の安堵、御宗家の長久、當紀州の繁昌を籌る我が職掌なれ、と一途に思ひ込める彼が一轍は、蓆ならぬ卷くべうも非ず、石ならぬ動かすべうも非ぬものなりき。此の君臣の齟齬は彼等に中分の利を得られたり、彼等は猶虎穴に入りて圖らざるに其が虎兒を獲たり。虎兒とは甚麼ぞ。名さへ其物なる殿が虎といふ御判なり。彼等は和歌山を發途て、山中の峠を踰るまではいと徐々に打ちたるが、軈て紀伊國の領を離れて和泉の堺界に入るが否、僕を急がせ人夫を驅り立て、堺住吉の見物をも爲で大阪に着き、船場の某處に潛みて、多時は其蹤跡をも見せざりき。かゝる中に正雪は、供なる鵜野に密意を含め、江戶に下して金井を喚上せ、又た若黨に打扮せたる腹心の弟子共を八方へ趨らせて、紀伊殿人數の御入用あり、一廉の者をば所望の祿にて御抱へあるべし、其の奉行として由井民部介近日當地に到着、との事を內々に觸させたれば、先年以來、飢寒に堪へで非ぬ農家に身を託せたる、町人の寄食人たる、夜は出でゝ辻講釋せる、賣卜者となれる、道中の上下の人夫、乞食、非人、强盜とまで落魄れる大阪の浪人、諸家の亡命者、沒收大名の有附き得ぬ武士、乃至天草島原の一揆の殘黨ら、此の風說を竊かに聞き傳へ、口より耳へと云ひもて觸して、あはれ由井殿御上りあらば、祿の多少には由べからず、只以前の身に引上られて殿の御馬前に奔り廻り、如是て飢凍えて死なむ生命を今一度槍の穗先に鮮血の花を咲させて賜はらばや、と手薬煉を引く者五百餘人、其れ其れの紹介を便りて彼の若黨にすら小腰を屈めつ、我が案内の日の他より先ならむことを翹み入る光景なりき。

（百八十二）

鵜野して喚上せたる金井は來れり、彼は師の命の隨に五千金を護して來れり、正雪は此金を

得ると同時に、又彼の若黨らして豫ての浪人共を竊に招かせぬ。其等が者に逢ふ時刻として、彼は夜の酉の刻より亥の刻を撰みたるに、一夜に逢ふ者三人より七人を限りたれば、些少も他の目を牽くに到らず、其の百日に餘れる久しき間も、彼の殿が折角に心を籠られつる七里目付すら此事を聞き出さで、和歌山へは終に知れざりき。彼が祕密は善く保持たれけり、彼が殿の御名を藉りて此時に嘯集め得たる者、豫算ての人數より增して七百餘人に及べるが、彼は先づ一々に、其の素性、來歷、戰場に臨めることの有るや否や、又其功の有無、得手たる武藝、材能、技術等を委しく問訊て、人品を視、容態を覘、言語を聞き、應對を試みつゝも、其の程々に寄り、或は十兩、廿兩、五十兩、百兩と大鷹の檀紙に包めるを初見參の引出物として之に與へ、終りて更に奧まれる間に導くなり。此處には高麗といふ緣の浮き疊を幾十片か敷て、長押には紫色の御紋の幕を走らせたり、其の上段の一段高き上疊に、檜の香鼻を貫くばかりなる巨大に新しき三寶を据て、これに殿より自己に賜はれりといふ御判の狀をいと恭々しう飾れり。正雪は、例の精好の其色雪の如き法眼袴に、黑き縮緬の御紋の服、顯紋紗の胴服の胸紐袴にして、出し鮫に黃金の目貫せる小刀を前半に指誇らしたる、人品骨柄更に云ふべき方も無きに、彼の御判の狀を物々しう取卸し、謹みて拜見せしめて、其れより彼が遽てず躁がざる能辯もて、大納言殿の彼等を頼み思し食すよしを言ひ、御分ら彌、彼殿に貳心なき御奉公せむとならば身命二つあるまじき誓詞血判、此の牛王の裏に、三世の御緣を結ばれよ、但し否とあるべくば、只今其旨眞直に申斷らるべしと言ふ。其の顏色嚴格なり。彼等も最初より其心なり、況んや轍鮒の水に遇へる如き先刻の引出物をや、此の神々しき場所に拜める僞りあるまじき御判をや、正雪の風采、辯口をや、自己らを頼むと仰するをや、いづれか一つ有りてもなるを、其の多くを具備たるをや、何條其の誓詞を否まむ、血判を辭せむ、梵天帝釋四大天王、伊勢春日熊野三社を驚かしたる神文に指の血を濺ぎ懸けて、各額上の熱汗を拭ひつ差出だす者のみなるを、彼は受けつゝ、其れより更に彼の御判に對ひて改めて君臣の禮を執り、三度を拜せしめ、正雪御取次の役として盃を賜はすなり。畢りて再び演述す、其の演述は、紀伊殿御謀叛のやうにも非ず、亦た御謀叛ならざる非ず、只何事まれ天下に色目立つ變事あらば、尼崎、茨木、奈良、堺、凡そ攝河泉に大和なる者共は大阪に馳せ參じ諸事は正雪、又た其れが部下の大將が下知につきて進退を守るべし、其期とても速くば今年、遲くとも三年をば出づまじきに、各位其身を堅固にして詮として前途の榮耀を翼へよかし、勿論此事は祕中の祕ぞ、努々、構へて親子兄弟たりとも漏泄すな、といふ一個々々を嚴重に警誡めたるが、神文にや懼れけむ、紀伊國といふをや憑みけむ、又は正雪が威望にや服しけむ、彼等は善く其が訓戒を守りて、然ばかりの多勢なるにも終に其等が口よりして、何事も世に漏脫ざりき。

恁くして彼は大阪を終了れり、彼は其れより京都に行きぬ。此處にて此年を暮らして、翌年の春より中國に越え、下の關より小倉に渡りて、福岡に趨き、久留米に過り、柳川に游び、佐賀に逗り、唐津、平戶、大村、長崎と回りて、其年も亦た徂きぬ。此間の彼が艱苦は一々云ふべからざるもの有て、成功と失敗とは相半はせり、然れど其の危難に遇ふ毎に、彼の膽は愈其大を加へ、其智は彌其の機敏を倍して、或は紀伊國殿御名を利用ひ、或は自個の武力に藉り、斷崖奔馬を驅るの危殆きを善く順風に帆を颺るの安易きに翻して、禍を轉じて福となし

たるも多かりき。今や彼が名は九州に轟けり、或る者は惡魔の襲來として恐れたれども、又或る者は菩薩の影向として歡び迎へぬ、就中特更に密使を發して彼が一行の疾く來らむを望めるは天草なり、其言に據れば彼の島人の彼を待つこと天有主の手を見るが如しと言ふ。噫神の手か、全智全能の此神の手にも太甚だ意の如くならざるに苦悶むもの一個あるなり。

憫れむべし、彼は此の二年の旅行を繼けて、其の嚢中は今や涸渇たり、然も滾々として竭ざるべしと暗に賴憑める源泉は、無情、一滴の惠露をも我に與へぬなり。彼は初めて窮しぬ、幾ど其の思案に暮れたり。

(百八十三)

彼は今、五畿南道、山陽、西海に黨與を得ること實に一萬に餘りき、されど又た是れが爲に費消せる金五萬五千兩——年來の貯蓄も今は全く其底を拂ひて、嘗て我が非常準備の金穴と賴憑みたる駿府の足洗村半左衛門らにすら若干の負債を生じぬ、然も其等の豪農富商が融通の途も、漸次に細瘦り行かむとするに、彼の大膽不敵、物を物ともせざる彼も、幾と其の思案に餘して、今後の進退如何の胸に手を當てぬ。彼は嘗て、松坂にて、兵庫に趣けりし時、其身の分限を誇りて、有金五萬兩、兵糧八萬石、人數十三萬とは云へりき、人數と兵糧とは其の有無の如何を知らざるも、當時の有金は確かに三萬兩の內外を有てりき、三萬兩の金銀、もとより寡きが如きを奈何せむ。

彼は果然此の些少の金を投じて、此の動天驚地的絕大の企望を做し遂げむと謀れる歟、倘し然りとせば、彼は三文の錢を賽げて、千萬の富を祈願る世の愚夫の爲に倣へるものなり、如是くして容易く柳營三代の基業を顚覆し得べくんば、甚麼人か又た天下に覇たらざらむ、彼の無算も亦た甚太しい哉。

然れども、彼は當時の智ある者なり、蓋うて横海の巨鯨を制せむとして獨繭絲を繰るといふの類には非じ、彼は十分に計畫せり、耕す者は其の耒耜を具へざるべからず、賈ふ者は其の廛鋪を備へざるべからず、今の我たる者は、地位あり、名望あり、富且つ貴にして、然も轗軻不遇なる人を撰擇ざるべからずとして、彼は洽く搜索せり。然して寬裕にして士を愛し、明決にして善く斷ず、其武、其勇、優に古を壓して今に匹儔なし、これに由て他の猜疑を得て、輙もすれば其の首領をだも保たざらむとす、然も其廩を見れば、粟實てり、其庫を見れば、甲冑旌旗充斥てり、其地位を問へば、柳營の一家、其官爵を問へば、從二位の大納言、其心事を問へば、甲裝百萬石たるべき人の今は僅に南紀の五十五萬石！ 此れ豈我が爲の天造にして地設たる人ならざらむや。之に因りて彼は一たび說きにき、二たび說きにき、其の說く每に、彼は其人の我が說を容れ、我が才を愛するを見て、聊かも厭惡するを見ず、或は謀策を設けて其城を燒き、其士を竊むも、彼は罪せぬなり、或は其を誣ひて其罪に陷れむとしたるも、彼は問はぬなり、或は擅に其の家士の名を冒すも、彼は尤めぬなり、或時は其生父に均しき老傅の言を黜けても、我を庇護し玉へり、或時は其の不思議の罪を犯せる者をも、我友とあれば、許容させたり、然して我黨の心事は、蓋し其の熟知し玉ふ處、此の心事を熟う知り玉ひて彼が如くに欵遇さるゝ、未だ臂を刺し、血を啜りて、共に天地神明の冥慮をこそは驚かさゞれ、此を既に我黨一味の仁として見むも誰か其を非ずと謂はむや、と信じて疑はざる彼は、可憫其の殿の外表のみを見て、其の內裏の、彼等に對する御計畫といふを看徹き得ぬなりき、唯殿の今容易く思し食し立ち玉はぬは、一つは彼の帶刀の在ると、二つには當時の將軍家三代家光公が

英明を憚らせらるゝとに過ぎざるべしと偽り、然も其の帶刀といふも、見る處餘命幾程もなき老人なり、殊に其の大事の際に僻の似而非忠義の頑硬なる諫言どもせば、其を討て棄てなむも易きなり、又た第二の將軍家と申すも、近來は御不例勝にて、奥にのみ在はし、諸家より献上の踊、狂言に御餘念の無しとやらむ聞けばこれを計策るに難からず、只天下の人心の殿に屬望きゐますこと如是し、其を空にもし玉はむには所謂る天の與ふるを取らざるなり、御身の禍害測り難たしとも云ばゞ、彼の殿とて、やはか、と云ふ肚思一つと、猶其の和歌山を發途る折に、他知らぬ懇切なる御意ありたるとを頼憑にして、此の二箇年に彼の多勢を語合ひ、此の多額を散與るなるが、仇なりき、先頃も再度まで半兵衛(金井)して、御手許の金子拜借を願ひ出させしも終に御沙汰無く、加之ならず喜太郎をもて其の金子の費途なんどを鞫問させらるゝ、妥穩かならぬ爲體なるに彼も機を察て遁げ歸れるが、如是ては我が肝も太く狂ふなり、其れ許りかは江戸よりは、何程に誅求らるゝとも今は奈何とも協らぬなり、其方の難義は然あらむも、此方の苦痛をも察せられよ、兎角は一日も疾く歸府を待つといふ言效もなき狀のみなるに、神の手と崇敬はるべき正雪が腕は、あはれ拱れて、其の懸河の辯を弄ぶべき口も吐息のみに、「甚麼なるべき、此よりは駿府の家を!」、彼は其を沽却むとにや?

(百八十四)

寛永は前に改まりて、正保となり、其れも過ぎて此時は慶安の號とぞなれりける。抑年號に慶の字を用ふること、古に慶雲あり、元慶あり、天慶あり、延慶、正慶、嘉慶あり、近くに慶長あり、慶雲には御代めでたく、四海昇平なりしかども、猶此の年號に天皇(文武)は崩御ありき、元慶の帝(陽成)と申すは×××××××××××××××××××、これより藤氏の權勢は朝に萌りぬ(基經××の事)、天慶は云ふにも及ばず、將門純友の亂あり、延慶の改元の年は後醍醐院立太子の御時にて、元弘建武の亂は遠く此時に胚胎せり、正慶には鎌倉九代の繁昌も夢と亡び、嘉慶には南朝三世の帝業も有明方の燈火と消えぬ、慶長には人も知る關が原大阪の御陣あり、或は其方ざまにつきては之を吉祥の兆ともいふべきも、兎角は舊きも新しきに變換て、且は死亡兵革に意を含める歟、されば只今の慶安の號、當時三代の柳營に取りてはめでたき文字といふべからず、など何者の云ひ出だしけむ、江戸京大阪その餘海道の諸國にても聞き傳へて自ら響めき合へるが、此時又た、將軍家の御病惱漸次に重らせ玉ひ、今後百日との御存命覺束なき容態とはなれり、これに依て、尾張紀伊水戸越前等の御一家は勿論、加賀薩摩仙臺を初として、國主、城主、總じて十萬石以上の諸侯を召させ、御遺言ども有らすべしとの沙汰、同じく江戸にて取り離せしものなるべし、麹町なる上館より彼の時限の脚夫を馳て、此趣を和歌山へ注進せり。

此年は御暇の年にて、大納言殿は御在國なりき、豫て彼の忌はしき風說ども聞せて、將軍家の御容體を心許なく思し食す最中なり、今や其の御大切はや三月に逼れりとあるに今更の御驚愕は大方ならず、急ぎ渡邊大學を召させて、云々の始末なり、予は明年の參府なれども上の然くおはすと聞ては一日も安んじて此の遠方に在るに堪へぬなり、其方疾く江戸に行て、老中に就き、予が參觀の免許を得て、又疾う歸り來よ、遲々りて御最期の際にも後れば賴宣一代の遺恨なるべし、疾く參れ、とある主命は一刻の猶豫をも與へ玉はず、かゝる急場の御使に馴れたる大學は、御判の狀賜はると齊しく身を起し、不斷に準備せる急籠に打乘て、其の和歌山

を發途たるより今回も又た晝夜三日に江戸に着き、江戸家老水野對馬に御判を示し、御意を傳へて、急ぎ其の免許を乞ひぬ。誰か知らむ、此の風聞も、其の取沙汰も、亦た彼の執念き彼者の殿を目指せる胸裏の機計ならむとは。

＊　＊　＊　＊

御本丸なる御黒書院は、大事の談合を行はるるとて今日は朝より人拂なり、但見る井伊掃部頭直孝を上座にして、堀田加賀守正盛其の次席たり、それに續くは松平伊豆守信綱、阿部豐後守忠秋、阿部對馬守重次、少し離れて酒井讃岐守忠勝あり、御紙襖四方を遠く明放ちて、隙見も竊聞も協はぬ如くにす、雖爲加賀殿が大聲、伊豆殿が其の甲走れる聲、豐後殿が底より響く調子太き胴聲とは、天井に觸れ、御疊に反響て、言の端々を斷續に、自然他に漏らすものありき。

先刻より取頻れる伊豆殿は、此時、其僻なる袴の稜角を撮み擧げつゝ、「……物怪でござらぬ歟、試み申すに……の事もあり、旁、な……許し申さう。」豐後殿は、自ら此れには反對の語氣なりき、首を傾げて、「ではおざるに、假初ならぬ……萬民に信義を失なはゞ、向後の……際ともあらざる歟……其際ですら……上の御不爲……」扇を揚て、制へ止らるゝ如き態なるを、加賀殿、「……とあらば斟酌も要り申すまい、只押懸けて踏潰す……たとひ然はおざらうも天下の爲ぢや、豆州の評議……掃部殿、讃州にも御異議は……」終日の此の評議は抑も甚麼か。只其れが翌日に水野は召されて、大納言殿御參府勝手たるべしとの事、伊豆殿口上にて傳へられぬ。

（百八十五）

這回は御心急きの御道中とて、供立、宿割、恆例の式をも守らせず、幾と晝夜兼行の御爲體にて、和歌山を御發途の五日目に、大納言殿は駿河國府中の驛舍に着き玉ふ、御供の頭たる者は彼の大學一人なり。本陣に御座なされて後、急ぎ大學を御使にて、時の駿府城代を訪はせ、江戸表の左右如何にやと問はしめらる。萬一は將軍家御異變の早打ども當所に來れる歟を氣支ひ思し食しての義なりき。と、有る間も無く、大學は御城代大久保玄蕃頭と同道にて歸り來れり、其の面色喜憂相半して、兎角は平ならず。御返辭を申上ぐるや直ちに又其の仰として玄蕃を御座所に案內せり。躄り出づるや、殿は御裀を半分外させて、「玄蕃か、近う。」「長途の御勞れもおはしませいで御元氣の體……」「いや其れよりも、」と其の半分なりし御裀を更に除させつ、「上には御心地快い方に渡らせらるゝとな？　其狀は何時着いた歟？」玄蕃は低頭して、「昨夜丑の刻におざりまする。先づ以て恐悅の御義。但し其れにつき殿の御進退、玄蕃近ごろ氣の毒の事と存じまする。」「むゝ、今聞いた。先づ其の予への奉書を見せ。」彼は恭々しく其の懷裏にせし帛紗を解きて、中なる狀を進らせたり。殿は其が封押折かせ、熟と御覽じて、「むゝ、予が當地の着を待受けて手渡しにせいと有た喃？　而て其餘に何事かの下知もあつた歟。」「其の通りにおざりまする。又別樣の御下知もござりますれど、是は我等限り、御聞には入れられませぬ。」僞はらぬを武士の面目として、尾張とも紀伊ともあれ、將軍家の御代官たる時の執政の下知の外、其餘を顧みぬ三河氣質を殿は然もこそと、「道理ぢや、聞くにも及ばぬ。但し上の御快氣といふ、其方にも申し越した喃？」「上樣益御機嫌克とは筆の初におざり申した。」「むゝ、其れにて安堵ぢや。予も軈て引返さう。」「御尤におざりまする。」異むべし、紀伊殿此地着を待つけて、玄蕃手して進らすべしとある江戸よりの書狀は、上樣御容體追々御快方渡らせらるゝにつき、御安心なさ

れ、先達て御願の參府の義は只今の處御無用なるべし云々といふ、伊豆守、豐後守、對馬守、三人連署の公然たる奉書なりき。もとより柳營御齡も未だ五十には至らず、御生得は剛健なる方ではあり、典藥の調劑、諸寺諸山の御祈禱、朝夕の御保養、等閑なるべきやうも有らぬに、御快方とあること當然の御義とは思し食しなるも、亦た此程の參府の御願たる半月にも足らぬ前の事ぞかし、縱令此方より何樣の義を云ひ出で玉はむも、其を受容るゝ程の事情彼方に無くば免許の沙汰有るべからぬ次第なるを、倏忽に御重體、倏忽に御快方、倏ちに許容の沙汰して、又忽ちに之を差止む、況んや其れも新附、外樣の御心隔かるゝ者とも有らむをや、現在の一門、叔父甥の御中、病氣を案ぜらるゝからの御見舞とあらば欣びても御迎への事あるべきを、百五十里の道途を遙々と越えて、今兩三日して對面とある其際に偬う不思議を仰せ出ださる、其も上樣には甚麼事の御存知とても有るまじきが、只執政等が計ひ、其意を得ざるもの哉、との御不滿は蓋た其の御心にも思し食たるらむも、例の事とて御色目にも見せ玉はず、兎角は安意ぢや。但し故々とも參詣らうものを好い折ぢやに、明日は久能へ詣でう。玄蕃計らへ。大學、今夜より潔齋をと申せ。―公儀と申せば、何事にても其通りと御沙汰あるが此殿の御平生、と聞きしにも違はぬかな、哀れ是如る忠信の叔父君を、江戸にては何故に然は忌まるゝやらむ、玄蕃、神文の面さへ無くば、江戸の御下知内々に御耳打して、前途の御用心をも爲せ申さむを、と彼は殿の御面を望みてはら〳〵と涙を流しぬ。時に、御旅館の門外に、早追の聲頻りて、駕は早く玄關に入りぬ。中より出づるは、江戸家老の水野對馬なり。彼、果して甚麼樣の急報を齎らしたる歟？

（百八十六）

江戸詰御家老水野對馬が早打とあるに驚愕かせたる大納言殿は、疾く〳〵と召されぬ。心ならざる玄蕃も座を立ち難ねたる、其席一息も喘しく入り來りて平伏せる對馬が面は、はや色も無きまでなりき。―やア、對馬、何事か？　心許ないぞ。―彼は左右を睨回して、―はつ、恐ながら御人拂を。―む‥―大學は御意をも待たず、突と起ちて、御座敷の前後、詰り〳〵へ眼を配れり。時に、玄蕃は、―對州、御人拂とおざる、殿御一家の御大事か、但し天下の御大事か。御一家の事とあらば遠慮申さう。倘か天下の御義とあらば我等も駿府御城代の身、寄と承はりたい。勿論、誓紙御所望ならば‥‥―其の凝眼なるを御覽ずるより、殿は逸早く御目を他方へ、注がせて、「對馬、其義は？‥‥天下の御事‥‥‥‥倘かお事を予に討てとあるなりや甚麼と爲る？―礑と睨ませ玉ふにも彼は聽せぬなり。―御手に逢ひまする。玄蕃、此座で御手に逢ひまする。但し我等御手に逢ひますより、殿が物の目に御逢ひなされるが笑止とも存ずる際、我等に御聞せなされたが好うおさらう。―抑此の玄蕃忠成は故の七郎右衞門忠世の四男にして、此ほど死したる相模守忠隣が弟なり、天正年中より故大御所に奉仕（御書院番）して、去る夏陣にも其の拔群の功名を賞せられ、千石の御加增をさへ賜はりつる士、御家久しき譜代といひ、年來の御知人といひ、其身の武功といひ、又た其の氣質といひ、旁大事を漏されたりとても、さと慌遽たる所爲すべき者ならず、特に況んや唯今の甚麼やらむ物有り氣の言分をや、何とは無きも世の中の事心許なう思す時節、確と其日を緊縛めて扱て江戸よりの注進を聞かば、亦た自然我が心得ともなるべき件を彼が助言に獲ることの莫からずや、然らば、と首肯せ玉へる殿、―聞屆けた、玄蕃、我等、誓詞！‥‥日光、

久能南御宮、八幡摩利支天、伊豆箱根三島の三社、殿が御國の熊野權現、忠貞、他言爲申すまい。」「苛し、對馬、委細を申せ。」殿が跪と御覽じたる御顔色を視せて、水戸は近う躪り侍りぬ、其等の膝も顫へて前み…「餘事とてもござりませぬ、恐れながら上様御容體は、南三日内との御義にござりまする。」「えい。」と殿が顔伏ふ御眼と、愕きて其等が瞻上ぐる目と、期せずして撲地と合へりき、其者は齎らずして膝を摺寄せたり、「紀州、其は……其は誰人より御聞きやれた？」「伊豆殿が口達おざる。」「え！　伊豆殿？」覺えず絶叫ぶを、殿は止々と抑め直して、「對馬、而して其後は？」「一昨夜子の刻におざりまする。後に我等を龍の口御用屋敷に召出されて密々に御面會の上、此義極中の秘なれども他ならぬ紀伊國殿へ、自分心注として申し進ずる。上様御容體、今晩までは追々御快方と見申すところ、夕刻申の刻より俄に御發熱、平ならぬ御有様との注進に登城しつれば、御侍醫五七輩より申し出でつる、御脈の狀、御症等の樣、御大切に、六日南三日の内、御長くとも四五日が程と、館林に申す。我等を初め閣員の苦慮は云ふまでも候はず、公御西丸樣御義は僅ほ御幼稚のことに四代家綱公、此時十歲。尾州家義直卿）には此ほど逝去、御親族の御年長られたるは只紀州と水戸の兩家、就中紀伊殿をば當御代には一方ならず親み思し食されたる御義とて、彼諸語のやう在る中にも、紀伊國の登城は未だか、追懸の使者疾う進らせよ、一日遇うて、なんどゝも仰せらるゝ。恐察のところ、御生前に是非御對顔にて、天下の御置目、幼君の御補佐、旁々全體の御遺言をも遊ばされたき、眞實に餘義なき御心中か。尤も此程の出府御願をば、何にいふ御快方の爲め差止め申し、其の奉書をば駿府城代手許よりして進達の手筈とは爲つれども、其れは屆かおはしまさざる際の事、只今は後悔も其期に及ばず、恐ては其方、今夜にも急ぎ發途して此の仔細を殿に申し、明日にも引返して江戸着あるやう。此方よりの改めたる奉書、御使は明曉までに出立たせう。只今は先づ伊豆一分の意見として書通を進ずる。急げ。頼む。」との御口達、他事もおざらぬに疾參じておざりまする。」と、彼は呼吸も繼ぎあへず、領に懸けたる袋より其の書狀を執出して、謹みて呈せり。

（百八十七）

對馬が言上の中より殿の御氣色ははや御座にも耐らぬ如し。京州が判の狀一通りきつと御覽じて、「對馬、遠路大儀であつた。然るにても伊豆が厚意……予はこれより打立たう。供の用意疾う！」「御發途とござりますか？」「勿論ぢや、上の御待兼、想へば然もあらう。予は一刻も在るに堪られぬ。」對馬は稍小首を傾けて御前をば立ち憚たりき。「何故疾うせぬ。」「こゝ……」「刻の猶豫は千悔の基、急げつ！」御聲も些と暴う見えたり、「御意をもどきまする、恐惶にはござりまするが、當地御發駕は其の再度の奉書到來の後と遊はされまして……。然くては如何ござりませう？」「其れは其の其方の遠慮道理ぢやが喃、又た頼宣が胸中も察して吳りやれ。公然ては上様と申上ぐるも其内情を申せば只一人の甥の殿、其殿が只今の臨終御間近とあるに、見い、此處より江戸までは五十里、駕籠に急ぐも一日半ぢや。其れに其の否に言ふ西丸は御幼稚、如何にも一門の年老分は予と水戸ぢや。旁後來の仕置、其外萬端我等に遂うて御申遺されたき義、又た我等も申上げたき事山々ぢやを、老中が連署を待つなど其れは平日、無事の穿議ぢや。兎角は箱根まで參るうちには其の使者に途中で逢はう。只今は一刻も在るに堪られぬ。對馬、急げ！」「御諫をいたし、撃せて頼て御座をも起たすべき勢。其の公に取り私に就

きての御道理は至極と言はむより外なきも、猶一歩を退けて熟〻慮ふれば、前後の様、何とも以て腑に落ちぬ、心の濟めぬ、物有り氣の事と、對馬は主への御請をばせで、「玄蕃殿、何とおざらう？ 我等當所へ早打と、この參向も、有り様執政たる豆州御下知を守り申した迄の事、殿が進退の御是非に就ては甚麼たる分別もおざらぬか、老功の御思慮、御批判は？」「やア玄蕃、對馬が言ふも一理はあるが、先判を破つて後判に就くは鎌倉以來の慣例。予の申すに異議あるまい喃！」先刻よりうち傾聽けたる玄蕃は、其の白髮の頭を掉り起して、「御意御道理におぢやりまする、先判後判の御詮については、玄蕃も不思議と存じませぬ。」「對馬、玄蕃も然申すは、只急げ！」「いや、待せられ殿、我等批判は只其の先判後判の御沙汰まで……」「急せたる殿は半分聞かせず、「で有らば奇怪はあるまい。伊豆が判狀……」「其物後判とおざりまする歟。承はりましたる處、其狀は一分の狀、松平伊豆守より殿へ進上の音信の狀、私の書通と存じ申すが？」「むゝ。」「御心を鎮めさせられ。後判は何だ誰が手に在るか知り申さぬ。只今は右、我等から差上まいた御出府御差止の奉書、其れが後判におぢやりまする。」殿は御目を眠らせて只御思案なり。玄蕃は其時良居丈高に、「大方右にて御合點もまゐらう。縱し其の内情は何とおざるも、我等進上の後判を御破りやつて差止の御沙汰を御用ひ無う、强て御出府とも御座あらば玄蕃役目の表として人數を以ても差止め申す。な。されば對馬言分に御就きなされて、其の連署の奉書、到達を待れての御發途が好うおざらう。猶申さば箱根の關が御大事——是れは御分別の要るべき處」や「某は此れにて御暇。明日の久能御參詣は重ねての御沙汰次第。」彼は恁く言ひ棄てゝ其座を退出ぬ。殿は猶御思案なりき、對馬も身の疲勞を忘れて一向に思ひ沈めり。

（百八十八）

「箱根の關が御大事、是れは御分別の要るべき處」といふ玄蕃が一言は、彼が饑の落涙に迎へて、其の胸中の幾微の一分を漏らせしと見るは非耶、兎角に一刻もと過り玉へる殿の御胸に、一頓挫を與へて、其後は別に仰せ出さるゝ旨も無く、深沈たる夜座、目に見るは隙間漏る風に燈燭の瞬くに、耳に聞くは次室なる數寄屋に松蟲の音をたつる御釜の沸聲のみ。手持なきに對馬も退出りぬ。恁くても殿は御衾に入り玉はぬなりき、其の兎つ逶つの御思案は、御胸裏を縱橫に驅巡りて甚麼とも思し分く由の無きに、果は豆州が判の狀を御袖の裏に取り出でさせ、頭より尾、尾より又た頭へと幾回か〱打讀し、繰翻し、猶裏面にもか、文字の間にもか、其の底意の認めある歟なんどゝも思す如くに、華手、歌繪の判じ物搜すやうにも御覽じたるが、有らぬなり、上樣御大切、一刻も疾く御出府、等の目に見えたる文字より外の意味は見當らぬなり。抑、是れが我を箱根の彼の關に誘引て、一家を破滅の掛罟に陷さむとする其餌か？ とは思すも看玉ふ處は彼が厚意の紙面に溢れて、御大切と云ふ僞りならず、御對顏と云ふ、僞りならず、御遺言と云ふ、僞りならず、總ては上樣御胸中と殿が御胸とを斟みもて量りて、臨機の計ひしたるものと御覽ずるよりは他あらぬをや。對馬の諫言といひ、玄蕃の異見といふ、賴宣身を念慮ひ異るゝ其の芳志は仇ならぬも、亦た予が立場より論ずる時は、自然一家の計畫を先にし柳營の御大事を後にする、心狹しきもの有るを奈何せむ、倘か此の書狀、眞正の報に非ずして、柳營の御上、甚麼事なくておはしまさば扨其迄なるも、不幸、此狀が眞實にて、言甲斐なき猶豫の爲に御大切の場に合はずともあらむには如何？ 連署の奉書到來せず、これに

依りて途中に繋留せり、頼宣が身の過失にはあらずと云はゞ人も無理とは云ふまじきも、心の問はゞ何と答へむ、向後の伊豆との面會は協ふべからずして、不忠、不義、臆病との批判を受けむにも、我は甚麼と言ひ解くべき。所詮目下の予たる者、御法に依らで身の忠を全うする歟、御體目に拘泥らひて心の未練を世人に爪彈きせらるゝ歟、其の一つ二つなり。法や重き、恥や重き、恥や重き、法や重き？ 此の曲ぐべからざる法の爲に、苦しき我心の節を屈して、紀伊國五十五萬石を一身の恥辱に換へむ乎。否らず、否らず。祿の爲に恥を棄つるは祿盜人なり、君を忘れて身を慮ふは人面にして獸心なり、頼宣にして臆病の叢罵を受けば大御所の御名を下すものなり、不忠にして不孝、祿盜人！ 人面獸心！ 其等の汚名を身に負はば今日の榮華は甚麼にかせむ。紀伊國五十五萬石！ 父と君と身との大事に比べては塵芥の輕き如けむをや。誤れり、過てり、如是る汚名を身に持ちて、紀勢兩國五十萬の臣庶が上に甚麼と立たむや。加之ならず、三家の一家たる紀伊大納言が御營の御大事とありて出府せむに、何者か之を拒へむ、有らば踏破って通らむに、何條事か！ 執政の奉書、老中の連署、目下の急にして顧慮る所にあらず。」と・奮然として御袂を投じ玉へる殿、御目を活と見開かせて、「對馬！ 大學！」召させたる御詞の下にあつと應へて畏まれる兩人を御覽じつ、「予は決心の旨あるぞ。疾う打立つ！ 用意のせい。」「何方へか？」「えい、言ふ迄も無い江戸へぢやは！」御眼の凝り、御聲の色も既や平ならず、殊には此の思慮ある殿が深う御分別ありての以上の御沙汰としては、憖ひに其の利害を反復さむも要無き義かと、對馬は爭はず、「御諚承はつてござりまする。但し其の支度のうち御目通り仕らせたい者のござりまする。右御逢を」「誰ぢや。此の心急ぎの時節……重ねてとも申せぬ者か。」「由井民部にござりまする。先刻江戸より到着との趣にて何やらむ御大事の注進を持て參つたげにござりまする。」殿は御眉を顰せ玉へるが、「むゝ、逢はう。召せ」

（百八十九）

召されて出づる正雪は、殿の御顏を見まゐらすより只管に落涙して、平伏せる面を擡げ難ねたるばかりなりき、「やア民部、何としつるぞ。其の落涙は？」「御運も限りと存じ做うまして……」愕ろける君臣の眼は覺えず合へり、もとより御油斷あるまじき者なれども、時も時、折も折なり、先刻の玄蕃が一言さへ今更ら想起されて、世間濶き彼が耳に什麼なる大事の隱密を聞出だしたる歟と、對馬は低聲の、いと慌忙しく、「御運の限りとは大方ならぬ事件、何樣の隱密を御聞きやれた？」「殿樣御切腹。和歌山御滅却。家老の貴殿らは重科の御成敗……」黙白もなき彼が涙の曇翳り聲は、其の言葉の眞實を表白す如きに、對馬が問は彌焦し、「えい御切腹御滅却、我等が重科とは？ 而て其は甚麼たる義！」「何も彼もおざらうか、只奸臣の所爲・」「讒言とや。其讒人は？」「執政の出頭、伊豆殿おざる！」呆れて舌をも發し難ねたる對馬を撲地と睨めさせて、殿の御聲は雷霆と轟けり、「民部！ 胡亂！ 苟にも天下の執政を然は申す、過たば容さぬぞ！」承はるより彼は腰なる小刀を逆か後邊に拋却り棄て、御前に突と出でぬ。「過たば御成敗、民部覺悟にござりまする。但し過たずば日光、八幡、熊野權現の御加護とも思し食しませ。民部此事が一代の御奉公。なれど御前へは恐惶、見ますれば御座は皆御心易い衆、對馬との大學へまで急度申入れます、我等出立は一昨日の夜の事、其夜に一大事を聞きまいて……」殿は御眼を瞠り玉へば、對馬は聽耳聳て、大學は堅唾を嚥めり。正雪は

其の精神の全力を面上に濺めて、猶且つ其悲憤と見ゆる涙を瞼に溢らせ、頻りに其鼻を打撳みぬ。「其の聞き申したるは極めて正確の。伊豆殿公用人奥村が口にござりまする。」殿の御色は俄に動搖けり、「待て、其の奥村とお事とは甚麼樣の由緒がある？」「されば御意、彼れ權之丞が弟七郎右衞門八郎右衞門兄弟は、私兵法の門弟にござりまする。彼等は生得堅固の者、これに依て私機密を打開まして、恐れながら公邊に就きましたる殿樣御身上大小に管はらず善惡に由らず、是非取交へて注進のさせまいたるに、其者が兄の權之丞口より不思議の大事聞出いたりとて取敢ず通知せ呉れまいたる……其れが其の諸神諸佛の御冥加とは。」と申すは、別義でおりやらぬ、伊豆殿も腹居る覺悟、其の領地、家名とも抛出いて憚りながら殿樣と組で落ち、柳營の御前途に害物たる紀伊國を滅却せしむるの結構とござりまする。あはれ扨世中に、此程の不思議……否、殿樣御身上に是程の御大事がおざらう歟！」彼は云ひ罷して一座を覰ぬ。殿すらも御聲無かりき、況て他の兩人をや。其の手段と趣意との如何は未だ聞ぬも先づ其心を戰棄して、面色の變るも知らざりき、正雪は更に語を續ぎ、猶其の流るゝ憤涙を拭ひぬ、「想へば無情うおざりまする。殿樣御心胸微塵曇暈のおはしませいで、一向御宗家御忠誠とござりまする、此は御家中の士のみならで天下に在りと在る程の者、皆存知の前！でおぢやりまするを彼の智慧の眼の肥えたる豆州、甚麼と物を錯見りてか、殿が這回の御參府を別條ない御野心と見申された。とござある其の意趣は、御存知の西丸樣は御幼稚、上樣には近年御不豫勝にまし〳〵て誰が見申すも來年までの御壽命はおぢやされまいと言ふ。此際に參府年にも無い殿が俄に其の御願を上げられて御出府ある、是は果然御血分られたる水戸殿とも引合ひ、又た御譜代、外樣、其餘古老の御心易い衆中とも御談合にて、天下に君を立つるは長ぜるを尊ぶ、御十歲にも足らせられぬ西丸樣を御繼嗣として萬一國内國外に變事ばしありたる際に那麼と召さるゝ、天下は天下の天下、一人の私有に非ず、なんどゝの理を眞額にして御同志を募らせ御宗家の御跡續ともあるべきの結構歟、倘し然もあらば嫡庶の亂、御家の滅亡、海内の爭亂と斯う黑白ならも見させられに、扨て右、殿と組で落つる！其の志は殊勝でおざるも眞實甚麼と申さう樣も無い御錯見、其の謬見から生み出された手段といふ、其も仔細ら聞ておざるぞ。此より申さう。」

（百九十）

夜は益闌け、人は愈聲無くして、折柄なる丑刻の鐘は更に御座敷の蕭寂さを添へぬ。正雪が談は今や彌步を進めり「手段を申せば我等毛髮も悚立ちまする。先づ殿樣御出府の義を公然たる奉書を以て差止め置き、更に別儀の使者をまゐらせ、自身一個の判狀をもて殿を誘致き、箱根の關を御越あらむ時……」對馬は耐らず、「關破りに爲申さむと歟？」「如何にも其の關破り……差止の御奉書あるをも用ひさせられず、強ての御出府、剩さへ大事の關所破らせられたりとの題目をもて……」「其義然もおりやらうず。然りとは我等も心附いたで。然りながら此儘殿が御歸國あらば？」覺束な氣に問ふ語尾に接て、彼は躊躇ず應へぬ。「其れが其の右の覺悟、殿樣と組で落つる、根深う巧まれた彼人の魂膽、領地も家名も自己が腹も抛出いたといふ可怖ましい分別おざる、豆州判狀の文體未だ承はりはしませぬが、定めし將軍家御大切、生前の御對顏、最期の御遺言？……いづれ上樣を笠に被られた、御病惱逼迫れりとの御義どもとも察しまする。右を殿樣御領取にて其儘にて御歸國ある。其處ぢやでおざる。彼人は直ぐ

御謀叛と言ひまする、此度の我等申通じた自判の状の表に據らず、上様御大切と御存知ながらに御謀叛ある、是れ言ふべうもあらぬ御企所に就かれての御謀叛、天下に御旗をと思し召す御野心、然無からむにも上様御口眞似をも仕まつる我等老中が申す旨に附かれず、自儘の御振舞ある御我儘の御所爲、兎角は、古の岡崎様(信康)近く上總様(忠輝)駿河様(忠長)御同樣の御義なんどしも申做して、彼の出頭、身の才辯、威權と智慧とをもて頭甲捺ぎに、御陳謝も聽かず、御論辯も容れず。殿様は是非もない御切腹、御領土は滅却、御身ら重職の向は重々の罪科! 恐くて彼人は依然世に在る歟。某が目算では同列にも議合せず、私の判状、殿に進らせ、其上にも假初ならぬ上様御大切云々と申たる旨を申して身を退くか。然らずば自滅か、或は平常の出頭振を嫉む者もござある程に、家名斷絶、領地沒收とも沙汰せらるゝ歟。左右は穩便とはあるまじきと其は其の最初より彼方では覺悟。只御傳はしうと、申すも恐惶は殿樣が御運の末! 進退とも協はせられぬ御身の果! 敢もなき御最後! 對馬どの、熟との御分別! 其言は、鐵騎夜枚を銜みて敵營を襲ふが如く、音激し、節險しけれども、其容は悄然として、涙は其頰に滂沱たりき。

對馬は今更に、此の御使に立ちたるが身の落度とも思ふ如くに、首を俛れたり。大學は寧に餘んの疑問を默止すべき時に非ずとや、恐る〳〵

「御前は實にもぢやが、不審もおざる、彼人御一人こそ然はおはさうも、掃部殿(井伊)讃岐殿(酒井)加賀殿(堀田)豐後殿(阿部)これ等の衆中が皆一同して然樣の無成敗せられうとも存ぜぬ。況て御分も今言はるゝ、彼人の出頭振を心憎うも思はるゝ仁の有りとやらむ、然あらば此方さへ理非明白ならば有樣の作略、自然に消滅もし申さう歟、還著於本人の名文も此處、然無くては神も佛も……」「えい神佛か! 凡夫觸んに神祟らずぢやは。」「とはおざらうも御主家にも等しい當家。」「其の御主に等しいから、彼等も日來に目を注け申すぢや。如是る際には君臣上下一同して其敵たつ者を斃さでは已ぬが御家の質、三河の風ぢや。舟を同くして風に遇ふ時は呉越の人も善く力を戮す、其の朋輩の嫉み媢みも目今は彼の衆の眼にあらぬ。掃部殿、讃岐殿、加州ぢやとて豐州ぢやとて甚麼が此方の依頼にならう。悉皆が敵ぢや。讐と見られい。」彼は御前を睨囘せり。と見る時對馬は其面を擡げ、然りともの氣色せる問を發しぬ、

「段々の論議する間も無い、實、我等も吐息とでおぢやる。就ては此際での貴老が御工夫は? 先刻の申された日光、八幡、熊野權現の御加護といふ、其の御加護の意趣を審と……」「言へとおざる歟?!」彼が巨眼は、俄に愕くべき光輝を放ちて、御脇息に凭らせたる殿の御面を颯と射たり。此時の殿は什麼? 瞑目、沈思、御口は一文字に緊結ばれて、御呼吸も有るか無きかの如し。

(一五八頁參照)

(百九十一)

此時殿が稍傾聽の御氣色を現はし玉へるを、斷えず其方に注ぎゐたる正雪が眼睛は逸疾くも看認め得て、同時に快然たる色を面に見せぬ、洋々たる彼が辯は、將に其の轡に脂さしたる車の如き舌より囘轉されむとせり、「善う申された。然らば我等も胸臆を盡まで申さう。申さう前に、先づ我等が兵法の奧意として弟子輩に傳ふる道歌といふを御耳に入れう。其は栂尾の明惠上人が古道の歌ぢや。山河の末に流るゝ橡殼も、身を棄てゝこそ浮ぶ瀬もあれ。な。意義は改めて申さでもぢや、が、只其處へ心を留めてお居やれ。身を棄てゝこそぢや! 何事も只身を棄てゝこそ! 彼の孫子に曰ふ、亡地に投じて後に存し、死地に陷りて後に生く、九郞殿が

鵯越、楠判官が千刃破、皆是れ九死して一生を得る、兵家の證として奇勝を制するの道おざる。扨て右は、三軍相會うて死生を賭し、勝敗を決するか、槍を執り馬を跳らせ一騎の勝負を挑む上に就てゞ申すが、又一身一家の事、存亡興廢の運に於ても其の道理は同一いぢや、扨て其の運の事、此れより些と運を申さう。運の類に二種おざる、一つを世の運といひ、今一つを身の運といふ。世の運とは世上の運ぢや。是れは其位に在らぬ、其分に不相應ぬ者の左右としても協らぬもの、只智あり能ある者は、其の到來せる世の運を我有にして、捉住て放たず、脱落ず身の運を延へて行く。見られい、故太閤にもおはせ、又日光の御宮にもおはせ、皆此の是非なき世の運を利して御自身御發達の資となされた。雖然、其の運を利すると言ふも、晝眠してゐては協り申さぬ、皆身を棄てゝぢや、扨て後に浮む瀬を得られたのぢや。卽ち太閤は明智が世の變を利せられて山崎に身の運を造られた。大御所は、太閤が晩年の驕奢を利し、石田并に大阪の野心を利せられて、覇府の御運を開られた。もとより運の字は軍に辵を加けたるもの、軍は世の危殆い所爲、其の危殆い軍に辵を加へたぢやで、運ほどの危險いものは又と無い。所以に最初は身を棄つる、後に浮む。扨て其の浮み、存生て見れば、運ほどの亦た容易い、めでたいものはない。禍を轉じて福と爲る卑を踰えて尊きに進む、皆其の刹那の運の機を利して家國太平の基礎を開く。な、古今天下創業の英雄たるものは大概其爲ぢや。恁く申さば自然に我等が申す意味も暗知れう。只其の身を棄てゝ、運に御乘りやれ。其機は目下ぢや。」彼が眼は右を睨み、左を覗ひ、其手なる扇は東を指し、西を示し、遽てず、噪がず、詢々として說き去り說き來る如き態をば裝ふなるも、一世の浮沈を此時に期したる聲音は自然異常のものありて、彼が額上に津々として湧く膏汗は、折節に拭ふ疊紙にも餘りて見えたりき。聽き悶りたる對馬はと見れば、其れが面色も太く變れり。「亡地、死地、九死一生、身を棄てゝ世運に乘れと仰るゝ、其の意趣は好う解せ申たが扨て其の手段は未だ其意を得ぬ。何さま殿の目下の御身、貴老言はるゝ如くとあらば其の亡地でもおはさう、又た死地に立たるゝでもおりやらう。なれど其の亡を變じて存となし、禍を轉じて福となす、今の進退協はせられぬ上から申せば其の手段たる只、御旗上られいと……申すより外無い歟！」貴老果然て其の意見か？」彼は其の凝眼をもて詰寄りぬ、大學も、豫てより目を注けつる彼、倘か然あらば同じく其座を起せじとの勢もて後を詰めたり。と御覽じたる殿は突如に御聲を懸させぬ、「控へ、對馬。大學、茶を一服！」思ひも寄らぬ御所望なるに大學は我にもあらで狼狽へき。殿は呵々と笑はせて、「大學、疾う立てい。や、對馬、人各其心あり、十人寄れば十色といふは、な、其方が予を見ると、民部が予を見ると、亦た各其の鑒察が違ふ、なれど予を案じ呉るゝ其の忠信は唯一つぢや。然て予はいから滿足ぢや、但し予にも亦た考案の些少はある。其の考案と彼が申すと合はゞ可し、合はずば只棄つるぢやまで。躁ぐな。其方は予の重職、國政の料理をこそは任したれ、罪人の捕方をば言ひ附けぬぞ。先づ夜は長い。緩々と一服して熟と其の心胸をも話し合うず。大學、對馬にも民部にも取らせ。睡氣の覺むるやう微と濃うせい。」正雪は此の御意を得て、少時御面を注視しが倏ちはら〳〵と落淚せり。

（百九十二）

御茶喫了て後、殿は徐ろに問はせぬ。「民部、扨て其手段はや。」あッと應ひつゝ彼は正面に

は。」「其の事おざる。」彼も御傍へと進前れる、其の意氣ぞ得々たり。

（百九十三）

進前れる正雪は扇の鐵眼にて疊に畫きつ、「其事おざる。先づ大體の順序を申さば、殿様は明曉の御發途、當地より直さま京都へ御上りになりまする。恁くて其の一夜の中に所司代を御踏潰し、同時に參內御座なされて關白殿御初め百官有司を、動亂の鎭りまする其間の御事とて叡山へ御登せ、此處に朝廷を居ゑまする。彼山には豫てより御風呂焚料として多分の御寄附もござりまする、座主を初め衆徒一同は皆式無き御味方……」「待た、お主、其の人數は……」「是れは容易い事。只今御召伴の御人數は大概百四五十人。民部御供仕りますれば五百餘人は一日が中に彼處にて揃へまする。總じては七百人。此程の勢がござりますれば帶紐解けの所司代以下を討取りまするに何條事もござりますまい。扨て、恁くいたして次に手を着けまするは彥根。」「むゝ、其の彥根は？」「翌日、直さま、其騷動の聞ゆるか聞えませぬ間に、令旨に添へ御教書を下されまする。其の御使に差副うて僧兵五百餘、私の手兵三百餘、取合して一千が程の軍勢を堅田より船して送りまする。此の大事は私に下されませ。時刻は[illegible]、月は[illegible]、否とも申さば其時が程に[illegible]の者に火手を上さして御覽に入れます。斯くてまづ東海、木曾、北國の三街道を塞ぎまする。」驚ける兩人に引反りて、殿は只[illegible]との御顏なり。「むゝ、京都を取り、彥根を潰いて、街道を切塞ぐ。其れにて近畿の關所、大津、伏見、水口、龜山、高槻より丹波に懸けて一圓に手に附うとな。扨て大阪は？」「是れは[illegible]も入りませぬ。狼狽てたる城內、僅か人數の[illegible]まして所司代の加勢とも參りませうなら、其の城を出ぬに御城は殿様御所有にござりまする。其手筈は前年より。」「附けたとある歟。むゝ。扨は先つ兩日が中に畿內の五國、丹波、近江、伊賀伊勢までも其の令旨と予が敎書と其方が軍配とで平均せうとな。其れで藤堂を追落し、尾張を下して、美濃越前をも手に入れ、日本の中央を中斷うと言ふは。扨其の江戸は奈何と爲る？」「其れは燒撃——、私秘藏の火術を以て……」「えい、扨こそな？ 扨は汝其の謀叛ぢやな？ 宗家を僵いて賴宣が天下奪ふ反逆ぢやな？」「えッ。」失敗ねたるか、扨は殿に——と其目色を交ふる正雪を撲地と睨させて、「君側の姦を掃ふと云ふ、其の言既に汝等が分に出來過ぎたる事を云ふ奴かなとは思ひたれど、汝等が家來として予が身を思ひ呉るゝ忠義かとも存じて聞き居れば、有るべき事か、賴宣に、勿體なき朝廷を挾みて畿內に號令せい、叡山に取籠りて彥根を襲へ、所司代を討ち城代を逐うて街道を塞げ、剩さへもや柳營御所在たる江戸を燒けとは、汝什麽何たる言——予を然る謀叛反道の僞者、虎狼の野心を逞しうする惡徒、古の將門純友にも劣らざる賊臣とも看做すか。えい！ 汝。賴宣、君側の惡を除かむと思はゞ只幾回も諫言を上げ、又奸奴どもも叱り懲いても其非を矯正う。甚麽の汝が云ふやうなる、此泰平の天下に旗を擧げ、兵を動かし、恐れある朝廷を驚駭かし奉つりて、可愛き農商らに憂い目を見する、然る無道の手段——其を汝は猶日光神廟の神慮といふか！ 可惜い奴め!!」百錬の鏡とも見る御眼の光に射竦められて、さしも物を物とも爲ざりし正雪も今は膽は戰きて動くを得ず、舌根も震へて陳るを得ず、平伏したる背と腋とに滴々として滴る膏汗は、五臟を搾木に懸けたる如く、色も変り、息も喘へぎて、肉も石と硬化れる、此儘にや枯死せむかと傍の看る限にも怪まれにき。恁くても殿は御眼をば寛させ玉はぬなり。

「民部！ 陳謝く言はあるか……」恐れ入てお

ざります。兵法者の生智慧只管殿様御身上のみ案ぜられまして……斯くもせばとて……」「一二も要らぬ。腹を切れ！」

（百九十四）

萬事は休矣。我が廿餘年來の辛苦も、經營も、此の一脅の蹉跌の爲に悉皆水泡と歸し訖んぬ。命の非なる歟、時機の達らぬ歟、抑亦我が明の足らざる歟、智の及ばぬ歟。斯くまでに墓なき運を有たる我は、只潔よく此儘、此場に搔切て、責てもの健氣を此の人々に見すべき歟。とは思ふも、惜みても猶餘りあるは、我が生命なり。我此殿を擁立むとせし初一念は那麽？ 只錦の上に花を添へ、木偶に箔の光を加へむとてなり。花無くも其錦の美麗きは有らむ。箔無くも木偶の靈驗は交らじ、美麗きを衒ひ、信仰の念を增さしめむと企望つる其花、其箔にして、錦の實を奪ひ、偶の面目を損はゞ、これを剝ぎ、これを除くも甚麽か有らむ、況んや其物と質とを併せて之を失はしめむと爲なるをや。見よ、倖ひなる夜陰、剩さへ御前は隙きたり、我が腹切るやうに見せて御油斷を覘ひ、一刀に御首を落して返す刀に兩人を切伏せ、悉くして此場を逃れむ歟？ 否、危ふし！ 此殿の御手の付たる、御心、織、正雪ほどの者に腹切らせて得も御油斷はなさるまじ。御油斷無きを我術にても討つこと難し。況て予は今一介の浪士由井正雪かは、一萬餘騎の大將！ 然る危殆き所爲して元をも子をも失はむかは。要こそあれ、今少時躊躇ひて、何事かの間隙を！」と、今は其胸稍沈着きたる正雪、猶饜くまでも其膽を太らさむとや平伏したる儘に身動きさへせぬを。「民部、見醜しや、惡怯れて見え申すぞ。」「言ふ對馬どの、然言ふ御分は？」「某を？ 我等が奈何とした？」「神文よ——日本大小の神祇を懸けた其誓詞は那麽と召された？」彼は耐らで詰寄せたりき。

「血迷うたか、神祇は懸けたる殿様御爲とある事なりやと斷つたを……」「斷られた。我等確實に記憶てをる。」「記憶てをらば破却とは言ふまい、其方がやうなる殿様御爲にならぬ事……」「御不爲とや？ 殿様御爲はいざ知らず、某は只殿の御爲と存じて言うた。悉くもせば目前の御難義も救はれうと存じて言うた。人各其事ふる所に忠す、天下が奈何、御宗家へ奈何、海内の動亂、朝廷への恐懼、御謀叛が如何か其等は知らぬ、唯我等は主として仰ぐ殿様の前途を好う籌策申して言うた。其の前途無いやうに、存して言うたが、御不爲か？」憎くき強辯、其の横車をはか押通さすべきと言ふ意込も、大學も進めり。「勿論ぢや。御不爲！ 忠臣は其君の非を正すとこそ言へ、御言がやうなる御非望の御勸告——大罪も大罪、君を不義に陷いる……八裂にも爲すべき奴！」「はゝ、君を不義に陷いる、何さま其は不忠か存ぜぬが、又安閑と手を束ねて主に冤罪の腹切らする、其れ忠臣とも申されまい。正雪が手段を惡しいと被仰る、御身が好い手段、密と此座にて承はりたい。はゝ如何とぢやな？」嘲笑る如くに詰問られても應へ得ぬ彼は、倏忽に赤面せり、追風に帆なる正雪は獲たりと猶畳み懸けて、「事御不爲とあらぬ上は、神祇に懸て誓はれた對馬どのも某と同意。又た目前の御危難に迂濶々々とある大學も御奉公を等閑の大不忠者。殿の御叱責にて正雪も腹切る以上は對州、御不詳ながら同じ死出に作立たれい。不忠の咎を身に帶いは武士として濟めまい。大學も又た悉くて驅をお棄てやれ。」言ひ了りて彼は疾視ぬ。此方も其を睨み反して無念の齒を喰切れるも、道理ならぬ其道理に詰られたる如くとなりて、遺恨の涙を徒に拳頭に拭ふのみ。

「[illegible]」はや近づきて、鍠々として耳に響く[illegible]、[illegible]に實[illegible]を報げり。此の一[illegible]に夜明けぬ

中に甚麼とかの御沙汰無かるべからず、殿も今更に困じ玉へり、御手は正しく胸に拱れて、例に無き御顔色も平ならず、勝に乗れる正雪は、憎きまで心地快けなり。「笑止、御兩所。夜明も間近……は丶、見醜しや、惡怯れても見え申すぞ。」

（百九十五）

小角力に小股を掬られて大角力の浮足となれるに似たる、始末の協らぬ御座敷は、際涯なき睨競に時刻のみ移るなり。血氣の大學は此時奮然として、腕を拗てり、松坂以來殿の御懸念ある正雪、御眼鏡に違はず今夜初て其の化尾を露はせる以上は最早や容赦のならぬ奴。一つは殿の御爲。身の遺恨。朋輩の恥辱。天下の禍の根を除くと云はむはずほけ無きも、誘引ふを倖ひ、いでや共に耦剌へてと……一民部、不忠の講釋、腹切れとの指南、近ごろ嬉しう聞き申したぞ。兎ても芳志に其の冥途への案內、先達も賴み申さう。いで——」拔懸くる小脇指の未だ鞘を放れぬ間に。「殿、御城代玄蕃樣、只今此れへ御伺候にござりまする。」兒小姓の一人、走り來りて劇たゞしく告る後より、城代の大久保玄蕃、老眼に涙を泛めし愁傷の體、履む歩も力無く御座に入りて、畏まりつ、一上樣、左様、御大切……一噫——薨御か、豆州の判斷は果して實か、將た其時に際會したるか、凶兆か、前兆か、其は知らず、柳營三代の將軍家光公は、實に慶安の四年、卯月廿日に御他界ありて、其の早打、疾くも此時駿府には着けるなりき。

成敗も、切腹も、刃傷も、總ては曉方の殘燈と共に撲消されたる、東方は白めるも御座敷は闇夜の如く、鳥の聲さへ心哀悲くて、人々は只恐懼の涙を其瞼に拭ふのみ、然も此朝に雨さへ降れり。

* * * *

危ふしとも、殆かりつる正雪が生命の、不意なき薨御の沙汰に一時を助かりて、其後は只謹慎とて江戸表へ召伴られき。是れ幕府の御喪中、百日が間は、輕罪とても行はせられざるが先例なればなり。生命だけは助かりつるも、彼が失望は言むにも餘りあるもの有りけり。只彼の殿を後楯なる、人數は實に一萬の餘を鳩合め得たれども、其れが爲め年來の貯蓄は、以前にも言ふ皆無となりたり。皆無のみかは餘義なき負債さへ出來て、彼の神の手と戴かれたりし九州の我も、江戸にては翻りて惡魔の手に墮ちて、債鬼等が苛酷き迫責は、宛然其肉を挘り、骨を蝕まむとする如きものあり。加之ならず、彼の國々の者共よりは、御旗上や何時？ 大納言殿御上洛は何れの日ッ・ 御約束の半年の日も既や夙に過ぎつるに御沙汰無きは何故ぞ、但し其は猶時節を待つと有らむには強ては言はじ、只差向ての逼迫なる金子なり。御預りの金は何くれの準備の爲にはや消費たるに、・跡々の御見繼なくば、此の前々甚麼とあらむも立ち行き難し、疾く御雅閣にて五十兩、百兩、二百兩……なんといふ口、夜に日に雨の降る如きに、貫を和し、延べ、言賺むる金井、鵜野、林、田代等が役も亦大概のものならず。彼等も後には、愆くてはと言ふ。言うたりとて無き袖は什麼して振られむ、駿府の家なる什具器財、目欲しきは既に九州の折り賣拂へるを、猶我が身の周圍、家の內外に、五百兩、千兩の料はあらむも這は正雪が面目とて手放されぬなり、雖然、其も今暫時が、間ぞ、將軍家の御不豫、右につきたる南方（紀州）の御肚裏、天下の亂に遠かるまじ、今にして挫折ば三年の法座、百日の萱、從前の苦心も水泡ぞ、武士は喰でも高楊枝とさへいふを、云甲斐ならうや、など勵責すが、勵責す師匠の胸裏は督勵さるゝ各位にも倍して苦惱かるべし、我等も今は摺りたる、好なる酒も疾くに廢

めぬ、母にこそ折節には魚もおますれ、我等并に妻子どもは朝夕は麥飯なり、されども金鐵の心腸は撓まぬぞ、方々も男士、此の大事に荷擔せられし其の初一念にも反省みて、辛防あれ、見られよ女子ながらも彼の宮が健氣の態を、と慰めつゝ、慚恥むるは忠彌にして、其の引合に出されし宮は、今は諸事の漏泄るを慮るゝと、活計の苦しきに端婢をも雇かぬ屋敷の、煮焚より掃除、夜は衣服の縫綴りに可憐彼女は眠る目も眠ぬなり、原來の肌理雪白、日には焦けぬ、今が娘の盛りといふ十九廿歳の、其手は胼、足は胝！ 可惜眞玉を泥裏に埋めたる無慘と謂むも愚かの態なりき。

鐵は振づべく、石は卷くべきも、正雪が融通は今や全く動かす可らざるものとなりぬ。折しも伊豆殿の事あり、紀伊國の御發途あり、彼は彼を聞き此を探りて、是を最後と駿府へ出立てり、然も策略は全然破れぬ、猶且つ右の僞體とはなれり。今は殿の御沙汰なくとも自身と腹切るか、無理ながらも大事を擧ぐるか、陷阱なる虎の躬ら處決を急ぐべき場面には墮ちたり。

（百九十六）

將軍家の薨御に物の音を遏められたる此夏は、大川の涼舟も出でず、堺町の歌舞伎も木戸を閉鎖して、富士を前面に連山の趣を見するといふ親父が許への遊客が編笠さへ、今紫月の江戸橋に影を斂めぬ、況て人目より草の芽しげき山の手をや、奴が柴垣もうつ蟬の殼、粉雪の振袖ふり立つる聲も聞えで、哀れを河田が窪の蟲の音にとゞめつるは、有る中にも加賀屋敷の正雪が住居なりき。これは猶主無き家の荒涼じさ、白晝すらも魔魅物の出づるとなむいふ如くに荒れ破れつゝ、内には人の有りや無しや、さしも今まで訪ひ寄りたる百に餘れる弟子も離れて、多かりし家内の男女も散り失せぬ、只交らぬ門に聳ゆる一本の巨榎、其れにも夜は怪異しき鬼の影さすとて、此頃の青葉涼しき日陰にも途行く人は避けてぞ過ぎぬる、其怪かあらぬか八幡山の丑三つの鐘、耳近きながらも雨氣を帶て朧ろに響く時、彼の下枝に手をかけて閃然と塀越に入るものあり。

「宮。宮、在るか？」一途早く聞つけたる宮は、其のほと〳〵と叩ける庭口の雨戸の際へ身を倚せて、戸の隙間より外面を窺見せしが、突如に戸尾の樞外す手も覺えぬばかりに、「師匠様！」「おう、とりや靜にせい。留守は無事かや？」一懲くも問るは遊町の上館に在りと見し正雪なりき。と聞て、最前の物音に、一時聲を靜める座敷は、倏忽に障子を開くる、紙燭を排く、物の慌遽しき響は聞えしも亦倏忽にして寂然となれり。其の慌遽しき響とは什麼ぞ。徒黨が、今夜も打集りて、大事の計議を凝らせるなるが、師が今歸へ家れりと聞きて驚喜して迎へしなり。其座には忠彌のありき。忠彌は先づ正雪に席を讓りて、「兄者、無事の對面は何倚りぢや。扨も今度は。」苦笑すれば、正雪も首を掉りて、「いや散々ぢや、一代の不覺、面目も無い、が時節は來たぞ。留守中に支度お爲やつたか？」其問を意外と聞做せる忠彌の瞼は看る〳〵脹れぬ。「何が！ 支度！ 御存じの體、我等此の三十餘人日々夜々に寄合うては只御身が上を案ずると、歎息を吻くのみぢや。先度に打たいた百挺の弓其の代金も得う拂はねば催促は矢のやう。又、九州の奴輩に向けて送つた百兩の金も彼の屋代めに一時というて借受けたが、期が切れたで、手代をおこいてわや〳〵と云ふ、支度は愚かぢや、足も手も出ぬ。現に今も、恁くては我黨無念の饑死するのみぢや、よし然らば生死を契つた御分と一所に兎も角もならうと云ふので、明日の晩紀州屋敷へ踏込んで憎い殿を斬り、館に火を放けて一同腹切るゝ覺悟のしたぢや。右の

爲體ぢやに甚麼とかならう。些と御察しやれ。」其の愁歎は實に無理ならぬも、如是る際に然る女々しきと、正雪忽ち氣色を変て、「聞たうも無や泣言、其れが其の丸橋忠彌とある勇士の性根か、腑甲斐なや。然る程ならば我等はやはり彼の節に在て腹切て果てたが増ぢやを。此方は又留守中の支度、江戸の大將たる御身がお在やれば脫落も無からう、況て我等が豫て云ふ將軍家は御他界、御家督は幼君、堀田を初め然るべき執政等は追腹切る、大名は外に疑ひ、役人は内に懼る、幕府の基礎の動搖といふも大方ならぬに、此ぞ我等が專として望む、諸侯未だ會せず、君臣未だ和せず、溝壘成らず、禁令施さず、三軍匈々、前むと欲して能はず、去むと欲して敢てせざる其時節ぢや。百戰するも殆からざる其時機ぢや。假令正雪は不在であらうも隙間なく旗を御擧ぎやる、今日か、明日か、今夜か、明曉か、と待つるも音沙汰なし。戰とも云はぬに肝のみ煎れて忍び出て來て見れば、呆れ果てた！ 嬰兒輩が母親に縋もつて飯粒啣めらるゝを待つ如き僉議。餘人はあらうも、忠彌、半兵衛、御分等は思ふに似ぬぞ。然る程にて此の大望最初に好うも思ひ立たれたな。こりや正雪、今日倖ひに生存て在ればぢや、途中に病死せば其儘に默止さるゝか。言甲斐もおざらぬ。賴もしうも無い。」

（百九十七）

如是る不足は彼が平生を知る者にして最も異むところならむ、彼は嘗て其の能はざる所を他に責めたる事あらず、能ふべき事の闕漏てるすら猶且つ其情にし酌量むべきもの有る時は、是を尤めぬなり。況んや今の云ふ其の脫落の如きをや、草鞋一足、握飯一塊とて、錢無くて調達はれぬ今の世中に、外に受くべきの俸祿無く、内に餬ふべきの口多く、所有の財嚢は既に全く其底を拂ひて、賴るべき銀主は悄く冷かなる白眼をもて彼等を遇ふる今日をや、彼が天稟の威容、得意の雄辯をもてすらも其の融通の門戸を打破ること難きに、猶何の忠彌を責めむや、半兵衛をか譴らむや。如是る無道理の言を近頃の駿河殿とても得う爲じ、況んや其情を抑へ、怒を忍ぶに妙なる彼正雪をや。其の慾を矯るに妙なる彼は、亦た此時に於ても其の情に忍べるなりき。彼は其席に入りて、一座を看渡すが否、先づ愕けるは彼等が氣勢なり 忠彌、半兵衛を初として、鵜野、奧村、林、日來は其の猪武者をもて自ら許して、火にも水にもと罵る河原十郎兵衛、僧の廓然すら、寂しき顏色は萎縮に萎縮て、我が歸家れるを歡びは喜ぶも、然りとて此を機會に大事を！ など發言はあらず、忠彌に纔に明日の夜（紀邸の襲撃）といふ、其れすらも彼等は應ぜし歟、否らざりし歟、徒爾として手を束ね、茫然として首を俛れたる、唵々たる容貌の萠氣滿たざるあるが如き、敗形など謂はむよ扨て措て此儘ならば離散にやならむ、裏切もせむかと思はるゝに、彼は愕きたり。愕きたる彼は無理と知る〳〵例の手段なる取敢ずの一喝を合喫て、死水を決りて活波を見むと試みたり、此の死期の獨參湯は什麼彼等を刺戟したる歟。耐へぬ忠彌は目を剝出しめ、彼が虎髯は鬆然として戰ぐを見たり。「賴もしう無い？ 我等、其の腰が拔たとお言やる歟。腰の拔た……賴もしう無いは我等より御身樣ぢや。駿府の醜態はよし彼の殿の手管に陷て、腹底まで看破されて、叱り飛されて、腹切れと窘責まれて、其腹も切り得ず、汚目々々と當地へ拘れて、幾と五十日、進もならず退もならず、其等の失損糊へ上げて留守の我等をお叱りやる。兄者とて云はれた義理かや。我等こそ聞きたうも無い」と云ふを抑へて金井は慌忙しく、「無用！ 甚麼事おざる兄弟の喧嘩。只今は然る場合か。但し師の仰せも曲も無い、頭の無い蛇の

我等が此の五百に餘る府内の黨與を伴う戰へたを御賞もなされいで。丸橋どの苦心、幷に此座衆中が骨折も大抵のものではおはさぬぞ。夜々の會合も人目を忍べば此邊に往來の絕ゆるやう有らぬ奇怪の說までも云觸らいての……」彼は猶語續けむとす、正雪は其を聞むともせず、見るより彌肚に堪らぬ忠彌、「叱！」云ふな、半兵衞。兄と立て師と敬へば野放圖も無い。耳も無い日も無い人に物云ふも無益。其の無益の口叩から隙に此方は此方で覺悟のそう。御分も爲い。」正雪は喫驚きたり。「覺悟とは？」「えいお主に云はぬ。お主は其の所望通りに紀伊殿へ行で隨意にもせられい。此方は此方で所爲がある。」其の語氣を察すれば、彼は彼にて其の大事を爲遂むとも爲るが如きなり、詳人かと懼れ……正雪は、肚裏に驚愕の胸を撫でつ、唇邊に嘲笑の色を見せたり。とも悟り得ぬか、鵜野、林等は、齊しく忠彌に眸を注ぎて、其膝を前めたる、中にも金井は、一心得ぬ忠彌の顏せや、御身は御身で所爲がある、此の半兵衞にも覺悟せいとは何樣の意趣？唯二人のみの大將が其樣の御確執では手に屬ふ我々は迷惑しまする。もとより根葉も無い……」「いや有るよ！」「何を然う御腹立たれた？」「嬰兒が飯粒哺ませらるゝと！御分も我等も正雪日からは嬰兒ぢやけな。其の嬰兒で有るか無いか、獨步獨行の甚ない軀に此の江戶の土、獨步して蹈で見るも畏多らうで噺？」彼が片頰には猶嫉き笑ありき。「扨は御分一人の旗上な？」「勿論ぢや。」と云ひも了らぬに、正雪は驚熱けるが如くに突と起こ、忠彌が手を我額に戴きつ、「誤つた、丸橋どの、正雪見損ねた。今迄の無禮お免しやれ。天晴や勇士、大將軍！　いかにも江戶は御分の隨意に……」

（百九十八）

如何になり行く事やらむと今迄は息を呑みたる皆も、此時さし出でゝ、我が賴たのある師の態く速かに我儘を棄てたるを喜ぶと、又忠彌の此の不滿を後日に遺存さゞらむやうにの配慮とにて、案ぜる人の恙無かりし祝賀を兼ねたる取敢ずの盃を持ち出でぬ。此頃の臺所の淋しさ、酒菜とては新瓜の酢に和へたるを一碟のみなるが、猶此の夕つ方、市谷の小濠に草寄して漁り獲たりとて鵜野が持て來れる小雜魚の些少あるを、是れもめでたき尾頭附よと、煮浸にして正雪が前に故とに勸めたる、箸にも足らぬ物なれども、志の眞實々々しきが針に交らぬを、彼とても嬉しとや見しならむ、一座の面色も稍復れるに、忠彌とても何時までも默れたる際しには居られぬなり。「然謝罪られては此方も挨拶に究るが、今は實に此腹さへ立ち申したよ。心さへ解られたり、我等も本にあや、あはゝゝ。」と初めての高笑なり。正雪は改めて、「忠彌料見濟ませたりや、扨て是れからぢや。我等が身も唯……」「其の身……云へるが人々の第一に案ぜしものたり、此の夜中に如是る騷擾して斯う忍びつゝ復歸らるゝ、決して青天白日のものならぬは勿論なり、彼の番士が目を竊み、戶を破り垣を踰えたるは云ふにも及ばず、或は人を殺め、其血をも流されしか、然らば追人も來るべく、捕吏も向ふべく、係くといふ其間にも防戰の準備せでは、といふ其の面色の變れるが彼方には難塞と見えたるやらむ、不意ぬ爭論に腰を折られて默止せしものゝ、今や其人の口よりして此の問ふに遑あらざりし疑問の答を得むとは爲なりけり、人々の膝も覺えず前みて眼光も自らに輝きたりき。彼は噪がず、「……眞實、一時は忠彌、有ふ通りに散々の不覺して腹切らで協はぬまでの首日に逃れたが、今に初めぬ彼輩が不思議の配慮で、其後何といふ沙汰もせられず、御咎の身にあるまじき折節も下され物の數々、番人とては朝夕の給仕を兼ねた

小坊主二人切り、湯浴もなる、用便も足る、眞個結構身に餘る御手當ぢや。なれど公儀御襃中百日も終了なば一旦仰せ出されたる切腹、是れは是非ないと覺悟の處に、聞かれい。今宵、戌の御時計轢つた後」と、彼は云ひ懸て、其の感謝にや有らむ目を拭ひ、騒ぐが如く口を潛めて、「殿、御自身して我等座敷へ成らしやれた。仰するやうは、幕府執政の料見愈見る處其意を得ぬ、就中伊豆守我意に募りて幼稚の將軍を私し、御政治も總て非ぬ方にのみ成り行くは、頼宣身も今は前途の測られぬに駿府にて其方が云ひつること今更のやうにも思ふ、これに依て予も思ひ立つ事のある、其方も此より一心予を輔けて豫ての望む處をせよ、但し此方に在らば對馬大學ら其餘に對して成敗の沙汰せでは協はぬに、疾う落ちよ、然して先陣の仕つれ、何處にもあれ三月ほど堪へう間には予も名を設けて歸國して旗をも上げ、其方をも見繼がう、疾う爲よ、重ねての對面は敷革の上にあらうぞ、と、な、仰せ棄てゝ入せられた――其れで我等も恁く、喃、歸家た、何と是れが……時節の到來、優曇華の花ではあるまいか!」歡喜しき色は眉宇に溢れて、涙は見ゆるも屹と看回したる眼中に、宿望の達せる、天下も既や我所者との勢の躍れる如きに、前みたる一座の膝は益進まれて、氣支れたりし呼吸の喘ぎも今は四邊に囂しき鼻嵐とはなれりける。正雪は其を熟と觀て、「されば軍議ぢや、此よりは手筈の決めう。但し我等が脫け出つるを殿こそは御存知、役人輩は然る事とも知らで今頃は定めて騷動しつらう。此處は長談の席にあらず、いで退去らう、方々彼の場所へ。……宮も供せい。」云ふ間に彼女は衣の裾端折りて、忍びの短刀を帶に挾める、小薙刀擓い込うで家の内一遍看歷りたるが、軈て座敷へ來つ、小膝を踞めて、「火を放けますか?」「否、其儘ぢや。座敷を攪亂すな。見醜しき物は無いかや。」引取りたる傘非は彼女が背を撫で、はゝと微笑て、「其れは此の女子。何時如何樣の事變おざらう歟と掃除は日々、打水は朝夕、恐らく此の廣屋敷に庭の草一本、落葉一枚もおざるまいかな。」賞て取らしやれ。」「おゝ過分ぢや。流石お主ぢや。いで然らば。」肚裏は知らず、彼は悠然として盃を納め、箸を投て、晴なる衣服身支度十分にして其座を起ち、門を出でゝ四五町も來つらむと思ふころ、喧噪しき人聲は其方に聞えぬ。蓋し紀州の捕吏ならむ。衆は皆其の手後れを嘲笑ふ中に、宮のみは獨り其小首を傾けぬ。

（百九十九）

彼等は巧みに形を潛めて、偉ひに夜行の町方が眼にも觸れず、市谷より船河原に出で、本鄕の大通を東北に進みて、やがて道灌山に來にけり。是れ正雪の云ふ軍議の場なり。頃しも六月の短夜とて、東方は既に微白を漏らせる、里遠き此邊りには鷄の聲すら聞えぬなり。入る方近き下弦の月、今や千住の森林より出づる曉の明星、樹下の露を玉と磨きて、青く碧に紅う美しう色彩れるを、樹杪におとす曉東風はさらさらとの音立たせて、又た其を村雨と降らすめり。袖にかゝるを打拂々々、脚にからむ茅草が根の蟲の音踏しだきて、船繫といふ巨松の畔に倚れる正雪、先づ其の根方に腰打懸むとすれば、如是る際にも目端の利ける宮は、暑熱を避けつる旅人もや置き忘れけむ雨避けの綵縧てふものゝ古きがあるを逸早く掻取りて、泥土を拂きつ、「御服が汚れます。」「ほゝう、御侍み笠とまをせにも優りたる風流ぢやな。」師は快よく打笑ひて、敷きたる上に無手と坐せり。「いや其の御笠より此方の目下は、天が下にも隱れ家もないみの上ぢや。兄者、手筈は?」呼べるは忠彌なり。此の秀句の面白きに衆も笑ひぬ。正雪は首背きて、「先づは然ぢや。扨て其

の人數配、右にもいふ忠彌は江戸の大將軍として當地に殘りやれ、其手に附ふは河原十郎兵衞、林理右衞門、芝原久左衞門以下大將分廿五人、手兵は有合ふ連判の五百餘人、加藤（市郎右衞門）和殿は京都の大將軍。半兵衞は大阪にて采幣をお取りやれ。扨て我等は。」些しく案ずるを。「御分は？」と忠彌は急立げぬ。「されば我等は、先づ東西の中央として駿府に在らうかな。其の場所は久能か喃？」半兵衞は聞くより其眉を顰めて、「む、久能？　何さま彼山は眞個天嶮の、然も案内は熟う御存知ぢやらうも、形の如き絶地、敵としては西に名古屋、吉田、濱松、東には小田原、甲府。縱し其れ迄もなう近隣の大名四五頭二三千の兵を出だして是を圍まば、味方甚麼に守らうとも端的に兵糧にも盡き申さう。東西の消息通ぜず、其中に御身に變ばしおざらうならば京大阪も其れ迄ぢや。是れは猶熟考との義。な、忠彌どの」忠彌を喚べるが正雪が耳にや觸犯りけむ、彼は例ならず色を損じて、「甚麼とや御分、然言ふ程のことを我等が知らぬとな。但し彼山の東方一里が間に淸水といふ港あるをも御分忘れしか、兵糧は自由、況て地の民は我等に服きたり、彼處に籠りて用物ども取り入れ、扨て搦手の裏山より海道を切塞ぎ、一方は府中を禦はゞ、西は大井川、安倍川、東は興津川、富士川、皆我が城地の外濠ぢやは。其の近く寄すべき敵は沼津、小島、田中の三所より外に無し、此等の隊を破らうに我等まで有らうか。然る中には忠彌が江戸、例の殿が南紀にての旗上げ、東西南北色の起らば小田原とて甲府とて、名古屋、吉田、濱松とて、何かは我が城地足長に隔れて彼山に寄せうぞ。理論は斯うぢやも其の御分が異見といふは嬉しう聞く。御事只今[illegible]として我等が何方に在り、又た何樣に運動はゞ善いとか想ふ？」眼には睨めつ、口には問ふ言を熟々と聽て、金井は更に打傾けぬ、「げに御尊問なくは承はるも、猶我等愚存を申せば、御匠には江戸…當地におざつて丸橋どの兩旗で御城を乘取るゝ…。」「半兵衞、忠彌一手で御分に不足なか！」「いや不足なと言ふではおざらぬが、兎角は此地が根本おや。南紀の御旗とて此地を好う奪られいでは和歌山にも立つまい。然らば大事の其上にも大事の取られて…」正雪は冷かに笑ひぬ、「然る配慮か。然らば無用ぢや。忠彌一手で見事此城の踏破らるゝ其の手段といふ。我等胸臆に有る。」彼は腰なる軍扇を徐ら拔出だして其祕策といふを說むとす、一座の目は驚き、胸は躍りて、其の咽喉には唾を嚥む音あり。

（二四）

靜り返れるに、露に集鳴く蟲の音は又た聞え初めぬ、なれど人は其れにも耳の着かぬなり。正雪は徐に首左して、「手段といふ、其の祕策は…河原どの、御身父子が渾分の肝煎を賴まねば事の濟まぬぢや。今更ら貳心はあるまい、偏頼まれうが喃？」「何事なりとも御下知と有らば…身力の限り！」彼が血氣、は自個先づ其名を指されしを當座の面目と、躊躇なく其決答を爲さしめたり。「大慶ぢや。餘の義とおざらぬ。父ご目今御預りの烟硝は幾計駄おぢやる喃？」「三萬駄と聞き申す。」「其の三萬駄の倉庫の鑰は、父ご手許におぢやらうかの？」「如何にも手許。所在場所も我等存じてをる。」「重疊ぢや。」

此の河原が父勘右衞門は、當時小石川御烟硝藏の奉行たり、當時御烟硝藏所在の地今詳かならず（寛永の江戸圖に據れば、白山御殿の脇、今の植物園近傍にも有りしが如し、猶考證して追記すべし）武勇には長けたれども强慾の曲者、御家人に有るまじき非望を起して其子十郎兵衞の勸誘る隨に、何時しか由井の荷擔人とはなりけるなり。「兄者、其の河原が烟硝如何お

爲やる。重疊御過分も要らぬ、式代拔いて疾うお言やれ。」氣立つる忠彌を、彼は忌はし氣に一睨て、「何分がならぬ。大事の話合を其樣にお急きやれて……晴にも落つまい。御分は江戶の大將軍ぢやぞ。」「大將が何？　如何爲申した？　大將が問うて惡いか？」「いやさ些と重重と御居やれと申すのぢや。假初にも生死の大事……」「生死の大事ぢやから疾う聞きたいと云ふ。聞く耳に重々も輕々も有るまい。御身は兎角に我等申すと二語目には御叱斥しやる。口辯こそ不束なれ、槍執ては丸橋忠彌ぢや。誰にも負うか！」正雪は其鼓舌せる舌を鎖して少時は緘默れるが、何とか思ひけむ、「むゝ可は。我ながら枝葉。然らば御分も其の槍取て大敵に對ふ心して熟乎とお聽きやれや、言ふ迄も無い、此の合戰は、彼等が不意を襲ふともあれ寡を以て其衆を擊つぢや。然れば尋常の手段して旗鼓相對ふといふ戰法の取られぬは云ふにも及ばぬ。只、奇兵ぢや。な、其奇を用ふるの最も奇なるは彼の火攻ぢや。火を以て人數と爲るぢや。火攻の奇勝を制するは孔明の赤壁、木曾殿の倶利加羅、和漢ともに其例多いに今一々は云はぬが、さればとて此等は皆、味方も二萬三萬の人數、又た其の攻むべき地といふも一所の彊域を限つてある。然るに今は江戶四里四方ぢや。目的の域といふ、是も周圍は內郭のみにて一里にも餘る。然もその其を攻る味方といふは僅か五百餘。十なる則ば之を圍め、五なる則ば之を攻めよとある其の法にも則にも該當らぬ無理の合戰ぢや。只彼の、善く攻る者は九天之上に動く……な、敵をして左其右を救ふ能はず、前其後を救ふ能はず、其守る所を知らざらしめて、我が無形を以て彼が有形を擊つとある、其の祕策に藉るのみぢや。扨其策の手段たる、餘にもあらぬ、右の火攻！火を役うて敵の耳目を先づ奪ふぢや。とは云へ、其の廣い江戶、何と何處を目的として燒立てう？況んや今は六月の大風とて無い時節ぢや。此處に一ケ所彼處に二ケ所と手兵を奔らかいても、衆の警驚く……我が軍氣を興奮つる……炎焰の下より切て廻る……敵に度を失はしむる、といふ程の大火事を爲出來さう樣も無い。處で右の烟硝ぢや、加之三萬駄！」金井は師の說を卒ふるを待難ねて、「發爆させますか？」正雪は寂しく笑ひぬ。「むゝよ。玉石共に焚く、是非も無いかよ！」「而て、其の箇所は？又其の爆發さする手段と申すは？」「箇所は限らぬ、右の三萬駄、多い任せぢや。場所は御城の近間、見附々々、本町、堺町、柳原、本郷の辻、番町、麴町、總じて家並の繁い所、又云へば、大名の明長屋、旗本の明屋敷、其等が所へ忍び入りて一樂に火を點すが專とも想ふ。運送は馬、車、長持、總ては有り隨ひ。其の馬も車も長持も、借るも可し、奪ふも可し。人夫は牢獄の惡徒を役ふ、其の方便に破牢するも放火には物好い歟。導火は各位も知る我等が工夫の雨火繩、其も足らずば線香も可し、蠟燭も可し。其藥は樽、瓶には詰めたいも、此は手廻らぬ歟。いづれは臨機ぢや。」

（二百一）

十三萬の人家、五十萬の人口を有せる江戶全府を、半夜の一爆に焦土と化し了んぬべき慘絕、亦た壯絕の祕策を聽きて、或に勇み、或は駭ける三十餘人、千態萬狀に聲を吞み、息を斂めて、各其の後談を渴望せる中に、獨個宮のみは、一向に打沈みつゝ、其心窃に懼るゝ如く、其憂に堪へざる如く、身を此團居の裏に置くすら快からざる如くにも見えき。とも知らぬか、正雪は、其談愈興に入れるが如くにて、「次に言はるは、人々が働きの手筈……當夜の刻ぢや。忠彌には豫て其の用意として紀伊殿が御紋の手丸、高張ども（幕府、尾紀水三家、越前、會津

等、其の紋所は同じ丸に三つ異なるも、其葉の條數には各多きと寡きとの相違あり、門衞の士は皆熟く知る事なり）數十張を調製り置かせて、扨こそ右用火と見ば、彼の五百人の中、屈強の若者百人を選りて、大納言殿登城々々と呼はらせて、眞一文字に大手から三の御門、中の御門、御玄關と雪崩込みやれ。御衞の侍等、出火の騒擾に動顚しつる門々の番士、狼狽た眼には提灯の紋は見やうも人の面の然る與非は無は見別けまい。惩くて御玄關に進まば直ぐ火をお放きやれ。用意した四五樽の火藥を大廣間にも積上げて火をお點しやれ。狼狽ゆる坊主を片端より引捉へて殿中の案内御爲しやれ。其を案内に奥へと切入らば、番士とて堪るまい。將軍は十一の御幼年、御下知もなるまい。御庭から山里へも遁らせられうを、待受けて、な。忠彌、其處は御自分の働きにある事ぢや。奥は其れ迄！　扨て城外は、殘ったる四百人を門際にと分くる。其の二百人は大手、百人は櫻田、五十人宛は平河と半藏ぢや。其の大手に向うたるは水戸紀州の、酒井本多、阿部、堀田、細川の間の大名、奉行ともあれ、役人ともあれ、駈つくる、登城する、其の手に當るを斬り、目に觸るゝを打放せ。其の櫻田なるは井伊掃部、松平伊豆、此の兩人を討留るが肝、其餘の働きは大手に同じ。其の平河口は御門を破って、御廣敷を燒立てい。半藏なるは萬一將軍、手に漏れさせて、脱し當らぬを揉る準備。此隊には鐵砲をお多く持せて樹立叢林へ據りを率たす、目端の利たる、逸り足りの達者なるを撰ばれい。かくて城も落着し、執政役人らが追伐も終らば、忠彌は直ちに上野に參って輪王寺宮を捕り奉つるぢや。其後は、寛永寺を城として取籠るも可し、西丸の炎上なくば、其處へ遷しまゐらすも可し、時宜次第。——當夜に殿樣は如何爲しやれます？」突如として問を發するは宮なりき。「むゝ、殿か。其の……其殿はな。當夜は赤坂の御館に御座なされて狼煙の揚まるを御待なさるゝ……」「御待なされて上樣とも爲らしやれます歟？」今想ひ得たる如くに、正雪は撲と其小膝を拍ちて、「おう、其れぢや。宮前は彼殿が上樣ぢや。其方も御寵の彼殿が將軍家とならせらるゝ、嬉しいか？」「些も嬉しい事ござんせぬ。再甥の上樣を亡物にさしやる……謀叛し！　いや主殺しの罪人にならしやれます！　假令上樣が宮樣でも決て嬉しい事ござんせぬ。」思ひも寄らぬ彼女が言は、愕ける人々が心を剜れり。就中慌遽たる正雪、其眼には神をも洞貫すべき可怖しき異光を發して、直ちに彼女を睨つ、更に膝を一膝を進めたり。睨まれたる宮は、日頃の孝順に似ず、剛情なりき。「師匠樣、御前が今言はしやれた事、當座の戲言も交つてをりや爲ませぬかえ？」「何と言ふ、正雪が戲言しつると？」「されば、紀伊國殿樣上け……眞實然樣と、判然と、御前言はしやること成りますかや？」

（二百二）

益々驚ける正雪は、彼女が窮迫の意味を解し兼ねて只喫驚めたる、其面を宮は側りて沁々と注視りて、情に堪へざるが如き聲音もて、「其の今の手筈といふを聞きますると、妾は御前の御本心が疑はれます。御前はあの松平伊豆何樣と言はしやれた？　當將軍家は御代々皆明君ぢや、日光樣は言ふに及ばず、二代樣、今の上樣とも下々を御憐愍、百姓町人を好う愛惜せらるゝ。只其の執政衆が然で無い。中にも出頭の伊豆殿は上に阿諛ひ、下を苛虐ぐる惡人、謂はゞ此人は天下の讐、上樣の御敵、萬寄の賊ぢや。其方も其事は目惜いなり、彼の伊豆殿ら現に其方が兄といふも彼の伊豆殿らに殺されたを根め。自家も上下萬人の爲に此讐を除かう、其れには我が手一つでは足らぬ、藥て御懇の紀

伊國殿を大將にして大事を擧げう。其れに就ての策略は斯う、手段は云々。但し其等を我が慾と想ふな、右にいふ幕府の御爲、萬民を安堵の爲ぢや、と恁う言はしやれた。其後、妾は紀州へ往き、あの殿の御側へも出て御容子を窺うたが、何さま御前が言はしやる通り江戸執政衆には何角不足も在らしやるやう見ゆるもの丶、上樣へは無二の御忠義ぢや。將軍家の御上とあれば、涙翻さぬばかりにして何事も御意なさる。月の十七日(東照宮御忌日)には御精進、廿四日(臺德公御忌日)には御潔齋、諸般の萬事が其通りぢや……を、其の今言はしやれたを聞きますれば、其の殿樣が、如何やら御前と御同腹で當上樣を亡物になされうやうな！ 彼程の忠義の御方が、假令天魔が魅入ればとて、御身の御前途が危ふいとて、有らう事かや、倘だ十歲か御十一の和子樣を然樣無情う遊ばすといふ……抑や此事が出來た事かや！ 其義が妾の一の不審ぢや。次に御前は、江戸中を燒撃……玉石共に焚く、是非無いとやら今言はしやれたが、伊豆殿等諸役人こそ然は有らうも、江戸町々に何咎がござります？ 宿寃舊讐もない人達を其の烟硝で其の黑燻しにする！ 何たら殘酷い事！ 伊豆殿が惡人ぢやとて、得も江戸中を引くるめて火坑に陷さうと汝の酷謀は爲やなさるまい。上下諸人を安堵の爲といふ御前が其を爲さるとは御本心かや？ 大風間に火を放けて山里とやらの御庭で上樣を兎角と言しやる、平河口から亂入して、御廣敷を燒立て丶、女中衆御局を燒殺すと被仰る。御本心かや？ 其樣な無慈悲な、恐れ多い、惡逆無道を振舞うて甚麼が天下の爲になります？ 其れが忠義か？ 御前が平生言はしやる事とは全然の反對ぢや。もとより本心では……妾は不審ぢや。」彼女が、師の叛賊に陷らむを恐るゝと、無辜の上下の損敗れむを傷むとの熱心は、覺えず口端の炎焰となりて、最も此談を聞くを厭ふ其人の面前に迸りぬ。看る看る蒼白き其人の面は茜を染めたる如くとなれるが、突如にして、「呆氣め！ 時宜をも知らで頑硬に師の非を擧ぐる……」單簡なる此の一語も彼が所思を解するには餘りあるなり。彼女はわッと泣伏したり。「馬鹿者！ 時宜といふを知らぬ奴！ 勢の來る處は聖人も之を奈何とも爲る能はぬ。成湯の桀を亡し、周武の紂を伐つ……」彼女が泣顏は屹と擡れり、「今の上樣が其惡王の樣な眞似なされましたか？」「や、何と言へば角と言ふ。汝、乃公が娘で無き歟。父に抵抗ふ歟！」「抵抗やしませぬ。只不審をいふ……」「え、そ、其の其れが父に敵對ふ。不孝者！ 不孝の奴！ 謝罪れ！ 謝罪ずば……」阿呀手討と見えたるに躍り出でたる半兵衞「謝罪りまいた、半兵衞代ッて謝罪まする。宮何故に其許も謝罪申さぬ。何事も父の命、理の過ぎたるは非の百倍ぢや。況て只今の時の勢、時宜といふ、至極の御沙汰ぢや。此の時節に兎角を論ふ歟。虎に騎る者の途中にして下るれば啖るるぢやまで。其れ知らぬお主ともあるまい。ささ疾う謝罪申され。」彼女は漸くに其泣聲を遏むると見えたるが、其の滂涙を拂ふかと看る手を忽倏懷中に指入れて、彼の小刀を拔くより疾く、丈なる黑髮根元より弗と斷りて、其處に棄て、再び嗚咽りて聲も得立てず。彼女に代りて、世の憂きに堪ぬを歎くは、彼の啾々たる蟲の聲のみ。

（三百三）

「復右どの御在やれてか。」と門に立つ深編笠の武士の聲を、内にては疾く聞つけて、「あゝ其聲は御茶の水の御仁か。折柄ぢや、此より愚老音づれ申さうと存じたるところ。」言ひつゝ出迎ふる其人は、五十七八、六十にもや老りたるらむ、頭顱は此頃の日中の陽と、眩きまで赤う滑こう照り輝きて、•後腦窩といふ邊にのみ消

殘る日陰の雪と、纔に融けて幾筋かの振分髪の記念と見ゆるを遺したる、箕にも似べき世を棄られぬ淺猿しき萬緒の名殘にや。身には手織木綿の單衣の襤褸なるを着て、頭には髪結もなき謙信平袴、背裏のわたり蜘蛛の網の如くに破だみ上れるを穿たり。此ごろ下る深草團扇の紙のそゝけしを、手細工の粟飯糊もて不器用に修繕へるに腰の白髪を戴かせつ、藤繩に眞鍮の鋲打ちたる、木佛の手かと怪訝まるゝ小脇差前反りにして、一本脱けたる門齒の口に惜氣もなき高笑を開せ、「はゝ、さ、先づ斯う御通りやれ。」「御免しやれ。」と弓手に取る編笠を式台に棄て、額上なる汗馬手の端に拭ひ拭ふ、御茶の水の御仁と呼ばれし其容は、別人ならぬ忠彌なりき。「暑は道で申したも今年は別て熱いでの、いや老人意氣地もござらぬ。……冷水など與るかの?」「何さま渇く。一杯賜され。」老人は手を鳴らして、出で來る小奴に其を命ずれば、彼は軈て水桶に泛々と、小茶碗を副へて持ち來れり。但し其の水桶に、朽ちたる底を盛上げて一線の箍をはめ、茶碗には缺損の痕あるものなり。「さ、何程なと喫れ。夏は茶々より冷水ぢや。されば宅では暑分は誰人にも御茶は斷さぬ、はゝ、些細の事のやうでもな、其れで炭代薪代が年分とすれば餘程違ふぢや。總て儉約は何様な處にある。水は天道の下された結構な飲料、それを差措て、や、茶で候ふの湯で候ふの、悉皆が驕奢の沙汰、神佛の冥慮に外るゝ。……や、御分、其桶を皆喫したの! いかに人の振舞へばとて。無錢ぢやとて……」彼は、忠彌が一桶の水を喫盡したるに、且つ驚き、且つ怨惜き面色したり。「一滴きりと仕申した。」「いや大事無いかの、腹も身の内、古釘も金の内、無錢の水とて無暗に粗惡には爲られぬものぢや。然りながら、まゝ可い、氣丈な事ぢや。流石は一流を立つる御仁ぢや。其腹で無うては喃、扨、今日渡せられたは豫ての金子返辨かや?」

爰に知る、此の老人は、前に忠彌が正雪に語れる本郷の金貸屋代後右衛門其人なるを。彼は元と都近き何某家に仕へしが、仔細ありて祿を辭し、江戸に出で、浪人の活業として高分の金銀を貸出だして貨殖したるが、積めども散ぜざる其利は年々に累積りて、今は數萬兩の分限といふ、大富裕の有德人とはなれりき。雖然斯是富人の常として、有れども無きが如き吝嗇と、盈れども乏しきに似たる慳貪とは、庫に餘り家に溢る黄なる金、白き銀にも猶饜かぬなり、折節は人の肉を殺ぎ、骨を剗む如き所爲のあるに、世間は、有財の餓鬼、黄金の奴隷と卑視つゝ、途に遇へば鼻を撮み、其名を聞くも爪彈きする如くに爲なれども、亦た然る輩も、苦しき時は賴と崇めて、手を摺り膝を屈め、其門に立ちて其蔭に依らむと縋るも尠なからぬなりき。忠彌も亦た然り、彼は彼を憎惡むこと從前は蛇蝎のやうなりしも、鼻をも殺ぐべき時の用の是非なさに、同じく其の叩くべからざる額を叩きて、彼に百兩の金を借りたるなり。借りたる金は一日が間に散り失せたるも、目的とせる方にては其時となりても一金の工夫すら附かぬなり。期日ははや過ぎぬ、疾く取揃へて、返辨をと手代の來て日毎に逼くが可厭きに、此の盆までと言ひ延へしが、其盆とても物の的とては無きなりき。已むを得ず留守といふ。其の留守も後には利かで、彼奴等は玄關に居催促なり。身さへ惜まずば、素奴等、斬にも薬にもとは幾回か想へるも、兎角は江戸の大將軍たる大切の身、然りとては唯一人の老母、妻女の手前も面目なし、有るべからぬ心配を掛くるも不孝、と彼は其の不慈の口を塞め、紀伊殿にすら好うは御會ひ申さゞりける其頭を、叩頭きし吝野郎の小奴が前に下げつ、明日までをと懇願みたるは昨日の晝時にて、其の契約れる翌日とは今日! 彼が自ら其

日、此家に來れるは、其の幾分の才覺の成れる歟、否歟。但見る彼は對等の座を下りて慇懃に手を交へぬ、然して其口は囁嚅れり。

（二百四）

「成……成り申さいで……」語尾までも言ひ斷らで俯向ける忠彌が面上は、苦汗の流るゝ滂沱たりき。聞くより主翁は目に角立てぬ「成り申さぬと？」「は、奈何と才覺し申したも……」六尺に餘れる大漢の聲も、悲しう敍れて、秋の蚊の鳴くより細し。可憫彼が牸牛の如き咽吭も此の酷暑に枯渇ける歟、今喫盡せる半桶の水も此の咽吭を潤すには足らざる歟、想ふに其水は枯渇を醫するには非ずして其熱を消さむとてならむ、されど其熱は竟に消し得ず、水は蒸されて湯氣とやなれる、全身の汗は流れに流れて、突たる腕の毛の尖にも露と應へて消ぬべき玉を結べり。「金持たぬ和殿が何と思って渡せられたか？」「餘りの懈怠、面目もおざらぬに……責て御詫なと……」言ふ面を睨つけたりし主翁は俄に冷かに笑ひて、「いや措かれい。……など と言うて我等を哢謔て、散々に腹立たした跡で金出いて、我等に面目無がらすとか。術が惡いぞや。こりや老人は性急ぢや。疾う持參の金見せて安心お爲しやれ。さ、其樣な狂言廢めて。」

彼は懷中より眼鏡を出だして鼻梁に懸け、傍邊の帳簞笥に立て掛けたりし算盤を膝に斜に構へて、手ずさみながらにはち／＼と彈ける、前の言を更に續けて、「さ、疾うぢや。如何でおざる喃？　呀、返答お爲やらぬは、扨は無錢の……手ぶらでお在つたか？　えい、忠彌、お主は昨日の武士を廢止たか！　え、乞食か、水貰ひにか、甚麼といふたか？　武士に二言無し、お主は其足恥めにか。え、此方は擬待の茶屋では無いぞ。何爲に見えた。謝蹐？　其樣な事ははや疾うの昔ぢやぞ。何爲うとて來た。」如是る雜言の耳に入れるは、生來、彼は今が其の最初なり、彼が熱腸は實に爆發せむとせり、低下たる頭、突きたる手は猛然として起ち、遽然として膝上に在り、居丈高なる彼が肩頭は飢たる野兎を搏むとする如くに聳立ちぬ。「はゝ何を其樣な辭。他に借りたる金を返却さず、今日の明日のと出放題な方虛言のみ吐きをって、此ばかり催促されたとて怒れた義理かや。其樣に腹が立つなりや寢た勘定を先づ起せ。言分があらば此の算盤の桁を斯っさらりと淸淨に拂うて後に言へ。お主が其の蟷螂の拳頭も乃身が證文で一撲ち撲たば支措がなるまいが。はゝ馬鹿面な！」堪忍の袋も今は裂けたり。轅手大喝、起上がる忠彌が

胸を。「待た客人。」簀戸の陰より躍り出でゝ、率制めしは、主翁が子の復十郎、引捕られながらに聲振絞りて、「短氣ぢや御分、談合は什麼もなる、怪我ばしさせられば御身が非分ぢや。非理に陷るな。」彼が憤怒は前後の辨別をも闇とせり、「否はぬ、放せ、非理も管はぬ！」「いや謝罪る、無禮は謝る、御分の面の起つやうに爲る。先づ、ま、我等へ……」主人の翁は此時に既や逃入りて此座に在ぬなり、忠彌は虎の眼を瞋りて、「此上は御分が敵手ぢや。いで立合へ！」「む立合もする、御手にも合ふ、但し根元が金錢ぢや。」「いや金錢で無い、無禮の沙汰、今は武士の意地……」「ぢやから我等が其無禮は謝る、御面についた汚泥も拭ふ。恁うまで言ふを言募らば我等も町役の者を呼ぶ。然あらば理非は何方にあらうか、熟う分別あれ。御分面皮を……」忠彌は其處へ撞手と坐して、言は無くて人を睨めたり。復十郎は既や我物と遽はしく手を鳴しぬ。「肴は無くも先づ御盃　。いや丸橋どの、兎角は詫びまする。一獻申して緩々と談合しませう。いざ御安坐……。」

（二百五）

「忠彌、酒は大嫌ひぢや。」「え？　御身が？」囁き着く如くに言放ちて、苦笑ともせぬ彼が面を差

たとて[illegible]のみも行るまいぞ、髯面とまで……は
はア解つた、嘲戲でもお爲やるか喃？」一慰み
には小鼓を打ち申す。」彼は其の沒分曉を嘲笑
て、他を問むとせり。

（二百六）

「浮世狂ひとも有るまい。其の御年齢で……」
「え、浮世……？」と忠彌は其目を圓くせり。復
十郎は騒がず、彼が衣服、形裝を又更に熟々と觀
て、獨語く如くに、「汗染みたる細布の帷子、葛布
の袴、綺羅を飾り世間を飾りて無い身代を有り
と見する、今噺、山師の人體とも見えぬ。甚麼樣
にも合點が行かぬ。あの繁昌の道場所有て右
にいふ家内は少人數で、其樣に窮乏らるゝ……
朝夕の御膳には何物を喫がるか、鯛比目魚でも
賦？ 飲食道樂かな？」彼が棄臺詞の徒口を此
方は眞に受けて、頭を搔搔き、面目もおざら
ぬ。他言は無用ぢやが、其の朝夕は麥粥ぢや。
老母にこそ折節は小鰯一尾も膳に附くれ、我等
に妻子、其れ等は皆生鹽を舐め申す。眞實に恥
かしい。道樂などの穿議かや。」有繫の彼も、此
の返答の思ひ懸ざりしには喫驚きて、再び其の
衣服、身裝、腰にせる大小刀にまで眼を注ぎた
り。詼諧よりも今は鞠問の口調もて、「御分、其
言は眞實か？」「甚麼の虛僞を申さうかや。實、
面目はおざらぬも眞實ぢや。」彼は[illegible]に頭を
[illegible]めぬ。「眞實なりや實に奇怪ぢや。[illegible]
ともあらう御人が何故に斯樣とは何たる事ぢや！
御分眞直に御申しやれ。さ、何故に其の麥粥生
[illegible]と迄に零落れられた！ 然も其の零落た身で
何故に我等が方の高分の分子百兩までの高
利の大金を借られた？ 其の仔細無うては協は
ぬ、次第によりて實にもとの得心行たりや、我
等其の發起となりて御身樣が身の立行かるゝや
う、弟子衆にも賴まう、出銀も爲せう。然はな
くて只理由も無う此方の金借たとあらば、こり
や最初から返濟せぬ……踏倒さう氣で借られた
ぢや。然らば騙賊ぢや。騙賊なりや騙賊で又處
置もある。今昔ながら其の腰の大小刀、老母、
内儀、兒童衆の衣服手道具、悉皆先づ引上げて、
不足な分は奉行所へ訴る。故障言はれば盜賊と
して縄にも繫くる。其は先づ是非ない後の場目
として、道樂も無う、遊戲も無う、あれ程の弟
子衆を持て、諸家諸方へも出入らるゝ御身樣の
然迄の窮乏とは予底も腑に落ちぬ。仔細を御言
やれ。是非に聞かう。」彼が同情と脅迫とは兩
面の大板となりて他を搾めたり、搾めらるゝ忠
彌が苦痛の膏汗は全身を浸して、搾らば斗をも
でも算へつべし。噫、彼の老奴が讒罵は、其面
を披ひ其顔を擲りても猶忍耐ぶべし。此の壯者
が情に富み理を責ての鞠訊は、口先に情深き我
には到底答へは得べしとも思はれず彼に謝め
り。「是れ迄に申ても得う解せられぬか。地獄
御身は、他人に對ひて虛僞を言はれぬを貧とお
爲やる、又我等も其を信けて、祿も扶持もおぢ
やらぬ仁に百兩といふ大金を用立てた。何の
此が尋常の貸借に……期日が切て此程待ちます
か。最初から抵當も取らいで貸しますか。此方
には其程の好意がある。いや懇意よりも不義理
の御身が前途の立ち行くやうにと肝迄を煎らう
といふ……」一層変りに雄辯てしが、彼に風と、
「……が、今方、今暫し待て、好い風も必ず吹
く、ここ一月が程と申された噺。其の好い風を
ば甚麼な風か？」想ふに彼が目下の手段たる、
這の錢無くして名と兩とのみなる豪傑の、其の
所有物件を利して、我が貸金の一錢たりとも餘
分の高收を獲むとは爲なるべし、故に百方、
腳を擂りても譲文の反古たらざらむことを冀
へるならむ。とは知らぬ忠彌は又も困ぜり、假
初ながら我を虛僞をば言ふまじき者と信じたる
其人に對ひて、此の好風の消息を明かさでは協
はぬ場となれり。然りとては其を甚麼と言ふべ

其天雷に身を碎かれう！―むゝ、天雷に身を碎かれう喃！」「勿論ぢや！」「耳を借せ。」忠綱は彼が耳朶を牽きて、耳語くこと少時なりしが、看る／＼彼は面色を變じて、手を戰かし、足を震はし、其儘中風の症に罹れる病者の、自個が身にして自個が隨意ならぬ、否さへも爲作ぬ如くとなれるを、彼は辛く念じて、纔かに態を辛くも假粧ひつ、「其事は、御身、眞實か？……言ふ迄もあらばこそ。僞言たらばお主が身上ぢやが、其れ覺悟ぢや喃！……覺悟は勿論、然、聞くからは：……」彼は胸を力めて鎮定め、呼吸を調整へ、我さへも異しと聞くまで亂案れたる聲音を佯飾ひて、「……我等も其の徒黨に入らう。や、忠綱どの、此上は一命もぢや、況て金銀！我等家に所有ほどの額此の大義の爲に進上せう。」忠綱は彼が決心の潔き、意外のもの有るに驚きたり。彼は熱誠の口氣を續けぬ、「左右は猶委細を承はらう。先づ其前に前祝の盃、一つ進らせた。」

（二百八）

銀河西に流れて、星斗爛たり、飄颻たる天風袂を吹きて、胸襟の爽かなる洗ふが如し。既に身を劇らるゝが如き借銀も不意に濟了つ、其の久しく涸れたる腸には飽くまでの酒を灌ぎつ、渴ちざる今宵も歡樂は思ふ儘になりぬべき、其の喉たる口には絶叫すべからざる快感の在身に溢れこ漲れむばかりなる忠綱は、快々の屋代が家を辭してより、僅ぎには此の涼風に浴び、佇しては其の前途に笑み、蹣々跚々、高き濶步は今其の歡喜の境を踏むを知らず、蹌々踉々、多年の宿望も今日に其掌裏に弄ばれ得るが如き心地して、不覺に出づる鼻唄の間に酩酊なる態子の滑稽、子安の墻を過ぎ行けば此の……こそ、我が家なれ。はゝ、今戾ツたぞ。」紙燭して迎へたる彼が妻女は、昏晩の夜金剛に異きて顛倒むとする我夫の手を逸早く扶けつ、と同時に眼をもて奥の方を暗示して、甚麼をかの注意を惹むとせり。「何事ぢや？誰が在るか？」醉漢の聲は彌高きに、今は是非なき妻女、「藤、藤四郎どの見えられてござります。」「甚麼、藤四郎？」はゝ、藤四か藤四か、酒顚どうしが参られたか。大江山の鬼でも大事ない。怖くはないぞ。」彼は知らむ、此の藤四郎は、妻女が身には、其の大江山の童子よりも可怖しき、索債の鬼なりけるを。

我が待つ人の聲と聞て、喧嚣なる男は其場へと出でたり。「これは旦那、はゝ此れは好い御機嫌で。藤四郎先刻より御待ち申してござります る。」「おう藤四、好う見えられた。はゝア久た健の其代かな？」言ひつゝ、介添もせで、つかつかと座敷に入り、床の前に挿手と胡坐せる人の後より、藤四も再び以前の席に立復れる、「挨拶も未だ終らぬに、「これ酒を！ えい酒を！ 酒をと言へば！」妻女は呆れ顔するを。……えい酒をと申すに！ 藤四郎、疾から待せて、喉茶ばアりで歸さるゝか？「一献せ。これを挨う——む？ 料物が無い？ 無いと申すか。えい此物など持て。えい此の小柄、用成ほど持て、はゝ、飲めえばあ甘露も斯くやらむとぢや。心も晴やかにぢや。あはゝゝゝ。」「いや旦那、我等は御存知の一向にてござります、我等爲なりや……」「えい、無用……無用にせいか？ はは虚言を吐きやれさ、弓師藤四郎ともある男が此の甘い酒を喫ぬといふ法あるか！ 敵の家でも來た口は濡らすと言ふ。はゝ、ま、可はさ。」彼は主人が目下既に、十二分の爲體と見ゆるですら心苦しきに、猶此上に、十三分、十五分の酒醉ともならば、醉ひ爛くるか、然ずば酗狂ふか、兎角は今まで待に待ちつる其要談の烟と化りて了らむことを懼るゝと今一つは、物こそ言はね、投出されたる小柄を手にしつる儘立つも得やらず、涙含める妻女が胸裏を想察りて、此の

されまし、潮が來ました。」搖起されても彼か惟任は醒めぬなり、尚其の夢を見續くるにや、「う……上樣を討たと言ふか……本河口……半刻藏の兵は、御殿の火を消せ……」何事言しやります。何を寢言で！」妻女は突如に其袂をもて大な口を覆ひたる、其れを拂除て、「も、可は。可厭い。勝、勝閣……」惡、口籠り出せる儘、彼は再び側に向きつ、踏反らす足の猶予といふ響と與に、鼾息の聲は雷の如し。「ほゝ、何事ぢややら他愛も無い。もし、妾が留守の間に甚麼事ぞ口弁しやりましてか？」「いや、何事も。」一言はしやれてからが寢言ぢやが、兎角は宿も一流の仁、酒に醉うて有らぬ言いうたと有りては弟子衆の前も恥かしい。依てな、何卒、然る事は沙汰無しにな。」三十路をば過ぎたるべきが、美しき婦女の鐵漿黑なる脣を凄めて、紅色の變れる面の上に淡き微笑を見せられたる、夜半燈前、冷水を背に浴せられしが如き藤四郎は更に慄然として、「いや何とて。夢には斗瓢と無い事を好く見まする。旦那には今夜は御弟子方へなと行なしやれまして軍學の御講釋でも有たものと見えまする。其れで軍の御夢。こりや道理ぢや。」「それぢや。此ころ太閤記を好て讀れます。大概今のは本能寺合戰の所でもあらう。其れは兎に角、平に沙汰無しには頼みますぞや。さ、折角おや、御行はしませぬか、早起られて。」

（二百十）

藤四郎は、針の筵に在るが如き忠嶋が家を辭く遁れて、今自己が宿へと歸らむとは爲なりけり。其の門の戸を潜れる迄は、氣も心も力めて確には持ちつれど、戸外へ出て吻と一息吐くが否遽に物の怖氣立ちて、遁るゝ如く、我も知らず、堀端五六町を直奔りに奔りつ、但見る人家の軒燈に漸くに我に復りて、何地かと視れば、筋違の見附外なりき。振顧れば、彼等は逐うても來ざりけり。雖然我胸は猶大濤と跳りに躍りて、呼吸喘きに耐らぬなり、霎時佇立みて耳を澄れば、眼に映ゆるは彼女の凄き微笑、耳に聽ゆるは忠嶋が可怖しき寢語なり。甚麼とせむ、此より本鄕の我家へ歸らむか。彼人目覺さば或は我方へ踏込みても來む、五人十人の弟子はありとも彼の健腕にて蹴立てられなば一堆りもあるべからず。君子は危きに近づかず、今夜は麹町なる親戚の方へ行て一夜を乞はむか、噫、兎角は命が物種！　彼は咄嗟に分別して、見附を入り、猶多く人の往來の絶ざらむ街衢をと撰りて、大通りを本町まで來れり。此の途次にも彼は深く專思たりき。物種の命一つは今夜は恁くして隙據きを免れたれども、明日よりの夜を奈何とかせむ。吾、其の物種の命もなれど、亦た約束の百兩の拂金といふを看す／＼棄では協るまじき歟。彼の資本も他所の金たり、其の拂金を棄つるなれば、折角貸かりし此首に我と我手で縄を懸けでは濟むまじき歟。否、其首より猶怖ろしきは彼の寢語なり、合戰！　撫切！燒撃！……血の海！　屍の山！　焦土の原！一夜が内に此の江戸も滅却すべし。我等が妻子、親族、家藏も武藏野の曠原と失なるべし、嗚呼！　と彼は獨り其舌を震はせしが、然りとては何故に又た其樣なる企謀をせられしもの歟。謀叛か、意趣か、或は全くの意味も無き太閤記の中の寢語か。其の尋常の寢語を物有り氣に聞て我が鬼胎れし歟。いや／＼、然樣ともあるまじき彼の内儀が顏色、殊には彼のまざ／＼しき、江戸の大將……上樣……伊豆殿……！彼は、何やらむ我さへも夢見る如き、此の思案の中に、いつか本町より常盤橋を歩みて、辰口の但有る長屋下に來にけり。折しも或る窓を漏れて出づる咳嗽の聲に耳朶を撃たれて、不圖氣附きし如くに停佇るが、其の寢待といふ月影に傍邊を透視して、「あ、然樣ぢや。これか今の伊豆樣の御用邸ぢや！　此の伊豆殿が邸も

彼が出入場の一軒なりき、別しては公用人の役の奥村には目を懸けられき。彼は此の邸を見、其の出入場なるを考へ、其の日頃より入魂に為らるゝ奥村が身上を想ひつゝ、我や今此の天下の大變たるべき謀叛の訴人と爲るべきか？　とは此時初て其の念頭に浮べりき。「…ではあるが、何しろ囈語ぢや。囈語を證據に訴人するのも…？」彼は猶、其身の職業に[illegible]て思ぢたり、此が尋常の商人ともあらむには、爰許の訴人、何程か苦しからむ。雖然、彼は不幸にして武士の表藝たる其の道具師たり、[illegible]て狼狽たる暴動をも爲ば、其身のみかは、其の製作たる物品上にも[illegible]なり。況て百金といふ其の代物の取れざる爲に、我が一命を助からむといふ其の卑怯の心より、有るまじき證を據ろとして懇親の仁を訴へしなど言れむには末代までの恥辱なるべし、此は迂闊とは！　低徊少時、彼は竟に其の[illegible]の心に制せられて、此の場所を去らむとして、行くこと四五十歩、不圖瞻仰ぐる眼前に、巍々たる幾座の城樓の、月光に映じて、[illegible]、遠れる壁は白玉の如きを見たりき。[illegible]、忿は其刹那に、亦た茫然として[illegible]せり。[illegible]して又た行きも得やらず。「えゝ、名も忠義から！」一看る看る、彼は取て返して、彼の邸の通用門の潜戸に走り着きぬ、鎖せる扉も敲るゝ許りに、「弓師藤四郎、火急の用事で奥村殿方へ通ります。御開け下され。」門は開きたり。彼は轉がる如くに入れり。時に櫓なる太鼓は丑刻に響きぬ。

（二百十一）

藤四郎は今、寢衣の儘に脇指一つなる主人奥村が面前に在り。什麼事ぞ、彼は太く外げて見えたり。「左樣の深い御鞠問では恐入ります。只私は有の儘申上げましたる自身承はりたる儘を御耳に入れましたまでの事。唯、其の、天下の御大事と存じましてな。」謝るが如く揉手する態を、主人は見遣りつゝ、打傾けたる首を徐ろに頷かせぬ。「いや甚麼も其方を苛問む、其樣な次第毛頭あらう理由は無いがの、只右の囈語では些と困却る。兎角は其方もいふ天下の御大事、と在りて其の證據が又た、俚諺にも夢を繪に書くといふ其の夢話の囈語とありては、執扱ひがいかう難儀ぢや。況て彼奴も名にうての武藝者、無三とも成るまい。過まてば公儀の御恥辱ぢや。然りながら、[illegible]には[illegible]。これは困つた。」組みたる腕を徐ら解きて、主人は急と容を正せり。「藤四郎、然うして其れは[illegible]か？」「へえ、…明日の夜參つて、其の百金の負債を催迫る…」「へえ。」一旣に一頓挫を來せる彼が心には、堪へ難く此の役目を難儀と思へりき。彼は今忠彌夫婦を、身を喰ふ惡鬼とも怖れたり。「…では、私自身にも參りませいでは？」「勿論ぢや。其負債を催迫つて、倘か拂はゞ、其金の出處を探索る…」「へえ。出處を？　何と申して？」「何として、其れは臨機ぢや。其金に刻印あらば、其印に就て。乃至其の包紙、何樣にも目を着る。縱其の自白した三萬兩。三萬兩とては當時將軍の旗本は申すに及ばず、十萬石以下の大名にも容易うは無い大金ぢや。其の大金を彼奴は什麼とて得たか。又其の丈彌の百金も其の三萬兩の内か否か。縱し、其奴[illegible]ならずとも、十分が一、百分が一でも素奴の手許に有るか、無きか。此等は其の金銀の出し振、執扱ひの粗忽なと、丁寧なとでも注意れば直ぐ知るゝ、而て、愈彼奴の其の手許に然る大金の有ると見ば、涯分の骨折て其の出處を探れ。縱其者に其の[illegible]弓は…其の百挺といふ弓を何用に爲るかいふをも糺せ。…いや、其れは、も、其の最初[illegible]に請う[illegible]ました。[illegible]に[illegible]しう手許に置いて、良製のを見て、諸家様、又た弟子衆の所望に應じて御肝煎なされまするとか…。」―然言

うたか？　むゝ、其れは左う其筈、扨其の負債を掃はなんだりや……」彼は独たりよ、「戻りましても好ござりませうな？」「いや、中々、此からが肝門ぢや、故意に腹立と見せて、番屋へ拘く……」彼は忽地舌震ひ遣り、「然樣な事申たりや直ぐ脱殺されます。私とても其の命が……物種と言ふか、然らば是非も無い、さらば番屋から彼奴夫婦を喚こ……たゞ婦の衆を喚びまして、私が其處で詰開きまする？」……むむ、其方は其所で詰開け、成らずば身代を取らうと言へ。其れを合間に其留守宅には當方から手を濵て家内を探す。物の書類、間好くば連判など有らうも知れぬ。」彼は撲地と感心の横手を拍てる、其手を翻して額上を撫でつゝ、「な、な、何さま。いや其の御穿議なりや……そりや其れ迄にも及びませぬ。忽忙さに啻申し外くれましたが、其の同類はな……」「え、其の徒黨？」「此とて囈語ではござりまするも、有り〳〵と、極、極確正に。」「申した歟？」「えい。江戸の大將は乃公、正雪は久能、金井は大阪、加藤は京都と……」「彼の正雪が？」主人が面色は遽に變りて、舌根も戰く如く、壓潰すが樣に押返して、「確と正雪？」「然、聞まして……」「えい、お主、其處に在れ。立は成らぬぞ！」沈着せる主人が恁う俄に狂せる如きに、何事かと彼は狼狽ぬ。奥村は愈眼中を血迸らせたる、押取刀に突と起て廊下へ出でたり。

（百十二）

「七郎右！　八郎右！　起きろ。起ぬか！」兩個の壯者が臥したる枕頭に立懸りて、熟睡の夢を遽だしう喚醒せるは、兄の奥村權之丞なり。兩人は俄破と蹶起きぬ。「兄者、何事ぢや？」「何事ぢやで無い。こりやお主等は……何かは知らず、是れぞ眞個の寢耳に雷を聞ける兄弟は太く愕きぬ。「甚麼と爲された？　我等が什麼ぞ爲申したか？　兄者。まゝ御心の熟う沈着けて。」「沈着くも急くもあるかや。第一がお主等が眼に、權之丞、兄と見ゆるか！　一腹の兄……」愈烱に捲れたる兩人、直呆れに呆れ果たる其眼を凝して熟と視れば、恁く罵ふ人の面上には血色も褪せて、押取れる刀の柄には戰慄ける拳も懸りぬ、然りとて其の狂氣にあらず、酒酣にも非ざるべきは、堪ぬ暗涙を其瞼に泛へしと、激昂せる聲音も調は低くして、傍邊の聞えを憚かる如きにても知られぬ。扨は彼の大事か、と末弟の八郎右衛門、既や面色の動搖き初むるを、仲兄の七郎衛門は擡平と睨附けて、「やア八郎右、兄者が奈何と仰られうとも、お主、末弟の分際として我等を攫て「返答相成らぬぞ！　いや兄ご、我等兩人素行悪しいこと、人の口の端に懸ること、然樣の義もあらば何卒御折檻……父の亡い後は兄。賴み申す。」と、言ふ身近くに彼は片膝を突着けて、「其兄に何故隱匿す、一腹一生の兄に何故祕密す。」「え、何事を？」「えいお主が口から自白さうとすりや……寄隙て其罪を輕めうとすりや、汝は飽く迄も此兄が眼を欺瞞かしをる。汝等兩人、先刻我等へ、確と言うたか、師に正雪肝煎られて不意も紀伊國殿へ三百石宛に有附いた。これに依て明日當地を發途する。途中の用意、身裝全體、厄介の貯蓄もおざらぬに百五十金を惠まれい、一期の所望ぢやと恁う言うたな！　汝、其の正雪を何者とか思ふ。其の正雪は兄より親いか？　當殿よりも尊いか？　紀伊殿事は姑く措くも、其の今の百五十金は汝、何用に爲る？　有らう事かや汝、其金を以て……三十年來長飼いて下された其の御恩を忘失て。其の御主君を……いや其の主の又た御主君たる上樣を……其の御居城たる江戸を……其の御仕置ある日本國を！……えい其後は言ふまいにお主等疾う自白せ。仔細は既や訴人あッて知れつるぞ。忠彌口から露顯しつるぞ。」「えい忠彌！」「正雪は駿府、金井

は大阪、加藤は京、彼れ忠彌は江戸を根城の大將とまで知れつるは……忠彌口から白しまいた歟？一言んでも無い！今汝ら兩人が訴人すりや、第一番の注進だすよ、倘か汝等が事他人の口より訴されなば其身かは、我等とて、御祟りは殿までどりやは。殿に寢召させ、父といふ兄の首に繩繋けても汝等は誅戮の惡徒たる正雪に荷擔人するか。其れも露顯せぬ中ともありや……惡く事の發覺したるを。迷ひを執るな。甚ふれば是非ない、兄が手に繩縛さうぞ！」驚愕窮りて聲をも發し得ぬ兩人と、愈彼等が謀叛の其れと知れたるに、一刻の後をも氣支ふ兄が眼とは、異しき光輝を左に射交して！少時は其語も斷切たる時、曉の風に冴えたる寅刻の太鼓は鼕々として、此處なる六個の耳を撲てり。巳や夜も明るなり、夜の明けば、と溌つる奥村の兩人、彼等に立らむとする際なりき。若侍の宿直したるが寢惚眼を慌たゞしく、「御町奉行石谷左近將監どの、御入來におざりまする。」町奉行との案内、然も時ならぬ此の入來は、と兄弟二個は覺えず、一所に目を合せぬ。

(二百十三)

町奉行石谷左近將監の、老中伊豆殿が役邸に來れるは同しく此の大事に就てなりけり。彼は此夜の子の刻に、彼の本郷なる屋代彌左衞門父子が、丸橋忠彌、由井正雪、其餘甲乙なる徒黨の大非望を企圖てたる急訴を受けたり。聞たき當人原が分際として世に絶無ぬ、殊と眞實と思はれざる迄の大望なれども、亦た其れが口吻中に紀伊國殿御名あるを慮へば、自ら思ひ當る節の無きにもあらず、殊に其の大事の日といふも四五日が程に迫れるかの如く聞ゆるに、兎角は猶ぬ、先づ搦め取りて、と一方には我が部下の與力同心の中にも倔強の腕利を勝り寄せたる、卽時に集まる者三十餘人、其等の古兵らが評議によりて、如是る大事の捕物は夜中は危ふし、朝斷にこそと言ふに就きて、忠彌が方は廿四日の未明、卯刻の討入といふに決定つ、一方には又彼の同僚神尾備前守が許に謀じて、其れが隊を市谷加賀屋敷なる正雪が私宅に向はしめぬ。此等の手筈遺漏なくして、扨て月番の老中伊豆殿方へ馳せ、猶其の下知を乞むとして彼は今來つるなり。來て見れば思ひも懸けぬ、這處にも弓師藤四郎、幷に奥村七郎右衞門、八郎右衞門兄弟の急訴あり。これに依りて彼等が隱謀今は一點の隱れなく、猶正雪は久能をと志して廿一日に江戸を發ち、京大阪の大將たるべき金井半兵衞、加藤市郎右衞門、其餘の黨類はこれに先ちて、東海道筋にての會合の後、七八日して、各其の指す方へ發途てる趣も知られぬ。然も甲が口、乙が口ともに、紀伊殿、正雪に御同席、五代の將軍家に御直りあらむとの御結構、とは衆皆一樣の自白なりき。驚愕きたるは伊豆殿なりき。是の如くば忠彌縛めは大事のもとなり、或は彼が居所の周圍に其方より如何樣の手當あらむも知れ難きぞ、市谷の叔が明屋敷に向ふなる備前が手は急ぎ途中より引返して御茶の水の二番手として後詰を爲せよ、將監は此より直さま其場に出馬して下知の手落あるべからず、予は直ちに急登城して、上を守護申し、諸事の手配すべきなり、馬率け、疾う！とて座を起たる。夜もほのぼのと明け渡る頃、大手、櫻田、平河口、半藏の門々を見れば、警衞の藩士の數は常日にも倍して、大手先なる大腰掛には諸役人が供廻の影侍よりも許多く、例ならぬ水戸殿、紀州家の登城さへあり。目附衆は目を瞠らし、小姓衆は舌を巻し、奥表の坊主どもは此の光景に、御廊下の隅、御衝立の陰に集りつ、目引き鼻引き、早朝より開かれたる焚火の間の評定といふ其を什麼事かと、茶筅の提綱さへ手にも附かぬ、聞立つる耳に漸々にして聞き出したるは左の一事なり

き。曰く、御禁制切支丹宗門の徒、駿府の町に徘徊して愚民を眩惑す、これに依りて御使番、駒井右京どの火急の御用として差遣はされ、御成敗……！

＊　＊　＊　＊

「はゝ、火事は遠いは。何事ぢや狼狽た！」誰か知らむ、其火元は、近く本郷にあらむとは。四隣に起る失火との叫號は、夜来の醉夢未だ醒めざる忠彌が耳朶を愕かしたり。彼は周章ぬ、突如に門の戸踢開きて「火事は何處ぢや？」彼が腰間には刃劍無かりき。一人の曲者は、と見るより其手なりし十手を棄て、小藪より飛で出で、「捕た！」其れが弱腰に無手と組みたり。同時に四五人の、手襷、鉢卷の紺色の股引に草鞋懸せる捕吏と見えたる黨共ははら〳〵と躍り出でたり。「御用！　御用！　忠彌、御用！」「えい、御用とは？」「御用！　町奉行石谷左近將監どの御用！　忠彌神妙！」彼は組せながらに、「石谷どのは面識人で無い。忠彌用事も嘗ておざらぬ。」「言ふた、汝、評定衆よりの御指圖ぢや。神妙！　神妙！　神妙せずば組で捕らうぞ。」「む、組で捕る？　成らば手柄に！」彼は其腰を一振振れば、組たる者は其手を外して狗兒の如くに投られたり。「呀、抵抗ふ！　それ！」一押取圍で撃むとする二番手三番手が十手を、彼は無造作に、左右等しく搔繰奪りて、猶面に競ふて進む四番手五番手両人が鼻顱が間を丁と撃ぬ、大力に撃れて彼等は目や眩めきけむ、次なる味方の突棒の上に撲地と僵れて、機に突棒を刎落しぬ。獲たりと彼は捉らむとす。原来の槍執ての名人、捉らせては敵はじと透さず組む二番手三番手六番手の同心を、彼は其足をも堪させず、横さまに薙倒して、手快く其を搔取りつ、小脇に挾み、一足退りて、「えい、公儀衆とて、忠彌身の咎をも申されで、無法！　無法！　無法の縄目には得う繋るまい！　さ、何萬騎でも……」彼が小鬢は風あらざるに戰ぎ立ちて、其眼は、這處にも一個の明星を現ぜるかと許りに耀きたり。

（二百十四）

彼は睥睨はす怨眼の裏に突忽映じ出せる一個の人ありき。其の打裝、九曜を金にて三所に打たる黒漆塗の陣笠に、淺黄縮緬の同じ紋章を染拔きたる割羽織、栴檀卷に角蔓角鍔の雙刀して、踏込といふ短袴の下には花田色の脚絆を着け、武者草鞋を穿ちたり。水色に磨ける紅總の十手を逆に把りつゝ、徐々と進み寄りたる、軀の長さも腕の太さも群に拔いでゝ、四下を掃ふ威風また尋常ならねば、怒猛れる忠彌も左右なるは打懸り得で只顧に其樣を覘ぬ。「忠彌、何とて然は躁ぐぞ。汝ほどの者召捕るに奉行の予が向うたるは面目では無き歟、など神妙に爲ぬ。」「奉行と聞て、忠彌は小躍りしぬ、「や、扨は石谷殿か？　奉行とならば忠彌聞かう。浪人とこそおざれ忠彌も武士ぢや。鞫糺さるべき義あるとなりや何故其れ〴〵の作法を以て參られぬ。無法の手態、近頃の奇怪！　然る奇怪の縄目には……。」「繋らぬと歟、えい汝耳聾か！　御用の聲は？」如何にも聞いた。其の御身が用、執政が指圖といふ……」「甚麽と言ふ、將監が私用の執政衆の公然ならぬ指圖に御用といふ歟。御用、とは上樣の御用、將軍家の御用を言ふぢやは！　汝、其の武士……武士たる者が然る程の義を辨へぬ歟。天下の武士の棟梁たる柳營の御用に其の武士たる奴が應ぜぬ歟！」疾視けられて、彼は言下に塞りたれど猶其弱味をば見せぬなり。隙もあらば這の重圍を殺開きて、と八方へ眼を配れる、牙を嚙み、臂を撫はせ、小腕なる突棒を押取直して、「御嫌疑ともあれ、御用ともおざれ、物の是非をも申されで……」「えい、未練の！　是非の當否は白洲で申せ。今は只縄」與力同心は口々に呼喚きたり。

「いや受けまい。一向我等を首にお爲れい！」益々息卷たる忠彌は引拔きて突出さむとす、將監は其鋒先に目を注ぎて、猛入りに彼が眉間をと劈かむ。龍未だ躍らず、虎未だ搏ざる其刹那の間に幕有りて、「侍、惡いぞ！」「呀？」回顧る背後に出で來れるは、彼が母と妻なりき。彼等は既に物の覺悟したりけむ、身には白帷子の潔きを着て、頭には黄楊の櫛一片を挿したり。猶妻女は今年二歳なる侍兒の男子を抱きたるが、什麼夜便を取靜めてや爲つらむ、彼は熟睡にありて餘念なう、すや〳〵と眠れり。「悴者、其の容態は？」「えゝ惡いぞ。未練に見ゆるぞ。如是なりてお事達と爲うぞの。身に咎あらば御法の廳にさい、罪無くば態て白洲で申し解け。今も仰せいお事ほどの者搦めらるゝに、上樣の御沙汰として奉行衆自身の御向ひあるとは面目天下に輝りたるものでは無いか。我も嫁女も覺悟しました。無益の罪作り、詮無い騷意に召し捕られなよ。さゝ尋常に……。一概に幾許の勢ありとも手に立つと見ゆるは此の眼前なる大漢一個のみ、其れとても我が日常の本事の種與を[illegible]はさば鐵砲とて堪らすまじきを。然て後は烟硝藏に取籠らむも、同志が後を追うて東海道を西に[illegible]むも易かりなむと想へるも、畫[illegible]なりき。彼は母の爲體を見つ、其言を聞て、深雪に壓さるゝ松の如くに、骨節も折れて、碎けむばかりに感えたりき。彼の純良なる、其の外見に背ざる心は、如是る際にも其母の命に違ふを敢て爲ざるなり。我單一個の危難を遁れて母を豺狼の牙に委ぬる如きを爲すに忍びぬなり。母の爲には十年の宿望も棄つるに易し、母亡くば百萬の利祿も物かはとは、彼が平生の心なりき。今や其母は死を決しぬ、然して我に示諭する處あり。縱し其人は疾に其覺悟を斷めたらむも、我にして其教示に遵ひて、眼前に其の淺ましき結果を見むは、友には背かむも、義理には虧むも、後世の名は下さむも、我が目下の此時に於て得堪ふまじきものなりと、彼は其手を背向にして、手を拱みぬ。「忠彌どの、御思案にも及びませぬ。たゞ母樣の思し食し通りに爲されませ。家内の見醜しき物の始末は殘り無う。既や甚麼樣に爲られましてから後々の大事ござりませぬ。」其の大望に關れる文書の處置了れるを暗示して、決然として面色をも變ぜぬ妻女が詞は、彼をして竟に、其手なる兵器を棄しめたり。「嗚。是非もおざらぬ!!」

（二百十五）

正雪は、道灌山にて會合の後、小石川御煙硝藏なる河原父子が方に潛みて、猶折節に黨與を集合め、世間の樣を覗ひたりしが、時機漸に熟せりとて、七月廿一日の夜明方に微行て江戸を發で、東海道を駿府へとて旅立ちたりき。其の伴へる人々は鵜野九郎右衛門兄弟三人、由井三左衛門、熊谷六郎右衛門、僧曇然等、下僕を合せて以上十人。多年の宿望漸く成就むとする日の近きて、人は皆其の功名の空想に耽られつ、前途を祝ふ盃酒、準備に油斷なき馬背の慌忙しき中に、單獨彼のみは悒鬱として樂まず、動もすれば遊宴の座を避けて、物も無き空に歎息を漏らす事さへありき。其の何故に悉く樂まぬかは、傍なる人は勿論なり、正雪自身にすら此を解くに苦惱あり、或は其の、某前ならむ賤と想ふ由あるも、然る事は目下の三軍の司命たる我口よりして女々しうも言出さるべくもあらず。雖然、猶ほ手に持たる花の暴風に敲なう散らされたらむやう、不意ぬ遺憾さの堪ぬ心地すなるを念じて、軍議の席にも臨むなるも、傍邊の鬱惡き濁聲の中に、從前は耳にするすら快う擬しかりける、機鋒の、親切の、思慮周到なる考案を、金鈴の如き澄冷たる聲もて發言す、其聲の前後には絶て聞ゆること無きを、[illegible]かず、口惜う、與しきまで恨めしと思ふ折もあり

の前に此の怪異を一、我等は心じて他人には申さぬが、内心は實變たうおざる。許多の御弟子衆もある中に我等を差別して御目懸られる、我等も亦た思動は人一倍の覺悟でをる。されば何処の御出行とても我等のみは御供に外れぬ、望んでも出まする、御跡をも追ふ、道固も亦た然りぢや。何様の御心知り、無二の我等に御隠蔽も詮無うおぢやる。御言やらずば、我等から指摘申さうか？」正孝は尚無言にて、鼻頭に冷笑を見せぬ。「蠡を以て海を測るといふ語には似ておざらうも、一念の我等には御心とていいはかちや。其の愛懐の第一は、紀伊國殿かな？ 其の御違約かな？」師の顔色は、諸動きぬ。第二には、忠彌信條の事で無いこと 然もおざらう哉？」正孝は猶之を其眼を見開り。鳴野は痛、彼三は、」言ふを制して。「擱け、擱け、已や其れは聞くに及ばぬ。然るにても、然までにも予が顔色の不在なんぢやか！ 噫、我なから……」只一言に面と我が意の感發とのみは、と慢ぜし彼も、其の平日小兒の如く蔑視れる彼に些少の底までを看徹されて、初て四知の箴言の僞るでおらさるに驚きたり。同時に彼は、此れを知るは、聡悧なる此の壯佐のみ哉、而已ならさる歟。彼のみとすれば目下の急事は無からむも、否らずとせば亦其れが應急の手段といふを施さざるを得ず。混んの實底よりも我が胸には、秘中の秘說、機中の大機密と言ふが有るをや。彼にして倘し其事をしも悟了りとならば、千丈の堤なる蟻穴の譬喩、日來の奉公、不憫とは思ふなれど、是非も無き目を觀らでは！ と、猛惡うも彼は咄嗟に決意せり、「……我ながら、知らぬとは愚かで有ッた。お、お事、其の予が胸中を悟ッた者は……他には誰ぢやッ？」「いや、誰もおざりますまい。傍人は昔此の前生を…の待焦れて……」「むゝ、お事のみ？ 善う看貫いた。如何にも予は南方の殿には謀られた！ 忠彌には不快の會釋を受けた……」「其の耐へぬ御身が、謀られて、……受られて、好う堪忍なさるゝ。など一刀に……」「えい、癡氣た！」と師は言葉にたり、」とは仰一も、誰にふらるる！ 御無念は萬そうでかう、拝察申す。御道理ぢや。師の汚辱は弟子の羞辱、御暇下さらば江戸へ戻つて我等御無念を晴いて進ぜう。御免しやれ！」彼の詞は殊に怪く、其等はいと急に、無禮は面に見はれたりき。師は其樣を熟視つ、厚意は過分ぢや、が、忠彌無くして江戸の大將は無い事るか？」「えい、其りや御身様が、御自身の采幣！」「むゝ馬鹿なッ！」彼は覺えず口奔れり。

（二百十七）

其等の僞りに侮蔑に過ぎたるに九郎右は寒膽て、「馬鹿とは？ え、癡呆と被仰るは？」此方は夙に心附て其口を含襟せり、「むゝ、其りや協らぬこと。」「協らぬとて、大將無い台戰が出來申す歟。況て此程の軍議にも、此の大義たる江戸が第一の根元ぢや、根元を巧らせでは枝葉の京大阪が何樣に肝煎たとて什麽なるべい、江戸が大事ぢや！ 關東が大切ぢや！ とて二度も三度も彼人に御注意けられた。其の大事の江戸！ 關東の大將ちふを既に彼人御渡しやるさへ我等存意は、何とやらむ仕手を奪られて御身樣が連、脇ともお成りやれたかの様に遺憾うも存ずるに。其の大將が今御手に入る。其の采幣を馬鹿ぢや、癡呆ぢやと！ 我等一圓合點がまゐらぬ。何故其の江戸燒撃の采幣が馬鹿おざる？」正孝は困せり、「馬鹿の理由か？」「えい、其の馬鹿の理由？」「餘でも無い、彼の燒撃はた内殺の合戰ぢや、同じ敵を討つにもせよ、名告り合うて槍つけてこそ手柄にもなれ、猛火の迸る煙の下から飛出いて、誰とも知らぬ首取てからが勇士の本意として面白う無い。仍てに予は呼嫌ぢやといふ……」「扨は、彼の獻捷

傑の火攻の一段は？」「閑捷録とは、彼が著はせる兵書の名なりき。彼は孫呉が精を摘き、信玄武田が英を摘みて、猶且つ自家が儒見といふ和漢古今の合戰成敗の理を參へ、集めて廿卷とし、續けて閑捷録といふ。其攻の妙、其理の精、孔明復た出つるとも一字を加へじと自ら誇れる書。彼は是れを以て普く諸侯に說き、門生にも授けき。其中に火攻の一篇を特に其れが得意とす。凡そ寡を以て衆を擊ち、衆を以て寡を征し、敗を轉じて功と爲し、功の小なるを大と爲す唯だ天火、地火、人火の三者乎。蓋し火の前には、勇者其勇を逞しくすること能はず、謀者其謀を運らすに遑らず、守者其守を固うすることを得ず、攻者其力を施すに所なし噫火乎、火乎、將にして火の用を知らざるものは、未だ倶に兵を道ふに足ざるなり、とまでも說けり。然して鵜野は今之を以て彼を難ぜむと爲るなりき。彼は空途惚けたり、「一段とは？」「あれ程に御賛めなされた火攻といふを、今、那樣御說きやれる？」「むゝ其の火攻か？」「三軍の勝を制するは將の策にありて、其勝を制するものは火に在り、とまで說られたか……」「は、其れはの、勝敗の大體ぢや、騎前には噺……」「いや我等は大將の采幣について論じまする。一騎の働きは、」正雪は獲たりと笑へり。「愚かや、お事、大將ぢやとて一騎の働きを心懸いで甚麼ならう。既往の八幡殿は六騎を以て貞任を破り、九郎殿は七騎を以て高松の城を落された。此等皆大將が一騎の働きを目に懸けて大功を得た本の證據ぢや。はゝ、其は先づ措てな、江戸は、ま、其儘ぢや、お主のもぢやが、見た處、忠彌を除けて彼處の大將なる者は自餘に無い。我等に對うて理で無い挨拶する程の俘僞只、其れ程の器量で無うては僅か五百の人數を役うて那れ程の大事に當らうとは得も言ふまいよ。先つは依然、まゝ、形勢を見い。」形勢を觀るうち此方が二の町になりましたりや？」「大事ない、忠彌に總大將を與るまでぢや。手柄は仕勝！ 氣支ふな。全般は予が胸臆ぢや。」爰にいたりて彼も再び其間を發さむとする由なきなり。然はあるも、其の忠彌に總大將の地を讓りて屑ともせぬ、傲慢を凌ぐ如くともある人の、甚麼を不快に我眼にも怪訝めらるゝ迄其の平生を變へたる歟。紀伊殿の手に陥り玉はざりしをも那程に正々しう言ふ其人。其が胸中の進退操縱、果して是れ什麼樣の手段ある歟。噫、鈴蟲の誰にふらるゝ夕かな！ 我はもはや其鈴蟲とは化りける歟。彼は、能れたる力瘤も、今や幾と脱たらむ樣に投首せり。其の失望の面を薄白う、仄に見せたる、海邊近き宿の曉夙し。

（二百十八）

蚊幮の中には纔入れるも、夢も結ばれぬ木枕に痛き耳根を、巳や啄き立つる軒の烏と、戸外に噪ぐ長持唄とに驚かされて、正雪が一行は此宿を出でぬ。彼の期日も餘すところ既に多からず、一日も疾く駿府に着きて、と急立つる人々が口よりも、猶深く念ふ由ある正雪が肚裏の焦燥は、煎らるゝ豆の躍り立つらむが如くなり。雖然、奈何せむ、他の目立ぬを旨せる道中には、物に附け事に就ての不自由てふも亦た大方ならぬなり。就中も溜らぬ日中の炎暑には、人並に立場に休憩て、心太啜る人足が懸鍾の上り下りも算までは協らぬなり。漸くに夕日影傾き初て、旅人の脚底も輕げなる頃には、既や塒急ぐ鳥の翼も、宿引てふ婦女の手と與に忙しきなり。夜行は結句涼しくて路捗取るべし、斯くては何時迄か、亥子の刻までも、と正雪は言ふなれども、彼が江戸發途る際より發作れる腹痛は、水變りてふ爲にや下痢さへも加へたるに、夜冷の氣に感ぜられては如何あらむ、大事を控へたる御身は千金とても換へ難きをといふ

に、彼も其言をば强ひてとも再び難きなり。如是る碍道に路次も豫算へるよりは進まず、廿五日の申刻近きころ、辛く興津の海邊まで來にけり。浩る處に、一挺の早打駕あり、東方より來ると見えたるが、曳さ應との人夫の懸聲、[illegible]く間に耳を貫く許りとなりて、正雪が駕人足の息杖を立てつ、路の傍に避くる際に、砂を蹴立て、浮を揮ひて、看る〳〵一團の黑影と化しつ、松原遠く消失せぬ。「九郎右、彼の早打は？」山形の避日筵を掲げつ、其の行方を遙に凝視て、囘顧て正雪は惡く鵜野に問へり。「されば。昔でございませうか奇？」「輿中を背たか？」「いや看申さぬ。其暇もおざらいで。」誰か知るべき、彼の駕輿の中なるは、昨日(廿四日)未明に江戸を發足たる御使番駒井右京ならむとは、然して彼の行先や何處に？ 駿府。其齋らせる用向や甚麼？ 前にも言へる彼等の採捕なり。採捕せらるべき彼等と、其命を帶びたる彼とは、單避日筵一重を隔てたる而已にして、顏を見合さむ許りにして別れたり。正雪も原來彼を識れり、彼も亦た正雪が人相書を懷裏にせり。其の四方髮、髮黑く、色白く、眼くりくりとして、額短く、唇朱く、厚し、とある其者を貸に、彼の駕輿は、或は此處にて駐停つべし、駐まらば一場の惨事は翌日を待たずして、疾く此の白砂青松、うち出でゝ見れば眞白なる富士の高峯を前面にしたる怒濤巨巖を嚙む邊にや演ぜられなむ。正雪、或は影を匿さむ。騷動は其大を加へむ。然して今は、彼も知らず、我も亦た知らぬなりき！

稍有つ間に篠原を離れる、駕輿の迹を彼は猶沁々と注視りしが、突如に、「兎角は急げ。彼の駕輿に追及かう。」例ならず彼が慌忙しき有樣に、愕きたる鵜野、「一徃と被仰るゝ、那の駕輿に？ 既や五町の餘も行き過ぎまいた、追及けとて此方の徒歩で……」「いや追及くと迄にはあらぬも、疾く駿府に入れ。人々も江尻にて早駕の用意して夜川とあらぬ內安倍川を越え、明日の黎明に大井川を渡して吉田まで行く覺悟せい。怒く言ふうちも惜く、疾う參れ。」益杲れたるは一行なり、江戸より此處までは四十餘里、其を五日路に旅行たる者が、此處より吉田までは三十四五里に近き遠路を明日までに行着けと言ふ、倘くは師は、發狂せしには非ずや、と彼等は疑惑ひぬ。堪り兼ねたる九郎右衞門は、「奈何被仰らうとも其の吉田迄などゝは協りませぬ。第一が我等は駿府まで……駿府の用向は什麼なさるゝ？」「否、駿府の、駿府の用向は後段に廻す。其は重ねて言ふ。今は唯予が行くといふ地まで行け。李公の等閑か否ぬかは只此時に見えうぞ！」氣色の實に平ならぬに、且つ懼れ、且つ疑ひ、且つ危みたる人々は、今は異議を介まむにも暇なきなり。傍邊の山崖に清水を掬びて、霎時の息をと休めたる人足を遽はしく喚び立て、先づ江尻へまでと急ぎに急げるが、傳馬所に懸りて駕をと言へば、個は什麼、昇くべき人夫は一人も無かりけり。

（二百十九）

事有る際には、街道の人馬の繼立を停め、續で往來の旅人を禁め、宿の上下の關門を鎖すといふは當時の掟なり。其を熟知る正雪は、人夫拂底との報知を得て驚きたり。扨は？と傳馬所の邊り、本陣の街際、其邊一遍探檢りたれども、別に異しと見る物も無かりき。さらば眞實に人夫の足らぬ歟、さりとて此先に參覲の諸侯の往來ありとしも聞かざるになど、思惟ひつゝも、兎角は思ひ寄らぬ隙入りしぬ、酉刻までには是非安倍川を越さで協ぬに、急げ、とて自己も草鞋の紐を結び、追分村より草薙、小吉田の立場にも杖をば立てゞ、三里の道を驀直に駿府の町の棒端てふに來れる頃は、雀色時はや近し。急ぎ鵜野を拙い、問屋場に走らして、西上

の駕十梃をと誂へさす。一行は故と後れて横田町をやゝ半途までさし懸れる時、「師匠様！」思ひ懸けぬ…耳に馴れつる！否幾と寐る間さへも忘れぬ聲は、突然として我が傍近くに在り。彼は覺えず、「宮か？」看回らせるも、其影すら見えぬなり。雖然其聲の正々しきに、不思議の耳を聳立てたる！　正雪、「宮か？」再び喚べば、「あい。這處にぢや。」聲する方を透し視れば、軒廡白はに壁破れたる、月はもとより雨さへ溜らぬ氣なる茅屋の毀戸の陰に、小手招きする人の有り。彼は我にも有らぬまでに走り寄りたり。「宮かよ。其方は？」言ふ聲の高やかなるを、彼女は遑だしく手を掉りて、其の脣を壓へむ許りに禁止ぬ。「師匠様、御大事ぢや。覺悟の時ぢや。其れにしても好う此處までは！」語ふ端に、殘れる八人も早く集ひぬ。視れば、彼女は、道灌山に一ト截れる髻を依然にして肩うつ程に斷下げたる、鼠色の單衣、污ら破れたる誰が着古しかの腰衣一領をなむ纏へりける、目下は如法の尼法師なり。久濶やの挨拶も口に出ぬ彼等は、肩摩るまでに此の女菩薩を闈繞みて、爭ひて其慈口の音を聞むとせり。妙音は甚低かりき。「知らしやらぬか、今の先から當地は騒動ぢや。切支丹の邪宗徒を穿議するとて…。」「甚麼ぢや？　邪宗徒ぢや！　奇しうも無い。其の穿議は江戸、京大阪、其外にも毎く有る事ぢや然様の穿議受けたとて淨土門の愚僧が口で辯解からには手間隙も懸らぬぢや。何の過大な！」「いや然は言ふな。而て其の穿議は甚麼様に爲る？」無口の廓然も、法師頭の役目とてか、己が知る儘を打出して頭粉碎に撲消すを、正雪は制して、打濟めて容子を問へり、宮が聲も益潛みぬ。「第一不審なは、江尻町の御屋敷の討手といふぢや。妾は其の騒動聞くと其儘、駈つけて見ましたが、彼の明屋敷の四方の辻々、町方と城代衆の人數で固めて往來を通しませぬ。其上に久能にも加番衆の秋田殿手が百人餘り、小馬印に旗二本で押出すを其の歸路に見ました。馬印の出たより見れば大将の安房殿も出馬されたか？　是れが邪宗徒の穿議くらゐで然様の騒動せられう筈が無い。殊に御前の見えさしやる期日にも合ふ。的切其事と思うてな、妾は先刻から倘やと此家で覗てゐました。が、途中では何物も見はなされぬかや？」扨は然様かや！　然らば先刻の早打は、名を邪宗徒の穿議に藉りて我等を捕拿せむとする江戸よりの御急使かや！　然りとも知らば彼の場所にて討果して、我等も兎も角となりけむものを。とは言ふも不思議なるは、其の手配なり。果然して味方の變心歟、或は過錯て捉へられ、其れより破口の綻ける歟。其は兎まれ今は既や此の海道は上らるべからず、急ぎ引返して、龍爪を甲府に踰ゆる歟。梅が島の間道を信州に越え、木曾路より我が指す方へ行くより外道の無からむ歟。然るにても此女子に此處に過るは我が運命の盡きざる處、偏に八幡の御冥助！「宮、辱けない。謝禮は追てぢや。無事で居よ。」彼は一同に目授して、戸外の方へ出むとす。忽地に人馬の響あり。是れ加番西尾が手の海道の出口を塞がむとて出向へるなり。

味方は縱し其勢に對して人は什が一なるべきも皆覺えある腕利なり、彼等が油斷して押通るを遣り過し、拔連て切て出でなば、是れ九死一生を得るの道、或は此の虎口を遁れ得たらむも、飽く迄も今は穩便を旨とせる正雪は、一面には此駿府に於ける間道を熟知つ、一面には今問屋場へ遣したる鵜野が歸りを待むとして、一向に躊躇へるが、看る〳〵此勢に紛れて其の九郎右衞門は歸り來れり。

人々の在るを見つけて彼は卒爾に走り入れり。「大事ぞや。路次は皆、間道迄もが塞りました！」

（二百二十）

彼等は袋裏の鼠となれり。今は或る一途を辿るより外道無かるべき有無の場なるも、有繋生死は大事とて、今更ら迷惑つ、躊い且つ呆れたる眼と眼を合せて、唯嗟の分別に苦悩みき。其の二途とは什麼ぞや。進みて屍を敵刃に曝すか、退きて自ら屠るか、單道個の二事のみ。雖然、恁くして腹切らむとて這處までは來ざりしものを、窮鼠に方やあるとて狼狽つる人々を、如是る際にも宮は甲斐々々しかりけり、諫めつ、勵ましつ、甚麼の今めかしい。「唯死は原來の御覺悟でおはさうものを。但し遁るゝ丈は遁れて、敵はどう為よう御腹居されや、敵の手配りとて瞬間の事、四谷の方、大岩の方、宮が崎の方、此の三方は未だ其手の廻らぬも知れぬ。妾が一走り見て來ませう。其中にも討手向はゞ此家での御最期は醜しい。幸ひの御存知の梅屋、那家へおはせ。然して兵糧の用意とも喃。」彼女の言葉て、馳せ去ると引違へに、但見る一群の人數、府中町會所と筆太に認したる弓張の提灯を手々にして、皮袴の腰つき覊束なき町役人五六人、「御用」持てる壯者十餘人を警護にしつゝ、戸々の戸を叩き、家內を喚びて、追つけ檢視の役人衆が御出向きなさらうぞ。寺證文用意して糺問の節に與狽へたる振舞すな、泊り人あらば關所手形を御目に懸て、何國郡、何村町の地主か店子、浪人衆ならば前主人の諱銜かをまで明細に御申し立ちやれよ失敗ねて會所の迷惑さすな。と叫喚き立つる濁聲も間近に聞えぬ。人々は素破との氣息せり。「靜に！」と言ふ聲々は闇黑を破りて響きぬ。「九郎右、油團の提灯持て。」弓を張り、火を點ずれば、火袋には紀の字を一字、墨黑に書きしが見はれぬ。是れ紀伊殿御印なり。看る〳〵正雪は、彼の四方髮を取り上て茶筅に結ひ、自ら彼の提灯を手にして眞先に進めるが、故らに彼等を喚び止め、其聲を粗かにして、「役人、犯人は獲たか？　口々の支度は？」諸彼等は此の提灯に畏敬れたり。「いや未だ。」口だけは殘りなう手當しておさりまする。」「む、好うせい。脫落るな。」彼は恁く威し棄て、悠々として茶屋町なる梅屋に入りぬ。

＊　＊　＊

駿府城代大久保玄蕃が奧書院には、御使駒井右京を上座にして、大番頭山口備前守、御目付井戸縫右衞門、町奉行落合小平治、神保三郎兵衞の人々列座せり。其中に落合は、今、手の與力が復命せる正雪取調の樣を告むとして座を前めし所なり。小平治、共齡四十一二、骨格逞ましく、眼光烱々、言舌はきッぱ〳〵と瓜を截る樣になむありける。「與力ども申しておさる。紀伊國殿御印にて町役人どもを威し、茶屋町の梅屋が方へ止宿しつる上下十人の中、右京御申しの正雪人相に紛れ無き奴もおるとおさる、此上は有無もなく踏込み申す與、但し[illegible]を申す與、玄蕃殿御指圖次第。」と、彼は屹と看做せり。彼の前に進みし玄蕃は雪花を撒散すが如き其頰髯を左右に震はして、「何條黨類か！　假初ならぬ紀伊國殿御印を盜みて兇徒を言奴、一刻も猶豫ず踏込ませい。但し素奴は遁るところ某も確識りあれ、殊に兵法においては名にあふて居た者、曲丸目に名ふ能く、取籠るとか言へば其準備も等閑にもせでおるまい。其の顏色をけに、癖の奴と見え申すに、方、用心は容閣にお爲やれい。」小平治は意得て急ぎ其の座を起むとす。先刻より打傾けたりし右京「いや、小平治、些と御待ちやれ。此は大事の捕物ぢや。先づ其の手配りは。」「えい、其の梅屋が二町四方は大提灯を取廻して、蟻の這ふも見ゆる如くに爲ておさる。其の西北は安房殿が手、[illegible]安房守、[illegible]は玄蕃手と新右殿（井戸　殿）、其の木戸へは我等が支配の與力同心を押出させて一左右次第と令

めておざる。」

（二百二十一）

「表の手配は寸間も無い。然りながら家の内は如何おざらう哉？ 夜深ではの。」或代の老人は、右京が此の注告を聞くも、猶自説を棄さるなり、「仔細もあるまいよ。夜深なりとて表裏より押取囲こ一時に踏入らば！ 殊には物の猶豫の中に奴原が徒黨の加勢の案じもある。旁、猶夜明けぬ前に……」「其の加勢とは？」「されば、加勢も有うで有るまいか。廿九日に久能へ籠る。如何に御山が堅固であらうと彼奴が召伴れた其の小勢、上下僅に十人ばかり甚麼様にかなり申すべい。孰れにも此の近間に其の徒黨の者……いや大分の兵の潜み居ると見申すも僻目とは無からまい。然れば猶豫は大事の根本ぢや、一刻も疾うと斯う申すのぢや。」「恐々」言ふ玄蕃が肚裏には、目に見えたる正雪を第一段にして、未だ目に見えざる、更に其者より二層三層も可怖かるべき此加勢といふを氣支へるなり。即ち其の胸中に描ける處は、久能周圍の村民の蜂起にて、其の蜂起は更に或る向の教唆、否、若くは既に其の首謀人の手なる兵の闖入み在りて、鍬鎌を手にせる蓑笠の後より、彼の正雪が今夜使用ひしとはいふ其の提灯の影、濱風にゆらめき見え來む歟といふに在りき。されば猶豫は大事の根本、一刻も疾う、と言ふ。言を聞き、異色を見たる小平治は、いでや、と兩び起むとするを。「いや、其案じも御道理ぢやが、」と右京は怪異きまで懸念せり、「今も被仰た彼奴は名にうてた兵法者ぢや。殊に江戸での手段といふも、烟硝の火攻といふ。其れ程の奴。萬一其の投火、棒火なんど言ふ火術を以て討入るを惱まし、廊下の盡處、納戸の隅に待懸けて切りもし、突もせば、可惜ら味方を損するのみで果は手に餘る樣の事おざらうかや。夜中の捕物は其れが大事ぢや。然も彼には賄賂を與れて其の無用心を討てさへ、將監、中々の骨折と聞き申す。況て是れは人數も多し、用心は堅固、思ひ切たる敵の取籠つたを撃つは只一所の城砦を攻むるでがなおざらう歟。夜合戰は危ふい。是れには種樣の法のあるもの。無禮ぢやが落合殿手に夜合戰の進退存知の者ござあるか喃。不案内なりや、攻る、踏込む擱むるとの擬勢を覗せて、今三時を待たれい。今の、奴原が加勢しいふも是れは未だ色目に見えぬもの、其れが準備に口々の警固もある。浪人の五十三十縱し寄すればとて甚麼程の義があらう。此方のは一つ損ずれば眼前に天下の大事ぢや。」用心はげに然る理ならむも、亦た武邊を以て世に許されし駒井右京其人にして、然とては餘りに度に過ぎたる入念ならずや、或は窮鼠の猫を嚙むと言ふべきも、猫に遁るゝ鼠として甲乙か窮鼠ならざらむや、反噬を怖れて捕へずとならば、猫の用は竟に廢すべし、天下の大事を企圖る者、其れ程の奴を擒めむに手負の十人二十人、討死の五人七人、其れはもとより覺悟の前なり、然るを今更ら、事新しげなる、意得ぬ夜合戰の穿議立てや、と小平治は憤まみたるが、此人も亦た然る者なりけり、否、此の大切の御使承はりて來し程の男子、斯く言ふは又た那麼樣かの有ること歟、此處は無言とは、と暫時は座敷の體に目を注りき。小平治は善く覗たり。天晴の目利なり。右京は眞個に或る人の密旨を領けて出向へるなり。其の或る人とは？ 別にもあらぬ井伊直孝にして。其の密旨とは？ 祕中の祕なる、正雪に自滅させよ、といふなりき、彼が彼の朝、此の御使を承はりて出立つ時、井伊殿は彼を一室に招かれて一言せられき。濁る水を攪立てなよ、天下の安堵に意を注めよ、洗ふことは、只其の見えたる汚穢を去りて、衣服の用を全からしむるに在り、熟ら意せよ、と申されき。元老の一言は深く彼が心に沁めり。紀伊殿と正雪とが云々

とは此日も殿中にて聞ける處、然れども、枝を截て樹を枯衰すは、稚樹に拙なる者の爲る業なり。唯其枝に纒絆り着く蔦蘿の蔓果を除けば足れり、と彼は其處に臍を決めぬ。

（二百二十二）

歳代お方はこの論料の最中なり、一方なる椽屋が裏には、鵜野兄弟、熊谷を初として九人の者、各、早手襷に袴の股立、布鉢卷して、刀の鯉口を切懸けたる、中にも正雪が弟吉左衛門は血濺ける怒眼に、無念の牙を嚙鳴して、「兄者、此上は分別も御思案も要り申すまい。只奴原切拂うて……えい、今の此際に寝睡でも……疾う御指圖。兄者！　えい。」立蹶りつ、其が袖を引攫みて扯起てむとす。曩より、其背を床柱に凭せ懸けて他目を瞑想に浸睡れる正雪は、此時漸くに其眼を開きぬ、毅然、泰然も平生に變らで、「太と慾々たりき。喧噪しい、何事ぞ。取亂されたりとて其樣驚くか。討手は原來の覺悟。何を今更ら……」再び其の眼を閉むとするに、九郎右衛門も堪り兼ねたり、「覺悟は剛す迄も無い、一命も惜みませぬ、なれど由井正雪とも有るべき仁の御最期には餘りに事の不體裁て見えますぞ。自殺なりや自殺、切死なりや切死、何樣とも……。」端と睨れば、何は首頷つゝ、徐かに微笑へり、「うむ、道理ぢや。固より自殺ぢや。但し、先づ然は其臍を決め置いてな、敵の樣を熟と覗い、今に物の注進も來う、兎角は其の注進次第ぢや。急く時を固むれば、周章るにも當らぬ。恐怖しうも無い。」「いや、恐怖し恐怖しと言ふではおざらぬが、自殺なりや自殺の儀式、後代の手本ともある樣の御腹構されたい。如是る際に奴等に無下に踏込れたりや。」「其樣な遠慮も要らぬ。正雪ほどの者の座敷へ奴等とて得も無下にはぢや。又た踏込まば此の一嚢ぢや。此火に爆裂さいて！　投て結果了ぢや。はは、好個此事が自殺の手本であらうがや。」一視れば、彼が膝近に、毎も見る錦嚢あり、其の重量のいと重きと、彼が其を寐る間とても手離さぬを見て、九郎右衛門すら、或は劍が這回の用途にとて何方へか貯蓄へ置ける、砂金入の嚢にや、なども疑へるが、此言に纔りて之を思へば、過失、初て解けたり、是ぞ火藥の袋なり。今が死ぬべき生命なれども、有繋に其の爆發の猛勢を想ひては、人々も還つ其顏を見合す時、「微妙い御覺悟、今は只其の……。」喘げる、嗄れたる、突然たる聲は入口にありて電光の如くに閃きたる法衣の影は、今まで誰が遲しと待てる宮なりけり、と看るより彼が無氣の眼、徹朗げなりし顏は遂に消亡て、憂く見えたる胡坐の膝さへ儼然正されぬ。「甚麼とぢや？　宮……」「も協ひませぬ。蟻の這ふ隙間も無い。只御覺悟……。」彼女は、其の鼠衣の袖を臉に押し當てゝ、忙しき辭も斷續に、潸然とばかりに泣きにき。「むう！　然樣か！　正雪が運も此迄か！　然りながら、一方の打破るべき口、蹴散らさう隙！　此も無いの歟。」「有る段でかや、此町の四方は皆突棒刺又、提灯は白晝のやう、町奉行の落合殿、御使の駒井どのと今小具足に自身の槍で表町に出馬と聞きました。到底が遁れさしやらぬ御運命。是非も無い。」彼女が耐ずして泣倚したる、其肩を攫み起すが如くにせる正雪は聲稍苛く、「泣くか、其方。えい泣く處で無い。言甲斐ないぞ。えいこりや、汝は何とか言ふ？　正雪が露顯は誰人の口からぢやと言ふ？　訴人か？　間諜か？　聞ぬか其方、其の口の樣によつては予に方便があるぞ、聞かなんだか？」一同の呼息も益く塞ぎて、此の潮泣文もなき尼の回顧を聞きあり「聞きました。」「えい聞いた？　そ、そ、其は誰ぢや?!」「忠彌とか……」兩個は嚇きて聲えず叫喚へば、「變心敗……」と正雪は扯徑に彼女が腕を扯起て、咆哮、狼狽、憤然の狀は瘋癲なれども、

一座齊しく其眼を瞠り、其手を叉にして、此の忠實なる民の、彼の不義に與みしたらむが如く、一言を道出たれば、八裂にもせむと言ふ勢もて扶持へ詰めたりき。然して其の二十の耳朶は、噴出せる火山の鳴響の如くに聳立られたり。

（二百二十三）

當時の幕府の光景を言はゞ、此日申の刻過ぐるころ江戸よりの早打駕御城へ着きたり。時ならぬ急使は、抑も何事か、と人々の訝怪める端に、加番の秋田が手は逸早く、久能へ向ひて、其れと同時に往還の關門は鎖されぬ、猶續きて戸々の人數檢めは行はれぬ。されど此時は、切支丹邪宗門の徒、江戸にて人討て此の駿府へ立越えたるなり、身元確かに、寺證文持たる者は、別段の御吟味も無しといふに、怖悸ぬ膽も猶立躁ぐまでには到らでありけるが、軈て甲夜過ぎて子刻にもなり、夜半近くなりける頃、町々一時に吶と騒動して、老を扶け、幼きを負ひ、資財を荷ひ、雜具を手にして、大濤の寄するが如く、鼎の湯の沸立つ如く人を突退け、我を先にと城の大手へ頽れ懸りて喘きつ叫びつ救助を乞ふ。事由を糺せば、何物か言ひ出しけむ、鄰の茶屋町に取籠れるは即ち彼の切支丹の大將、先年の島原の殘徒にして、彼が手には鐵砲五十挺、騎馬卅騎、徒步の兵士二百人あり、明日當市中を焼打して、此の紛れに財寶を掠めて、引返して久能の御山の要害に楯籠らむと巧圖るも、其の徒黨の返忠によりて恐う討手を差向らるゝが然りと其の人數は彼の家にあり、今にも彼處より討て出でなば、市中は黒煙ぞ、我々は[illegible]切ぞ、疾う城內に入り[illegible]に[illegible]ても、命一つを助かれといふ、其の風説暴風よりも鋭く市內を捲りて、此の騒動に及べりと正確に知られぬ。此時、猶夜合戰の是非、討入の利害に就きて議論決着せしてありし人々は、事の注進に驚きつ慄れつ、先づ其の脚下なる此の擾亂を鎮めでは、と、扨て御使たる駒井、町奉行たる落合の兩個、小具足に槍提げて橋際に出で、江戸にての模樣、謀叛の徒黨逮捕の始末を言詞明晰に說き聞せて、當座なるは彼等が殘黨、頭無き蛇の如きものなり、素奴ら甚麼程に働かむも其の多寡も知れたるものなり、合戰の焼撃のと、然樣の大事ゆめ以て有るべからず、人數は上下纔か十人、今の程に搦め取て江戸表へ差立つべきに、構へて騷ぐな、騷ぐなとて猶彼等が安堵を買むとか、幸いたる馬に驀然と騎り、二騎打揃びて彼の場所へと出でたるなれ。思ひきや、此の光景が奇怪の者に疾く見られて、其の演說は不思議の者に聞かれたり。其者とは宮なりき。彼女は宵よりして四谷、大岩、草深の町、瀧下、片羽、安西の隈々までを、僅かな路をあるき、[illegible]と狙ひもし、[illegible]もし、潛りつ[illegible]けつ足手をはかりに奔走たれども、行く處として當所、足跡、一寸の消何、寸土の遑、毫ほどの消息も無きに、然しもの彼女も氣力の脱けつ、怨くては寧ろ彼の人數にて切て出むも前途を甚麼となるべきぞ、只疾く此樣を彼人に告げて、生ての恥辱を見まさば其の覺悟を、と走せ戻る途次に瀧らずも此の演說の場に遇ひぬ、此れにて彼女は忠彌が事、河原が事、屋代父子、藤四郎が[illegible]までも逐一に知りぬ。是れに依て彼女は今、其の聞くが儘を彼等に語りぬ。咸嚇み懸れる九郎右衛門、左衛門等は言ふにも及ばぬなり、正雪さへも呆れ果てゝ、攫みたる彼女が腕を覺えず放しぬ。然も其手は胸の上に拱れたり。憶ひも懸けぬなり。想ひも寄らぬなり。九仞の功一簣に到りて、彼れ忠彌が、自ら求めて其の破綻の口を啓かむとは。嗟、實に憶ひも懸けぬなり。天乎、命乎、抑人乎。否、人に非ず、天なり。彼の蒼々たる的は他に還すを好むもの、我は今其の所好たる還復の戯技にや、弄ばれぬる。と彼は憮然として其の首を俛れ

とある。何ともの不審ぢや、甚麼が御罰ぢや？ 甚麼が咎ぢや？ 其れともに忠彌に對して濟めぬ事爲された歟。其れが聞きたい！」「まアさ急きやるな。今語うぞ。如何にも予は忠彌めを殺しに懸けた！」其の眼は俄に炫灼て、勃如たる色は起れり。其眼光に射竦められたらむが様に、一座の口は皆鎖されて、物の不思議に只瞠唖を呑りき。

（二百二十五）

「予は眞實に彼を殺した！ 江戸の大將といふ名を好餌にして鏖殺しにした！」 正雪は、容され難き心中の罪を訴ふる如くに反復して叫びたり。其語尾に接て直地に疑問を起せるは九郎右衛門なり。「と許りでは未だ我等腑に落ちませぬ。忠彌御不快の段々は神奈川でも話の巨細はおざつたも、彼の夜には何だ其處までは仰せられぬ。其義は其後の御分別か、但しは秘されれた歟。兎角然る程の御決定なりや何故我等忠告を容れさせられいで、今日の窮境に御墜たされた？ 御身にして江戸の進退なされうなりや……」「露顯も爲まいと歟。露顯は知らぬが、江戸の采幣を甚麼で執られう！」「大事の江戸の、何故執られませぬ？」「其れが不審か。愚かの問條や！ 此の一義に就ての江戸の地は所謂る死地ぢや、疾く戰ふ則んば存し、疾く戰はざる則んば亡ぶ、即ち攻るに可しくして守るに可からざる合戰には難義の地ぢや、味方、縦令一旦の勝には乘るとも十日との籠城も叶らぬ、謂はば無用の地ぢや、只此處にては敵の膽を奪ひ、氣を撓まし、根本を搖撼して、枝葉に手足を使ふことを得せしめざれば足れりとするぢや。彼の三百の大名、八萬騎といふ旗下、味方いかに彌猛に思ふも敵對が協るべきかは！ 如是る土地に忠彌を置いたは、古諺にいふ、馬を提ふるに馬を以てし、毒を制するにはいはゞ、毒を以てすぢや。」突然として閃き出でたる陰火の影に、闇中に潛める妖怪の面を始て看得しが如くなる鵜野は、他の詭秘の測るべからざるに今更ら驚悸きて、我師ながらも其人の面を覺えず嫉視たりき。三左衛門は纔りて頷きて、「扨は忠彌を血祭にぢや喃？ 敵の手に與いて討死をさせうで喃？ 何さま其故で御身が彼地の采幣を御執りやれぬ……あ、解せた。解せ申した。但し、何故に然までは忠彌を御憎惡しみやつた？」其れまでは、有繫に慚ぢて、彼も口には出し得ぬなり。彼が友に信、母に孝、妻子に愛ある、あはれ人としての人間たる道に虧缺る無き丈夫たるは彼も認め得て疑はぬなり。只其者が剛愎、嘲罵、他の過失を毫も假さざる、我を餘りに其の屑ともせざる、直情にして經行なる、寧ろ其の膠無く、愛想無きが、多感にして猜疑に富める彼が意を損せじと言ふなれども、其は縦ひ此際に臨めるとても、正雪其者の死後の名に對ひても、懺悔をまでは得了ぬなり。雖然、一念の善に向へる、既に夢幻の大闇を良透徹し得むとする彼が心は、我が曇までも隱蔽はむとするの勇無きなりき。

「其れが予の做した罪科天道の御罰といふぢや。深うは問ふな。」苦笑は彼が唇頭に見ぬ。其を引取りて廓然の法師頭は搖めき出でたり、彼は燃去らむとする蠟燭の心を摘棄て、「微妙い事。此既に其れ迄の御回心なりや滅罪は眼前ぢや。此上の御懺悔も無用、但し豫ては久能へとの御沙汰が遽に京都筋へともおざる様なと、忠彌事につき紀伊殿の甚麼の御作略もおざらなんだげに見ゆるは愚僧不審ぢや。此事にも密藏の奥義ばしおざるかな。御胸が聞きたいが。」「流石ぢや、好う問うた。甚麼の久能がぢや！」「扨は御旗は、和歌山かな？」「はゝ、和歌山か？ 和歌山は今、この敵ぢやは！」彼は九郎右衛門を顧みつ、我が愚を嘲ふ如くに言ひ消しぬ。「ほゝう、其れも方便かな？ こりや愚僧の株を奪ら

れた。彼は圓顱を撫で回せば、「御前に教化せられての。」と正雪も微笑ぬ。「では大阪に探らるゝ歟。彼の太閤の迹を追はれて？」「其の脱殼の土地へ、甚麼行かしやりませう。師匠様の御在る處は確に京都ぢや。是は先刻の御話の兵事どの事から見ても知れますは。」宮は念佛の口を住めて、老法師の耳に敎へぬ。

（二百二十六）

「京都？　扨は朝廷を歟？」廓然が喚けば、三左衛門、作左衛門、六郎右衛門も、漸くに師の意衷を解み得て、宮の慧眼に今更ら歎服の唸きを起しぬ。彼女は、此等の驚駭を微笑みて、「何のいの其れ程の事知らしやらぬ御身様方とも有ろまいに其様に魂消さしやるは。ほゝ今の世に如是る大事を企圖てらるゝ人！　凡そは江戸の將軍様御敵に引受けられて、天下に旗をと思ひ立つ程の御人で、朝廷といふ字に眼を着さしやれぬ、其様な愚がござりませうかや。御威勢こそ微々たれ、御領地こそ僅々なれ、人間の種にましまさぬ現神の尊さは、紛れない天下の御主……。其の御主を首に戴いて、海内に號令する、遠き王朝の藤原氏、續いて平氏、幕府を樹てゝ六十餘州の總追捕使とまでならしやれた源賴朝も皆同一轍ぢや。尊氏の不臣ですらも、天位の恐しきに對ひて弓挽きまゐらすることの難義を思うて、同是其の謀叛を皇統の御爭ひに執做された。織田といひ、豐臣といひ、自個が遺恨も、我が私己の爭ひも、勝手の爲には勅命を仰ぐ。背けば逆勅ぢやで讐も敵も皆を晦さまする。されば此の勅命の文字の前には、人數の多いも恃むに足らぬ。要害の堅固も用をば做さぬ、弓鐵砲の長兵、太刀槍の短兵、皆朽たる木錆れたる鋼も同然ぢや。只是の勅命の二字を戴くものは勝ち、戴かぬものは敗る、之を戴き之を得る者は、挺を作りて秦楚の堅甲利兵を伐たしむべしとある。想ふに師匠様は其れを疾うに御覽じたぢやろ？　猶尼が目で見ますれば、縱令紀伊國様、全然師匠様に御荷擔なされればとて、只の和歌山、僅か五十五萬石の御身上、多寡が六萬に足らぬ御家中ぢや、其れで天下を敵になされて御運の日の開くといふ、其様な道理甚麼がおはさう？　又、師匠様が、十年以來寨合めさしやれた人數とても、物の一萬、論ふにも足らぬと方纔彼仰れた島原の一揆に比せて見まするも只其れが三分が一つぢや。大阪の秀賴様が、彼れ程の金銀兵糧と、彼れ程の御官位と、彼れ程の親御様御餘光と、彼れ程の城地と、彼れ程の名將智者、勇士猛卒とを有たしやれてからが、御最期は、彼の墓ないぢや。無躾ながら今の師匠様、秀賴様ほどの御身上は有たしやれぬ。味方は島原ほど一致して在りませぬ。其れで彼の天上の鳴雷も音を停止むる彼の將軍様敵になされて、稍附かうとは、其の鳴雷にも……否其の音を停止むる將軍様にも勝ッた御味方が無うては協はぬ。無うては惜はぬ。只其れが有りやこそぢや、紀伊國にが思し召す儘にならいでも、忠彌どのに御不快でも、箇様に金銀に逼迫られても、此處までは出て在したぢや。其の御目的が無うて何のいの、師匠様ともある御人が、府中邊りへ――久能邊りへ、百姓一揆同様の御眞似なされう歟。

こりや其人の御身分にも寄りまする。」ほゝと微笑ふ其口許の匂はしきは、澤として秋水を出る蓮花の萼を破る如きあるにも管らぬなり、其れが堅議横說、胸を開き、隱を索り、他の肺腑を透見して寸毫の微をも過錯たざるには、物に動ぜぬ正雪も些しく狼狽てゝ、覺えず其膝を前むとす。「悠有る處に、一物申さう！」「喝破！」との面色は人々が眉に動きて、道度のみにぞ秋夜の寂寞を見せたる從前の座敷も、鬱蒼たる殺氣、看る／＼充盈てり。就中、三左衛門、六郎右衛門、清兵衛らの用侠は、逸早く押取刀の鍔

口切り懸て、「蹴散し申す歟！」正雪は阿呆と禁めぬ、「周章つるな。何をお主等。案内を乞ふでは無きか。」「案内とて、油断のなり申す……」「油断せいとは誰が？　案内とあるを討つ、然樣の法武士に無い。作左衛門、えい、應對せい。」鵜野が弟作左衛門は、師命餘義なく、其の鉢巻を取り、手襷を脱し、袴の襞目も常にして戸口へ出でぬ。來れるは落合が與力なり。「奉行落合殿申せとおざる、江戸にて人討たる者、當地へ狙け込み申せしに依て旅人宿をば一々に檢分申す、主從を言はず、御入りある程の人數は只今此れへ御座なされい。奉行も今ほど此處へ見え申す。や、既や馬の見え申した。」落合小平治、自身此處へと向へるなり。

（二百二十七）

「檢分の義は心得たり、暫時待たれよ、追附け」と言ひ棄てゝ作左衛門が引入れる後は、家内は黯黑く、寂閑として、人の在らむ氣勢だも無きまでなる、隠予との物響もあらざりき。其れとは反りて戸外には、當所の町奉行落合小平治、與力五騎、同心十人、城代足輕三十人にて既や犇々と押詰めたり。彼は前にも言ふ小具足に身を固めき、九尺柄の短槍を馬の平頸に引着けたり、鍛附の陣笠に、黃平の陣羽織、武者擎厳めしく、「やア誰か、疾く案内へ。町奉行の自身出向うたるに紀伊殿御内とやらむ言ふ主從の上、疾う出でよと言へ。家主なる奴は在らぬか、町役人は此家に案内存知であるべきに、彼等が座敷へ此義疾う〳〵申入れい。」奉行の下知は暴風の如く激しけれども、兩個無き命は誰も惜しかりけむ、憲の與力を先頭にして同心二人、町役人四五人、物申う、物申う、案内を頼まむとは頻に繼きつ叫べども鬼一口といふよりも可怖しき暴猪の籠れる其の路次の口、廊下盡處の黑闇所にまでも進み得ずして只、所に動搖く時、潑つといふ闇中の燭は其の眼を射たり、一聲高き咳拂は其耳を驚こり、人々は又更に阿呀と絶喚ぶ、戸外にても之に應じて素破と絶叫り。這の急遽なる現象の中に、奇異きまで綏徐なる音は響きぬ。憂乎！　楷乎！　と此響は、今出で來し人の路次下駄の音なりき。其の音の主や誰？　正雪なりき。肩頭過ぐるまで截下げたる四方髮の髮るを掻き上げ、稍擢て色若きまで白き面上に、明星を並べ懸たらむが如き凜しく、瞭けく、鋭き雙眼を儼と瞰出でゝ、又た莞爾と微笑める、凄愴じさ、氣高さ、再とは正眼に瞻上ぐることも協はざるべき其の威容、天晴れ實に百萬騎の大將とも見えたる。彼は、朔に、續帛の薄紅色の裏打たる帷子を穿て、菊水の紋を散らせし唐綾の丸括帶し、蠟塗蒔繪の小脇指前下りに反して、弓手に唐骸扇を景色ばかり銜きたりき。雪を欺く白絹の數寄屋袴の其下より、彼の憂乎楷乎といふ其音なむ、路次の圍板に響へつゝ、天井高く反響くにぞありける。刀をば、今出でし作左衛門持ちたりき、其れが左右に、又前後に、鬼かとも見る倔強の壯士以上七人、眼を配り、鼻嵐を強く吹かせて、跟扈り出でぬ。是等皆、一以て什に當るべき猛者とは見えき。餘りに爲體の心憎きに、馬上にては如何とや思ひにけむ、落合は飄然と下り立てり、與力も同心も居流れたり。此曉は、雨雲濃く、空黝みたれば、今頃は入る方の光爽かなるべき弦月の影も見えねども、二町が先に焚き續けたる遠篝、提灯の火は、靉りて此雲に映じ、彼等に射て、地獄の猛火を變相の圖に見るが心地しつ、恐怖しと戰かるゝ町役人らが面も赤々と隱れず顯はれき。怯有りけれども正雪は、其等には目も與れぬなり、微笑る面を依然に、「只今の御名告にて承はる、御手前は當所の奉行落合殿な。是れは紀伊殿御内におざる由井民部。扨て如何樣の御用にて自身の御出馬なり？」「委細は先刻申入れつる。切支丹邪宗門の徒、江戸

にて人討て當地へと遁れたるを狙込申した。其許らには然る仔細も有るまいと御使の旨趣、御法の表目ぢや。先以て御分より其肌を袒ぎ、其背を見して、身内の傷の有無を疾う見せられい。其の檢分の爲の出馬とおざる。」彼は恁く言ひて、彼の意衷を誘き見たり、其答は果して彼が意を得たり。「是れは扨思ひも寄らぬ、紀伊殿御内とおざる士が、公儀衆ともあれ、其面前にて素肌を袒ぎ、其背を見せ申すことの協るべきか、はゝ、惡皆降人の法。協り申さぬよ！」「協らずとて、御法ぢやが？」正雪は猶自若たり、「武士の面目を潰さる御法、然樣な御法は有る樣が無い。」「無いとて有るとて公儀御下知、右に故障お言やるが其の御法違犯。違犯の輩は奉行役として先づ其科を以て搦め捕らが……恁有ても嗽！」彼は其の決意を暗示せりき、正雪は良色を作しぬ。「強々の沙汰。奇怪の義。可矣此上は……」「えい迷疑をお執りやれるな。由井とも有るものが！　御法、遁れぬ場と覺悟お爲やらぬか。其れが江戸よりの御沙汰と言ふに。」落合は摚地と睨めたり。

（二百二十八）

小平治は逆て念ひぬ、倘か正雪、一時の命を助からむとして、形態醜しうも、命ふが隨に其肌を討手たる予が面前に袒ぎ、其背を敵たる多衆が眼に曝らして恥ずとあらば、是れ意地も義理も無き尋常の鼠竊狗盜の輩、憫れむにも足らぬ奴なり、然る程ならば縱し右京は甚麼と言はむも、即座に我が役所に拘き來り細縛して江戸へ護送らむ、何の猶豫かと手業煉引きたるも、有繫に然は無かりけり、彼は其れが、飽くまで沈着ける態度、率爾ならざる言語、屈すべからざる節、侵すべからざる威容とに、自ら畏敬と愛慕との念を生じて、漫ろ其人の憫然に感えぬ。奈何ならむも倘程の好漢を拷掠の責苦に遇さむは忍びずと思ひたり。これに依りて彼れは其の駒井と談合へる自滅の意衷を微白しき、心緻き正雪は其旨を快くも悟了ぬ。「はは、御奉行の御注告、近ごろ辱けなう、御禮申す。如何にも遁れぬ場、御法の通り躯内の樣をも御目に懸けう。但し某、途中より風邪の氣味にて湯も浴かず、垢膩いたる肌膚の醜しうおざる。暫時の御猶豫を。」「心得た、いかにも好う整頓て扨て見せられい。」兩人は式代して、小平治は將几に凭れば、正雪は又た戛乎楷乎と入りぬ。

*　　　*　　　*　　　*　　　*

待難ねたる宮は走り迎へぬ。「師匠樣、妾は那樣なるかと案じたに、まゝ其れでもな。」胸を叩けば、正雪は撓げる色もせず、「おう、有繫は奉行ぢや。予に自滅せいと言ふ。過分の芳志ぢや。や、方々、聞く通りの事情、いで其夢を見果さう。噫、然るにても人々が厚志は生々世々正雪改めて禮謝する。忠彌其餘も追附け來うに、死出の山にて待合さう。宮、お主は倖ひの其姿、我等初めへ一句を授けて、死後の追弔を好う賴むぞ。千僧の供養とあるよりも其方が其の一遍の念佛、予も人々も嬉しう聽かうぞ。」彼は一面には恁く語りつゝ、一面には矢立の墨壺執り出でゝ、最後の遺書一通をさら／＼と書認め了り、飯糊して床柱に粘り、銚子を、と命ふ。永訣の盃を掛むとや。

昨夜よりして恁くとは思ひ設けつれども、目下となれば流石名殘の惜まれてや、猛く勇める九郎右衛門、三左衛門、六郎右衛門、廓然等を初として、供若黨に到るまで、皆首を垂れ、眼を瞑て、其をすら持て來らむと言ふも無きなり。獨り甲斐々々しきは宮なりき、彼女は勝手に走り入り、銚子、盃、搜し出して師が言ふ儘に座敷に据ゑつ、「さ、先づ召しませや。然て其の御盃、一番に妾に下されや。」正雪は其の意を解し得ぬも、先づ首領きぬ、「導師というて

歟。其の會釋の歪歟？」「いや導師は廓然どの、其れが相應しい。吾は冥途の露拂ひ、御先に立ちますで！」といふ眼には涙あれども、凜たる聲は露も濁らで霜吹く旦の風響にも似たりけり。此言に興奮られてか人々が息も出でたる、其れに先ちて正雪が眼は苛ぎぬ、「甚麼を汝！　師の命令を背く曲者。正雪ほどの者が切腹の場に青尼など！『喫！』―汝は曩に道灌山で、其毛髪と共に師弟の緣、父子の緣、斷たで無き歟！　棄恩入無爲の尼法師が俗人に殉じて、自害するなど、協らぬ事！　えい協らぬ、協らぬ事！　強ても言はゞ再度の勘氣ぢや、出て失せい！」―彼が怒れる暴々しき聲、人の涕泣聲、排出だす、去じと爭ふ、其等の物音の外にや漏れけむ、突然與力の一人は其の廊下の口に來りぬ。「物申さう。御問罪の餘りに入り申すに奉行不審を立てられます。疾く御整頓。」「曳！」との衆聲は忽諸として座敷に起りて、繼いで撲乎々々の太刀音も凄う響きぬ。愕きて駈入れる彼は、何物にか脚を奪られて頭顚倒と鴨居際に打倒れぬ。是れ豫て彼等が張り置ける牽繩に足を綁まれたるなり。再び蹶起て、紙襖を開けば、慘たる腥氣は面を撲て、暴くれたる僧俗十個の亡體は算を亂しぬ。「呀！　自害ぢやヤツ！」

（二百二十九）

彼等は噫、自殺せり、然も見事に自殺せるなりけり。試みに想へ、書劔十年、跋涉數百里、東に籌り西に說き、衆を鳩むる一萬、金を散ずる數萬、壯圖方に成るに垂むとして、此の口言ふべからず、吾說く能はざるの悲境に沈落す、其が胸中の遺恨什麼許なりけるぞ。蓋ふに彼れ正雪たる者、其腸や爛れ、胸や碎けて、心狂せずしては已ざらむ。然り、死の一字、彼が今、當然に領くべきの運命のみ、順序のみ。雖然、彼が氣力は猶這の熱腸を壓抑に、破裂せしめざるの重力ありき、便ち彼は今般の失敗を己が躬に牽て、天をも怨みず、亦人をも尤めざりき。猶人生の夢幻を悟了し、大徹して、落々然、月に面し花に對して一盃の酒を喚ぶが如くに這の一大事の因緣を解脫しき。其の解脫せる彼が亡體の什麼な見事なりける歟！　彼は、彼の遺書を粘り置ける床柱を其の背後にして、肌をも袒ず、其襟を些か緩解げたるばかりにして、腹一文字に掻切れるが、瞑れる眼は寛に閉して、曩に見し微笑を猶其の脣邊に見すらむ樣なりき。これに續きて、由井三左衛門、鵜野九郎右衛門兄弟三人、熊谷六郎右衛門、僧の廓然、泛々の供若黨、小者にいたるまで、或は其肚を屠き、又は互に其胸元を刺違へたる、惡怯れたる形態は亡屍の上にも些見えずして、彼の遽しう聞えし聲なむ、一齊なる最期の合圖とも今更ら思はれぬ。踏入りし小平治も、此の爲體の潔きに感じてや、多時は下知の語をも出し得で漫ろ暗涙に咽ぶのみ。與力、同心、心無の町役人らも、我組留めて殊別たる恩賞に與からむ、此町の騷動如何あるらむ、と勇みし心も、悸えし胸も、今は失せて、鼻うち掀むもあり、聲低く念佛を唱ふるもありけり。血の腥臭ならでも、衆は皆其面を背けぬ。

＊　＊　＊　＊

江戸御城なる焚火の間には、大老井伊掃部頭、酒井讃岐守、老中阿部豐後守、松平伊豆守の四人ありて、圍爐に居列ばれたる、互に頭を衝合はし、聲を潛めて、物言はるゝ氣色も平ならぬは、今や彼の大事に管る御用談の最中なるべし。看る、其の中央には、二枚の鼻紙に書認めたる書附の其の端方に鮮血の痕遺存れると、別に、下知の本書めきたるもの數十通とは、堆高く積累られぬ。最も熱心に、最も心急きたる如き伊豆殿は、彼の血痕狀を執上げて、―掃部殿は然は仰せらるれども、彼奴が此の遺書に、私にして人數を催さむと欲するも敢て一人も其催促に

應ぜざらむ、之に依て紀伊賴宣公の御名を借り、御扶持を蒙むるの由披露す、全くは誰人よりも一人の扶持を受用せず、天の照覽他無き者歟、云々と書き申たは頭隱いて臀隱さぬ、否、問ふに落いで語るにといふ淺々しい分別とも存ずるぢや。現に當夜も、彼の殿の御印の物をもて一時衆目を欺瞞さむと謀れる事、右京言上によりても明白おざる。況て追々徒黨の輩より差出いたる此の下知狀の判といふ、紛れも無い彼の殿のもの……。」言ひつゝ其の書附と、彼の奉書とを引披き、井伊殿が面前に差置きて、更に扇もて其際を打鳴しつ、「汝等は何とも、遁れぬ證據と、判斷申す。」爰に知る、此の血痕狀は、正雪が遺書にて、其を小平治が收り、右京が携へて歸れる物、又た他の奉書は、正雪が嘗て紀伊國殿御名を以て諸浪人を招きたる折に授與せる、彼の贋筆の御判の狀なるを。然して此は、豆州が許に急訴せる奥村七郎右衛門、八郎右衛門兄弟を初にて、其後追々諸方の浪人の返忠を申立つる輩が手より差出せる物なりき。言へば實に其の道理あるなり、彼者の故らに紀伊國殿御名を借れりと書遺せること、死後までも逆に祕て漏洩さじとの固き盟約を全うせむずると、猶想へば、其身運盡きて其處に死なむも、其が首領たる彼殿にして無難ならば、早晩は再度其の宿望を遂ぐるの期ありて、其を草葉の陰よりして樂みて見むとは案じたる、兩途懸けたる遺謀と言はゞ實に言ひ得べきなり。雖然、其は推量なり、彼が遺書に、紀伊殿、此義に御關繋なしとあるを本とせば、自餘の御判など、皆彼が徒黨催促の方便として破りも棄つべきも、扨其を爭論ひ氣に見ゆる豆州が腹中は？ と掃部頭は其口を啓くに良難んぜられぬ。

（二百三十）

「ではおざらうも、是は大義ぢや。申さいでもの彼殿は當上樣の御大叔父、過錯たば人倫の大變ぢや。此は熟考ぢや。」掃部殿が平上落下ぬ挨拶を、悶かし氣なる豆州は、今打鳴らしたる扇を這回は膝に突立てぬ、「大老の御遠慮、尤も其の道理はおはさうも、其の人倫の大變よりも是れは天下の大變おざる。天下の上には縱令肉親の御仲とても。……」鋭く歇語て、屹とばかりに一座を看回せる。問題は、測らずも、彝倫と政道と其の孰方か重大かを秤の目に爭ふ如くとなれり。年壯氣鋭に智畧逞ましき老中は、温厚沈着、世味の辛酸を咀嚼し盡せる大老と、あはや衝突せむとはするなり。實に是れは如法の大義ぢや。而て豆州分別は甚麼樣に爲られうといふ、悄と御申しやれ。」喙を容れたるは豐後殿なり、其れが額に刻まれたる酸皺の間より、良居丈高なる人の面を覗へば、此方は甚麼の會釋もなくて、「別義がおざらう？ 御大叔父ともおざれ、紀伊國ともおざれ、見る體では謀叛の發頭ぢや、家老の者召喚いて仔細を訊問し、其容子によりては假に殿の官位を停め！ 扨て根を斷ち源を塞ぐ、其れが外に何樣の處置がおざらう歟。」可怖しき眼は彼を睨めり。睨まれたる豐後殿は遽てし口に、「扨は、大義親を滅する……？」「勿論ぢや。政道の前には親疎貴賤の別は無い。それによ、彼の殿が、御先々代樣御以來から目上の瘤、下世話の、臭い物に蓋を爲つゝも今日までは來申したが終局には此の爲體ぢや。大阪の内府（秀賴）の其人ですら、那樣體でおかせば、有らぬ徒輩の附着申て天下の靜謐を擾亂さるゝ、然るを此方は御存知の剛健者、簾中は加藤（清正）が娘、御内には福島初めの諸家諸方の浪人共も夥多しい。帶刀が存在たる時にこそ其奴等が頭を壓抑て、無事に橋をも通らせたぢや、前年の物故の後は家中は只洪水の暴れ次第、人事もおざらぬげに言ふ。現の證據が彼の前上樣の御他界の日ぢや、御途中の駿府に御座なされた際り其の正雪を夜陰に召さ

れてな、何事かの密議に其夜の明くるも知られなんだと確に聞き申す。其のみかは、此ほど、未だ御百箇日とも經ざる大切の御喪中に、御遠慮もあるべきものを、正雪めが加賀屋敷の私宅へ多人數の士遣はされて合壁を騷動さす、是れは正雪を召捕の爲なんど訴人は申すが、扨て其の意趣は果然て甚麼やらむ、縱んば其の彼奴が、何樣の曲事あらむも支配たる町方へ一應の斷りをも立られで私の御人數遣ひ、兎角は御自儘の沙汰、上を憚らざる御仕向、第一が其の一事を以ても正雪と御入魂におはせし迹は明白ぢや。旁、何分、此儘には差置き申されぬ埓と此の伊豆は確に存ずる、否、猶其の依然とありや、右の大阪、駿河樣なんどより可怖しい御家の痼疾とも存ずるぢや。一も二も要り申さぬ、結句は雨降つて地固まる、家老共召喚いて伊豆自身に鞠問の仕つらう。御家の爲の害物を除く、損せば我等が腹一つぢや！　想へば先年の兵庫めが訴訟の折、さしも我等が遮つて申た事を方々の拒否まれて……今更ら無念ぢや！」彼の突立てられし扇は、再び緊く其柄を握られてはた〳〵と強く其主の膝を拍りき。義朝の父を弑し、淸盛の叔父を殺せる、與に我國の青史の面を糞土に潰せるものとして世の博士輩は論ずるなれども、此は其れには似るべくあらぬ、三代相恩の將家の爲に、否、四海の安寧を其任とする幕府の爲に、我が一命を賭して其の不逞の徒を誅せむとは爲るなり。此點よりして言はゞ志の切なる、理の純なる、誰か忠臣豆州の爲に一掬の感涙を濺がざらむや。然れども、事若し協ふを得べくんば、と井伊殿は首を傾けたり。「殘る處なくは承はるも、此の御仕置が當上樣の御手初ぢや。御手初に大叔父たる殿をとあらむは？……甚麼と今一應、御分別、繰り返して賜らぬか。」「然ればぢや。」と讃岐殿も其を贊けたり、「恐れは多いも御先代樣御時に、駿河樣御成敗も、人は善きには爲申さぬ。御目下でも既に爾うなる是は猶御目上、然も日光樣、御愛子といふ旁以てぢや。指圖ではおざらぬが今一應の分別な。」「では、此の沙汰、ひつたりと罷め申すか？」其の異見に唾吐く如くに豆州は言へり。「いや、爭でか直たとは。然らば、倚樣にも致さうなりや？」温順しき豐後殿が口頭よりして、重げなる意見は出でぬ。其輩は低くして聞くを得ざるも兩大老が首領く影は遙に見えぬ。

（二百三十一）

大納言殿は、其の以來、太と甚う樂まずしておはしき。もとより世間のなべてなる閑居家の御喪の中なり、嚴格なる御謹愼は、此の忠信なる殿として當然き御事なるも、猶其の御胸裏を覗へば、其れよりも他に一條の堪へ難う恨めしう、躬ら悔い思し召すの理由ありて然るなりき。其の御後悔は正雪なりけり。什麼ならむ人咬ふ馬も、騎手の技倆にして優れば其が惡癖は出さぬものぞ、箇程なる野心の奴も、我手に附けなば、終には眞正の武士と化ることの有りなむ、化らば天晴の家の重寶よ、其迄ならぬも其者が得たる奧義どもを我が壯佼等に傳へさせなば、其猶愈剛愎くあらば、其時にこそ成敗もせめ、兎角は此れ程の奴を無慘〳〵と、とある海如す御心を搯み得でや、故意に其守衞を寛緩うせられしを物得つとして、彼は汚なうも遁げたるなり。封じたる毒龍は逸れぬ、それ、とある澆だしきに役人は慌忙て、前後の勘辨の間隙も無う其者が私宅へ人數を向けぬ。雖然空虛なりき。引返して言上すれば、殿は太くも驚かせて、目下の折柄に然る暴立てる沙汰、其方共は此の大切なる御喪中を何樣にか心得るぞ、怪しかる次第かな、捕ふるとて別に手段の有るべきものを、心憂や、と難らせ玉ひしが、愆ては扨て已むべからず、忠彌方へも潛みけむ、

捜れ、との御意なりしかども、亦今までも忍術を皆趣との命なれば何方の手を借むにも能はず、左や右やの催援の紛れに何時か日の經ちて、七月も末旬なる、彼の事件は端無くも世に起れりける。達む方なき御遺恨は今更らなりき。恁うとも知らば疾く町奉行にも告げ、其が支配を使ひてなりとも召捕へて成敗も爲つべかりしを、此の騒動こそ眞個に賴宣が身を損じ、事を誤うせし、一代の過誤！　故御所様には申すに及ばず、我心を熟く知りて、亡からむ後をと依嘱せ玉へる前代の御寵位にまひまゐらせても恥辱と申し解くべきや、咎きは彼等なり、愚かなるは我身なり、協るべからむには此が隙断に、我慢一つ堪切て失せたきが、又逮ぞる、其れが中には予が身上をも付るべからぬ様に告げりと言ふ。素奴が根ある心としては然も有らむ、但し賴宣、射の道藝を自ら貢て腹居らむ易けれども、彼奴等に逼はれ、師恩ある宗家に對ひて弓牽き損じて、其れが情に惜しき命を棄てたりとあらば已身の上までの無念なり、要こそある、今暫しを待て、御使を受けて、心中の眞實直に申して其後にこそ！　您く思し食し賜らせ玉へる殿の御心は、飽くに淨潔で、毀るに纖を容れぬ空に一點せる雲雨の、其時に紅くし葉を沈なて、然且つ夕月の薄き光を散り行く雲の端に微白う出したらむが様なりける。物の哀れも世の懐しさも恁有る際とや、朝夕は只御歌をのみとなむ聞えたる。如是て四日五日と過ぎぬ、其の六日目の日に御城よりの御使は來ぬ。明日巳半刻の御登城、上様御對顏！

*　　*　　*　　*

其夜における館の内の騒動は、震へる地震に崩壊れむとする家屋の下にも在るやうなりき。人は皆決死眼なり。其眼は彼處に集ひ此處に寄れり、其の口には、其舌には、此頃の忌々しき雜說！　明日の御登城四半時！　此程の忠彌が隙にも、水戸殿は召されたれども此方には不沙汰なり、彼を思ひ此を思へば殿の御運も此時を限り歟！　兎角は紀伊國の水を飲たる程の者、かゝる場合に遇うて默々と在るべきかは、先んじて討てや出でむ？　御先途の様を見て追腹をや切らむ？　但しは殿を擁し宵にも急立て申て和歌山へ走歸り、眞個の御與を擧げさせ申さむ歟？　如何、如何、といふ衆議は、いつしか家老牧野三馬が口を經て、殿の御耳に入りたりける。「好いは、然りとも相思の事、予が下知も有る内に無二ともあるまいよ。其汝等にも、予が將軍家に有らむやうに、汝等も予に有れと言へ。寃を含み、恥を忍ぶも、時としては忠義の一つぢやよ」談隙に横状突かせて、秋夜の靜穏なる如き御面地、明日の風雨の如何ならむも御念頭に無きもの丶如し。

（二百三十二）

一昨日の八朔の餘波をうけたる今日は、日出づる候より俄然に空暴れて、天翔る魔の車乘かと見る叢雲の、安房上總の山々より、秩父淺間の峯々へ、前後に、左右に、追續け、引繼け、其轅を列ねて推行くやうなむ看えたる後より、其が輜軍の呼喚かとばかりなる東南の風、突然吶と落し來て、品川の海は、今か八百衝を一呑に呑むが如きの可怖しき音を起てたる。夜は明けたれども、市中の家々は、此の光景に戸を鎖固めて、忠彌正雪らが徒黨の、再度の爆撃の其日かとも怖れたり。御城の内外なる見附々々は、近日來の戒嚴なる上にも戒嚴して、何處よりか洩り出づべき樣な流言の、未だ聞かざる警音に其の衆多の耳を欹立てたり。況て、麹町、赤坂、四谷、市谷なる紀伊殿が上中下の屋敷に近き大小の旗本家人をや、大納言殿が今日の御登城は、容易ならざる事の續くもの有るをも知りぬ、萬一の際に自然の不覺あらば、と心遊きは昨夜より御館の近所へ目星を附けぬ、混頭き

は其れと無う討出の準備をなしぬ、其の支度も心構も取り／＼なるに上下を論はず、士民を舉りて、知れるも、知らざるも、軈て起らむずる雷撃の、先づ電光を見たる如くに、此の天變と人異とを恐怖れたりき。如是る中に、昨日總登城と觸られたる諸役人は、辰の上刻より出仕せり。大名も、溜詰、帝鑑間、雁間、柳間なるは登營せり、其の下刻に尾張殿、水戸殿も御登城ありき。但し御供は常に倍して、御駕脇は特に嚴重に固められたる、鎖衣をも襲ねたらむが體とも見えぬ。劇搖を作れる大手先なる供待の大腰掛には、猶此時一種奇怪の風說なむ弄ばれき。其は此の日、不時に吹上なる山里の御殿に御直の白洲を啓かるべしといふ事にて、其の發頭と目指されたるは、衆目の見る處、紀伊殿とは誰が口にも唱ふるなれども、猶其の濺液の如何なる邊にや及ぶらむ、假にも正學忠彌らに出入をさせつる、彼等が一味に其藩の家來を出せし其等が向までにも祟るべき歟、兎角は連判の狀は、忠彌が女房の燒棄たりとも、又は石谷殿が取りて御用部屋へ差上けたりとも言ふなれば、黨類たる者の穿議孰れとしても無くて已ざらむ、況んや返忠せる輩の日に五人十人と今も無間斷をや、其等が、有らぬを有る樣に向ふ口を一々取られなば、我が主とて、我が屋敷とて、何時、如何ならむ御咎度の舞ひ來らむも測り難き歟、否、今日の殿中にて不慮の御吟味は受け玉はぬ歟、と大手に聞ゆる呀應の制止聲、二の丸の茂林に吹荒るゝ暴風の音にも簀破といふ彼等が眼光は運ばれて、半日には其の賄方の吝嗇を喞つ腰辨當も、此日のみは其多量に飽倦つ、心痛の胸に湯茶さへも快くは通らぬなりき。總て、人は目下の一時を危めり、天は其兆を暗示し蔭に、暴れに暴れたり。

＊　＊　＊　＊　＊

城外は如是きに、殿中の氣色は什麼。御表と中奥との境界なる御三家御休息の御間には、尾張中納言光友卿を上座に、次座には水戸中納言賴房卿ぞ在したる、其前に謹みて控へたるは彼の井伊、酒井の兩大老と、伊豆殿、豐後殿、其餘三人の老中とにて、彼の數十通の判狀と、正學が遺書の寫とは御前に披露せられつつあり。御披見は存りたれども、兩卿には甚麼とある御沙汰も無し、豆州は御傍へ稍進まれぬ、「御判の證據、斯樣に明白とござーある上は有無も無き御成敗とは存ずるも、亦同列にも彼是の評議もあり、上樣には猶更に御大事の義と再應の御沙汰おはします。これに依て今日御前にて仔細の御訊問もおはさうずる、御陳謝の旨も聞し食さうずるとの御義にて、御兩家樣にも御列座との御事にござりまする。但し眞直の御申條滯りなくましまさば公私の幸ひ！　なれど、倘か御容體の醜うおはして連坐紛れ無うおはさむか、眞に以て御據ろ無き義、恐れはおさるも征夷の御任の御面表に對せられて相當の御處置遊ばされいでは……。自然に不祥の振舞とも御目に立ち申さむも、其邊は豫て。」此の言上に先づ驚かせたる兩卿は、「伊豆、不祥とは？」「取固め申す義にござりまする。」「營中にてか？」「御廊下の詰りにて、……既や番士の者數十人、其手組を申付てもおざりまする。」其が決心たる聲音、目下の急に迫れる形勢、頽瀾の既に回すべからざるも猶其を萬一に防止て、と水戸殿は扇笏に執り直し玉ふ時。「紀伊殿御上りにおざりまアす！」坊主の此聲は今日の殿中を愕かせり。御時計の間の四半時は此時轢りぬ。

（二百三十三）

但見る、紀伊大納言殿は、近江麻の水色の御帷子に、同じ麻の長袴を召し、手には細骨の白扇を尋常に把らせたり、邊てたる態も、異める色も無くておはせるが、只此日の此腰間には、

故御所様より拜領とありて身にも換へじと思し食す、頼宣が萬一の時節には、日頃御誇の、倶利加羅正宗の御小刀なむ金覆輪の鍔かけて佩せたる。

莞爾との御笑顔、徐かに御座に着き玉ひて、「ほう、これは兩卿には御早い事ぢやの。扨、上様には、愈御機嫌好うおはすか喃。御光氣もあらせられいでか。」御傍なる豐後殿を回顧り玉へば、阿部豐後守、「御氣色彌御麗しう渡らせられまする。追付の御對顏。御三家様とも其の御用意あらせられまするやう。」申し訖りに一同に目を換すれば、大老、老中、これを機會に其座を起ちぬ。殘れるは尾張殿、水戸殿なり。尾張殿は御腹こそ異へ、御血統とり申しては、大納言殿は御叔父なり、况て水戸殿は紛れもなき・腹の御弟にておはしますを。血縁より言へば目上、門族より推さば長者におはします此殿の、凡下の輩に看す〳〵擯め果られむとし玉ふを、知らせずば扨在らむ、知りて、然も注告の協はせざる、倒々に飾の莚に自個に座まするむやう苦惱に堪へ玉はぬか、御年壯き尾張殿は、不覺御疊の紙を御目に當てさせぬ。分別の盛りにおはす水戸殿は、其の救護の方を案ぜさせぬ。大納言殿も別に佩する由も無くて、其の扇の蟹目、穩かに膝の上に走らかしつ、手弄ぐり玉ふ時、水戸殿は突如、「あ、謀書！」獨語き玉ふ御聲の高きに尾張殿は驚きて其方を瞻たまへば。「いや、何事もおはすまい。如是る淺どい事はゝはゝゝ何を老中が周章して！　や、紀伊國殿、今日は執政輩が面白い狂言して人々に見せ申すげぢや。但し殿には初終見物人として只御覽じておはせ、尾州と我等が總て携かう。尾張殿も其の狂言の仕手にお爲りやれ。はゝはゝゝ」水戸殿は俄に御心地快げの、御面色も爽けり。大納言殿は只微笑てのみおはします。

＊　　＊　　＊　　＊

大廣間の上段、黑漆の御框の奧の御座には、御手御褥のみにて、將軍家は出御なし。向ひて右の方、桃栗の繪ある御袋棚の下なる中段には、紀伊大納言殿御座なされぬ。其れより下段となり、御座敷につりては、津山、福井の御一門方、加賀、薩摩、仙臺、長門の國主方、次に城主、十萬石以上以下の面々、譜代を論ぜず、中將、少將、侍從といひ、諸大夫といふ、官位の高下と、其家の格式の順序とに依りて整々として居流れたる、鎌倉山の星月夜といふ當時の光景は見ぬ代の昔なり、其れには倍せる百を以ても算ふべき今の柳營の緊目、大小名、諸有司の員數の夥多しき、唯是れ武藏野の秋に榮ゆる千種の花、尾花が末たる蒲露の繁きにも似たらむ歟。好個、看得て好個、鷺の如くに列なり、鴉の如くに斑べる彼等は、此の藹然として林木の蔭きが如く、鱗鷄として夏雲の叢れるが如き御座敷の爲體を見て、今更に幕府へ威勢に偶れたり。然して同時に、正雪忠彌らが、蠡片を以て洋海を測るといふ其身の程度を知らざる匪謀の愚かなるに唾吐けり。其れと又た時を齊くして、所有る衆瞳は、其の中段の首座におはす紀伊國殿の御身の周圍に攢りき。恁る處に、「警蹕の聲は御廊下遠く聞えて、萬衆一齊額を埋め、息を凝せる頭の上を、籟々との御袴の響、亙るかと思へば、「御讒、申上げませい」讒殿にや有らむ、執政の一人は、叫べり。一同は又た其額を銜きぬ。千疊に近き、廣き大廣間も、水打たる庭の塵一本だも動かぬ如し。竊に瞻れば、上様には、上段の彼の御褥に端に在します。今年は御十一と聞ゆるも、御背は偉大く、御威容の具備りて、白茶字の御袴に、黑き御紋附の狩衣人々の御禮を受けさせて纔に御首を領かせ玉ふやうなるも、天晴れ四代の御世継とは見まゐらせぬ。

同じ中段の左方なるも、御三家とは少し下り

て執政の七人は列座せり。時に、掛り老中、松平伊豆守は、稍中央に其席を進めて、將軍家を背向に、取繕ふやうに爲まゐらせつゝ、懷中より四五通の書附を出しぬ。言ふにも及ばず、是れ正雪が遺書と、彼殿が御判の狀といふものなり。

（二百三十四）

伊豆殿は、其時、御座敷に向ひて、威儀嚴重に「上意！」峻急なる聲は高からねども、靜まり返れる御廣間には、遠く響き、近く應へて、突然疾雷の一聲山谷に震ふやうなりき。凛たる衆は、ふたたび、其角を崩すが若くに稽首しぬ。「此度、浪人、由井正雪、丸橋忠彌等、徒黨を語ひ、諸國を、亂暴いたすべき結構の處、急訴の者これ有つて、露顯に及び、それに依て、正雪は駿府において、忠彌は江戸において、或は自殺、若くは召捕られ、相濟み訖んぬ。然る處、猶右連坐のもの有無につき、御不審の廉これ有り、今日御前において、老中阿部豐後守、松平伊豆守兩人、承はり、御訊問の事あらせらる。右、一同、上意、承はりませい！」伊豆殿が語尾昇なる當席の演述を了れば、掛りの一人、阿部豐後殿、座を前まれぬ。「紀伊殿、上意！」大納言殿は、あツと仰せて、畏惶れ、且つ恭敬みて、御手を支へらる。「正雪事、前年以來、御手前樣御賴みとの趣を以て、其の御判の狀、諸浪人共へ與へておざる。此義、極めたる曲事、千萬御心許無き埒とござ有て、此度承はり糺せとの御諚、先づ其狀、然と御披見。」聽て眞直の御陣述、御尤も歟。伊豆殿が手より受取りて、阿部殿は彼狀を殿が御前に推遣らる、看る、兩人が眼は、其の一人の眼よりも鋭りて血迸りて、狀を執らす御手の顫ふや什麼。判を御覽ずる眼の其光明きやうなるや什麼。御呼吸、御面色の樣、果然其れか否ぬ歟と、右より睨つゝ、左より睥つ、此微にても其氣勢のおはさむには、と皮肉を割けたる御胸の裏にも其心を配れりき、列居る面々は、阿呀とも恐怖て言ひ敢へぬ、彼の執政等が法を執るの嚴なる、非を鞫すの嚴なる、親疎も貴賤も其眼中にあらぬ如くなるに戰慄きたり。況て彼の正雪忠彌らに一面の識ありと言ふ人々をや、我にもあらぬ冷汗の不伏せる額の上、腋の下にたく〳〵と滴るを覺えず、頓ては我上か、彼殿の御應答は如何、と狼狽つる耳を側てたる、時に御庭なる風は益々暴れて、雨さへも加れり。大納言殿の御光景は、豆州が眼には、蓋し憎きほどに沈着て見えたるなるべし。殿は彼狀を悄と取らせて、謹みて一應御覽あり、漸くに御眉を綻ばさむと爲玉ふ時、御隣席なる尾張殿は横合より、「豐後、右は謀書と見るぞ！」伊豆殿は驚きに手を擧げぬ、失禮と心づきて遽に其手もて衣の襟をば搔合されしが、猶些と逡巡ひて見えたりき。阿部殿は透さず、「御口入は少時。御本人の先づ御陳述ありたる後に、思し附の義とおはさむには、扨。」「いや、紀伊國の胸中は存ぜず、某が見たる處は謀書に紛れ無い。謀書と見つるは！」豆州は微笑みぬ。「これは扨て御壯年の御一轍、思し召す儘の御申しとはおはさうも、是れは天下の御大事、別しては御前とおざる。其證だもこれ無き事を無きと御口外ござありては……。」「其證といふ、其證とや？「證とや、」とはのたまひたれども、水戸殿が漫の御獨語を、年少の血氣、魁けて仰出されたるものなれば、其蘊奥の底までには未だ考慮の及ばせで、御口も忽諸結塞りぬ、御赤面と見えたるを、水戸殿は騷がず、「證もある。某も其は謀書と見つる。」衆は駭けり、御家格こそ三家の末位にておはせ、柳營の副將軍として、沈深寡默、然も發すれば必ず中る、水戸殿の御詞として、其證據ありと仰せらる。此の發揮たる御諚には然しもの伊豆殿も良二の足なりき。「證とござる。如何なる證

おざる？」「紀伊國が旗を擧ぐに、其の浪人を賴まるゝか？」鐵案は下れり。人々が耳には無聲を過るの鈴聲とも聞えぬ。豆州も其首を稍俯けたりしが、今一通の御判の狀を引拔きて懸て水戶殿が御前に指附けぬ。「御諚にはおざあるも、此の御判をば？」甚麼樣に陳じて、恁麼樣に撲滅さるゝかと、豆州は問へるなり。

（二百三十五）

水戶殿は些し、御居丈高の姿勢なり、「伊豆。當代の分別者と聞く其方が言としては些と不穿議かとも覺ゆるぞ。其判が餘人の物とあらば何と爲る？」「はッ。」「恁う申す賴房が判とあらば、其方は猶某を疑ふ歟？」「一應は其義を申進ぜまする。」「むゝ、然らば、我等が物にもあらで、松平伊豆守、其方が判形とあらむには何とか致す？」「はッ。」「人を鑒るは腹をもて察い。假令其方が判とあらむも忠義を無二なる其方、執政に私無き伊豆が平生を知る以上は、賴房は、只其狀を狂人が所爲、若くは讒姦の輩が所業として毛頭も懸念せまいぞ。紀伊國とて其通り、御前代には御叔父、當上には御大叔父、一門の長者として、紀勢兩國五十五萬石の大名として、柳營の御待遇、世人の崇敬、何の不足か只今の靜謐の御代を攪亂して然でも無き浪人共を語はるゝなんどの事あるべきや。況て平日の忠厚、無二の御心懸諸事只宗家の御爲を一途とのみ存ぜらるゝ、此等は上樣御眼代をも仕つる其方等が油斷無き吟味を爲いでは協はぬ義とあるべきを、心にも似ぬぞ。伊豆！」

層に熱心なる尾張殿は此御言に續きて其足らざるを補はせぬ。「段々は實に隙間もおはせぬ。猶我等申さうなりや、紀伊國にして眞實其の旗とあらうに、現在の一腹の兄弟、又遁れざる血緣の我等共へ一度の談合の無いとの事おざらうや。然るに無い！只其の賴憑とせらるゝは餓み凍えみ、今日を送りて明日をも知らぬ一所不住の浮浪原といふ、恁る無道理の事世間に有るべき理由歟。殊に其判狀の謀書たる正雪めも其の死際に書遺しつる。死人に口無しとは言へ、人の死むとする時其の言ふことや善しと聞く時は、其の遺書の一つ、紀伊國の寃名を雪ぐにおいて十分の證據であるべきを。やア伊豆、豐後、光友の恁く言ふが非理歟。恁くても紀伊國殿御不審と申做す歟、眞直に申せ。申せ！」血氣の殿は勝に乘られし、御前も忘れて御疊をすら叩かせ兼ねまじき御氣色なるを、暫くと停めさせたるは紀伊國殿なり。紀伊國殿は、これより先き、我が庇護を任とし玉ふ如き兩卿の御芳志、又た執政等が幼君を補佐の其の手段として、特別に恁る糺彈を公然にしたること、眞正に水際離れたる微妙の計畫やなと、彼れを感じ、此れを喜び、漫ろに暗淚さし含むまでにおはせしが、此時漸々御口を啓かせたりき。「是れは〳〵、尾州と申し、水戶と申し、我等意衷の奧の底までを御存知にての御陳疏、近頃の過分ぢや、只此上、我等一言申し添うは此の一時たる最早や何の御氣遣とて在らせられぬ、當上樣御治世千歲、めでたしとも中々、と斯う申上げらずる其外には何もおはさぬぢや。伊豆、豐後、何と然は思はぬ歟。」思ひも懸けぬ、いと御打解顏なる御會釋には、階上階下、彼の御廣間に在りと有る其の三百に近き面は呆駭に呆駭れたり。猶ほ、其の御言の意味を纔に解せしは百の二三にて、許多は猶此殿の御膽の剛健なる、遁れぬ場所の負じ魂にもやなど、且つ惑ひ、且つ嘲笑ひぬ。豐後殿は儼と居直られき。「めでたしと御沙汰におはす、甚麼事の御めでたさにて御座あるやらむ。一時、御氣遣おはしまさぬと申す其の御仔細は？」殿は微笑せぬ、幾回打頷せて、「其義であるよ。仔細と言ふはな、彼の惡徒輩倘か外樣の人々が判を似せ、謀書ともせば、畏こし三代の御恩を忘れ、氣ばし狂うて然る逆

心を企圖てつる歟との御疑念もおはさむ。然るに倖ひなは此方判を似せつること、物怪の義で無き歟、尾州、水戸の申しの如く頼宣未だ浪人を語ひ、其の力に縋りて思ひ立たう抔いふ程の甲斐無さでも無し、又た御照の宗家に弓率まゐらせて天下をといふ如き獣心も有たず、其等は先年、丘庫といふ狂者の有らぬ事訴せし際に故帶ハして委細を申述べ置せつる、我等心底、當時も今日も毫差違はぬ、是れは日光も御照覽、僞らば的面の御罰、何の疑ひの有るべきや。但し、恁くは申せども……。」と、仰せ懸けて上段におはします愛々しき上の御容粧を沁々と瞻仰させしが、忽地はら〳〵との御落涙に少時其の御舌も澀みぬ。

（二百三十六）

良存りて、殿は、落る涙を搔き拂はせ、一面には上の御座に、一面には老中に指向はする如くに在しつ、御言も打霑りたる、「とは申せ、如是る徒輩に判僞造らせ、苟にも天下の人の耳を騷駭かし、御幼少の上に、暫時ともおはせ、御胸を痛めさせまゐらせしこと全く頼宣が不肖、何と御謝辭を申上げて宜しきやらむ詞の品も辨まへず。所詮は唯今、御預りの紀勢兩國五十五萬石を返上仕つり、和歌山の城地滅却いたさせ候はむ、然でも猶御心許なく思ぼし食さば、如何樣にも某を仰せ付られ下され候らへ。頼宣が所願は、只、天下の靜謐、人民の安堵、柳營の御威勢の爽灼うおはしまさむより外はござ無く候ふ。ヤア伊豆、豐後、其餘の人々も熟う聽き候へ唯今我等が、御治世は千歲、一埒は御氣遣あらせられぬ、めでたしとも中々、と言ひつるは此の覺悟よ。頼宣世に無くば甚麼か有らむ。とは申せ。此の御最愛氣の上樣御前途を見奉つらず、懿ひ三家の一家として、事有らむ際其一方をと豫ては念ひつる、所望も空しう、闇々と此世を看終てむな、何ぼうの無念！　遺恨は此事のみよ！　南無三寶！」ー撲地と御掌を組み合せて、御目を瞑させ、覺悟の御臍を決めさせたる御容態。白き御鬚自然に震ひ動きて、金輪より生ひし大磐石に迅き山風の霜華を吹くにも似たりけり。滿座は寒からざるに慄けり。然も徒死默せり。「伊豆、其の遺書を。」爽かなる御聲は忽地上段の御褥の上にあり。伊豆守は恐惶として進らせぬ。「紀伊國の爺、疑念ははや無いぞ。今がた尾張、水戸の兩家も申しつる、予も彼の正雪めが遺書、其方が名を僞りしとある段は眞實と思ふぞ。御父樣の、亡い後は賴めと仰せつる其爺が、何の予に謀叛など爲るものぞ。疑念は些も無い。先づ此書を見い。」彼の遺書を御手から與させ玉ふ。紀伊殿の御驚きと、御喜びとは、夢中に吉夢を御覽ずるやうにも傍目に見えき。「高聲に讀め。」「はッ。」とは仰せしが、其文字には、猶忌憚るべき言の多きに、躊はするを。「遠慮すな。人々にも聽かせい。」噫御度量の宏大なる、御十一の、是れが御意か？　と殿は只嬉しさの遂つるばかりに驚かせしが、軈て其書を引披かせて、御聲は高う聞えぬ。「今度讒奸の人有り、某謀叛を企つるの由台聽に達するの間、討手を下さるゝの段至極仕り畢んぬ。但し賤卑愚魯の身を以て、何爲ぞ四代の天下を亂破せしむるの事叶ふべけむや、須らく圖り給るべし、螳螂が龍車を遮るの譬にも足ざることを。然りと雖も天下の御政法無道にして、上下困窮せしめぬ、誰か之を悲まざらむや、然も適賢慮を以て、松平能登守諫を爲し世を遁るゝ所。却て狂人の沙汰ありて忠義の志空しくなる、是を不思議と謂はざる可むや。某不肖の身と雖も、天下を困窮せしむる所の奸人、酒井讚岐守等を遠流せしめむが爲め、僞謀を企て、人數を催し、籠居せしめ、右の趣段々言上せしめ、其上は奉行所の差圖に任せ、身の安否を定めむと相謀る所

成就せずして發覺、滅亡し畢んぬ。又、私にして人數を催さむと欲するに、敢て一人も其催促に應ずべからず、依之て紀伊賴宣公の御名を假り、而も御扶持を蒙るの由披露す、全くは誰人よりも一人の扶持を受けず、天の照覽他無き者與。申達するの旨繁多と雖も、時忩なるの間之を申し殘す。恐惶謹言。慶安四年辛卯七月廿六日、由井正雪」と讀み了りて、御氣色を覗ひ玉ふ。其の御氣色は麗はしかりき。

―喃、爺、其通りぢや。正雪めも謀書の判とは確正に白うた。ぢやが喃、其他は皆取るにも足らぬ。掃部もあり、讃岐もあり、豐後も在り、伊豆も在り、天下の政道は何か無法ぢや？　能登は、あれは發狂ぢや。讃岐を奸人なんどゝいふ、憎い奴ぢや。自滅したは惜しい。活して予が面前で其の惡口の舌を拔せても見たうあつたぞ。伊豆、其の搦めた奴原に、今の政道何事が惡るい、と確に問へ。座敷も是れ迄ぢや。皆大儀！　仰せ棄て突と其座を起せ玉ふ、御言辭の凛々しさ御容體の老成しさ、從外の恐怖は去りて又新らしき畏懼を加へたる御座敷の大小名らは小草の風に靡伏す如くに首を垂れて、衆心一樣に、此の幼稚なる將軍家の御前途に戰慄をなしき。

此時、雨は歇み、風は收まりて、亭午に擢やく陽光、御廊下の端に見えきたり。喜びの御餘りにや、將た正雪が有繫にも斯うと書遺しつる其の健氣さの感慨の御涙にや、搔暮れてまします紀伊殿が御傍に、尾張殿、水戸殿あり。「殿、扨殘る方もおはさぬ。我等ともに日本晴ぢや。」「げにも日本晴！　總ては只日光の御光り！　我等此の老年に及びて如是る嬉しい目を見るも、總ては日光の御光り。あら尊とや！」

* * * * *

安部川の畔、名におひて吹く木枯の森の此方に、此冬の初め、一宇の庵室は結ばれたりき。扃漏る看經の初終には、必ず此の歌なむ誦して、其の詠人の佛果菩提を禱るといふ。其歌は――

秋はたゞ馴れし夜にさへ物憂きに、
いづく宿りの門出なるらむ。

是れ正雪が最期の一首なり、此の一首を志ざす人の名に換へて念誦する其庵主は、年若き尼とかや。年若き尼、正雪が辭世、噫、彼女は果して宮か。

（編者は此の唯一の單行本たる「澁柿叢書由井正雪」（明治四十年左久良書房發行）を底本とし、明らかに誤植脱落と認めらるゝ箇所のみ、發表當初の「東京日々新聞」（自明治三十年九月至三十一年七月）に依りて訂正せり。尚右紙は第百九十一回として左の一文を載せ、以下一回づつ『澁柿叢書』のものと相違せり。故に其の當否を辨ずるに由なければ敢て本文中に加へず、こゝに採錄す（編者））

（百九十一）

彼が今言はむと爲なるは、實に彼が此の年來、此の月來、其の胸窩に蓄へ、其の心頭に煉りたる、有一微妙、無二、亦無三てふ祕なりき。雖然、これを口に爲むには、亦た先つ己が身の生死を賭せざる可からず、其は、彼が放てる舌頭の箭尖にして念ふ敵の胸腔を射潰ば可し、過錯たば其場を去らず、可惜しき彼が首は其の三尺の鋩先に懸けられなむ、便ち是れ虎口裏に殘を奪ふもの、凡は彼が一代の大手腕は、實に此時に於て現されむとしつゝ有るなりき。其の話とは那麼ぞや？　言ふ迄もなき御謀叛の勸告なり。

彼は御聞きたる眼を半ば瞑ぢて、うち鎮め玉へる殿の御息と呼吸を合せつゝ、徐ろに語調いと徐かに、此方を顧向て、一對馬どの、大學、凡そ神佛の擁護と申すも、其の新禱者の信心、不惜身

命といふ境にいたりて初めて冥の慈眼といふも有るものぢや。日光、八幡、熊野權現の御加護とて、水無きに月は宿らぬ。先づ某が胸裏の祕を御聞きやれらず思し召さば、正雪を其の神の使者、申す口を其の示現とも思されて、扨て後の事。いかに其信を御執られうかな？」彼は故らに微笑みつゝ問ひぬ。對馬は思ひ難ねたる眉を顰めつゝ、「其れは勿論信をも執らう……雖然、先づ御申しやれ、否は聞き申しての以上の事。」

「はゝ然らば未可しぢや。苟初にも神の示現を然、容易うは口外されぬ。但し、恁う申す民部介を神の示現受くべき者か、將た受くまじき者か、如何と思しやる？」驚くべき問に、此方は困じぬ。「其れは御分が、受くべき者か受くまじいか我等は知らぬ。先づ只今は其の示現沙汰後にして、如何にせば殿が此の御難義除けられうか、紀伊國御安堵召されうか、其の分別の聞きたいぢやまで。御分も故々早打として殿樣御爲に當所までも渡せられた仁、忠義の程は我等とて感心いたす。其の心底に對せられても御爲の意趣は一刻も疾う御聞にも入らるべき理由、今更らの猶豫の體は何とやら御如在のある樣にも見え申して……曲もおざらぬ。」大方ならぬ不興の語にも彼は念じて感せぬなり、猶其頭を左右に掉りて、「兎角は我等を猶危險い者やうにも思ぼす。右にては申すも無益ぢや、然りながら熟ら思うにも御覽ぜ、祿高こそ、役柄こそ、又た御官位こそ貴所は正雪に勝りておはせ、普く古今の成敗を視、國家の盛衰、人心の歸嚮を考へて、時の宜しきに投じて躬の武運を全うする、憚りながら其は某を首にして其の一にだも及ばれぬ。民部、決して自讃でおりやらぬ。民部、名のみは御當家の御家來、なれど俸祿は一口も戴きませぬ。以前の儘なる浪人！ されど門弟として我等腹心股肱たる者三千人、其餘心を同くし、志を通はす者、總じては一萬に餘りて待ちをります。箇程の器量ござある士、縱し御家來とおぢやらしやらぬも、如是る節には故意々々の御招き、御談合ども有りて然るべき道理。見申され、故大御所樣伊賀越の御難（本能寺の變）の時も甲賀の多羅尾留召させられて御頼ませ有たればこそ彼の危險いをも免れさせた。目下の御有樣、太平と戰國、文と武との差異こそあれ進退ともに協はせられぬ御危難は同一。爰處は一番當時の本多殿（忠勝）勇斷を發されて、殿の御身御泰安を計畫らせらるゝか老職たる御身が任でもおざらうを、故々にも及ばぬ、遙々と馳參じて殿樣御先途に立たうと申す我等を疑惧はれ、左や右との御邉巡ひ、近ごろ甲斐なう見え申すぞ。古の聖人は芻蕘の者にも諮る、況て是は正雪おざるぞ。曲無いと言はゞ此方こそ曲無うおざれ。只、信を御執りやれ。神の使者として我等申すに就せられい。萬に一も御過失はさせ申さぬ。」

滔々たる雄辯、洪水の堤防を決して一瀉千里の猛勢をもて進む如きに、彼方も面を向け難ねたりき。少時くは猶躊躇へるが、終に是非なき彼が呼吸に捲込れて、對馬、「然らは、兎角に……殿樣御爲に惡しう無き限際なりや……」「勿論の事、兎にもに御祈誓！……大小の神祇……水野對馬、貴老が教示を受け申さう。」

年　譜

嘉永元年
三月一日、江戸市ヶ谷合羽坂上に生る。幼名直太郎、後靖と改む。縱死、澁柹園、又しかまと號す。家は代々幕臣たり。

元治元年
九月、京都に赴き、二條城の定番となる。間もなく辭して大阪に赴き、御目附木城安太郎の許に寄寓す。

慶應二年
木城安太郎に從ひて東上、相模、武藏、上野の諸地の開墾、水理、河川改修測地等に從事、十二月末、江戸に歸る。

慶應三年
奥儒者小林榮太郎に就き、論語、孟子等の輪講を事とせしも、尊王討幕の時世に刺戟せられて書筆を捨て柔劍の道に勵む。爾後二十一歳に至るまで兵馬倥偬の人として寧日なし。

明治元年
静岡藩士となり駿州田中に移る。

明治二年
沼津兵學校に入學。後、静岡の醫學校に入る。

明治三年
藩命を以て薩摩に遊び、歸來静岡の集學所に入り武技を修む。集學所の解散するに及んで某地方の小學教員となる。

明治七年
横濱毎日新聞社に入る。

明治十一年
横濱毎日新聞社を辭し、東京日々新聞社に入る。

明治十五年
韓國京城の變あり、東京日々新聞社より特派せられて渡韓、『入韓紀實』を著す。歸來同紙の小説欄を擔當す。

明治二十二年
一月『曼府叛亂』を『萃錦』に、八月『畫學校濡衣の卷』、九月『くされゆび』を『國のもとゐ』に發表。十一月『條約改正』を上梓。十二月『號外附錄』を『都の花』に發表。

明治二十六年
六月『丸と釘貫』、十一月『長篠合戰』を『東京日々』に掲載。

明治二十七年
一月『山中源左衞門』、五月『山崎合戰』、九月『碧蹄館』を『東京日々』に掲載。

明治二十八年
一月『出征留守宅』を『東京日々』に、五月『他流試合』を『太陽』に、六月『北條早雲』を『東京日々』に發表、十二月『最上川』を上梓。

明治二十九年
一月『淨瑠璃坂』を上梓、三月『密告』を『太陽』に、四月『伊達政宗』、九月『小牧合戰』を『東京日々』に發表。

明治三十年
三月『島左近』、四月『小牧後日』、九月『由井正雪』を『東京日々』に、十月『大風乾之介』を『明治小説文庫』に發表。

明治三十一年
一月『俠坊主』を『世界日本』に、『二度相撲』を『大日本』に、『三千石』を『太陽』に、五月『島勘左衞門』を『文藝俱樂部』に、八月『惡態』を『天地人』に、同月『六連錢』、十一月『大島逸平』を『東京日々』に發表。

明治三十二年

一月「五月女坂」を「文藝倶樂部」に、五月「印旛沼」、九月「脫走兵」、十一月「でれ醫者」を「東京日々」に發表。

明治三十三年

一月『八千代丸』を「東京日々」に、二月『罰あたり』を「文藝倶樂部」に、四月「一命」を「東京日々」に發表。

明治三十四年

二月『妻の心』を「文藝倶樂部」に、三月『石井兄弟』を「東京日々」に、五月「聚樂殿」を「文藝倶樂部」に、七月『別木騷動』、十月『其覺悟』を「東京日々」に發表。

明治三十五年

二月「俠足袋」、六月「三郎殿」を「東京日々」に、「意地組合盃」を「つり忍」に、七月「片桐且元」を「文藝倶樂部」に發表。

明治三十六年

一月「一本槍」を「東京日々」に、「地獄組」を「文藝界」に、三月『天下茶屋』を「東京日々」に、「鐵火」を「文藝倶樂部」に、九月「釣天井」を「東京日々」に發表す。

明治三十七年

一月「馬渡し」を「文華」に、二月「虛無黨」、六月「功夫」を「戰爭文學」に、十月「華財布」を「新聲」に、「暗撃」を「文藝倶樂部」に、「大石良雄」を「東京日々」に發表。

明治三十八年

五月「宮くづれ」を「文藝倶樂部」に、七月「淀殿」を「東京日々」に、「赤穗城」を「太陽」に發表。

明治三十九年

一月「割り淀殿」、五月「天草一揆」を「東京日々」に、「釜煮」を「文藝倶樂部」に、六月『眞の武士』、十月『鬼武藏』を「武德」に發表。

明治四十年

六月『碧玉盆』を「大阪毎日」に、「新粧法」を「文藝倶樂部」に發表。

明治四十一年

一月「猿冠者」を「大阪毎日」に、二月「眞田幸村」、四月「水戸光圀」を發表。五月「水野越前守」を上梓。同月「家康公」を「毎日電報」に、六月「不老術」を「文藝倶樂部」に、「石川五右衞門」を「大阪毎日」に、八月「是非もなき」を「文藝倶樂部」に發表。

明治四十二年

一月「振武軍」を「新小說」に發表。六月「俠足袋」を上梓。七月「親の面」を「文藝倶樂部」に、「幡隨院長兵衞」を「毎日電報」に、十月「村井長庵」を上梓。

明治四十三年

一月『犬の皮』を「毎日電報」に、三月『ではどんな物』を「文藝倶樂部」に、五月「三代景清」を發表。

明治四十四年

一月『賤ケ嶽』、『桔梗の笠』を「大阪毎日」に、三月「藤江」を「太陽」に、六月『西鄕隆盛』、七月『錢屋五兵衞』を「實業倶樂部」に、『らしわか丸』を「日本少年」に發表。

大正元年（明治四十五年）

二月『茶磨丸』を「中學世界」に、四月『佐倉宗五郎』を發表。五月『戀の秀吉』を上梓。

大正二年

「孫子講話」上卷を上梓。（中卷は翌三年三月、下卷は五年七月上梓。）

大正四年

「歷史の敎訓」を上梓。

大正六年

二月東京日々新聞社退社。四月『新說雁金五人男』を「大阪毎日」に掲載。

六月五日「烈女さつ」を執筆中逝去。

元祿女

村上浪六

元祿女

いつも男ばかりに骨ついて、あまり角の取れぬも妙ならずと、聊か滑かに肌觸りの辷やかなるところ、但し女は女ながら元祿の伊達模樣と廂髮の鰕茶式部、いづれに禿筆を下さうかと反古の端に書いて掌に丸め、これを机の上に轉がして捻みあぐれば元祿女を拾ひあげたり、されば前後の順に當世風の鰕茶殿を後日の事として、まづこゝに元祿風の寛活小袖を掲げ出しぬ。たゞ髮の額を越して前に出るか、首筋を越して後に出るかの相違なり。

前編

其一

夏の夜は蚊を瑕瑾にして五百兩といへど、古昔より定めたる春宵千金の價値まだ半額を殘せるに引替て、そも〳〵四里四方の江戸繁昌より僅か二町四面に一寸八分の淺草觀世音を引去れば、土一升に金一升の諺も二束三文の田舍相場と鳴雷の門前、人は雲の如く織るが如く日夜雜沓の市をなして、袖と袖とに蒼蠅一疋の飛交ふ寸隙もなき脚下を見れば、いづれも浮いた調子の太平樂に醉ひし素天窟は元祿の空、罪も報いも疝氣もない當時流行の寛活伊達に身代を打込んで、とかく浮世は斯うしたものとの鼻唄まじりに人間一切の歌舞伎めいたり。

わけて江戸は次第の扇形に末いよ〳〵廣がる其の繁華の要、この淺草の夏は猶更ら立寄る樹蔭なければ、混合ふ人影に日を蔽うて額の汗は不斷の雨かと疑はれながら、さて俄の夕立に一寸の地も濡さず、照續いたる乾蒸の炎暑にさへ境内に小石一箇の燒けたるところなし。

加之も徳川の流れます〳〵深く淀まぬ五代將軍の天下泰平、槍は刷毛繪に似たる霞を縫うて大名の行列道具に振立てられ、薙刀は蒔繪の鞘に緋羅紗の袋をかけて武家の嫁入道具に飾り立てられ、甲冑弓矢は軒の菖蒲と共に五月人形の添物に見るのみ、鐵砲玉に山奥の獵師が米の種、實も蓋の皮となりゆく當世に腰の兩刀は女童の紅白粉に等しく、たゞ金銀に飽かして身の全盛を誇る化粧の比類、旗差物の蟲干よりも花ふりかゝる春の帳幕を競ひ、陣鐘太鼓の響よりも色絃の音じめに小耳を欹てゝ、世は夢うつゝの正體もなき腹鼓、ぽんといふ花火線香の音にさへ大の男が飛上りぬ。

この華奢風流を競ひし元祿の伊達に舐盡されて、さらぬも毛脛男に魂魄の行方いづことも知れぬ折柄、武將の上に天下を操る時の將軍家は犬公方とて、生きた人間を取締るよりも死だ畜生の死骸一箇を持餘しながら、その捨場の詮議に嚴しき掟を定められしほどの世の中、兒戯に似たれど浮世しらずの歡樂こゝに極まりて、人間萬事たゞ土佐繪の極彩色を施せるが如し。

されば淺草觀音の境内、いかに立錐の地もなく日夜の繁華雜沓すればとて、紅粉の香と伽羅の匂ひに鼻を穿たれながら互ひに振返るのみの外、額と額は絶えず突合へど眞正面に對うて目と目の睨み合ふ事さへなき中に、どれほど腹の蟲の居處を間違へし奴が立交りけん、山門の軒下より濡佛の方へ俄の人浪を打出してわつと叫ぶ聲々。

「やれ喧嘩ぢや、寄るな、逃出せ、ぬいたぞ、

拔刀たぞ」

＊　＊　＊　＊　＊

人斬庖丁とは名のみの事、腰の兩刀は婦女の櫛笄に等しき化粧道具の當世、われて繁華雜沓の織るが如き淺草觀世音の境內、その山門の軒下より俄の聲々に喧嘩〳〵、ぬいた〳〵と叫びながら人浪を打て一時に溢れ出しぬ。その拔た喧嘩の本人、いかなるものと見れば、いづれも目深笠を脫捨たる三十前後の面魂、名月や來て見よがしの小唄に殘る當時流行の大額、雲の懸橋こゝに時めいたる奴ありかと思はる武士三人が蟬の羽に似たる伊達の薄羽織を腰に卷て、山形染の澁帷子に車鍔の大小を閂差、撚緒の草履に毛脛の徒足を上せたるまゝながら、はや假頭を叩いての大聲、なるほど中に一人の氣早く拔いたる奴あり。

その片相手は倚も案外の大前髮、名に負ふ浮世繪より脫け出たるが如き自然の色香こゝに深みどりの若衆が猶更ら優なる梅花の落し髱、わざとならず今日の暑さに羽織を脫いで下郞に持たせながら、白屋町に等しく前透しに織込んだる紗帷子、銀箔翎の折幅廣き扇子に細身づくりの華奢大小、誰が目にも堅々の節目に生れし次男か三男か、眞白の面に薄紅を浮べて相手の三人へ小腰を打屈めし體、嵐に揉まるゝ名花一輪の梢に堪へざる風情あり。さては聞かでも知れし黑白の爭鬪、事の善惡は置て身も心も曲り出したる三人の毛脛男に持餘したる一人の若衆姿、いづれも哀れと見ながら誰一人の割つて出るものもなくたゞ遠卷に取卷て芝居見物の如く人垣を築きあげぬ。

「や、今更何と口車に押戾されても退かぬぞ、まだ二十歲に足らぬ若衆ながら今日が初て世間の往來へ出られた年輩でもなし、いかに混合ふ雜沓の中とはいへ他の足か大地か平生の踏心地、草履加減もあるべき筈を、踩躪つた其のまゝの無言に摺違うて呼べど應へぬは我等三人へ喧嘩の賣人と見た、かくまで念入に賣込まれた折角の喧嘩を買はいでは武士の一分が立ち申さぬ、あらためて出られい、三人一時にかゝるとは言はぬぞ、現在こゝに拔た一人まづ當の相手ぢや」

「やれ幾度、お詫罪致しても同じ義ながら、不意に途中の事これと申して思召に叶ふほどの分別もない當惑さ、たゞ〳〵御免なりませと御勘辨を願ふより外に、さて誰も力も盡果てましたる身、この人混と人聲に氣も心も、上まつて、うかと致して無挨拶のまゝ行過ぎましたる段は平に、ひらに—

「なに、何といふ、おもはぬ不意の途中に湧た出來事、口より外にこれといふ詫罪の音物もないとは、や此奴、我等三人を白晝の物ねだりに見て取た言分もはや、猶更ら以て拔た。刀の手前このまゝ鞘に納まらぬぞ、但し眞實、腹の底より前非後悔の證跡を絞つての義ならば、生命に代ての手輕い業、踏まれた此の足の泥砂を今こゝで舐取て貰はうか」

小田の蛙を覘ふ蛇に等しく、いよ〳〵横に曲り出しながら不敵の鎌首を据ゑし勢ひ、今は會釋もなく三方より吐出す毒氣に居縮められて、まだ世に馴れぬ若衆姿の猶更ら哀れに下郞もろとも遁るゝ道もなき主從の絕體絕命、たゞ差俯いて無言のまゝ其處に蹲らんとせし折しも、人垣を築きて見物の汗臭き中より得ならぬ伽羅の匂ひ、ぷんと薫りて浮世の月も花も物かは、十八九ばかりの水際立ちし美人、ぬッと畫ける如く現れ出でぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

うき世を月と花との華奢風流に逆る世の中、加之も晴がましき淺草の山門に見物の人垣を搔分けつゝ、刃物三昧の相手に對うて喧嘩の腰を折らんとするほどの面魂、いかな不用の生命

を持たし鐵面牛皮の胸毛男かと思ひの外、みれば萬綠叢中の紅一點、此のごろ世上に持囃さるる菱川師宣が屏風繪より脫出でたるが如し。

まして芳紀は自然の男殺、やう／＼こゝに花の蕾を破りし十八九、つや／＼と曉鴉の濡羽色に似たる黑髮を銀箔の大元結に束ねて、なぎ袖の生絹單衣に摺込模樣の帶の端きりゝと高く結びあげし風情、武士の娘にもあらず町人の祕藏にもあらず、さりとて賤しき下司の家にも育たぬ體、雪の額に振りかゝる切立の前髮を輕く片手に搔き上げながら、のツしりとせし身の擧動に引替ていき／＼と張切りし黑目勝に鬼の筋骨も拔取るべき艷を含んで、すつと喧嘩の中間に立ちぬ。

あまりの不意に、あまりの案外に、あつと呆れて驚いて、目の球を剝直せし三人の武士、おもはず胴膽に冷水を注込まれし心地しながら、山の如き見物の手前、今更ら退くに退かれぬ勢ひ。

「や、どこの檻を脫出た狂氣やら、うろ／＼と伽羅臭い女童の出る場合でないぞ、退たそこ退けッ」

「いかな蓮葉女とて、出まする場でもないものが、この白晝の衆中に身の艷も無う、お目觸りに出ましたは、よく／＼の事、こな片相手は、ちと前方よりの心易い知人」

「知ら知らぬは汝等の事、そこ退いて當の相手を出せ、わるく動かば拔いた人斬庖丁に男女の差別はないぞ」

「男、女子の差別は無うても、れき／＼の殿達が斯う打揃うての晴業に、相手の弱いと強いとは、お差別のあらう筈、わけて先刻より詫罪に盡果てた此の、この若衆お斬りなされて、どれほどの御手柄になるやら、また取るにも足らぬ端た女の血は、たゞ／＼お刀の汚穢となるまでの事、ほゝゝゝゝ」

「しやツ面に似合はぬ此奴、や、ほざくぞ、ほざくぞ」

「似合ますやら、ませぬやら、をり惡う身だしなみの鏡臺もない途中の事、ほゝゝゝ、えゝ貴方樣、何と遊ばされたぞ、あの方々は御酒興の基、さゝ早う、早う」

女にあるまじき言葉はかりか、顏にも姿にも年にも似ざる不思議の不敵さ、ぐいと若衆の手を取つて我が身に押隔てながら、驚く見物の衆中へ突入れたるまゝ、またもや靜かに振返りて機關人形の如く三人に對ひし風情、どれほど性根の落着たるか、この夏の炎天に一滴の汗も流さず、この取詰められし敵手の前に目色も動かさず、さらぬも美はしき天生の美顏いよ／＼冴渡りて物凄し。

「この廣い江戶中、いづれ御身分に叶うた相應の御敵手もあらうもの、あの若衆たゞ一人を取込めての御酒興とは、あまりの事、なれど今、折角の的を取退ました身に、もしや後の御用とあらば」

隨分お相手も致しかねぬ身と、そこまでは口に言はねど、心の一物あり／＼と面に現せし體、見物おもはず動搖めいて、感歎の舌鼓を打鳴す中より、誰とは知らず猛牛の呻るが如き聲、

「出來いた女、當世無類の花ぢや、女房に欲しいぞ」

ぞツと影身に添うて術でも見屆けし後ならば兎も角、この晴がましき白晝の人中に大聲あげて嚊に欲しいと吐す場所しらずの無遠慮もの、いかな奴かと見返れば、ぬツと見物の頭上に一尺あまりも高く拔けいでたる大編笠、眼前の三人に對うて目色も動かさぬ身ながら、さても女は女、どこやら女なりけり、この一言に眞白き頰の邊、ぽツと薄赤う染出しぬ。

其二

天下の直參といふ旗本の巢を構へて軒を並べ

し番町のうち、土手三番町に二番目の高取と數へらるゝは四千石の本田内記、その一子小一郎こゝに當年十八、他に同胞もなければ猶更ら父母の寵愛まだ前髮も取らぬ若衆姿のまゝ、加之も生來の優形に華奢風流を添て、珠玉を錦繡に包むが如く一人の祕藏に育てあげられつゝも、しや歷々の身分でさへなくば江戸中の好奇心に身代かけて爭はるべき男色の隨一、今日まで相手なしの無事には濟まぬ筈ぢやと、知る知らぬ聞傳へての風聞とり〴〵。

庭苔の香を送るまで宵の打水させながら、まだ殘る晝の餘炎に葭障子を開放ちつゝ燈火を遠退けて、たゞ奧深き葉越の石燈籠に火影ぼッと薄闇き一室のうち、白絽の蚊屋の中より絕間なき團扇の音は小一郎の寢苦しき風情、その緣端に遠上りしは四十あまりの家に久しき下郎の藤助、主從そッと聲を潛めて四邊を憚かりぬ。

「藤助、今日の淺草あのまゝではならぬ事、うかとしたぞよ」

「は、その邊の事、藤助も心付きましたもの〻、あの場合」

「あの場合とて、このまゝで濟まうか、せめて心ばかりの一禮、あらためての挨拶せいでは、偖」

「なれど若樣、どこの何女やら、名も宿も、方角さへ」

「えゝ賴み甲斐のない奴、名も宿も、知れて汝に斯うまで言はうか、知れねばこそぢや探し當てゝ來い」

「やれ御無體な、この廣い江戸中を」

「いかに廣うても、あの女ぶり、あの氣性、あれだけの目に立つ姿が、知れいでか、是非に探し出せ、この小一郎あの場で萬一の禍災あらば供いたした汝は何とする、立つまい、されば現在、汝の身に取ても思はぬ不意の恩人ぢや、是非、是が非でも探し出して來い」

「は、是非との仰せには、お言葉も返されぬ藤助奴、いかにも足に任せまして、なれど雲を摑むやうな事、迚も急にはよし日毎に驅歩いても半月か、いづれ一月は」

「一半月、一月とは氣の長い奴め、三日ぢや、隨分と待て四日ぢや、遲くも五日六日のうちに探しあてゝ來い、そッと内々まづ住居の宿だけ、名だけ聞て來い、あらためて挨拶の工夫もある事、また今夜此のまゝでは何とやら、心が殘るぞ、觀音の境内あの山門を彷徨て、人の風聞、近所の取沙汰、本人の在所こゝ彼處と、その方角を知る便利にもならうぞ、行け早う行け」

もし戰國ならば家の筋目といひ必ず初陣を二三年前の男振、年こゝに十八の曉ながら、浮世を火宅の宿とも知らぬ前髮姿、まして太平の有德全盛に育てあげられし小一郎、これといふ戀にもあらず、それといふ情にもあらず、たゞ何となう今日の我が身を救はれし女の風情ちらと目に見えて忘られぬまゝの性急に、追出す如く急立てられて飛出せし下郎の藤助、おもはず眉を顰めながら呟きぬ。や、うか〳〵油斷のならぬは此の道ぢや。

* * * *

眼前の敵に迫られて戀に心を寄すべき遑なければ、戀でなし、白晝の人垣に取圍まれて情を運ぶべき道なければ、情でなし、戀でなし情でもない上の事、さては只その身の危險を助けられたるのみの恩義かといへば、また何とやら其事ばかりでもなくて、どこの何者が娘ぞと思へば猶更の思ひ、あれほどの女いづこの誰が妻になるかと、妻なき身の空に餘所ながら花の行方を妬ましき心地ちら〳〵目に見えて忘られぬまゝの身も橫へず、小一郎たゞ一人そッと蚊屋のうちに藤助を待ちわびぬ。

はや夜半に近きころ、やう〳〵歸り來りし藤助、人しれぬ内々また蚊屋越の枕頭に近寄て

四邊を憚りながらの小聲。

「若樣、淺草の山門に棲む鳩の數は知れても、あの女の素性は迚もの事、凡そ一刻あまり境内を彷徨て近所の取沙汰往來の風聞、それと無う聞けば聞くほど猶更確とした言質もない不思議の本人、只あの後で相手の三人が無言のまゝ見物の人混へ吸はるゝやうに遁込だとやら、その時の面相が鳥羽僧正の繪卷物にも無いとやら、あるとやら、それに引替て女は睡れるやうに身を掘たまゝ脇目も觸らいで立去た姿が、いや美はしいの凄いの氣高い段か、ありや人間でないかも知れぬとの囃し立、はゝゝゝゝ」

小一郎、ぱツと團扇に腹立しげの蚊屋を叩いて、ころり其のまゝ身を横へぬ。

「えゝ埒もない、何が可しいぞ、知れねば知れぬで早う歸りもせず、それだけの事なりや、聞かいでもぢや」

「は、なれど若樣」

「もう淺草に用はない、夜のあけ次第、市中ぢや、いづれ下町ぢや、いちいち草の根を刈るやうに江戸中、隅々まで搜し出して來い」

もはや夜も更けたり、折柄の機嫌も惡しと藤助そのまゝ言葉もなく頭を下げて、自己が部屋へ引退らんとせしを、また蚊屋の中より小聲に呼戻されぬ。

「藤助、藤助」

「は、いかな御用で」

「じたい、あの女、ありや汝が目に何と見た、武家の種に近いか、但し町家の風に近いか」

「まづ藤助の見ましたところ、なかなか町家生育にはあるまじい體、さりとて歴々衆の武家風もない體、申さば筋目ばかり世に取殘した浪人の娘でがな御座りませうか」

「それ、それそれその邊が的ぢや、芳紀は幾歳であらう」

「さて十七、いや八か、九のところ、よも二十歳には屆きますまいかと」

「はゝゝ同じ年輩ぢやの、名は何といふであらう」

「名、名の知れよう筈は」

「ないに致せ、これぞと思ふ名を言當て見い、もし、中れば藤助、生涯、汝を立養ひにするぞ」

「さてさて御難題、なれど花のやうな姿で申さば、梅どのか、また水際の立て美けしいところは其のまゝの玉どのか、あれほど凜として心の根強い、外觀によらぬ案外の男優りで、氣性の張切たところを見れば、何と申して宜しいやら、お弓どの、お石どの、お岩どの、お鐵どのか、大の男の膽魂を冷したところは、お冬どの、お霜どの、氷といふ名もなければ雪、雪女、お雪どのが色白な潔い女に相應の名、若樣、お雪どのは、如何で御座りませう、當分まづ見當るまでの間、はゝゝゝこの夏の炎暑には却て幸ひ、思ひ出しても御心の涼しうなるやう、あの女を今後お雪どのと遊ばして」

「おゝ藤助、よいところに氣が付た、なるほど雪ぢや、雪ぢや、あの雪、偖この暑いに何處の空から降つたやら」

其三

本田内記、家にも身にも代難き祕藏寵愛の一子、其の小一郎が此のごろ何とやら氣も引立たで、この夏の炎暑に朝夕たゞ奥の一室へ閉籠りつゝ、庭の樹蔭の涼風にも立出でぬのみか、三度の食事に箸とるさへ憂さ氣の眉うち顰めて、をりをりぼツと我を忘れながら物思ひに沈める顏の色艶、いつしか失せし體に子を思ふ親心、いかで其のまゝに見過すべき。

まして幼少より氣心に叶ひし藤助が、他の朋輩にも告げず屋敷の人目を忍んで、こそこそと日毎に的もなく何處へか出行く體、また歸れば其のまゝ一子の居室に這寄て四邊を憚り何をか

私語く體、ここには此奴に云々の緣道ありと、或日の朝、例の如く出でんとするを俄の不意に呼戻すや否、恩威の眼光に疊みかけて責問へば、藤助も實は内心その手に餘りて問はれたい折柄の事、これ饒倖と淺草山門の喧嘩沙汰より江戸市中の雲を摑み歩く委細、加之も自己が心に今は戀路の奴使者と見て取りし言葉を添て打明しぬ。

かくと聞きし父内記、おもはず手に持てる扇子を膝に落して、其のまゝ暫し思案の眼を閉ぢしが、やがて無言に首肯きながら奥へ入りぬ。

賣色を身の業とする君傾城の比類でなし、浮世の萬事一切を算盤珠に彈き込む町人の種には出來まじきもの。土臭き百姓の胎内よりは猶更ら以て生れまじきもの、それほどの優れし色香に太平の當時それほどの凜とせし氣性を備へたる女、よしや尾羽うち枯して世に落魄果てし素浪人の娘にせよ、いはゞ天晴れ覗ひ損ねぬ戀の的、本田家の妻に迎へ取ても氏素性を汚すべき瑕瑾にはならぬ筈、親の口より出來したりと立騷いで譽められねど、たゞ一人の子のため内々そッと江戸中の隅々まで、その宿を探し出してくれんとの心體。

曾て重き公用も勤めし四千石取の本田内記、時の町奉行に一人の交誼あるを幸ひ、流石に我が子の女風情に身の危きを助けられし委細は語らねど、たゞ聊か仔細ありて搜し出したき年ごろ十八九の女、容貌風俗これ〳〵と藤助より聞取りしまゝを打明けて、人しれず餘所ながら、市中の詮議を賴みし上、またべつに腹心の若黨四人を絶えず日夜の町々へ差出せば、四里四方の江戸三界は手に取る如くの泥溝鼠も見遁すべき筈なきに、さても不思議や、それほど人目に立ちし美人の影、いづこの隅にもなし。

＊　＊　＊　＊　＊

芳紀、風俗、面貌、聞取りし言葉に合して現在それかと思ふ美女の數、江戸市中に以上まづ四十餘人、いち〳〵町名も住家も親兄弟の素性まで書き加へて、人しれず奉行の手より渡されし本田内記、さては我子の戀人この中にありと、鑑定人は外になし例の藤助、四人の若黨に差添ながら、さま〴〵の事を設けて一人も餘さず尋ね廻りしが、玉と瓦を取違へしほどの相違なけれど、いづれも案外の門違ひ人違ひのみ、さらに本人の影なし。

淺草の觀世音へ旅姿でもない若い女一人の參詣は、よし遠くとも四里四方の江戸市中に住むべき筈の證據、まして供をも連れぬ手輕さに田舍方言もなき言葉の端々は、猶更ら近き邊に住馴れて重々しき有德全盛の娘にもあらぬ筈の證據、第一あれほどの水際立ちて凜とせし無類の色香を塵埃の巷間に包めば、いよ〳〵人目に聳えて猶更ら風聞の種に持囃さるべき筈の證據を、これほど隈なき内外公私の詮議に漏るゝとは、ます〳〵工夫に盡果にし探しもの、いづこの隅に身を潜めて加之も如何なる業に浮世を渡るやら。もしや門内の奥深く人目の屆かぬ大名高家に召使はるゝ女かと思へど、きりゝとせし中に態とらしき紅粉の裝飾なくして、自然の無造作に其のまゝの艶を含みし風情、それでもない筈とすれば、もはや江戸市中に思案の及ぶところもなし。

さりとて今は父子もろとも同じ心に氣を焦り立つる主命、まして無いものを探すではなく、必定あるべき筈の女一人を四人の男が毛脛に任しての業、この上は市中を離れて江戸の近在を漁り廻らんと、どこまでも遁れぬ例の藤助を先に立てゝ不俱戴天の仇を覘ふが如く、まづ本所の果より飛耳長目を張り初めぬ。

夏の半日を汗と塵とに塗れて、本所の町外れを歩き廻りし後吾嬬の森の此方より柳島の村里へ通ひし野路の片傍、一本松の葭簀茶屋に勞

れし足を休めながら、今日は四人のうちの若黨二人に例の藤助、冷めた澁茶に甘露々々と舌鼓を打鳴しぬ。

「やれ草臥たぞ、いかに主人のためでも身體が基、せめて日中の一刻だけを我が物に仕て退けずば、脛腰は續いても魂氣が續かぬ」

「それぢや、今日で半月餘、これほど屆いた目鼻に影も匂ひも無いとは偖、よく〳〵案外の穴に棲む化物でがな、はゝゝ第一この鑑定人が覺束ない、怪しいぞ、淺草の山門と見れば人氣の薄い野原で、黑山の見物は生茂つた篠薄、加之も其の中に水際立て目の覺めるやうな凄い美女といへば、こりや猶更ら以ての事、ようぞ大切の若樣へ馬糞を差上げずに濟だ、はゝゝゝゝ藤助どうぢや、ちと氣を確實に持てくれ」

人しれぬ内々の時は小一郎が我まゝ生育の性急に追立てられて、江戸市中の雲を摑みに馳歩き、いよ〳〵斯うと打明けし後は猶更ら寸暇もない日毎の鑑定に驅立てられて、入らざる汝の口が禍の基と絕ず嘲弄半分に責拔かるゝ藤助、今更ら後悔の臍も嚙損ねし滿面に手持無沙汰の苦笑しながら、ふと何心なく茶店の奧を見れば、また別に半窓の廂に掛出せし一室ありて、その隔ての中庭なる物干竿にかけしは、や、や、これぞ正しく見覺の一品、あの時あの女が身に纏ひし薙袖の生絹模樣と見るや否や藤助おもはず腰を外して床几の上より辷り落ちぬ。

「で、出たぞ、出をツたぞ」

＊　＊　＊　＊

藤助、おもはず腰うちかけし茶店の床几より辷り落ちて、其のまゝ大地に平駄張りながら出た出た、出をツたと叫びし聲に二人の若黨も俄の呆れ顔、何事ぞと問へば、唯その中庭を指さして目ばかり剝出しぬ。

此奴いよ〳〵正氣でないぞと、左右より引起して澁茶一碗を與へし後、靜かに聞けば藤助ほッと大息を漏らしながらの小聲、

「どれほど江戸市中に目鼻が屆けばとて影も匂ひも無い筈、こゝぢや、案外の穴は此家ぢや、いよ〳〵見付出したぞ、あの中庭の槇の木にかけた物干竿、いや、その竹竿にかけた生絹染の單衣、あれが第一の證據、動かぬ本人あの離れ家の一室に居る筈、あの半窓の障子一枚が四千石の本田家騷動ぢや、我々が半月あまりの脛腰を摺小木にした原因ぢや」

「やれ出來た、出來したぞ天晴れ用に立つた鑑定人の御手柄ぢや、偖から見屆けた上は急て後日の事を仕損じるより、そッと此のまゝ馳歸つて内々の注進するか但し餘所ながら素性の大略を聞出して、まづ本尊の半面なりとも拜まうか」

「いはいでもの事、これほど手を盡して半月あまりの汗水に見付出した一物、たゞ竹竿に乾しかけた證據の袖模樣だけでは歸れぬぞ」

三人こゝに私語合ひし後、みれば茶店の主人顔は五十路を越えし婆々一人、折しも背門の方より枯柴を携へ歸りて釜の前に踞蹲りしを、其のまゝ無言の小手に招いで奧の方へ憚りながら問ひかけぬ。

「婆々どの、こゝは汝の住宅か、この茶店は汝の家業か」

「はい」

「もう六十に近い身空で、ついして手輕な葭簀茶屋とはいへ朝夕に見ず知らずの客扱ひ、さぞ氣骨の盡きる事でがな、まだ孫は無いにせい、浮世の手助けになる子は持たぬかの」

「はい、五年前に連添た爺々を失ひまして、後に只一人の娘を持ちまするものゝその娘めが、ちと親に似ませいで」

「や、娘一人、ある筈、無うて叶はぬ筈の老輩ちや、また其の、その娘御が親に似ぬ、なるほど似まい、はゝゝゝから見た汝に似られては少々、

はゝゝゝ娘一人名は何といふ、幾歳ぢや」
「身の恥ながら、實は、その娘のため、かやうな老の苦勞も致しまする」
「いや／＼世の中の苦樂は壁一重ぢや、その娘御、いかな不意の出世で思はぬ孝行するも知れぬぞ、兎も角も名を聞きたい歳は十八か、九か、よも二十歳には屆くまい」
「あれ、ようぞ中りました事、ことし十九になりまする、名は國、お國と申しまするもので」
「國、年は十九で名が、お國どの、や、藤助、はゝはゝお雪どのではないさうな、はゝゝゝ」
いよ／＼見付出した手柄はあれど、小一郎との約束、生涯を立養ひにせらるゝ筈の運を取逃した藤助、おもはず首を縮めて自己が額を音高く叩きながら、俄に黄色の聲を張上げつゝ猿の如くに笑ひ出しぬ。
「半月あまりも道中するほどの遠い、お國どのには得て夏氣にも少々の雪はあるものぢや、ははゝゝゝ」

其四

半月あまり江戸市中の雲を摑んで駈廻りし果に、思ひもよらぬ本所の町外れ、吾嬬の森より柳島の村里へ通ふ、本松の片邊、その葭簀茶屋に第一の證據あの時あの本人の身に纏ひし生絹の單衣ありて、加之も現在こゝに渋茶を汲出す主人の婆が娘、親に似ぬ子とは固より其の筈、年も見た目の十九といふのみか、きくまで知らぬが當然の名だけは國と雪との相違あれど、もはや一切萬事は動かぬ大願成就の手柄顏に、鑑定人の藤助おもはず雀躍しながら、まづ一時も早く屋敷への注進吉報。あとは互ひの顏に見覺ある我こそ居殘りて、ならば本領の心根まで固めて歸らんとの言葉に、二人の若黨そのまゝ馳出しぬ。
いよ／＼斯うなる上は功名手柄の取次第、見付出したばかりの藝では面白からず、せめて本人より若樣の這出すやうな言質を取て歸らんと、慾の皮を重ねながら後に居殘りし藤助、折しも婆が近所の馴染顏に呼出されて葭簀の外の立談に餘念なければ、自己まづ一散かたゝゝ中庭を過ぎて、猶も證據の單衣に首肯きつゝ、はや半窓の下より小腰を屈めて横の入口に對ひぬ。
「卒爾ながら、御免なりません」
いかに天性の氣は猛く心は剛なりとも女は女、まして艶なる花の顏に鶯の囀、小耳の底に冴え渡るかと思ひの外、遠山寺の破鐘の響くが如き聲。
「誰ぢや」
障子がらりと引開けて、ぬッと差出せし面を見れば、虎髯を喰反したる一文字の脣端に頰骨の荒れたる色まッ黑々の大男曉の明星に等しき眼光をぎろりと光らして睨み下されし藤助、おもはず飛退て、きやッと叫びぬ。
「どこから來た、みれば下郎の體、何の用ぢや」
慾恍の深入に鬼の宿へ落込だ心地、たゞ呆れて驚いて無言のまゝ臼の如く頭を上下の體に、その大男、吹出しての高笑。
「はゝゝゝ奴め、門違ひ仕をつたな、但し往來に對うた入口も構はず、この中庭を隔てた奧の離れ屋へ、たゞ的もなう來る筈なし、店前の婆に聞て來たか、その他に間違ひの種でもあるか、もし無案内に踏込まば汝、その分に差置かぬぞッ」
大喝一聲の下に藤助いよ／＼縮み上りぬ。
「は、は、實は何よりも第一、證據の品が目に付きまして、は、は、恐れながら伺ひまする、あの中庭の竹竿に乾し掛けた、あの單衣、あの持主は」
「むゝあの單衣か、あの單衣の持主は乃公ぢや」
「貴方樣で」
「いかにも」

「いや、あの單衣、あの女儀の召しまする生絹の模樣は―

「女の着るものにせい、ぬしは乃公、正しく我が秘藏、なれど、あの單衣模樣に何とやら執心の仔細ありげな奴、や、汝は前月、淺草の山門で無體の喧嘩を仕かけられた若衆の下郎ではないか、むゝその時の下郎ぢや、まづ上れ、汝よりも此方に執心の仔細、きく事がある」

* * * * *

店前の茶を汲む婆が親に似ぬ十九の娘ありとの言葉、中庭の竹竿に乾かけたる證據の生絹單衣、もはや藥手に本尊この奥の一室と思ひの外、浪人風の顏色まッ黑なる大の髯男とは、加之も其の案外の大目玉を剝出して、あの單衣の主は正しく我ぞといふのみか、淺草の山門に無體の喧嘩を仕かけられし若衆の下郎と見たぞ、まづ上れ、其方より此方に問ひたき事ありといはれて、藤助いよ／＼夢うつゝの心地、ぼッとして四邊を見廻せば、わづか六疊の一室に女氣もない假寓の獨身、たゞ片隅に浮世を忍ぶ目關笠と朱鞘角鍔の大小あるのみ。

ぬッと立たば天井に頭の屆くべき大男、疊一枚の横に食出す大胡坐を搔て、猶亡の寸隙もない太腕を組みながら、何とやら物凄き滿面の微笑。

「いや、事の大略いはずも知れたぞ、さては竹竿に乾かけた、あの單衣ぢやな、實は我等も其の一人で、その女の所在いづこと詮議の最中ぢや」

藤助、ますます呆れて眉を顰めつゝ、打守れば、大男、猶更ら面にも似合ぬ愛嬌を目に浮べながら、殊に聲を潛めぬ。

「あの單衣たゞ一枚に狼狽て、こゝへ飛込むほどの體では、まだ其の後の影にも出逢はぬらしいな」

「は、江戸市中、凡そ半月あまりの日夜間斷なく、探せば必ず探し出すべき筈の手も内々そつと借受けました上、また別に目鼻の屆くだけは殘る隈もない筈ながら、さて不思議―そこまで手を盡してさへ知れぬ女を、尾羽うち枯した浪々の身たゞ一個では、や、夢にも逢はれぬ筈ぢや、はゝゝ…」

「して御手許に、ありや正しく、あの時あの女の身に着て居た筈のもの、第一また此の、こゝの茶店婆が今年十九の娘ありとて、それこそ猶更ら以ての不審―」

「いや、婆が娘の事で一入、はッと意込んだな、何の由緣もないが幸ひ此の空屋を三月以前より借住居の身、かねて委しう聞いた、いかにも當家の婆に十九の娘、國といふ親の正直一途に不似合な淫奔女はあるぞよ、その娘めが去年の春、老後の死金を盜み出して素性も得しれぬ下司情夫と逐電したげな、はゝゝこりや同じ年ごろの娘は娘ながら雲泥の相違、黑白の大間違ぢや、はゝゝまた我れに不審の第一あの單衣、いかにも淺草山門の喧嘩に割て出た、あの時あの女の身に纏うた絹も模樣も同じ染色なれど、これまた贋物ぢや、はゝゝ―

「こゝの婆が娘の事は措置て、本人の移り香も通はぬ贋物を、貴方樣、何と思召して」

「やれ痛いぞ、はゝゝその急所を突かれては、この男ちと遁足ぢや」

「御意を得まするは初對面ながら、さて御緣あればこそ、同じ女一人を探し合ふほどの事、もはや此の上に何の御隔意―」

「あの單衣の、どこまで我れを取憎ますやら、この大白癡奴、また貧乏巾着の底を叩いて入らざる苦の種を仕立てあげたぞよ、はゝゝゝ實は我等、西國筋の浪人、當時この江戸の女々しら腐れ果てた景況に、持たが病の癇癪を押へ兼て歩く折柄、女としては無類の逸物、わけて二十歳に足らぬ花ならば蕾やら／＼の身があの

凛とした不敵の振舞に、や、まゐッた、おもはず我れを忘れて、見物の中より大聲あげて、妻に欲しいと叫んだほどの男、其のまゝ爪も立たざる混雜に押返されて、つい見失うた無念さ、心外さ、あまり餘情が惜しさに、せめてもの思ひ出、目に見覺えた其のまゝの生絹單衣を染上げて、はゝゝ笑はゞ笑へ、戀ではないぞ、物いはぬ心ばかりの我が女房、夜な夜な淋しい獨り寢の夢を包んで、はゝゝゝゝ」

＊　＊　＊　＊

若黨二人、まづ足を空にして本所の果の柳島より番町の屋敷へ馳歸りつゝ、草叢に埋まりし珠玉を見付出したる顏色、斯との注進に父の本田内記は固より襖越に漏聞きし小一郎は猶更の事、最初は然のみとも思はざりしに、いつしか我身ながらの憂に沈みて迚も叶はぬ戀の俄に叶ひし心地、はッと思はず顏を赤らめつゝ、人しれぬ胸を轟かしぬ。

さては出來した大手柄の藤助、まして後に居殘りつゝ本人の心根を確めし功名面、よもや勞れし脛腰そのまゝ引摺ては歸るまじいづれ駕を飛して今日こそ憚らず玄關へ横付にすべき奴ぢやと、元來好物の酒の燗まで用意しながら待受けし其の日の夕暮、あはれや悄然と身を縮めて臺所の片隅へ立歸りぬ。

それも偖その筈の事、思ふ本人を首尾よく見付出した段か、思はぬ戀の競爭者、案外の怖ろしい奴に出喰して、加之も其奴が虎髯を喰反した大目玉の素浪人、きけば白晝あの見物の中より女房に欲しいと吐鳴散したほどの無遠慮もの、うか〳〵すれば本人の出ぬ前に屋敷に押寄せて來ようも知れぬほどの面魂、まして移り香も通はぬ例の單衣模樣染出して、夜な〳〵夢うつつに抱寢するほどの狂氣じみた執念深い奴、もし此のまゝ我れ一人の胸裡に包んで押祕せば猶更ら後日の大禍害と、今日の手柄に生涯安樂の運を取り遁せし藤助、半泣の澁面に這出して委細いち〳〵打明しぬ。

かくと聞きし本田内記、おもはず兩腕を組で眉を顰めしが、やがて靜かに首肯きぬ。

「美女も美女、それほどの女ぢやもの、いづこの里にも人目に立つべき筈、小一郎のみではあるまい、心を打込で戀に惱む男の數々、いづれ種々の相手もあらうぞ、なれど偖、その浪人め、何とやら人一倍に打込で事の面倒ありげな奴、藤助よも屋敷の名に出すまいの」

「は、そこは當座の方便、押詰めて問はれましたる上、小川外記、樣と僞り置きまして」

「はゝゝ本田が小川で、内記が外記とは、ただ裏と表の垣一重、さて〳〵人に根からの虚僞が言へぬものぢや、但し相手の名を聞たか」

「こりや虚僞のあらう筈もない體、西國筋の浪人で、村田三平と」

「むゝ西國邊の浪人で村田三平、年輩は三十前後の一癖あるべき大男ぢやな、それは偖置て本人の所在、こゝまで手を盡して方角さへ知れぬとは、いかにも不思議、あまりの不思議さに小一郎の戀よりも、今は一入この身の好奇心と意氣地に猶更の興が乘て來た、や、面白いぞ、まだ目には見ぬが、きけば聞くほど、ゆかしげな、心憎い女、どこに居らうとも、みごと探し出してくれう」

其五

時は元祿の太平を飾る蒔繪に等しき華奢風流、世は徳川の流に風浪も立たぬ五代目の全盛、將軍家は人間冥加の頂上を極めて政道の沙汰よりも奧殿の蘭麝に不斷の春色、加之も戌の歳に生れし犬公方とて生類哀憐の法令のみ天下に行渡りぬ。

荷車にて往來の犬を曳殺すものは斬首の嚴刑、犬の噛合を見物しながら引分けずして死に至らしめたるものは遠島流罪の嚴刑、もし竊に

犬を取捨つるものあれば一家追放に處せられ、いづこより來るとも迷ひ犬に時の食を與へざるものは三日の手錠を入られ、中らずとも犬に石瓦を抛げしものは十日の入牢、軒下に臥せし病犬を介抱せざるものは入墨の刑罰、屠犬者を訴人せしものは其町內の組頭となり、犬の死骸を厚く葬りしものは白銀三枚の御褒美を賜はりつゝあはれ人間風情よりも天下こゝに御犬様となりぬ。

また江戸市中に飼主なき犬を中野の犬屋敷に集めて、歴々の氏素性ある武家の大身を犬の頭とし、犬に召使はるゝ小役人五百餘人、駕に乘りて出入する犬醫者三十七人、朝夕の野遊びに連出す犬曳の勢ひ四邊を拂うて凄じく、春秋の花見と月見に犬案內の眼は前後左右を睨み散らして、わンといふ畜生の一聲は町人百姓が十千萬言の訴訟よりも重く尊し。

うまれて三月日の兒犬が過つて井に落込みしより、切腹を仰せ付けられし千二百石取の石田主水といへる旗本あり、八歳の小兒が吹矢の遊戲に誤つて犬の目を射しがため其の父の川口庄左衛門とて三宅島へ流されし七百石取の直參衆あり、飼犬の紛失せしを尋ね出しもせず其のまゝの無屆に打過ぎしかば露顯の曉に祖先傳來の知行を召放されし五百石取の齋藤數馬といへるものあり、大名高家も犬のために閉門謹愼の數々、まして陪臣と町人とは放火夜盗の強賊よりも、うか〳〵犬に出逢はぬ用心專一、わけて悲慘なるは霜夜の盲目按摩が犬の尾を踏んで向脛に嚙み付かれし時、おもはず杖を振上げて撃ちしがため忽ち捕へられて三年の牢獄に投込まれぬ。

その怖ろしき犬の死骸一個、同類に嚙み殺されしか、自然に病死せしか、誰が棄てしか、いづこに飼はれし果か、當時の江戸市中に迷ひ犬のあるべき筈なしとすれば猶更ら不思議に何としてやら、兩國橋の上に横はりぬ。

折しも夏の闇夜、空に月なく往來の人足も薄く、たゞ星明りに透して見れば見るばかりの事ながら、人間の行倒れと違うて御犬様の御亡骸、おもはず最初に躓いた奴が、きやッと叫んで一散に逃出せばあとより、何氣なら來りし奴、また飛退て俄の大聲に人を呼立てぬ。

「や、犬、お犬ぢや、お犬ぢや、お犬の死骸があるぞッ」

＊　＊　＊　＊　＊

人を罵る諺の一口に、犬猫のやうな奴といへど、犬公方に護られたる當時の犬は人間以上の待遇、猫のやうな奴は腐るほど世にあれど、犬のやうな奴、なか〳〵市中の町人風情に無し。

その御犬様の御死骸が不意に御一個、夏の夜の兩國橋に横はりて、いよ〳〵事となりにけり。

素早い奴は最初に遁出して行方も知れねどうろうろ彷徨て遁後れし奴七八人、其のまゝ時の關係人として其の場に引留められ、橋の兩方より町役人が立合の押問答、いかな物見高い江戸ながらも、これぱかりは其の後さらに寄附くものなし。

「兎も角も此のお死骸、此のまゝの夜露に捨置けぬぞ、御詮議は後の事として、まづ引取らねばなるまい」

「よし引取るにせい、これが町內ならば其の町內で引取るべき筈ながら、さて橋の上ぢや」

「なるほど、橋の上に人は住まぬが、橋の袂に軒を並べて住む以上、こりや雙方の町內持で五分々々の始末ぢや」

「雙方で五分々々といへば、橋の中央で出來た事、目分量ながら、ちと本所の方へ近いぞ」

「いや〳〵其方へ近いぞ、繩張の間尺を入れても、たしかに手前へ遠い筈證據の立つほど其方

の物ぢやー
　互ひに讓らぬ小田原提燈を振照して、畜生の死骸一疋を取圍みながら、おの〳〵自己が町内を預かる禿頭に脊汗を流しての大談判、關係に引殘されし七八人の奴は、相方鬮取にして一時も早く此の災難を脱れたいと、喚くやら騷ぐやら入亂れて姦しき折しも、いづこより來りけん、淺草山門の喧嘩を割て出でし例の美人、伽羅の匂もろとも無言のまゝに立現れぬ。
　提燈の火影をうけし夜目には猶更の美はしさ、もの凄きほどに際立ちて、いよ〳〵冴渡る眞白の顏面は晒しぬいたる白瀧の名作に等しく、地色に確かならねど白ぬきの大模樣を染出せし薄縮の袖袂、さつと川風に吹せながら切立の大前髮に小動ぎも打たせず、すらりと自然の作らぬ中に天性の艶を含みし風情、其のまゝ人影を除けて通るかと思ひの外、わざと橋の欄干近く寄添ひ來りて、今しも傍方よりの大談判に持餘せし犬の死骸、川中へ蹴落しぬ。
　加之も女の業としては、わけて二十歳に足らざる美女の仕業としては、あらう筈なし今この天下に猶更の事、あるまじき業ながら、猶その容貌にも似ず性格にも似合ず、箏を弾く片手間に大漢樣の綸を聞いて、一度二度三度、ごろりと四度目に川中へ蹴落したる勢ひ、いづれも呆れて無言のまゝ打守れば、靜かに振返りて微笑を浮べぬ。
「今この川へ落ちたもの、あれは何物、はて音の高い事、ほゝゝゝゝ」
　悠然と其のまゝ脇目も觸らで黑闇の方へ歩み行く後姿、星影に銀箔の大元結のみ、きらめきぬ。

＊　＊　＊　＊

　自己が心に斷うと思ひ込めば、忽ち我れを忘れて白晝の衆中も憚らず女房に欲しいぞと喚くほどの男、元は西國筋の大諸侯に千石取の身ながら、仔細ありて今は江戸の空に尾羽うち枯せし素浪人の村田三平、こゝに三十の曉、面も手足も繁毛に包まれて骨太の體量いよ〳〵重ければあはれや浮世を渡る腰巾着ます〳〵輕し、されば下郎たゞ一人を召使うての浪宅も構へ得ず、固より手を鳴して盃を呼ぶ旅籠住居は猶更叶はぬ境涯、やう〳〵樽島の村外れ一本松の茂り茶屋に奥の離れ小屋あるを僥倖無器用の主鑪飯に手入らずの炭籠と鍋壺、大胡坐に小鼻を蠢らして虱とも組むで面白ながら、猶この男にも案外の癖といふものあり。
　われ戀でなしといへど、日に忘られぬ思ひの種、戀なればこそ、やがては肌寒き秋に身を纏ふべき袷一枚の用意もなき貧乏の中より、わざわざ入らざる女の生絹單衣を染出しながら、人しれぬ夜な〳〵夢うつゝの枕に引添て、寢言まじりに我が妻と呼ぶ哀れさ、たゞ戀に痩衰へて枯木の如く窶れ頰ひあけ易き夏の空に猶更此のごろ寢覺勝の早起、半窓より朝ぼらけの面を差出して中庭の葉越に店前の婆を呼びぬ。
「婆さま、この早いに近所の奴等が店前で、がやがやと何事ぢやー」
「あれは前夜、兩國橋での噂」
「むゝ兩國橋が落ちたでもあるまい」
「いや、橋は落ちませぬが、此のごろの嚴しい御法度も恐れず、まだ二十歳にも足らぬ女子の身で、大膽な、怖ろしい事お犬樣を川中へ蹴落したとやら踏込だとやら、わけてその女子が畫に描いたやうな、凄いほどの美貌とやらで、現在その場の往來に引留められて、見て來たのが村の一人こゝでの談話」
　きくや否、其のまゝ首を引入れし村田三平脇差ばかりを腰に差込みながら、のそ〳〵と店前へ出來りぬ。
「その通り合せの關係で、その場へ引留められて現在、その女を見て來たといふ奴、どこの奴

ぢや、名は何といふ」

「この柳島村で、伯樂ばかり宿にするものの子息なれど貴方また其事聞て何となさるゝぞ」

「や、ちと空耳に聞流されぬ事、實は豫てより内々その所在を尋ね出して用のある女に、何とやら似たらしい口氣ぢや、はゝゝ兎も角その見て來たといふ男に逢ひたい、む、村の入口で右側の三軒目か、よし、伯樂宿の子息ぢやな、さて、其奴、酒飲まぬか、飲めば一升だけ、やまた貧乏してくりよう」

＊　＊　＊　＊

村田三平、さらぬも近來ます〳〵輕くなりし巾着の底より、あはれや自己さへ咽喉を鳴しながら得飲まぬ酒一升、また覺悟の前の貧乏して、前夜の兩國橋に出逢ひしといふ伯樂宿の子息を訪ひつゝ、きけば聞くほど正しく其女なり。

加之も兩國橋を本所の方へ渡りしと聞いて、さては川より此方に住む筈、また夏の宵とはいへ、うら若き女の身に月なき闇路を只一人、ぶらりとせし手輕さは猶更ら有德の全盛にも暮さぬ證據、本所でなくば深川のうち、まづ方角だけは知れたり、おのれ搜し出さいで置くべきかとおもはず心の微笑に首肯きぬ。

されど彼奴一人を的に覘うて心を運び氣を採む男、嘸や定めて數々ある中に現在あの番町の若衆め、此奴まだ淺草の恩を返さらばかりでも無い氣の體、や、油斷大敵、なるならぬは本人に出逢ひし後の事ながら、それまでは一念の魂くらべ腕くらべ、まづ差當りての脛くらべと、思へば猶更ら急立つ心地の村田三平、明日ともいはず、その日の晝飯を掻込むや否、其のまゝ忽然として我宿を飛出しぬ。

我れより他を見れど他より我れを見られぬ日關笠、こればかり今の身に殘れる角鍔朱鞘の大小を腰に横へ、茶色木綿の單衣に葛布の夏袴を高く穿ち古風に五本骨の幅廣扇子、たゞ新しきは打藁の重ね草履のみ、當時元祿の華奢風流に猶更の不似合、歩の運びまで田舍めいたり。

前夜の兩國橋といふ一言に、何とやら我れしらず心を引寄せられて、今日また其の橋に佇む筈なけれど、いづれ橋に遠からぬ住居ぞと、まづ橋の此方より淺草川の河岸傳ひ、やう〳〵去年の秋こゝに架けし新大橋の袂まで來かゝりし頃は、いつしか夏の日も傾いて、町の片蔭に笠越の涼風。

折しも新大橋を彼方へ渡り行く男、みれば例の若衆に召使はるゝ番町の下郎。

「や、そこへ行く奴、待て」

呼止められし藤助、面深の編笠に顏は見えねど、はや其人と風俗に知りて南無三寶の迷惑顏。

「呼ばれまするは、いづれ樣で」

「はゝゝいづれ樣もあらうか此奴、過日不意に我が住居へ踏込んだ上、あれほどの弱い音まで吐かせながら、その後そのまゝの無挨拶とは、あまり身勝手な奴濟まぬぞ」

「は、すぐにも御挨拶のため、まかり出まする筈のところ」

「筈のところが、その筈よりも例の事でがな、はゝゝ兩國橋、あの犬は」

「兩國橋で、お犬とは」

「まだか、今あの兩國橋で此のごろには珍らしい犬の嚙合が、あるとやらで人が走るぞ、はゝそれは措置て今日、どの邊を搜し歩いた」

「いや、今日は別段の主用で」

「その別段の大切な主用で、どこを目的に彷徨た、せめて吹送る花の匂ひ、でも嗅付けたか」

藤助、わざと心に會得しかねし體、たゞ慇懃に頭を下げて其のまゝ遁行かんとするをまたも引止めて笠越の笑ひ聲。

「僥倖のことぢや、思ふ的を見付出した曉は、一の矢も二の矢もない其の場の圖取として、ま

づれまでの間は互ひに同じ方角の共稼ぎ、交際よう力を併しての共[illegible]、こりや後日の面倒なうて面白いぞ、はゝゝゝ」

＊　＊　＊　＊　＊

生きた人間を簀巻にして海へ投込みし詮議は寛くとも、犬の死骸を川中へ蹴落せし罪科の重き當時ながら、もはや流れて證據なきを僥倖、兩國橋を夾みし町内は互に目と目を見合すのみ、まして往來の關係に引止められし奴等は、後日の難に蜘蛛の子を散すが如く遁伸びし後の事、猶更ら誰一人の訴へ出るものなし。

されど其のお犬樣を蹴落せしは二十歳に足らぬ女も女、もの凄いほど人目に立ちし美女との風聞、いつしか耳より耳へ口より口に洩れて、内々の話柄となりぬ。

その内々の風聞を種に第一の手がかりとして探し歩く村田三平、かの藤助に出逢ひし新大橋より河流に沿うて歩み行きしが、はや夕暮の海面近き河下に僅かの人立人群、何事ぞと立寄りて見れば、荷船の船頭らしき男が町廻りの小役人に召捕られし體、加之も最初より見物せしものゝ言葉を聞けばあの波際の亂杭に引懸りし犬の死骸を棹もて突流せし罪人との事に、三平、思はず[illegible]の目を射出しぬ。

偖は其の面倒なりと人助けに突流せしを、生憎く見付けられし不運の奴でがな、されど其の不運を[illegible]れば此の犬の死骸、いづこより流れ來りしとの嬉しき詮議あるべき筈、あれは正しく前夜の兩國橋、同じ流れの川上と川下の事、や、いづれ探し出さるゝは嬉しけれど、ソッと人しれぬ情の我が手に探し出してこそ、珠玉を打碎く獄卒の手に探し出されては、あたら待兼ねし春に逢ひながら何の色も香もあるべき。

まして現在その戀人のために今この男の災難、いよ／＼餘所ならぬ哀れの奴、もし救ふ道あらば救うて得させんと、なほも人混に立交りつゝ、引かるゝまゝの影を逐行けば、その濱邊の町内に入りて五人組の家に一夜の宿預けとなりぬ。

やれ金ぢや、殺した本人でなし投込んだ證據はなし只その死骸を棹先に突流したのみの事、金で助かるぞ、明朝あらためて引出しに來る時が地獄極樂、ソッと袖の下へ物が通へば助かるぞ、もし助からぬ罪ならば町内の宿預けにせられぬ筈、其のまゝ牢屋へ引摺行かるゝ筈ぢやと、見物の私語き合ふ聲に耳を欹てし村田三平、むむ金で濟むかと首肯きしが、偖その金いづこにある、此ごろの方便いよ／＼輕く、木葉と共に吹けば飛びさうなり。

金、金、金と幾度か思案の首を捻りしが、俄に立ちながらの小膝を打て、つか／＼と五人組の家に入りぬ。

「いや笠越ながら今そこへ預けられた男、いかにも哀憫ぢや、みれば荷主に雇はれて其の日の舟人らしい體、さのみの用意もあるまい、身が助け遣はすぞ、なれど途中の事今夜か夜明か、いづれにせい、金で濟まば濟むだけの金子を整へてくれるぞ」

本人は困り呆れて只うち守れど、預りの宿主が何をか言はんとするを見向もせず、ふいと其のまゝ飛出しぬ。

其六

土手三番町の本田内記が屋敷の玄關へ、まだ更けねど其の日の夜に入りし後、無提燈のまま大聲の案内を乞ひしは村田三平。

「こりや本所の果の葭簀茶屋に假寓いたす浪々村田三平といふもの、御當家には始めての推參ながら、ちと御依頼の義で罷り出まして、主從いづれの方なりとも是非に御意を得たい」

かくと聞きし主人の内記、子息の小一郎わけて、藤助は顔色を變ての驚愕、偖こそ來たぞ、いよ／＼押寄せて來をッたぞ、まして昨日あの

新大橋にて何とやら薄氣味の悪い事を吐した折柄、また小川外記と偽り置たを違へもせず門違ひもせず、わざ〳〵夜に入りて玄關の眞正面より襲ひ來るほどの奴、いづれ心に一物なうて叶はぬ筈と、俄の反身に狼狽出しぬ。

されど本田内記は兼てより聞及ぶ相手、我が子のため囮り覺悟の相手、隨分と麁末なきやう通せとの一言に、みづから客室へ立出でて見ればなるほど虎髯を喰反して大目玉の輝く骨太の面魂、いかにも一癖あり氣なり。

「當家の主人、本田内記、始めて逢ひまする」

村田三平、案外の慇懃に禮を正しながら、言葉を改めての挨拶振。

「こりや主人の殿、我等こと只今お取次に申入れしもの、御覽ぜらるゝ浪々の見苦しき體、ひらに御免なりませ」

「いやそれには及ばぬ事、但し何の、いかな御用で來せられた」

「主人の殿へは聊か、憚りの義あるかは存ぜねど、先月九日、淺草の山門にて御迷惑を蒙られし、あの美はしい、お若衆は御子息でがな、實は内々その御子息へ御依頼の仔細で、はゝゝ、宵から只今まで小川外記樣と尋ね廻りて、はゝゝ自己が御主人の名を忘れた、あの下郎どのいづれに居りまする、はゝゝなれど、かやうの美たる御若衆あらるゝ邸宅と聞て、さやうの事。

わざと言葉を丸めて角を立てねど、そろりと舌端の鋒を出せし體に、主人の内記、また空とぼけての高笑。

「はゝゝをり〳〵得て入らざる滑稽をいふ奴、川と田と内と外とを綟りをツたな、はゝゝそれは偖置て、手輕ながら子息は近來ちと病體に引籠る折柄、何事に致せ、父子の間、この身が承はらう、隔意なく申されたい」

「萬事、かやうな武骨もの、猶更お言葉に從うて」

「御念に及ばぬ事、萬事うちあけての懇談されたい」

「實は御當家へ、賣拂ひたき一品、持參のもの」

「むゝ其の品は」

「身に不似合の品ながら、うら若き女着の生絹單衣一枚」

「はて、異な賣物を持たれたぞ」

「いや、外々へは何の艶も曲もない品なれど、當家の御子息へは必ず御意に入る筈の品、是非に欲しいと仰せらるゝ筈の品、只今お言葉に御病中とやら、されば猶更の事、名醫の藥石よりも却て效驗のあらうと存ずる一品、はゝゝ御家橋に來ては至極の廉いもの」

＊　＊　＊　＊

その生絹單衣は此奴が戀の夜な〳〵、せめての心やりに染出して夢うつゝに抱寢の品とは、兼て藤助より聞及びし本田内記、偖はと思へど顏色にも出さず打笑ひぬ。

「何の御用かと存じたに、いかな事、うら若き女の單衣を賣物に來られたとは、はゝゝゝ」

「や、その生絹單衣、今も申す通り外々へは狂氣じみた笑ひ草ながら、當家の御子息には、是非とも入用の品」

「もし是非に入用とあらば、單衣は偖置て、小身ながら隨分、綾に錦に厚重ねの幾枚も仕立て遣はす親心、それも女、いづれの女にせい、女その本人、その身よりの依頼とあらば、また格別、見受けたところ、今この太平に用なしとて甲冑の賣物が相應の御人體で、さる案外の賣物とは、あまりの不似合、はゝゝゝ」

「その不似合の賣物なればこそ、わざと御當家へ推參いたしたもの、まづ御子息へ聞合して戴きたい」

「いや〳〵、子息に聞かずともの事、但し折角、それほどまでに言はるゝ品、不用ながら御便利

とあらば買受けも致さうが、じたい誰が品で、いかなる女の身に着けた品やら、着ぬしの本人、また不似合に所持せらるゝ仔細、具さに打明けて承はりたい」

「はゝゝもはや打割たぞ、恥かしながら實は我等、この年輩まで無妻獨身の折柄、ふと思ひ込んだ戀女が、いや、その戀女、當家の御子息も御存じあらう筈、なうて叶はぬ筈、はゝゝこゝまで申さば主人の殿、よもや御會得のないでは御座るまい父子の間、なれど我等は常祿のある身とは違ひ、かゝ尾羽うち枯らした、浪々の空、神以て放し難い品なれど持續けられぬ浮世の苦しさに、第一が今夜に差迫る金子入用の義で、幸ひ外ならぬ御當家への賣物と心得て推參いたした、よし本人その女の身に着けた品でなくとも、同じ方角へ自然の絲を引合ふ縁の端と思召して、近ごろ御無心ながら小判三枚、高い廉いは取つて退けての事」

「そこまで推ての御依頼ぢや、子息に關はず、こ[illegible]け申さう、[illegible]、いや十[illegible]から、偖その[illegible]以上、[illegible]その戀まで添て渡さるゝか」

「戀まで[illegible]に渡せとは」

「目に見ぬ事、かうと言へば、さうかといふ外に、確とした證據なけれど、その單衣もろとも、貴方その戀女を、あきらめて、思ひ切つて渡さるゝか」

「むゝ戀を捨てゝ仕舞へと、仰せらるゝ義でがな」

「いかにも、他の戀を妬んで妨害の關を構へるではないが、實は當家も其女に、ちと用のある折柄、なるべく辿る筋道に事の捗まぬやう致したいが希望ぢや」

流石に無遠慮の村田三平も、この一言に聊か押詰められし體、たゞ無言のまゝ目を見張つて唾を呑み込みぬ。

其七

川上と川下と同じ流れの嚴しき詮議沙汰より、おもふ戀女を罪人に引出さじとて、幸ひの生絹單衣を戀の片敵手と睨みし本田家に賣附けんとせしが、その戀衣へ我が心の戀まで添て買はんとの一言に、流石の村田三平、ぐッと押詰められし苦しさの果、實は金子入用の仔細かくと打明すや否、や、それならば折角の品を放されずとも當家の金と力で濟む事と其まゝ手柄を奪はれて酒を出されしが、あまりの腹立まぎれに盃も取らず飛出しぬ。

世の諺にいふ貧は諸道の妨害とやらさても浮世は金ぢやなれど金で買へぬは戀と情と人の生命、よし此の上は金の外にて出來るだけの事、天晴れ敵手に後れず仕て退けんとの一念、番町より丸の内を横ぎりて兩國橋まで來りし頃は、いつしか次第に夜も更けたり。

この橋の上こそ前夜あの戀女の通ひし跡、目にも見えず匂ひもせねど、何とやら懷かしく、ゆかしく嬉しく、さては勇ましく、また凛々しき風情、大の男も恐れて近寄らぬを斯く蹴込みしか、嚴しき天下の法度を花の露に彈いて斯く踏込みしか、その時いかに袖袂を夜の川風に吹かせけん、大束に結立てし銀箔の元結ゆらりと響いて闇にも雪を欺く眞白の脚首、いかに華奢なる裾模様を打開きしかと、あはれや其のまゝ俄に去りも得やらず、幾度か往きつ戻りつ星影に流るゝ川面を見渡せし後、淺草寺の夜半の鐘の音に驚かされて、やう〳〵自己が家路の方へ歩み出しぬ。

本所の町外れ、さらぬも淋しき柳島の村里に夜は更渡りて、一本松の片蔭に漏るゝ燈火の影もなし。

さては實々め、もはや寢込みしかと、門口の戸も叩かず、背門の方より低き竹籬を大跨に乘越て、我が一室へ這込みつゝ、其のまゝの闇まぎれ

に蚊屋のみ引摺出して手探りに吊りし中へ、ごろりと丸寝の氣樂さ、たれ笑ふものもなし。
　あたら折角の手柄は、おめ〳〵他に奪られしが、偖それがため思ふ女の不義に狩出されずば重疊、また賣飛さんとせし戀衣の自然に我手へ殘りしも、今更ら思へば却て幸ひの吉兆、よくよくの緣あればこそと、我みづから我を慰めながら、うと〳〵と睡りし夢うつゝの枕頭に、すッと音もなく立ちし朧ろげの姿を見れば、や、正しく其女なり、戀の面影。
　はッと思はず跳起きて、眼を据ゑつゝ見直せば、固より何の影も形もあるべき筈なし我れただ一人、壁と障子の隔てさへ見えざる黑闇に、三平そのまゝ兩腕を組で總身の大息を漏しぬ。
「弓矢八幡、戀は仕かけても、戀には仕てやられぬ男と思ひの外、南無三寶、いつしか魂魄を喰取られたぞ、曲もの、曲もの、おのれやれ」

＊　＊　＊　＊　＊

　わづか小判二三枚に窮して身にも放さぬ戀衣を賣らんとまで、尾羽うち枯らせし浪人の加之も一癖あるべき奴が、腹立まぎれに盃も取らで其のまゝ飛出せし前夜の面魂、わけて他の事とは違ひ世間を憚る子息に就ての事、この上の面倒なきうちと、子を思ふ心弱さに本田內記、目錄の一封そッと藤助に贈らしめぬ。
　自己の主人が名を取違へた下郎どこに居ると吐した奴、猶更ら事の叶はぬ不平面に歸りし今日、重ね〳〵薄氣味惡けれど、主命こゝに是方なく、その目錄を携へて柳島の一本松、葭簀茶屋の店前より奥の方を差覗きながら、幸ひの婆々に手渡すや否、一散に遁出しぬ、貧乏浪人の僻み根性、や、人を見透す無禮もの奴と、あとより追驅け來ようも知れぬ奴と思へば、わざと道を外れて本所の割下水へ出でぬ。
　本所の割下水は御家人の軒並び、屋敷町ながら手薄き小身の門構へ、櫛の齒の如く打續いて、白晝さへ淋しき片影を歩み行く折しも、背後の辻より俄に高き蹄の音、おもはず振返れば鞭をあげたる馬上の武士、はや間近く躍り出しぬ。
　藤助、はッと驚いて右に飛退けば、飛退く方へ驅寄る勢ひ、またもや驚いて左へ飛退くや否、つるりと踏辷つて割下水の大溝へ眞逆倒、馬は其のまゝ見向きもやらず砂煙を立てゝ驅行きぬ。
　おのれと叫べど雲霞、藻搔けば藻搔くほど底深き大溝に落込で、身動きも取れぬ泥に埋もれつゝ、墨壺より引摺出せし蛸の如くやう〳〵這上りし眞黑の目ばかり白き體をその門前に立出でし五十あまりの半白の主人顏。
「どこの者ぢや、何とした、はゝゝゝ今の馬に驅落されたか、やれ笑止、まづ手前の門內へ、白晝その體では、井水があるぞ」
「番町の、さる屋敷奉公いたしまするもの、あの馬上奴が」
「はゝゝ今更ら、致方はないぞ、早く這入れ、兎も角も水を浴びい」
　せめての幸ひ夏の單衣、ぐる〳〵と脱で片手に抓みあげながら、丸裸の小腰を打屈めつゝ門內に引入られ、臺所口より裏口の井戸端に立出でて、瀧の如く頭上に水を浴びし後、ふと何心なく竹垣の彼方を見れば、奥座敷の軒端に吊れる小鳥の籠へ今しも餌を差入れんとする若き女、例の太き銀箔元結に大束ねの黑髮、夏の繁茂の青葉に冴返りて一入の色艶、すッと畫ける如くに際立ちし風情は、や、や、や。
　藤助、思はず丸裸の身を屈めて、そッと垣根に這寄りつゝ、差覗けば、馴れし小鳥に微笑を浮べながら首肯く體、畫でなし、幻でなし、まぎれもない其の女。
　自己の戀ならねど、あまりの不意に胸は轟いて五體の居縮む心地、たゞ何となく兩手を合して伏拜みぬ。

折しも下女に洗ひ直しの單衣一枚を持たせて、またもや主人の笑ひ顏。

「はゝゝゝ泥を取れば俗、よい下郎ぶりの男ぢや、差當つての事、着古しながら、これを纏うて歸れ」

「いづれ、あらためて御禮に罷り出まする、下郎奴、土手三番町、本田内記に召使はれまするもの」

「や、お目にかゝらぬが、本田殿か、御大身ぢや」

「恐れながら、御當家樣は」

「いや〳〵、我等は見る通りの小身ものぢや、わざ〳〵來るに及ばぬぞ」

「されど、身勝手の用事とは違ひ、主人の使者にまゐりました途中の出來ごと、わけて御衣類まで借用の折柄、委細、申さいでは」

「はゝゝ手堅い男ぢや、木原庄左衛門といふもので」

「木原樣、は、木原樣で、は、は」

借着の腰を屈めて臺所の猫にまで會釋しながら、門を立出るや否、飛ぶが如き勢ひ、またもや辻の角石を踏辷つて下水に落込みしが、藤助、もはや夢中の一生懸命、そのまゝ躍り上つて宙を驅出しぬ。

其八

本所の割下水に軒を竝べし御家人町、わけて中にも古びたる塀越より往來へ椎の大木の差出たる小家、板屋根の門さへ幾歳の雨風に力なく傾いて、見れば名ばかりの玄關口、白壁さへ何とやら薄闇き木原庄左衛門が方へ、目立たぬ體ながら兩若黨に草履取を從へし本田内記、例の藤助を案内に立てゝ訪來りぬ。

高が下郎一人の事、溝中へ落込みし泥を井戶水に洗はせばとて、わざ〳〵四千石の主人この早朝に一禮のため來べき筈なしと、庄左衛門、おもはず眉を顰めながら、一室に迎へて手厚く待遇せば、本田内記また直參と御家人との格式を打破りての慇懃さ、互ひに初對面の挨拶も濟みし後、靜かに語り出しぬ。

「もし御用とあらば、お召に依て罷り出まする筈の身分へ、わざ〳〵」

「いや、さやうの義は萬事うち捨て、きのふ下郎に御介抱の一禮まづ演べた上の事、こりや我等一存の內々にて、申さば多年お馴染めいた御懇談に承る事ながら、さて貴方、傳來これに住はれまするかな」

「は、公邊に近う在らせらるゝ歷々衆へは、ちと憚りの次第ながら、實は、八年ばかり以前、當家先代の木原庄左衛門が株を求めまして」

「さも御座らう、此の邊の親讓りに住はるゝ御人體でないと見受けた、元は、いづれの御生國で、何と仰せられた」

「うちあけましたる段が、越後もの、あのころ世上に取噂されし越後騷動の御爲方、荻田主馬の家老を勤めましたる身で本名は高橋庄左衛門、姓こそ違へ、ふしぎに當家と同名」

「やれ越後家の、わけて荻田殿は北國に聞えた名門であられたが、さて是非もない御家の不運で、お察し申す、當時まだ八丈島に存命との事、をり〳〵內分の御音信せらるゝかな」

「は、越後家お取潰しの節、多年苦忠の甲斐もなう主人は遠島流罪、その家來の身として、おのれが本名そのまゝの浪々にも世を得送らず、かく緣なき他人の名跡を金錢に買求めて、わづかの手薄き知行取に浮世を過しまするには、さて聊か仔細ある義で」

「いづれ、さる事でがな、但し當時の御家族には、幾人あらるゝ」

「妻は、本國退轉の砌、病死いたしまして、一子は、主人の兒小性に付け置きましたるがため、お上へ願ひ濟の上、島に居りまするが本年十九歲、せめて此奴が父の名代として、主の先

途を見屆け居りまする義で」

「それは偖、天晴れ、お手柄な事、出來された御子息ぢや、我等また今年十八の一子を持ち申すが、いやはや、頓と埒も無うて面目なき次第、はゝゝゝその他に御緣類の衆でも」

「たゞ下女下男、二人を召使ひまして、一家こゝに主從三人の外」

「はて、貴方お一人か」

じろりと思はず四邊を見廻せば、主人の庄左衞門、また思はず其の顏を打守りぬ。

* * *

さては音に聞えし越後騷動の餘波、加之も君家を奪はんとせし小栗美作の奸黨に對して其の頃御爲方といはれたる忠臣の頭領荻田主馬が家老を勤めし身の果かと、本田内記、おもはず小膝を打ちながら、きけば猶更ら當年十九歲の一子を十一歲の曉より八丈島へ流罪の主に付け置きつゝ、自己は別に仔細ありて御家人の株を求めしといふ、人品風體、いかにも一入の床しき思ひを增せど、これ專一に訪來りし的もなくて、一家獨身たゞ男女の召使ひ二人の外に何の緣類もなしとは。

されど確乎に藤助が垣根越より見屆けしといふ、その奥座敷は此の壁一重の隣室、あの小鳥の啼音は正しく其の時の本人が餌を差入れしとやら、はて不思議と耳を欹つれば、折しも座を起ちし疊へ摺觸りの氣配、靜かに緣端に步み行く女の足音。

「首尾もなう、不意に異な事を承るが島へ遣られし御子息の外に、もし娘御、お持ちなされぬか」

主人の木原庄左衞門おもはず眉うち顰めながら、何となく目色を据ゑぬ。

「娘、いや、島に居りまする子息の外、子として、娘は」

「一實、うちあけて申さば、今日これへ推參したも、それがため、若し娘御でないに致せ、十八九ばかりの、すぐれて目立つ美女、あるゝ筈—や、いづれにて御覽なされたやら、ある筈と仰せられては、偖、ないとも申されぬ身で」

「あらるゝ筈ぢや」

「さして世間へ憚るほどの事もない身ながら、なるべくは外出いたさぬやう、年來かく、淺間の住居なれど、奥の一室に居らせまする女が一人」

「それ、それ〳〵、その女の事、委細は偖置、まづ我等その女へ御禮かた〳〵參つたもの、こりや萬〻の御掛念ないやう前以て申し置くが、元來いづれの種、何人の娘御でがな」

「お言葉、あまり御簡略で、ちと前後の合點まゐり兼まする事ながら、御身分柄に對し、包むも却て、實は先刻も申上げましたる體、越後家沒落いたして主人流罪の後に、これぞ荻田家の記念と見るべきものは女子たゞ一人、やうやう其の時は十歲の曉を、十一歲の子息と取替こ我が手に申し受け、互ひに八重の汐路は隔つとも、つきぬ主從の緣に今日まで育てあげましたる女、子息のためには一人の父こゝに、また彼女のためには世の中に一人の父御あの島に、これが浮世とは申せ、をり〳〵語り出して袖を絞りまする境涯」

「やれ痛はしや、きけば涙の種ながら、さてこそ自然の名物、さもあらう筈、氏素性は爭はれぬものぞ、越後家にても別に一城の主となられた荻田殿の娘女ぢや、偖、さう承る上は猶更の事、本田内記あらためて是非お逢ひ申したい、これへお連れ下さるまいか、但し、お座敷へ參らうか」

其九

門内も玄關も名ばかりの御家人住居、供待の設備なければ、加之も夏とはいへ朝まだ早き涼風の折柄、二人の若黨もろとも草履取も藤助も

往來の塀際に立出でて、幸ひの駒寄石に腰うちかけながらの物語、

「戀の絲道、やう〳〵こゝに手繰り當てた今日の結び目、偖どうなるやら。お話が案外、ながながしいぞ」

「どうも斯うも、あらうか、泥臭い割下水に尾を垂れて住む御家人と、槍を立てゝ歩く天下の直參衆、この椎の木の根元に生た玉蟲一疋が這出して、土手三番町の角を引廻した屋敷の奥様になるといふこれも戀なればこそぢや、はゝゝゝ戰國は男、太平には女の事、百人を相手に其の場を退かぬ武藝者の太刀先よりも、花の色香の娘一人を持てば千人力、ぐいと手許へ引寄せて出世の的の射ぬき次第ぢや」

「それに就て芽の吹き出したは藤助、どれほど忠義に働いても大地に緣の切れぬ奴が、いよいよ疊の上で踵を擂り始めるぞ、さしづめ奥向の用人格、若黨の口で呼捨にするも今日明日のうちぢや、こりや藤助、下に居れ藤助、藤助、何とした藤助」

藤助、おもはず苦笑しながら、ふと振返りし辻の角より、ぬッと立現れしは件の編笠村田三平。

「や、幸ひ此奴、出逢うたぞ、前夜、宿へ歸れば其の朝、店前の婆々に投込だとやら、ありや何者から誰への目錄ぢや、この男、浪々こそすれ自己一身の浮世を渡りかねて他の扶助は乞はぬぞ、合力は貰はぬぞ、其のまゝの一封これに持參した、確と抛返した上の一文句を吐きに行かう折柄ぢや、見れば若黨に草履取までさては此の、門内へ本田家の主人が客來の體、や、面白いぞ、此のよし申込め、但し門前で待たうか」

四千石の主人より贈られた目錄一封、みすみす知れし素浪人の分際として何の恥辱にかなるべき、さるを入らざる一文句が捻りたいとて、わざわざ懷中へ飛込だ福の神を押戻しに來るほどの奴、もし此家を戀女の宿と知らば南無三寶、主の身に取ての一大事、我が身に取ては猶更ら生涯の運を踏潰す奴と、遁場もない藤助俄に顏色を變て狼狽出しぬ。

「そりや貴方様の思召し違ひ、何事かは存ぜず屋敷へ御入來の節、一獻の間も無う其のまゝ出られました御挨拶までの事金子の高も誌さぬ上の目錄一封、いづれ様へも憚らぬが江戸の習慣、また今朝こゝへの主人は私用でなく、實は公邊の御用かた〳〵」

「や、だまれ、酒が飲みたいとて行きもせぬ身に、飲まぬがための挨拶、うける筈はないぞ、また公邊の祿を食む人、公邊の御用で來られるが當然、何の不思議ぢや、加之も今、かた〳〵とは私用のある證據、さらば公邊の御用相濟むまで差控へて、私用に取かゝらるゝ時、是非に御意を得よう、それも出來ずば私用の濟で後、お歸邸の途中に待受けて逢ひ申さう、もはや汝と問答は無用ぢや、當の相手は本田內記殿、まして幸ひの折柄、但し下郎、まだ例の宿は搜し當らぬか、はゝゝゝ」

折しも主人の木原庄左衛門、本田內記を玄關へ送り出して門外に向ひながら、お歸りとの一聲に、すはこそと待受けし村田三平かくと見るや否、藤助、あッと驚いて飛込みぬ。

＊　＊　＊　＊

あッと驚いて飛込みし藤助より、かくと聞きし本田內記、おもはず舌鼓を打て眉を顰めしが、この穴を知られては猶更の面倒と其のまゝ立出でし門外に村田三平、流石に編笠を脫で片手に提げながら、會釋の目禮もろとも、づいと歩み寄りぬ。

「こりや一昨夜、伺ひましたる柳島の村田三平と申すもの、あの事は、あの夜、あのまゝにて相濟だ筈のところ、翌朝、我等への下され物、じ

たい如何な思召でがな、見る影も無う尾羽うち枯した素浪人、もし哀れとの御芳志ならば、生涯お救助に預かりたい、さもなくて只これ一時の御合力は、神社佛閣へ參詣の路傍で投錢せらるゝも同じ事、まだ路頭に立たぬ身の面目、ちと男が潰れ申した」

「やれ他の門外に待受けての事、何かと存じたに、はゝゝゝ不承とあらば返さるゝまでの事、返せば此方、うけとるまでの事ぢや」

「いはれずとも、返さうために罷り向うた男、但し確に請取たといふ御自筆の一札、賜はりたい」

「や、難題を持掛けらるゝか、元は何人か知らず今、浪々の身として直參の我が面前へ、加之迄中の難題、持掛けるか」

「難題、難題とは出來ぬ事と存ずる、直參衆にせい、我等また浪人にもせい、出さるべき筈の請取一札、物の返しに出されぬとか」

「くどいッ」

「何、何といはるゝ」

玄關へ送り出して、まだ内にも入らざりし木原庄左衛門、かくと見るや否、其のまゝ門外へ走出でて相方の中間に身を隔てぬ。

「我が方へ客來の御人に對うて門前の大聲、主人の身として聞捨にはなり申さぬお屋敷も御姓名も歷々それと知れたる方ぢや、聲高に喚かずとも濟む筈ぢや、や御家來衆、其のまゝお供せられい、あとは引受けましたぞ」

「いや〳〵、その男これへ殘しては猶更の御迷惑」

「はゝゝ殘るとは言はぬぞ、殘してくれとも賴まぬぞ、時の挨拶人は扨て置いて、當の相手は貴方ぢや、本田内記殿ぢや」

「其方づれに當の相手と呼ばるゝ身でない、もし達ての用とあらば屋敷へ來い」

「固り此の門前で逢はうとは思はぬ、その屋敷へこそと、出かけた男」

「いざ來よ」

「行かうぞ」

おのれ來れば其の分に差置かぬ奴、たゞ一時も早く此の門邊を追拂はんとの心體、おのれ行かば其のまゝの權威に恐れて歸らぬぞ、幸ひ目錄の一封に事よせて近來の腹癒を仕てくれんとの心體、互ひに睨み合ふ中間に主人の庄左衛門、猶更ら言葉を盡して我が門前に廻りし相方の角を採潰さんとする折しも、あまりの騷がしさに間近き玄關の障子、そつと細目に開けながら花一輪の漏るゝ匂ひか雲間に現れし名月の片影か、それとも知らで何心なく見返りし村田三平はッと思はず踵を大地に踏込みしが如く立停りぬ。

立停りて見られし障子はたと閉づれば、ぼッと夢うつゝの幻影に抛出されし心地、もはや相手を追うて屋敷へ押掛け行く勢ひもなく、たゞ門前に立てる木原庄左衛門へ今更ら慇懃の會釋を殘しながら、無言のまゝ差俯いて自己が來し方へ歩み去りぬ。

其十

家の目標になるべき椎の大木、半は塀を打越して往來へ差出でつゝ、半は庭を蔽うて白晝さへ薄闇き樹蔭に、まして本所の夕暮は名物の蚊やり火、餘煙は軒を傳うて白く空に立昇りぬ。

はや黄昏の夕餐も濟みて、さらぬも天生の珠玉を磨きし浴後のまゝ庭に對ひし縁の端近く、わざと燈火を遠退けし柱の此方、解かば身の丈にも餘る黑髮を、小枕の固き籠島田に似たる大束ねの五味藤に梳立てゝ、今日ばかりは例の銀箔よりも浮世に祕し元結の匂ひ一入の床しさ、風に吹込まれつゝ身に這寄る蚊やりの餘煙を、そつと音なき梶の葉の團扇に煽ぎ返しながら、紫絲の組帶さへ何氣なき風情の背後より主人の庄左衛門が聲。

―露さま、露さま―
呼ばるゝ聲に振返りし風情、今更ながら倚いかなる名筆の畫ぞ及ぶべき、萬人の男殺しに生れたる自然の美はしさ、加之も凜々しく凄く、いき〳〵と張切る目元に鬼も蛇も消入るかと思はれぬ。

庄左衞門、靜かに坐しながら、わざと微笑を浮べし小聲のまゝ。

―あの淺草觀世音へ、參詣せられましたは、たしか先月の九日、その節、山門の邊で、不意の喧嘩沙汰ありしとやら、御見物ばしなされぬか―

はッと思はず顏を反けし體に、庄左衞門、なほも膝を進めて摺寄りぬ。

―また今月十一日の夜、つい其處まで人目にかからぬ涼風とて、出られました時の事、もしや兩國橋の上まで、加之も其の橋の上にて何事も御覽なされぬか」

遠退けし燈火の餘光、猶更ら柱の小盾に闇けれど、眞白に際立ちて冴渡る横顏、ぽッと薄赤う染出せし風情を見るや否、庄左衞門、いよいよ小膝を詰寄せぬ。

―確とした應答、お返事のないは、お身に覺あればこそ、わけて年齡も行きぬに猶更ら女儀のあられもない事、また平生の御氣性を出されましたた、常々あれほど申入れた甲斐もなう、さる不似合の荒々しい御身持は、この庄左衞門に此の上の、この上の苦勞を重ねよとの思召でがな、さもなくば、島に御座らう父上に對しても、さやうの蓮葉なる義はあるまじき筈」

名花一輪、風なきに其のまゝ花瓣を垂れて何とやら差俯きぬ。

「露さま、この庄左衞門は元來お家に養はれし身、夢さら〳〵お叱り申さうではない、たゞ父上、あの八重の汐路を隔てゝ水や空なる諺、鳥も通はぬ島蔭に在す事、何と思召すぞ、さるを女性の身として時世の謹愼も無う、わけて人目に立つべき天生その御容色で、いかに自然の御氣風とは申せ、繁華雜沓の巷に他の喧嘩を割て出るとは、また大の男さへ身の程を思へば厄病神の祟とも見るべきものを、何事ぞ足にかけて川中へ蹴落さるゝとは、さて〳〵無益の頂上ぢや、沙汰のかぎり、あまり不用意、もし萬一それがため、お身に珍事出來の節は庄左衞門どこの淵瀨に立ちまするぞ」

柳髮、はね元結か三日の月、それにはあらねど自然の氣風、ぴんと強ねたる身にも心にも、おのが名の露おもげに壓されては返す力もなく、たゞ無言のまゝ差俯きしを、やう〳〵面恥氣に振上げて、そつと今更ら忍び音の小聲。

「いづこの誰が耳へ入れたやら、ゆるしてたもや、この後は、この後は」

* * * *

氏を忘れて身の程も思はれぬ蓮葉の振舞、わけて女性にあられもない事、うまれし容色にも芳紀にも似ざる荒々しき御氣風ぞ、さて〳〵無益の頂上、沙汰のかぎり、あまりの不用意と、たゝみかけて庄左衞門に老の膝を進められし露女の風情、今更の辛さ恥かしさに消えも入りたき心地やする、雪の襟首に辷りし鬢影を打震はしながら、首垂れし伽羅どめの大前髮に火塔口の額際まで、さッと薄赤う染出せし無言のまゝを見れば、流石に今年やう〳〵十八まだ浮世の山も知らで、そよとの風にも堪へぬ優しさ、ふしぎや白晝の雜沓に三人の毛臑男を驚かして夜陰の橋の上より天下の禁物を川中へ蹴落せし猛勢、どこにあるやら。

「この庄左衞門、せめて身も心も思ふがまゝの世に驅出さるゝ四十前後か、其のお身また行末の武運に迪らるゝ男子ならば、さらぬも北國の名物に唄はれし家の一炷俺、天晴、それほどの御氣風なら一何とする、あれば備あるが上にも、猶更の獎勵、至極の滿足ながら、露さま、女

性は女性の守らで叶はぬ常慎事、ましで父上あの島への御、この庄左衞門も内々そッと申し置かれた義もある事、たとひ今後いかやうの選かれぬ場合に出逢はるゝとも、さる荒々しい、世間の耳目に際立つべき擧動は—

—仕ませぬぞや、誓文、神かけて—

—お心に沁みた今後、せぬとの御言葉ならば、偖、はゝゝゝ餘所々々しい、誓文にも及ばぬ事、なれど實は今朝、それがため、思ひもよらぬ人より、わざ〳〵不意に來られての内談、勿論、お身に取つては幸ひの吉事ながら、もし其の人に何の希望も無うて、たゞ曲けたる目角の奴ならば、取返しもならざる不吉の基と思へばこそ、如斯、くどう今後の事を—

「あれ、今朝あの門前で、何とやら、騒がしい聲高に、あの人が—

「否、ありや別段、あの時また門前での出來事、その一方の客來に來られたが、番町で四千石取の直參衆、本田内記と申さるゝ人、内談の結局は、是非に一子のため、お身を、迎へたいとの義、あれが淺草の山門にて無體の喧嘩を仕かけられた、その若衆の父御で—

きくや否、ゆかた帷子の裾に青海波の大模樣、さらりと動いて座を摺りし音のみ、返答もせぬ其のまゝの身を捻りて、はや暮果てし庭の方に對ひながら、何氣なき風情の軒端越に空を見上げし折しも、椎の木の繁茂の中より大石を抛出すが如く、どッと庭の中央に落込んでうンと叫びし眞黒の動きもやらぬ人聲。

流石の露女、はッと驚いて起ちし此方に主人の庄左衛門、や、おのれ曲者と勝差もろとも飛下りて見れば、その眞黒なる奴、苦しげの聲を絞り出しぬ。

—くせもの、曲者は其處、そこに居らるゝぞ、こりや其の曲者に仕てやられた戀の奴ぢや—

* * * * *

人しれぬ浮世の内證に火の雨の降る諺はあれど、夏の夜露より宿らぬ筈の椎の木の繁茂より、どつと地響うつて正しく人間の落來りし奴、さては曲者そこにありと叫びしは村田三平。

さらぬも人並に勝れし膽量の大男、庭石に腰骨を打付けて、動きも得ざる苦痛の中より猶更ら首を差伸しつゝ、はつと驚きながら遁げも入らざる露女の美はしさと健氣さに、いよ〳〵眼光を放たぬ戀の一念、おのれと走寄りし主人の庄左衛門に對うて、もはや絶體絶命の胴膽を据ゑたる小聲。

—この面は今朝この御門前にて見られた筈、元は西國に相應の氏素性を備へし武士の成果、今は御島の一本松に尾打ち枯せし素浪人、村田三平といふものなれど現在かく他の杜に身を忍んで庭中へ落込みし奴、もし夜盗の曲者と思召さば、夜盗にもなり申す、曲者の成敗も受け申さうが、たゞ一言、恥辱も面目も身も世も丸潰しに拋出しての上、只こゝに一言、あれ、あれに居らるゝ女に、たとひ手は取らずとも、せめて袖袂の端近う、とめ木の匂ひ身にうけて、申し入れたい一言あるまでの事、この虎髯を噴反した三十男奴、無念、心外ながら戀に仕てやられた」

主人の庄左衛門、あまりの案外に呆れて其のまゝ其處に立ちつゝ打守れば、かくと聞くも幸し恥かし罪深し、わけて目に見るは猶更の露女、さりとて凛々しく張切りし天生の氣性、顏色を失うて遁け隠れもせず、たゞ縁端の柱を身の小盾に取りながら、そつと差覗きし風情、面影に、村田三平またもや眼前に惱殺せらるゝ苦しげの聲を潛めぬ。

—今朝、この御門前で出逢うた本田内記の一子が、淺草の山門にて喧嘩を仕かけられし時、その場へ割つて出られた花の風姿に、たゞ夢うつ

つ、わけも無う本性を奪られて以來、せめての思ひ出と、目に殘る生絹單衣の大模樣を染出して、夜な／＼人しれぬ枕頭に添寢するほどの大白癡、まして本田父子も同じ怨恨に堪へ兼ねて、江戸市中を捜し歩くとは知っての上の我等、加之も不思議に兩國橋の事を聞ての後は猶更の魂魄脱殼、緣なくば偖それまで、いづれ嫌はるゝとは知れど、さて嫌はるゝまでは、村田三平でない戀の奴、ちらと障子の細目に見たばかりの今朝それで濟まうか、さりとて歴々の本田家が玄關の眞正面より全盛振に言込だ筈の其の、その後へ、この見苦しき體の素浪人この髯面を出して何となる、浮世は運命の秤量目、自然の輕重、もはや嫉むでもない恨むでもないか、薄命の崩れ捨草履、あるにもあられぬ前後忘却いたして、幸ひの椎の木を心ゆくまで見るだけの見終まで詰められた月下氷人と念じ、宵闇の墨堤に身を忍んで、誰の案内に、聞設した る夏の緣端、あり／＼と、あまりの風情に、足踏辷らした人間の捨たりもの一疋、戀路に落散る塵ぢや、芥ぢや、蕪や目觸り、いづれへなりとも掃除けられい、たゞ願くは其の、その戀女の手に掃除けられたいぞ」

あはれや殊更と身に兩刀も帶びず、措の夜露に猶更ら打濁れたる生平の帷子、せめて昔日の名殘に穿古したる高宮の袴もある事か、身動きもならぬ毛臑を庭石に抛出したるまゝの體、骨太の首を力なげに首垂れながら男泣の涙を流しぬ。

其十一

天下取の將軍家よりは陪臣といふ舌長の言葉あれど、越後家の内にても北國に名を得し三萬石の城持、その荻田主馬が一人娘、家の武運に盡きて苦忠の甲斐もなく、現在の父は八重の汐路を隔てし遠島流罪の身ながら、四千石の本田家に懇望せらるゝ事、さのみの榮とも出世とも、さては固り玉の輿とも思はぬのみか、いかに桂の匂ひ床しき全盛の美男とはいへ、武士の穢として仕かけられし白晝の喧嘩相手に戰き恐れて、見苦しや其の場に居縮むやうなる當世振の伽羅若衆、いやな事ぞ、變らぬ末の友白髮まで生涯を連添ふ良人に持ちて、越路の雪より清き先祖への申譯どこに立つ、誰に向うて何の女冥利かある。

もし同じ我が身への戀ならば、もしや其の戀に引寄せらるゝ我が身ならば、見ず知らずの女一人に生命の瀬戸を救ひ出さるゝ鶺鴒髷の華奢風流なる若衆よりも、尾羽うち枯せし紙子の末の浪々ながら、運にさへ叶はゞ自己の五體を衆中に抛て闘ひて其處を逃けとぞ言ひたけなる虎髯の大男こそ。

まして若黨草履取まで召連れたる父を戀路の使者に立つる人と、あはれや目に殘りし我が衣の模樣を染出して夜な／＼思ひの枕頭に添寢する夢うつゝの人と、この身への情いづれの心ぞ深き。

わけて朝まだきの玄關口より家屋敷を名乘かけて來る晴がましい戀路と、人知れぬ宵闇の木蔭に身を忍ばせて足踏外すまでの痛ましき戀路と、同じ戀せらるゝ身に取りての思惑、いかなるべき。

百年の苦樂を他人に依るといふ果敢なき女さへ、美目よりも心といふに、猶更ら世を我が物として立つべき男の身が、どれほど優に容儀を整へ鏡に風流を作ればとて、淺黄紐の玉緣笠に鬢髮の色深く、ぬき鞘の大小を粧飾ばかりに着添へたる若衆形、いたづらの歌舞伎に見る目はありとも、それを生涯の男として誰が擇返るべき。

たとひ見る影もなう落魄れても、いかに怖ろしげの虎髯を噴反せし身なりとも、あるべき事か三十男が我を忘れて、夜露に打たれ蚊に責め

られながら庭の梢に忍びし心の優しさ、ゆかしさ、嬉しさ、狂へば狂ふほど厚き情のしをらしや。

されど其人も穢忌、かくまで深き戀の情は身に沁みて忘れねど、荻田主馬が娘の露に朝夕たつと映る面影は、あの島の父が影身に附添ふ男こそ。

別れしは十歳と九歳の春、互ひに幼な顔を知り合ふのみながら、數ふれば今ぞ十九と十八、よしや其のまゝ島に朽果てなば朽果てよ、この身も此のまゝの生涯を浮世の塵に朽果てるまでの事、もしまた運を開いて立歸る曉もあらば、たとひ片目片輪の漁夫にならうとも、心に誓ひし良人ぞ妻ぞ、いづこの誰にか憚るべき友白髪、せめて寢覺の夢に通へかし、浪枕いかに磯邊の松風や傳ふらん、なつかしの人よ、逢ひたき君よ、さて何とせう水や空なる沖の果。

＊　＊　＊　＊

川端に衣を洗へる女の白き脛を雲間より差覗いて下界へ踏落ちしは久米の仙人、緣端に立出でし戀女の風情を椎の樹間より見恍れて庭前へ落込みしは村田三平、いづれも平生の通を失ひながら、さて仙人は尋常の人間となりて濟めど、そもそもたゞの人間その後に何となる、もはや浮世に魂魄脱殼の五體、いづこの隅にも果にも捨處なく拾ひ手なし。

わけて男一代、さても見苦しや、庭石に腰骨うち付けて動きもならぬ體を、面目なや主人の庄左衛門に抱起され恥かしや勿體なや、珠玉を展べたる戀女の手に手を引かれながら、息水を與へられ、駕に扶け乘せられ、やうやう柳島の浪宅へ送り込まれし後の村田三平。

もはや世にある甲斐なし、おめおめ生きて再び髯面を曝し歩かるゝ我れでなし、叶はねば叶はぬ戀の亡骸なりとも、八十氏川の流の末、せめて武士らしき身の終焉を取らんとて、こればかりは流石に失はざりし家傳の一刀、夏なほ寒き氷の如く拔放てど、惜からぬ生命に何とやら惜しきものありて無念、心外、死たくもなし。

されど死ずば生きて煩惱に苦しむ身、いかに苦しめばとて念願の叶ふ身か、迚も叶はぬ戀の淵瀬に惱まさるゝ身、やれ死たし、さりとて死るは辛し嫌なり、これぞ生死の境に心の底を弄ばれて、皮肉の間に惡魔の宿りし我が身ぞ、戀か、おのれ戀と思へど、かくあるべき筈の戀に狂ふ我が身こそ罪あり、かくとも知らで戀せらるゝ女に何の罪やある。

たゞ頼むは去るもの日々に疎しとの諺、この上は此の身この江戸を去るより外になし、いづこの宿とも知らざりし今までは偖朧月夜に散行く花の匂ひを慕ふばかりの我にて濟めど、もはや遠くもあらぬ本所の割下水、あの木原庄左衛門といふ御家人、あの塀越に差出たる椎の木蔭にありと思へば目鼻の間に手の屆くべき心地、いかでか餘所に過さるべき、まして番町に全盛の片相手あれば忘らるべき、何として身に猶更の凡夫煩惱、いづれ他の妻になるべき筈のものながら、これほどの戀を現在それと知る奴の手に迎へ取らるゝは生膽を絞り拔かるゝより苦しき業ぞ、あまりの苦しさに堪へ兼ねて我れもし此の上に狂はゞ、人斬庖丁を身に添へたる武者種の大狂亂、いかなる怖ろしき振舞に血迷ふやら。

人は心の器、やれ危ふし、やれ恐ろし、かくと思ふ今こそ我れまだ五體の端くれに本性の殘りし證據、せめて其の性根の失切らぬうち、この江戸を立退て海山を隔てし遠國の空へ遁出るより外なし。

あたら五體を寸隙なく戀の白刃に斬刻まれながら、流石に蟲の息を殘せし村田三平、終夜ら眠りも得せず明行く空を待兼ねて、鴉の聲もろとも旅の用意さりとて用意するほどの品もなく、

椎の木より轉げ落ちましたる戀の奴、江戸出立の暇乞と聞いて、木原庄左衛門、何とやら胸に涙のせぐり來る心地、そツと立寄るや否、手を取て引入れぬ。

「いや、情あるほど猶更身に取て辛い折柄、これにてこの御門內にて此のまゝ暇乞、それさへ來らるゝ筈の身でなけれど、たゞ一品、お渡し申したい一品を持參いたした」

「兎も角も、こゝでの立談は、せめて入口の一室まで」

「御芳志、なれど、もはや再び、わけて白晝に見られたくない面ぞ編笠は此のまゝ御免なりませ」

「はて、何の、それが、はゝゝ」

「幸ひ狼狽た目鼻も見えぬ笠越なればこそ、おめおめ此奴また今日、これへ斯く來られたものの、さて今更何と申さう言葉も面目もない次第、もし兩刀の手前を思はば、さらぬも世に在て用なき當世不向の男、まして尾羽うち枯した果に、何事ぞ、叶はぬ戀に木の空より辷り落ちて他人の庭石に腰骨を打拔かすほどの大白癡、せめて手の動く間に腐りし臟腑腹を搔切るべき筈ながら、惜からぬ生命を今暫時、入らぬ生命を今暫時、蓮の葉の絲目に繋ぎ止めて、これより他國へ出立いたす心體、ついては持參の生絹單衣、こりや自己の心で人しれず染出したのみの事、さら／＼此方の、あの女に何の、ゆかりも緣もなけれど、これあるがために首途の歩も進まず、やれ苦しみ申すぞ、さりとて此のまゝ捨てゝも得ゆかぬ男、また身に添ては猶更得ゆかぬ男、願はくば御手許へ返したい、否、そツと差置て旅立いたしたい」

霑垂れて肩口まで蔽へる編笠もろとも差俯きながら、幾重に疊み込で懷中へ入れたる戀衣を差出せば、主人の庄左衛門、まづ押止めて手にも受けず、其のまゝ家內に走入りしが、やがて出來りて身を摺寄せつゝ聲を潛めぬ。

「實は只今、貴方も門前にて後姿を見られた筈、あの番町の本田家より子息が、わざ／＼來られてさへ、影も見せず奧深う潛まれし女ながら、貴方へは、お逢ひ申したいとやら、編笠そのまゝとならば其のまゝにて、もしまた、座敷へ入らぬとの事ならば、庭口より緣端へ」

きくや否、村田三平、編笠を震はしながら身は立木の如く動きもやらず、兩手に持てる戀衣を確と胸邊に抱きぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

おもふ戀女の手に觸れし情の移り香もなくて、たゞ自己が心の迷ひを染出せし生絹單衣一枚さへ、今ぞ行方も知れぬ旅の首途に踏出しながら、さて勞きも得せず捨てゝも得ゆかぬ村田三平。

まして華奢風流の全盛を盡せし當世振・男の目にも見恍るゝばかりの若衆にさへ、奧深く花の姿を隱して匂ひも漏さざりし其の戀女が、現在の今この身に逢はんとの言葉を聞きし村田三平。

たゞ夢うつゝの體、主人の庄左衛門に導かれて、細谷川の丸木橋を盲目の身に辿る心地、庭の柴折戸より飛石傳ひの樹間を歩みつゝ、ここぞと思ふ緣端に腰うちかけしまゝの無言、ちらと編笠越に見れば流石の面恥氣に隔たりたがら、正しく戀女は同じ緣端の彼方、柱の際に畫ける如く坐して、あの椎の木より轉び落ちし大白癡とも思はぬか、この見苦しき魂魄の脫殼を今なほ引摺歩く愚鈍者とも思はぬか、さても何とやら我に自然の情らしき風情、しめやかに匂ひ滾るゝ慇懃の會釋振、三平、おもはず總身を打震はしぬ。

主人の庄左衛門、わざと一室へ入りて、障子越より釜の湯加減よろしきとの聲に、露女、すらりと座を起ちつゝ、心を込めし抹茶一服の

手前、やがて靜かに持出でて、袱紗のまゝ三平の前に差置きぬ。

「何處へやら、お旅立なさるゝとの事、せめて祝盃の代用に、無調法ながら」

三平、いよ〳〵面深に編笠を打被れるまゝ頭を垂れて、珠玉を捧ぐる如く手に取上げつゝ、おし戴きぬ。

「もはや、これへ來られぬ筈の此奴が、かくまでの優しい芳志に、あづからうとは、思ひもよらぬ事、この一服の御手前幾久しう、うけまするぞ、忘れませぬぞ―」

「あれ、その御言葉は聞かぬ事、たゞ前途の朝夕、山川の旅路、道中お支障のないやう、また目出たう、わけて勇ましういづこの里にても、晴々しう御出世なされまするやう、かげながら―」

「かゝる奴へ、ようこそ、目出たうは偖置て、晴々しう、勇ましう世に出よとは身に取て何よりの御餞別」

「ほゝゝゝ事々しい仰せ、それよりも只今、主人の言葉に、貴方樣こそ、この身へ、何やら一品」

「や、うけて下さるゝか」

「うけませいでか、數ならぬ身をさほどまで、悄うも思召さず、下されうとの品、うけませいでか、時めく全盛の人に贈られる綾、錦、摺箔、唐織、よりも厚う、嬉しう」

三平、もはや身にも心にも堪へざる體、ほろりと一雫、編笠の中より腰うちかけし膝に落して、懷中より疊みしまゝの戀衣、さても今更ら恥かし氣に差出せば、そツと兩の手にうけし露女、いき〳〵と張切りし目元を絲曳く如くに閉ぢて、その生絹單衣を雪の額に押當てぬ。

「行末、何とならう浮世の果まで、こればかりは、他人の手にも觸れさせず、身に添まして―」

「は、は、村田三平といふ男、この後の生涯に、女といふもの、あツて濟まうか、無い事、もはや無い事―」

其十三

「藤助、これへ來い藤助、ずつと出い」

「は、召しまする御用は」

「あの本所の割下水へ、わざ〳〵今朝、この身を何のため、連れに參つた―」

「こりや若樣、今更ら異な事を仰せられまする、何のためとは偖、御無體な事、はゝゝゝ」

「や、此奴、笑うて濟むか、行けば行くだけの事、あると申したでないか」

「ある筈、なうて叶ひませぬ筈、なれど藤助は室外に供待の身、若樣こそ、それだけの事、御自身に―」

「いや、さらに面白うないぞ、あの主人振の角張て艶もない事、第一その、花も月も見ずに歸つたぞ」

「それ生命、そこが浮世の眞只中、さうあるべきが人情の水上、で、はゝゝ花は日の清朗なるよりも、籬を隔てゝ何とやらの諺、また月の風情も冴て照るよりは、かすむ朦朧に如くものなしとか、聞及びまする事」

「えゝ籬でない、壁ぢや、朧ろの段か、影も漏さぬ眞黑闇ぢや」

「それこそ一入、それならば猶更ら以ての風情、あまり若樣の、まばゆう出來過されました容色と、華奢な風流振に思はず照返されて、花も月も奥深う、さりとては女性、あの淺草の山門で、あれほどの寛活な氣風にも似合ず、こりや若樣、お連れ申した藤助に、まづ御褒美を下されいでは―

「はゝゝ物いへば褒美々々と、聞苦しい奴、何それが、褒美にならうぞ」

「これ御褒美にならいでは、もはや藤助お暇を願ひまする、大の男さへ見物の山ばかりで、たれ一人の割て出るものもない其の中へ、ぬツと花の姿を惜氣もなう抛込むほどの女が、今更ら

主人の御耳まで、そつと御意に觸らぬやう、何卒この段を餘所ながら、それとなく入置て下されたい、さて／＼公の是も非も無う、たゞ石のやうな片意地に出來たは致方のないもの、轉ばしもならず、掘出しもならず、たゞ埋めたまゝに可惜ら見過すも身のため、あはれと思へど、偖また思ふやうにはならず、や、あの預かり女には懲果てた―

其十四

おもふ戀は身に叶はずとも、おもはぬ情は心に叶ひし村田三平、もはや男一代に浮世の月も花も見捨てゝ、迷ひの種に染出せし生絹單衣は本田家に賣損ねたれど、これぞ却て幸ひの手に渡して我が一念の屆くべきところへ屆いたり、あるにもあられぬ前後を忘れて椎の木より辷り落ちたれど、落ちて後の我が生命を拾うて執着の雲霧は胸に晴れたり、いざや此の上の懷中に殘るものは音物の一封、只これのみ。

行方も知れぬ旅の空の首途、いづこを的とも定めなき江戸出立の草鞋がけ、土手三番町の本田内記が玄關の眞正面へ、編笠も脱がず立ちながらの大聲、

「こりや一度これへ罷り出た事のある村田三平と申すもの、その砌、はて何の思召やら、受けやら覺もない我が浪宅へ抛込まれた金子一封、すぐにも返さう筈のところ、わざ／＼面倒と心得て今日只今歩ついでに禮と返戻いたす、一旦は主人殿御自筆の請取一札、是非に入用と存じた事もあれど、もはや其事に及ばぬ折柄ぢや、封じ目を改めて納められい」

取次に出でたる男の面前へ抛出せしまゝ、飄然として立去りぬ。

ふしぎや三平と藤助は走馬燈の如く、けふ一日のうちに三度の出入もろとも互ひの後姿を前後に追廻りぬ、そも／＼小一郎が全盛の若衆振を粧うて木原の門より立出でし時に、折しも來合せし三平、その塀際に倚添うて竊に見送りつゝ、三平また古編笠に旅草鞋のまゝ木原の門を立出でし時は、折しも取て返して來合せし藤助、また同じ塀際の物影より竊に見送りつゝ、加之も今こゝに走歸れば三平また今しも立去りし後と聞て、藤助おもはず腕を組みながら、いよいよ癇癪の眉を逆立てぬ。

さらぬも藤助、みす／＼自己が掌中に握りし出世の緒を、思へば思ふほど不思議の案外、あの虎髯に踏切られたる心地。

まして我等主從には奥深く閉籠りて花の匂ひの影さへ見せぬ本尊が、彼奴ばかりに何とやら情あり氣の風情、わざ／＼[illegible]門前まで送り出せしとは。

加之も化粧道具の一箇ぐらゐは今日の手柄に何の苦もなしと思ひの外、五味藤の貝殼一箇も手に入らぬ眞正面より、ずばりと主人の庄左衞門に根こぎの破談を申込まれし藤助、もはや絶體絶命、此のまゝ屋敷を叩き出される覺悟の泣面に這出でて、委細を主の父子に打明しぬ。

かくと聞きし本田内記、たゞさへ素浪人の村田三平に音物の一封を冷飯草履の如く抛返されたる折柄、わけて四千石の主人が御家人づれを訪うて慇懃を極めし甲斐もなく天下の直參が生涯一度の面上を逆撫にせられたる心地、猶更戀の一念に前後の差別もなくて浮世を我がまゝ生育の小一郎は、月も花も物かはと萬人に羨まるゝ自己が華奢風流を割下水の泥に塗汚されたる心地、父子もろとも目眦を釣上げて本所の方角を睨みぬ。

* * * * *

どれほど天下無類の美女にもせよ、さもあるべき女の美はしきは花の自然に艶なるが如く、そも／＼男として萬人に羨まるゝ我が一子の面前へ、どれほどの過ぎ[illegible]る色香やある、たと

ひ元は北國に一城の主たりとも江戶よりは陪臣の荻田主馬、まして今は家も亡び身も落果てゝ八重の汐路を隔てし島蔭へ流人の娘、やう〳〵其の日を御家人づれの手許に養はれながら、天下の直參として四千石の家門に迎へらるゝが何の不足ぞ、女に似氣なき蓮葉の振舞なれど我が子に取つて一時の恩と思へばこそ、一月あまりの日夜この四里四方を探しもすれ、もし娶らんとならば選取に娶るべき筈なれど、我が子のために餘所を得しらぬ戀と思へばこそ、わざ〳〵慇懃を極めて數々の心を運びもすれ、さるを今日まで唯一應の挨拶もなく、自己そのまゝ居坐りながら此方よりの下郎使者を幸ひ、下世話にいふ木で鼻を括りし無禮の破談とは。

まして片相手に人らしき奴のある事か、浮世の浪に纏れて心に結ぶ礒邊の小屋もない素浪人、いづこの馬の骨とも牛の皮とも知れぬ奴へ、きけば不思議に何とやら情あり氣の風情を寄せながら、かくまで家格を破りて取入る我等父子へ思ひの影さへ見せず、加之も振分髮の頃より定まる緣ありとか、今更ら脫れぬ義理の柵ありとか、せめて相應らしき言葉のあるべきに、たゞ生涯の獨身、世の中の男一切この身に持たぬとは、あまり見透て紙一枚の內外を欺くに等しい業、人にも依りけり本田內記の手前おのれ其事で濟まうか。

―藤助、もはや再び、いかな事ありとも八幡梵天、あの割下水へ脛腰を運ぶ事ならぬぞ、もし萬一、あらば汝まづ其分に差置かぬぞ、たとひ小一郎が何と言ふにせい、その小一郎を產だ父の內記が不承知ぢや、花は年々の春に咲出るもの、美女が欲しくば日本晴、あれよりも立勝る美女この廣い世の中に無うてか、當時いづこの誰に劣らぬ本田家の嫡子として生れた身が、わざわざ流人の殘し種を拾はずともの事、父が捨置かぬと申せ、夢にも藤助、なまなか無益の忠義立して入らざる拔足に忍び出るな、汝は最初より此の事に就て人一倍、小一郎の氣に合うた奴、わさと言置くぞ、確と申聞たぞッ」

折しも取次のもの出來りて、お玄關へ本所の木原庄左衛門と聞くや否、本田內記、猶更ら眼を光らしぬ。

「や、追歸せ、用はない筈、もはや今更ら逢うて語るに及ばぬ奴ぢや、なれど達て逢ひたくば前以て用事の次第を委しき書面に差出した上、當方よりの召に應じて來いと申せ」

其十五

天と地が逆倒に入替らうとも、かゝる不思議のあるまじき世の中に、さて何とせん現在こゝに元祿の空、あるが猶更ら以て開闢以來の珍事出來、かの生類憐愍といふ天下法令の下に、戌年の五代將軍家ます〳〵繁昌の勢ひ、時を得たりと犬畜生いよ〳〵江戶市中を我が物顏に吠歩いて、あはれや顏色を失ひつゝ逃迷ふ人間風情、うか〳〵歩の停場もなし。

加之も人間には飢て路頭に倒るゝ奴あり、病で軒下に蠢めく奴あり、家を失うて野に臥す無宿もあれど、四里四方いづこの隅にも端にも一疋の迷ひ犬なく、いち〳〵犬の戶籍を作りて毛色と生年月を奉行所に差出さしめ、いよ〳〵持主なきものと定まれば公儀飼立といふ名の下に大久保の御用屋敷へ養はるゝもの十七萬疋の餘、さらに中野へ十五町四面の犬小屋を建て聯ねて、これに養はるゝもの三十餘萬疋、一日一疋に白米三合と味噌汁四合と干鰯五合づゝの賄料とは、あるべき筈の事ならねど、正しく元祿八年の五月七日、犬の頭の判を大奉書の帳面に据て時の老中より將軍家の手許に差出せし御犬樣の取調書なり。

お犬樣の餘德を蒙りて山里の田舎には猪猿鹿狼の類まで、のそ〳〵と傍若無人に這出て、田畑を荒し人を傷くる事あれども是れまた

獲物を打取りしに生類一件、かりそめにも鐵砲弓矢等にて打すべからずとの嚴令、まして犬公方の御膝下には、下賤の途中おもはず向脛を嚙み付かれながら、其の犬に一禮厚く演べて行過ぎし振舞神妙なりとて百石の加增を得たる旗本あり、また犬の喧嘩には水をかけて引分くべしとの布令あるに、足をもて蹴り分けしがために三宅島へ流されし淺草の町人あり、天下の政道たゞこれ犬沙汰、日本一の大江戸は只これ犬畜生の持物となりぬ。

折しも誰いふとなく、兩國橋の上より犬の死骸を川中へ蹴落せしものありとの風聞、今までは然ほどにも立たざりしが、俄かに近來、ぱッと世上に廣まりぬ。

犬の死骸を竊かに取捨つるものあらば、本人は固り脱れぬ重罪、その町内一同は軒を竝べて曲事たるべしと、兼てより嚴しき法令を頭上に戴ける折柄、この風聞に兩國橋の相方、あッと今更一時に狼狽へ騷いでおの〳〵五人組の家に夜明しの内談密議、もはや逃も叶はぬところと觀念しながら、せめて本人の召捕られぬ以前に哀訴歎願の外なしと、先月その夜の始末いちいち具さに町奉行へ訴へ出でぬ。

現在その場に立會ながら、今日まで祕し立の罪科、主人分いづれも入牢申付くべき筈なれど、主人は現場の前に出で訴へいたせしがため、町内一同に日頃商賣に勤めの上、許し遣はすぞと言渡されて、橋の相方おもはず胸を撫下しぬ。

されど彼の風聞に囃し立てられ町奉行に訴まれ相方の町内より訴へ出られし其の夜の本人、あはれ何となる、恨みの風、嫉みの雨、それとも知らで浮世の籬に色香を深く包みし名花一輪。

＊　＊　＊　＊　＊

同じ將軍家の臣下ながら、直參とは違うて御家人といへば、生涯に一度の拜顏も叶はず、猫の額に等しい知行所でもある事か、時めく大名の乘馬一頭にも劣りし廩米取、たゞ兩刀の手前に其の日を送りて、粗末なれど門構の家に住みぬ。

わけて木原庄左衛門、これを踏臺として世に出る心もなく、また人と交はりて當世振に押歩く氣もなく、もはや五十の坂を五歳の上まで越して今更流れ渡りの浪人するよりは、たゞ浮世の氣樂さに味を求めての江戸住居、一つには流罪の赦免も其のうちに吉報あらんとの心待、一つは主の形見を無事に育てんがための業。

されば固り傳來の御家人風情でなく、人しれぬ古葛籠の底に用意の黄金もあれど、わざと世間體は目立たぬ老後の閑暇、加之家事の手轄き、ものの葉蔭に塒を作る小鳥の如し。

今朝も今朝、みづから箒を手に取りつゝ、流石に忘れぬ昔の餘波、奥よりの塵を小謠の一節に玄關口まで掃出せし折しも、門前に三人の同心を待せながら、ぬッと入來りしは町方の與力風。

「木原庄左衛門殿、御當家の筈、只今、居られまするか」

「庄左衛門これに、何の御用で」

「ちと、お尋ね申したい義で、實は、町奉行の手より」

「はて、異な事、奉行所よりとは、兎も角も、まづ一室へ」

「通らいでもの事ながら、お身柄を辨へて一應」

おもはず小首を傾けて、眉を顰めし主人の背後より、ずッと無會釋に打通りし體、加之も座に着いて輕く目禮しながら、四邊を見廻す眼、ぎろりと光りぬ。

「是非もない役向の事、私用の世間體は措置て、お尋ね申さうは、娘御か、但しは寄食人か存ぜず、當家お手許に十八九の女性あらるゝ筈」

自然の優なる靜けさ、あまりの落着たる豐かさに、與力も思はず感に堪へて目禮すれば、すらりと其のまゝ奧の一室に入りしが手早く筆とりて主人の庄左衞門へ書殘せし一封、そツと文匣の底に蔵めて床の間に差置きながら、さても十八年の春や秋、花も月も空しく過せし浮世、これぞ我が身に我が顏の最後となるやら、あはれ鏡臺に對うて、袖の端に拭ひつゝ人しれぬ心の覺悟みれば斯くても女、いつしか宿りし目と目の雫、ぢツと打守りぬ。

其十六

貞享二年七月、生類憐愍の嚴令以來、ことし元祿九年八月まで、かけて十二年の間、犬畜生のために人間は塵芥の如く取扱はれて、獄門首にせられしもの十六人、たゞの死罪四百二十八人、遠島流罪三百十餘人、歷々の身分ありて、切腹を仰せ付けられしもの三十七人、先祖傳來の知行を召放されて追放せられしもの二百六人、その他の閉門謹愼は措置て、いかに厄病神の如く逝廻れど、うかと吹付かれしが禍の基に捕へられつゝ、素町人の獄屋に繫がれしもの凡そ幾萬人、怖ろしや犬一疋の生死は天下の大事よりも重し。

されど流石に女の常、猶更此のごろの怖ろしさに身を縮めて、醉漢の刃物三昧よりも四足の影に奧深く逼入れば、この十二年間の厄病神に取付かれしもの僅に四百二十餘人、まして思はぬ不意の祟、いづれも夢うつゝの心地に引かれしのみ、わざ〳〵犬の毛一本を拔取るほどの罪人あるまじき筈の折柄、その女も女、やうやう今年こゝに十八の身を持ちながら、六尺の毛脛男さへ顏色を失うて飛退くべき嚴科重罪の一物に、通行途上の足をあげて橋の上より川中へ蹴落せし女、いかなるものかと見れば、花の露女、惡魔波旬も居縮むべき奉行所へ脇目も觸らず入來りぬ。

まして平常は生れしまゝの風情、天の成せる容色を誇るにあらねど、總て紅粉脂黛を施さざりし身が、あはれや今日を我が身の大事の女の修容、さらぬも蕩ける如き面上に白粉の匂ひを重ねて、丹花の脣端に奧紅を含みつゝ、火燈口の額際に飾りし大前髮吹鬢の鬅髻に毛卷の小枕を絞付けたる籠島田、銀箔の平元結を菱結びに跳返して、とめ木の馨りに四邊を薰じながら、どこまでも優に艷なる風俗、すらりと靜かに打沈みたる自然の容態、雪を欺く素足に紙緒の草履そろりと運ぶ歩み振、男ならば正しく胴骨の押据りし大膽不敵、こゝを何處の里と言ひたげに引かれて、加之も身に纏ひしは村田三平が殘せし生絹單衣の大模樣、さりとては女一代の浮沈みに人しれぬ心の優しさ、ゆかしさ、しをらしさ、もし一目かくと見れば、あの虎髯を喰反して唸るが如き大聲に泣叫ぶべし。

當の奉行を始めとして、白洲の上に居並ぶ一列いづれも呆れし體、おもはず眼を注いで暫時の無言。

やがて一聲、帛を裂くが如し。

「面を上げい」

露女、さらに怖るゝ顏色なく、加之も態とらしき風情なく、たゞ物靜かに差俯きし花の顏、そツと半まで擡げぬ。

「本所割下水の住居、これにて身分柄は入らぬぞ、たゞ木原庄左衞門の養女、露とやら、ことし十八、確と、それか、本人あらためて申上げい」

半まで擡げしまゝ、伏目勝に身を謹みて、流石に何となう含みながら、底に根ありて冴たる聲。

「仰せの露、十八になりまする」

「養女と申せば、生產の親ある筈、いづこのものぢや」

きくや否、すツと顏を振上げぬ。

「お上へ對しまして、ちと憚りある者の娘、その事ばかりは、たゞ仰の木原、庄左衛門の養女、それも子に貰はれましての養女で無う、世間體の養女分、厄介者の御扱を願はしう存じまする」

＊　＊　＊　＊

江戸の奉行所ありし以來、こゝに始めて見る目も覺むるばかりの容色、生類憐愍の法令ありし以來、こゝに始めて女のあるまじき大罪の重罪人、加之も二十歳に足らぬ身の不思議に落着たる自然の體、わけて優しき中に凛々しく冴渡りし風情。

當の奉行、おもはず座を乘出しながら、その面體、ぢつと見下しぬ。

「只今の一言、お上へ對して憚りあるものゝ娘とは、猶更ら聞捨にならぬぞ、役向に依て尋ぬる次第ぢや、ありのまゝ神妙に申立てい」

露女、さらぬも水際の立ちし天生の美に紅粉を粧ひし面、靜かに振上げぬ。

「木原庄左衛門が養女とあらば、生産の親ある筈、その者の名を言へ、との仰せに致方もなう、恐れ多い事ながら、申上げまする、父は先年、お取潰しになりました越後家の本國城代、荻田主馬、只今は八丈島の流人、その節、お上、お帳面に同人娘、露、九歳と書止められましたる筈、とやら、それが、さる縁で、木原庄左衛門に養はれまする身」

落ちても流れても氏素性、さては父の子なり、まだ十八の女ながらも、越路の雪と共に北國の名物、越後騷動お爲方の頭領、荻田が娘ぞと、奉行その他の一列、おもはず互ひに顏を見合せつゝ、今更ら一入の花に匂ひの香しき心地。

「その義を、お上へ對して恐れ多い者の娘と存じた心得方、いかにも殊勝に思ふぞ、但し今日、あらためて尋ぬる次第ぢや、先月十二日の夜、兩國橋を通行いたしたか」

「はい、通りかゝりまして」

「その砌、天下御法度の、お犬を川中へ蹴落したとの事、覺あるか」

「さら／＼、さやうの事は」

「ないか、否、ないと申しても、確とした證據はあるぞ、下司の稱でもあるまい身ぢや、今更ら無用の陳じ立いたすは、却て、ためにならぬぞ」

「いかやうに、仰せられましても、さやうな、大それた事は、わけて只今も申上げました、お上へ對して恐れ多いものゝ娘、何として」

「證據人の出ぬうち、出ぬうちが身に取つての、事ぢやぞ」

「その、證據人とやら、出ましての上、申上げまするほどならば、お手數も無う今のうち、なれど、身に覺のない事、存じませぬ事」

「やれ、聞分のない女、身のため哀憫に存じて、かくまで申聞けるに、さて知らぬとか、いよいよ存ぜぬとか、その夜、兩國橋に何事もなう、たゞ通行したと申しきるか」

露女、いき／＼と晴渡る目を見開いて、雪の額越に奉行の面、ソッと見上げぬ。

「何事もなう、たゞ通行したかと、仰せられましては」

「むゝ覺があるか、申し直しを差許すぞあらためて聞取らすぞ」

「暮果てましての事、橋の上に何とやら人立、ソッと身を避けて、通らう途端、おもはず足に躓いたもの」

「其の、その躓いたもの、いかなものぢや」

「存じませぬ、女子のあられもない、不用意、夜の事ながら、ものに躓いて、それを人中に見返る事は、たゞ心慌てゝ、前後の差別もなう足早に」

「その身が現在、足に躓いたもの、知らぬ筈はないぞ、そこぢや、申立てい」

「存じませぬ事」
「知らぬで濟まぬぞ」
「存じませぬ事」
「や、そこまで、白状しながら、知らぬとは、猶更の重罪になるぞ」
「存じませぬ事」
「もはや、存ぜぬで通らぬ場合ぢや」
「存じませぬ事」
「露、確と面を上げい」

靑女、すらりと振上げし面、どこに一點の打たれし疵もなく、さりとては不思議の天生、照れる如く端肅に艶なり。

其十七

やう／＼十歳になりしばかりの一子を人間の捨物に等しく、八重の汐路を隔て〻鳥も通はぬ水や空なる島陰へ遣りながら、生きて甲斐なき老の我が身を浮世の塵に取殘しつ〻、御家人風情の株を求めて人しれぬ心の憂年月を送りしは何のため、たゞ主の形見を無事に育てあげし後、せめて女子は女子だけの世に出さんがため、また其のうちに赦免の一陽來復、主從父子が互ひの春に巡り逢はんとての事。

されば今こ〻に自然の命數、醫藥の介抱にも佛神の加護にも盡果てし上の病死さへ、あきらめ難き凡夫の腸を裂かる〻に、まして何事ぞ、大畜生一疋に可惜ら生涯を過まらせんとは、加之も其の畜生の死骸たゞ一箇の業にて、ことし十八の花の色香を現世からなる生地獄の底に落さんとは。

汐風の磯馴松に夢を破らる〻曉も、さては小夜の月に悲情の浪に碎け寄る夕暮も、千鳥に鳴いた時はる〻夜寒にも、嘸や父心、いとゞ猶更忘れ玉はぬ息女の身を、この庄左衛門が譜代恩顧の家來として預かりながら、わけて九歳の春より十八の今まで幸ひに事なく育てあげながら、何と申譯の立つべきぞ、おのれが一子を人質にさしたる我が子を粗末にせしかと、いばれても思はれても、どこに一言それにはあらずといふ證據の立つべきぞ。

あれほど手強く老の膝を詰寄せて諫めしかど、諫めし時は南無三寶、はや既に其の事ありし後、たゞ此の上は世上へ漏れざるやう、朝夕の神かけて念ぜし甲斐もなく、今更ら思はぬ不意に現れんとは。

されど現れし今更ら、現れぬ以前の事いかに悔やめばとて繰返せばとて、そも／＼何の業にかなるべき、さればとて他の事とは違ひ、固り天下の道理にあるまじき古今無類の今日、この老の一命さし出すとも、取拵のならざる悲しさは、たゞ徒らに手を束ねて其の成行を見るより外なし、とは思へども今こ〻に手を束ねて此のま〻見過しのならざる我、せめて皺腹より流れ出づる血汐の下に救け出す道もがな。

扨その場は力にも及ばず涙にも及ばず、加之も魂か手足を動かして立騷ぐよりはと、おめおめ與力の手に渡して奉行所まで曳かせしが、もし今日の一夜たりとも獄屋の中に其のまゝならば、東雲に啼渡る鴉の聲もろとも、一命にかけて、するだけの事せずには立たぬ庄左衛門。

あまりの堪難さ、居るにもあられぬ苦しさ五臟六腑を絞らる〻心地、思案の腕を組みつ〻同じ家の内を歩みながら、奥の一室の床の上、ふと何心なく見れば、そこになき筈の文函そこにありぬ。

もしやと開けば、果して延紙の端に墨の色さへ急ぎしま〻の走り書。

罪なうて流人となるほどの父が子に生れし露の身の置どころ、いづれ浮世の葉蔭に消ゆべきものと思ひあきらめ候

一目、みるや否、庄左衛門、おもはず座に抛付けて老の涙もろとも、呟きぬ。

る四千石取の大身、それかと思ふ我が身こそ世に連れて落果てし老の心の淺ましさと恥ぢたりしに、思ひきや自尊心なき下司は却つて正直なる藤助の唇端より此の耳への一言、正しく聞取りし現在の業をせし奴それならんとは。

言語道斷、家にも名にも身分にも係あるまじき卑怯の振舞、見下果たる小人の素根性おのれ其のまゝに置くべきかと思へど、さて暫時そのまゝに置かではならぬ無念さ、加之も其の輕輩の端くれ奴にまで幇間の手を摺り腰を屈めて、伏拜まんばかりに頼まずば立たぬ浮世の庄左衞門、もはや末なり武運こゝに盡果てたり。

されど我が一命さへ、此の事に就ての用に立たばと、老の眼を皿にして死場所を探すほどの折柄、何の身の末も武運の果もあるべき、救ひ出すべき本人さへ救ひ出さば庄左衞門それで心に滿足の折柄、我がための血を絞られし鬼にせよ蛇にせよ、用捨までならぬ折柄、あとは浮世の萬事この鐵膽一箇で濟むべき筈の折柄。

終夜そのまゝ寢もやらず、燈火の下に腕を組で總身を火水に貫抜かるゝよりも堪へ難き苦しさ、いかに男優りの凜々しき健氣に生れながらも、やう〳〵今年こゝに十八の花よりも艷なる女の身として、夢にも得知らぬ獄卒の手に扱はれ門屋の中に無やゝと思へば、思ふほど猶更ら座にも堪りかねて、闇の夜深の庭に立出でつゝ、遠路の空の氏神た專念に祈り明せし東天の頃、そッと門を叩く音。

さては我よりも余に約束の藤助め、前夜のうちに仕終せたかと、下女にさへ憚る忍び足の庭傳ひ、其のまゝ近く傍添うて門内よりの小聲。

「やれ待兼ねた、藤助よりか」

門外には暫し無言、そッと隙間より差覗けば、ほの〴〵と明行く夏の空に見覺えの古編笠。

「や、村田殿か、三平殿か」

村田三平、夜露のまゝか朝露か、濕り勝なる笠越に門の扉を隔てゝ、四邊を見廻しながら、息を吹き込むが如き聲。

「あの日、あのまゝ、行方も知れぬ他國の空へ立退た筈の奴が、うろ〳〵と今日まで、まだこの江戸に彷徨うた仔細、それや別に委しう、申さうが、爰、ちらと聞及んで身の恥辱も面目も見返る遑なら、馳付けて來た三平、露どの無事に居られまするか、幸ひ人の風聞に聞たが譃となれ鶴龜、居らるれば此のまゝ立去る男、もし、もしや萬々一、お手許に居られずば是非、是が非でも此の門あけて、この男を入れられたい、せめての御思案相手にならうとて―」

庄左衞門、そのまゝ門の扉を開いて、涙の片手に引入れぬ。

「かゝる折柄の事」

村田三平、古編笠に小動を打たせて、おもはず武者振ひの力足。

「もし眞實、それならば、たとひ鐵壁の底にありとも、救ひ出す男は此奴、此奴ぢや、此奴ぢや」

＊　＊　＊　＊　＊

前夜の今朝、まだ東天の露に門を打叩くもの、番町よりの藤助と思ひの外、いづこを身の果か行方も知れぬ旅の空へ立出でし筈の村田三平とは、あまりの案外に木原庄左衞門、あッと驚きながら、はや委細を知つて來りし體に、いよいよ不審の眉もろとも其のまゝ引入れぬ。

一室へ引入られし三平、今日こそ例の古編笠を脱でさらぬも虎髯の盤大面に猶更ら輝く大目玉。

「もはや再び來べき筈でなし、いかな事ありとも男一代、あの見苦しい醜態を曝け出して、あの優しい情に見送られし以上、八幡、來らるる筈でない男がおのれの恥辱も面目も顧みず、かく走付けたは前夜、ちらと小耳に聞た露どの

の事、いよ／＼其事、眞實ならば三平、生命ぢや、生命にかけて救ひ出さう」

「ようこそ、さて／＼芳志、さぞや本人も、但し貴方、まだ江戸に居られたとは存ぜぬ事、じたい前夜、いづこの、誰に聞かれて―

「實は其の後、あの日、あのまゝの足にて江戸出立の筈ながら、こゝは御推量に預りたい、さらぬも前々より[illegible]して腰巾着は幾日の底まで秋風に吹拔かれし折柄、道中の古宮柱を拾うて其の日の餌食にならば兎も角、まだ旅の乞食業にも馴れぬ身が、俄に的もなう踏出して他國の空の野倒死するよりはと、聊か武道の心得あるを僥倖、内々そつと歩を停めて江戸市中の端々、町道場を目標に覗き歩いて不意の勝負を申込み、こゝに三日、彼處に二日、我れには未熟の藝ながら、さて太平の世には時に取ての業を賣物として、はゝゝ、飯喰種に流れ渡りの代稽古を頼まれ歩いた前夜、ある道場での噂、加之も其奴は奉行所の下役を勤むる奴とやら、はッと思はず耳を欹てゝ、聞けば聞くほど正しく露ども一

「いかにも、それがため、きのふ一日、ゆうべ一夜、わけて我娘でもある事か、貴方には始てながら、實は大切の預り女を、加之も今日まで無事に育てあげし十八の花の曉　犬畜生の死骸一箇で」

「や、その事も其奴が我を忘れて、流石に氏素性は爭はれぬものとの取沙汰、きけば北國の名物、越後の荻田家の息女でがな、猶更ら以て今は叶はぬ戀を仕遂げようでない村田三平、たゞ御見舞のみには參らぬ男ぢや」

「さりとて、餘の事とは違ひ―

「いや、外に助くる道あらば知らず、もし無くば此、この男に任されたい、いつまで椎の木より辷り落ちた三平ではない筈、腰うち拔したは生涯、あの時ばかりの事」

木原庄左衛門、兩眼を閉ぢて差俯きながら聽を細みしが、やがて三平の耳に口、そツと何とか私語けば、大の眼くわッと剥出して鐵拳に自己が膝を打叩きぬ。

「ヤツ、あの木田奴が、むゝ儕は、あの飾人形め―

庄左衛門、また更に聲を潛めて摺寄りぬ。

「こりや今こゝで、いはずともの事ながら、きのふ、奉行所へ曳かるゝ時、わざと着替て、身に纏うたは、女の身に取つて浮沈の大瀬戸、いかな晴衣裳と思はるゝ、貴方が殘された、あの生絹單衣の大模様ぢや」

きくや否、村田三平、骨太の首を縮め鼻を皺め齒を喰締りつゝ、男泣の胸に迫りて堪へ兼ねし眼中より霰の如き粒涙、ぼろ／＼と虎髯に振落しぬ。

＊　　＊　　＊　　＊

十八年の浮世を人にも知られず咲出でし花の露、おもはぬ不意の嵐に逢うて、不祥ながら女生涯の大切なる晴着、また再び歸るやら歸らぬやら散際の色香、あはれ覺悟の心に曳れ行く時、わざ／＼着替て其の身に纏ひしは、この髯男が迷ひの種に染出して獨寢の夜な／＼夢うつゝの枕頭に添へし例の生絹單衣と聞くや否、さらぬも殘る情の絲に擱まれし村田三平、もはや何の理由もなく、仔細もなく、たゞ腸を掻挘らるゝ心地、見苦しくも六尺の大男が小兒の如く聲をあげて、おい／＼と泣出しぬ。

「さて／＼生れながら、自然と男の生命取に出來たる女、何たる優しい芳志ぞ、いかに其處まで儕、しをらしう、や、却て憎いぞ、憎いぞ、あまりの憎さに猶更らの事、此のまゝでは濟まぬ三平ぢや、たとひ身の一大事は置ても、これ其のまゝには見過されぬ三平、わけて古今無類の白癡を盡した當時の禁令法度に何の恐れも憚りもあらうか、神も佛も入らぬぞ、みごと凡夫の

力で奈落地獄の底より摑み出して見ようわ、ついでに吞町の方角へもおのれ一度は踏込で父子の奴等へ」

あとは唸るか細き聲もろとも、吉備の縁越に天井の片隅を睨みあげながら、元來の一徹、もはや火水も鐵石も選ばぬ蓦地に飛込まんばかりの猛勢、あまり藥の利き過ぎたる體に驚いて主人の庄左衞門また今更の心地、おもはず摺寄つて聲を潜めぬ。

「かゝる折柄わけて、老の身の氣ばかり急いて力に及ばぬ事。まるを幸ひ、貴方なればこそ、時に取つての千人力ぢや、なれど貴方の來られぬ前夜、無念ながら詮方もない浮世の方便に實は内々、そッと吞町へ忍び行き、あの藤助といふ萬事それ心得顏の下郎へ本人を[illegible]、聊か喰はせ置いた義もあれば、兎も角も其の吉凶の定まるまで、うらみの敵と思へば猶更ら其奴の手より拔出してこそ少しは小腹の癒もするかと、なれど萬一もし叶はずば、その時こそ千萬、たのみ入るは貴方一人」

三平、いよ〳〵大の眼を瞋出しぬ。

「入らぬ事、それ入らぬ事、前夜は前夜そりや時に取つて浮世の方便ともいはゞいへ、今日は今朝、この男こゝへ斯く來合した以上に何の其もはや入らざる小面倒ぢや、わけて下司下郎は口ほどに業のないもの、また圖は得て其まゝ散に仕てやらるゝ恐れあり、かた〴〵以て無用の沙汰、只この男の腕に任されたい、重ねて囀づるやうなれど、椎の木より辷り落ちた村田三平、あの時ばかりぢや、明日ともいはぬ現在、今夜のうちに救ひ出さう、や、摑み出さいでか鐵壁の底にありとも、但し救ひ出した上の隱れ場所これ專一、どこにせらるゝ、それさへ定まらば必ず今夜、よし定まらずとも、この男このまゝ今夜は過さぬ覺悟ぢや」

折しも人の門内へ入來りし足音、やがて玄關の片傍より小聲に案内を乞ひしは例の藤助、それと聞くや否、庄左衞門、三平の耳に口を寄せながら、憤怒の滿面いよ〳〵青鼻を剝出して墨繪の達磨に似たる體を、壁一重隣席の彼方へ押遣りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

門内への足音、やがて聞えし藤助の聲に、壁一重隣室に押遣られし村田三平、いよ〳〵面白からぬ目鼻を突出しながら、みれば其の一室こそ、去し夜彼女の居室に用ひて折しも隔ての障子を開放したる夏の小座敷そつと差覗けば、あはれ主なき鏡臺の片隅へ押寄せたる淋しさ、とある木の匂ひを殘せし此方の吊衣桁には、引かれ行く時まで玉の肌を包みしか、團扇の散し形を染ぬいたる大柄の帷子ばかりぞ掛け捨てられて、その下には生來また月下氷神さへ手にも觸れざる朝夕の腰を我が物顏に纏ひ付きし紫繻の細帶、つるりと音もなく、[illegible]の影に辷り落ちたるまゝの風情、床の小傍に讀みかけし物の本を重ねて、蒔繪の手文庫に敷かれし和歌文字の反古紙ちらと見ゆる床しさ懷かしさ、今にも其の面影の現れ出づる心地、あり〳〵目に浮べば、三平、おもはず居住を正して、何とやら我が心に我が身を恥づるが如く差俯きぬ。

折しも壁一重を隔てし主人と藤助との聲に、はッと氣を取直して其の壁際に倚添ひつゝおのれ下郎奴、いかなる返答するやら、その返答の次第に依つては其のまゝ歸さぬ奴、茲の主人の迷惑にならざるやら、かけぬけて途中に待受け、生死の境目まで引絞めて後の一工夫ありと、眼を閉ぢながら拳端を結び耳を欹てゝ聞けば、互ひの小聲なれど手に取るが如し。

「[illegible]手ながら、[illegible]は後の事、終夜ら寝もせいで待[illegible]した身ぢや、首尾よう仕遂げて下されたか、何し萬一」

「いや、前夜お約束を申した手前、首尾が惡う

ては今朝、來られませぬ筈の藤助まづ十のもの七八まで―
「やれ滿足、それは偖お手柄、いづれ重ねて御禮いたさうが、委細いかやうの體でがな―
―御存じの通り今日の場合、もはや主人は萬事を背にして横顏さへ向けられぬ大の立腹、迚もの事ながら父子の情愛、わけて外に御兄弟もない大切の一粒種また格別と心得、加之も本人の若樣が人しれぬ内々の思召、實は兼てより承知の藤助、そッと蚊屋越の御枕頭へ這寄て、何となき世間談話の緒より手繰込で根のあるところを窺へば、さて戀は曲者、や、かうも容易う出來よう筈のない事が、出來ましたぞ、出來ましたぞ、おのれ家門にも恥ぢざる未練者との御叱咤を覺悟の身で、父上を動かして見ようとの御言葉、こりや正しく出來ましたぞ、まして當の御奉行は主人と年來入魂の間柄、その邊は申さいでもの事、地獄の底へも浮世の風が吹て通ふとやら、はゝゝゝ但し第一は藤助、そも／＼事の最初より最終まで引出されまする奴、もし萬一、首尾よう出來て後の間違あつては―
―や、何として、あるにもあられぬ老の身が、わざ／＼お屋敷の門前を宵闇に彷徨て、内々お願ひ申したほどの事、本人さへ無事に出ますれば、是までの縁談は偖置、たとひ侍婢に召使はるゝとも―
―確と、其事ならば遲うて三日のうち、實は今日中に出來ずとも、明日中には必ず埒あけて見るとの御言葉まで、承つて來た藤助―
「やれ千萬お骨折、かたじけない、猶この上の事が專一、くれ／＼も賴み入りますぞ―
　壁一重の此方には村田三平、おもはず滿面を皺めて舌鼓を打鳴しぬ。

其十九

　同じ地獄の底とはいへ、死して其のまゝ行くべき地獄の果でなく、生きて現世からなる地獄の沙汰、金の外にも浮世の通路ありて、さても思はぬ隙間より引けば引かるゝ内々の操り絲。
　まして天下の嚴禁お犬樣を傷けたでなく殺したでなく、たゞ通行に橋の上の死骸を川中へ蹴落したのみの事、加之も本人を見れば衆中に足をあげて路傍の小石一個さへ蹴飛す段か、荒き風にも堪へざる古今無類の美女が、今年やうやう十八の花の露、こぼるゝばかりの風情に差俯きながら、それとは知らず頷いて逃出せしといふの外、あくまで何事も覺えず存じませぬの一點張を幸ひ、猶更ら本行の手加減に三日目の朝、あらためて呼出されぬ。
　たとひ一夜たりとも汚らはしき牢獄の内に夢も結ばで待明せし身、どれほど男優りの凜々しき天生なりとも、女一代の生涯を浮沈の瀨戸際に抛込まれし身、いかに打濕れて花の色香もなく、もの哀れ氣に兩の目瞼を泣腫せしかと思へば、引出されし露女、さても不思議や、鴉髩の襟首にこそ二筋三筋の後れ毛はあれ、雪の額に塵も置かざる大前髮の艶やかさ、いき／＼と張切りし黒目勝に脇目も觸らず、わざとならぬ自然の態度、しッとりとして睡れる如く靜かに豐かに加之も猶更ら優に差控へし體、今更ながら正しく名花一輪、どこに元來それほどの膽魂あるかと疑はれぬ。
　あッと思はず感に堪へし白洲の正面より、當の町奉行が一入の威儀を正せし聲、耳の根に響き渡りぬ。
「あらためて今日、調べ直すではないぞ引續いての事ながら、格別の義を以て再度の白洲ぢや、露、面をあげて其の夜の委細、この上お手數を煩はさぬやう、具さに確と申立てい―
―あの夜の事、いかに仰せられませうとも、かねて、申上げましただけの事、たゞ橋の上を暮果ましての人立、それを避けて通らう途端、何

やら足に蹴いたものゝ外、女子のあられもない、大それた嚴しい御法度と知りながら、さやうな恐れ多い事は

「いよ／＼天下御禁制の物とも知らず、存ぜず只その脚下に蹴いたまゝ、狼狽て逃出すやうに去ッたと申すか」

「はい」

「但し露、それでない證據の現れた以上は、猶更ら以て罪が重いぞ」

「はい」

「その證據人の申立に依ては、拷問にかけるぞ」

「はい」

「大の毛脛男さへ悲鳴の聲もろとも白狀さすべきやうに出來た拷問道具ぢや、さるを其の方、その纖弱い身で、その拷問にかけられても、これまで申立てた義に確と相違ないか」

「いかやうな、怖ろしい目に逢ひませうとも、その外に、申上げよう事のない露、この上は只、たゞ／＼身に取りましての、運命とやら、不束なれど、腹からの下司にも生れませぬもの、女子とて、父への手前、生命が惜しさに正體も無う取亂して、さら／＼其事でない事の、お受は致しかねまする」

優しけれど凛としたる言葉の端々、半まで靜かに面をあげて、そッと奉行を額越の目元、四邊に人なきが如く、まじろぎもせず眞生面へ冴渡りぬ。

* * * *

いかに其の事を掌中に握れる町奉行の身なればとて、また多年入魂の本田家が内々そッと自己より事を發いた今更いかに再び内密の手を盡せばとて、みす／＼法を枉けし黒白轉倒の沙汰は力に及ばねど、幸ひ本人が顏にも姿にも似合はぬ不敵さに始終の言葉を變へず、たゞ萎果てし脚下に何やら躓きしまゝ若き女の身空に慌てゝ立去りしといふの外、さらに一言も吐かざる折柄の手加減、いよ／＼天下の御禁制とも心附かず通行の急ぎ脚に過つて躓き落せしといふ、それだけの事に定まりぬ。

されど息の音の通ひし人間の生命よりも、捨處のない犬畜生の死骸たゞ一箇が重く大切なる不思議の世の中、いかで其のまゝの無事に濟むべき。

たとひ通行の暮合に何物とも辨へざる前後忘却の過失にも致せ、斯まで嚴しき御布令物を女の身として脚下にかけし段、不屆の至極、本人の露は今後三年間市中往來差止の事、主人の木原庄左衛門また油斷の罪輕からず今後一年間御家人の御扶持米取上の事、併して其の間の謹愼を申付くるぞと言渡されぬ。

倶に呼出されし庄左衛門、其の後また藤助より手柄顏に重ね一二度目の内通ありしかば、そッと町駕二梃を此方の辻に待たせ置きつゝ、露女を引渡されて奉行所の門前を立去るや否、物も得いはず眞一文字に宙を飛して走歸りぬ。

加之も其の町駕をまた我が家の此方なる辻に乘捨てゝ、手を取らんばかりに半町あまりを急がせながら、今しも門内へ入らんとすれば、留守を賴みし村田三平、例の古編笠を面深に打被りての會釋振、さては人目を憚かりし出迎ひかと思ひの外、其のまゝに立去らんとする體、庄左衛門、慌てゝ引止めぬ。

「や、どれへ行かれる」

「もはや御暇いたす、かく無事に目出たう、歸られた上は用のない男、此方には兎も角この二日三日、せめて御心勞の片相手にもなりましたれど、さて露どのには再び晴れて面の合せぬ三平ぢや、御免なりませ」

庄左衛門、身の疲勞も忘れて訝かしげに眉を顰めし露女を振返りつゝ、これには仔細ある事まづ奧へと口早に促しながら、あとに殘りて立

去らんとする三平の袖を放さず確と捉へぬ。

「それでは濟まぬ、無事に歸ればとて、まだ御力に預かりたい事の山々、男と見込んでぢや」

「その男と、見込まれては猶更ら居るに居られず、立去るべき筈の三平、笠越ながら、いかにも女生涯浮沈の境に、あの單衣を、身に纏はれた今その姿を現在、これにて見受けた三平、もはや此の上に浮世の希望はない、一代の得心、このまゝ後を濁さず立つ鳥のやうに御暇いたしたい、凡夫ぢや、わけての大白癡ぢや、この邊で此奴の分相應に出來たところ、また見苦しい愚に返らぬうち放されたい」

其二十

もし犬の死骸と知て橋の上より川中へ蹴落せしといはゞ、それこそ忽ち一家身命にも及ぶべき筈の重罪ながら、たゞ暮果てし通行の闇下に何やら躓きし身の懼て、立去りしといふ、それだけの事に定まりて加之も當の奉行の手加減に案外の輕く扱はれし段が、怖ろしや本人こゝに三年間の市中徘徊を差止められ、主人の木原市左衞門また一年間の扶持米を取上げられて蟄居を申付けられしとに、さて〳〵當時の天下政道、お大樣の世の中なり。

されど關り人しれぬ仔細あつての江戸住居、實は御家人の扶持米に露命を送る身ならねば、さして何の苦痛もなく、また三年の市中徘徊を差止められても、元來が晴がましう世間へ色香を誇る身でなく、ましてや往來の人に見返られて思はぬ玉の輿を願ふ身でもなく、いはゞ却て祈禱の僥倖、さらぬも第一は面憎き番町の木田家に對して此の上もない當座の小盾ながら、たゞ十八年の今日まで浮世の塵にさへ染まず守育てし名花一輪を、わづかに三日なれど汚らはしき牢獄の内に繋がせし無念さ、心外さ、あはれ市左衞門の胸裡には多年秘藏の珠玉を碎かれたる心地。

わけて本人の露女、かく〳〵と聞くや否、おもはず柳眉を逆立てゝ、いかな惡漢無賴の徒輩さへ、身縮むべき奉行所にも不思議や一滴の雫を浮べざりし目元、今更に涙を含んでの口惜しさ、洗ひ立の大前髮に恨みの漣を打たせて、それかと思ふ番町の方角、きッと物凄く睨み送りぬ。

女の身にあるまじき蓮葉の振舞なれど、男の身にあるまじき見苦しの場合を救はれながら、おのが戀路の叶はぬとて恩を仇なる卑怯の姦婦に、憎さも悲惨と見るべき女、一代の生涯を潰して退けんとは、いかに何と言葉にも外れて見下げ果てたる奴ぞ、まして一旦その地獄の底まで突落せし此の身をまた今更に引上げて動けぬ閨の捕獲物にせんとは、八十氏川の流こゝに涸るゝとも、せめて弓矢神への恐れを思へかし、北國に名を得し萩田家の娘を賤しき賣色の遊女に等しう、おのれやれ身受證文とやらに卷込みしか、さても憎くや、あまりに物の冥加を知らぬ奴。

わづか四千石の家屋敷を太平の世の得意顏なる鼻頭に打かけて、歌舞伎の踊り子めいたる華奢風流これ見よがしの體、その心根の見透て淺ましき父子のために引かるゝ我が身ならば、あの虎髯を喰反した素浪人の妻となりて、みごと生涯の貞女に唄はるべき女とは知らざるか、我がために足を踏外して櫓の木より辷り落ちたるほどの哀れに優しき男、この露が思はぬ不意の災難と斷くや否、もはや再び來られぬ筈の五體を宙に飛ばして來るほどの哀れに優しき男、きけば獄屋に火をかけて炎焔の中より此の露を背負出さんとせしほどの哀れに優しき男、それさへ八重の汐路の島陰を思へば、辛や良人に得持たぬ我が心の底とも知らで、何事ぞ、かくまでの戀と情を手鞠のやうに自己が掌中に摑み行かんとは。

いざや狼狽へて摑みに來よかし、ならば[illegible]し

や何となる、女も女この露が一念の業、摑み行かれたし。

* * * * *

花の色香の露、消えもやらで其のまゝ無事に立歸りし筈の後、わざと思はせぶりの一日を隔てゝ三日目の朝、例の藤助、もはや本所の割下水を我が物顏の體、空飛ぶ鳥は得落さねど、たしかに此處の本尊を片手の自由自在に持運ぶべき勢ひ、加之も何は偖置まづ祝ひの盃に金封の一包は必ず添へらるゝ筈ぢやと、滿面の笑もろとも鼻を蠢めかして門内へ入れば、不思議や、今日こそと思ひし玄關口の戸は閉ぢたり。

眉を顰めて舌鼓を打鳴らしながら、臺所口へ立ち入れば、生憎く飯炊の半婆々さへ居らで、この夏に納戸と取合の障子まで閉切りぬ。

「や、居られまするか、番町より藤助、藤助、藤助で」

二三度の大聲に、やう〳〵奥より出來りし庄左衞門、それと見るや否、わけて平常よりは俄の慇懃さ。

「や、誰かと存じたに、こりや外ならぬ人ぢや、人ぢや、何としても此のまゝには歸されぬ人ぢや、兎も角も一室へ」

固り外ならぬ筈、此のまゝ歸されてなるものかと、藤助、はや自己が平生の分際を忘れし上、風の奴凧、得意顏に打通りて四邊を見廻しながら、何を誘ひ出すやら俄に輕薄の空笑。

「はゝゝゝさて人の住家は自然に吉凶の器とやら、陰に閉ぢられると、陽に開き直るとは格別の相違、はゝゝ……陰か陽か、吉凶は偖置て御禮は御禮、あらためて早速、まかり出まする筈ながら、實は其事も叶はぬ今日の庄左衞門、幸ひの折柄、何卒、御主人へ宜しく傳へて下されたい」

「いや勿論、如才なう傳へも致しまするが、是非とも一應、御當來より來られませいでは、相方とも折角の念が屆かぬやうで、第一この藤助が板插みの立往生、はゝゝ」

「…なれど、それが出來ぬ庄左衞門とは御主人、既に御存じあらせらるゝ筈ぢや、幸ひ本人は其のまゝ無事に出ましたれど今後三年間は市中の往來を差止められて一室へ引籠りの身、また我等は一年間の御扶持米を召上げられて、加之も其の間は謹愼を申渡された身、つまり庄左衞門は心ならずも一年間の御無沙汰、これ何と致方のない事、まして本人は今年が十八歳、すれば二十一の曉まで丸三年の間、いかな事あるにせい門前一歩も叶はぬ哀れの身となりました以上、心外ながら、例の内談、お約束の義は當分まづ」

藤助、あつと驚きながら、いよ〳〵手柄の上盛こゝぞと思ふ顏色、俄に膝を進めて聲を潛めぬ。

「藤助、それ承るは今こゝに始めて、また若樣も今朝まで、この藤助へ何とも仰せられぬ事ながら、いかにも御言葉、主人が存じられいでならぬ筈とあれば、や、さほど御心配に及びませぬぞ、一應は御公儀の表面、それにも致せ、いづれ其のうち、また重ねて寛悠な御沙汰のあらう事ついては近日、こりや却て御當家のため、餘所ながら内々そつと若樣の御供いたして何となく、伺ひましたい、すれば猶更ら一時も早く根を固めて、お互ひに御安堵のなる道理…」

「や、さりとて、今かゝる折柄、さやうの義は第一お上への恐れ、何事にも遠慮いたさいでは」

「お言葉なれど、浮世の萬事こゝが世間體の表と人情の裏道、はゝゝまして御謹愼中の身が出らるゝでなし、外より不意に立倚る客來の事、お茶一服の手前に暫時の雜談が何の、はゝゝ」

後編

其一

露女は三年の市中往來を差止められ、庄左衞門は一年間の謹愼を申渡されし折柄、身に取ては生涯の無念ながら、幸ひ時に取ては番町への小盾この上なしと思ひの外、その小盾を押倒して一日の晝過、内々そつと訪ひ來りしは本田小一郎。

わけて今日は、一入の華奢全盛に當世樣の風流を盡せし若衆振、はや人しれぬ我が戀路に適ふ心地、加之も浮世の裏道傳ひに結句これが面白う異ありげの體、まして萬事を自己一人が心得顏の藤助に案内させて、閉切りし玄關の此方、わざと臺所の入口に得ならぬ隱し梅花の肌着を匂はせつゝ、廚の世帶道具を差覗いて物めづらし氣に立てる風情、猶更ら際立ちて優なれど、あたら婉艶たる媚態こゝには却て色を賣る若衆の野郎帽子にも劣れり。

主人の庄左衞門、それと見て今更の當惑、おもはず[illegible]を低めながら、さて〳〵當世振の我まゝ生育は、毛頭の下司根性よりも無作法千萬、容姿にも風情にも似合ぬ厚顏な奴ぞと思へど、此のまゝ門外へ押出しもならねば、まづ藤助に一室へ案內させつゝその身は奥に入りて露女の耳に口、かくと私語きぬ。

露女、さらぬも口惜しく腹立しき今日この頃、その番町の本田家より恩を仇なる押掛け戀の飾り人形奴が、ぴらり、しやらり、歌舞伎めいて來りしと聞くや否、いとゞ猶更ら胸の張裂く心地、讀かけし物の本を、ばたりと音するばかりに閉ぢて、凛々しき目元に庄左衞門への小聲。

「いづれ此の身を、この身に、何やら用ありげの人、今日、逢はいでは、また來よう筈の人、なまなか隱れて、いつまで好かぬ思ひに惱まされうよりは、晴々しう逢うて、いふだけの事いはせも仕、いふだけの事、言ひも仕たい氣」

「や、それに仕てからが偖、うかとせられぬ相手、わけて斯る事には世間しらずの我がまゝ三昧に出來たらしい奴、もし萬一、おもはぬ言葉質を取られて、この上に後日の迷惑を重ねては」

「もし言葉質とやら、取て用に立つならば、此方よりこそ、何の、男らしうもない心根の見透た人、うか〳〵仕てやられうぞ」

「なれど元來お氣性、また餘り過ぎては却て、只逢ひなされた上、それとなく其の場に當らず觸らず」

「ほゝゝ同じうは、あの三平殿、こゝに居らせたい事、ほゝゝゝ」

「いかにも、見た目は黒白の相違、美醜の一對ながら、うまれついて人の氣心は偖また格別なもの、あのまゝ袖を振切て門前より立去たまゝ、どこに居らるゝやら、今日これへ押掛けての人に比べて猶更の哀れぢや、この邊で此奴の分相應に出來たところ、また見苦しい愚に返らぬうち放してくれとて、あの古編笠を脫ぎも得せで其のまゝ遁出した體」

「あれ、もう言はぬ事、それよりは、今日これへの人、この身に何といふやら、聞きたい」

其二

固り太平の夢に育ちて浮世を火宅の宿とも知らぬ全盛の秘藏生育、華奢風流の當世振この上あるまじき物の冥加を盡して、かくし梅花の肌匂に四邊を薰じながら、鶺鴒髷に二つ折の大髻を小枕高く卷立てゝ綠の角前髪に向はせたる本田小一郎、藤助を背後に從へ主人の庄左衞門に案内されつゝ、すツと奥の小座敷に入來りし風情、此のごろの世上に三國無雙の美男と唄はるゝ芳澤あやめ水木辰之丞が歌舞伎姿の一枚繪にも立勝りぬ。

されど露女が目には何の花も實もない若侍人形、からくり細工に臺の上を傳りて歩み來るが如き心地、身に纏ふ單衣の染模様こそ情も深き澤邊の亂れ葦ながら、五味藤に梳立てし島髷の後れ毛さへ一筋も動かさずたゞ流石に女といふだけの座を辷りしのみの事、積りし雪の額に結びし丹花の脣端、晴渡る柳眉の鮮明さ、冴渡る黒目勝の凜々しさ、靜かに轉ふ心ばかりの會釋せし外はゆッたりと自然の氣位を取りて、眞正面より小一郎の面、さても氣强や射透すやうにさッと見遣りぬ。

そも〳〵淺草の山門にて其の時の事もありわけて我れよりの戀には猶更ら聴き習慣、加之も現在これほどの花を嫉妬の風に散らさんとせし心の咎め、はッと思はず狼狽ながら、此方より見遣りて赤らむ顔を横にさすべき筈の身が、彼方より見られて我れしらず差俯きし小一郎、其のまゝ無言の體に主人の庄左衛門、さてこそと目を欹つればさらぬも萬事この場の藤助、たまらず膝を進めて露女の方へ追從の輕薄笑聲。

「お目にかゝりまするは、これで二度目ながら、さて〳〵何かの御縁あればこそ今日また、かやうに主人の供いたして、これへ出まするほどの事、はゝゝ以後は猶更ら以て一入お心易う、今更ら申さずともの事なれど、いやはや、あの淺草以來、尋ねましたぞ、探しましたぞ、この江戸市中を凡そ一月あまりの間、夜晝なしの雲を摑み歩いて、はゝゝゝや、お茶道具それに見えまするな、差出がましい御無禮ながら、幸ひ主人義その道の稽古好、まづ一服お手前を下されて後、ゆる〳〵打解けた世間話も——

おのれが身の分際も顧みず、たゞ一人この場を取持顔に饒舌立つる藤助の顔、じろりと横目に見遣りし露女、坐したるまゝの小膝も動かさで、もの靜かなる聲を含みつゝ打笑ひぬ。

「どこで御修行なされましたやら、水車のやうに轉う御口が廻る事、もしあの淺草の山門で、それほどお手が廻れば、女子のあられもない、蓮葉に出ませいでも濟んだもの、ほゝゝゝ」

出過ぎた眞向を一本、まゐられし藤助、あッと呆れし頭上より、また隙間もない重ね打ちの二本目。

「折角の仰せなれど、女子の出まじい場所へ男めいて出まするほどの片輪もの、女子の身に知らいでならぬ諸禮事お茶の道には却て此の上もない不調法もの、あの道具は當世樣の殿樣が御腰の御飾刀と同じ事、たゞ人目ばかりで、ほゝ」

固り水に油の諺とは知れど、主人の庄左衞門、今更に手持無沙汰の體、さりとては案外の本田小一郎いよ〳〵差俯いて、今日を晴と華奢風流の全盛を盡せし甲斐もない無言の體、露女は自然の氣位ます〳〵高う身を持ゐて、をりをり冷かなる目元に嘲るが如き風情、一座こゝに白けては猶更ら退くに退かれぬ此の場の藤助、出過ぎた眞向を一本二本、つゞけ打に戴きながら、また懲りずまに輕薄の脣端を繕へしぬ。

「偖から見受けましたるところ、お年は互ひに同じ十八と十八、手前主人の事を申すやうなれど、まづ物の比喩が世間の風聞、水の滴るかと思はれる美男で、貴孃樣は勿論、いはずとも比類とあらう筈のない花の露、今にも滾れるかと存じまする御美質、や、古今あるまじい一對の內裡雛が出來ましたぞ、はゝゝあまり出來過ぎた情緣の神業、こりや迚も浮世の人間業でならぬ事、いづれ斯うなるべき筈の御縁でがな、はゝゝ」

きくや否、今まで風なき花の如く、身動きもせざりし露女、おもはず小膝を主從の間に向け直して、きり〳〵と柳眉を釣上げながら、さも口惜しげに物凄う、輝くばかりの黒目勝、いと冴渡りぬ。

「そこな奴衆、何といはれましたやら、もし聞違うては濟まぬ事、今一度その口で」

「は、いづれか、只今の言葉お氣に觸りましてか」

「さのみ氣には、觸りませいでも、女子一代、生涯の身に觸りましたぞ、これに居られまする御人、どれほど歴々の御大身を父御樣に持たれた御子息なら存ぜねど、それをいへば、この露も、今こそ流人ながら北國の越後家に唄はれました三萬石の荻田主馬が一人娘、武門に恥ぢぬだけの事を仕て退けて配所の月に伴はるゝ父を持ちました身、また縁あれば、あるべき筈の縁さへあれば、否、氣心にさへ合へば、いづれ男に連添ふべき女子の行末、たとひ片目片輪の人でも、いかに落魄れて、草葉の日蔭に住まふ人でも男は男、まして當世振の華奢風流に見れば見るほど猶更らの御全盛へ、何の勿體ない、なれど今この露が身に取りましてはその御全盛、いやな事、その當世樣の華奢振、すかぬ事、それを似合うた夫婦雛とは、きくも忌はしい事、その用のみで來られました御主従なれば、片時は偖置て、ちらとも逢ひませぬ筈、第一は御存じあるか、ないかは知らねど、ふとした事の起因で、三年の間、市中へ差止められました引籠りの身、こゝの主人も連れて一年の間は謹愼中の身、なればこそ、奴衆、汝、無事に歸られまするぞや、まだ二十歳に足らぬ女子と思うて、世の中らかとなされては危い事、危い事、ほゝほゝ身のほど知らぬ人の偖も大膽さ、ほゝゝゝ」

すッと座を起ちて、かご島田を菱結びに懸けたる跳元結の鷗髱、やゝ打仰いで後を見向きもやらず其のまゝの風情、彼方の一室へ明月の雲に入るが如し。

其三

川一重を隔てゝ江戸と奥州街道の境目、橋を渡ると渡らぬが都の空と旅の空、その千住の宿外れに履古せし草鞋を捨ても得やらで這込むほどの奴、いづれ浮世の落武者を搔集めし一夜の宿、どこの馬の骨やら牛の骨やら一蓮託生の木枕を並べて、はや夏の名は過ぎながら殘る暑さに夜は猶更ら寢られぬまゝの語り草、おの〳〵身上談話を聞けば偖、あはれ今の境涯より劣れる昔は一人もなし。

「かう見えても千兩の角屋敷を物の見事に潰して來たもの、春は花、秋は月、それに色戀といふ味を取添て、我も昔は男山ぢや」

「や、これでも野原でない、あたり近所の小耳に觸るぞ、くわッと仕て來た昔の男が汝、一人か」

「さうとも、どこに腹からの木枕で首骨の馴れた奴がある、いかにも其奴、ちと口の幅が廣過ぎるぞ」

「落つれば同じ谷川の水ぢや、雪でも霜でも氷でも、今更いうて返らぬ昔の喧嘩まづ偖置いて、固うなるより和から、解けて流した〳〵」

「それこそ話せる奴、といて流せとは、面白いぞ、おもしろいぞ」

「いや、あまり流し過ぎて一雫の水氣もないほど川底の乾いた男一疋、これに罷り在る、さりとては現在に生きて居る以上、少しの用意は入るぞよ」

「はゝゝその用意も偖、その身の運次第ぢや、どれほど踏占めて用心堅固に仕てからが、この木枕宿へ落込む奴は落込む奴、たゞ早いか遲いかの事、して見れば浮世、ある時あるだけに仕てやるが却て心殘りもあるまい」

「身代水の餘滴を流す流さぬは偖置て、いかにも人間その運次第ぢや、みす〳〵手に取つたやうな出世の運も、わづかの隙間から此奴、つるりと逃足の早いには驚くぞ、はゝゝ加之も聞けば今夜の同行一列、いづれも斯うなるだけの

事を其の身に仕過ぎて來た錆らしいが、さて何としても浮世の義理勘定が間違うて、腹の蟲の治らぬ哀れな奴は乃公ぢや、手柄顏に恥をいふでもないが、こりや五年も骨を惜しまず奉公した結局の果、その主人の戀を取持損うて、その代りに自己の生命を取られかけた白癡の骨頂、まだ其の上に今年の給金そのまゝ無事に差置て逃出したといふ不運の水上ぢや、はゝゝいかに太平の世でも武家奉公は禁物、もしこれが有德の町人なら、たとひ戀は取持損うたとて、勤めた給金は給金、仕ただけの骨折は骨折、隨分その場に居直つてもやらうが、人斬庖丁といふ奴、さうなれば着替一枚を持出す寸隙もないぞ見た目の男振に似合はず丸裸一貫で場末の木枕宿へ落込んだ由來まづ件の如しぢや、はゝゝゝ」

折しも火影さへ屆かぬ片隅より、むく／＼と起直りし大男。

「や、藤助、異なところで落合うたぞ、例の古編笠ぢや」

村田三平、ぬッと虎髯の盤大面に大眼玉を剝出せば、藤助、あッと驚いて、蝗の如く飛上りぬ。

川一重と橋一條ながら、江戸の繁華を離れて街道馬の鈴の音、ちやら／＼と朝夕に絶えぬ千住の宿外れ、まして一夜の木枕宿、鬼も佛も知るまじと思ひの外、また夢に結ばれぬ寢床に來の片隅より大喝一聲、藤助と呼ばれて、見れば尙更身に取て禁物の村田三平、その虎髯の大目玉に蝗の如く飛上れど、今更逃場もなし。

「や、藤助、あの番町で手柄顏する奴ならば、幸ひの落合場處ぢや、その分では差置かぬが、餘所ながら聞た今の懸歎談話で許す段か、はゝはゝちと物の哀れを催したぞ、兎も角こゝまで轉げて來い、木枕を竝べて夜と共に語り明さう、また汝の改心次第、事と品に依ては隨分この三平の家來に召使うてやらぬものでもない、戀を取持損うた代りに生命を取るやうな男でないぞ、はゝゝ」

ほッと胸を撫下せし藤助、事と品に依つては家來に召使うてやるとの一言に、おもはず吹き出しながら、もはや番町を立去りし上は何の恐るゝ事もなしと、其のまゝ自己が木枕を提げて火影も屆かぬ片隅へ這ひ行けば、三平、さても今は心に一物の蟠りもない男、から／＼と高く笑ひぬ。

「いよ／＼叩き出されたな、はゝゝ面白い、おもしろい」

「貴方これに御座らうとは存ぜず、只今も興に乘て讀上げました一卷の始末、いやはや今更ら面目もない、千日の萱を一夜に燒て退けました上、やう／＼丸裸で逃出しました藤助」

「もし首尾よう取持てば下郞で居らぬ奴そりや自業自得ぢや、なれど番町の父子此奴また餘りに無慙な奴ぢや、出來ぬ事は誰が手に何としても出來ぬ筈、せめて破れかぶれの刃物三昧と當の相手にでもする事か、それを門違ひに散々、追使うた自己の家來へ斬るの、突くのと、や、今時の知行取それほどの價値ぢや、はゝゝ」

「如斯なりましての今、申すやうなれど思へば貴方へも、第一あの割下水へも、濟まぬ事を致しました」

「もはや過ぎた事、そりや措置て、あの割下水、その後いよ／＼無事の體か、何の變りも無う暮して居らるゝか」

「居られまする筈、實は今日より十四日以前、内々そッと若主人を誘ひ出してあの本尊へ逢はせました節」

「何、逢はしたとは」

「はゝゝたゞ顏と顏だけの事、加之も其の、顏と顏だけが一つ桶に水と油を注混ぜたやうで、あまりの事に見兼ねた藤助め、つい辷り過

ぎました口が禍の基となり、あの本尊、あの美しい、あの優しげな、あの畫に描いても及ばぬ花の顔が猶更ら俄に物凄う、さらぬも氣位に取拵がれた若主人へ對うて、ようも、あれほどに從まず、さわやかに手嚴しう、わけて大膽に、いはれました事、それが藤助の行屆かぬ落度となり、大切な子息を自己の身勝手に誘ひ出して生涯の恥辱を與へたとの言下に二尺八寸の業物、ぴかりと目の前へ、や、生命から〲で、今年の給金も半分そのまゝ置去に—

三平、むくりと起直つて、腕を組みながら大額を振立てぬ。

「むゝ出來されたな、今年まだ十八の女でこそあれ、いよ〲こゝぞと思ふ場合には、それほどの事、あらう筈の氣性ぢや、ようぞ藤助、着の脚で目の玉を突かれなんだ、はゝゝゝゝ」

其四

鴉の聲もろとも東天の空、街道馬の鈴の音に夜は明放れて、千住の朝ぼらけに木枕宿の門口、ぶらりと立出でしは古編笠の村田三平と無一文の藤助。

「や、世に落ちても腹は空いてもかうした朝景色の心持、得も言はれぬぞ、ふしぎの緣で異なところへ宿り合したが、藤助、偖これから何處へ行く〲」

「どことて、丸裸一貫の身空、兎も角も今日までは、持合せの鳥目で露命を繋ぎましたものゝ、前夜が當分まづ屋根の下の寢終焉かと心得まする、番町界隈の屋敷町には從來の友達甲斐もあれど、偖あの方角は一切禁物—」

「はゝゝ哀れな音を吹く奴ぢや、さらば三平、助けて取らさうか」

「それ叶ひますればなれど貴方とて、前々より存じまする御境涯、わけて今日このごろは」

「や、おのれ下郎の叩き出されとは違ふぞ、廢れても枯れても元は千石取の侍浪人ぢや、天井の節穴を數へて居ればこそ、腰巾着の底の縫目まで人に差覗かるゝが、いざ歩いて動いて五體を世上へ運び出せば、みごと腕一本で氣樂に世を渡る男、はゝゝもし今この身に其の業ありと見て藤助何と思ふぞ、無遠慮に中てゝ見い—」

「はゝゝ差當り只今、見受けましたるところ、勿論、お主持でなし、また餘り窺ひ過ぎますれど、お金持でなし、家はなし、身に御眷族はなし、算勘の道には固り不似合の第一、萬事の優しみ風流沙汰の業には御不得手のやうなり、六尺に近い骨太の御體格、自然の武者振に出來ました御顔色、もし萬一これが人なき山中でも不意の宵闇に御出逢ひ申せば、それこそ、はゝゝゝ—」

「や、此奴、胴卷の用心でも、せずばならぬと吐すか—」

「なか〲以て、さやうの義では、なれど白晝この江戸市中では、はて何が、お手馴れて在らせられまするやら、藤助風情いかやうに考へましても、賑さへ取れませぬ事—」

「なるほど武家とはいへ太平の餘徳で、夢のやうに其の日を送る屋敷へ奉公した奴ぢや、この三平を其處まで數へ立てながら、さて心付かぬとは案外、目の屆かぬ奴、まづ兎も角も今日の一日だけ供を仕て來い、身一個ならば身一個だけの稼ぎ鹽梅、また二人分となれば二人分の働き工合、はゝゝゝ」

「何かは存じませず、それほど御重寶な御便利な業お持ちなされて、勿體ない、何として、あの千住の木枕宿へ、あらためて藤助、御家來分となりました上、いづれへか相應の御屋敷を—」

「はゝゝ古編笠一介を身代として三平の御屋敷に、戀を取持損ねて叩き出された裸下郎の藤助が御家來それ面白からうはゝゝゝいや隨分、持つまいものでもない、まづ今日の稼ぎ工

合を見せてからの相談ぢや、はゝゝゝ」

其五

戀の道には脆く正體を失うて、宵闇の椎の木より辷り落ちるほどの男、また自己が心の迷ひに染出せし生絹單衣を女一代の晴着にせられしとて、おい／＼聲をあげて泣くほどの男なれど、さて武道の業には天下泰平の當時、いづこの敵にも劣らぬ一流の村田三平、江戸市中の町道場を渡り歩いて、木太刀の音するところにさへ腕一本を差出せば、六尺の五體そのまゝ飢ず凍えぬ自然の男に出來たり。

虎髯を喰反して大日玉の色まッ黑なる面がまへ、尾羽うち枯して古編笠一介の身空、のそりとして相手かまはずに勝負を申込む體最初のうちは斬取強盜も仕兼ねまじき奴と見られしが、さて腕は見事に冴たり、氣心は正直一途なり、元來が無慾なり、また萬事無愛嬌の中に物の根本を辨へて、いづこの道場にも持主の師匠と門下第一の高弟とを破らず、加之も門外より不意に飛込來る他流の敵に出逢はゞ、自己その道場の盾となりて一歩も退かぬ猛勢に、果は諸方より珍客の如く日を爭うて招かれつゝ、到るところ渡り先生と呼ばれて其の日／＼の代稽古を頼まれぬ。

わけて利慾の念に薄き男、かくまで重寶がられて諸方に持囃されながら、自己その日の食さへあれば其の日の事こゝに足りし體、頻に引止められても夕暮の燈火を見れば一夜の宿錢を乞ひしまゝ、飄然と立出でて更に歩を停めぬ體、あまり編笠の古びたればといふものあれど、破るゝまでは我がために雨露の恩これを今更捨つるに忍びずとて放さず、それとなく着類を新調せんといふものあれど、いや秋風に袷入用の節こそ芳志に預らんとて其のまゝ垢染みたる單衣一枚、たゞ酒のみは元來の好物いつにても辭退せず、さりとて飲むだけ飲めば陶然として其の場を立去る體、清淨潔白、天眞爛漫、げに青竹を割りしが如き男振にいよ／＼諸方より珍重されつゝ、渡り先生の名ます／＼高くなりぬ。

かほどの男とも思ふ筈なき例の藤助、おもはず流れ込で落合ひし千住の木枕宿より、今は此奴こゝに丸裸一貫の立寄る影もなければこそ、すご／＼三平の背後に從うて其の日まづ本郷神田の町道場七八軒を廻りしが、いたるところの待遇振、いづれも先生々々と立てられて、加之も木太刀一本を手に持てば、のつそりと豚の病めるが如き男忽ち飛鳥の如き活動を見るや否・藤助、あつと呆れて横手を拍ち、はつと驚いて恐れ入りぬ。

三平、また藤助を見返りて、いたるところの道場に此奴これ拙者が昔の家來、ふと出逢うて斯の落魄の身に附纏はれますると笑へば、やれ主從よく／＼の深い御緣ぢやとて、飯も酒も二人分、その夜の宿錢まで二人分、別に藤助の袂へ内々の心付を投込む者さへあれば、さらぬも案外の舌を卷たる藤助、まして外に倚る邊もない今日この頃の藤助、自己が額を平手に音高く叩いて雀躍しながら、いよ／＼大先生お屋敷なうては差づめ此奴このまゝ改めて御家來と叫び出しぬ。

其六

まつち山夕こえくれば菴崎のすみだ川原にひとりかもねん、その待乳山の蔭、その隅田川の邊、水を隔てゝ菴崎の景色を竹の窓越といへば、どれほど優しき風流の住家かと思へど、實は街道の馬糞に匂ふ千住道と泥舟を繋ぐ橋場道との落合ふ境目、西は日本堤の非人小屋に近く、北は今戸つゞきの××町に近く、山の宿に鄰りて淺草田甫の東、この江戸繁昌の市中ながら、名さへ田舍めいて追分といふ。

この追分の加之も裏屋住居、出るにも入るに

も一方口の箸函に等しく、その底の行止りに廂は破れ柱は傾いて、雨漏る板屋根の小借屋こそ、近ごろ浮世に構へし村田三平の御屋敷、例の藤助いよいよ返忠の御家來となりて、主從ここに二人の男世帶、上雞飯に朝夕の腹を膨らせつゝ燒鹽を抓んで舌鼓を打鳴しぬ。

今日も下谷の町道場を三四軒の渡り先生、はや夕暮の點燈頃、ぶらりと歸り來りて、三尺の片戸口に六尺の大兵を横へつゝ入るや否、四邊かまはぬ破鐘の大聲。

「藤助、今夜の米は何うぢや、炊置の冷飯でもあるか」

家老用人若黨下郎に女房役まで兼ねての藤助、はつと出迎ふべき玄關も奥の室も其の身そのまゝ、そこに居坐りて前後に首さへ捻れば埒のあく氣樂さ。

「や、御歸宅なされませ、米は生憎、なれど炊置は飯櫃に半分以上、幸ひ茶も熱し、召しまするか」

「いやいや、今日は或道場主の誕生日とやらで、おもふまゝ強ひ酒の振舞に逢うて來た腹この上に入らぬぞ、たゞ汝の喰ふ飯あるかといふのぢや」

「こりや過分の思召、藤助一人ならば、たしかに明日の糧まで―」

「まづ天下泰平ぢや、はゝゝゝ明日になれば明日また三四日の兵糧代を持つて歸るぞ、や、渡れば渡る世の中、この分で行けば當分、二人の生命に別條はあるまい、さして用のある生命でなうても、面白い捨場所のない以上、自然の壽命を待たうか藤助、はゝゝゝ」

まだ捨ても得やらぬ古編笠を柱に懸けて、こればかりは尾羽うち枯せど流石に男、柄絲の端も毛立たぬ大小そツと片隅に立寄せつゝ、藤助の汲出す澁茶を一口、其のまゝ身を横へて荒土の喰出でし竹簀子の天井を打仰ぎながら、さも心地よげに手足の筋骨を差伸しぬ。

「はゝゝ人が住めばこそ、家ぢや、犬が棲めば犬小屋、いや、此のごろの犬畜生め、ふしぎの世中に出逢うて我等よりは遙の全盛を極め居るぞ、犬といへば藤助、あの割下水、その後どう暮して居らるゝやら、もはや戀でも情でもない、そりや捨てた、思ひ切ツた、みごとに捨てて退けた男ながら、たゞ何となう、さて氣にかかる人々、幸いぞよ藤助、これ語るは幸ひ汝ばかりや、近う寄れ―」

過分の裏屋住居に反古張の行燈、ぽつと薄闇き火影に、村田三平、他の誕生に出逢ひし振舞酒の醉心地、肱枕の身を横たへながら、藤助に對うて幸いぞよ諦めても忘れても凡夫煩惱、これ語るは汝の外なし、せめてもの思ひやりに聞けとの言葉。

「もはや戀でなし情でなし、また元來の恩もなし義理もなし、猶更ら以て固より由緒もなし縁もなし、第一は今後さらに一切いかなことあらうとも再び訪はぬ覺悟、それで不思議や大切の品を他に預けたかのやう、絶えず朝夕の氣にもかゝり心にも忘られぬは、藤助、こりや何といふものぢや」

やうやう炊き置きの冷飯に燒鹽の茶漬腹、まだ片手に箸も放さぬ藤助、おもはず滿面を皺めながらの苦笑。

「はゝゝ白髮が不意に禪宗の難題を懸けられました、同じ事、わけて御本人の貴方樣、それほど萬事、あきらかに御得心の上で解せぬ事が何として、範圍外の藤助に」

「いや、この事ばかりは範圍外の藤助と云はさぬぞ、隨分、をりをりは本人の我等よりも圖太う大膽に深入して、おのれ一人が手柄顏に業を仕た奴、今更この返答が出來ぬで濟むか」

「やれ御無理な、これは番町の本人で、もあれば偖、浮世知らずの我儘生育、まだ十八の角前髪

相應の事と受けますれど、鬼も蛇も踏潰すやうな三十男の虎髯を生された貴方様が、はゝゝゝなれど戀といふ奴、いかにも恐ろしい曲者、こりや迚も人間業では退治の出來ぬものかと心得まする」

「むゝ偖は此奴、無念ながら、やはり戀と見えるな、まだ其の曲者を取て拋捨てた身でもないか」

「まづ戀の外、とも申上げ兼ねまするやうで、なか〳〵その曲者、さら容易う、ころ〳〵と手毬のやうには、まゐりませぬ奴で、はゝゝ」

「や、戀ならば戀に仕て置け、但し藤助、あの柳島での三平は知らず、もはや今日こゝでの三平、ものの見事に拋出す事は出來ぬにせい、やはか見苦しう組敷かれては居らぬ筈ぢや」

「いはれませずとも、その邊は萬々、さうとは存じまするが、さて其奴その曲者、いや、あの割下水の本鄕、ふしぎと番町よりも何となら案外の貴方様へ、申さば風情ありげの體、こりや番町を追出された今この藤助の追從口ではなく、實は追出されぬ前々より藤助の目で確かに見屆けました事、わけて片相手の番町は先日、あれ程顏と顏とを眞正面に差向けながら現在、手強う跳返されました折柄、こゝは殘る片相手の貴方様、さう早合點に御遠慮なされずとも、隨分また漕出す船の櫓拍子と櫂の取工合で、つい其處へ港の見えぬとも限らぬ事、いかやうな順風が吹いて來ようも知れぬ空模様、はゝゝ、一番この藤助も出汐を變へて、また乘出したい心地が致しまするぞ、はゝゝ」

「や、此奴め、まだ懲りもせいで、そろ〳〵今度は三平を浮かしにかゝつたな、もし此處を叩き出された曉は汝、どこへ行く、はゝゝ」

其七

土手三番町の本田內記が玄關の眞正面へ、これで三度目の村田三平、のそりと現れて例の古編笠を片手に垢染みたる着流しのまゝ無遠慮の大聲。

「これは今日、始めて伺うたものでもない、但し御主人へは迚も御面會の出來ぬ段を承知の上で推參いたした、また天下の直參衆として素浪人への扱ひ振、玄關拂ひ門前拂ひといふ御便利なる御勝手もあらうが、それでは却て御當家のため、ちと宜しからぬ義を抱へた男、せめて御用人衆へ御意を得たい」

折しも主人の內記は登城中、さりとて一子小一郎は部屋住の身、わけて其の後は人にも得逢はぬ半病人の體、加之も門前拂ひ玄關拂ひの口上まで自己より添て來るほどの奴、いかにも始めてでない奴、ましてや當家のため宜しからぬ義を抱へて來た男といへば、其のまゝ叩き出されもせぬ奴と、用人格の半白老爺、しぶしぶ內玄關より自己が一室へ呼入れぬ。

「主人義は只今不在中ながら、始めて來られたでもなく、また用人へとの御言葉に依つて、お逢ひ申す、もし御用あらば萬事お手短かに承る」

三平、玄關での言葉にも似合はず、わざと慇懃に襟を正しぬ。

「は、仰せに從ひ、無用の御挨拶は偖置て、今日これへ推參の當用のみ、御當家に、藤助といふ、お召使ひ——」

「や、その藤助、あれは多年、奉公いたしました者ながら、先日、不調法の次第で、出奔せしまゝ當時いづれに居りまするやら」

「いかやうな不調法で、多年の奉公人お暇になりましたか——」

「そりや主人、ぢき〳〵の事で」

「實は藤助、只今、拙者方に——」

「むゝ貴方に」

「それに就て伺ひましたる次第、不調法は不調法に致せ、出奔は出奔に致せ、拙者あらため

て召使ひまする以上、あの者に御當家よりの御差構、あられますまいか、念のため此の義を一應」

「實は、お手討にも相なるべき筈のところを、運よく逃出しましたほどの次第ながら、上分ででもあれば兎も角、また主人の心體、其の後いかやうかは存じませねど、結局は取るに足らざる下司の身でもあり、且また、はや既に他家へ奉公濟の上は、さしての事も、あるまいかと心得まする」

「いや、それで相方お互ひに安堵いたしましたぞ、あの藤助、御當家に罷り在る砌は、わけて御子息の思召に叶ひ居りましたるよし、ついては御家門の面目上、ちと世聞への風聞も御内分になさるべき筈の密事まで、委しう承知いたし居るげの奴、さるを今日その奉公先まで彼是お構ひ遊ばされては口善惡ない下司の習慣、自己の苦しまぎれ、いかやうな大事を申觸らさうも知れねば、御當家のため其の邊の御心添かたがた、ついでに拙者方へ改めて召抱へましたる義を御屆け旁、かく推參いたした、確と御主人へ申し置かれたい、はゝゝ御子息その後、あの本所の方角へ御出向なされませぬか、はゝゝゝ」

旗本と御家人との相違は大名の家來に士分と足輕ほどの相違、その旗本も天下の直參として上乘に位せる本田内記が、御家人中の出頭でもない木原庄左衛門のため、一度ならず二度までも跳返されたる鬱、加之も二度目は戀の的とせし十八の女の口より秘藏の一子を眼前に罵で吐出す如く仕てやられたる父心、いかで其ままに打遣すべき、たゞ一應の申込を斷絶られてさへ身分に似合はぬ卑怯の返報せしほどの奴、この上また如何なる暗闇に積忿怨恨の念を晴らさうも知れぬ奴ぞと、餘所ながら、本所の空を氣遣うて心を痛めし折柄、おもはぬ藤助を手に入れし村田三平。

や、これ幸ひ敵の急所と、その玄關へ不意に押掛けて、わざと用人に物凄き言葉の裏表より今後の手も出せざるやう鐵釘を置いて後、冷かに微笑を含みながら、今しも門を出でんとする鼻頭へ歸り來りしは主人の本田内記。

今日は兩若黨に草履取、士分の家來二人、槍持の奴まで從へし下城の體、ずッと門内への眼に村田三平と見るや否、それと知れど、知らぬ顔の眉を顰めぬ。

「あれは何者ぢや」

三平、道も譲らず其のまゝの歩を停めて、會釋もない大聲。

「こりや主人の眼、物覺えの備お惡い事ぞ、當お屋敷への初對面は御子息これ御執念の筈と心得た女の生絹單衣を贈物に參ツたもの、あの本所の割下水、木原庄左衛門の門前では吾物の一封それ返す取らぬの義に就て猶更ら親しう懇ろに御言葉を下された村田三平、今日また推參の次第は委しう用人衆へ申置きました、結局は御當家お手討になり損ねました藤助といふ奴、あらためて拙者、召抱への御挨拶かた〴〵、はゝゝ」

言葉の端々に何とやら一物を含んで搦みかけし面魂、こいつ叩かば藪蛇の面倒とや思ひけん、其のまゝの無言に見返りもせず、玄關より打通りぬ。

三平、振返りて見送りながら、そこに居殘りし家來への捨言葉、

「流石に御身分柄、なか〳〵の御器量者ぢや、今この男の無禮を咎め立いたさば却て御身のため、宜しかるまいとの思召で、あのやうに無言のまゝ奧へ逼込まれた、はゝゝ御子息は淺草山門の雜沓中で面目を踏潰されても龜の子のやうに手足を縮められ、其のまた父御樣は素浪人の無遠慮に一言もなう唖となられた、こりや

「争はれぬ父子ぢや、はゝゝゝ」

善悪ともに天性の一本調子、元來の胸裡に前後左右のない男、からと思へば思ふだけの事を吐て、例の古編笠を面深に戴きながら、悠々と立去りぬ。

迚も叶はぬ戀と我みづから我を顧みて諦めながら、さて悟れども悟られぬ凡夫、もし叶はば一夜の契りに生涯の半を縮めても嬉しかるべき男、いづれ遂げざる情の道とは固りの覺悟ながら、さて追へども去らぬ煩惱、もし遂ぐれば其事がため百人の敵に圍まれても嬉しかるべき男。

加之も世にいふ諺、辛からば只これ一筋に辛からで、そも〳〵如何にせよとか、なまなかの優しき芳志。

あの華奢風流に全盛を盡せし若衆振さへ、何の色香もなう空嘯くほどの心に、この虎髯を喰反せし三十男が椎の木より辷り落ちたる白癡さを見苦しとも笑はず、たゞ片頰の微笑さへ漏せば綾も錦も積重ねて贈らるゝ筈の方角へ見向きもやらで、この尾羽うち枯した素浪人が心の迷ひに染出せし生絹單衣一枚を、さても女一代の浮沈の晴着に纏ひしとは、村田三平、そもそも前世いかなる報いに斯くまで惱まさるゝか苦しめらるゝか。

せめて近よらぬが身のため、一歩たりとも日に遠退くが心の安かるべき基ぞ、うか〳〵彷徨て此の上また凡夫煩惱の思情を増さば、叶はぬ戀と遂げぬ情に蒸し殺さるゝ男、やれやれ怖ろしやと二度三度その場を遁出しながら、人しれぬ朝夕、寢覺勝の枕頭、夢か、うつゝか、幻か、をり〳〵の面影、すッと音もなう朧げに立現れて、さのみ嫌はぬ風情の優しげに見下さるゝ辛さ切なさ。

忘れんとすれば猶更ら忘られず、今日この頃の三平、加之も返り忠の藤助より番町の父子が怨恨の深さを聞けば聞くほど、あるにもあられず、餘所ながら影身に添うて後難の楯ともなり防矢ともなりたき心地、わざ〳〵本田家の堂隣へ押掛けて、戀なればこそ、他の弱身に附込む男ならねど、幸ひの急所に釘言葉を打ての歸途、丸の内を通りぬけて神田橋より斜に眞一文字の淺草川の此方の山の宿、その追分の裏屋住居へ歸るべき筈の身が、いつしか狐狸に誘はるゝが如く川を彼方へ兩國橋を渡りて、や、こゝは本所と俄に心附けば、南無三寶、狼狽て割下水へ近づきぬ。

さても我れながら見下げ果たり、人こそ知らね、恥かしや面目なし、もはや此奴この方角へ用なき筈と、物に追はるゝ如く足を早めて歩みながら、無念や後髪を引戻さるゝ心地。

あの辻を横ぎりてあの屋根越の彼方、あの椎の木の蔭には其の後の體いかにぞと、また思はず振返れば、その辻より此方へ走來る男、正しく藤助なり。

三平、はッと遁出せば、藤助、其のまゝの一散に追來りぬ。

其八

心に憎からねど身には戀でないぞ、もはや捨てた、忘れた、諦めた、わざ〳〵引止められし袖を門前に拂うて立去りしまゝの今日まで、一切あの方角へは足も向けぬ男ぢやと、現在の昨夜、藤助に對うて語りし三平、やう〳〵一夜をあけし現在の今、その本所の割下水を彷徨て案外その藤助に見附けられ、鬼にも背後を見せぬ男ながら、はッと思はず遁出せば、藤助、また一散に驅出して追附きぬ。

「や、今日は本郷邊の道場まはりと仰せられましたに、こりや案外、あまりの方角違ひで」

「汝また今日は、ちと氣分が惡うて一日引籠ると吐したに、のそ〳〵と不意に何處へ出掛けた」

「はゝゝ、第一この藤助を見るや否、お逃げなされましたが不思議で」

「はゝゝかりにも主の姿を見て、追掛けるといふ奴があるか」

「追掛けませいでか、前夜の御言葉、もはや本所は禁物と承りましたに、今あの辻を御通行の體、ちらと、はゝゝゝなれど本所と本郷、はて一字だけ藤助の聞違ひでがな」

「此奴め、兎も角も主の事は措置て、まづ不審は家來の分より詮議ぢや、いづれへ何の用で參ツた」

「この本所で、この割下水で、この藤助が内々出向きまするところ、差當り椎の木の小蔭より外には」

「そりやこそ下司根性、おのれが腹加減で他の疾病を業三昧、入らざる無用の詮を探廻したな、折角こゝまで出來した三平、丸潰れぢや、事と次第に依ては汝、また叩き出されるぞツ」

「叩き出されるのは愚かな事、これで藤助お手討になれば本望、入らざる匙加減か、みごと面白う仕て來た憂い奴か、委細は萬事お聞取の上でこそ、はゝゝ何は措置まづ平等いよ／＼美はしう、いやはや、わけて今日の風情、ようぞ簪の閒で眼球を抉られずに濟だと仰せられました先日の藤助とは違ひ、格別の今日この藤助へ俄かに打て變られた優しさ、情らしさ、眞實お見せ申さぬが殘念千萬さても／＼案外ぢや、ふしぎぢや、貴方樣へ、あれほどまでとは、はゝゝなれど、こゝは途中の事、ゆる／＼歸りまして、ならぬ中よりの御酒でも頂戴いたした後の事、はゝゝ」

藤助、自己が鼻柱を捻上げて、四邊を見廻しつゝ、そッと古編笠の中を差覗けば、三平、片手に虎髯を撫廻しながら、片手の握り拳を大刀の柄頭に載せての苦笑。

「藤助、此まゝ歸つてこの吹置の冷飯より外にあるまい、さりとて腰巾着は生憎、いや、はゝゝいつもながら秋風で、ものゝ哀れぢや、かゝる時の折詰、幸ひ上野か淺草あたり、足ついでの道場へ立寄て、酒料の一稼動して行かうか」

「ならば他流の手剛い奴でも來合して、その道場の立つか立たぬの堺目へ貴方樣の一太刀、はゝゝ」

「やれ、どこまで厚顔しい奴」

いたるところ[illegible]に覺えの業を切賣の浮世、ゆく先々の町道場を廻り歩いて、其の日／＼を代稽古に渡り先生の村田三平、藤助を引連れて本所より追分への歸途、淺草田原町の道場へ立寄りぬ。

折しも木太刀の激しき響に窓を滿るゝ汗臭き匂ひ、三平、まづ微笑を浮べながら、ぬつと入れば、藤助、古編笠を大切に請取りて尻切草履まで慇懃に取揃へつゝ、どれほどの酒料になるかと、八方に其の場の人數を見渡しぬ。

三平、さても武道にかけては敵なき男、息も次がず十八九人を相手に引受けながら、さらに勞れし顏色もなく悠々たる體、いざとて歸りがけの高笑。

「いつもながら、わけて今日は三平、腹の蟲めが酒々と吐すやうで、はや何とも堪難い心地、御無心ながら時の災難と思はれて、これに在られる御一人前より一合づゝの振舞を願ひたい、はゝゝまた猶更の身勝手を申すやうなれど、近ごろは山の宿の追分へ塒を構へましての事、それへ持歸つて家來と差向ひの晩酌に致したい、はゝゝ」

いとど却て自然の愛嬌、外修もなく虎髯の大口あいて笑へば、折しも道場に十七八人また思はず高笑しながら、忽ち酒組と肴組とに頭割の鳥目、合して瓶に包まんとするを、三平、いや／＼裸のまゝで頂戴いたさう、それ藤助と呼べば、さらぬも蛇の如く鎌首を立てゝ待兼

ねし藤助、はツと答へて飛込むや否、押戴いて主の背後より中腰に立出でぬ。

「どうぢや藤助、身に過分の我慾さへ求めねば、さて世の中いづこの里にも不自由のない男、

はゝゝ」

「や、實は身の差替と申せど、使へば盡きる筈の差替より藝こそ盡きぬ身の寶、今更ら感じ入りまする」

「まづ酒は三升分、それに相應の肴料もありげぢや、思ふまゝ夜と共に打寛いで飲まうぞ藤助」

「いたゞきませいでか、萬事小面倒に禮儀張た四千石の歴々奉公よりは、から氣樂に面白う打解けて主從共稼ぎの酒こそ身が肥えまする、はゝゝ」

「面白う氣樂に打解けるは宜い、なれど主從共稼ぎとは此奴、ちと脣端が過ぎるぞ、おのれ身に何の藝がある」

「は」

「は、で濟むか」

「なれど、今日ばかりは藤助、その御酒を無遠慮に頂戴するだけの藝、たしかに仕て退けました筈、はゝゝあの割下水で、加之も本尊へ、ぢき〳〵」

「ぢき〳〵が猶更ら危險ぢや、いかな藝を出したやら、見屆けいでは覺束ない奴なれど、今夜この酒を無いものに仕て兎も角、聞て取らさう」

追分の裏屋住居に貧乏德利の酒三升、纒からげの鹽鯖を焼て、飯炊鍋に叩き菜の味噌汁、主の村田三平は畫ける山賊に等しい毛胸を現はしながらの大胡坐、家來の藤助は片肌ぬぎに立働いたまゝの差對ひ、これで人しれぬ浮世の戀沙汰とは。

「藤助、このみ醉はぬうち、この酒に對しての義理がある筈ぢや」

「はゝゝ義理も人情も、まづ七八杯戴きました上の事、や、久しぶりでか、抉らるゝやうに五臟六腑へ染渡る心地、じたい酒といふもの、こいつ戀と同じ曲者で、いかな男も竟には正體を失うて、ころり、はゝゝさて今日の割下水、あの椎の木の小蔭へは、番町の本人もろとも生面の皮を剥かれました以來の藤助、申さば足踏もならぬ筈ながら、こゝに出汐を變て濟出した櫓拍子、實は只今、かやう〳〵と打明て前非後悔いたすや否、そりや不思議な緣ぢやとて案外の順風に迎へられ、主人殿と暫時、世間談話の障子越に委細を聞て居られたやら、あれ嫌な人と思うたに偖も罪のない事、これへ來られませとの優しい聲音、そも〳〵いづこの誰と思召しまする」

「はゝゝあの木原家に、庄左衞門といふ主人の外、まさか飯炊の半婆々が障子越に物もいふまい」

「加之も霞を隔てた花の匂ひ、聲ばかりでなく、その障子そろりと開けられて、にこりと思はず笑まれたが偖あの容顏、貴方樣でなうて僥倖、藤助なればこそ、五體ぶる〳〵と震うただけで氣絶もせず無事に濟みました事」

「や、何と吐す此奴、忘れたか、假初にも主從ぢやぞ」

「はゝゝなれど、かうなれば、否、これほどの事を申上げるに、いづれ少しの座興は、たとひ聊かの御耳觸りあらうとも、御許容を蒙らいでは、や、そろ〳〵酒ばかりで差引勘定の合はぬ段となりました」

「はゝゝまた其のうち着替の一枚も、稼ぎ出してやらうぞ」

「さて本尊、これへとの言葉に藤助、それへ出ましたところ、あの番町氣は一切皆無、たゞ不思議に貴方樣の事ばかり、いろ〳〵お尋ね、追分といふところは何處、いかな世帶を持たれた

ぞ、わけて汝が朝夕の嘆きといへば、嘸や氣輕に呵しい事でがな、ほゝゝゝと齒を含んで笑はれた時の美麗さ、氣高さ、もし從前のやうに自由の身なれば一度その御宿へ、訪うて見たやと、さも情らしう、ゆかしげに申された風情、こりや正しく、たゞの雲行でない證據、たしかに藤助、見屆けました、さて何として貴方様が、古今無類あれほどの女に、こゝまで、や、人間界の珍事この上もない大間違、はゝゝゝ」

三平、ぐい〳〵と茶碗酒の續け飲みに、梟の如き眞丸の大目玉を半眼に細めながら、力を極めて自己の太股きりゝと捻りぬ。

「藤助、酌せい、浮世は斯うぢや、汝も飲め、寝られぬぞ、夜明し〳〵」

其九

垣根の牽牛花、まだ葉は散切らねど、朝な〳〵の花の色、いつしか色も褪め行きて、晝は梢に蟬の聲さへ細く、夜に入れば庭の隅々に蟲の音、軒端を誘ふ風は目に見えねど、何とやら身に沁む秋心地、はや夏は過ぎて秋ぞ來にけり。

わけて世に時めく全盛の人よりは、浮世を忍ぶ顏に物おもふ身に早き秋の空、加之も主人の庄左衞門は一年の勞役、露女は三年の門外へも出られぬ身、それには然までの悲歎もなけれど、これが犬畜生の死骸たゞ一個の業、あの番町の方角より吹出せし嵐の末かと思へば、さても無念さ口惜しさ腹立しさ。

「今更ら申さうでもないが、さて世の中といふもの、これほど不運に、まゝならぬとは思ひもよらぬ事、や、心外千萬、なれど、これも萬事この庄左衞門が鬢に霜置く年甲斐のない愚鈍さ、花ならば今が春の眞盛、可惜お身を日蔭に埋めましたぞ」

「あれ、また、辛や、この身こそ、女子のあられもない、入らぬ蓮葉な業して、それがため、済まぬ事、申譯もない事、もし島に御座らう父上の御耳へ、聞えたらば、いかに何と仰せらるるやら」

「いや〳〵、もし島へ聞えましては、お身を預る庄左衞門こそ」

「島といへば、その島で今更ら、思ひ出したでもない事なれど、あの父上に、附て、この身と取替た」

「や、子息、靫負の事でがな、されば、お身よりも一歳の上、ことし十九になりまする筈、あの時、十歳で別れたまゝの今日、いかに育ちしやら、世に離れた八重の汐路の外とは申せ、殿様お側に朝夕の身、姿こそ汐風に吹かれて、さて見る影もなう、なれど、まさかに文盲の島奴にはなるまいかとの父心いや、子息の事は偖置て、たとひ再び弓矢神の武運に叶はせられずとも、せめて氏神の守護、めでたう流罪御宥免の曉を、願はくは庄左衞門が世にあるうちに」

「この身も、それぱかり朝夕……」

「庄左衞門、もし十年、若くば、こゝまでの憂節は見せませぬもの」

「いや、この身とて、もし男ならば、たとひ渡る海原で、底の藻屑にならうともいかな怖ろしい鮫、鯨の餌食にならうとも、おめ〳〵父に離れては居ぬものを」

まだ秋は深からねど、はや夜は更渡りて草葉の露雫、いかに滋くぞ宿れる、こゝにも人しれぬ涙の露、庄左衞門が老の目の雫、さても浮世なり、折から哀れを添て啼渡る初雁の一聲、さりとて何の音信もなく、通ふ文の便りもなし。

いづこも同じ浮世、こゝばかりの秋ならねど、もの思ふ身は猶更ら淋しき宿に露けき袖袂、更行く夜半に燈火の影も打沈んで、ぼッと力なげに薄闇し。

主人の庄左衞門、老の目を瞬浹きながら、俄に膝を組直して容を改めぬ。

一や、昔は昔、今は今、いかに嘆けばとて、どれほど口惜しければとて、かくなるべき運命に早くなりし上は、何とせん、たゞ自然の時節を待たう外に力も業も及ばぬ事、主従父子、互ひに八重の汐路を隔てながらも、諺にいふ物種の生命あればの世の中、また霜枯の梢にさへ春は巡り来る凡例、わけて春も春、老木の枝とは違うて、いざこれよりが初春に初咲の御身ぢやもの、さるを何事ぞ、うかと自己が年甲斐もない愚癡の涙に引入れて、はゝゝ不吉、不吉」

露女も閉ぢし絲目、やう／＼開けて、凛とせし平生の男優りに似もやらず、残る雫を袖に拭ひながら、わざと作りし笑顔、いとゞ﨟闌けて哀れ深し。

「何の、それが身の不吉でがな、老木の蔭に宿ればこそ、消もせいで今日までの露、ほゝゝよしや此のまゝ消えてからが、武運に盡き果てた流人の娘、さら／＼惜しうもない身、惜しめばとて、叶はねば是非もない事」

「いや、是非ないとて、武門に名を得られた父上さへ、一死の易きを忍んで島に在す以上、其のまゝ軽々しう捨てらるゝお身か、また不肖ながら庄左衛門、こゝに朽果ても致さざる以上、この上いかに不運の憂目に逢ふとも、萬一の事あらせて、なるべきか、たとひ世に出られずとも生涯大切のお身ぢや、女性なりとも荻田家の一粒種、うき世の憂が嫌さに我れから我が身を粗末にせられては大の不孝ぞ、縁あらば天晴れ男を見立てゝ、お身一代に氏素性は興されずとも、嫡々の血筋を傳へて二代、三代の後には」

「えゝ遺憾ぞ、いはるゝほど猶更の事、女子に生れし口惜しさ、もし男ならば、たとひ見苦しい不具にもせよ、せめて男の端ならば」

「はゝゝまた詮もない事を、女性なればこそ、あの砌、荻田主馬が一子といふ流罪を免れて今日まで無事のお身ぢや、この行末とても、いづれ女身の折柄には何か物に角立つ男より滑かに過せば過さるゝ女こそ、世に連れて萬事の心易さ、まづ／＼今を今として、まのあたりの今夜は今夜、さて更けたぞ、遠慮も無う寝ませい、寝られませい」

胸裡の柵に堰止兼ねし泪、目に溢れながら、いざ寝ませいとの言葉に首肯て、そッと其のまゝ静かに座を起ちつゝ、奥の一室の臥房へ入りし後は深く色香を包みし夜の花、いづこの誰に見られねど、枕頭の燈火を細めて雪の額に夜具うち被ぎ、はや更渡れど寝られぬまゝに猶更ら秋の夜長の物思ひ、庭の木葉を誘ふ風の音、壁を隔てゝ庄左衛門が思はず漏す溜息まで、いよ／＼耳に冴えて、さても苦しや終夜。

其十

八畳の一室を中間に隔てゝ、奥には露女の臥房、納戸の此方には主人の庄左衛門、まだ互ひに睡られねど枕に就て、はや夜半の鐘の音も過ぎぬ。

春宵の値には一刻千金の諺さへあるを惜しや一夜たりとも、これほどの名花が人しれぬ閨の獨寝に、いとゞ猶更ら哀れぞ深き、しみ／＼と身に沁む秋の夜長の憂愁、ぼッと薄闇き燈火の影に、古今の筆にも畫にも及ばぬ色香を包んで、寝られぬまゝの夜着の袖、伽羅の匂ひの漏れて浮世に通ふ行方もなし。

まして庭の梢の枯葉を吹行く夜風の音、かきならす遠音の爪琴に思ひ紛らせど、いつしか生憎の雨とやなりけん、枕頭に近く愁人の小鼓を打つが如く、軒端を傳ふ點滴に誘はるゝ心の淋しさ、いよ／＼目は冴えながら夢に等しき過越方、迚も詮なき事とは諦めながら一入さらに今の身の恨めしさ、わけて斯まで不運の行末いかになるぞと、思へば思ふほど流石に女、ことしの春も過ぎけり十八の秋、ぢッと其のまゝ

あるにもあられぬ耳朶へ、何とやら聞えし音響は庄左衞門が臥房、や、加之も俄に曲者と叫びし聲。

露女、はッと枕を放てゝ身を起すや否、さらぬも平生の氣性、まして生來は越路の雪に唄はれし北國名物の氏素性、父が記念の守護匕首を手に取て嵐に狂ふ花の面影、寢衣のまゝに間の襖を開放ちし折しも、またもや續いて尋常ならぬ悲鳴。

もはや男女の差別も火水の境もなし、たとひ鬼神が襲ひ入るとも生涯こゝに一念の業するりと拔放ちし匕首もろとも、今更ながら十八の女には僭あるまじき不敵さ、無言のまゝ、中間の一室より風に散行く木葉の如く、庄左衞門の臥房へ飛込めば、南無三寶、はや既に納戸口の雨戸を蹴放して、曲者の影は見えねど遁出す庭の足音、現在まだ耳に殘りて響く無念さ、おのれやれと思はず我を忘れて、追縋らんとせし背後の血汐に、あはれ蟲の息を絞り出せし老の苦叫。

「無用、無用ッ」

總身の根元を大力に摑んで引戻さるゝが如く、あッと我身に立返れば、跳退けし夜具の上に横はりながら、むざんや朱に染みし刺殘の首のみ、やう／＼擡げし庄左衞門を燈火の影に一目ちらと見るや其のまゝ露女今更ら心弱き泣音を立てゝ、倒るゝばかりに抱き付きぬ。

「親子には何、何者ぞ、いかなる奴、せめて其の、それ一言、この露にッ」

「無念、確と顏、見屆ける間も、なけれどいづれ、町でがな、但し無用、大切のお身ぢや、この老爺のため、また女性に入らざる、無用な事、せられますなッ」

露女、總身の力に抱起して抱占めながら、庄左衞門の耳に口、腸を抉らるゝ悲痛、胸に湧返る涙、おろ／＼聲。

「この露は、嫁、あの島にある人の妻ぞ、生涯逢はずとも妻ぢや、其方の子を良人に、持ちまするぞや、や、や」

其十一

追分といふ土地の名よりも身の運命の眼前うき世に落ちて追込まれし裏長屋の侘住居ながら、かりにも主從といへば殿樣の村田三平に家來の藤助、貧乏徳利の酒三升に纒からげの襤褸を燒いて、ゆうべの終夜を人に聞かれねばこそ、品位にもない戀沙汰に明せし今朝、まだ起出でぬ二日醉の體。

わけて眠なき秋空の雨さへ降出せし曉方にやうやう一夜の垢染みし夜具を引合うて、君臣こゝに相抱きながら雷の如き鼾の聲、沸は庇を叩いて一雫も餘さねど、流石の齒節に喰餘せし鹽鯖の骨屑を、其のまゝ枕頭に留る降屋の猫まで悠々として逃げもせぬ氣樂さ。

横に置並べし石佛二體、かくても動き出す時刻あるかと思ひの外、三平、まづ晝近き頃に目を覺して、見れば僭、いかに夜具一枚の致方もない境涯とはいへ、せめて滿足に目鼻を備へし奴でもある事か、化損ねし狸に等しき面體、あまりの面白からぬ添寢に、無言のまゝ藤助の首筋を摑めば、きやッと叫びながら跳起きんとせし寢惚面を、あはれや這從わし猫の爪に逆撫られて猶更の驚愕、狼狽たる五體いよ／＼廣くもあらぬ一室を蜻蛉の如く飛廻りぬ。

「畜生、畜生」

三平、おもはず枕を外せし高笑ひに、藤助も今更ら我れに立返りし體、手持無沙汰に猫の逃出せし戸口を引開けながら、また破廂より滴來る飛沫に面を叩かれて、そつと首を縮めし獨言。

「や、降るぞ／＼、前夜あれほどの星が今朝この雨とは」

「藤助、もはや今朝といふ世間普通に目の覺めた時刻であるまい、うかとすれば夕暮に近いぞ、

はゝゝゝゝ但し時に取ての腹加減、どうぢや」
「寝起の汐合を取違へました上、偖その腹加減も二日醉で、いつ何時やら」
「空腹の知れぬが酒の餘德、却て今日の僥倖ぢや、雨も降るぞ、出るに雨具は無し、わざ〳〵起きて喰直す珍味は無し、まゝよ藤助、また此のまゝ枕を竝べて寝ようか、はゝゝゝ主從の差別と晝夜の差別は世にある奴の事ぢや」
「身に餘る御言葉ながら、勞れて前後不覺に睡りまする時か、また醉うて夢うつゝの時なればこそ、はゝゝゝ斯う寝倒た晝日中、御免を蒙つて申せば針を植込だやうな虎髯の貴方樣とは流石の藤助も、さて聊か、はゝゝゝ」
「や、此奴、そりや此の方の言ふ事ぢや、今も今、ふと目を覺せば何の因果か今更ながら、汝のやうな奴に鼻と鼻とを突合しての寝心地はゝはゝ、わけて前夜あの戀沙汰にちと味な氣の持越した折柄、たゞ首筋を摑み出されたばかりで、素頭を叩き割られぬが生命拾ひぢやぞ」
いち〳〵言葉に荒々しき角は立てど、互ひの心は丸く打解けし境涯、四邊かまはぬ大口あいて高笑しながら、雨の日の一入さらに暮れ易く、いつしか夜に入りし後は、いよ〳〵車軸を流すが如き大雨に、さらぬも荒れたる板屋葺の天井より隙間を漏來る雨點滴、加之も生憎今夜の油は盡きて、點火のない眞黑闇に主從ただ二人。
「藤助、どこに居る」
「は、これに居りまする、この隅の壁際に身を縮めて雨宿り致し居りまする」
「はゝゝゝ家の内の雨宿りこれは妙ぢや、面白いぞ、はゝゝゝ」
折しも入口の軒下へ、俄に雨を彈く音、さては浮世、こゝにも傘持つ人の訪來し不思議さ。
いかな貧乏神も、これは案外、あまりと呆れて立寄らぬ筈の軒下へ、加之も車軸を流す大雨の日は暮果てし後、家内に居てさへ點滴の漏來る境涯を、何事ぞ、滿足に傘持つ人の訪來しとは、「たのみませう」わけて優しき女の聲に、燈火もない眞黑闇より寝ながらの鎌首を擡げし三平、「藤助、藤助」壁際の片隅に身を縮めて、古襦袢を頭上に打被りし藤助、ごそ〳〵と這出でながら、戶口へ立寄りて中腰に透し窺ふ鼻頭へ、顏は見えねど、ぷンと匂ふ伽羅の香、「こりや村田、三平と申すものの浪宅、お門違ひでがな」「その三平樣、御在宿でか」「や、いづ方より」「本所あの割下水」一入さらに聲を潛めて、露々といはるゝや否、あッと其まゝ後居に倒れし藤、助あとは絞殺さるゝが如く唸り出して、俄かの不意に方角まで取失ひしか、まッ黑闇に蟹の如く這廻りながらやう〳〵探り當てし三平の枕頭へ身を乘掛けて耳に口、かくと私語けば、三平また跳返ッて、がばと起直る勢ひに主從もろとも額と額の鉢合せ、互ひの目より火は出るとも、あはれ家内は元のまゝの眞黑闇「藤助」「はッ」「燈火を點けい」「は、燈火、は」「や此奴、うろ〳〵何を狼狽る燈火ぢや、行燈の火ぢや」いかに氣合よく受けては、はッと掌中より物の飛出すやうに答へながらも、反古張の紙さへ破れて骨ばかりなる古行燈に今夜一滴の油もない境涯。
三平、たまらず軒下に飛出して、この大雨に瞬時なりとも花の姿の勿體なやと、口に得いはねど胸に溢るゝ千萬無量、年ごろ祈りし神の眼前に現れ玉ひし心地、そッと恐る〳〵手を取れば、取られしまゝに探り入りし風情、此方には藤助、かち〳〵と頻に慌てゝ燧石を打つ音、ばッ〳〵と稻妻の如く闇を破る火奴の火影、やがて土火鉢の中より俄に燃出す焚火を見れば、手當り次第の木屑紙屑自己が頭上に被りし古襦袢まで引裂て、飴細工に等しく面を膨らしながら、總身の大息に吹立つる苦しさ、家來に劣

らぬ三平その間に半蔀の蔀戸を一枚取外して、大力の早業に木殻を曲折る如く、五六寸づつに打砕いて傍より投込む火勢いよ〳〵熾盛に炎々と燃上りぬ。「はゝゝゝ面白いぞ、時に取ての篝火ぢや、あらためて讃美、これへ御案内せい」「見苦しい茅屋は雨り御存じの筈ながら、をり悪しう此、この大雨で油賣奴も來ぬとは偖、生憎な事」障子を曲折て傍の焚火、これが何の面白い篝火ぞ、よし十八の油賣が門口に競合へばとて、行燈一臺の火皿に半分の鳥目さへ覺束ないほどの身代ながら、主從おもはず言葉を番へて振返れば、やう〳〵軒下より引入られしまゝ流石まだ戸口に立てる露女、偖も不思議や、男合羽を身に纏うて頬被かけたる大小、黑の頭巾面深に猶更ら冴えて雪を欺く眞白の目鼻のみ、描ける如くに際立ち見え、大散しの染ぬき模樣を重ねて、かるた結びの前帶に小褄きりりと引絞りつゝ、緋縮の下着に纏ふ雪の素足を惜氣もなう現しながら、かの島田の大當髮も何とやら傾き勝に、鬢髮の毛さへ亂れしのみか、降注り〳〵雨の沫と思ひしは、あはれ堪兼ねし目元の涙、三平、やう〳〵膝を進めて、今更の體に容を改めぬ、不審も不審、案外も案外、いかな仔細あらうとも、まさか存ずる我が浪宅へ、せめて庄左衞門殿でも來らるゝ事か、さるを今夜この大雨に」平生の氣風も今夜の姿も男ながら、かくの今となりては流石に女なりけり伏目勝に流るゝ涙を袖に拭ひつゝ、ゆうべ夜更けて庄左衞門が曲者に殺されし事、あけゆく空を待兼ねて兩隣家の手より組頭へ屆け出でし事、やう〳〵檢死も濟んで、いづれ曲者の詮議あるべしとは聞けど、例の沙汰にて一年禁足中の本人が其の身の油斷に不覺の死人として扱はれ、加之も相續の男子なき上は御家人の名跡を取潰さるゝとの事まで、いち〳〵涙片手に物語りし後、一入さらに無念の泣音を絞り出しぬ。

其十二

「本國の越後さへ、今は無い身、まして假の浮世住居に求めた御家人風情の家も名も取潰されてからが何の、さら〳〵惜しうは無けれど、これが自然の成行でもあらう事か、現在その曲者まで、口惜しや、あの野郎、かと思へば思ふほど猶更の事、甲斐なき女子でこそあれ、賤しい下司の種にも生れぬ身、わけて事の原因は此の身ゆゑ、もとは主從ながら九歳の春より育てられて、うみの親とも仕へて來た人を老の苦勞の果に殺さしたまゝ、おめ〳〵とは、なれど今が今、また此の江戸中に、草の葉の由縁も覺もない露、今夜こゝへの途中さへ、この大雨を幸ひの人目ないとは知りながら、もしやと男姿に忍び來ましたほどの露、たのみますは貴方樣ぞ、お馴染は薄うとも只お心の厚さに、お縋り申したい山々、せめて一念の屆くまで、あはれ妹のやうにも思召して」確とも知れぬ餘所の風聞を小耳に插んでさへ、もはや他國へ立退し筈の身を躍らして築地に朝ばらけの門を叩きし男、さるを現在の今、その本人に眼前の泣音を立てられて、この江戸中に賴むは只一人といはれし村田三平、あまりの嬉しさ有難さに大目玉より豆粒のやうなる涙を彈き出しながら、加之も聞けば聞くほどの無念と心外に、兩の拳を摑み齒を嚼鳴しつゝ虎鬚を逆立てし體、描損ねたる鍾馗の如し「や、おのれ、武士冥利の白刃にかけては飽足らぬ奴おのれ、おのれ、おのれッ」此方の土火鉢に障子の骨を砕いて燈火に代へし焚火の藤助、おもはず進出せし鼻頭へ無念の遣場もない螺の如き拳、ぬッと振廻されて飛退きぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

天下の重き禁制に觸れしもの、猶更ら油斷なく身を謹むべき筈の本原庄左衞門が、何一品

これといふ詮議の取止もない兩者の越度不覺の横死せしのみか相續の男子なき上は只さへ家名取潰して住宅は七日間に明渡すべしとの事、兩隣家の同じ御家人へ申渡されぬ、また庄左衛門が養女分の露は、翁一とより三年間市中往來差止の女ながら、義理親を失ひ住宅を召上げらるる折柄の事、その七日間に身元の引取人なくば、あらためて江戸追放との嚴しき沙汰、かく申渡さるゝや否、その引取人として奉行所へ願ひ出では、いかに花の色香を闘ふ優美の藝者かと思ひの外、山の宿の追分に奈良屋住居の虎髯を喰反した村田三平、藤助もろとも七日の間は本所割下水の本宅家へ乘込で、まづ第一に葬式の事、追善供養の佛事、さては此の後いづこへ選ぶやら家財道具の取片付まで、六尺の大兵を素丁稚の如く立働きぬ、固り生涯こゝに氏素性を定めし身ではなく、たゞ浮世を忍ぶ假の宿、家も名も捨てゝ惜しからねど、幾星霜の朝夕に住馴れしかと思へば、流石に何となう、時も秋なり餘波の寂寞、そッと軒端に散來る木葉・枚にさへ行方を案はるゝ心地、まして親とも恃みし人を非業の白刃に失うて、その初七日も濟まぬうち去らで叶はぬ袖袂、やがて暫時の情もなく追出さるゝかと思へば、いとゞ猶更の無念さ口惜しさ、家の事は三平と藤助に打任せしまま、たゞ奥の一室へ閉籠りて名花の日頃に凋れし風情、夜更けて寢もやらぬ涙もろとも專念に漏れ來る念佛の聲、一入の哀れ深し、さらぬも生命、もし現在こゝに捨てゝ用に立たば、床下に積りし塵芥よりも容易う抛出すべき三平、夜更けし後の閨かに漏れ來る唱名回向さては絶間なき線香の匂ひに無常を誘はれながら、枕を並べし藤助に對うての私語低聲一倍かうなれば藤助、もはや夜明しの酒うち喰うておもしろ可しう自己が身勝手の無沙汰では濟まぬぞ、腸の底から洗ひ直した眞實、神もつて潔白清淨の男業ぢや、いよ／＼七日の日限も今日が四日目、あとの三日で此家を明渡す以上、あの番町へは三平また別に一存のある事、但し藤助、あれほどの目に立つ花の姿を泥貝も住倦ぬる追分の裏長屋へは、加之も流石に古河の水絶えぬ諺、萬事を賴むといはれた時、この三平へ内々、そッと渡された用意の金子もあり、また十年來の家具調度も外聞の外にある以上、いづれ改めて分相應の一家を構へずばなるまい、偖その家ぢや、偖その後ぢや、家は今日明日のうち捜し出すにせい、我等兩人、かゝる折柄の力になればなるほど猶更の事うか／＼其の餘徳を喰缺いてはならぬぞ――いかにも御言葉、この藤助も最初は貴方樣を・伺はれた主のためより實は身のために利慾の敵とした奴、それが今、かうなりましたのみか、また現在の眼前、これほどの悲哀に出逢うて、もし叶はねば叩き散さうとまで覗うた色香の花守になるとは、偖よく／＼の御縁でがな、戀か情か、そりや一切、この後の藤助は知らぬ事、たゞ何處までも貴方樣といふ天晴れ男づくに使はれる男の端くれとなりまして、一事には時に取ての幸ひ、褒美と思ひの外の人斬庖丁で追出された番町への面當に―「や、よく言うた、その蟲の居どころを取違すな、男は氣で持つ世の中、知行取が嫌さに氣樂三昧の素浪人こそすれ、わづか四千石の飾り人形に出來た奴が何の、おのれッ」

人しれぬ内々そッと驅歩いて、こゝと定めし借宅へ前日のうちに家具調度一切を運び込みし上、いよ／＼今日が七日目といふ其の朝、兩隣家へ慇懃の挨拶も濟ませ、辻の町駕ながら一挺の乘物を門内へ傭ひ入れし體に、奉行所より見屆けの同心三人おもはず瞠して、お咎め中の蟄居に憚りもない路上の沙汰といへば、村田三平、例の大目玉に虎髯を喰反しつゝ、これは豫てより三年間江戸市中の往來を差止られしも

の、わけて年若き女の足弱、いかゞ致して迯延びまするや、人間なれば荷車にも積まれず、陸路なれば舟にも乗せられず、空飛ぶ鳥でなし地を潜る蟲でなし、お指圖に預りたいと、はや癇癪の青筋を現して、どいつ此奴の容赦もない面構、さらば仕方なし、せめて駕の簾を下して途中の人目を避けといへば風に散るまいものでもなし、釘付に致さうかと首途す不敵さ、うかうかすれば當時不似合なる大刀の柄を叩いて、生命不知の猪武者も仕兼ねまじき勢ひに、夢の如き太平の世の濁れ汁に湧出でし小役人、ただ互ひに顔を見合して苦笑しながら、見届けのため半町ばかりの後より從ひ行きぬ、わざと駕の簾を晴々しう開けさせて、あはれ心は涙の喪中なれど、善悪ともに身は女として今日を及ぶかぎりの晴粧、さらぬも萬人に勝れて水際の立ちし天性、加之も生れながらの氏素性、自然と備はりし武家生育の色香に綺羅の匂ひを含んで、静かに脇目も觸らず端なる擧動の態度も氣高さ美はしさ、名器の音に生あるが如き風情の駕籠と、いかなる高貴の御用かと見れば、辻番ひの町の者に思はず目を驚めて往來の歩を停めし町頭へ、そこ退けと西側の大溝に此時散らすは村田三平、渡石に平生の面體をも打棄らで、庄左衛門が遺物の借着に見苦しからぬ體、藤助まで時候に外れぬ衣服を纏うて肩臂を張りぬ、兩國橋を渡りし時は、今まで脇目も觸らぬ露女、かくなりし怨みの種あの犬の死骸、こゝにありしぞと思はず駕より外を差覗けば、三平もなんとやら今更の心地、消しも藤助、その袖そッと引いて私語きぬ、一今あの橋の袂の葭簀茶屋に、ちらと見えたは番町の若黨、さては道中に待受けて、後より來よう奴でがな一それとも知らず行過ぎし三平、暫時と駕を停めて橋の袂へ舞戻るや否、ぬッと茶店に押入りながら、誰乎に此奴と思ふ若黨風の面前に仁王立の大聲、やい、臭いぞ臭いぞ、番町臭いぞ、この臭味の根を持つ奴へ結びの傳言ぢや、本所割下水の木原庄左衛門は何者の手でやら無念の最後を遂げて、あとに取殘された露女の後見には幸ひ兼てより馴染甲斐の村田三平といふ男、今日あらためて轉居の先は神田の逢初川、委しういへば鍛治町より紺屋町へ流るゝ大溝の落合口ぢや、はゝゝゝいづれまた用ある節、忘るゝな、わざ／＼後を付けて來るに及ばず、此のまゝ立歸つて確と言置けッ

その逢初川の邊に俳諧の宗匠が住みし跡とやら、市中なれど流れ際の垣根に折しも秋の草花咲亂れて、軒淺き土庇の草屋に味噌醤油の通路まで風流の柴折戸、庭に捨石の苔さへ古びて、算盤珠の彈く／＼に不似合なれば町人の住居ともならず、馬鞍の置處に狭ければ武士の屋敷ともならず、さりとて垣一重の外には絶えず往來の足音も繁ければうき世を捨てし白髪老翁の隠家ともならで年久しく其のまゝの空屋に打過ぎしを、わざ／＼好んで僅かの世帯道具を運び込みしは舊の本所割下水より。

人しれぬ心の逢ひに染出せし生絹單衣を夢うつゝの枕頭に抱占めて、宵闇に忍びし椎の木より辿り落ちたるほどの村田三平、せめて半日なりとも打解けて優しい言葉の端だに聞けば、いかに嬉しからんとまで思ひ落ちしに、思ひきや不思議の縁の今は同じ家の内に住込で、加之も朝夕このまゝの行末を頼まるゝのみか、何事も打任されて人目は兄とも良人とも見らるゝ體に、しみ／＼と身に沁む男冥利、もはや此の虎髯が分に過ぎたる名花の露を吸はんとの戀でなし情でなし。

わけて下司ながら藤助といふ奴、四千石の大身に蝿蟲の如く召使はれしよりは、應分の裏長屋に肱を並べて主從苦樂の境涯、さては一箇の物を二箇に割つて喰はれし男づくに眞實の心體、

かくなりし今は猶更ら餘所の利慾に脇目も觸らず、奥の始末、庭の掃除、廚一切の隅々まで身に引受けて自己が世帯と立働きぬ。

　また露女は露女、思へば世の中、かくなるべき筈の運命に弄ばれて、かくなり果てし身の行末は兎も角も眼前、人は外貌によらぬ心の鬼とこそ聞きしに、これは見る目の外の優しい人に冊かれつゝ、朝夕の憂を勞はり慰さめらるる嬉しさ頼もしさ、あの口惜しい仇敵への力まで俄に立添ふ心地して、いつしか互に馴々しう何の隔意もなく貴方樣と呼し三平を三樣と呼替へ、藤助殿といひしを紫の花ゆかりの人と笑うて呼ぬ。熊の背皮を着て谷間の焼火に荒稼の網を張る山賊が、やう／＼心を改めて人里に出でしが如き村田三平も、名花一輪浮世萬人にあるまじき色香の露を含んで、情らしく三樣と呼ばるゝ可笑しさ、下手な大津畫の奴に似たる藤助までも紫の花、ゆかりの人と色めいて呼ばるる恥かしさに、主從そッと思はず顏と顏とを見合せながら、秋の寒さに額の汗を拭ひぬ。

「藤助、どこが汝、むらさきの花めいたゆかりの人ぢや、どす黒い鳶色の奴風に似て居るぞ」

「あれ、三樣のあられもない仰せ」

「や、此奴め、はゝゝゝゝ」

　江戸繁昌の市中に逢初川といふ、名さへ何とやら優しき浮世の假住居、折しも咲出でし秋の草花、その露の身の置どころに三樣と呼るゝ男、ゆかりの人と呼ぶ聲を聞けば垣根越、いかに心憎き戀と情の忍び宿かと思はれぬ、されど見れば案外、六尺の大兵を猪毛に包まれし虎鬚の三樣、絲目の切れし鳶色の奴風が南瓜畑へ落ちたる如き由緣の人、たゞ花の露それだけが萬人に勝れて珠玉かと疑はるゝ風情、猶更ら四邊近所の眉を顰むる種とぞなりぬ。白晝さへ淋しき本所割下水に御家人の軒を竝べて、加之も奥深う人しれぬ一室に伽羅の匂ひを罩めし頃とは違うて、逢初川といふ名こそ風流めけど實は神田の鍛冶町と紺屋町との堺目、夜さへ絶間なき往來の足音に紛ければ、いつしか世間の風聞こゝかと嫉妬の取沙汰、わざ／＼朝夕の垣根越を差覗く奴もあり、うろ／＼用なき門邊を彷徨く奴もあり、腹立まぎれの石礫を宵闇に抛込で遁出す奴もあり、果は自己の戀でも盜まれたるかのやうに無遠慮の大聲を張上て、神武以來の珍事出來これほど不似合の夫婦あるものか、と喚き散して行く奴もあり、いづれ涙の種、ありや迚も尋常の夫婦でないぞ幼少のころ掠うて來て今あの芳紀になるを待受けた花の色香の紋殺し、無理往生の鷲掴みでがなと、あはれ氣に私語きながら通行く奴さへあり、いち／＼其奴の面を見れば大喝一聲の下に細首を吊るしあげて逢初川へ投込む筈の男なれど、をり／＼何となき餘所ながらの小耳へちらと挿むのみの三平、それさへ思はず滿面を皺めて座にも得堪へぬ冷汗、いとゞ猶更ら奥の露女に憚りつゝ、そッと廚の藤助を差招きぬ、「や、小うるさい人の口、小面倒な浮世ぢや、空に寒呼鳥の啼く本所の果とは違うて、路傍の犬の糞にさへ見物の山を築く繁華の市中へ、元來あれほどの名華一輪、其まゝ見遁さるゝ筈はなし、いづれ風聞に立つべき筈ながら、さて現在からも立ち過ぎては藤助、ちと面白うないぞ、聊か身に取つての迷惑、第一は本尊の手前、この虎鬚が可惜い色香を揉取るやうで氣の毒ぢや」「はゝゝゝ面白うないとて、實は身も切らるゝほどに嫌な御迷惑でもない筈、また氣の毒ぢやとて今更ら其のお額が、俄か細工であの花に釣合ふだけの美男ともならず、これや世間の奴等が正直、見る目に無理のないところ、朝夕この藤助さへ、や、ふしぎの緣もあればあるもの、よく／＼狼狽た月下氷神が結びかけての思案最中かと心得まする、はゝゝゝ」「白癡奴、よし其の、結び日に近

うても、今は思ひ切て帰らねばならぬ─いや、わざ〳〵切て退けられいでも、此まゝの二様、どうなりますやら、自然の結び目に御注意のない事─はゝゝまた此様、そろ〳〵夜開しの酒でも飲みたいか─果は互に打笑ふ聲、俳諧の贅女、そつと打顰いて、「あれ、何事やら、只お二人とも思へぬ顔しまはゝゝゝ」

其十三

人は太平の夢、世は元禄の繁華風流、笠も簡目に編ませし青簾のまゝの色褪めぬを常とし、草履さへ伊達奴に穿替の後足を持たせて一町毎に踏捨てしといふ、その全盛の大江戸に天晴れ男が二夏を持通せし古編笠を戴きつゝ、この秋空まで垢染みたる素袷一枚に冷飯草履ぼそぼそと歩みながら、さて我は身を我ふ幸か不幸か、其の日〳〵を市中の町道場に渡り先生の桁田三平、今日は雑賀なれど新しき田舎袴を纏うて、これまで町家の道場いろ〳〵挨拶に立廻りぬ、加之も行く先々に同じ挨拶、三日、その後いづれへも暫時、本意ならぬ無気嫌に打過ぎたが、今日あらためて一通りかたへの暇は、我等これまで師の家の手分に席を借へて、其の日其の日の御相手に罷り出ましたれど、今度仔細あって今日、師匠、逢初川の辺へ転居いたした、ついては身勝手ながら今後いろ〳〵渡り歩いて御意を得られぬ境遇、さりとて知らるゝ通り元来の世間渋に不案内、わけて當世事には至極の無器用もの、これといふ外に藝のない男、やはり木太刀の音でもさせずには喰へぬ奴、太平の御治世しや、はゝゝゝ、折節の幸ひ逢初川に近い御治世町の裏通、角の酒屋の空網屋を借受て我等の持道場と致した、但し從來お馴染甲斐の方々は却て一切、いかな事あらうとも入門の義お謝絶申し置くぞただ新参の御弟子ばかりを受けまする筈の心體、評する所無音のまゝ新に同じ業を開いては相済まざる義と心得、わざと念の爲前々の御贔屓を兼ねて暫く御挨拶に立廻る桁田三平これにて御暇いたさう、や、御免なりませ─二日の間、江戸市中の下町筋、いづこの道場へも以上の外に何の世辞なき同じ口上ながら、これまでの業が確乎に物いふ身の一徳、いたるところに惜まれて、加之も贐ひの酒を強られつゝ、いよ〳〵今日こゝを挨拶の仕終りと神田辺の見附外、三河町の道場より立出でゝ、はや夕暮近き鎌倉河岸を逢初川への歸途、折しも時ならぬ秋空の一雨、ばら〳〵と降来れど、ほろ酔の面に却て小気味よき雨、其のまゝ悠々と歩みながら、ふと何気なく傍の軒下を見れば、これほどの小雨を濡でも降るかのやうに恐れての雨宿、雨に若黨に草履取もろとも空を打仰ぐ若衆姿は例の本田家の一子小一郎、道波の小島づくしで鬢分けたる重ね袷に萌黄縮緬の合羽きらきらと光らせて、目に見えねど其着の匂ひ得もいはれぬ風情、流れに添へる柳影の内槽に似たり、さらぬも三平、おもはず行道をし歩を停めて、「あた〳〵」と同じ軒下へ立寄りつゝ、加之も不意の無遠慮に主従の中間へ割込で両臂を張出しぬ、「この雨、このまゝでは何とやら、急に晴れまい雲行ぢや─小一郎主従気色ばみ、や、おのれ無禮ものといへば、かう〳〵と大聲の高笑ひ、「はゝゝゝこの軒下を借す宿の主人が言葉でもある事か、一趣託生に割込んで同じ雨宿りに少しの肩臂が觸つて何の無禮ぢや、生白き面自慢どこへ覓歩いての歸路やら、みれば女の生れ損ひ、紫帽子の歌舞伎野郎に似たる色若衆を主と押戴く分際で、他の無禮咎め猪参な奴め、そこ退け、うては暮、男ぢや、うか〳〵喋らば顎骨を踏砕くぞッ」桁田三平、折しも微る一酔かたがた市中の道場を立廻りて振舞酒に酔うたり、さらぬも元来その身に取て面白からぬ本田家の小倅まして此左衛門が横死以來の今こゝに出逢うたが幸ひの面魂、梟の如き

大日坊を突出して虎擲いよ／＼喰反せば、はッと始て心付きし主従、おもはず顔色を失ひつつ立去らんとするを、三平手早く小一郎の袖ぐいと摑みぬ、「や、他の無禮を咎めたまゝあとに一言の挨拶も殘さず何處へ行かるゝ、降る雨まだ止まぬぞ、鎌倉河岸の片町ぢや前面に雨宿りの軒下はないぞ、さりとて無益の喧嘩を仕かける男でない、するだけの辭義を置いて行かつしやい」大象の首綱をも引戻さんばかりの猿臂を伸して、片手は懷中のまゝの仁王立に小一郎が袖を摑みし勢ひ、横に振れば横に木葉の如く散るべし、前に引けば前に磁石の如く吸取らるべし、もし突放せば其まゝ飛で堀中へ落込むべき體に、兩若黨おもはず三平が腕首へ確と抱付きぬ、「只今の無禮は我等、うかと致した口、主の存ぜぬ事、こゝ放されたい」「いかやうとも御謝罪いたす、御覽の通り若輩の主人、萬事は我等兩人へ、ひらに、ひらに」

三平、やう／＼鷲摑みの手を放すや否、ぐるりと體をめぐらせば、かゝる事に得たる業、小一郎もろとも兩若黨を自然と軒下へ追込みし形勢、一はゝゝ紙子細工でない五體、これほどの小雨を厭うて、わざ／＼雨宿りせずとも身ながら、實は今こゝを通行に何氣なう、ふと見掛けた若衆振が蟲の居處に觸ッての業ぢや、この男また其方で其人と知らるゝ筈、わけて近來、本所の割下水より逢初川の邊へ花の露、そッと濺さぬやうに持て移した男といへば猶更ら合點せらるゝ筈、はゝゝゝさて互ひに名は語らねど、こゝまで打明けた以上、幸ひ遠くもない宿ぢや立寄られぬか、せめて新世帶の澁茶一杯を進ぜたい、番町より足を振出した鶺鴒といへば折も折から秋は此のごろ一入の露の身に、いかばかりか嘸や嬉しき本望、また面白う談話相手になるべき下郎も居る事、初對面の馴染みではないぞよ、はゝゝゝ」荒れたる猛牛の如く眞正面より角目立つかと思ひの外、俄に打て變りし一樣、色男の強ねたる如く優しう味に搦んで面に不似合の苦笑を含みぬ。

其日々々を渡り歩いて可惜ら業の切賣なさらずとも、それほどの武藝一流、別に一箇の町道場を構へて居ながらの大先生で濟む筈とは、藤助の言葉、親とも賴む人を失うては猶更の心細さ、わけて口惜しき番町の空を束の間も忘れぬ身、うかとすれば此の上また覗はるゝ身、あまり遠くへ行かれずに居て欲しやとは、露女の言葉、右左より勸められし此のごろの三平に何の否があるべき、鐵筒に似たる太き首骨を忽ち其の場に柔から首肯きぬ、加之も追分の裏長屋で米櫃に蜘蛛の巣の張りし頃とは違ひ、世間體は御家人風情ながら内證には人しれぬ用意金のありし古河の末流、その雫を時の方便に幸ひの事、逢初川より一町あまりの角に酒屋の空納屋を借受けつゝ、俄普請の町道場に仕立てて、門邊の表札に墨くろ／＼と人目に立つべき筆太の大文字、上泉末流指南所村田三平の十一字を掲げ出しぬ、固り江戸市中いたるところの道場に渡り先生の名を得たる三平、猶更ら念のため改めて一禮の挨拶に立廻りしかば、これまで馴染の方々へは一切師弟の義お謝絶いたすといへど、現在の業を惜まれ腕を慕うて朝夕それとはなしに出入するもの多く、言傳へ聞傳へて誘ひ誘はれつゝ新たに入門するもの絶えず、日は淺けれど思ひの外の大繁昌、半月あまりの後には木太刀の音に四邊を鳴響かして、上泉の末流といふよりも村田流の名に高し、その村田一流の鬼をも挫ぐ大先生、人の生肝でも三盃酸にして打喰ふほどの怖ろしき面魂を備へながら、近き逢初川の宿に歸れば聞くさへ優しき三樣と呼ばれて、古今の名畫も及ばぬ笑渦の露に迎へらるゝ冥加男、いよ／＼世間の風聞に立つのみか、現在かくと見る日の門弟中には、これ

ばかりを氣にかけ過ぎて武道の稽古も進まず、あまりの羨ましさに我身の無骨を感じて浮世が嫌になる奴さへあり、両の藤助は家事一切を引受けて宿にのみ居れど、をり／＼道場へ來るを待構へし門弟ども、そッと小影に招いて内々の樣子を聞けば、此奴、また元來の惡戯もの、四邊を憚りながら聲を潛めて語り出しぬ、「や、縁は異なもの、あれが先生より男一代、捨物の生命にかけた戀ならば偖て、まだしも不思議の中に情の念力、さうかと思ふ人もあれど、實は案外、あの花のやうな色香十七の春に、浮世萬人、美男も富貴も選取次第の縁談を嫌ぢやとて、そも／＼あの眞黑な面に虎髯を喰反した六尺の大兵へ眞一文字の戀の山々、のぼりつめて一時は戀病の枕に痩衰へたほどの思情、やう／＼神佛に屆いての夫婦と見えまするか、見えぬところが猶更の深さで、加之も夜な／＼得もいはれぬ伽羅の匂ひに包んで、あの玉の腕の手枕で明暮した屏風のうち、火にさへ燒けぬ荒男を縫ひ着の間漏る風にも當てじと、百代に一夜の逢瀬を待兼ねたやうな睦言、それを木でも石でもない男一疋が檢證の獨身に聞く辛さ苦しさ、世間普通の給金では迚も無事に勤まりませぬぞ、はゝゝゝ、第一あの髯面を剃らぬといふも、本人の剃らぬではなうて剃らせぬからの事、あれほど迷うた日には何と見えるやら、土細工の達磨へ針を植込だやうな虎髯の尖頭が、ちくちくあの玉の顔へ刺す心地まで、いやはや堪らぬほどの嬉しげに」きくや否、ぼつとして氣の遠くなる奴もあり、きやッと俄に叫んで的もなく飛出す奴もあり。

其十四

元來の氏素性、うまれついての氣風、どれほど案外の男優りに出來たりとも、今は生涯を八重の汐路に流人の娘、やう／＼今年まだ二十歳に足らぬ女の身一個、まして奉行所より三年の外出を差止められし籠の鳥その餌を飼ひ羽色を守る奴さへなくば、飛ぶに飛ばれず居るに居られず、燒くも煮るも我が手の自由自在と思ひしに、思ひの外の素浪人あの虎髯奴が引取人となつて加之も神田の逢初川へ轉居以來これ見よがしの樣と聞くや否、番町の屋敷に奥深く腕を組みし本田内記、いよ／＼人しれぬ眉を逆立てぬ、たゞさへ兼てより愛子のための片敵手、かくならずとも捨置けぬ奴が、わざ／＼兩國橋の葭簀茶屋にて若黨への面憎き傳言といひ、鎌倉河岸の船宿りに傍若無八の振舞といひ、重ね重ねの我を蔑付にせし奴、おのれ其のまゝにはと思へど、いかな縁でか追出せし藤助を引摺込で加之も念のため屆けに來たほどの奴、うかとも手を出せぬ折柄、その逢初川の近傍へ町道場を構へて、ます／＼我を喧嘩腰に召招くが如き面魂、わけて世間の噂に聞けば此のごろの取沙汰、たとひ同じ家に住むとも偖こればかりは案外あまりの不似合、よもやと思ひし彼女を其のまゝ宿の妻にせしげの體、もはや本田父子の面目いづこの瀬にも立難しと、猶更ら憤怒の拳を握りぬ、わけて本人の小一郎、あるにもあられぬ無念さ、やるに遣場のない心外さ、今は叶はぬ戀よりも情よりも、夜な／＼人しれぬ心の怨恨と嫉妬に腸を掻亂されて、よしや××××の娘にもせよ彼れに增す花の色香を妻に持ちたき心、ならば彼れ等男女を世の中に生けて置きたくない氣、果は堪兼ねて斯くと父に迫れば、さらぬも父の内記、一粒種の子を思ふ胸の闇路に迷うて、いとゞ猶更ら修羅を燃しぬ、「いや待て、あの藤助さへ敵手の懷中に巣を作らずば今が今、枯草を刈取るよりも容易い業ながら、藪を叩いて蛇を出すとやらの諺で、あの下郎め聊か竿頭が面倒ぢや、まづ當分は何事も知らぬ顔わざと寛めて置て、いよ／＼こゝぞと覘ひ澄した的を外さず突落さいでは、まして三平とい

ふ素浪人め、老耄の庄左衞門とは違うて、もはや内應の手では行かぬらしい奴、なれど後日のため、兎も角も例の男を時に取つての間者、幸ひ彼奴の道場へ内々そつと、入門さして置かうぞ、はゝゝゝ今に見よ、第一は身のほども知らいで汝に辛かりし女め、入らざる腹立の返報も後足に砂を蹴あげし藤助も以上三人、あつといふ間に一時の縛ぢや、はゝゝ」

＊　＊　＊　＊　＊

宵より奥の一室にありし露女、物の本にも讀飽て、まだ寢るには早し徒然のまゝ、そツと縁戸の方へ立出づれば、折しも夕餐を差伸べて空腹の茶碗酒に代へし三平と藤助、思はず振返ながら内證を見付られし體、から／＼と高く笑ひぬ、「はゝゝあまりの靜けさ、もう臥房かと思うたに、まだ寢られませずか、こりや一段と男振を下げたところを見られましたぞ、兎角この藤助め、何に付けても酒々と吐したツて、はゝゝ」「や、何が藤助でがな、わざ／＼膳部を備へて夕餐めしますかといへば、此奴め氣の利かぬ奴ぢやとて其の、それ其の、酒の器どこで名を付けられましたやら、德利と申すものに一升分の鳥目を添へて鼻頭へ突出されし上は家來の身、主命是非もなき次第にて、はゝゝ」

露女、おもはず袖に顏を包んで打笑ひながら、平意もない此のごろの騷々しさ、「ほゝゝ三平樣が善いやら、ゆかりの人が惡いやら、そのやうな事は置いて殿御の常、をり／＼の酒氣ならでは叶はぬものとやら、憂を拂ふ玉帚とさへ聞きまするに何の、わけて一日の道場で嘸や、お疲勞なされうはずの身、もし露の口にさへ合ひますれば、お酌も致さいで濟まぬところぞ、ほゝゝ」ほろりとせし目には猶更ら冴えて美はしき花の姿、得もいはれぬ匂ひ其のまゝ其處への風情に、溢るゝ茶碗酒を兩手に捧添ながら俄に膝を組直す藤助、我れしらず德利を抱へて座を讓りし三平、いよ／＼互に改まるほどに心の醉ひを増しぬ、「藤助、早く飲め、すかぬ女性の身には酒の香も厭はるゝものぢや、わけて下司の下唇を打鳴す體、男の目にさへ見苦しいぞ、わづか一杯に今更ら何を此奴が思案顏・ぐつと飲乾して仕舞へツ」「は、この一杯ぐつと惜氣も無う埒あけまして、あとの分は偖て、いかゞなりませうぞ」「もはや盃の遣取は面倒ぢや、幸ひ相方に持合うたが時の運次第で、まづ今夜このまゝの物別れぢや」「や、物別れとは相引に致して互ひに損のない事、さるを藤助が茶碗に一杯で、貴方樣は德利を抱へたまゝ、これが運次第の物別れとは」「はゝゝそりや互角の人と人とぢや、君臣こゝに自然の禮あり、主從が平等になるか」「外の事は偖置いて、こればかりは」「見られましたか、酒となれば此奴こゝまで主從の差別もない奴、はゝゝ」「御覽ぜられましたか、酒となれば現在、こゝまで家來に無慈悲な殿樣、はゝゝ」露女いよ／＼座にも得堪へず打笑うて其のまゝ奥へ這入らんとしながら、振返つての小聲、「三樣、お酒が濟めば、あとで、そと御相談のいたしたい事、今夜に限らねど、あの奥へ」

其十五

三平おもはず後影を見送りし油斷に藤助、そツと德利を盜んで口うつしの濫飲、「や、此奴」「何が此奴で、はゝゝ」「笑うて濟むか、座興にもせよ、おのれが分の茶碗酒を乾して、主の分にまで手をかけるとは」「笑うて濟まねば、あらためて藤助、ちと御不足を申したいところ、何は偖置、目に見えたは現在の今あの優しい情らしい、わけて今夜は格別、一人の花の姿が風もないに飄然と振返つて、そも／＼いかな色香が出ましたぞ、三樣お酒が濟めば内々そツと御談話したい事、あの奥へとは、どの奥への事」「こりや藤助、靜肅にせい、聞えるぞ、聲が大き

骨を掻付けて、わざと手輕の小聲に打笑ひぬ、「何を、はゝゝ何を、いかな御世話かと思うたに、はゝゝゝこりや山の事を滋で聞くやうな門違ひ、はゝゝ」「あれ、お氣に觸れば、お謝罪もしまするに、只お門違ひとは」「はゝゝ假令この男それぞと待ち受けても、來る女の門違ひ」「來る女の、門違ひといはれまするは、來よう女のないとか」「まづ無い筈」「もし、あれば三様、何となされまするぞ、さりとて一生涯お獨身か」「あれば猶、もし其一その好奇心な女であれば、世間の手前へ御免なりませ此の面で、や、迎へまする腕か、木でなし石でなし、わけて難い奴、貞實、神もつて友白髮の末まで」「女子でさへ美貌よりも心とやらそれに何の、世を氣で持つ筈の男として顏、容姿か、はゝゝ聞しやる三様とも思はれぬ事、さて〳〵お氣の弱い御方」「や、氣も弱うなりませいでか、お身の前では猶更の事、重ね〳〵思へば思ふほど、面皮のない男ぢや」「えゝ三様、それ言はぬ事、それ、お聞き申しては、こゝに居られぬ義、消も入りたうなりまするぞこの身とて、否、これが既に一方ならぬ深い御縁、これほどの御縁あればこそ、かうも打解けて、こゝまでの思召に縋り、お力に縋る身、なれど、幸や、なれど三様、この身には、たゞ一事、いふにいはれぬ苦惱、今は立つ心願で、この事こそ其の一事お叶はねば生涯の獨身、女子一代を無にして、此のまゝ浮世に反きまする事情は何ぞ何事ぞ、餘所の獨身を背にせいでもの事ながら、この身ほど辛い理由のあらう筈もない三様、さるを可惜ら男の不吉な仰せ、一時も早う、お迎へなされて、露がための姉御とも、妹とも見て暮したく、さすれば此の上また猶更の隔意なう、お願ひ申したい事も出々、いつまで同じ家の内に獨身の露と獨身の三様では、いかに互ひの心と心が清うても、男づく〳〵といふ事を得知らぬ輕薄な人の口、また女子は女子だけに見らるゝ世間の目、いち〳〵言譯もせられねば」今が今にも戀と情に溢れし露帶、觸らば其のまゝ手に落つるかと思ひの外、きけば言葉の端々を窘殺せしが如き凛々しさに一時は上氣せて日の見えざりし三平、はツと夜の明けし心地、我れに恥ぢての兩眼を見開きぬ。

* * * * *

その後に自己ばかり悄然と取殘されし藤助の顏、主從なればこそ、もし見ず知らずの他人ならば、腰巾着の一個を押出されて濟さぬ筈の今宵、わづか酒一升を友として無事には居られぬ筈の穢れ日に、我も木でなし石でなし生て血の通ふ男一疋、實は羨しからぬ大盲苦笑を掻て、死なば此のまゝの鰥夫を煮立てながら、茶碗酒の獨り飲に間なき悶えを朦朧たる醉眼に睨み消しつゝ、それ〳〵夜着より鼻唄を唸りかけし折しも、三平、のそりと出來りぬ、藤助かくと見るや否、俄に首を縮めて額越の忍び笑ひ、きゝッ〳〵と鼬の啼音に似たり、「やれ、まだ夜が明けませぬに、わけて秋の夜の長さに、つい一跨ぎの通路を譴に御遠慮なされたやら、こりや案外お早い事、はゝゝゝ殘酒なれど、お氣付の一杯、めしませぬか、斯やうな時こそ歸つて百藥の長」三平、じろりと見遣りしのみの體、無言のまゝ夜具を引摺出して五體を横に包めば、藤助、いよ〳〵堪らず、酒には醉うたり俺はと首肯きながら、甲羅を押へられし龜の如く首を拈ツて差伸しぬ、「いかにもさう無うて叶はぬところ、かうあるべき筈は筈ながら、さて只今まで氣も狂はず神妙に運り在りました藤助め、こゝで何となりまする、ことし三十男、睡りもせいで御覽の通り、これに居りまするぞ」

いかに差伸しても首では足らず、どれほど囁づり出しても言葉で屆かぬ藤助、そッと這寄て

女房の襟髪に手をかけんとする一刹那、抜刀の柄頭に頭を強く打たれて、ぎやツと叫びながら倒れ、きゝも得やらず、仰向けしまゝに中途の苦しき聲、「ヤ仲間ども、この狼藉者を逃すな」不意の横面、今まだ無言の頭とは倍一やう／＼身を起して見れば、我よりも先、三平まづ其身の上に起直ツて、ぎろりと兩眼を光らしぬ、一驚一喝、それへ出い、おのれ今夜この三平を何と心得た、あの夜での仕置、おのれが汚い心に引當て、事も事に依りけりおのれ無禮者め、重ねて酒を與れたは我が過誤なから、そこまで喰ひ酔うて、や、主の家來に手をかけるとは此奴、ずツと出い、こりや盗賊、この三平は偽置いて、あの奥の女に済まぬぞ、やう／＼今年まだ二十歳に足らぬ身なれど、あれを世間たての女性と思ふか、この六尺の棒切が、貞實、あるにもあられぬ心に恥ぢて顔も得あげず、猶石に頭を擦るゝ心地、すご／＼引退ツて來たぞ」

其十六

小川町の前と前宿町の一區境と隔たる一町あまりの間に、舊旗本家何某の一軒を買讃して此のごろ俄かに大看板に玄關構の改築のしま、門前の賑寄、門前に佇待、さては出入に乘物の用意、下戦下女の忙しき働、いかなる有徳の武家か好奇心の町衆皆かと思へど、恭しく掲げ出せし門札には、下谷竟御大醫者小川平庵の十二字、あり／＼と現はれぬ、かくなりし身の蜜女、さらぬも犬には人しれぬ無根の數々、わけて朝夕その門前を往來の村田三平、いとゞ癇癪に觸つて面白からぬ心地、おもはず面を皺め鼻を喰はしながら、道場の稽古休息に門人を相手の茶飲話、「ヤ、世の中、頼れは頼るもんぢや、近來は人間の名醫、どこにあるやら、親兄弟の九死一生に捜し歩いても、さて知れかぬるが、犬に御の字を戴かして家來に天下御を打つた者兵學醫が此の近邊へ鼻を突くやうな大玄關を張出したぞ、四足の療治に名を得た醫者殿といへば同じ四本の脚を持た棒振りか細工もせらるゝでがな、はゝゝゝ」聊か酒氣を帶びて四邊かまはぬ大聲、木太刀の音に等しく窓を漏るゝばかりに高く笑へば、焚火夜番の罪よりも犬沙汰の悔ろしき此のごろの世、上門人いづれもおもはず眉を寄めて俯かる中に一人、かの小川平庵が身の來歴を知る物うかと饒舌出しぬ、「一體あれ木に花咲く人の運命と金庫を開ふ實見切とは、いつ何時、いかな不意に向うて來るやら、現在あの全盛に乘物を飛す實加醫者は元來、京都より流れ込で神田の多町邊に摘乞と壁一重の境涯、嬉は町内の辻掃除で晝は道傍されて町小使で夜は火の用心の拍子木を打鳴して、やう／＼露命を繋いで來た男、それの多町に飼犬の發病した時、どうした紛れ的中に何の煮汁やら、煎じ出した藥の效能が風聞の基で、偖また犬の病氣一切は不思議と其の煎藥に限るか役更の不思議、や、その後の繁昌も繁昌、住後の土藏が新込むやうな藏の大身代、平助々々と酒屋の小僧にまで呼ばれた奴が忽ち小川平庵老と立てられて夢のやうな一足飛の大出世、近ごろ聞けば當時天下出頭たる御大老あの柳澤家へも親しう召されて出入するほどの身分、また生類憐愍の御政道中にも別して戌年の御出生と聞及ぶ將軍家の御意に叶うて、いづれ近々のうち直參格にせらるゝとの事、なるほど人は世に連れての運次第」三平いよ／＼寢の蟲の躍遂る心地して一人さらに大聲の高笑ひ、「いかにも、それぢや、人らしい道では迚も出世が覺束ないぞ、なるべく人間に緣の遠い畜生か化物の御助力を頼るが第一ぢや、はゝゝゝ文武兩道を汗水に勵むよりは、せめて一筋が鼠の養でも丸薬にして飲むが近道ぢや、はゝゝゝあの犬醫者も多町で滿足に朝夕三度の飯を喰へば今日の全盛にない昔を、幸ひと喰付れた者

腹へ夜な〳〵人知れず犬の糞を舐めて喰ひ込だ冥加でがなはゝゝゝゝ—

みす〳〵飢死する奴を其のまゝの見殺にもならず、第一は無宿の行倒人、この町内の面倒なりとて、幸ひの辻小屋に住はせつゝ軒並びの朝掃除と火の用心の夜番に拾ひあげられ、やうやう多町一體の殘飯冷汁に養はれし平助が、ふしぎの運に向ひ案外の世の中に出逢うて天下御免御犬醫者小川平庵といふ俄か出世の大身代、新に厳めしき玄關屋敷を構へて六尺の肩を揃へし乗物を飛すほどの威勢、當世の冥加男これ一人と言囃されぬ、世間の目よりは兒戯にも外れし白癡の骨頂なれど、本人の身に取ては實に御犬樣の小川平庵、其のころ京都に名高き人形師を遥々と呼下して、牝牡の一對を生けるが如き巧妙の木彫に作らしめ、金銀珠玉の首輪を飾り綾錦の幕を打廻し摺箔緞子の蓐を重ねて上段の間に安置し、朝夕の燈明を奉つり三度の供物を備へ身を清めて隨喜渇仰の涙に禮拜するとの事、いつしか公儀に聞えて白銀五十枚の御褒美を賜はりしのみか、家業ながらも心掛の殊勝さ神妙の至極なりとて隔日に破格の登城を許され、將軍家御手飼の御犬脈を伺ひしかば、時を得貌の平庵いよ〳〵自己一人の天狗猛を會釋もなく伸し切に、諸侯方と雖も禮物の薄きところへは容易く招きに應ぜず、平大名か旗本衆の犬は一切呼寄せて療治するほどの體、さりとて此奴また有徳の町人よりといへば食事の箸と茶碗を抛出しても利慾に飛で行く五十七の禿頭、わづか四五年のうちに二棟の道具庫と金庫を築きあげつゝ人知れぬ内證また十三箇所の地主とまでなり終せぬ。

其十七

わけて小川平庵、其のころ百五十俵の小普請組より當時天下の大老職となりて加之も將軍家を掌中に握りしといふ柳澤美濃守が古今無類の權威を神明佛陀の如くに打仰ぐ折柄、一日これまた犬の療治に呼ばれしを幸ひ、こゝばかりは流石の利慾坊主も倒まに追從輕薄の音物を近侍の徒輩に運び込でいつしか出入を許されつゝ果は酒宴の末席にも召寄せらるゝを浮世の金城鐵壁と心得て、うか〳〵すれば日本國中ありとあらゆる人間の醫者より運上金も取立かねぬほどの勢ひに、恐れて呆れて世間いづれも目を欹て舌を卷ぬ。

さるを此の小川平庵が住居より僅か半町あまりの裏道に構へし町道場の窓を漏れて往來に聞ゆる高笑ひの罵詈嘲弄、折しも窓下へ通りかかりし平庵の下男、かくと聞くや否、走歸つて猶更尾に鰭を添へしかば、くわッと思はず憤怒の雨眼を音するばかりに光らしぬ、「や、おのれ、いかに物事を辨へぬ奴とはいへ、勿體なくも將軍家御祕藏の御犬脈を伺ひ御大老の御贔屓にさへ預かる當時この小川平庵を何と心得た生命不知ぢや、櫓炬燵の療治もする筈とは吐しも吐したぞ、こりや平庵一人に對しての奴でない、正しく天下の御政道を批判する奴ぢや、この近邊に其のまゝ捨置いては上への恐れあり、おのれ今に見よッ—

せめて五町十町の間を隔てし他所でもある事か、つい裏道の半町あまり、同じ町内に我れを罵る奴ありと聞いて、烈火の如くに憤りしのみか、天下の謀叛人でも見付出したる如くに騷ぎぬ、されど近來この鍛冶町へ新に家屋敷を構へて引移りし折柄、まだ町内に住むものの委細を知らねば、まづ内々そつと問合せしに、あの道場主は六尺大兵の、見るさへ物凄き髯男にて、加之も武藝一流に敵なしとの風聞、また逢初川の宿には妹にしても案外の不似合、妻には猶更ら凡そ江戸中にあるまじき十八九の色香を包んで、古今の名畫も及ばぬ美人ありと聞て、この平庵坊主、ことし五十九の禿頭を傾

けつゝ俄に一思案の腕を組始めぬ

＊　＊　＊

まだ宵るには早き納戸の一室に脇枕の折しも、珍らしや訪來る人の足音、靜に案内を乞ふ聲、藤助、まづ出での挨拶、いづ方よりぞと問へば、四十ばかりの見知らぬ男ながら、浮世離れたる日熱に麗態の體、これは御近處、此のごろ引移り住しましたものゝ召使、わけて初對面の甚だ御遠慮の身勝手ながら、實は内々、そと伺ひ申したい義で、わざ〳〵に夜中の推參、あしからず御取次を願ひまする　納戸の一室より障子越に平の聲、一何の御用かは知らず、藤助、そこで其まゝ、夜ふけ、藤助、振返りながらの笑ひ聲、ほゝゝ、聞かれまする通り手前主人は只今、生憎と聊か酒後の折柄で、いや寧ろお心持よう御就寢なされたとあれば、まで今夜に限らぬ事、また改めて委細は明朝、なれど、もはや御方お在宅に御近處同士、お馴染甲斐を下された事と察し、御心易う伺ひたいは、時内の風聞花も譽も及ばぬとやら、いやはや、とりわけ其の器量の美女は御當家の何、御であられまするか、但し御内儀でもなく、これは小川平庵と申して近來、醫術の評判を得ましたるものゝ家來で

きく〳〵否、藤助よりも納戸の一室に臥枕せしまゝ、平むく〳〵り起直りし體、障子越に猛牛の唸るが如し、一も、ゝ小川平庵といへば近來、あの嚴めしい玄關を構へられた犬醫者殿ぢや、その犬醫者殿が縁も由緒もない我等方へ、初めての使者口上、毛色の變つた四足の義にでも御座ッたかに思うたに、す、正しく人間の種に生れた女を指して、あり〳〵妹か女房かとは家業の外に異な問合せぢやが、藤助、門口の打締りして其の人にこれへ通させい〳〵の挨拶してくれる」

たゞ腹の蟲の不承知だけならば使者に其奴の素首を芯伏せて門口へ抛出すべき筈なれど、癇癪も癇癪、あまりの癇癪玉に觸り過ぎて呆れ果てし平、まづ其奴を無事に納戸の一室へ引入れつゝ、大胡坐のまゝ睨み返す挨拶振、藤助は此方に拳を固めて待受けながら、いざといはゞ飛込で横面を打喰はすべき勢ひ、さても奥よりの露女はいかになり行く事ぞと懐遣に小耳を欹てゝ猶更ら我身の上と思へば口惜しけの風情、それと知るや知らずや四十あまりの浮世離れたる口達者な奴、わざと輕薄の微笑を浮べつゝ、此奴また案外に大膽なり、お氣に觸りますれば、いかやうとも本人の平庵、御不足を受けますゝ覺悟、私儀は平庵に召使はるゝ

身として致方も無う今夜これへ伺ひましたる次第、この邊を篤と御合點下されまして、さて只今の一件、はゝゝゝ貴方樣お内儀とあれば一も二もない筈、萬事お斷り致して此のまゝ追返さるゝが當然の事ながら、もしや、あの女性お妹御か、但し他よりお預かりの方でもあれば、内々そッと打解けた御相談を申上げたい義で、つまるところ、あまり御容貌が勝れこの世間の風聞に立たれましたが仇に、御迷惑の程ならなれど、また浮世これが御運の開く裏となり、思ひの外の御縁作、いかな御出世なさりようも知れぬ事、はゝゝゝ一生さらりと光る大目に、掌に握するばかり虎髯を逆撫で、聞けば身が妻でもない、同胞の妹でもない、いはゞ或方より大切の預かり女、それに就て内々の相談とは、まづ兎も角聞かうぞ」「で、御内實でない以上、これ何よりの事、實は平庵、御承知の通り當今の世上に一人と無う用ひられまして、隔日に破格の登城まで許されまするほどの身分、わけて天下御政道の柄を握られまする執權職、あの御大老の柳澤家には殆ど譜代同樣の出入人とて、をり〳〵御内宴にも召されますれば、自然また種々の御内意も承る中に近來、これも世間内分の義ながら、柳澤樣おき〳〵、

の思召として平庵への御言葉、さのみ氏素性の詮鑿は入られど、芳紀、凡そ二十歳前後にて萬人に勝れた美女あらば知らせよ、第一は其の女其加に餘る出世となる事、第二には其の女の親兄弟、運よくば遠縁に連なる親戚の端まで、一時に浮び出すほどの事、もし御庫の金銀所望とあらば千金も惜しうないぞ、女の容色と氣心次第で萬金も遣はすべしとの仰せ、平庵、その以來こゝに三月あまりも油斷なく諸方詮議いたしますれど、さて廣い江戸中に名花一輪、これならばといふ美女も見當りませず、みす〳〵の運の神を取逃すかのやうな、頻と残念に心得まする折柄、幸ひ町内の風聞にて御當家に、御容貌と申し芳紀と申し、それが御内實でもない上は猶更ら以ての事、もし柳澤樣お生育分として恐れ多くも將軍家の御側へ差上げらるゝ義にもならうかと、平庵の意をうけまして私儀、わざわざ御相談のため—村田三平、きくや否、大胡坐のまゝ雙腕を組で其の男の面體、ぢつと睨みつめぬ、「いかにも身が妻でなく、妹でもなく、さる方よりの預かり女、いづれ生涯、あのまゝの獨身に白髪の末まで居らうとは、誰が目にも見えぬ筈ながら、さて小川平庵といふ大醫者殿の見出に逢うて假令、どれほどの出世、どれほどの運に叶ふか知らず、賤しい金銀に代て可惜ら清淨無垢の身を賣物同然の妾奉公に出せとは、案外の沙汰も通り越して言語に絶た慮外な奴、口は自己の口なれどようも吐したぞ、野末の小屋に連添ふとも縁あらば夫婦、妾は玉の輿でも妾ぢや、じたい平庵といふ畜生醫者、この男を何と見違うた、あの女を何と思うての使者ぢや、いふまでもなく人間に遠い奴、つまりは犬畜生と同じ腹加減に出來たればこそ、四足の療治に妙を得た醫者でもあらうが、はゝはゝあまり狼狽た的外れの鑑定ぢや、本人の坊主奴こゝへ來ぬが僥倖、おのれも素頭の缺散らぬうちに上下座して逃歸れ、や、ふしぎに相手かまはず大膽な事いふ奴、あればあるものぢや、はゝゝ—平庵が使者の四十男、あツと驚いて逃出すかと思ひの外いよ〳〵案外横強い奴、こゝぞといはぬばかりの額越に三平を見上げながら、にやりと笑ひぬ。

—お言葉、いち〳〵承りましたが、あらためて今更ら主人へ申傳へずとも、實は一昨日の晝過、あの裏道の道場にて窓を漏れたる大聲を其のまゝ聞取ました下男より逐々承知の上の平庵、かりそめにも當時の身分として聞捨には致さぬ筈ながら、それさへ一言の不足も申入れいで、かやうに別段の義を御相談いたしまするは、偖、よく〳〵の事、また妾奉公とは申せ、これが平庵その身の妾にでもの義ならば兎も角、天下の御大老たる柳澤樣ぢき〳〵の御内意として恐れ多くも將軍家お側に差上らるゝやら知れぬほどな冥加至極の事、玉の輿も輿、たゞの輿とは違うて一足飛に飛放れた御出世の水上、わざわざこの運の神を取逃されまするか、さりとては浮世、あまり勿體ない、いや、勿體ないばかりで濟めば、まだしもなれども、平庵その身の心外を借置て折角こゝまでの骨折を潰されました以上はよもや一昨日の惡口、今夜また先刻よりの雜言其のまゝには差置きますまい筈、天下御免の銘を戴いて上樣御手飼の御犬脈を伺ふな御大老の御目かけらるゝ身分で御座りまするぞ、さるを口汚う畜生醫者の、四足と同じ腹加減に出來た奴の、人間に遠い奴のと、こりや平庵の一身上ばかりでなく、いはゞ御政道に觸れた事、何と思はれまする、女としては日本一の出世女を出さるゝか但し否、一枚の業で生涯破滅の禍を取らるゝかの境目ぢや、かく申す我等も世に連て今こそ醫者の番頭役いたすが、元は武家浪人の果、たゞ素丁稚の口上使者と見られては聊か不本意の迷惑、否か、應か、確と

した御返答を承りたい一次第に本音を吹いて手強く曲り出したる體に、もはや堪らぬ村田三平、無言のまゝ猿臂を差伸すや否、胸倉ぐいと引摑みぬ、「やゝ、うぬッ、[illegible]待兼ねし、藤助、拳を振廻して叩込ぬ、一畜生めッ」

* * *

村田三平が大力の早業に取て抛げられ、藤助が握拳に蹴飛されて、口ほどにもない奴、不具にならぬを身の僥倖に逃出しながら、かくと平俺に告ぐれば、こゝな大膽者、いよ／＼坊主頭を振立てゝ猶更ら胸に一物ありけの體、その翌日夜に入りて後、人知れず內々そッと柳澤美濃守が屋敷へ驅込みぬ、いづれ此のまゝには濟むべき筈なし、いかに出直して來るやらんと、待受けし覺悟の前の三平、今朝か、今夜かと思ひの外、ふしぎや何の音もなければ、聊か張合の拔けし心地、されど此の後とし業見い奴の來次第に來で來いと臺詞に言含めて、其のまゝ平生の如く裏道の道場へ通ひぬ、平俺の使者を叩き歸してより四日目の昼頃、門口へ若黨と草履取を立置て、見馴れぬ武士一人、ぬッと不意に入來りて、「たのむ、誰か居らぬか、たのむぞ」折しも裏口に湯殿の火を焚入る藤助、急ぎ出來りしが、諸行に久しく武家奉公せし男、目早、身分の程を見て取て、さらに慇懃の腰を折屈めぬ、「は、いづれ樣より、何の御用で」「別段これといふ、公邊がましい用でもないが、柳澤家より來たものぢや、當家に露といはるゝ女性ある筈、それに逢ひたい取次せい」藤助、きくや否、はッと思ひしが、わざと落着たる體、「いかにも仰せの露と申すもの、居りまするが、まだ今年、やうやう二十歳に足りませぬ初心女の事、わけて平生より往來の隙見さへ致しませぬ身、猶更ら初對面の御方には、もし露に就ての御用とあらば、萬事、後見いたし居りまする男、只今是へ迎へまするで」「はゝゝいや其の男、わざわざ呼戻すに及ばぬぞ、よし呼びに參つたところが急には歸れまい、我等同役の一人あの道場へ向うて應對最中の筈ぢや、次第に依れば其のまま屋敷へ連行からも知れぬ折柄ぢや、但し安堵いたせ、これとて別段、むづかしう角立つた義ではないぞ、第一それに拘らず今日こゝへの用は本人の露女にある事、是非に逢はうぞ」藤助いよ／＼苦しげの體、兎も角も平生の顏に見るまではと、ます／＼小腰を屈めて、一時の方便口、「は、は、なれど、さう承りますれば、玆方なく、そこは私より申上げませいではならぬ次第、無事に籠り居りまするものゝ實は露も身、さる仔細のため、お奉行所より兼て御咎め中の女で、門口一歩もなりませぬほどの事、まして明りに勝手がましう人樣へは」「いや／＼、その憚りにも及ばぬ、元は本所割下水の御家人木原庄左衞門の養女分、さる仔細とて兩國橋の上にて御禁物を川中へ云々の事で三年市中往來差止の女と委細承知の上ぢや、老へても見いたゞ一應の取調べもなくて當時格別に重き御役柄の家來が、わざ／＼女一人を尋ねに來らるゝか、其の方は召使はれの分際、入らざる口數を置いて取次せい」いつの程にか足音もなき露女、そッと障子を開けて、畫ける如き風情、いと靜かに頭を垂れぬ、「仰せられまする露、これに御出迎ひ、手狹ながら、お通り遊ばされませ」

其十八

いつしか霜夜の鐘の音に更渡りて、いとゞ猶更靜けき奥の一室に燈火を插みながら三平も浮世の辛さ、あはれ戀にはあらぬ三平と露女、あの畜生醫者め。たゞ一疋と思ひの外、よしまた聊か事の面倒になればとて、この三平が身で濟むべき筈と思ひの外、こりや容易ならぬと手強い難題の相手に出逢うた、柳澤は當時の出頭第一、わづか百五十俵の小普請組より

天下の大老とまで這出して加之も前後無類の權勢、飛鳥も落すとやらの風聞、で、今更ながら實に口は禍の基で、さらぬも憂かる上に一人の憂目を見せまする「何の、皆この身の斷らなる不運の果でおなた、おのれやれ」、思へは思ふほど口惜しけれど、もはや大醫者の事は置いて、今日この柳澤家の人に差當る否應の返辭、是非にと迫られた時—その時、いかに返答されたか—の三平も道場で三人の奴に膝詰の難題をかけられて、なれじ、こりや先づ以て我れ一の難題ばかりと心得ますとか本人の根城に同じ時刻に攻込だ奴あらうとは、夢さら知らぬ事、わざと手間取らせて日の暮るゝを待受け、其のまゝ遠路の料理茶屋へ誘ひ出して、酒に醉はして歸して上の今夜、ゆる／＼談合いたさうと思うたは南無三寶、却て敵の術に乘せられた三平の白癡さ、つまり其の場に邪魔な我れこそ追拂はれた油斷大敵、但し其の場の返答、いかにせられたぞ」「力に思ふ貴方樣の影はなし、あの藤殿も出られず塞かれて餘所ながら氣を焦るばかりの事、この身たゞ一人が、さりとて現在、我が身の上、迚も逃れぬ深水の瀬戸と諦めて それ、嘸かし、偖いかに何と返答せられた 其の淺い、女子の智惠なれど、時に取つての事、これ僥倖に、此方よりも三箇の難題を—「やそれほどの場合で、まじろきもせず逆襲に三箇の難題を仕かけられたとは、流石に越後家の名物と唄はれた絲魚川の城主、荻田の息女ぢや」「三箇のうち、一箇は、八丈島に流罪の父を召還さるる事、一箇は、養ひ親の木原庄左衞門が下手人を急に嚴しい御吟味の上、召捕るゝ事、また一箇は此の身を年中往來差止の義を許さるゝ事、以上の三箇を御聞届け下されいでは、よしや冥加に餘るほどの有難い、思召に從へばとて流人の娘、お咎め中の女、養父恩義の仇も得返さぬ腑甲斐なきものが、勿體ない何として上々樣の御身に近づ、お伽の御奉公がならうかと—出來された、この三平それが生涯の智惠袋を絞ればとて、及ばぬ事、天晴れ出來されたぞ、加之も理詰に動かぬ難題ぢや、但し其の時、柳澤の家人奴、いかな面をせしやら」「ほほゝゝたゞ呆れ顏、一さも無うてか、はゝゝこりや愁か喧嘩腰の外に用のない三平が其の場に居らし結句の重疊、なれど柳澤が當時の勢ひ、もし萬一、以上の三箇を聞届けた曉は」「はて自害するまでの事」三平、おもはず居襟を正して其の顏を打守れば、恐ろしや自然の名花これほどの優しい色香に何として斷る不思議の大膽さ、その凄きまで美はしく冴渡る面に一點の曇らなしさう／＼百五十俵の彌太郎より身を起しながら、徳川の流れも深き五代目の水底を片手業に探りあいて、忽ち天下の大老となりしほど、柳澤美濃守、そも／＼人間と犬畜生の生命いづれが重い輕いを知らざるできや、されど戌年の將軍家を幸ひ、鹿と馬との古事を眼前の今こゝに現せし勢ひ、自己が腹心の護持院僧正を手品の師に使うて物の見事に癡けたる生類憐愍の觸令を布かしめ、また古今無雙の女色をもて大樹の根本を喰取らせんとすれど、年來の數多く勸めし美女いづれも我意に叶ふほどの魔力もなくて、只これのみ求め兼ねし折も折柄、出入坊主の犬醫者より注進の逸物、それ見て來よと差向けし家來に聞けば、猶更ら萬人に勝れし名花一輪この上なしとの事に、思はず小膝を打ちぬ、加之も其の女、固り氏素性の知れざる下司腹の生來ではなく、かの越後家に唄はれし荻田主馬が娘と聞くからにか、四邊に人なき膝詰の難題にさへ顏色も變ず氣も狼狽ず靜かに丹花の脣端を開いこ、逆寄の理詰に三箇條の難題を仕返せしと聞くや否、さても希代の才色兩全、それほどの女を暫し我が手許に仕込で、君側へ差出さば、百萬石の

大名を味方に取るよりも面白しと、陰から刺客の名劍を得たる心地いよ／＼人しれぬ手を伸しぬ、されど三箇條のうち、天下の御一門に聯なりし越後家が斷絶するほどの大騷動に善惡は偖置て其の一方の棟梁となりしもの、わけて平侍でもある事か大名分の取扱ひせられて絲魚川の城主たりし荻田主馬を、大赦の沙汰もなき今更流罪の配所より召還すは容易ならざる重大の事、たゞ養父横死の下手人を詮議の一條と本人が三年の市中往來差止を許すだけの一條とは、我が手加減に何より易き事なりとて、俄に町奉行へ内密の嚴命を下しぬ。

委細は知らず政道一切を掌中に握る時の大老より、ぴかりと稻妻の如く頭上へ浴せられし嚴命を蒙るや否、町奉行の驚愕、その日のうちに露女が引取人の村田三平を呼出して、其の後の神妙なる旨に免じ、別格の御慈悲を以て三年間江戸市中往來差止の義は今日かぎり一事、以後は本人の勝手たるべしと許せし上、養父木原庄左衞門横死の件に就て萬一それぞと思ふ心當りの者あらば憚らず内通せよと一事まで口添せし後、俄に八方へ目役の手を廻して浪に群千鳥の飛立つが如く、小事もない嚴しい詮議沙汰とぞなりぬ、かくと聞て聊か手慰の一服を盛損れた心地は大曲者の小川平庵、四足の畜生と同じ腹工合なりで櫓炬燵の小細工もする筈の奴ぢやと、嚙で吐出す如くに罵られただけの藝、また使者に立たし隣の四十男は三平の大力に逃出され藤助の握拳に張飛されしのみの業、わけて薄々ながら俄に庄左衞門が横死の詮議嚴しくなりしを漏聞て、あまり案外の不意に顏色を失ひしは、かの番町の穴より蛇の如く鎌首を立てゝ覗ひし本田内記、今は却て自己父子の影を覗はるゝ心地して青くなりぬ。

天生自然の容色、敵に覗はれては猶更ら口惜しき身の禍害となり、たま／＼味方に取られても辛や同じ身の禍害となる露女の不運さ、あはれ涙の種より咲出でし色香に生れしか、可惜ら花の姿を空しく三年の浮世に埋められて、江戸市中の往來も叶はぬ身を今こゝに許されつゝ、また束の間も得忘れざりし庄左衞門が無念の仇さへ、いづれ嚴しき詮議の曉に召捕らるゝかと思へば氣も勇みに嬉しけれど、年來の願かけて第一の念願、八重の汐路を隔てし島陰の父が事、その淋しき父が朝夕の浪枕に附添ふ人、これぞ心の底に誓ひし我が良人の事、その後さらに何の沙汰もなし、さりとて眼前、この念願が叶へば其のまゝ此の身を本意なき業に汚さで濟まぬ筈、懷かしき父のため戀しき人のため、いかな浮世の憂目に逢ふとても、怨まねど厭はねど、さしも北國に唄はれし名物の一人娘が何の淺ましさぞ、外に工夫のない事か、たとひ玉の輿にもせよ身の全盛にせよ時の榮華にせよ、それと見て喜ばるゝ父でなし、かくと聞いて譽むべき良人でもあるまじ、所詮は生命一箇の捨物、さら／＼惜からねども、同じ捨つる身ならば、一時も早う絕て久しき父の御顏を見たし、夢うつゝに等しき緣ながら、せめて半日なりとも露の名を其の人の妻と呼ばれたし、いかに平生の氣心は男優りに猛くとも、かくなれば流石に女なりけり、いつしか搔亂るゝ胸の裡、父は偖置、もし其の人に逢うての我が身、今こそ戀ならねど、これほどまでに盡されし三樣への辛さ切なさ、いとゞ猶更ら苦しう、あるにもあられぬ筈、どれほどの苦痛ぞと、はや身を寸斷に切刻まるゝ心地して打沈みしが、されど生れついての露女、顏色の端にも出さず、善いにせよ惡いにせよ今日こそ籠の鳥の雲井に放たるゝ祝ひにするとて、さらぬだに艷々しき黑髮を丘味蘇に搔上げつゝ、けふにぞ歸し花の香を添ふる紅粉の粧ひ、わざとならねど武家風と町風とを取合せし一際の伊達小袖、昔に近き神田明神へ厄

免れの御禮參詣といへば、主平、おもはず微笑を浮べて見返りぬ、「イヤ、それ何より其の事、但し此のごろの御身ぢや、けふ初めての外出に一人步行は、ちと氣がかりの折柄あの藤助を召連れて」「ほゝゝそれに及びませいでも、折角の御言葉、「藤助、藤助、これへ來い、さて明神へ參詣せらるゝぞ、隨分と油斷なく途中の萬事に氣を取外すなわけて人混雜の中では猶更ら自然と目立つ筈ぢや、うか／＼するな」「は、確と預かりまするで」「おのれ自慢顏に、わざと入らざる無用の道路を立廻らうも知れぬ奴、まかりならぬぞ」「こりや迷惑な御鑑定、この藤助、さやうな奴に見えますか」「見える段か餘所ながら夫婦面も仕兼ねぬ奴ぢや、はゝゝ」「餘所ながらも、それに似合ますれば藤助、男冥利、ついでに其のまゝ明神へ無理願ひを祈りませうか、はゝゝ」

其十九

淋しき霜枯の冬空には、いとゞ猶更ら目立つ名花一輪、逢初川の宿より鍛冶町を筋違御門に出でつゝ神田明神への途上、いかな白髮の老爺にも思はず目鏡越の步を停めさせ、年若き男には見惚り見返る魂魄、うつとりとさせて、低き藤助の鼻まで高根の心地に蠢きぬ、淸淨無垢、さてこそ神も納受ましますかと思はるゝ靈女の風情、まづ社壇に供物料を備へて後、本社に詣でて第一には八重の汐路を隔てし父が上その身の事も無理ならぬ願念を祈り果てしか、流石に半歲あまり今日が始めての珍らしさに、樓門を立出でて鳥居際なる小路角の茶店に腰うちかけながら、藤助もろとも暫し憩へば、春ならねど明神境內の絕えぬ往來、また目立ちて頻りに差覗かるゝ蒼蠅さ、「藤助、歸りませうぞ」「外に花のない冬空、せめて今暫時、時に取つての功德ぢや、世間の奴等に見せてやられませ、はゝはゝ」「あれ、また埒もないこと、三樣に告口しますぞ、ほゝゝ」「なれど、たま／＼折角の外出に此のまゝとは俗あまり本意なし、步ついでに上野か淺草へ」「淺草は禁物」「や、いかにも淺草といへば兎角に事のありげな方角、この藤助も聊か面白うない筈、はゝゝ」おもはず高く笑ひし肩口を、不意の背後より突飛されし藤助、どツと床几を辷り落ちながら、驚いて見返れば番町の本田家が用人の弟、身持放埒のため兄の勘當うけて屋敷の出入も差止められしが互ひに見知合、三十前後の骨太に着流しの大小、ぬッと立ちて、はや喧嘩腰、「藤助、珍らしいぞ、うす／＼聞けば其の後、おのれ屋敷を出奔して行方も知れぬとやら、今どこに居る、幸ひ兼てより何をがなと思うた主と兄への土產ぢや、同道せい、否と吐さば引摺り行くぞ」「幸ひの土產ぢや引摺り行く、はゝゝ今この藤助、あの本田家に拾ひの土產となるかならぬか、面白い、みごと引摺られて行かう」「うぬ文句は入らぬ、いざ來い」「いや、行かいでか」うたてや、また退くに退かれぬ場合ぞと、おもはず中間を隔てし靈女、すッと水際立ちて濟るが如し、「よし連行かう人ありとて、今此身の供を外してどこへ、控へて居や、貴方また何處の御人やら知らねど、理不盡に途中より、元は存ぜぬ事、只今は遣られませぬぞ、もし達てとの仰せなれば、それも藤助に行かで叶はぬ仔細あれば、この身、宿許まで歸りましての上、あらためて進ぜませう、番町の本田家とは、內記樣といはれまする四千石取の旗本衆でがな、ほゝゝ事の次第によりましては、御所望なうても、手前方より連れて參りたいほどの折柄」境內の人足を一時に吸取りし見物、はや茶店の軒下を埋めて、黑山の如き中より悠々と割て出でし二人の武士、いづれも編笠越ながら敵手の男に立寄ると見れば、其のまゝ左右より插みて、加之も此方に對うては慇懃の體、「こゝ構はず出られませ」靈女

訴かりながら其のまゝ足早に搦門の外へ立出づれば、こゝにも一人の武士、また同じ笠越に待受けて、我等三人は内々柳澤家より近來大切の御身を護るもの、あとに念なう歸られよとの言葉を聞くや否、彼女はツと兩眼を閉ぢぬ、さても恐ろしや、これほど深き執心とも思はざりしを、はや既に斯くまで見込まれし我が身かと、あだなる情の鏈鎖に縛られたる心地、加之も三日目、町奉行より村田三平を呼出しての沙汰に、豫て嚴しき詮議のところ、木原庄左衛門か下手人は今回召捕て近日御仕置に相成るぞ、元來その曲者は御直参本田内記の家來ながら當時勘當の者なれば、主人に何の御咎なし、但し別段また身分柄不取締の廉にて當主内記は閉門謹愼を仰付られたりと申渡され、格別の思召を以て斯く落着の上は餘事の追訴一切あるべからずとの口達まで添られぬ、さては案に違はず、庄左衛門の仇は正しく本田父子の業、手を下せし曲者は神田明神の境内にて出遇ひし奴かと今更の無念さ、みす〳〵眼前に理不盡の喧嘩を仕かけられながら、おめ〳〵加之も其のまゝの無事に見逃せしを悔めど、もはや町奉行の手に召捕れて、當の内記また閉門になりしのみか餘事の追訴一切ならぬとの念は、流石に打込む寸隙もない柳澤美濃守の指圖振、前後あまり際どく行屆いたる體に、その後の露女、いよ〳〵薄氣味惡し。

時に取ての方便なれど、みごとの逆寄に跳返したる三箇の難題、一箇の我が身に就て三年の市中往來差止は既に許されたり、その一箇の養父に就て半歳の朝夕を無念の涙に忍びし曲者は既に召捕られたり、もはや殘る一箇は八丈島の父が上、もしや萬一これさへ叶ひし曉は、榮華の外に情を知らぬ浮世の目よりは女生涯全盛の頂上ながら、神も佛も恨めしや人しれぬ我が心の苦しさは落花狼藉。

村田三平、また口にこそ得いはねまして今は宵闇の椎の木より辷り落ちし戀にもあらぬ男づく、よしや戀にせよ、あたら名花の意を嵐に誘うて我が物とも願はぬほどの身ながら、さりとては斯まで不思議の緣に聯なりし今更ら、玉の輿にもあれ、黄金の臺にもあれ、此のまゝ餘所に取らるゝが何の面白かるべき。

ならば固り不似合の我が手にも折らず、また他人にも折らせず、まことや女一代を取潰すに等しき我が罪は深けれど、こればかりは循も前世の因果か、あはれ生涯あのまゝの清淨無垢に過させたく、四時不斷の名花一輪、いつまでも此のまゝに守りたし。

＊　＊　＊　＊

行末いかな運命にやら、逢初川の宿、はや夕暮の門口に一挺の女乘物を据て、その駕脇に添へる武士一人、をり〳〵待兼顏に家の内を差覗きぬ。

濱の藥助は身も心も落着かで、出つ入りつ頻に氣を採む體、奥の一室には露女と三平、もしこれが連添ふ良人ならば、たとひ身を寸斷にせらるゝとも行くまじき筈の風情、もしこれが連添ふ妻ならば、たとひ一時に生涯の血を流しても遣るまじき筈の顏色、そッと互ひに聲を潛めて私語きぬ、「三樣、もはや斯うなれば斯うなりし上の事、今更ら悔めばとて詮も甲斐も屆かぬ身、第一あの乘物を空のまゝ荷うて歸さるる相手でなし、なれど父の安否、それ聞くまでは、この露いづこの誰に恐れて、おめ〳〵何の」「や、いかにも其處ぢや、その心さへ確となれば天晴れ男も同じ事、但し父御の安否、きかれた上は」「たゞ安否を聞くだけには取られませぬ身、現在この赦免狀を送るぞと言はれても、正しう父の顏、眼前に見るまでは」「なれど、なみなみの係人とは違ひ、當時の天下政道に只一人の權威と聞及ぶ柳澤美濃守、容易く叶はぬ

筈の事を猾吏の案外、何の苦も無う叶へて、加之も今夜の不意にも、萬々一人質にせられた父御その座にあらば其の座の即答、何とせらるゝ一あれ様の、今更事々しい、もし萬々一その場となれば、過日もいふ通りの露が身の果は、この生命一箇で濟む事ぞ　それ痛はしの無殘、さりとては運命、いよ／＼それと覺悟せられてか　入らぬ生命一箇に代に暫時なりとも、戀しい、ゆかしい、懷かしい十年振りの父にさへ逢へば現世の本望、また一旦、呼還されたト上は、便船の積荷でもない荻田主馬、いまな事あればとて、再び元の島へ其のまゝ追流さるゝ父では無からう筈、わけて榮華全盛、どれほどの出世になればとて、其の色香を幸ひの賣物にして時の權威に媚る其の身の流罪を許さるゝが、嬉しからう筈のない父、逢へば其の場で只一言、死ねとの聲を名殘に聞きまする覺悟ぞ、いづれにしても露の消際、草の葉末を轉がるよりも果敢ない身、なれど今夜は三樣、それまでの事も無うて濟む筈、この露を一目、見ようとての迎ひでがな、さても當時の世の中に一の人といはるゝほどの眼力、何と見らるゝやら、ほゝゝゝ　思はず聲を含んで笑ひながら鷲の毛一筋も覺らず、かくなりし今吏の未練氣も無う、キッと座を起ちし草々にて、流石の猾吏また言葉もなき體、一室を出でし後姿を見送れば、同じ家内に住みながら、最とゞ見る度毎に立勝る名花自然の風情、まして女色をもて天下に業を行はんとするもの目には古今無雙の逸物、何として無事に見遁さるべき。

* * * * *

戰國の太閤以來、あれ、今當世の柳澤と唄はれて、下大名の味噌摺用人にも足らぬ一握りの痩身代より武家の圖白に等しき天下の大老となりしのみか、將軍家の血を分けし連枝ならでは叶はぬ筈の甲府の城を預けられ、正しく葵の一門ならでは及ばぬ金紋の挾箱と虎の皮の鞍覆まで許されし其の守の勢威、やがては甲斐と信濃の兩國に二十一足飛の百萬石に封ぜらるべき風聞さへ傳はりし折柄の事。

その柳澤美濃守が面前へ引出されし露女、もはや身動きもならぬ運命の底、煮るといはゞ煮られ、燒くといはゞ燒かるゝ身ながら、さても萬人に勝れし天生の容色を人しれぬ内々の乘物に迎へ取らるゝだけの仔細ありて呼寄せられしもの、わざと屋敷の奥深き庭傳ひに導かれつゝ、小姓の外は人なき案外の閑室加之も心易げに打解けたる體、猾吏薄氣味惡し。

其二十

まことや聞きしに勝る露女が風情を、飢ゑたる鷹の餌を覗ふが如く、じろりと一目、するどき眼力に打守りし美濃守、さりとて面には優しき微笑を浮べて、言葉の端まで手弱う柔和なり、「ようこそ來た、それほどの容貌を持ちながら、まだ今日まで緣にも付かざりしとは不思議ぢや、あまり男選擇が過ぎた爲でがな、はゝは、」露女、一人の小姓に携れつゝ、まばゆき銀燭に左右より照されて、伏したる大前髪の雪顏、何の恐れ氣もなう、どこに一點の蓮とらしき顏色もなう、いはゞ自然の大膽さ、憎らしきほどに凛々しう汐渡る花の美顏、靜かに擡げぬ、「賤しい身の女を、かやうに格別の御目見、仰せ付けられまする事、勿體ない身の冥加と心得まする　いえ、元來の下司種ではない筈、その氏ある父を八重の汐路の空に置いて、頼れぬ浮世に身一箇の力ない境涯、わけて年齒も行かぬ女の事、嘸やと心根、察し入るぞよ　はい、ありがたう存じまする　また不運に母もない身とやら、定めて朝夕、猾吏の懷かしさ、一入、父に逢ひたう思ふでがな一たとへどれほど、逢ひたう存じましても、かりそめの事とは違ひ、御上より遠島流罪の父が身、逢も叶はぬ業と、

の上」「むゝ確實に聞屆けた、但し露、その內沙汰を遣はすまで、いかな事ありとも、身勝手はならぬぞ」「はい、謹んで、御許の一室に、控へ居りまする」

其二十一

其の夜は其のまゝの無事、また同じ乘物にて大切氣に送り歸されしのみか、翌日、なみ〳〵の町女には過ぎて用なき不相應なる錦繍の衣裳地五巻に化粧料の金子百兩、まづ當座の引出物として贈られし露女、さても何とやら物凄し、はや我が身を犧牲に備らるゝ心地。

されど舊主たる越後家再興の沙汰さへないに、舊臣棟梁の父ばかりが流罪を免の事、いかに政道隨一の人たりとも、掌を翻すやうには容易う出來まじき筈、その父の顏を見るまではとの言葉を殘せし我が身、今日の眼前に迫りし事でもなく、まだ暫しの月日はありながら、さて案外の無事に其の場を歸されて、かくも慇懃に音物を贈らるゝ上は、いづれ遁れぬ身の運命。

なつかしや一時も早く父に逢ひたし、戀しや父の影身に添ふ人も見たし、さりとて逢へば孝になるやら不孝になるやら、見ればとて嬉しう添遂げらるゝ緣でなし。

かなしや一日なりとも此まゝに清淨の我が身を保ちたし、さりとて身を保たば生涯このまゝに座を隔てし父子、同じ世の中に生きながらの甲斐もなく、また其の人を見もし其の人に見らるゝ時もなし。

それのみか、きのふ今日は裏道の道場へも行かで、あはれや六尺虎髯の鐵も石も踏拔くやうなる大男が、はか〴〵しう物さへ得いはず、しをしをと打濕れて何とやら首垂勝の三平を見れば見るほど、稽吏の辛さ苦しさ、平生は大聲に笑ひ散して呵しけの藤助までが、俄の陰氣に閉籠められし體、さても我が身ながら罪深しと、人しれぬ夜半の枕紙を濡らしぬ。

もし氏なき下司下郎の種に生れたらば、時の大老より天下の將軍家が寵に進ぜらるゝ事、まこと女一代こゝに榮華無上の全盛ながら、なまなか越路の雪もろとも淸く唄はれし名物の家に生れしのみか、おめ〳〵主家の亡滅を餘所に見て我が身一箇の流罪を赦す緣に脱れまじき父の子、加之も片目片脚の不具に生れたらば、こゝまで的に取らるゝ花の色香もなく、また戀する人への義理も薄く戀せらるゝ人への操もなくて、かくまで苦き心の淵瀬には沈むまじきを、罪深くも女らしげの目鼻を備へて浮世の淫奔女にも生育ざりし我が生涯、今が十九の霜月、あけなば二十歳の春に消ゆべき露とは、よく〳〵前世の因果に名付けられしか、と、夜更けし燈火の影に其の身を飾る錦繍の小袖地、見るさへ淺ましく罪根の種、わけて誰がための化粧料ぞ、百兩の小判きら〳〵と光輝く憎さ腹立しさ。

＊　＊　＊　＊

藩上一切の沙汰を預かる御右筆の家柄、父祖傳來こゝに同じ名を四代目の向井將監、その屋敷の奧深き一室に客分の如く扱はれながら、偖また座敷牢の如く閉籠められしは、荻田主馬、當年五十八歳、高橋毅負、當年二十一歳、何事かは知らず磯馴松に風の音信もなき使の便船に呼還されて、主從もろとも夢の心地。

越後家全盛の昔、高田一藩の棟梁と立てられ越路の名物と唄はれて、別に絲魚川の城まで持ちし大名分の身ながら、主家斷絶の曉、小うたに唄ふ八重の汐路の浪枕、鳥も通はぬ八丈島へ流されてより十年の春秋浮世を隔てし鬢髮に一入の霜を置きつゝ、さらぬも打寄する朝夕の年浪に堪へでや、いとゞ肉は落ち身は痩せて骨のみ高く、ありし面影の其人かとも見えぬ哀さ、憂に積りし半白の鬢髯を撫でて自然の汐風に皺萠れたる顏、—毅負、汝まだ小兒の頃で確と

は知るまいが、この向井家は我等流罪の時に送られし船手の頭領ぢや、さるを十年振り今かく俄の不意に呼戻されて、大赦御免の沙汰ならば一應まづ公儀へ召出さるべき身が、また同じ向井將監の手に渡りしまゝ、今日で三日目、加之も當家の主人にさへ逢はれぬとは御吏の不審、いかにも仔細あり氣ぢや。なれど何事も運次第の成行、平生の教訓こゝぞ、たゞ神妙に謹んで、諸事萬端に見苦しからぬやう、かりにも流人に仕へし島生育と言はるゝな」兒小性のまゝ水や空なる流罪の配所に從ひ行きて、今日までの朝夕を師父の如くに仕へし靱負、十年の憂身を絶え間なき汐風に吹曝されつゝ、頭髪は赤く、縮れて目のみ白く顏色まツ黑々の島奴となれど、流石に元來の男振、まして名物の手許に只一人を仕込まれし今年二十一の骨柄、世間に利悧出世の作法よりも自然の禮儀を身に備へて、殊に餘念なき小膝を進めぬ。「は、今後の御安否、いかやうになりませうとも、お言葉の外は、わけて島とは違ひ、申さば靱負、これが物心を覺えましてより始ての浮世に、うまれ出ましたる三歲兒も同じ事と、心得居りまする」「それ、哀れなことをいふぞよ、この主馬、とても何となるにせい、せめて汝だけは今この時を[illegible]、十年の配所に仕へてくれた一禮を演べて、うみの父に渡さいでか、あの庄左衞門は御家人の株を求めて本所に世を忍ぶ筈ぢや」「靱負め、父に、うみの父に逢ひまするよりも、嘸や御心中、その父が許に、あられまする筈の」「露か、露か、むむあれも、今年は二十歳の春ぢや、いかになりつらうぞ、庄左衞門の介抱、如才なくとも、母には早く別れて、父は流人、まして昔に變る境涯で育ちをつた女ぢや」

其二十二

おもはぬ不意の便船にて八丈島より召還されし荻田主馬、其のまゝ御船手の向井家に引取られて、客分の如く座敷牢の如く差置かれし四日目の夜、主人の將監、始めて小書院に呼迎へぬ。

まだ確と赦免にならざる流罪人ながら、世に顯はれし越後家の名物とて、加之も時の大老たる柳澤美濃守が内意をうけし向井將監、慇懃に疊まで迎出しての待遇振、互ひに八重の汐路を送り送られし十年以前の挨拶も濟し後、わざと打解けたる體に語り出しぬ。「あのまゝ生涯の流人と心得ましたるものを、彼の御召還しに相成るのみか、斯く過分なる御扱ひ振、や、頓と夢のやうな心地で」「それに就て早速お目にかゝらう筈のところ、我れ等一存でもまゐらず彼是と今日まで、なれど幸ひ、今夜は諺にいふ膝と膝との御談合いたしたい」「談合とは、お言葉、さて痛み入るべき身に、何の御意でがな」「實は内々ながら、御大老よりのこと、貴方、木原庄左衞門といふ本所割下水の御家人に、いかな所緣でやら、娘御を預けられた筈」「その庄左衞門は、舊この主馬が家來、越後家斷絶以前、既に暇を遣はして浪人せしものなれど、運よく御家人の空株を求めしと聞及んで流罪の砌、お帳面に記されましたる小娘一人、いかにも預けに置きまして」「その娘御ぢや、こりや過去りし事、申さいでもの義ながら、去年の夏、當時御禁制の生類を兩國橋の上から蹴落した、いや蹴落さぬ躓いたとの申開きで、三年市中往來のお差止のところ、また庄左衞門が不意の横死にて、もし引取人なくば、其のまゝ御追放になるべき筈の折柄、村田三平と申す浪人が後見として願ひ出で、當時は神田逢初川に住居せらるゝとの事」「やれ、さて案外な白痴ものめ、おのれ身にあるまじき蓮葉ものめが、流罪の父が心も思はず、さやうの事いたしましてか、また庄左衞門いかなる義にて横死せしぞら、こりや忘れ來、他に怨恨を負ふべき筋でも御

座らぬに、いや〳〵、もはや御掛念に及ばぬの
みか、却て今は禍を轉じた幸福の身となられ
ましたぞ、その幸福に就ての御談合、實は娘御
の容色、萬人に勝れて御大老の執心、養女分に
仕あげし後、恐れながら上様お側にも差上げん
かとの事、さるところ、流石に名物柄、三箇の
願望を差出された、一箇は其の身の御咎めを許
さるゝ事、一箇は庄左衛門の下手人を召捕らる
る事、以上二箇は既に聞届けられて、今その一
箇が貴方の事、父の流罪御赦免の上とは正しく
孝女の一念さうあるべき筈、加之も餘の義とは
違ひ、いかに榮華無上の出世にもせよ、本人不
得心のまゝを差上げて萬一、見張もならぬ大切
の御奉公に油斷あらばと、それがため今回、これ
ばかりは容易う叶ひまじき義も格かく叶へられ
て俄の御召還しに相なりし次第、つまりは御大
老の娘分として上様の御寵愛に進ぜらるゝほ
どの冥加、わけて生涯の流罪このまゝ公に
御赦免となるべき折柄、固り御異存あるまい筈
ながら、娘御に猶この上の念入、篤と言聞けら
れたい、また向井將監、かく屋敷へ内々お預
り申したは、次第に依て再び元の島へ、送り歸
せとの嚴命を承はるも知れざる用意、あらた
めて深うは申さぬが、この邊の義も兼ての御承
知せられたい」

荻田主馬、目を閉ぢて無言のまゝ聞き居たり
し眼、靜に開きながら、容を正して恭しく
「聞かぬ、十年以前、この浮世を隔てしまゝの
主馬、さらに當時の重き御役柄を存じませぬ
事、先刻よりの御言葉、不束なる流人の娘に
過分の恩召を下さるゝ今日の御大老、諸家様
のうち、いづれよりの御身分、何と仰せらるゝま
する御人體でがな」向井將監、おもはず小膝を
打ちぬ、「これは不念、いかにも、はゝゝゝたゞ
我等に口馴れた御大老では、さ、御存じないは
ず、當時は柳澤美濃守様、ま、柳澤様と
は、これまでの諸侯方に、まして御大老になら
るべき御家柄には、絶えて承らぬ御姓名、其
事、それも其の筈、實は百五十俵の小普請組、よ
り出られた御人ながら、さりとては前後無類の
御器量人、當時は御三家同様の格式に、また
御連枝の外、なるまじき甲府まで賜はるほどの
こと、天下御政道たゞ一人の御威勢なればこそ、
大赦なき流罪人さへ、かく御一存にて召還さる
る次第」「さて〳〵、めづらしや、太平の世には
凡例もない御出世、わづか百五十俵の小身殿
より、今それまでの御身分にならるゝ御器量人
がわざ〳〵何として遠島ものの娘風情を、さほ
どの御執心なら、殊更御威勢のまゝとは申せ、
人にまさる無用の御手數までかけられし」荻田主
馬、何をか胸裡に人しれぬ思案の體、また目を
閉て暫時無言となりぬ。

やがて何をか思案に閉ぢし眼を見開くや否眉
を顰めて向井將監の面體を打守りぬ、「たとひ
一度は御取潰しに相成るとも、なみ〳〵の諸侯
方とは違ひ、御一門中の總領筋たる越後家の
事、いづれ御再興の御内意を下さるべき吉兆か
と存じて、實は心中に天地を拜せし甲斐もなう、
や、娘一人のため、はる〳〵八重の汐路を召還
されしとは案外、あまりの本意なさ、また露め
我が手許には置かれず幼少より世を忍ぶ家來の
手鹽にかけて育ちし身ながら、正しく種は荻田
主馬が子に生れしもの、もし女一代は替て同じ
願念を差上ぐるならば、叶はぬまでも舊恩君家
の斷絶を數くまゝに、只おのれが父の一身ばか
りを願ひしとは、この父を見損うたる狼狽もの、
生涯またとない大切の時機を取外せし白癡も
の、わざ〳〵逢うて先刻よりの思召を念入に
申聞けまする段か、もはや勘當いたせし女、目
にかゝらば其の分に差置かぬ女」

向井將監、おもはず小膝を詰寄せぬ、「さて
は荻田殿、父として娘の出世も出世、かほど

の冥加を揉潰さるゝか、娘として父への孝も孝、これほど出來したものを踏潰さるゝか、但し御大老の厚き御沙汰をたゞ一息に吹消さるゝか、また再び元の島へ歸らるゝ心體か、向井將監、確と承る―さて〳〵御身分柄にも不似合の仰せ、御大老の養女分として將軍家の寵に進ぜらるゝ事、凡そ世上の女には夢にも得難い幸運の絶頂、勿體なき冥加至極の義ながら、越後家斷絶の曉に生涯の流罪となりし荻田主馬、さやうの子を持つて、それがため、我が一身の浮世に召還さるゝを、さのみの名譽とは存じ兼ぬる次第、再び元の八丈島へ追流さるゝが何の、はゝゝゝ第一また戰國でもない太平の今日、良馬一頭の秣にも足らぬ、百五十俵の小身殿より天下御政道の執權職になるゝほどの御器量人が、わざ〳〵君側に御手入仕込の女色を勸められずとも、外に御忠勤の御工夫は出來ある筈、たとひ卿が目鼻の置どころ滿足なればとて、美女の多き世の中に事の面倒なる流人の娘にこまでの御執心とは猶更の不思議、もしも萬々一、不束な女なれど、將軍家もさ〳〵の御目に止りて、加之も斷絶せし越後家舊臣の娘と御得心の上、差上げよとの御意ならば、串刺の御惠みにならうとも、ありがたく謹んで獻上いたすべき主馬、憚りながら其の外の一切この義に就ては、いづれ樣の御理解にも從ひ兼ねまするぞ、また元の島へ追流さるゝ事を、身の苦痛と思はるゝかは知らねど、この主馬、同じ越後家の斷絶を餘所に見るならば、なまなか耳目に近き江戸の空にて歎うよりは、遙の海を隔てし浮世の外こそ、却て氣心の休まる男、以上いち〳〵御大老へ御傳へ下されたい」案外の返答なれど、あくまで動かぬ武門の意地、一々加之も根を掘返せし理の當然に向井將監、何とやら通路を失ふに押詰められし心地、「いや、善惡ともに御大老より再應の御内沙汰あるまで、この將監、もはや言葉を交しませぬぞ」「いかやうとも、御威勢の下に我等父子の五體は思召のまゝ、但し心體の義は、ちと格別、只今申上げましたる通りの事」

* * * * *

娘の露は父の流罪御赦免の上ならばとの風情、父の主馬は越後家再興の御沙汰あらばとの口振、父子まだ逢はぬに互の心と心と相通じて言合したるが如く、色へは抱けとの諺、他の内兜を見透して憎き奴とは思へど、流石に父は父だけの主馬、その種に生れし娘は娘だけの露ぞと、柳澤美濃守人しれず感歎の眉を打ちながら、いよ〳〵我が手に仕込で君側に差入したしとの一念、いや増しぬ。

されど越後家の再興は天下の大事、いつしか竟に叶ふ事ありとも、それまで荻田主馬あのまゝにも捨置かれず、娘の露は猶更ら一日も早く屋敷に引取たし、さりとて父の顏を見ずば容易う手に入るまじき女、また娘の顏を見れば如何なる智慧を附けるやら知れぬ父、うか〳〵父子を逢はせたらば事の根本を破る基、もはや今までの微笑を浮べて整ひ難しと、美濃守が眼中に平生ならぬ凄味を帶びぬ。

* * * * *

夜更け人定りて後、向井將監が屋敷の奥深き一室に臥したる荻田主馬、ソツと夜具の上に起直りつゝ、燈火の下に靱負を呼んで四邊を憚りながら私語きぬ、「今いふ通りの次第ぢや、かくなりし上は自然の運命、是非もない事、十年以來の今日まで、互に八重の汐路を隔てゝ夢にも逢ひたし、見たしと思ひ暮した甲斐もなう、あはれや汝も一人の父を非業に失ひ、我も一人の娘を、捨物にせいでは叶はぬぞ」「父が事、今更ら、いかやうに歎きましても、はや既に及ばぬ靱負とは諦め、現在まだ無事にあられまするを、痛はしや、捨物に遊ばすとは一聞ば名

もない小身より當時天下の大老に這出すほどの相手、いづれ世の常の平凡者ではない筈、その柳澤が、何の好奇心で、わざ／＼緣ない流人の娘を我が手に引取らうぞ、こりや正しく露の容色よりも元來の氣性を見込んでの業ぢや、父子とはいへ、九歳の時に手放したまゝの今日、いかに育ちしかと思ひの外、さては女に入らざる父が不敵の端くれを持傳へた體ぢやぞ、天下の禁制物を橋上より蹴落して罪をうけしとやら、また柳澤の權威に對うて逆擊めいた三箇の希望を出せしとやら、ます／＼相手に仕込甲斐ある女と見込まれたぞ、つまりは女色を以て君を傾けんとする大奸の手業に使はるゝ娘、知らずば差置、それを知つて荻田主馬、たゞ一身の流罪を免るゝがために得心のならう事か、なれど露め、いかに勝氣の强女とはいへ、今年やうやう二十歳の春を迎へしばかり、父が島より呼還されしといふ嬉しさに、うかと相手の懷中へ捻込まるゝも知れぬが懸念ぢや、ならば逢うて一言、いひ聞かせたい事あれど、この分ではそれも叶ふまい、や、心外ぢや、他手に使はるる娘ならば、父が手に使うて、幸ひの折柄と思ふ工夫も分別もあるに、おめ／＼同じ江戸の地にありながら、猶更の無念ぢや」

其二十三

靱負、サッと膝を摺寄せて、主の面を仰ぎつつ一入さらに聲を潛めぬ、「その御用、その御一言、この靱負、お傳へ申しましたい――前夜、この主人が言葉で、神田、逢初川とは聞及んだが、客分の扱ひながら實は座敷牢に等しい當家の嚴重さ、わけて島に育ッた汝、足の踏出す方角も知るまい、結句、仕損ずるだけの事……いや、當家いかやう嚴重なりとて、外よりゝは逆ひ內より忍び出るに何の、また方角は存じませいでも、この靱負、みごと人にも怪しまれず、その神田逢初川とやらへ尋ね行きまする、但し、一旦こゝを忍び出ましたる上は、もはや再び歸られませぬ靱負、此のまゝ、お別れにならうかとそれのみか、後にて萬一、御身に――」「靱負、その義は偖、さほどにないぞ、汝は元來、罪あッての流人でなく、たゞ主の身に從ふ兒小姓として島へ行きしもの、加之も世間なみ／＼の流罪とは格別の沙汰で、この荻田主馬に限り一人の召連を許された汝ぢや、無理もなし十年振の島生育、若輩者の血氣に堪兼ねて二日三日の江戸見物に逃出したかと、言退けても濟む筈、はゝゝ」「や、さやうなれば猶更の事、その御用を是非とも、この靱負に」「むゝ、仕遂げてくれるか、首尾よう、露に逢うてくれるか」

＊　＊　＊　＊

短き春の夜ながら、まだ東雲の橫雲、ちらとも透かぬ闇の星影に、いづこより忍び出でけん、向井將監が屋敷の裏門近き塀外へ、例の靱負、いとゞ却て荒浪の岩角を傳ひ馴れたる身ぞ輕く、サッと飛降りぬ。

＊　＊　＊　＊

浮世を隔てし水や空なる島陰に育てど、固り蜑の苫屋に生れし元來の島奴でなく、武門の名物が膝下に多年の朝夕を仕込まれたる靱負、向井將監の屋敷を忍び出でて、踏出す一歩の方角は知らずとも、うろ／＼狼狽て仕損ずる男でなし。

まだ闇の星影に忍び出るや否、わざと的なき市井を遠く向井家の屋敷に離れて、朝日の出づる頃を待ちし後、そろ／＼と往來の人に神田の逢初川を問ひ始めぬ。

汐風に吹曝されて髮は赤く顏色まッ黑々、着物は裏返して身に纏ひし跣足の體、やれ難船の生命拾ひせし男かといはるゝ呵しさを幸ひ、其のまゝの船頭となり澄して人にも怪しまれず、辻々を尋ね行きぬ。

江戸市中、どこかは知らず、夜あけて旭の立昇

る其處より、凡そ二里あまりの道を歩み來りしかと思ふ頃、こゝが逢初川と敎へられし轎負、ふと今更に歩を停めし背後より、肩口を突かれて驚きながら飛退けは、武士の附添ひし乘物一梃、其まゝ急いで彼方へ行過ぎぬ。

さりとては浮世、神も佛もなし、いよ〳〵八丈島より父を召還せしぞ一時も早く來よとの言葉に夢うつゝの露女か、今あの乘物に嬉し淚の餘る思情を柳澤家へ運ばるゝとも知らぬ轎負、また今その乘物の棒先に突飛ばされしが我が身を訪來し父の密使とも知らず年來こゝに慕ひし心の良人とも知らぬ露女、加之も互ひの一目せめての赤繩、ちらと餘所ながら見交す寸隙でもありし事か、急ぎ脚に駕の戸は閉おたり、あはれ生涯また逢ふべき時なく、別れ〳〵の此まゝとは。

まして今の乘物が七八軒の先より出でしとも知らぬ轎負、其まゝ歩み出して、見れば門口に立てる男、それさへ今の乘物を見送りて、まだ家內にも入らぬ藤助とは知らず慇懃に腰うち屈めつつ主馬より聞きし村田三平の名を問ひぬ、「神田、逢初川と聞及んで來ましたるもの、もし村田、三平樣といはるゝ御人、あられまするか」藤助、じろ〳〵打守りながら、おもはず眉を顰めぬ、「その村田三平、當家なれど、いづれより來られた」「や、當方樣で、萬事は、お目にかゝりましての上」「それも兎も角、何の用で來られた、何といふ人やら」「初對面ながら、お逢ひ申せば、それかと御承知あるゝ筈のもの」風體、言葉の不似合に、藤助いよ〳〵不審の眉もろとも、暫時そこに待たせて家內に入るや否、轎負無遠慮に其のまゝ續いて入りぬ。

わづかの一歩、もし露女こゝにあらば、流石それとは口に言はねど、餘所ならぬ浮世の義理と柵、二人の男に挿まれて心の辛さ苦しさ、いかに身一箇の遣瀨もなう、何とするやら、三平と轎負、初對面ながら互に語り語られての後、おもはず顏を見合せつゝ、猶更ら無念の拳を握りぬ、「無念も無念、あまりの心外さ、その乘物に現在の今あの辻で摺れ違ひながら、加之も念入に此の、此肩口まで突飛されながら」「なれど、行く先の知れた道筋を藤助奴が、お聞き申すと其のまゝの一目散、途中で追付きませうぞ」「いや、幸ひ運よく、途中に追付かれてからが、向井家にある主の身を其の屋敷にありと欺いて、この早曾に急の乘物を差越すほどのこと、わけて只今も申す通りのをり柄」「むゝ、偖、さう聞けばいよ〳〵仕てやられたか、但し荻田殿、それほどの中より、わざ〳〵貴方を當家への密使、お差支なくば內々、そと承りたい、この三平また及ばずながら、ふしぎの緣で今日まで男づくの世話介抱も致したもの、次第に依つては今後の一工夫、ないでもない筈」「まだ御目にはかゝられねど、浮世に立倚る影もない不束な娘を、さほどの御力になり下さるゝ御人、篤と御禮を申上げた後、重ねての御迷惑にならずば猶この上の御談合を願へとまで、申聞けられましたる拙者、實は主人の內意、たとひ如何なる場合ありとも越後家再興の沙汰ないうちは父子面會無用との事、つまりは當時天下の權威無雙と聞及ぶ敵手に見込まれし女の身一箇、いづれ叶ふまい、逆も叶はぬ運命に柳澤が手へ落つれば落ちよ、但し娘を賄賂沙汰の音物にして舊主の亡滅を餘所に見ながら一身の流罪を脫るゝ父ではないぞとの事、さらに委しう打割て申さば越後家の荻田主馬とも心付いで汝ばかりの父と思ひし不覺交、せめて大奸の手業に使はれず身の汚れぬうち、死との御一言、痛はしや、本人こゝに居られませねばこそ、かく容易う、淀まず口より出ますれど」轎負、おもはず兩眼に淚を含めば、さらぬも村田三平、虎髯の泣面を反けて、苦しげの聲を濕しぬ、一流

のまゝ奥まりたる一室に入られながら、たゞ世に過ぎたる山海の珍味に待遇され榮華の綾錦に包まれしばかりの事。

一夜を千夜の埋轉き、まどろみもせず明行く空を待兼ねて、今か／＼と思ひしに、其の日も夜に入りし後、五十あまりの仔細らしき老女、此方へと導きぬ。

偖はと今更に飛立つ胸を押へて、引かるゝまゝに長き廊下傳ひの杉戸口を立出で、また一室ばかりの奧へ入るゝ時、その老女も立去りし五十前後の大男、ひたりと閉ざし障子の外に座控へながらの事。

「その床の間の蒔繪函は、主人より今夜の贈り物、お見なされませ」

露女、ふと何氣なく見返りて、片輪車の蒔繪締せる手文庫の蓋、靜かに取退けつゝ見れば、白鞘の短刀一口。

流石に男優りの氣も心も張切りし丈生ながら、はッと思はず閉ぢし兩眼、暫しの後、やうやう開いて、居坐を直しつゝ障子の外に向ひぬ。

「御當家樣より、この露へ、この下されものとは―」

障子の外。

「貴女の御身、これまで別して主人、大切に存ぜられましたるところ、僞かの義にて、もはや今夜かぎり御不用との仰せ渡はしけれど、現世に申置かるゝ事あらば、いかな思召なりとも殘されませい、これに罷り在る御介錯人、たしかに承はりまするぞ」

露女、其のまゝ差俯きし兩の目より、無念の涙、怨恨の涙、さても總身を絞る口惜氣の涙、はら／＼と膝に落したながら、さりとて今更ら一言の未練もなく、千萬無量の胸に餘る數々を、ホッと堪へし不思議の女性あはれや今年ここに二十歳の倒も無、やう／＼迎へしばかりの花も花、これほどの色香にかほどの無點に若もない散際、まして其の名の露草に似たる生涯、草の葉末に宿りしよりも果敢なし。

「たとひ、御用になればとて、おめ／＼他手のまゝにはならぬ氣性の女、それが御不用とあれば、猶更の事、また御主人へは一言二言、いひ殘したい筈の身なれど、召使はるゝ人へは詮ない業、たゞ最後の體を失言もなう見られまして、春日山謙信公以來の武門嫡々、越後家に二代以前より憫まれ家來の絲魚川荻田主馬といふものの娘が、いかな死樣いたせしかを傳へられませ、當世振に和から御出世なされた御家中へは、御手本になりませう事ぞ―」

時しも元祿の空に吹出でし名花一輪、惜しや得ならぬ匂ひ其のまゝ花蘂も亂さず、そッと落果てぬ。

* * * *

露女の死せし其の年の暮、その將軍家は俄の他界、さしも全盛を極めし柳澤美濃守は忽ち火の消えたるが如く、加之ぞ井伊掃部頭が處決の下に一切の格式を揉潰され甲府の城を召上げられ高閑の風聞に上りし百萬石の墨附まで取返されて、不首尾の家を我が子に讓りつゝ剃髮の後、やう／＼身を許されぬ。

さても物の哀れは三平と靫負、生涯を無妻のまゝ花も月もなき世ながら、互ひに兄弟の如く暮せしが、その後人しれず井伊家に養はれし荻田主馬、竟に越後家再興の宿望を遂して作州津山に舊君の遺子を奉じ、加之も結城秀康公と等しく松平三河守を名乘らせし時、娘に代て斯る拾ひ子せりとて三平と靫負の兩人を連行きつゝ、越路の雪に唄はれし名物は白髮童顏の曉、また山陽道に中國名物の名を唄はれぬ。

年譜

慶應元年
十一月泉州堺に生る。幼名は龜太郎、後信と改む。

慶應三年
父を失ふ。母一人、子一人となる。

明治六年
堺の錦小路學校に入る。

明治十四年
九月上京。後、或は政治家たらんとし、或は實業家たらんとして七轉八起具さに人生の困苦を嘗めた。

明治二十三年
十月報知新聞社に森田思軒を訪ひ、その紹介にて同社に入り校正掛となる。

明治二十四年
「報知叢書」(「報知新聞」の日曜附錄)刊行のことあり、偶々、思軒居士のすゝめに從ひて、同叢書にちぬの浦浪六なるペンネームを用ひて處女作『三日月』を發表す。作出づるや、世の歡迎甚だしく、一躍紅露と竝び稱せらる。是作家浪六のそも〳〵なり。
十二月二十二日報知新聞社を退く。

明治二十五年
東京朝日新聞社に入社。

明治二十九年
五月東京朝日新聞社退社。
文士生活三十餘年今日に至る。

（附記）
年譜に就て村上氏より『學校の教育なし。文士生活は三十餘年なれど其間も單に筆の人として來らず現在なほ然り、小說家たりしは其當時窮餘の一策一方便とせしが心ならずも今日に及べり。其三十餘年間文壇人に一人の交際なき事實は能く小生を辯解して居ります。かういふ事實ですから願くば小生の經歷とか年月に割當てた著書とかいふものを載せずにしていたゞきたい。實際また書くにしても自分に正確な帳面もなし却て前後に間違ひ多かるべしと思ひます。たゞ著書の名だけ列擧していたゞきたい』との注意あり。仍て玆には特に氏の許諾を得て上記の略年譜を掲げ併せて左に著書名を列記するに止める。尙圏點を附しあるものは著者自身が最も好愛せられる書である。

○三日月　○後の三日月
○井筒女之助　○奴の小萬
○鬼奴　○破太鼓
○安田作兵衞　○夜嵐
○たそや行燈　○深見笠
○髯の自休　○後の髯重

○浪六漫筆
○うき舟
○石田三成
○大惡魔
○金剛盤
○毒婦
○うやむや日記
○煩悶病院
○八軒長屋
○古賀市
○魚屋助左衞門
○海賊
○武者氣質
○品定め
○文字
○元祿女
○武士道
○日本武士
○赤蜻蛉
○天眼通
○裏と表
○四十七士
○牛肉一斤
○綠蔭の人間

○うき世車
○當世女
○仍如件
○夜叉男
○最後の岡崎俊平
○三人兄弟
○浪華名物男
○當世五人男
○鬼あざみ
○草枕
○呂宋助左衞門
○後の海賊
○浮世雙紙
○花車
○大阪城
○明治十年
○やまと心
○原田甲斐
○蔦の細道
○大正五人男
○元祿忠魂錄
○出放題
○無遠慮
○後五十年

○放言錄
○日蓮
○豐太閤
○人間學
○馬鹿野郎
○男女の戰ひ
○時代相
○失敗の英雄、無名の英雄

○川徳
○親鸞
○元祿名物男
○人の垢
○稻田一作
○人間味
○妙法院勘八

無花果

中村春雨

無花果

路加傳第十三章

シロアムの塔たふれて壓死されし十八人はエルサレムに住る凡の人々よりも益りて罪ある者と意ふや、われ爾曹に告ん、然ず、爾曹悔改めずば皆おなじく亡さるべし、又この譬を言り、或人その葡萄園に植おきたる無花果樹ありしが來りて之に果を求れども得ざりければ、其園丁に曰けるは我三年きたりて此無花果樹に果を求れども得ず、之を伐され、何ぞ徒らに地を塞ぐや、園丁こたへけるは、主よ我その周圍を掘て之に糞するまで今年も容せ、もし果を結ばゝ善もし結ずば後に之を斫るべし。

Or those eighteen, upon whom the tower in Siloam fell, and slew them, think ye that they were Sinners above all men that dwelt in Jerusalem?

I tell you, Nay: but, except ye repent, ye shall all likewise perish.

He spake also this parable; A certain man had a fig tree planted in his vineyard; and he came and sought fruit thereon, and found none.

Then said he unto the dresser of his vineyard, Behold, these three years I come seeking fruit on this fig tree, and find none; cut it down; why cumbereth it the ground?

And he answering said unto him, Lord, let it alone this year also, till I shall dig about it, and dung it:

And if it bear fruit, well: and if not, then after that thou shalt cut it down.

—ST. LUKE, XIII.

（一）

くもゐのみやー、しづがふせーや、つひ
にもれーぬ、うきためしー。ひとはくさー
の、はなにーひとーし、あさの榮達は、夕
にーちらん。
とこしーへのー、さちぞーあるー、このみ
とゝーに、とくきーたれ。

淸い美しい、中には、嗄れた濁み聲も交つて、いみじく響渡るオルガンの音につれ、會衆一同、聲の調子を揃へて今讃美歌を唄ひ了つた。その餘波の、空氣の振動が未だ靜らないで、隅から隅へと微風のやうにそれを傳へてゐる中に、正面の一段高き說教壇の上に立現はれた一人の男、年紀は三十前後、眉の濃い、眼色の深沈な、小隆い鼻の下には八字髭を蓄へて黑い髮が少し縮れてゐるのを、櫛の目を入れて立派に左右へ分け、額際の豁然として、何處かに斯う浮世の波風と苦戰して來た名殘がほの見えて、身には黑のモーニングを着し、襟の、雪の如くに白いのが殊更に目立つやうで、脊のスラリとしたなか〳〵に恰好が善い。亞米利加から歸立だと思うて見るからして何となう白皙人種の風采をも備へてゐるやう。と見ると、少し遲れ馳に、左手のオルガンの前の腰掛臺から立離れて、さや〳〵と衣の裳を曳きながら、徐かに五六級の階段を踏登つて、男の傍に摺り竝ぶやうに佇んだのは、白い鳥の羽を飾つた晩帽の下から、黄金色の髮を渦巻いてこぼれ出で、色の透通るほど白い、頰邊にぽつかり薔薇色の薄紅を浮べて、露を帶びた葡萄のやうな眼元の愛くるしい、百合の花びらを含んだやうな脣の艶な、そして眞白い衣を肌に懸けて、雙を打

つた裳、長々と曳いた立姿で、宛ら天使の天降りしたかとばかり、二人とも揃つて、會衆へ一禮した。

　會堂は例の、高い圓天井、雨漏の痕の、雲形を描いたのが、中央に低く吊り下げた花飾の大洋燈の火影でありありと見える。場内には、長い腰掛椅子を廿脚宛、四列に列べて、二階にも恰好に席が設へてある。左右の壁には四角な窓が、幾つも明いてゐて、正面の一段高い説教壇の、後の白壁は穹門形に刳りし如く塗り込められ、そこに數本、聖像椅子が飾つてある。左手つ、オルガンを据ゑ付けた方へ片寄つては、七寶燒の大花瓶に、桔梗、刈萱、女郎花その外、檜扇だの、雞頭だの、紅や白や黄や紫やいろいろな秋の草花がごたごたと無造作に投活にしてある。右側には白い布ぎれを懸けた卓子が一脚、上に錫の盆が、同じ細工の水注瓶と、玻璃盃と載せてゐて、中央の臺高の見臺の上に安置してあるのは古びた金縁の聖書一卷。

　今夜は新に歸朝して、この牛込教會の牧師の空位を充す事となつた神學士鳩宮龍之助、及び其新夫人の、惠美耶といへる米國婦人を歡迎する爲めに、且は新任の披露を兼ねた安息日の集會である。會衆は信者、不信者、彌次馬をメめて合せて殆んど二百以上に出づる事であらう、この會堂始まつて以來斯う云ふ事は、二度とはなかつた。

　今、會衆の視線は皆一樣に、この新牧師夫婦の上に引附けられて了つて、後に附添うてゐる禿頭の白い長い髯の、洋服の老人や、横に件の大花瓶を背後にして突立つてゐる年紀三十五六の、眼の大い、眉の濃い、色の黒い、例時も顏馴染の、隣區の教會の、中岡牧師の方へは眼も遣らなかつたが、やがて中岡牧師は、屹と姿勢を正して、咳拂して、滿座を一睨した。鈴が鳴る、會場内は何となう森とした。

「諸君、此處にお立ちなさつてゐるのが、鳩宮牧師御夫婦の方であります。諸君も略御聞及でもありませうが、鳩宮牧師は實に今から十年以前、米國へ御渡航になつて彼の地でいろいろと辛酸を嘗めて苦學なさつて居られました中に、偶一夕米利耶と申す熱心な牧師の教を聽いて、其場で斷然是迄の罪を悔改めて信者となられ、其牧師の助に依て、遂にエール大學へお入りになり、御勉強の結果神學士の稱號を擕うて、此度目出度く御歸朝になつた次第であります。令夫人は、今の、米利那牧師の愛孃で、此の方は女子大學を御卒業なさつた、極熱心な信者でして、かねて海外へ傳道して見たいと云ふ御志願があつたのを幸、米利那牧師も、鳩宮神學士の人物を見込んで、雙方合意の上、彼地で結婚の式を擧げ、此度御同伴なさつたやうな譯であります。何うか諸君も、この御二方を、父とも見、母とも思うて、主のため、福音のために只管御精勵あらん事を希望致します。一寸、御紹介致した次第であります……猶鳩宮牧師が、御懺悔話をなさるさうで……何卒、皆さん、御清聽を冀ひます。」

　聲は爽やかだが、何だか重味のない調子で喋舌つて退けて、後へ退つて椅子へ着くと鳩宮牧師は更に一同へ目禮して、咳一咳、やをら、説き出さんとした。

（二）

　惠美耶夫人は、此時、一寸一同へ目禮して、さやさやと衣摺の音をさせて、そのしなやかな姿を後の左手の椅子へ凭せかける、中央の椅子には、例の白髯の老人が倚りかゝつて、威儀を繕ろうて、その嚴めしい眼色の、眼鏡越にじろじろ、會衆の方を眺めてゐる。

　鳩宮牧師は、水注瓶の水を徐かに、玻璃杯に注入れて、一口、脣を濕し衣兜から手巾を取出して、一遍口邊を拭うた。會衆一同片唾を

呑む、咳拂ひの聲。

「諸君！」と喝破した聲は凜として、何となく襟元から冷い水を注ぎ入れられるかのやう。一同は更に衣紋を正した。

「私は只今、中岡牧師の御紹介下さつた通り、二宮倫之助と申すもので、此度米國から歸朝致しまして御教會を牧するやうな事となつたのであります。至つて不才不德な者でありますから、斯樣な重大な任務に果して堪へ得るか、何うだか、竊に自ら危み、且憚かつてゐるのでありますが――併し自分は、主の福音を宣べ傳へるのを終生の天職と信じ、唯この事の爲めに遣はされたといふ一片の信仰を以て、飽くまで遣り貫かうと決心して居る次第でありますから、諸君も何卒、この不肖の身を捨て給はず、願い處は幾重にもお扶け下さつてお互に協力一致、彼の十字架の旗を高く押し立てゝ浮世の罪惡と戰ひ、惡魔と戰ひ、最後の勝利を得るまでは斃れて、止まないといふ勇猛心を鼓舞致しまして、『サタナは滅びぬ』の凱歌を奏する日の、一日も早く近づくやうに奮發興起致したいと考へてゐるのであります……」

莊重な語氣、眼光は星のやうに輝いて、睨と會衆の方を見廻した。

「ヒヤ〳〵。」と頓狂な叫び聲が、入口の方の片隅の椅子から起つて、聽衆は言合せたやうに、一齊に後へ振返る、何んでもビヤー、ホールから出て來たのでもあらう、顏を眞赤にした、廿歲ばかりの書生風の男子、鹽鯖の腐つたやうな、恍子の眼色で、牧師の方を見上げて、懷手で、體をぐら〳〵搖つてゐるのである。書記は近寄つて「靜かに。」とばかり彼を制した。

「……それで、今晩は始めての事でもあり、何だか有益なお話をと、思つたのですが、實は今朝、横濱へ上陸したばかりなので、別に準備する暇もありませんでしたし且これが正當の順序のやうに考へますから、それで先づ第一着に私の懺悔話をして、御挨拶に代へようと思ひますのでお聞苦しうはありませうが、暫らく御清聽を煩はしたいので……」

語を切つて、玻璃杯の水を一口、一寸濕したが、眼中には早何となう、暗いやうな影が射してゐた。

「懺悔々々……」此度は又、法外に高い、突拔けたやうな調子で叫んだ。

「貴君、演說會ではないのですから、何卒御靜かに……」と書記は、又近寄つて物柔かに制すると、ニタ〳〵笑つて素直に默つた。前の長椅子の、六十恰好の禿げ頭の隱居が、眼鏡越に睨むやうな眼附で、醉漢の顏をじろ〳〵見てやがて又くるりと向直つて見た。

「……實は今から十數年、前の事であります。……今は、それを口にするのも恥かしくてならんのですが、併し悔改めた今日、その昔の祕密を私一個の胸に隱して、斯樣な神聖な職に就くのは何うも良心が咎めてならんのですから、それで諸君の前に敢て自白するのであります。」

語尾は心なしか顫へてゐた、白髯の老人も、中岡牧師も言合せたやうに、視線を二宮牧師の横顏に濺いだ、亞美耶夫人は、その美しい顏を少し傾けて、二人の方へ眼を附けて、更に夫の後影を見守つてゐた。

會堂の內は今森として宛ら水を打つたかのやう。例の醉漢は一人合點の「ウム……ウム、」と頻りに領いてゐた。

「第一に懺悔すべき事は、私が青年時代の果敢なき功名心の爲めに、私の一人の姉を犧牲に供した事であります。」云ひ了つて、流石に愁然と伏目になる、一同は更に片唾を呑んだ。

「フーン、それから……」と又例の混ぜツ交しの、圖外れの調子、書記は怺へかねて、進み寄つて、少し棘々しい口調で、

は泣き出します、親父も唯もう思案に暮れてゐたのですが、その中、姉が何と思ひましたか、それは私も賛成だが、學資は幾何、あつたら好いかと聴きますのですから、まア二三百圓もあればと、大摑な事を話しますと、點頭ましてマア二三日待つて見よと、斯う申すのです……」

牧師は咳一咳した。白髯老人は感に堪へざるものゝ如く、後から悄然と見上げてゐる。

「何うも胸が迫つて、詳しくお話する事も出來ませんが……それから三日經つて、姉は家の者へ知らさずと、新橋の某樓へ藝妓奉公に住込んだのです。少しは琴三味線の嗜みもあつたのですから、向にも早速承諾したものと見えまして、私への學資金と、親への食扶持と……諸君、私は罪人です……只だ功名心のために、一人の姉を賣つたのです……」いたく激した、顫へた調子で暫、目に手巾を押當てゝゐたが、やがて漸く元の姿勢に立直つた。

「今一つ、大なる罪を懺悔せねばなりません。私は、その血の出るやうな學資金で纔、不足を感じたもんですから中途で好い口のあつたのを幸、さる辯護士の事務所へ出て、傍ら勉強を續けてゐたのですが、その辯護士の家に一人の娘がありました……その娘に、私は一時の煩惱の迷ひからでもありますが、又一つは功名心を遂げようとした野心から、實に云ふも恥づかしい……處女の神聖を汚しました。」

ぶる〳〵ツと戰慄した。

「色男！」と、醉漢が又遣たので、今度は四五人ばら〳〵と立蒐つて、罵り狂ふ奴を無理遣、場外へ押出した。一時會衆は動搖き立つた、鳴の靜まるのを待ち兼て、

「私は最早、多くを語ひませんが、その事が娘の親達へ知れまして、私は其處を放逐される、丁度其時受けました判事試驗は失敗つて了ふし、その娘へは養子が取れたといふのを聞いて、何やら彼やら、失望に失望を重ねて、とうとう無茶苦茶に瘋癲、飛び出しました……諸君、私は實に罪人です、若、基督の救を得なかつたら、地獄の火に燒かれねばならぬ體です……」

胸が迫つたか、言句も繼ぎ得ないで、暫し立窘んだ樣子が常ならぬので、惠美耶夫人は、愛らしい眉を顰めて、する〳〵と駈け寄つて、優しく背から搔抱いて、後の椅子へ連れて行くと、白髯の老人が起上つた。これは監督の植木牧師といふので。

「諸君、讃美歌第十五番を唄うて、後祈禱を致します」

（四）

牧師館は會堂の裏手の、丁度屋敷町の並であつて、前面に一帶に杉の生垣、衡門を潜拔けて、緩めに小石を敷詰めた道の突當が玄關口で、二階造の小ぢんまりとした家體であるが、暫らく住人の無かつた爲めに、邸内一體に荒れ果てゝ、前栽の植込は木下闇いやうに繁り合ひ、八重葎の宿となつてゐる。朝から人足を傭うて、座敷の掃除、植木の手入、雜草の刈拂に取掛らせ、やがて夕方になつて、一先、雜と形が附いたので鳩宮備之助は己が書齋と定めた八疊の座敷の、緣側に、籐編の腰掛椅子を据ゑてホッと一息、吐息を吐いた。

書齋の飾り附は、朝から自分が手一つで、取掛つて汗の出る程驅廻つて、書物箱なんかの重さうなのは、惠美耶に手傳はせて、二人で持運び、漸く心ゆくやうにしつらへ了つたのである。

先づ床の間には、ラファエルの名畫を摸した、それも米國で當時有名な畫家の筆に成つた耶蘇昇天の、大幅の油畫を揭げ、その隣には五重に仕切つた玻璃戸の書棚を置き金文字入の洋書が、背を揃へて、規則正しく飾られてある。下手の壁には、自分等夫婦の肖像畫が、惠美耶の

手細工に成つたものでもあらうか、精巧に毛絲で編み出だした薔薇の花の、額縁の中へ嵌めて掛けられてある。古襖の上には花紋の緞通を敷詰めて、障子の代りに、角の西洋家具屋から、玻璃戸を取寄せ、緑色の紗の窓掩を掛けて、卓の上には、鵞ペンの、白い羽根が筆筒の上に拔んでて目立つてゐる。床柱に掛けた一輪插の、竹細工の釣花瓶には白百合の花が、匂をこぼしてゐた。

「私の室も、漸と形附きましたのでありますよ、もう卓据ゑるばかりでございます。」

聲を掛けながら、後の鴨居際の、帷幕を搴げて、顔を出す惠美耶の方へ振返つて、

「左樣か、そりやア何うも御苦勞だつたね、まア此處へ來て、少時、休息したら何うだね。」

立寛つて、片隅の安樂椅子へ手を遣ると、早くも惠美耶は駈け入つて、夫がその傍へ列べてくれた椅子の上へ、欣然と倚りかゝつて、笑みかけながら、

「あの、私の日本語、日本人が聽くと可笑いでありますかね、思ふ事、向の人に分明りませんかね。」

少し顔を赧らめて問ひかける。手には造り花の白い薔薇を、寶石入の、黄金の指環の燦めく指頭でいぢくつてゐた。

「何アに、そんな事はないよ。汝米國に居る中から學び始めて、五六年の間熱心に遣つてたんだもの、なか／＼旨いよ。誰にだつて、分らない事はないから、構はず遣るが善いさ。少しは破格だつても、その中、漸々直つて來るからね。」

「私、良君が、日本へ行つたら日本語ばかり使ふよろしいと仰やりましたから、それで可成左樣してゐますが、外の日本人　解るまいか思ひましてね……」

「何アに、そんな氣苦勞をしなくても大丈夫、大威張さ。」

「氣苦勞つて……何アに。」解せぬ樣子で、美しい顔を少し傾けて、庸之助を振仰いだ。

「氣苦勞か……ハヽヽヽ、こりやア未だ分らなかつたんだね。氣苦勞と云ふのは、左樣さ、心配の事よ、心配しなくても好いと云ふんださ。」

「左樣……ぢやア分りました、氣苦勞、心配……心配氣苦勞……。」伏目になつて、無心に白薔薇の花を嗅いで見ながらしきりと小聲で口の中で繰返して、それをも記憶に留めんとする風情、その無邪氣な容貌が何となう可愛うてならぬ。年紀は未だ廿一と云ふに、遙々千里の波濤を越えて、何んな苦勞をも一緒にとばかり、男々しい中に、いぢらしい心根の、思ひやればやる程いとせめて、感謝の情が胸に溢れて來る。庸之助は暫し我を忘れて、天使のやうな惠美耶の顔を惚々と打守つてゐた。黄金の絲の如き髪の毛が二筋三筋、象牙細工よりも白いその首筋へほつれかゝつて、折からの微風に搖々と月を碎いて漣の漂ひかゝるがやう。

（五）

芭蕉の葉が風の囁きに、二度三度、頷いたかと見る間に、雨蛙が一つ、搖り落されてぴよいと飛んで、椽側へ落ちた。惠美耶は偶然、それに眼を遣つて暫くは小動物の動靜を窺つてゐたが、やがて笑むやうな眼色で、振仰いで夫を見ると、端なく、夫の此方を見てゐる視線と衝突した。庸之助も輕く笑ひながら、突拍子な口調で、

「併し、惠美耶さん、米國とは萬事が違つてるから、思つたよりは餘程、不自由な事も、窮屈な事もあるだらうし、當分は少と困るだらうよ。まアその中、慣れて了つたら左程にもあるまいけどもな。」

「そりやア私、心得て居るのでありますから、何とも思ひません、阿父樣と良君と二人私頼みにしてゐます。」

相不變笑んでゐる眼元の端々と愛嬌滴るばかり。そして何處となう凜とした勝氣な相がほの見えてゐる。
「何しろ當分は辛からうが、まア暫と我慢するさ……汝の父さんも云はれたやうに日本へ來たら日本の風俗——習慣に從ふやうにせぬと、神樣の福音を傳へて行くに都合の好くない事があるから、食物も日本の食物を食べ、住居も日本流にやらねばならないのだが、汝はまだ慣れてゐないのだから、それ等は漸次に、左樣する事として先づ第一に會話それから、信者、未信者に應對する時だね。――應對つて、分らないだらうが、結局、日本人と交際して行く際にだね、最も氣を注けにやアならないんだよ。」
「私、良君の命令なさる通り、遣つて行かう思ふのであります。」
と素直に、少し俯向加減である、雨蛙は又い、い、ぴよこり、芭蕉の葉に飛び乘つて、低く高く二度三度上下へ搖いだ。ホザナよホザナよと呼び出しさうな姿勢で。
「それから經濟の事だね。家の月々の費用の事だね。これも一應心得て置いて貰はにやアならないんだが、牧師といふと、米國では隨分澤山な月給も取れるのだが、日本では左樣云ふ譯に行かない、殊にこの教會は、獨立で遣つてゐて、信者の寄附金の中から月給も支拂ふやうな事になつてるので當分の間は、三十圓より以上は出せないと云ふんだ、勿論自分等のは、月給を目的の仕事とは譯が違ふんだから、兎に角この教會の財政の困難な……金の無い苦しい中から、それほど報酬を貰へば、結構だとして、喜んで受けねばならないんさ。」
「そりやアね……左樣でありますとも。」と微かに頷いてゐる。
「米國を出發つ時も、汝の父さんが何彼の費用にと云つて何千弗か御贈り下さらうとしたのを、私が堅く謝絶つて、僅か、當分の食扶持丈しか頂いて來なかつたやうな次第だから、勿論贅澤な事は出來ないし、料理番を置き、その上婢を置くといふやうな氣儘な事はやれないんだ。」
「料理番も、婢も、そんなもの入りません。私一人で遣るあります。」と牝鹿のやうな優しい眼で媚びるやうに、又決心を囁やくやうに、屹と夫の顏を見上げた。
「だつても、汝一人でそんな事が……第一、先生の可愛いお孃さんに、そんな事をさせちやア濟まないから、料理番丈置いて、婢は置かない事にせう。」
「否、私遣るあります。父さんもその事、何時も云はれたであります。料理番なんか置かないやうにするよろしいつてね、それで私、平常、家でも庖廚の方の事、手傳うたのでありますよ。」
「左樣……そりやア兎に角、考へ物だが……」
と、喜之助はくるりと蕉美耶の方へ横向になつて、椅子の一方の、肱掛へ兩肱凭せ頰杖突き、頤をその上に据ゑて、思案しながら偶と仰くと、向屋敷の欅の大木の梢越に、夕づつの光が淡く滴のやうな蒼空に浮んでゐた。
「もう暮れるな。裏角の、西洋料理から未だ持つて來ないのかい。先刻左樣言附けて置いたのだが……」
「私、行つて來ますかね。」
「何アに、そんな事をしなくても……汝が走り使をしなくつても……別に急ぎはしないんだからね。唯、日が暮れたら新橋へ行つて、姉の行方を搜さうと思つて……姉の行方が分つたら、兩親の事も知れるだらうと思ふんさ……」流石に稍愁色を帶びてゐる。
「あの、良君の親さんや、姉さんに、私早ら逢ひ度でありますよ……私、米國人だから、嫁

はれる事ありますまいかね、」何だか心細さうに、夫の顔を差覗く。

「そんな事が……米国人だつて、日本人だつて、同じ神様の子なんだもの、そんな事がハヽヽヽハ」と、事もなげに笑つて、髭を捻つて、再び空を仰いだ。

芭蕉の葉では、雨蛙が雨を呼ぶのか、今聲高に鳴き出した、ホザナよ、ホザナよ、主の名に依りて來るものは福なりと叫ぶやうにも、聞做される。

恵美耶は何となく浮立たない顔色であつたが、何時しか、つい、その蛙の聲に引き入れられて了つてそれを自然の音樂とでも思ふのか。

キリストのみにあるべきか――、いな、世はたれも十字架あり。むかしのともも主とともに、十字架おひてぞしたがへる――。

始めは極めて低音で、やがて悲愴な、美しい聲音を張上げて、神を讃美の唱歌を始めた。星の光は今花やかに、ベツレヘムの昔のまゝに輝いてゐる。

（六）

麹町上六番町と聞いて來たを心當に、鳩宮庸之助は辻車を乗り捨てゝ、角から一軒、一軒、家々の表札を讀んで、足もそゞろに辿んで行く中、側と、大理石の門構に定紋附の鐵扉を設らへて、扉形に白い御影石を敷詰めた、手廣い邸宅の前に來かゝつた。何心なく見るともなしに見上げると、陶器の表札に、田島保備として ある。さてはこれが自分の尋ねる人の家であるか。東洋銀行の支配人と云ふのだから、まさか、長屋にも居まい位に考へて來たのが、之は又、あまり贅を盡した住居である。破風造りの玄關口の、外よりは見透されぬやう大きな蘇鐵を植ゑ込んで、内庭の周圍には、鐘形の植木が列んで、その根を覆ふ芝生の青々と、毛氈を擴げたやうな中に、折れ曲つた巾廣の一條の通路には綺麗に多摩川砂利が敷詰めてある。

庸之助は暫し門前で躊躇うてゐたが、やがて我が身の姿を見返りながら、何となう肩身の狭さうに、足の運びもたど〳〵しく、中へ入つて行つた。一張羅のモーニングを着てはゐるのだが、海上一ケ月の航海に大分汚れ目が見えて、少しは汗臭い、靴も甚だ新しからず、帽子も稍古びて、此の門に潜るにはあまり見すぼらしい、我が身姿に不覺、心臆したのでもあらうか。

暫くして玄關に出て、案内を乞ふと間もなく、「ハイ……」と應へ一寸次に出たのは、十六七の、色の小白い、丸ぽちやの、背のずんぐりした小間使らしい女、此方の風體を一目見るより、胡散臭さうに、一寸形ばかりの會釋して、

「あの、何方様で……」

「一寸御主人に御目にかゝりたいのですが……御在宅でありますか。」

名刺を差出すと、彼の女は凝と見て、銀釵の間で、島田髷の中をゴシゴシ掻きながら、

「ハイ……あのー……一寸……」と曖昧に言葉を濁し、「少しお待ちなすつて。」云ひ捨てゝ奥の方へ入つて行つた。

庸之助は茫然として、俟つ事二三分間、足音が聞える。

「あの、何卒此方へ御通りなすつて……」此度は少し笑顔で云つて、前とは打つて變つて叩頭も丁寧である。

「それぢやア御免下さい。」破れ靴を根布川の靴脱石の上に脱ぎ捨てゝ、案内に連れて、一室の内へ導引れた。

やがて與へられた縮緬更紗の褥の上に、尻の据り工合を氣にしてゐると、横手の一枚丈明け放してあつた襖の蔭から、つと顔を出したのは、色の小白い、ぱつちりと眼元の涼やかな、大丸髷に結うた奥様姿、凝と此方を見てゐたが、

「まア庸さんかい……汝は何うしてたんだね

え、と何やら驚きと喜びに込み上げたおろ〳〵聲で、飛び附くやうに縋つて遣瀬なく、衣物の裾を蹴返しながら席に就いた、庸之助は周章て、衿を正して、両手を支へ、

「姉さんですか……」と云つた切り、しげ〳〵顏を見詰めて涙も出ない。

「姉さん、眞に何うしてたんだねえ……私等は何んなに心配してたか知れないよ……」と顫へ聲で漸く云つて、茶色の手巾を眼に押當て、早や鼻泣きしてゐる。片手は疊に落して、打慄へる體を支へてゐたので、

「何んとも、早申譯はありません、姉さん、これまでの事は何卒御免し下さい……」といとゞしく涙含んだ調子で、疊の上に眼を落した。

「許すも許さないも……そんな事は何うでも好いけれどもね、眞に生きてるか死んでるか、何うしたんだらうと思つてね……まあ、まあ、健全で居たのが何より……お父さんもお母さんも此家に御居なさるんだからね、喜ばせて上げようよ。」

と鼻汁打かみながら、潤味ある眼元に、希望の光を湛へていそ〳〵轉ぶやうに駈けて出た。以前の女が茶器を運ぶ、菓子を運ぶ、煙草盆を持て來る、其の指のいと丁重に、小笠原流といふので。

庸之助は唯腕を拱いて、思案に沈んでゐた。

（七）

「あゝ、庸かい。まア、眞實に……汝は善う無事でゐてくれたなう。」

母は轉げ込むやうに入つて來て、いきなり庸之助の前へぴたと坐つた。嬉しさに涙も出ぬ。夢かとばかり一心に顏を見詰めて氣もそゞろである。

「母さん何うも……」少し退つて、挨拶をしようとすると、

「庸かい。まア……眞實だ、眞實だ……眞實に歸つて來たなう……」聞覺えある父の聲。その方を振向くと、後には姉が附添うて入つて來た。先づ眼に打たれたのは、兩親とも、早、頭が白髮になつてゐたのである。

「誠に何うも……」外に何んと言葉もない。水入ずの親同胞の中に取圍まれて、何んだかもう生ながら天國へ昇つたかのやう、暫くは別の思案も浮ばなかつた。

やがて姉は咳拂しながら、「外國へ行くといふ端書をした限で、其後何とも云つて寄越ないもんだから、生きてるか死んでるか、少とも判然やアせず、眞に皆、心配ばかりしてたんだよ。」と、いとゞ濕りがちな調子である。

「何處で……何處に、今まで居たのかい。庸、無事で居るのなら眞實に、少たア親兄弟の氣も察して、手紙の一つ位寄越しさうなもんだ。」

一徹、氣丈の母親も老ては愚に返りがちの此言を云ふ。

「否、何んとも申譯はありません、實は亞米利加に居ましたので……その後、手紙を出しましたのですが、御住處が不明で附箋して返つて來ましたやうな事で。」

父は元來お人よしの氣も弱く涙を拭いて、又しても後からこぼれて出るのを袂の端で押拭うて、

「まア、無事なのが何よりだ……こんな嬉しい事はない……」

「私も早速貴方等に逢ふ事が出來まして、こんな嬉しい事はありません。實は昨晩新橋の、元、姉さんが御奉公なすつていらしつた家へ尋ねて行つて聽きますると、何んでも此方へ御居になつてると云ふやうな事なので、それで今朝伺ひましたのです。」

「姉も此家の、奥様に出世してたなう、私等まで御厄介になつてゐるのだよ。」と、父は又しても鼻汁を啜上る。

泣かせてくれい。」と母は濡れた顏をして、キヨキヨと見詰めてゐる。
「耶蘇やなんかに……實體に、碌でもない。」と父も心配さう。
「耶蘇だからと云つて、決して左樣御剛直なさる程の事ぢやアありません。今の、先生の孃さんの事に就きましては、一寸申殘したのですが、實は米國で結婚の式を濟ませて、公然私の妻として連れて歸つたのでございますから……いづれ御紹介を致しますが……」
「エッ……庸さん、あの汝、本氣で云つてるのかい。先生の孃さんだつて。それぢやア異人の娘なんだらう。」姉は二度吃驚。
「無論、亞米利加人です。」
「庸、汝は氣でも狂つたのかい。」と父は呆れ顏。
「一體に汝、本氣なのかい、耶蘇なんかになつた上に、毛唐人を女房に持つなんて、そんな情無い事を……眞に、そんな情無い毛唐人なんかを汝。」母はおろ〳〵涙聲である。
「君、それはまア兎に角、その牧師の方丈は廢止たら何うだね。折角銀行の方でも外國課に人が無くつて今弱つてる處だから、君が其方へでも來てくれりやア、最初に六十圓は出す。賞與を合せると平均百圓以上には屹となるから、何うだね、牧師なんか廢止て了つちやア……」
「折角の何ですが……」と極めて冷淡である。
「コラ、庸之助、折角、保衛さんがア、親切に云つて下さるものを、そんな失禮な御挨拶をすると云ふ事があるもんかい。第一、心得違な、異人の娘を……毛唐人の娘なんかを女房に持つなんて眞に馬鹿馬鹿しうて、人樣へお話もならぬ……保衛さん何卒一つ説得して下さるやう僕が一生のお願ひで御座います。」
「眞に何卒……庸、何と云ふ氣であるのだ。……汝は一體、何う云ふ氣なんだらう。之までさんざん人に苦勞を懸けといて、折角歸つて來たかと思やア、又、苦心痛をさせる。汝、何う云ふ氣心でゐるのかい。」父も涙の目で庸之助を眺てゐるので。
「左樣云はれると、實に私も困るんですが、牧師といへば結句、人の靈を救ふのが役目で、極く尊い職分なんです。月給が少いからつてそんな、月給やなんかで人の價値は定るものぢやアありませんから何卒そんな事は御心配下さらぬやう……そして又、今の、外國婦人を女房にしましたからつて、矢張同じ人間同士なんですもの、少とも構はないぢやアありませんか。大臣や公使方にも隨分その例はあります。世界の人間は皆兄弟なんですから亞米利加人でも、英吉利人でも諒ひへありやア夫婦にもなりませう。何にも不思議な事はありません。」乾脆とした口調である。
少し氣に喰はぬといふ顏付をして默つて、控へてゐた保衛は此時、鼻と苦笑しながら、
「……理窟を云やアまアそんなものだが……」と嘗めたやうな調子。
「併し庸さん、汝はそんな呑氣な事を云つてお居だが、あのほら、汝と關係のあつた岸野の孃さんは、汝が彼方へ行つた後で、何んでも私生子を殺しちやつて監獄へ入つたといふ事だよ……そして牢獄の中で汝の胤を産み落したとかいふ噂も聞いたんだよ。」と姉のお柳は眼縁を赤らめて云つた。
「エッ……」とばかり、庸之助は打驚いて、見る見る顏色を變へた。
父の修造も、母のお節も頷きながら、
「ウム左樣々々、何んでもあのお澤さんは可哀さうな目に逢つてるといふ事だ。それに汝は異人なんか女房にして、づう〳〵しく夫婦氣取で居るなんて、罰が當らうよ。」と母は入齒を噛緊めた。庸之助は今全く死人のやうな顏色をして、わな〳〵唯顫へてゐる。

（九）

憧れし戀には敗れ、功名の梯は踏み損つて、遣瀬なき滿腔の不平洩らすに地なく、癒え難き心の創痍を裹んで、無茶苦茶に海外へ飛出して行つたのは未だ青春の血の、稍もすれば焰となつて燃え上るやうな頃であつたが、ゆくりなくも基督の福音を聽せられて、身はこれ迷へる小羊、闇から闇へとさまよひ行きつゝあるのを牧者の角笛が遂に我を呼んでゐるのに始めて氣が附いたやう。眼が醒めて見ると浮世の富も譽も、夕やけ雲の暫らく人目を眩する假の彩たるに過ぎない。ソロモンの榮華の究極の時もその粧、野の百合の花に若ざりし事を思へば、從前の果敢ない頼みにならぬ事を頼みにして、夢幻の影を捉へ、風の後を追駈んとしてゐたのがつく／＼恥かしくもある、口惜くもある。罪の身が空恐しくもなつて來たが、唯、一旦の悔改めには、千百の罪障も消えて了つて、雪の如く白く潔い體になられるとの、大慈大悲の誓を只管に信じ切つて、今も尚誘惑の惡魔には嘆かされ易き人の子の心弱さを恥る中にも、自ら貞潔と平和の泉の絶えず湧るゝを感謝してゐた次第であるに、これは又思ひも懸けぬその昔の戀人が、今は早運命の波のまに／＼身を任せて人妻となつて、定めて一家團欒の樂しい夢に醉うてゐるのであらう、又然あり度ものだ、又然あらせ度ものだと祈つて信じて、敢て疑はなかつたのが而も全然裏反で、あらう事かそれが夫殺しの大罪を犯し、又自分の昔の罪の胤を産落したと聞ては最早、驚愕といふ度を越して、何やら彼やら薩張譯が分らなくなつた。

雛宮庸之助はその夜、床の中で、悶搔足搔いて幾度枕を落したか知れなかつたので。

常時の起る時刻になると、惠美耶は床から出てしどけなき寢卷姿を搔い繕ひながら、

「良君、起きませんの……御氣分如何ありますかね」

庸之助は答もせず、寢打返をした。

「良君、いけませんのありますかね。良君……」

息の香の頬に通ひ、額の熱りの耳に感ずるほどに近く、惠美耶は夫の面を覗ひ寄つて、優しう左も心配さうに尋ねるのである。

「も少し、……も少し寢てゐる。もう、氣分は好い。」

口重たけに云ふ。

「御氣分は好いのありますかね。」と稍安堵したやうな顏色。

「アヽ、好いから、汝はもう……汝は彼方へ行つて髪の支度したら好からう。」

「それぢやアあの、米焚いて見ますのありますよ。ホヽヽ何んな米……飯になるのでありますか。ホヽヽヽ」無邪氣に微笑みながら、やがて戸を明けて、徐かに閉めて出て行つた。

後で庸之助は、胸の底から出るやうな太息を弗と吐いて、「アヽ、基督の救……」と呟いた。

今、庸之助は實に大なる疑問に出會せたのである。基督の救は自己の悔改めと共に、從前の罪障一切を消滅して、柱に打つた釘の痕までも殘りなく、拭ひ去つて了ふとの誓ひでもあるし、又自分もそれを左樣と堅く信じて疑はなかつたのであるに、今、事實はそれに反對の證據を擧げてゐるではないか、自分は一旦の悔改めと共に、生れ變つた人間となつて、身に犯せる罪は、最早基督の十字架に懸けて亡して了ひ、新に神の御名の下に立てる一の使徒として、眞理の爲め、聖靈の爲め、福音の爲め、何までも奮鬪血戰するの榮冠を戴く身だと、それを誇にしてゐたものを、而も皆悉く根底から覆へされて、自分が十年以前、處女に罪を犯した其罪惡の種は、芽ぐみ、育ち、枝を延べ、葉を茂らせて、大空の鳥それに巣喰ふといふ芥子種の譬をその儘、夫殺しの大罪人を作り私生兒

を產ませたと聞くに至つては、依然たる當年の罪人、否將に、天火に燒き盡さるゝにも當るべき極惡非道の行爲を働いた事になるのだ、自分は成程一旦悔い改めたには相違ないが、それは處女の神聖を犯したと云ふ事の悔改めなので夫殺しの大罪人を作り、私生兒の父となつた事に就いてはまだ悔改めはしなかつた。否悔改めたと云ふ丈で、神の前に聽納られる譯には行かないのだ。思へばこの大罪人、牧師などとは實に恥入つた次第だ。この地獄の火に投け入れらるべきもの、牧師などとは…………

身悶えして、危く寢臺から轉落ちんとした時丁度、戶を明けて、惠美耶、

「良君、祈禱の時間ありますよ」

（十）

常時は、自分が先づ祈禱の口を開いて、「天の父よ、冀くは今日一日の糧を與へ給へ。世の罪惡と戰うて勝を得せしめ給へ。一日の職を了つて後平安に安息の床に入らしめ給へ、アーメン。」と祈るのが例であるが、今朝は惠美耶一人に祈せて竊に自分で自分の胸を打つて、

「神よ、罪人なる我を赦し給へ。」とばかりも口の中である。そして讚美歌の聲もいとゞしく顫へてゐた。

思ひの外、半熟にもならないで、兎にも角にも出來上つた飯の、少し柔過ぎはするが、齒に障らぬのをせめてもの誇り顏、手際の程を褒めて貰ひたさうに、一ぱい茶碗へ盛つて、

「良君、飯出來たのありますか。食べて見て下さつて……」と笑顏である。

「フム……」と頷くばかりで、箸を取上ぐるのも懶さうに見えるので惠美耶は、俄かに少し眉を顰めて、

「良君、何うも御氣分善くありませんでございますか……今朝、醫者を呼ぶよろしいぢやアありませんか。」

「否……そんなにもないよ。」と如何にも氣の進まぬ樣子、血色が何うも好くない、眼色も沈んで何となく肩先が萎げてゐる。

「何うも私、心配でなりませんのあります……良君、眞に神樣の爲め働く體ありますから、何卒氣を附けて下さい、私も、良君と、神樣と依賴にして、知らぬ處に來て居るのありますから、今良君に飛んだ事ありますと、私何うなる事か　神樣は私の日に見えませぬから、良君と別れるやうな事あると私……」つくづく心細さうに、少し涙含んで差俯向いた。鬢のほつれ毛が微かに慄へてゐる。

「そんな心配は入らない、……何アに少し散步して來たら直癒る。」惠美耶の橫顏を見やつて、さすが慰めるやうに云つて、何だか心落居ぬ素振である。惠美耶は俄然振仰いで、

「あの、昨日は善くお話聞きませんでしたが、親御さんや、姉さんやの御住居の處判然つた云ふのありましたね。私、連れて行つては惡いのありますかね。私お嫁ひなさるのありますかね。」と今更心ありげに問ふのである。

「否、別に、……何アに左樣急がなくつても好いぢやアないか。」

「だけども、お父さん左樣仰やつてでありました。日本へ行つたら、良君の親御さんや、御兄弟を大切にするよろしいつて……」

「ウム、いづれその……」如何にも煮え切らぬ返事。

「あの良君、親さんや姉さんへ會ひにお行きなさつてから御氣分惡くなつたのでありますから、私何うも……」その纖弱い白い手をひたと乳の邊りに押當て、斜めに食卓の上を見詰めた。

「その……そんな事は氣にしないが好い……決してそんな事ぢやアないんだから。」と周章てたやうに押宥めるのである。

「左樣ねっ」と惠美耶の眼は閃いて、庸之助の顏を見上げてゐたが、忽ちその險しさうな眼光の中に、電の如く、一の暗い影の跳動るのが見えた。

「あの……あの……お澤さんて……昔の事云うて良君を責めるので決してありませんが、あのお澤さんいふのは、人と結婚してお在なさるのでございますね。」

一句胸を刺されて庸之助は肉の顫く思ひ。

「そ……それが何うしたつて。」

「イヤ、つい、その……ホヽヽヽ、何んでもありませんのでございます。」片頰に笑窪印けて、今更氣の毒な事を口走つたと悔むやうな顏色で、眼元に媚を湛へてゐる。

庸之助は何氣なげに、頤を撫でて、天井の方を見たり、何かしてゐる。

「良君、怒りなさつたのありませんか……」

「馬鹿な……そんな事が……兎に角險を遣つたお好い。」と故更平氣を粧うてゐる。

兎角して、惠美耶が折角の心盡し、箸の持ち樣を敎へられて、菜の煮加減を褒められて、面白可笑く食べようと樂みにしてゐた朝食は、無言の行の中に味なく濟まされて了つて、やがて庸之助は澁々茶を啜りながら、

「一つ散歩して來よう。」

「良君、怒りなさつたのありませんの。」と鳩のやうな眼色の、飽くまで優しい女である。

（十二）

「君、甚くお早いぢやアないか、これも亞米利加流と云ふのかね。ハツハツハツハヽヽ。」と腹から押出すやうに笑つて、指頭で妻楊子を弄くつてゐるのは主人の牧師、中岡蘇平といふのである。

「イヤ、つい、散歩に出かけて、不知不識この方へ足が向いて來たので。」庸之助は相不變浮立ぬ顏色でつく〳〵然と腕叉をしてゐる。今朝は、素袷に、縮緬の三尺をぐる〳〵巻といふ體裁なので。

「不知不識か、それぢやア無意犯と云ふもんだねハヽヽヽ。訪はれた方は、聊か難有味が減ずるやうな次第で。」

「否、不知不識と云つても滿更目的なしに來た譯ぢやアない、一つ、君の御意見を聽かうと思つて。」

「ハア、僕の意見……何だか訴訟の鑑定にでも來られたやうな工合だな、よろしい、何う云ふ事件かな。」とぐいつと氣取る。

「實は、先夜、僕が教會で懺悔した一件ね。あの事に關してだがね。」とさすが後は性急に言葉も繼ぎかねてゐる。

「フーム、あの事に關して……」と頷く。

「君は、何う思はれるんですかね。悔改めは凡の罪惡を消滅せしむる力があると云つてあるんだが……」と少し躊躇してゐるのを、直と引取つて、

「それは無論左樣だね。我が來るは義人を招かんが爲めにあらず、罪ある人を招いて悔改めさせんが爲めなりで、結局、基督の救といふのが唯悔改めに依つてのみ得られる譯なんだ……併し今の基督信徒と云ふ連中が怪い奴なんで、羊の皮を被つた狼とまで行かないでも、野羊位なもんぢやアあるね。あの件から教會の連中が何か難題を持懸けて來たんだらう。」

「否、そんな事は……」云ひつゝも、少し疑ふやうな眼色で凝と見て、脣を嚙み緊めてゐる。

「左樣……それぢやアその中止犯といふ譯かな。」妙に法律の術語を交ぜて、少し怪訝な顏附。

「何うしたと云ふ譯ですか。」と此方は膝頭を進める。

「實は、その、昨晩、君の教會の執事連が遣つて來て、已に懺悔したのだとは云ふものゝ、兎に

角一旦あゝな罪悪を犯した牧師を何うも教會の上に置いて置くのは、甚だ好ましくないといふ議論が信者の中に喧ましくなつて來て、到底圓滿の局に行かないから、此際辭職して貰ふやうに、勸告してくれいと云ふんさ。そんな馬鹿な事をと、一旦は叱り附けて、追ひ返してやつたのだが、君、實に今の信者には、僕等アもう愛想を盡してるんだよ。牧師が、必ずしも人の靈を救ふ唯一の道ではないのだから僕は更に他方面から手を更へて遣らうと思ふ。」

「フーン……それは何うも……そんな事が……」と庸之助は、不圖、眼を瞬つてそのまゝ、凝と考へに沈んでゐる。

「君は彼の植木監督から大に信任されてるやうだし、殊に神學士の肩書もあつて、前途大に有望だから、まア遣れる丈遣つて貰ひたいが、僕等はもう功成り名遂げと云ふ……未だなか〳〵そんな處へは至らぬが、兎に角十數年間此職を勤めて、隨分戰つたつもりだから、或はこゝらで一先切上げて、側面攻撃と云ふ態度を取るかも知れない。」

「ハア……」と一心に聽いてゐるのか、考へ込んでゐるのか、頭は上らない。

疊踏む足音がした。間近く人の坐る氣色。

「貴方、まア一つこれを召上りませんな」細君の聲に、ハツと思うて庸之助、頭を上げると、葡萄の紫の一房、黑漆の盆に盛つて差出されてあるので――實の上には一々白い露が、珠と置渡してゐる。

細君はお貞と云ふ、髪は夜會くづしの、束ね結びで、色の淺黑い、顔に小皺が見えて、如何にも女臺所の監督者たといふ相があり〳〵と。

「もう、御構ひ下さいますなっ」

「否、何にも……あの奧さんも些とお遊びに入つしやるやうに……」と世辭を云ふ。

「ハ、難有う。」

「家の夫は又いろ〳〵……あの田島さんと仰るのは貴方の御親戚の方でございましたつけねえ。」

「ハツ……」と合點の行かぬ樣子。

「ア、左樣……僕は未だ何とも御挨拶もしなかつたが、君、實に或人の紹介で、彼の方の銀行へ出るやうな事にならうと思ふのさ。法律を勉強して辯護士の試驗をとも思つたが、最早老いたりて、なか〳〵間尺にやア合はないからね。」

「お蔭で月給も大分取れるやうになりさうでございます。貴方方は、あんな御大家を親類に控へておいでなさるんですから結構でございますが、私等のは、眞の一本立ちで、二十圓か、三十圓かのお金を貰つて、十何年といふもの、隨分苦しい目を見て來たのでムいますから……」

女はますます思慮が淺い、いそ〳〵として何も彼も曝け出す。

「何に、敢て月給といふ點に眼を注ける譯ぢやアないがね。」と庸之助は稍、敗亡の氣味。

（十二）

勸めらるゝまゝに庸之助は、葡萄の實の一つ紫水晶の珠のやうなのを指頭で摘上げて、香の高い汁を啜りながら、

「考へて見ると、僕等は、實際牧師といふ資格は無いんだから、此際教會の方を辭職して了つて、寧そ山の中へでも入つた方が善いか知ら……」淋しげに唇頭に笑を見せて、額際には淺い皺を刻んでゐる。

「君がそんな……、資格があるの、無いの、そんな馬鹿を云つてくれては困る、罪を犯したからつて一旦悔悟したらそれで好いんだ。實際、自分の罪惡を公衆の前に自白して、それを懺悔すると云ふやうな事はなか〳〵出來るもんぢやアない。然るに君は敢て之を爲得たといふので、植木監督は非常に君を賞めて、實に將來日本の

基督教界の柱だと云つて誇られた、貴方、君、何んの疚しい處もないぢやアないか。」

「虚が……罪、その汚穢した罪惡の古傷が何時迄も消えないで殘つてゐた場合には何だらうね。」と睦しさうに露子の顏を見る。

「フーン……僕は何うも左樣云ふ事を信じ得ないね。社會の釘を一旦拔き取つて了つたらそれで好い譯なんだ。古傷の痕跡が有らうが、無からうが、結局それは人間の眼に見える丈なので、神樣の方ではもう綺麗に、帳消しになつてるんだと思ふね。」

「ハア……」と、暫し小頸を傾けて考へてゐる。

「私どもは、何分りませんけれども、何だか彼の人の云ふのが尤ものやうに聽えますね。貴方左樣お氣になさる程の事はないぢやありませんか。あの嚴しい基督さんなんかも、貴方、お若い時にはいろいろな事がありましたさうですわ。ホヽヽ」と細君は笑を含んでゐる。

「左樣さ、あの人も昔は女學校の生徒と何うかしてたといふやうな噂もある。君、……そんな詮索立をして行つた日にヤア誰だつて襤褸が出るからね、左樣無闇と氣に懸けちやアいけない、大概にして置き給へな。」

「そして十年も前の事ぢやアありませんか。貴方に貴方はあまり苦勞性ですわ。」

「もう〳〵考へるのは廢止給へ……そして、あの、市ケ谷監獄の教誨師といふのを、僕の方へ云つて來てるのだがね。近々罷めようと思ふ矢先、とても行けないと云つて斷つて、代りに君を推薦して置いたのだから、多分今日中にでも君の方へ依賴みに行くだらうが、よろしく遣つてくれ給へ。」

「そんな事を僕の方へ……」庸之助はちよいと眼を瞬つて當惑さうな顏色。

「君は亞米利加から新たに歸朝した若手のチャキチャキの牧師で而も、神學士の肩書のある、有德の君子人だから、僕等はその靴の紐を解くにも足らない。實にこの人ならばと大いに君の事を稱讚して置いた次第だから、君が行つてくれると署でも非常に喜ぶだらう。」

「僕は何うも……辭職でもしたいと思ふ矢先それはどうも迷惑至極だね。」

「貴方、そんな謙遜なんて云ふ事は何やりますな。皆貴方の事は神樣のやうに褒めてるのでありますよ、教會の人は何と云つたつて、世間では皆左樣云つてるのでございますよ。」と、細君は思ひあるやうにつく〴〵庸之助の顏を見てゐる。

「何うしまして……」と苦笑ひしてゐる中に、門前でハタと車の止まつた音、細君は振返つた。そして一寸氣色を變へてゐたが、客來の聲がするので、周章てゝいそ〳〵と玄關の方へ小走に走つて行つた。

來客と悟つたから、「何もお邪魔でした。」と會釋して起かゝる。「まア緩り……」と止めるのを辭退して早玄關へ出る。細君も止める。見れば小意氣な洋服を着た、鬚を下げた、銀行員か會社員かといふ小才子風な男が入違つて奧へ入つて行つた。

彼は周旋する男かと思ふと、庸之助は、彼奴惡魔だ。中岡牧師を俗界へ墮落せしめんとする誘惑の魔の使だ。誘惑する者も實に憎むべきであるが、誘惑さるゝものは更に憎むべし。如何に貧乏が辛いからと云つて、如何に月給が欲しいからと云つて、十年、天の糧に養はれて來た身が、一朝節を屈して俗世界へ降參して了ふなんて、實に天火に燒かるべき罪惡だと思ふと、更に自己が罪惡が身を責める。自分が其任に堪へないからと云つて、牧師を罷めるのは未だ正直な處もあるが、牧師の資格なくして世を欺き人を欺き吾自を欺き、猶その神聖な職を汚してゐるのは、正に十倍の大罪惡ではあるま

いか、成程、中岡牧師はあのやうに云つて慰めてくれるのであるが、其釘の痕が神様の方では果して帳消になつた都合であるか何うだか、否そんな事は斷じて信じ得られないのだ。と繰返し繰返し思ひつゞけて歩いてゐると、車夫に二度鐵突を喰されて、三度目に、

「旦那、何卒一文やつて下せえ。」見れば十二三歳の小娘を頭に、三四人、男子と女子と打交つた乞食の一群であつた。

(十三)

母のお節は窮屈げに安樂椅子へ腰を掛けて、座敷中一遍ぐるりと見廻して、床の間の、側の耶蘇昇天の油畫に眼を留め、珍らしさうにそれを眺めてゐる。小造りの丸顏の、鼻の小高い、眼元から額際から、皺だらけの、年紀は早五十の坂を越して、六十には未だ少し手が屆きかねてゐるらしい。木綿の小格子縞の袷の上に、茶縞の絲織の袷羽織を引掛けて、黑繻子の細帶を締め、小瀟洒とした服裝である。

「姉さんも何卒御掛けなさつて……」と庸之助に云はれて氣の附いたやうに、今まで突立つたまゝで一途に新夫婦の肖像畫に見入つてゐたお柳は始めて腰を卸した。紋織お召の小袖に三紋附の黑縮緬の羽織を着流し、繻珍の帶に琥珀色の帶留の、前でパチと緊めた金具きらびやかに、大丸髷は結立てと見え、黑い髮が艶々しく水際立つて色の白い、何時も目元の涼しげな、さすがは一時飛ぶ鳥も落す許り婦名を新橋に賣つた當年の俤が殘つてゐて、しかも年の勢と、自づと備つて品格があるからでもあらう、如何にも立派な奥樣だ。

「何うも手狹な處でして。」と庸之助は低聲。

「否え……なか〳〵綺麗だよ。」とお柳は未だ彼方此方と眺めてゐる。

「庸や、彼れは何の繪なの。」と母は顋で、油畫の方を示して、不審さうな目色。

「彼れは耶蘇の昇天……耶蘇が天に昇られる畫でございます。」

「天に昇るつて。ホヽヽヽヽ。」とお柳は笑を噛みしめたやうである。

「フーン、彼れが耶蘇の神樣だな。」母は忌な顏色。

衣ずれの音さや〳〵と徐かに入つて來て、下手から卓の上へ手を突いて丁寧に會釋する惠美耶を庸之助は二人へ紹介して、

「あの阿母さん、姉さん、これは米國から連れて歸つた妻でございます。何卒よろしく……」

「何卒よろしう。」も、惠美耶は口の中で、さつと頬邊を薄赤らめて、慇懃に叩頭をした。

「何卒ね……」と、お柳も一寸會釋したが、母はギロリと見た切りで、強て叩頭をするでもなく、唯少し頭を揺つた。

「阿母さん、何にも未だ分りませんのですから何卒よろしく……姉さんも妹と思つて……」

「ハ……何卒ね。」何となく冷淡な調子である。

「私、何んにも分りませんのでありますから、何卒可愛がつて下さりますやう、お願ひでございます。」絲のやうに纖細く、覺束ない聲音にも情を罩めて、惠美耶は二人の顏を竊むやうに見つゝ累りに叩頭してゐる。

「ハイ……何卒ね。」

「あの、阿母さん、何とか云つて遣つて下さい。」庸之助が詰るやうに云ふ。

「ハイ……何卒ね。」と、お柳の眞似をする。惠美耶は手持無沙汰で唯顏を赤らめてもじ〳〵其處に佇んだまゝ、伏目になつて裾の方を見詰めて、白い手巾をいぢくつてゐる。

「庸や、少し内談があるんだからね……あの、此の人も誰も聞かないやうに。」

「庸さん、阿母さんが少し内談があるんだとさ。」

「左樣ですか、ぢやア惠美耶……汝は御馳走の

支度でもしてゝおくれ。少し秘密の相談があるんだとさ。」

惠美耶は何だか怨めしさうに夫の顏を見た。

「あの、一寸……汝、何卒、夕餐の御馳走を拵へてね、阿母さんや姉さんにお上げ申すやうに。」

心から柔しく慰めるやうに云はれて、直と打解けたやうに會釋して次の間へ出て行つた。

「何に、そんなものは入らないよ。」と癇高な母の聲は、惠美耶へは聞えたか聞えなかつたか、お柳は、つと立つて一分ばかり閉め殘した後の玻璃戸をハタと閉て切つた。

「庸、先日も云つたやうに、何卒汝、耶蘇なんか、廢止ちやつて、銀行の方へ出る事にしておくれな、ねえ、――そして、あんな眼の青い、髮の赤い、何んだか忌らしい、あんな者を汝、女房にするのはもう廢止ておくれ、お願ひだから……。」

「眞にね、庸さん、あんなものを妹だと思へなんて、私やア何だか情け無くなつちまふわ、何卒、廢止されりやア、廢止して貰ひたいもんだね。」

云ひつゝ、お柳は、帶際から、古渡金襴の煙草入を出して、銀の煙管を取上げた。

庸之助は黙つてマッチを取つて、姉の前へ遣つて、唯淋しさうに笑んで、下を向いてゐる。

「庸や、眞にお願ひだから、何卒、あんな者は離縁てしまうて、そして、このやうな耶蘇なんて商賣はもう廢して、銀行へ出るやうな事にしておくれ、あの、中何とか云ふ矢張耶蘇の先生だがね、それが汝昨日保衞さんに逢ひに來たのだよ。なうお柳、中何とか云つてたけなア。」

「中岡さんて……あの方も、何でも八九十圓の月給にはなるんださうですよ。」煙をすぱ〳〵吹かしてゐる。

「庸、眞に汝、こんな商賣は廢して、あの、毛唐人とはもう弗切縁を切つておくれ、そして、まだ汝に、眞身になつて聞いて貰はにやアならん事があるんだよ。」

（十四）

庸之助も少し姿勢を直して、今更のやうに耳を欹てゝゐる。

「あの、外ぢやアないんだがね。實は彼の田島の家で、女房の親とは云ふものの私等二人までが揃ひも揃つて御厄介になつてるのは、心苦しうてならないんだよ。それも是迄は相續子の、汝の行方が知れなかつたもんだから、保衞さんもまア苦い顏をせずに、お世話をして下さつたといふもんだが、汝が斯う歸つて來て見りやア、此方にも左樣安閑と何日迄も厄介になつてる譯にも行かないし、それにね、姉さんも當初、新橋から落籍されて奧樣に直つた當座はもう塵も据ゑぬやうに大そう可愛がられてゐたもんださうだが段々年は老るし、子は無しといふやうな事から、この頃では、汝、外に妾が三人もあるんだとさ。」

「妾が……フーン。」と庸之助は驚いたといふ顏色。

「否、そりやね妾手懸は男の働きだつて云ふし、殊に私には、子供が無い事だからそりやア家の人位になつたら二人や三人置いたからつて別に不思議はないんさ。嫉妬んぢやアないよ。ホヽヽヽ。」とお柳はわざとらしく笑ふ。

「二人も三人もそんなに……そりやア何うも怪しからん……そりやア何うも不都合だ。」庸之助は熱心に如何にも淺ましいといふ口調である。

「妾のあるのは、まア好いけれどもね、そんな者が出來ると矢張その方へ許氣が移つて、本妻になつた者は一番可哀さうだよ……この娘はあんなに勝氣なもんだからなか〳〵口へ出して云やアしないけども、この頃は汝、一週間に一日

と家で泊る事はないんだもの。」母は早涙含んでゐる。
「フーン……」
「そんな事は阿母さん、下らないぢやアありませんか。そりやア交際や何かで、家の人位になると野暮な言は云つちやア居られませんからねえ。」
「あんな事を云つて平氣でゐるから、保狩さんは好い事にして愈々浮氣をして廻るんぢやアないかね。汝さんは大切の男を人に奪られたつて、何とも思はないのかい。」
「そんな……そんな血の氣の薄いのぢやアありませんけどもね、阿母さん……まさか悋氣喧嘩も出來ませんからねえ。」聲は怪しく曇つて來る。長い睫毛の下には哀愁の影が動きそめてゐた。
「妾を置くなんて……何うも怪しからん……」と庸之助は呟くやうに云つて、累りと腕叉を堅くしてゐる。
母はさすがに、娘の悄けたのを見て、氣の毒な感がしたものか急に話の向を變へて、
「まアそんな次第で、何うも私等はこの上彼家に永く御厄介になつてるといふ譯には行かないのだからね、何卒汝も私等の事を思ひ、又姉さんの身の上も察して上げて一つ銀行の方へ入る事にしておくれ……そして、嫁も別に姉さんが、心當りがあるといふから、汝の氣に入つたらそれを娶ふ事にして、あんな毛唐人なんかとはもう常切絶縁ておくれ。庸、私等も眞實に、從前大概心配といふ心配はし盡して來たのだからこれからは少たア安心させて貰つても罰は當るまいと思ふのだよ……孫の顔も早う見たいしね。」
「あんな嫁さんぢやア汝、雜種兒が出來るだらうぢやアないかね。雜種兒なんか朔に持たせられちやア大變だわ、お父さんや阿母さんも、まさか雜種兒の孫は抱き度くなからうといふもんさ。」聲音も早元の、快濶な調子に戻つてゐた。
庸之助は返事もせず、俯向いてゐる。
「庸、眞にお願だから……親が手を突いて頼むのだから……」母は熱心に、哀訴するやうな調子。
「何とか一つ思案して見るが好からうぢやアないかね……何んなら、あの女と絶縁る方の事だけでも一つ早くね。」
「絶縁ると云つて……一旦婚禮の式まで済まして、そして、何の罪咎もないものを、左樣無茶苦茶に何うも……」
「婚禮と云つたつて、親が承知したのぢやアないんだから、云はゞ出來合夫婦と云ふもんだよ。」
「阿母さん……出來合夫婦なんて、そんな事を……神樣の前で誓うて、立派に結婚式を擧げたのですもの。」嚴かな口調で庸之助は襟を正して云つた。
「だけどもさ、日本ぢやア又日本の式があるんだから、親が承知しなけりやア、立派な夫婦とは云へまいぢやアないかね。」とお柳は輕く云つた。
「郷に入つては郷に隨へつて云ふぢやないかい、日本へ來たら又日本流にせにやアならないんだよ。」
「阿母さん、米國で結婚したんですもの、郷に入つて郷に從つた譯で。」不思、ニッと笑んだ。
お節はウンと行詰つたが、
「……だけどもさ、兎に角、親が承知せにやア眞實の夫婦ぢやアないよ。一體耶蘇は先祖を粗末にしたり、親へ不孝するやうに教へるつて事だが、汝は少い時には極優しい子で口應一つした事はなかつたのに、何と思うてるのか、合點が行かない……耶蘇なんて、眞に情ないものになつて、呉れたなう。」おろ〳〵、少しは鼻

へ臨つた樣。

「決して……耶蘇は決してそんな事を。」

「だつても現在汝が夫れだ。儂の云ふ事を聽かないおやアないかい、現在汝が……」口惜しさうな顏へ樣で。

「庸さん、汝眞實に、何とか一つ、思案しておくれよ。あんな女なんかを妹だと思へつて、何だか急に私や肩身が狹くなつちまふんだもの。それにね、汝、昔の事を云ふぢやアないけれどもあのお澤さんの事もあるんだしさ。兎に角子まで生した中であつて見りやア、あの人とは縁が切れたやうで、切れないやうなもんだからね、お澤さんの方と滿更緣が切れないんだとすりやア、あの女と夫婦つてえのも怪しいもんぢやないかね。」

これには庸之助も一句が出無い。呼息が迫るやうに覺えて、胸はもう引緊らるゝやうだ。

（十三）

いづれ思案してと云ふを言質に、庸は眼を眞赤にしてお柳は甲斐々々しく背からそれを扶けて遣つて、衝門を潛つて出る出合頭、はたと行違ふやうに入つて來たのは惠美耶である。薄桃色の上衣を着て、料理番のすなる白い金巾の胸當を當てゝ、提籠を肩頭に懸けてゐたが、周章てゝ合釦で會釋をする。二人は素知らぬ體でそのまゝ行過ぎて了ふ。後影を一寸見送つて、振向くと、玄關口の敷臺には丁度夫が立つてゐた。

訴へるやうな眼色で、惠美耶は悠々跫を鳴らして駈け寄つて夫の顏を眤と見上げた。淸い眸には[illegible]涙が浮んでゐる。提籠の中のは、豚の肉であらう、竹の皮の一包が入れてある。

庸之助は何にも云はず黙、惠美耶の肩を撫して、つくゞゝ憐むが如く、その薄紅く照つた顏を覗き込んだ、惠美耶は提籠を其處の敷臺の上に置いて、しなやかな手頭をヒシと庸之助の胸に纏うて、今更のやうにしげゞゝと見上げるのである。その牝鹿のやうな優しい眼には今、星の露を孕んだ如く淸くゆらゞゝきらめくものがあつた。

「良君……私を愛してくださるのでありますか。」

「勿論……そんな事は今更問はなくつたつて……」心からか打頭へた語氣。

門口に人の氣色がした。見ると七歳か、八歳、中に十一二のが年嵩らしい、襤褸の片袖又は半袖ちぎれて、日に灼けた眞黒な肩頭の現れた、膝坊主の瘡疵を青蠅が嘗めて、飛んで、又嘗めに來る、見すぼらしい乞食が三人皆一樣に缺け碗を持つて立つてゐるので。

「耶蘇の異人さん、何か貰いに來たんだよ。」「異人さん、何か吳んねえ。」

「何うしたんだい。」と庸之助に問はれて始めて心附いたやうに惠美耶は靜かに手を解いて、片鬢を撫で附けて、半ば振返りながら、

「私、あの、酒屋の角で巡査さんに叱られてゐる處を見たありますので、此方へ來い云ひました。」

「唯、食物を遣つたり錢を遣つたりする丈では、何の利益にもなりませんよ。」

「私、考へる事ありますので、ね、良君、良君に御相談したい思ひますので……」

「何んな事なんだね、まア此方へ上つて談したが好からう。」

「何卒、何か遣つてくんねえ。今朝から飯一粒も食はねえんだから、腹が減つちやつて步けねえんだ。」十一二の年嵩なのが、頻りに[illegible]である。

「まア待つとよろしい。」と惠美耶は手眞似で宥めて、靴を脫いで傍への下駄箱に入れ、敷臺へ上つて、

「あの私孤兒院を建てたい、思ひまして……この子等皆親が無いのでありますからそれで乞食

したり、中には泥棒します、米國でも左樣ありますからね。」

「私等ア泥棒しねえや、そんな事しねえや。」と喚く。

「汝、左樣した云ふんぢやアありません。」張向いて押宥める。

「孤兒院、フム……それは結構な企だが、まア篤と思案した上でなけりやア……」

「一寸あの子等の傳記、ホ丶丶丶、違ひましたね。あの子等の履歷、聞くよろしいぢやアありませんか。」

「左樣だね、折角呼んだもんだから……ぢやア汝等此方へ上るが好い、足拭を持つて來にやるが好からう。」と惠美耶に命ずる。

「私等ア跣足だア、臺處で洗ふべいか。」と、年嵩のが眞先、二人も氣扶くいそ／＼と後へ蹤いて早水口へ廻る。惠美耶は其處へ裾を褰げて下り立つて、一人／＼石疊の上に立たせ、水桶の水を手づから柄杓で浴びせ懸けてやつた。彼等は欣々として雛が母鶏を仰ぎ見るやうな眼色。

庸之助は縁先へ坐らせようとしたが、惠美耶の氣を兼ねて三脚安樂椅子を竝べた。身姿は賤しくても矢張神の子であると云ふ事を胸の中て繰返してゐると、何となく非常に尊いもののやうに思ふ氣が潮して、一種神聖な感が骨の髓へ浸み入るやうな心地であつた。

程なく三人は惠美耶に引連られて、小羊が牧者に導かるゝよりも無邪氣に、無頓着に入つて來て王座を與へられでもしたやうに、喜び勇んで件の椅子に凭りかゝつた。十二三の年嵩なのは、流石眼色に一種陰險な光を浮べてゐるが、他の二人は未だ無邪氣な、人を見懸けて強請といふのも眞の器械的で、無意識で、畢竟草花が風の神に叩頭してるやうなものなんだ。

「汝等は何うして乞食するやうになつたんだね。一つ、話して見るが好い。」

「己等か、己やア父無兒だよ。」十二三のが、喚くやうに云つた。

「己等の父ちやんも阿母も去年虎列剌で死んぢやつたんでえ。」

「己や捨兒だ。親ン畜生めが捨てやがつたんだ。」七八歲にしては長せた口調である。

「まア一人、一人、緩々と詳しい事云ふよろしい。」惠美耶は慈悲に輝く眼光で、一々斯う見廻して云ふ。

庸之助は何と思うたか、始めのが父無兒というた言葉で不思四肢を戰慄せて、木偶のやうに茫然佇んでゐたので。

（十六）

金曜日の祈禱會には集會者が僅か十名にも滿たなかつた。今日安息日の朝の集會には彼是五六十名の顏觸は見たのであるが、執事の仕草が何となう冷淡で、人を輕蔑したやうな風があつた。――或は自分の僻根性から左樣思うたのかも知れないが、兎に角皆が浮の空で、讚美歌を唄ふのを何だか都々逸でもやつてる位な氣でゐるやうに見えた。實に嘆息すべき事の限りではないか。

併し、人の眼の塵を議するもの、自分の目にある梁の事を思へば、何んにも云はるべき筋ではないのだ。自分が大なる罪惡を犯しながら、牧師など云ふ神聖な職を汚してゐるのが、丁度羊の皮を被つた狼ではあるまいか。その狼が聖壇に立つて、僞善な虛飾な說教をやつた處で、誰が謹んで聽くものがあらうぞ。人々の浮の空なるのも、敢て咎むるに由はないのである。否、都々逸を唄ふのが却て似合ふかも知れないのだ。

思へば自分が牧師の職に居るのは、愈々罪に罪を重ぬる道理で、阿母さんが謂はれたやうに耶蘇は先祖へ對し、親へ對し不孝を勵くものだといふ、それにも增した冤罪を神の尊き御名に

塗り附けるのである。寧ろ今の中に潔く辭職して了つて、斯う、山か海へでも……、と思ひ詰めては見るがさて又一方では、彼の可憐な惠美耶の身の上は何うするのであるか。千里の波濤を越えてわざ／＼知らぬ他國へ連添うて來て、我一人を杖とも柱とも頼んでゐる、それを振棄てゝ行く事が何うして出來ようか。忘れも得しない、結婚の約束が成立つた、その前日彼の宅の後の花園で、自分が始めてお澤の事を打明けて、彼の前で懺悔した時、貴方はもう其方と縁を切つて了つたのでせうね。その人はもう他人の細君になつてゐられるんでせう、ね、それぢやア貴方は、私に僞なき愛を濺ぐ事が出來るぢやアありませんかと、自分の手を取つて、熱い接吻をしてくれたその場の有様は、今も猶眼の前にあり／＼と浮んで來る。それを何うして、今更お澤が殺人罪を犯したといふ事、自分との間に私生兒があるといふ事まで、何の面下げて打明けられようものか。

お澤が事も、若果して我が身の上の關係から殺人罪を犯すやうに立至つたといふを事實とすれば、決して人事に聞き流される段ではない。若氣の過ちとは云ひながら、互に戀ひそめ、慕ひ合うた果が、我が身の胤までも宿して、それ等の事から一途に取逆上せ、無殘にも其夫に當る人を刃にかけて殺したといふに至つては、自ら手を下さない迄も、自分は正に教唆者ともいふべきものである、何と云つて詫びよう、否、詫る言葉はない、否合す顏がないのである。

又一方には父母へ對し姉へ對し、自分は實に大なる責任を負うてゐるのではないか、耶蘇を止めよといふ――そんな事は無論出來ないが、幺麼にも父母に安息を與へる丈の仕向はしなくてはならぬ。銀行員になれといふ――その相談には乘られないが、兎に角こんな薄給ではとても、思ふやうにする事はならないのである。その上、姉へは自分が實に面向けのならぬ仕儀をして置いて、その罪を償ふ事の出來ないばかりか、今以つていろんな心配を掛け、厄介な目を見せてゐる。惠美耶から第一に離縁て了へといふ、そのお言葉は實に情ないが、畢竟これも自分が可愛いから云つてくれての事だ、雜種兒の甥、雜種兒の孫、成程親や姉の考では嫌なものに思はれるだらう。否、日本の社會が又雜種兒を何のやうに待遇してゐるか、親たる身のさすが、思へば腸が千切らるゝばかりだ。

お澤と惠美耶、惠美耶と親同胞、親同胞から生活の事、牧師の事、銀行員の事、それから私生兒の事、胸の中で宛ら車輪を廻すやうに、あれからそれへと思ひつゞけ、考へ廻し何だかもう掻き挘らるゝやうで、目先が眩む思ひ。殆んど昏倒せんとして、庸之助はハッと氣が附いて、邊を見廻した。

自分は今、市ケ谷監獄へ囚徒の教誨に行くのだと心附いて、さて、何を云ふつもりだつたかと思うて見て、ふとそれが横へ外れて、自分抔が教誨師なんて實に恥かしい次第だといふ事から、又空想に陷らんとした時、

「何か遣つて下せえ、旦那何か遣つて下せえ……」

突如に、狹い小路の、生垣の曲り角から叫び出されて、驚いて見遣ると、十二三の小娘の、襤褸下げた乞食である。

何處かで見たやうだと思つたが、一寸思ひ出されない。立留まつて暫眺めてゐると、

「母さんは牢へ行つて、私お飯食はれねえンだ。旦那何卒一文遣つておくんなせえ。」

庸之助は猶もそれを見詰めてゐる。

「何卒一文遣つておくんなせえ。」

「あの、牛込の教會へ行つて見るが好い。」と云つて、何氣なく一枚の名刺を渡した。

「これを持つて行くとお錢を呉れるんかい。」

「アヽ……兎に角行つて見るが好い。」と、猶も様子を見守つてゐる。垢まみれ、塵埃まみれの、窶れてはゐるが、その眼附が何となう涼しい、品のありさうな娘だ。

（十七）

監守長の先導で、やがて狭い暗い長廊下を通つて幾曲り、靴音の戸障子に響く調子が忌に淋しげで、何だか斯う冥府へでも下つて行くやうに思はれる。向の幾棟、工場であらう、騒々しい槌の音やら、器械の運轉するやうな響が不絶聞えてゐて少し離れた女監の方からは機織る筬の音が響いて來る。その音響といふものが、陽氣な、威勢の好い聞心地の勇ましい調子は微塵もなくて、唯もう陰氣臭い、何だか飽つぽいやうな、到底娑婆世界のものではなかつた。

四方の窓を玻璃で張つた廣やかな教誨所の、正面一段高い處に鳩宮牧師は今起立つたのである、板敷の上に莚を敷いて、何百の女囚は列を作つて、目白押に押並らんだ、蓬け髪の、油氣のない、赤ちゞれたのやら、色艶の失せた猫毛やら。中には腫物が吹出て赤茶瓶になつたのも交つてゐる。身幅の狭い、柿色の囚衣の皆一様に美人草も醜草も、敢てそれと見分は附かない。いづれも牢窶れのした、眉間に小皺の寄つた、そして陰險な眼の光り、ぴか／＼と電の閃めくやうな、その光景が何んとなく凄いやうだ。

人は動物だと云ふと、何だか神の子たる榮冠を泥の中へ投げ込まれたやうに聞做さるゝのであるが、この場の光景を見ると實にその動物たる事を證據立てゝゐるのだ。見よ、彼處には狼のやうなの、此處には豺のやうなの、或は山猫のやうなの、或は狐のやうなの、狸のやうなの、そしてその腰には、鐵の鎖が鳴つてゐるではないか。

例の黒い袴を穿いた女監取締は、端々へ立つて壁板に凭れかゝつて、場内に眼を配つてゐる。部長は飛び／＼にその間に配置されて、劍鞘を握つて、警戒してゐる。鳩宮牧師の傍には看守長が椅子へ倚りかゝつて、八方を見下してゐた。

牧師は手を額に加へて暫く祈禱の後アーメンと唱へ、聖書の一節を讀んで、さて咳一咳した。

「皆さん、私は唯今、監守長の御紹介下さつた通り此度この監獄の教誨師に依頼されまして、男囚方と、女囚方との一部を受持つ事になつた次第でありますが、可成御了解になるやう極手近な御話をしまして、別に六ケ敷い事は申上げません積りです。」

女囚に一寸咳拂ひをするものがあつたので、「靜かに。」と、女監取締は制した。

「皆さん、皆さんは人間といふものゝ價値を御存じでありますか。人間は元來神樣の形に肖せて造られた極尊いものであります。神樣といふのは皆さん御存じでもありませうが、天を造り、地を造り、日輪や、お月さんや、又水や、火や、凡てありとあらゆる萬物をお造りになつた全智全能……何も彼も御存じで、何處も彼處も御見通しなさる御方であります。」

コホンコホン。と今度は高く咳拂ひの聲が聞えたので、部長は、「誰だい。」と叱咤して、白い眼を光らせた。

「それで皆さんは、その尊い神樣の姿に肖せて造られた方々でありながら、罪を犯し、惡事を働いて、こんな暗い處へ入つて來るといふのは抑々大な心得違ひではありますまいか、勿論その罪を犯すやうになつた原因起源といふものはいろ／＼ありませう。私は決して皆さんのみが惡いとは申しません。否、寧ろ中には大に同情を表すべき點もあらうと思ふのです。或は偶とした出來心で盜をして、一度こんな處へ入つた爲めに、後からそれを改心しても、世間が

もう相手にしてくれないとか、又は兩親の手で育てられて自然と[illegible]になつたとか、或は親に捨てられたとか、又は父母の手に捨てられたとか……云つて何だか身に沁むやうに、悄然として少し伏目になつた

僅かに、すゝり泣の聲が聞えた。見れば片隅の女は東條の廊下に坐つてゐた年頃三十ばかりの女で、右側の片隅に身を押當てゝ、いとどしく睫毛をわな／＼顫はせてゐる。

「コラ……コラ……」と東條は叱咤したが、なかなかに泣き止まない。牧師は不思議さうにその女の面を見遣つた。譯は分らない。嘲笑するものもあつた。

（十八）

亞米利加は其の傍へ椅子を引寄せて、例の長い睫毛を瞬きながらいたく悄然さうな顔色で云つた。

「良君、何うするよろしいのでありませうか。あの、一昨日の多い子、昨夜から出た限り歸るありません、八歳と九歳の子二人共、又出て行きたいふのでありますが……」

「フーン、矢張乞食して行くのが好いのかなサ。偶然に遣つた餅子。聞知し頃は、何にか好う顔色で背を向けて眼差見せんよりも、昨今、又顔られなかつたのであらう。

「あんなに、衣服も古着商から取寄せて、着せてやつたのでありますし、私の室、孤兒院にして可愛がつてやるのでありますのにね。」

「何うも仕樣がないなア。」

「あの二人は又今から直に出たい／＼云ふありますから、待つよろしい云つて、あの薔薇色した油畫澤山出して、二階で見せてあるのであります、良君何んとか一つ、思案ありませんかね。」云つて一途に、庸之助の顔を見入つて返事を俟つ。庸之助はむつゝり默込んで暫時口を利かなかつた。

「御顔色よろしくありません、御氣分何うかありますかね。」と覗き込むやうにせられて、

「イヤ、別に……」と、苦の無ささうな返辭。

「良君御隱しなさる事ありません、私、妻でありませんか、妻に何か秘密をお隱しなさる事ありません。」と此方は怨めしさうに云つて、その美しい眼元に涙味を見せた。

「何にもその……秘密なんてありやアしないよ……唯、お前草臥れたらう。」

「だけれど……私、良君の親切さんや、傍さんに嫌はれてゐるのでありますから……」

「そんな事は……そんな事は決して心配するにやア及ばないんだよ。」

「心配するなつて……良君、私心細くありますもの……良君、私あの……」少し口籠つたが聞取れぬやうな低い聲で、

「あの——私、懷姙ありますよ。」颯と茜さす頬の、宛ら爛漫たる薔薇の花びらを編める清ものに包んだやう。少し俯向いて眞紅な耳の根を見せた。黄金色の漣の、縮れ毛一摘み、ほつれかゝつて、又なく艶な其中にも何處か嫻う嬪として神々しいその風情、聖母マリヤの像にも似通うてゐる。

「左樣……」と庸之助は不思議な身を立直したが少し血の氣が眉際に浮んで、そして何處か滿足らしい色が見えた。

「まア、身體を大切にするが好いよ……。早速下婢を雇ふ事にせうぢやアないか。」と語を繼いで、胸元氣附いたやうな顔色。

「下婢なんかは……私、未だそんなのありませんから出來るだけ、私働くあります。」

「だつて大切な身體なんだから氣を附けなくちやア……そして昨日云つたあの小娘はまだ來ないんだな、小使の乞食は……」

「未だ來ませんのありますよ。」

「あれが來たら下女代りに使つてゐるが好いが

なア。」
　折節二階の階子段をどたばたと駈下りたやうな足音、續て玄關口で何か騷々しい人氣色がする。
　惠美耶は何事かと、立ち出て見ると、例の二人の少年、仲間を見附けたと思つて駈け下りて來たのらしい。下の土間には、十二三の乞食の小娘が佇んで何か互に談合つてゐるのである。

（十九）

　件の小娘は惠美耶夫人に連れられて、二人の少年に右左から取卷れて、やがて庸之助の室へと入つて行つた。例に依つて安樂椅子は此の襤褸衣物の腰も肩も抜けて了つて、垢附き汚れたる可憐の少女に王座を與へるべく設けられてあつた。二人の少年は昨日の見すぼらしい身姿に引換へて、今日は、小瀟洒とした木綿の袷を纏うてゐる。頬邊も何だか肥えて早ふつくりとして來たやうで、時々は笑顔もする、如何にも邪氣は無ささうである。
　つく／＼見ると其小娘は、顋のかゝり、頬の工合何となら恰好よく、天のなせる麗質を暫らく浮世の風塵に埋めて了つて、こゝにその多年の恨を語るやうな眼元、それは少し險しい、狐疑深いやうな色を帶びてゐた。

「あれから何うして來なかつたの。」と庸之助は自分が與へた名刺を取上げて見ながら云つた。
「私、あの日、あれから澤山と貰ひ物があつて腹一杯になつちやつたんだもの、それで來ねえだつたよ。」
「左樣……私は又、此處が分らなかつたのか知らと思つたよ。」
「左樣ぢやアねえんだ……あの、私、今、腹が減つて、我慢が出來ねえから何かお呉んなね。」
　二人の少年は眼を見合はせて鼻頭で、クスクスと笑つて、
「あんな事云つてらア、やアい。」「先刻、朝飯が濟んだばつかしの癖にやアい。」
「汝等ア濟んだか知らねえが、私未だから好くつてよ。」と小さい口を歪めて罵つた。
「汝等は默つてお居でよ。」と庸之助は二人の少年を宥めて置いて、
「汝、名は何と云ふの。」「お卷さんてえの。」
「父さんや、阿母さんは……」「名は知らないの。」
　此時惠美耶は、ビスケットを菊皿模樣の、玻璃の菓子器に盛つてさし出した。
「食べるよろしい……」
「好くつて。」と、いゝ、いきなり、小娘は黑い猿のやうな手を出して鷲掴み、餓ゑたる犬が肉の塊に有附きでもしたやうに、むしやり／＼遠慮會釋もなく頬張り込む。二人の少年も負けずと手を出して、瞬く隙に、菓子器の底が明いて、卓掛の白い布切が透いて見える。その時惠美耶は更に珈琲を運んで、一々振舞うて自分も傍へに腰を掛けた。
「あの、汝、何うして乞食になつたのかね。」
「私……私は牢の中に生れて、それから……」
　珈琲茶碗片手に未だ口の中の何處かに殘つてゐるのを、モグ／＼と遣つて一息に、それを嚥下した。
「エッ……牢の中……」庸之助は驚いた顏。
「牢の中つて……何あります。」惠美耶は不審さうに尋ねる。
「牢つて、牢だア。」八歳の方、これは綽名をチビ六といふのが喚く。
「監獄の事さ……監獄よ。」と、庸之助は惠美耶に目を注けて云ふ。
「私ン阿母は好い家の娘だつてんだがね、若い時分家の書生と密通いてから、お腹が懷姙くなつたんだつさ、其處へ又他家から婿が來て、其奴が忌な男、嫉妬ばかし燒いてゝ、墮胎せ／＼つて、餘まり邪慳にするもんだから、阿母ア肝

癪を起して、とう〳〵殺しちやつたの……」とその小さい鼠のやうな眼は閃めくがやう。

庸之助は怯として全く顏色を變へた。

「そんなに……まアそんな事をしたの。」と惠美耶は呆れ顏。

「殺人犯の子だなア、汝、殺人犯の子だなア。」とチビ六で無い、上州といふ方が暗いた。

「汝の阿母さん、汝をその牢……牢だね、その牢の中で產んだのありますか。」

「私、牢の中で生れたんだつてね、それからあの看守長の家で奉公してえたんだが面倒臭えから飛び出しちやつたのよ。」

「まア……」と云つた切りで、惠美耶はつく〴〵氣の毒さうに、又いとしさうに愁然たる面地して、庸之助の顏をちらと見やると、何うしたのであらう殆んど死人のやうに、宛ら土色になつて、唇頭を顫はせてゐた。

「良君、何うしたのあります。良君、御氣分惡いありますか。」

答も得せず、唯齒を喫つてゐる。お卷も、上州もチビ六も、驚いてキボ〳〵と見てゐる。

「良君何うなさつたのあります。」惠美耶は周章てゝ、夫の傍へ立寄つて來て、兩肩へ兩手を掛けて及び腰になつて、下から覗き込んだ。

「何アに……」と輕く云つたが、彼の心臟は宛ら兩刃の劍で差貫かれたやう、最早苦痛といふ段ではなかつた。

（二十）

お柳は臺所で、鰯の潮煮の鹽加減を嘗試みてゐる。三人の下女は紅い襷がけ、冠り手拭の、庭を彼方此方、忙しさうに立働いて、西洋竈へ薪を投げ込むやら、漬菜を刻むやら、擂鉢を洗ふやら、コチコチギシギシと騷々しい音を立てゝゐた。茶の斑白の頸へ眞鍮の輪を嵌めた大きな洋犬が、今し方、投げ與へられた一斤の牛肉に、猶飽足らでや、舌舐ずりしながら、戸口からのそ〳〵と入つて來て流元で擂鉢洗ふ下女の踵を嗅いでゐると、漸く氣が附いて吃驚して周章てゝ、擂小木を振り上げ、叱ッ、叱ッ……叱、畜生。怒鳴れたので洋犬も敗亡、長い目でじろ〳〵見て、やがて小急いで、外庭の方へ出て行つて了つた。

「お梅や、あの酒屋から、未持て來ないのかい。」

「もう追附持つて參るでございませうよ、私が只今行つて、促き立てゝ來たのでございますから……」

竈の鐵蓋を鎖しながら云つた。

「左樣、それは御苦勞だつたのねえ。」

「あの御客樣の、御膳立もするのでございませうねえ。」と、漬菜の方が、念を押した。

「アゝ左樣だよ、あの方は精養軒へとか何とか云つてたんだけども、兎に角夕御膳丈は家で濟まして行かうつて、旦那さんがさう云つていらしつたんだからね。」

「左樣でございますか……あの方は何とか云ひましたつけね、この頃善くちよい〳〵入らつしやるのですが……」

「中岡さんて……今度東洋銀行へ出るんだとさ。」

突然、臺所口から、白の浴衣に紺の腰掛の、若い男が、跣足で飛び込んで來て、

「お梅どん、柄杓を貸した。」

いきなり、水瓶の水を柄杓飲のぎう〳〵と引かけて、「一寸行つて來るんだ。」直と又飛び出さうとするから、お柳はじろりと見て、

「源や、お前何處へ行くの。」

「へイ……旦那樣が、あの上野までお出でなさるんで。」振返つて中腰になる。

「オヤ、左樣……それぢやア又入つしやるの。」

お柳は氣拔けのしたやうに、はたと汁鍋へ蓋をして懶げにする〳〵と玄關の方へ出て行つた。後影を見送つて（竈の前）は、聲を潛めて、

「又、今夜ア泊り込みだよ。若いのねえ、十日も流連して、今朝漸つと歸つて來た許りだのにさ。」
「可哀さうだわねえ、奥さんも……床の番ばかりしてゝ。」
「これだから、大家の奥さんなんかになるもんぢやアなくつてよ。見掛け許しの風袋倒しつてえ奴で、傍から見てる者が、お氣の毒のやうな譯ぢやアないかね。」これは、摺鉢の局の御言葉。
「成程お梅さんが、車夫の源公を亭主に見立てちやつたのも、そこらから割出したもんなんだね。ホヽヽヽ。」と、漬菜をコチ〳〵。
「人をつけ、餘まり馬鹿におしでないよ。幾ら何んだつて源公なんかに。」と、(摺鉢の局)は膨れ面。
「好いぢやアないか、源公だつて……亭主になつてくれ人がありやア結構さ。此方等見たやうな、おかめ面は一生寡だ。」嘆息しながら(竈の前)の述懐、成程見れば此奴は盤臺面だ。
「そんなに心細い事を云ふもんぢやアなくつてよ。男鰥に蛆が湧くてえけども世間に女の廢れ物アないんだとさ。」
「押が強いのねえ、お松ちやんはほら、あの、何とか云つたけね、銀行から好く來る、色の生白いのに岡惚だとさ……今に、奥さんになれるんだらうよ。ほんとに眞似りたいもんだわ。」お梅は仇討といふ口調。
「アヽ、今にね……此方等が奥さんになつたら、見てゝ御覽、あんな意氣地のない事アしないよ。宿六が浮氣すりやア、此方ア俳優買ひさ。」
「オヤ〳〵……」
折節、「梅ちやん、松ちやん、誰でも好いから一寸……」と奥から叫び立てる。
「又、あの厄介婆だよ。」舌をペロリ。

（二十一）

下女が持運ぶ銀瓶の湯を急須に注いで、お節は茶盆の上に伏つた洛燒の茶碗を片端から一つ一つ起して並べてゐると、お柳は客間から下げて來た菓子器を持つて、下手に坐つた。父の修造と三つ鼎、狭い庭に面した障子は颯と左右に開かれて、その庭内には日影が一ぱい、緣側近く射し込んで來て、瓢簞形の盆池に放つた緋や、白の金魚の背甲がぴか〳〵光つてゐる。飛び飛びの庭石の間には、小い青石を一面に敷詰めて片隅の五六本、疎らに植ゑた角竹の蔭に、苔蒸した雪見燈籠が立つてゐる。三方、建仁寺垣で仕切つてあるので。お柳はリツフルを兩親に勸めて、自分も一つ箸で挿んで取つて、それを二つに折つて、口へ當てゝ見たが強ひて食べるでもない。
「眞に保衞さんにも困つて了ふね……御飯位家で食べて行つたつて善ささうなもんだらうにね。」
母はいかにも娘が可哀さうなといふ面地。
「何だか何うも……矢張、家の物ではお氣に召さないのでございませうよ。」
「近頃何うも、家に尻が据らぬやうになつたてやなう。」修造も思案顔。
「私等が事も氣に食はないのでありませうよ。庸が歸つてからといふもの、保衞さんの仕向が何だか違ふやうですもの。」
「そりやア阿母さん、何んでもないひがみといふもんですよ。畢竟は私が御氣に召さないのでありませう。この歳になつて、子供と云うては無し……旦那樣へも眞に御氣の毒でなりませんわ。」
「子供が無いからと云つて、そりやア何うも天運だから仕方がないさ。」
「否え子供の無い許りぢやアありません。厄介なお荷物を背負ひ込んでるといふ心が何時も保衞さんの胸中にあるんです。ハイ、この二三年、

何うも左様云ふ風が見えますもの……」
「阿母さん、そんな事はありませんよ。」とお榔は眼を大くして低聲。
「否え、ない事はありませんよ……又、滿更ら無理でもないだらうよ……それはまア兎に角、唐之助が歸つて來たもんだから、私等はあの子に係るのが當前でさア、否應云ふ筈はありませんから押掛けて行からと思ふんですがね、お父さん……」
「そりやアあの子が、私等を養ふのが當前だからなア。」と强て先は云はない。吐息をして唯腕を叉いてゐた。
「ですけれども給金は少し、それにあんな毛唐人と一緒で、阿母さん辛抱が出來るもんですか。」とお榔は髮の中を銀釵の脚で掻き〳〵してゐる。
「それがさ、又あの儘にしてちやア腐れ縁で、斷れるつてえ事はあるまいしさ、其中又三毛猫のやうな眼色をした赤ん坊でも産んでくれた日にやア家の恥、親の恥だらうぢやアないか。今の中に苛り出して追ひ返すやうな事にしなくつちやア、ねえ、お父さん。」
「ウム、左様云やアまアそんなものだが……」と危ぶむやうな調子。
「苛り出すつて……左様され、苛り出して了はれりやア好いけれども。」
「何んでも彼でも汝、あんな者ア苛り出してやらないぢや、眞に人様へ話も出來ないよ。保衞さん等も少しは左様云ふ了見から、この頃汝に漸く苛り出したんではなからうかとも、考へてゐるんさ。毛唐人を妹に持つてるんだなんか思ふと、誰だつて全く好い氣持やアしないからね。」
「そんな事でもありますまいけれども……併し、雜種兒の事なんか思ふと忌ですわねえ。」
「ウム、雜種兒の孫ぢやア何うも困……昔なら、斷つて捨てる處だハヽヽヽ。」と修造は苦笑ひ。
「何う云ふ了見であんな者になつたのだらうね我子ながら愛想が盡きて了ふ。」
「唐さんも米國でお世話になつたつていふ、そこらの義理からでもありませうか、親同胞の事も少しは考へてくれないぢやア困りもんです。」
「世話になつたつて、あんな毛唐人なんか忌だ忌だ。」ぶる〳〵とお節は身慄をした。折節洋犬が庭先で突如に吠え出した。

(二十二)

惠美耶の居室であつた二階の八疊の間は悉皆取形附けられて、窓掛を外づし、書棚を運び去り、卓を取除け、上敷の絨毯を捲き上げて元の疊のまゝで障子を立て附け、日本風の昔に復されて了つた。こゝは一昨夜移り住む事となつた唐之助の父母の居場處となつたので。
お節は今、惠美耶を二階へ呼び上げて室内を掃除させてゐる。朵鳥を持つた手附が可笑いと云つては笑ひ、掃び方が粗略なと云つては、白い眼を光せて、
「そんなに無茶苦茶に敲いちやつては紙が破けつ了ふぢやないか、玻璃戸たア違ふんだからね、氣を附けないぢやア……」と癇走つた調子。
「これ位でよろしうありますかね。」見返り見返り極めて輕く、緩やかに、恐る〳〵はたいてゐる。
「そんな眞似をしてちやア……そりやア汝何んだね、遊び事をやつてるんぢやアないか。塵埃を掃ふんだよ。塵埃を……」
惠美耶は呆れて、默つて、當惑さうな眼色で、佇んでゐる。
「オイ汝、何をしてるんだよ、木偶の坊だねえ、御苦勞な、わざ〳〵遠方から遣つて來て、そんなざまぢやア汝、汝の國の恥辱だらうぢやアないか、女の仕業が一つ出來ないぢやア、汝

眞實に……貸して御覧、貸して御覧。」

　尖り聲の、拖ぎ奪るやうに采配を取上げて、手敏くバタ〳〵と障子を叩いて見せて、

「斯うするんだよ、分つたかい、分つたかい……汝一體そんな襤のびらしやらしたものを着てるから、當り前に働けないんだよ。」

　惠美耶は唯默つて、素直に敎へられたやうに、バタ〳〵遣つてゐる。

「何だか手附の可笑いこと、毛唐人の天手古舞見たやうだよ。ホヽヽヽ。」

　その意味が解せたか解せないのか、一寸お節の顏を見やつて、又累りと、障子の塵をはたいてゐる。

「オヤ……」と俄に、お節は耳を傾げて、

「何んだか、湯か何か煮え越してるやうだよ。オイ汝、愚圖々々してゐないで、早う下りて見な。」

「ハイ……」惠美耶は逸早く身を飜へして、蒼惶階子段を駈け下り、直と、臺所へ入らうとする出合頭、「あらッ……」と周章てゝ、お卷は袷の袂へ何か隱して、そして例の瞳に、狐疑深い光を浮べて鬼胎を含んだ顏色で一寸仰ぎ見て、伏目になつてそのまゝ、其處に佇んで了ふ。

　惠美耶はチラと見やつたが、擦れ違うて駈け入つて、丁度七輪の上で累りに煮え溢れて、水蒸氣をもや〳〵雲のやうに揚げてゐた鐵瓶を急いで下の臺へ取卸しながら、

「あの、お卷さん一寸……」と呼び留めた。逃げもやらず、去りも得せず敷居際で躊躇うてゐたお卷はギックリ、胸に應へたやうにじろりと振返つた。

「あの、今のお見せなさいよ。」

「何アに……」白ばくれてゐる。

「今の……今の袂の中の、何あります。」傍へ寄添うて、威嚴を含んだやうな眼でぢつと見下した。

「何んにもありません。」

「一寸見せて下さりませよ、私、貴方を惡く思ふでありません、私、貴方の爲、思ふのであります。」云つて、袂の中へ手を遣らうとすると、周章てゝ顏色を變へて振拂はうとした途端、ポタリと袖口から零れ落ちて、敷居の上でガチャリ、音がしたのは紺の大霰紋の錢入、臺所の棚に置いてあつたのだ。

「これ何うしたのあります。」拾ひ上げて、鼻頭へさし附けると、唯もう顏を眞赤にして、言葉は無い。

　折柄、水口へ影を見せたのはチビ六事、改名、約翰、上州事、改名、馬太、この二人が、玉葱を一ぱい手籠に入れて、兩方からそれを提げて、えつちら、おつちら今八百屋から漸く歸つた處だ。お卷が來て以來、又尻を据ゑ込んだものと見える。

「あらお卷さん泣いてるわ。」「何うしたんだい。」

「汝さん等は、それを其處に置いて、早く彼方へ。」と頤で追拂うて、「お卷さん、貴方、何うも手癖よくありません。」

　お卷は口惜しさうに、わッとばかり泣出した。二階から誰か、段階子踏み鳴らして下り立つ氣色。

（二十三）

「この子を汝、何の咎があつて虐めるんだい。自分に何一つ女の業が出來もしない癖に、生意氣な事をおしでないよ、この子に何んの惡い事があるんだね。」お節は憎らしさうに鴨口を曲げて、惠美耶を睨み詰めてゐる。お卷はおろおろ、お節の顏を竊み見ては、淚を拭いてゐる。

「この子手癖惡いありますので……」

「手癖が惡いつて……何うしたんだね、苟且にも日本人だよ、矢鱈にそんな事を云つて傷を附けられちやア、日本の恥辱だからね。」

惠美耶は唯、愁然として頭うなだれて、兩手の指先を袴の上で又み合はせたまゝ敢て口答もしないで、弱々とした姿は、聊か打振ふかのやう。

「お卷さん蝦蟆口盜んだんだよ。」水口の横手の柱際から眼ばかり出して喚く。これはチビ六の約翰先生、最前から隱れて樣子を窺うてゐたのだ。

「何んだ、こんな餓鬼奴ツ……入用ぬ事を喋舌るんぢやアない。」と白い眼を見せ附けられて吃驚ばた〳〵と駈け出す。

「お卷が盜んだよ。」こたびは上州、水口へ一寸姿を見せて、電のやうに消えて後園へ約翰の後を追うた。

「蝦蟆口なんて……お卷そんな事をしたらかい。」

「左樣ぢやアなくつて。」と眼をおらめてゐる。

「一體未だ眞の子供で、何にも分らない年配なんだもの、蝦蟆口なんか、つい拋り出して置くのが惡い。」

「ハイ。」と云つて惠美耶はそれにも一言、言抵抗はしない。

「子供なんていふものは、つい、物を見ると欲しがるもんだから、そこは大人が好く氣を附けて始末して置かなくつちやアいけないよ、好いかい。」

惠美耶は唯項垂してゐる。

「オヤまア……あんなに炭火を無駄にしてちやア汝、罰が當るよ。」と、ふと氣が附いたやうにお節は臺所へ駈け入つて、七輪の中の、活々と青い焰を揚げてゐた炭の燃さしを一々火消壺の中へ插み込む。惠美耶ははら〳〵して、後から蹤いて行つて、うろつき廻つてゐる。

「臺所の事は汝が氣を附けて、最少と確かりやらなくちやア困るぢやアないか、日本ではね、一軒家の女房になると、皆それが當前の役目なんだからね、朝つ原からピー〳〵歌を唄つたり客がありやア說教だとか何とか、女だてら賢立てにベチヤクチヤ〳〵お喋舌なんかするのが能ぢやアないよ。好いかい、汝の國の風が遣りたけりやア汝の國へ歸つてお遣り、此國ぢやア此國流にやつて貰はないとね。あの、飯なんかもあんな焚き樣ぢやア不味くつて、から、食べられりやアしないからね、最少し水加減をして、火を引く時分に餘程氣を附けてね。好いかい。そして又豚や牛やあんなものはあまり私等の口に適はないから當時魚か、野菜物にしたら善からう。第一其方が安値上でもあるし、この月給の少い中でなか〳〵贅澤な眞似は出來ないんだもの。そして又、あの二人の飯田は、汝が物數寄から養つてやつてるのださうだが、彼こそ眞とに、何にもならぬ穀潰しだから、早速追出つ了ふが好いやねえ。」火箸を握つたまゝ少し烟さうに額をしかめながら、あまり前ほど刺々しくはないが、一種底に針を含んだやうな云廻しである。

惠美耶は素直に、唯ハイ〳〵云つて聽いてゐた。

「漬物なんかも始終買つてちやア大變だから、自分で漬け方を覺えるが好い。」と捨臺辭で、「お卷や、二階へお出で……汝は私等の氣に入つたよ、何となく可愛いんだもの。」

頭を撫で〳〵小い肩へ手を掛けて連れて行く、後を見送つて、不思惠美耶はボロリとした。周章て、手甲で拭いて、茫然と其處に夢見るもののやうに突立つてゐる。

玄關の障子が明いて、悄然と足音も立てず歸つて來たのは夫であつた。段梯子の陰惠に、それと見るより、惠美耶は忽ち南京兎が跳ぶやうに、いそ〳〵と裳を曳いて走り寄つて、訴ふるやうな眼附で、そして優しい兩の手を擴げて、いきなりその首筋へ縋んだ。

上で死物狂に吼え狂うて、それに聲を合するのではあるまいか。ゴウー〳〵と鳴る響、ヒューヒューと叫ぶ音、さしもに堅き屋根の瓦が鱗を剝ぐ如く五枚三枚と拔け落ちて、あれ程手丈夫に犇と建構へた獄屋の根太からメキ〳〵怪しい音を立てあはや天上へ吹き飛ばされんず勢。何となう身に迫るやうな物凄さで、咫尺を辨ぜぬ闇は瞬く隙に、大魔の手を擴げた如く四邊を領して了つて黑闇々、今にもこの世界が全く滅ぶるのではあるまいか、このまゝ奈落の底へ陷るのではなからうか。吹くわ、吹く〳〵わ、物恐ろしい大虛空の叫びは犇々と一秒、一秒每に深く深く身節に沁み込むばかりに。

かゝる夜はさすがに警戒怠りなく、看守長、部長、劍の音をガチャ〳〵させて、外套が鳥の兩翼を擴げたやうに、體には着かないでふはいふは吹き捲らるゝをも物の數ともせず、必死となつて辛くも大暴風と爭ひつゝ、危き足元を踏締め〳〵、累りに巡廻してゐるので。

雨がぼつ〳〵降り出したのは夜中十一時頃であつた。風力は未だ少とも減ずる模樣が見えない、累りと天に荒れ狂ひ、地に怒り叫んでゐる。今は暫し靴音も途絶えて了つた。

「オイ、皆起きるんだよ・・・・・・占めたぞッ！」と低聲の、しかも凜としたのが、件の、女監第十三號の房で響いた。

（二十五）

一旦、惠美郞と共に、寢臺の上に身を横へたのであるが、叫び狂ふ大暴風の音が忽ち耳に附いて、何うも怪しく胸騷ぎがして、寢附かれない。傍では早纖細い、蜜蜂の囁きのやうな寢息を立てゝ、無心に眠つてゐる。無邪氣な、ほの暗い火影で熟とその寢顏を見やる、如何にも、心の底から安らかさうで此世の罪と云ふものは知らぬらしい。定めて天國の夢でも見てゐるのであらう。夢の中に莞爾と口元で笑んだ、それが如何にも可憐で、又如何にも羨ましいので、凝と眼を放さないでゐると、此度は眉をピクリと動かして、その白い、艶やかな眉間に少し皺を寄せた。何うしたのであらう、又阿母さんに虐められる夢ではなからうか、左樣思ふと可哀さうで、いとしうてならぬ。何だか斯う、顏色が少し殺げて來たやうに見えるのでも、日頃の心痛、氣苦勞の程が推量される。察してくれい、心底、慰めて勞つて遣りたさは山々であるが、親の前では左樣もならず、實に腸がちぎれる思ひのみしてゐるのだ。

惠美郞の眉間の皺が自と消えて、又白々と光るやうになつた時、庸之助は更に、自分の罪といふものが恐ろしく身を責めて來た。宵の程から大暴風で、屋根が剝れ、瓦が飛び、壁が崩れ、何だかもう家がそのまゝ飛んで行つて了ひさう。これぞ、この世の末日かとばかり心怖かれて、今、天軍が自分の汚れた魂を奪ひ返しに來たのではあるまいか、エホバの震怒で、自分は今宵粉碎さるゝのではなからうかと、安き心は微塵もない。それに、纖弱い女の身が、枕を高うして、すや〳〵と熟睡の夢に入つてゐる、罪の無いものは結構なものだ。

丁度、雨の音がポッ〳〵屋根の瓦を打ち始めて、それが何だか獄舍の嘲笑の聲のやうに聞做さるゝので、庸之助は最早堪らない、ぶる〳〵ッと身顫ひしながら寢床を脫け出て起上がつた。

隣の寢臺には、義雄と馬太、二人の少年が抱合うて眠つてゐる。お卷は二階で愛せられて、今宵も例の、父母の中に挾まれて眠入つたのであらう。

寢室は東側に當つて、この頃は惠美郞の室と食堂なのである。庸之助は洋燈の心を捻ぢ上げて、燈を手にして、やがて己の寢室へと入つて行つた。が、同時に怯として不思立留まつた。背は早一面の生汗、氣が附いて見ると洋燈の火

影が、正面に床の間の、油畫に射し懸つたのであらうア、耶蘇の畫像が惡魔と見えさうになつたか。否、自分が早惡魔になつて、耶蘇が恐ろしく見えるのであらう、もう駄目だとそゞろ嘆息した。

やがて頽然と椅子へ凭れかゝつて、茫然と考へ込んでゐる。何だか非常な物音が屋根の上で聞えた。ハッと思ふと、冷汗が又背に一ぱい。會堂の屋根の瓦が落ち懸つて來て碎けたのでもあらう、こんな事に怯えるやうになつたとはと、更に太息した。

庸之助の左なきだに搔亂されたる胸は、今日、監獄の教誨堂で、我に物云ひ懸けんと立騒いだ女囚を見た時に、殆んど致命の大傷を受けたのである。罪なるものの如何に恐るべく、又神樣の罰なるものの、如何に嚴かなるかを、今更身に沁み入るやうに感じたので。

吹くわ、吹くわ。暴れるわ、暴れるわ。罪の子を吹飛ばし、人類の種を打滅さんとエホバの震怒が、末の世に臨んだらしい、今夕今夜！

（二十六）

又しても、又しても、罪の子よ、惡魔の兒よ、サタンよとばかり連けさまに、天空から喚き叫んで、會堂の屋根越しに、自分の頭の上を掠めて行く嘲けるやうな、悲鳴するやうな聲が、暴風雨の中を劈いてありありと聞えて來たので、旗竿の唸るのであらうと、思ひ直して見ても、何うしても左樣だとは思ひ直されない。齊聲默せば石も號ぶべしと基督は宣給うた。旗竿が號んで、正に自分の身の罪を問責するのであらう、旗竿の號びは旗竿の號びでないのだ、庸之助は頭を打つて、やがて兩手を耳に蓋うて了つた。

耳は蓋うても、目は塞いでも、心の鬼嗤と嘆きとは、なかなかに靜まる段ではない、旗竿の號びが今良心の號びと代つて、罪の子よ、惡魔の子よ、サタンよとばかり、肉を推ぎ、骨を抉る苦しさ切なさは、以前にも倍する心地。女囚の怨めしさうな顏がありありと幻に浮ぶかと思へば、小娘の俤が眼の先にちらついて來る。そしてそれはお卷に似てをる。否お卷である。お卷と女囚とが交る交るに見えて、やがては恵美耶の睨むやうな眼色、母の泣き出しさうな顏、姉のお柳の心配さうな樣子、宛ら萬花鏡を覗くやうに、心の底でくるくると廻り廻つてゐる。

かゝる中にも又してもあの、お卷といふのは、自分の娘に違ひなからうといふやうな氣がしてならぬ。姿形は見更へるほど變つてゐたけれど、あの女囚は慥かお澤であつた。時も時、折も折、斯く兩刃の鋒が、この罪の身を刺し貫くのも、畢竟神樣の冥々の罰、主の正義の犯すべからず、蔑ろにすべからざるを示し給ふ所以である。身はこのまゝに碎けよ。心はこのまゝに消えよ。骨は灰となれよ。肉は塵に歸れ。我身は實に天地容れざる大罪人である。

虚空は八荒の荒狂ふ響、滝津瀬の鳴り轟く音、降りしきる雨はやがて九天の銀河を決して、ざアざアッとばかり横しぶきの、斜めに戸や窓へ打かゝる。それが宛ら幾百の怪獸が襲ひ入らんとして、鋭い爪で掻り附くかのやう。屋根の上では、惡魔がいゝ、しきりと跳つてゐる。狂つてをる。會堂の方に當つて嘲笑ひの聲は、いよよ高く、いよゝ逼るやうだ。

庸之助はもう生きながら地獄の火に燒かるゝかとばかり、滿身の血は逆流して、暫し頭が破れるやうであつたが、やがて氣も次第に遠くなつて、何だか冥府の使の暗車に乘つたまゝ地の底へでも引入れらるゝやうな心地怪しく、ほとほと滅入り込んで了ひさうなので、之ではならぬと、漸と氣が附いて、洋燈の心を又一捻捻ぢ上げた。室内がぱつと、以前に倍して明るくなると、心が妙に引立つて來たが、床の間の昇天の耶蘇は、此方を睨んでゐるかの如く、とて

も正面には見られなかつた。

風の聲、雨の音の中から、何だか戸を叩くやうな音が微かに、ふと耳に入つた。氣の所爲だらうと思つて見たが、何うも左樣ではないらしい。自分の名を呼んでるやうだ——、耳の所爲か知ら。

　小頭を傾げて、靜と斯う氣を靜めてゐると、矢張戸を叩いてゐるやうだ。慥かに門の戸を叩いてゐる。この大暴風雨の中を怪しさの限り。さては、これぞ冥府の使かと思ふと、何んだか襟柱凄いやうで、庸之助は二度三度戰慄した。

（二十七）

　庸之助は宛ら死人のやうな眞蒼な顔をして、未だ止まない胴慄ひの、足元踏み緊め、洋燈持つ手も戰きつゝ、己が居室へ入つて來ると、後から蹤き隨ふものがある。その影法師が洋燈の火で、窓敞の上へ映つたのを見れば、大童の、髪振亂した魔ものの姿である。

　椅子を與へてやつたが、その欄を捉へたまゝで未だ突立つてゐる。蓬の如く亂れた黒髪が濡れしよぼけて、雫がぽた／＼、耳際から、濃く皺の入つた額際から、顴骨の高く突出た顔邊へ瀧をなして流れかゝり、眉毛が長く延びて、目が窪んで、その底にはどんよりと一種濁つたやうな光のある、口元の稍曲つたやうな、何となう淋しい何處か邪慳らしい女で、しかも身には澁紙の如くなつた柿色の囚衣がヒタと食着てゐる。その袖からも襟からもぽたり／＼水が垂れて、浴びたやうにびつしより濡れ鼠である。

　庸之助は斜めに椅子へ倚りかゝつて、チラとその顔を見遣つて、直ぐに眼を翳らし下向になる。女は一心に、庸之助を見詰めてゐる。

「それぢやア何んでも氣持が惡からう……私の衣物でも……」沈んだ顫へた調子で云つて、又一寸見上げて、立かゝる。

「逃ちやア忌ですよ。」と物凄く笑つた。

　庸之助は唯默つて、蠟火奴を持つて出て行くのを、振返つて見送る途端、手甲へぱつと洋燈の光を浴びた。鮮血が眞紅を染めて、ぽたぽたと滴つてゐる。

　暫らくして、庸之助は、綿ネルの衣服一枚と、三尺帶を手にして入つて來たので、

「難有う。」と輕く叩頭したまゝで女は片隅へ行つて、囚衣を脱ぎ捨てゝ、丸めて置いて、わなわな慄へながら、それを着用した。

　庸之助は凝と、その後姿を見守つてゐたが、やがて、彼方で振返つたので、周章てゝ伏目になる。戸外では猶しきりと、雨風が暴れ狂うてゐる。例の叫び聲も、耳に附いてならぬ。

「驚いたでせうね。庸さん、驚いたでせうね。」と馴々しく云つて、椅子へ倚りかゝつて顔を覗き込んだ。

「左樣です……何うも驚いて了つて……。」と未だなか／＼動悸の靜まらぬ樣子。

「妾はね……もう何から云つて好いやら分らないけども……、庸さん、貴方は隨分、し、酷いぢやアありませんか。」

　俯向き込んで了つて、何とも返事がないので、

「庸さん……」と、椅子を一搖前へ、押進ませて、

「庸さん、私は貴方の爲めに、何んなに苦勞したか……それに貴方は薄情な、私を打捨つといて何處へか逃げて了ふのだし、後で私はもう何んなに……」

　とばかり、胸が差迫つたやうに言葉は途切れて、そのまゝ袂を顔に押當てゝ了つた。

　庸之助は何とも彼とも云へない、唯もう腸が寸斷々々にせられるやうで、言葉は出せないのである。

「ね、庸さん、貴方はもう……貴方はもう、私に愛想盡ししたのでありますか。十年經つたらもうそんなに……ハイ私は罪人です、囚徒です、夫

殺しの大悪人でございます。口を利くのも汚らはしいか知りませんが、その罪人には……その夫殺しには誰がしたのですか……庸さん、貴方にまで愛想盡される理はありません……そりやアね、譯を知らない人は、鬼となと、蛇となと、勝手に云ふが好いでさア、けれども庸さん、貴方にまで……」と、云つて、涙を拭いて、そして依然當年の情人に戀を語り憂を分つといふ素振。

「そりやアね、私だつて、滿更世間の義理といふものを知らないぢやアありません。けれども、その今の、婿つて云ふのが、私は何うも蟲の好かぬ、忌な、忌な、おまけに恐ろしい嫉妬家なんでね……、それも何か、お父さんが訴訟事件の失錯から刑事の罪人にならうとしたのを都合よく仲裁したとやらで、それを恩に被せての、押懸婿つてなもんでさア。かねて私に横戀慕してたものと見えまして、貴君との中を妨けたのも、畢竟、其奴の仕業なんでしたよ……丁度ね、もう懐姙てたもんですから墮胎して了へつて、私を虐めて、虐めて、虐め貫くんぢやアありませんか……。阿母さんは成さぬ中だし、お父さんは御病氣で臥つてお居なさる、私はもう氣が狂ふやうになつたらうぢやアありませんか……庸さん、少たア察して下すつても。」ぶる〳〵慄へながら云つて、口惜しさうに袂の先を喰ひ縛つて、涙の眼でぢつと見た。

あゝその涙の眼、昔の愛に輝いた火のやうな光はもう消え失せて了つて、優しい、淑しい、しなやかな顏容は最早尋ねるに由もない。暖い手を握り交して、戀を囁やき合つた、あの可憐の少女がこれであるかと思へば庸之助は先づ、誰不知涙含まるゝのであつた。

（二十八）

風は少し凪いで、雨が今、土砂降に降りしきつてゐる。何處か筧が落ちたのであらう、軒の玉水、不絶忙がしげに細語くやうな音の、それにも心置かるゝのである。

「全く、私が悪いので……私の罪で……決して左樣……囚徒だから、罪人だからつて、そんな事は。」と、庸之助は吃りながら漸く云つた。

「おやア貴君は、あの私の事を……」と少しは笑顏になつて、「あの……私の顏が分らなかつたのですかね、始めて教誨所へ御出なすつた時は……」

「私は唯一心に、說教してゐるのだから……」

「私は一目見ると、何うも貴方のやうに思ひましたから、懐かしいぢやアありませんか、他人の空似だつても懐かしいんですもの……看守長が、鳩宮先生だつて皆に紹介しました時やア私はもう直と飛んで出ようかと思ひましたけれども、場所柄が場所柄だからと漸と控へてゐたのですが、あの、夫に捨てられて罪人になつたものもあらうつて、御說教なさつた時やア、もう胸が一杯になつて、泣出したらうぢやアありませんか。」と眼を拭いてゐる。

「濟まない事をしたねえ。」と、庸之助は敢てそれに答へるでもなささうに、唯呟やくやうに云つて、ホツと苦しい吐息を吐いた。

「その後ね、取締に密と聞いて見ると、鳩宮庸之助さんて、牛込教會の牧師だつて云ふんでせう。それからは一日逢つて、話が仕度くつて〳〵ならないんですから、大膽な、牢破りを目論見ましてね。」

庸之助の眼色は動いた。

「同じ房の、皆のものを煽てゝから、古釘を盗んで來て、毎晩々々、少しづつ羽目板を毀しかけてね、一月許り懸つたのです、今夜の暴風雨に紛れ込んで、皆脱けて出たんですが、一番終の奴ア、目附かつて愚圖々々してる中、部長に切られちやつた樣子です。」

「……………」

「斯うしてゝも、少とも安心はならないんです

から、貴方今から一緒に、何處かへ連れて逃げて下さいな、ねえ貴方。私を可愛さうだと思ふお心がありや……」

「……」

「二人で氣樂に暮されるやうな處へね……」

「……」

「貴方、子まである仲ぢやアありませんか。」と急き切つて、さて調子を緩めて、

「その今の貴方の胤つてえのは、牢の中で產み落しまして、六歲の時、看守長の處に引取つて貰つたのですが、その後逃げ出したつてね……何處へ行きましたか……お卷といふんで、可愛らしい娘子でしたがね。」愁然として、露味のある眼元で、つく〴〵訴ふるやうに庸之助を見上げた。庸之助は今更葬と胸に當つたやうに、顏色を變へながら、固く腕叉をしてゐる。心臟の鼓動の高く跳るやうなのが、衣の顫へにでも分つてゐる。

「貴方、何處へか連れて行つて……それとももふ今閣さんがお在んなさるのですか。」と少し甘えたやうな調子で凄味を云ふ。

「お澤さん、私は牧師です……何卒、汝さんは自首して出て下さい。」と、屹として庸之助は云放つた、容を改めて、今、犯し難き威嚴を含んだやうな顏色である。

「エ、牧師……それは承知です、牧師さんだから私をお見捨てなさるやうな薄情な事はなさるまいと思つて、それで逃げて來ましたので。」

「私は……私は、これでも牧師です。」と顫へ聲。

雨垂の音がポツ〳〵、何だか嘲つてるやうに聞做される。

「牧師つて、そんな邪慳なものですか……生氣な娘を欺しちやつて、子まで生して、擧句にやア夫殺しまでさしといて、知らない顏をしてるもんですか。」扶ぐるやうに云つて、しく〳〵鼻汁を啜り上げた。

庸之助は肩から出るやうな吐息をして、堅く眼を瞑つて、小頸を傾けてゐる、雨は小降になつてしと〳〵と、戶外から人の窺ふやうな氣色。

お澤は四邊を振返つて、悄として、自分の影法師だと氣が附いて漸く胸を撫でた。

今斯くと思決したのか、庸之助はいつか眼を瞬つて、しきりと次の室の方を氣にする樣子。

名殘の風が一吹ピユー〳〵と物凄く、簾竿の邊で鳴つて行つた。

（二十九）

「昨夜のやうな大暴風で、屋根が飛んだり、垣根が倒れたりなんかすると、又汝の入費だと思つて、私やア眞に胸が痛くなるのよ。」と、母は一階で、四人が朝餐の食卓を圍んだ時に、庸之助の顏を見ながら心配さうに眉を顰めて云つた。

四人とは勿論親子夫婦の者であらうと早合點せらるゝのであるが、左樣ではないのだ、惠美耶は此の一家團欒の食卓から遠ざけられて、後で、約翰、馬太の二人と共に、食事を濟ますのが常例になつてゐる。畢竟、母が、あの碧い眼玉を見ると胸が塞へて食物が喉へ通らないと云ふから起つた事で、その代りにお卷が御給仕役として、其座を與へられてゐる。庸之助は親の命令に背く譯にはゆかず、惠美耶へ對しては氣の毒千萬であるし、食事の時は常時もこの事を考へ出して、箸を執るのも忘れがちなのである。

「大分、彼所此所破損したやうだよ、困つたもんだ。」と父の修造も心配顏。

「なう、庸や、瓦なんか大分飛んぢやつたやうだよ。」と母は稍聲高に云つた。

「ハイ……瓦ですか……」と心此所にあらざるものゝやうな返辭をする。

「大分入費だと云ふ事よ。」

「ハイ……修繕費ですか……その方は會堂の

維持費から出す事になりますので。」
「左様かい……左様云ふ事ならまア好いけども。」と、伴は一寸言葉を切つて、小頸を傾げ、
「併し、それでなくつても、この月給の少い中から、何や彼や、汝も入費が多くつて、弱つてる處へ第一、あんな、何處の牛の骨か馬の骨か分りもせぬものを二人までも養らてやつて、ありやア眞に何うすると云ふんだね。お巻は臺所の方の役にも立つし、養ひ甲斐があるといふものだけども、あの子供なんか、眞に下らない骨頂ぢやアないか。」
「あれは又、妻が孤兒院を立てたいと云ふので拾ひ上げたのですから、阿母さんには先日もお話しましたやうにその方の費用は亞米利加から送る事になるでせう。」顏を上げて、極めて細い、力無さうな聲で云つた。
「亞米利加の方から……汝の月給もその方から送らせたら何うだい。」と父は分別顏。
「左樣云ふ譯にはゆきませんので……」云つて、又深く考へに沈んでゐる。今朝は別に一つ、大きな心配事が胸の重石となつて、飯も漸く、一椀が力限りであつた。
「も一つ、裝ひませう。」とお巻は、教へ込まれて言葉も丁寧に、凝と庸之助の顏を見上げた、庸之助も不思議、それと瞳を見合せて感に堪へざるもののやうに吐息をして直と他方を向いた。
何うして飯を食はないのかと、父母に怪まるるを、少し頭痛と云紛らして、やがて段階子を下りかけた。段階子の下を今、周章てゝ再び退いたのは惠美耶である。腰を掛けてゐたのらしい、其處へ降りて行くのを立迎へて、そして赤らんだ眼で庸之助の顏を見る。手には革表紙の聖書を持つてゐた。
「何うしたの……」沈鬱な聲で問ふと、
「何うもしたのありません。」泣いてゐたのらしい、星のやうな瞳が潤んでゐる。
「何んにも心配しちやアいけない。」下意氣を勵まして、我にもあらず、その手を確と握る、温い血が全身に波立つやうである、惠美耶も確と握り返して、感謝の涙が一滴、長い睫毛を傳うた。
折ふし、朝の讚美歌を唄ひつゝ二人の少年が入つて來た。庸之助はふと心附いたやうに、眼を擧げて、後の庭口の方を氣にしてゐる。

（三十）

隣合の、陸軍士官の邸宅と、中を隔てた竹垣が繩を切つて押潰したやうに大地に倒れ、屋根瓦の粉微塵に碎けたのが、彼處此處に狼藉して、板片やら、木葉やら、小枝の折れたのやら、窓の戸の飛んで來たのやら、藁屑、古帽子、傘の骨、何や彼や雜多と、塵溜桶を引くり返したやうに散亂してゐる。前面は生垣だから、左程破損もしないが、門の柱が少し歪んで根太が怪しくぐらついてゐた。庸之助は、一通、屋敷内から會堂の周圍を見廻つて、さてその界境の木小屋の前へ立戻つて、暫らく下駄の先で小石か何か踏躙つて躊躇してゐる樣子であつたが、遂に其處を離れて、家へは何とも云はず、門の外の方へ出て行つた。セルの單衣に常着の、久留米絣の羽織着流のまゝ帽子も冠らず、散歩であらうか、それとも何處へかと、不審さうに、惠美耶は櫛を使つて鬢毛を掻上げながら、水口の敷居際に立つて、その後影を目送してゐた。
道へ出て見ると相も不變瓦の碎片や、板片や、中には、大きな雨戸のやうなもの、厠の屋根のそのまゝ剝れて飛んで來たやうなの、豚屋の看板、ヒトローの廣告、濡れ草履、松の小枝、いろ〳〵算を亂して處狹く落ち散らばつてゐる。その中を右に左に縫うて、やがて曲り角の交番所の前まで來た時、辻に立番の巡査へ危く行當らうとして、庸之助は始めて眼を上げたが、胸がどきりとして心臟の鼓動は俄かに高まつて來た。

一二間行過ぎるまでは、何だか呼吸が止まるやうな思ひで、今にも襟首へ手を掛けて後へ引戻されさうな氣がしてならず、我不知小足早に、すた／＼と歩いて行つたが、何時しか背はびつしより汗びたになつて、腋の下は冷かであつた。ア、情ない、と口の中で呟いた。

如何にも情ない次第である。昨日までは牧師たる事を恥ぢてゐたものであるが、今日は又人らしい姿をしてゐるのさへも恥かしい。道徳の罪人として天の罰を受けるばかりでは猶事が足りないで、法律の罪人として、人の罰まで身に負はねばならぬやうに、立至つたとは、何たる情ない次第であらう。思へば破獄の重罪犯を、場處もあらうに牧師館の中へ隱匿するやうな、不埒な事を仕出かしたのも、矢張、自分の手で蒔いた罪の種の、收穫をしてゐるのである。恐るべきは、罪と、今更のやうに、四肢が打顫かれるのである。

自首を促すやうな聲も聞える。それを打消すやうな思も萌す。自首して了へば、それで神様の前は濟むのであるが、併自分一人を只管倚頼に思ふ一心から、女ながら大膽にもあの城壁のやうな處を脱け出して來て、生殺與奪の權を一切自分に任ねてゐるのではないか。それを自分が直と又、元の暗い處へ押込めて、身の潔白を證據立てようといふのは、あまり僞善の行ではなからうか。彼の女に罪はあらう、罪はあらうが之といふも畢竟日本の社會制度が不完全で、相愛し相慕うてゐる男女の、切なき戀を遂げさせず、親の威光や、金の威光で、雙方の中を無理遣割いて了ひ、押附沙汰で、氣に染まぬ者と一生友白髮の契を強ひんとするから起つた事で、神樣の眼から見たら、却つてこの女の手で屠つた人を祭壇の聖火に燔いて、今の社會制度をのろひの犧牲としたのではあるまいか。左樣思ふと決して突放し、叩き出すといふ譯には行かないのである。否、それはあまり牽強つけた小理窟かも知れない、法律と道徳としかく、衝突するものではなからう。餘りに自分を辯護し過ぎるのである。兎にも角にも已に罪人と名の附いたものを隱匿するのは良心が許さない。心の底に不安な處がある。然らば自首か。自首すると或は、自分も一時入監の身とならうも知れぬ。假令左樣ならないまでも自分が多少の地位名望は全く亡くなつて了ふのである。固より、社會の或一部に對して有する地位と名望とは決して惜しくはない。唯植木監督の信任には何として答へる事が出來るか。惠美耶へは何の面下げて逢はれようか、又、兩親の思惑は如何であらうか、或は又、此を機に銀行員となれと勸めらるゝかも知れない。ア、寧ろ中岡君のやうな心になつたら氣樂であらう。

しきりに洋犬が吠立てるので、ふと顏を上げた、こゝは早、田島の邸である。自分は何ういふ氣で來たのか知ら。貸家を探さうか、自首をしようか、夫を思ひ決するために慥家を出たのであつたが親が身を引くのか、此處まで來ると姉の顏も見たい。

（三十一）

離亭の小座敷では早酒宴が始まつてゐた。迎酒とでも云ふのであらう客の中岡が下手で、主人の保衞が上座、見知らぬ綺麗頭の、仇つぽく着飾つたのが、お酌役である。黑漆塗の臺の上に、鯛のあらひか何か、あつさりとした一鉢、錦手の底の淺いのが載つかつてゐる。

庸之助は姉のお梅に導かれて、少し當惑さうな顏色で、其處へ正坐まつて、會釋をなし言葉少なに風見舞など云つてゐる。

「ア、何うも昨夜は大變でしたね。お庇蔭で強ひて破損もしないやうでしたが、唯庭木が少しね。御宅の方は如何でした、未だ失禮ばかりしてるですが……」と、保衞はさすが側の人を外さ

ぬ婉曲な調子。米琉のけば〳〵しい袷の上に黒魚子の羽織着である。

「ヤア、鳩宮君か。近頃御無沙汰ばかり。昨夜は又大變な暴風雨で、御宅の方は何うです、強ひて御破損は……」中岡は膝を正して、丁寧に叩頭をした。庸之助も何か云つて會釋を返した、見れば、彼は未だ新らしい仕立下しの、黑綾のフロックコート、スコッチの上柄の股袴を着し、時計の金鎖を胸の邊で燦かせてゐる。顏は赤い、彼の綺麗首も、その中何か云つて、丁寧に、庸之助へ會釋した。

「僕は其の、實は、一昨日教會の方を辭職して了つて、銀行の御厄介になる事になつたんだがね、それに就いては、此方樣の容易ならぬ御心配で、實に感謝してゐるんです……之と云ふも、君等の緣に繫つてゐるからでもあるので、實に感謝に堪ない。」と頭をひよこ〳〵屈めて、

「未だ、つい何や彼や多忙だもんだから、御報知もしなかつたが、僕は丁度この裏手へ引越したんだからね、寸と又遊びに來てくれ給へ。相不變手狹だが、從前のやうな蝸廬でもないからハッハッハッ……」と押出すやうに笑つてゐる。息は酒臭い。

お柳は保衞の側に坐つたまゝ、唯默つて、庸之助の顏を見てゐた。

「一杯何うだね……」と保衞は杯を鳴す、綺麗首は直と銚子を取上けて、

「お受けなさいましな。」縮の袖が動くと、薰香の匂がぷんとする。

「僕は……僕は遣らないんですから。」と庸之助はいゝ、しきりに辭退する。

「アヽ、左樣だつたね……併し、一杯位好いぢやアないか。」「君、折角の何だから遣り給へ、遣り給へ。」と中岡が笑顏で嗾かしてる。

「僕は……、禁酒なんですから。」

「まア、一杯だから遣り給へ……お龍茫然見てゐないでお酌をしろッ。」

綺麗首はお龍といふので、お妾が妾宅からの出張と見える。

「貴方まアお一つ……好いぢやアありませんか。」と保衞の手から杯を取つて、それを強ひて庸之助に持たせうとする、持つ事は持つたが、直ぐと疊の上へ置く、構はず、それへ浪々と注いだ。少し溢れ出て、疊表に斑點が附いた。

「何うも鳩宮君はあまり義理固いから困る。何の酒の一杯や二杯で廢れて了ふやうな君の信仰でもないぢやアないか、僕等は敢て、酒一つ吞むの、吞まないのといふやうな事に重を措かないね。唯心で信じてさへ居りやアそれで好いんさ。ね、奧さん、少し氣を變るやうにしないと鳩宮君は病氣を出しますよ。何うもこの頃血色が好くありませんですもの。」

「左樣ですねえ、何うも病身げで……あれぢやア心配でございます。」と、お柳は浮かぬ顏で、ほつれ毛をいぢくつてゐる。

「實に何うか少し氣を變へたら好からう。こんな事を云出すと、又笑はれるかも知れないが、何うせ君、五十年の命だもの、旨い物を食つて、好な酒を吞んで、偶にやア藝者買も好からうし、出來るだけ、吞氣にやつて行かなけりやア損だらうぢやアないか。未來なんて、そんなものが的にやアならないからね。」保衞は笑ひ〳〵云つて、蘇牛が嗚した杯を受けて、お龍に酌をさせる。

「そりやアまア、未來つて……いろ〳〵信仰にも依りませうが、兎に角、飲んで食つて氣樂にやる方も惡くはありませんね。」

「ハヽヽ、あれでも中岡君が、未だ悟つた顏をしてるから可笑いや。」

「眞にね、……中岡さんもこの頃は隨分御盛んださうですよ。」とお龍が笑顏。

「串談云つちやア困りますよ。」さすがに、赤

面した。
お柳もむゝつり。庄之助もむゝつり。座は白けて來る。

(三十二)

夜も早更けて彼是十時過であつた。番町の横町の、とある路次口で、今合乘車の梶棒下させて、手頭を絡み合つて下り立つた二人の男女がある。
男の方は山高帽子を目深に冠つて、二重マントか何か着込でゐる樣子。女はお高祖頭巾で面を包んでゐた。薄暗い長屋の角口から六軒目の、茫然した燈影が障子格子に映つてゐる家の前で、男は立留まつて暫らく邊の樣子を窺ふやうであつたが、やがて戸口の戸をギシ〳〵ガタガタ漸と明けて、
「御免よ。」と、邊り憚かる低聲。奧から燈を持つてばた〳〵と駈け出る氣色。
「何方……オヤ、お前でございますか。」と、嗄れた聲。
「何卒よろしく願ひますよ……此方へ入るが好い。」と、戸外の女を呼ぶ。
「誠にむさくろしい處でございますが……」云ひ云ひ、一寸豆洋燈の笠を上げて庭口に佇んでゐる女の姿を一目見て、「まア何卒。」と先に立ち、二階へ導くのは、六十前後の、眼のしよぼしよぼした、猫背の老婆である。
「梯子が危險でございますから、何卒御氣を附けなすつて。」
女が先へ、男は後から、恐る〳〵、殆んど眞直な、破れ梯子を昇つて行つた。
二階は六疊で、天井の低い、窓の小暗い、古新聞を貼附けた壁が、所々落ちてゐて、疊は、燻臭い、藁が食み出してゐる。それでも、隅の方に、古い錦繪やら、煤を拂つたのやら、分らぬやうな黒煤けたのが、べた〳〵貼つてある一枚の襖の、手垢で光る革の引手を引くと、其處は押入になつてゐるのが、殊勝な位なもんだ。
婆が用意してゐたと見え、片隅にあつた行燈へ火を移して、何かくど〳〵世辭を云つて、やがて降りて行つたので、女は、ホツと一息、お高祖頭巾を脱いで、其處へ坐つた。男は帽子も取らず、二重マントもそのまゝ、相對して座を構へる。
燈火が暗くて、厭に何んだか陰氣臭い。
「隨分汚いけれど、まア我慢して下さい。」
「否、結構ですよ。これまでの事を思ひやア、貴方、此處だつて勿體ないくらゐですわ。」滿足さうに笑んで男の顏を見入つた。おぼろげながら、燈火の影が正面に射し映る。それは彼の脫監の女囚お澤であつた。男は無論、庄之助。
「木部屋の中で何うも辛かつたでせうね、方々探し廻つたんだけれど、妙に一寸見附らないもんだからね。」
「もう辛い方は慣ツ子になつてるんですからホヽ。」と淋しく笑つて、「それでも、濟まないのねえ、貴方にいろんな御心配をかけて。」如何にも氣の濟まなさうな顏色。
「何ァに……」之も沈んだ調子。
「貴方、帽子なんか取つちやつては何うでございます。」と氣の附いたやう。
默つて、帽子丈は取つたが、二重マントは脱がなかつた。
「貴方も、飛んだ災難に逢つたとお思ひなさるでせうね、眞に濟みませんのねえ。」
「何ァに……そんな事は。」
「私やアもう、貴方ばかりを便宜に思つてるのですから……御迷惑ぢやアありませうけどもねえ。」
「私が惡いのだから……」と自ら哀れむやうに濕つた聲音。
「否、何にも……貴方が惡いなんて、そんな

譯は一寸もありやアしませんわ。私が惡いのですとも、そりやアね、私が矢張、…貴君の事ばかりは、何うしても諦らめる事が出來ないもんですから、それや是やで、つい、あんな大外れた事を仕出かすやうになつたのですよ。矢張、女といふものは馬鹿つぽいもんですわねえ…私やア何うせ絞首になるんだらうと覺悟は極めてゐましたけども、それまでに一度貴方の御目にかゝりたいと思つて、公判の時なんか一心に、傍聽席の方へ氣を附けてゐたのですが、見えないんぢやアありませんか、あの時は何なに口惜しかつたか…」と云つてほろ〳〵涙を滾した。

庸之助も何だか胸が迫るやうに覺えて、今更のやうにしげ〳〵お澤の横顏を覗いた。戀の俤はさすがに何處か、未だ殘つてゐる。

（三十三）

「あの、貴君はもう奧さんがおありなさるのですか。」とさすが打慄へるやうな聲音で問うた。

「ウム、その…實は…」

「もう、おありなさるのですかね。」と眼色を變へて不思獨高な調子であつた。

「實は…汝さんが、斯う云ふ事であらうとは夢にも知らなかつたもんだからね。」

「汝さんなんて、改まつた口上ですことねえ…私やア矢張、十年前の事を思つてるのですよ。そりやアね奧さんなんか、もうお持ちなさつてるやうだと、私の事なんか、から思ひ出しても下さらなかつたでせうけれどもね…」

「左樣いふ譯では決して…」

裏口でガタリと物音。庸之助は吃驚して膝立て直すと、お澤も耳を澄まして、やがて口元で笑んで、

「猫ですよ。」

庸之助はホッと吐息。

「嘸、お美しい、お弱々い、そして里方も歴とした家の御嬢さんなんでせうねえ。」

十年前のお澤は含羞んで、串談口なんかあまり利かないで、品の高い、温和やかな處女であつた。それが何うも、嫉妬悋氣か、弄ぶ氣か、斯ういふ事を臆面もなくぶつつけるといふのは、さても浮世の波の底には如何なる魔が潛んでゐるのであらうか。庸之助は何だか嘲けらるるやうにも聞做たのであるか、自分の所爲を思ひ出すとさすがに心弱く覺えて、

「否決して…實はその、亞米利加で、私の恩人の娘を貰ふやうな事になつた次第で、決して…そんな浮いた事ぢやアないです。それも、汝さんにはもうちやんと婿養子があつたのだから、今頃は夫婦の間に子でも出來て、一家睦じく暮されてゐるだらうと思つたので…斯う云ふ事とは夢更知らなかつたのです。」

「子でも産んで、睦じく暮してるだらうなんて、そりやア貴方あんまり薄情ぢやアありませんか…」

「薄情つて、左樣いふ譯ぢやアないんです…あの時の事を思ひ出すと、何方に怨があるんだか汝さんは婿を取るんだし、試驗には失敗つて了ふんだし…」我ながら聲の調子が何んだか高まつて來たやう。世間が早寢靜まつたからでもあらう、庸之助は不覺、體が竦むやうで、四邊をキョト〳〵見廻した。

「そりやアね…あの時の私の心つてえものは、何んなに辛かつたか、貴方に逢はせないやうにと云つて、一室の内へ閉ぢ籠めて了つて、家の人が始終眼張つてるんぢやアありませんか。手紙一つ書いて上げる事は出來ず…濟まなかつた事ねえ。」と涙聲。

「何うも、これもお互の運命だから、今更夫れを何う斯う云ふのぢやアないんだがね。」と至つて低聲、天井の方を仰見るやうにして、感に堪へざるもののやう。

一寧そ、あの時、否でも摑んで死で了つたら好かつたのにねえ。」眼を堅く瞑つて、手を額に加へた。

庸之助は返辭も得しない。

「その奥さんてえのは、亞米利加ですつてね。」と、思出したやうに云ふ。

「亞米利加人なんで。」

「亞米利加人ですつてね、……おやア異人さんですね。」と妙な眼色。

「左樣です、私が容易ならぬ御世話になつた人の娘なんで。」云ひつゝも、しきりにキヨト〳〵四邊を氣にして居も据らぬ樣子。

「あの、お子さんがおありなさるんですかね。」

「否……そんな事は。」

「左樣ね……」と云つて、一寸、小首を傾け、

「お登は何うしたんだらう、ついあの子の事を思出しますが……」愁然たる面地で、庸之助の顏を見遣ると、忽ち眉を顰して、

「す、あの子は私の家に居るんですよ。つい、未だ話さなかつたが、實に不思議な事で。」と言葉遣ひも少し碎けて來る。

「まア、眞實に。」とお澤の聲も不思議い。二人は周章て、前後を見廻した。何處かでギチ〳〵とミシンの器械を廻す音が聞えてゐる。

（三十四）

「何うも不思議な事があるもんですねえ、矢つ張神樣のお引合せとでも云ふんでせうねえ。」と、お澤は庸之助の談話を聞き了るか了らないかに、早眼の中を霑ませて云つた。

白木綿の繃帶した片一方の手頸は輕く膝の上に任せ懸け、右の方の手を疊に突いて自墮落に體をくづしかけ燈心掻き立てた行燈の火口の一寸許明いてる隙間から、はつと射しかゝる薄赤い火影に半面を照らされながらゐたのが、今俄かにきちんと起直つたので。

庸之助は語り續けるのである。

「それが又、お父さんや阿母さんに餘つ程可愛がられてゐるんだよ。私やアまだ實の孫だといふ事を打明しやアしないけども、親といふものは爭はれないもんで、自然と其處に情愛を感じるものと見える。」

「眞實にねえ……あの娘も幸福ですわ、もう餘つ程大人になつてゐますでせう、見度うございます事ねえ。」云つて限り無き愛の光を面に浮べて、笑に綻けるやうな口元、希望に輝く眼で、呢と庸之助の顏を仰ぎ見るやうにした。眼鼻立さすがに溫い血の氣の通ふ昔の色に出でて、凄いといふよりは何處か斯う美くしい。庸之助も、不思見返して、何となう床しさ、懷かしさの情が泉の如く、胸の底から湧き上る思ひ。暫しは我を忘れて、十年前の昔に返つてゐた。

「あの、何卒一度……明晩でも連れて來て、逢して下さいましな。」と漸く云つた。

「明晩つて……そんな性急な譯にも行くまいが、兎に角二三日中に、連れて來る事にせう。」

「私、一刻も早く逢ひたいのですから……親子三人一緒になるつてえな事は、滅多に出來ないんですもの。」

「左樣さねえ……私も未だ親子の名乘をしてゐないのだから、汝と三人、斯う揃つた處で。」

「汝かね……嬉しいねえ……三人一緒になつたら何んなに嬉しいか。」莞爾と笑ふ、その滿足さうな、左も愉快らしい顏色の、見るから引入れられて了ひさうだ。

庸之助も暫しは胸の懊惱も忘れて、何となう醉へるもののやうに、樂しい、喜ばしい、心のどかな思ひであつたが、それも譬へば、針を縫ゑしと知らで、絹蒲團にくるまる束の間の夢、果敢なく醒めてはやがて、起つても居てもゐられぬやうな遣瀬なき苦痛と煩悶と恐怖と不快とが體中に漲り渡つて今四肢慄かるゝばかりである。

「もう晩くなつたから歸るとせう……そして、

下へは未だ金が拂つてないのだから、この中でよろしいやうに。」調子は怪しく顫へてゐる。五圓紙幣を一枚取出したその手附もいとゞ周章てたやら。

「そんなに急かなくつても……今夜ア泊つて行つたつて好いでせう。」

「何一言も言つて置かなかつたんだし……家で何んとか思ふと、又出て來られないからね。——

「左樣かね。」と暫らく思案して「おやア無理には留めますまいねえ、一寸位お待ちなさるのは好いでせう、ね。」と云つて、ついと起つて、障子をトン〱と下りかける。

一人法師になると、庸之助は愈胸騒ぎがして、しきりに氣が焦いて、靜としてはゐられない。丁度下の、戸口を明けた音に、吃驚して、息を屏め今にも刑事が飛び込んで來るかと氣もそゞろ、やがてさる氣色もない、內から婆か誰か出て行つたものだと分つて、肚胸を撫でたものの、また探偵が何處か、この邊の隙間から覗うてゐるのではあるまいかと窓の障子の破れ目を一々氣にして、天井の節穴、これまでが人の眼に見える。

其處へお澤が又上つて來て、「少し、お待ちなすつて、ね。」

「もう歸るとせうよ、今の次第だからな。」

「少し、十分程、ね、好いでせう。」

「何か、用があるの。」と、桃尻になつて、障子の塵を片手で拂つてゐる。

「もう少し……」暫くと引留めてゐる中に又前の戸口が開く音。

やがて階子段の人氣色、庸之助は又胸をドキりとさせて、身中汗にしてゐると、「お待遠さま。」顏を出したのは老婆である。刺身の一皿と、剩錢を手にして下手に坐る。

「何うも御苦勞さま。」とお澤は手早く、幾何か握らせると、「何うしまして、その御心配にやア……」と辭退するを、強ひて納めさせた。老婆は餘多度叩頭をして、「誠に濟ませんのねえ……あの只今、直にお燗が出來ますよ。」と此處々々もので。

「酒を買つたの、……私ヤア少とも行けないんだよ。」と庸之助は當惑顏。

「エ、そんな事があるもんですか、いけませんよ、いけませんよ、そんな水臭い事を云つちやア……何うしたつて呑まなけりやア承知しませんよ、好いかね、呑まなけりやア歸しやアしませんよ、愛の玉締ですもの。」

「眞にねえ。」と婆は猶も追從口。

（三十五）

天に在す我等の父よ、冀はくば吾夫の胸に祕めたる祕密を吾が耳に細語き給へ、彼と我との心は同一つでありますれば、彼の心の苦み惱みは、我が心の苦み惱みであります。何卒我が熱き心を以つて、彼に同情を表しまして、彼の心の痛を醫す事を得まするやう、上より大能の御手を以つて、御冥助けあらん事をアーメン。とは、惠美耶が、頃日の朝夕の祈禱である。

惠美耶は自分の心の奥底から飽までも夫を信じ、夫を倚頼に思つて、如何なる辛い事、如何なる苦しい目をも堪へ忍んでゐるのである。父母の國を離れて何千里、知らぬ異鄕に、かよわい女の身の心細くない段ではない。人種も違ひ言葉も違ひ、風俗習慣が一つでない所爲からでもあらうが、自分の最愛い夫の父たり母たる人に、自分は何彼に就けて快く待遇して貰へないのが、一倍悲しさ、切なさ、心憂さの限りにも思はれる。それも一つは、自分の注意が至らぬからで、更々お怨み申す筋ではなけれど、その遣る瀨なき思ひに小い心が張裂るかとばかり悶ゆる時、唯、連れて行く場處は夫の其優しい胸——その胸に凭れかゝる刹那はもう今迄の苦痛は夢のやうに忘れて了ひ、唯何となく、

鷹に逐はれた雛鳥がその古巣に歸り、牧者に鞭打れた小羊が、母の乳房に縋り付くやうな心地の、云はん方なき慰藉と平和と、そして喜が溢るゝのである。

その逃れの場處、安息の幕屋と頼み切つてる夫の優しい、温な胸が、今日この頃は何となう冷たく、鉛でも包んでるやうに重くるしさうなのが、自分の、愛に燃ゆる指頭に觸れては、直ぐとそれがこの心に感じられるではないか、秘密を打明けて妻にその苦痛の半ばを分ち給へと搔口說いても、秘密は無いと打消して了はれる、強ひて根問をして怒られて、僞と自分でも氣が附くと、俄かに竦として體が慄へるやうで、その秘密といふのが外ならぬ、自分の身の上に關係つてゐるやうに思はれる。自分が夫の父たり母たる人の御氣に入らないから、それで自分を離緣するやうに迫られてゐるのではなからうか、それで夫が、打明かし惜いのかも知れぬ、左樣……それに違ひなからうと、思つて見ると、不斷心怯えて何んだか斷ら奈落の底へでも突き落されるやう、悲しさは早、胸に込み上げて來る。

併しそれならば左樣と、寧そ包まず打明けて下さつても好ささうなものといふやうな氣も起る。左樣思ふと、一條の希望の光は胸の奥底に輝きそめて何となう心強くも覺える。それよ、あの人のお心で自分を愛してゐて下さるその愛情にさへ變りがなくば何もそれ程の事、包隱しなさるにも及ぶまいもの、日本ばかりに日が照るではなし、二人一緒に行きさへすれば、世界至る處エデンの園、神の惠はいと廣きに、さりとは狹い御了見よ。懷胎にまでなつてゐるものを、あまり御遠慮がちな其お心が却つて怨めしうさへも思はれる。それに此方の氣は少ともお察し下さらないで、昨夜は又何うしたといふのであらう、沈默つて何處かへお出て了ひ、一時過までも待たせた上に、何だか酒の香をさせて御歸なさつたんだもの、何うした譯か聽からとしても、胸に詰つて口も利けず、こんな情けない事は生れてから始めてであつた。

左樣思へば又、この頃は教會の方も折々怠り勝になさるゝのが氣に懸つてならぬ。腦の病と披露してはあるものゝ、信者の方が折節何の彼のと、蔭口も利かるゝやう、眞に何うしたら好いのであらう。妻の身の上も少しは御察し下さつても好ささうなもの、自分はあの人の半身たる價打がないのであらうか。それとも……若しや、人種が違ふと云ふので忌氣がさしたのではあるまいか。否……否……あの人に限つて左樣いふ事はない。自分の夫はそんな輕薄な心は持たない、肉體の、その眞の外皮の彩飾が異つてゐるばつかりで、靈は皆神樣の手から同樣に授つたもの、靈と靈と相結び合ふ愛情の緒に、何んの變り、何んの隔があらう。これは自分の僻だと、痛く身を悔んでも見る。

時計が丁度十時を打つた。足音がしたので、ふと眼を上げると、夫が今起床つたと見えて、寢室から出て自己が部屋へ入つて行く後姿が見えた。惠美耶は、臺所の椅子に倚掛つて、茫然、刺しかけの襁褓の布切を手にしてゐたのであるが、始めて心附いたやうに、それを其まゝ椅子の上に抛け出して、周章しく水口から下り立つた、片手には手桶を提げて。

（三十六）

安樂椅子へぐたりと頽るゝやうに身を凭せかけてなす事もなく茫然と、片手を額に當てゝ庸之助は唯何となう壓し附けらるゝやうな胸の苦しさを紛らす由もなく、耳邊では蜂の巢の破れたやうな唸り聲が聞える思ひ。我と我身を搔き挘り度く、殆々前後の分別も失せて了つて、中仕切の玻璃戸を開けるのに氣が附かない。閉ち切つた時の響で漸く頭を擡げた。

「あの水、取つてありますよ……そして、この手紙、郵便函の中にありましたの。」云つて惠美耶は一封の書狀を差出した、淋しさうに片ゑくぼで笑んでゐる。

「何處からか知ら……」呟やくやうに云つて、取上げて見ると、嚴めしく親展としてある。差出人は植木監督、庸之助は不思議顏色を變へた。

「監督さんからでありますね。」と、惠美耶はそのまゝ其處に佇んでゐる。

「ウム……何うしたのかな。」少し眉根に皺を寄せて封を切る。庸之助は今起床上つたばかりなので未だ顏を洗はないのである。例時はその次に、祈禱をして、聖書を讀んで、然る後に、信書を開く人が、今朝丈は異例であるから、惠美耶は不思議さうに、夫の顏を見守つてゐる。

「彼方へ行つてるが好い、手紙を讀むのだから……」と、叱言のやうに云つて、一寸顋をしやくられ、惠美耶は始めて氣が附いて、顏を眞紅にして、

「御免下さい。」と處女のやうに含恥んだ調子、心殘りの體で、帷幕を引いて、その影に消えた。

目送して、庸之助は今更氣の毒な思もした。信書の祕密――夫婦間でもそれを堅く保ち合ふのは西洋の風である。自分が惠美耶に注意を與へたのは素より咎まるべき筋ではないが、併し、此方の都合の好い時にばかり、西洋流を採用してその他はすべてが日本風で、妻たる彼に不少ぬ苦痛と恥辱とを忍ばせてゐるではないか。勝氣の女なら疾に女權を振廻して、離婚の請求をするでもあらう、又請求せられても仕方はないのだ。それに彼の女は心から優しく、只管我を倚賴に思つて、滿身の愛を獻げてゐるではないか。思へば自分は、その愛を受けるには足らない身だ。彼の天使の如き女に夫として侍かるゝには餘り罪惡の多い體である。面と向いては彼の神々しう光るやうな白い額が、何だか自分の罪を照らす鏡のやうに思はれて、恐ろしくて堪らない。まして植木監督からの手紙、その中には如何なる文字があるか、自分の祕密が早くも洩れ聞えて、それを詰責の書面ではなからうかと、脛に疵もつ身の薄氣味惡く、先づ胸がときめくので、妻に退去を命じたやうな、淺果敢な、裏恥かしい次第だもの。

打顫ふ手先で少しづつ、片端からそれを擴げて讀んで行くと、始めは先づ尋常の挨拶、それから、中岡蘇平が牧師を廢めて、俗界へ墮落した事を憤慨するといふよりは寧ろ憐れんだ文句、次には、自分を甚く信任の言葉で、將來の宗教界の雲の柱、火の柱となり、主の爲め、道の爲めに、善き信仰の戰を戰ふやう囑望に堪へないとの事、惠美耶夫人の上をも非常に賞贊して、この夫にしてこの妻あり、神の攝理は實に幽妙測るべからざるものであるとしてある。讀み了つた時にホッと一息安堵の吐息を吐いたが、直と後から良心の呵責が鞭打つやうに起つて來て、罪の子よ、惡魔の子よ、サタンよ、僞善者よ、蝮蛇よ、蝎蠍よ、とありとあらゆる叱咤嘲罵の聲は、今あり〳〵と耳の底に鳴り響くのである。

ア、植木監督が斯くまで自分を信任してゐるのであるか、中岡を失うて、新に君を得たのは、小狐を逸して若き獅子を味方に附けたのよりも、猶優つてゐるとの一句、あの嚴格な、謹直な、他人に對して言葉もあまり交へぬ人が、斯程までに自分を、と思ふと、自分はもう直に、彼の人の足下に平伏して罪を悔いて了ひたいが、その時彼の人は果して何んなに驚くであらうか、何んなに失望するであらうかと、更にその段に思ひ至ると、愈々濟まぬやうな氣がして、今日當折角の信任を水泡に歸せしむるのは實に忍びないやうでもある。これは僞善であらう

か、僞善であると叫ぶ聲もする。併し折角の信任、それを直に無にしなくてもと人情の叫ぶ聲、それにはつい、耳が傾き易い。

　再び玻璃戸が明いた、帷幕を捲し上げて顏を差出したのは、お卷。

「あのー、二階から御用がありますつて。」

　その聲、慥かにお澤のそれに似通うてゐる。そしてその眼元も、口元も。

（三十七）

「牢破りがあつたんだねえ、牢破りが……」

母のお節は、庸之助の顏を見るといゝきなり斯う云ふのである。

「エ……左樣ですか。」驚いたやうな顏色の、そして極沈鬱な調子である。

　修造は眼鏡を懸けて、赤新聞の三面を默讀してゐたが、一寸此方へ向いて、

「汝、あの岸野澤つて……岸野のお孃さんなんだらう、あの人が監獄を破つて逃出したつて云ふんだよ。一昨日の暴風雨の晩……大膽な女になつたもんだ。」

「汝が常時說教に行く監獄なんだが、汝は一寸も逢はなかつたんだね……」と、いゝ、ちらと顏色を窺うて、早口に言葉を繼ぎ、「そんな女なんかが、善く牢破をやつたもんだなう。」

「左樣ですね……その……何うしたんですか。」

　庸之助は自分でも何を云つてるのか分らない。血色は全く青醒めて了つて、唇が微かに慄へてゐる。

「あの、お卷の阿母さんは、お澤つて云やアしないの。そして汝の產れた處は、市ケ谷監獄ぢやアなかつたかい、思ひ出せないの。」とお節は今一途にお卷の顏を覗き込んでゐた。

「私知らないわ……覺えてゐないんだもの。」と鼻白んで云ふ。

「何うも、私やア、左樣思ふよ、何處か庸之助に似てるんだもの、ねえお父さん。」

「ウム似てると云やア似てるやうだ。」

　此時庸之助は俯向いて、父が疊の上に抛げ遣つた新聞の三面を見るともなしに見詰めてゐる。

「一人斬られちやつて、二人は捕つたといふんだなう。」と修造は眼鏡越にじろ〳〵庸之助の横顏を見てゐる。

「成程……左樣ですね。」

「何うも大膽な女だ。」

「母親は、まア何んでも好いわね、この娘は私の孫ですから……ハヽヽ、何うも實の孫のやうな氣がしてならん、なう、お卷、汝は孫になつてくれるかい。」と頭を撫でる。

「私、知らないわ。」

「知らないなんて、そんな事を云ふもんぢやアないよ。」猶しきりに愛してゐる。

「あの、階下のも懷姙なんだもの、今に可愛い孫が產れるんだから、お卷が孫になつてくれないと云やア、その方許り可愛がる事に極めようぢやアないか。」と修造は戲弄半分。

「まア忌な、串談にもそんな事を……毛色の赤い、眼ン玉の青い、そんなものは孫ぢやアありません、そんなものを孫にやア持ちませんよ。」

「だつて、孫は孫さ、アハヽヽ。」と苦笑。

「そんな事を串談にも……ア、又、階下で歌なんか大聲で唄つてるよ。眞に始末に了へない奴だよ。」お節は顏を蹙めて、つと起上つた、庸之助は唯木偶のやうに新聞の一處許り見詰めて、身動もしない。

　階段とん〳〵と踏み鳴して、お節が降り立つて見ると、惠美耶は今階下で約翰、馬太の二少年に椅子を與へて、讃美歌を敎へてゐた。

「又そんな氣樂な事を……」と睨まれて、惠美耶は如何にも辛さうに、もじ〳〵椅子から起たり居たりしてゐる。

「もう〳〵そんな事は……喧しうて仕方がな

い。」

「ハイ……」

「ハイぢやアありませんよ、こんな穀潰し共を集めて善らもまア……」

二少年は怨めしさうな眼色でじろ〳〵お節の顔を見てゐる。

「人を睨むんだな。小癪な、人を睨むんだな。惠美耶さん、こんな失禮な奴はもう〳〵一刻も家に置く事は相成りません、只今追出して貰ひませう、追出して……追出すのが忌なら自分で連れて、疾々と出て行つて了ふが好い。」突慳貪に極めつけて尋常ならぬ權幕である。

「ハイ……」とばかり、首を垂れて思屈した體。

「出るよ、出るよ、鬼婆アめツ。」と忽ち元のチビ六に立返つて、小い頤をしやくる。

お節は赫と焦き上げて、「汝ッ。」と云ひさま、傍の、棕櫚箒を逆に取つた。二少年は廿日鼠の如く、室の隅の方へ走つて行く。

「まア、一寸……」と支ふる惠美耶はしたゝか肩頭を打たれてよろ〳〵と後の椅子へよろけかかる。

（三十八）

會堂の前面の、白く塗つた壁に木炭の切片で惡戲書がしてあつた、一方のは、へのへのもへいで、口の處へ鬼牙を附けて、頭の髮を、蟹の足の行列のやうに描いて、頸は縦に二本棒を引き、鬼婆ア奴と、覺束ない片假名がその傍に書添へてある。今一つは、それに竝べて、不手際ながら、極念入に、女の顔らしいものを畫いて、横手に、神さま、マリヤさま、エミヤさま、アーメンと釘の折のやうな平假名が記してある。手の屆き工合から見ると、無論眞の、子供の惡戯である。

庸之助は物を案じながら、何氣なく此所まで廻つて來て、今それを見附けたのである、誰の所爲であらう、二人の少年が昨夜から姿を見せないのに思ひ合すと——左様だ、全く彼等の所爲である。鬼婆とは勿體ないが、母上の事であらう、母上は決して左様、鬼と怨まるゝやうなお人ではない、自分へ對しては極めて優しく、極めて愛情の濃かな慈母である。その慈母を彼等無心な、そのまゝ天國に入るべき小兒の心に、鬼などと、怨ませるやうな事に立至つたのも、畢竟自分の不孝から起つた事、外國の婦人を妻に持つて、牧師なんかの職に居るのが、御氣に入らぬから出た八つ當りが原因なのである。濟まぬ、濟まぬ、如何にも濟まぬ、又一方の畫は、惠美耶の肖像といふ積であらう、成程、彼は心も清い、姿も清い、彼等無心の小兒でさへ、マリヤとも思ひ、神さまとも考へるのであらう。アヽ、自分はその人を妻にしてゐるのだ。その神さま、そのマリヤを妻としてゐるのだ。この汚れた、罪の塊なる自分は、果してそれを恥かしうは思はないのか。惠美耶へ對して氣の毒だとは感じないのか。否思つてゐる、感じてゐる。さればこそ、自分は彼を遠ざからうとしてゐるのだ。彼の神聖な身體へ、この汚れた者が近づくのさへ罪惡だと思ふのだ。自分はこのまゝ惡魔の子となつて滅びても好い、彼をして飽くまで天使たるの姿を保たせたいのだ。これがせめて、謝罪の意を表する所以の道ではあるまいか。

「良君、此所に……これ見なさつたのでありますか。」

突如に聲を懸けられて庸之助は吃驚した。見れば惠美耶が雑巾を持つて、水滿々と盛つたバケツを手にして傍に佇んでゐたので。

「ヤ……何ふしたの、吃驚した。」

「誰の惡戯ありますか……私、最前掃除する時見附けまして……」

云ひ〳〵耳の根まで眞赤にして、雑巾を絞つて、先づ鬼婆の字から拭取つて行くのである。

その横顏の底白きが、紅に燃ゆるやうに輝いてる美くしさ。庸之助はそれを見てゐるのも恥かしいやうで直と横手へ曲つて、家の方へ歸つて行くと、お卷が丁度我を迎へるやうに、會堂の裏庭の、夾竹桃の葉蔭に立つて居た。

彼も罪の子だ、惡魔の子だ、否この自分の罪の記念だと思ふと、何だか堪へ切れぬやうに懷かしうなつて、小足早につと走り寄つて、その小い、白い頸筋へ急遽に兩手を絡んだ。

「アラ……」眼をパチと瞬つて、驚いたやうな顏色。

「阿母さんの處へ連れて行からか。」と耳へ口を寄せて低聲で云つて、周章てたやうに振向くと、惠美耶の姿は未だ見えなかつた、斜めに、空を仰けば會堂の屋の棟の十字架、それが夕陽を浴びて、赫奕と金色に輝いてゐた。

(三十九)

「この子が……まア、こんなに大きく……阿母さんだよ、阿母さんだよ、私や汝の阿母さんだよ。」お澤はいきなり飛び附くやうに搔抱いて、靠々と胸元で締め附けながら、頰摺して、早ポロポロ涙を流してゐるので。

「アラ……何うしたの。」とお卷は驚き呆れたやうに、兩手を突つて身を反らした。

「お卷、これが汝の阿母さんだよ。」庸之助も嬉しさに笑んでゐる。

「阿母さんだつて。」

「お卷、汝は知るまいけども、私が汝の、生の阿母さんなんだよ。そしてこの人が、汝の眞のお父さん……」眼を拭きながら、片手は鑓と其小さい背に絡んで、永久も離し難なき風情。

「だつて、こりやア先生だもの……家の先生だもの……」

「お卷、今までは打明けて云ふ事が出來なかつたんだがね、私が汝のお父さんだよ。」と顫へ聲で云つて庸之助も懷かしさうに膝行り寄り、愛に燃ゆる溫かい手で、後から確と母に抱かれてゐるお卷の小い手頸を握緊めた。

「左樣なんだよ、お卷、これが汝のお父さん、私が汝の阿母さん、嬉しいだらう、ね、嬉しいだらう。」

「眞實に……」振り仰いでキヨト／＼二人の顏を見競べてゐる。

「汝、嬉しいだらう、阿母さんは嬉しくて仕樣がないのよ。七年……八年ぶりだもの、汝の顏を見るのは、八年ぶりだもの。」

啜りにハラ／＼と涙をこぼし袖口を濕らせてゐる。

「眞實に……先生が私のお父さんなの、貴方が阿母さん……」猶も半信半疑の面地で、例の狐疑深い眼が輝いてゐる。

「今まで云はなかつたもんだから、疑るのも無理はないけども、私等が汝の親なんだよ。」

「眞實だよ、……可哀さうにねえ、親は有りながら今まで親の顏も見知らないで育つて來たんだもの……眞に私等が惡かつたよ、何卒堪忍おし……」

二人とも漸く手を放して其處へ坐らせた。

「汝にやア……お前にや何の罪もないんだ。これまで實に辛い目を見せて濟まなかつた。」庸之助は暗涙を浮べてゐる。お澤は唯俯向いて瞼をしきりと手甲で拭うてゐる。

「眞實に、あの－、私のお父さんや、阿母さんかね。」

「眞實だとも、眞實だとも。」父は今、再び最愛子の兩手を確と握つてぢつとその、顏を見詰めた。滿身の血は愛の炎に沸立つのであらう、五體がぶる／＼慄へてゐる。

「眞實なの……眞實だと私嬉しいわねえ。」始めて莞爾した。その笑顏にはもう一點の邪氣もない、實に、世の常の少女子が頰にこぼす花の笑み、接吻したいやうな愛くるしさである。

「貴方、可愛いちやアありませんか。」と、お澤は眼を眞赤にして、膝行り寄り、庸之助の顔を見上げて又もお卷の小い肩頭へ手を遣つた。

「可愛くなくつて……」

「もう三人、このまゝで此處を動きたくないのねえ。」

「もう父さんも、阿母さんも、私を一人法師にしちやアいけないよね。父さん、ね母さん、私を一人法師にしちやア忌だよ。」しく／＼鼻汁を啜り上げて交る／＼二人の顔を見競べてゐる。

「一人法師にしやアしないよ。」と、お澤はひしと肩頭を摑んで、背後から自分の體をその上に押蔽せるやうにする。

庸之助は默つて、片手で眼を拭いた。今といふ今、苦痛も心配も忘れて了つて、唯子の愛、それに加へて夫婦の情愛が、胸一ぱい、油のやうに湛へ切つてゐるのである。

（四十）

「まア、一つお祝にね……斯う親子三人が一緒になるなんて、お目出度い事ぢやアないかね。」とお澤は今、階下から老婆が持運んだ杯盞を上り口から受取つて、其處へ置き列べたのである。

酒の香がぷんとすると、庸之助は又何だか惡魔が誘惑に來たやうな心地、少し眼を瞬らせた。

「貴方からお始めなさいな。」とお澤に杯を囑れて、進まぬながらも手に持つ事丈は持つた。

「お父さん、お酌。」と、お卷はちらと見上げていそ／＼嬉しさうに燗徳利を取上げる。

「私は禁酒なんだから。」と猶豫ふ。

「禁酒つて……先夜も召上つたんぢやアありませんか、……そんな禁酒はありますまいよホ、ホ、、、。」

「否、あれは何うも無理遣、口の中へ注ぎ込まれちやつたんだもの。」

「貴方、濡れぬ先こそでさアね、……酒でも飲まなけりやア眞面目でこんな世界に生きてゐられるもんですか、それに今夜は、親子三人邂逅ふつてなお目出度な晩なんですもの。」

「お父さん、注ぎますよ。」と、お卷は早、半分程注いで了つた。傾いた緣からぽら／＼と疊の上へこぼれた。

「コレ……」庸之助の手先はぶる／＼顫へて、瞳は異樣に光つた。

「折角、お卷が酌をしたんですもの……ね、貴方、娘が折角お酌をしてくれたんぢやアありませんかねえ。」

お卷は唯、父の顔を見て莞爾々々笑つてゐる。

「エ、もう斯うなつちやア……」舌打して、眼を瞑りさま、ぐつと一息に呑干した。苦かつたか、酸ばかつたか、甚く顔を蹙めたので、

「父さんあんな顔をしてホヽヽヽ。」と貝のやうな白い小い前齒を現はして笑ふ。

「お藥でも飲むやうにね、……酒は百藥の長つて、貴方、眞實に藥なんですよ。」

「藥だか毒だか知らないが、もう斯うなつちやアやぶれかぶれだハヽヽ。」と苦笑ひ。

「斯うなつちやアつて……濟まないのねえ。私がこんな事にしちやつたんだから……私が連累にしちやつたやうなもんだから……」お澤はさすが鬱ぐやうに、伏目になつて、呢と考へ込んでゐる。

「何にさ……汝が惡いんぢやアないよ、身から出た銹なんだから、天をも怨みず人をも咎めず唯謹んで神樣の罰を受けるより外にやア致方がないんだ……。オイ何を茫然してる、最前から囑してるんだよ。」

「オヤ、つい恍惚してゝね。」お澤が杯を受けると、お卷は酌をする。

「階下では何と思つてるのかい……何だか妙に

考へてやアしないの。」と、氣懸りなやうに、庸之助はさすが小聲で問うた。

「妙につて……階下の婆さんがですか、可笑いのですよ、私を妾か何かのやうに思つてるんですものホヽヽヽ。」

「妾つて…イヤ、何うも愈墮落だねハヽヽハ。」と頭を掻いて、又苦笑ひした。

「あの、惠美耶さんと云ふのが、御本妻といふもんですかねえ。」杯を喝して、何んだか忌味らしい口調。

「さア、何方が本妻だか、……薩張分らないよ。」

「薩張つて……、ねえ貴方、何方が御本妻でせうか、一つ伺ひたいのねえ。」

「左樣さ、……まア、こんなもののある方が本妻かも知れない。」云つて、お卷の柔らかな頬邊を指頭で一寸突く。

「アラ、あんな事を……」と子供心の唯嬉しさう。お澤も莞爾眼元で笑んで、

「ぢやア今夜ア本妻の處に泊つたつて好いでせう。」と、庸之助の顏を見入つた。

「泊れつて、左樣、現金に……まア、兎に角、そのお薬を、最少とやつ附けて、何も彼も忘れて了はにやアいけぬ。」

頽然と身を横へて眩枕、顏は赤うなつて、眼は血走つて、莞爾ともせず、お卷とお澤とを交る／＼見競べてゐる。

（四十一）

宿醉の、庸之助は頭が上らない。寢臺の上に空氣枕を當て、白い金巾を上蔽にした掛蒲團の中に半身を入れて、そして、惠美耶の方へは背を向けて横たはつてゐる。惠美耶は、椅子を寢臺の側へ引寄せてその上に跪き、氷を西洋手拭に包んで、夫の半面の、ピク／＼動く顳顬の邊から、額へかけてしきりと冷してやる。體温で氷が溶けて露が滴縞をなして流れかかるのを、手早く片手の手巾で拭取つて、何から何まで、注意至らぬ隈もなく必死と介抱の手を盡してゐる。憂を含んで少し青ざめた頬に、ほつれかゝる金髪を皓い前齒で噛み締めて、眸に霑味を持つて、夫の容體を打瞶つてゐるその顏の、美しいよりは寧ろ高尙いやうだ。枕元の一方の、椅子に倚り掛つて、心配さうに控へてゐるのは父の修造なので。

今朝庸之助が俥に搖られながら歸つて來たのは夜の全く明け放れる前一時間。東雲の雲が仄かに動き初めた頃であつた。お卷は連れて歸らない、何うした譯かと、先づ父母に不審打れたので、實は昨日、淺草見物に行つた途中、偶とあの子の親戚の者に出會せて、その家で自分も泊り、あの子は强て引留められて一兩日滯在の積、いづれその中、仔細は分るとばかり、寢臺の上へ打倒れて了つたのである。

惠美耶は今餘念もなくしきりと氷で冷してゐる。その冷い、絹のやうな手の指頭が、庸之助の額に觸れる度に、庸之助は何だか身節へ沁み入る思ひで、空恐ろしいやうな又勿體ないやうな感がする。宿醉も苦しくて堪らぬのではあるが心の痛の方が寧ろ嵩高で、それに氣を壓せられて起きも得上らないのである。

「何うだい……何うもよろしうないかい。」と修造は耳邊へ口を寄せる。

「ハイ……イヤ左程に。」と聞取れぬやうな低聲。

「愈、何んならお醫者を呼んだが好いぢやアないか、その方が早く快くなるからな。」

「否……醫者なんか……醫者なんか入りませぬ。」と少し周章てたやうな口調。牧師が、迫害の鞭撻、いゝろひの石塊でも打附られて、負傷したといふのなら主の榮の爲めに誇るべき事でもあらう、それとは全く雲泥の相違、しかも宿醉で、醫者を呼ぶなどと來ては早論にも掛らな

いのである、このざまで、宗教界の雲の柱、火の柱――さても自分は何んたる罪人であらう、惡魔であらう。宿酔は未だ言ふにも足らない、昨夜は實に、大罪惡を再びして、罪の上塗をやつたのではないか。思へばこのまゝ消え入りたいのだ、このまゝ死んで了ひたいのだ。死……併し、その死も自分を神の審判の大前に立せて、地獄の火に投げ入るゝべく命ずるのであるかと思へば、安息の場處どころではない。アゝ自分は死ぬる事も出來ないのか、身も世もあられぬとは此れ――何うしたら好いのか、何うしたら好いのか……。庸之助は愈々頭がわく／＼し出して、血管が今にも張り裂けるかとばかり、眼先は又も眩んで來る。

仕切の玻璃戸が開いて人の入り來る容子、やがて耳邊へ口を寄せて、

「庸や、夏蜜柑を買つて來たよ……何んな容體かい……」母の聲だとは分明つたが、返事は出來ない。

お節は夏蜜柑の皮を剝きかけて、爪先を黃にしながら累りと力んでゐるので。

「頭は大分冷たくなりましたのあります。」と惠美耶は低聲。

「庸や……少しは好いかい、さアお上りよ。」蜜柑の一袋を背から二つに裂いて逆に剝いて、脣へさし寄せてやる。

「難有う……」と、漸くぶつて、片手をさし出してその芳しい汁を啜つた。

「庸や、少しは好いのかい。」心配さうに顏を覗く。

「ハイ……少しは、……氣分はもう好いです。」

「酒なんか、汝飮まないのか、無理強ひなられたんだねえ……お爸の[illegible]つて、何うしたの、あの子の事も私やア心懸りでならないんだが……」

「ハイ……そりやア淺草の方なんで……一兩日中に歸つて來ますから……」舌重くるしげに云ふ。

「まア、今、問はないでも好い……一兩日中に萬事分明るといふんだから、問はないが好い。」と修造窘め顏。

「そりやアまア左樣ですけれど……オヤ、水が垂れて眼に入るよ。惠美耶さん、汝はマア何を茫然してるんだねえ。」と突慳貪な調子。

「ハイ……」素直に答へて、周章てゝ手拭で拭く。

「氣をお附よ、茫然してちやアいけないぢやアないか、何んの爲めの介抱だと思ふの……」

惠美耶は唯首を垂れてゐた。思へば福音を宣傳する手助にとこそ云つて、偕老の盟を交したのだ。宿酔の介抱にその手を藉らうとはさら／＼思ひもかけなかつた。又そんな事をさせてはならない筈だと、庸之助は愈々胸が苦しい。

（四十二）

父母が今、午餐にと起つた、その後で、庸之助は靜かに惠美耶の手を握つて、ぶる／＼指頭を慄はせながら、直とそれを押退けて寢臺の上に起直つた。瞼は、一ぱい、血汐を湛へたやうで、眼の周圍が腫れぼつたく、櫛の齒入れぬ散髮の、この頃、亂れに亂れて、顏色何となく沈み切つてゐる。

「何うなさつたのありますかね……、良君、御氣分よろしいありますかね。」と惠美耶は、愁はしげに顏を覗き込む。

「難有う……何うも誠に濟まなかつた。」

「私、心配したのあります、寢臺の上へ御倒れなさつたのありますからね。」

「イヤ誠に……何うも濟まなかつた、つい昨夜はその……親族の家へ行つて、泊り込んで了つてね……。」

「左樣ありましたかね……私、三時まで寢ませ

んのありましたよ。」
「三時まで……何うも濟まなかつた。」と不思眼を瞬つて、直と下を向いて、如何にも氣の毒さうに頭へ片手を遣つてゐる、暫は、二人ともむつつり。
「あの……良君……」と、惠美耶はやがて夫の方をちらと見遣つて、後は何だか云出し憎さうに、脣を顫はせてゐる。
「何ですか……」と云つたものの、庸之助は今更胸の悸くを覺えて、早、心臓の鼓動は高まつた。
「あの、良君、……他人が强て勸めたのありますかね……あの、お酒、强て勸めたのありますかね。」美しい眼は今閃くがやう、呢と、夫の顏を見入つた。
「ア、……何うも實に……衆が寄つて聚つて私の口へ注ぎ込むのです。」さすが慄へた調子。心臆せたやうに、愈俯向き込んで、顏は得上げない。
「いけませんのねえ、そんな事をする人……いけませんのねえ。」
「實に面目ない……私も左樣云ふ譯で無理遣强ひられて、前後も知らないやうに醉つて了つてね……實に……何うも……。」

「あの……良君、何卒私に、祕密打明けて下さいね。」と、惠美耶は俄かに言葉を改めて、眼の中に一ぱい、涙を漲らせた。
「エッ……とばかり、庸之助は一寸惠美耶を見遣つて、直と又頭を俯垂れて了ふ。
「良君、私に打明けて云つて下さい……私お父さんや、お母さんの御氣に入らぬありませう。私、それ知つて居りますけども、良君は私愛してゐて下さると思ふのありますが、良君、私に祕密隱して、云うて下さらないから、私心配で心配で……」右手の手巾を、氷を入れた銅盥の上で絞つて、それをひたと自分の眼に押當てた。
庸之助は深く、頤を衣服の襟に埋めて考へ込んでゐたが、やがて苦しさうにホッと太息を洩らして、
「何……そんなに……そんなに心配しなくても好い、祕密と云つて……別に……その經濟上の……金が足りないぐらゐな事なんで……」
「あのお金足りないので……それで御心配なさるのありますかね。」と惠美耶は上眼遣の稍安堵したやうな、又、腑に落ちぬやうな面地。
「米屋、薪屋その他の支拂が附かないやうに思ふので……それ等も心配で。」と言葉は濁る。

「そんな事なら早く云うて下さるよろしいもの……」と少しは愚痴も出たが、直と又、氣の毒さうに俯目になつて、「私、父の處へ云つて遣りました孤兒院の方の金、未だ來ませんので……私、惡いのあります、小兒養うて、金は出さないで、私、惡いのあります。」悄然として暫く考へ込んでゐたが、
「あの、私の衣服、裝飾、賣拂うて下さりませんかね、私もう必用ありませんから……。」云つて、瞳に冴々しい光を浮べて、庸之助の顏を見上げた。
「そ……そんな事が……」と周章てたやう。
「否、私、衣服裝飾必用ありません、良君に御心配かけて、私、そんな物持つに及びません。」云つて起上つて、其處の西洋戸棚の觀音開の戸を左右に開いた。紫や、緋や、葡萄鼠や、金茶織や、いろんな上衣、袴が花紅葉めづらかな色を競べて掛けられてある。
「そ……そんな事を……」と、庸之助は甚く悔めるやうな眼色で、脣を顫はせてゐる。

（四十三）

二階では親子四人、額を鳩めての談合である。
「ね、庸や、姉さんもア、してわざ〳〵來てく

れて勸めてるのだし、私等も、借錢取に度々遣つて來られて、大きな聲を出されると、二階で聞いてゝも冷々するだらうぢやアないかね、まア、あの女が、洋服なんか賣つて、少許金の都合が附いたもんだから此度丈けは何うか斯うか治まつたやうなものゝ男が餘り働が無さ過ぎるやうに思ふね。元來働きが無いのなら、それでまア諦めも附からうけどもさ、左樣ぢやアない、お金を取らうと思やア、何時だつて百圓位の月給にやア有附れるといふ人なんだもの、正宗を菜切庖丁に使つてるやうなもんぢやアないかね。」と、お節は齒痒さうに一膝膝行り出る。

「女房のお蔭で……あんな異人なんかのお蔭で遣繰を附けるなんて、庸さん、あんまり意氣地がないやうだよ。」と、お柳も焦つたさう。据洋燈の火影でその姿が前の腰障子に映る、肩先が何んとなう萎げてゐるやう。

「異人のお蔭つて……左樣ぢやアないさ、お蔭つてえ程の事ぢやアない。元來あの毛唐人が、お節介な、乞食なんか拾ひ上げて來こ、高價い米の飯で飼立てゝるんだもの、一つは夫等からも、家の活計向が遣り切れなくなつたのだよ、お蔭でこんな貧乏する位なもんさ。五十圓や六十圓の金を都合したからつて、なか／＼償が附く處ぢやアないのよ。」

「庸、何分これぢやア遣り切れないから、銀行の方へ行つちやア何うだ。」と修造は沈着いて云ふ。

「左樣です……併し何うも……」と庸之助は何方と云つて好いか、何うすれば善いか、當惑が額に讀まるゝのである。

「姉さんも始終、この家の事許氣にしてるんだもの、汝濟まないぢやアないかね。」と母は濕やかな調子。

「この頃は、妾が來て泊り込むのですし、それにもう何や彼や私の居るのがお氣に召さないと見えましてね、隨分當り散らされるのですよ。私やア默つてぢつと辛抱してるんですけれど……親の家が確乎して厄介になられるやうなら、寧そ飛出して來ようかと思ふ事が度々あるんですよ。」と、お柳は詰らなささうに身の上を訴へて、黑の紋付の羽織着の下から、水淺黃縮緬の襦袢の袖口をそと引出して眸を拭うた、頰が少し殺けて來て、色艶が好くないやうだ。

「そんな事を……そんな事を云つちやア困る、隨分辛い事は辛いだらうけども……」

「この子がこれぢやア、姉の肩身が狭いんですもの、それ等の事から馬鹿にせられて辛い目にも逢ふんです、姉も實に可哀さうで……」お節はさすが女氣の、早徐々涙含んで來る。

「私も實際……實際、この儘ぢやア立行かないですから、何うか最少し、收入の附くやうにと、考へてはゐるんですが……」と庸之助は一寸頭を掻く。

「それぢやア、銀行へ來る事にしたが好いぢやアないか、あの、中岡さんて云ふ方など、此頃は立派な身裝をなさつて、體裁が好くないからとか云つて、金時計なんか買つてさ、馬車の古手を探がすなんて豪い勢なんだもの。」とお柳は淋しさうな笑顏を見せる。

「中岡さんて……ウム、あの人がそんなに……」

「まア、そんな贅澤は兎に角、このまゝぢやア親子が渴命に及ぶばかりだからな。」と父は眉を顰めてゐる。

「ね、庸さん、早くしないと折角の好い口が又飛んで了ふ事になるからね、それが私、心配でならないんだもの。」

「眞に、庸、もう大概にして心を決めたら何うだね、お父さんや私等にも少は樂な目を見せておくれ、汝、それが孝行と云ふもんぢやアないか。」

「ハイ……」と猶躊躇して、額に愁の皺を寄せ

てゐる。
「異人の方を、直に何うせいと云ふんぢやアないよ、兎に角、銀行へ出勤る事にすりやア好いんだからね。」と姉は弟の腹を讀んだつもり。
「その方は……左様云ふ譯でもないんですが……」
「兎に角、私に任せちやア何うだね。」とお柳は呪と見る。
「任す事におし、姉さんに任す事に……ね、それが好い、それが好い。」
庸之助は默込んで腕叉をする、折ふし車輪の音が聞えて、それが門前でハタと止まつたやうだ。

（四十四）

惠美耶は何となう二階の談合が心懸りで、この身の運命に係つてるやうな氣がしてならず、獨、つく然と、洋燈の火影を見詰めながら椅子に凭れかゝつて、小い胸を抱いてゐる。夫には未だ自分の赤心が通じないのであらうか、祕密といふのも、唯一家の活計向の都合が好くないから、その心配の仕過しより外にはないと聽いてさへ、今まであまり隔てられてゐたやうで寧そ怨めしく、衣裳、飾具一三昧賣り拂つて、その方の償ひはして貰うたのに何うしたものか、それから後は愈鬱ぎ込まれるやうで、眼を見合せても直とそれを翦らせて了つて、談話を仕掛けてもあまり口數を利かれない、自分を愛するお心が無くなつたのであらうか、あれ程親切に、この身を勞つてくれ、慰めてくれ、そして熱き接吻を交してくれたその人の唇は、何時の間にか冷い氷と閉ぢ切つて、自分と相擁して白と紅との薔薇の花を嗅ぎ合ひながら、樂しい嬉しい戀の語を囁き交した新婚の夜の、その終生忘れ難なき記憶は最早、夫の胸の底からは消え失せたのか、左ほどまでにこの身は、夫に捧ぐる愛が足りないのか、情が薄いのか、又信仰が弱いのであらうか。
併し、これも自分の思ひ違であらう、自分が疑深いのであらう、我夫はそんな輕薄なお人ではない、如何程、自分が不足ものだからと云つて、假初めにも神の子たる人間を玩弄物にして、厭氣が來たから突放さうといふやうな、不義不正な事をする男ではない、恐らく家族の間の不調和が基で、それであのやうな陰氣臭い、鬱ぎ勝のお人になられたのでもあらう――左様、若左様とすれば、自分は實に氣の毒千萬で、何と云つて謝して好いやら分らない。溫い心で自分を愛してゐるあの人は、又溫い心で親を愛し姉を愛するであらう。その、自分を愛する心と、親兄弟を愛する心とが胸の中で相鬪うてゐて、それがために、苦しい切ない思に惱んで居らるるのか。左様……若し果して左様であるならば、自分は何としたら好いか、自分はこの家を出て行かねばなるまいか。あの人と分れねばなるまいか、否……否……神の合せ給ひたる夫婦の中を、人の意志で自由に離す事は出來ないので、又あの人と分れて了ふ程なら寧そ死んだ方が増な位。それに自分は早、尋常ならぬ體だもの、何うしてそんな事が出來るものぞ。
惠美耶が思ひ屈して、ホッと肩から出るやうな吐息をして、その細い優しい、手を片頰へ押當てた時に、丁度門前に、件の車の音が止まつたのであつた。
氣が附いて、洋燈を手にして、小足早に駈け出て見ると、玄關先にお巻が立つてゐた。
「オヤ……まア……」
「阿母さんを連れて來ましたの。」
「何うしたのでありますつて。」と怪訝顏、その中に薄闇い門口の方から人氣色がするので、見れば一人の女、瀧縞の絲織の袷に、黑繻子の帶の古手と見えて、耳の少し摩り切れたのを締め、髪は櫛巻、つと立寄つて、洋燈の火を正面に浴

びた所爲か、顏が凄い程青白い。眼は冴えて凜として、手頸に白木綿の繃帶をしてゐる。

「あの、庸さんはお在なさるんですか……お澤が來ましたつて、左樣云つて下さい。」と蓮葉な調子。

「何方樣からでありますの。」

「唯左樣云つて下さりやア分明りますのですよ。」と嘲むやうな眼色である。

「私が左樣云つて來るわ、もう眞實の阿母さんが來たんだから、毛唐人なんか追ひ出すんだよ。」と、お卷は、小まじやくれた口を利いて、いゝいゝつと奧の方へ入つて行く。

「何うしたのでありますかね。」と、その後影を見送つて、惠美耶は、向解せない樣子、當惑さうに躊躇うてゐる。

折ふし、二階の段階子を下りる音。

「お父さん。」と、下から、お卷が氣負うた聲。

（四十五）

お澤を己が居室へと誘ひ入れて、庸之助はいたく心安からぬ面地の、宛ら藍のやうに眞青になつて、亢まれる胸の動悸の人の耳にも聽えるかとばかり、腰はなか／＼椅子に落附く段ではない。

「何う……何うしたんだ。」と調子もいとゞしく顫へてゐる。

「何うしたんだつてもう……何處かへ一緒に逃げて下さいな。」これも心周章だしげである。

「何う……何うしたんだ……何うしたんだい。」

「もう暴露れちやつたの……今朝から迂散臭い男があの路次を迂路々々してたんだがね、お午過ぎに、あの婆さんの處へ紙屑買に來た奴が矢張それなんでせう、もう直とズキが廻るんでさアね。」

「エッ……それは何うも……」總身一時にぶるぶるッと戰慄いて、危く、椅子と共に反樣に倒れんとし、僅かに踏み留まつた。

「もう斯うなつちやア、所詮駄目ですから、お家の方へあの子の事も好く頼んで置かうと思つてね。」とさすがに悄氣て云ふ。

「實に……何うも……」今更途方に暮れて、唯呆れ惑ふばかり。

「貴方は一緒に……もう網は張つてゐませうけども、一緒に逃げて下さいな、實がありやア……」

「逃げるたつて……もう駄目だつて云ふぢやアないか。」

「それがね、二人一緒なら捕まつたつて私やアもう何にも殘惜しくはないんだからね、貴方がそれ程まで……實があるんだと思やアもう捕まつたつても好いんだからね、逃げられる丈け一緒に逃げて下さいな。」眼を星のやうに光らして、そして、何だかそは／＼、後を見たり、横を振返つたりする。

「逃げるつて……何うも……」

「貴方にそんなに、私の事なんか思つちやアゐないんですかね……私を弄み物にしたんですかね。」と怨むが如く、眦をキリヽと釣つた。

「決して、左樣いふ譯ぢやア……」

折ふし、仕切の玻璃戸が開いた。

二人は驚いて振返る途端、お卷が先に立つてどや／＼と、母、父、お柳は丸髷の中を銀釵の脚で搔きながら入つて來る、後から悚々と惠美耶も從うた。

「これが孫だつてねえ、眞實の孫だつてねえ。」と、お節は左も愛らしさに得堪へぬもののやうにしきりとお卷の頭を撫でながら、顏の相好を頽してゐる。

「何うも、誠に不思議だなア、庸、早く左樣云つて聽すれば好い事に……」と、父も愚癡を溢しながら莞爾々々もの、お柳も尾に附いて、

「眞に、不思議な事ですねえ、この娘から皆聽きましたが、何うも不思議ですわねえ。」

「あの……お初にお目に蒐ります。」と、お澤はさすが恥らふやうに、一同へ挨拶する。

「あの……貴方がお孃さんで……岸野のお孃さんで……」と云つて、會釋しながらお節はしげしげと見詰めた、眼元は稍霑んで來る。

「何うも飛んだ事で……」とばかり父は胸が塞がつたやう。

「庸之助が事で何うもいろ〳〵……私は姉でございます。」と云ふ聲も濕つてゐる。

「オヤ左樣でございますか、……何分、この娘の事をよろしうお願ひ申します。」

「孫ですもの……聽かない中から何うもそんな氣がしましてねえ。」と、お節は鼻聲。

庸之助は唯俯向いて、息を屛めてゐる。

と見ると、惠美耶が悄然と後に立つてゐるので、お節は振返つて嘲み顏。

「ア、これは私等の孫だよ、此所のが庸之助の本妻だからね、汝左樣思つてお居……もう、もうお卷を叱り付けたりなんかする事は出來ないんだよ、好いかい。」

惠美耶はパチと眼を瞬いて、そして今怨を含んだ睫の、睨むが如く庸之助の方を見遣つた。不思白貌は颯と血走つて、宛ら燃ゆるがやう。い齒を嚙み締めた、途端足元が蹌踉とよろめいて頰邊には一滴、血のやうに温かいのが。

突如、玄關口に、どや〳〵と靴音が亂れて、騷々しく駈け込む人氣色。

「御用ッ……」の聲耳を劈いて、警察の提灯が三つ四つ、ガチャン〳〵と激い響がして、碎けた玻璃戶は早、蹴倒された。

(四十六)

秘密……夫の秘密そのものを、始めて悟り得た惠美耶の心は傷れたのである。未だ嘗て、嫉妬といふものを知らなかつたその胸は、怪しく燃えて、張り裂けるかとばかり、愛のために濺いで未だ嘗て怨の一念に零さなかつた、淚、それが今、拂へども〳〵、しとゞ瞼を曇らせて來る。父も母も自分には卒れなくて、事の仔細を話してはくれないまでも、あの女を本妻だと云ひ、お卷を實の孫といふからは、昔の情婦と未だ緣は斷れてゐなかつたのである。よくも人を欺したもんだ、よくも處女を弄んだもんだ。否、神樣の前で嚴かな式まで擧げて、立派に結婚をして置きながら、斯樣な事があらうとは、あまりと云へば大膽過ぎた、天父を輕んじ、聖靈を汚し、實に地獄の火に投げ入れらるゝにも當るほどの、大罪惡ではあるまいか。何の罪で拘引されたものか、その廉は自分には分らないけれども、あの女と一緒であつた處を見ると若しや姦通……そんな事ではなからうか。あの人が斯る惡魔であらうとは、知らなんだ、知らなんだ、夢更々知らなんだ、これまでその人の半身とも思ひ、身も靈も捧げて侍づいてゐたものを、欺すにも程のある、騙かすにも法のある。口惜しいッ……口惜しいッ……もう口惜しうて堪らない。

白い鵞ペンを執つて紫のインキの、この事一分始終を米國なる父へ報知の手紙、二三行横文字の、走り書にしたが、さて、口惜しさと悲しさと、切なさとが、胸一杯込み上げて來て、なか〳〵ペンは動かない。ぽたり淚が落ちたので、紫の文字が浮いて、汚點になつた。エッ……と切齒して、直と又べり〳〵それを嚙裂いて、いゝいゝ揉みくちやにして、物狂ほしく床の上へ投げ捨てゝ了ふ。

又一枚、紙を展べてさら〳〵と走り書、四五行進んでペンは又動かない。このやうな事報知せて遣つたら、父は何んなに驚ろくであらうか、日常病身の母が、何んなに胸を痛めるであらうか、最初、日本人との結婚は不贊成だと云張つて反對した、あの頑固な叔父さんが、又何んなに怒り立てゝ、兩親達を虐める事か、懷姙のやうなと云ふ報知を送つた時、喜んで、早く

赤兒の寫眞を一枚と、氣速に云つて寄越した末の妹が、又、裏の花園で自分と別れを惜んで泣いた、その時よりも、更に泣いて、泣いて泣きくづをれるであらう、思へばこんな報知をするのは、一家の平和を擾亂す魔の使を遣るのも同じ事、左なきだに、海山萬里を隔たりて、自分の身の上を氣遣うてゐる家族の者を、氣遣に死なしむるには當らぬ事、寧そ止めて置かうか、止めた方が好いかも知れない。

とはいへ、これが報知せてやらねばとて、そのまゝで濟む事ではない。自分獨で泣き死ぬよりは、親兄弟にも泣いて貰つて、その悲を分つのがせめてもの心遣り、報知せてやらう報知せてやらうと、又も二字三字と書いて行く。

寧そ、歸國つて了はうか……とも思つて、茫然考へても見たが、夫が拘引さるゝ時、如何にも悲しく、切なさうに、哀を求めるといふ眼光で自分を見て、「許してくれい、よろしく頼む。」と、低聲ながら三度許繰返した、その刹那、もう云ふに云はれぬ憐れさの情が、胸の底から湧き出でて怨みつらみも忘れて了つた事——その事を思ひ出して見ると、又實に、夫が可哀さうでならない。如何に其罪は憎むべしとはいへ、「許してくれい。」の一句には悔改めの心が充滿てゐるではあるまいか。「許してくれいよろしく頼む。」自分のやうな者を頼みに思うてゐる、その心の中を推測ると、又謂知らぬ涙も出る。

考へては書き、書きては考へ、やがて漸く五六葉書き了つたので、一應讀み返して見ると、冒頭から夫の罪惡を竝べ立てゝ舊情婦と、未だ内縁の切れなかつた事、しかもその仲間に子のある事、自分の欺された事、二人の拘引された事、一々書き附けて如何にも口惜しさ、怨めしさの文字づくめである。二度、三度、讀み返して見る中に一種云ふべからざる不快の情が、胸に斯う重石を置くやうな氣味合で、あまり、自分が人の罪を數へ上げる心の淺猿しうも思はれる。何故、夫が拘引せられて行つたか、如何なる仔細のある事か、詳細い事情を知りもしないで輕率なと心が附くと、何處かで神樣が自分を嘲つてお居なさるやう。ふと眼を擧げると、傍の壁にピンで留めたる牌の文字〔*There is none righteous, no not one.*〕、(義人ある無し、一人もあるなし。)とあつた。

惠美耶の眼は今、電のやうに閃めいてべりべり〳〵と手紙を一葉一葉裂き始め、果は粉韲微塵に引きちぎり、搔き破り、そこらの床一面、落花狼藉の模樣を印した。二階には母が病氣で臥つてゐる、「よろしく頼む。」その言語が今再び、耳根で囁やかれたやうで、急遽に、身を起して段階子の方へ走つて行つた。面は宛ら希望の光で白々と輝いてゐる。

（四十七）

「御容子如何ありますの、阿母さん……お眠入みなさつたのありますかね。」と、惠美耶はお節の枕元に差寄つて、横顏を覗きながら恐る〳〵云ふのである。

「イヤ、格別、左樣心配する程の事でもあるまいよ。」と修造は傍に控へてゐる。

昨夜、庸之助が突然拘引せられて行つた時にお節は驚愕と失望と心配とが一時に込み上げて、その場に卒倒して了つたのである。かねての持病もあるが、心臟に異狀を呈してゐるといふ醫師の診斷であつた。

「あの、お粥煮るよろしうありませうか、牛乳は阿母さま、お忌ありましたのね。」

「ウム、牛乳なんか、向附くと云つてるのだ。」と、修造、嘲み顏。

「鷄卵、よろしうありませうかね。」

「左樣さ……まア そんなものなら、好いだらう。」

「今朝、少しもお食りなさらないのありますか

ら、心配あります。」と、顫ふるやうに修造の顔を仰いだ。

「やかましいッ……やかましいつたら、静かにしな……病人の枕元で、何んだい。」と、勃々しう、しかも憎なげに我鳴り立てゝ、お笛は寝打返りした。

恵美耶は如何にも済まなさゝうに、耳の縁を真赤にして、伏目になる。

病人は、ハア〳〵太息を吐きながら、「あの子が……あの子が……あんな事になつて、私がこれほど……死……死ぬるほど心配してるに……やかましい、枕元で……喋舌るなんて……」

後は一座寂然と、暫し咳拂ひの聲も聞えなかつた。

段梯子を昇る足音、やがて顔をさし出したのはお卷、小い手に薬瓶を提げて、恵美耶の顔を一目睨むやうに、修造へは笑顔で、そこへ正坐つた。

「オヽ御苦労々々々……」と、祖父に労はられて甘えるやうな調子。「私、待つてゐましたの……薬取が澤山來てゐるんだもの。」

「オヽ、左様だつたかい。」

「ね、祖父さん……お父さんは何故歸つて来ないのだらうね……」と又思出したやうに、祖父の顔色を窺うて、やがて淋しさうに遶りをじろじろと眺めてゐる。

「ウム、……その中……今に歸つて來るだらう、心配しないが好いよ。」

恵美耶は默つて、二人の問答を聞きながら薬瓶の、横に印の入つてある處まで、小い玻璃杯へ濺ぎ込んで、「今、差上けても、よろしいありますね。」

お卷が頷いたので、膝行り寄つて、

「阿母さま、お薬あります。」

「何……」一眼を睜つて、少し身を起しかけて、杯へ口を寄せる途端、不思噎せ返つて、コホコホと咳き入つた。

「オヤ……」周章てゝ、背中を撫で下さうとすると、没義道に身を揺つて、咳きながら、

「人を……人を……何んだ。」罵りざま、玻璃杯を取つて投げ附ける、發止、恵美耶の横額へ當つて砕けて、颯と散る薬の水沫、皮が傷れて一滴、苺のやうな紅い玉がほろ〳〵とこぼれる。

「呀ッ。」と不思聲を立てゝ手巾を押當てると、白い絹地に唐紅が見る〳〵滲み渡つた。

「こ……これは……」修造、さすがに驚いて、如何にも氣の毒さうに、恵美耶の方へ一膝膝行り出る。

「何んだつて……この……この異人……この毛唐人めがゐるばかりで、あの子、あんな事になつたんだもの……こ……此奴のお蔭で……、殺したつて……、殺したつて腹は癒えぬ……」と病人は物狂ほしげに哮り立てる、恐くは、魔の叫び聲であらう。

お卷は子供心の、只呆れてゐた。

（四十八）

恵美耶が、無法にも額を傷けられて、鮮血の迸る中にも苦痛の色を見せまい、煩悶の様子を隠さうと力むいぢらしさには、さすが、父の修造も心折れて、かほどまでに優しい女、假令、毛色が異へばとて、瞳の色が變つてゐればとて、それが何程の事であらう、庸之助は好い妻を持つた、自分等は好い嫁を娶つたものだ。思へば是迄、何彼に就けて邪慳に當り散し、出て行けがしの仕向をしたのが、つく〴〵恥かしうなつて、罪の報酬の空恐ろしくも感ぜられる。今更それを謝罪るといふも可笑なものだし、さればと云つて、このまゝでは氣が濟まず、せめてもの心遣り、以後はお節にも云聽せて、あの女を優しう待遇ふやう心得させ、自分は又蔭ながら力になつてやるが好からうとまで、思ひ定めたのであつた。

罪無くして血汐を流した十字架上の人……それを憶へば額に受けた微傷が何程の事であらうか、凡夫の身の淺猿しさには、一時は怨めしくもあつた、口惜しくもあつた、又何とも云ふに云はれぬ、搔き挘り度き思が、胸の中に込み上げて來たのでもあるが、自分が惡い／＼、自分の足らぬ所爲だと、我と我が心を抑へ附けて、さて振仰いだ時に、彼の十字架上の人が夢幻の中に見えて惠美耶は限り無き慰藉と、盡きぬ喜びの情に滿され、自分で覺知れぬ涙を浮べたのであつた。それさへあるに父の修造、今まであまり口も利いてくれなかつたのが、その時より心熔けたやうに、さま／＼自分を勞り慰めて、何も彼も打明けてくれ、眞そこ我が娘待遇、此方にも早、何だか實の父のやうに、懷かしさの情も起る。

夫の身の上も、聞けばなか／＼自分が怨めるやうな筋ではなく、今までの邪推とは裏反對の、氣の毒な、哀れな、身を切らるゝやうな、いとしさの限りである。一時の迷から、國元への手紙を書きかけた、その事が今更、背へ汗の浸潤む程恥づかしく、よくも思ひ止まつたと、これにも神の冥助の難有さを感ずるばかり。思へば我が夫――いとしの人は今頃何うしてゐらるゝであらう、「許してくれい、頼む。」と云はれた、その言句の中には自分へ對して謝罪の意が、無限に罩められてゐるではないか。勿體ない、偶とした事の齟齬から、斯う云ふ次第になつたのだもの、自分は謝罪の辭を夫から受取る謂れはない。否、自分こそ、一時の邪推、僻見、それを夫に對して謝せねばならないので、又、他まで同情を寄せてゐる事を、夫に知らせて、慰め、勞らねばならないので。

斯く思ひ至つた時に、惠美耶はもう矢も楯も堪らない。密々父へ相談して、早速その承諾寧ろ贊成を得た。

「では、一寸行つて參るあります、阿母さん……一寸……」

お節は背を向けて臥つてゐる、惠美耶は額、に、白木綿の繃帶をしてゐた。上眼縁が少し腫んで來てるやうだ。

「行つて來るが好い、家の事はあまり心配せぬやうにと、左樣云つておくれ、母が病氣の事なども云はない方が好からう。」と、修造は、眼の中を霑ませてゐる。

「ハイ……よろしうあります。」

「庸に、逢ひに行くんかい。」と、案外優しい聲でお節は云つて、振返つたが、繃帶を見ると、直と又、彼方へ寢打返。

「ハイ、行つて參るあります。」

「私が心配してるから……早う歸つて來るやうに……左樣云つておくれ。」

「左樣、申します。」

「何處へ……父さんに逢ひに……」と、お卷は、祖父の額を見ながら云ふ。

「汝も一緒に行かないかい。」

「私、父さんは見たいけどもね。」

「一緒に行きませうか。」と、惠美耶は笑顏。

「父さんや、母さんは見度くて仕樣がないけども……」

（四十九）

鍛冶橋監獄に繫留中の未決監囚鳩宮庸之助は看守と看守長との立會で、妻の惠美耶及び子のお卷と接見を許されたのである。

板で中仕切の、唯、小い狹い窓口から庸之助は額許差出してゐる、僅かの間に、早頰の肉がげつそりと殺げて、顴骨が目立つやうに高く現はれ、眼窩が際立つて、陷込んでゐる。

一目見るより、惠美耶は唯涙であつた。

「何うしたの……そ……その額は。」と庸之助は妻の繃帶に目を附けて、氣遣はしげに尋ね懸ける。

答もしないで、鼻汁を啜り上げてゐた。
「父さん、母さんは居ないのね……、母さんは何處に居るの。」と、お卷は子供心の、足を爪立て、脊伸をして、窓の中を覗かうとする。
「オ、……阿母さんは……阿母さんはゐないよ。」
「あの、良君、嘸ぞ御難儀ありませうね……」と惠美耶は漸く喇ぶやうな聲音で云つた。
「何とも……何とも早、面目ない……仔細は聞いて下さつたでせうが、唯、私は決して貴方を欺いたのぢやアありませんから……當初、結婚する時に決して貴方を欺いたので無かつた事だけは、承知して貰ひたいので……」語氣もいとゞ改まつてゐる。
「そ…それは存じて居るのであります。」
「私はもう神樣からも、人からも見捨られた體です。この上何んにも申しやうはありませんが、唯一言貴方に對して置きます、是迄、滿身の愛を捧げてこの、罪深い私に親切を盡して下さつた事、これ丈は、私は死んでも忘れませぬから、その段は……」呢と俯向いて暫しは聲を呑んだ。
「良君、そんな事を……神樣からも、人からもつて……左樣、お見捨てられなさる譯ありません、良君悪い事ありません、事の纏綿からで……私、決して良君を見捨てる處ではないのであります……」
熱心、面に現れて、瞳には同情の火の燃ゆるがやう。
お卷が、「いゝ」と手欄を滑りぬけて窓口に兩手を掛け延び上らうとするので、「コッツ……」と云つて、看守長は、その小い肩を押へて、靜かに手欄の外へ出した。
「そんなに……そんなに思つてゝ下さるのは難有いよりは、寧ろ、苦しいです、この罪悪の塊を貴方のやうな……天使のやうな方が、左樣云つて下さるのは、實にもう、胸が張裂けるほど苦しいです。」
「そんな事、良君……そんな勿體ない事……」と、惠美耶は手巾を嚙み締めてゐる、額の筋肉が、痙攣發作のやうに顫へて止まない。
「父さん……父さん……何故、歸られないの、母さんと一緒に居るの。」と、お卷は鼻聲。
「オゝ汝も……汝も何卒……決して悪い事をしてはならんぞ、惠美耶さん、この子の事と、そして憚りながら、親達の身の上を賴みます……貴方の額は又何うしたのですか、それも氣懸でならんですが……」
「これ、少し負傷をしたのあります、眞の少し……」と言葉を濁し、掻改たまつたものゝやうに、
「私、鳩宮夫人あります、お父さまや阿母さまの事、御心配入りません、この御子私の子と思うて可愛がります、私、子産れましたら、同胞二人になりますから、良君此所から出なさるありますと、何んなに樂しいありませう……阿母さまも御心配なさつて……良君の早く御出獄、俟つてゐられます。」
「左樣でせう……實に不孝とも不義とも……」聲を顫はせてゐる。
「何卒、體の御用心第一ありますよ。」
「ハア、難有う、貴方も何卒……お卷や、好いかい、これを汝の阿母さんと思つて……眞實の阿母さんと思つて、大切にするんだよ。」
お卷は眼に涙を漲らせて、早しく／＼泣いてゐる。
「お卷さん、……泣くいけません。」と、惠美耶は片手をお卷の頭に遣つて、自分は少し俯向いて眸に溢るゝ涙を拭はうともせず、胸を押へて佇んでゐる。
看守長は今、頻りに懷中時計を眺めて、又窓口の上の柱時計と見競べてゐる。

「何卒……何卒、よろしく……父にも母にも……植木監督には、實にもう……」云つて俄に心細さうに惠美耶を見入つて、「お察し下さい私の罪は、夜も晝も、私の心を責めて寸時も眠る遑はありません、神樣の罰は、地獄へ陷るのを待たないで現世で報いてゐるのです……差入物は聖書を願ひます。惠美耶さん、私は毎夜毎夜苦しい夢に魘されてゐます、何卒、私の爲めに、貴方の清い祈を願ひます。」語尾もしどろに亂れてゐるので。

惠美耶は返答も得せず、今は手巾で顏を蔽つてゐた。

（五十）

植木監督は銀のやうな白髯を撫でながら肱掛椅子に倚りかゝつて、片手は洋袴の上へ落し、兩足揃へて如何にも威儀儼然と姿勢を崩さない。そして、其皺の寄つた額際には何となう愛が溢れてゐる。

「私も一時は驚ろいたのです……何かの間違だらうと思つたのですが、併し、事情を聽て見ると實に氣の毒千萬な譯で……脱獄者を隱匿したといふ點は、鳩宮君に似合はない事をやつたものですが、それも前後の行掛りで、人情負けて了つたのでせう、私は決して、鳩宮君を惡くは思つて居ません。」と、隔意なく打解けた調子。

「貴君、そんなに仰やつて下さるありますと、私もう、斯の上嬉しい事ありません……夫も、貴君へ面目ない申しまして、それを苦にして居るのであります。」惠美耶は唯もう胸迫る思ひで、正面に監督の顏を仰ぎ見る事は出來なかつた。

「左樣ですか、それは何うも氣の毒です、何れ手紙でも遣る事にしませう。實は今日、御留守宅へ、お見舞旁々何ふつもりでゐた處へ、丁度御出で下さつたやうな次第で……」

「御見舞下さる事ありません、それでは濟まないありますもの。」

「否、何うしまして……教會の信者方も又何とか思つてるだらうし、實はそれを取鎮め旁々參らうと思ひましたので。」

「ハイ、誠に難有うあります……」

「鳩宮君が御留守中は、貴方代つて、教會を牧して頂き度いですな。」と稍改まつて命ずるやうな語氣。

「ハイ……私、そんな事出來ません……信仰が弱いありますから。」顏を赧らめてもぢ〳〵してゐる。

「左樣御辭退には及びません、貴君が御承諾下されば、教會の信者方一同が幸福です。」

「ハイ……難有いお言葉ありますけれど……」と、思ひ餘つたもののやうに、差俯向いて考へてゐる。

「主の爲めですから、當分お遣りなさい。」

「ハイ……」と漸く面を上げて、「では私、力限り致して見ます、何卒、御援助け下さるやう願ひます。」

「よろしい、御承諾下されば、私も及ばずながら力を添へませう、そして御一家の經濟向も隨分御困難だらうと察してゐますが、折角、駿河臺の女學校の方に會話の教師が缺員だと云つて來て居りますので、貴方その方をお遣りなすつては何うでせう。」

「それは何うも難有う……折角、その方の事も御相談したい思うて、上りましたのあります。」と、惠美耶の眼には喜びの色が溢れてゐる。眉も暢々と、心から嬉しさうで。

「左樣して下さると、私の方も非常に好都合です。」と監督も左も滿足げに、豐な頬邊に微笑を浮べて不知々々、卓上の白磁の花瓶に活けた黄菊の花の、手近なのを一輪捩り取つて、嗅いで見るのであつた。

「實は母、病氣ありますし、差入物致したうもありますし、何彼と費用掛りまして……」

「左様でせう……お察し申します。」と、老牧師の瞼には今一點、露が光つてゐる。

「今、何時ありますかね。」と思出したやうに問うた。

「未だ早いです……五時です。」

惠美耶は新婚の記念の爲めに、特に誂へて造らせた、精巧の、小型の、器械に金剛石を鏤めた女持の金時計、それを昨夜質屋に賣り拂つて了つて、米屋其他の支拂殘を、一應濟ましたのである。衣服も早大分汚れて、洗濯屋に遣すべきであるが、着替一枚も殘さないので、それもならず、纔かに自分の後影が見らるゝやうだ。

「あゝ、お暇致します。」

「まア好いでせう、序に晩餐でもお濟ましなさつては如何です。」

「難有うありますが、あの、今晩祈禱會がありますから……」と情無椅子を立離れた。

〔五十一〕

一旦、柿色の囚衣を着たものが、牧師さんに成れるでせうか。　これは牛込教會の今曜日の祈禱會が始まる前、婦人室の一椅子から起つた聲である。

「牧師さまアない、車夫になつたつて、人は相手にしやアしないわ。」と四十恰好の、痘痕面の大年增。

「乞食になつたつて、錢一文も遣りたくないわ。」と、之に和するものがある。

「だけども、悔改めりやア善いやうに思ふんだがね、牧師さんなんかには、左様行けないもんでせうか。」と、原案提出者は恐らく懷疑派の一人と見える。

「悔改めるたつて、エスを賣つたユダは何うです、首を吊つて死なればならなかつたぢやアありませんか。」と、眼鏡を掛けた一人の女學生。

「そりやア　ユダなんかはお話にもならないんですが、外の、法律上の罪を犯して、そして後、悔い改めたものは何うでせう。」

「處がその法律上の罪を犯すと云ふのが、ユダのエスを賣つたのと同じ事になるんだらうぢやアないかね。」と、女學生愈々得意。

痘痕面も、而同者も、乃至懷疑派の原案提出者も、今、既に斷案を下されたやうに、呀ッと感じ入つて默り込んで了ふと、突如、

「それはいけません、そんな事を云つてた日には、一人だつて救はれるものはありやアしませんわ。」と椅子の隅から、嫁有を得た澁澁さうな婆さんが嘴を入れる。

「否、間違へちやアいけませんよ、牧師になれるか何うかといふ問題なんですから……。」と、女學生先生至つて鷹揚である。

「牧師にだつて、神様にだつてなれますとも、悔改めさへしたらね。」

一句に荒膽を挫がれて、人々互に顏を見合せて暫、口を噤んだ。

「ですけれど、出獄人保護事業なんかが、まア適當でせうよ、牧師なんかにやア何うも……。」と顏色無かつた女學生が、漸く盛返した。

「××なんかが……、あの、××の女房なんかが、矢つ張、説教を聽きに來たつて、常時もこの席へは入らないで、あの柱の隅ッコの方へ小さくなつて屈み込んでるのですもの、まアそんなものですわ、物の譬がねえ。」と、例の痘痕面が氣焔を上げる。

「そりやアね、世間は矢つ張、理窟許りぢやアいけませんからねえ。」と、援兵一人。

「理窟を云ふんぢやアありません、唯、愛の一字で結構ですよ。」と婆さん、寸鐵に留を刺す、

一座寂然。

衣ずれの音、腰掛の、長椅子と長椅子との中間の一條の通路を、聖壇の方へ向けて靜に淋しげに歩して行くのは惠美耶である。夜會つしの髮は亂れに襟際の上で渦卷いてゐる。

鈴が鳴つた、一齊に衣紋を掻繕ろふ、惠美耶は此方へ向いて、毅然と椅子に倚かゝる、顏色も青白く冴つて見えたが雙の瞳には何となう瑞々しい、希望の色が輝いてゐた。

讃美歌は、「くもゐのみや」の一節、それは、今夜の司會者たる惠美耶夫人の胸に深く／＼印銘されてゐる――夫が新任披露の當夜、滿堂に鳴り響く聲も高く唄はれた歌ではないか、それを今、唄うて見るのが又慰藉の便宜ともなるので。

一齊に會衆は早、聲を張揚げた。その中で一縷、際立つて耳を貫くやうに悲しい、又憐れな、泣くが如く、訴ふるが如く、細く長く引く聲音が紛れもせず、あり／＼と聞えてゐるのである。あはれ斷腸の聲とは是であらう。

會堂の鳴りどよめくやうな、歌の餘波が今漸く四方の壁に消え込んだ時、惠美耶は手をその繃帶で結んだ額際に加へ、顏を斜めに、俯向いて、卓上に片肱を凭せ、

「天に在す我曹の父よ、我が夫は愛の爲めに獄屋に繋れました、同情の深かつたあまりに獄屋に繋れました、何卒、彼の罪を赦させ給へ。オヽ、父よ、我夫は愛に滿ちて居ります……父よ、我夫は……我夫は獄に……赦し給へ……父よ」帛の破るゝ如くいとゞ打顫へたる聲音の、果はしどろに亂れて、わッとばかり、卓の上に泣伏して了つた。

（五十二）

「まア、そんなにまでして、お氣に入り度いと思ふのですかねえ。」とお柳は、父から一分始終の談話を聞いて、如何にも感に得堪へぬやうな面地の、片手は乳際へ、片手疊に突いて、ホッと吐息をした。このごろ一入窶れたやうで、何うも血色が勝れてゐない。眉間には消えやらぬ愁の小皺、左樣思つて見る所爲からか、眼が少し窪んだやうな。

「私はもう氣の毒でならないんだよ、阿母樣にも虐めるの丈は廢止つて云つてるのだが、何うも折々無理な事を云出して困らすんだよ。」

「そんなにね……そんなに親切に介抱したり、機嫌を取つたりしてるのなら、阿母さんも成丈ね……」

「親切つて……あの女の爲めに、庸之助が牢へ入つたんだと思やア……それが怨みで……」と、お節は此方へ寢打返して、眼を絲のやうに瞬つて、お柳を見る。

「そりやア汝、何んでもない思違ひつてえもんだらうぢやアないか。あの女の爲めにつて……少ともそんな事はありやアしないぢやアないか。」

「阿父さんは……阿父さんはこの頃、大そうあの女を御贔屓になさつてね……忌な……毛唐人たんか……」

お柳は一膝押進めて、

「阿母さん、今聞きますれば、彼女が餘つ程親切にしてくれるといふぢやアありませんか。私なんかも、何うも毛嫌をする方の質で、あまり氣に入らないのでありますけれど、そんな事を聞きますると自分の身に引比べて見て何たかもう可哀さうになつてね……私も家で、この頃は隨分辛く當られるもんですから、もう飛出さうかもう飛出さうかと思ひ詰めてゐます其心中の苦しさと云ふものは、何とも彼とも云へませんが、惠美耶さんの事を考へるとね……そんなに額なんか割られても、それを何とも云はないでぢつと辛抱してるなんかんてえな事を考へて見ますればね、私の辛いなんかと溢してるのは、未だ／＼我儘だと思つて却つて、恥かしい位ですわ。」

お節もさすがに、顏色を動かしたやうだ。

「左樣さ少しは我が子の事も考へて見て、あの女が可愛くなけりやア、せめて憎まないで

ゐてくれりやア好いんだ……庸之助が此度の事件も、先の女が基なんで……岸野のお孃さんから起つた事なんで、少ともあの女に關係のある譯ぢやアない。飛んだ考違ひから怨を人に着せて虐めたり、苛んだりするのは、實に罪な事だよ。」

「私のは、旦那に虐められると云つても、打つたり叩いたりせられるんぢやアない、唯まア見せ附けられる位なもんです……それを何うも……阿母さん、もう〳〵酷い事をなされますな。」

「この頃は毎日、女學校へ行つて、隨分勞れて歸るんだから、少しは氣の安まるやうな言葉も掛けてやらなくちやア……」

「左樣でございますよ……庸さんがあんな事になりましたのも、何方かと云やア、畢竟惠美耶さんを、家で、あまり虐めるもんだから、それで自分にも面白くなくなつて、先の女に繫合を附けたつてえやうなもんですからねえ。」

「其處も大きにあるよ……それにもう、次第とお腹が大きくもなるのだしね。」

「左樣ですつてねえ。」とお柳は、小思案顏、「私も、子さへありましたら……」と云つて、「愚癡ですわねえ、、、、、。」

お節は又眼を瞬つて額に皺を寄せて、「雜種兒なんか忌な事だ。」と咳きつゝ如何にも憐むやうにつく〴〵娘を見て、「汝、子がないからつて、そんな事をくよ〳〵思つて、何卒病氣なんか出さないやうにしておくれ、庸は……庸は彼樣だし、汝許を倚頼に思つてるんだからねえ。」

「ハイ……」とお柳は、もう鼻を詰らせてゐる。

「もう、彼是、孫も歸りさうなもんだ……この頃は、彼が女學校の一年生で、勉强家といふのださうなハ、、、妙なものでなう。」と父はわざと笑を粧うての自慢顏。

「オヤ……左樣でございますか。」と、眼をぱつちり。

（五十三）

惠美耶は今日も女學校の退出際を、連れ立つて、例の如く監獄署へと廻路し差入物を濟ましての戻り掛け、海老茶の袴を穿いて、書物石盤の包を小脇に插み、毛絲で編んだ辨當袋の緒を小指に絡んだお卷の肩へ手を遣つて、綺れつ纏れつ今我家の門を潛らうとした時、丁度玄關口から梶棒を擡けて引き出す瀨塗の車、紫繻子の蝙蝠傘を擴げてゐるのを、見上げるとお節であるから、馴々しく會釋をする。

「オヤ、お歸りですか。」と、優しく云つて、丁寧に叩頭を返した。車夫は早、引き出して行く。

惠美耶は、嬉しさに胸を跳らせた。お卷に向いて云つたのではあるまいかとも思つて見たが、併し姉の瞳は慥に、自分の瞳と合つてゐたのであるから、自分へ向いての言葉に違ひない。從前はついぞ好い顏も見せず、口も碌々利いてくれなかつたお人が、今日はまた打つて變つて、優しく、馴々しげに物を云ひかけてくれたといふのは、何うした譯であらう。お父さんが左樣云つて下さつたのかも知れない。誠の貫かぬ道理はなく、愛に克つ敵はないとはいへ、自分の愛自分の誠は未だ〳〵盡し樣が足りないのに、思へばお父さんのお情も難有く、姉さんの御心の解けたのも、嬉しい事の限りと云ふもの、阿母さまもその中には、乾度、自分を愛して下さるに違ないと、早、天國へ昇る路筋を見附出しでもしたかのやうに、勇み立つ心を押へ、茫然と、俥の後影を見送つてゐた。

「母さん……母さん……」虚空に聲あてて叫ぶやう。

「母さんてば、母さんてば。」漸く氣が附いて見ると、お卷が二階の櫺子窓から顏を出して、自分を呼んでゐるのである。狐疑深く見えてゐたその眼光、このごろは誰も愛らしく、無邪氣な色

を添へて、顔の肉附がふくやかに、氏より育ち、器量も一段と立優つた美しい小娘である。

「オヤ……もう上つたの……」と云つて莞爾、いそ／＼と恵美耶は入つて行く、額の繃帯はもう取れて了つて、傷痕は小さく癒えてゐるが、それが眉間の痣のやうで、一層慈悲の相にも見える。毛絲で編んだ、目の疎い手提の中には、林檎か何か入つてゐた。

　お巻が母さんと呼ぶのは滅多に無い事である。祖父はしきりとそのやうに教へてゐるが、先生と云つたり、叔母さんと云ふ方が多い、併し、この頃は次第に懐いて来て、昔日のやうに、白い眼なんか見せる事に、絶えて無くなつた。

「只今……」と、恵美耶は下手へ正坐つて、丁寧に挨拶して、

「あの、阿母さま、御病気如何ありますの……少しはよろしいありますか。」傍へ膝行り寄つて、様子を覗ふのである。

「別にも変りはない　、追々快くなる方だよ。」と父は執成顔。

「あの、今日、好い林檎ありましたので。」云つて、手提の口を明け、皮の紅く色づいて、一部は未だ少し青い、小手毬程の林檎三つ四つ、取り出し、転げ廻るのを押へて、「阿母さま、これお上りなされませうか。」

「オヽ、お節……恵美耶さんが、林檎を買つて来ておくれだよ。」

「左様……」と云つて、一寸振向く。

「只今、皮剥きます。」ナイフを手提の底から取出して、銀の刃に、蛇のうね／＼巻き附く如く、やがて巧に皮を剥き了つた、乳白の實の、汁が滴りさう。

「さア、お節……」修造が、それを口端へ差寄せてやると、吸ふやうにする。

「母さん、私にも……」とお巻は甘える。

「上げるのあります……階下の部屋へ行つて勉強して、それからね。」

「オヽ、お巻、階下へ行つて、復習して来るが好いよ。」

「さア、お出でなさい。」と、先へ立つ恵美耶の背へ小羊が母に縋るやうに、もつれ附いて、

「復習したら林檎をおくんなさいな。ねえ母さん林檎をね……」

（五十四）

　牧師嶋宮楠之助が、囚徒逃走の教唆及隠匿の被告事件と、それに関聯した贓品の重罪囚、岸野澤の公判は、愈本日、東京地方裁判所法廷に於て開かるゝ事となつた。豫審は意外に早く終結して、是迄の手續に頗る敏活に運んだのであるが、畢竟、被告人が敢て抗辯もせず、潔く服罪したからでもあるといふ。

　時刻前から傍聴人は陸續と詰掛けて、早満廷、立錐の余地もない程であつたが、中に殊更、人の注目を惹いたのは、前の几椅に、萎み衰れた老婆を片手で抱きかゝへて、愁ひ顔の色青ざめ、鬢の後れの、憔悴、目鼻立の美くしいのに照り映えて一入いぢらしくも見らるゝ大丸髷の、白襟紋付、黒縮緬の羽織着流した奥様風俗、これは田島のお柳である。同じく件の病人を一方から支へてゐる手先の妙にぶる／＼慄へて止まないのと、目の下の皮の痙攣発作でも起したやうに、頻りと微かに動いてゐるのが、人の目に怪まるゝやうなのは楠之助の父の修造、お巻は例の、海老茶の袴で祖父の横手に悄然と控へてゐる。その小い手を把つて、自分の膝の上に載せ、眞黒な洋服着の飾気のない晃綃を眉深に冠つて、いた／＼思に沈めるもののやうな様子の西洋婦人は即恵美耶で、之が又最も満堂の注意を呼び集めた。

　程なく看守に導かれて、傍の入口から悄々と宛ら小羊の屠場に引かるゝ如く、しかも又何處か寛裕と、覚悟を定めたもののやうに、敢て迫ま

らざる態度で、やがて裁判長の面前に、悠然として突立つた鳩宮庸之助、黑のモーニングの、垢じつき汚れたるを着て剃刀當てぬ髯の鬖々と、口邊から顋一面を蔽ひ隱し、頰骨は高く尖り、眼窪陷りて血色いたく勝れず、一體漸う青氣のない、枯びたやうな調子。兩眼のみは、鐵を疊める瞼の底から爛々と、星の如き光を放つてゐる。一座を籠むやうに見廻して、其視線が、ふと前の几椅に陣取れる人々の上に落ちた刹那、眼中異樣に閃めくものがあつた。直と俯向いて、悄然と足の爪先を見詰めてゐる。

「庸や……」と叫びかけた弱々しい、左も潰れたやうな聲音は、ハヽヽと、修道の片手で遮られた。

「默つてるんだよ、お節。」耳邊へ口を寄せて極めて低い聲で囁くのである。看守の眼は、電光の如く此方へ濺がれた。鼻汁を啜る音、それも今は邊を憚るやうであつた。

その時、更に滿堂の視線を一身に引き集めて、看守に導かれながら手摺の前に歩出でたのは、例の柿色の囚衣を着し、手錠を卸された、色の青白い、卷髮の女である。始終俯向勝で、如何にも萎け返つてゐるが、折々庸之助の方を竊視るやうにして、哀を乞ふやうな眼色であつた。

被告兩名の者は、敢て辯護士を要しないと云つて、其屆出を遣らなかつた爲め、當日官選辯護の貧乏籤を抽き當てたのは、未だ新米の、年若の辯護士、この頃蓄へた許りと見えて、一本宛數へられさうな薄ら髭を捻り立てゝ、痰吐器に唾を吐き込んでオホンと澄し、例の黑裝束の、未だ着慣れぬらしく、しきりと容體を作つてゐた。

式の如く、住所姓名職業年齡の訊問を了つて、さて裁判長は、虎髭の檢察官が提起せる公訴に據り、被告鳩宮庸之助が、女囚岸野澤を教唆し、內外相應じて、遂に之を脫獄せしめ且隱匿したる嫌疑の廉々を述べ、事實如何と、嚴然威儀を正して問ひかけた。

庸之助は涙ある眼光に、昵と裁判長の顏を見上げて、いとゞしく打慄へる調子。

「閣下よ……私は何にも申上げません、私は大罪人であります……何卒御嚴罰を……」とばかり、悄然と頭を俯垂れて了つた。

惠美耶は仰ぎ見る事も得せず唯手巾を嚙み緊めた。お澤もしく〳〵泣いてゐる。

（五十五）

「申上けます……全く、私が惡いからで……全く私の心得違から、豫審廷で曖昧な事を申上げまして……眞實は、この人に罪はありません。」と、お澤は今、甚く悔めるもののやうに、涙含んだ聲の途切れ〳〵、「默れッ！」と、裁判長に一喝されたのも、格別耳へは感ぜぬ如く、自由ならぬ手の焦々しげに、只管、胸を押へて、眼を拭いて、靜に庸之助の方を眺めやりながら、如何にも濟まなささうに、打詫びるやうな顏色の、總身をぶる〳〵戰慄せてゐるので。

この時、庸之助は裁判長の方を仰いで何か云つてゐたのである。

「……私は、若氣の誤過で、一度犯した罪が斯くまでも根強く蔓つて來ようとは夢更思ひも懸けませんでしたが、今日に至つて見ると、實に空恐しくてならんのです、折角、一旦悔改めて、神樣の御名の下に立働く身となりながら、其昔犯した罪の爲めに、吾自らを欺き、妻を欺き、神を欺き、社會をも欺いて果ては、國家の法律にまで觸れるといふ、實に淺猿しい次第に立至つたのです。私は神樣の嚴罰を蒙るべき者です……」と甚く激せるやうな調子の聲は言葉も塞つたやうに、庸之助は片手を額に加へて昵と俯向いた。

「全く……全く私が惡いからで……この人に罪はありません。」と、お澤は哀訴するものの如

く、裁判長の顔を見上げた。傍聴席の、お卷の眼は愁はしげに瞬きつゝ、彼の母の顔に從うて動いてゐる。

「否、私は罪人です…大罪人です…罰を逃れようといふやうなこの上卑劣な考は決して持ちません。否、寧ろ、この大罪に相應した嚴罰を受けたら多少我心の苦痛を減ずる事が出來るだらうと思ひます。辯解も、何にもする必要はありません…お澤さん、…貴方に對しては、實に何とも、お詫びの申上げやうもありませんので…」心の底から悲を絞り出すやうな聲音で、庸之助はちらとお澤を見やつて、面なささうに俯目になつた、惠美耶は心に、何か祈るものゝ如く眼を瞑つて、兩手を膝の上に叉み合せてゐたが、此の時、如何にも夫の上を憐むやうに、霑んだ瞳を呪と瞬つた、病る母、父、姉、いづれも、庸之助の悪怯れず覺悟を極めた男らしさ、健氣さに、謂不知涙を催ほすのである。

裁判長は、やがて被告お澤に向つて事實の訊問を始める。お澤はいと殊勝しく、臆したる色もなく、

「ハイ、私が豫審廷で申上げました處は、全く事實とは違つてゐまして、つい心にもない事を浮か浮か御答致したのでござります。私が、脱監致しましたのも、自分一人の考からでありまして、その夜、この人の處へ逃げて行きますと、この人は非常に驚きまして、隱匿してくれる事は愚か直ぐに自首するやう達て勸めますのを、無理遣私が据り込んで動きません。とう／＼心にもない事をさせるやうに仕向けたのであります。豫審廷ではつい呆然してたものと見えまして、曖昧な申立てをしてこの人に嫌疑を掛け甚だ相濟みませんでした。今のやうな次第で、この人に罪はありませんですから…何卒この人だけは無罪になすつて…」語尾はさすが顫へて、消えて了ふ。

辯護士はしきりに薄い髭を捻りながら何か考へ込んで、鉛筆の尻でコト／＼卓の縁を叩いてゐる。

虎髭の検察官は眼を瞋らして突立ちながら、

「本官は、被告澤が只今の陳述は、殊更に共犯者を庇はんが爲め、虚構したものであつて、本心より出たものでないと認めます。裁判長は公明なる御判斷あらん事を一言注意致して置きます。」

「決して、私は謔は申上げません、この人にけ罪はありませんのですから、何卒、私丈を罰して下さいまし、この人が私を隱匿したのではなくて、私の方から無理遣逃げ込んで行つたのですもの、此の人の心から出た事ではありません。それを罰するといふ法はありますまい。假令又、それが本心から出た事にしても、其處は人情です、檢事さんでも…」と嘲弄るやうな口調。

「默れッ！」

裁判長の大喝に、傍聴席のお卷は、子供心の慄へ上つて一わッとばかり泣出した。

庸之助と、お澤とは、一齊にその方を振向いて、見返りさま、パッと瞳が合つた。惠美耶は蔽ひかぶさるやうにお卷を抱き竦めて、看守の白い眼を遮りながら、慈悲の溢るゝばかり愍め賺すのであつた。

五十六

物淋しい時雨がしと／＼と宵の程から小止みなく降りしきつてゐる。市ケ谷監獄の冬の夜の陰に深けて、暗い暗い魔の住家のやうな監房の其處此處、鼾の聲も聞えてゐる。彼方の、女監取締の見張處には微かな角燈の燈火が、怪物の眼の如く、薄氣味悪い光を放つて、その幻のやうな影を地上に投げ、何となう冥府の光景を想ひ起さしめるのである。

お澤は又今宵も寢就かれない。角格子へ手拭を

縛り附けて、縊れ死なんとして死損ひ部長に見附けられて嚴しい譴責を喰つたのは早十日も前の事當座は暫時も眼を離さないやうに、一擧一動に注意してゐた女監取締も、昨今日、漸く氣を許し始めて、此方も亦油斷をさすやうに、さりげなく仕向けてゐたので、今は早心安い。それにつけても、庸之助さんは今頃、何うしてゐられるやら、何の罪も無い人が、自分故に一年の重禁錮、無辛い、悲しい思をして、憎い奴めと怨んででも居ての事か、否寧そ、怨んで居て下されば、又この胸の遣る瀬もあらうに、あの、義理堅い、同情過た御方の事故、公判廷で自分に向ひ、一言半句怨言かましい事云ふではなく、唯々自分で自分を責めて誑言までしてゐられたやうに、矢つ張神樣の罰たと諦らめて己一人で悶え苦んでゐてのであらう。思へば、女心の淺果敢な、一目見てより昔戀しく懷かしく堪へ切れぬ愚癡が嵩じ、果は大それた牢破りまで企んで逢ひに行つたのが抑もあの人の御身に災難のかゝる基、今更この膓を八つ裂きにして御詫びするとも猶御足つた事ではないに、剰さへ惠美耶夫人が妬ましく、夫婦一緒に監獄住居すれば、それをせめてもの心遣と淺猿しい、佞ぢけた根性から、豫審廷で曖昧な事を申立てて、あの人にあらぬ嫌疑を掛け、非常に迷惑な目を見せたのだもの、濟まぬ、濟まぬ、如何にも濟まぬ、夫是思ひやればやる程、我ながら愛想も小想も盡き果てた、罪深い膓、汚れた心、この心が鏡に映てあの人にあり／＼と見られようものなら、自分は何として立つ瀬があらうものぞ、この儘に消えよとばかり、胸を打てば、ジンと總身に響いて、足頸に嵌められたる鐵の鋲の、今更緊く骨身に喰ひ入る許である。

傍では物凄き齒軋の音、ムニャ／＼と文の分らぬ寢言、子守唄の眞似のやうなのは定めて愛兒に添乳の夢でも見てるのであらう。

お澤は愈々、自分の心が心を責めて起つても坐ても居られない……。思へば、自分は庸之助さんに對して實に濟まぬばかりではなく、父なる人母なる人、又姉のお柳さんへも申譯の仕樣はない。のみならず、大切の夫を寢取られたやうで口惜しさ紛れに自分は嫉妬の炎を燃してゐた戀の敵のあの惠美耶が、法廷でお卷を愛してゐて呉れた其素振を見て一日にそれと、その親切の讀まるゝやうな、何と思つても憎まれない穩柔和な、愛心の深さうな顏に、忽ち自分の心の邪慳の角も折れて了つて今に唯もう氣の毒さが胸一ぱい……。晝間、工場の手仕事の隙にも始終これ等の妄想に驅られ詰め、夜も床に就けば一々それが胸の上に釘でも植ゑたやうに、苦痛の種となつて、再び入監して以來、未だ一夜さも落々寢就いた事はない。神經は高ぶる、食事に進まない。總身背が立つて、枚數へ掘るも臂の痛さはよゝ堪へ難いやうで、偶々心氣の疲勞にうと／＼と夢幻の境を辿るかと思へば、庸之助の姿、惠美耶の顏、お卷が泣出したその當時の有樣があり／＼と眼前にちらついて、折節は、自分が手に懸けて殺した血まみれの人が、恐しい、白い眼を剝いてハッタと睨み付ける。其度毎骨も肉も削り取らるゝばかり、走馬燈のやうにそれを繰返してゐるのである。

悲に生てゐて、日夜この苦しい目を見るよりも死んでお詫びと思ひつめて、先夜の失敗には懲りもせず、今宵こそと覺悟を極め、お澤は今薄い冷い衾を蹴つて起上つたのであるが、丁度折惡しく、軒下を靴の音がしてゐるので、又寂然と、寢靜つた態を粧つてゐたが、處へ、部長が巡廻つて來て、忍びの角燈よりちらと射出す一線の光、房内の隈々を照し、囚人の動靜を窺うてやがて、立去つて了ふ。

片唾を呑んで靜まり返つてゐたお澤は、この時むくりと起上り、手早く上の囚衣を脫捨てゝ

素肌に唯お仕着の襦袢一枚となつた。夜寒骨に透りて、ガタ〱と齒の根も合はず胴慄つくを我と我が身に力を入れてぢつと堪へながら、件の囚衣を取つて片端からベリ〱と嚙み裂き始めたのである。

音が立つので、屢々躊躇らて、邊を窺ひながら或は手で裂いて見たり、齒に懸けて見たり、止めたり續けたり、兎角して、漸くそれを解き了つたらしくホッと小い吐息を吐いた。一つ宛持つべき筈の手拭は、縊死の失敗以來、取上げたまゝで與へてくれず、細紐で、帶の代用をさせてゐたので。

せめて、遺書をとは、臨終の際に、お澤が念頭に浮んだ處であつた。庸之助と、お卷との俤は今あり〱と暗中に現れて、懷かしさに得堪へない。抱き附からとすれば忽消えて了ふ、再び描からとすればおぼろげである。死神が白い衣を着て、隅の方で自分を呼んでゐるやうだ。見れば、それは、自分が手に懸けて殺した人で、怨めしさうにハヽ、ハタと睨まれ、總身一時に氷を浴びた如く冷渡つて、暫し氣を失つたやうであつたが、やがてその幻が消えて、再び庸之助と、お卷との俤が現れたので、欣々語り掛けて、周章てゝ聲を呑んで、グサとばかり、小指の先を嚙み切つた、生暖かいものが、暗中ぽた〱と滴つた。定めて黑い血であつたであらう。

（五十七）

金の七つの燈臺、その燈臺の間から人の子の如きものが現れた。その身には足まで垂るゝ紫の衣を着、胸には金の帶を束ね、頭の髮の白きこと宛ら羊の毛の如く、目は火焰の燃ゆらんかと許、足は爐に燒る眞鍮、聲は大水の響、右の手には七つの星を持ち、左の手には角の笛を把り、兩刃の利劍その口より出て、面は輝く日の如くである。

我、末の世を審判かん、我、罪の子を滅さんと、叫ぶ聲宛ら迅雷の如く轟渡つて一聲、笛を吹き立てるより早くも、一人の天使が白い駒に騎つて、疾風の如く馳せつけて來て、一の星を授られたかと、見る間に、それが朱の弓と、白い翦矢を手挿んで、戰を宣すべく、何處ともなう去つて了つた。金の燈臺の火が一つ消える。

次には二聲笛を吹立てると、こたびは赤い馬に騎つた天使が駈け來つて、又一つの星を授けられる。星は巨なる銀の如き刀となつて、地の平和を奪ひ凡人類をして互に相鬩ぎ、相殺さしむる權威を與へられた。金の燈臺の火が又一つ消える。三聲目の笛で、黑い馬に騎つた天使が現れて、又一つ、授けられたその星は正しき權衡となつて銀十五錢に小麥五合、銀十五錢に大麥一升五合、油と葡萄酒を損ふべからずとの宣託を受けた。金の燈臺の火は又一つ消える。笛の第四聲目に、一匹の灰馬が哮け狂つて跳び來り、授られたる星の一つを銜んだ。これに騎れるものの名は「死」、「陰府」なる天使の一群その後に從うた。彼等は刀劍、饑饉、疾病、及び地の猛獸を以て、世の人類の四分の一を殺すの權威を與へられた。金の燈臺の火が又一つ消える。笛の第五聲目に、多くの殉教者の靈魂か、一つの巨な星を中央に取卷いて、宛ら火輪の如く廻轉しつゝ、血の酬よ、血の酬よ、と叫んだ。金の燈臺の火が又一つ消える。第六聲目に非常な大地震が起つて、日は毛布の如く黑くなり、月は血の如く赤くなり、靈空の星は無花果の樹の、大風に搖れて、未だ熟せざる果の、枝を離るゝが如く、地上に隕ち、天は卷物を卷くが如く去り行き、山々島々皆移つてその處を變へた。地の諸々の王、貴人、富者、將軍、勇士、凡ての奴隸、凡ての自主、悉く洞穴に匿れ、山の巖の間に逃れた。七つの燈臺の火は六つまで消えて、七つの星は唯一つ殘つて血紅色に燦めいてゐる。

庸之助は、火の山、火の岩、火の谷の中を、命辛々逃げ惑うて、漸く向方に、安全の隠れ家らしき洞窟一つ見附けたので、しきりとその方へ心焦かれつゝも、自分の手と手を緊と握り合つたお澤が、無殘にも早半ば焼け爛れて足腰も立たない體を強ひて引起して、無理遣連れて行かうとする、お澤は唯絲のやうに片眼を瞬つて、今にも息を引取さう、額の皮は剝け爛れ、白い頬骨が現れ出て、見るから傷ましい瀕死の姿をそのまゝ地上に横たへようとする。今一歩と勵まし立て、叱り立てゝ、遮二無二、引摺り行かうとすれば、「もう、私は……私は、神樣の罰で、此處で死んで了ひます……何卒、貴方は、體を御大切に。」とばかり、末枯れの蟲の音を振絞つて、はたり地上に倒れて了ふ。庸之助は周章てゝ抱起して、

「何んだ、氣の弱い、これ迄一緒に連れて來て今更、私は汝を捨てやアしないぞ。」と、之も呼吸の迫つたやうな苦しげな聲音。

折ふし、第七聲の笛が、世界の滅亡を宣告すべく鳴り渡つた。

（五十八）

第七聲の笛が鳴り渡つた時、一人の天使が雲の翼に乘つて、大聲に呼はり行くかと見る間に血の雜つた雹と火と地に雨降り、地の三分の一焚け亡せ、又樹木の三分の一焚け亡せ、凡ての青草も亦焚け亡せて了つた。

更に、第二の天使が立現はれて、電の如く巨なる刀を揮つて指揮するよと思へば忽ち猛火に焚くる大なる山の如きもの、海に投げ入れられ、海の三分の一は血潮に變つて、海の中なる、鯨、鮫、鰐魚、海豚を始め凡ての活物三分の一は死し、船の三分の一は粉微塵に破壞されて了つた。

更に、第三の天使が立現はれ、虚空に向かつて白銀の箭矢を射かくるかと見る間に一の大なる星、明燈の如く燃えながら、怪光を放つて天より隕ちた。即ち水の源は塞がれ、河の三分の一は碎かれて了ふ。この星の名は「茵蔯」、水の三分の一は茵蔯の如く苦く變つて、多くの人類は爲めに滅んだ。

第四の天の使が、奇なる叫び聲を發して、それが宛ら天地を震撼かすやうであつた。見る見る、日の三分の一、月の三分の一、星の三分の一、皆撃れてその、三分の一、凡て暗くなり、晝三分の一、光無く、夜三分の一、光無し、一羽の鷲、蒼空の中央を飛び廻りて、大なる聲にて呼ぶを聞けば、「地に住むものは禍なるかな、地に住むものは禍なるかな。」

その時、庸之助の手には、唯、累々たる白骨のみが殘つてゐてその髑髏からはしきりと白い烟が立つて、それが次第と黒焦に焦けて行くのである。將に腸を斷るゝ思ひで、そこら邊を見廻したが、お澤の俤はもう幻にも浮ばなかつた。ふと氣が附くと、曉の明星の如く一つ累りに明滅する金の燈臺の影に、紫の衣曳ける人の子の、燃ゆらんやうな瞳を睜つて、自分をハタと睨み詰め、右の手に一つ消え殘る、血紅の星を頭上目蒐けて、投げ附けんず凄まじき憤怒の形相、一目にアッと許、聲も得立てず、身毛彌立たせてぶる／＼と戰慄しつつ不思地上に押伏つた。地は一面に熱鐵が熔解けた如く、眞紅に煮え返り、沸き立つて、中を泳ぐ蠑螈の群れ、忽ち安息の場所を見附けたやうに、頭手足の嫌ひなく、纏れ附き這ひ上つて膚を刺す、肉を咬む其苦しさ、切なさに、狂氣の如く、打ち拂ひ、振落し、駈け出さんとすれば、何時しか焼け爛れて紫がかつてゐた體中俄かにむづ痒さを覺えて、血の精のやうな眞紅な斑點が、ぱつと花を散らした如く、皮膚一面に浮び出た、目的の洞穴は、早壞れ込んで、脚の周圍は湯の池、火の池、見る／＼それが血の池

と變る。上よりは星の塊が飛んで亂れて雨と降り、日が碎け落ちて霰と散り、身はこれ生なから焦熱地獄の呵責。この時までも手を放さなかつたいとしいものの白骨は、血の池の中から金甲を着たやうな毒龍が頭を擡げて奪ふやうに、それを咬んで、沈んで了つた。後には唯小く太く渦が卷いてゐるのみ。

罪の子よ、惡魔の子よ、汝は神の御名を汚したり、汝はエホバの譽を傷けたり、女子の榮の冠は、其節操にあらぬ乎、然るに汝はその節操を奪ひ、處女の神聖を犯したるにあらずや。人の子の誇はその僞らぬ愛にあらぬ乎、然るに汝はその、愛を弄びて、妻なるものを欺きたるにあらずや。殺人犯を出せしも亦汝の罪なり、私生兒を生ましめしも亦汝の罪なり、親同胞を泣かしめしも亦汝の罪なり、社會を欺き世を僞りたるも亦汝の罪なり。就中自ら使徒と名乘り、神の聖靈を汚したる大罪惡、天地共に容べからず、今や世界の最終、審判の日、汝が身も魂も、地獄の火に燒かるゝなり。と嚴かな、怒れる如き、犯し難き叫び聲が、彼の口より、頭上にはためく雷とぞ、響き渡るのであつた。

庸之助の體からは、今炎々たる猛火が、黑い焔を揚げて、紅蓮、大紅蓮とぞ凄じく燃え上り、足、腰の肉は早、白蠟の流るゝ如く熔け去つて了ひ、細い白骨のみが頽れもせずに立殘つてゐる。斜めに、胸際へ十字架を描いて、叉み合せた左右の手からも黑い、臭い絲游のやうな烟がゆら〳〵と立昇つて、次第々々に燃え上るのである。苦しい、苦しい息、それも青い焔となつて、呀ッと叫ばんとすれども、舌は爛れて聲が立たなかつた。

（五十九）

生汗がびつしより、體中宛ら浴びたやう。邊は眞暗で物の文色も分かぬ、何だか斯う地の底の暗い穽へでも投げ込れたやうな心地の、庸之助は暫く正坐つて夢耶現耶を疑ぐつてゐた。薄い藁蒲團の、一種、黴臭いやうな、垢臭いやうな、忌な臭氣のするのが、むつと鼻頭に立込むやうで、氣持の惡い事と云つたらない、時雨はしとしとと降りしきり冷い冷い夜の空氣が襟元から水のやうに流れ込んで、竦と靡柱寒く、不思首を縮めわな〳〵と戰慄を禁じ得なかつた。

傍では、高く低く、獸の呻くやうな鼾の聲がしきりと聞えてゐる。それが何だか、罪の子よ、惡魔の子よ、と罵つてるやうにも聞き做れる。庸之助は再び戰慄した。

暗中瞳を凝して、呢と見廻したが、何物も眼には入らなかつた。唯もう天地眞暗闇の、月も星も虧けて落ちて、太陽もその光を失うて了つた世界滅亡の日の、慘憺たる光景を想ひやらるゝのみで、左樣思ふとそれが又、あり〳〵と幻に現れて來て、自分の體から炎々たる猛火が燃え出るやう。邊が一面、血の池になつて、人の子の、物恐しい叫び聲が宛ら頭上にはためくが如く、氣も心も次第に遠く何處かへ引き去られて、そのまゝ、冥府へ導かれて行きさうなので、是ではならぬと自分で自分を勵まし立てゝ、漸く心を取直して見たが、何だか眼の先に斯う白い物が動いてるやうな氣がしてならず、手を出して捉まうとすれば、陽炎を追ふやうに、何うしても、捉まらない。眼を瞑つても、矢つ張それが何處かで見えてゐる。

神經の所爲だと氣が附いて、やがて靜かに眼を開くと却て鮮明として、その白いのは慥か白骨のやうだ。お澤の白骨……左樣思ふと、幻影と知つてゐても、何うも幻影だとは思はれない。不思議な氣持がして、暫くそれを見詰めてゐると、次第々々に白い衣と化る、上には面が見える、色の青ざめた、如何にも窶れのした樣子で、そして霑味ある眼光の、しきりに謝するが

如く我を見るのである。

　ふと心附くと、その幻影は忽ち掻消えて、七つの星が現はれた。七つの金の燈臺が見える。庸之助は今、堅く／＼眼を瞑つて、思ふまじ考へまじとすれど、又してもお澤の顔、それも公判廷で、頻りと自分に陳謝してゐたその時の姿があり／＼と描かれるのではないか。

　自分は決してお澤から謝罪せらるべき謂は無い、否、自分こそ、彼の足下に身を投げ出して、詫びても／＼足りないのだ。彼の一生を誤らせたのも、全く自分の仕た仕業で、これが爲めには如何なる酬が來ようとも、自分は甘んじてそれを受けねばならないのである。淺果敢な女心の、あらぬ事に神經を惱して自分への申譯などと、飛んだ事を仕出かしてくれねば善いが、この頃、毎晩毎夜、あの女の事を夢に見て、何うも胸騷がしてならない。何卒、心得違ひのないやうに、神樣の御保護の御手に縋るより外はないのである。

　併し、神樣は、このやうな不義不信な者の祈に果して耳を傾け給ふであらうか、神は愛の神なれども、又義の神である。このやうな汚れ果た、腐れ切つた者に、御愛の御手を藉し給ふやうに思ふのは、あまり得手勝手ではなからうか、あまり蔑に仕過ぎた話ではあるまいか——左樣だ、自分は最早、世からも人からも、又神樣からも見捨てられた罪の塊、惡魔の子——生恥曝してゐるより、寧そ自殺して了はうかと、思ひ立つた事も屢で、今夜も又、頻りとそのやうな氣が潮してならぬのであるが、唯恐るゝ所は、自殺が又一つの罪惡であるといふ事、その罪惡を敢てして、罪に罪を重ぬるのは、愈々神樣の怒に觸るゝのみか、生てゐてさへ、この苦しい思をしてゐるに、まして死んで神樣の審判の臺前に立つた時、何のやうな心地がするであらうか。又地獄の火に投げ込まれて、何のやうな呵責を受けねばなるまいか。その戰慄すべき恐ろしさが、實に自殺を思ひ止まらす鎖である。

　その上又一つの心殘りは、妻の惠美耶が少しも自分を怨む氣振はなく、未決監に居た時には、日々心盡しの差入物、今も度々、慰めの手紙を呉れて、一早く御無事に御出監を、朝夕神樣に祈つてゐます。」と飽く迄優しい、親切しい心掛けの、あの罪の無い、潔い人の祈には、定めて、神樣も耳を傾け給ふであらうに、それを何も仇にして一層の嘆を掛けては、愈罪のやうでもあり、父母の事、姉の事、そしてお卷の上もそれからそれへと思ひやらるゝのである。

(六十)

　、、、、、、ぼたりぼたりと地を穿つ軒の雨垂の音、それが何だか怨鬼の囁くやうにも思做されて薄ら淋しく、肌膚に迫る夜寒のいとゞ堪へ難くなつた。行儀善く揃へた膝節しきりに慄かれて、祈るが如く額に加へた兩手も風に戰ぐ蘆の葉のやう。庸之助は總身冷え渡つて、暫し氷の如くであつた。

　このまゝ凍え死んで了ふのであらうか、それよ、自分は寧ろそれを望むのである。自殺といふ罪惡を重ねないで、この命を奪ひ去る事が出來るならば、自分は何よりも嬉しくそれを感ずるのである。今の自分の身の上では又しても又しても、死より外に、この傷める心の安息の場所はないかとも思はれるのだが、唯一念、その死の門の後に、神樣の審判の御座が聳え、地獄の火が炎々と燃えつゝあるかといふ事に思ひ至つては、それが更に幾層の、恐怖の情を喚起して、このまゝ死んではならぬと、今更のやうに滅入り込んだ氣を引立てんと力めるのであつた。

　凝つた血が溶けて流れてそれが再び脈管を通じ始めたのであらう、身内少しは溫つて、稍人心地が附いた。眼の前では、暗中、花火の

閃めく如く連りと幻影が消えては現れ、現れては消えてゐる。中にも、お澤が、法廷で自分へ向つて詫びてゐた當時の有様が、何うも一番あり〳〵と目に附いて、何だか胸元へ針でも刺さるゝやう、思へば思ふほど、堪らずなつて、腸を掻き挘り度くもなる、あの女に何の罪があるか、あの温和しい、素直な、人の顔を見ても面羞んで逃げ出しさうであつた清淨無垢の處女を一朝墮落させて、今日のやうな境遇に陷入れたのは抑も誰の罪であるかと、又しても、自ら責め來つては滿面から火の出る思ひ、頸へは錘でも縛り附けられたやうに、自づと首俛れて了ふのであつた。

時折「神よ、我が罪を赦し給へ　アーメン。」とばかり得堪へぬやうに愁訴の聲を洩らすのであるが調子は至つて低く、微かな、やがて、胸を打つて、「ア、…。」と絕望の嘆息を發して、「駄目だ〳〵。」と呟いて、額の手を膝頭に落し、戰慄ながら暗中、邊を見廻すと、隅の方に、又例の白いものが立つてるやうだ。

眼靄を拭いて見返しても、何うも白い物がふらふら動いてるやうな氣がしてならぬ、若しや、お澤の幽靈ではなからうかと、斯う思ふと、それがいたく心がかりで、何だか胸が壓迫けられるやうだ、成程幽靈といふやうなものは、迷信であらう、人々は迷信と云つてゐる。自分も又左様思つてゐたが、併し、人の靈魂はこの世限りでなく、死の門を潛つて更に義人は永久の生命を得べく天國へ昇り、不義者は永劫の罰を受くべく冥府に降るものだと信じて疑はざる以上は、その不滅不死の靈魂が、再びこの世へ顯はれて來ないとは又斷言し難いではあるまいか。蓋し人が死すれば肉體の滅ぶのは、素より爭はれない事實であるが、その肉體の滅ぶといふのが、畢竟唯形體を變へるに過ぎないので、物質の不滅則は科學上の原理である。物質已に不滅である以上は、況して、そのエネルギーたる靈魂が痕跡もなく滅びて了ふといふやうな事は、何うしても信用し得られぬではないか。科學上の議論はさて措いて、人世はこの世限り、不義者も榮え、義人も虐げらるゝ儘のものであるとしたら、神様の正義しき審判は果して何處で行はれるのであるか、人間の意義といふものは、果して那邊に存するのであらうか。さらば、自分は恐れながら神様の存在を疑はねばならぬ。

然り、今の自分の身の上では神様の存在し給はぬ事を望むのである。寧ろ無神論の眞理である事を欲するのである。乍併、この心中の恐怖、良心の呵責、神様の御聲は慥かに聞えてゐるのだ。畏れ多い事を思ふも罪だと、今更に胸の悸くのを覺えた。

神様に祈る事さへならず、人に訴ふる由もなく、悅樂と平和との、全く缺けた胸の中に、何處ともなく、微かに通ふ慰藉の聲――それは、惠美耶が朝夕、我が爲めに祈つてゐると書き送つた彼の手紙の一句ではあるまいか。庸之助は又しても、それを考へ出して、遙かに一點、希望の光明を認め得しやうに、謂不知、感謝の涙を浮べて、我がためにも、祈るものがある、我がためにも祈るものがある。それに自分は入監以來一度の手紙も遣らないのだ。否、書きかけては、引き破り〳〵したのであるが、これほど、自分に同情してくれるものに、あまり踏み付けた仕打と怨まれてはと、思ひ至つては矢も楯も堪らない。夜の明けるのが非常に待遠しくなつた。白い影は、前に後に動いて次第々々に烟の如く消えて了ふ。

（六十一）

「お卷や、もうそんなに泣くもんぢやアないよ、私も折角快くなつたのが、汝がそんなに氣遣してるのを見ると心配で〳〵、又舊のやうに、病氣になつて了ふからね。よ、よ、好い子だか

られ……」

お節は昨今、床上をしたばかりで、體がまだ十分舊のやうには調つてゐない。瘦せて窶れて一層深く皺の寄つた顏を愁ひに顰めて、孫が疊に擴げた新聞紙の上に突伏つて、果しもなく泣歔欷りしてゐるのを見遣りながら、氣遣はしげに、宥めてゐるので。

「お卷、大概にしてお廢止よ、あんまり悲しんで汝、病氣になつちやアいけないぢやアないかい。」と果ては、小い肩へ兩手をかけて引起さうとする。

「だつても……母さんが死んぢやつたんだもの……私もう、母さんに逢はりやアしないんだもの……」淚聲で云つて、又一しきり悲さの迫つたやうに、よゝとばかり聲を立てゝ泣く。

お節も寄と眼を拭いて、

「そりやアね……そりやア、悲しいのは尤もだけども……もう、そんなに何時までも泣いてたつて死んだものが生返ちやア來ないんだからね、諦らめなくちやア、汝……」

淚の下から鼻汁を啜上げながら、「牢の中で……首を……首を吊つたりなんかしたんだもの……私の事なんか……母さんは少とも思つちやアゐないんだ……」言葉も途切れ〳〵の、後は嗚咽の音に埋れて了ふ。

「左樣云ふ譯ぢやア決してないんだよ……阿母さんが、汝の事を思はないなんて、そんな譯があるもんかい。汝の事が氣に懸つてりやアこそ、自分の指を嚙み切つて、その血で以で牢屋の壁へ遺書なんかしたんだらうぢやアないか。自分が惡いから許してくれい、あの子の事を賴むつてね、左樣書いてあるんだらう、その新聞に……」

「……」

「汝の事を思はない段ぢやアないんさ。」

「それほど……それほど、私の事を思つてゝくれるもんなら、何んにも……何んにも、そんなに首なんか吊つて死ななくつても……」

「そりやアまア左樣だけれど……そんな事を云つて怨んでた日にやア死んだ阿母さんが可哀さうぢやアないかい。」

「だつても……又お父さんも、母さんが……母さんが死んだなんて聞くと、自分で又、死んで了ふかも知れないんだもの……」小い鬢毛を戰かせつゝ少し額を上げて今、兩手で眼を擦つてゐるので。

お節も玆に思ひ至つては、暫し言句が塞がつて、不覺顏色を失つて了つた。成程、陽之助が若しもこの事を耳にしたら、牢の中で又自殺するかも知れない、實に氣遣しさの限りである。——左樣思ふと、起つても坐ても居られない。又もや、心臟の鼓動が怪しく高まつて來るやうな氣持、片手で乳際を押へて、暫らく思案に沈んでゐたが、やがて少しは、自ら慰める處があるやうに、

「だけれど、お父さんからは今朝手紙が來たんぢやアないか……。健康でゐるから安心してくれいつてね……」

「だつてお父さんも、未だなか〳〵歸つて來るんぢやアないんだもの。」と心細さうに、獨語くので、

「……」

「手紙だつて、今朝來たんが初度てだわ……お父さんも、私の事なんか思つちやアゐないんだ……」

二人ともやがて押默まつて、唯かすかに咽び泣の音を忍ぶのみである。

折ふし、段階子を昇る足音のして上つて來たのは修造、他出しての歸りと見えて、折目正しい羽織着である。

「代書人の處へ行つて聞いて見ると、死體は、引取人があれば下渡すといふ事だから、引取つ

ては何うだらうかの。」
「左様さねえ……」と、お節は、涙を押へながら此方を見上げた。
丁度懶げに、段梯子踏む足音が聞えて、やがて上り口から顔を出したのは惠美耶、重たさうに、漸く體を運んで、究屈さを堪へて、下手に正坐まる。腹部の膨脹の目立つやうで、血色は至つて勝れてゐない。
「あの……お澤さん……此方で葬るよろしいではありませんか。」と半ば涙含んだ、如何にも悲しさうな調子である。
修造は、直と後を受繼いで、
「惠美耶も彼アいつてるんだよ……葬式の費用なんか何うでもするから、引取つて貰ひたいつてね……」
お節の目はギロリと光つて、「汝、もう腹痛は好いんかい。今朝から痛むつて寢てゐたんだが、もう快くなつたのかい……まア、そりやア好いね、私や又、餓鬼なんか産みやアしないかと思つて、心配でならなかつたんさ……」

（六十二）

「お節、汝、何時もそんな邪慳な事ばかり云つてるのだが、少しは後先も考へなくちやア……汝の病中も惠美耶が何んなに心配して親切に介抱してくれたか、汝、それを知らないのかい。」と修造は窘める如き口調で、呪とお節を見た。
「親切に介抱つて……何んにも此方から頼んだ譯ぢやアありませんし……介抱する位、當り前です。」
「そんな事を云つてちやア、汝、あまり酷からうぢやアないか。庸之助はあの通だし、お柳も昔とは違つて十分に金廻りも利かず、家内の食代から、汝の藥代まで一切皆惠美耶の手一つで、遣繰を附けてるやうな譯なんぢやアないか……一節、汝の重體であつた時は、彼女は夜の目も寢ず、三晩といふもの、枕元に附切つて、眞に座も居去らさずと、介抱してたんだよ、現在、實子のお柳が、あれほどの辛抱が、善く出來る事だつて、恥ぢ入つて、感心してた位なんだもの……それを汝は、何うして何日までも邪慳なんだらう。」と稍窘んだ調子。
惠美耶は端知らず悲しくなつて、唯、俯向いて、何にも云ひ得なかつた。
「オヤ、まア、汝さんはそんなに惠美耶がお氣に召しましたのかね。では澤山と可愛がつてお遣が好いわ。今に玉蜀黍の毛を粘附けたやうな、茶眼の孫が飛出して來ようてえもんだから、お樂みさねえ……私やア、お澤さんが可哀さうでならぬ。庸之助の事を思ひ詰めて……あの子が、監獄に入れられたのを自分の所爲だ、如何にも濟まん／＼といふ一心から、首を吊つて死ぬなんて……指を喰切つて、遺書したなんて……思やア思ふほど、私やア腸がちぎれるやうで……」お節は齒を喰縛つてゐる。
暫し泣き止んでゐたお巻が又わツとばかり聲を上げて袂を顔に押當てゝ突伏さつて了ふ。
「お節、汝があんな事を云ふもんだからこの子が又氣遣つて泣くんぢやアないか……お巻や……もう泣いちやアいけぬ。阿母さんに逢はしてやるからね……阿母さんを此方へ引取る事にするんだからね……」と傍へ摺り寄つて、背中を撫でゝ、宥めてゐる。
「だつて．死んぢやつたんだもの……逢はしてやるたつて、死んぢやつたんだもの……」少し頭を上げて、瞼を摩り／＼泣歔欷してゐるので。
「もう、泣いたつて……泣いたつて、死んぢやつたものが、生きて來るんぢやアないからね……汝が、あんまり愁嘆し過してると、阿母さんが又迷つて、行く處へ行かれないからね。」
「お巻……もう泣くんぢやアないよ……お祖母さんも、もう……泣きやアしないからね。」と襦

袂の袖口抽き出して、瞼に押當てながら、コホンコホンと咳拂した。

「お卷さん……もう泣くありませんよ。」と、惠美耶は微に聞取れぬばかりの低聲で云つて、忙しく眼を瞬いた。右の手はくの字形、脇腹へ押當てゝ吐く息もホッと苦しさう。

「汝はもう、階下へ行つて寢てるが好いよ、我慢して體に障つちやアいけないからね。」と修造は惠美耶の氣色を覗うて、心配さうに眉を顰めてゐるので、

「ハイ……難有う……」も、口の中。

「眞實にね……大切な孫が産れるんだから、隨分と體をお厭ひが善いよ。」といぢ惡く云つて、そのまゝ俯向いて思案に餘つたやうに、ホッと太息を吐く。

「汝そんなに……そんなに面當がましく云はなくつても濟む事ぢやアないかい。まア、その中、孫の顏を見たら、汝もまさか殺し度くは思ふまいよ。惠美耶もあまり心配仕過ぎないが好いよ。今にも産れさうな腹を抱へてゐて、いろんな事を氣にかけてから、血の道を上げたりなんかしてくれちやア席之助も死んで了ふだらうし、私だつて、もうこの世に生てる氣はしないんだからなら……」飽くまで恩愛の情の罩つた言葉、惠美耶は我不知、頭垂れて、はら〳〵と冷たきものゝ頰邊に流るゝかと覺ゆる間に、露がぽたり膝頭に落ちて、衣服の地に浸染み込むを認め、周章てゝ手巾で額を蔽つた。

「へン孫なんて……毛唐の孫は持ちませんよ、私の孫はこればかり。」と、お節はお卷の細い首筋へ、その瘦腕を纏つた。

（六十三）

惠美耶は寢臺の床の上に仰向けに打倒れ、兩手を額に當てゝ、微かに呻吟の聲を洩らしてゐたが、やがて腹の痛みも少しは薄らいで來て、心に物思ふ餘裕が出來ると、何うもいろ〳〵な事が考へ出されてならぬ──自分は出來る丈け、物事親切を盡して御氣に召すやう〳〵と、眞に寢た間も心を碎いてゐるのに、阿母さまは一向打解けて下さらぬ。左程この身がお憎いのであらうか、それとも自分に未だ足らぬ處があるのか知ら、孫さへ滿足に産み落したら、屹度彼も心が融解るからと、左樣云つてお父さまは自分を慰めて、氣を引立てるやうにして下さるのだけれど、その孫が何うも、阿母さまの御氣には入らぬ樣子、猫の眼とやら何とやら、産れぬ前から大層忌がつてお居なさるんだもの、この子が滿足に産れた日には、自分は愈々辛い目を見て、死ぬるほどの苦しい、切ない思をせねばならぬのであらう。寧そ……寧そ……母子共々に天國へ旅立つて了ひたい。その方がどれ程氣安いか知れぬので。

けれども故國に在す父上、母上、さては同胞の者の歎きの程を思ひやると、なか〳〵容易に死なるゝ處ではない。それさへあるにこの頃は自分を實の娘のやうに可愛がつて、依賴に思つて、蔭となり、日向となり、庇つてゐて下さる今の父上に、悲しい目を見せてならうか、お卷の行末も心に懸るし又搗てゝ加へて、獄屋の中に、慰めもなく憂き月日を送つてゐらるゝ我が夫の上を思へば、早く赤兒の顏を見せて、喜んで貰ひ度さが胸一ぱい。自分の生命は二つあつても足りる事ではないに、死んではならぬ〳〵と、我と我身を勵まし立てゝ見てもさて何だか初産の心細く、そのまゝ息を引取つて了ふのではあるまいかと、つい氣が滅入つてならぬ。

こんな事を思つてゐては、譃が眞にならうも知れず、心丈夫にと、氣を取直して、掛蒲團の中へ片手を遣れば、カサリと鳴もの、引き出したを見れば夫が監獄から送つて寄越した、長々と詫びの文句懺悔の文句で滿された手紙なのである。惠美耶はそれを何んだか、我夫に逢うた

やうにでも思ひ做して、懐かしく、肌身を離し難ない風情。又しても披けて見て、繰返すのであつた。

昨夜の夢に、世界滅亡の日の大審判を見たといふ事、自分は何うしても天火に焼かるべき罪人だといふ事、兩親の事、姉の事、一家の事、さてはお卷の身の上をよろしく賴むと、繰り返し繰り返し丁寧に書き附けて、やがて、自分が滿期出獄の日には、御身の足下に平伏して靴の紐を解かんといふ。その一句に讀み至つては、惠美耶は又しても／＼わりなく涙に咽んで、手紙を接吻するやうに、顏の上に押當てゝ了ふのである、

いよ／＼終まる手紙の、更に其末段に至つてお澤が悔改めて天國に入るやう、何卒御身の熱き祈を願ふ、といふ文句、これが又、惠美耶の腸を斷つやうに、悲しく憐れつぽく感ぜしめるのである。指を噛み切つて、血汐で遺書して、自分の罪を詫ながら縊れ死んだ人の上は云はでもの事、夢更かくとも知らないで、猶その人の靈の救を祈つてゐる夫の心事は又思ひやるさへ涙の種である、この世は何うしてかくまでも悲しく出來てゐるのであらう、神樣は何故に、人の子を泣かすやうに天地をお造りなさつたのであらうと、ふと思ひ至つては、何だか空恐ろしくも感じた。

突如に、室の戸が明いた、振返つて見ると、修造が、愁はしげな顏色で、

「氣分は何うだい　何事も心配しないが好いよ……あの、お澤の亡骸は、今引取つて來たのさ。汝のお蔭で、この家から葬式を出して貰つて、彼女も定めて滿足であらうよ。」

（六十四）

死の前には恩も仇もなく、罪も咎も消えて了ふのである。白木の棺桶の中に眠れるが如きお澤の死相、頰は殺け、眼は窪み、永の牢舍住居の窶々しく、骨と皮ばかりになつてはゐるが、しかも、その額際の何處やらに斷ら、心安けな、從容とした樣子がほの見えてゐる。紫がかつた唇、これが今にも動き出して何か語りもしさうである。昔は定めて、花の顏艶やかに、兩の頰邊には若い血汐が騷いだでもあらう。兩の瞼は星と輝いたでもあらう。嫉刃を把つた男一疋刺殺した其手頸に、今はしをらしくも念珠を懸けて、西方淨土を欣求するかの如く。生恥曝してゐた柿色の衣は娑婆世界に脱捨てゝ、一點の斑點も汚もなき白衣と着せ替へられ、そのまゝ蓮の臺の人ともなりさう。色と呼び戀と叫び、罪と罵り、惡と譏る、觀じ來れば夢の中の夢、幻の中の幻ではあるまいか。人間一度死といふ問題に思ひ至れば、茫然として迷はさるもの果して幾人であるか。

「お澤、何卒、後に心殘さぬやう、成佛しておくれ　お澤……成佛しておくれよ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」と、お節は涙ながら、水晶の念珠を爪繰つて、口の中で念佛を繰返してゐるので。

「母さん……酷……酷いわ……し……酷いわ……私の事なんか……何うでも……何うでも善いつてね。」歔欷け／＼咽び泣するお容を、お柳は背後から勞はり慰めて、

「もう、汝、そんなに泣くもんぢやアないのよ。阿母さんの死顏に涙なんか掛けると、靈魂が浮ばれないつて云ふんだからね。さう、善い子だから泣くのはお廢止よ、ね……

「だつて……母さん……私を一人法師にしちやつて……」

「一人法師つて云ふ事はないわさ。お父さんもその內、歸つてお來なさるんだし、私等も居るんだからね、そんな駄々を捏ねるもんぢやアないのよ……阿母さんもね、お父さんの居室へ漸う引取られてお來たんだから、まア不幸の中

の往といふものさ。左樣思つて諦らめなくつちやアね。」と濕めつた調子。

「……」

「よう、お爸さん、もう泣くんぢやアないよ。……オヤ、涙が落ちて、線香の火が消えて了つたぢやアないかね。」と、お柳は白襟紋付の、縮緬の二重襲亂次もなく、紅絹の下着の、裾をひらりと捌いて、今經机の前に正坐まり、燈明の蠟燭の火で新に線香を燻して立てた。香烟縷々と絲の如く立昇つて、樒の香の、それも何となう、胸に迫るやうである。

どさ〳〵と、足音がした。軈て入つて來たのは恵美耶であつたので。

一旦に、お前樣止ば好いのに……尋常の間とは違つて、こんな時にやア義理も絲瓜も入用つたもんぢやアないから……。」と、宥めるやうなのは、修造の聲。

「いけませんのねえ……、もう今にもお產れなさらうといふ際で。」と小叱繰つてるのは、今し方參つて來た產婆なのである。

恵美耶は強ひて返事もしないで、無理にと我を張つて、蒼ざめた顏色の、いかにも術なささうな吐息。兩方から扶けられて、漸く此の座へ入つて來たので、

「まア……恵美耶さん……そんな體で出て來なくつても、靜と寢んでお居でて好い事にねえ。」と、お柳は、振返つて見て、いとも氣の毒さう。

「香……一寸……お告別して……お祈し度うあります……」動もすれば、倒れさうな體を右左から支へられて、お柳には、背後から抱き上げらるゝやうにして、棺桶の中を覗き込んだ。

三寸息絶えて、今は早、苦も惱もなく眠つてゐるやうな死顏を見て、誰知らず、恵美耶ははらはらと涙を流した。

「汝が……汝が見に來たからつて、お澤は少とも喜びやアしないよ。」と、お節は涙目立つて、憎さげにいふ。

「阿母さん……そんな事を仰やるんぢやアありません、あんまりですよ。」

「エ……お柳まで、この異人贔屓になつたんかい……。ア、お澤が一番可哀さうだ喃。」とお巻の頭を撫でると、下からはいよゝ、歔欷げて、果はわツとばかり泣き入つてしまふ。

「オヤツ……。」と產婆は驚愕の聲を發した。今まで、默禱する如く、手を額に當てゝゐた恵美耶がこの時、全く死人のやうな顏色をして、横腹を緊しく押へて、物も得云はず、後ざまに倒れかゝつたので。

（六十五）

柔かに寢臺の上に舁き込んで、水を吹きかけ、名を呼び立てゝの介抱の後、恵美耶は漸くに息吹返した。

「何うでございます、御氣分を確かにお持ちなさらなくちやアいけませんよ。」と、產婆が、顏を差覗いて耳邊へ口を寄せたので、

「お腹が何うも……」と、絲のやうな、か細い聲音でいつた限り、額際に小皺を刻んで、微かに、「ウン……ウーン……」と呻き出した。眼を瞑つて、堅く口を結んで、切なげに折々それを怺めるのである。

枕元にはお柳が左も氣遣はしげに、悄然と椅子へ倚掛つて控へてゐたが、未だ嘗て產といふものをした覺えのない身は、何んだか、恐ろしいやうな、氣懸りなやうな、手持無沙汰で、呻吟の聲が高まるにつけ只管、產婦の顏色を見守つては、怯々してゐるのみで。

呻吟の聲は、漸く刻一刻と太くなつて、長く引いて、傍の見る目も苦しさうで堪らぬのである。

お柳は愈、不安の面地して、尻も椅子に落付かぬ風情、產婆の方へ向いて細聲になり、

「何うです、大丈夫でございませうか。」

產婆は唯頷いて、產婦の兩腕を確と握つて抱

を上げるやうな氣味合で、力を附けながら、
「あゝ、奥さん……最少し枕を高う。」と、手つて低い調子。
「ハイ……」とばかり、お柳は立寄つて、蒲團を巻いて高枕を拵へ、靜にそれを宛がうてやる。
ウーン……ウーン……と産婆は、力味始めた。
ウーン……ウーン……と産婦の、病めるやうな聲は微かに、如何にも切なさうで、お柳は聞苦しくてならぬ。嗚呼から、無術ない事であらうと思ふと、つく／＼最惜うて堪らない。自分が斯かる目に逢つて居るのなら何うであらうと、さま／＼に思ひ廻らしても見たが、ふとこの苦しさは、一時の事である、この一時の苦しい目を見得ない爲めに、自分は始終、心の中で苦しい思ひをして、夫には疎まれる、奉公人には馬鹿にされる、何ぼう口惜しうてならぬか知れぬと、密かに自分の上を憐れむのであつた。
呻吟の聲は愈切に、愈迫つて、惠美耶は今必死と産婆の肩に縋み付くやうに、身を悶え苦んでゐる。ウーン、ウーンと産婆は、一生懸命に勵を附ける。お柳はいとゞ慄ふる如く、暫時を見遣つてゐたが、やがては得堪へずなつて、さし俯向いて、所作なさゝうに、襁褓を揃へ、嬰ん兒に着せるべき、桃色の小い衣服の、皺を伸しなどしてゐた。産湯は、傍の小盥に滿々と、蒸氣をしきりに上げてゐるので。
産婦の額に、今ぽつ／＼油の珠の如き生汗が浮いて、産婆は兩手にしとゞ湯のやうな熱い汗を握つた。潮時であらう、呻吟の聲ハタと止むかと思ふ刹那、「オギャー」と一聲、帛を突裂くやうな初聲！
産婆は手早く、産婦の腹帶を引締めて、臍襪切てこら取形附け、泣きしきる初兒を抱き上げた、お柳は狂ずるが如く、傍へ馳寄つて、「シッ……」と制せられた。
産毛の少し縮れた、はつちりと黒眼勝の、宛らむき玉子へ紅をさしたやうな、ふくやかな、愛くるしい男の子が、湯盥の中にさゞ波を立てゝ、小い拳を花びらのやうな唇へ押當てて、無心に泣いてゐるのを見て、お柳は直ぐにも抱き上げて喰ひ付いてやりたいやう。
産婦は寐ながらその方を一目見遣つて、神に感謝の祈を捧げるのか、片手を眼の上に加へてゐる。
何時しか、斯くと報知せて行つたお柳の、背後から修造急ぎ足の、氣もそゞろに、
「どれ／＼、見せてくれい。」と差し寄つて、盥の中を覗いて見て莞爾。
「産れた／＼、孫が生れた、婆さん……婆さん……産れた／＼。」ほく／＼雀躍しつゝ、産婆が、初兒を取上げて大巾の西洋手拭で拭つて、件の桃色の衣服を着せ掛、襁褓を纏ふ間が待遠しく、密と、抱き取るやうに抱き上げた。
「お父さん、私に……」とお柳がせがむ。
「まア、汝は小兒らしい事を云ふな。」と云ひ捨てゝ、室の戸明くれば、周章てゝ避けるやうにする、お節の鼻先へ。
「さア、見ろ、これでも憎いか……これでも汝の孫ではないか。」
さすがにお節は、嘲むやうな眼附で、密とそれを見やつた。人形のやうな愛くるしい赤兒が、可愛い口元を微動めかして唯無心に泣いてゐる。これが孫かと思ふと、お節は俄かに心が動いて、わりなく抱き附きもしたいやう、暫し恍乎となつた。
「あゝ可愛いねえ、一寸私に抱かせてよ……ね、祖父さん。」と、後に立つてゐたお巻が、涙を拭きながらせがみ出した。

六十六

丁度櫻の散る時分、會堂の構内の、庭の木々も生々と、梢に緑の芽を吹いて、風も薫を送つて來る。この頃は惠美耶一家、睦しく樂しく、

折々は調子高い、笑ひ聲も聞えてゐる。一つには、甯之助が出獄の日も漸く近づいて來たのでもあるし、又一つは孫の惠太郎が日に増大くなつて、智慧づいて、愛らしくなつて來たからでもあらう、お節も漸く打解けて、昨今は惠美耶惠美耶と無くてならぬもののやうに懐かしんでゐる。お巻も又、坊ちやん坊ちやんと云つて、慕ひ出したので

惠美耶が時折串戯口に、「汝は何故惠美耶[illegible]嫌になつたのかい。」と問かけると、お節は「眞面目、でも孫を育んでくれたんですもの。」と、何時もきまつた紋切形であつた。

今日は日曜の午後、惠美耶は、[illegible]の方へ勤務で行つたので、擔當に眠つてゐた惠太郎を抱上げて、今門口を出掛けやうとした。

「惠美耶や、汝、何處へ行くのかい。」と、丁度、木小屋から出て來た母のお節は、何時もの癖を[illegible]。如何にも愛に[illegible]つた調子。

「ハイ……散歩つて……でも、母さん、おいでありましたの、默つて失禮ね、あの、昨日の處へ行かうと思ひまして。」

「甯之助の處へかい……そんなら宜しいけれども私やア、今日はまだ一度もその子を抱かないから何だか、[illegible]くて[illegible]と思つてね。」

「左樣でありますか……では、お抱きなさつて。」と莞爾笑つて二足三足戻りかける。

「否……否……それぢやアよろしいよ、まア早く行つて、早く歸つて來ておくれ……甯も、見度がつてゐやうから、噺。」と、水口の、柱に凭れかゝる。

「左樣でありますか、……では、私歸りましてからお抱きなされませ。」

「アー、左樣しよう〳〵、早く行つてお來。」

惠太郎は眼を醒してむづかり出す

「おゝやア、御免下さいまし。」と、子を賺しながら心殘りの體で顧りみがちに出て行く。

「可愛い奴だ……あの嫁も、眞に優しい」と、呟きながら、お節は下駄を脱いで奥の方へ入つて行く。

惠美耶は、愛らしい赤兒を緊と懐に掻き抱いて、その赤みがかつた、色の底白い顏をつくづく見守つて、紅の蕾のやうな小い唇へ暖い接吻をしながら、道々考へ出すのは、自分は假且にも、これまで母を怨めしいやうに思ひはしなかつたか、母なる人を邪慳だと考へはしなかつたかといふ事である。若し、夢にでもそんな事があつたとすれば、實に恥かしい、穴へも入りたいと、背は早、汗に浸染むのであつた。

以前の辛かつた事、悲しかつた事それが、今は皆一場の夢と消え失せて了つて、嘸もう樂しい嬉しい、希望に輝いた世界となつたかのやう。これも神樣の惠みである、と思ふと、只管に感謝の涙を浮べる外はないので

唯、そればかりではない。人は神樣の子であつて愛の爲めに遣されたのだといふ事も、今更思ひ當るではあるまいか。父なる人も、自分は當初愛のない人のやうに心得てゐた。姉も又、そのやうな方かと思つた。勿體なけれど、阿母さまが、あのやうな優しい、實のあるお人であらうとは、夢にも思はなかつた。自分の思慮の足らぬのを、恥ぢてさは素よりであるが、また世間に鬼はないものだ、と思ふと、非常にこの世界が尊く、美しいやうだ。

惠美耶は、甯之助が此の頃、他の囚徒の中に立交つて、片山の邊で土運をしてゐるその處へ今、愛兒を見せに行かうとしてゐるのである。生垣の、衛門の、屋敷町を、思案に沈みながら辿つて行く〳〵、丁度傍の、とある屋敷の晩櫻が折からの風にこぼれてはら〳〵と、落花雪の如く飛んで舞うて髪に、肩に、衣裳に、さては小い女靴の痕へふりかゝる。その白い花びらの一つが、赤兒の、唇邊へ落ち散つた。惠美耶は直とその上へ

に丘を驅け下り、いそ〳〵、小足早く、その囚徒の方へ近寄つて行く。

「馬鹿者め……」と又一打、囚徒は默つて面を上げた。その眼と、惠美耶の眼とヒタと合ふ。惠美耶は、中を隔てた雨の水滴をひらりと飛んだ。白衣の女が、赤兒を抱いた姿。ちらと水の底に落ちて、雲がゆら〳〵、その上を掠めて去つた。

（六十八）

「お結構でございますよ、鳩宮さんも今日は無事にお歸宅なさるのですし、坊ちやんは愈愛らしうお成遊ばすんだし、第一、惠美耶さんの信仰がお堅くつて、お心掛の好い方で入つしやりますから、御家内が誠に、お睦じいといふ事を、田島の奥さんからも承はりました。眞に何よりお結構でございますよ。」と、中岡蘇平の妻のお貞、今日は庸之助の出獄を出迎ひ旁々久しぶりの、御無音勤に來たのであつた。お絹布ぐるみの、琥珀の帶なんか締め込んで、誠に立派な奥様姿。唯顏附は何んとなう淋びしさうで、眼中に、沈んだ色が見えてゐる。

「何うしまして、結構どころの話ぢやアありません。家内はまア、睦じいかも知れませんがこんなに暖くなつても、未だ襤褸袷を引張つてるやうな爲體で、お恥しい事でございますわ、」と、お節は強ひて笑顏を作る、

「御家内の睦じいのが、何よりの一番結構でございますよ……私なども、今更悔んでゐるよくので。」

「貴方方が、そんな……悔むなんて、何を仰やるのです……串談云つちやいけませんよ。」

「否、眞に、串談ぢやアありません、幾何貧乏したからつて、昔の方が何んなに好かつたか知れませんのですよ。夫の事を彼是云ふぢやアありませんが、この節はもう無茶苦茶にお金を費ひましてね、始終家を明通しなんですもの、矢張神様の罰が當つたのでございませう……私の身にね。」と云つて、悄げて、早眼を濡ませてゐる。

「そんなに……あの、中岡さんが、そんなにお成りなのですか、何うも殿方といふものはねえ……併し、その中、屹度お目が醒めますよ、御心配なすちやアいけません。」

「眼が醒めますか何うだか……」云つて、後は半ば、喉へ押詰まつたやう、苦しさうに咳拂をする。

折節、段階子の人氣勢、さや〳〵と衣ずれの音がして、

「中岡の奥さん……」と快活げな、その底には少し濡味を持つた聲で呼びかけたのはお柳。

「まアこの子を見てやつて下さい……私が設けましたのですよ、お、、、。」と淋しげに笑ひながら、惠太郎を抱いて、上つて來たので。

「オヤまア、好いお子さんです事ねえ、可愛らしい……」と、指頭で一寸頬邊を突いて、そのぱつちりした柔和な眼で、じろ〳〵、見廻すのを、只管笑顏で迎へてゐる。

「眞實にお柳も、こんなのを設けりやア好い事ですのにねえ。」と、お節は今更愚癡つぽく云ふ。

「だつて、これ丈けは、設らへようつたつて出來るもんぢやありませんわねえ。」

「何んの……この子を私の子にしつちまへば、文句はないぢやありませんか。惠や、汝、私の子になつておくれよ……ね、ね、私の子になるんだわねえ。」云つて、一ツ、頬邊に接吻して、さも憎い程可愛いやうに、頬摺りしつゝ、何時までも離れ難ない風情。惠太郎がむづかいゝ出したので、周章てゝ、オヽ〳〵……」と賺してゐる。

「その子を汝に持つて行かれちやア大變だよ。私の可愛い孫だものホヽヽ。」とお節は笑顏。

「だつて、こんな孫は孫ぢやアないんだつて、未だ産れもせぬ前から、阿母さんは何時も口癖のやうに云つておいでなすつたんぢやありま

せんかね、私が貰ひますのよ。そして立派に育てますのよ。」お節は唯苦笑。お柳前も唾を呑み込みながら、「子でも育てゝ、それを樂みにしてゐなくつちやア、とてもこの世に生きてる甲斐はありませんわねえ。奥さん、私等はやもめ同様なんですものねえ。」

「眞にねえ、何か一つ樂みがなくつちやア、とても遣り切れませんわねえ。それでもまア、貴方なんかは斯うして、御父母方揃つておいでなさるんですから、此家様へお越になりやア、其處に又お樂みがあらうといふもんですが、私なんかと來ちやア鬼の死んだのと一緒で、から、行く處はなし、眞に詰まりませんわ。」

「だつて、貴方のお家なんかは、未だ好い部ですよ。私の處には、妾なんかを引張込んであつて、家へ歸つたつて、何方が眞の奥様だか分らないんですもの、屎面白くもないから、つい一寸々々親の家へ出掛けて來たくなりますわ。」

「男といふものは、何うして彼ア氣強いのでせうねえ。」とホロリ。

「だからもう、私は一生懸命にこの子を可愛がります。」と、又接吻した。

お節は唯、斯う胸の上へ、手を十文字に抑當てゝゐた。

段梯子の上り口から、お卷が小い面を出して、「あの、植木先生が入しつたから、お祖母さんも伯母さんも一寸降りて來て下さいつて、今母さんが左様云つてよ。」

「エ……。」と、お寅は、顏色を變へて、恥らふやうに、身の周圍を見返つた。

六十九

市ケ谷監獄の嚴めしき門口を丁度今、潜つて出たのは、五分刈の、頭髮の毛の延びた、眼窩の陷込んだ、色の青白い、見るから牢窶のしてひよい、ひよろしたやうな男で、古ぼけた洋服を着、革の鯱子張つた古靴の、足も痛々しげに、呢と伏目の、折々は竦むやうに左右を見廻しながら、薄氷でも踏んでる如く、徐々と、十歩ばかり歩んで來た時、向うの差入物屋の戸口から飛んで出て、つかつかと馳寄つて、急遽に、其の手を握つたものがある。男は驚いて、ばつちり眸を睜つて、

「オヽ……。」と云つたきり、茫然と唖の如く佇んで了ふ。

「良君……御無事で……。」顫へ聲の、手先もわなわな慄きつゝ、ホロリと一雫こぼるゝ涙を拭ひもあへず、嬉しさと悲しさと、一時に込み上げたやうな顏色の、之もこの句を繼ぎ得ないのは恵美那であつた。懐には、愛らしいのを抱いてゐるので。

「何うも……何とも申譯が……。」庸之助は、如何にも、面目なささうに、仰ぎ見る事を得ないのである。

「良君嘸辛かつたありませうね……まア御無事で、何より結構あります。この子……この子を御覽下さい。」と涙含んだ聲で乳房にうとうと眠りかゝつてゐるのを、抱起すやうにして見せつける。

「オヽ……。」と庸之助も濡んだ調子。片手で、赤兒の、二重に括れた頸を上げて左も懐しげに見入つてゐる。兒は未だ眠むさうに、小い手でい、い、しきりと瞼邊を擦つて今に泣出しもしさう。

「泣くありませんよ、お父さんあります……お父さんありますよ。」と搖り起さうとしてゐる。

「まア起さなくつても善いよ。」

「鳩宮君……」と、不意に呼び懸けられて、吃驚して振向くと、白の、ナポレオン帽の縁を押へて會釋してゐる、セルの背廣服扮装の老人の姿、一目見るより、周章てたやうに、頭を下げながら、

「植……植木監督ですか……誠に……。」

「無事に御出獄なさつて、何より嬉しいです。」と慇懃に握手の禮を施されて、唯恐れ入つて、い、ふる〳〵する。

「庸さん、御無事で。」

「鳩宮さん……御無事で。」

つゞけさまに、後、前から挨拶されて、庸之助は愈〻狼狽へる。姉のお柳は、眼に手巾を當てる。中岡の大人は、如何にも氣の毒さうに、伏目である。會釋しつゝ、振向くと、何にも云はず、取縋つてゐたのはお卷であつた。父の手に、輕く頭を撫でられてしく〳〵と泣出した。

「見ともないよ……往來で泣いてさア……」

とお柳は、自分の眼邊を拭きながら、お卷を窘めたり、賺したり。

「車夫さん。」と植木監督が呼んだ。

聲に應じて、差入物屋の前に五六輛、梶棒を並べて、蹴込へ毛布腰卷の臀を据ゑて休んでゐたのが、皆一齊に立上る。

「鳩宮君、俥に乘り給へ。」

「それには及びません。」と恐縮の體。

「その爲めに廻つて來てあるんだからね、庸さん、お乘よ」と姉に言葉を添へられて、お卷にせがまれて、恵美耶に促されて、やがて漸く、前から二番目の俥に乘つた。お卷は懷かしげに早速前膝へ乘れなかつたので。

前なる車夫と、後なる車夫と、相呼び、相應じて、今五輛の俥は轔々たる車輪の音威勢よく風を截つて、砂塵を揚げつゝ、其處の街角を鍵の手に折れて曲つて、監獄の高い築土手に沿うて西に走つた。庸之助はそゞろ振返つて、昨日までの、否一瞬時前の苦痛を思ひ出しては、竦とするのである。

やがて幾曲り、幾うねり、だら〳〵とした坂道を下つて、再び燒餅坂を上らうとした時、タンバリンの音、太鼓の音、合奏の調子の騷々しく妙な節で、高やかに唄つて來る聲が聞えたので、庸之助は何事かと思つて、そゞろに注意してゐると、坂の上から次第に降りて來る一行、皆一樣に、赤い筋の入つた帽子を冠つて、赤い襯衣を着込んで、揃ひの黑の羽織は、彼の救世軍であつた。此處にも、主の福音の戰士が勇しく進軍しつゝあるかと思ふと、我不知、腋の下に冷汗が出て、何となう尊敬の念慮も起る。その中、ヒタと行逢ふやうに相迫まつた。見れば、その先頭に立つて、タンバリンを鳴らしてゐる二人の少年、何うも誰やらに似てゐるやうな。それよ、約翰のチビ六馬太の上州のやうだ。僻目かと思つて、再び見返さうとした時は早、向には氣附かなかつたのであらうか、行過ぎて了つた。「アラ、チビ六に上州だわ」とお卷は振返つて、父の顏を見る、後の方で、「まア……」と云つたのは、恵美耶の聲。

（十十）

時計は今正に一時を打つた。目白の鐘の音は陰に微かに響いて來る、何うしても寢就かれないのである。自分が又、寢就ないでゐると、恵美耶が闇雲に心配して、眼を塞がないのだから、今まで眠つた風を粧つてゐたのであるが、心底何うしても眠られない、父の悦んだ顏、母の嬉し泣に泣いた顏、さては姉の笑んだ俤、中岡大人が氣の毒さうに、見舞を言つてくれた、その時の樣子などが、あり〳〵と眼の先にちらついてゐて、植木監督が、最も嚴肅なる態度で自分の爲めに、罪の赦免を神に願ひ、今後は眞に生れ變つた人間となつて、福音の宣傳に一生を委ねるやう、熱誠を罩めて祈つてくれた、その姿、その言葉、……はつきりと、自分の心に印象されてゐるから、何んとなう恐ろしいやうな、又恥かしいやうな氣持がしてならぬ。

傍の寢臺には、恵美耶が子を抱いてすや〳〵と、絲のやうな纖細い鼾の聲を立てゝ安らかに眠つてゐる。自分の直ぐ側には、お卷が微かな寢息を快に通はせつゝ、さも安心したやうな面色で、夢路に入つてゐる。これも最惜しい、彼も

可愛くてならぬ。が併し、惠美耶に對しては、いとし、可愛い、と思ふと、勿體なく、何だか罪のやうな心地がする。今宵は久しぶりに、夫婦が一室の中へ寢床を列べるのだもの、山々積る話もしたく、睦言も交して見たさは胸一ぱい。惠美耶からも、それを話し掛けて、腹藏無く赤心を打明して來るのであるに、面と向つては、自分は何うも氣が咎めて、思ふ事口へも出されず、唯々、自分の罪を許せ〳〵とばかり。果ては、妻の心を良作はまだお疑ひなすつてかとまで怨ませて、彼女を泣かすやうな始末に終つたのではないか。嘸ぞ無情漢と思つてもゐよう、あまり隔がましいと考へるでもあらう、けれど、自分は決して無情でもない、又隔てるのでもない。唯此の汚れた軀が、亭主顏してゐるのも、神樣から叱られるやうな氣がして、言葉を掛けるのさへ、何だか空恐ろしいやうに感じられてならないので、

　左なきだに、始めて聞き知つたお澤が横死の一條、舌を咬み切つて、首を吊つて、無慘の最期を遂げたといふ、その事を思ひ遣ると、自分は又一つ、大罪を重ねたのではないか、實に可哀さうでならぬ、不憫で堪らぬ。左ほどこの身の事を思つてゐてくれたものを唯一人で先立たせて、自分は阿容々々と、この世に生延びてゐられた義理か。地獄も苛責も、死後の證も、斯うなつては、もう〳〵構つてはゐられない。第一惠美耶へ對し、又植木監督へ對しても、自分は元々生面向けられた筈ではないに、教會の人々へも今將た何んと挨拶の言葉が出よう。思へば獄中で何故自殺を遂げなかつたのであらう、今更後悔の臍を噛むばかりであるが、兎にも角にもこの現世から唯もう逃れて了ひたい。後は何となれ構つてはゐられないのだ。

　斯く思ひ詰めては、何うしても生存へて居られぬ義理と、心に頷き、少し身を起して、左右を振返れば、お卷の寢顏、惠美耶母子の寢像、今宵は安心して何にも知らずすや〳〵と眠つたのではないか。眼が醒めて見ると父の姿はなく又、夫の影が見えなくなつたら、何んなに悲むであらう。憫むであらう。父母にも今まで大概に苦勞心配をかけた上で、猶飽足らず、愁嘆の淵へ突き沈めようとする　自分は鬼か、惡魔か、ア、寧そこの世へ生れて來なかつたら幸であつた。

　我不知、お卷の額邊へ接吻すると、妙に、少し額を歪めた。振返つて、こたびは惠太郎の、稚なかさうな頬邊へ口を寄せようとしたが、餘念なく眠つてゐる惠美耶の手頸に觸りさうなので、暫らく躊躇してゐる。其中にも、心は鈍つて、氣は滅入つて、さすがに又頽然と崩るゝやうに枕に就いたが、併し、何う考へても、思ひ直して見ても生きてゐられた義理ではない。それよ、自分が獄屋の中で、一度ならず二度ならず自殺を思ひ留つたのも、一つは罪の上に罪を重ねんよりは、寧ろその罪滅しに國の爲め道の爲め、浮世の戰場で男らしく戰死するに若かずと覺悟を極めての上からでもあるに、さて、獄屋を出て、一歩、娑婆の土を踏んで見ると、自分の周圍には悉く、自分の罪惡を照らす淨玻璃の鏡が掛けられてあるやうで、良心の呵責は暫しも止む暇はない。殊に汝は、お澤を慘殺した大罪人であるといふやうな、嘲ける如く、罵る如く、責る如き叫び聲か、何處からか、又しても、耳根に鳴り響くやうで、寢てゐても、何だか、寢床の中から投げ出されさう。枕も飛んで了ひさうで、思へば、天涯地角、ほと〳〵身を容るゝ處もない。夢か、幻か、オヽ、お澤が、自分を手招きしてゐるではないか。

　庸之助は揮波と跳ね起きて寢床の上へ正坐つて、眼を瞑つて、左右の手で胸を十文字に抱き、祈るが如く自づと頭を垂れた。廿日過の月影が青白く、窓欞の隙から玻璃窓を通して、ほツと、

様の御座に達するやうにも思はれないで、ホノと絶望の吐息を洩らして、力なげに、舷から見下した。蒼黒い波が忌に物凄く光つて、うねらねと何だか毒蛇の群の千萬疋、舟を圍んで絡み付き纏ひ付き、今にも這ひ上らうとするやうで、一思ひに飛び込まうとしても、何うも脚が立たなかつた。

ばた〳〵と頭上を蹴るやうに掠めて行くものがあつた。驚いて振仰ぐと、白い、一團の雲のやうな天使の姿。その中に、惠美耶の像がありありと現はれて次第に小さく、遠く、彼の紫の星を目蒐けて飛び去つた。月が冴えて、今、滿天清く澄み切つてゐる。

（七十二）

上野の森の下蔭ほの暗く黄昏れて、月はまだ昇らぬ逢魔が時、どんよりとした灰色の空にはあるかなきかの星が、一つ四つ二つ瞬いて、塒鳥の鳴き聲も止んだ。軌道に沿うて、一人の男が、物思ひに沈んだやうに頭俯垂れつゝ、とぼとぼと、喪家の犬の如く歩んでゐる。それは彼の庸之助であつた。

庸之助は、昨宵、海の上で死損つて、茫然と氣抜けしたやうに、一日そこらを漫歩いてゐたが、今又、死所を此處に求めるべく来つたので。

彼の眼の先には、絶えず斯うさま〴〵の顏が懸かつてゐて、何だか暗くなつて了ふやうだが、併し分別は附かない、悲しいとか、氣遣はしいとか、胸が押潰されさうだとかいふ境は早、通り越して、唯もう、無茶苦茶に死度い。少しは精神に異状を呈してゐるのであらう、否、寧ろ、知覺を失つたのかも知れない。

――オイ、危ねえよ、今に汽車が行つて来るんだから――と、突如に喚かれて、ぼかんとして振返つて見る。丁度、踏切番の老爺が、灰色に汚れた旗を捲いて、肩に先に掛けてゐたので。

構はず、沈默つて又てく〳〵歩み出した。

――コラッ、危ねえつていふに、鈍馬め、最つと傍へ寄つて行つた。と睨み付けるやうに怒鳴る

庸之助は相不變默込んで、返事もせず、少し左手へ避けて行く、一命不知奴ッ……間抜め……と、後ではしきりに罵つてゐる。

振向きもしないで、丁度其處の曲際を曲つた時、轟々と地響かして、汽笛一聲、闇を裂くやうに上野の森に鳴り響いた。

つと、軌道の中央に歩み出る　眞向へ、眞紅な兩眼を瞠いた大怪物が轟々と凄まじい響を立てながら、小さき犠牲に向つて、直線に迫つて来る。大蜈蚣か、毒龍か、地獄から我を迎ひの魔の使なか。この時、天地は暗、闇の幕で讃取られてゐた。

骨も除さず砕けて飛んで、罪の肉塊は今此世から煙のやうに消え失せて行くのであるかと思へば、何したら心安い、又何處に謝して凄いやうた。庸之助は確と、胸を抱き緊めて、軌道の中央に石像の如く突立つて、閃めくやうな眼光の凝然と、近づき来る汽車を睨み詰めつゝ、冷かに笑んだ。

一秒時……二秒時……眞紅な兩眼は次第に、怒に燃ゆるが如く、鮮かになつて出た。……十間……、轟然たる鐵輪の響は耳を聾し、總身に應へてそのまゝ捲込まるゝやう。すはやと思ふ刹那、非常汽笛が血を吐くやうな音を立てゝ、空氣を振はせた、天から聲あつて、自分を大叱咤したるものゝ如く思ひ、蹌踉と庸之助、不覺軌道の外へ倒れた、其瞬間、風を切る地響音、誰か罵る聲、轟々たる車輪の唸りは、耳を押潰すかのやうに、幾多の窓口から漏るゝ電燈の影を、夢の如くに左右の地上に印しつゝ、颯と疾風よりも早く、汽車は過ぎ去つて了つた。

星の薄明で透して見れば、斑々たる鮮血であつた。黒い、泥々した泉のやうなものが一ぱい邊へ、溢れ、肉や骨が微塵に砕けて飛んでゐるらし

い血生臭い臭がして、胃腑が悪いやうだ。庸之助は今、もう自分は肉體を離れ、靈魂となつて、自分の罪の死骸を見下してゐるのだと思つて、如何にも浅猿しい死様であつたと、今更悔むのである。

汽笛が丁度上野の森に鳴り響いた。

七十三

漸く我に返つて、自分は未だ死んでゐないのだと氣が附いた時に、庸之助は討不知胸の安きを覺えて、ホツと肩から出るやうな吐息を吐いたが、さてもこの無慘の死を遂げた人は誰であらう、何んな罪を犯したのであらう、男か女か、覺悟の自殺か、それとも誤つて轢死したのか知らなどと、いろんな事を考へてゐると、角燈の火影が、此方へ向いて走つて來る、二つ三つ、暗中を流るゝ星のやうだ。

庸之助は急に何だか恐ろしくなつて、周章て、構の外へ駈け出して了つた。

薄暗い、細長い町を見も定めず通り抜けて、やがて、不連に出掛ると、其處は十字街頭で、丁度、鐵道馬車が二臺、左右から人力車が混雑合つて、騒いでゐた。向角の牛肉店の電氣燈、此方の軒の瓦斯燈の光で、街は白晝のやうに明るい。

自分は顏を見られまいとして、俯向いて、小急いで車と車との間を駈抜けようとした途端、

「ヤア、庸さんか、何うしたんだね。」

と思掛なく車上から聲を懸けられて、吃驚しながら、恐る〳〵見上れば、その人は田島保衞であつた。

「ハア……」とばかり、行詰つて言句が出ない。

顧れば、身は、寢卷着のまゝであるのだ。

「家妻も大そう君の事を心配してたつけ……。何處へ行つたんだね。」と、マニラを燻らしながら保衞は鷹揚に云つた。

「ハイ……その……」

「鳩宮君か……ヤア失敬。」と高調子な聲。見れば後の車上のは中岡であつた。麥酒ホールで一墨を傾けたのであらう、顏の色艶が異つて、ニヤリ〳〵笑んでゐる。

「まア兎に角、早く歸り給へ〳〵。」と、保衞は早口に云つて、マニラの先の、灰になつた處を摘み落した。漸く馬車が動出して、俥は隙かさず、後前懸聲をしながら、二輛とも早、駈け出して了ふ。

呆然と、後影を見送つて、庸之助は暫し木偶のやうに佇立んでゐたが、「べらんめえ。」と俥屋に權突を喰はされて、始めて氣が附いて、そのまゝ居所の[illegible]悄々と、横丁の薄暗い町へ折れて行つた。

今の二人は、恐らく俥を北廓へ飛ばして、浮世の歡樂を買ひに行くのであらう。思へばこれも人間の一生、隨分、氣樂に遣つて見ないも損だ。自分はあまり眞面目に、あまり堅苦しう考へ過して、こんな境界に陷つたんだもの、寧そ下らぬ、四角張つた信仰だとか義理だとかいふものは、綺麗さつぱり廢止して了つて、これからは面白可笑しく命長う生き延びて見ようか。

併し、今の我身は、そんな氣樂な、浮世の事を思ふ餘裕はない筈、唯如何にして死ぬべきか、生命を絶つ手段を考へてゐるのではないか、馬鹿馬鹿しい、夢の世界に、夢の歡樂、何を苦んでか、そんなものを求めようぞ。人生は兒戯だ。浮世は暫し現れて忽ち消えてゆく霧のやうなものではないか。

だが、その死ぬるに就けては、天晴男子らしう死んで見たくもある。山の靈を汚すと罵るか。罵る者は罵れ、富士、萬四千尺の絶巓に攀ぢ上つて、吹き下す天風に衣を拂ひ、朝暾に彩られて金色漂ふ雲の中へ、飄然と飛び下りたら何んなに愉快だらうか。海の靈を犯すと嘲けるか、嘲ける者は嘲けれよ。太平洋上の月冴えて萬里水と天と相連るの夜、檣柱の頭で高く讃

美歌を誦して、そのまゝ身を眞逆さまに、雪山繞るゝが如き大浪の底に消え込んだら、何んなに愉快だらうか。然らざれば淺間山巓の紅蓮大紅蓮と燃え上る噴火口に身を投じて、生ながら天の火葬を受けよう。然らされば那智の大瀑布の上流へ跳り入つて、百丈の懸崖に暫し人間の生血を流さう。

折ふし、ふと遠音に響く音樂の音、庸之助は忘想の夢から半ば醒めて、聞くともなしに立留まつて耳を欹てゝゐると、微かに妙なるオルガンの響、つゞいて、優しい、美しい讃美歌の聲、體がジンとして何だか骨の髓に浸み入るやうだ。

（七十四）

庸之助は、唯もう引附けらるゝやうで我不知その歌の聲する方へ近附いて行つた。微妙なオルガンの響に合して、清い、美しい、神々しい歌へ聲が、深く、深く、胸の底へ沁み渡つて、神より受けたまゝの八面玲瓏曇無く、汚無き靈魂を微すかに呼び醒して來るかのやう。何となら懐かしい、慕はしい、又慰められるやうな、醉はされるやうな心地がして、つい早足になつて、其處の街角を曲つて行くと、直ぐ傍に、護謨の樹が、白壁に映らうてゐる教會堂の、玻璃窓からあかあかと燈火の影が外へ漏れて、神の榮光が輝けるが如きを見るより、足は大地に吸附けられたやうに、そのまゝ其處へ立竦んで了つた。

讃美歌は今、當にその一節を了つて、司會者の祈禱が始まつた樣子。莊重な、嚴肅な語氣が途切れ〳〵に洩れ聞えて來ると、庸之助は何んだか、首筋へ氷の刃でも擬せられたやうに、竦として、そゞろ身の寒きを覺えた。

つい、中へ入つて見たいやうな氣もするし、又何んだか進まぬやうでもあるし、思案しながら、浮々と、一段、二段、やがては五六の石階を登り盡して、我不知、會堂の玄關口へ立つた時、「何卒お上り……」と、親切に案内するものがあつた。

ハッと思つて、眼を遣れば、信者の一人であらう、「何卒、お上り……」と極めて優しく、又丁寧に云つてくれるのであつた。

今は早、辭むにも辭まれずなつて、案内さるるまゝ堂内へ上り、一番最後の長椅子の片隅へ小くなつて腰を卸した。善男善女、會衆は堂内に充溢れてゐる。庸之助は何んだか顏を見らるるやうで、頭を深く襟元に埋め、悄と俯向き込んでゐた。

嘗ては聖壇に立つて、人々を導くべく諄々乎として說教を試みたものが、今は斯く座の片隅に縮込んで、他の說教を聽くといふ。移れば變る世の習とは云ひながら、あまりの事に、自ら耻然する思ひであつた。

頭の禿けた老牧師は今音吐朗々、路加傳第十六章、第三節を讀み始めた。

若し兄弟、爾に罪を犯さば之を誡めよ。彼若し悔なば免せ。若し一日に七次罪を爾に犯して、一日に七次、爾に對し、吾悔ゆと曰ば免すべし。

又、馬太傳第十八章第廿一節、

厥時ペテロイエスに來りて曰けるは、主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯すを赦すべき乎。七次まで乎。イエス彼に曰けるは、爾に七次とは曰じ、七次を七十倍せよ。

誦し了つて、咳一咳、さて、人の罪を赦すといふ事に就いて、諄々と說き出したのである。

老牧師は最も熱心に、人間の弱くして、罪惡の淵より免れ出づる事の難いといふ事、天下に到底、一人の義人も無いといふ事、信者は未信者に對して毫も輕蔑するやうな擧動があつてはならぬ事、人の犯した罪は、その人が眞に中心から悔改めて來さへすれば、百度でも千度でも赦してやらねばならぬ事等を、丁寧に、親切に、

又熱心に說き來り說き去るのであつた。
　庸之助は、ひし〳〵とそれが胸に迫つて、七度を七十倍せよとの基督の、愛の深い、情に富んだ難有いお言葉を繰返し〳〵、口の中で默讀した。何だか、その短い語句の間に千萬無量の意味が籠つてゐるやうで、それが殊更に、自分へ向つての御訓戒のやうにも思做され、やがては、譯知らず、感謝の涙も浮ぶ。
　「サタナは亡びよ、民よ、喜べ――」の悲壯な讃美歌の一節で、この會が散じて庸之助も人波に揉まれながら會堂の入口の石段を降りて行つたが、この時、胸の底には、希望の微光が閃めいてゐた。足は我が家の方に向つて急ぐがやう。

七十五

　門の戸に手を懸けた時は、流石に指頭が顫へた。中庭へ入つて見ると、自分の居室としてある間の玻璃戸に赤々と燈火が射して、白い窓紗に人の影法師が映つてゐる。何うしたのか知らと、つい、忍び足で窺ひ寄る。月が冴えて、丁度後手の會堂の、廣棟の上に斜であつた。
　話聲がするので、耳を傾て、聞いてゐると、何だかそれは祈の聲のやうである。惠美耶であらうと思つてゐる中、それが了つて、續いて祈るは慥に父である。庸之助の身の上の恙なきやう何卒、早く歸宅してくれますやう。アーメン。」と顫へた聲、何だかそれが身節に沁み入る心地。併し父は何時改めて信者になつたのであらうか、と不思議にも思はれる。涙も浸む
　その次に祈るは、慥かに母の聲音、母も亦、信者になつたのか知ら、信仰の心が起つたのか知らと、愈不思議な氣持。聽けば微かに、何卒あの子が……神樣、何卒、あの子が……と後は涙に埋れて了つた。
　「神さま……何卒お父さんをお助け下さいませ。」と、あどけない涙含んだ鼻聲で祈りかけて何だか聞入つて了つたやうなのに、お終であらう。庸之助は唯もう、胸先へ火でも附けられたやう。今、滿身の血は一時に炎々と燃え立つ思ひで、我にもあらず、玄關口から飛鳥の如く驅け上つて、遮二無二室の戸を引開けた。
　門口の戸の開いた音も、何も彼も、前後一切夢中になつて知らずにゐた一座、驚いて見上げると、庸之助が、蒼青になつて、其處に突立つてゐるので、暫しは夢かとばかり呆れ惑うた。
　鈴木監督も、一座の中に交つてゐたので。
　ま……と悲喜交々至つた聲が一齊に發せられた時に、早、庸之助の膝は、父と、母と、姉と、妻と、娘とに、四方八方から縋み附かれ、抱き附かれて、床の上に押据ゑらる、ばかりであつた。
　「濟みません……濟みません……」と、涙ながらに謝する聲は、一同の啜り泣の音に沒せられて了つた。
　「實に心配したです、今朝から祈禱會を開いて君の無事を神樣に祈つてゐたのです。君、悔改めの前に、躓けないぢやアありませんか、君にも似合ない事だ。」と、鈴木監督は、雪の如き白髯を捻りながら威嚴ある、而も慈悲深い面地でゐつた。
　「實に……實に濟みませんでした……併しもう御安心下さいませ。」と、屹張とした口調。庸之助の面は今、日の如く、希望の光で輝いてゐた。
　「それならば、難有い……殊に君、喜び給へ、君の一家は今日皆救はれて、主の御名に入られたよ。」
　「エ、左樣でしたか……實に、神樣に感謝する外はありません。」と、清い涙をはら〳〵と垂れた、その時、庸之助は、懷には恵太郎、片手ではお雪を抱いて妻の惠美耶の、温い背に、その片頰を任せてゐたので。

年譜

明治十年

五月十五日、石見國津和野町大字後田に生る、幼名は常治と稱す、父は唯治、母はたみ、家は小商賈を業とす。祖父吉藏、祖母たきは、實子なく、養嗣子夫妻が始めて子を擧げたるを喜び、愛翫措かず。

明治十五年

津和野、殿町、小學校に入る。

明治二十三年

津和野町立高等尋常小學校を卒業、山口町の山口學校に入る。小學在學中、坂下門の志士にして碩儒たる椋木潛翁を師とし、漢籍を學ぶ。又、この間、祖父の努力に依り、家屋は新築せられ、旅宿業營まる。

明治二十四年

山口高等學校入學試驗準備のため、山口學校より轉じて鴻城義塾に入る。入學試驗は準備不足のため失敗し、九月、祖父は傳染病に罹りて歿し、十月、更に父を病に喪ふ、これより境遇逆轉す。常治を亡祖父の名吉藏に改む、されど自ら家業に當るを厭ふ、母獨り奮闘して市上に行商し、一家を支ふ。

明治二十五年

靜岡市の公證人千坂氏の役場に筆生として赴く。餘暇に法學院講義録その他の法律書を讀み、この方面に立身の志を起す。

明治二十七年

胃病より遂に脚氣症に罹り、靜岡を辭して歸國の途に上る。

明治二十八年

家に閑居して書溜めたる浪六張、又は涙香張等の幾部の原稿を携へて、大阪に上る。友人、右の原稿の一を書肆駸々堂に持込んで刊行を求め、拒絶せらる。旅費盡きんとす、大阪爲替貯金管理所の書記補試驗を受けて登第、月俸七圓。又川口メソヂスト教會に通ひ、米國宣教師ウォーターに受洗。

この秋、妹かつ、郷里に病歿。

同じ役所に在勤せる高須梅溪、及び、商店奉公の小林、その他の人々と博文館發行、少年文集への投書關係より相知り、遂に關西青年文學會を起し、雜誌、よしあしぐさ刊行。

明治三十二年

上京、先きに再三文通したる廣津柳浪氏を訪ひ、子息和郞君等の家庭教師を兼ね、玄關に住込む、同時に早稲田專門學校英文學哲學科に通學。坪内逍遙博士を始め、高山樗牛、島村抱月氏等の講義を聞く。

新聲誌上に評論執筆。

明治三十四年

大阪毎日新聞懸賞小說に應募して創作せし小說「無花果」第一位に當選、選者は坪内逍遙、尾崎紅葉、幸田露伴の三氏、賞金三百圓を受く。「無花果」は金尾文淵堂刊行。又伊井、河合一派により、中洲、眞砂座に上演せられて好評を博す。

明治三十六年

改稱、早稲田大學卒業。

後藤宙外氏主宰の春陽堂發行「新小說」に聘せられて小說寄稿の約を結び、數篇を發表。

お茶の水の女子高等師範學校音樂講師安井孝子と結婚。

明治三十八年

祖母を郷里に喪ふ、哀傷深し。

本郷教會の海老名彈正氏主宰「新人」に執筆、同人には内ケ崎作三郎、吉野作造諸氏あり。

明治三十九年

六月、アメリカに渡航、桑港の日米新聞社に暫時逗留。新學期より、東部に赴き、プリンストン大學院英文學科に入る。

ステオルナー、ニイチエ等を耽讀して、近代的懷疑に陥り、反基督教精神に燃え來る。ニユーヨークに出でてナヂモワ夫人の「人形の家」の實演を見、イプセン劇に傾倒し始む。

明治四十年

プリンストン大學院の修業を了へ、ニユーヨーク市に移り、コロンビヤ大學にブランダー・マシウス教授の演劇史講義を聞く。

當時、學資の送金絶え、雜誌「大西洋」社に入りて編輯に當る。

明治四十一年

ニユーヨークを去つて英國に向ひ、ロンドン市に入る。バーナード・ショウ氏と會見。

約一ケ月の後、獨逸ベルリン市に赴く、日本クラブの東郷熊氏の斡旋により、滯留して專ら演劇研究に從事す。

明治四十二年

秋、ミユンヘンより瑞西に入り、アルプス觀光の後パリに遊び、キョルンを經てベルリンに歸る。十二月、ベルリンを出發、シベリヤ鐵道によりて歸朝。十七日敦賀に着す。

明治四十三年

「東京朝日新聞」に、社會劇『牧師の家』を發表、連載。雅號、春雨を廢して、實名を用ゆ。

この戯曲は新社會劇團により東京座に初演、新聞方面の反響は盛んなりしも、觀客は數十人に達せざる日多し。一座は次いで大阪、京都の大劇場を巡演す。

早稲田大學講師としてイプセン劇の講座を受持つ。又「東京朝日新聞」の劇評擔任。

明治四十四年

坪内博士の文藝協會は、イプセン劇「人形の家」の上演を企て、島村抱月氏の依囑を受けて、共に演出の任に當る。松井須磨子のノラ、世評高し。

「最近歐米劇壇」を博文館より刊行。

大正二年

文藝協會動搖、島村抱月氏が松井須磨子を擁して藝術座を組織するや、これに參加して協力せん事を求められ、舞臺監督として立つ事に決す。この一座に澤田正二郎等あり。

「サロメ」を飜譯。藝術座は帝劇女優劇に加入して、これを上演。

大正三年

藝術座の事業に努力する傍ら、戯曲創作の筆を取り、「中央公論」に社會劇『剃刀』を發表。藝術座はこれを帝劇の秋季公演に初演、反響あり。爾後、レパートリーに加へらる。

新著「イプセン評傳」實業之日本社より刊行。

大正四年

「太陽」に社會劇『飯』を發表、藝術座のレパートリーに加へらる。

創作集『新社會劇』を南北社より刊行。

大正五年

長篇社會劇「眞人間」を發表、大阪、及び東京の藝術座公演に上場す。

社會劇「爆發」を「中央公論」に發表、藝術座の帝劇秋季公演に上場す。

「眞人間」を新潮社より刊行。

大正六年

四月、急性腸炎に罹り一時重態に陥る。漸く回復の兆あり、茅ケ崎に轉地療養、秋冷の季節に入つて東京に歸る。

藝術座との直接關係を離れ、又早稲田大學講師を辭し、專ら創作生活に入らんとし、年末より戯曲「淀屋辰五郎」に着手、翌春、

脱稿して『早稻田文學』誌上に發表。又イプセン劇『ブランド』を飜譯、刊行す。

大正七年

創作戯曲『白隱和尚』、松本幸四郎等に依り、帝劇女優劇に上演。

又、『帽子ピン』、藝術座秋季公演に上場さる。

十一月、島村抱月氏流行感冒にかゝり、俄かに逝去す。藝術座の善後策の爲め再起す。

出版書肆大佾社の顧問として盡力す。

大正八年

一月、藝術座の有樂座公演中、松井須磨子の縊死事件突發、藝術座解散。

大正九年

史劇『井伊大老の死』を『早稻田文學』誌上に發表、松竹合名會社は市川左團次一座によつてこれを上演せんとす、井伊大老反對派の妨害運動起る、世論沸騰喧噪を極む、七月つひに歌舞伎座に初演。

又岩野泡鳴、菊池寛等と協力して劇作家協會を成立せしむ。

『淀屋辰五郎』、勘彌の文藝座、帝劇に初演。

イプセン會の組織成る。

大正十年

史劇『大鹽平八郎』を『新小說』に發表、刊行。

大正十一年

戯曲『錢屋五兵衛父子』を、『改造』に發表、ついで同社より刊行。

弟安治郎を東京大學病院に喪ふ。

創作戯曲『地震』、尾上菊五郎に依つて、市村座に初演、好評あり。

大正十二年

小川未明、秋田雨雀氏等と共に『二三人の會』に於て、プロレタリヤ文學運動者のグループより祝辭を受く。

大地震後、創作より轉じて、時學究生活に入らんとする志動く、しかも、劇壇復興の以外に速かなるに促されて、つひに創作の筆を抛つに及ばず。

大正十三年

『現代戯曲全集』二十卷の編輯に當る。

戯曲『原始時代』『牛と闘ふ男』等發表、後者は澤田正二郎の新國劇に初演、世評あり。

大正十四年

戯曲『無籍者』、澤田正二郎一座の新國劇に依り邦樂座に初演さる。又文藝座の守田勘彌に依て史劇『錢屋五兵衛父子』は帝劇に、新國劇の澤田正二郎一座に依て史劇『大鹽平八郎』は新橋演舞場に初演。

大正十五年

再び早稻田大學講師となり、近代劇、ギリシャ劇史を講ず。

イプセン會より雜誌、『演劇研究』刊行。

『剃刀』は英譯されて『スリー、モダン、ヂャパニース、プレー』に收められて、アメリカ、ステウワード、キッド社より刊行さる。

澤田正二郎の新國劇に依て『井伊大老の死』帝國劇場に再演。築地小劇場は小山内薰氏の演出により、『大鹽平八郎』を上場。

社會劇『道化役者』を『改造』に發表、新國劇に依て帝劇に初演、アルスより刊行。

英譯『井伊大老の死』、ジャパン、タイムス社より刊行。

昭和二年

『獅子に喰はれた女』、帝劇女優劇に初演。

戯曲『星亨』を『改造』に發表。

新國劇創立十周年記念として『星亨』、新橋演舞場に初演、反響高く、更に帝劇に再演。

昭和三年

喜劇『鬼ヶ島から來た男』を『改造』に發表。新國劇はこれを帝劇に初演、又寶塚國民座にも上演さる。

『吉藏戯曲集』春陽堂より刊行。

小松嶋

村井弦斎

小松嶋

洪水

一

三日三晩降り通した大雨に、酒匂川は以ての外に水増して、夕暮には堤の上に溢れんとしてゐる。

川岸の今井村から大勢の農民が土手に出て、土俵を積み柵を築いて、一生懸命に水を防いでゐる。此の堤が破れたら、今井村は一面の洪水となるのだ、水は刻一刻に高くなる、消防方ばかりでは人の手が足りない、夜に入つてから、村中の男といふ男は、若い者も老人も、皆んな駆り出されて土手の防ぎに出て來た。

雨は漸く歇んで、雲間より星の光りが一つ二つ見えるやうになつたけれども、川の水は時時刻刻に勢ひを増して來る、足柄箱根の山奥から押出す水は、雨が歇んでから此の川下へ湊合つて來るのが毎年の例だ、殊に近年稀れな三日の大雨、今夜一晩此の水が引かなければ、古くなつてゐる堤が危いと、消防組合の頭は血眼になつて土手の上を奔走してゐる。

大きな篝火は三四ヶ處に燃やされて、土手の上は晝のやうに明るくなつた、五六張の高張提灯も、高い松や柳の枝に括りつけられて、村から炊出しを運ぶ者の目標になつてゐる。

平生は河原廣く、流れの淺瀬を徒歩で渡れる程の酒匂川も、今は對岸の飯泉まで、一面の海のやうになつてゐる、その中流の瀬の速さ、赭く濁つた水が處處に大きな渦を巻いて、渦の中には木の枝や橋杭の破片なぞを揉みに揉んで、土手の方へ打突つて來る、上流の家も流れたと見えて、人家の屋根も浮いて來る、根抜ぎになつた大木も浮くかと思ふと忽ち沈み、沈んだと思ふ間に枝の先を水面に現はして、波のまにまに海の方へ流れて行く、後の壊れた材木が轉轉と水に旋されて幾本と無く流れ寄る、馬の死骸も浮いてゐる、半分弱つた蛇が流れる草屋根に取ついて、忽ち水で拂ひ落される。

土手の上では、窪い處に土俵が三段程積まれてゐるけれども、彼方の隙間や、此方の土の崩れ目から水がちよろちよろと土手の内へ流れ出す。

「ソレ其處を制めろ」

「ソレ此方へ杭を打て」

と互に呼び勵まして、土俵を擔ぐもの、杭を打つもの、鍬で掘るもの、繩で巻くもの、狭い土手に押し合ひへし合つて、宛ら戰場のやうな大騒ぎ、村からは大勢の女達が、握飯の包みを竹籠に背負つて、土瓶片手に、土手の上へ運んで來る、人人の騒ぐに連れて村の小犬が三四匹、土手を駈け降り駈け登つて空に向つて吠えてゐる。

「ソラ水が引いたぞ」

「三寸ばかり減つたぞ」

「柳の根が頭を出した」

「モー大丈夫だ、安心だ」

と、眼前の危難から遁れたやうに、大勢の若者が土手の上で叫んだ、之を聞いて土手下まで炊出しを運んで來た女達まで、ホツと息を吐いて、嬉しさうに顔を見合せた。

年の頃六十ばかり、四角張つた赭ら顔に、白い髭のムシャムシャと生えた消防組合の頭は、默つて凝乎と水面を見てゐたが、忽ち銅鑼のやうな聲で叫んだ。

「ヤイヤイ、水が減つたんぢやアねいぞ、油斷するな、油斷するな、穴部邊りの土手が切れて、水が向うへ押し込んだんだ、後に復た殖えて來るぞ、今の内に土俵を積んで、危ない處を堅めて置け」

自ら東西に奔走して、人人に指圖するけれども、最前よりの疲勞と、水が引いて氣が弛んだので、何人も以前のやうに働かない、その中に水は再び増して來た、一時間程過ぎた頃、水は再び以前の高さに戻つた、水の色が以前と變つて、灰のやうな白味を帶びて來た、その水の底力の強さ、水勢も以前より激しくて、人人の立つてゐる土手が、ブルブルと震動し始めた。

「惡いぞ、惡いぞ、今度の水は性が惡いぞ、山で堰かれた水が、急に押出したぞ」

組合の頭は血眼になつて騷ぎ出した、土俵の土は、一且水の引いた爲め、處處に隙間が出來てゐて、思はぬ場所から、水がさつと迸り出す。

「ソレ其處へ出た」

「此處へも出た」

人人の叫ぶ聲は大きいけれども、身體が疲れて、手足が思ふやうに働かない。

寢ずの篝火はいつの間にか燃え盡きて、土手の上は暗くなつた、提灯の光りも一つ二つ殘つてゐるばかりだ、暗くなると堤から洩れる水が見えないで、人人は手探りに水の出道を搜してゐる。

先程より唯一人、身の疲れもうち忘れて、命限り根限り、必死になつて働いてゐる十八九の若者、今や土手下から、大きな土俵を擔いで來て、中央まで行かんとするに、足元に水が流れて、ピタピタと音がしたれば、土俵をヅシリと下に投げ卸し、

「エイ、此へも水が出やがつた、斯うなつちや迚も駄目だな」

獨語を言つてゐる、その側に絶望顏して茫然と立つてゐた組合の頭。

「オー、權六か、善く働くなあ」

權六は威勢の好い聲で、

「頭あ、何うだらう、此の土手は保つぺいか」

頭は默つて水の音を聞いてゐたが、

「今引かなきや駄目だな、此の土手が切れると、おめえの家は一潑ひだから、直ぐに歸つて、父さんやおつ母あを逃がしねい、身體の利かねい父さんだから、早く逃がさねいと危ねいぞ、モー此にや鬪はねいで宜い、俺が承知だ、おめえだけは早く歸れよ」

若者も先程から父母の事も氣になつてゐるので、頭の言葉を幸ひに、

「おや頭、賴むぜ」

頭は頷いた。

「道は遠くつても、多古の觀音樣まで逃げねいと、安心がなんねいぞ」

若者は、難有うと聲を殘して一散に土手を驅け降りた、此の體を見ると家を案ずる人達が、一人去り二人去り、土手の上は人影が寡くなつた。

人の氣が衰へると、川の水は勢を増す、陰陰たる眞夜中に、大地を呑まんず勢ひにて、山を崩し、岩を搖がし、濁流澎湃として堤の上に漲つた。

二

酒匂の堤より道の二町も隔つてゐれど、村中の最も低い土地に建つてある權六の家、水呑百姓の事とて、屋根も破損し、柱も少し傾いて、壁さへ二三ヶ所落ちかけてゐる。

六十に近い老爺の權平は、二年越しの中氣で半身が利かず、六疊の一間に枕屛風を樹てて、床の上に寢たつきり、三度の食事も人手を借りる不自由さ、女房は濕地に住む者の習ひとて、僂麻質斯が痼疾となり、此頃の樣な雨續きには、手足が痛むとて思ふ樣に動けず、圍爐裏に火を

熾して、躯や身體を温めてゐる。

娘のお藤は田舍に稀れな好容色、一旦他家へ縁付いたけれど、亭主が死んだので實家へ戻つてゐるが、戻つてから產まれた女の子が、やつと百日を過ぎたばかりだ、お藤は弟權六が土手の消防に出た後は、獨りで働いて炊出までも二度持つて行き、今に權六が歸つたら、嘸腹が減つてるだらうと、野菜の鍋を爐にかけて、一生懸命に煮物をしてゐる、嬰兒は小さい蒲團に寢かされて、宵よりスヤスヤ眠つてゐたが、乳が欲しくなつたと見えて、急に眼を覺まして啼き出した。

初めの程は母親が、片手で嬰兒の背を叩いて、子守歌を謠つてゐたが、ひもじいと見えて容易に啼き止まぬ、煮物の鍋を火から卸したお藤は、急いで嬰兒の側へ來て、身を横にして乳房を當てがつた、母はそつと嬰兒の顏を覗いて、

「何うしてもお母さんの乳でなくつちや默らないなう、マア、ナンといふ可愛らしい顏だらう、此の兒の顏さへ見てゐりや、わたしや何の苦勞も忘れて了ふ、ドレ乳を呑んだら、わたしに抱かしな」

嬰兒の乳に堪能するを待つて、自分の手に抱き取つた、お藤は急いで野菜鍋を臺所へ持つて行つて、煮た物を丼へ移してゐる。

臥てゐる老爺は先程より息子の歸りの遲いのが氣になつて堪へられない。

「お藤や、お藤や―」

と娘を側へ呼んで、

「おまへが先刻土手へ行つた時分には、水が何處まで來てゐた」

氣遣はしさうに問ふのを、娘は別に心配らしい顏もせず、

「あの時は土手一杯になつてゐたがネ、モー雨が歇んだから、水も直きに引くだらうつて、皆んな斯う云つてゐましたよ」

老爺は昔から此に住んで、川の樣子を知つてゐるだけに、兎角心が安からぬ。

「早く引けば可いがなう、以前と違つて此頃は、山奧の木を無暗に伐つて了ふから、川の水が一度に押出すよ、だから近年になつて、大きな雨が降ると、彼方の土手が切れたり、此方の土手が切れたり、洪水の騷ぎが絕えつこねい―」

母親は小兒をあやしてゐたが、ちよいと顏だけ父の方へ向けて、

「だけども、今井の土手は昔つから切れた事が無いと云ふから安心だネ―」

老爺「ナニ斯うでねいよ、八十年程前に此の土手が切れた時は、大層家が流されて人死があつたさうだが、田中樣と云ふ豪い役人が江戶から來なすつて、金輪際切れつこねいといふ此の堤を築いて下すつたから、その後といふものは、向う岸の土手が切れても、此方は何の事も無かつたんだ、だけども近頃は無暗に川幅を狹くしたり、粗末な蛇籠を川へ入れたりするから、土手も大層弱くなつてゐらあ、もしも今夜中に此の水が引かねいで、土手が切れた日にや、一番先に此處へ水が來るから、今の內に要心して大事なものを片付けて置きねい」

お藤は少し心配になつて來た。

「お母さん、簞笥の鍵を先刻何處へ藏つたネ―」

母親は物覺えが惡くて急に憶ひ出せない。

「小簞笥の抽斗へ納れたつけか、それともお佛壇の處へ置いたつけか知らん、お藤や、ちよいとお佛壇の方を見てお呉れ―」

お藤が立つて佛壇の前へ行かんとした時、不意に村の半鐘がジャン、ジャン、ジャンと破るばかりに摺り出した、續いて寺の早鐘がゴーン、ゴーンと凄まじく鳴り出した。

「オヤッ―」

と老爺は顏を揚げて耳を欹てると、何處で誰が叫ぶとも無く、

「切れたあ――、切れたあ――」

物哀れな聲が幽に聞える、母親は思はず抱いた兒を下に置いた。娘のお藤は簞笥の鍵よりも何よりも、身體の利かぬ父の身が大事と、老爺の側へ駈け寄つて、重い身體を抱き起さうとした。

その途端に入口の戸がガラリと開いて、飛込んで來た權六は、息を切つてゐて聲も立たない。

「土手が切れ……切れた、俺が父さんを負ふから、姉やはおつ母あと赤ん坊を伴れて、早く逃げて呉れ、早く早く」

母親は慌てて、うろうろしてゐる。

「ど、ど、何處へ逃げるんだ」

權六は父を引立てて自分の背に載せながら、

「多古の觀音樣だよ、姉や、早くその兒を負ひねい、何を愚圖愚圖してゐるんだなあ、ナニ簞笥の鍵が知れねいと、簞笥なんぞは何うでも宜い、ナニ貨幣だあ、貨幣よりや命が大事だ、早くおつ母あの手を牽いて戸外へ出て呉れ」

母親はよろよろと立つて、佛壇から過去帳と位牌と觀音樣の畫像を懷中に納れた、お藤は手早く小兒を背に負つて、紐で括つた。

誰が押すとも無く、一枚の雨戸がガタリと内へ倒れた、サッといふ水音、棟から水烟が疊の上に飛散つた。

權六は父を背負つたまま、殆ど夢中で家の外へ飛出した。お藤も母親の手を執つて、續いて表へ出ると間も無く、裏口の戸もバラバラと外れて、臺所の一角が横に倒れた。

道路は川になつてゐる、堤の切れ口から押して來る水が潮のやうに低地へ擴がつて、田も畑も一面の海になつた。星の光りで水は白く見えるけれども、道も溝もよく判からない、權六は膝まである水をザブリザブリと渡りながら、

「おつ母あ、俺の袖へ掴まつて歩びねい、姉や、溝へ落ちるなよ、オー深い、オー深い、段段深くなつて來る」

氣は焦慮つても足が進まない、姉と二人、互に助け勵まして、漸く水の淺い處まで達した、近隣の家からも避難の人人が、命からがら逃出して來た、日頃は親しき仲ながら、今は互に安否を尋ねる遑も無い。

村を外れて水の無い道へ出た時、權六も姉も思はず振返つて見ると、我が家の方は波が立つてゐる、お藤は悲しさうに、

「家はモー流れたかネー」

權六は叱るやうな語氣で、

「家は流れたつて、命が助かりやめつけもんだ」

母親はつくづく感じたやうに、

「是れといふのも、平生信心する觀音樣のお蔭だよ」

觀音堂の杜はこんもりと向うに見える、避難の人を招く爲めか高張提灯が五つ六つ、堂の門に立てられた、夜の風は身に沁みて寒い、塒から逃げ出した黑い鳥が、バタバタと低く飛んでゐる。

三

火事で燒けても土地は遺る、地震で潰れても材木は遺る、世に慘なものは洪水に遭つて、家も田畑も押し流された人人であらう。

酒匂の堤が切れて、今井村の人家は七八軒も流された、中に最も慘狀を極めたのは權六の家だ、奔流の衝に當つた爲め、家屋調度は跡方もなく、小作に借りてゐた田は時ならぬ沼と化し、自分の持つてゐた七畝ばかりの畑には、泥砂が堆く押し込んで、急に耕作を施せぬ。

一家四人は多古の觀音堂に避難して、その當座は村役場からの施米を受け、水の引くのを待つてゐたが、十日程過ぎて水も去り、村も稍略舊態に復した後、權六は親類から僅の貨幣を借り、以前住んでゐた土地の傍に、雨を凌ぐばかりの小屋を設けた。

權六は若いに似合はぬ實體者、日頃村人に可愛がられるので、此度の災難を氣の毒に思ひ、貨幣や品物を惠んで吳れる人が多い、それやこれやで形ばかりの世帶を張り、一同其處へ引移つたけれども、着のみ着の儘で命だけ助かつた家内中、何かに就けて足らぬ事が多く、追追涼風が立つて來るのに、衣服や寢道具を何うして算段しようかと、權六は竊に胸を痛めてゐた。

姉のお藤は出戻りの身として、弟の厄介になるのが何よりも心苦しい、おまけに乳呑兒を抱へてゐて、病父の看護から母親の世話まで、思ふ樣に手が屆かない、此の先きを何うしよう、如何にして身の始末を付けようと、毎日思案に暮れてゐた。

土手の假普請が始まつたので、權六は毎日人足に出て、僅かばかりの賃錢を取つて來るけれども、一家の口を糊するにも足らぬ、病人は心配が累なつて愈よ身體が惡くなるばかり、母親も氣抜けがした樣になつてゐる、お藤は彼を思ひ是を思うて、心に決する所があつた。

或日お藤は焚物の料にと、流木を拾ひに、嬰兒を背負つて川岸へ行つた時、土手下に休んで、權六が仕事から歸るのを待つてゐた。

夕暮近くなるままに、日の中川へ上つてゐた海の鷗が、白い翼に夕照を浴びて、三三五五と沖へ飛んで行く、村の人家から立登る蚊遣りの烟が横に靡いて、田の面は淡く霞んだ、土手の切れ口にはまだ水が溜つて、鶺鴒が白い尾を動かしながら、石の上を移り飛んで餌を漁つてゐる、以前には此の邊にも小作の田があつて、弟が稻を作り、自分も草取りに來たものを、先頃の洪水で斯んなにも荒れ果てたかと、お藤は坐ろに過ぎにし事を想ひ起して、今の身の苦しさが一入身に沁みる。

長いシャベルを肩にして、土手から降りて來た權六は、草の上にお藤の坐つてゐる姿を見て驚いた。

「姉や、そこに何をしてゐるんだ」

お藤は思ひ入つたやうな語調で、

「おまへを待つてゐたんだよ、今日はとつくにおまへと相談し度い事があるんだがネ、家ぢや談話も能きないから、燃木を拾ひながら此まで來たんだよ」

お藤の側には大きな笊の中に、水で揉まれて白くなつた木片や、細い枝なぞが一杯に納れてある、お藤は背中の嬰兒をくるりと前へ廻して、襟を開いて乳房を含ませた。

「權六や、此頃折があつたらおまへに相談しようと思つてゐたんだがネ」

と腰を据ゑて語り出したので、權六もシャベルを肩から卸し、草鞋の泥を振ひ落して、姉の前に蹲踞んだ、お藤は話し度い事が山山あつても、言葉が前後して順序が立たない。

「ホントに今更考へても口惜いよ、あの晩にネー、簞笥の鐶が早く見付かつて、わたしの財布を持つて出りや、あの中に五十兩のお貨幣がそつくりしてゐたんだから、斯んなに困る事はありやしない、あの財布を誰か拾つたらうか。何處へか流れて木の枝にでも引かかつてはゐなかつたらうか」

權六はお藤の未練を笑ふやうに、

「馬鹿あ言ひねい、あの水だもの、簞笥も財布もバラバラになつて皆んな海へ流れ出しちやつたのよ、よしや人が拾つたつて、誰の財布だか判かるもんぢやねい」

お藤はまだ心が殘つてゐる。

「だけどもよ、此兒の養育金につて、やつとの事で甲州から貰つて來たんだもの、ナニもわたしがあのお貨幣を欲しいんぢやないが、斯んな時にあれがあつたら、お父さんやお母さんの衣服位買つて、おまへも少しは樂が出來るのにネー」

権六は男だけに何事も諦めてゐる。

「そんな愚癡を言ひなさんな、外の家ぢや人死さへあつた中でよ、俺つちは皆んな命が助かつたから、ありがていと思はなきやなんねい、あの時もう一少しまごまごしてゐりや、家と一緒に皆んなも流されて了つたんだ」

お藤は漸く思ひ直した。

「爾う云へば爾うに違ひ無いネー、それに就いて権六や、此の苦しい中で、わたしは何時までも、べんべんとしておまへの厄介になつちやゐられない、今の内に何とかして、おまへの手助けになるやうな事を爲度いと思つてゐるけれども、何にしろ此の兒があつちや、足手纏ひで何うする事も能きない、何より先に此の兒の始末を付けなくつちやならないと、それぱつかりを心配してゐるんだよ」

お藤は以前甲州郡内の絲取工場へ、工女に往つてゐる中、美貌が人の眼に着いて、同じ町の材木屋へ嫁に貰はれたけれども、病身の良人が脚氣衝心で急に亡くなり、姙娠中の身を離縁になつて、實家へ戻つて來て女の子を産んだ、其時出産入費や養育料にと五十兩の貨幣を貰つたけれども、家ではその貨幣に手を付けさせず、貧しい中にも一同が世話をして、其兒を育てて來たのであつた。権六は姉の言葉を聞くと、自分も言ひ度い事のあるやうに、草の上に片膝を突いて、兩腕を組みながら、

「姉や、おつ母あがまだおまへにや話さなかつたかも知んねいけんど、あの洪水の前までは、おつ母あも父さんも、おまへの身を案じての、子供があつちやお嫁に遣る譯にも行かねい、それに可愛い孫ぢやあるし、一年も經つて乳が離れたら、きい坊はおつ母あの子にして了つてよ、それからおまへを好い處へ縁付けよう、その時の用意に、五十兩の貨幣は保つて置いて、一文も費つちやなんねいと、斯う言つてゐたんだあ、だけどもなう、今になつちや、此兒を育てて行くのも大變だからなあ」

お藤は親の心を難有く思つて涙ぐんだ。

「お父さんやお母さんが、爾う思つて下さるのは嬉しいけれども、わたしやモーお嫁になんぞ行く氣は無いよ、自分の了簡ぢや、今に此兒を里に出して、わたしは絲取工場へ入るか、それとも東京へ奉公にでも出て、お貨幣が溜まつたら、此兒を引取つて、何處までも育てて見度いと思つたのさ、わたしは何うしたつて、此兒を手放す氣は無いけれども、斯うなつちや何うして可いか、ホントに譯が判らないよ」

弱い女氣の今更運命を喞つばかり、愁然として我子の顏を眺めてゐる、権六もちよいと覗き込んで、

「きい坊は姉やに肖たから容色が佳いつて、皆んなが爾う言つてゐらあ」

お藤は顏を揚げて極く眞面目に、

「イイエ、わたしよりも此兒のお父さんに克く肖てゐるんだよ、此兒のお父さんは役者に爲度いやうな好い男だつたもの」

赤兒に映る良人の俤、懐かしいやら、悲しいやら、お藤は滅入るやうな心持になつた、権六も姉の心を察して慰め度くはあれど、慰むべき術も無い。

「何うだネ姉や、此兒を向うへ引取つて貰つちや」

姉は屹と緊張した顏で、

「それは駄目、あんな家へ遣つちや此兒が可哀想だ、今ぢや弟が跡を取つてゐるもの、それに色色な譯もあるし、何うしたつて此兒をあの家へは遣られないよ」

権六は姉の氣か知れず、

「ぢや此兒を何うしようと言ふんだネ」

お藤はホッと溜息を吐いた。

「わたしはネ、何處ぞに貰ひ人があつたら、思

な切つて遣つて了はうと思ふんだよ、衛らした
らわたしは乳が出るから、東京へ往つて乳母奉
公に上ると、高いお給金が取れるから、そのお
給金を家へ入れておまへ達の手助けにするよ、
何うだらう、此兒を何處かで貰つて呉れる人は
あるまいか」
　權六は暫く思案して頓に返事を爲なかつた。
「半日だつて貨幣でも附けなきや、人の子を貰
ふものはねいといふのに、あの時の洪水で、南
視か流されて子供だけ殘つたのが、やつと此頃
孤兒院とかへ貰はれた位だものなあ」
　お藤は當惑さうに、
「何うだらう、小田原邊りを搜したら好い口は
あるまいかねー」
「權六訊いて見なきや分んねいけんど、小田原に
や知つた家も多いから、俺が是れから、一走り
往つて、皆んなに一つ賴んで見ようか」
　お藤は嬉しさうに、
「どうぞ衛らしてお呉れな、小田原なら近いか
ら復た顏を見る事も能きるわ」
　權六は氣が輕く、
「おや衛らしよう、おまへ此のシャベルを持つ
て歸つて呉んねい、俺は此の儘直ぐ往くから」
お藤「おまんまを食べておいでな」
權六「インニャ、腹はまだ減らねい」
　以前ならば一旦家へ戻り、衣服でも着更へて
行く筈なれど、今は着更へる衣服も無い、仕事
着の儘で一散に小田原指して急いで行つた、お
藤は後を見送つて、風に吹かれて草原に立つて
ゐた。

四

　其夜權六は小田原へ往つて、嬰兒の貰ひ人を
搜したけれども、好い口も見當らなかつた、翌
晩も復た出かけたが、手を空しくして歸つて來
た、三四日過ぎて雨の降つた日に土手普請の仕
事が休みになつたので、權六は終日奔走したけ
れども、矢つ張り徒勞に屬して了つた。
　秋風は既に立初めて、稻の穗も少しづつ熟く
なつて來る、朝夕の冷たさに、野に出る村人も
袷を纏つてゐるが、權六の家では病人に被せる
夜の物さへまだ十分は調はぬ、お藤は最う氣が
氣で無い、一日も早く小兒を片付けて、乳母奉
公に出ないと、一家の口も干上つて了ふ、母親
の僂麻質斯が痛みを增し、病める父が夜の寒さ
に咳など發すと、自分獨りが惡いやうに思つて、
お藤は身を斬られるよりも辛く感じた。
　或夜權六は復た小田原へ宵から出かけたが、
遲くなつても歸つて來ない、お藤は權六にも氣
の毒でならない、忙しい中に暇を潰して、毎日
のやうに奔走して呉れるが、それが爲めに夜業
の仕事が出來ないで、家の收入にも差響く、モ
ーモー今夜好い口が無かつたら、再び弟に賴
むまい、寧その事に思ひ切つて、此兒を何處か
へ棄てようか知らん、エイ何んといふ淺ましい心
だらう、良人の形見の幼兒を、何うして無慘
無慘棄てられよう、矢つ張り人に遣らうか知ら
ん、イヤイヤ迚も貰ひ人はあるまい、ああ何う
したら宜からうと、幾度か思案を定めかねて、
獨り心を苦めたが、兎も角も弟の返事を待
つて、其上に處置を付けようと、洗つたお襁褓
を風呂敷に包み、寢入りし嬰兒を背に負つて、
そつと家を拔け出した。
　夜は暗い、廿日過ぎの月は山の端に出てゐ
るけれども、淡い雲に蔽はれた光りを地上に投
じない、お藤は道に躓いて背中の嬰兒を傷つけ
まいと、一足毎に氣を配り、成るたけ人目に懸
らぬやう、裏の細道を傳はつて、村外れまで出
て來た時、向うから歸つて來る弟にバッタリ
行き合つた。
「オヤ權六かえ、あんまり遲いから何うしたか
と思つたよ」
　權六は自分の罪にあらねども、姉に吉報を齎

して歸らねお心變へ、腕拱いて力無氣に、
「姉や、今夜も隨分各處歩いて板橋や風祭まで往つて見たけんど、何うも女の子を貰ふといふ人はねい、男の子なら漁師町で、貰ひ人があるけんど、女の子ぢや錢がかかつて、しちりけつばいだといふんだ、稀に氣のありさうな人があると、ヤレ兩親は何者だとか、男親は何の病氣で死んだとか、血統は何うだとか、むづかしい事はかりいつて、急には話に乘つて呉れねい、俺の思ふにや、斯んな容姿の佳い兒だと知んねいから、それで口が出來ねいんだ、百姓の子でも斯んなに眼鼻立の揃つた可愛い赤ん坊だつて、きい坊を伴れて行つて皆んなに見せたら、小田原の藝者屋や何かで、貰つて呉れるもんかあるかも知んねい、今度はきい坊を伴れて行つて、皆んなに見せて觀んだら可いだらうと思ふんだ、その内に雨でも降つたら、おまへと一緒にその子を伴れて、モー一度小田原へ往つて見よう」

　お蔦は愈よ覗み少なく思つた、貧窮のある身ならば氣永に捜してもゐられるが、今は一日も延ばす事はならぬ。

「權六や、おまへにばかり骨を折らして、ホントにお氣の毒だネ、よしや此兒を藝者屋へ遣る事が出來たつても、慾で貰ふやうな人ぢや、末になつて此兒が何んな酷い目に逢ふかも知れない、それよりもわたしは自分で少し考へた事があつて、是れから此兒を伴れて行かうと思ふんだから、おまへは家へ歸つてお呉れな」

　權六は眼を圓くして驚いた風に、
「是れから何處へ行くんだ」
お蔦「少し心當りがあるんだがネ、遲くも明日の朝までに歸るから、おまへはお父さんやお母さんを氣をつけてお呉れよ」

　權六は愈よ胸に落ちない。
「心當りとは何處の事だ、姉や、おまへはあんまり物を考へ過ぎて變な氣でも出しやしねいか、その手に提げてゐる包みは何だ」

　月光は薄く雲を出でて、階に道を照らした、お蔦の顏は無限の悲しみを湛へてゐる。
「是れにきい坊のお襁褓だがネ、何うぞモーその事を聞かないでお呉れよ、詳しい事は後で話すから」

　權六は近寄つて姉の袖を捉つた、
「オイ姉や、おめえは全體きい坊を何處へ伴れて行く心算だ、初めつから伴れて行く處があるなら、俺だつて斯んなに心配もしやあしない、ナニもそんなに隱すことはねいぢやねいか、おめえはその兒を何うする氣だ、さあ言はなきや俺も放さねいよ」

　お藤は暫く默つてゐた、何か言はうとしても胸が塞へて聲が出ない、良あつて言葉も片片に、
「權六や、おや話すがネ、迚も好い口は無いから、わたしや此兒を……」
權六「何うするんだ」
お蔦「す、す、棄てる氣だよ」

　言ひさして歔欷り上げた、權六は辛氣く、
「馬鹿を言ひねい、俺が附いてゐて、そんな事をさせるもんか、よくもおまへは、そんな事をそうな氣になつたもんだ」

　お蔦は徐に氣を落着けて、沈痛なる音調となつた、
「權六や、さう聞いたらおまへも吃驚するだらうが、マア克く考へて御覽、設け口があつて此兒を遣つたつても、善くない人に貰はれたら、此兒の不幸になりやしない、わたしがフイと考へ付いたのは、酒匂の濱へ行くと立派な御別莊が澤山ある、あんな處へ此兒を棄てたら、もしやヒョッと東京の人に拾はれて、何んな出世が出來るかも知れない、さうすりや田舍の人に貰はれるよりも此兒の爲めに幸福だ、それに此兒

の運次第だがね、斯うなつたら神様や佛様を
お願ひ申すより外は無いから、わたしは多古の
觀音様を御信心して、此兒の運の向く様に拜ん
でゐるよ、何にしろ家はあの通りの始末だし、
まごまごしてゐると、皆んなが餓ゑて死なな
くつちやならない、わたしだつて此兒を棄てるの
は、自分が死ぬより辛いけれども、お父さんやお
母さんの爲めを思ふと、モー此兒の事なんぞ言
つちやゐられない、ネー權六や、家の方へは貰
ひ人があつて、此兒を遣つたと言へば濟む、わ
たしや此兒を觀音様にお預け申す氣で、是れか
ら酒匂の濱へ棄てに行くんだよ、何うぞ眼を閉
つて今夜だけわたしを見遁してお呉れ」

一時の決心に氣が張つて、言葉に力を入れる
けれど、心の中の悲しみは流るる涙に露はれて
ゐる、權六は悵然として歎息した、頭を低れて
暫く思案に沈んだが、漸くにして顔を揚げた。

「さう言はれて見りや、下手な處へ遣るよりも、
その方が可いかも知れねい、だけども可哀想だ
なあ」

お藤はいつの間にか道の端へ蹲踞んで、兩
袖を顔に當てて了つた、權六は心を決したや
うに、

「ぢや俺も一緒に往つて遣らう、あすこの様子
は俺の方が克く知つてゐる、御別莊の門へでも
そつと此兒を置いて行きや、誰か出て拾つて呉
れるだらう、誰が拾ふか、俺が遠くから番をし
て、愈よ拾はれる處を見屆けて歸らう、さあ、
そんなら一緒に歩びねい」

お藤は嬉しいやら悲しいやら、身を起すにも
力無く、やつとの事で起上つた。

「ぢや、さうしてお呉れ」

と最早口數も利けぬ、權六は俺が持つてやる
と姉の包みを取つて先に立つた、お藤は袖で眼
を拭き拭き、背中の兒を片手で叩きつけながら、
悄悄として後から尾いて行つた。

棄兒

一

吹送る夜寒の風の身に沁みて、今宵は一入物
憂きに、お藤は背中の嬰兒を案じ、風邪惹いて
呉れるな、煩つて呉れるな、設ひ何處に棄てる
とも、慈悲ある人に拾はれて、仕合せ善き身と
なるまでは、どうぞ無事でゐて呉れろと、心の
中に祈りつつ、權六の後に蹤いて、今井の土手
を南に下つた。

酒匂橋の袂に來て見れば、以前の橋は半ば壞
れて、鐵道馬車の通ふ假橋が、水に近く架けら
れてある、土手下の木が、大きな横枝を水に浸
がれて、その折口の白く凄まじき、灌木は横に
仆れ、長き草の泥に埋みたるなんど、今に至つ
てもまだ洪水の慘狀が恢復してゐない。

權六は姉に怪我させまいと、その手を執つて
假橋を渡つた、人が渡れば橋は動く、顚んだら
最後命が無い、さりながら深き思ひに沈めるお
藤は、夢のやうな心地である、足元が危いか、
水が増したか、月が出たか、眼前の物には眼も
留めないで、心の中には只我子の行末のみ考
へてゐる。

橋を渡つて右に折れ、酒匂の濱邊に出て見る
と、海岸に沿ひたる一帶の松林は、陰陰として
國府津の濱まで續いてゐる、松林の中には、都
の人の別莊が高い屋根を梢の上に露はして、五
つも六つも見えるけれども、今は主人が不在に
やありけん、多くの家は二階の戶も開かず、留
守居の家の小窓から、細い燈火が纔に濱へ洩れ
てゐる。

權六は以前野菜物を賣りに來た事があるの
で、此邊の案内は善く識つてゐる。

「姉や、一番此方の角にあるのが、東京の官員
さんの御別莊でよ、その先の西洋造が、銀行屋
さんの御別莊、その奧に大きな屋根の見えるの

が、お金持の御別荘た、松原の中央にも二三軒あるが、此の方にも近頃新しい御別荘が出来たといふ事た、斯ういふ處へきい坊を棄てりや、誰に拾はれたつて、悪いやうにやなんねいぜ」

お藤は最初より、それが一つの望みであれど、扨如何にしてその人人に、棄てた嬰兒を拾はせようと、暫く思案に暮れてゐた。

「權六や、今頃は御別荘の人が來ちやゐまいから、お不在ぢや仕様が無いネ」

權六は深くも考へない。

「ナニ旦那がゐないつても、お留守番の人が拾つて呉れりや、旦那の方へ默つちやゐねいよ」

お藤は先の先まで案じられる。

「旦那の方へ隠す所はないで、お巡査さんにでも突出されちやあ大變だネ」

權六は姉に心配させまいと、

「ナニ大丈夫だよ、此の先の大きなお金持の御隠居様はね、大層慈悲深いお方だつて、此の近所で評判してあらあ、お身體が悪くつて、御隠居様たアは、何時でも此方に來てゐなさるから、マアあの御別荘の方へ行つて見よう」

權六が先に立つて松原の中程へ来ると、見通せないほど廣い地面を圍ひ込んだ丸太垣が、大きく松小松を庭の陰めに取込んで、中央には廣い芝生が廣濶に取つてある、奥の建物は樹立多く、何れが本家、何れが離室とも分ち難い、權六は垣の側に進んで、中の様子を窺つた、勝手の方には人聲もする、燈火も二つ三つ芝生に射してゐる。

「姉や、此の御別荘の近所へ棄てて置きや、必然誰か此の家の人が見付けて呉れるぜ、庭の中へそつと納れて遣らうか、イヤ、イヤ、庭ぢや明日の朝まで人が出まい、門の前へ置いて來ようか、往來の人が見付けて、持つて行くといけないなあ、マアお勝手口の方へ行つて、何處か良い場所を捜して見べい、俺と一緒にそつと來や」

人に見咎められぬやう、權六は抜足してお藤と共に勝手口の方へ廻つた。其處が可からう、此處は悪からうと、二人はヒソヒソ話しあつて頻に垣の内を覗いてゐると、勝手元の犬小屋に臥てゐたむく毛の小さな黒犬が一聲高く吠え立てた、忽ち玄關の方から小牛とも紛ふばかりの白斑の洋犬が、口の内でウーと唸つて、勝手口へ駈けて來たが、二人の姿を見ると、大濟りかゝる垣の許へ飛出して、二人を望んで咬み付くやうに吠え立てた、黒の小犬も小屋から飛出して、洋犬と共に吠え付いて來た

二人は驚いて逃げ出した、逃げる程勢ひを増す犬の聲、小犬の方が猛り立つてお藤の裾に咬み付いた、お藤はキャッと云つて、一目散に濱の方へ駈け出した、權六は小石を拾つて犬に投げ付ける、犬どもは一旦後へ退つて、聲を限りに吠えてゐる、お藤は遠く濱邊へ逃げた、權六は石を投げては少し逃げ、立留まつては石を投げ、やつと松原を抜け出した、犬はモー追つて來ないけれども、姿の見えぬまで、松原の中から、此方を望んで吠えてゐる。

お藤は一生懸命に波打際まで逃げて來て、砂濱に揚げてある大きな漁船の陰に身を隠した、嬰兒が背中で頻に啼き出すのを、片手で後ろから叩きつけながら、片手で自分の胸を撫でて、ホツと息を吐いてゐる、後れて來た權六が、

「姉や、びつくらしたらう」

お藤は聲もワクワク顫へてゐる。

「わたしやモー、咬み殺されるかと思つたよ」

犬の聲はまだ聞えてゐる。暫く止んだかと思ふと、忘れた時分に小犬の甲走つた遠吠が、お藤の耳へ凄いやうに響く。

二

お藤は今の驚きに胸の騒ぎが容易に鎮まらない、犬の聲は全く歇んでも、まだ何となく怯気がついて、張詰めた氣も抜けたやうに、茫然と

して船陰に佇んでゐた。
「アー怖い、アー怖い、頑是無い子を斯んな處へ棄てて、犬にでも咬まれちや大變だ、わざわざ此兒を殺すやうなもんだ、モーモー迂つかり棄てられない」
お藤は今になつて、子を棄てるといふ事が空恐ろしくなつて來た、天の許さぬ大罪を犯すやうな心地がした、荒い風にも當てないで、是れまで育てて來たものを、今更野山へ棄てるとは、何といふ無慈悲な事だらう、後に此兒が大きくなつて、眞の親に棄てられたと知つたら、嘸我身を恨むだらう、アー何うしても棄て度くない、寧そ棄てるのは廢めにして、此儘伴れて歸らうか知らんと、頻に我子が不憫になつた、さう思ふと忽ちに父の病氣や母の苦勞が眼の前に浮かんで來る、此兒のある爲め自分では親の世話をするどころか、年の若い弟の厄介になつて兩親にも難儀をかけるばかりだ、此儘にしてゐるなら家中が餓に迫つて、何んな憂目を見るかも知れない、餓に迫れば自分の乳も段段と出なくなる、乳が出ないと此兒が育たない、人に遣り度くも貰ひ人は無し、自分と一緒に此兒まで干乾にするよりは、矢つ張り棄てた方が可いか知らんと、心は頻に迷ひ出して、悄然と首を低れて了つた。
お藤は元來氣の弱い神經質の女である、親の病氣を見れば人一倍も心配し、弟の難儀を知つては同情の念深く、我子に對しては滿身の愛を籠めて育てて來たのである、自分の身體も弱い爲め、再び嫁に行く氣は更に無く、我子を育てて婿でも貰ひ、それを樂みに孀で生涯を暮らす心算、末の賴りにするものは、天にも地にも我子一人、我子が無ければ自分の命も消えるやうに思つてゐた、それを今更棄てるのは自分が死ぬより尚ほ辛い、弟が傍に居なかつたら、我子と一緒に此の海へ飛込んで死んだ方が餘つ程可いと、熟熟浮世が可厭になつた。
秋の空の習ひとて、流れる雲の脚遲く、月の光りが白い濱砂を照らしたかと思ふと、忽ち復た暗くなつて、海の面が物凄く、岸打つ波はドブンドブンと沖のうねりを寄せてゐる、廣い濱邊に人影も無く、壓し付けるやうな夜の氣が人の頭上を蔽うて來る。
權六は先程より、四邊に心を配つて松林の方を眺めてゐた、此より遠く望むと、立駢ぶ別莊は隅から隅まで一一分明に數へられる、何れの家もひつそりとして音もしない、唯一つ奥まりたる新しい別莊から、洋燈の光りが二つ三つ濱へ洩れて、人の大勢居るやうな氣合がする、ハテあの家には人が來てゐるか知らんと、權六は延上つたり、透したりして窺つた、忽ちその別莊の庭から提灯が一つ、松の樹の間にチラチラと見えた、やがて提灯は裏木戸から庭の外へ出た、人が二人程庭の先の道を彼方此方へ往つたり來たりしたが、松林の中へ曲つて、提灯は遂に見えなくなつた、權六は急に思ひ付いたやうな語氣で、
「姉や、おまへもあの提灯を見たらう、今松原の中へ往つたが、今に必然歸つて來るから、あの御別莊の裏手へきい坊を棄てて置きねい、さうすりや何うしたつて、今の人達が見付けるに違ひねいよ」
お藤はまだ怯ぢてゐて、急に立ち上らない。
「復た彼處へ往つて、先刻のやうな犬が來やあしないかネ」
權六は氣が急いてゐる、今此の好機會を失つては、再び好い折があるまいと、
「大丈夫だよ、犬が來たつて俺が追つ拂つて遣るから、兎に角マア彼處へ往つて見ねい」
引立てるやうに促した、お藤は恐る恐る立上つて、四邊に氣を配りつつ、松原の前まで進んで來た、以前の豪奢なる別莊と違ひ、庭は可な

りに廣いけれども、建物は小じんまりとして質素な構へ、木柱は新しく茅葺屋根の叩合しみたる工合なんど、何となく奥床しく見えて、賴もし氣な心地がした。

お藤は幾分か心を安めた、あんまり大きな家よりも、斯んな別莊の人なんぞが、却つて賴りになるだらうと思つた。

權六は四目垣の前の草原へ近寄つて、長い草を五六本足で踏み仆した、その音に驚いて、聲涼しく鳴いてゐた松蟲がピタリと音を停めた、權六の耳には蟲の音も入らない、一生懸命に草や灌木を仆したり押し分けたりして、今棄てる兒に假の臥戶を設けてやつた。

「姉や、きい坊を此へ出しねい、此の草の上へ置きな、ふつくりして柔いぜ」

お藤は愈よ我子を棄てるのかと思ふと、今更のやうに胸が轟いた、されど未練に思はれては、弟の手前も恥かしいと心を勵まして、

「ぢや此の絆天を下へ敷いて、お襁褓の包みを枕にしてお呉れ」

急いで絆天の紐に手をかけて、解かうとしたが解をかけて手を留めて了つた、其の動きもせず物も言はない、權六は何を愚圖愚圖してゐるのかと、前へ廻つて姉の顏を覗いた、お藤は下を向いて潸潸と泣いてゐる、豫ねて覺悟はしながらも、遂に我慢が出來なくなつて、片手に紐の先を握つたまま、片手で眼を押へて、聲も立てずに淚を吞んでゐる、權六は之を見て、ああ無理も無いと思つた、あれ程可愛がつた子だものを、今棄てるのは嘸辛いだらうと氣の毒になつて堪まらない。

「姉や、おまへにきい坊を棄てさせちや、俺が父さんやお母あに濟まねいんだ、父さんもお母あも、何んなに此兒が可愛いか知んねいよ、幾日もおまへに話した通り、お乳が離れたら自分の子にするんだつて、きい坊の事べい案じてゐらあ、自分が食べるものも食べないでおまへにばかり食べさせるのは、きい坊にお乳を飲ませ度いばかりだ、それをマア何のこんだらう、おまへと一緒に酒匂の濱へ棄てて來たなんて聞いたら、俺が何んなに怒られるか知んねいよ、姉や、俺が一生懸命に稼いだら、きい坊の一人ぐれえ、何うにかして育てられねい事もあんめい、俺は三度食ふものを二度にしても闕やあしねいから、どうぞモーきい坊を棄てるのは廢しちやつてよ、是れから家へ歸つて呉れねい、俺はきい坊が可哀想で可哀想でなりやしねい」

權六も淚を禁めあへず、姉の袖をそつと押へて、返答を待つてゐる、お藤は弟に優しく言はれるほど尙ほ悲しくなつて來る、是れ程皆んなが惜しがつて呉れるものを、ああ此兒は何うして斯んな惡い月日に生れたらうと、胸も裂けるやうな思ひがするのを漸く淚を押へて、

「おまへに爾う言はれると、わたしやモー死んででも了ひ度くなるよ、斯うなるのも何かの因緣だ、何う考へても此兒を棄てなけりや、家中の厄介になるばかりだから、どうぞモー爾んな事を言はないでお呉れ」

遂に心を決して紐を解いた、紐が弛むと、背中の兒がずるずると下へ落ちかかるを、權六は兩手で支へて絆天ぐるみ抱き取つた、お藤は直ぐに身體をぐるりと向き直し、手を出して嬰兒を受取つた。

折しも月は雲を出て、四邊がパッと明るくなつた、お藤は月の光りにつくづくと嬰兒の顏を見たが、是れがモー我子の顏の見收めかと思ふと、胸が迫つて身體が顫へ、嬰兒を抱いたまま、砂の上にペタリと坐つた、嬰兒は母の胸に口を寄せ頻に乳を搜してゐる、母は淚ながらに乳房を當がつてそつと頭を撫でながら、

「なう、きい坊や、たあんとお乳を飲んでお呉れよ、モー是れつ切り」

と言ひさして聲を曇らせ、

「お母さんのお乳は飲めないんだからネ、どうぞ澤山飲んでお呉れよ」

嬰兒は今棄てられる身とも知らないで、紅葉のやうな手を出して、片方の乳を嬉しさうに弄つてゐる、母は愈よいぢらしく、兩方の乳房を交る交る絞るやうにして乳を飲ませた。

此の暇に權六は袢天を草の上に敷いて、お襁褓の包みを枕に置いた、お藤は嬰兒に十分乳を飲ませて後、そつと前に進んで、設けの席へ卸さうとしたが、蟲が知らすか、母の心が傳はるか、嬰兒は急に母へ抱きついた、お藤は眼を閉ぢて顏を背け、

「權六や、おまへ其處に置いてお呉れ」

權六は嬰兒を受取つて、片膝突いて嬰兒を袢天の上に置いた、嬰兒は背中が寒いので、手を出して抱かれ度いやうにする、お藤は之を見て、ワーッと一聲其場に泣き伏した。

「アー濟まない、どうぞ堪忍してお呉れ、きい坊や、お母さんもおまへを棄て度くは無いけれども、おまへがあつては家中が困るから、據ろ無く棄てるんだよ、どうぞ少しの間辛抱して、おとなしくしてゐてお呉れよ」

そつと手で叩きつけてゐると、嬰兒はやがてうとうとと眠つた、權六は濱風の當らないやうにと、草を引寄せて嬰兒を圍つてやつた。

「いつまでも斯うしてゐて、人が來ると大變だ、松原の中へ往つて、何處かに隱れてゐよう」

お藤は立つに立たれない、幾度か嬰兒の寢姿を覗いて、涙を拭き拭き漸と立つたが、足が竦んでよろよろとよろけた、權六は側へ寄つて姉の手を執つてやつた、お藤は權六に身を靠れつつ、一足行つては振返り、二足歩いて立留まり、後髮を引戻されるやうな心地がして、容易に先へ進めないのを、無理に心を勵まして、松林の中に入つた、半町程奥に數百年を經たると覺しき大松がある、是れ幸ひと二人はその蔭に身を隱して、暫く樣子を窺つてゐた。

雲は再び月を蔽うて、松林の中も暗くなつた、お藤は延上り延上り、草原の方を望むけれども、我子の姿はモー見えない、草原の中では松蟲が我物顏に鳴き出した。

お藤は急に北の方を望んで、松の根方に跪いた、渾身の血を絞るやうに、一心籠めて兩掌を合せ、南無や多古の觀音樣、どうぞ我子が無事に拾はれますやう、善い人に育てられて立派なものになりますやう、我子の爲めになるならば、自分の命を縮めても厭ひませぬ、何卒我子を護らせ給へと、髮振亂し聲を嗄らして、一心不亂に祈念してゐる。

三

「オヤ、赤坊の聲がするよ、何處だらう」

不思議さうな顏して松林の中に立留まつたのは、紺絣の袷に白い扱帶を締めてゐる十一二歳の男の子、片手に竹細工の蟲籠を提げ、片手に小さい捕蟲網を持つてゐるが、蟲籠の中には今採つて來た松蟲と鈴蟲が累なり合つて蠢いてゐる。

「叔父さん、何處かで赤坊の啼く聲がしますよ、變ですネー」

少年の背後から手にブラ提灯を提げて、悠悠と歩いて來たのは、三十四五にもありなん、威嚴ある逞ましい顏に、濃い口髭の長く生えてゐる偉丈夫。

「ナニ赤坊だ、今頃斯んな處に赤坊のゐる筈が無い、鳥でも鳴いたんぢやらう」

少年は二足三足進んだが、復た耳を欹てて、

「イイエ、赤坊ですよ、アレ復た啼いた、家の裡の方です」

足を速めて松林の外へ出た、別莊の裡まで來ると、草原の中に嬰兒の啼く聲が聞える。

「叔父さん、速く來て御覽なさい、此に赤坊が

ゐますよ」

偉丈夫はのそりのそりと大股に歩いて、漸やく草原の前に来た。

「ウム、成程、赤坊ぢやなう」

と別に驚いた顔もしない、嬰兒は乳に飢ゑたか、寒さを感じたか、少しづつ間隔を置いて、憶ひ出したやうに啼いてゐたが、提灯の光りが眼に入ると、忽ち啼き止んだ、少年は物珍らしさうに嬰兒の姿を見てゐたが、振返つて、

「何うしたんでせう、此の赤坊は」

偉丈夫は提灯を嬰兒の臥てゐる上に翳した。

「棄兒ぢやらう、誰か此へ棄てたんぢやらう」

少年は未だ人事を解せず、

「赤坊を棄てるなんて、酷い人があつたもんですネ」

偉丈夫は膝を折つて嬰兒の前に蹲踞んだ。

「それには事情があるぢやらうさ、此へ棄てたのは別荘の人に拾はせたい了簡ぢやらう、勇君、此の提灯を持つて呉れ給へ」

少年に提灯を渡して置いて、嬰兒の側へ進み寄り、そつと兩手をかけて、袢天ぐるみ抱上げた、寒さに啼いてゐた嬰兒は、温い手に抱かれて、心地好くなつたのか、抱いた人の顔を見てニコリと笑つた、その笑顔の愛らしさ、櫻色の透き徹るやうな頬に、小さい靨が露はれて、眼元、口元の愛嬌は、如何なる猛き心をも溶かすであらう、今迄は沈着にして物に動じない偉丈夫も、此の笑顔を見て急に愉快らしく、

「オー笑つちよるぞ、僕の顔を見て笑つちよるぞ、愛らしいもんぢやなう」

少年は提灯を嬰兒の前に近寄せて、あやす所存か、

「オロオロオロ」

と舌を鳴らした、偉丈夫は嬰兒の身體を検めて、

「ウム、女の兒ぢやなう、眼鼻立の揃うた好い兒ぢや、斯んな好い兒を棄てたのは、よくよくの事ぢやらう・親の心が氣の毒ぢや」

少年は懸念顔に、

「叔父さん、その兒を何うします」

偉丈夫は嬰兒の愛らしさに魅られて、自分が拾つたのは何かの因縁でもあるやうに感じた。

「實に可愛いもんぢや、是れは天が僕に授けたのかも知れんよ、兎も角も伴れて歸つてお姉様に御相談しよう」

少年は嬉しさうに、

「ぢやその赤坊を家へ伴れて行きますか」

偉丈夫は嬰兒を抱いたまま立上つた。

「ウム、提灯を貸し給へ、道が悪いから轉ぶと不可ん」

大の男が扱ひ馴れぬ嬰兒を、さも壊れ物でも持つたやうに、心配しながら兩手に抱く、手の先に提灯の柄とお襁褓の包みを攫むやうに提げた。

少年は別荘の裡木戸を開いて、大急ぎで庭口へ駈け込んだ。

芝生を前にした廣間から、六七歳の仇氣無い女の子が、縁端までちよこちよこと駈け出して来た。

「お兄様、蟲は澤山捕れましたか」

少年は沓脱石の上に立つて、先づ捕蟲網をバサリと縁側に投出した。

「みいちやんはまだ寝なかつたの」

女の子の後から縁側へ出て来た二十三四の腰元か、捕蟲網を拾つて手に持ちながら、

「お兄様のお歸りになるまで寝ないと仰しやつて、何うしてもお就寝になりません、オヤお籠の中には蟲が澤山居りますネ」

少年は蟲籠を二人の前に置いた。

「蟲も澤山捕れたがネ、それよりや今僕と叔父さんは此の裏で大變なものを拾つたよ」

少女は興ある顔、

「何をお拾ひなすつたの」
少年「何だか當てゝ御覧、是が當つたら僕はみいちやんに何でも上げらあ」
少女は首を傾けて考へながら、
「何でせうネー、お魚」
少年は蟲籠を縁側に置きながら、
「イイエ、そんなもんぢや無い」
少女「ぢや、海から上つた海綿かナンか」
少年「イイエ、生きてるもんだよ」
少女は自分で頷いた。
「あー解つた、屹度雲雀の子でせう、曩日お兄様と一緒に濱へ往つて拾つた事がありましたつけネ、あんなの」
少年は當らぬ事を面白がつて、
「もつと大きなものさ」
少女は氣の抜けたやうに、
「ぢや何だらう、猫かナンか」
少年「迚もみいちやんにや當らないよ、濱や、おまへ當てゝ御覧」
捕蟲網を床の間へ片付けて來た腰元が、故意とらしく首を捻つた。
「何で御座いませう、私には解かりませんネー」
此時裡木戸から提灯が見えた、叔父は一歩一歩足元に氣を配つて、そろそろと歩いて來る、少女も腰元も齊しく其の姿を注視した。
「アラ、叔父様は何か抱へてよ、お兄様、アレはナニ、教へて頂戴よ」
少年は笑ひながら、
「赤坊だよ」
少女「赤坊――」
と呆れた顔、叔父は芝生の上まで來ると、急に足を速めた。
「オイ濱や、速く此へ來て赤坊のお襁褓を何うにかしてお呉れ、僕は今膝まで濡らされた」
少女は縁先に乗り出して愈よ驚いたやうに、
「アラ、ホントに赤坊だよ」
と言ひながら急いで奥の間へ驅けて行つて、
「お母様、お母様、叔父様が赤坊を拾つて御歸りでしたよ」

四

鳥海陸軍少將の別莊では、時ならぬ珍客でもあるやうに、奥も勝手も嬰兒の始末で、大騒ぎが始まつた。
主人の少將は目下洋行中なれども、明日の日曜日をかけて、夫人が二人の子供と、主人の妹の良人なる陸軍少佐栗山義雄を誘つて、今日の午後から此へ來てゐた、その義雄が勇少年と共に、捕蟲に往つた歸りがけ、裏の草原で嬰兒を拾つたといふので、夫人は驚いて奥から出て來たが、先づその嬰兒の愛らしい顔を見ると、女だけに一入憐みの心深く、拾つた事も棄てた事も論議する遑無く、何より先に氣を揉むのは乳の才覚だ。
「誰か此の近所に、乳首の附いた消毒壜を持つてゐる人はあるまいかネー、速く乳の用意をしなくつては、今夜此の兒がひもじからう」
留守居の老僕を走らして、漸く小兒用の牛乳壜を借りて來た、乳は幸ひ殘りの物があつたので、水で薄めて小兒に飲ませようとしたが、母乳の外に味を知らぬ嬰兒は、いかに骨を折つても、口を振つて乳首を銜へない、是ではならぬと再び心配し、何處にか乳の出る婦人はあるまいかと、再び近所を捜させて、やつとの事に近頃お産をしたといふ百姓家の嫁女を伴れて來た、嬰兒は始めてその乳を飲んだが、人見知をせぬ兒とて、誰にも彼にも可愛がられ、交る交る家中の人に抱かれた。
少年と少女は嬰兒の珍らしさに、睡たさを耐へてあやしたり賺したりしたが、餘りに夜が更けるとて、母親に制せられ、二人とも臥戸に入つて、嬰兒の噂を語り合ひつつ眠りに就いた、

嬰兒は貰ひ乳に堪能して、生れてから初めて裁つたらしい絹の座蒲團に臥かされた、傍には腰元のお濱が、撫でたり揺つたりして介抱してゐる。

　奥の間では夫人と義雄が嬰兒の處置に就て頻に相談を始めた。

「義雄さん、あの兒は家の裏に棄ててあつたのならわたし達に拾つて貰ひ度いといふ親心に違ひありません、さうして見ると、あなたがお拾ひなすつたやうなものの、わたしの方でも其儘にはして置かれませんが、あんな可愛い兒ですから、東京へ歸つて子供の無い人に遣らうと申したら、悦んで貰ふものもありませう、それとも外に良いお考へでもありますか」

　慈愛深き夫人は嬰兒の行末を案じて、半ば自分の責任にする所存、義雄は既に心を定めてゐる、最前嬰兒を拾つた時、何か一種の靈感が生じて、自分と嬰兒とは離るべからざるやうに思つてゐる

「イヤ人に遣るまでもありません、僕はあの兒を自分の子にして育て度いと思ひます、僕は結婚後七年になりますが、まだ子がありません、一人でも欲しいと思ひますけれども、まだ授かりません、よし今後妻に子供が出來ても、女の子一人ぐらゐあつても關ひませんから、僕はあの兒を育てて見度いと思ひます、世間では人の子を育てると、自分の子が産れると言ひますから、あの兒を育てたら自分の子が出來るやうになるかも知れません」

　夫人は頓に答へなかつた、斯る問題は人生の一大事、迂濶な事も言ひ難いと、暫く思案した。

「それはマア東京へお歸りになつて、お關さんやお母様と御相談なすつた上の事ですネ、あなたが自分の子にすると仰しやれば、異存を言ふもあはありますまいけれども、お關さんが氣の進まないのを、あなたへの義理で御承知なさるやうだといけません」

　義雄は無造作に、

「お關だつて先頃も、あんまり淋しいから親類の子を貰ひ度いと申した程ですから、あんな可愛い兒を見たら、必ず悦ぶに違ひありません、それよりもあの兒が大きくなつて、自分は棄兒だと知つたら、嘸可厭に思ふでせう、成るべくなら親の違ふ事を知らせないで、何處までも實子として育て度いと思ひます」

　夫人は頷いた。

「それはわたし達の方で一切默つてゐれば、他人の耳に入れないで濟みますけれども、もしや何かの折に實子でない事が知れたら、藁の上から親知らずに貰つたと言つて置いて、棄兒なぞといふ事は決して欠にも出してはいけません」

　談話の闌なる時、腰元が襖の外へ來て、

「奥様、あのお兒さんのお襁褓が足りませんが、何う致しませう」

　夫人は當惑さうに、

「それは困つたネ、浴衣の古いのを壞して間に合はせよう、ドレわたしが一つ見て遣るから」

　立上つて腰元と共に座敷へ往き、箪笥を開いてあれよこれよと詮議してゐる、義雄は初めて嬰兒といふものは手數のかかるものだと思つた。

　此夜は夫人も腰元も、小兒の世話で碌に眠り得なかつた、翌朝早く少年の勇は眼が覺めると、何より先に腰元を呼んで、

「濱、濱、昨夜の赤坊は何うした」

　少女も共に案じ顔、

「おとなしくして」

　寢床より出るが速いか、寢卷の儘で一人とも座敷へ驅けて行き、左右から嬰兒の側に摺り寄つて、面白さうにあやしてゐる、百姓家の嫁女も早く出て來て乳を與へた、義雄は今日から我が子ぞと、抱き取つて頻に悦んでゐた。

鳥海夫人は老僕を小田原へ遣つて、急に吳服屋を呼ばせ、今日中に嬰兒の衣服を新調せよと命じた、お襁褓も新しく調へた、玩具も買つた、帽子も涎掛も殊に美麗なものを擇んだ、負ひ袢天までも其日の中に手を分けて用意した、百姓家の嫁女を一日借りて、東京まで嬰兒を伴れて行つて貰ふ事にした。

其日の夕暮一同は別莊を引揚げた、義雄と勇少年は一足先に停車場へ歩いて行き、婦人達は俥を列ねて門を出たが、百姓家の嫁女に抱かれてゐる嬰兒は友仙模樣の染め出したモスリンの衣服に、白い綾織絹の涎掛、桃色の帽子も顏の色を照り添へて、その美しさ愛らしさ。

今日一日此の近邊を彷徨いて、竊に樣子を窺つてゐた權六は、門前の立木の蔭からそつと嬰兒の姿を覗いて、

「ナントマア、えらあ立派になつたもんだ、嘸姉やも嬉しかんべい」

俥を遣り過ごして身を轉じ、一散に今井村へと駈けて行つた。

邂逅

一

春とはいへど松島はまだ寒い、都は櫻の最中なるに、鹽島の梅はまだ散り切らず、殘んの花は行客の袖に香を留める、空はどんよりとして風も無く、海には波も立たず、遠い島島山山は淡い霞を掛けられたやうで、灣內は靜に落着いた景色である。

鹽島の岸を離れて、經が島へと進んで行く遊覽船の中には、栗山大佐の一行が乘つてゐる、大佐は家族を伴れて青森から上京の途次、松島館に投宿して今朝早く島巡りに出たのである。

大佐は每度此地に來てゐるから、松島の景色も珍らしくはないが、妻や娘達に島巡りの盡きぬ眺めを見せて度いと思ふのである、殊に最も愛してゐる長女の小夜子がまだ年齒は行かないけれど、風流心に富んで畫が好きだから、此の絕景を見せたら嘸悅ぶだらうと思つてゐる。

「どうだネ小夜子、佳い景色ぢやらう、おまへは畫が上手だから、何の島でも一つスケッチして見たらどうぢや」

十四になる小夜子は、褒められたのを羞かしいといつたやうな態度で、默つて下を向きながら、風呂敷包みの中から、スケッチブックと鉛筆とを取出した、されど描く處を人に見られないやうにと、胴の間を立つて、舳の少し高い處に進んで、何の島を描からうかと頻に四邊を眺めてゐた。

大佐夫人は眼前の景色を賞するよりも、濱風の寒さに怕れて、火鉢を前に引寄せ、背を圓く縮めて、兩手を火に翳してゐたが、妹娘の閑却されたのを不足らしく、

「豐子もブックを持つてゐるだらう、おまへも何か一つ描いて、青森へ歸つたら、先生に御覽に入れると可いよ」

豐子は姉よりも一つ年少だが、身體が大きいので、折折姉と間違へられる事さへある、性質も姉の優しく弱弱しきに引換へて、小さい時から勝氣な、意地の惡い方で、喧嘩をすると姉を泣かしても自分の泣いた事は無い　されど學校の成績は姉の常に最優等なるに似ず、漸と落第を免れるばかりの程度になるので、學業や技藝の事に就ては、敢て姉と爭へない。

「わたしにやむづかしくつて能きないわ」

父の大佐は豐子をも引立てるやうに、

「おまへも描いて御覽、何でも可いよ、向うに面白い岩が見える、あんな岩でも描いて御覽」

豐子はしぶしぶ自分のスケッチブックを取出して、一つ二つ筆を走らして見たが、

「舟が動くから描けやあしない」

と絵筆をブックに挾んだまゝ、板の間へ投げ出すやうに置いた。

舟は經ケ島を過ぎて、絵島焼島羅漢島と、島の間を縫ふやうに巡つて行く、舟を轉ずる毎に風景は千變萬化して、應接するの遑も無い。

艫の方では、七輪に懸けてある藥罐の湯が沸騰つたので、老いたる船頭は若者に櫓を漕がせ、自分は急須に茶を淹れて、茶碗と共に胴の間へ持つて來た、大佐夫人は茶受の料にと菓子の包みを開いた、それを待つてゐたと云はぬばかりに豐子が手を出して早くも豆銀糖を喫べ初めた、大佐夫人は急須の茶を一つ一つ茶碗に注いで、

「小夜子や、お茶が點つたから、此へ來てお菓子をおあがり」

舳にゐる小夜子は、

「ハイ難有う」

と頭を下げたが、一生懸命に描いてゐて、容易に出て來ない、されど小夜子の顏には不安がある、描きかけた畫を描き了らずに立つのも惜しいが、母に呼ばれていつまでも往かないでは惡いだらうといふ氣兼もあつて、膝を立てながら忙しさうに紙の上を擦り、やがて茶碗の茶が冷めた時分、スケッチブックを持つて胴の間へ戻つて來た、大佐はいきなり、

「ドレ、何んなに出來たかお見せー

小夜子は已むを得ないやうな風にそつとブックを出した、大佐は披いて見て、

「オー善く出來たの、三四枚描いたネ、此の島帽子岩は一番善く出來た、東京へ往つたら、勇さんに直して貰ふと可いー

大佐はブックを擴げたまゝ下に置いた、妻にも豐子にも見えるやうな位地に置いたけれども、夫人は菓子を喫べるに忙しさうにしてゐて、直ぐにその畫を覗いて見ようともしなかつた、覗いて見ずとも畫は前に展開されてある、豐子は横目にチラと見て、

「松があんまり濃過ぎるわ」

無遠慮に人の瑕疵を言ひ度がる平生の癖、小夜子は氣に留めた態度も無く、

「どうせ善く出來ないんだもの」

大佐は小夜子に氣を落させまいと、

「ナニ、是れなら立派なもんぢや、一昨年勇さんが來なすつた時も、おまへの畫は素性が良いと頻りに褒めちよつたよ」

豐子は自分が不得意だけに、畫といふ事さへ氣に入らないやうな顏して、

「勇さんは何だつて畫師なんかにおなりなの、外の兄さん達のやうに軍人におなりだと可かつたのにネー」

大佐は豐子が、職業によつて人を高下するの非理なるを戒むるやうに、

「畫師だつて軍人だつて、豪くさへなれば同じ事だ、勇さんは畫の天才があるんぢやもの」

大佐夫人は豐子と同じやうに輕蔑した語氣で、

「畫師なんぞにならないで、實業家にでもなつた方がまだ優しだ、勇さんは畫師だつても、まだ展覽會へなんぞ、一度も名の出た事も無いぢやありませんか」

大佐は苦苦しさうに口を少し結んで、

「名を好むやうな畫師ぢや駄目だ、勇さんは別に感心な見識を持つちよるよ」

談話は途切れた、舟はいつしか方向を轉じて南の方に進んで行く、眼前に隱見する無數の島島、岩の形松の色、以前とは趣を異にして、海水も透明になつて來た、大佐は船頭を顧みて、

「是れから何方へ遣るか」

船頭「扇谷へ參りませう」

大佐「ウム、扇谷は可からう、松島四大觀の一つぢや、山の上から眺めると、昨日の富山に劣らんぞー

好風景と聞いて竊に悦ぶのは小夜子孃、豐子は足の疲れが厭はしさうに、
「復た山へ登るのう、道は惡く無くつて」
大佐は叱るやうに、
「ナニ昨日程ありやしない、それつぱかりの道が歩けないで何うなるもんか」
夫人は豐子を庇ふやうに、
「足よりも衣服が汚れますからネー」
舟は扇谷の入江に進入した、小舟で底を摩るやうな淺い岸に舟を着けると、大佐はいきなり舟より飛下りて、
「あすこに見えるあの山だ、譯は無いから皆んなおいで」
先に立つてずんずん登つて行く、一同も舟を出たが小夜子は父に追付いて、途中の景色を指しつつ、睦ましさうに語り合つてゐる、豐子と夫人は後れ勝ち、案内の船頭に助けられて、漸く後から尾いて行つた。

二

「マア佳い景色だこと、海が宛然扇のやうに見えますネ」
坂の下から扇谷の山の上に登つて來た小夜子は、前に展開された灣内の風光を觀ると、足の疲れも忘れて、崖の端まで身を挺り出した、父の大佐も後ろに立つて、
「絶景ぢやなう、此から見ると島島の形狀が一層面白い」
後れて登つて來た夫人と豐子は、風景よりも何よりも足の疲れを休め度く、
「あなたマア其處へ休みませう」
夫人が先に立つて茶亭の縁に腰掛けた、豐子も身體を投げ出すやうにして、
「オー苦しかつた、わたしや斯んなに遠いと思はなかつたのよ」
茶亭の女が茶を出し、菓子を出し、
「どうぞ此方へお掛けなさい」
と彼方に立つてゐる小夜子と大佐を呼んだ、大佐は二足三足茶亭の方へ近寄つて、
「此の前には島が澤山竝んでゐるが、あれは皆んな名があるのかネー」
茶亭の女は腰を曲げて延上り、
「ハイ、色色の名がございます、左の方に群つてゐるのは大黑島に布袋島、毘沙門島に惠比須島なんぞと申して、七福神の名が附いて居ります、前に二つ列んでゐるのが小町島に伊勢島で、右に幾つもポツポツと海から抜出たやうなのは、兜島に鎧島、筓島や都島でございます」
大佐は立つたまま、紙卷煙草を出して火を點じながら、
「フム、大層良い名が附いてゐるなう、此邊は海が綺麗ぢやから、島の姿が一層美しい、小町島や都島なぞはいかにも繪のやうだの」
茶亭の女は誇り顏に、
「お畫をお描きなさるお方は、よく此の山へいらしつて島の景色をお寫しになります、今も若いお方が此の少し上の方で一生懸命に畫を描いてお在です」
小夜子はまだ茶亭に入らないで、展望の好き場所に立つてゐたが、自分の好きな畫の事と聞いて、俄に後方の山を眺めた、
「ホンに誰か、あの岩の上で畫を描いてお在ですネ」
大佐も振向いたが、屹と眸を凝らして、
「オー、アレは勇さんぢや、確に勇さんぢや、小夜子、彼處へ行つて見よう」
茶亭の脇の小徑から、木の枝を分けて後方の山へ登つて行つた、小夜子も跡から行かうとしたが、
「おまへ、そんな道の惡い處へ行くと足袋が汚れますよ」
母に制せられて小徑の前に立停まつた、豐

子も夫人も緣先から離れて後方の山を望んでゐる。

「勇さんは丸で書生さん見たやうネー」

豊子は先づその風體を見て、輕蔑の意を含んだ口氣、成程勇は色の褪めた土耳古帽を無造作に長い毛髮の上へ斜めに載せ、木綿の絣の羽織に小倉の袴も裾の方が畫の具の汚點で汚れてゐる。

「ナゼあんな貧書生見たやうな風をしてゐるんだらう、見つとも無いぢやないか」

虚榮心の強い大佐夫人は、自分の甥の風采が善からぬを不平に思つてゐる。

やがて大佐は勇と共に小徑から出て來た、勇は夫人の前に進んで、慇懃に、

「叔母樣、誠に久濶、一昨年は非常に御世話になりました、オー小夜子さんも豊子さんもお揃ひで」

二人の娘に會釋しながら、殊に意を注けて小夜子の態度を熟視した。

元來栗山大佐の上京は、小夜子を東京の鳥海家に託して、東京の女學校へ入學せしめん爲めである、青森にも高等の女學校はあるに、大佐をして小夜子を東京に出さんと決心せしめたのは、勇が暗暗裡に自分の父母を說き、父母よりして大佐の心を動かさしめた結果だ、勇は一昨年の夏、十和田湖漫遊の序に青森へ立寄つて、十日ばかり叔父の家に滯在したが、其時小夜子を長く青森に置くのは、本人の爲めの幸福にあらぬ事を看破した、今の內はまだ小夜子も年が往かず、大佐夫人を眞の親と心得てゐるけれども、夫人の方では豊子といふ實子を產んだ後、小夜子に對する愛情は次第次第に薄らいで行く、況して學校へ通ふやうになつてから、小夜子が殊に學藝に秀でて、每期の試驗に必ず優等を取るに引きかへて、豊子の成績面白からねば、それが却て嫉妬の種となり、何かにつけて痛ましい事が多い事を知つた、小夜子は昔酒匂の濱で、自分と叔父とが拾つた子だ、小夜子の行末は何處までも自分が見屆けて遣り度い、小夜子の身を幸福ならしむるには、女學校への入學を好機として、東京へ呼ぶに如くはないと、勇は青森から歸宅した後、先づ自分の母に其事を說いた、去年大佐が公用で出京した時、鳥海夫人から大佐に小夜子の出京を勸めたところ、大佐も內內同じ心であつたらしく、早速同意して國に歸り、今年の春小夜子が尋常科を卒業したので、演習後の休暇を幸ひに、都の花を見物かたがた、一同を伴れて東京へ出るのである。

勇は小夜子が其後、如何なる風に發育したか、體格は何うなつたか、性情は如何に變じたかと、夢寐にも忘れた事は無い、今度も大佐が上京の途中、松島見物に立寄るといふ事を父母への手紙で知つたので、間が好くば松島で邂逅し度いと、數日前より此地に來て、春の松島をスケッチしてゐたのであつた。

勇は小夜子の顏を見て、思ひの外に痩せてゐる事を氣遣つた、妹の豊子が肉附好く肥えてゐるに引かへて、小夜子は甚だ發育が惡い、體格が發育しないで、神經ばかり働くといふ相貌だ、東京へ出したらば何より先に體格の發達を謀らねばならないと、勇は心中に小夜子の敎育法を考へた。

やがて一同は茶亭の內に入つて、女連は疊の上に坐し、大佐と勇は緣に腰掛けたが、大佐は小夜子を顧みて、

「勇さんは松島の畫を澤山お描きださうだよ、見せて戴くと可い」

小夜子は飛立つやうに思ふけれども、自分から先へ見せて下さいとは言ひ兼ねて、母や妹が何か言出すかと待つてゐる、大佐夫人は畫を見度いやうな顏もせず、

「勇さんは是れから何うするの、復た何處へか

廻つて行くの」
　勇は自分も目的が無い、興に乘ずれば飄然として來り、飄然として去るのが美術家の常、
「さうですネ、是れから平泉の方でも廻つて歸りませう」
　大佐は久久にて勇と緩緩懇談がし度い、
「勇さん、今夜は僕の宿へ來て泊り給へ、僕等は明日の朝早く發つから」
　豐子が馴馴しい口調で、
「勇さんは何處へ泊つてお在のう」
　勇は笑ひながら、
「僕の泊るところはいつでも木賃宿」
　大佐夫人は驚いたやうに、
「木賃宿」
　と眉を顰めた、勇は叔母の心を知つてゐる、その虛榮心に反抗する意味で故意に木賃宿と云つたらしい、小夜子は最早耐へられなくなつた。
「お畫を見せて下さいな」
　思ひ切つたやうに言ひ出した、その遠慮深いやうな、外の人に氣兼して恐る恐る口を利くやうな態度は、勇の心に痛痛しく感じた。
「スケッチですから碌なものはありませんけれども、旅店へ行つたらお目にかけます、ぢや叔父さん、今夜はあなたの方へ御厄介になりませうか」
　勇が來ると聞いて小夜子は內心飛立つやうに悅んだ、若しも間が好かつたら、自分のスケッチブックへ何か描いて貰ひ度いと思つた、だけども自分から賴むのは言ひ難いから、旨く先方から描いて進げるとでも言つて吳れれば宜いたんぞと思つたりした。
　小夜子の悅ぶに引かへて、大佐夫人は此の見苦しい風體の勇が自分の甥らしい顏して一緒に來るのを好ましくなかつた、書生ならば可いけれども叔母さんと云はれるのが厭なのだ。
「勇さんはまだ畫を描くのでせう、夜になつたらわたし達の宿へ來ますか」
　勇の返事をせぬ先に、大佐が妻の心も知らず、
「是れから一緒に船へ乘つて來給へ、君の美術眼から批評した松島の風景論を聞き度いもんぢやなう」
　勇は同意して一行と共に山を降つた、入江に繋がれてゐた遊覽船は人人を載せて沖へ出たが、小夜子は勇が船に乘つてから、母の顏色の安からぬを見て、竊に胸を痛めた。

三

　舟が沖に出た時、船頭が茶を沸かして辨當の包みを胴の間へ持出した、折詰にした辨當は四人前、勇の分が一つ足りないと思つて、小夜子は內內氣を揉んだが、勇は握り飯の辨當を竹の皮に包んで持つてゐた。
　人人が辨當を喫する中に、大佐は獨り正宗の壜を傾けて、眼前の風光を賞してゐた。
「勇君、君の美術眼から見たら、松島の風景は何處が最も絕景ぢやネ」
　勇は今握り飯を喫し了つて、竹の皮を海に投げたところだ、小夜子が注いで吳れた茶碗の茶を半分飲んで下に置き、
「さうですネ、松島の風景は、富山、扇谷、多聞山、大鷹森の四大觀になつてゐますが、その中で最も勝れてゐるのは大鷹森です、大鷹森は內海と外海との中央にありますから、その風景が變化極り無くして、一日觀てゐても二日觀てゐても飽きるといふ事がありません、僕は先年來た時あの島に十日程滯在しましたが、今度も三日泊つてゐました、古來から松島の景は大鷹森にありと云はれるくらゐで、大鷹森を觀なければ共に松島を語るに足りません」
　大佐は頷いて前路を望んだ。
「あの高い山が大鷹森ぢやネ、是れから往つて見る譯にならんかな」

勇「松島から海上三里あつて、波の荒い處ですから、風の好い日に朝早くから往かなければ其日に歸つて來られません、今日はモー遲くつて到底駄目です」

大佐「その島には人家があるのかネ」

勇「七八十戸ありますが、漁村ですから普通人の泊る處はありません」

豐子は横際から、

「勇さんは大鷹森の畫を澤山お描きでしたか」

勇は茶碗の茶を皆んな飲んで、

「描きは描きましたが、幾度描いても氣に入りません、大鷹森の景を立派に描けるやうになるのはまだ二三十年の後でせう」

豐子は、

「二三十年」

と驚いた顔をしてゐる、大佐夫人は勇の心事が解からない、勇の服装の惡いのも疑問となつてゐる。

「勇さんはまだ、自分の畫で獨り立をする事が能きないんですか、まだ家の厄介になつてゐるんですか」

と詰問するやうに言つた、勇は冷かに笑つて、

「叔母さん、僕は父や兄に相談して、何時までも書生でゐる心算です、僕は自分が滿足するまでは自分の畫を人にも賣らず、世間にも出しません、その代り、學費は決して多く費ひません、衣服は綿服で通して、愈よ着られなくなるまでは、人が呉れても取換へないと極めました、食物は生命を繋ぎさへすれば可いと思つてゐます、生涯決して妻帶もしません、一身を美術に委ねた以上は、美術を以て妻ともし、家ともし、全く世間と離れて自分の藝を磨く所存です、それに就ては父の事情の許す限り、父から學資を出して貰ひますし、父から出せない時には、兄から貢いで貰つて、先づ五十歳位までは畫の稽古をし度いと思つてゐます」

夫人は愈よ呆れた、

「五十までも書生でゐるの」

勇「左様です、一心不亂に勉強しても五十歳位にならなければ自分で滿足する腕前にはなれません」

大佐は豫ねて勇の覺悟を鳥海大將から聞いてゐた。

「勇君、君の決心は實に達氣ぢやから、僕も至極賛成を表するが、全體何んな畫が描けるやうになれば、それで君は滿足するのかネ」

勇は談話の序に自分の抱負を知らしめて置き度いと、容を改めて語り出した。

「叔父さん、口廣いやうですが、僕は世界的の美術家になる了簡ですから、別に一機軸を出して一切古人の糟粕を嘗めません、勿論土臺は日本畫ですけれども、自然の指導に從つて、如何なる畫風に變化するか判かりません、僕の師は古人にあらず、粉本にあらず、自然の景を描き、自然の人物を描き、自然の草木、自然の禽獸蟲魚を描くのが目的です、それには最初の順序として先づ寫生といふ事を研究しなければなりません、寫生の技術が十分に熟達したら、その次は趣きを寫さなければなりません、即ち情趣を寫すのですネ、趣きを寫す事が自由になつたら、その次は魂を寫さなければなりません、風景にも魂があります、山川草木にも魂があります、人物にも魂があります、その魂を寫し得るまでにならなければ、美術の蘊奧を極めたと申されません、然し叔父さん、是れまでは古來の美術家も往往にして達し得たものですが、僕はモー一層進んで、天地間の森羅萬象に宿つてゐる美の神を寫し出すまでになり度いと思ひます、即ち僕の描いた畫には美の神が宿つて、畫から光明を放つといふまでにならなければ、僕は自分の畫を世に出しません」

勇の言葉は眞面目である、その言葉には魂

が籠つてゐる、大佐は默つて聞いてゐたが、是れも眞摯なる態度で、
「勇君、その抱負は實に立派なものぢや、然し人間は抱負の大なるを貴しとせん、その抱負を貫くを以て貴しとするのぢや、必ずその目的を貫き給へ」
勇は斷乎として、
「誓つて貫きます」
雙方の言葉には眞情が流露して、互の心に徹底した、此の對話を熱心に聽いてゐたのは小夜子孃、何となく勇の意氣が天地を呑むほどに大きくつて、松島の景色なぞは何處へか消えて了つたやうに感じた、夫人と豐子は何時の間にか、首を鳩めて食後の菓子を喫べてゐる。
「小夜子や、おまへもお喫り」
紙に載せて出された菓子を、小夜子は難有うと禮を言つたまま、急には手にも取らなかつた。
大佐はやがて正宗の壜を傾け盡して、辨當の食事に取かかつた、夫人は熱い茶を茶碗に注いで大佐の前に置いた、豐子は正宗の空壜を把つて、高く捧げて海へ投げ込まうとするのを、勇は早くも、
「待ち給へ豐子さん、どうせ捨てるならその壜を僕に貸して下さい、僕が今面白い事を爲ますから」
壜を受取つて膝の前へ置いた、小夜子と豐子は勇が何をするかと興あり顏に眺めてゐると、勇は懷中から自分の名刺を出して壜の口に插んだ、豐子はその名刺を見て、
「アラ鳥海ハルホつていふの」
勇は笑ひながら、
「ハルホぢやない、春帆と云つて僕の號です」
小夜子は懷かしさうに、
「マア佳いお名前ネ」
と思はず口から聲が迸つた、勇は名刺を插んで置いて、コロップを堅く名刺ぐるみ壜の口へ押し込んだ、
「小夜子さん、此の壜が今浮いて流れるから見ていらつしやい」
そつと壜を海へ入れた、底の方が水に沈んで、壜の口の立つたまま、名刺が帆のやうに浮きつ沈みつ流れ行く面白さ、豐子は手を叩いて笑ひ興じた。
「何處へ流れて行くでせう」
「何處かの島へでも着くでせうよ」
舟は此の小さい浮標を跡に遺して、材木島の方へ漕いで行つた。

四

此夜勇は栗山大佐の旅館に投宿して、小夜子達と晩餐を共にした、小夜子の請求によつて自分の描いた下畫をも見せ、又小夜子のスケッチをも見たりしたが、小夜子の畫を褒めると夫人の機嫌の好からぬを知つて、心にはその進境を驚歎しながらも、口では善いとも惡いとも評言を下さなかつた。
大佐は例によつて酒盃を傾けてゐる、外の人達は速く食事を終つて大佐の膳だけ殘してある、豐子は突然自分のスケッチブックを持出して、勇に何か描いて呉れと迫つた、勇は無造作に椿の花を描いてやつた、小夜子も賴み度くはあれど、兎角に遠慮して言ひ出さなかつたのを、父の大佐が其意を察した。
「小夜子や、おまへのブックへも何か描いて貰ふと可い、丁度今夜は月もあるから、月の松島を描いて貰つたら何うぢや」
小夜子は嬉し氣にブックを勇の前に置いて、
「どうぞ」
と簡單な口上、勇は快く、
「ぢや小夜子さん、庭へおいでなさい、あの小亭の中で描きませう」
勇は畫筆とブックとを携へて二階を降りた、

小夜子も續いて降りると、豐子も後から蹤いて來て、

「勇さんのお描きなさる處を見ようや」

自分の物でも描いて貰ふやうに、何處までも勇の側を離れない、勇は亭の中に入つて圓い卓子の上に小夜子のスケッチブックを置いた、亭の屋根裏から小さい電燈が卓子を照らしてゐるけれども、月光が斜めに射し込むので、電燈の光りが冴えない。

月は今丘の堂の上に懸つてゐる、遠近無數の島島は淡煙模糊の間に隱見して、夜の景色の面白さ、勇は默つてその風景を見ながら、ブックの上に筆を着けた、海を描き島を描き松を描き堂を描き、一筆も苟もしないで、丁寧な密畫を描き始めた、小夜子は何よりも樂しさうに脇目も觸らないで熱心に觀てゐる、豐子は初めの内こそ面白さうに覗いたが、忽ち倦きて了つて、どたどたと二階へ戻つて行つた。

豐子が立去つた後、今迄は無口の人のやうに、默つて畫を描いてゐた勇は、急に畫筆を下に置いて、

「小夜子さん」

と優しく呼んだ、その聲の中には溫い慈愛が籠つてゐるやうで、小夜子は慕はし氣に、

「ハイ」

と答へた、勇は身體を小夜子の方へ向けて、

「あなたは東京へ往くのが嬉しいとお思ひですか、それともお父樣やお母樣の側を離れるから悲しいとお思ひですか」

小夜子は返答に困つたやうな顏して、

「何だか怖いやうですネ、わたしは何にも出來ませんから、東京へ往つたら、皆さんに笑はれるだらうと思つて心配ですわ」

勇は氣の弱い小夜子の心中を斯くあらんと察した、

「決して怖い事はありませんよ、あなたぐらゐ學問でも何でもお出來なされば、何處へ行つても立派なものです、あなたは學校の外に、お家で何かお稽古なさいましたか」

小夜子「ハイ、お祖母樣に、讀書と習字とを教はりました」

勇は思ひ當つたやうに、

「あなたのお祖母樣は何でもよくお出來なさるさうですネ、御本は何をお習ひでした」

小夜子「大學と中庸と論語とを畢げました、古今集なんぞも講釋をして下さいましたよ」

勇は此の祖母がいかに小夜子を愛してゐるかを知つた、小夜子の爲めに唯一の味方となり、唯一の保護者となつて、蔭になり日向になり、小夜子の爲めに盡力した事を察した、

「あなたが東京へお出でなさる事を、お祖母樣は何とお言ひでした、出た方が可いつて、それとも出ない方が可いつて」

小夜子「お祖母樣はネ、東京へ出て鳥海さんのお世話になれば、おまへの爲めに幸福だとお言ひでしたよ」

勇「お祖母樣は嘸あなたをお可愛がりになりましてせうネ」

小夜子は「ハイ」と言つて急に涙ぐんだ、祖母の慈愛を過ぎにし事を想ひ起して、感に堪へたい風情であつた、勇もその心情を察してゐる、東京へ出したらば此の弱弱しい遠慮勝ちな性質を引立てて、無邪氣に、天眞爛漫に、我儘も言つたり、喧嘩もしたりするやうな人に仕立てなければならないと思つた。

「小夜子さん、あなたは僕の家へ來ても、決して遠慮したり心配したりしてはいけませんよ、自分の生れた家だと云つて、何でも我儘一杯になさいよ、僕のお母樣もお父樣も善い人ですよ、僕の妹もあなたの來るのを樂しみにして待つてゐますよ、妹の卒業した女學校へあなたを入れる事になつてゐますから、その學課の事は

妹があなたに敎へて進げますよ、それにあなたは畫がお上手だから、畫を習ひ度ければ、僕が敎へて進けますよ」

斯う言はれて小夜子は安心した樣子である、今迄は其事ばかり案じてゐて、知らぬ他國へ流されるやうに思つたが、第一に勇の溫い情味に感じ、今復たその家庭の事を話されて、前途に愉快や希望が生じて來た。

「どうぞ何でも敎へて下さい、そしてあなたはいつ東京へお歸りになりますの」

と甘えるやうに言つた、勇は小夜子が自分を待つ心のいぢらしく、

「僕は是れから中尊寺の方へ廻りますけれども、成るたけ早く東京へ歸りませう」

小夜子は再び口にこそ出さねど、勇の歸りの一日も速からん事を祈つてゐる、勇の慈愛や眞情は東京に於ける第二の祖母、此人の側にゐれば何の心配もあるまいと、子供心に深く信賴の念を生じてゐる。

突然亭の外から、

「まだ畫が出來ないのう」

と美代子の甲走つた聲がした、勇は驚いて畫筆を採り、以前の無口な人に還つて、默つて畫を描き出した。

合作

一

小夜子は東京青山の鳥海家に寄寓して、女學校へ通ふやうになつてから、瘦せた身體も次第に肉づき、内氣で淋しかつた性質も、幾分か快活になつて來た。

以前小夜子は六歲の時まで東京に住んでゐたから、父や母に伴れられて度々伯父の家に來た事がある、その度に伯母が可愛がつて、玩具や繪紙を澤山呉れた、小夜子の方でも心の中に善い伯母樣だと思つてゐた、父の轉任と共に九州の久留米へ引越した後も、盆と暮には伯母の許から、美しいリボンや繪草紙なんどが必ず來るのを樂みにしてゐた、日清戰爭の後、父母と共に青森へ轉じる時、小夜子も一度東京へ出て鳥海家に泊つた事がある、其時は以前よりも一層伯母の慈愛を感じ、母親よりも伯母の方が慕はしい程であつた、青森へ移つてからは五年以來一度も東京へ出なかつたが、伯母の家の印象は小さい心に忘れた事がなかつた。

されど此の度、東京に留學する爲め、愈よ自分の家を離れて、伯母の家に寄寓する事となつては、以前遊びに行つた時分と、心持が格別になつて、伯母夫婦がいかに我身を取扱つて呉れるか、勇さんの心は變つてゐれど、外の兄弟は何んなに思つてゐるだらうなんぞと、氣の弱いだけに先の先まで案じられた。

愈よ東京へ來て、鳥海家に落着いた後、父母が青森へ歸つて了つた當座は、島流しにでも遭つたやうに心細く思つた、伯父は淡泊で何事にも無頓着な人、伯母は昔に變らず、親切で優しくして呉れるけれども、初めの内は遠慮があつて何事にも氣が置ける、伯父の長男は陸軍大尉で朝鮮に往つてゐるし、次男は騎兵中尉で大阪師團に在勤してゐるから、家にゐるのは勇と妹の美代子孃ばかりだ、美代子孃は親切に學校の事から衣服の事まで、萬事一人で引受けて世話を焼いて呉れるが、そのかはり人の氣心も察しないで、何でも自分の思ひ通りにしなければ承知しないといふ風がある。

程無く勇が遊學から歸つて來た、嚢に松島で早く歸京すると小夜子に約束したけれども、美術家の心の飄々として定まり無く、平泉の中尊寺から、急に思ひ立つて山形へ廻り、歸りに秋田の男鹿半島へ出たりなんぞして、思ひの外に暇どつた。

勇が歸つてから、小夜子は初めて心がのびの

びとした、その癖勇は外の人のやうに、チヤホヤと世話をして呉れない、同じ家に住んでゐても、書室に立籠ると、二日も三日も出て來ないで、顏を合せない日もある、さうかと思ふと、急に小夜子の部屋へ來て、サア是れから畫を教へようと、一旦坐り込んだら三時間も四時間も動かないで、一生懸命に教へて呉れる、習ふ小夜子も熱心だが、教へる勇の方が一層熱心だ、それが爲めに小夜子の畫はメキメキと進步して、學校の教師に舌を卷かしめた、外の學科も最初は地方の學校と勝手が違ふので、同級生の中程に地位を占めたが、半年程も過ぎない中に、最優等の生徒となつた。

初め小夜子が此の家へ來た時は、美代子孃の部屋に机を置き、夜は孃と女中との間に寢かされたけれども、勇が歸つてから、その意見で、以前お針女中の部屋であつたといふ四疊半の小座敷を小夜子の部屋と定められた、それまでは朝起きると女中が來て床を揚げ、顏を洗ふにも女中が湯を取つて呉れ、部屋も女中が掃除して呉れたが、四疊半の部屋へ移つた時、勇は小夜子に毅然と言渡した。

「小夜子さん、あなたは今迄學問にばかり熱中して居て體の運動が足りなかつた、それに青森のお家は女中が多過ぎる、叔母樣は大勢の人をお使ひなさるのがお好きだけれども、女中が多い爲めに、あなたの身體が自然と運動不足になつた、是れからはあなたの部屋の事は、決して人手を借りないといふ覺悟をして、寢床も自分で始末するし、拭掃除も自分でする、雨戶も自分で開閉をするといふ風に、何でも自分で爲なければいけません、それがあなたの爲めになるのです」

と懇に諭して呉れた、小夜子は却てそれが嬉しかつた、あまり親切に世話をされるよりも、自分の事は自分に任せて呉れる方が難有い、それに勇自身は朝夕の事をその通りに實行してゐる、書室を自分の小天地として、決して奉公人に手を着けさせない、それを見ても、小夜子は自然と勇を見習ふ樣になつた。

伯父も伯母も小夜子に向つては決して小言を言つた事が無い、美代子孃も小言らしい事は言はない、唯一人勇は頭ごなしに叱り付ける、癇癪持だから畫の出來でも惡いと、畫筆を紙に叩き付けたりするやうな事もある、だから小夜子に取つては、勇が一番恐ろしい人だ、なれども勇の言葉には僞りといふものが無い、小言の裏には深い親切が籠つてゐる、小夜子は外の人にこそ幾分か氣が置けるけれども、小言を言ふ勇には少しも氣が置けない、自分の方から遠慮無しに我儘を言ふ事さへある、小夜子は青森の家にゐた時でも、決して人に我儘を言つた事がない、奉公人にさへ言ひ度い事も言はない程の內氣であつたのに、今は折折勇に向つて、勝手な事を言つて見たり、小言を言はれると、ちよいと怒つたりするやうになつた。

一年程過ぎると、美代子孃は洋行歸りの陸軍士官と結婚した、それは以前から婚約が成立つてゐて、留學年限の終るまで待つてゐたのである。

美代子孃が嫁入した後は家庭が淋しいので、鳥海夫婦は小夜子を我子のやうに可愛がつた、家にゐると、成るたけ自分達の傍へ引付けて置き、物見遊山にも大抵な場處へは小夜子を一緒に連れて行つた。

然し冬の避寒と夏の避暑とに、鳥海夫婦が[illegible]の別莊へ行く時には、一度も小夜子を伴れて行かなかつた、小夜子も初めは別段に往き度いと思はなかつたが、奉公人達が別莊から歸つて來ると、その景色の好い事から、濱遊びの面白い事なんぞを話すので、何んなに佳い處だらうと思ふ事もあつた。

二年と過ぎ、三年と經つて、小夜子は愈よ鳥海家に居馴染んだから、最早何人にも氣を置く事が無く、身も心も寛いで、其日其日を樂しく暮らした、毎期の試驗に國元の父母へ學校の成績を通知すると、父からも母からも手紙と共に御褒美の品が來た、國へ、手紙を出す時は小夜子が必ず草稿を書いて、手紙の文句を勇に直して貰ふ、その時は勇が朱筆で草稿を赤く塗つて、二度も三度も書き直させる事もある、殊に母へ出す手紙は、成るたけ長く、成るたけ詳しく、成るたけ心を打開けるやうに書かせるので、母の方からも優しい言葉で返事が來る、小夜子はその手紙を讀む度、今更母上が是程優しい人であつたかと、慈愛に感じて泣く事もあつた。

朝鮮にゐる鳥海大尉が出て來ても、大阪から次男の中尉が出京しても、必ず酒匂の別莊へ遊びに行く、美代子孃は以前から酒匂が好きだから、結婚後も毎度婿君と共に泊りに行く、鳥海家の奉公人も一人として酒匂を知らないものは無い、されども小夜子はまだ一度も伴れて行かれなかつた。

知らない處を見度いのは人の情、小夜子は折折酒匂の別莊が見度いやうな心持もする、何ういふ譯で自分だけが伴れて行かれないか知らん、是程可愛がつて下さるのに、一度位は伴れて行つて下すつても可ささうなものだと、内内不平に思はない事も無かつた、なれども酒匂へ往かないのは自分ばかりで無い、何ういふものか勇も滅多に酒匂へ往つた事が無い、先年東海道を遊歴した歸り途に、一度酒匂へ寄つた事のあるのみで、其後は日歸りにも出かけた事が無い、それぱかりか自分に向つては酒匂の噂も爲た事が無い。

或時小夜子は昔の事から風景の話に移つたので、好き折ぞと勇に酒匂の事を尋ねた。

「景色と云へば、酒匂にある御別莊も、大層佳い景色で面白い處だといふ事ですが、あなたは滅多にいらつしやいませんネ」

斯う云はれて勇の顏の色は俄に動搖した、されど忽ちその動搖を鎭めて、平日の通り莊重なる態度となつた。

「あれは親の別莊ですもの」

と簡單な答に深い意味があるやうに言つた、されど小夜子にはその意味が急に解し得られない。

「ぢやあなたのお別莊でないといふ譯ですか」

勇は少しく顏を和げて幾分の笑を帶びた。

「小夜子さん、あなたも御存知の通り僕は少少偏屈ですからネ、親の建てた別莊へ、子供が我物顏して遊びに行くのは濟まない譯だと思つてゐます、況して親の別莊を自分の別莊だなんぞと思つたり吹聽したりするのは心得違ひだと信じてゐます、僕自身の力で建てた別莊なら、遠慮なく遊びにも行きますけれども、僕はまだ別莊遊びをする程の身分になりません」

小夜子は初めて成程と思つた、勇の主義ならさもあらうと了解した、勇の覺悟の健氣さに引換へて、自分が身の程も顧みず、往つて見度いと思つたのは惡かつた、モーモー決して分に過ぎた事を思ふまいと深く心に戒めて、其後は酒匂の事を口にも出さなかつた。

二

酒匂の別莊には小夜子に對する祕密がある、鳥海家の人達は此の祕密を小夜子に知らせまいと、平生竊に心を勞してゐた、昔別莊の裏で小夜子を拾つた當時の留守番も奉公人も、今は幾度か代つて新しい人になつてゐるけれども、其時乳を飮ませて東京まで伴れて來た百姓家の嫁女は、今大勢の子持になつてゐる、停車場まで送迎した車夫もその近所にゐるらしい、もしや小夜子を別莊へ伴れて行つて、祕密の鍵が破れたら、小夜子の爲めの大不幸であると、

鳥海夫人は深く注意して、小夜子を一度も酒匂へ伴れて行かなかつた。

さりながら小夜子を伴れて行かない事も亦た一つの苦痛である、小夜子が其事を不審に思つて、疑ひの心を生じては、却て秘密に近寄らしめる動機とならう、小夜子は未だ深く人事を解せざる中に、青森の自宅を離れたから、栗山夫婦を實の父母と信じてゐる、母に對して氣兼ばかりしてゐたけれども、心ではまだ實の母たる事を疑はない、以前傍にゐた時よりも、今離れてゐて稀に母の手紙を受取ると、嬉しさに泣いてゐる事もある、此の小夜子に何うか少しでも身分に關する疑心を發させ度くないと、これも亦た鳥海夫人や勇等の心配であつた。

勇が酒匂の別莊へ往かないのは、自分の主義もさる事ながら、一つには小夜子の心を酒匂へ向けしめまいとの苦心もある、勇は小夜子をして幸福ならしめる事とは、自分の責任だと信じてゐる。自分が栗山大佐から預つて、保護者の地位にあるものだと覺悟してゐる、勇の心には以前大佐と共に小夜子を拾つた時の事を忘れない、今は身の丈も五尺に餘り、知らぬ人からは一つ二つ年長に見られる程の娘になつてゐるけれども、勇の眼から小夜子を見ると、いつでも赤兒の時の事が聯想されて、まだ小さな可愛らしい者の樣に思はれる、自分が預かつた以上は自分の仕向け次第で、如何なる人物にでも仕上げ得られるやうな心持がしてゐる。

それが爲めに勇は自分の責任と云ふよりも、寧ろ半は自分の道樂として、小夜子を理想通りの娘に仕立て度いと思つた、學業の事は更にも言はず、每日の動作から性格まで、一步一步自分の理想に近づけて行くのが、勇に取つては何よりの樂みであつた。

勇は自分の妹の美代子孃が、あまりに姬君育ちであつた爲め、嫁入してから尠からぬ苦痛を嘗めてゐる事を知つた、收入の少ない家庭を維持するに、奉公人を多く使はなければ、手廻らないで困る樣子を目擊してゐる、それを一つの戒めとして、小夜子には成るべく、學事の暇には臺所をも手傳ふやう、奉公人と一緒に立働いて、家政の事も覺えるやう、或時は伯母の肩を揉んで按摩の稽古も爲て置くやう、病人があつて看護婦でも來た時は、其の手助けをして看護術を習ふやうと、常に小夜子を慫慂した、小夜子も亦た心を虛しくして勇の勸めに隨つた、勇の理想は自分の理想、自分は心が弱いから、身體に骨を折つても心の樂な身の上になり度いと思つた、榮耀榮華は望まない代りに、いつでも苦勞の無いやうに爲てゐ度いものだと、人生の問題が少しづつ解つて來るに連れて、折折そんな事を考へた。

小夜子が十八になつた年の夏、鳥海夫婦は避暑の爲めに酒匂の別莊に往つてゐたが、鳥海夫人が惡性の流行性感冒に罹つて、遂に肺炎を惹起した、熱は四十度の上に滯留して、三日過ぎても容易に下らない、近傍の醫師も手を束ねた、東京の留守宅へ電報が來て、看護婦を一人送るやう、又懇意な醫學博士を賴んで、同道して來るやうにと、勇の許へ言つて來た。

勇は東西に奔走して、即日に看護婦を酒匂へ送り、翌日の午後には醫學博士某を同道して別莊へ行く事に手筈を定めた、伯母の病氣と聞いて心配したのは小夜子孃、自分も平生看護術を習つてゐるから、斯ういふ時に看護婦の手助けを爲度い、丁度學校は休暇だし、役に立つなら自分も一緒に伴れて行つて呉れと、勇に賴んだ。

勇は今更それを拒む譯にならなかつた、外に拒むべき理由が無い、拒めば疑ひを生ずるであらう、よしよし自分が一緒に行つて、蔭ともなり日向ともなり、十分に小夜子を保護して、秘

密の鍵に近づかしめまいと、思案を定めて快く小夜子を同伴する事にした。

　愈よ當日となつた、勇は小夜子と共に、新橋の停車場にて醫學博士を待合せ、一等客車に乘つて國府津の停車場に着いたが、人の眼に付く娘盛り、停車場でも汽車の中でも、人がじろじろ小夜子の顏を視るので、勇は何となく心配であつた、停車場から俥を驅つて別莊へ行く途中でも、行く人が小夜子を振返つて見ると、勇は心でヒヤヒヤした。

　醫學博士は夜汽車で歸京した、看護婦と小夜子は一生懸命に病人を看護して、一日一晩は夜も碌に寢なかつたが、三日目に熱が分離して、病勢も忽ち衰へた。

　熱が去れば恢復も速い此の病氣、鳥海夫人は一週間程過ぎると、日中は床の上に起きてゐられるやうになつた、病中殊に感じたのは小夜子の親切な看護介抱、それが爲めに病氣の快癒も速かつたやうに思はれる、夫人は或日小夜子にその親切を謝して、

「小夜子さんは此へ來てから、まだ濱へも出た事が無いやうだネ、今日は誰かと一緒に濱の景色を觀に行つて御覽」

　それを聞くと傍にゐた勇が、迂つかり餘人には委されぬと、

「小夜子さん、僕が案内しませう、濱の景色も佳いが、川口の方へ行くと、川上から連山を望んだ景色が格別ですよ」

　成るべく人の寡い川口の方角へ導いて行く所存、小夜子はその心を知らず、

「ぢや、スケッチブックを持つて行つて、その景色を寫して來ませう」

　勇はあまりに暇取るも懸念なれど、さりとて無下に小夜子の望みを壓へんも心無し。

「ざつとスケッチしたら、家へ歸つてから本式に描いて御覽なさい」

　別莊生活の氣樂さに、小夜子はその儘衣服も改めず、スケッチブックと畫筆とを無造作に持つて、勇と共に庭口へ出た、勇は勝手元から麥藁製の大きな海水帽子を二つ持つて來て、

「小夜子さん、日に焦けると不可いから、これを冠つておいでなさい」

　小夜子は別に日焦を厭はない。

「アラ私は宜う御座いますよ、日に焦けたつて關やあしません」

勇「イヤイヤ、濱の日は強いから、マアお冠りなさい、僕も大事な顏を黑くすると困るから冠りますよ」

　滅多に言はない戲言も、深い心のありとは知らず、勇の言葉には何事も逆らはぬ小夜子とて、束髮の上に帽子を載せて、細い紐を頸の下で緩く結んだ、勇は麥藁帽をスポリと冠つて、紐も結ばずその儘に、小夜子の先に立つて木戸口の方へ行き、小さい木戸を開いて裏口へ出た。

　木戸口の前には昔ながらの雜草や灌木が、丈も延びず葉も繁らず、濱風に吹き荒されて、年年歳歳枯れては生じ、同じ姿で垣の外を繞つてゐる、勇は昔此の草の中で、幼い小夜子を拾つた事が、端無く腦裡に映じて來て、今の姿と想ひ比べ、心の中に今昔の感が生じた、それと同時に懸念の氣も深くなつて、態と足早にその前を通り過ぎ、人多き渚の方へ向はないで、酒匂の川口へ進んで行つた。

　小夜子は初めて濱へ出た事とて、眼前の景色の面白く、勇の足の速いのが心無いやうに思はれた。

「勇さん、マア待つて頂戴よ、此から見た景色も大層良いぢやありませんか、家から見たより、大島の烟が復た良く見えますネ」

　勇はちよいと立留まつた。

「漁師はあの烟で風の方角を識るのですが、今は南風だから烟が上に立つてゐますよ」

濱邊には近所の別莊や旅館から出たらしい都人が、三三五五と徘徊してゐる、國府津寄りの砂濱では大勢の漁師が地引網の綱を引いてゐる、沖には漁船が木の葉を撒いたやうに浮いてゐて、空に飛び交ふ白い鷗の珍らしさ、日は今西に傾いて、伊豆の山山には綿のやうな雲が峯傳ひに靉靆いてゐる、眞鶴の崎の鬱蒼として黝みたる、小田原の濱の白浪が帶のやうに連れるなんど、小夜子の眼には何物も皆な珍らしく思はれる。

「勇さん、青森の海に比べると、此方の濱は何となく陽氣ですネ、あの地引を引いてゐる處なんぞも、スケッチなら面白い畫が出來ませうネ」

勇は成るべく此邊に長く小夜子を立たせ度くない。

「あれも惡くはありませんが、此の邊で畫を描いてゐると、村の子供が寄つて來て、煩さくつて仕樣がありませんよ、向うの川口は人が來なくて靜ですから、早く彼處へ行きませう」

酒匂川の海に落つる處は、水と波と闘つて、白い泡が輪のやうに浮いてゐる、砂が白い、海に突出て、その內側は川水が灣曲し、亂杭に鷺が二三羽止まつてゐる。

小夜子は勇の後に跟いて、川口の砂濱へ進んだが、勇に指ざされて川上を望むと、連山平野を蔽つて、宛然たる天然の一大畫幅。

「アラ、ホントに佳い景色ですネ」

三

小夜子と勇が濱へ出た少し後に、田舍から肥料車を挽いて別莊の門內へ入つて來た四十恰好の百姓男、車を裏口へ牽込んで置いて、光澤の好い茄子の澤山納れてある大きな笊を留守番小屋へ持つて行つた。

「小父さん、大きに御無沙汰をしましたよ」

留守番小屋で煙草を吸つてゐた六十許の老爺は、親しい友達でも來たやうに、顏の相好を崩して愛嬌好く、

「オー權六さん、待つてゐたよ、此頃はお人が多くつて便所が閊へるから、モー二三日來なきや手紙を出さうと思つてゐた」

權六は茄子の笊を重さうにドタリと框に置いた。

「もつと早く來ようと思つたが、畑が忙しいんで遲くなりました、時に是れは今畑から挽いで來たんだが、美味しかあねいけんど、お勝手へ差上げて下さい」

老爺は氣の毒さうな顏して、

「止しなされば宜い、來るたんびに斯んなものを貰つちやお氣の毒だネ、ただでさへおまへさんの作れる野菜物は何時でも美味しくつて、八百屋の物なんぞは食べられないから、お奧だつて何んなにお喜びだか知れない、マア、ナンてい色の善い茄子だらう、おまへさんは餘つ程農事が上手だと見えるネー」

權六は謙遜する風に揉手をして、

「ナーニ良くは出來ねいけんど、新しいだけが長所さネ、時に此頃は大勢のお客樣が來て在らつしやるのかネ」

老爺は火鉢に掛けてある土瓶の茶を有觸茶碗に注いで權六の前に出した。

「此頃中は奧樣が御病氣でなう、醫者樣も來なさるし、東京から看護婦さんだの、御親類のお孃さんだの、それに若樣も來て在らつしやるよ」

權六は茶を飲みながら、

「それは御心配だネ、御病氣は何んな御樣子だえ」

老爺「モー大層およろしくつて、床の上に起きて在らつしやるから、今日は若樣やお孃樣も初めて濱へ出ましつた位だ」

權六は先程からそのお孃樣の事が聞き度くてならない。

「お孃樣とは折折此でお見上げ申したお孃樣

かネ

老爺「ナーニ、御親類のお孃樣よ、お屋敷のお孃樣は疾つくにお嫁にいらしつて、今ぢや奥樣だ、四五日前にちよいとお見舞にいらしつたが、お忙しいさうで直ぐお歸りになつた」

權六「御親類のお孃樣は毎度此方へもいらつしやるかネ」

老爺「イイエ、今度が初めてよ、わしも東京のお屋敷へ往つた時お見上げ申した事があるが、わしが此へ來てからまだ一度も來さしつた事がねい、今度若樣と御一緒にいらしつて、奥樣の御看病をなすつたが、それはそれはお綺麗なお孃樣だよ、お色がお白くつて、お脊がお高くつて、さう云つちや惡いけんど、お屋敷のお孃樣より餘つ程お綺麗たよ」

權六「お年頃は」

老爺「十八九だらう、先刻濱へいらしつたが、今にお歸りになるから、そつと見上げて置きねえ」

權六「ハア、難有う、全體そのお孃樣のお家は何處なんだネ」

老爺「何でも青森とか云ふ事だ、此方の殿樣のお姪子樣だと云ふが、東京のお屋敷へ來て學校へ通つていらつしやるんだよ」

と權六は何も詳しく訊き度いけれども、あまりに根掘り葉掘り尋ねては惡からうと思つて話を轉じた。

「ぢや小父さんも忙しかつたネ」

老爺「ウム、此の二三日漸と少し樂になつたんだ」

權六は何か想ひ出したやうな顏して、

「小父さん、俺は今此の先の御別莊まで物を持つて行くから、歸りに寄つて肥料を汲るよ、それまで此の笊を預かつて置いて下せい」

老爺「ああ、ゆつくり往つて來さつせいよ」

權六は何氣無き體に門の外へ出たが、垣根傳ひに裏口へ廻つて、一散に濱の方へ驅け出した。

權六はそのお孃樣こそ、日頃自分が一目でも見たいと思つてゐるお方に違ひ無いと喜んだ、十數年來此の別莊に出入して、肥料も他人より割を好く引取り、留守番の人にも氣に入られ、來る度に新しい野菜物を土産にするのは、そのお孃樣の消息を知り度い爲めであつた、以前の留守番から栗山大佐のお孃樣が東京のお屋敷へ來てゐる事を聞いてゐた、その年齡や相貌を懷ひ合せると、確にその人と思はれるけれども、まだ一度も顏を見ない、顏さへ見れば必定何處かに肖た處があらう、何うか一度でも餘所ながらその顏を見度いものだと、多古の觀音樣へ願をかけて祈つてゐたのだ、今の談に、若樣と一緒に濱へ出られたと云ふから、多分まだ濱にいらつしやるだらう、ハテ何の邊か知らん、地引の近所か、國府津の方かと、隈無く走り廻つて尋ねたが、それらしい人も見當らない、尋ねあぐんで、失望顏に川口の方へ往つて見ると、顏は見えねど、若い男女が岸邊の草に腰かけて、一人は頻に畫を描いてゐる、權六はてつきりそれと音せぬやうに近寄つて行つた。

四

權六が川口へ近寄つた時、橋の下の亂杭の間で、笊や手網を持つて小魚を掬つてゐた村の子供が六人、岸を傳はつて川下の方へ降つて來たが、一人が忽ち振返つて、

「ヤア、女の書生さんが畫を描いてらあ、皆んな來て見ろ、ヤーイ」

笊を持つたまま、バタバタと小夜子の側へ馳せ寄つた、手網を持つた子も驅けて來た、一番小さい十ばかりの子は、小魚の納れてある小桶を重さうに兩手で抱いて、よちよちと急いで來る、禮儀も知らぬ子供達、ズラリと前に列んで覗くので、勇は煩さしと云はぬばかりに、

「コラコラ側へ寄つて來ちや不可ん」

と顏を揚げて見れば、子供の背後には大きな

男も立つてゐて、畫を覗いたり、小夜子の顔を覗いたりしてゐる。

勇は急に氣忙しなくなつた、速く此を切上げて別莊へ歸り度くなつた。

「小夜子さん、何處まで描けましたネ、酒匂の橋や釣人なんぞは良く出來ました、また向うの山や森なんぞを採らなければなりませんネ、斯うしませう、半分は僕が手傳つて輪郭を採りますから、家へ行つて緩つくりお描きなさい」

小夜子は風景の廣くして深いだけに、スケッチがむつかしくつて困つてゐたから、嬉しさうに紙と筆を勇に渡した。

「さうして下されば助かりますわ、今漸と橋だけ描いたばかりですもの」

勇は筆を採つて紙に臨むと、山の姿川の流れ、活然として紙面に露はれて來る、小夜子は心中に今更ながら勇の手腕の凡に超えたるを感じて、瞬目も撓らずに、その筆の動く通りを視てゐた。

子供等は倦厭たと見えて、いつの間にか立去つた、大きな男も何處へ行つたか姿は見えない、四邊は唯だ、森閑になつた、勇は漸々、心を安めて、

「小夜子さん、酒匂の山は畫きましたから此の下の方をあなた描いて御覽なさい」

小夜子は是れも稽古だと筆を採つて、

「あなたのお描きなすつた下へ、私が下手なものを描くと、折角の畫が無價しになりますネ」

「ナニ關やあしません、合作ですもの」

合作と言はれて小夜子は嬉しいといふよりも寧ろ難有いといふやうな感じがした。

「私のやうな畫に合作なすつては、あなたのお筆が汚れます」

勇は微笑んだ。

「あなたの畫となら何時でも合作しますよ」

小夜子は勇が平生、苟も筆を採らない事を知つてゐる、他の美術家とも交際せず、常に獨立獨行の主義を唱へて、他人と合作した事の無いのを知つてゐる、その勇が自分の畫と合作して異れる事は、深い慈悲である、特別の恩惠であると、涙を泛べんばかりに感激した。

「コラ斯んなものが出來て了ひましたよ」

漸く描き上げて差かしさうに勇の前へ出した、勇はちよいと眺めて、

「結構、結構、家へ歸つたら、一生懸命に此の畫を描いて御覽なさい、必定今迄に無いやうな立派な畫が出來ますよ」

小夜子は時えるやうな目付で、

「其時も矢つ張り合作に爲て下さいますか」

勇は笑つた。

「さあ、合作にしませうかネ」

勇は立上つて家路に歸らうとしてゐるけれども、小夜子は何だか此場を去るのが惜しいやうな氣がして容易に立ち得なかつた、風景に惹入れられたか、深い興味に醉はされたか、今迄嘗て覺えた事の無い一種微妙の感じが生じて、天上の世界にでも遊んでゐるやうな心地がしてゐる。

忽ち別莊の方から、四邊をキョロキョロ眺めながら、大急ぎで歩いて來た留守番の老爺、二人の姿を見ると、一段と足を速めて側へ寄つた。

「若樣も小夜子樣も、斯んな處に在らつしやいましたか、只今東京から電報を送つて來まして、奧樣がそれをあなた方に見せろと仰しやいました」

一枚の電報紙を二人の前に出した、勇が手に執つて讀み下し、

「トウケイヘテンニンスル、シヤクヤヲサガシテクダサイ、クリヤマ、小夜子さん、叔父さんは東京へ御轉任たと見えますネ」

小夜子は嬉しさうに、

「アラ爾うですか」

、正體を見てゐた、勇の心中には栗山一家の東京へ引移る事は、小夜子の爲めに善いか惡いかと疑つた、兎に角二人は老爺と共に道を急いで別莊へ戾つたが、雪隱口で下肥を汲んでゐる權六は、遂に二人の庭口から入つて來る姿を眺めて、ホロリホロリと涙を隕した。

參詣

一

「南無や大慈大悲の觀音樣、何卒私のお育て申したお孃樣が、行末冥加あらせられますやう、又一つには私事のお願ひながら、棄てた我子の無事息災で居りますやう」

內陣の前で一心不亂に祈念してゐる四十恰好の人柄な女、兩掌を合せ珠數を揉み、脇目も振らずに口の中で、觀音經を讀誦してゐた。

御堂の內は常に變らぬ群集雜沓、五厘や一錢の銅貨を賽錢箱に投込んで、無造作に禮拜して去る者もあり、お蠟燭を上げて熱心に祈願する者もあり、內陣に一禮もせず、見物がてらに繪馬の額を、一つ一つ眺めて步く人もある、子供は駈け廻り、犬も走り、人も押合ふ混雜の中に、今しも階段を昇つて、四邊の人をそれかこれかと眺めながら、女の背後へ來た男は、橫合からちよいとその袂を掴いで、

「オヽ姉や、此に居たかえ」

女は振返つた。

「權六か、いつ來たのう」

田舍者の權六は殊勝氣に先づ懷中から蟇口を出して、一錢銅貨を賽錢箱へ投込み、丁寧に合掌して禮拜した後、

「姉や、今おまへの跡を追つかけて來たのよ、昨日東京へ來てなう、今朝お屋敷へ上つたら、おまへは淺草の觀音樣へお參りに行つたといふから、直ぐに此方へ遣つて來た、時に姉や、早速おまへに話し度い事があるんだから、堂外へ出て茶屋へでも休みねいな」

お藤は幾度も內陣に向つて禮拜し、膝が倦怠くなつたといふ風に、やをら身を起して弟と共に御堂を降りた、堂の前には幾百羽とも數知れぬ鳩が、人の撒いた豆を折累なるやうにして拾つてゐる、四邊の茶屋には人が多い、權六は成るべく靜な處を搜さうと、矢大臣門の方へ廻つて、御堂の背後へ出ると、一軒の腰掛茶屋には折好く客が居なかつた。

權六は姉を誘つて茶屋へ入つたが、人目を避けるやうに、奧の片隅へ腰かけて、茶や菓子を貰ひ、四邊を憚る低聲で、

「姉や、おらあ先月酒匂の御別莊でな、初めてきい坊を見たよ」

之を聞くとお藤は思はず前へ摺り寄つた。

「ど、ど、どんな娘になつてゐたえ」

心が急いて、呼吸も喘んでゐる、權六は態と沈着いて、

「マア聞きねい、初めつから話さなきや譯が解かんねいが、おらあ何うかしてきい坊の事が知り度いと思つて、あの御別莊へ肥料を取りに行くと、いつでも氣を付けてゐるけんど、今迄一度もそれらしい人が來た事もねい、此の前にゐたお留守番の話ぢや、何でも青森の御親類から娘さんが一人、東京のお屋敷へ來て學校へ通つてゐなさると聞いたが、御別莊へは來ましつた事がねいといふこんだ、おらもなあ、東京へ出た時、御本郷の近所へ行つて、その娘さんを見度いと思つたりしたが、滅多に東京へも出ねいし、出ると飛脚のやうに直ぐ歸らにやなんねいからなあ」

談話の道行が長いのでお藤は焦かしく、

「そんな事は跡でも可いが、きい坊はどんな風をしてゐたえ、嘸大きくなつたらうネー」

權六「ウム、數へて見りや十八だもの、大きくもなるべいぢやねいか、先月肥料取りに御別莊へ

行つたら、丁度その娘さんが來てゐて、若樣と御一緒に今海岸へお出なすつたといふから、おらあ外の御別莊へ行くやうな風をして、そつと海岸へ出て、各處捜すとなあ、酒匂の川口の處で、若樣と御一緒に畫を描いてゐさしつた、見物してゐる子供達の後ろから、そつとその顏を覗いた時、おらあ魂消ちやつたよ」

お藤は顏を前に突出して、

「ナゼ、何うして、何んな顏をしてゐたえ」

權六「どんなにも、こんなにもつて、その綺麗な事つてつたら、色が透徹るやうに白くつて、鼻が高くつて、眼がパッチリとしてゐて、髮の毛が濃くつて、おらあ是れがきい坊か知らんと、よくよく見たら、矢つ張り爭はれねいもんで、何處かおまへの若い時に肖てゐらあ、それに幼顏も殘つてゐるし、誰に聞かねいでも、きい坊に違えねいと思つたら、おらあ何だか嬉しいやうで、自然に涙が出たよ」

聽いてゐるお藤は感慨無量に迫つて手巾で鼻を押へた。

「そんな佳い氣になつたかネ！」

嬉しいやうな、悲しいやうな、懐かしいやうな氣がして、何とも言ひ知れぬ心持になつた、今更我身の罪が恐ろしい、拾つて下さつたお孃樣の難有さよ。

「だけどもネ權六や、おまへはその人達に氣取られるやうな事は爲なかつたらうネ、訝しい樣子だなんぞと思はれるやうな事は無かつたらうネ」

權六は幾度も頷いた。

「それは言ふまでもねい、大丈夫だよ、おらだつてあの子の爲めにならねいやうな事は爲ねい、向うの人達は一生懸命に畫を描いてゐたから、誰が覗いたか知つてゐやあしねいが、おらも直ぐに御別莊へ戻つて、それから顏を出さねいから、氣が付きつこねい」

お藤は漸く心を安めた。

「それなら宜いけれど、若しやひよつとそのお孃樣のお爲めにならない事でもあると大變だからネ」

權六も同じ苦心だ。

「だからよ、おらあお留守番の人にそのお孃さんの樣子を訊きていと思つたが、態と何にも訊かねいで、其日は默つて歸つちやつた、それから早く東京へ出て、おまへに此事を話さうと思つたけんど、野良の仕事が忙しいので、漸と昨日出て來たが、おまへに會ふ前に、そのお孃さんの事をよく調べて置かうと思つて、昨日は青山南町の鳥海樣の近所を廻つて、髮結床へ入つたり、蕎麥屋へ寄つたりして、それと無く訊いて歩いた」

お藤は思はず膝を前に進めた。

「そして樣子が判かつたかえ」

權六「ああ、概略の事は判かつたよ、そのお孃さんは栗山小夜子さんといつての、先月まで鳥海樣のお本邸に居なすつて、女學校へ通ひなすつたが、先月青森からその親御樣の栗山大佐が東京へお引越になつて、今ぢやお孃さんも御自分の家へお歸りになつたといふ事だ」

お藤「そのお家は何處だえ」

權六「それも直き青山から近い處で、麻布の笄町だといふから、おらあその笄町に廻つて、お邸の御樣子を見たが、大層お庭も廣くつて立派なお邸だよ」

お藤はあまりの嬉しさに半は夢のやうな氣がしてゐる。

「ホントにきい坊は幸運だネー、わたしの子だつたら、今頃は工女か守子位にしきやなつてゐないものを、そんな立派なお孃樣になつて、學校にまで通つてゐるとは、何といふ難有い事だらう、わたしやその親御樣に、どんなお禮でも申し度いよ

權六は東山家の內情を探つただけは話して置いたといふ風に顏を前へ突出した。
「姉や、栗山さんにはまだ一人妹さんがあつてなう、女二人、御同胞なんだ、妹さんの方はそれほど容色も佳くないが、きい坊の小夜子さんは、あの界隈で評判なお孃樣だとよ」
お藤はほくほく喜んで、
「そんなに容色が佳いかネー」
權六「佳いにも惡いにも、マア一度顏を覗て見ねい、是れから一緒に麻布まで往きや、今日は土曜日でお孃樣が學校から歸つて來るから、橫町にでも隱れてゐて、そつと顏を覗いて見ねい」
お藤は嬉しさうに、
「おや、何うしようか、一目でも可いからあの子の顏が見度いよ」
相談は決して二人は茶店を立出でた、お藤は心が急かれて、さつさと獨りで先へ行く。

二

お藤は元來根岸の時原家といふ貴族院議員の家に奉公してゐる、十八年以前お孃樣の乳母に上り、其儘お孃樣の生長と共に、お附女中となつて、今日までも勤續したから、主人夫婦にも無きものよと愛されてゐる。
お藤は常に觀音樣を信心した、鄕里にゐる時は每月多古の觀音樣へ參詣し、國元から觀音經を教はつて每日それを讀んでゐたが、東京へ來てからも、自分の部屋に觀音樣の畫像を飾り、朝か夜には必ず御經を讀誦した、或時其の事が主人の耳に入り、信心は何より善い事だから、以來每月淺草の觀世音へ參詣するやうにと、公然の許しが出たので、其後は月に一度づつ、必ず淺草へお參りして、まだ一回も缺かした事が無い、お藤は觀音樣へお參りすると、先づ第一にお屋敷のお孃樣の冥福を祈り、次には必ず棄てた我子の無事息災であらん事をお願ひ申した。
お藤は先年棄てた子が、鳥海家の人達に拾はれた事を知つてゐる、見違へる程綺麗になつて、東京へ伴れて行かれた事は、或人の報告で聞いてゐる、それから自分が東京へ出て、時原家に奉公した後も、我子の事を忘れた折は無い、何んな人に育てられて、何んな身の上になつたかと、春雨の徒然や、秋の長夜の寢覺には、我子の行方を案じてゐた、さればとて自ら鳥海家の本邸を尋ねて、よそながらその消息を知らうとまでは爲なかつた、自分の罪が恐ろしい、迂つかりした事を爲て、露顯の種となつてはならぬと、無理に抑へて知らぬ顏に過してゐた、されど[illegible]は權六に折折酒匂の別莊へ野菜物を賣りに行き、それと無く樣子を探つて見ると、拾はれた子は御親類へ引取られ、數年の後には遠い國へ引越されたと噂話に聞知つた、その後權六は傳手を求めて別莊の肥料取に入り込み、心をつけて我が姪の行方を尋ねた甲斐があつて、今度といふ今度こそ、その成行が遂に知れた
十八年の昔ながら、酒匂の濱の草原へ我子を棄てた時の事は、今も猶ほお藤の網膜に殘つてゐる、その幼兒の愛らしい顏がまだ眼の前に見えてゐる、別れた時の辛さ悲しさ、血を吐くやうな心の中も、また彰彰と記憶に存して、昨日か今日のやうに思はれる、その時の幼兒が、今は立派な娘になつて、栗山大佐の令孃と、人にも評判せられるかと思ふと、お藤は唯夢のやうな心地で、一刻も速くその顏が見度い。
お藤は嬉しさに氣が急いて權六の先立ちに、御堂の横を廻つて仁王門の前まで進んだ時、忽ち耳元でゴーンと衝き出した時の鐘が、雨催ひの曇つた空に反響して、唸るやうに大地へ響いた。
お藤は常に無く鐘の音に吃驚して思はず立停まつた、興奮せる神經はものの響に感じ易い、お藤は耳を貫かれるやうに思つて、鐘の音が何

とな〳〵氣になつた、三つ四つ五つと鐘は續いて鳴つてゐる、その餘韻がいつまでも振動して、心の底まで響いて來る。

　お藤は茫然として夢の覺めたやうに、初めて我に還つた、神氣が鎭まつて、平生の心持になると、急に我身を顧みて悲しくなつた。

―なら權六や、わたしはモー[illegible]へ行く事は廢しますよ―

　と涙ぐんで後方を振返つた、權六は驚いて、

―ナゼ、何故廢すのう―

　お藤は深い感慨に堪へない態度で、首を少し低れた。

―だつてもネー、わたしだつてあの子の顏を見度いのは山山だけれども、よく考へて見ると、あのきい坊は一旦棄てた子だもの、言はば親子の縁を切つたんだもの、今更立派な人にならうとも、自分の子だなんぞと思つちや濟まないよ、それやモーわたしだつて、あの子の無事であるやうにと、觀音樣へお願ひ申すけれども、それはホンの私事、觀音樣の御利益で、立派な身の上になつてゐれば、それでモー安心だ、此上に未練な氣を出して、あの子に逢はうと思つたら、觀音樣の罰が當る、わたしやモーあの子の顏を見ないよ

　深く決心したやうに言つてゐれど、心を抑ふる切なさは流るる涙に知れてゐる、お藤は想ひ出したやうに、御堂の方に身を向けて、恭しく合掌して觀音樣を拜んだ、心の中では今の罪を詫びるのであらう。

　權六は張合が拔けたやうに、

―折角おらが逢はしてやるべいと思つたのになあ、ナニも面と向つて顏を合せるのでも無し、おまへは隱れてゐて、そうつと顏を見りや宜いぢやねいか―

　お藤は首を振つた。

―イイエさうでないよ、おまへの談にも、そのお孃樣はわたしに肖てゐるといふから、もしやお附の女中にでも見られて、よく肖た女が覗いてゐると思はれたら、どんな御迷惑が懸るか知れないよ、折角幸福に育てられてゐるものを、わたし達の事から素性が知れたら、あの子は何んなに困るだらう、モーモー是迄判かれば澤山だから、おまへも是れから酒匂へ行つて、御別莊の人にあの子の事をお訊きでないよ、誰に背つ事を尋ねられても、あの子を棄てたなんぞと言つてお呉れでないよ―

　權六は手持無沙汰、

―そりやおらも承知してゐるけんど、一遍でも可いからおまへにあの顏を見せ度いなあ―

　お藤は堪へられぬ風情で、

―モーモーそんな事を言つてお呉れでない―

　と袖で顏を押へて了つた、權六も姉の胸中を察して、再び其事を多くも言はず、共に仲店へ出て、郷里への土産物を買つたりした、お藤の父は疾くに世を去つて、今は母が樂隱居の身になつてゐる、權六も律義一方で稼ぎ出し、女房との間に五人の子供もあるから、老母は家で孫の守ばかりしてゐるが、お藤は價高き品物を澤山買つて、母や子供への土産にと、權六に持たせて歸して遣つた。

　　二

　同じ邸の内に、我身の事を斯くまでも、思ふ人ありと知る由も無く、小夜子は自宅に引取られてから、再び愁多き身となつた。

　溢るる如き父の慈愛は、毫も昔に變ること無く、母も以前と違ひ、努めて親切に優しくして呉れるけれども、何處かに心の解けぬ節があつて、小夜子は何となく氣が置ける、殊に妹の豐子は、自分獨りが母の愛を專らにしてゐるやうな了簡で、事毎に姉を凌ぐから、小夜子は何事も諦め、目にして堪るだけ、妹に讓つてゐる。

　相變らず自分を愛して、慰ともなり日向とも

なり、何事にも庇つて呉れるのは、七十を越した祖母である、祖母は小夜子が東京へ出てから、いかにも女らしい娘となり、學藝の事から身嗜みまで、自分の好むやうな人になつたので、是れも鳥海家のお蔭だと悦んだ、殊に小夜子が畫を善くする事は、風流心に富める祖母の最も嬉しく思ふ所であつた。

父の大佐は小夜子の畫が驚くほどに上達したのを見て、行末の爲めに飽くまでも畫の稽古を勵むやうにと奨めて呉れた、母は喙を容れて、同じ畫を學ぶなら、名ある大家に就いたら可からう、書生の様な勇さんに習つても、碌な事は覺えられまいと言つたけれども、父はそれを制して、勇は無名の大家である、今迄も勇の畫風を受けたから、今更別人に就くは得策で無い、矢つ張り學校へ通ふ暇に、鳥海家へ立寄つて勇に畫を習ふがよいと、公然の許可が出たので、小夜子は一週間に兩三度づつ、女學校の歸途に鳥海家へ寄つて、勇に就いて畫を學んだ。

妹の豐子は青森の女學校で、一度落第した事のある爲めに、學力が大層遅れてゐる、東京に來たから小夜子と同じ學校に通つたら可からうと、鳥海の伯母は勸めたけれども、姉に比べて成績が違つては當人も心苦しいだらうと、母の意見で外の女學校へ通ふ事になつた、豐子は以前から音曲が好きで、青森でも琴や三味線を習つてゐたから、東京へ來ても學校の歸りがけに、琴の師匠へ通つて、熱心に音曲の稽古をした。

小夜子も今は昔と違つて、少しづつ人生を解して來た、親子の情は如何なるもの、同胞の仲は斯んなものと、世間の事情を知るにつけて、我身の事に何となく心安からぬ疑問が生じた、臺所の思慮無い女中達が、

一御姉妹とはいふけれども、小夜子様と豐子様とは些つとも似たとこがお有りにならないね、それに小夜子様は奥様にも似ていらつしやらないよ一

なぞといふ陰口をいつの間にか耳に挾んだことがある、それに母と父とは同じやうに我身に優しくして呉れるけれども、母の親切には何となくその奥に冷たい處があるやうに思はれる、父は口へ出してこそ我身の事を世話しないけれども、心の奥には深い深い慈愛の籠つてゐる事が自分の心にも通じて來る、世間に親子も多くあるが、自分の父程我身を愛する親は多くあるまい、是を思ひ彼を思ふと、もしや自分は父の實子で、母親が違つてゐるのではあるまいか、世間によく例もあるやうに、外へ出來た子を母が自分の子にして引取つて呉れたのか知らんと、斯うも考へたりした事があつた、されども心を注けて父母達の様子を見るに、そんな氣振は少しも無い、矢つ張り自分は母の實子であつたか知らん、氣が置けたりするのは俗に云ふ性が合はないといふ譯であらうか、イヤイヤ自分の孝行が足りないから、何程に母の氣に入らないのだらう、實の親に對して少しでも疑ひの心を生じたのは、自分の罪が恐ろしいと、頻に後悔して、獨りで泣いた事もあつた。

されど一旦萌した疑問の芽生は容易に消えも失せなかつた、折折は事に觸れて、再び疑問の起る事もあり、後には自ら打消して、モーモー濟んだ事を思ふまいと、努めて忘れようとする事もあつた。

父の寵愛は日に増して深くなる、小夜子の學問が上達するにつけ、畫が上手になるにつけ、又は娘姿が美しくなるにつけ、父は誇りとして知人にも引合せた、小夜子の爲めには畫の道具も上等の品を買つて與へた、詩歌や文章の書冊なぞは、自分が古い版本を買つて來て小夜子に渡す事もあつた、妹の豐子は琴や三味線の高價なものを父に請求つて拒まれると、

一是れが姉さんなら、直ぐに買つて貰へるんだ

けども」
と母に向つて訴へる、さうすると小夜子に對する母の仕打が自然と變つて來る、小夜子も心の中で、
「阿父樣があんまりわたしばかり可愛がつて下さると、却つて辛い事が多い」
なんぞと思ふやうな事もあつた。
それに父の大佐は鳥海家の勇を我子のやうに愛してゐた、勇が遊びに來ると、心を傾けて歡待した、勇の對手にはいつも小夜子を呼出して、三人が睦ましさうに話してゐると、大佐夫人は我が甥ながら、勇の事を惡くばかり言つて、優しい言葉もかけなかつた。
彼是する中に其年も暮れて翌年の春になつた、父は小夜子が、今年こそ女學校を卒業すると言つて悦んでゐた、卒業したら何を習はせよう、畫の稽古は第一として茶の湯生花歌詠む道も學ばせようと、そんな準備まで整へた。
然るに人事の定め無く、二月の初めといふに日露の平和が破れて、大佐は直ちに朝鮮方面へ出征する事となつた、程無く豫備であつた鳥海大將も現役に復して軍務に就かれた、大將の二子もそれぞれ部署に就いて、忽ち征戰中の人となつた。

大佐は家を發するに臨んで、軍人が一旦出陣すれば固より生還を豫期しない、我身が若しも戰歿したら、小夜子は然るべき良人を選んで嫁に遣り、豐子に婿を迎へて栗山の家を繼がしめるやうと、夫人に後事を託して行つた。
大佐が内地を出發した後、小夜子は首尾好く女學校を卒業した、しかも優等生の第一位、卒業式の時には生徒の總代になつた程だから、父が居つたら嘸悦ぶだらうと思つたけれども、戰亂の最中とて手紙さへ容易に屆かない、心の底より卒業を祝つて呉れたのは、家の祖母と鳥海家の勇と二人位なものだつた。
勇は小夜子が女學校を卒業した後、如何なる風に身を持するか、それが何より心配であつた、叔父の大佐からも留守中の事を何分賴むと云はれてゐるから、折折栗山家を見舞つて、何事の相談にも預からうとするけれども、栗山夫人は勇を嫌つて、頓と家庭の事を披瀝けない、勇は栗山家へ往くと、親身の叔母よりも、却て老母の氣に合つて、隱居所でばかり快談してゐる。
父が不在だからといふ事で、母は小夜子の門外へ出る事を好まない、それが爲めに小夜子は、畫の稽古に往く事さへも遠慮して、勇の處へも足が遠くなつた、僅かな事には祖母が小夜子に、裁縫や漢學なんぞを熱心に教へて呉れるから、小夜子も無駄に日を送るやうな事は無かつた、その間に畫も自分で稽古した、歌詠む事も祖母から習つた、詩を作る道も教はつた。
父の大佐は戰地に於て少將に進んだ、每度の合戰に勳功を樹てて、新聞の記事にもその功名談を傳へられたが、翌年の三月五日、奉天戰爭の眞最中といふに、少將は萬寶山の敵壘を陷落せしめた刹那、敵の狙擊彈に中つて壯烈なる戰死を遂げた。
萬寶山は奉天戰の天王山である、之を奪はざれば味方の中央軍は前進すること叶はず、之を奪へば敵の運命は忽ちにして決すべし、此に於て我軍は大擧して六晝夜の間攻擊したれども、敵の抵抗頑强にして容易に弱る色も無い、正面に向ひたる栗山少將大に奮鬪し、左翼の早天に決死隊を率ゐて、無二無三に敵壘へ攻めかかり、必死の奮戰をなして遂に之を奪取したのである、その猛烈なる戰況を聞くものは、皆少將の勇武を賞して、その戰死を惜まないものは無かつた。
惜しまれるほど倘ほ悲みの彌增すは遺族の心中、國の爲めとは云ひながら、恩愛の私情は長に忘れ難く、栗山一家の人人は悲歎の淚

容易に乾く暇が無かつた、其中に殊けて小夜子は誰にも增して力を落した、父の慈愛は身に沁みてゐる、父の高恩は骨に徹してゐる、今その父に死なれては自分の身が愈よ心細くなるやうに感じられて、無量の悲みは慰むるに道が無い、每朝每夜祖母が隱居所にて看經する聲を聞けば、自分も共に佛門にでも入り度くなる。

「お祖母さま、今迄種々なものを教へて戴きましたが、まだお經は一つも教はりません、どうぞ私にもお經を教へて下さい、お父様のお位牌に向つて、私も每日お經を上げ度いと思ひます」

或時折入つて祖母に頼むと、祖母も快く頷いた。

「あゝ、お習ひなさい、お經を覺えて置くのは、矢ッ張り自分の爲めになりますよ、觀音經でも、般若經でも、何でも好きなものを教へて進げるが、先づ最初は讀み易い修證義から習つた方が可いでせう、此に書册があるから、わたしと一緒にお讀みなさい」

黄い表紙の折本を恭しく押戴いて經机の上に披げた。

「サア第一章ですよ、ソレ

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり、生死の中に佛あれば生死無し、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきも無く、涅槃として欣ふべきも無し、是時初めて生死を離るる分あり、唯一大事因縁と究盡すべし、人身得ること難し、佛法値ふこと希れなり、今我等宿善の助くるに依りて、已に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇ひ難き佛法に値ひ奉れり、生死の中の善生、最勝の生なるべし、最勝の善身を徒らにして露命を無事の風に任すること勿れ、無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡無し—

祖母の讀む聲に連れて、小夜子も難有さうに讀んでゐると、障子の外から顔を出した男子が、

「アラ、イヤナ、姉さんはお經を讀んでよ」

四

驚天動地の大戰も、我が日本軍の大勝利に歸して、東洋永遠の平和は玆に恢復し、其年の秋になつて鳥海大將は戰地より凱旋された、嫡男も凱旋した、次男の騎兵大尉は遼陽の戰爭で重傷を負ひ、野戰病院で死去したが、名譽ある戰死者として骨を滿洲の野に埋めた。

出征の將士が戰捷の名譽を擔つて凱旋するを見るにつけ、栗山家の人人は誰しも少將の事を懷はないものは無かつた。

鳥海大將は東京に歸ると、先づ妹の栗山夫人を訪ひ、故少將が戰地に於ける勳功談や戰死當時の狀況などを物語つた末、少將の無い後は、廣い邸に居て無駄な入費を使ふに及ばぬから、早く小さい家に引移つたら可からうと忠告した。

栗山夫人は唯唯として兄の忠言を聞いたけれども、其後一向に外の家を尋ねて引移るやうな氣色も無かつた、夫人は以前より、恤兵會とか婦人會とか、各種の會合がある每に必ず顔を出して公共の事に奔走した、何會の幹事とか名譽員とかに推薦せられると、何よりの名譽と喜んだ、今は良人の代りに自分が天晴れ國家の事業に盡力する所存でゐるから、交際上の外見を飾る爲め、狹い家に移る事を好まなかつたのである。

翌年の春には大將中の故參なりし鳥海大將が男爵を授けられた、栗山夫人は自分の名譽の樣に悅んで、誰に逢つても兄の男爵を擔ぎ出

す爲め、人の蔭口に男爵屋夫人と綽名せらるるやうになつた、されば栗山圓子といふ名は、少將の未亡人といふよりも、男爵の令妹として交際社會に知られてゐた。

故少將の存生中よりも、近頃の方が栗山家の生活は却て派手になつて來た、少將は質素簡易を好んだから、家人の衣服が華美に流れる事を戒めたが、今は栗山夫人が交際社會に出づる必要上、隨分思ひ切つた贅澤な服裝をする、隨つて小夜子や鞠子にも、人の目に附くやうな衣服を着せて、成るべく人中へ伴れて出る、鞠子はそれを悦んだけれども、内氣な小夜子は心苦しく思つてゐた。

小夜子の樂みは家に居て畫の稽古を勵み、一週間に一度づつそれを勇の處へ持つて行つて直して貰ふ事だ、小夜子は鳥海家へ往くと、自分の故郷へでも歸つたやうな氣がして、一時間でも長く遊んでゐたかつた、されど勇は近頃折折[illegible]に出て、一日も二日も歸らぬ事が多いので、小夜子にはそれが何より苦痛であつた、今年の秋は木曾山中に籠つて、天下の絶景と稱せらるる木曾の秋景色を描くと云つてゐたから、復た當分不在になるだらうと、小夜子は心細く思つてゐた。

栗山家には近頃新しい種類の人が多く出入りするやうになつた、少將の知人朋友は殆ど跡を絶つて、銀行員だの、會社員だの、或は輕薄らしい商人などが毎日のやうに夫人を訪ねて來る、新聞の外に相場表などが屆いて來る、夫人は何でも會社事業か株の相場にでも手を出してゐるらしい。

昔氣質の物堅い祖母は、斯る有樣を見て竊に歎息したが、何事も前世の約束と諦めて、嫁の爲る事に喙を容れない、自分獨りは暇ある每に、神社佛閣へ參詣する事を何よりの樂しみとしてゐた、折には小夜子を伴れて行く事もあつたが、小夜子はその方が母に伴れられて劇場へ行くよりも嬉しかつた。

夏も過ぎて秋となつた、鳥海勇は彩管を携へて木曾山中へ赴いた、小夜子は畫を描くにも張合拔けて、成るべく祖母の出る時同行し、お寺でお說教でもあると祖母と共に悅んで聽きに行つた

今日も祖母は朝から川崎のお大師樣へお參りに行くと云つて支度をしてゐる、小夜子もお供をしませうと云つて、母にその事を告げると、母は大層改まつた口氣で、

「小夜子や、おまへは今日家に用があるから、何處へも行つてお呉れでない、お祖母樣のお供は竹にでもさせますよ」

年增の女中を祖母に附けて、朝早くから出してやつた、小夜子は今日に限つて、自分に用があるとは何んな事だらうと思つてゐた。

祖母の出て行つた後に、母は急に下男に命じて風呂の用意をさせるやら、臺所へ出て料理の獻立を作るやら、その態度の事々しきに、小夜子は愈よ不審に思つてゐると、母は小夜子を自分の居室へ呼んだ。

「小夜子や、ちよいと此へお坐りよ」

常に變つて勿體らしい態度だが、その顏には一種の悅びを宿して、何處と無く嬉し氣に見えてゐる、小夜子は滅多に母の斯くまで嬉しさうな顏を見た事が無い。

「ハイ、何か御用で御座いますか」

母の前に來つて慇懃に兩手を突いた、母は優しい言葉で、

「もつと此方へお寄りよ、時に小夜子や、いきなり斯う言つたら、おまへが吃驚するかも知れないがね、全體わたしはおまへを早く好い處へお嫁に遣り度いと思つて、各處へ口をかけて置いたんだよ、今迄折折申込もあつたけれども、あんまり感心しなかつたから、皆な斷つて置い

たかネ、今度といふ今度はそれこそ天から降つて來たやうな好い口が出來たんだよ」

寢耳に水の小夜子は、顔の色が俄に動搖して次第に首を低れて了つた、母は愈よ言葉に元氣を含んで、

「全くおまへに好い運が向いて來たんだネ、おまへも豫ねて聞いてゐるだらう、神戸の實業家で銀野太吉といふ有名な金滿家がある、何でも三百萬圓位の財産はあるさうだが、日露戰爭で陸軍の御用を勤めたから、復た二三百萬圓も儲けたらうといふ評判だ、大阪にも支店があり、名古屋にも支店があり、東京に支店があり、門司にも支店があつて、大した勢ひなんだ、その人の息子が甚三といつて今年二十三になる、亞米利加へ行つて商業學校を出たといふが大層怜悧な男で末に望みのある若者ださうだ、親はどうかその息子に東京の良い家庭からお嫁さんを貰ひ度いと思つて、豫ねて搜してゐたところ、先月の事だつけ、わたしとおまへが歌舞伎座へ往つた時、直き隣にゐたその阿父さんがおまへを見たのさ、それから茶屋でおまへの事を聞いて、何でもおまへを嫁に欲しいと、人を以てわたしの方へ申込んで來たが、わたしも迂つかりした處へおまへを遣られないから、色色に手を廻して先方の樣子を探つて見たら、その息子さんは一人つ子で外に小姑も無し、阿母さんも極く善い人だといふし、それこそ申分の無い家なんだよ、だけどもまだ本人同士がお互に顔を知らないから、先づ本人の見合をさせて、それから極めようと、その親御さんは急に息子を神戸から呼び寄せて、今日は家へ伴れて來なさる筈なんだよ、見合と云つても昔風に、唯お茶を飮んで別れた位では、雙方の氣心も知れないから、お晝御飯でも一緒に食べて、緩緩談話でもするやうにと、それで今日は御馳走の支度も爲てゐるのだがネ、おまへもその心算で、早くお風呂へ入浴つて、身繕ひを爲てお呉れ、十一時頃には來なさる筈だから、暇取つてゐると間に合はないよ」

小夜子は唯夢のやうな心地だが、母の言葉には何となく自分の胸に落ちないやうな節もある。

「お祖母樣は御承知の上ですか、鳥海の伯父樣や伯母樣は御承知の上ですか」

母は輕輕しい口調で、

「お祖母樣には後でお話をするがネ、斯んな好い口だから必然お喜びなさるに違ひないよ、伯父樣の方へもいづれお話をしなければならない、先方では鳥海さんを親元にして戴き度いと云ふけれども、此方があるのに外の家を親元にする譯に行かないと云つたら、それでは鳥海男爵にお媒介人を願ひ度いと言つてゐるから、伯父樣の方へはよくお話をするがネ、マア何しろ見合を濟ませなけりや、此方ばかり可いと云つても、向うが何といふか知れないからネ」

小夜子は愈愈胸に落ちない、默つて下を俯いて考へてゐると、廊下から女中が障子を開けて、

「奥樣、お風呂が沸きました」

見合

一

「マア、お孃樣のお立派におなり遊ばしましたこと」

今日を晴れと盛裝した小夜子孃の姿を眺めて、年增の女中がつくづくと見惚れたやうに感歎した。

天然の麗質を有ちながら、小夜子は今迄外貌を飾る事に無頓着であつた、お化粧をする暇があれば、書物でも讀んだ方が可いといふ風だから、よくよくの時でなければ白粉さへも塗ける事を好まなかつた。

然るに今日といふ今日は、母親が先に立つて、

風呂に入れたり、髮を結はせたり、帶や衣服も女中に手傳はせて、自分が着せて遣つたりしたが、是れでは帶の掛けが短い、是れでは下着の褄が出ると、幾度も着せたり脫がせたり、大きな姿見の前に立たせて置いて、女中と共に前や後ろを眺めてゐる。

「民や、帶の工合は是れで可いネー、衣服もよく似合つたよ、此子は全體地味なものが好きで、派手な衣服を厭がるけれども、斯うして着せて見ると、矢つ張り派手な方が、見榮もあつて綺麗だネ、ホントに今日は美しく見えるよ、常日の燻ぶつたやうな小夜子とは人が違ふよ、これならば何んなお婿さんが見たつて、惡いといふ氣遣はあるまいネー、オホホ」

今日に限つて母親の機嫌の好さ、小夜子は今迄に母親から斯くまで親切に世話を燒かれた事が無い、心から出たやうな母の笑顏は滅多に見た事も無かつたのに、今日は又た最前から溢れるやうな母の慈愛、我身の大事と思へばこそ、斯んな心配して下さるかと、小夜子は初めて親心といふものを難有く思つた、さりながら一方には、母の熱心が餘りに強いので、母の心の奥には外に期する所でもあるかと、幾分か氣味の惡いやうな感じもした。

兎に角母が是程に機嫌好く、我身の世話をして吳れるものを、今日は何事も母の意に逆つては惡からうと、小夜子は母の言ふなり次第になつて、口紅も插し、眉まで引いて、鏡に向つて姿を見た時は、自分ながら氣羞かしさに堪へなかつた。

母親は小夜子の姿が、我が思ひ通りに出來上つたのを悅んだけれども、尙ほ心配なのは客の前に出た後の動作である。

「小夜子や、おまへは全體無口の方で、お客の前へ出ても默つてばかりゐるけれども、女は愛嬌といふ事が大切だから、今日は何でも機嫌克く、一生懸命になつてお客の待遇を爲て吳れなくつては不可いよ、見合だからと云つても、羞かしがつて引込んでばかりゐては、お互に氣心を知る事が能きない、だから先方でも今日は一日緩緩と遊ぶ所存で早くから來なさるのだ、何でも此方から心を開いて、お友達のやうにしんみりと談話をしてお吳れよ」

賴むやうに諭してゐる、小夜子は只唯唯として頷くばかり、見合の席上でそんな事が能きるか知らんと、自分では重荷でも課せられたやうに思つた。

小夜子の身裝が濟むと、今度は母親が鏡臺の前に坐つて、髮の形を整へ始めた、四十を過ぎた未亡人にも似合はず、若若しく化粧して、派手な服裝を爲る事が好きである、年增の女中は夫人の背後に立つて、頻に頭髮を撫で付けた、小夜子は默つて自分の部屋へ入つて休息しようと、音せぬやうに立つて行つたが、鏡に寫る姿で知つた母親は、

「小夜子や、いまに呼んだら直ぐにおいでよ、そしてお茶を飲んだりお菓子を食べたりすると、口紅が剝げるから氣をつけてお吳れよ」

小夜子はハイと頷いて、我が部屋へ戾つて來た、隱居所の離座敷に接したる六疊間には、小夜子と豐子の机が二つ、書棚を境にして腰窓の下に並んでゐる、孔雀の尾羽を二本插した筆筒に、蒔繪の硯箱や水晶の文鎭を體裁好く配置し、小さい京產の人形に、箏の爪筥まで載せてあるのは豐子の机、その隣の書棚に草の花のスケッチしてある小さな紙をピンと打付け、詩の本や歌の本が雜然と並べてある机の前に、小夜子孃はどつさり坐つて、ホッと息を吐いた。

今迄はそれ入浴よ、それお化粧よと、母や女中に急き立てられて、半ば夢のやうな心地であつたが、自分の部屋に戾つて、机の前に坐つてゐると、呼氣の漸く鎭まるに連れて、今日の見合

といふ事が、一つの苦勞になつて來た。
元來最初より今日の事は腑に落ちない、是程の緣談だから、以前より判かつてゐるだらうに、今迄何のお噂も無く、今日になつて出し拔けに、自分にばかりお話のあつたのも不思議である、お祖母樣は全く御存知が無いから、今朝は參詣にお出掛けなされたが、何故母樣はお祖母樣に御相談なすつて、見合の席にも御同席をおさせにならなかつたらう。
女の身として一生に一度、斯ういふ事に出會ふのは心得てゐるけれども、自分は決して富める家に嫁する事を望まない、又尊榮權貴の家庭に入らうとも思はない、富貴尊榮は苦勞の種、自分は生涯氣樂な身の上で暮らし度いのが望みであるに、今聞けば先方は何百萬圓の財産家、息子といふは年も若い、鳥海男爵を親元にして貰ひ度いと云つたのも其意を得ぬ、母樣は此上も無い良緣と仰しやるけれども、自分には何うも似合はしい緣と思へない、斯ういふ時に勇さんがお在なら、そつと參上つて御意見を伺ひ度いけれども、眼前に迫つた此の場合、今は何うする餘裕も無いと、小夜子の心は尠からぬ煩悶に陷つた。
小夜子は平生何事に對しても深く物を考へる癖がある、一枚の畫を描くにも、先づその配置を考へ、結構を考へ、遠近を考へ、色彩を考へ、我が腦中に於て完全したる映象が成立たなければ、容易に筆を下さない、詩を作つても歌を詠んでも、腹稿の中に幾度も練り上げなければ氣が濟まぬ、日常の小事すら苟もしない小夜子孃だから、今や見合といふ大問題を前に控へて、種種の方面から其事を考へた。
考へれば考へる程自分の運命が善い方面に向つてゐるとは思へない、自分は運命の擒にでもなるのかと思ふと、何となく心細くなつて來る、さりながら小夜子は復た考へ直した、勇さんの話に、人は何事も善意に解釋して、世の中を樂しく思はなければならん、猥に物を疑ふと、心から苦勞を求めるのだと、邪推や妄想を戒められた、まだ善いとも惡いとも運命の定まつた譯では無し、見合さへせぬ先から、人の事を疑ふのは我身の不覺と、自分で自分を引立てても見たりした。
忽ち玄關にガラガラと俥の二三臺着いた音がした、呼鈴が鳴る、女中が駈け出す、小夜子は我れとも無しに窓の障子を細く開いて、そつと玄關の方を覗くと、生垣の上に、帽子の尖頭が二つ三つ見えた、小夜子はハッと胸が轟いて障子をピタリと締めて了つた。
表座敷へ茶や菓子が出て、客と母との間に、二三の談話が交へられた時分に、先程の女中が急いで小夜子の部屋へ來た、小夜子は態と机に身を寄せて、机上の書物を讀んでゐるやうな風をした。
「お孃樣、あちらへいらつしやいましつて、奧樣が仰しやいました」
小夜子は聞えぬ態をして返事をしない、女中は側へ寄つて、
「よ、お孃樣、お速くいらつしやいましよ」
小夜子は下を向いて默つてゐる、女中は進み寄つて手を執つた。
「オホホ、些つともお羞かしい事は御座いません、サア御一緒に參りませう」
小夜子は片袖を口に當てて、面羞かしさうに漸つと立上つた。

二

生れてから初めて臨む見合の席、小夜子は羞かしいやうな、心配のやうな、恐ろしいやうな感じがして、座敷へ入るといきなりに、母親の背後へ小さくなつて身を隱した。
母は態と身體を横に退らして、娘を前の方へ出すやうにした。

「是れが娘の小夜子で御座います」

改めて來客に紹介した、紹介されて小夜子は顏を紅くしながら、客に會釋した。

此時まで小夜子は、今日の來客を最つと偉大なる人格の人達だらうと想像した、銀野といふは有名なる關西の豪商、同作者も然るべき紳士であつて、本人の息子といふも、相當の教育を受けた高潔なる青年であらうと思つたから、その人人の前に出るのは、何となく氣が怯ぢて、上から頭を壓へ付けられるやうに感じてゐた。

然るに今その一應の挨拶が濟んで、其人人を見廻すと、下座に坐つてゐる四十恰好の商人は、今迄折折母の元へ訪ねて來て、自分も二三度顏を見た事があるが、いかにも輕薄らしい、薄つぺらな、口の先ばかりで物を言つて、無暗にお世辭笑ひをするかと思ふと、忽ちケロリとして凄い眼付を見せる氣味の惡い人物だ、此の男が今の紳士の番頭かと思つたら、小夜子は毛蟲にでも背中を這はれたやうな心地がした。

銀野太吉といふは年頃五十七八、骨組の頑丈な、[illegible]で、百姓爺とも言ひさうな人物で、是れが有名なる財産家の主人とは思はれねど、其精悍[illegible]ぎ出して一代の富を造つた精力は、何處となくその眉宇に表はれてゐる。

此の父に育たら、まだしも少しは優しであらうけれども、母に育たかして、弱弱しく見える息子の甚三、色も白く、眼鼻立の揃つた顏は、女にしても見まほしいやうなれど、坐つてゐる身體に中心といふものが無い、衣服や帶には數寄を極め、金剛石の指環を二つまで指に嵌めて、帶に卷いた時計の金鎖には装飾の寶玉を一つ二つ垂らしてゐる、油で撫で付けた髮の毛の滑澤しさ、香水の匂まで此方へ感ぜられるか、初心らしく羞かしさうに顏を俯せて何人をも直視しない、左右の手をもぢもぢして、膝に置いたり卸したり、窮屈さうに身體を縮めて坐つてゐる。

小夜子は父の在世中に、屢ば客の前へ呼び出されて、軍人風の人物には接した事がある、父の交友には木強粗野の人達が多かつたけれども、孰れも皆な相當の人格を備へてゐるから、其前へ出ると男子の威嚴に壓せらるるやうな心地がした、客の人物の偉大なるだけ、自分の方が小さくなるやうな感じがあつた。今はそれに引かへて、此の三人の客を見ると、衣服や持物こそ華美を極めて光彩を放つけれども、その人物に威嚴といふものが更に無い、大事な客とて粗末には思はぬけれども、尊敬の念が毫しも發らないから、小夜子は却て氣が樂になつた、最耻かしさも、恐ろしさも消えて、頭が輕くなつたやうな心地がする。

「お嬢さんは先月、お母さんや何かと歌舞伎座へ來てお在になりましたネ、あの時わたしはお隣の枡にゐましたよ、お嬢さんは芝居がお好きですか」

銀野の老爺から先づ談話の緒を開いたが、小夜子は冷然として、

「イイエ、あんまり……」

そつけない返事をしたので、母親は愛想らしく微笑みながら、

「此子はどうも内氣ですから、お客樣のお相手をするのが下手で困ります」

銀野は眞面目な語調で、

「イエ、その内氣で從順しいところが千兩です、わたしどもは女學生風の生意氣な娘は嫌ひでな、お嬢さんのやうな、おとなしい娘さんを捜してばかり歩いたんです、お嬢さんは神戸や大阪の方へいらしつた事がお有りですか」

小夜子から即座に返事が出ないので、母親が引取つて、

「イイエまた一度も參つた事はありません、尤も幼少の折久留米へ參つた時分にあの邊を通りましたが、何にも記憶えては居りますまい、私

も久しく上方へ參りませんが、今では神戸邊も嘸變つて居りませうネ」

銀野「年年變つて行きます、私どもの居ります生田の近所は、以前淋しい處でしたが、今では大層賑かな町になりました」

橋渡しの商人は此ぞと口を出した。

「銀野さんの生田のお邸と云つたら、それはそれは大きなもんですよ、お庭も廣くつて、西洋館なんぞは神戸で一番貨幣が掛つてゐると云はれる位です、それに近頃は須磨へも御別莊が出來まして、是れも景色の好い處です、須磨の御別莊ばかりでも何十萬圓といふ價値がありますよ」

何事にも一一金錢を標準とする商人氣質、聽いてゐる小夜子は何となく不快に感じた、母親は對手の甚三に口を開かしめ度いと、少し前に進んで、

「御子息さんは亞米利加へ御留學だつたさうですネ、何年ほど彼地にいらつしやいました」

面と向つて訊かれたから、甚三は何とか答へなければならないが、おどおどして下を向いたまま、

「ハイ、三年ばかり」

漸く聽取れるやうな低い聲で答へた、いかに低くとも男の聲には幅があるものなれど、甚三の聲には幅も無く深さも無い、腹の底から出た聲にあらで、細い息が僅に聲帶を鳴らしたに過ぎぬ、父の太吉は息子の言葉を引取つて、

「一体は十九の年に彼地へ參りまして、一昨年歐羅巴を廻つて歸りました、もつと長く留學する筈でしたが、どうも身體が外國の風土に合ひませんので、早く呼返しました、わたしどもの家では、深い學問をさせる必要もありませんし、それに實地の仕事を覺えさせるのが肝腎ですから、今では店の方を手傳はせて、先頃まで名古屋の支店へ遣つて置きました」

栗山夫人は再び甚三に向つて、

「名古屋のお店は、主に何ういふ事をなさいます」

甚三は以前より落着いた語調で、

「神戸へ出します陶器類や何かを扱ひますので」

栗山夫人は銀野太吉の事業を小夜子に知らせて置き度いと、

「神戸の御本店では外國との御商賣をなさいますと承りましたが、嘸お忙しい事でせうネ」

本人よりも橋渡しの商人が勿體らしく、

「神戸のお店では直輸出も直輸入もなさいまして、汽船も三艘ほどお持ちです、それに銀行會社の重役も十二三勤めてお在ですから、銀野さんのお忙しいと云つたら、神戸へ行つたつて滅多にお目にかかる事も能きません、お店の御商賣ばかりでも、昨年までは何千萬圓といふ總額に上りましてネ」

復たしても貨幣の勘定と、小夜子は愈よ忌はしく思つた。

程無く酒肴の用意が整ひ、食膳は一一座中の人に配置された、女中が持出す酒の銚子、母親は小夜子を顧みて、

「おまへ一つお酌をしてお進げ」

三

今日は土曜日の早退とて、妹娘の豐子孃は十二時過ぎに學校から戻つて來た、孃は此の春女學校を卒業した後、自分の望みで私立の音樂學校に通ひ、バイオリンを稽古してゐるが、母に似てか奢侈を好み、虚榮心の強い性質だから、道を歩いてゐても、他人の華美なる服裝や、贅澤らしい風采ばかり注意してゐる。

豐子孃は我家の門を入ると、玄關前に抱車らしい立派な人力車の、三臺も列ねてあるを見て、何となく我が家門の景氣の好い事を悦んだ、

今日は如何なる客があるか、必ず立派な人達が來てゐるだらうと、嬉しさうに勝手口へ駈け込んで、茶の間へ通るといきなりに、樂譜の包みを片隅へ抛り出した。

「民や、民や」

忙しさうに女中を呼立てたので、臺所に手傳つてゐた年增の女中は、手を拭きながら茶の間へ來て、

「オヤお歸り遊ばせ、お臺所にゐまして些つとも存じませんでしたよ」

速く迎ひに出なかつた事を詫びるやうに言つた、平生ならば斯る場合に不快な顏をする豐子なれど、今日は少し甘えたやうな口氣で、

「誰かお客さんがあるの」

女中は今日のお客樣こそ小夜子孃よりも豐子孃の方に多く氣に入るだらうと思つてゐる。

「あなたはまだ御存知ありませんか、今日のお客樣はネ、それこそ大變な御珍客ですよ」

豐子は愈よ興を催して、

「何んな人」

女中は微笑みながら、

「何んなにも斯んなにもつて、その中には業平樣といふやうなお方もいらつしやいますよ」

豐子は戻かしく、

「何の事だか分からないネ、全體何處の誰が來てゐるの」

女中は成るべく仰山らしく、

「日本で幾人といふ大金持の若旦那ですよ、神戸の銀野さんと云つて、東京へも名の響いてゐるお家なんですつて」

豐子は愈よ我家の名譽と悅んだ。

「そんなお人が何うして家へ來たんだらう」

女中は笑ひを漏らした。

「オホホ、お目出度い人ですよ、大きいお孃樣のお見合ですもの」

豐子は眼を圓くした。

「アラ、お見合……」

驚いた顏をしてゐたが、急に好奇心が湧き出して、

「何んな人だか見度いことネ、お供の人でも附いてゐるの」

女中「ナーニ、その親御樣と、いつもお家へ來なさる仲買さんとお三人ですが、奧樣も豐子が歸つたらお座敷へ來るやうにと仰しやつてお在でした」

豐子は嬉しさうに、

「ぢや行つて見るわ、だけども此の服裝ぢや出られないネ、姉さんは何んな風をして」

何の場合にも姉の服裝に見劣りさせる事を厭つてゐる、女中に一一小夜子孃の衣帶から半襟まで說明した、豐子は自分が見合にでも出るやうな心持で、早速顏を洗ひ、髮を撫で付け、額や領に白粉を濃く塗つて、大急ぎのお化粧を始めた。

「民や、わたしの良い帶を出してお呉れ、菊のおやないよ、此の春三越で買つた黑地に笹の葉の織出してあるんだよ」

帶も衣裳も最上等の品を擇んで女中に着せて貰ひ、それでは下着の裾が出る、それでは帶の掛けが短いと、一一小言を云ひながら　姿見の前をぐるぐる廻つて一生懸命に盛裝を凝らした。

表座敷では栗山夫人が、小夜子一人では客の待遇に物足らず、折角の酒席も興味に乏しきを憂ひて、豐子が戻つたら早く出るやうにと、腰元を以て催促した、程無く身支度も濟んで、腰元と共に座敷へ出ると、靦面無き豐子は先づ銀野父子の燦爛たる風采を眺めて、神の前にでも接するやうな心持がした、その心には富といふものが此上も無き權威のやうに映じてゐる、美麗なる衣服や、價高き寶玉なんどは人生の光りのやうに思はれてゐる。

豐子は母親より來客に紹介されて、一一丁寧に挨拶したが、その擧動の何となく泛泛してゐるので、客の方でも氣が置けない、一つ二つ言葉を交へると忽ち狎れ易いやうな感じがして、銀野老人は笑ひながら、

「お妹さんは大層お身體がお大きくつてお在ですネ、ちよいとお目にかかつては、孰方がお姉さんだか分りません」

斯う言はれて母親は心に思ふ旨があるから、卽座に答へた。

「ハイ、是れは年子で御座います、前の年の夏に小夜子を產みますと、翌年の秋に此の豐子が生れました」

銀野老人は頷いて、

「一年位のお差ひでは大きくなると分かりませんネー」

母は先方をして何の疑念も生ぜしめまじと、眞實しやかに極く眞面目で、

「姉の方は亡くなつた父に肖て少し瘦せて居りますが、妹は私に肖て斯んなに肥つて居ります」

銀野老人は別に其言葉を疑つた態度も無い。

「お二人とも好いお孃さんで、あなたはお樂みですネー」

と二人の娘を見較べて、獨りニヤニヤと笑つてゐた。

此の一場の談話は他の人に對して何等の感興も與へなかつたけれども、側に聽居る小夜子孃には絕大の感動を惹起さしめた、孃は今迄栗山夫人を眞の母か義理ある母かと疑つてゐた、別に疑ふべき證跡とては無いけれども、奉公人の蔭口を聞いたり、妹の我儘を思ひ較べたりして、自分は何となく日蔭者でもあるやうに氣を置いてゐた、何か折があつたら昔の事を知り度いと、人には言はねど我心には片時も忘れる事が無く、場合に依つては我が祖母にそれと無く訊いて見ようと思つたりした事もあつた。

今や母の一言、此の二人は年子である、前年に自分を產んで、翌年に豐子を產んだと聞いた時は、小夜子は心に、ああ嬉しいと思つた、人が居なければ母を拜み度いほど悅んだ、多年の疑問が氷解して、自分の肩身が廣くなつたやうに感じた。

それにしても今迄、由無い疑念を抱いて眞實の母に二心を生じたのは何といふ不孝の事だらう、我身の罪が今更恐ろしい、どうぞ赦して下されと、心の中で母に詫びた。

斯う思ふと母の慈愛が急に難有くなつて來た、今日に限つて親切と見えたのは、今迄母の心を知らなかつたからだ、母の心は何時でも我身に親切で、我身の爲めに行末の事を案じて下さるのだ、今日の見合は心に染まぬけれども、母の親切を思ふと、惡い顏をしては相濟まない、先程も母に言はれた通り、努めてお客の愛想をしようと、心機を轉じて、機嫌好く、客に對してお世辭の一つも言ふやうになつた、心裡の變化は容貌に表はるる、小夜子の顏の色は俄に冴えて鮮かになり、風采態度に一段の活氣を帶びて、以前より一層の美しさを增した。

小夜子孃は此の席の明星である、豐子孃がいかに盛裝して其側にゐても、品位風格は到底小夜子孃に及ぶべくも無い、銀野老人は先程より唯恍然として小夜子孃の姿に見惚れてゐた、斯る美しき姬君を我家の花嫁として迎へたら、家門の譽れ此上も無い、どうか一日も早く引取つて、嫁と呼び舅と呼ばれて一門一族に誇り度いと、心は全く小夜子孃に傾倒して了つた。

孃の美しさに見惚れたのは、息子の甚三も同じ心である、さりながら甚三は孃の威容に壓伏せられるやうな心地がして、面と向つて顏を見る事も能きない、折折偸むやうにその顏を眺めて、愈よ身體が竦むやうになり、酒も飲ます、箸

も取らず、羞かしさうに下ばかり向いてゐる。

親の太吉老人は我子の甚三が、あまり小さくなつてゐて、席に堪へないやうな態度を腑甲斐なく思つた。

「おまへ御遠慮する事は無い、もつと何でも戴くが可い」

と幼兒にでも奬めるやうな口振、栗山夫人は愛想好く、

「どうぞモー一つお累ね下さい、御子息さんも少しは御酒を召上りませう」

老人「ハイ、是れはわたしほど飲みもしませんが、少少位は戴けます」

夫人は小夜子を顧みて、お酌をせよと眼で促した、小夜子は銚子を把つて甚三の前に進んだが、薄化粧でも施てゐるやうな匂ひがするので、その顏を屹と見下しながら盃へ酒を注がうとする、甚三は盃を手に採つて前へ出したが、その手先が顫へてゐる、小夜子は心中に男らしくもないといふやうな輕蔑の念が生じた、何だか自分より年弱なものを對手にしてゐるやうな心持になつて、見合の席に出てゐるやうな氣がしない。

小夜子の酌が濟むと、次には豊子が母に促されて、銀野老人より順番にお酌をして廻つた、豊子は甚三の酌をする時、その謙遜らしい樣子を見て、マア何といふ從順しいお方だらうと、心で頻に感心した、豊子の眼には甚三が美の權化と映じてゐる。

主客は盃を獻酬して互に快く談笑したが、

小夜子はいかに心を引立てゝ見ても、此の人人に對して尊敬の念が發らない、銀野老人が酒を飲む態度の下品なる、甚三が物を食べるにも、そはそはとして落着かぬ意氣地無さ、橋渡しの商人の、輕薄らしいお世辭の嫌らしさ、是れが所謂何百萬圓の富豪の品性かと思ふと、敝衣敝袴、貧書生然たる鳥海勇の人格が却て幾段の高さに在る事を想ひ出さるる。

四

やがて一同の食事も濟んで、茶や菓子が前に出た、微醺を帶びた銀野老人は、酒の力で打解けたやうに、膝を崩して無遠慮な高笑ひした。

「アハヽ、時にわたしはお孃さん達に御無心があります、定めし何かお稽古事はお習ひでせうが、琴でも三味でも、踊でも何でも一つ拜見し度いもので」

最前の慇懃なりしに引かへて、語調も次第に下卑て來た、栗山夫人は二人の娘をちよいと顧みて、

一姉の方は書が好きで音曲の方は好きませんが、妹は小さい時から箏や三味線を習つて、今でも音樂の學校へ通つて居ります、豊子や、一つお箏を復習つて皆さんに聽いて戴いたら何うだネー」

銀野老人は笑顏を作つて、

「お箏ですか、それは面白いでせう、是非どうぞ聽かして頂戴」

息子の甚三も箏と聽いて興ありげに豊子の返事を待つてゐるのは、音曲に趣味があると見える、豊子は自慢の音曲を斯る珍客に聽かし度くもあれど、故意と焦かしさうに遠慮して、

「だつても良くは能きませんもの」

母「ナニ宜いわネ、どうせお慰みだもの」

女中に命じて一面の箏を座敷に運び出さしめた、豊子は柱を立て調子を合せ、角爪を指に嵌めて、今や彈出さんと姿勢を直したが、フト向うを見ると、甚三は一心に眸を凝らして自分の手先を視詰めてゐるので、日頃は人に怯おない豊子なれど、今日ばかりは何となく胸が躁いた、此人は必ず音曲が良く解るのだらうと思つたら、急に呼吸が喘んで身體が落着かない。

「お母樣、何にしませう」

母「何でもお目出度いものが可いネ、松竹梅で

も老松でも」
　豐子は漸く考へて、
「おや松竹梅にしませう」
　漸く勇氣を鼓して、コロリンシャンと掻き鳴らし、
「たち渡る霞を空にしるべにて」
と唄ひ出した、平生家で復習ふ時は、もつと音も冴え聲も立てど、今日は調子が上走つて、初めの内は息も續かず苦しく氣に聞えたが、一段二段と進むに連れて、幾分か調子も乘つて來た。
　銀野老人はフウム、フウムと首を傾けて感心したやうな顏をしてゐる、息子の甚三は息を吞んで熱心に聽いてゐたが、折折指で膝を叩いて拍子を合してゐる、最前まで窮屈さうにしてゐた甚三が、箏の拍子に釣込まれた態度を見ると、小夜子は何となく可笑しいやうに思つた。
「どうも實にお上手なもので、是れぢや黑人も跣足ですぜ」
　一曲の關つた時、追從らしいお世辭を叩いた橋渡しの商人は、三人の中で最も音曲を解し得ない人物だ。
「どうかお序にモー一つ」
　所望は無くとも母親は、尙ほ一曲を演奏させて、今の失敗を取返し度かつた。
「おやモー一つ老松でも、今度はゆつくり落着いて」
　暗に娘を誡めた、豐子も幾分か心の動搖が鎭まつた。
「では老松をモー一曲」
　力を籠めて老松の曲を奏したが、以前の松竹梅に比べては出來榮が數等立優つた、甚三は思はず、
「面白う御座いました」
　と禮を言つた、豐子は甚三に褒められたのが、何よりも嬉しかつた、大切な試驗にでも及第したやうに思つて、先方が望んだらモー一曲も演奏し度かつた、されども箏の所望は再び出ない、母親は今日の場合に大切な小夜子を閑却せしむるも得策でないと思つたか、
「小夜子や、おまへも一つ、席畫を描いて御覽に入れたら可からう、是れもお慰みになるからネ」
　銀野老人は豐子の箏よりも小夜子に何かその技倆を見せて貰ひ度い。
「お畫を是非拜見し度いもので」
　橋渡しの商人が知つた顏に、
「お孃さんのお畫は素人離れがしてゐます、私も先日此方で拜見しましたが、下手な畫師なんぞは敵やあしません」
　小夜子は斯る人達の前に、畫を描く事は好ましからねど、母の意に背くも心無しと、我が部屋に戻つて紙筆や墨を持つて來た、毛氈を前に布き、半切の唐紙を展べて何を描かうかと考へてゐたが、此の席で別段に我が畫を褒められようといふ野心も無い、氣に入らうが入るまいが、自分は唯母に對して責を塞ぐばかりだと思ふと、日頃內氣な小夜子も今日は氣分が頗る樂になつてゐる、自分獨りで稽古する時の心持で、何でも一つ思ひ切つたものを描いて見ようと、筆を採つて腕を舉け、墨を十分に含ませて、奔龍の地に落ちたる如く、先づ一幹の梅を寫した、筆勢全幅に溢れて、横枝となり、直梢となり、花となり、蕾となり、塵俗を離れた風格は、師たる春帆の骨髓を傳へてゐた。
　描き了つて小夜子は、我れながら能く出來たと、思はず會心の笑を帶びて、他人の鑑識を待つまでも無く、自ら嬉しさうに眺めてゐた。
「是れはどうも」
　銀野老人は唯驚いたばかりで、外に褒むべき言葉を知らぬ、母は聊か得意顏。
「小夜子や、上の方へ何か贊でも描いて御覽」
　娘の筆蹟も誇りである、小夜子は忽ち筆を

採り、
「空谷園林夜半樹、水邊籬落忽横斜」
林和靖の句を題して、春水女史と名を署した、畫の巧拙はよく解らねども、初めより終りまで、小夜子孃の落着拂つて泰然たりしその動作は、殊にゆかしく思はれると、銀野老人は心の底より感服した。
「此のお畫はどうぞ頂戴致し度いもので」
小夜子孃の辭退するのを、老人は強いて懇望して、その畫を自分達の前に向け直した。
「よく御覽、實にお見事なものぢやないか」
息子を顧みてその感想を言はせようとしたが、甚三は唯茫然として、
「成程ナ」
眼は畫の上に注がれてゐれど、肝の一向に要所要所、解らねば、畫にも文字にも趣味が無いらしい、下品の商人は解かつたやうな顔をして、
「どうも此の梅の、スーッと出てゐる工合なんか、實に何とも申されませんネー」
頻りに見當違ひのお世辭を述べてゐる、小夜子は此の畫を師たる勇に見せて、評言を受けないのが殘念であつた。
是れより主客は次第に寛いで雜談に耽つたが、銀野父子の談話は、兎角自分の富の自慢をするやうに聞えて、小夜子は愈よ不快の念を增した、それに引かへて豐子は、斯る人から懇望される姉の運命を羨ましく思つた。

一　養老

秋といへば、錦織成す山山の、美の粹寓る風色を一管の筆に寫さんとて、過る頃より木曾山中に立籠りたる鳥海勇は、沆瀣の氣に心膽を練り、風露の清に胸襟を洗つて、十一月の初めに、飄然と山を降つた。
勇は東京を發する時、小夜子孃に賴まれた事がある、木曾山中の景色を寫したらば、自分の畫手本になるやうな紅葉の畫を一枚描いて來て呉れろと言はれてゐる、勇は孃の賴みとて、一日もその約束を忘れたことが無いけれども、今迄寫し得たる木曾の景色は、悉く是れ崔嵬卓犖、男性的の畫題にして、婦人の容易く學び得べき所でない、小夜子孃の畫手本には今少し女性的の優しい景色を擇ぶこそよけれと、木曾から名古屋へ出る途中、到る處を物色したけれども、是れぞと思ふ會心の景が無かつた。
名古屋の旅宿に泊つた時、美濃の養老山が今宛も紅葉の盛りになつて、名古屋岐阜邊からも毎日登覽の客が多く出ると聞いた、養老は十數年前曾遊の地、あの山の風光は明媚にして、瀧の水に映ろふ紅葉の色は、小夜子孃の心を悦ばしむるに足るであらうと、勇はその翌日汽車に乘つて大垣に出で、昔は徒歩で通つた三里半の道を、今は新設の汽車に投じて、數十分の後養老の停車場に着いた。
見仰げれば養老の山は、舊に依つて濃尾二州の曠原を睥睨してゐるけれども、昔の幽邃なりし趣と事變り、今は公園地となつて道路も開け、停車場附近は人家櫛比して、見紛ふばかりに雜沓の地となつてゐる、名古屋岐阜大垣邊の都市から、遊覽の客が群集して、俥走り、人叫び、茶屋に憩ふもの、山に登るもの、汽車に急ぐもの、客を送るもの、旁午絡繹として宛ら賽日の如き賑ひだ。
勇は轉た今昔の感に堪へないで、喟然と手荷物を肩にかけ、途中の風色を漁りつつ、俥の馳る坂路を登つて行つた。新道の開けた爲めに、道幅も廣く、坂も急ならず、盛裝した士女も、老人も子供も談笑しつつ歩いてゐる、遠足に出たらしい小學校の生徒も校旗を翳しつつ登つて來る、勇は木曾山中の景色幽邃なりし趣

きに思ひ較べて、此の山のいかにも女性的たるを感じた、髪の毛を蓬々と長く伸ばし、髭も生えなりに顔を埋めて、古男然たる我が姿を顧みれば、此の山の行客には似合はしからぬ、斯る處へは小夜子嬢などを伴ひて、一日の清遊を試みたらばよけんと思つた。

登ること十數町にして、昔年曾て投宿した一旅店の前に出た、それも以前の結構と異りて、幾棟の新館嚴めしく、今は一大旅館となつてゐる、勇は何となく氣が引けるやうに思つたけれども、舊知の好みを思つて、此の旅館に荷物を卸した、幸ひまだ室も多く明いてゐたので、三階の片隅なる六疊の一間へ通されたが、勇は此にて午餐を喫し、暫く足を休めた後、獨り飄然と旅館を出て、養老の瀧の道へ登つて行つた。

登る程無く神さびたる養老神社の前へ出た、此邊へ來ると、今迄の打ち開いたる景色は一變して、蓊鬱たる老樹天日を遮り、岩間の清水溪に流れて、嵐氣徐ろに人を襲ひ、眼前の風物は全く塵俗の氣を離れた。

是れより一歩一歩、路漸く險に、溪愈よ深く、兩岸より蔽ふ如き木木の梢のむらごに色づきたる、岩頭の蔦の、葉は黄みて骨の露はれたる、雜草は偃し、灌木は萎れ、カケスといふ綺麗な鳥の高い聲出して木の間木の間を飛び交ふ様なんど、斯ういふ景色を小夜子嬢に見せたら、嘸悦ぶ事だらうと、嬢の居ないのを惜しいやうに思つた。

勇は小夜子嬢の爲めに畫手本を描く所存だから、今は嬢の心持になつて眼前の景色を眺めてゐる、嬢の趣味を我が趣味として一草一木を觀察してゐる、あの松は嬢の氣に入るだらう、あの岩を嬢に描かせたら嘸巧く寫すだらうと、一一嬢の事を想ひ出して、後には自分の身邊に無形の小夜子嬢が隨伴てゐるやうな心持がした、耳の側で小夜子嬢の愛らしい囁きが聞えるやうな感じもする、自分も迂つかりして、

「モシ小夜子さん」

と低聲に呼んで見て、慌てて四邊を顧みながら、獨りでクスクス笑ふ事もあつた。

さなきだに勇は平生小夜子嬢の事を片時も念頭に忘れ無い、長い間自分の手元で理想的に仕立て上げた小夜子嬢も、今は母の手元に引取られて、生活の模様も一變したから、嘸や心に苦しく思つてゐるだらう、一旦は快活になつた性質も、再び沈鬱になりはしないか、妹の豐子嬢に凌辱せられて僻み根性でも起しはしないか、自分の身の上に就て何か疑ひでも抱きはしないか、不平は無いだらうか、悲觀の心を生じはしないかと、常に嬢の事が案じられた、さりながら人は藝術に沒頭すれば、不平も怨恨も忘れて了ふ、嬢の爲めに唯一の慰みは、好める畫を描いて藝術の天地に優遊するに如くはない、それを思ふと、嬢の爲めに寫さんとする養老の瀧の畫手本は、嬢の心に光明を與ふべきものでなければならぬと、今や我が責任の輕からぬ事を感じた。

やがて登ること三四町、兩岸急に迫つて、壓する如き崖壁の下を過ぎると、眼界忽ち開いて養老の瀧の前に出た。

昔ながらの瀧の水は、十丈の高さより水晶簾を垂れたる如く、緑樹紅葉其上に蔽ひかかりて、その美しきこと筆にも及び難い、瀧壺は淺くして水清く掬まば醴泉の香りもするかと思はるる。

勇は暫く瀧の前に立つて、四邊の景色を眺めてゐた、勇の心には水や紅葉の美しさよりも、此の瀧には威靈があつて、觀る人に一種美妙の感じを與ふる如く思はれた、孝子の徳に水の味を變じて、その親に延年の壽を與へたのも此の瀧である、當代の年號を改元せしめたのも此の瀧である、天皇の行幸を辱うした

のも此の瀧である、古より今に至るまで、詩にも歌にも詠み傳へられて、天下に名を知られたのも此の瀧である。

此の瀧には老子の靈が籠つてゐる、此の瀧には美の神が宿つてゐる、心耳を澄まし心眼を開いて瀧の景色を眺めてゐると、音樂聞え、靈香薫じ、雲の上にて天人が舞を奏するやうな感想が生じて來る、勇は頻に感嘆して、

「これだ、これだ、此の瀧こそ、景のみを寫して滿足すべきもので無い、景の中には魂が無ければならぬ、靈が無ければならぬ、瀧の威徳が我が筆端に顯はれなければ、以て養老を寫し得たりと云ふに足らぬ、小孝子をして學ばしむるのも、瀧の景にあらずして、瀧の靈にあり」

今や、大決心を以て、此の瀧を寫さうと意氣組んだ、折しも勇と前後して遊覽の客が續々と下より登つて來た、紳士も來る、學生も來る、田舍人も來る、小學生徒の遠足隊も來る、老人も來る、婦人も來る、一瓢を携へた風流人も來る、藝者やお酌を大勢引連れた遊冶郎までもやつて來る、瀧の前の茶屋は遊覽の客で一杯だ、ベンチも[illegible]にも空席が無い。

[illegible]の雜沓を避ける爲め、茶屋の背後から林の中に分け入つて、瀧を觀るに適したる場所を覓め、此處では近し、彼處では遠しと、岩頭に攀ぢ、樹下を潛つて、一段高き岩の上に、漸く適當なる位置を定め、心靜に紙を展べて、瀧の景色を寫し始めた。

さつと吹き來る峰の風に、もみぢ葉戰ぎ、瀧の白玉岩に碎けた、勇は會心の笑を漏らして、

「オー、此の風裏の景こそ面白い、此を描けば畫が活きて來る」

筆は心に隨つて、風となり、水となり、紅葉となり、瀧となる、勇は頻に興が乘つて、描いては眺め、眺めては描き、時の經つのも日の移るのも忘れて了つた。

二

瀧の景は容易に描き得らるれども、景中に籠る神秘の靈氣は、筆端に寫されぬ。

勇は描いても描いても物足りない、折角描いたものを消したり、消したものを描したり、渾身の精力を注いで、此の瀧を寫さうとしたが、秋の日の[illegible]く暮れて、紅葉の色も見えぬ位に暗くなつた、勇は十分に描き了らないのを口惜しく思つたが、暮るる景色を[illegible]、胸中に畫み込み、旅館に戻つて緩緩描き足さうと、遊覽の客の去り盡した後、[illegible]を[illegible]めて山を降つた。

勇の歸りの遅いのを心配して、旅館からは若者に提灯を持たせて迎ひに出した、勇は道の闇いのに困じ果てたが、瀧の下、町程の處にて迎ひの者に遭ひ、頻に旅館の親切を悦んで、若者と共に歸つて來た。

旅館に戻ると、物馴れた女中が茶を淹れ、菓子を侑めて、

「お風呂をお先になさいますか、それとも御飯に致しませうか」

勇は茶も飲まず菓子も顧みず、いきなり座敷の中央に坐つて、一心不亂にスケッチの畫を修正し始めた。

「イヤ、僕はまだ用があるから、風呂にも入らん、飯も食べない、然しあんまり遅くなつても氣の毒だから、飯の用意が出來たら、お膳とお櫃を持つて來て、隅の方に置いて呉れ給へ、欲しくなれば獨りで喰ふよ、決してお給仕に及ばん、そして僕が呼ばなければ來ないでも宜い、無闇に來られると邪魔になるから」

勇は畫の事に熱中すると、入浴も忘れ、食事も忘れ、寢る事さへも忘れるのが平生の癖であつた、そのかはり途中で人に來られて興を妨げられるのは何よりも大嫌ひ、天井で鼠の騒ぐ音さへ耳に響いて苦痛に感ずる程であつた、此處は幸ひ隅の部屋で、廊下を通る客も無いから、

勇は何より嫌ひだと悦んでゐる。

畫師の客が來ると、斯ういふ事は珍らしくないので、樓婢はよく其意を諒した、程過ぎてそつと食膳を持つて來たが、音せぬやうに片隅へ置いて、言葉もかけずに默つて立去つた。

勇はスケッチの畫を前に置いて、腕拱いて深い冥想に沈んだ、勇の胸中には眼前の畫と養老の瀧とが相往來してゐる、瀧が畫となり、畫が瀧となり、孰れが眞、孰れが假とも判ち難い。

勇は旅館の座敷に在る事をも忘れてゐる、食膳の前に出てゐる事も忘れてゐる、勇の魂は今も尙ほ瀧の前に在つて、その耳には音樂の如き瀧の音が聞え、その眼には美しい紅葉の色が映じてゐる、折折筆を把つて紙に臨めば、一線加つて畫面改まり、一筆落ちて情趣新しきを增す、養老の瀧の神韻は今や勇の筆端に乘り移つてゐるらしい。

此時俄に一間程隔てた先の室で、絃歌の聲が沸く如くに起つた、手を拍つ音や笑ふ聲、その騷がしさ言はん方無い、勇は忽ち興を破られた、眼前に髣髴たりし瀧の姿も消え失せて、身は天上から俗界に落下したやうな心地がした。

絃歌の聲は容易に罷まない、踊も始まつたらしい、當八拳の掛聲もする、甚句端歌や流行歌、一一耳を貫くやうに囂しく聞える、勇は茫然として氣拔けしたやうになつたが、マアマア此の間に何でも食べようと、食膳を引寄せた、冷めた吸物、水のやうな茶も厭はず、さらさらと食事を濟まして、隣室の騷ぎの鎭まるのを待つてゐた。

騷ぎは愈よ激しくなるばかり、待てど暮らせど到底急に鎭まりさうも無い、勇は失望してスケッチの畫を片付けた、一旦興を破られたから、今夜はモー畫が描けない、如かず早く寢て、明朝緩緩描かんにはと、樓婢を呼んで床を展べさせ、夜被の内に潜り込んで、眠に就かうと努めてゐた。

さりながら隣室の騷ぎが耳に附いて、眠らんとしても睡られない、癇癖の强い勇はぢりぢりと腹が立つて來た、急に呼鈴を鳴らして樓婢を呼び、

「姉さん、誠にお氣の毒だがネ、あの騷ぎぢや迚も寢る事が能きない、外に靜な部屋があるなら取換へて貰ひ度いものだがネ」

樓婢は幾度か叩頭した。

「どうも誠にお氣の毒さまで、外に明いたお座敷も御座いませんが、モー直きに濟みませうから、何卒御勘免遊ばして」

自分の事のやうに詫びるので、勇は幾分か心を和らげた。

「全體誰が斯んな處へ來て、あんな馬鹿騷ぎをするのだネ」

「神戸で名高い銀野太吉さんの若旦那ですよ、此頃名古屋の支店に來てお在で、每度此へもお遊びにいらつしやいますが、今日は藝者が四人とお酌が二人と幇間が二人ですから、それであんなに賑かなのです」

勇はフフムと冷笑した。

「金持の馬鹿息子さんかえ、道理で場所柄も辨へずに、人の迷惑になる事をすると思つた、昔の孝子は瀧の水を汲んで親を養ひ、今の息子は瀧を見物に來て親の金を費ふのか、隨分面白い對照だネ」

樓婢は頻に詫びて立去つた、勇も再び枕に就いたが、隣室の騷ぎは夜更けても尙ほ罷まない、やがて勇はガバと床の上に起き直つた、最早胸に据ゑかねて、隣室へ呶鳴り込まうか、番頭を呼び付けて掛合はうかと、頻に腹が立つて腕を扼したが、忽ち自分で心付いた、斯ういふ時には靜座沈默、心を氣海丹田に收めて、三昧に入るのが何よりの修養と、兩眼を閉ぢ、呼吸を鎭め、六識を斷盡して無何有の境に入ら

ん事を努めた。

　良あつて勇は眼を開いてハタと手を拍つた、獨りで嬉し氣に微笑みながら、

「三昧に入ると必ず自ら得る處があるから妙だ、隣人の騒ぎを煩いと思つたのは我が誤り、よく考へて見ると世中には美華の標本も得られるし、美人の標本も得られるが、馬鹿息子のモデルは容易に得られない、何程の金を積んでも馬鹿息子のモデルになつて呉れるものは一人もあるまい、然るに今夜は天が僕をして風俗畫の材料を得せしめん爲めに、馬鹿息子のモデルを眼前に與へて呉れた、醜美妍媸賢愚善惡、悉く採つて以て材料とするのが美術家の本領だ、今夜のやうな機會は決して再び得られないから、僕は一つあの馬鹿息子をモデルにして、活きた風俗畫をスケッチしよう、さうだ、さうだ、どうぞいつまでもあの騒ぎが續いて呉れれば宜い」

　急に紙と筆とを携へて廊下へ立出した。

三

　十疊の室を二間打通して[illegible]の廣間とし、中央の床の間を背後に、厚い緞子の座蒲團へ傲然と安坐して、[illegible]で控へてゐる銀野甚三、梯子酒の癖として小さな盃を二つ三つ膳の上に列べ、ちびりちびりと少しづつ飲みながら、

「サア、是れから皆んなで有りつたけの藝盡しを演るんだ、モー是れが馬鹿の騒ぎの總仕舞だから、今夜は底拔けに騒ぐんだよ、サアサア始めた始めた」

　と座中の藝者やお酌を見廻はして、獨りで頻に浮立つてゐる、されど藝者どもは最前からの騒ぎに腕が疲れたか、それとも夜更けて四邊の客の迷惑するを憚つてか、多くは互に顧みて復た三味線を取上げない。

「ちよいと姉さん、今夜が總仕舞だつて、モー是れつ切りお遊びにいらつしやらないのう」

　愛らしい半玉は年增の藝者を顧みて眞面目らしく尋ねた、年增の藝者は如何にも[illegible]さうに、

「ああ、さうだよ、若旦那は今夜つ切りで、堅藏さんにおなりなさるんだとさ、モーモーわたし達なんか振向いても下さらないんだつて」

半玉「アラ詰らないことネー、ナゼ急にさうなるの、大旦那がおやかましいの」

藝者「イイエ、さうぢやないが、お目出度い譯があるんだよ、若旦那の處へはネー」

　甚三は聞いて、

「コレさ、そんな事を素破拔いちやいかん」

藝者「ホホホ、素破拔いたつて可いぢやありませんか、お目出度いんですものネー、みーちやんお聞きよ、若旦那の處へはネー、近い内に東京の華族さんから、それはそれはお美しいお姫樣がお嫁にいらつしやるんだよ、さうなると若旦那はネ、急に猫を冠つて、石部金吉鐵兜つていふやうな顏をしていらつしやるんだとさ」

　半玉は頓狂な聲出して、

「ヨー、若旦那お目出度う、お祝ひに何か奢つて頂戴よ」

　障子の外から折折室内を覗いて、甚三の態度をスケッチしてゐた勇は、心の中でウフフと笑つた。

「何處の華族さんの御姫樣だか知らないが、媒人口に騙されて、斯んな馬鹿息子の處へお嫁に來なさるとは隨分お氣の毒なものだ、來る方も金持と聞いて、富と結婚するのだらうし、貰ふ方も華族といふ名譽と結婚するのだから、虚榮心と虚榮心とが衝突するのだ、アハハ世中は面白い」

　その内に甚三の催促で、藝者は再び三味線を彈き出した、聲を自慢に唄ひ出す甚三、勇は耳を傾けて、

「ウム、隨分好い聲だ、唄の節も巧いや、學問を勉強しないで、あんな事ばかり稽古してゐたんだらう、あの、のつぺりとした顏で、妙に口

を尖らしながら、得意顔に唄つてゐる態度は、何う見ても馬鹿息子のモデルだな」

頻に悦んでスケッチしてゐる、今度は大勢が三味線を彈き、半玉達の踊るに連れて、甚三も立つて踊り出した、勇は獨り笑壺に入つた。

「イヤ好畫題、好畫題、馬鹿息子の狂歌亂舞を寫生するなんて、天の與へた好機會だぞ、然し是れも單にあの狂態を寫生するばかりでは畫にならん、あゝいふ時の心理狀態を我が筆に寫し得なければ以て上乘の畫とするに足らん、ところであの馬鹿息子は、どんな心持を以て斯んなに狂つてゐるだらう、サア斯うなるとむづかしいぞ、養老の瀧の神仙は想像し得られるが、馬鹿息子の心中は容易に推測が能きん」

風變りな美術家は筆を走らせながら、頻に獨りで考へ始めた。

「全體金持の息子には馬鹿者が多く出來る、是れは天地自然の道理に適つてゐる譯だな、何となれば金持の息子が親勝りで復た金を儲め、その息子が復た金を儲めるとなつたら、富者は益す富み、貧者は愈よ貧に、社會の經濟狀態が不平均になつて了ふから、天が社會の富を平均させる爲めに、金持の息子には馬鹿者を生じて、親の儲めた金を社會に分散せしめるのだな、天才に二代無し、偉人の子に凡物多きも、天が人類の極端に傾くを妨ぐ爲めの配劑に相違無い、あの馬鹿息子も天意に依つて此世に生れ出た人間だ、親が無理をして儲めた金を、殘り無く費ひ果して身代を潰すべき天職を帶びてゐるのだ、さう思ふと無下に輕蔑するのも氣の毒だ、あの通りな馬鹿騷ぎをするのも天意に適ふのかと思ふと、少少憐れになつて來る、ところで、あの先生の心中には、程無く華族の姬君と結婚するから、今の内に思ふ存分愉快な事をして置き度いといふ存念があるのだらう、あゝいふ人物は肉體の愉快の外に高尚なる愉快のある事を知らないから、大勢の藝者を對手に踊つたり狂つたりするのは人生無上の愉快だと思つてゐる、して見るとあの狂態の中には人生無上の愉快が籠つてゐる事を我が筆に寫し出さなければならん、一方から云ふと、此の人物は酒を飮んで踊つたり狂つたりする外に、何の長所も無いから、あの場合が最も得意なる瞬間で、拿破列翁が帝冠を戴く時のやうな心持でゐるだらう、人生の愉快と得意、是れがあの狂態中に含まれてゐると思ふと、此のスケッチも却却骨が折れる」

勇は頻に思考を凝らして、甚三の魂までも寫し取らんと努めてゐる。甚三は踊つた爲めに酒が廻り、足元が次第に危くなつて、遂に席上に醉ひ仆れた、勇の爲めには是れも一つの好畫題。

「アハヽ、昔の應擧は寢てゐる猪を寫生した所存で死んだ猪を寫生した爲めに、獵人に笑はれた事がある、醉仆れたのと、假睡してゐるのとは、斯うして實地を見ると、趣きが大層違ふぞ、うまい、うまい、何でも僕の材料になつて呉れる」

頻にスケッチしながら、復た獨りで急に笑ひ出した。

「アハヽ、然し斯ういふ處をその姬君とやらに見せたら、忽ち愛想が盡きるだらうなあ、知らぬが佛、可哀想なもんだ」

四

東京青山の鳥海家にては、勇の母が頻に我子の歸宅を待つてゐた、母は勇を二無きものと愛してゐるに、此頃は小夜子孃の結婚問題も發つてゐるから、早く勇に會つて其事を相談し度いと思つてゐた。

勇は飄然として家を出で、飄然として歸り來るが常なれど、出張先から母の許へ絶えず音信を寄せて、母の心配せぬやうに、自分の居所だけは必ず通知して置く、木曾からも通信を寄

せた、養老の旅宿へ泊つた時も、直ぐに端書を出して置いた。

母親は指折り數へて、今日は必ず戻つて來るだらう、朝の内に歸るか、それとも午後になるかと、頻に待遠しい。

「竹や、今日は勇が歸つて來るからね、勇の好きなバナナの良いのを果物屋から澤山取つてお置きよ、そしてお風呂も早く沸かしてお置き、汽車で歸ると煤烟で身體が汚れるから」

三十過ぎた我子を、十五か十六の子供のやうに思つて、何から何まで世話を燒く、玄關の戸が開くと我子ではないかと、一々氣を注けた。

正午になつても勇はまだ歸らなかつた、どうして斯んなに遲いだらう、昨日の中に養老を發てば今日は早く歸りさうなものだと、母は頻に案じてゐたが、晝の食事を濟ました後、豫て注文して置いた帶地が三越呉服店から屆いたので、茶の間に列べて、女中を對手に帶地を品評してゐると、勇は飄然旅から歸つて來た。

勇は玄關にゐる書生に我が荷物を運ばせて、先づ茶の間へ通つた。

「お母樣、只今戻りました」

母は我子の顏を見て嬉しさうに、

「オーお歸りかえ、大層遲かつたネ、手紙の樣子では、もつと早く歸るかと思つてゐたよ」

勇は火鉢の側に進んで、

「ハイ、僕も早く歸る心算でしたが、一昨日養老の瀧の畫を描いた後に、夜になつてから奇奇妙妙不思議な風俗畫をスケッチしましたから、昨日は一日旅館に逗留して、それから遲くなつて山を降りて、やつと名古屋の夜汽車に間に合つたのです」

母は平生勇が旅から歸つて來ると、その齎したスケッチ畫を品評するのを樂しみにしてゐる、母は實家が美術品を多く藏する爲め、自然と美術思想に富んで、書畫や骨董の鑑識は良人の男爵よりも勝れてゐる、畫に對する勇の天才は、此の母親の美術思想を享けたものらしい。

「さうかえ、それは面白いものがあるネ、後で緩緩見せて貰ひませう、わたしもおまへに相談し度い事があつて、早く歸れば宜いと思つてゐたんだがネ、マア差當り、此の帶地をおまへに擇つて貰ひませう、是れに小夜子さんに進げるのだがネ、此の中では何れが一番小夜子さんに似合ふだらう」

勇は小夜子孃の爲めと聞いて、吸ひかけた卷烟草を灰の中へぐつと刺し込み、やをら身を起して帶地の列んでゐる側へ乘出した。

「小夜子さんに進げるものなら、僕が一つ美術眼を以て見立てませう、小夜子さんは霞町へ歸られてから、叔母さんのお好みで大層派手な風をなさるが、あれは却て似合ひませんよ、小夜子さんには何でも上品で奧ゆかしいものが良いのです、さうですネー、此の帶地の中ぢや、此にある秋草模樣に菊の散らしてあるのが一番人柄ですネ、是れは能衣裳から意匠を採つたものに違ひありません、餘程古代めいてゐます」

一筋の帶地を擢出して母に示した、母も我が鑑識を誇るやうに、

「どうしてもそれだネ、わたしも先刻からそれが可いと云つてゐたんだよ、ぢや是れに極めるからネ、竹や外の帶を皆んなよく卷いて、玄關の方へ遣つてお置き、その内に三越から取りに來るだらうから」

一人の女中は帶地を卷いて片付けてゐる、一人の女中は勇の前に鉢に載せたバナナを持つて來た、勇は早速一つ捥ぎ取つて皮を剝きながら、

「お母樣、小夜子さんに今度は大層上等の帶をお進けなさるのですネ」

と何心無く尋ねた、母は意味あり氣に、

「是れはお祝ひに進げるのだよ」

勇は口に入れかけたバナナを其儘手に持つてゐて、

「ナニお祝ひに……」

と不審さうに顔を揚げた、母は頷いて、

「あゝ、小夜子さんが今度急にお嫁入をなさるんでネー」

勇はバナナを下に置いて了つた。

「お嫁入、何處へ」

驚いた顔をして、母の返事を待つてゐる、母は四邊に人がゐないかと、ちよいと次の間を振返つて、急に聲を低めた。

「勇や、わたしがおまへに相談し度いと思ふのは其事だがネ、全體今度の事は何だか誠に變なんだよ、先月の末に、お關さんが來なすつて、小夜子の事は豫ねて何處へか嫁に遣り度いと思つてゐたが、今度急に大層好い口が出來て、昨日見合を濟ましたところ、先方にも氣に入り、當人も至極進んでゐるから、早速取極め度いと思ふが、それに就て先方の望みだから、わたし達夫婦に表向きの媒酌人をして下さいとお云ひなさるのさ、お父様はあの通り無頓着だから、ウムよしよしと御承知をなすつたがネ、それにしても輕率な婚禮をすると、跡で後悔する事もあるから、よくよく先方の人物を調べた上にしなければならんと仰しやつてお關さんたお歸し申したのだよ、するとモー其日に直ぐ結納を取交はして了つて、御婚禮の日取も此の十五日とお極めなすつたといふ事で、わたしはあんまり早いのに吃驚したよ」

勇は何だか狐にでも欺かれたやうな心地がする。

「此の十五日、おやモー僅かよりありませんネー」

母はさも不平らしく、

「全體お關さんは何でもわたしに御相談をなさらないで、お父様にさへ話せば、わたしなんぞは何うでも宜いといふ風だから困るよ、今度の事だつて、もつと早くから御相談があつても宜ささうなものだけれども、御自分の方で事を極めてからお話があるのだもの、わたしの方で何と思つても爲様がありはしない、お關さんのお話では當人も進んでゐると仰しやるけれども、どうも小夜子さんがそんな口へ氣の進む譯はないと思ふんだがネ」

勇「全體それは何んな口なんです」

母「先方は大層な金持で、兩親の外に兄弟も無し、婿になる人は極く物堅い人物ださうだけれども、年がまだ二十三だといふから、あんまり若過ぎるわネ」

勇は頻に懸念らしく、

「何處の何といふ人ですか」

母「おまへも名を聞いてゐなさるだらう、神戸に名高い銀野次吉といふ商人がある、その息子の甚三といふ人だよ」

之を聞くと勇はアッと呆れて、急に返事も能きなかつた。

約束

一

小夜子孃が結婚の日も間近きに、母親は娘の支度に忙しく、毎日午後から家を出て、三越白木と買物に廻つてゐる。妹娘の豐子孃は自分が嫁にでも行くやうな心持で、面白半分にあれよこれよと騒ぎ立つてゐる、奉公人もそれぞれ用事を課せられて、解物やら縫直しと、夜も碌に寢られないほどの忙しさ。

唯一人本人の小夜子孃は、自分の部屋にばかり立籠つて、深き物思ひに沈んでゐる、自分の氣も進まぬに、いつの間にか結納までも取交され、婚禮の日まで確定して了つた、今更何と云つて斷らうか、斷り度くも取付く術が無い、此儘成行に委せようか、到底行末の見込は無い、

ああ斯んな時に勇さんがお在だつたら、早く御相談申して何とかお智慧を借りるものと、頻に勇が懐かしくなつて來た。

本人の外に今度の縁談を苦苦しく思つてゐるは小夜子の祖母だ、祖母は小夜子の浮立たぬ態度を見て竊に心配し、今日も母親の居らぬを幸ひに、小夜子を自分の部屋へ呼んで、その心中を試いて見た。

「なう小夜子や、今度の事はおまへに何の相談も無く、見合が濟むとその翌日、直ぐに結納を取交せて、婚禮の日取まで極められて了つたと云ふが、おまへは全く氣が進んでゐないのかえ、氣の進まないものならば、今の内に早く斷らうと云つて、何とか斷つて了はなければ、必ず後悔する事があるよ、全體斷らうといふ事はわたしに前から相談があつて可い譯だけれども、マアわたしは世捨人同様だから何うでも可いとして、肝腎なおまへの心を試いて見ないで、結納を取かはせるといふのはあんまりな仕方だネ、お母さんは島海さん御夫婦も大層御贊成だとお言ひだけれども、わたしの考へでは、それも當にならないと思ふよ、おまへは長く島海さんの家にゐたから、おまへの氣質を伯父様も伯母様も御承知でありさうなものだ、これが眞實なら、斷らいふ口へ大喜びで行き度がるだらうけれども、おまへのやうな人は金持だの豪商だのといふ口へ向かないわネ。

親切なる祖母の言葉は一一身に沁みて難有く思ふけれども、さりとて母親の意氣組を想ふと、いかにして斷る事が能きようかと、小夜子は心一つを定めかねてゐる。

「お祖母様、今更わたくしが可厭だと申しても、お母様が迚もお聞入れにはなりますまいが、外に何とかして今度の事を中止にする事が能きませうか」

祖母は暫く考へた。

「さあ、一通りの事ではむつかしいだらうよ、お母さんもあんなに大騒ぎをやつて支度をしておいでだし、婚禮の日まで極まつてゐるから、よくよくの事がなければ、これを破談にする事は能きまい、だけどもおまへが全く氣の進まないといふことなら、わたしが何んな思ひをしても、此事を中止にさせなければならないがネ、わたしの思ふには、島海さんへ上つて伯母様に御相談申したら、伯母様も必ずわたしと同じお考へだらうと思ふよ、よしや斷ういふお考へで無くつても、おまへの氣が進んでゐない事を申上げて、どうか破談になるやうな御工夫を願ひ度いとお願ひ申したら、伯母様も御承知なさるだらうし、伯父様の方から、何でも此の縁談を中止しろと仰しやれば、お母さんだつてそれを無理にと云ふ譯にもなるまい」

小夜子は何うも頼み度くはあれど、復た後の事も案じらるる。

「ですけれどもネ、それがわたくしの我儘から發つた事だと判かりましたら、お母様が嘸お怒りになりませう、それによく考へて見ますと、今度の口を斷つても、復た二度目に同じやうな口が出たら、さうさう自分勝手に可厭だとも言へません、よしやそれが破談になつても、二度目に一層惡い口が出たら、それも可厭とは申されなくなりませう、其事をわたくしは何よりも心配して居ります」

末を案じる小夜子の心も、母親の虚榮心に思ひ合すれば、強ち餘計な心配とは云へぬ、祖母も打案じて、

「成程、それも左うだネ、おまへのお母さんは、何でも金持とか豪商とかいふ處を望んでゐるのだから、幾度斷つても同じやうな口ばかり出て來るに違ひ無い、島海さんの方でおまへに似合つたお婿さんを捜して下さると可いけれどもネー、あの勇さんは何故まだ獨身でいらつし

やるだらう、モー三十をお越しになつたから、寧そ勇さんがおまへを貰つて下さると可いのにネー」

小夜子は案外なといふやうな顏をして、

「勇さんは生涯御獨身で畫の事を御勉強なさるのですつて、僕は美術を妻として生涯美術と同棲するつて仰しやいますよ」

祖母はよく勇の人物を識つてゐる。

「あのお方の事だから、生中に妻子なんぞがあつては勉强の妨げだとお思ひなさるのだらう、だけども偉いお方だよ、後には必ず天下に名を成すお方だよ」

小夜子は勇の事を褒められるのは自分を褒められたよりも嬉しい。

「勇さんは世界の美術家になると仰しやつて、五十までは書生の意で勉強なさるお覺悟ですよ」

祖母も感心したやうに、

「それでなければ大業を成す事は能きない、先月木曾へいらしつたといふ事だが、まだお歸りにならないかネー」

小夜子も一日千秋の思ひで待つてゐる。

「まだお歸りになりません、お歸りになれば、わたくしが畫手本をお頼み申してありますから、何とか御知らせがありませう」

祖母は勇が居らぬを殘念さうに、

「勇さんがいらつしやると、わたしも昔からのお馴染だからおまへの事を御相談申すのに都合が可いけれども、お不在では致方が無い、それでは小夜子や、わたしが是れから鳥海さんへ上つて、伯母様におまへの事を御相談申して來よう、後の事は兎も角も、差當り今度の口を破談にしなければ、おまへが生涯の難儀を背負ふやうなものだから」

談話半ばに女中が表から入つて來て、

「お孃樣、只今鳥海樣から老僕さんがお使ひに見えまして、若樣が畫手本を描いてお戻りになりましたから、御都合が好ければ直ぐにいらしつて下さいと申して參りました、何と御返事を致しませう」

小夜子は飛立つやうに悅んだ。

「ぢや直ぐに上がりますと申してお呉れ」

祖母も小夜子の爲めに上無き味方を獲たやうに思つた。

「小夜子や、先づおまへが上つて、勇さんや伯母樣によく御相談申して御覽、その樣な次第で、わたしが鳥海さんへ伺ふから」

小夜子は嬉しさうにそはそはとして隱居所を辭し、衣服を着換へる間も惜しく、髮もそこそこに撫で付けて、遠くもあらぬ鳥海家へ、驅けるやうにして急いで行つた。

二

「小夜子さん、よく直ぐにお入來が能きました、叔母樣はお不在ですが」

玄關の前に爪立ちして待つてゐた勇は、小夜子孃の嬉しさうに門から入つて來る顏を見て、づかづかと前に進み寄つた、小夜子孃は勇を見ると、忽ち胸が一杯になつて、聲も吃るやうに、

「ハイ、お母樣はお買物にいらしつてお不在ですから、お祖母樣に申上げて、急いで參りました、あなたはいつお歸りになりました」

孃の顏は酷く窶れてゐる、孃の眉宇には深き愁を湛へてゐる、今迄いかに心を苦しめたか、いかに煩悶もし懊惱もしたか、その心事を聞くまでも無く、胸中の苦悶は察するに餘りありと、淚脆い勇は急に哀れを催した。

「僕はモー少し前に戻つたばかりですが、お頼みの畫手本が出來ましたから、早くお目に懸け度いと思つて使ひを進げました、それに色色伺ひ度い事もありますし、マア直ぐに畫室の方へおいで下さい」

玄關の脇から庭口へ出て、一棟離れた自分の

畫室へ小夜子孃を誘つた。

　風變りな勇が自分の好みで建てた畫室は、木柱が粗末で、物置小屋に似てゐるけれども、世の常の家屋と違ひ、南方を小窓にして、北の方へ縁側を取つてあるのは、晴雨寒暖によつて光線の變化するを防ぐ爲めであらう、疊は二十枚も敷いてあつて一人の室には廣過ぎるやうなれど、机や道具やら、何でも彼でも雜然と取散らして、廣い室を狹く使つてゐる勇の癖、殊に今は旅行鞄を開いた後と見えて、空虚の鞄が隅の方に轉がしてあり、木曾山中のスケッチや描きかけの畫なぞが秩序無く取亂されて、養老の瀧の畫一枚が正面の壁に懸けてある。

　此の畫室は他人禁制で滅多に奉公人をも入れないから、小夜子はいつも畫の稽古に來ると、勇の机を片付けてやつたり、疊の塵を掃いてやつたりした事があつた、奉公人に手を付けさせる事は大嫌ひの勇も、小夜子孃に片付けて貰ふ事を何よりも悅んだ、それは小夜子孃が美術家の心を識つて便利を感ずるやうに片付けるからである。

　他人の出入を禁じても、小夜子孃には開放してあつた畫室ながら、勇が不在になつてから、小夜子孃も久しく此の畫室へ來なかつた、今久し振りで來て見ると、自分の常に稽古する机も、依然として長火鉢の側に据ゑてある、自分の硯や繪道具も机の上に置いてあつて、上に座蒲團が掛けてある、心に愁ある小夜子孃は之を見て一入懷かしく、自分の故郷へでも歸つたやうな心地がした。

　勇は孃の座蒲團を取つて、長火鉢の前に据ゑ、自分も蒲團の上に坐つて、

「小夜子さん、よくあなたは出られましたネ、實は今母とも相談して、何と云つて呼びに進げようか、母から用があると云つては、もしや叔母樣が御一緒にお入來だと困るし、畫手本が出來たと申したら、あなたお一人でお入來が能きるだらうと思つて、さう申して進げたのです、實はあなたの事に就いて、急に僕からお話をしなければならん事情がありますので」

　徐ろに語り出しながら、長火鉢に懸けてある土瓶の番茶を茶碗に注いで、小夜子の前に侑めた、小夜子は悄然と頭を低れてゐて、敢て茶碗を取らうともしない、

「勇さん、わたくしも早くお目にかかり度いと思つて、何んなにお歸りをお待ち申して居りましたか知れませんよ」

　勇は自分も茶を汲んで一杯ぐつと飲み干した。

「小夜子さん、僕は今母からあなたの御縁談を聞いて驚きましたよ、あなたがお嫁入なさるといふ事に驚いたのではありません、思ひも寄らない口へ御縁談が極まつたのに吃驚したのです、叔母さんのお話では本人も氣が進んでゐると仰しやつたさうですが、本當ですか」

　小夜子は屹と身體を引締めて、怨めしさうに勇を見上げた。

「それはあんまりなお言葉です、何でわたくしが斯んな口へ氣が進みませう、金持だの、豪商だのと云ふやうな處は、大嫌ひでございます」

　勇は頷いた。

「僕も爾うであらうと思つたのです、それにしてもあなたのお氣が進まないものを、何うして結納も取交はして、御婚禮の日まで確定した譯ですか」

　小夜子は幾度か沈吟した、語り出さんとして躊躇した、深く語つては子として母の事を惡しざまに言はねばならず、語らねば愈よ勇に怪まれんと、暫く思案してゐた。

「そのお疑ひは無理もありませんが、今度の事は最初からお母樣が大層御熱心で、此の口を外づしてはお嫁に行く處が無いやうに仰しやいま

すし、妹の眞子も無闇に贊成して、姉さんは羨ましいの、果報者だのと云つて騷ぎ立てますから、わたくしに異存も無いものとお母様はお思ひなすつたのでせう、見合の翌日、わたくしの知らない間に、結納の取交せも濟みますし、婚禮の日取も極まつて了つたのですが、お母様は大層なお悦びで、それから毎日毎日一生懸命になつてわたくしの支度をして下さいますのはお氣の毒のやうでございます、買つて來て下さるものは、わたくしの身分に過ぎた贅澤な品ばかりで、却てわたくしの氣が引けるやうです、爾ういふ譯で極まつて了つたのですから、わたくしも今更何うして可いかと思つて、毎日泣へてばかり居りました」

母を庇ふやうにして、概略を語つたけれども、その間にいか程心を苦めたか、小さい胸を痛めて痩せる程に煩悶したかといふ事は、自らその態度で察し得られる、勇は小夜子の心中を氣の毒に思ひながら、

「それにしても小夜子さん、あなたのお祖母様がよく御承知なさいましたネ、お祖母様は御見識の高いお方だから、あなたのお心も御存知でありさうなものですのに」

小夜子は急に語調を新にして、一語一句に眞實を籠めた。

「イイエ、お祖母様は大の御不贊成です、今もわたくしはお祖母様と、色色御相談してゐた處でしたが、お祖母様は此の緣談をわたくしの爲めに似合はしくない、おまへの氣も進まないものなら、何うかして今の内に破談にして了ひ度いものだ、それには今日にも鳥海さんへ伺つて、伯母様によくお話し申さうと仰しやつたのです、ところへあなたのお使ひが參りましたから、おまへが先づ勇さんの御意見を伺つておいで、その模様でわたしが復た御相談に上るからと、斯う申してお在でした」

勇は慨然として言葉も莊重に、

「それで御事情が判かりました、僕も多分爾んな事だらうと思つて居りました、ところで小夜子さん、僕は偶然の事からその銀野の息子さんを識つてゐますよ、旅先で同じ旅館に泊つて、他所ながらその人物を見ましたが、到底あなたの良友たるには適しません、駿馬癡漢の譬へどころか、人格の相違は天地霄壤も啻なりません、それに此の御緣談は人物と人物とを目的としたのでは無く、全く虛榮心と虛榮心とで成立つたものです、斯う申しては失禮ですけれども、叔母様の方でも先方の人物如何を顧るのでは無くして、數百萬圓の財產家といふ點にのみ重きを措かれたのでせうし、先方ではあなたが鳥海男爵の姪で栗山少將の令孃であるといふ肩書を何よりの名譽と思つてゐるのです、その證據には先方の人達が、東京の華族さんからお嫁がいらつしやると云つて吹聽してゐましたもの」

小夜子は今更のやうに、

「アラ、そんな事を申しましたか、道理で最初には鳥海様を親元にして婚禮するやうに願ひ度いと申したさうです」

勇は斷乎たる口氣で、

「だから僕は此の緣談が、徹頭徹尾あなたの不利益なる事を斷言します、如何なる事情に迫ればとてあんな處へお嫁入なさるのはあなたの不幸である事を明言します」

一語一句に熱誠を籠めて、小夜子の心に透徹するやうに忠告した、されどさすがに遠慮したか、甚三のスケッチ畫までは持出さなかつた、此の場合にその畫まで覽せしむるのは、いかにも忍びないやうに思つたのである。

三

勇の忠言を聽いて、小夜子は愈よ事の眞相を解し得た、事の眞相を解し得るほど、我身の運の幸無い事を想ひ起して、ホッと溜息を吐いた。

「勇さん、それならば何うしたら可いでせう」
と勇の顏を見て頼りかかるやうに言つた、小夜子の心には勇を慈愛深き親のやうにも思つてゐる。眞實の兄のやうにも思つてゐる、此際頼るべきは勇の外に無い、勇の指圖さへ受ければ、如何なる事でも其意に乖くまいと覺悟してゐる。

勇は頓に答へなかつた、小夜子孃が一世の大事と深く思案を凝らして、思ひ入つたやうに、
「さあ、是れは甚だ難事ですネ、叔母樣のお心がそれ程進んでいらつしやるのに、御支度も半分は出來てゐませうし、結婚の日も近づいてゐる場合ですから、尋常一様の手段では、突然と之を破談にする事が困難です、それに今度の御縁談がよしや破れても、叔母樣は金滿家といふやうな口がお好きですから、再び發る御縁談も矢つ張り今度のやうなものでせう、さうして見るとあなたはいつまでも氣の進まない縁談に苦められなければなりません」

小夜子は前へ乘り出して、
「その事をわたくしも心配して居りました、今度の口を斷つても、二度目や三度目に、一層惡い口が出やしないかと思ひまして」

勇はそれも察してゐる。
「だからあなたを救ひ出すには、今度の口を破談にすると同時に、あなたの身體を外へ引取つて了ふやうな工夫を致さなければなりません、それに就て今も母と相談しましたが、母はあなたを此方へ引取り度いと申してゐます」

小夜子は耳に春の風でも當つたやうな感じがした。
「わたくしを此方へ、養女のやうにでもなすつて」

勇「さあ、それに就ては先づあなたのお心を伺つて見なければなりませんが、今の場合に何の理由も無くあなたを養女に呉れろと言ひ出す譯になりませんから、その口實として」
と言ひかけて少し口籠り、
「後には僕に配偶せるといふやうな事を申すのですネ」

小夜子はその一言が電氣の如く骨にまで徹した、さりながら勇の眞意は未だ知り難い。
「そんな事を口實になすつて、もしやあなたの御迷惑になりはしませんか、あなたは生涯御獨身のお覺悟でいらつしやるのに」

勇は莞爾と笑つて、急に卷莨に火を點じ、左の手に持つて一つ二つ吸ひかけた、莨の烟に故意と我が顏を隱すやうにして、
「いかにも僕の獨身論は、あなたのお父樣にも明言した通りですが、それは妻帶すると僕の事業を妨げられるからの事です、あなたなら決して僕の事業を妨げるどころか、却て僕の成功を助けて下さるだけの資格があります、それも今直ぐ結婚する譯では無し、五年でも十年でも僕が自ら滿足の能きる技倆になるまでは、あなたにも畫の稽古をして戴いて、互に相援け相勵ましたら、他日藝術界に貢獻する所がありませう、唯あなたがその事を御承知なさるか否やと云ふ事が問題です」

小夜子は却て怨めしさうに、
「何と仰しやいます、わたくしがそれを難有いと思はないやうな人間だとお思召しますか、わたくしはあなたのお弟子として、生涯畫の稽古をさして戴けば外に何の望みもありません」

勇は莨を火鉢に棄てて、急に眞面目な態度となつた、
「ところで小夜子さん、それだけの口實で、もしや叔母樣の御同意を得なかつた時には何うしませう、叔母樣は僕をお嫌ひですから、急に御同意もなさいますまいし、叔母樣の方から觀れば、今度の口と僕とを取換へるのは、それこそ黄金を鉛に換へるやうなものでせう、さうする

と、此事を成就せしめるのに、モー一層强い理由が無ければなりません、そこで愈よむづかしくなつて來たら、僕が罪人になつて、あなたとは疾くに約束を結んで了つた、二人の心は決して渝らないから、無理に外へやらうとしても駄目だといふ風に言出すかも知れません、それもあなたが御承知なすつて、若もの場合には僕と口の合ふやうにして下さい」

　小夜子は却て勇の親切が氣の毒になつた。

「あなたを罪人にするなんて、それでは私が濟みません」

　勇は打消して、

「あなたの爲めなら決して厭ひませんが、事の順序として、突然此方からあなたのお家へ其事を申込むも變なものです、今度の口は惡いから破談になさい、それと同時に小夜子さんを家へ引取り度いと言つたら、あなたを貰ひ度い爲めに、今度の口を惡く言ふやうに思はれて、却て事の妨げになりませうから、丁度あなたのお祖母様が、御心配なさるのを幸ひに、あなたがお歸りになつたら、兎も角もお祖母様を此方へおよこし下さい、僕と母がお祖母様と相談を極めて置いて、お祖母様に巧く取計らつて戴くやうに致しませう」

　小夜子は嬉しさに夢心地。

「では直ぐに歸つてお祖母様に來て戴きませうか」

　勇は笑つて、

「マア、それほどお急ぎなさらんでも、僕の描いて來た養老の畫を一つ覽て下さい」

　再び茶を汲んで小夜子の前に出した。

（四）

　當面の問題が一決して、勇も小夜子も始めて重荷を卸したやうな氣になつた、殊に小夜子は日頃の煩悶も忽ちに解け、愛戀の雲も漸く霽れて、光風霽月を看るやうな心地がしたから、此に至つて前の壁に懸けてある養老の瀧の畫を注視した。

「勇さん、此のお畫はホントに良く出來ましたネ、普通の畫と違つて、此の瀧には秋の神が宿つてゐるやうに思はれますネ」

　勇も我が苦心を誇り顏に、

「是れは僕があなたの畫手本にする所存で、心血を濺いで描きましたもの、然し何程苦心しても、まだまだ眞の趣きを完全に寫し出すことが能きません、今度あなたが家へおいでになつたら、折を見て一度養老の山へ御一緒に行つて、あなたに實物の瀧をお目にかけませう、養老は却却好い景色ですから、あなたがおいでなすつたら、必定お悦びになりますよ」

　小夜子は心の底から嬉しさうに、

「御一緒に行つて描いたら、嘸樂みでせうネ」

　勇は前年の事を憶ひ出した。

「その時は復た合作をしませうネ、あの酒匂の時の様に」

　小夜子は今も尙ほ當年の感想を忘れない。

「あの時のやうに面白かつた事はございませんネ」

　魂は雲烟縹渺の間に馳せて、勇と共に酒匂の川口に優遊するやうな心地がする　小夜子は今嬉しさの極點に達してゐるが、やがてその反動として、一方から種種の懸念や心配が湧いて來た。

「ネー勇さん、世間ではよく從兄妹同士の結婚が衞生上に害があると言ひますけれども、そんな事はありますまいか」

　勇は此語によつて小夜子の心に何の秘密も知らぬ事を悟つたから、快然として打笑ひ、

「イヤこれは大丈夫、身體の强健なる從兄妹ならば、却て雙方の良質を備へるといふ利益があつて、決して害はありません、害があるといふのは雙方ともに體質の虛弱な人達をいふの

です」
小夜子「伯母様は御承知なすつても、伯父様は何と仰しやるでせう」
勇「母から申せば父だつて承知しない事はありません、母は非常に熱心で、以前からあなたを外へ遣り度くないと申して居りました、僕の獨身論にも大反對で、若い内はそんな事を言つても、年齢を取つて病氣でもすると、獨身では心細いものだ、お嫁を貰ふなら小夜子さんが丁度可いけれどもと申した事があります」
小夜子は微笑んで、
「其時あなたは何とお答へになりました」
勇「アハハ、御追究は恐入る、其時はまだ何とも答へませんでした」
小夜子は俄に愁然として、
「ですが誠にお氣の毒ですネ、あなたは全くわたくしを救つて下さる爲めに、平生の御主張をお曲げになつたのですもの」
勇は至極眞面目に、
「イヤ、決して爾うお思ひなすつてはいけません、僕の獨身論はあなたのやうなお方が此世に無いと思つた以前の事です、よく考へて御覽なさい、僕のやうなものが嫁を欲しいと云つたつて、決して來るものはありません、四十までも五十までも父兄の厄介になつて書を勉强すると云ふ變物に、誰が嫁に來るものですか、あなたでなければ僕の處へ來て吳れる人は無し、僕も亦あなたで無ければ嫁に貰はうとも思ひません、あなたが御承知なさらなければ、それこそ僕は眞正の獨身で生涯を通します」
小夜子は心中に感激して嬉し涙を泛べつつ、
「爾う仰しやつて下さると、難有いやら勿體無いやら、わたくしはモー下女になつた氣で働きますけれども、しかし何う考へて見てもあなたにはお氣の毒でなりません」
勇は笑ひながら、
「ぢや此事を廢しませうか」
小夜子も笑つて、
「存じません」
此時遙に隔つた門の方にて、人俥の威勢好く駛り込む音がした、玄關前にて、
「お歸りー」
と叫んだのは小夜子の耳に聽き馴れた車夫の聲だ、小夜子は急に振返つて、
「オヤ伯父様のお歸りですネ」
勇も顏を揚げて、
「左樣、父が戻つたと見えます、小夜子さん、マア奥へいらつしやいな」
平生ならば小夜子は伯父や伯母の前に出るのを樂みのやうにしてゐるけれども、今は何となく心が新しくなつて、羞かしいやうな氣がしてゐる。
「勇さん、わたくしは直ぐに歸つて、早くお祖母様に今の事を申上げませう」
勇も頷いた。
「それも爾うですネー、今夜にも直ぐお祖母様が此方へ來て下さるやうにお願ひなさい、モー日限が迫つてゐますから、一日も猶豫はなりません」
小夜子は座を立つた。
「では伯母様に宜敷」
勇は送り出して、
「少しお待ちなさい、今誰かに送らせますから」
小夜子は會釋して、
「そんな御心配には及びません、遠道では無し、いつでも獨りで御稽古に參るぢやございませんか」
勇は少し微笑みながら、
「平生は爾うですけれども、今はお嫁入前の大切なお嬢様ですもの」
小夜子は眼を圓くし、
「アラあんな事を仰しやつて」

と、そこ/\に下駄を穿いて、逃げるやうに門の外へ出て行つた。

五

一旦は逃げるやうにして門の外へ出たが、出て見ると心は後方へ引戻されるやうな氣がして、小夜子孃は幾度も鳥海家の方を振返つた、勇さんの言葉に僞り無くば、我身は今度の難を遁れて、遠からず此の家に引取られるだらうと、自分の前途には幸福の門戸が開けたやうな心地がして、唯嬉しさに堪へられない。

小夜子孃は以前此の鳥海家に寄寓してゐた時から、自分の家よりも鳥海家の方を安樂國のやうに感じてゐた、伯父や伯母の慈愛は言ふも更なり、殊に我身を弟子とも思ひ、又眞實の妹とも思つて、滿身の愛を傾けて吳れた勇ぬしの眞情は忘れんとしても忘れられぬ、孃は勇の藝術を尊重すると同時に、その人物にも傾倒して、世に男子も多いけれど、勇さんこそ男子中の男子よと竊に敬慕の念を絶たなかつたのである。

その勇さんが我身の爲めに自ら罪人となつてまでも、今度の難儀を救つて下さる、生涯獨身のお覺悟も我身の爲めに破つて下さる、ああ何といふ勿體無い事だらう、難有いと言はうか、濟まないと言はうか、我身は如何にして此の大恩に報いようと、頻に勇の眞情を感じて、道を歩きながらも感涙の湧き出づるを禁め得なかつた。

其に感じた小夜子は慨然として將來の事を想ひ廻り、我身が愈よ鳥海家へ引取られたら、自分の身體を無きものにして、勇さんの爲めに盡さなければならぬ、我身のある爲め勇さんの進步が鈍くなつたと云はれては世間へ對して申譯が無い、我身が內より助ける爲め、勇さんの事業が光彩を增したと云はれなければならぬ、爾う思ふと我身の責任は重大だ、迂濶な心を以つて、氣樂に日を送つてはゐられないと、我身の前途の甚だ多忙なる事を考へた。

伯母樣はお慈悲深いお方だし、伯父樣も淡泊な御性質だから、以前のやうに可愛がつて下さるだらうけれども、今度は以前と違つて、舅姑として事へなければならぬ、何うか以前にも增して、一層お氣にも入るやうに一生懸命になつて孝養を盡し度いものだ。

伯父樣よりも伯母樣よりも一番怖いのは却て勇さんだ、その眞心は判つてゐれど、天才家の事として癇癖の強い御性質だから、我身が恩に狎れて我儘でもすると、必ず御氣に障るだらう、藝術家は外の事で心を亂されるのが禁物だから、我身は何處までも弟子といふ心を忘れてはならない、小間使になつたり、看護婦になつたり、或は女中になつたりするやうな氣で勇さんに事へなければならない、そのかはり勇さんが他日愈よ成業して、世界に其名を揚げられる曉には、我身も美術界の女王として、勇さんと共に世の尊敬を受けられる、爾うなつたら嘸嬉しいだらう、是れぞ我身の幸福だと、頻りに前途の樂しみを想像して、腦裡に種種の幻影を描き、身は宛も勇と共に天國にでもあるやうな心地して、步む足が地に着くを覺えず、夢とも無く現とも無く、いつしか我家の門前へ出たけれども、ツイ迂つかりと門の前を五六間ばかり通り過ぎて了つて、忽ちハツと氣が付いた。

「アラわたしとした事が」

自ら顏を紅くして、人や見ると恥かしさうに、踵を返して急に門の內へ駈込んだ。

小夜子は門の內へ入つて、平時の通り玄關から上らうとしたが、フト心付いて足を停めた。

「もしやお母樣がお歸りでいらつしやると、先へお目にかかつては、今の事をお祖母樣に申上げる折が無くなる、勇さんは今夜にもお祖母樣をよこすやうにと仰しやつたから、何でも早く

お祖母樣に申上げて了ふ方が可い

　玄關脇から庭口の小門を開いて、燕石傳ひに隱居所の方へ行くと、祖母の室では人の話聲が聞える、障子が閉めてあるからその人影は判からないが、祖母の聲が平生より少し高いので、小夜子は足音を立てず、忍ぶやうにして窓の前に進んだ、立聽しては惡いと思つたけれども、中から母の聲も聞えるので、小夜子はその儘内にも入らず、太い百日紅の根方に身を寄せて、談話の濟むのを待つてゐた、祖母の聲は平生の優しく柔かきに似もやらず、今は幾分か激勵の調子を帶びてゐる、

「なうお關や、今も言ふ通り、わたしは是迄家の事に就ては一言もおまへに彼是言つた事は無い、おまへの世になれば、何事もおまへの了簡次第だから、わたしは決して何にも言はなかつたが、今度といふ今度ばかりは何うしても默つてゐられませんよ、小夜子に緣談が始まつたら、ナゼ早くわたしに相談してお呉れでなかつたらう、見合の日だつてわたしがゐては邪魔になるかも知れないけれども、席へ出なければ他所なから視いたつてもその人物を見る事が能きるわネ、然しわたしの事は何うでも可いとして、當人の氣の進まないものを無理に嫁に遣つては却つて後の爲めになりませんよ、當人の爲めにもならず、先方の人の爲めにもならず、兩方で難儀をするやうになるから、よくよくその邊を考へて貰はなければなりませんネ」

　母の聲として、

「だつても是程好い口を、あの子だつて氣の進まない譯はありません」

祖母「では結納を取交はせる前に、おまへは本人に心を訊いて見ましたか、本人が承知した上で約束を取極めましたか、それが順當の事だけれども、おまへはその手續を踏まなかつたでせう、おまへの方では好い口だと思つても、斯ういふ事は相緣奇緣、本人が進まないと云へば、それを無理にと云ふ譯になりません、今度の口は金持の獨息子と聞くと、ちよつとは好いやうに思はれるけれども、小夜子の爲めには決して似合はしい緣と思はれない、先方の人物はまだ年も若し、よく世間にある通り、息子が道樂で困るから、嫁でも取つたら治るだらうと、親の方から無理に嫁を持たせる位なものだらう、そんな所へ無理に遣つては後に必ず後悔する事が發りますよ」

母「全體何うしろと仰しやるんですか」

祖母「モー一度おまへによく考へ直して貰ひ度いと思ふのさ、何にしろ肝腎の當人が氣の進んでゐない事だからネ」

　母は少し聲高く、

「小夜子があなたに嫌だとか何とか申しましたか」

祖母「別に嫌だとも判然言はないが、わたしが訊いて見た口振では決して氣が進んでゐません」

　母は激したやうな語調で、

「わたし達が是程に心配してやつた口を、あの子の分際として否も應も言へた義理ぢやありません、自分では昔の事を知らないから、好い氣になつてそんな我儘を言ふのでせうが、よく考へて御覧なさい、小夜子は棄兒ぢやありませんか、しかも乞食の子です、わたし達が育ててやらなけりや、生きてゐるか死んでゐるか判かりやしません」

　祖母は慌てて、

「コレさ、聲が高い、人に聞かれたら何うします」

　窓の外に立聽してゐた小夜子は身を顫はせて覺えず樹の根に仆れた。

墓場

一

昨日までも今日までも、栗山少將の娘よ、鳥海

男爵の姫よと、自らも信じ、人にも敬はれたる小夜子が、今更棄兒よ、乞食の子と、身の素性を洩れ聞いた時は、あまりの驚愕に眼が眩んで、思はずヨロヨロと樹の根に倒れたが、その瞬間に、天界から地獄にでも突落されたやうな感じがした、眼前の大地が俄に開くなつて、自分の世界が急に亡くなつたやうな思ひがした、世界も亡くなつた、自分も亡くなつた、今迄の小夜子も亡くなつた、希望も亡くなつた、樂みも亡くなつた、浮世の光明も無くなつた、人の溫情も亡くなつた、自分の身體や魂は氷のやうに冷たくなつて、其儘消えて了ふやうな心持がした。

良あつて小夜子はそつと身を起して四邊を見た、今迄見馴れた木も石も今は我身のもので無く、向うに見える自分の部屋も遠く〳〵、遠くへと離れて行くやうな氣がして、自分の棲處といふものは何處へか消えて亡くなつたやうに思はれた。

「あゝ、棄兒だ、棄兒だ、乞食の子だ、わたしやモー斯うやつてはゐられない」

足の下から何者にか衝き上げられるやうな、惡魔にでも追立てられるやうな心持がして、小夜子は殆ど夢のやうに庭口から門の外へ忍び出た。

門の外へ出て往來の人を見ると、誰も彼も我身の事を、アレ棄兒よ乞食の子と嘲つてゐるやうに思はれる、隣家の土塀、見越の松、角の交番、向ひの西洋館、走る犬、豆腐屋の聲、兵營で吹く喇叭の音まで、見るもの聞くもの皆な我身を呪ふやうに感じられる、小夜子は廣い世界に身一つを置く處が無いやうな氣がして、人目にかかるも厭はしく、南町の坂を降りて、射的場の背後の草原へ逃げるやうに駈け込んだ、今は練兵も濟み、遊び兒も引上げて、廣い草原に人影も無く、小夜子が獨り枯草を踏んで行くと、秋に後れた死殘りの大きな螽斯が、キチキチと羽音を立てて、草から草へ飛んで行つた。

小夜子は何處といふ的も無く、草原の中を彼方此方と彷徨つてゐたが、まだ何者にか追はれてゐるやうな氣がして、心が落着かない、世の中の人は悉な他人だ、誰一人味方になつて、自分の心を打開けるものも無いと、頻に心細く悲しくなつて來た、それに就けても憶ひ出すのは亡き父上の深い御恩、眞の親でも及ばぬほど我身を愛して下すつたが、今更思へば勿體無い、ああ父上よ、お父樣よと、急に亡き父が戀しくなつて、向うに高い青山の墓地を見上げた。

墓地の上には大小の墓石が樹木や生垣と錯綜して列んでゐる、夕陽は既に沒して、淡い暉が崖上の人家から墓地の上に這ひかかつて行く、參詣の人も去つたと見えて、人影も無く、物の音も聞えない、小夜子は草原から崖の細い道を辿つて、墓地の裏口へ登つた

小夜子は人に遭ふのが何よりも苦痛である、そつと四邊を見廻して、故意と樹の下の薄暗い道を歩み、草にも木にも心置くやうにして、細い墓場の路を縫ふやうに廻つて行き、中央の大通りから一町程東へ引込んだ我家の墓所の前に出た。

一方には石の玉垣で圍つた某貴紳の墓所があつて、伊豆の小松の大墓石が亭亭として嚴めしく四方を睨んでゐる、一方にはまだ葬られて時日も經たぬ白木の新墓標が、文字の墨色も褪めずに、土饅頭の上から人待顏に白く立つてゐる、その中央の一圍ひ、要冬青の生垣を結び廻した四坪程の墓所は、父の靈が永久に眠つてゐる處、白く磨いた御影石の表面には、陸軍少將栗山義雄之墓と肉太の字で彫付けてある、小夜子は毎月の命日に、此の墓へ參詣を怠つた事が無い、母親と共に參らねば、祖母と一緒に詣でるし、二人に差支があれば、自分一人は必ず來て、父の靈位に香花を捧げてゐた、さりながらそれ

は今迄の小夜子として參詣したのである、父母の實子として供養したのである。

今は心が新になつて、父の大恩を骨髓まで感じてゐる小夜子は、以前のやうに躁喧しく、墓場の中へ進み入るべき勇氣も無い、遠方から先づ兩掌を合せて、恭しく父の墓を拜しながら、膝を曲げて膝行するやうに少しづつ前に進んだ、先の日に參詣して手向けた花は、花筒の水が涸れたか、半分萎れて哀れに首を埀れてゐる、線香の灰が纔に殘つて、燃え殘りの赤い紙が、雨で地に叩きつけられてゐる。

小夜子は合掌したまま默然として良久しく父の墓を視詰めてゐた、視詰めてゐる中に、暗涙が頻に湧き出して、頰に傳はるけれども、敢てそれを拭ひもしない、小夜子の眼には墓の影が見えないで、生前の父の姿が朦朧として現はれて來る。

軍服を着た嚴めしい父の姿も眼に見える、平服を着て食膳の前に胡坐をかき、自分に酌をさせて嬉し氣に酒を飮んでゐる時の優しい顏も現はれる、自分の幼い時分、父が兵營から歸ると、先づ軍服をザラリと脫ぎ棄てて、大急ぎで嬉しさうに自分を抱上げた態度が、今更のやうに浮かんで來る、父が隊から戾ると、必ず土產物や玩具を手づから自分の手に渡して呉れた、自分が妹と喧嘩をすると、いつも母に叱られるけれども、父は我身の贔屓して、妹を叱つたり、母を宥めたりして呉れた、あれが何うして唯の親と思へよう、父上は實子の豐子よりも我身の方を可愛がつて下すつた。

小夜子は斯う思ふと、何うしても亡き父を養ひの親とは思へない、世には實の親子でも、あれ程に親みの無いものがある、我身が東京に寄寓してゐる時、故鄕の夢を見ると必ず父を見ない事は無かつた、父の手紙を受取ると、封を切らない先から嬉し淚が零れた、東京の家へ一緒になつてから、父の慈愛は以前よりも一層深くなつた、我身の畫の上達を心から悅んだのは父である、我身に詩歌文章の書籍を澤山買つて呉れたのも父である、女は人に嫁しても萬一の時には獨立する資格が無ければならんと、自分に藝術を仕込んで下すつたのも父である、父は我身の爲めに末の末までも考へて下すつたのであらう、是れこそ眞に深いお慈悲、眞の親でも及ばない御恩である。

小夜子は當時の事を憶ひ起して、初めて父の深い心を悟つた、父は我身を愛するが爲めに、又我身の未來を思ふが爲めに、飽くまで我身を教育して下すつたかと思ふと、その深い情が身に沁みる、いつの時は矢つ張りそのお心持で我身に斯う云つて下すつたのだらう、何の時もその下心で、我身の爲めに末の用意をして下すつたかと、以前の事を繰返して見ると、父の注意が犇犇と身に感ぜらるる、その高恩が骨にまで徹つて、身體の筋筋が緊め付けられるやうな氣がする。

小夜子は端無くも、父が戰地へ出征する前日に、特に自分を二階の部屋へ呼んで、懇懇と諭された事を想ひ出した、當時の父の優しい中に悲を含んだやうなお顏、太い地聲に悲みの存するやうなお聲、武士が戰場に臨むと生還は豫期しない、自分が若しや討死したら、おまへはお母樣とお祖母樣を大切にして、親孝行をしてお呉れ、伯父樣や伯母樣は第二の親だ、勇さんを兄とも師匠とも心得て、何事もよく教へを受けろ、妹はあんな氣質だが、無理があつても我慢して可愛がつて呉れろ、何事も控へ目にしてお母樣の御機嫌を損じるなと、噛んで銜めるやうに仰しやつた、今更想ふと父上は深い深いお心があつて我身を誡めて下すつたのだ、それと言はずに我身の行末を案じて下すつたのだ、道理で其時父上のお眼には淚が見えて

ゐた、ああ勿體無い……難有い……情に迫つて小夜子は思はずワッと泣伏したが、夢のやうに手を出して、父の墓をそつと抱いた。

「お父樣、堪忍して下さい、濟みません、わたくしは些つともお父樣の大恩を知らずに居りました、斯んな賤しい素性のものを、よくマア子にしてあれ程に可愛がつて下さいました、爾うとは知らないで、御存生中に一言のお禮も申上げなかつたのが悔しうございます、深いお心も存ぜず、夢中で暮らしてゐたのが殘念でございます、お父樣、どうぞ恕して下さい、何うしたら御恩報じが能きませう、わたくしはモ！浮世に望みはございません、お父樣のお側へ參つて、草葉の蔭で孝行が致し度うございます」

墓に抱き付いたまま、絶入るばかりに泣いてゐた、心は半分死んでゐる、大地が二つに裂けて地の底へ沈んで了ひ度いと思つてゐる。

四邊は漸く薄暗くなつて來た、何となくしつとりとした濕潤いやうな腥いやうな墓場の氣が身に沁みて來た、何處ともなく線香の匂がする、燃えてゐるのでは無いが、樹や石に屯してゐる日中の匂ひが、夜陰の氣の上昇すると共に、四方へ分散するのである、彼方の墓の間で繁つた木の葉のザワザワと急に動くのは、宿つてゐる夜の鳥が舞ひ出すのであらう、梟か、木菟か、死者の幽魂か、夜行の鬼か。

平日ならば氣味惡く、又物凄く、片時も斯んな處にゐられぬ小夜子も、今は却て闇くなるほど自分の身體が安らかに、自分の心が落着くやうに思つた、暗黑も怖くは無い、沈默も寂しくは無い、今は人の眼、人の聲より遠ざかるほど、自分の世界が近づくやうな感じがする。

小夜子は墓から手を離して茫然としてその前に立つたが、敢て此場を立去らうともしない、立去つて何處へ行くといふ當も無い、最う再び我家へ戻らうとは思はない、以前の小夜子に復つて、世の人に顏を合せようとも思はない、眼前に迫つた結婚問題は自分の身の上の事では無くて、末を約した勇とは、千里も萬里も遠く離れたやうな氣になつてゐる、世界は無い、天地も無い、自分の棲處は何處だらう、昔の昔の、闇い闇い、穢いやうな、濕つぽいやうな、日光も當らず、人の聲も聞えず、惡魔と共に棲みさうな深い深い地の底の窖の中にでもあるやうな心持がする、死ならうか、生きようか、山の中へ引込まうか、尼寺へ逃込まうか。

小夜子は身體の力も拔けて、墓の前にべたりと坐つた、眼を瞑り息を殺して、石のやうに動かない、氣は死んでゐる、魂は地の底に沈んでゐる。

二

「モシ、モシ、小夜子さん、あなたはそんな處に何を爲ていらつしやる」

突然生垣の外から勇に聲をかけられて、小夜子は驚いたやうに振返つたが、勇の顏を見ると、復た急に悲しくなつて、袖を顏に當てて了つた、勇は不思議さうに墓所の中へ入つて來た。

「全體あなたは何うなすつたのです」

小夜子は袖の裡から幽な聲で、

「ハイ」

と纔に答へたけれども、急には次の言葉が出なかつた、勇は傍へ進み寄らうとすると、小夜子は急に身を退つて、

「わたくしに觸つて下さいますな、あなたのお身體が汚れます」

勇は呆氣に取られて、默つて小夜子の顏を見た、その顏には血の氣が通つてゐない、日頃の艷艷しい色も失せて、灰のやうに蒼白く、眼は泣腫らして、瞼まで紅くなつてゐる、勇は愈よ懸念顏に、

「小夜子さん、何ういふ事が發つて、急にそん

な事を仰しやいますか、マアその理由を話して下さい」

小夜子は首を俛れたまゝ、ホツと溜息を吐いた。

「それよりもあなたは、何うしてわたくしの此にゐる事を御存知ですか」

勇は叔父の墓に會釋して、墓石の前に腰を卸した。

「小夜子さん、僕は先刻あなたをお歸し申した後で、何だか氣になつて堪りませんから、直ぐ家を飛出して、あなたのお家の近所へ行つて、御樣子を窺つてゐましたよ、あなたがお祖母樣にある事をお話しになれば、お祖母樣が是非無くお家をお出になつて僕の家へおいでになるだらう、事の成否はお祖母樣がお家をお出になるか否やにあると、霞町の角に立つて、お祖母樣をお待ち申してゐると、思ひがけ無くあなたが、急に門の外へお出になつて、人目を憚るやうにして此へいらしつたから、僕は不思議に思つて遠方から見え隱れに跟いて來たのです、全體何ういふ事が發つて、あなたはそんなにお歎きなさるのですか」

常に漲らぬ熱誠を顏面に露はして懇ろに尋ねた、小夜子は何ほ冷冷として默つてゐる、勇は怨めし氣に、

「小夜子さん、あなたは僕にまでお祕しなさるのですか、是程までにあなたの事を思つてゐる、此の勇をお信じなさらないのですか」

辭色迫つて詰め寄せた、小夜子は初めて顏を揚げて勇の顏を凝乎と視詰めた、やがて一大決心をしたやうに、底力のある滅入つた聲で、

「勇さん、どうぞ遠くへ離れてゐて下さい、わたくしはあなたとは同席の能きるやうな身の上ではございません、わたくしは卑しい棄兒です、しかも乞食の子でございます」

片手で勇を押退けるやうにして、片手で自分の眼を押へ、泣く音を聞かれまいと、密に袖を噛んでゐる、小夜子の心では斯う言つたら勇が吃驚くだらうと思つてゐた、日頃は親切な勇でも我身の賤しい素性を聞いたら、必ず後退するだらうと期してゐた、然るに勇は更に驚いた態度も無く、いかにも落着いた語調で、

「フフム、それが何うしてあなたのお耳に入りました、女中さんの口からでもお聞きでしたか」

小夜子は語氣を強く、

「イイエ、外の人の口からではございません、お母樣が斯う仰しやつたのです」

勇は急に眉を顰めた。

「お母樣があなたに」

小夜子は首を掉つて、

「さうではございません、わたくしが先程家へ戻つて、直ぐに庭口からお祖母樣のお部屋へ參らうとすると、御隱居所でお母樣のお聲が聞えますから、窓の外で伺つてゐましたら、お母樣がわたくしの事をお祖母樣に、あの子の分際として、否も應も云へた義理ぢやありません、あの子は棄兒ぢやありませんか、しかも乞食の子です、自分が育ててやらなけりや、生きてゐるか死んでゐるか分かりませんと仰しやいました」

言ひ了つて兩眼を瞑ぢ、息を殺して默つてゐた、此事を告げて了へばモー勇に用は無い、自分は以前の小夜子で無いから、今迄の約束は消えたものと思つてゐる。

勇は落膽した、餘人の言葉ならば打消す事も能きようが、母親の口から出た事では、モー取返す道が無い、ああ二十年の昔から祕しに祕した其事が惡い折に知れたものだ、此上は委しく來歷を說いて、事の眞相を知らせようと、故意と快活な語調で、

「小夜子さん、あなたはまだその外に吃驚なさる事がありますよ」

小夜子は思はず、

「エ」

と顏を揚げた、勇はニコニコして、

「小夜子さん、その棄兒のあなたを拾つたのは誰だとお思ひですか、即ち僕ですよ、僕と叔父樣と二人して拾つたのですよ」

小夜子は、

「アラ」

と眼を瞠つて、身體まで勇の方へ向けた、その心には百萬の味方でも獲たやうな感じがして、溫い血が急に動き出した。

三

日はとつぷり暮れて、人の顏も確乎には見えなくなつた、廣い墓地は闇黑と沈默に包まれて、雲間を渡る星影が一つ二つ墓の閼伽水に映つてゐる。大通りの方に當つて、遙に聞ゆる電車の響音、此邊は夜になると、不良少年や盜賊などが墓場の陰に潛む故、警官は特に注意して警戒を怠らないのである。

勇はその跫音が次第に此方へ近づくを知つて、そつと顏を揚げて四方を見廻した。

「小夜子さん、そのお話をすると大分長くなりますが、此にゐて警官にでも咎められると面倒ですから、兎も角もマア僕の書室へおいでなさい、それにあなたのお家では、あなたがまだ僕の家にお在なさるとお思ひなのでせう、一旦あなたがお歸りになつて、後で此へいらしつた事は誰も御存じ無いのでせう、それならば猶更です、僕の家へあなたの方からお迎ひでも來ると困りますから、最前から僕の家に居るやうにしてお置きなさい」

頻に促せども小夜子は敢て氣が進まず、

「でもあなたのお家へ上りますのは、氣が咎めてなりませんもの」

と躊躇する、勇はやをら身を起した。

「そんな御遠慮をなさるに及びません、僕が昔からの事情をお話し申せば何事もよくお分かりになります、さあ早くいらつしやい、闇いから躓くといけませんよ、僕の跡から直線に跟いていらつしやい」

無理に小夜子を引立てて、路を迂回して墓地を出た、墓地を離れて街中へ來ると、町家の街燈で道は日中のやうに明るいけれども、小夜子は何となく身を憚かる態度で、故意と人に見られぬやう、闇い陰を擇んで歩いてゐる。

やがて兩人は遠くもあらぬ鳥海家の門に達した、小夜子は門外に立つて二の足を踏んでゐるのを、勇は叱るやうにして直ぐに我が書室へ伴れ込んだ、小夜子は最前此の書室へ來た時と殆ど別人のやうな心持で、女中達にも顏を合せぬやうに、小さくなつて片隅に引込んでゐる、

勇は一旦小夜子を置いて獨りで奥に行き、小夜子の空腹ならん事を察して、自ら菓子盆に餅菓子や果物を澤山持つて來た。

「小夜子さん、あなたはまだ御飯前でお腹がお空きでせうが、お話が濟むと御膳を持つて來るやうに申付けて置きました、僕もまだですから御一緒に喫べませう」

勇の心は更に以前と變りなく、未來の良友として取扱つてゐるが、小夜子は自ら抑遜して、語氣も殊更謙遜に、

「何う致しまして、わたくしは御飯なんぞを戴き度くはありません、それよりは何卒、早く今のお話を」

勇は落着いて茶を飲み菓子を喫し、頻に小夜子にも侑めて、

「もつと前へお出なさいな、ナゼそんなに引込んでいらつしやるの」

小夜子は茶にも菓子にも心は無いが、身の來歷を知り度さに、少しく前に身を進めた、

「勇さん、いつ何處であなたはわたくしを拾つて下すつたのです、矢つ張り東京ですか」

勇は手巾で口を拭いて、改まつたやうに座り

小夜子は初めて勇の深い親切を知つた、その時分の事はまだ彰彰と記憶に存してゐる、松島で勇に逢つた事から、東京へ出て勇一人の格別な世話になつた事まで念頭に浮かんで來る、今更想ふと勇の親切が尋常一樣のもので無かつた、實の同胞でも及ばない、親友としても例は無い、勇の我身に對する心は、親が子に對するやうなものだつた、慈母と言はうか、慈父と云はうか、自分も子のやうな氣で勇に懷いた、書の師でもあり、從兄でもあり、父兄のやうでもあつたが、自分の心は全く親のやうな氣がして、勇ばかりを賴りにしてゐた、全く第二の親である、父と共に我身を拾つて、子のやうに思うて呉れたのである、父の大恩を知ると同樣に、今更勇ぬしの大恩をも知らねばならん。

「さう伺ひますと、ホントに色色と、厚いお世話になりましたのですネー」

　今は他人行儀になつて、深く其の恩を謝してゐる、勇は故意と當時の事を詳しくも語らず、

「さういふ譯で、僕もあなたとは深い關係がありますから、叔父樣も御出征なさる前に、內內あなたの行末を御心配になつて、小夜子の事はよろしく賴むと仰しやつた事がありますよ、僕もよろしい引受けましたと叔父樣に御返事をしましたから、僕は何處までもあなたの身を保護しなければならない義務を有つてゐます、今度のやうな事があつたら、僕の責任としてあなたをお救ひ申さなければなりません」

　勇の語氣は熱心だが、小夜子の心にはその熱心が却て異樣の感じを與へた、小夜子は勇の大恩も知つてゐる、その親切も知つてゐる、さりながら我身に對する熱情は單にその親にも齊しい慈悲心から生じたのでは無いか知らん、亡き父に對する義侠心から出たのではないか知らん、我身を愛するといふよりも、我身を救ふといふ心が先に立つてゐるのではないか知らん。

「勇さん、それでは全くお父樣のお賴みがあつた故、あなたの責任だと思ひなすつて、平生の御主張をお曲げ遊ばしたのですネ」

　他の方面から反問されて、勇は當惑さうに、

「イヤ決して爾ういふ意味ではありませんけれども、斯ういふ深い關係があるといふ事をお話し申したのです、僕の心は先程お話し申した通りですから、あなたが昔の事を御存知になつても御存知にならんでも、僕の方には少しも渝る事はありません」

小夜子「ではもしわたくしが知らずに居りましたら、何處までも知らないものにしてお通しなさる御所存でしたか」

勇「勿論です、誰しもあなたに其事を知らせようと思ふものはありません、僕等は今迄あなたにその祕密をお知らせ申すまいと何程心を苦めたか知れません、酒匂の別莊へ滅多にお伴れしないのもその爲めでした、酒匂ではお一人で戶外へお出し申さなかつたのもその爲めでした」

　小夜子は唯感慨に閉ぢられて、

「ホンにさうでございましたかネー、何ともお氣の毒で、お禮の申し樣がございません」

　勇は小夜子の兎角沈みさうになる心を引立てようと愈よ平靜な語調となつた。

「だから僕の家でもあなたのお家でも決してあなたにその事を知らせようと思ふ氣支がありません、第一あなたのお母樣だつて、あなたが聽いてゐると御存知だつたら、よもやそんな事を仰しやらなかつたでせう」

　小夜子は點頭いて、

「お母樣はわたくしと豐子が年子だと、見合の時先方の人に仰しやいました」

勇「それ御覽なさい、お母樣だつて何處までもあなたを實子と認めていらつしやる證據です、だからあなたは何にも知らない以前のお心持で、今迄通りに爲ていらつしやれば可いのです、決

して其事を氣にかけて、餘計な御心配をなさいますなー

頻に慰めるけれども、小夜子は尚ほ深く沈吟して、

「ですけれどもネ、一旦知つた以上には氣にかけずにもゐられません」

勇は一段と熱誠を言葉に籠めた。

「それは御無理もありませんけれども、時日が經過すれば、自然とお氣にもかゝらなくなります、ナニもそれが如何なる變化があなたの御身に發つたといふ譯でもありませんから、あなたはお家へお歸りになつたら、先程お約束申した通り、お祖母樣に先刻の事をお話しなすつて、今夜にも明朝にもお祖母樣を此方へおよこしなすつて下さい」

今の出來事は殆ど問題とはならないやうに言つた、勇の心は更に從前と變らないけれども、小夜子の魂が今は以前と別のものになつてゐる、小夜子は愁然と頭を低れたまま、物を言はないで頻に何か思案してゐた、思案しては溜息を吐き、溜息を吐いては復た沈吟し、折折は感に迫つて、湧き出づる涙を獨りで拭いてゐたが、漸く思ひ定めたやうに、顏を揚げて髮を撫で上げながら、

「勇さん、段段の御親切は誠に難有うございますが、わたくしは折入つてお願ひがございます」

改まつた口上に勇は驚いて、

「エ、何ですか」

小夜子は再び言はんとしても、聲より先に涙が湧出でて、幾度か咳に噎びながら、やつと思ひ切つて、

「どうぞモーあの事は水に流して戴き度うございます」

四

最前までは共に天國へも登らんとまでに思ひ焦がれた最愛の勇に向つて、自分の方から今急に謝絕の意を述べるのは、血を吐くよりも苦しい思ひである、斯うと心を決する迄には、幾度か自ら煩悶し、幾度か躊躇し、幾度か心で泣いたのである、勇の說明を聞いて身の來歷は判かつたけれども、一旦素性を知つた上は、いかに心を取直さうとしても、知らぬ昔には復られぬ、自分はモー小夜子でない、栗山家の娘でも無い、勇さんの從妹でも無い、自分は棄兒だ、乞食の子だと云ふ心が先に立つて、勇とは百里も千里も距離のあるやうに感じてゐる、今となつて勇の言ふ通り、知らぬ顏して從前の約束を遂行するのは、自ら心を欺いて魔道に陷るやうな心持がする、モー浮世に望みは無い、勇さんの親切を受けるのも今日限り、自分はモー勇さんからも、鳥海家の伯父樣や伯母樣からも、遠く引退いて了ひ度いと、深く自ら抑損して、聲も悲壯の色を帶びてゐる。

「勇さん、今迄は自分の素性も知らないで、好い氣になつてあなたのお世話も受けましたが、今になつて考へて見ると、自分の罪が恐ろしうございます、あなたは假にも男爵家の若君、わたくしは棄兒、乞食の子、いかにわたくしが鐵面皮しくつても、平氣であなたのお側へ參つて、末には夫婦だなんぞと澄ましてはゐられません、よしやあなたは人爵だの身分だのと、そんな事に頓着なさらないにしても、下女より卑しいわたくしの身でありながら、何うして伯父樣や伯母樣を親だの舅姑だのと申す事が能きませう、あなたのお側にゐてあなたのお名前を汚しては、わたくしが生涯心を苦めなければなりません、わたくしはモー自分の身體を成行に委せて、決して彼是申しませんから、あなたは何卒わたくしの事を、此上御心配なすつて下さいますな、あなたの御恩は死んでも忘れません、何卒あなたは好いお嫁さんをお持ちになつて、伯母樣や伯父樣を御安心おさせなすつて下さい

ました、わたくしはもー世の中から消えて了つた方が幸福でございます」

と、勇は先程より黙然として小夜子の言葉を聴いてゐた、絶望的なるその言葉は如何なる心より發したかと、竊にその所以を考へてゐたが、何と思つたか急に快闊と笑つた。

「アハヽ、小夜子さん、あなたは全く誤解してゐらつしやる、継子だといふ事よりも、乞食の子といふ一言が酷くあなたの神經を刺戟して、極端の悲觀に陷つていらつしやる、小夜子さん、乞食の子といふのは全く嘘言ですよ、叔母様の御冗談が少し過ぎたので、決してそれが事實ではありません」

小夜子は何う言はれても容易に勇の言葉を信じない。

「だつてお母様が確に乞食の子だと仰しやいましたもの」

勇は軽く頷いて、

「それに就ては別に仔細のある事です、實はあなたを拾つた時、あなたは木綿の田舎じみた衣服を着て、古びた袢天の上に寢かされてお在でした、それに就て僕の母も叔父様も、色色とあなたの御身分を推測して、無論漁夫なぞの子では無し、商人の子か、農民としてはお襁褓の布片に、古びてはゐるが銘仙なぞが混つてゐる、今こそ粗を着せる位だから衣食にも窮つてゐるだらうけれども、以前は相當に生活したものに相違無いといふ鑑定でした、然しあなたの前で斯う申しては悪いが、叔母様は以前から虚榮心の強いお方で、外見をお飾りになる御性質である事を僕の母はよく知つてゐますから、此儘此の服装で東京へお伴れ申しては叔母様のお氣に入るまいと思つて、其日の中に小田原の呉服屋に頼んで、急にあなたの服装を殘らず新調したのです、お召物からお[illegible]か、帽子から靴足袋に[illegible]まで上等の品を揃へて、全然衣裳を換へたところが、自然に備はるあなたの御品格で、それこそ立派な嬢様の風情と申しても、決して怪まれないやうになりました、誰の眼から見ても實に美しい赤さんで、是れは棄児だと氣の付く人はありませんでした、東京へ歸つて叔父様が早速あなたの寫眞をお撮りでしたから、その寫眞はまだあなたのお家にありませう」

小夜子「ハイ、小さい時の寫眞がございます」

勇「あなたが御成長になつても、立派なお子さんだつた事がお判かりになりませう、然るに豊子さんがお生れになつた後、叔母様が産後の御養生に、酒匂の別荘へ一ヶ月程來てお在の事がありました、御自分の實家だから致方もありませんけれども、叔母様は僕の處へおいでになると何でも家の中を隅から隅まで捜したり穿鑿したりなさるので、いつも母が不平を申しますが、其時も戸棚の隅へ大切に藏してあつたあなたの衣服やら何やらを出して御覧なすつたさうです、それを後になつて僕の母が別荘の留守番に聞きましたから、ああ悪いものを見られた、それが爲めに小夜子さんに對するお心持が變らなければよいがと云つて、再びそんな事の無いやうに、その衣服や何かを皆な燒棄てて了ひました」

小夜子は惜しさうに、

「ぢやわたくしの身に着いたものは一つも殘つて居りませんか」

よしや乞食の着る綴布にても、證據の品があつたらば實の親を知る由もあらうにと、小夜子は竊に力を落した、勇は他の意味から殘念さうに、

「今はもー何一つ殘つてゐるものはありません、斯んな事になるやうならば、その品を保存して置いて、あなたにお覧せ申せば、あなたの御疑念も晴れるでせうに、惜しい事をしましたよ、然しあなたが乞食の子でないといふ事は、

僕の母だつてよく承知してゐます、能く考へて御覽なさい、そんな卑しい御身分と思つたら、叔父様だつて御自分の子になさりもしますまいし、僕の母だつて、それを贊成して、あなたのお世話を致しますまい」

勇は當時の事情を語つて、小夜子の心を安んぜしめようとするけれども、小夜子は先入主となつてまだ急に疑念が霽れない。

「勇さん、それはあなたがわたくしを安心させる爲めに、爾う仰しやるのでございませう」

勇は語氣を強くして、

「イイエ、事實だから事實と申上げるのです、あなたは僕が虚言を吐くものとお思ひですか」

小夜子「あなたをお疑ひ申すのではありませんけれども、乞食の子でないといふ證據もありませんものネー」

勇「それでは、何うしたらあなたのお心からそのお疑ひを取除る事が能きませうか、是れが一つの一大問題です」

勇は急に腕を拱いて思案に沈んだ、小夜子も深く思ひ入つて、

「わたくしは乞食の子でも、とうさら悲しいとは思ひませんが、何んな親に棄てられたか、實の親が知り度うございます」

今は浮世に頼り無い身の、實の親といふものが無性に懐かしくなつて來た、よしや鬼でも乞食でも、自分を産んだ親といふものに、一度は會つて見度いやうな氣がして來た、自分の運命は闇黒だ、生きるか死ぬか先の事は分からないが、實の親を知らないで死んでは念が殘るやうな氣がして、誠に心細く、暗い夜道を獨りで歩いて、何處かに燈光を見付け度いやうな心持になつた。

勇は小夜子の心根を察して、いかにも哀れに堪へ難い程同情の心を發した、感情に脆い天才的の人物とて、事の難易を判斷するの遑も無く、無闇無性に感激した口氣で、

「小夜子さん、僕は是れから酒匂へ行つて、あなたの親御さんを詮索して來ませう、爾うしてあなたに乞食の子で無いといふ證據を觀せなければ、僕があなたを失はなければなりません、僕があなたを失ふのは自分の生命を失ふやうなものです、僕は如何なる困苦を冒しても、あなたの爲めに實の親御さんを尋ね出さなければなりません、僕はモーあなたの爲めなら水火の中も辭しませんよ」

意氣軒昂として顏の色も紅くなつてゐる、小夜子は勇の底知れぬ程深い親切に感じたが、事の成否を危んで、

「だつてもあなた、二十年も昔の事ですし、證據にする品物も無くなつてゐますから、急にその事が判かりませうか」

勇は深い自信のあるやうに、

「必ず搜し出します、誓つて目的を達します、僕は自分の精誠を唯一の武器として、必ず此事を成就する覺悟です、そのかはり小夜子さん、あなたにお願ひがありますよ、僕の歸るまで如何なる事情に迫ればとて、決して婚禮をなすつて下さいますな、素より雲を攫むやうな詮議ですから、三日で判かるか、五日で知れるか、或は十日も二十日も暇取らないと限りませんが、萬一其間に婚禮の日が迫つたら、病氣と云つて延ばして置いて下さい、もしも僕の苦心を無になさると、僕はあなたを恨みますよ」

その熱心なる意氣組に、小夜子は感激して、淚ながらに幾度も叩頭した。

「何ともお氣の毒で、御禮の申上げやうもございません」

勇は急に身を起して、呼鈴を鳴らし、女中を呼んで用意の晩餐を持出させた、されど小夜子は食慾がないと云つて、箸を採らず、勇も氣が塞んでゐて、飯粒も咽へ通らぬから、茶を

かけて一杯を漸く搔き込んだ、ところへ他の女中が顏を出して、

「小夜子樣、お宅からお迎ひが見えました」

勇は小夜子の變れる顏色を直させて歸さうと、女中に命じて洗面の湯と鏡や櫛を持來らしめた、小夜子は顏を洗ひ、髮を撫付けて、人に怪まれぬ姿となつた。

「それでは伯母樣や叔父樣に宜敷、わたくしはモーお目にかかりませんから」

勇は最前の旅行鞄を開いて、入用の品物を手早く詰めながら、

「奧には客があるやうですから、いらつしやらないでも宜うございます、では小夜子さん、今の事は必ずネ」

小夜子は挨拶して戶口まで出たが、

「どうしても今夜いらつしやいますか」

勇は送り出しながら、

「まだ九時の汽車に間に合ひますよ、遲くなつても終列車には乘れます」

栗山家の女中が玄關に待つてゐるので、互に深い事は語らず、小夜子は書室を出て玄關へ廻り、女中と共に鳥海家の門を出て、我家の道へ歩いて行つた。

小夜子は女中に對して、今迄鳥海家に遊んでゐたやうな顏をしてゐるが、心中の惑亂は今も尙ほ全然と鎭まらない、先程よりの出來事を想ひ起して、身體が燃えるやうに熱くなつたり、又凍るやうに寒くなつたり、血液が急に流れたり、又停つたりする。家を飛出してから數時間に過ぎないが、その間に海山を踰え、夏冬を經て來たやうな心持がしてゐる。

小夜子の心に最も强く感じてゐるのは、勇の熱情の猛烈なる事であつた、最初は我身を救ふ爲めに、平生の主義を曲げられたかと思つたが、今のお心を察すると、强ちに單純なる慈愛や親切や義俠心ばかりでは無い、疾くの昔から、我身に對して深い愛情を有つてゐて下すつたかと思ふと、自分の魂が何物にか溶けて行くやうな感じがする。

是れから酒匂の御別莊へ行つて、我身の親元を詮議し下さるが、どうして御詮議が能きるだらう、證據はなし、古い事、何を手掛りとしてお取調をなさるだらう、お氣の毒な事だ、御苦勞な事だ、急に手掛りが無かつたら、あの御氣質で唯煩悶なさるだらうと、今は我身よりも勇の身の上が案じられる。

忽ち背後から勢ひ込んで駈けて來る俥の音、小夜子は車上の人を見て、思はず感涙をハラハラと流した。

人相

一

遠く隔てた漁師町の方で、一番鷄の聲が遙に聞えた。

昨夜遲く別莊に着いて、獨り臥戶に入つた勇は、終夜一睡もせず、小夜子の實の親を尋ね出すべき方法を考へたが、如何に考へても名案が浮ばない、煩悶に煩悶して獨り心を苦めた矢先、鷄の聲を聽いてガバと床から跳ね起きた。

勇は最初小田原警察署の刑事巡查を賴んで小夜子の親を搜索して貰はうかと思つた、されど二十年も前の事で、證據とすべき品も無いから、いかに警察の力でも、急に目的を達し得られると思はない、或は自分で近邊の漁師町の百姓家を戶每に訪ねて、昔の事を訊き出さうかとも思つたが、まさか近所の者が眼と鼻の先へ兒を棄てたとも信じられない、何うしたら手懸りが付くだらう、如何にしたら詮議の端緒が見付かるだらうと、頻に思案を凝らしたが、雲を攫むやうな問題とて、好い分別も出なかつた、されど一刻も猶豫はしてゐられない、一日遲るれば小夜子の苦痛は愈よ深くなる、否でも應で

もここ數日の間に我が目的を達しなければならぬ、斯う思ふと勇はおちおち寢てもゐられない、鶏の聲に何か催促でも受けたやうな心地がして、臥床を出るといきなり濱側の雨戸を一枚繰開けた、

東の空はまだ白まないけれども、殘んの月が斜めに庭を照らして、濱の景色も垣根越しに透かして見える、沖の漁火、岸の舟、昔ながらの松林を眺めると、勇は端無くも二十年前小夜子孃を拾つた當時の心持が油然と湧き出した、あの松林で赤兒の啼聲を聞いたつけ、あの濱の草原で孃を拾ひ上げたつけ、あの邊へでも行つて見たら、復た好い分別も出るか知らんと、庭下駄を足に突かけて、飄然として庭へ出た、昔年はまだ小さかつた庭の植木も今は大抵高く伸びてゐるが、彼の夜叔父の義雄が、拾つた赤兒を心配さうに抱いて、裏口から戻つて來た態度が、今更のやうに憶ひ出される。

勇は裏木戸の小門を開いて、濱の草原へ出た、昔ながらの草や灌木は、半ば枯れて濱風に吹荒されてゐる。

「ここだ、ここだ、此の草の中で小夜子さんを拾つたのだ、今でも何かその時の物が殘つてはゐないか知らん、詮議の種になるやうなことでもあれば宜い」

低回顧望して頻にその邊を徘徊したが、松吹く風の音ばかりして、今は昔の移り香も無い、勇は絶望顔に松林の中まで進んだ、自分の別莊の目標にしてある一本高き數百年の大木が、龍の如き根を四方に蟠つてゐる、勇はその松の根方に腰掛けて茂れる枝を見上げた、松に靈あらば當夜の事を知つてゐるだらうに、松の精でも顯はれて、詳しく教へて異れないか知らんなんぞと思つたりした。

松は默默として昔を語らない、そよ吹く風も月影も敢て舊事に異らねど、勇の心に何の消息も與へない、勇は愈よ絶望して、再び深い思案に沈んだ。

俄にガヤガヤと大勢の人聲が別莊に沿へる小徑から聞えた、勇は人に見られて怪まれんも面倒なりと、松の背後に身を隱した、人聲は次第に近づいて來る、透かして見れば漁夫達が朝網の支度にと大勢打連れて濱へ出て來た、一番先に立つて長い櫓を肩に擔いでゐる五十恰好の男は後方を振向いて、

「金八どんはモー沖の舟へ出ねいのか、今年になつてまだ一遍も鰹釣に行かねいなあ」

眞黑い若布を網袋に納れて右の手に提げてゐる三十四五の頑丈らしい男は急に右櫂を左の手に持ちかへた

「ウム、俺あモー去年の難船に懲りちやつたもの、子供はまだ小さいしよ、嚊がモー沖の舟は廢して異れろと賴むから、子供の大きくなるまでは鰹舟に乘らねいんだ」

その後方から太い竹に目の細かい網を縛りつけて二人して擔いで來るものがある、先に立つた男が甲走つた太い聲で、

「金八どんはあの時よくマア助かつたなあ、何にしろ四十日も行方が知れねいんだものなあ、誰も生きてゐようとは思はなかつたぞ」

金八「俺の助かつたのは全く大導寺樣のお蔭だ、俺あ毎晩小田原の方へ足を向けちや寢ねいぜ」

網を擔いでゐる後方の男が感歎したやうな口氣で、

「大導寺樣は神樣だな、人の顔を見りや百里先の事でも、千里先の事でもチャーンと判かるんだからなあ」

此の問答を聽いてゐた勇は、急に松の背後から飛出して漁夫達の前に立塞がつた。

「モシモシ少し訊き度い事がある」

漁夫達は驚いて足を停めた、前に進んだ五十恰好の男が櫓を擔いだまま少し腰を屈めて會

釋した。
「是れは別莊の旦那樣、何ぞ御用で御座いますか」
勇は氣が急いてゐるやうな語氣で、
「外でもないが、今彼處で聞いてゐたら、小田原の大導寺とかいふ人は人の顏を見ると百里先の事でも千里先の事でも判かると言ひなすつた、その大導寺とは何者だネ」
五十恰好の男は世間慣れてゐると見えて言葉も丁寧に、
「ハイ、それは人相見の先生でございます」
勇は少し輕蔑したやうに、
「ナンだ人相見か、大道の角にでも出て賣卜を行つてゐる人か」
漁夫は自分達が尊敬してゐる者を輕蔑されたのが殘念さうに、
「イイエ、そんなお方ぢやございません、以前は小田原の御藩中のお武家樣です、何でも學問の先生をなすつていらしつたさうですが、今でも昔の通りのお邸に住んでいらしつて、ホンの人助けに人相を見て下さいます」
勇も初めて輕侮の念を去つた。
「フウム、それでは普通の賣卜者でないな、年齡は幾歳だ」
漁夫「何でも八十位だといふ事です、なら金八どん」
金八が後ろから、
「ウンニヤ、八十七だとよ」
網を擔いだ後方の男が何でも感歎するやうな語調で、
「ぢや俺の祖父樣と同い年だ、祖父樣はモー腰が曲つてよぼよぼしてゐるが、大導寺樣は若く見えるなあ」
勇は愈よ尊敬の念を生じた。
「八十七歳の高齡で、人助けに人相を見るといふのは頼もしい、では別に人相見を商賣にしないでも困らないのか」
漁夫「ハイ、御子息さんは軍人になつて討死なすつたとやらで、今ぢやお孫さんが學校の先生をしていらしつて、別にお困りでもありませんから、人が頼めば見て下さるし、見料なんぞは差上げても差上げなくつてもお關ひになりません、お玄關の側に太い竹筒棒が柱に懸けてありまして、見て貰つた人は見料を好い加減にその中へ納れて歸ります、だから先生は誰が幾干置いたか御存知はありません」
勇は感心したやうに、
「ウム、愈よ面白い、そこで今聞いてゐたら、金八どんとやらが難船した時、その大導寺さんに助けられたとは何ういふ譯だネ」
漁夫は金八が自ら返事するだらうと待つてゐたが、櫓を押す手業に慣れてゐても、改まつた口を利くに慣れない金八は、もぢもぢして急に物を言はない、最前の漁夫は擔いでゐる櫓の肩を換へて、
「それは斯ういふ譯でございます、此の金八どんは去年の夏まで伊豆の方へ出稼ぎに行つて鰹舟に乘つてゐました、去年の夏大島沖で鰹が澤山捕れた時、金八どんも沖に出てゐましたが、大暴風雨を逢てその舟が行方知れずになりました、伊豆の方からその通知が此方の家へ參りましたから内儀さんも心配して、毎日毎日行方の知れるのを待つてゐましたけれども、三十日經つても四十日經つても知れません、必定その舟は顚覆つて皆んな死んだらうと思つてゐましたが、内儀さんは小田原の親類から大導寺樣の事を教はつて、直ぐに大導寺樣へ行つて、亭主の安否を見て貰ひました、すると大導寺樣は、何とかいふ大きな眼鏡で」
金八が後から、
「天眼鏡よ」
漁夫「オー、その天眼鏡とやらで、暫く内儀さん

の顔を見さしつたが、是れはまだ生きてゐる、おまへの亭主は此處から南の方に當つて百里餘も隔てた處の、人の居ない小さな島に三人で漂着いて生きてゐるが、早く助けなければ水が無い島だから病氣が出て死んで了ふ、おまへの亭主は今足が腫れて歩けないで困つてゐると、斯う云つて下さいました、内儀さんが歸つて村の者に其事を話しましたから、村から助け舟を出して、八丈の先の島といふ島を搜しましたら、御藏島の沖の小さな島、島と云つたつて周圍が半里も無いやうな島に流れ着いてゐたんです、その島には大きな木も無し、水もありませんから、三人の者は魚を手捕りにして食つてゐましたけれども、段々足が腫れて病氣になつてゐました、モー少し舟が遅く着くと三人とも命が助からなかつた處です」

勇は聽いてゐる中に不審の念を生じた。

「それは何より幸福だつたが、しかし解からん事がある、人相見といふものは當人の禍福吉凶を見るものだから、その内儀さんが亭主に死なれたとか、死なれないとかいふ位な事は人相に出るだらうが、百里先の無人島で、その亭主の足が腫れて困つてゐるといふ事まで何うして判かるだらう、全く内儀さんの顔を見て能う言つたのか」

漁夫「全くでございますとも、外の人相見にや逆さになつたつてそんな眞似は能きませんが、大導寺様が御覧になると、女房の顔を見りや、その亭主が今何處に何をしてゐるといふ事がよく判かるし、亭主の顔を見りや女房の事が判かる、親の顔を見りや子の事が知れるし、子の顔を見りや親の事でも先の事でも知れるんですから、全く神様のやうだと申して居ります」

勇は半信半疑ながら、頻に好奇心が生じた。

「それは面白いな、さういふ事が人物で判かれば、所謂天眼通を具へてゐるのだ、何か一種の神祕な千里眼があると見える、實は僕も少し尋ねる人があるから、その大導寺さんに見て貰はうと思ふが、小田原は何といふ處だネ」

漁夫は後を顧みて、

「あれは何といふ處だつけなあ」

金八が口へ何か銜んだやうな語調で、

「小田原あ、中新馬場だあ」

漁夫「ウム、中新馬場かあ、中新馬場といふのはお城から後ろの方へ曲つて行つた處です、今ぢや新しい家が澤山出來て、町のやうになつてゐますが、以前はお武家屋敷で、大導寺様のお宅は昔のやうな御門ですから直ぐに判ります」

勇「それは大きに難有う、ぢや早速是れから行つて見よう、大層暇を取らして御氣の毒だつたネ」

漁夫「何う致しまして」

漁夫達は濱邊に立去つた、勇は暗夜に光明を得たやうな心地して、急いで別莊へ戻つて行つた。

二

小田原城外の閑靜なる町外れ、昔は武家屋敷であつたといふ中新馬場の通りも、今は面目を新にして中學生徒の下宿屋、教員や吏員の邸宅なんぞが、割合に廣い地面を圍ひ込んで列んでゐる。

その中央に唯一つ、昔風の土塀を左右に控へて、古びた瓦門が立つてゐる、色の褪めた黒塗の太い門柱に、大導寺と肉太に書いた大きな表札が出てゐる、表札の木地は古びて木理が見えてゐるけれども、表札の文字は墨に漆が混ぜてあると覺しく、それ程に磨滅もしないで浮上つてゐる。

此處だ此處だと門の前で俥から降りた勇は、是れ家だけに先づ門の表札を眺めて、その文字に一種の古風な威嚴の存する事を悟つた、多分八十七歳の大導寺老人が何年か前に自分で書

いたものだらうが、昔風は好みならされどもその□□頑固らしい□きがあると思つて、勇は幾分か□の念を抱ひつゝ、門の内へ入つて見ると、玄關までの廣い地面には、小田原名物の楠の大木が、春ならば日光を洩らすまいと思ふまでに枝を重ねて數十本も生ひ繁つてゐる、幹には苔蒸して樹齡は各々百年の上にも出るであらう、玄關前の大きな石構も都に見られぬ葉色の好さ、躑躅や南天の植込も一種の古氣を帶びて、昔の武家時代を想ひ出させる。

斯る家屋敷へ一度もまだ來た事の無い勇は、何となく奥床しい中に物哀れなやうな氣分を感じて、頻に四邊を顧みつゝ玄關の前に進んだ、玄關と云つても左右の壁が四隅は少し剝げて、褐色の上が色の縫めてゐる中に、黑格の障子の紙も燒けたのが閉めてある、漁夫の話した太い竹筒の皮の性も拔けたやうになつたのが、壁の柱に懸けてあるが、幾日中を改めないのか、重みで釘さへ曲つてゐる。

今の世の中には珍らしい古風な住居、斯んな家には髷結つた古武士か、世を離れた仙人でも棲んでゐるかと思はれて、勇は愈よ一種の好奇心を生じた。

─お頼み申す、御免下さい─

玄關から聲をかけて見ると、一室隔てた奥の方から、底力のある鍛へたやうな太い聲で、

「誰だ其處へ來たのは─」

叱り付けるやうな物の言ひやう、勇はその聲が腹にまで徹したやうに覺えた。

「ハイ、少少見て戴き度い事がありまして─」

奥の聲は言下に、

「構はず此へ通れ─」

勇は障子を開いて四疊敷の小座敷へ上り、先づ帽子を傍に置いて向うを見ると、間の襖がカラリと開いてゐて、奥の八疊間には厚い澁紙が一面に敷き詰めてある、壁に沿うて五つ六つ列んでゐるのは古びた書篋、長押には短い手槍の千段卷の剝げたのが懸けてあつて、室内は何處を見ても新しい氣分のものが一つも無い、唯一つ天井から鐵の自在の吊るしてあるのは、夜は適に洋燈を用ゐると思はれる。

勇は先づ室の内の光景の珍らしさに驚きながら、室内に進んで見ると、襖の陰に大きな机を控へて、大導寺老人が威風嚴然と端坐してゐる、黑木綿の紋付に小倉の袴、羽織を着ないのは家居の爲めであるか、それとも頑丈な身體だけに袷になつても寒さを感じない爲めかも知れぬ、八十七歳と聞いてゐたれど、今見れば顏は澤澤として年よりも若く、白い髯は銀の絲を植ゑたやうに長く膝の邊まで垂れてゐる、老人は机の上にある古書を讀んでゐたが、頭を揚げて勇の顏を眼鏡越しにジロリと眺めたその眼の鋭さ、勇は眼光に射竦められるやうに覺えて、思はず肩が縮まつた。

老人は默つて暫く勇の顏を凝視めてゐたが、今迄の凛乎たる威容に引かへて、急に言葉も穩和かに、

「アハハ、おまへは畫師ぢやな」

圖星を指されて勇は先づ肚膽を貫かれたやうに感じた、されど自分も劍術を以て心を鍛へたもの、斯る場合に氣が怯ぢては平生の覺悟に背くと、急に腹へ力を籠め、老人の威風に對抗するやうな意氣組で、

「いかにも僕は畫師に相違ありません、人相學の方では一見して人の職業が判かりますか」

老人は事も無氣に阿阿と笑つた。

「イヤ判かるべき筈のものぢやが、容易には判からん、唯おまへの顏を見た時、わしの心に畫師ぢやらうと思つたから然う言つたのさ」

渾然として慢らぬ處にゆかしさが忍ばれると、勇は竊に感心した。

「僕は少少見て戴き度い事があつて出ました

が、併しその前に一應伺ひ度い事があります、僕は自分の心に信用しない事を實行するのは好まない性分ですから、御迷惑ながら人相學の事に就て一つ二つ伺ひ度いのです」

自分も亦た尋常一樣の人間で無いといふ意味を示す意で、一段と氣を張つて老人を視上げた、老人は疾くに知つてゐる。

「アハハ、おまへは底の底まで物を究める性だから、末には立派なものにならう、何でも訊きなさい、知つてゐる事は教へてやるから」

頭から勇を小兒のやうに扱つてゐる、されど勇は何處までも誠實の心を以て人に對する故、敢て氣が引けたり遠慮したりするやうな事は無い。

「今のお言葉に判かる筈のものぢやが、容易に判からんと仰しやいました、人相見といふものは世間にも澤山あり、人相の事は昔から書物にも出てゐます、西洋の骨相學と我邦の南北相法位は僕も讀んだ事がありますけれども、どうもまだ人相が必ず中るとは信じられません、中る事もあり中らない事もあるといふやうでは、信賴するに足りませんが、人相は必ず中るべきものでせうか、それを第一に伺ひ度いのです」

老人は勇の言葉に應じて一々頷いてゐる。

「誰しも然う思ふのは無理も無い、人相は中るべき筈のものぢやが容易に中らんものぢや、譬へば弓は中るべき筈のものぢやが、容易には金的を射落せないと同じ事ぢや、弓の中らんのは射手の惡いので、弓の惡いのでない、人相の中らんのは人相見が惡いので、人相の法の惡いのでない、だが容易には中らんよ、わしなぞも却々思ふ樣に中らんなう」

道理を説き諭されて勇は釋然と悟つた、急に敬服したやうな口氣で、

「成程解かりました、弓術は中るべきもの、中らざるは人の罪、人相は中るべきもの、中らざるは相した人の罪、弓に百發百中の人が滅多に無いと同樣に、人相見にも百發百中の人が滅多に無いのは無理もありません、その代り爲朝や養由基の如き名人が出れば弓も百發百中しますから、人相も名人になれば外れる事はありますまい、そこで今一つ伺ひ度いのは、酒匂の濱だつた時に、あなたは人の顏を見ると、その肉親の者の形態や擧動が能く知れるといふ事ですが、それは如何なる相法に據るものですか、僕はまだ斯る相法のある事を聞いた事もありませんし、人相學の書物でも讀んだ事がありません」

是れが第二の疑問である、勇の知り度いのは此の疑問の說明である。

三

此時大導寺老人は居住ひを直して容を改め、語氣も態度も嚴かに、

「是れは世間にも滅多に無い相法の一派ぢや、素は天竺より傳はつて來た化象の術といふものぢや」

勇は殊から興味を感じて、

「ハハア化象の術と云ひますか、化象とは何ういふ字を書きます」

老人「化は變化の化の字、象は森羅萬象の象ぢや」

勇「して見ると萬象の變化を洞察するの術ですかな、併し人の顏を見て百里以外にゐるその肉親の形態が判かるのは不思議ですな、何か催眠術のやうな事をなさるのですか」

老人「イヤ左樣な事では無い、肉親には限らず、譬へばおまへを愛してゐる人とか、或はおまへを憎んでゐる人とか、善惡ともに心をおまへに寄せてゐる人の姿は、おまへの顏に露はれてゐるのぢや」

勇は不思議さうに、

「ハア、顏に現はれますか、それが何うも合點

が行きません」

老人「それは先方の心が自然とおまへに通じてゐるからぢや、今の若い人はよくむづかしい理窟を言ふがの、先づ考へて見ろ、小田原の城内で撞く時の鐘は東京まで聞えるか聞えないか—

勇「東京までは迚も聞えません、酒匂まで聞える事も滅多にありませんもの—

老人「さあ、そこぢやテ、それは人の耳が鐘の聲を聞き得ないのか、鐘の響きが東京まで達しないのか、それをよく考へて見ろ」

勇は即座に答へ兼ねて黙つてゐた、老人は微笑を含んで、

「考へたら判かりさうなものぢや、鐘の響きは東京までも大阪までも長崎までも達して行くが、人の耳でそれを聽く事が能きんのぢや、おまへが此の座敷にゐて、東京にゐる人の事を憎い奴ぢやと罵つても、先方には聞えまいと思ふぢやらうが、それは先方の耳に聞えないので、おまへの言葉の響きは先方の人の身體へ傳はつて行くものぢや、もしも順風耳のやうな耳があつたら、東京の人の聲を小田原で聽くぢやらうし、小田原の時の鐘を長崎で聽く事も能きるぢやらう、それと同じ道理で、おまへを愛する人の心も、おまへを憎む人の心も、イヤ心ばかりで無い、その聲もその姿も、おまへの身體へ傳はつて來る、それを見出すのが化象の術ぢや」

勇は黙然として聽いてゐたが、忽ちハタと膝を拍つた。

「成程解かりました、無線電信の電報は千里二千里に達する事を思へば、人間の身體から發する波動も千里二千里に達しない事はありません、人間の身體には無線電信の發信器もあり受信器もあるやうなもので、百里千里を隔れてゐても、相互の一擧一動は暗暗裡に相感通してゐる譯ですな、我等凡夫はそれを知らないから、人の惡口を言つても遠方の人には聞えないと思ふし、怒れる顔をしても見えないと思ふが、それはいつの間にか一一先方の人に通じて、何等かの反響を生じてゐるに違ひありません、斯う考へて見ると別に不思議でもありませんが、ところでその姿は如何なる形で人の顔に露はれますか—

老人「さあ、それを見出すのが多年の修行ぢや、三年や五年稽古しても容易に見出せるものでないが、永い間の鍛錬を經ると、先づ最初には人の額に小豆粒位な小さな姿が見えるな、親の姿は何の部、兄弟や夫婦或は他人の姿を何の部と、一一その部位が定まつてゐるが、その小豆粒位な姿を見たら、多年の修行で段段と大きくして見る事が能きる、呼吸を殺し心を沈め、瞬きもしないでその姿を見詰めてゐると、一寸のものが一尺にも二尺にもなつて見える、併しその間に咳一つしても瞬を一つしてもその姿が消えて了ふから、それが復た修行ぢや—

此の説明を聞いて勇は今更に大導寺老人に心服した、是程の深い修養があるならば、人の未然を察し、百里の外を知る事も不思議で無いと思つた。

「それでは先生—

今迄は先生といふ言葉が容易に口から出なかつたが今は我れ知らず敬語が迸り出た。

「先生、僕の見て戴き度いのは、僕の識つてゐる婦人の事です、それは棄兒で、實の親が判かりません、その婦人の實の親は何者であるか、その素性を急に調べ度いのですが、それは能きませうか、能きますまいか、何卒一つ見て戴きたいものです」

大導寺老人は默つて首肯いたが、忽ち身體を起して兩眼を閉ぢ、兩手を袖の下に組合せて、何かの印を結び、口には呪文のやうな事を唱へてゐた、勇は是れも精神を統一させる爲めの一方法だと悟つて、その態度を見てゐると、大導

寺老人の身體がブルブルと顫へた途端、忽ち兩眼をくわつと開いた、其時の老人の相貌は、一種森嚴の氣を帶びて、眼光炯々と人を射り、天上の神が眼前に降臨したかと思はれるやうであつた、老人は默つて机上の天眼鏡を把り、勇の顏に翳して、眸を凝らすこと良久しく、呼吸も聞えず、瞬きもせず、額の中に穴でも明くかと思ふほど凝視めてゐた、勇は此の間に何事を知られ、何事を讀まれ、何事を洞察せられるかと、氣味の悪いやうな、恐ろしいやうな感じがした、軈て老人は徐かに天眼鏡を机に置いて、溜めた息をホッと吹いた。

「有るな、おまへを慕うてゐる若い婦人があるな、世の常の夫婦が良人を尊び妻を愛すといふよりも、尚ほ深くおまへを慕うてゐる婦人ぢや、その婦人の由緣の者が今日から三日の中に、おまへの今居る處へ來る事になつてゐる、その人に就いて詮議したらおまへの知り度い事はよく解かる」

斯う云はれて勇は惑んだ。

「では三日の中にその由緣の者が僕の處へ來ますかな、それは男でせうか女でせうか――」

老人「それまでは判からん、何れ由緣の者がおまへの處へ近寄る事になつてゐるのぢや」

勇は最早本意を遂したやうに思つて嬉しさうに、

「どうも難有うございました、實は何としても詮議の手懸りが無いので途方に暮れましたが、それさへ伺へば何より安心です、時に先生、お序にその婦人の運命を見て下さる譯に參りませんか――」

老人は聲鋭く叱るやうに、

「相成らん、人相は序に見るべきもので無い、本人が來れば見てもやらうが、人の運勢を輕々しく定める事は能きん、用が濟んだらモー歸りなさい――」

勇は再び取付く術も無く、厚く禮を述べて室外に出で、帽子を執つて玄關へ下る時、何程かの謝金を竹筒の中に投じた、竹筒には澤山の貨幣が溜まつてゐると見えて、底まで屆かない中にガチャリと音がした、勇は心の中に、此の音の波動も矢つ張り千里の外まで響いて行くのだなと思つた。

四

勇は生涯の中に、今日ほど深い印象を心に與へられた事は無かつた、門外へ出て以前の俥に乘つてからも、まだ眼の前に大學寺老人の風俗を離れた風貌が見えてゐる、人相の道理を説いて呉れたその言葉も耳底に殘つてゐる。

成程人と人との間には、心が感應するばかりで無く、聲も姿も皆な同樣に感應するのだな、今日は老人のお蔭で、我が爲めには何よりの教訓を得た、之を我が藝術の方面から見ても、魂の籠らない畫は、如何に巧みなりとも、人の心を動かすべき力は無い、是れは矢つ張り我が魂が畫を通じて人の心に感應するからだ、迂つかり畫も描くべきものでない、迂つかり人を誹るべきものでない、迂つかり人を蔑むべきものでない、化象の術に照らせば人間の一切は淨玻璃の鏡に映る如きものだと、深く自ら心を戒しめた。

それにしても小夜子孃の實の親の由緣の者が、三日の中に我が方へ來るとは難有い、三日の中に我が目的を達し得れば、小夜子孃の結婚前に東京へ歸つて孃に報告する事が能きる、爾うしたら孃を我が方へ引取つて、共に藝術を勵むのが樂しみだ、それといふのも大學寺老人のお蔭だから、其時は小夜子孃と共に、再び老人の許へ禮に來よう、ああ愉快愉快と、心は頻に躍つて、疾走する俥の今日ばかりは遲いやうに感じた。

兩旬の別莊へ歸り着くと、勇は直ぐに留守番

の老爺を呼び出した。
「爺や、今からおまへに大役を申付けるぞ、今日から三日の間は、誰が此の別莊へ來ても、決して僕に默つて歸してはならんよ、僕が一寸調べる事があるから、それの濟まない内に、門から外へ出しては不可んよ、僕も玄關の座敷に居て、入つて來る人に注意するから、おまへもよく内外に氣を付けてお呉れ、裏口の木戸は堅く鎖して置きな、もしや裏口から來て裏口から出る人があつてはならんから」
嚴重の申渡しに老爺は何の仔細とも知らず、妙な事を言はれるものよと、不審ながら唯唯として退いた、勇は玄關前の小座敷に座を占めて、玄關の障子を明け放し、箱根下しの寒風が吹き込むにも頓着無く、門の内に入り來るものは猫の子一つも見遁すまいと、眼を開張り、臂を擴げ、兩の拳を膝に當てて、閻魔顏して頑張つてゐた。
門と玄關とは十四五間も離れてゐるに、正面に松と柊の植込があるので、玄關から直接に門が見えない、勇は折折顏を横にしたり、頭を曲げたりして門の方を透かして見てゐる。程過ぎて何人か門から入ると直ぐに留守番小屋の方へ曲つて行つた。勇は大聲に老爺を呼び付けて、
「コレコレ、今おまへの處へ人が來たのは何者だ」
老爺「あれは近所の八百屋さんです、今朝青物を少し賴んで置きましたから、今持つて來て呉れたんです」
勇「その八百屋を此へ呼べ」
老爺は自分の小屋へ戻つて、八百屋の男を玄關へ伴れて來た、勇は先づその人物を見るに、年頃は三十の上を二つ三つも出たらしい、顏の四角張つた、色の黑い、眼のドンヨリとした、唇の厚い、至つて鈍物らしい男だ。
「コラコラ、おまへは八百屋か」
男は蟇を潰したやうな顏して勇を見上げたが、いかにも重苦しい聲で、
「ヘエー」
勇「おまへの家は何處だ」
男は何か惡い事でも調べられるのかと思つて、どきまぎしながら漸く、
「山王で」
勇「フム、山王から來るのか、突然妙な事を訊くやうだが、おまへは二十年前に、此の裏の濱で棄兒のあつた事を知つてゐるか」
男はけげんな顏をして、
「知りましねい、わしは七年前に松田在から養子に來たもんで、古い事は些とも存じましねい」
勇は失望して、
「それぢや仕方が無い、モーそれで可い」
男は警察からでも放免されたやうな氣で、這這の體で門の外へ迯げて行つた。
勇は復た待つてゐること二三時間、別莊の事とて滅多に人も來ないから、退屈して堪へられぬを、是れではならぬと、氣を引締めて、最初の程は嚴重に見張つてゐたが、昨夜一睡もせぬ事とて遂には睡氣を催して來た、自分では眠らない意なれど、夢とも無く現とも無く、遠い山の中が見えたり、東京の畫室に畫を描いてゐるやうな氣がして來るので、急に自分の膝を抓つて、無理に眼を覺ました、その途端に何か黑いものが門から外へ出て行つたやうに思はれた。
「爺や、爺や、今何か來たか」
爺やは臺所から、
「犬が來ましたから、追出してやりました」
勇は犬と聞いて安心し、暫く表を見てゐる中に、復た睡くなるのを堪へてゐると、袢天着た若い者が門から疾足に臺所の方へ行かうとする、勇は急に呼び留めた。

「コラコラおまへは何だ、ちよいと此へ來て呉れ」

若者は驚いて玄關の方へ進んで來た。

「ヘイ、わつちは魚屋の若い者で」

勇「魚屋か、おまへの家は何處だ」

若者「此の酒匂で」

勇「出生は何處だ」

若者「此の土地です」

勇「此の土地の生れでは以前の事も知つてゐるだらう、妙な事を尋ねるが二十年前に此の裏の濱で棄兒のあつた事を知つてゐるか」

若者はニヤニヤ笑ひながら、

「二十年前と、旦那、わつちは今年十九ですから其時分はまだ生れてゐません」

勇は失敗つたと顏を紅くして、

「おや用は無い」

若者は尚立去らず、

「旦那、鯖の鮮しいのがありますが、お刺身に如何です」

勇は權柄に、

そんなもの要らはん

若者は臺所へ廻り、老爺と何か話をして歸つて行つた、午時になると老爺は晝食の用意が出來たと云つて勇を呼びに來た、勇はまさか玄關前にて食事する事もならねば、

「爺や、今日はお給仕に及ばんから、僕の飯を食ふ間おまへが此に番をしてゐろ」

勇は奧へ入つて晝食を濟まし、再び玄關前へ來て、入り來る人を終日調べたが、これぞと思ふ人も見當らなかつた。

翌日も朝から晩まで別莊へ入り來る人を調べた、憲兵の押賣、壯士の物貰ひ、酒屋の小僧、百姓家の守り子、それ等の外には來たものが無い。

第三日目になると、勇もそろそろ心配になつて來た、今日一日の中に其人を捉へねば、我が目的は達し得られぬと、晝飯も喫べずに一日玄關で見張つてゐた、毎日入り來る商人の外に、其日は夕方まで新しい人物が一人も來なかつた、勇は愈よ悶えて來た、今日中に來なければ大善寺老人の化粧の術が外れるかと、頻に獨りで氣を揉んだ、やがて晩餐の用意が出來た、勇は腹が減つてゐるので、門内の見張を老爺に賴み、急いで奧へ入つて食事を始めると、程無く臺所口で老爺の聲がする、

「ナイ權六さん、モー少し待つてお呉れよ、今お奧で御飯だからさ、おまへさんはいつも惡い時に來るネー、御飯時分でない時に來れば可いのに」

男の聲として、

「どうも濟みません、ツイ外を廻つて遲くなつたんです」

勇は遽だしく、

「爺や、爺や、誰か裏口へ來たのか」

老爺「ナニ肥料取りのお百姓です」

勇は腰を浮かした。

「その百姓を庭の方へ呼べ」

自白

一

「ナイ權六どん、若樣がおめえさんに用があるから、ちよつくらお庭へ來さつせいつて」

突然老爺に呼ばれて、肥料取の權六はハツと驚いた、權六は心に秘密があるから、もしやそれかと胸にギツクリ應へたのである。

權六は先年東京で若樣のお爺から戒められた、御別莊へ肥料を取りに行つても、決して留守番の人に小夜子孃の噂なんどを爲てはならぬ、餘計な口を利いて人に怪まれてはならぬ、折角幸福に暮らしてゐる小夜子孃の迷惑になるやうな事を爲て呉れるな、如何なる場合に臨めばとて昔の事を洩らして呉れるなと、呉呉も嚴に誡

まれた事がある。
それから以後といふものは、自分でも深く愼んで、肥料さへ取れば直ぐに歸つて行く、野菜物を土産に持つて來ても以前のやうに分言を多くはしない、成るたけ人目に立たぬやう、成るたけ人に怪まれぬやうと、何事も控へ目にして人目を避けてゐた。
さりながら小夜子孃の身の上を案じる心は昔に渝らない、父君の戰死なされた事は新聞で知つてゐる、其後あの子は何うしたらう、お嫁に行つたか、お婿でも取つたか、そんな事でもあれば、自然と此の別莊へも聞えさうなものよと、人に隱れて竊に細心の注意を拂つてゐた。
然るに今や突然御別莊の若君から自分に用事があると云はれ、もしや何かあの子の事に關係してゐるのではないかと、心に十分の危懼を抱いたが、生中に躊躇しては惡しかりなんと、何氣無き體を裝つて、裏口から庭へ廻つて行つた。
看ればお座敷の緣端には、座蒲團も敷かず板の間に、肩を怒らし、臂を揚げ、睨めるやうな顏して、若君が坐つてゐる、權六は以前にも折折此の若君を見た事がある、小夜子孃と一緒に酒匂の川口へ行かれた時は、自分も後から二人を見に行つた、其頃の若君に比べると今は大層勿體らしく、年も長けて容貌が重々しくなつたけれども、昔の通りに髮の毛を長く伸ばし、生えなりの髮の蓬々としてゐる工合は、何う見ても貴族の若樣とは受取れぬ。
勇は頻に氣が急いてゐる、權六がまだ腰を卸して會釋もせぬに、例の調子でいきなり聲をかけた。
「コレコレ、おまへは何處だ」
權六は芝生に跪いて丁寧に會釋したから、
「へイ、わたくしは今井で」
勇「今井とは酒匂の上だな、年は何歳だ」
權六「五十九で」
勇「子供はあるか」
權六「五人ございます」
勇「五人切りか、外には無いのか」
權六は變な質問と思ひながら、
「五人切りで外にはございません」
勇は屹と容を正して、聲も嚴かに、
「妙な事を聞くが、おまへは二十年前に此の裏の濱で棄兒のあつた事を知つてゐるか」
權六は姉の戒め此なりと、心の動搖を見られぬやうに、努めて何氣無い顏をして、
「そんな事は一向存じません」
と誠しやかに答へた、勇は此男こそは何か端緒を語り出すだらうと、寧ろ望みを屬してゐたが、此の返答を聞いて失望した。
「全く知らないのか、隱すのぢやあるまいネ」
權六は最初よりも落着いた聲で、
「全く存じません、その時分にはわたくしも滅多に此の近所へは參りませんから」
勇は愈よ落膽した。
「おまへは人の噂にもそんな事を聞いた事は無いかネ、おまへの近所の人か村の人が子供を棄てたといふやうな事でも聞かなかつたかネ」
權六は一生懸命に我が言葉を怪まれぬやうと聲に力を籠めて、
「頓と、そんな事は噂にも聞いた事がございません、全くわたくしは何にも存じませんので」
勇は失望の餘り、ヂリヂリと氣が焦れて腹だ立つて來た。
「ぢやモー可いよ」
と捨言葉を殘して、緣の板を足で蹴るやうにプイと立つて奥へ引込んだ。
權六は一旦裏口へ戻つたものの、勇の態度が氣になつて、袖垣の背後に身を隱し、息を殺して内の樣子を窺つてゐた。
勇は座敷へ還ると、喫べかけた食膳を顧みもせず、身體を投げ出すやうに、疊の上へ大の

字に打倒れ、口の内でウムウムと暫く唸つてゐたが、忽ちりツバと唾を吐きて、悔しさうに両足でヂだんだ踏んだ。

「エイ、畜生、あの大尊寺め、三日の中に手懸があるなんて、今迄知れなけりや何が分かるもんか、馬鹿らしい人相見に騙されて、大切な三日間を空費した、此上は何うしよう、何を為るにも手後れだ、モー一度大尊寺へ行つて、あの老耄に談判しようか知らん」

ドタリバタリと室内を歩き廻つて、狂氣のやうに獨りで荒れてゐる。

此の光景は手に取る如く權六に聞えた、若君の失望の甚しき、何の仔細があつて昔の事を調べられるか、もしや薬兒の一件が知れないと、小夜子や若君が迷惑でもされるのか、是れは生中秘さない方が宜かつたか知らん、それとも矢つ張り黙つてゐようかと、心が頻に迷ひ出した。

やがて勇はドタバタと玄關の方へ駈け出したが、玄關前の階にヘタリと坐つて、人の来るを暫く待つてゐた、日は漸く暮れんとして、門の外も行人が稀になつた、勇は立つて見たり坐つて見たり、心の焦燥に堪へぬ如く、忽ち下駄を穿いて門の外へ駈け出さうとして、復た立ち戻つて玄關へ上り、両手で髪の毛を掻つて重い息を吐いた。

「何程待つても人は来ず、今から小田原へ談判に行かうか、それとも不在の間に由縁の人が出て来ては困る、今夜の十二時まで待つて見ようか、待つても人が来なかつたら何うしようと、時々刻々に煩悶が増して、勇の心は狂ほしくなつてゐる。

最前から竊に勇の態度を窺つてゐた權六は、何うしても此儘若君を見捨てて帰られなくなつた、あれ程にして若君が薬兒の事をお調べなさるのは、何か小夜子嬢の身に就いて差迫つた事でも發つたのだらう、それを聞かぬ中は自分も安心が出来ぬと、先づ勝手口へ廻つて留守番の老爺に様子を尋ねた、老爺は数年前に此の別荘に住み込んだもの、まだ東京の本邸へも行つた事が無い、何が何やら事情を知らねど、若様が先日小田原へ行かれた後、毎日毎日此へ来る人を待つて、薬兒の事を尋ねらるるとの返事、權六は漸く意を決した、娘の言葉には背くとも、場合によつては昔の事を若様に告げねばなるまい、何れにしても此儘に知らぬ顔して帰られぬと、裏口からそつと玄關の前へ廻つて見ると、勇は眼も血走つて閻魔のやうに表の方を睨み付けてゐる、權六は頭を掻き掻き、きまり悪さうに式臺の側へ進んだ、

「モシ若様、最前のお話に就きまして、よく考へましたら少々憶ひ出した事がございます」

之を聞くと勇は天の福音でも聞いたやうに悦んで、閻魔顔した相好も忽ち崩して嬉しさうに、

「ナニ、憶ひ出した、ぢや心當りがあるかネ」

權六「ヘイ、心當りはございますが、其人が一生懸命に秘して居りますから、わたくしが無暗に名前や何かを申上げる譯になりませんけれども、全體何ういふ譯で若様は急にその事をお調べになりますか、その次第を伺ひ度いものでございますが」

心配顔に尋ねる權六の態度、その次第に依つては詳しくも語らうし、次第によつては秘して通さうとする下心と判じられる。

勇は此に至つて、最初から我が問ひ方の甚だ拙なりし事を悟つた、此を秘したといふ事は何人も秘すべきものを、頭から叱るやうに調べたとて、誰しも容易に實を告げまい、是れは我身の[illegible]だと、初めて心付いて急に言葉を和らげた、

「成程、此方の事情を聞かなければ、[illegible]

た事を言へないのも無理は無い、實は斯ういふ譯だ、その棄兒を拾つたのは、僕と叔父さんと二人だが、その兒は叔父さんの子として、今では立派な娘になつてゐる、ところで今度大層好い處へお嫁に行く筈だが、お嫁入した後に棄兒の親だなんぞといふものが飛出されると大變だし、それに實の親は何んな人物であるかといふ事も今の内に知つて置き度いと思つて急に取調べてゐるのだ、爾ういふ譯だから何卒包まず話してお呉れ、決して惡いやうには爲ないから」

　事を分けての頼みに權六も始めて納得した、それならば何よりもあの子の出世、生中に祕して疑はれるより、事情を詳しく告げた方が宜からうと意を決した。

「それはマア、えかい御恩になつて何ともお禮の申さうやうもございません、實を申せばあれはわたくしの姉の子でございますが、姉はその兒が何んなに出世をしたつて、親顏をして名乘つて出るやうな心の淋しいものではございません、その事は何卒御安心なすつて下さいまし」

　勇は愈よ心を安めた。

「フウム、ぢやあの子はおまへさんの姪になるネ、何ういふ譯であんな良い兒を棄てるやうになつたのか、その事情を詳しく話して呉れ給へ」

段々前に膝を進めて、顏と顏とが突合ふ程に近よつた。

二

　權六は此に於て二十年前の舊事を物語り始めた、三日降續いた豪雨の爲め、酒匂川の堤破れて、家も田畑も押流され、命だけは辛うじて助かつたが、病める父を養ふべき術も無く、姉のお菊が意を決して足手纏ひの幼兒を何處ぞへ棄てると言出した事から、自分と二人で酒匂へ來り、彼處よ此處よと棄場處を尋ねた末、遂に此の別莊の裏手の草原へ棄てた顚末まで、何の隱す所も無く有の儘に事實を告げた、勇はその境遇に同情して聽いてゐたが、

「それではネ、おまへさん達は僕等がその兒を拾つた事を知つてゐたらうネ、世間の話に、棄兒の親はその兒が誰かに拾はれるまで、近所に隱れて見てゐると云ふが、おまへさん達も何處かで見てゐたらうネ」

　權六は面目無ささうに首肯いた。

「ヘイ、實は姉と二人で、松林の中に隱れて、始終の樣子を見て居りました、その以前外の場處へ一旦棄てようとした時、犬に吠えられて逃出しましたから、草原へ棄てた後も、もしや犬でも來やあしないか、狐でも出やあしないかと、却々氣になつて遠くへは離れられません、神樣や佛樣を拜んで其兒の無事に拾はれる事を祈つて居りますと、程無く松原から御立派な旦那樣と、十一二のお子さんとがおいでになつて、棄てた兒を拾ひ上げて下さいました、その時姉はヤレ嬉しやと嬉し泣きに泣きまして、此の別莊へお入りになるお姿をいつまでも拜んで居りました」

　勇はさもありなんと頷いた。

「それではあの兒が僕等に拾はれた事を知つてゐて、それでおまへさんは此へ肥料取に來るのかえ」

　權六は腰に插んだ手拭を取出して、額の汗を拭きながら罪を詫びるやうな口氣で、

「爾う御聞しやられると、今迄噓を申してゐたやうで誠に面目もございませんが、實はその翌日も此の御近所に彷徨いてゐて、あの兒が大層立派になつて、若い女に抱かれて東京へ伴れて歸られる處も見ました、その後わたくしは何うかして、此の御別莊へお出入をし度いと、野菜物を賣りに來たり、お留守番と御懇意になつて、お庭の掃除を手傳つたりしてゐる中に、前の肥料取の人が罷めたので、それからわたくしが肥料を取るやうになりました」

勇「それではその子の樣子も薄々聞いて知つて

ゐたかネ」

權六「ヘイ詳しい事は判かりませんけれども、栗山様といふお屋敷の御養女様になつて、米國へいらしつたといふ事は聞きましたが、その後復た東京へお出になつたとやらで、此の御別莊へも見えるだらうと思つて待つて居りましたら、三四年前に一度お入來になつた事がありまして、その時わたくしはそつとそのお孃様を見上げました」

勇「フム、それでおまへさんの姉といふものはその後何うなつたネ」

權六「東京へ乳母奉公に出て、今でもそのお屋敷に勤めて居ります」

勇「何といふ邸だネ」

權六「麻布の時原様と申します」

勇「ウム、貴族院の時原か、最初からそこへ奉公したのかネ」

權六「ヘイ、そのお邸でお孃様がお生まれなすつて、お乳が無いものですから、姉がお乳母に上つてそのお孃様をお育て申しました、それからモー二十年にもなりますし、姉も病身ですから、お暇を願ひ度いと申しますけれども、せめてお孃様がお嫁入なさる迄邸に居て呉れろと仰しやつて、中々お暇しになりません」

勇はその事實によつて、小夜子の母親の人物を推測した。

「それ程に惜しまれるやうでは、心掛の好い人と見えるネ」

權六は心から出た何の飾り無き言葉で、

「わたくしの姉と申したら、誠に氣立の好い感心なものでございます、最初奉公に出た時分は家がまだ困つて居りましたから、姉は一文も無駄な錢を費はず、お給金は大抵家の方へ送つてよこして呉れました、それで老父も阿母も大層樂になりまして、いつでも娘の孝行を人様に自慢した位です、その後老父も阿母も續いて亡くなりましたけれども、わたくしは姉のお蔭で少しづつ田地も買へる様になり、今では今井村で何うやら斯うやら押しも押されもしない顔になりました」

勇「その姉さんは栗山の娘を見た事があるかネ、麻布にある事を知つてるなら、東京の内で顔を合した事があるかネ」

權六は斷乎として、

「イイエ、それは決してございません、まだ一度でも顔を見た事はございません、先年わたくしが此の御別莊でお孃様を見上げた時、東京へ行つて姉に其事を話しまして、麻布の近所へ行つて待つてゐれば、そのお孃様が學校から歸る所を見られるから、是非一度見て置きなさいと勸めましたけれども、それは未練だ、顔は見まい、迂つかりその人の近所へ行つて飛んだ迷惑でもかけてはならん、此後は何んな事があつても、おまへも再びそのお孃様を見るな、よしや人に尋ねられても昔の事を人に言ふなと、わたくしも嚴しく口禁をされました、そんな譯でわたくしも最初にはあなた様にお隠し申したのでございます」

勇は感心して、

「それは覺悟の好い婦人だ、ところでその父親の方は、急病で死んだといふが、身分は賤しいものでないかネ」

權六「賤しいどころでございません、郡内の市野では人に知られた材木屋の息子です、今でもその家は弟が相續して立派に營業て居りますから、お調べになれば直ぐに分かります」

勇は此に至つて小夜子孃の實父も實母も探り得た、母は農家の女ながら心掛の好い人物、父も由ある商人とあれば、小夜子孃の素性に決して賤しきものでも無し、自分の家へ貰ひ取つた後には、場合によつてその母親を出入させても差支は無い、公然親子と名乗らずとも、斯る

人物が世にあると知らば、孃の爲めには何より
の頼りになるだらうと、末の事まで考へた。
「それにしても何か證據が欲しいものだが、お
まへさんの家には、その姉さんの寫眞でもある
かネ」
權六は姉の容色を自慢顏に、
「ヘイ、寫眞は澤山ございます、お屋敷のお孃
樣と御一緒に寫したのもありますし、自分一人
のもございます、寫眞で見ますと百姓の娘と
は思はれません、宛然立派な奧樣のやうです」
勇は悅ばしさうに、
「小夜子さんの母なら爾うであらう、時に僕は
その寫眞を欲しいものだが、近く寫したのを一
枚呉れないかネ」
權六「御入用なら何枚でも差上げます、では明日
でも持つて來てお目にかけませう」
勇は暫く考へた。
「イヤ僕の方から明日の朝早くおまへさんの家
へ行から、僕は序におまへさんの家の光景も觀
て置き度いから」
權六は遠慮して、
「おいで下すつても百姓の家ですから見苦し
うございます」
勇「イヤそれは關はん、僕は畫師だから、おまへ
さんの家の近所を、畫に描いて東京へ持つて歸
るよ」
勇の心は小夜子孃の生れた土地を寫生して、
孃への土產にする所存、尙ほ詳しく權六の家の
道筋を問ひ、明日を約して權六を歸した。
權六は小夜子孃が良家へ緣付くと聞いて、
孃の愈よ幸福を喜んだ、此事を東京の姉に
告げなば、姉が嘸安心するだらうと思つて、
欣欣として歸つて行つた。
勇は初めて重荷の卸りたやうな心地がした、
此の三日間は夜も滿足に眠られぬ程心身を勞し
て騷いだが、大導寺老人の化象の術の適中して、
小夜子孃の素性が判明せし上は、證據の寫眞と
その家のスケッチとを携へて、明日は早く東京
へ戻り、孃に逐一報告して、早く孃を引取らう、
孃を我家へ引取つて了へば、昔の事は公然の祕
密、實の親に會はせても、權六の家へ遊びに行
つても、何の遠慮するところは無い、爾うなつた
ら小夜子孃も、初めて心が休まるだらうと、頻に
未來を想像して、其夜は溫き夢を結んだ。

別離

一

結婚の日は眼前に迫つたが、支度萬端は手落
無く整つてゐるので、母の栗山夫人は一先づ安
堵した、なれど氣に懸るのは當人の小夜子孃が、
先頃から兎角氣分勝れず、食事も碌に攝らない
で、部屋にばかり引籠る日が多い事である。
母は心配して夜と無く晝となく、幾度も小夜
子の部屋に見舞に行つた。
「何うだネ今日は、モー頭痛もしないかネ、氣
分も少しは良くなつたかネ、何か少し食べて見
たら可から、お粥を煮させようか、葛湯にし
ようか」
飽くまでも親切に問ひ慰めて、自ら藥までも
持つて來る、その慈愛の深いのに感激して、小
夜子はあゝ濟まないと思ふ事もあつた。
小夜子は病氣に惱むのでは無い、煩悶に惱む
のである、勇さんはまだ歸らず、結婚の日は迫
つて來る、その歸りを待たうか、歸つて來て實
の親が知れたらば何とせう、親たる人の身分次
第で勇さんの言葉に從はうか、それとも矢つ
張り辭退して、身を成行に委せようかと、心は
頻に迷うてゐたが、母親の是程までに心配する
態度を見ると、自分の勝手な煩悶で、親にまで
苦勞をかけるのは、子たる道で無いやうに思は
れる、それも肉親の親子なら格別、身分の卑し
い棄兒をば實子として育てられた恩義に對して

何ほ済まないといふやうな氣が發る。
　斯うも思つたりすると、一方には復た勇の言葉が耳底から憶ひ出される、自分の歸るまでに結婚の日が迫つたら、病氣と云つて延ばして呉れと、あれ程に言つて行かれたから、その言葉に乖つたら、癇癪の強いあの御氣性で、何んなにお怒りなさるか知れん、勇さんの承諾を得ないで、迂つかり事も極められないと、心は愈よ懊惱を増すばかりだ。
　栗山夫人は小夜子孃の態度が、病氣の爲めで無くして、結婚問題の爲めである事を察してゐる、自分の言葉を立聽されて、それが大打撃となつた事は知らないけれども、青山の鳥海家へ往つた日から、急に樣子が以前と變つた、仲の好い勇に何か言はれて、婚禮するのが可厭になつたか、伯母にでも何か先方の事を惡いやうに言はれたか、先日の伯母の言葉と云ひ、最初から小夜子が此の縁談に氣の進まない事は知つてゐる、もしや今になつて此の婚禮を嫌だなんぞと言出されては大變た、何うかして小夜子の心を確に納得させしめなければならぬと思つた。
　今日は祖母も朝から[illegible]に逝いて家にゐない、豊子は學校へ行つてまだ歸らぬ、奉公人は秋晴の好日和と、[illegible]で頭に洗濯を爲てゐる、丁度幸ひ四邊に聽く人は無し、此の際に小夜子の意中を確めて、動かぬやうにその心を極めて置き度いと、母は茶菓子など携へて小夜子の部屋に赴いた、小夜子は相變らず元氣の無い顔をして机に靠れて何か考へてゐる、母は菓子盆を其傍に置いて、
「小夜子や、今朝もまだ御飯が食べられないかえ、此のお菓子はネ、昨日わたしが三越で買つて來た鷄蛋燒だから、是れでも一つ喫べて御覽な」
　母の斯くまで親切にして呉れるのは嘗て覺えない事である、小夜子は心からその厚意を感謝して、
「何うも恐入ります、どうぞそこへお置き遊ばして、モー少し後に戴きますから」
　小夜子は母が菓子盆を置いたら直ぐに立去るかと思つてゐたが、母はじろじろと小夜子の身體を眺めて容易に歸りさうも無い。
「あんまり物を食べないと痩せて了つて困るネ、おまへの病氣は氣から出るんだよ、自分の氣で身體を惡くするんだよ」
　と言ひつつ疊に腰を卸したから、小夜子は急いで室の隅から座蒲團を取つて母に薦めた、母は蒲團に坐つて先づ四邊を見廻しながら、
「おまへは此頃になつて、伯母樣か勇さんから銀野さんの事に就て何か惡いやうな事でも聞きはしなかつたかえ、それから急に心配でも爲出したやうに思ふが、青山の伯母樣はネ、何でもわたしの爲る事を善いと仰しやらない性だから、今度の事に就ても必定内心で贊成なさらないに違ひ無いよ、伯母樣が何とかおまへに仰しやつたかえ」
　小夜子孃は返答に困つたが、
「イイエ別段……」
　と何氣無いやうに答へた、斯る場合には何と答へて宜きものか、實際の事情も告げられぬ、と云つて虚も言ひ難いと、小夜子は内心で當惑した、されど母は深くも追究しなかつた、追究したとて明白には言ひ得まいと察してゐるのであらう。
「設ひおまへは誰から銀野さんの噂を聞いたつても決して餘計な心配しては不可ないよ、それやモー女一生の大事だから、氣が揉めるのは無理も無いけれども、人間は運次第なものだから、餘計な心配をするのは却て身體に障つて自分の損になるよ、銀野の息子さんだつて、年は若し、金はあるし、些つとやそつとの遊び位はなさるかも知れないがネ、そんな事はおまへが行けば悉皆罷んで了ふよ、おまへのやうなお孃さ

んを貰つて、營業をする人が何處にあるもんかネ、だからそんなやうな事を聞いたつても決して氣に懸けるのぢやありませんよ、それよりもわたしは今度の事に就て、おまへに篤つくり話して置き度い事がある」

語りかけて、ちよいと襖の外を覗み、聽く人無きかと氣を付けて、一段と聲を低くした。

「小夜子や、是れは極く内内で、おまへだけに話して置くのだがネ、實は今度の婚禮に就いて、わたしは銀野さんからおまへの支度金を壹萬圓受取つてゐるのだよ」

下を向いて默つて聽いてゐた小夜子は驚いたやうに顏を擧げた、母は四邊を憚る口氣で、

「さあ、わたしが支度金を貰つて娘を嫁に遣つたと云はれては名譽にも係はるから、決してそんなものを取るまいと思つたけれども、何にせよ此の頃は運の惡い事ばかりあつてネ、わたしも非常に苦しいもんだから」

少し言葉を切つて暫く考へながら、

「それといふのも矢つ張りおまへの爲めを思つたからだよ、お父樣の無い後は、斯んな邸に住むのも贅澤だから小さな家へ引越せと青山でも頻に言ひなすつたが、わたしはおまへを立派な家へ緣付けるまでは見すぼらしい家へ入り度くないと思つて、以前の通りにして居たんだよ、その内に勸める人があつて、會社の株を澤山買つたのがお手違ひの基で、今では恩給でも何でも人手に渡つて此方へは來ないし、利子の高い負債もあるし、實は非常に苦しくつて、迚もおまへの支度などを爲る事は能きない始末さ、その事情は仲に立つ人が知つてゐて呉れるから、先方に話して内内で壹萬圓の支度金をよこしたのだがネ、その壹萬圓を悉皆おまへの支度にかけられれば可いけれども、性の惡い負債の方へ半分以上廻して了つたから、今若し此の婚禮に故障でも發ると、わたしは生きてゐられない程の譯なんだよ」

小夜子は新しい驚きに今迄の煩悶も懊惱も忘れて了つて、呆氣に取られたやうに母の顏を見てゐた、世間を知らぬ娘氣の、まさか斯んな事があらうとは氣が付かなかつた、さう云へば道理こそ、母の買つて呉れる衣服調度が、平生の程度に比して贅澤過ぎると思つたが、それは全く支度金の爲めであつたか、性の惡い負債があるの、恩給は人に取られるのと、今更聞いて小夜子の心は、急に悲しく心細くなつて來た、栗山家といふものゝ今にも破滅するかと思ふやうな氣がして、我れ知らず涙ぐんで下を向いた、母親も懺悔するやうな口氣で、

「小夜子や、わたしはおまへに濟まないと思つてゐるんだよ、壹萬圓貰つて、それだけの支度を爲て遣る事が能きないから、おまへには氣の毒でならないんだよ、然しまだわたしの方の負債は其位な事ぢや足りないけれども、婚禮さへ濟んで了へば、貳萬や參萬の金はいつでも融通して呉れる約束だから、さうしたら悉皆家の整理をつけて、豐子には婿を取つて、もつと小じんまりとした家へ入らうと思つてゐるんだよ、さういふ事が能きるのも皆んなおまへが銀野さんへ行つて呉れるお蔭だと思つて、わたしは何んなに嬉しいか知れやあしない、もしもおまへが今になつて、此の婚禮を嫌だなんぞと云ひ出したら、わたしは迚も壹萬圓を辨償する事も能きないし、諸方の負債も一時に責めて來るから、栗山家は破產して了つて、お祖母樣も豐子も路頭に迷はなければならない始末だよ、わたしを助けて栗山家を立てさせて呉れるのも、家中を路頭に迷はせるのも、おまへの心一つにあるから、そこはおまへもよく考へてゐてお呉れ、日頃從順しいおまへだから、今になつて彼是と言出す譯もあるまいと思ふけれども、あんまりおまへが沈んでばかりゐるから、わたしや氣にな

つてならないよ」

母の態度は熱心である、その言葉は眞實である、語した事情に僞りは無い、栗山一家の興亡は全く小夜子の雙肩に懸つてゐる。

小夜子は愈よ自分の心を一決しなければならない破目に陷つた、今はモー迷つてはゐられない、母に從ふか、勇さんに從ふか、母の事情を聞いて見れば、いかに心が進まずとも、一家の難儀を他所に見て、此の緣談を破らうとは言ひ難い、兎ても角ても世に棄てられた不幸者、自分の私情を通さうとするのは心得違ひ、是れは一心を犧牲にして母の心を安んじなければならないかと、幾度か心を定めようとしても、何者にか後方へ引戻されるやうな氣がして、急には思ひ切つた返事が能きない。

母は小夜子がもぢもぢして、即座に返事を爲ないので、忽ち濁聲になつた。

「小夜子や、それぢやおまへは嫁になつたのかえ」

と思はず前に詰め寄つた、小夜子は慌てたやうに、

「イイエ」

と先づ答へたが、今は躊躇して居られぬと、心を定めて顏を揚げた。

「お母樣、御心配なすつて下さいますな、わたくしは決して嫁とは申しませんから」

母は胸を撫でて、

「それぢや元氣好く婚禮して呉れるかえ」

小夜子は幽に、

「ハイ」

と答へて睫に淚を噛んだ、母は尙ほ元氣つ付くやうに小夜子を勵まして自分の居室へ戻つて行つたが、母の姿が見えなくなると、小夜子は机に額を伏せて忍び泣きに泣き出した。

二

いつまで歎いたとて、一たび定めた運命は取戻されぬ、モー歎くまい、モー何事も思ふまいと、小夜子は心を取直さうとしたが、さう思ふ程尙ほ悲みの增して來て、小さい胸も裂けるやうな心地がする。

斯うしてゐてはお母樣に濟まない、折角卽彼云つて答へたのに、いつまでも此に引込んでゐては、復た怪しく思はれようと、小夜子は漸く浴室へ行つて顏を洗ひ、髮を撫付けて、衣服を着直した。

小夜子は茶の間へ行つて母の前へ出ると、母は文凾を披いて手紙を讀んでゐた。

「小夜子や、今青山の伯母樣から使者が來て、今夜おまへに御馳走し度いから豐子と一緖に來て呉れろと言つておよこしだが、何と云つて返事を爲ようネ」

小夜子は母の氣を兼ねて急に何とも言はない、母は既う先程の言葉に安心したから、强ひて鳥海家を嫌ひもしない。

「折角斯う言つて來たのだから、往けるなら往つた方が宜からう、わたしが一緖に行けると可いけれども、今夜は婦人會があるから脫けられない、豐子と一緖に往つておいでよ」

小夜子は素直に、

「ハイ」

と答へた、母は急に低聲で、

「言ひもしまいけれども、先刻の事を伯母樣や勇さんに話しちや不可いよ」

小夜子は矢つ張りハイと卽座に答へたけれども、何やら肩に重い荷が懸つたやうに感じた。

母は返事を書いて文凾に納めた、傍に女中がゐなかつたので、小夜子が文凾を採つて、

「わたくしが持つて參りませう」

內玄關へ出て見ると、使ひに來たのは昔馴染の民といふ女中、小夜子はその勞を謝して、

「勇さんは」

「先程酒匂からお歸りになりました」

小夜子は急に胸が轟いた、嬉しくもあり、悲しくもあり、逢ふも憂し、逢はぬも憂し。

此日鳥海家から急に小夜子を招いたのは、勇の方寸より出た事である、勇は朝早く酒匂の別莊から今井村に赴いて、小夜子孃の鄕土たる權六の家をスケッチしたり、孃の母たるお藤の寫眞を貰つたりして、喜び勇んで直ぐに東京へ歸つて來た、歸つて見ると父の男爵は用事あつて二日前に京都に赴き、母一人で淋し氣に勇の歸りを待つてゐた、勇は小夜子の事を何も彼も母に打明けてゐるから、酒匂の出來事を詳しく話した末、如何にして此の報告を小夜子に知らせよう、如何にして寫眞やスケッチを小夜子に見せよう、人の前で語り得べき事で無し、以前の樣に畫手本が出來たと呼びに遣る口實も無い、何か小夜子を呼寄せて祕密に會ふべき手段はあるまいかと相談した、母は最初より小夜子を勇の嫁にする心、素性の如何は深く氣にもかけなかつたが、今や勇の報告によつてその實家も母親も知れて見れば、愈よ安心して小夜子孃を引取られると、愈よ嬉しく思つたから、それならば自分から公然と栗山夫人に申込んで、嫁に行く身の儀けに、今夜小夜子に御馳走しよう、さりながら一人だけを呼ぶ譯にもならぬ故、豐子も共に招いで、自慢の箏でも彈かせようと、竊に協議を決してゐた。

夕暮に及んで小夜子と豐子は盛裝して鳥海家に赴いた、小夜子は何か意味のある御馳走ならんと察してゐたが、豐子は必ず男爵夫婦も揃つてゐて親類の誰彼も打混り、盛大なる宴席の開かれる事だと思つたのに、案外な事には主人方が伯母一人、勇さへも顏を見せないで、御馳走の品品は多けれど、人の淋しいのと、興味の乏しいのに張合が拔けた。

食事が濟むと鳥海夫人は女中に命じて一面の箏を座敷に持出さしめた、以前勇の妹がまだ家にゐた時分、師匠を呼んで稽古した時に用ゐた箏、小夜子もそれで二三段習ひ覺えた事がある、豐子も遊びに來て自慢に彈いた事もある。

「豐子さん、今日は久し振りで一曲聽かして貰ひませう、伯母さんはモー久しく聽かないよ、此頃大層手が上つたといふから、今日は豐子さんの箏を樂みにしてゐましたよ」

豐子は自分の音曲の技倆を褒められたのが何よりの本望である、何處へ行つても褒められれば幾段でも演奏する事を吝まない、況して伯母の前ではあるし、外に聽衆の無いのが不足なれど、此頃習つた新曲を彈じて昔者の伯母を驚かせようと、箏を前に引寄せて、先づ柱を立てて音を入れた。

「オヤ、大層線が弛んでゐること、伯母樣、締木がありますか、二三本緊めなくつちやなりません」

伯母は女中に命じて紫檀の締木を取寄せた、豐子はそれを受取つて、女ながらも箏を緊めるといふ我が技倆を誇り顏に、線を外して一つ宛緊木に卷いて緊め初めた、伯母はその心を察せず、

「女ぢや何うしても線がよく緊まらないネ、勇に緊めて貰ふと、力があつて可いのだけれども、今日は生憎風邪を引いて臥てゐるから」

小夜子は勇の病氣と聞いて心配さうに、

「勇さんはお熱でもお有りですか」

伯母は身體を小夜子の方へ向けて、

「ナーニ、大した事も無いが、今朝酒匂から歸ると頭痛がすると云つて臥て了つたの—」

小夜子は是れも我身の爲めに心勞された結果かと思ふと、愈よその病狀が氣にかかる。

「お藥でも召上りましたか、お醫者でもお呼びになりましたか」

伯母は打笑つて、

「ナニさ、今はモー起きてゐるでせう、ちよツと

行つて御覽、新しい畫も何か出來てゐますよ」
　小夜子はハイと答へて、そつと席を立つた、豐子は線を緊めるに一生懸命で、此の問答も耳に入らない、ギーギーと木を摺る音をさせて、線を龍角に絡んでゐる。

三

　假初にも勇の身に病ありと聞いて、小夜子は心に新しい苦勞が生じた、我身の親を尋ねると此の數日間に如何なる難儀を逢はしたらう、當もない捜し物故、夜の目も寢ずに心配なすつたらう、御病氣は重くはないか、風邪位でお癒りなさるだらうか、何うか手重い事にならねば可いと、頻に胸を痛めて、勝手知つたる廊下傳ひに勇の部屋なる離れの畫室へ赴いた。
　畫室の入口は繰戸が締めてある、小夜子は先づ戸口に立つて中の樣子を窺つた、電燈の光りは戸隙より洩るけれども、室内はひつそりとして音もしない、もしや眠つてゐなさるなら、それを驚かすも心無しと、小夜子は繰戸に手をかけて、少しづつ退るやうに引開けた。
　看れば勇は人待顏に、座蒲團の上に端坐して、頻に此方を眺めてゐる。
「小夜子さん、待つてゐましたよ」
と元氣らしい聲に小夜子は先づ安堵した、
「お風邪だと聞きましたが、如何です」
　繰戸をピタリと締めて中に進んだ、勇は座蒲團を取つて小夜子の爲めに席を設けながら、
「ナニ、風邪ぢや無いのです、二三日よく眠なかつたから、睡いのと疲れが出たので、先刻まで横になつてゐました」
　小夜子は席に就いて勇の顏を見ると、いかにも疲勞せし顏色で、頰肉さへも落ちた樣子、是れも我身の爲めかと思ふと、その親切が一入身に沁みて、坐ろに涙が沸いて來た。
「でも今迄お座敷へおいでになりませんから心配致しましたよ」
　勇は快然と笑つた。
「アハハ、それはあなたを呼寄せる策略です、僕が出て行つてはあなたと談話をする機會がありませんから、故意と此に待つてゐたのです、小夜子さん、マア喜んで下さい、僕は悉皆目的を達しましたよ、あなたの本當の親御さんはよく判かりましたよ、決して決して卑いお人ではありません、立派な身分の御兩親ですから、あなたも何卒御安心なさい」
　小夜子は急に肩身が廣くなつたやうに思つた、今まで頭上から壓迫してゐたものが俄に除かれて身體が輕くなつたやうに感じた。
「誠に何うもお禮の申しやうもありません、何うしてそんなに速く判かりました」
　勇は神明に感謝するやうな口氣で、
「それといふのも、天が全く僕等の微衷を憐んで、二人の前途を保護して呉れたのですネ、何にせよ、手懸といふものは一つも無し、空漠として手の付けやうが無い事だから、僕も非常に弱りましたが、フトした漁夫の談話から化象の術といふ天竺傳來の奇術ある事を發見しましたよ」
　酒匂の濱にて漁夫の教を聞き、小田原に赴いて大導寺老人に觀て貰つた顚末を物語つた。
「その時ネ、小夜子さん、不思議なものぢやありませんか、その人相見が僕の顏を暫く視てゐて、ウム有るな、おまへを慕うてゐる若い婦人がある、世の常の夫婦が良人を慕ひ妻を慕ふといふよりも何ほ深くおまへを慕うてゐる婦人ぢやと、斯う言ひましたよ」
　勇は此事を語りつつ、小夜子の顏を見て心の底から嬉しさうに笑つた、さう言はれた時の心持は今も猶ほ忘れないといふやうな態度が彰彰と知られる、小夜子は思はずポッと顏を紅くした、勇は頻に愉快らしい口調で、
「それよりかネ、大導寺老人の言葉を賴りに、酒匂へ歸つて三日の間待つてゐると、三日目の

夕方にあなたの由縁の人が來たのは全く、老人の言つた通りです」
　權六との問答、棄兒の由來、一一詳しく物語つて、
「ですから僕は今朝早く今井村へ行つて、あなたの生れた土地を寫生して來ましたよ、コレ御覽なさい、此の田舍家が權六さんの家で、以前建てゝあつた場所から十間程上へ寄つてゐるさうです」
　小夜子に覽せようとて用意して置いたスケッチ畫を示した、小夜子は是れが自分の鄉土かと手に取上げて懷かしさうに眺めてゐる、勇は復た一枚の中形寫眞を小夜子の前に出した。
「小夜子さん、是れが今もお話し爲た權六の姉さんでお藤さんです、顏の輪廓がそつくりあなたと同じ樣ですから、爭はれないものですネ」
　小夜子はハッと、穩かならぬやうな、懷かしいやうな、さりとは遠遠しいやうな、珍らしいやうな、一種異樣な感じがした、先づ横目に偸むが如くチラとその寫眞を見たが、スケッチ畫を下に置いた儘、その寫眞は手に取上げんともせず、遠くから顏を伸ばすやうにして母なる人の肖像を眺めた。
　勇は小夜子が母の寫眞を見て如何なる感想を生ずるかと、默つてその態度を視てゐた、小夜子は何にも言はず、默つてその寫眞を押戴いて勇の前へ戻した。
「勇さん、それは何卒あなたの方へお置きなすつて下さい、わたくしが持つてゐては家のお母樣に濟みません」
　勇は小夜子の用意もさる事と考へた。
「それもさうですネ、叔母さんは何處までもあなたを實子と言つておいでですから、そんなものが知れては惡いでせう、然し小夜子さん、僕の母はその寫眞を觀て、斯ういふ上品な從順い人なら、小夜子さんを家へ引取つた後は、それとなく內內で出入させても可いと言つてゐますよ」
　小夜子は思ひ設けぬやうに、
「アラ、伯母樣にお覽せなすつたのですか」
勇「覽せましたとも、此の寫眞もスケッチも殘らず母に覽せました、母にはあなたの事を少しも祕しません、先日僕が酒匂へ行く前にあなたの話を詳しく母に爲ましたが、母はあなたを引取る事に大賛成です、だから今日だつて、萬事母が承知してあなたを呼びに進げたのです」
　小夜子は斯くまでに事が運んでゐようとは思はなかつた、勇さんのみか伯母樣まで、それ程我身を贔屓して下さるのに、何うして斯んな運命になつたものかと、頻に悲しくなつて來た、勇は小夜子の心を知らず、最早天地が二人の爲めに開けたやうな氣分で、
「小夜子さん、その通り萬事は母が承知してゐますから、モー心配はありません、兎も角も今夜あなたがお歸りになつたら、お祖母樣に話して、明日の朝早くお祖母樣を此方へおよこし下さい、さうしたら僕と母とお祖母樣と三人して宜い樣に手筈を極めて了ひますから」
　小夜子は愈よ胸を絞られるやうで、默つて下を俯いてゐた、勇は小夜子がまだ安心せぬものと思つて、
「小夜子さん、モー何にも案じるに及びませんよ、僕の母は何んな無理をしても必ず此事を成就させると言つてゐますから」
　勇の意氣組の烈しい程、小夜子は愈よ返答が能きない、ああ如何にして我が心事を言出さう、如何にして我が苦衷を勇さんに知らせようと、思ひ迫つて溜息ばかり吐いてゐた。
　遙に隔てた表座敷から箏の音が頻に聞えて來る、一曲閱つて又一曲と、新に長いものを彈出した。

四

　勇は豫期に反して小夜子の返事の遲いのを怪

しんだ。

「小夜子さん、何うなすつた、ナゼそんなに默つて[illegible]ゐます」

催促されて小夜子は堪へかねて潸然と泣き出したが、漸く涙を拭つて顏も擧げずに、

「勇さん、どうぞ赦して下さい、わたくしはモーあなたのお側へ參られません」

勇は驚いて、

「それは復た何うして、何ういふ譯で」

小夜子は事情を語り度くも、母に口止めされてゐるから、それと明白に言ひかねる。

「わたくしは、今朝お母樣に色色と訊かれましたから、快く婚禮すると答へて了ひました」

勇は殘念さうに、

「それは復た取返しのならん事を言ひましたね、叔母樣が無理にあなたを壓迫したのでせう、然し關ひませんよ、僕の方から言込んで、何うでも壞して了ひますから」

小夜子を慰める意で、さも無造作のやうに言つた、小夜子はそれが苦痛である、我が言葉の意味を勇に知られないのが悲しいのである、何う言つたら勇が悟るだらう、如何に語つたら我が心が通じるだらうと、猶も沈吟して、深く思ひ入つたやうに、

「モシ勇さん、それはネ、お母樣が無理を仰しやつた譯ではありません、全くわたくしが自分からさういふ氣になつたのです、さあ、爾う申したら無情い奴と御立腹もありませうが、わたくしは熟熟考へて見ますと、何うしてもあなたのお側へ參る事の能きない身の上でございます、あなたの御親切は骨身に徹へて居りますし、あなたの御恩は死んでも忘れませんが、今迄の御恩や御親切を受けただけでも身に餘つた幸福です、此上にもあなたのお世話になつては、却てあなたにも御迷惑をかけて都合の惡い事が發ります、わたくしはモー分に過ぎた望みを起すまいと諦めました、斯うなるのも前世の因緣でございませうから、どうぞわたくしの事はモーお關ひになりませんで、あなたは外から好いお嫁さんをお迎へ遊ばせ」

明けて言はれぬ胸中の苦み、いかに說いても語つても勇の心に通ずべくもあらず、勇は少しむつとして、

「それぢや先日の約束を忘れましたか」

小夜子「忘れはしませんが、わたくしが自分で考へ直したのです」

勇は無念さうに、

「ぢや僕が酒匂まで行つて奔走して來た甲斐が無いぢやありませんか、乞食の子といふ汚名を雪いで、あなたの親元を調べて來たのは何の爲めです、あなたに安心を與へて僕の家へ引取る爲めぢやありませんか、僕は三日も四日も碌に寢やあしませんぜ、寢食を忘れてあなたの爲めに奔走しましたぜ」

小夜子は聲を曇らして、

「その御親切は、何ともお禮の申しやうがありません」

唯シクシクと泣くばかり、勇は更に合點が行かず、

「それほどに思ふなら、今更僕を蹈付にしなくつても可いぢやありませんか、何うしてあなたの心がさう急に變つたのです、何か僕の仕打に氣に入らない事でもありますか、僕が嫌になつたのですか」

小夜子は顏も揚げ得ない。

「何う致して勿體無い」

勇は小夜子の肩に手をかけて、

「ネー小夜子さん、あなたは氣が弱いから叔母樣に言はれた事を拒む事が能きなかつたのでせう、それは後で何うにでもなりますから、決して心配なさいますな」

言ひ[illegible]小夜子の[illegible]しさうにも無い、小夜

子は愈よ當惑した、いつまで問答してゐたとて、容易な事では我が意を通ぜぬと、思ひ切つて身を退り、聲も幾分か莊重に、

「勇さん、何と仰しやつてもわたしは一旦心を決めましたから、モーあなたの方へ參られません—」

聞くより勇は憤然として、

「おや愈よあなたの心は變つたネ」

小夜子は血を吐くやうな思ひで、

「ハイ變りました」

勇は思はず立上つた、持前の癇癪が一旦に込上げて、ジリジリ身を顫はせた。

「此の人非人め—」

拳を擧げて打たんとしたが、流石に打ちもしかねて矢庭に傍のスケッチ畫を摑み、バリバリと兩つに裂いて小夜子の前へ叩き付けた、小夜子は涙ながらに身を前へ投げ出して、

「どうぞわたくしを打つとも叩くとも、存分になすつて下さい、お腹の立つのは御尤もです、わたくしは死んでも厭ひません—」

勇は小夜子を睨めて、腕を扼してウムムと唸つてゐる、眼は血走り、身體は顫へ、長い髮の毛はざわ立つて、無念の形相物凄く、忽ち左右の拳で我が胸を音のするほどウムと撲つた。

「僕は死にます、あなたを失つては生きてゐられません、僕はあなたに殺されます—」

狂人じみた天才家の癖として、激昂の極には如何なる珍事を仕出かさんも知れぬ勢ひ、小夜子は急に恐ろしくなつて來た、今は我身の事よりも勇の身の上が案じられて來た。

「勇さん、どうぞモー一度坐つて下さい、それでは仔細をお話し申しますから—」

勇は聞咎めた、

「ナニ仔細を—」

小夜子「ハイ、是れには仔細のある事です、人に洩らしてはお母様に濟みませんけれども、あなただけにお話し申します—」

母の禁を破るも罪なれど、勇に過ちありては一層罪が重くなると、心を決して勇を再び座に就かしめ、逐一に母親の事情を物語つた。

「ネー勇さん、わたくしが今になつて嫌だと申せば、栗山一家は破滅してお母様は生きてもゐられないと仰しやるやうな譯なのです、さう云ふ場合にわたくしは何うして嫌だと申されませう、況して普通の親子では無し、棄兒の身を拾はれて是れ迄に育てて下すつたお父様やお母様の御恩に對して、何程わたくしがあなたをお慕ひ申しても、今更自分の我儘を通し度いとは言はれません、それですからあなたには濟みませんけれども、お母様にきつぱりとお返事を申したのです、どうぞわたくしを可哀想だと思召して、勘忍して下さいまし、モシ勇さん、わたくしは斯んな思ひをするより死んだ方が餘つ程宜うございます—」

と苦しい心を披瀝けた、勇は最前より頻に涙を拂つて聽いてゐたが、感慨に堪へぬ語調で、

「小夜子さん、僕はモー何にも言ひません、あなたは實に犧牲だ、運命の犧牲だ、あなたをして此の犧牲の運命から脫せしめる事の能きないのは僕の不德です、僕は叔父様に申譯がありません、ああ實に我身ながら腑甲斐無い—」

男泣きに暫く泣いたが、忽ち屹と顏を揚げて、

「小夜子さん、モー一つお願ひがあります、あなたは暫時僕のモデルになつてその顏を僕に寫さして下さい」

小さい紙を取出して、筆を採つて身構へた、小夜子は言はるるままに容を正して端然と坐つた、勇は滿腔の熱血を一管の筆に籠めて、精神を凝らして小夜子孃をスケッチした。

「小夜子さん、僕は此の畫を小さい卷物にして、生涯肌身離さず持つてゐますよ」

小夜子は堪まらなくなつて、忍び音にヒーツと一聲、

「モシ勇さん、わたくしの身體は何處へ参りましても、魂は此へ置いて行きます」

よよと勇の膝に泣き倒れて殆ど生氣を喪つた。

須磨

一

冬とはいへど東京より稍温暖い須磨の浦、殊に主人の銀野太吉が昔から普請道樂とて、寒にも暑にも適するやう、數寄を凝らして建築した此の別莊、天氣さへ晴れてゐれば、何處の座敷も南から日を享けて、羽織も脱ぎ捨て度くなる程の好い心持。

花嫁の小夜子は良人の甚三が神戸の本店へ出勤した後、獨り自分の部屋に籠つて、東京の新聞など讀んでゐたが、退屈したと見えて縁側に立出で、硝子戸の内から庭前の景色を眺めた、庭は一面の清らかな白砂、其間に昔ながらの老松が舞ふやうに枝を翳して幾十本も連つてゐる、松の間から透かして見える淡路島、前の海には眞帆片帆或は釣船網船の點點として泛べる中に、烟を引いた蒸汽船が西へ東へと駛つてゐる。

「マア好い景色だこと」

思はず感歎した小夜子は好める道とて部屋に戻り、紙や筆を持出して、眼前の景色をスケッチした。

「關東の景色は大きい代りに締りが無くつて描きにくいが、此邊の景色は自然と畫になつてゐるから面白い」

興に乗じて筆のまにまに、山を寫し、海を寫し、舟を寫し、松を寫し、寫し了つて自分ながら善く出來たとて會心の笑を漏らした。

小夜子は暫く嬉しさうに其畫を眺めてゐたが、畫といふ事に聯想して忽ち何を感じたか、愁然と首を低れて、ホッと長い息を洩らした、折角斯んな畫を描いても、誰に見せて批評して貰はう、誰に惡い處を直して貰はう、ああ是れが東京だつたらなんぞと、端無くも胸中に何者かが浮び出でて、心淋しいやうな悲しいやうな氣になつた、されど小夜子は忽ち自ら心付いて、自分の心を自分で叱つた、

「ああ、思ふまい、思ふまい、モー何事も思ふまい、是れからはモー畫も描くまい、昔の事は悉皆忘れて了はなければならない身の上だ」

部屋に戻つて紙や筆を机の上に置いたが、端坐するに堪へない風情で脇息に身を靠たれ、悵然として再び物思ひに沈んだ。

小夜子は銀野家に嫁して以來、人の羨む幸福な身の上になつてゐる、兩親の寵愛は言ふも更なり、良人の甚三も自分を大切にして姉のやうに敬つて呉れる、神戸の本宅へ同居するのは窮屈だらうから、須磨の別莊を若夫婦の住居として、何事も心任せにするが可いと、粋を通した太吉老人の取計らひ、大勢の男女は附添つてゐるし、三度の食事も料理番が腕を揮つて拵へて呉れる、お針さんもゐる、洗濯婆さんもゐる、何一つとして事を缺かないから、良人でも出て了ふと、小夜子は唯退屈に困しむばかりだ。

退屈に困しむと小夜子は頻に越し方や行末を考へて、獨りで鬱ぎ込んで了ふ、小夜子は元來物質的の幸福を悦ばない性質である、百萬の富も榮耀榮華も雲烟の如く輕蔑してゐる人物である、況して銀野家に嫁して以來、鳥海男爵の姪、栗山少將の娘といふ資格のみが尊重せられるので、自分といふ本質が認められてゐない事を知つてゐる、神戸の本邸で新婚の披露會が開かれた時は、大阪京都の名ある紳士淑女が殆ど洩無く來會した、その席上で太吉親子が華族と縁組したといふ事を得意顏して傲然たり

し態度を想出しても冷汗が流れる。

良人の甚三はいかにも好人物だ、お坊さん育ちの懐子、自分の意地といふ事が更に無いから、女のやうに從順しいけれども、斯る人物の癖として虛榮心は却却強く、友達なぞが訪ねて來ると、僕の女房は華族だよと、二言目には其事を鼻に懸けるのが片腹痛い。

もしや自分の身の上が此人達に知られたら何うなるだらう、男爵の姫でも無し、少將の子でも無い、酒匂の濱に捨てられた棄兒の果だと判かつたら、自分は此儘で濟むだらうか。

何故に見合の時、お母樣は自分の事を實子だなんぞと仰しやつて下すつたら、お母樣のお言葉さへ無くば、自分は今の內に實の事を家人に告げてその處置を受けるものを。

斯んな事を考へると、小夜子は逆旅にでもゐるやうな心持がして、周圍の幸福も嬉しいとは思はない。

其中に唯一つ、小夜子の心に慰安を與ふるものは、姑の親切にして優しい事である、貧乏世帶から良人を助けて今の身代に仕上げた程の女だけあつて、奉公人にも氣受が好く、誰にも彼にも如才無いが、嫁の小夜子に對しては眞實の母も及ばない程の慈愛を垂れてゐる。

小夜子は生れてから始めて、母の温情といふ事を此の姑によつて解し得た、姑は子といふものが甚三一人で女の子を持たなかつたから、小夜子を實の娘と思つて愛するのである、その性質の內氣なるを憐み、その學問技藝に長じたるを重んじ、斯る嫁は再び世に獲難いと、心一つを小夜子に傾倒するのである。

小夜子は三日に上げず、神戶の本宅へ、舅や姑の御機嫌伺ひに行つたが、姑の前に出てゐると、始めて心が落着いて、自分の家にでもゐるやうな氣持になる、ナゼ本宅へ同居する事が能きなかつたらう、氣樂にせよとの計らひは嬉しいが、別莊にゐて無聊に苦むよりは本宅にゐて姑に事へた方が餘つ程可いと、小夜子は良人よりも姑の方が賴もしく思はれた。

「あゝ、モーわたしは寧その事、眞實の身の上をお母樣にお話し申さうか知らん、外から知れて來ない內に何事も打明けて了はうか知らん、イヤイヤ彌うすると、東京のお母樣が譃を仰しやつたやうに當るから御迷惑になるかも知れない、わたしには誰からもお話が無いけれども、此頃神戶から東京の家へお貨幣が澤山廻つたやうに思はれる、今わたしが迂つかりした事を言出したら、東京で何んな事が發るかも知れない、マア當分は默つて成行を見てゐようか」

斯うも考へたりして、兎角心の安らかになる事が無い。

神戶の本宅から姑は折折此の別莊へ遊びに來たが、今日も天氣が好いので、女中一人を供に伴れ、氣輕な性質とて停車場から俥にも乘らず、十餘町の路を話しながら步いて來た。

「なう松や、小夜子は何を爲てゐるだらう、一人になると嘸退屈で困るだらうネー」

聲かけられて後方から足疾に近寄つたのは中年增の肥つた女中、

「若奥樣はお繪がお上手ですから、先日お使ひに參つた時も、お一人でお繪を描いていらつしやいました」

姑は感心したやうな語氣で、

「あの人は畫でも字でも何でもよく出來るよ、容色は佳し、氣立は優しいし、あんな好いお嫁は滅多に無いネ」

女中「若旦那樣のお幸福でございますネー」

姑「ああ、ああ、甚三ばかりぢや無い、わたしの爲めにも何よりの幸福だか知れやあしない、三日も顏を見ないと、わたしやモー會ひ度くつてならないよ」

此の嫁の顏を見度いばかりで、姑は態態本

宅から出て來たのである。

二

「モシ若旦様、只今大旦様がいらつしやいました」

腰元の知らせに小夜子は、

「オヤ個ふかえ」

と立上つて表座敷の方へ行かうとする間も無く、づかづかと廊下傳ひに小夜子の部屋へ入つて來た姑は先づ嫁の顏を見てニコニコと嬉しさうに、

「モー立たなくつても可いよ、わたしは表座敷より此方の方が暖くつて大好きだよ」

女中が差出す座蒲團に坐つて、小夜子の慇懃な挨拶を受けたが、女中に持たせて來た風呂敷包みを披いて小さな菓子折を取出した。

「是れはネ、昨日京都へ往つた店の者に賴んで伏見の駿河屋で買つて來て貰つた羊羹だよ」

小夜子は姑の心入を感謝して、

「何うも恐入ります、毎度色色戴きまして」

姑「曩日寄越した外郎は何うだつたネ、あれは京都の駿河屋のだよ」

小夜子「まことに結構でございました、あんな美味しい外郎は東京で無けません」

姑は小夜子に悅ばれるのが何よりも嬉しいのである。

「東京には上等のお菓子も澤山あらうから、珍らしくもあるまいけれども、此方にも種種の名物があるから、追追取寄せて喫べさせよう、おまへも夕方までは退屈で困るだらうネ、繪が上手だといふから繪でも描いて覽せてお吳れな」

小夜子は羞かしさうに、

「何う致しまして、一向善くは出來ません」

姑「わたしはおまへが見合の時に描いたといふ梅の畫を見たが、大層立派に出來てゐるネ、家へ遊びに來なさる學校の校長さんもあの畫を覽て大層褒めてゐなすつたよ」

と言ひながら眼らを轉じて、

「オヤ机の上にも何か畫があるぢやないか、今日描いたのかえ、ちよいと覽せてお吳れな」

小夜子は机の方を振返りながら、

「アラ、是れはまだ仕上げませんで、不潔うございます」

遠慮するのを姑は强ひて手に取つた。

「マア善く描いてあることネー、此の前の景色だよ、松や拜見して御覽、淡路島なんぞがそつくりだネ」

誇り顏に其畫を女中にまで覽せてゐる。

「小夜子や、斯んなに畫が上手になるには、定めし東京で立派な先生に敎へて貰つたらうネー、おまへの先生は何といふお方」

小夜子はもぢもぢして卽座に返事が出なかつたが、良あつて、

「ハイ學校で習つたばかりですが、後は鳥海の三男に直して貰ひました」

姑は婚禮の里開きの時男に會つて其人を知つてゐる。

「ぢやおまへの從兄だネ、あの髮の毛を長くした武骨らしい息子さんだらう」

小夜子「ハイ」

姑は勇の風采の變つてゐるだけに、よく記憶してゐる。

「あの息子さんは畫を描きなさるのかえ、道理で一風變つてゐると思つたよ、おまへも此方の景色を畫に描いたら東京へ送つて直して貰ふと可い」

何心無く親切に言ふ詞なれども、小夜子は後ろめたいやうに感じて、急に何とも答へなかつた、姑は女中の勝手に去りたる後、小夜子の顏を見て思ひ入つたやうに、

「小夜子や、わたしはおまへにお賴みがあるよ、あの甚三は獨りつ子で、あんまり大事に爲過ぎたものだから、我儘育ちになつて了つて、學問

なんぞの方は十分に勉强が能きなかつたよ、と云つてわたし達も自分が識らないから、小言も言へず、教へる力も無いが、何うか物の能きるお嫁さんを貰つて、少しは眼鼻の明くやうに仕込んで貰ひ度いと思つてゐたら、その願ひが叶つておまへのやうな何でも出來るお嫁さんが來たので、わたしは何より難有いと思つてゐるよ、だからおまへも畫を描いて見せるとか、面白い書籍を讀んで聞かせるとか、何でも甚三を學問の方へ引込むやうにしてお呉れ、爾うすればあの子も人中へ出て、押しも押されもしない人間になれるけれども、今の世中は財産ばかりあつても學問が能きないと、何うしても馬鹿にされるからネー」

斯う云はれて小夜子は及びも無い事と謙遜はしたれども、自分も內內その下心があつて、生涯の良人とするからには、せめて今少しでも人格を高くし度いものと思つてゐた。

此時以來小夜子は心を用ゐて良人の甚三に、學問とか美術とか、風流韻事の趣味を養はしめんと努めたけれども、更にその甲斐が無いのみか、良人の方では小夜子のあまりに堅苦しく折目正しきを窮屈に思つて、少しは酒でも飲むとか、三味線でも習ふとか、自分の遊び對手に爲度い了簡、されども小夜子は到底軟化すべくもあらず、甚三は容易に向上の見込も無く、互に睦まじくはしてゐれど、趣味性行は到底十分に一致すべくも見えなかつた。

三

兎角する内に翌年の春となつた、小夜子は年の始めから姙娠の徵候があると云ふので、良人も兩親も大悅び、ソレ大阪から醫者を呼べ、京都の大學で診て貰へと、今にも赤兒が出るやうな騷ぎを爲てゐたが、身重の身體を醫者に遠い須磨に置くのも心配だと云つて、四月半ばに神戶の本宅へ同居する事になつた。

女は姙娠すると、神經が甚だしく鋭敏になつて、餘計に物を苦勞する、況して小夜子は姙娠前から苦勞が多い、良人の前途、身の行末、殊に心を縮めるのは自分の素性の秘してある事である、實家の事も氣に懸かる、舅の事も折折は心に浮ぶ、あれを想ひ是れを想ふと、周圍の幸福も夢幻のやうに思はれて、僅な事にも神經が感激し、直ぐに淚が泄れるやうになつた。

小夜子を絕愛する姑は、いつしかその樣子に氣が付いた、是れは全く姙娠の爲めに心理狀態が一變したものだと思つたから、成るべく安靜にさせるやうと萬事に心を配つて、五月から先は夜も自分の次の間へ寢かし、自分が看護婦になつた氣で、何から何まで世話を燒く。

母は小夜子が此頃頻に淚脆くなつてゐるのを見て、何うかその氣を引立て度いと、古い錦繪を買つて來たり、繪畫の雜誌を薦めたりして、其心を慰めようとする。

「なう小夜子や、おまへは決して何事も心配お爲でないよ、初產といふものは誰しも心配なものだけれども、おまへの身體ならお產は輕いとお醫者が保證したから、モー何にも案じる事はありませんよ、お產の事ばかりぢやない、お實家の事でも何の事でも決して氣にかけたり心配したりしない方が可いよ、假令ひ何處に何んな事があつたつて、わたしが附いてゐるから決しておまへの惡いやうには爲ない、わたしはおまへを實の娘だと思つてゐるから、おまへの方でもわたしを實の親だと思つて、安心してゐるが宜いよ」

熱誠を籠めた母親の言葉を聞くと、小夜子は一層感激して、ツイそれならば斯う斯うと、身の上を明かして了ひ度い氣がするけれども、扨愈よ言ひ出さうと思ふと、急に言葉は口から出ないで、折角の機會がいつの間にか消えて了ふ。

舅の太吉もその悅びは母にも劣らない、遠か

らず初孫が見られると思つて、頻に小夜子の身を案じてゐる。

「何うだネ、男に違ひ無いかネ、左腹といふから必定男だらう、何でも彼でも男の子を産んで貰はにやならん、鳥海男爵の血を受けて、偉い男の子が生れると可いなう」

斯る言葉を聽く〳〵と小夜子は復たしても心が苦しくなつて來る、母は如才無く、

「そんなに男男と云つて騒ぐと、女を産んだ時落膽して病氣になりますよ、昔から一姫二太郎と云つて初産は女が可いとしたものです、女の子だつたら何んなに可愛らしいでせう、わたしや今から樂みでなりませんよ」

母は女の兒を、父は男の兒をと、雙方が勝手に熱望してゐるから、男女孰れになつても姫は力を落すに及ばない。

大切の上にも大切に注意して月の滿つるを待つてゐたが、其年の十月といふに小夜子は安安と玉のやうな女の兒を産んだ、懇意な學校の校長さんがその兒を見た時、昔希臘では美の系統を永遠に保存せしめん爲め、毎年一回國中より一人の美男子と美婦人とを選出し、公費を以て結婚せしめたといふが、甚三夫婦は美のモデルで、産れた此兒は雙方の美の結晶だと評した、太吉夫婦の喜悦は天の賜物を獲たやうで、東京の栗山家と鳥海家とへ、毎日のやうに親子の容體を通知した。

良人の甚三も初めて我子といふものを見たので、嬉しいやうな珍らしいやうな氣はしたけれども、お産があつて以來、小夜子も小兒も全く兩親の持物になつて了つて、自分は滅多に側へ寄る機會も無い、よしや産室へ顏を出しても、大勢の看護婦が産婦を取巻いたり幼兒を始末したり爲てゐるので、碌に口を利く折も無く、看護婦が幼兒を抱かせようとしても、年の若いだけに耻かしがつて、ちよいと抱くと直ぐに卸して了ふ、それかあらぬか甚三は夜も多く遊びに出て、歸らない晩も一二度はあつたが、母は産婦に心配させまいと、一生懸命に秘してゐた。

枕直しの濟んだ頃、東京から栗山夫人が遙遙と見舞に出て來た、姑と色色育兒の事を語り合ふ中に自分が小夜子を産んだ時は、斯うであつたの、如彼であつたのと、頻に古い經驗を談じてゐる、それは實際小夜子ならで妹の雪子を産んだ經驗であらうけれども、夫人が殊更小夜子の事を實子らしく吹聽するのは、一つには弱點を蔽はん爲め、又一つにはその姑にも何か爲めにする所があるらしい、夫人は兩三日滯在して東京に歸つた時、太吉から多額の金圓を引出して行つたと、小夜子は後に薄薄聞知つて、

「ああ、何うしてもあの事は言はれない」

と愈よ心配が深くなつた、さりながら以前と違ひ子供の産れた後は、ソレお乳よ、ソレお襁褓よと、子供の用事の忙しいのに紛れて、氣が鬱する事も寡くなつた。

美の結晶だから光子としたが可からうと校長さんに名を命けて貰つた幼兒は日一日增しに可愛らしくなつて來る、人の顏を見分けるやうになつても、大勢の人に抱かれたり負はれたりするから、誰を見ても人見知りを爲ないで、いつも嬉しさうに笑つてゐる、愛嬌の塊團だ、美の神だと、誰もその子を褒めぬものは無いが、殊に太吉夫婦は片時も自分の傍を離さないで、赤兒が立つて歩く頃まで育兒看護婦を附添はして置いた。

愛らしい光子が紅い小さな羅紗の靴を足に穿めて、衣服の褄を後ろから高く帶に挾まれ、ふくふくと柔軟い白い足を一つ一つ運んで、緣側に手を曳かれながら庭の內を歩くやうになると、母の小夜子はモー花嫁で無い、[illegible]野家の若奥樣として家庭に自分の權威を有ち、心も滿く落着いて、初めて自分の幸福を感得するやうに

なつた。

然るに突然意外な事が發つた、舅の太吉は大酒家でこそあれ、若い時から風邪一つ惹いた事の無いといふ頑強な身體、老いても益す意氣旺にして此の二三年に百萬圓近くの金を儲けたと噂される程であつたが、或日酒に醉つた後、風呂に入つて浴槽に長く沈んでゐたら、急に眼が暗くなつて、浴槽から出ると、其儘昏倒して了つた、家人は驚いて醫者よ藥よと手當を爲たが、激烈なる腦充血とて其儘遂に蘇らなかつた。

四

太吉の死後は甚三が二代目の主人となつた、店の事は幸に忠實なる老番頭がゐて、萬事を以前通りに取行ふから、今迄の事業に變動は無いけれども、お坊さん育ちの若主人が金も自由になる所から性の惡い遊び友達も毎日のやうに遣つて來て誘ひ出す、交際の爲めにと飲む酒が次第次第に量を增す、京都や大阪へ遊びに行つても、二日や三日は逗留して歸つて來ない事もあつた。

世間を知らない小夜子は、是れも交際の爲めだと云はれて、そんなものかと思つてゐたが、母親は獨りで心配して、折折我子に意見した、意見された當座は甚三も少し愼んでゐるけれども、時が過ぎると復た忘れて遊びに耽る、後には意見も利かなくなつて、甚三は公然と他所へ泊る事が多くなつた。

その癖甚三は妻の小夜子を嫌つてゐる譯でも無い、妻の美貌は誇りとする處、妻の身分は名譽とする處、阪神の間に紳士貴女の會合でもあれば、甚三は小夜子に盛裝させて同行する事を悦んでゐた、されども家庭にある時は小夜子と同棲するが何となく窮屈である、物堅い姉さんの傍にでもゐるやうで氣が詰まる、趣味は違ふし、談話は合はないし、父のゐる時分はその怒に觸れん事を懼れて、小さくなつて辛抱してゐたが、今は自分の世になつたから、妻は家の裝飾物、自分の樂みは外へ行つて索めるといふ心になつてゐる、それに數百萬圓の財產家、寢てゐて生活しても貨幣が餘つて行く身だから、今は貨幣を使ふのが何よりも面白い、毎日外の事は考へないで、いかに面白く貨幣を使つて遊ばうかと、そればかりに苦勞してゐる。

京都の祇園で一と云はれた舞妓の某を大金で落籍して三の宮の近所に圍つてあると聞知つた時は、流石に素直な小夜子も生來初めての不愉快を感じた、嫉妬の情も起つた、悔しくもなつた、良人に散散怨みでも言つて氣を晴らし度いやうな心持もした、されども飜つて考へると、自分の身の上にも弱點がある、まだ明かさない祕密がある、それを思へば人がましい嫉妬も言はれないと、小夜子は獨り心を苦めて、良人には何も言出さなかつた、さりながら心に不快の情があれば自然と色に顯はれる、甚三は家へ戻ると、小夜子がいつも浮かない顏をしてゐるので、愈よ歸るのが嫌になつて、次第に家を外にする。

翌年の春には東京の栗山家に亡き父の法事があるので、小夜子は實家から招かれてゐる、此頃は妹に軍人の養子が出來て、栗山家の家名が繼がれたが、妹にはまだ子供が無い、祖母がまだ光子を見ないから、是非とも伴れて來るやうにと言つて來た、小夜子はそれ等の手紙を見せて、東上の許諾を良人に請うたら、

「ああ往つておいでとも、悠悠往つておいで、いつまで逗留しても關はんよ」

快く承知をして呉れた、されどもその心中は好意を以て悠悠逗留せよといふのか、邪魔になるから早く歸るなといふ譯か、或は東京に遣つて置いて、後から何事か媒酌人まで申出るやうな了簡でもあるか、イヤイヤお母樣があ

るのに、良人の一分でそんな事を爲る筈も無い、矢つ張り自分の疑ふのが惡いか知らんなんぞと、斯る折にも心の煩悶は止む事が無い、自分の身體は何うやら再び宙にでも浮き出したやうな心持がした。

小夜子は姑にも法事の爲めに出京する事を物語つた、姑は此頃甚三の放蕩に陷つたのが小夜子に氣の毒でならないから、もしや小夜子が愛想を盡かして其儘東京へ往つた切りになりはしないかと懸念してゐる。

「小夜子や、おまへは東京へ行つても御法事の用が濟んだら一日も早く歸つて來てお呉れよ、エ、必然歸つて來てお呉れだらうネ、その儘東京へ留まつて了つて、モー此方へ歸らないなんぞといふやうな事はあるまいネ、わたしはそれが心配で心配でなりませんよ」

小夜子は姑の言葉を案外のやうに聽いた、自分の身に取つては思ひも寄らない懸念のやうに感じた。

「何う致しまして、お母樣、ナンでわたくしが歸らないなんぞと申しませう、法事さへ濟ませれば直ぐに歸つて參りますよ」

姑はやつと意を安んじて、

「それならば可いがネ、わたしはおまへに氣の毒で氣の毒でならないよ、甚三もあんなに馬鹿ではなかつたけれども、全く人に騙されてゐるのだネ、おまへのやうな好いお嫁さんがありながら、此節のやうに家を明けて道樂をするといふのは何事だらう、そりやモー男といふものは、先の大旦那だつて折折他所へ遊びにも行きなすつたが、家を外にして用の間を缺くといふやうな事は無かつたよ、おまへは聞いてゐるか何うだか知らないが、何でも甚三は京都の女とかを近所へ圍つて置いて、それに現を拔かしてゐるらしいネ、おまへはそれを知つてゐるかえ」

小夜子は詮方無く、

「ハイ存じて居ります、店の者の噂に聞いた事がございました」

母は小夜子のあまりに從順しきがもどかしく、

「それを知つたらおまへが默つてゐる事も無いわネ、おまへがあんまり從順しいから、甚三が却て好い氣になるのだよ、男といふものはあんまり女房に妬かれないのは張合が無いから、おまへがやかましく云つて甚三に怒りつけると可かつたのにネー、兎に角わたしが附いてゐて甚三に斯んな眞似をさせちや、おまへに申譯が無いから、誰か人を頼んで、その女の手を切らせ度いと思つてゐるがネ、おまへの不在中にそんな事をして甚三の氣が復た外へぐれても困るから、おまへが歸るまで待つてゐよう、どうぞおまへは甚三に愛想を盡かさないで東京から早く戻つて來てお呉れ」

姑は唯小夜子を失はないやうにと祈つてゐるのである、小夜子は却て、姑の心が氣の毒でならない。

「お母樣、決してモーそんなに御心配なすつて下さらない方が可うございます、京都の女とやらが旦那のお氣に入つてゐるのなら、他所へ置いて家をお明けなさるよりは、寧その事家へ引取つて、一緒に生活した方が可いと存じます、わたくしは決して嫉妬がましい事は申しません、妹と思つて世話もして遣りますから、どうぞさういふ風にお取計ひをなすつて下さい」

母は頑として不承知顏に、

「それは不可ません、そんな事は何うあつてもさせられません、よしやおまへが彼是言はないとしたところが、第一東京のお實家へ對しても申譯がありません、鳥海樣へもお詫の爲やうが無いよ、不肖わたしの家へおまへのやうな身分の高い人がお嫁に來て呉れたといふ事は、願つても能きない幸福なんだよ、先代の靈があれば

こそ、甚三だつておまへのやうな身分の人と縁組をする事が能きたけれども、自分一人の力で何をする事が能きるものかネ、そんな事を思ひもしないで、大切なおまへを差置いて、外の女に迷ふといふのは、何といふ心得違ひだらう、今に罰が當つて病氣にでもならなければ可いと思つてゐるよ―

　復しても身分の事を言はれて、小夜子は覺えず脇の下から冷汗が出た、今こそ最早隱しても居られない、愈よ言はうか、打明けようかと、躁く胸を押へて、

―モシお母様―

と急に態度を改めた。

五

　小夜子の態度の急に改まつたのに驚いて、母は不思議さうに其顏を視てゐると、小夜子は漸く思ひ切つたやうに、

―モシお母様、只今迄も幾度か申上げよう、申上げようと思つて居りまして、ツイ折が無いのでまだ申上げませんでしたが、わたくしの事を身分の高いものの樣にお思召て下すつては心苦しうございます、實の事を申上げますと、わたくしは實家の親の實子ではございません―

　さう聽いて母は始めて會得したやうに、

―道理で東京のお母さんと少しも肖た所が無いと思つた、實の親子なら肖ないやうでも他人から見ると何處かに肖た所があるものだけれども、おまへはお母さんと丸で違つてゐるから不思議だと思つてゐた、だけども東京のお母さんはおまへの事を實子のやうにお話しなさるネ―

　小夜子は母の罪に歸せぬやうと思案して、

「ハイそれは母の惡い譯でございません、母は何處までも實子としてわたくしを育てて吳れましたのです、今でもわたくしが其事を知つてゐようとは思ひますまいから、母はわたくしに對して實の親の心持で居りませうし、わたくしの方でも母に對しては實子といふ心を失ひませんけれども、先年外から聞込みましたには、わたくしは棄兒でありましたのを、父親が拾ひ上げて實子として育てて吳れたのださうです、棄てた親も今では判かつて居りますが、それはわたくしだけ知つて居りますので、母は少しも存じません、さういふ譯でございますから、鳥海男爵の姪だの、栗山少將の娘だのと、身分の事を仰しやられる毎に、わたくしは穴へも入り度いやうな念ひが致します、今迄長い間お隱し申したやうで誠に濟みませんけれども、どうぞモーわたくしの身分の事は仰しやつて下さいませんやうに願ひます―

　尙ほ自分の生母は小田原在の農民なる事、未だ一度もその生母には會はない事など、包む所無く打明けて物語つた、母は珍らし氣に聽いゐたが、却て小夜子の斟酌を打消して、

―それはおまへ、世間に隨分有る事だから、決して氣を揉むには及びませんよ、よしや實の子で無いにもしろ、實子として育てられたら、自分も實子の心持になつてゐればそれで可い譯だ、況してお母さんの方ではおまへに昔の事を知らせまいと思つて、何處までも實子のやうに僞てお在なさるのはおまへに對する慈悲といふものだネ、わたしの方ではおまへが實子であらうとも養女であらうともそんな事に頓着するのでは無い、おまへのやうな氣立が善くつて學問も出來てそれで容色まで佳いといふ三拍子揃つたお嫁さんは、日本中搜したつて外にあるまいと思つて悅んでゐるのだよ、決して決してそんな事を氣に懸けてくよくよ思ふには及びません―

　母は頻に小夜子を慰めたが、暫く何か考へて、

「だけどもネ、甚三にはまだモー少しその事を話さずに置く方が可いネ、いづれ折を見てわた

しから話を爲ようけれども、今はとんと狐に騙されてゐるやうな樣子だから、何にも聞かせない方が可いだらう、何にしろわたしはおまへばかりが賴りだから、どうぞ早く歸つて來て、何事も辛抱してお呉れ、甚三だつて滿更の馬鹿では無し、時が來れば自分でも眼が覺めて氣が付くに違ひ無いよ─

いかにもして小夜子の心を此の家より離れしめまいと努めてゐる、小夜子はその實意に感じて、此の母の爲めにはいかなる辛苦も厭ふまいと決心した。

程無く東上の支度も出來た、實家や親類への土產物は姑が自分で才覺して、一一心の籠つた品物を撰んだ、小夜子の供には若い腰元が一人と光子に付添つてゐる保母が一人、外に途中の宰領として五十ばかりになる店の番頭を商賣用かたがた東京まで送らせる事にした。

出發の當日には、姑が自分で停車場まで送つて來た、店の者も大勢來た、奉公人も見送りに來た、なれど甚三は昨夜から家へ歸つて來なかつた、その癖今日の出立は前前から知つてゐるのに。

姑も小夜子に氣の毒でならず、奉公人も口にこそ出さねど、內心で痛はしく思つてゐる、小夜子は良人に挨拶も爲ないで別れるのが心殘りである、平日は家を外にしても、今日だけは歸つて呉れさうなものと、良人の心の輕み甲斐無き事を怨めしく思つた。

小夜子は五年振で東京へ歸るのだ、汽車の窓から眺めても大阪や京都邊の郊外は、烟突が增し、家が殖え、五年の間に面目を新にしたから、東京も嘸變つてゐるだらう、お母樣やお祖母樣は別段お年も召されないか知らん、妹のお婿さんは何んな人だらう、鳥海家の人人は何うしてゐるだらう、殊に知り度きは勇の消息、神戶へ來てから文通も爲た事が無いけれども、矢つ張り御無事でゐられるかなんぞと、頻に故鄕の人人が懷かしくなつて、急行の汽車も遲いやうに感じた。

鶉　狩

一

春の初めの習ひとて二日も三日も吹通した函嶺颪の大西風は昨夜の夜半からパッタリ歇んだ、今朝は溫暖い陽が酒匂の耕地を照らして、草も木も甦つたやうに頭を擡げてゐる。

久能の山と酒匂の川との間に連なる廣濶い耕地も、農事の閒隙とて見渡す限り人影も無い、田には水が乾いて稻の切株が行儀好く竝列んでゐる中に、頰白や雀なんどといふ小鳥の群が、小さい楓葉のやうな足跡を田の土に印して我物顏に餌を漁つてゐる、堤の下には二三本宛まばらに生えてゐる野梅が、今を盛と咲いてゐる、土手の芝生には黃い蒲公英の花も見える。

酒匂の川下の土手傳ひに此の耕地へ出て來た鶉狩の若者二人、孰れも半纏股引の身輕な扮裝にて、一人の年長けた男は竹の棒で卷いた鶉網を肩に擔いでゐる、十八九にもならうかと覺しき若い方の男は片手に地の厚い麻の袋を提げてゐるが、まだ獲物が無いと見えて袋は輕い、此の男は耕地へ降りると、先に進んで田の畦路を、そろりそろりと步いてゐる、網持つた男は外の畦へ進んで行く。

二人の背後から興あり顏に跟いて來るのは鳥海の勇、今日は此の鶉狩の獵師を一日雇ひ、鶉を網伏せにして生きた儘別莊へ持歸り、病氣保養に來てゐる母親の食膳にも供し、又は自分の畫の材料にも爲る所存、獵師と同じ樣な脚袢草鞋に身を固め、田でも畦でも會釋無く步いてゐるが、變つた土地へ來ると、鳥を搜すよりも先づ眼に付くは眼前の風色。

此處も却却面白い景色だな、函根や久能の連

山が近く眉端に接して、富岳が高く雲際に聳えてゐる、先づ一つスケッチして置かうか」
手に携へたるスケッチブックを擴げて、立ちながら筆を走らしてゐると、ツイ足の先の草叢から、鶉が二三羽バタバタと飛出した、驚いた勇は筆を停めて鶉の飛んで行く姿を目送してゐる、近い畦を歩いてゐた若い男が殘念さうに、
「旦那、今のは何うしたんです、鶉の居る事を知らなかつたんですか」
勇は宛も鶉に侮辱されたやうな氣がして失望顔、
「ウム、此つとも知らなかつた、あんな近い處に豈夫鶉が居ようとは思はなかつた、おまへ達の眼に留まれば、悉皆捕れたらうになあ、惜しい事を爲たよ」
若者は勿體らしく、
「何處に鶉がゐるか知れませんから、旦那も歩きながら氣を付けて下さい、何でも鶉の新しい糞があつたら、その近所には必然居ますよ」
勇はウムよしよしと承知して、スケッチを手早く切上げ、今度は鶉を見付けようと、細い畦道を拔足して、物でも盜むやうに歩いて行つた、道の半町程進むと、畦の脇の枯芝の中に同じやうな羽色した鶉が蟲か何か拾つてゐる姿を見付け、今度こそ獲物ござんなれと、再び拔足して後方へ戻り、前の若者を手招ぎして、內證のやうな低聲、
「ソラ居るよ、彼處に」
指して示す途端、鶉はパッと飛立つた、若者は惜しさうに見送つたが踵を返して勇の方へ進んで來た、
「旦那、鶉を見付けたつて、アレ彼處になんて、指をさしたり、顏を向けたりしちやいけません、鶉つていふ奴は却却猾い鳥で、人が知らずに步いてゐりや、鳥の方で知つてゐても足元へ來るまで逃げやあしません、そのかはり、人が見付けて來たと思ふと、遠くにゐても直ぐに飛び立つて了ひます、だから鶉を捕るには、決して物を搜すやうな風をして、彼方を見たり此方を見たりしてはいけません、何でも顏は眞直に前方を向いて、脇目も振らないで步きながら、橫目でちよいちよいと鶉を見付けるんです、もしや鶉が居たと思つたら、猶更顏をそつちへ向けないで、何處までも知らん顏して、クルリと戾つて來るんです、さうしてから遠方へ行つて網を擴げて、畦の向うから忍び寄つてバタリと伏せるんですが、その前に此方が鶉を見ちや、モウ迚も捕れません、見さへしなけりや、少し位網の音がしても人の聲がしても、奴はヅーヅーしく構へてゐて、容易な事ぢや逃げやあしません、だから鶉は怜悧なやうで馬鹿なものです」
說明を聽いて勇は何事にも專門的の知識が要ると思つて感心した、
「サア僕が先へ行くと、却て邪魔になるなあ、今度はおまへ達に見付けて貰つて、その捕る所を見物しよう」
若者を先に遣つて、その後からのそりのそりと隨いて行つた、外の小鳥は多く見えるけれども、鶉は容易く眼に留まらない、勇は土手の上に松の大木が七八本枝を翳し、其下に灌木の叢生してゐる樣子を見て、
「どうだネ、あんな處に鶉が居さうなもんだ、松が上から覆さつて、いかにも鶉が好きさうな處ぢやないか」
若者は呵呵と笑つた。
「旦那、如彼いふ高い松の木の下なんぞに、決して鶉の居る事はありません、ナゼだと申すと、高い木の上へは鷹や隼が來て止まりますから、それが怖いので、鶉があんな處へ寄付きません、何でも鶉は高い木の無いやうな處にゐるもんです」

勇は「ー我が推測の外れるに失望して、

「矢っ張り僕には鷸捜しより、畫を描く方が勝手で宜い」

畦路から上手へ上つて、松の根に腰かけ、卷烟草を服ひながら、何處の景色を寫さうかと、筆を把つて紙を擴げた。

忽ち看る若い男が急に畦路から後方へ戻つて、網持つ男を手招きした、やがて二人は竹に捲いた網を手速く擴げ、雙方へ分れて竹の柄を持つた、幅五尺に長さ八間程ある細長い網を高く擎げて二人の獵師は田の中を進みながら、上手の脇の畦へ近寄るが早いか、バタリと網を畦越しに仆した、網の脇からパッと飛立つ二三羽の鷸、梅花を掠めて土手の彼方へ飛んで行く、網の下にも伏せられた鷸が、羽叩きして網をむくりむくりと突上げてゐる、遂に此の體を見た勇は手を拍つて悦んだが、急に筆を走らしてその光景を寫した。

やがて若い獵師は麻の袋に獲物を納れて得意顏に勇の側へ持つて來た。

「旦那、惜しい事をしましたぜ、六羽も居たのをそんなにゐると知りませんで、逆つかりしたもんだから三羽逃がしました、もつと先の方を伏せりや六羽ともそつくり捕れましたのに」

勇はまだ筆を動かしながら、

「イヤ大手柄、大手柄、捕つたのも巧いが、逃げたのも面白い、三羽の鷸が網を遁れて夢中で飛出した拍子に梅の枝に突當つて、花をバラバラと散らした工合なんぞは實に獲難い好畫題だ」

藝術家は斯る場合に俗人の得知らぬ樂みがある、獵師どもは再び網を以前の樣に捲いて、耕地を隈無く捜したが、秋と違つて今は鷸も狡くなり、姿を見せても容易く網には入らない、午時頃までかかつて漸く十羽程を狩得たばかりだ、若者どもは獲物の寡きを不平顏に、

「旦那、此の耕地はモー駄目ですから、もつと上へ行つて今井の耕地を捜しませう、今井には事によると、面白い鷸があるかも知れません」

勇は今井と聞いて權六の事を想ひ出した。

「ウム今井か、モー此の先の村だな、ぢや其處へ行つて見よう」

獵師は先に立つて土手の上を川上へ進んで行く、勇は俄に感慨が胸に生じて、足の運びも自然と遲くなつた。

忘れもしない五年以前に、小夜子孃の素性を尋ねて、その實否を探る爲めに此の今井村へ來た事がある、小夜子に示さんとて、權六の家もスケッチした、孃の生みの親といふ權六の姉の寫眞をも貰つて來た、當時の苦心も皆な水の泡となつて、一夜狂風花狼藉、綠葉成レ陰子滿レ枝と、古人の恨みを今眼前に看るやうな思ひがする。

勇は小夜子孃が結婚した後、當分は茫然と氣抜けしたやうになつて、好きな藝術も手に付かなかつた、勇の心を知つてゐる母親は、早く外の嫁を捜して貰つたら可からうと勸めたけれども、勇は毛頭外の人を貰ふやうな氣も無かつた、その内に兄夫婦が東京へ轉任になつて戻つて來るし、自分も東京のやうな雜沓の地に居るのが可厭になつて、父母に請うて我が畫室を酒匂の別莊内へ移した、一年と過ぎ二年と經つ中に、自分の心も漸く落着いて、再び藝術に沒頭する事となつたが、事に觸れ物に感じて、遂に小夜子の事を想ふと、無限の恨み消するに由無く、自分一人が不行屆の爲めに、叔父少將の委託に背いて、孃を溝壑に陷れたやうな心地がする、東西に別れて以來、交通もせず消息も聞かないけれども、大阪の新聞が兄の元へ届くので、折折銀時の家の事を新聞で知つた、大吉の死後甚三が親の遺産を湯水の樣に費つて狭斜の巷に豪遊する事も、每度新聞の三面に現はれる、あ

あゝ愈よ彼の人の不幸、その心中は如何であらうと竊に心を痛めてゐたが、今回叔父の法要に勇も東京へ出て菩提所に參會し、久し振で小夜子の顏を見た、花のやうな小夜子も昔の俤は漸く失せて、今は愁多き人となつてゐる、無慘、是れ果して誰の罪と、愈よ自分の小夜子を救ひ得ざりし事が腑甲斐無く思はれた。

勇の母は冬の初めから激しい僂麻質斯か發つて保養の爲めに酒匂へ來てゐて、今度の法要にも參り會はなかつた、小夜子は東京の用事を濟ましたら、神戸へ歸りがけに酒匂へ寄つて伯母樣をお見舞申すと云つてゐた。

小夜子が來たら何うしよう、我が書室へでも誘つて昔の事を語り合はうか、イヤイヤ人の妻に對して、迂濶な事を爲ては成らぬ、寧そ知らぬ顏して路傍の人のやうに別れようか、とは云へ互に顏を見ては心の感慨が急に消えまい、後に思ひが殘つては却て雙方の爲めにもならぬ、小夜子の來るのは我が母親を見舞ふ爲めで、自分に用事のある譯で無いから、成るたけ遇はぬ方が優しか知らんと、心は種種に懊惱して今日は鶉狩に出て來たのである。

今井村に近づく程步は舊時の感想が湧き出して、權六の家といふものを閑却する事が能きなくなつた、ちよいと立寄つて茶でも飲まうか、もしも小夜子の事を訊かれたら却て返答に困るだらう、寄らずに此儘行き過ぎようかと、土手の上の岐れ路に立つて、暫く向うを見てゐると、青青と伸びた麥畠の彼方から、日頃の百姓姿にも似ず、手織木綿の袢纏や綿入を着て、改まつた風して此方へ出て來たのは慥に權六である、勇は先に行く獵師達に聲かけて、

「おまへ達は僕に構はず獵地へ行つて鳥を捕つてお吳れ、僕は今用のある人に逢つて行くから」

二人を遣り過ごして、物珍らしさうに權六の來るのを待つてゐた。

二

權六は端無くも土手の上に勇の立つてゐる姿を見て、嬉しさうに足を速めて傍へ進んで來た。

「モシ若樣は何うして此處に在らつしやいます、わたくしは今御別莊へ出ませうと思つて參りました」

勇は權六の顏に深い憂色のあるを認めた。

「僕は鶉捕りに來たんだが、おまへさんは何で僕の家へ來る心算なんだ」

權六は土手の上に登つて先づ四邊を見廻した、四望廣濶な土手の上、外に聽く人は無いけれども、權六は木の下石の陰まで透かし見て、

「實は旦那樣に少少お願ひがございます、それと申すのはわたくしの姉が此頃病氣になつて東京から歸つて居りまして」

勇は小夜子の親の病氣と聞いて眉を顰めた。

「あのお蘇さんといふ人だネ、何んな病氣」

權六は沈んだ語調で、

「何うも病氣の質が惡いので困ります、實は姉もお屋敷のお孃樣が四年程前にお嫁入をなさいましたから、自分もお暇を戴かうと申して居りましたが、マアマアモー二三年も勤めてゐて吳れろと御親切に仰しやるので、ツイ其儘御奉公して居りますと、御屋敷の御二男樣がまだ十八九でお若いのに、何ういふ譯ですか肺病におなりで、一年程お煩ひなすつてお死去になりました、その御病中姉が看護婦代りに御看病申上げたさうですが、いつの間に傳染つたものか、姉もトウトウその病氣になりまして、最初の内はお屋敷から病院へ入れて下さいましたけれども、何うしても快くなりません、自分でも何うせ助からないものなら、故郷へ歸つて死に度いと申しますので、わたくしが先月の初めに東京の病院へ行つて、漸との事で姉を家まで伴れて參りました、お屋敷でも氣の毒だと仰し

やつて十分に手當をして下さいますし、姉もお給金を澤山儲めて居りますから、金に明かしても癒し度いと、小田原から三人もお醫者を呼んで診て貰ひますけれども、些つとも功能がありませんで、一日増しに重くなるばかり、昨日いらしつたお醫者のお話には、モー十日は保つか保たないか知れないと仰しやいました」

言ひながら眼を潤ませてゐる、勇は愈よ驚いて、

「そんなに惡いのかネ、何うかして助け度いな、早い内なら鶉の卵が非常に效くけれども、此の邊に鶉を澤山飼つてゐる人は無いか知らん、生きた鶉なら今捕つたのがあるけれども、鶉の肉では役に立たん、鶉の卵を一日に九つ位飲むと、輕い肺病は其儘癒るし、重い病人でも身體に力が付いて、十日といふ所は一月位保つ事もあるよ」

權六は耳よりな事と嬉しさうに、

「ハア鶉の卵がそんなに效きますか、鶉は隨分飼つてゐる人もありますから、早速卵を搜して飲ませませう、ですが旦那樣、當人はモー自分で全然諦めて居ります、今度の病氣はモー迚も助からないから、高い藥なんぞを飲まなくつても可いと申して居ります、姉は觀音樣が信心で、死ねば觀音樣のお側へ行かれると、毎日口の中でお念佛ばかり申してゐますが、熱でも出てうとうと爲ますと、寢言のやうにきい坊きい坊と昔の子供の名を呼ぶ事がございます、口にこそ出しませんが、心の中では何んなにかあの子の事を思つてゐるのでございませう、東京にゐた時は自分で遠慮して顏を見にも行きませんでしたが、今になつて見ると死ぬ前に一目でも顏が見度いでございませう、わたくしも何うかして、せめては寫眞でも見せて遣り度いと思ひます、さうしたら姉も悦んで、安心して死ぬ事が能きませう、實はそのお寫眞を拜借に是れから出ようと思つたのでございます」

律義者の權六が姉を思ふの一心から涙ながらに頼んだ、勇は坐ろに同情の念を禁じ得なかつた、是れが自分の望みの通り、彼の時小夜子孃を我が方へ引取つてゐたら、斯うならぬ前にその母親に面會させ、病氣と聞いたら傍へ遣つて緩緩看病もさせたものを、或は早く母親に奉公を止めさせてそんな病氣に罹るのを免れしめる事が能きたかも知れない、何れにしても氣の毒なのはその母親と、自分が何やら濟まないやうに感じた。

「それは無理も無いネ、二十五年が間、何處に何うしてゐると知つてゐながら、一度も顏を見ずにゐるのだから、嘸戀しいとも懷かしいとも思ふだらう、寫眞は何枚もあるから、何時でも貸して進げるがネ、その小夜子さんは親の法事で此頃東京へ出てゐて、今日か明日には酒匂へ來る事になつてゐるよ」

權六は力を得たやうに、

「ぢや小夜子樣が御別莊へ御入來になりますか」

勇「ウム、僕の母の病氣見舞に必ず來るよ」

權六は思はず前へ乘り出した、最初は言ひ難さうにもぢもぢして口籠つてゐたが、漸く思ひ切つて、

「如何でございませう旦那樣、決して小夜子樣の御迷惑になるやうな事は致しませんが、御別莊の近所へ姉を伴れて參つて、他所ながらお顏を姉に見せては惡うございませうか」

勇は不承顏に、

「だつてもそんな大病人を何うして酒匂まで伴れて來るね、もしや途中で變事でもあつたら大變だ」

權六は姉の心中を察してゐる。

「一俥へ載せても、わたくしが負つても、何うにでもして參ります、小夜子樣のお顏を一度でも

見る事が能きれば、其儘死んでも爺は本望でございませう」

勇は暫く沈吟して、

「おや僕が何とか取計らつて、それとなく逢はせるやうな工夫をしよう、兎も角も小夜子さんが來たら、一應相談しておまへさんの所へ何とか傭う言つて進げるよ」

權六はその厚意を喜んで心から勇に感謝した、折から酒匂の土手傳ひに川下の方から急いで來た別莊の留守番老爺、勇の姿を遙に認めて走り寄り、

「若樣、銀野樣の奥樣がいらつしやいましたから、お早くお歸りなさいましつて、大奥樣が仰しやいました」

三

此日小夜子は東京を辭して神戸へ歸る途すがら、國府津から汽車を降りて鳥海家の別莊へ立寄つたのである、伯母の男爵夫人が僂痲質斯で足が惡く、酒匂に出養生してゐて東京の法要にも出席しなかつたから、小夜子は伯母の病氣を見舞ふ爲めに、子供や女中を引伴れて此の別莊へ着いたのである。

伯母の病氣は案じたよりも快くなつて、今は褥の上に臥たり起きたり氣任せにしてゐるが、小夜子が來たので急に元氣づき、奉公人に指圖して、ソレお菓子よ御馳走よと頻に歡待の準備をする、小夜子は却て氣の毒に思ひ、

「モー決して御構ひ下さいますな、實は今夜の夜汽車に乘つて參らうと思ひますから」

伯母は本意無氣に、

「それは復たあんまり性急だネ、せめて今夜だけ泊つて明日の朝お發ちなさいよ、その内には勇も戻つて來るから」

小夜子は此の懷かしい別莊を早く去り度い氣は無けれども、長く居るほど却て心が苦しくなる、今出發を急ぐのは自分の心が此の別莊へ引付けられて何か深淵へ沈んで行きさうな氣がするからである。

「一晩位御厄介になり度うございますが、神戸の母から再三の手紙で、一日も早く歸るやうにと申して參りますから」

伯母は内内神戸の樣子を聞知つてゐる。

「お母樣は大層好いお方ださうだネ」

小夜子「ハイ、誠にわたくしを優しくして呉れまして、東京へ參りましても每日手紙を寄越します」

伯母「それは何より仕合せだネ、だけども一日位此に逗留したつて、お母樣も御心配はなさるまい、わたしもおまへさんに篤くり話をして置き度い事もあるから、神戸へは電報を打つて、今夜だけは泊つて下さいよ」

餘儀無い賴みに小夜子も辭み難く、それでは今夜一泊して、明日出發する事にと一決した、伯母は頻に小夜子を懷かしがつて、十日も二十日も逗留して貰ひ度いやうな心持。

「ネー小夜子さん、わたしが先年此の別莊で大病になつた時は、おまへさんに看病して貰つたつけネー、あの時のやうにわたしは嬉しいと思つた事がありませんよ」

坐ろに昔を語り出すと、小夜子も心に當時の情調が油然として湧いて來た。勇に伴れられて始めて此の別莊へ來たのもその時である、勇と共に海岸へ出て酒匂の川の風景を合作に寫したのもあの時である、あの時の嬉しさは今も尚ほ忘れないなんぞと思ふと、現在の身分も境遇も打忘れて、昔此の鳥海家に寄寓してゐた時のやうな心持になつた、小夜子が今迄の生涯に、其時分ほど氣樂で面白い事は無かつた、伯母の慈愛と勇の親切に包まれて、春の園に延年の遊びでもしてゐるやうな境涯であつた、今更昔が懷かしい、再びあの時代に還り度いと云ふやうな氣がして來た。

「ホントに今度もわたくしに暇さへあります。と、緩緩此に逗留して御看病を致し度いのでございますけれどもネー」

と云ふ心はお世辭でもお追從でも無い、全く赤心より出たのである、伯母は言ひ知れぬ情味を含んだ語氣で、

「ネー小夜子さんや、今更斯んな事を言ふと愚癡になつてお氣の毒だけれども、わたしはおまへさんを家へ引取る事が能きなくつて、何んなに殘念だつたか知れないよ、あの時の事情は勇から詳しく聞いて、わたしはおまへさんの爲めに泣きましたよ、勇だつてあの當座は氣拔けがした人のやうになつて病氣でも發らなければ可いと心配しましたよ」

其事を言はれると小夜子は今更考を探られるやうな心地がして、返事も能きずに涙ぐまれてゐる、伯母もその心中を察して多くは語らず、

「今ぢやおまへさんもあんな可愛いお子さんまで出來てゐるから、別に案じるやうな事はあるまいけれども、併し栗山のお母樣はあんな人だし、おまへさんも中に立つて隨分心の苦しい事があるでせう、もしも此の先思ひに餘るやうな事があつたら、決して遠慮しないでわたしの處へさう言つてお寄越しなさいよ、わたしはおまへさんの性質のことからよく知つてゐるから、今までは默つてゐたけれども、おまへさんを思ふ心は栗山のお母樣に優してゐますよ、眞實におまへさんの爲めを思つてゐるものはわたしと勇の外にあるまい、だからおまへさんもわたしの家をお實家だと思つてお在なさいよ、わたしを親だと思つて何事も遠慮無く相談して下さいよ、何事があつてもわたし達が引受けるから決して獨りで心配しては不可ませんよ」

何か未來でも察したやうに懇懇と我が心を語つた、小夜子は伯母の心を聞いて、今更嬉しく感じたが、それを感ずるほど倚ほ心が引込まれるやうになつて、却て苦痛が增して來る、小夜子は生中に人の情けも親切も感じない方が氣樂なのである、伯母の事も忘れ度い、勇の事も忘れ度い、過去も憶はない、未來も想はない、唯現在の境遇に心を安んじて、それで滿足するやうな氣になり度いのである。

「伯母樣、御親切は難有うございますが、決してモーお案じ下さいますな、わたくしは何にも心配がございませんから」

嫁入先の事情を彼是云はぬが女の嗜み、小夜子は何人にも異樣らしい事を洩らした事が無い、伯母はその心の殊勝なるに感じて、愈よ懷かしく、

「ああ、ホントに家へ引取つてあつたらネー」

名花は他人の園に咲く、今更移す由もがな。

忽ち庭先からちよこちよこと緣側へ駈けて來た愛らしい光子が、首を伸ばして障子の内を覗きながら、

「母ちやま、早く來て御覽なちやい、ウジラの生きたのがたくちやん捕れてよ」

四

名工の細工した人形に魂を入れて邪念無く動いてゐるやうな愛らしい光子が、椽端に立つて頻に母親を呼んでゐるので、小夜子は伯母に會釋して椽側に立出でた、光子は明珠を並べたやうな眼を擧げて、嬉しさうに母の顏を眺め、

「母ちやま、早く來て頂戴よ」

と催促する、小夜子は沓脱石の上にある庭下駄を穿いて芝生に降りた、光子は走り寄つて、小さな手で母の袖を握り、先に立つて裏門の方へ案內する、庭から離つた裏手の砂地に、今しも鶉狩から歸つた勇が、二人の下僕を相手にして、獲物の袋から鶉籠へ捕つた鶉を移してゐる。

小夜子は勇の顏を見ると、遠方から默つて會釋はしたが、何やら氣が咎めるやうで、直ぐに

その前へ進み兼ねてゐると、頑是無い光子はグングンと母の手を引張つて、鶉籠の前まで伴れて行つた。
「コラ斯んなにたあんとゐてよ」
小夜子も珍らしさうに鶉を眺めて、
「よく斯んなに澤山捕れましたネ」
勇は空虚になつた袋を獵師に渡しながら、
「十三羽捕れましたよ、晩には此の鶉を御馳走しませう」
小夜子「アラお止し遊ばせ、生きてゐるものを、可哀想ぢやございませんか」
勇「ナニ、何うせ母にも喫べさせる所存です」
四角な平たい田舎風の鶉籠の中には、鶉がゾロゾロと連立つて頻に出口を索めてゐるが、鶉の背が籠の上部の細い丸竹を摺る毎に、竹がガラガラと廻轉つて、宛ら人の手で算盤を撫でるやうな音がする、光子は面白がつて頻に觀てゐたが、鶉が動かなくなると竹が鳴らないので、手で竹の上をざらざらと撫でると、鶉が驚いて復たゾロゾロと動き出す、小夜子は不審顏に、
「此の籠は大層淺いつて背中が閊へますから窮屈さうですネ」
勇は横目に光子の愛らし氣な態を眺めながら、
「澤山納れて置くには斯ういふ籠でないと、鶉が飛んだり荒れたりして却て弱ります、此の籠では背中が竹に當りますと、竹の方でクルクル轉りますから、鶉の頭を傷めません、然し是れでは光子さんが鳥を看るに都合が悪い、オー老爺、僕の書室へ行つて先に鶉の納れてあつた脊の高い籠を持つて來てお見れ」
老爺に命じて都風の鶉籠を取寄せた、勇は多く納れてある籠から形の佳き鳥を一羽抜き出してその籠へ納れた。
「光子ちやん、斯うするとよく見えますよ、是れはあなたに進げませう」
光子は嬉しさうに自分の前へ引寄せて、
「母ちやま、わたしのよ、家へ持つて歸りませう」
小夜子「マア可いことネー、だけども汽車で持つて行くのは大變よ」
光子の背後に立つてゐる繼母が知つた顏に、
「生物を汽車へ載せると罰金ですよ、別に預けなくつちやなりませんネー」
光子は不承知顏、
「アラ持つて行からよー、母ちやま、持つて行つても可いでせう」
獵師に賃錢など拂つて鶉籠を老爺に始末させてゐた勇は此の問答を聞いて、自分の迂つかり氣の付かなかつた事を後悔した。
「さうですネー、光子さんに進げても神戸まで持つて行くのは大變ですネー、是れは此にゐなさる中の玩具で、神戸へ持つて歸るには、僕が今鶉の畫を描いて進げませう、此の鶉の通りな畫を描いて進げるから、光子さん、その籠を持つて僕の書室までお入來なさい」
自ら先に立つて人人を我が書室へ案内した、繼母が鶉籠を手に提げると、光子は一緒に籠の紐を握つてゐる、小夜子はその後ろから隨いて來て、
「マア可いことネー、小父さまが鶉の畫を描いて下さるつて、畫の方が何んなに善いか知れませんよ」
庭の先をぐるりと廻ると、濱に面した片隅に、小松の林を四方に取込めて、勇の書室が建てられてある、位置は變つてゐれどその構造は東京に在つた時と寸分違はぬ、小夜子は遙にそれを望んで、端なくも昔の事が憶ひ出された、朝な夕な此の書室に通つて、勇さんから熱心に畫を習つたものを。
勇は先に進み入つて一同を書室へ招き入れた、無邪氣な光子は新しい場處に來たのが何よ

りも珍らしく、面白さうに室内を見廻り、

「母ちやま、畫がたあんとあつてネ、アラ彼處にも此方にも」

畫室の四方には種々の畫が掲げてある、小夜子は一一心を留めて丁寧に眺めた、五年以前の作に比ぶれば驚くべき進歩の跡を示してゐる、愧かしや我身は全く筆を擲つて、今は昔にも及ばぬものを。

勇は小さな紙を展べて鶉の畫を描き出した、光子は前へ顔を出して畫を描く態を面白さうに眺めてゐる、假初の筆ながら鶉は忽ち紙上に躍如として、貰つた光子よりも母の小夜子が内心非常に悦んだ。

畫を貰つて了ふと、光子は畫室の中が鬱陶しくなつたと見えて、

「母ちやま、お庭へ行きませう、お舟が見えてよ」

鶉の畫を片手に持つて、ズンズン入口の方へ出て行つた、乳母は小夜子を顧みて、

「此の鶉畫は何う致しませう」

小夜子よりも勇が、

「緣側へ持つて行つてお置きなさい、復た光子さんが御所望になさるでせう」

乳母は畫を提げて光子と共に出て行つた、小夜子も續いて立たうとすると、

「小夜子さん、少し待つて下さい」

勇が急に制したので、小夜子はハッと胸が躍つた、何を言はれるだらう、何んな事を語り出されるだらうと、不安の色を顔に示して默つてゐた、勇も小夜子と差向ひで言葉を交ふるは後ろめたくあれど、差迫つた用事とて躊躇しても居られず、

「小夜子さん、急にあなたと御相談しなければならん事があるのですがネ、實は今日僕は今井村へ鶉狩に行つて、あの權六さんといふ人に遇ひましたよ、即ち血縁から云ふとあなたの叔父さんに當る人です、その權六さんは丁度僕の家へ訪ねて來ようとする所でしたが、その用向を訊くと、自分の姉さん、即ちあなたを生んだお藤さんといふ人が東京で重病になつて、今は家へ戻つて居るが、餘程病氣が重くなつてゐるといふ事です」

聽いてゐる小夜子は思はず眼が潤んだ、顔は知らねど、生みの親の病氣と聞いては心が痛く案じられ、思はず前へ身を寄せて、

「急に變りさうも無いでせうか」

勇は告ぐるも氣の毒さうに、

「左様、醫者の意見ではモー十日保つか保たないかと云ふ場合ださうです、本人は諦めてゐて少しも愚痴は云はないさうですが、寝言や譫語に每度あなたの事を言ひますから、口でこそ何とも言はないけれども、心の中では嘸あなたを戀しがつてゐるだらう、東京にゐた時は自分で辛抱してあなたの顔も見なかつたけれども、今になつたら唯一目でも逢ひ度いだらう、せめてはあなたの寫眞でも見せて遣り度いと、權六さんは寫眞を借りる爲めに僕の家へ來ようとしたのです」

小夜子は悵然として眼を連瞬いた、

「何うかして助ける工夫は無いものでせうか、まだ年齢もそれほどに老つてゐる譯では無し、何とかしたら癒る事がありさうなものですネ」

「さあ、僕も鶉の卵で生命を延ばす方法は話しましたが、助かるか助からないかは判かりません、それに就て小夜子さん、僕も寫眞を借すのは容易いが、小夜子さんが一兩日中に僕の別莊へ來なさる筈だと申したら、權六さんは非常に悦んで、それならば病人を自分が負つても、別莊の近所へ伴れて行つて、他所ながらあなたの顔を見せ度いと斯う言ひます、僕もその心中を無理とは思はんが、マア小夜子さんと相談して何とか好いやうに取計らはうと云つて置きま

した、小夜子さん、あなたは何うしたら可いとお思ひになりますか」

小夜子は急に答へなかつた、胸の中には幾多の感情が混雜して答へる事が能きなかつたのである、先年勇さんが我身の爲めに今井村を詮議して東京へ歸られた時、その親人の人となりを詳しく告けられたから、心窃に戀しいと思つてゐた、折があつたら一度でも顏を見度いと思つてゐた、殊に我身は小さい時から眞の親の情愛を知らぬ、人の慈愛や親切は受けてゐるが、切つても切れぬ肉縁の、温い血が通つてゐる親子の情の眞味を知らぬ、自由になるなら生みの親に傅いて、三日でも四日でも心の儘に孝行がして見度い、我身の前途は暗黑だ、我身の運命は何うなるか判からぬ、今若し生みの親に逢つて置かねば、再び顏見る折もあるまい、是れは出發を延ばしても是非その親に逢はねばならぬと、斷然と心を決した。

「勇さん、それなら明日の朝でも、わたくしがその今井村へ訪ねて行つて、生みの親といふ人に會ひませう」

緊張してゐるやうな語氣で言つた、勇は意外に感じて、

「さうなされば先方は嘸悦ぶでせうが、併し迂つかりした事を爲て、人に知れると困りますネー」

小夜子は悄然として歎息した、今迄は他所人のやうに斟酌してゐた勇に向つて、今はゆくり無く昔のやうな心持になり、胸中無量の感慨を與へるとも無く語り出した。

「勇さん、わたくしはいつまでも大罪を犯してゐるやうに、自分の素性が露はれはしないかと、それをビクビク心配してゐるのが何よりも苦しうございます、わたくしは決して名譽も欲しくはありません、富貴榮華も望みではありません、唯天下晴れて自分の素性を、棄兒の果だ、百姓の子だと名乘るやうになつたら、嘸心が安まるだらうと思ひます、姑には東京へ來る前にわたくしの素性を明かして置きました、よしやわたくしが生みの親に逢つた爲め此の先の運命が何んなに變化しませうとも、決して殘念とは思ひません、わたくしはモー何うなつても關はん身體ですもの—」

その心には幾分か自棄の氣を含んでゐる、現在の境遇に落着かないで、運命の變化を待つてゐるやうな語氣が見える、勇は愈よその心中を哀れに思ひながら、

「それにしてもマア、東京へ對しても公然と行く譯になりませんが、幸ひ明日は多古の觀音様の縁日ですから、僕は母の平癒を願ふ爲め參詣に行くと言出します、あなたも伯母様の爲めに一緒に參詣し度いと仰しやい、其時僕は道が惡いから子供は行かれぬとか何とか言つて、あなたと二人で先づ多古の觀音様へ參詣して、その歸途に今井村へ寄る事にしませう」

頻に相談してゐる處へ、庭口から戻つて來た光子が愛らしい聲で、

「母ちやま、まだいらつちやらないのう」

對面

一

田舍とはいひながら今日は觀音様の御縁日とて、多古の村には朝の内から相應の人出がある。

平生は寂寞として鶏や鴉が人も無氣に餌を啄んでゐる廣い境内に、田舍廻りの見世物小屋が寸地も無き程立並び、門の内から道を挾んで、玩具や食物の大道店が御堂の前まで列なつてゐる、飴や煎餅を口に咬へて嬉嬉として遊んでゐるのは村の子供、見世物小屋の前を一つ一つ素見して看板の良否を品評して歩く子守達、信心參りの婆さん達は三三五五と御堂へ畀つて行

く、お札を戴くものもある、お蠟燭を上げるものもある、門の内から御堂の間を往きつ戻りつしてお百度を踏んでゐる若い女は、誰か良人の病氣平癒を祈るのでもあらう、參詣の人は引きも切らない、鰐口も絶えず鳴つてゐる、賽錢箱もバラバラと音がしてゐる、何さま近郷に名高い觀音樣の御緣日とて、鎭守樣の祭禮よりも遙に增した賑ひだ。

忽ち小田原の方面から勢ひ込んで駈けて來た二輛の人力車は門の前に梶棒を下した、前の車より立出でたのは今日に限つて珍らしく背廣の洋服を着てゐれど、髮も髭も蓬々として仙人然たる良海男、後の車から降りた小夜子は濃い紫の細かい矢絣の衣服に秋の七草を織り出した淺色の帶、東京で結つて來た丸髷の形好く、襟も首も水際立つて人の目に付く優美な姿、日は照らねど蝙蝠傘で顏を隱すやうにして、勇の後から門の内へ入つたが、物賣る人も群衆も皆な眼を瞠つて此の二人に注視した。

二人は御堂に昇つて觀音樣を禮拜した後、小夜子は御堂の緣に立つて眼前の風光を見渡すと、酒匂川沿岸の平野は前に展開して、足柄松田の連山自から塀を繞らせる如く、時しも今を盛りの稻花が黄金色として綠樹の間に燦光を放つてゐる。

「マア、靜閑で良い處でございますネー」

小夜子は天性として斯る閑寂の地を好むのである、神戸のやうな繁華雜沓の地は心から擇ぶ處で無い、どうか生涯を送るなら風光明媚な田園の地こそ望ましいと、娘の時代には斯う思つてゐた事もあつた、殊に小夜子は此の邊こそ自分の生れた處であると思ふと、一層懷かしいやうに感ぜらるる、もしや自分が棄てられもせず、拾はれもせず、此に生れ此に育ちて、今迄過して來たとしたら、今は何んな運命になつてゐるだらうなんぞと考へると、何うやら自分の心が此の風光の中へ引込まれて行くやうである。

「小夜子さん、向うに見えるあの村が今井ですよ、昔洪水のあつた時、あの村の者は大抵此の觀音堂へ遁れたと云ひますから、あなたも一」

と云ひかけて勇は急に四邊を顧みながら、

「此の觀音樣のお世話になつた事がお有りのですネー」

小夜子は首肯いて後ろを振返り、

「ホントによくお禮を申さなければなりませんネー」

再び御堂を拜して慇懃に内心を感謝した、

やがて勇は時刻が移るとて小夜子を促し、御堂を下つて門前の俥に乘つたが、門内の群衆はその後姿を見送つて、

「あれは何處の奧樣だんべい」

「小田原の御別莊から來さしつたに違えねい」

「アーニ、あれは酒匂の御別莊だよ、あの髮の毛の長い旦那は、よく酒匂の濱で見かけるもの」

各人に推測を下してゐるのは、此の近邊に珍らしい風采容貌とて、鶴が泥田へ舞ひ下りたやうに感じたのであらう。

車上の勇は小夜子の姿があまりに人目を惹き易く、此儘に今井村へ俥を入れては却て後の災になるかも知れずと心配して、今井村への曲り角で急に俥を停めた。

「オイ車夫、おまへ達は此處に待つてゐてお吳れ、僕等はちよいと此の村へ寄つて用を達して來るから」

車夫どもは合點せず、

「だつても旦那樣、村の中まで俥が參りますから、何處までもお供致しませう」

勇は苦しさうに、

「イヤ運動に少し歩いた方が可い、直きに此へ戻つて來るから、おまへ達は此にゐてお吳れ」

無理に車夫を留して村の入口に俥を置き、自分は小夜子の案内して、權六の家へと進んで行

く、途中に遊んでゐる村の子供達が、小夜子の姿を見て仰山さうに、
「ヤア、あんな綺麗な人が來たよー」
「誰も來て見ろ、彼も來て見ろと、友達まで誘つて跡からぞろぞろ跟いて來る、勇は復たしても眉を顰め、
「是れなら矢つ張り俥で來た方が可かつたか知らん」
頻に獨り心を苦しめて、成るべく人目に立たぬやうと、態態堤の方へ道を迂回して、人家の寡い方面から、權六の家へ廻つて行つた。

二

長き病に身は窶れ、最早浮世に望みも無く、到底も死ぬ身と諦めて、お藤は醫者の藥も飲まず、胸の苦痛の薄らぐ時は、頻に念佛を唱へつつ、今は唯末期を俟つばかりである。
「ああ、ああ、いつまで斯うやつて苦しい思ひをしてゐるんだらう、わたしや些つとも死ぬ事が可厭ぢやない、生きてゐて衆人に厄介を掛けるよりや、死んであの世へ行つた方が餘つ程可い、あの世へ行きや懷しい旦那にも遭へるだらう、お父さんやお母さんにも遭へるだらう、わたしやモー此世に思ひ殘す事は無いから、一日も早く死んだ方が可い」
溜めた息を長くホッと吐いて、夜被の中へ顔を深く潛らしたが、暫く眼を閉ぢて默思すると、現とも無く、夢とも無く、幻影のやうに我子の姿が見えて來る、先年捨てた幼兒が今は立派な奧樣となつて、赤兒さへ抱いて自分の側へ進んで來るやうな心地もする、お藤は忽ち夜被から顔を出すと、幻影は消えて跡も無い、枕屏風の蔭で鐵瓶の湯の沸騰る音がチーチーと微かに聞えてゐる。
「ああ、心の迷ひだ、全くわたしの未練がまだ遺つてゐるのだ、モーモーあの子の事なんぞは思ひますまい」
凝乎と歯を噛み締めて、自分で心を抑へようとしてゐるが、過敏になつてゐる神經は、兎角物に感じ易く、抑へんとすれば尚ほ昂奮して、腦の奧から古い記憶や聯想が湧いて出る、殊に今日は忘れもしない、日頃信心する多古の觀音様の御縁日だ、觀音様と我子とは切つても切れない因縁がある、我子のお宮參りには、貧しいながらも色模様の衣服を着せて、多古の觀音様へ伴れて行つた、我子の運の開くやうにと、開運のお守を戴いて來て、守袋に納れて置いたが、守袋も晴れの衣服も皆んなあの洪水で流して了つた、とは云へ その洪水には觀音様へ避難して命が助かつた、貧苦の中にもあの子ばかりは蟲氣も無く育つて來て、一日増しに愛らしくなつて行くのも觀音様のお蔭だと喜んでゐた、その愛らしい幼兒を何の因果で酒匂の濱へ棄てるやうになつたらう、今更思ふと夢の如だ。
お藤の腦裡には當時の光景が歷歷として見えてゐる、酒匂の濱の一草一木も深く記憶に存してゐる、忘れんとしても忘れ難いのは、愈よ草の中へ捨てたのに、我子が手を出して母の懷を捜した時の悲しさであつた、死ぬより辛い、捨てるのは廢して伴れて戻らうかとまで思つた、その時の我子の顔がまだ眼の中に遺つてゐる。
棄てたは棄てたが心では片時も我子の事を忘れない、御別懇の人に拾はれて幸福な身になつたとは知りながら、暑さ寒さの變り目には、もしや風邪でも罹かぬかと心配し、種痘も無事に濟んだか、麻疹も輕く終つたかと、似た年頃の兒を見ると、我子の事を案じない日とては無い、同じ東京にゐて垣見る折はあつたけれども、自分から遠慮して、顔も姿も見た事は無かつたが、今になつて考へると一度位、自分を隱してあの子の顔を他所ながらでも見て置けば宜かつたものを、今は何んな人になつてゐるだらう、何

んな塩梅になつてゐるだらう、遠い國にゐるといふから、モー顔を見る折は無い、此世會はずに死んで了ふのか、せめての事に一目でも顔を見て死に度いものだと思ふと頻に戀しく懐かしくなつて、忍び音に潸潸と泣いてゐたが、忽ち復た氣を取直し、ああ濟まない、面目無い、一旦捨てたからには我子で無い、他人樣の大切なお子を、戀しいの見度いのとは自分の不覺、モーモー何にも思ふまいと、心で心を叱つたりして見た。

　弟の權六は襖を開けてそつと病人の態度を窺ひながら、足音を立てぬやうに入つて來て、手に持てる丸盆を病人の枕邊に置いた、盆の上には重ねた小皿に小さい土褒色の卵子が一粒載つてゐる。

「姉や、心持は何うだネ、今日は胸も苦しかあねいかえ」

　と先づ顔を覗いて、姉の眼に涙痕のあるを認め、自分も急に心が滅入るのを故意と元氣らしく、

「姉で、モー決して心配しなさんな、俺が昨日良い藥を教はつて來たから、おめえの病氣は必度治るよ」

　お藤は復たしても藥かと、最早藥には飽きたやうな顔して、

「權六や、おまへがさうやつて親切にわたしの病氣を案じてお呉れのは何より難有いが、モーモーわたしは諦めてゐるから、決して高い藥なんぞを買つて來てお呉れでない、無駄に金圓を費ふとネー、わたしの死んだ後でおまへが困るよ、おまへには子供が大勢あるし、わたしは些つとでもおまへに讓るものを餘計に遺して死に度いと思つてゐるんだよ」

　姉の心の優しさに權六は思はず涕を啜つて、

「姉や、モーそんな事をそへて呉れるなよ、俺あおめえに金圓なんぞを讓つて貰ひ度かあねいから、一日も早く快くなつて、達者な身體になつてお呉れ、よー姉や、今日の藥つていふのはお醫者樣から貰つたんぢやねい、昨日酒匂の御別莊の若樣に教はつたんだ」

　別莊の若樣と聞いてお藤は懐かしさうに、

「ぢや鳥海樣の若樣だネ」

權六「ウム、さうよ、あのきい坊を拾つて下すつた若樣よ、俺あ若樣にお目に懸つておめえの病氣の事をお話し申したら、鶉の卵を毎日九つ位宛飲ませろ、さうすれば病氣は癒ると仰しやつたから、俺あ昨日から此の近在を捜して、やつと今朝井細田で鶉の卵を見付けて來たんだ、モー是れからは毎日十でも十五でも買へるから心配は無い、サー、先づ三つばかり飲んで見ねい、些つとも飲み難いもんぢやねいさうだ」

　重ねた小皿を盆の上に卸して、一個の卵を把り、病人の枕元にあつた鋏を取つて、卵の先を剪りながら、

「鶉の卵は内皮が厚いから、ポンと割つても雞の卵のやうには割れない、鋏で内皮を剪つて中の身を出すんだ」

　殻を割つて内容物を出すと、小さけれども高く充實した卵黄が小皿の中に盛り上つて、卵白が少し許りその周圍に流れてゐる。

「サア一口にグツと嚥んで見ねい、此の卵黄が藥になるんだとよ」

　小皿を病人の口の前に突出したので、今はお藤も拒み難く、眼を閉ぢて一口に嚥下した、

「あんまり飲み難くも無いネー」

　權六は續いて二個の卵を割つて、強ひてお藤に飲ましめた。

「お晝にも晩にも持つて來るから精出して飲んで呉んねい、早く病氣が快くなつて、酒匂の御別莊へお禮に行くやうにならなくつちやいけねい」

　お藤の耳には酒匂の御別莊といふ事が難有く

忝けないやうに感ぜらるゝ、御別莊と聞くと心に我子を聯想せずにはゐられない。

「權六や、おまへは昨日何うしてその若樣にお目に懸つたの」

權六は急に坐り直して姿勢を改めた。

「姉や、實は昨日俺は酒匂の御別莊へ上らうと思つて途中まで行つたら、若樣が鶉籠に畑地へいらしつて、其處でひよつくりお目に懸つたんだ、それに就て姉や、おめえに喜んで貰ふ事があるぜ」

お藤は不審さうに「ナニ」と心では必ず我子の事に關してゐると悟つて、早くその事實を聞き度いやうな氣がする、權六は立上つて襖の外に聽く人無きかと四方を見廻し、再び座に戻つて、常の聲よりも低い調子になつた。

「姉や、おめえが折々寢言や譫言にきい坊の事を言ふからなう」

半ば聽いて姉は驚いたやうに、

「アラ、いつそんな事を言つたえ、わたしや何にも言つた覺えは無いがネー」

權六は自分が承知してゐるといふ風に頷いて、

「覺えが無くつても、夢中でおめえが幾度も然う言つたから仕方がねい、だからおめえにせめてあの子の寫眞でも見せて遣り度いと思つて、昨日はその寫眞を借りに酒匂の御別莊へ行かうとしたんだ」

お藤は最早包むに包まれぬ心の歡喜、

「ぢやその寫眞を借りて來てお吳れかえ、寫眞を見た位ぢやあの子の迷惑になりはしまいネー」

權六「それがの、寫眞よりもまだ良い事がある、あのきい坊の小夜子樣が東京に來てゐなすつて、昨日か今日には酒匂の御別莊へいらつしやる筈だといふんだ」

お藤は少し身體を乘り出した。

「ぢやその酒匂へ、直ぐそこの御別莊へ」

權六「ウムさうよ、俺もさう聞いたから、成らう事なら一目でもおめえにあの子を見せ度いと思つてなう」

お藤は我を忘れて聲も甲走つた。

「わたしや其場で死んでも可いから、酒匂まで伴れて行つてお吳れな、遠くから見ただけでも澤山だよ」

權六「俺もさう思つてなう、若樣にお願ひ申したんだ、御別莊の近處に隱れてゐて、通る姿でも見せ度いと言つたら、そんな事をすると病氣に障る、小夜子さんが來たら何とか相談して、都合よく會はせるやうに工夫するから、その事が極まつたら此方から沙汰をすると仰しやるんだ、だから今日中に何とか御沙汰があるに違ひねい、おめえも鷄の卵を澤山飲んで身體に力を付けて置きねいよ」

お藤は嬉しさうに元氣づいて、蒼い顏にも血が通つて來た、折から表の方より十四五になる權六の倅が慌だしく驅け込んで來て、

「父さん、お客樣が來たよ、綺麗な奧樣と旦那樣が」

三

お藤の臥てゐる部屋は以前兩親の隱居所にしてあつた本屋續きの六疊間、壁も障子も粗末なれど、奧に飾つてある佛壇は家に似合はぬ立派な裝飾、屋蓋も扉も金箔で煌煌と光つてゐるのは、父母の死んだ後お藤が東京から買つて寄越したものだ、中央には阿彌陀樣、左右には觀音勢至の御脇像、その前に先祖や父母の位牌と、小夜子の爲めの生みの父、お藤の良人の位牌も列べてある、お藤は此の家に引取られた當座、まだ身體の動ける内は、每朝佛壇の前に坐つて、觀音經を讀むのが例であつたが、今はモー病苦の爲めに床から出る事も能きないので、每日床の中から禮拜してゐる。

お客樣と聞いて權六が表の方へ出て行つた後、お藤はト佛壇を見ると、亡き良人の位牌が平日よりも光るやうに思はれた、お藤は心に何か一種の戦慄を感じて、もしや良人の靈までが我子を待つてゐるのではないかといふやうな氣がした。

遠くもあらぬ表口の方で權六が來客に挨拶する言葉は此の病室までよく聞える。

「どうも恐入りました、斯んなむさ苦しい處へ態々お入來下さいましては―

權六は頻に叩頭して客を迎へ、二人の客は本屋の座敷へ通つた樣子だ、一人は確に別莊の若樣、一人は我子、きい坊の小夜子樣に違ひ無いと思ふと、お藤は嬉しさに胸がどきどきする。

「何うして此まで來て呉れたらう、そんな事を爲ても可いのか知らん、面と向つて會ふのは、却て自分が恥かしい」

亂れた鬢を手で撫で上げて、衣服の襟を掻き合せた、恰も間の襖が開けた、權六は先に入つて病人の傍へ寄つた。

「姉や、若樣と小夜子樣が御自分でいらしつて下さいましたよ―」

お藤は蒲團に手を突いて強いて身を起さうとするのを、權六の後から入つて來た勇が手を振つて急に制した。

「起きないでも可い、起きないでも可い、其儘臥てゐなさいよ、何でも安靜にしてゐるのが一番だ」

お藤は漸く頭だけ擧げて勇に會釋したが、その眼は勇よりもその背後の小夜子に注がれてゐる、お藤は最前襖の開いた刹那から、瞬きもしないで小夜子の入つて來る姿を眺めた、是れがあの子か、きい坊かと、あまりその顔の美しく、その裝ひの華やかなので、初めの程は合點の行かないのを、よくよく視ると何處やらに幼顔が殘つてゐる、それよりも爭はれないのは死んだ良人に生寫し、肌理緻かに色のクッキリ白い處も肖てゐる、顔の面長な工合も肖てゐる、口元も肖てゐる、額も肖てゐる、殊にその顔に顯はれてゐる優しさうな氣分までが、いかにも良人によく肖てゐる、嘸や心も優しからう、よくマア此まで來て呉れたと、坐ろに感涙を催して、後には却て眼を閉ぢて了つた。

小夜子も亦た先程より脇目も振らずに病人の容貌を見てゐた、小夜子の心には何よりも先づ此の病室の狹くしてむさ苦しいのが氣になつた、都育ちの眼から見ると、木綿の蒲團に木綿の夜具、シーツの汚れて鼠色になつたのさへ、病人には氣の毒に思はれる、弟夫婦が親切に世話をするとは云ひながら、農事が忙しいので思ふやうには行屆くまい、是れがもし實子でもあるならば、我身でも傍にゐたならば、寂しい思ひを病人にさせまいものをと、頻に哀れな痛はしい氣が生じた。

小夜子は五年以前に此の母親の寫眞を見たので、心の想像には、もつと頬のふつくりした、色の眞紅な、綺麗な眉を描いてゐたが、今傍へ寄つてよくよく視ると、長い病苦に顔も痩せ、頬も憔けて、鼻ばかり高く尖つてゐる、何處やらに上品な人柄と温良な性質は露はれてゐるが、血の氣の枯れた蒼い顔に肩まで動く苦しさうな呼吸遣ひ、此の樣子では如何に心を盡しても永くは此世に生きようと思はれない。

天にも地にも一人と無い生みの親だ、血を分け肉を分けて呉れた一人の母だ、二十五年が間顔さへ識らずに過ごして來て、今こそ漸と其人に逢ひながら、明日をも知れぬ此の御病氣、是れがモー一顔の見納めかと思ふと、小夜子は胸が一杯になつて、何をも言はず病人の枕邊へ跪いた、その途端にお藤も眼を開いて小夜子を見上げた、互に顔を見合せたが、感慨が迫つて、聲も出ず口も利けない、ちつと眼と眼を見

合して無言、沈默、涙ばかりが左右の心を告げてゐる。
　此の瞬間一種凄愴の氣が室内に滿ちて、夜陰の樣な心持になつた、勇も權六も同情の涙に暮れて默然と首を低れて了つた。
　やがて小夜子は堪まらなくなつたといふ風に、藉と病人に縋りついて、
「お母樣」
と前に泣伏した、此の一言を聞くとお藤は驚いて身體を向け直した、
「アレ飛んでも無い、わたくしはあなた樣にお母樣なんぞと云はれるものではございません、勿體無い、罰が當ります、日頃ならばわたくしはあなた樣のお側へなんぞ寄る事も能きない身分でございます、それを態態お訪ね下すつて、お顏を見せて下さいましたのは、何ともお禮の申しやうがございません、わたくしは是れでモー安心して死なれます、世中に思ひ殘す事はございません、モシ奧樣、小夜子樣、あなた樣はお幸福なお身の上、何卒お身體を御大切に遊ばして、此上にも御運の開きますやうに、それ計りがお願ひでございます」
　謙遜した言葉の中に、親身の親の深い情けが籠つてゐる、お藤は最初から親子の名乘を爲ようとは豫期してゐなかつた、他所目になりとも顏さへ見ればそれで望みは足りるのであつた、一旦捨てた我子故、今更親と言はれては面目無い、唯他所の奧樣として何處までも應對する意であつた。
　小夜子は生れてから初めて實の親の言葉を聽いたのである、その言葉を聽いて深い深い實情といふものが言外に存するを知つたのである、親の身には温かい血が通つてゐて心の底まで浸み渡る、ああ嬉しい、辱有い、自由になるなら一日でも、此の母親の傍にゐて、親子の情味に飽きて見度い。
「お母樣、そんなに御遠慮なさるに及びません、何處までもあなたはわたくしのお母樣です、わたくしを産んで下すつたお母樣はあなたの外にありません、何卒子だと思召して下さい」
　お藤は眼を屡瞬いた。
「ああ何うして斯んなお優しいお子樣を捨てたらう、わたくしは罪の深いものでございます、今更親らしい顏をしては罪の上の罪作りでございます、ですがあなたを捨てたのは餘儀無い譯があつての事、どうぞわたくしを怨んでは下さいますな」
「アレ、何でお怨み申しませう、モシお母樣、何卒早く快くなつて下さいまし、わたくしは復た折を見てお目に掛りに參ります」
　と小夜子は膝を進めて、お藤の細い手を握つた、お藤は嬉しさに身體が顫へてゐる。
「ハイ快くなりますよ、必然快くなりますよ、ですがあなた樣はモー二度と再び斯んな處へお入來下さいますな、あなた樣のお名が汚れますから」
　小夜子は握つた母の手を我が額に當てて、
「お母樣、わたくしはいつまでもあなたのお側にゐ度うございます」
　心の底から絞り出たやうな聲で言つた、小夜子は現在の境遇よりも此の閑靜な田舍に引込んで、母親と共に棲む事が能きたら嘸心が樂しいだらうと思ふのである、小夜子の背後に坐つてゐた勇は自暴の意味ある此の言葉をお藤に聽かせて心配させまいと、前に進んで、
「モシお藤さんとやら、此れから僕が小夜子さんに代つてあなたのお世話をするから、何でも不自由な事があつたらさう云つておよこしなさい、僕の家の方へは少しも遠慮するに及びませんから」
　權六は病人の裾の方から顏を延ばして、
「此の若樣が今迄も色色お世話をして下すつた

んだよ」

　お藤は幾度か叩頭した。

「何うも難有うございます、御恩の程は決して忘れません」

「精出して鷄の卵でもお飲みなさいよ、追追温暖になれば病氣も必ず樂になりますよ」

　勇も小夜子も頻に言葉を盡して病人を慰めた、病人は如何なる延年の藥を服したよりも、今日の會合を難有いと悦んで、生きながら極樂へ行つたやうな心地がした、良あつて小夜子は感慨深き態度で、

「モシお母樣、失禮な事を伺ひますが、わたくしのお父樣は何といふお方でございますか」

　お藤は良人の事を問はれて慇懃に、

「ハイ、わたくしは罪が深うございますけれども、お父樣には何の罪もありませんから、その事ならお話し申しませう、あなたのお父樣に當る人は甲州郡内の市野のいふ處で、先祖代代から連綿と續いた材木問屋の惣領息子、常野榮太郎と云つて氣質の優しい實に立派なお人でした、さう申しちや失禮ですけれども、あなた樣はお父樣にお肖遊ばして、顏も體もそつくりでございますよ、今あなた樣をお見上げ申すと、自然と昔の事が想ひ出されて懐かしくなつて參ります」

　轉た今昔の感に堪へないで、眼を閉ぢ鼻を詰まらせて悲しさうに下を向いた、小夜子は其心を察して共に哀れを催したが、そつと佛壇の方を顧みて、

「そのお父樣の御戒名は過去帳にでも記いて居りませうか」

　お藤は眼を開いて佛壇の左の方へ指を差した。

「アレ彼處にお位牌がございます、順性院秋露義貞居士としてあるのがそれでございます」

　小夜子は立つて佛壇の前に行き、跪いて先づ本尊に禮拜した後、左の方に安置してある父の位牌をしげしげと眺めた、如何なるお方か存じませねど、我身の爲めには實の父、切つても切れぬ肉縁の親ぢや人、どうぞ手向けを受け給へと、傍にあつた線香に火を點じて香爐に立て、南無や順性院……と戒名を唱へて一心に祈念した、それを見てゐるお藤は、嘸や良人が悦ぶだらうと、涙ながらに床の中から位牌に向つて合掌した、今日は風も無く、日は暖い庭に、パタパタと鷄の羽音がして大きな黒い影が障子にパッと映つた。

　本家の方から權六の娘が漸くお茶を淹れて持つて來た、母は畑へ出て家にゐず、外の子供は學校へ行つてゐて、家には娘ばかりだから、火を熾したり湯を沸かしたり獨りで働いてゐたのである、小夜子は佛壇の前より退いて權六から筆と墨を借り、父の戒名を紙に寫して、懐の中へ深く藏つた、神戸の家に還つてから、心ばかりの回向をする意だらう、勇は時計を出して見て、

「小夜子さん、いつまでも名殘は盡きませんが、あんまり遲くならない内に行きませう」

　促された小夜子は心が惹かれるやうで容易に立ちかねたが、漸く思ひ切つて母の枕邊に寄り添ひ、

「ではお母樣、モーお暇を致します、何卒お身體を御大切に……」

　落つる涙を隱して暇を告げた、お藤は身體を乗出して熟熟小夜子の顏を眺めた。

「あなた樣にもどうぞ御機嫌好く」

　と後は涙に曇つて行く、再び逢はれぬ生別れ、小夜子は腸のちぎれるやうな念ひがして、容易に此の室を出られなかつた。

　勇は先に表座敷へ來て、小夜子よりの土産と若干の金子を權六に渡した、權六は一旦辭退したが、小夜子も出て來て共に強ひるので、

權六は止む無く受け取つた、權六は直ぐ病室へ持つて行つて姉に告げようとするのを、小夜子は切に制して、勇と共に戸外へ出たが、病室の方を振返つて見ると、障子を細目に開けて、お藤は床の中から此方を望んで拜んでゐた。

四

多古の觀音樣の御緣日から既う二十日程も過ぎてゐる、畑の麥も丈が伸び、酒匂川の水も一雨毎に量が増して、川上の魚は鮎の子を餌食る爲めに夜な夜な川下へ下つて來る。

此の下り魚を漁る爲めに、今井村から夜網に出た若者の勘太と金八は、獲物の饒いので夜の更くるを忘れて了つた。

「オイ勘太、モー何時だんべい」

「モー一時過ぎだぜ、今鳴つた時の鐘は多分十二時頃かと思つたら、一時を打つたから驚いちやつた」

「遅くなると家で叱られるからモー歸るべい」

勘太は網を疊んで肩に掛けた、金八は重い魚籠を手に提げて先に進んだ。

「土手下から村へ入らうなあ」

「さうよ、權六どんの家の前を拔けて行から、その方が餘つ程近いや」

二人は堤を下りて、田の中の闇い小徑を辿つて行つた。

「なら勘太、權六どんの家の病人は何んな風だか知つてるか」

「ウム此の二三日大層惡いつてなあ、今日の夕方俺の阿母と隣の婆さまとで見舞に行つて、俺の出る時までまだ歸つて來なかつた」

「さうかなあ、五六日前にや大層佳い樣に聞いてゐたがなあ」

「一時は佳かつたのよ、何でもあの病人の娘とかが遠方から訪ねて來たんで、その當座は大層元氣づいたつていふ事だが、急に復た惡くなつただ」

「權六どんの姉さんには娘があつたのか」

「それがよ不思議なもんぢやねいか、俺らつちのまだ生れねい前の事だ、酒匂の洪水で此の今井の土手が切れた時、權六どんの家は田も畑も全然流されて貧乏になつちやつたんだ、その時あの姉さんは出戻りで赤坊を伴れてゐたが、乳を吞ませる事も能きねいので、酒匂の濱へ棄てちやつたとよ、その棄てられた兒が御別當の旦那に拾はれて、今ぢや日本で幾人といふ大金持の奥樣になつてゐるんだとよ」

「その奥樣が病人を訪ねてござつたのか」

「さうよ、生みの親に逢ひてい逢ひていと云つて、お金を澤山費つて日本中搜した擧句、漸と親の身元が判かつたから訪ねて來たんだとよ」

「ぢやモーお金に困るやうな事はねいなあ」

「金で病氣が治せるなら何萬圓掛つても關はねいと云ふさうだけんど、何にしろモー彼樣に弱つてゐるからなあ」

語しながら權六の家の前に近づいた、宵からの雨催ひで空はどんより曇つてゐる、四邊は闇黑だ、夜陰の冷い空氣は頭上から人を壓して來る、何だか物凄く、氣味の惡い心地がして、二人共に默つて了つた、忽ち金八が呀つと云つて足を停めた、勘太も驚いて向うを見ると、權六の家の屋根の棟から、青白いやうな一團の光り物が、フハリフハリと立昇つたが、風も無きに西の方へ流れるやうに飄颺として飛んで行つた、勘太も金八も足が竦んで立つた儘、暫時は聲も出さなかつた。

「オー怖い」

「早く歸るべい」

二人は權六の家の前を、殆ど夢中で一散に駈け通つた。

翌日になると、權六の姉の死んだ事が村中へ知れたので、勘太も金八も村人の義理として權六の家へ追悼に行つた、其時二人は口を揃へて、

昨夜夜半の歸るさに、人魂のやうな光物を見たと、詳しくその光景を權六に語つた。

　權六は一一首肯いてその人魂の何處へ向つて飛んで行つたといふ事まで察した、お藤は息を取るまで、小夜子の事を口にしてゐたから、人魂は疑ひも無く神戸を指して飛んで行つたのであらう。

旅行

一

「アラお母樣、よくマア此處まで入來いました、御病氣はモー全然お本復りで、マア嬉しうございますこと」

　夢か現か小夜子は生母の傍へ近づかんとすると、母の姿は忽ち消えて跡も無い。

「オヤお母樣は何うなすつたらう、今其處にいらしつたがネー、お母樣ー、お母樣ー」

　思はず大きな聲を出すと、自分の聲に喚び起されて小夜子はハツと眼が覺めた、眼が覺めて見ると全身にビツショリ汗をかいてゐる。

「オー苦しい、今のは夢であつたか知らん、それにしてもお母樣の姿が彰彰と眼の前に見えたがネー、何うしても夢とは思はれないよ」

　床の上に起き直つて四邊を見廻すと、夜は既に三更を過ぎてゐる、四隣寂として何の音も聞えない、自分の傍には小さい臥床の中に娘の光子が前後も知らずに寢入つてゐる、其先に良人の臥床は設けてあれど、毎夜の例として主は居ない。

　小夜子は急に今の夢が氣になつた、もしや彼の人の身に變事でもあつて、その魂が此へ來たのではあるまいかと思ふと、氣味の惡いやうな、悲しいやうな、又心淋しいやうな感じがした。

　左なきだに小夜子は神戸の家に歸つてから、毎日の樣に生みの親の事を案じてゐた、到底助からぬ病氣と知りながら、一日でも二日でも永く此世に置き度いと祈つてゐた。

　殊に東京から戾つて以來、良人の心の自分を離れ行くにつけて、小夜子は深く人生の無常を感じ、生みの親の實情を一入懷かしく思つてゐた、其嫁姑の慈愛は以前に倍して小夜子を大切にする、東京から戾るまいかと心配した嫁が無事に戾つたので、其顏を見た時は死んだ子でも甦つたやうに涙を流して悅んだ。

　さりながら姑の悅ぶ三つ一つだも良人の甚三が悅んで吳れたらば、定めて小夜子も滿足に思つたらう、甚三は小夜子の不在中、大抵は妾宅や花柳の巷に外泊して滅多に家へは戾らなかつた、小夜子が歸つてから日の中には折折戾つて來て、娘の光子を可愛がつたりするけれども、夜に入ると忽ち何處へかフイと出て行つて了ふ。

　廣い十二疊間に三個の床は敷いてあれど、一つはいつも空虛になつてゐて、夜半に眼でも覺めると殊に淋しく感ぜらるる、小夜子は今の夢に眼が冴えて眠られぬまま、端然と床の上に坐つて頻に物を考へてゐた、孤衾空閨の恨、考へれば考へる程悲しくなつて來るばかりである。

　曉方近き夜の寒さの身に浸みてや、寢入りし光子はフト眼を開いて母親の坐つてゐる姿を不思議さうに眺めた。

「母ちやま何うしたのう」

　小夜子は悲しい顏を我子に見せまいと、電燈の光より顏を背けた。

「何うも爲たんぢやないが、今不淨場へ行つたから、ねんねするところだよ、みいちやんもねんねなさい」

　光子は夜被の下から父の臥床を覗いて、

「父ちやまは今夜もお不在」

　小夜子は覺えず、

「ああ」

　と涙聲になつた、自分は怨みと思はねども、

我子に何と返事をしよう、嘸や光子が心細く思ふだらうと、坐ろに哀れを催した。

「モー直きに父ちやまもお歸りだからネ、おとなしくねんねして待つてお在よ」

夜被の上から背中を撫でゝ漸く我子を寢かし付けた、小夜子も續いて横になつたが、眼を閉ぢると生母の姿が再び朦朧と見えるやうな心地がする。

二

數日の後酒匂の別莊に在る鳥海夫人から小夜子の元へ手紙が届いた、それを讀んで見ると、今井村の實母が數日前に死んで、舅がその葬式に立會つた事まで詳しく書いてある、別に戒名を記した小さい紙片までが封じ込んであつた。

生母が死んだ日と時とを繰合はして見ると、丁度前夜の夢が符合する、此に於て小夜子は血を分けた親子の間に心の暗流が通つて、冥冥の裡に何者か往來してゐるといふ事を悟つた、二十五年が間顔を合したのは唯の一度だけれど、親の心は常に自分の身に注がれてゐたかと思ふと、一入難有く又懷かしく感ぜられた。

主人は相變らず家に在らず、姑の用事の閑を見て、小夜子は自分の部屋に入り、伯母の手紙を披いて二度も三度も繰返して讀んでゐた。

「臨終の際までわたしの事を言ひ續けてゐられたと書いてある、ホントに爾うであらう、廣い世界に子といふものはわたしより外に無いのだから、何んなにかわたしの事を思つてゐて下さつたらう、モー少し早くお目に懸れたら何んとか御養生の方法もあつたらうに。モー彼樣なつては何の力も及ばない、ホントにお可哀想な事を爲た、せめてはモー二三年もお生かし申して置き度かつたものを」

手紙の中に挾んであつた戒名の紙を取出して、我が額に當てゝ押戴き、そつと机の上に載せて、恭しく禮拜した。

「南無や母様、春月院妙澤法忍信女」

と四邊を忍ぶ低聲にて心ばかりの回向を爲たが、人目に憚りありて、香花も供へられず、手向の水も心に任せぬ今の身の上、せめては之を供養にと、豫ねて祖母から敎へられた修證義の經文を口の内で唱へ出した。

「生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり」

と第一章の總序から二章三章と讀んで行き、第四章の發願利生、愛語の一節に到つた時、忽ち腦中に一種の新しい感想が閃いた、何か神祕の力が背後から自分を動かして、急に悟りが開けたやうな心地がした、一度讀み過ぎて復た讀み返す愛語の一節。

「愛語といふは衆生を見るに、先づ慈愛の心を發し顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり、徳あるは讃むべし、徳なきは憐むべし、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす、面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魄に銘ず、愛語能く廻天の力ある事を學すべきなり」

幾度か繰返し、幾度か沈吟して讀んでゐたが、やがて飜然と前非を悔いたやうに、

「ああわたしが惡かつた、今迄は全くわたしが惡かつた、家の旦那が外へばかりお泊りなさるのも全くわたしが惡いからだ、わたしには最初から愛語といふものが缺けてゐた、女は正直にして貞節の道に乖きさへしなければ、それで役目が濟むと思つてゐたが、今此のお經を讀んで見ると、人には愛語といふものが大切だ、徳あるは讃むべし、徳無きは憐むべし、怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなりと佛樣がお敎へなされた、愛語を以て人

に臨めば怨敵さへも降伏するものを、況してや怨みも無い夫婦の仲、わたしが常に愛語を以て良人に對したら、良人の心も外へは移らなかつたらう、わたしは良人に逆らつた事も無い、怨みや不平を言つた事も無いが、そのかはり自分の方から愛語を以て良人の心を和らげた事も無い、わたしは全く冷淡だ、自分から努めるといふ氣が無かつたから、人の妻としては良人に對する熱情が缺けてゐた、殊に近頃は心が何時でも沈んでゐて、良人に機嫌の好い顏を見せた事が無い、偶に良人が家へ戻つても、その顏を見るとツイ悲しくなつて涙ばかり零すから、良人が不快に思ふのも無理は無い、強ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくすといふやうに爲てゐれば宜いものを、全くわたしは妻の道に缺けてゐた、ああ濟みません、悪うございました、是れから心を改めて愛語を專一と致します、何卒廻天の力を添へて給び給へ。」

請ふとも無く拜むとも無く心の懺悔を佛に訴へてゐたが、やがて儼然と顏を揚げて、

「是れといふのも矢つ張りお母様のお導きだ、お母様の魂がわたしに教へて下さつたのだ、ああ難有い」

母の靈位に恩を謝して、倚ほ經文を讀誦した。

三

鳥海男が養老山中にての觀察に從へば、親の身代を蕩盡すべき天職を帶びてゐる甚三は、妾宅一軒にて飽き足らず、それからそれへと花柳の巷を遊び歩いて、居る處さへも定まらず、小學校時代の古い友達で、今は立派な貿易商になつてゐる芳野春吉が昨日も今日も行方を捜して、辛と今諏訪山の公園に藝者末社を引伴れて遊んでゐる事を探り當てた。

神戸に生れて神戸に育つた甚三は諏訪山の眺めも珍らしくはないが、山上から市中を瞰下して、自分の家や地面家作を自慢したり褒められたりするのが何よりの目的。

「オー家の汽船が一艘入港つてゐる、荷役を終ると明日邊り九州へ出帆するのだぜ」

と近所の人人にも聞えるやうに吹聽する、藝者の一人は甚三の意を迎へて、

「各人此方へ來てよく御覽よ、生田のお邸がよく見えるぢやないか、此の廣い神戸中に旦那のお邸位大きくつて立派なものは滅多にありやしない、お邸の近所は二町四方の間、ぐるりつと旦那の御地所なんだよ、豪氣なもんぢやないか」

「そんな立派なお邸へ旦那は滅多にお歸りが無いんですか、いつでも三の宮の方にばかりいらつしやるぢやありませんか」

「奥樣がお可哀想ネー、偶には歸つてお進げなさいよ」

一時の座興か、眞實の同情か、甚三は斯う言はれると何と無く妻に對して濟まないやうな心持がする。

繪に書いた達磨のやうに肥つた身體の重いので、傾斜の緩い裏道から、片手に衣服の裾を褰げて、よたよたと登つて來た芳野春吉は、突然甚三の背後から、

「オイ甚三君、何んなに君を捜したか知れなかつたぜ、何處を毎日ほつつき歩いてゐるんだ、店の者を二人も出して、漸くの事で君の此にゐる事が知れたんだ」

甚三は振返つて、

「オー春吉君、丁度好い處だ、是れから衆人で常盤へでもしけ込む意だから一緒に來給へ」

春吉も以前には甚三と共に遊んだ事もあるが、數年前に女房を持つてから、今は手堅くなつてゐる、古い馴染の藝者が、

「アラ芳野さん、さつぱりお見限りですネー」

甚三の傍に藝者や半玉の大勢隨從てゐるのは場合悪しと、春吉は好い加減に調子を合せなが

ら、そつと甚三を片脇へ呼んで、
「甚三君、僕は君に大切な用事があつて捜してゐたんだよ、あの女達を一旦還して、僕と一緒に此の山の上まで来て呉れ給へ、悠悠談話を為なければならん事があるから」
　遂に甚三を説き付けて医者や末社を山より降らしめ、自分は甚三を拉して、人目の寡き山上の芝原へ伴れて来た。
「甚三君、其の石へ腰を掛け給へ、斯ういふ處の方が掛構へが無くつて談話をするに都合が可い」
　自分も小径の傍に横はつてゐる丸石を抱へて来て敷物代りに腰を卸した、甚三は早く談話を済ませ度いと気が急いてゐる。
「春吉君、僕に用事といふのは何だネ」
　春吉は暫く甚三の顔を見て容易に口を開かなかつた、甚三の今の胸懐が能く我が言葉を容るるに足るか否やを懸念しながら、少し語気を荘重にして、
「甚三君、僕は君のお母さんから頼まれてゐるのだがネ、何でも君に逢つたら、一つ君の意中を訊いて見なければならんと思つてゐた、君は全體あんな立派な奥さんを持つてゐながら、何が不足で戸外ばかり遊び歩いてゐるのだネ、君の奥さんが先日東京へ行かれた時、君に愛想を盡かして其儘帰つて来ないか知らんと、君のお母さんは非常に心配して、毎日、本宅東京のお嫁さんへ手紙を出したといふ事だぜ」
　甚三は失望顔に、
「何の用かと思つたらそんな事かえ」
　春吉は満腔の赤誠を籠めたやうに熱心なる語調となつた。
「そんな事かと軽いやうに思つてはならん、是れは君が一生の大事ぢやないか、君の為めに是程重大な事は滅多に無いぜ」
「そんな野暮な事はマー止し給へ、それよりや何處かへ行つて一杯飲まう」
　甚三の心はまだ何うしても容易に親友の忠言を受付けさうも無い、春吉は意と冷かに笑つた。
「おや甚三君、詰い事は言はんから一言僕に返事をして呉れ給へ、君はあの立派な奥さんが大切でないかネ、もし奥さんが君と離れる事になつても惜しいと思はんかネ」
　甚三は言下に、
「些つとも惜しくない」
　春吉は頷いた。
「よろしい、それで澤山だ、然し君にはお氣の毒だネ、僕がその返事を君のお母さんに傳へると、君は忽ち廢嫡になるのだ、それも自業自得だから仕方が無い」
　廢嫡と聞いて甚三は案外なやうに驚いた。
「ナ、ナニを言ふ、廢嫡だつて」
　春吉は計略圖に當り先方から談話に乗つて来るのを待つてゐた。
「さうよ、君のお母さんの話には、銀野の家が大切か、君の身が大切かといつたら、折角お父さんが是迄に仕上げた銀野の家が君よりも大切だから、君にして品行を改めなけりや斷然廢嫡して了ふ、そして小夜子を自分の娘として、外から養子を迎へると言つてゐなさるよ」
　甚三は愈よ驚いたが、半ばは威嚇と半信半疑、
「そんな事が能きるものかネ、僕は戸主だもの」
　春吉は勿體らしく誠しやかに、
「戸主だつて能きるさ、お母さんと親類と連合して願へば、君を禁治産にする事も能きるし、君を廢して養子を立てる事も能きるよ、僕も一度は君に異見して見るが、僕の言葉を用ゐないやうだつたら、結句斯うなさつた方がお得策でせうと賛成して置いたよ」
甚三「友達甲斐が無いぢやないか」

春吉「だつても君、よくマア考へて見給へ、君一人の力であんな奧さんを貰ふ事が能きたと思ふと間違つてゐるぜ、君のお父さんの顏があつたればこそ、鳥海男爵の姪だの、栗山少將の令孃だのといふ高貴な身分のお孃さんが貰へたのだ、その上容色は佳し、學問でも何でも能きるし、何一つ不足を云ふ所が無いぢやないか、そんな奧さんを大切にしないで、女狂ひや藝者狂ひに耽るといふのは、君は全く冥利に盡きたんだネ」

激しく攻撃されて甚三は面目無ささうに差俯いた。

「春吉君、誰でもさういふよ、人がさういふばかりぢやない、僕は折折自分でも爾う思ふよ、斯んな良い女房を持つてゐながら、何の因果で家にゐるのが可厭になるだらうと思ふ事もあるよ」

春吉は微笑して、

「可笑しいぢやないか、自分で爾う思ふなら外へ出て遊ぶには及ぶまい」

甚三はホッと歎息した、親友に向つて心の中を訴へるやうに甘つたるい語調で、

「春吉君、外から見りや全くその通りに違ひ無いがネ、全體最初からあの女房は僕と氣が合つてゐないんだよ、僕には寧ろあの妹の方が陽氣で賑かで面白いと思つた位だ、勿論容色は姉より劣るけれども、僕は妹の方に餘計口を利いた位だよ、それでも阿爺があの人を貰へといふから默つて婚禮はして了つたが、宛然造り付けのお雛樣のやうだネ、何を言つても几帳面に三つ指でハイハイと云ふ調子だもの、僕は窮屈で氣が詰つて、女房の前に長く居ると肩が凝つて頭が痛くなる、しかも此頃は猶更の事、僕が惡くつて家を明けるから仕方が無いけれども、偶に家へ歸つて行つても、女房は能く歸つたといふ顏もしない、他所のお客さんが來たやうに、成るたけ僕の側へ近寄らない算段ばかりしてゐる、僕だつて實際面白く無いやネ、何かいふと直きに可厭な顏して、涙ばかり出してゐるのだもの、僕は女房の身體から冷たい風が吹いて來るやうな氣がするネ、僕の身に取つちや尼宮樣を御主人に持つたやうな心持がするネ、君も少しは察して呉れ給へ」

親親の定めた結婚には往往にして斯る夫婦のある事を免れない、春吉は幾分かその事情を察してゐれど、故意と打消すやうな語氣で、

「それは君の方から爾う仕向けるからだよ、何處の國に亭主が浮氣を爲て歩くものを、女房が機嫌好くニコニコしてゐる奴があるものかネ、君が奧さんを大事だと思つて嬉しさうに歸つて行けば奧さんだつて決して惡い顏をする氣遣がないよ。マア兎も角も今から家へ歸つて、三日でも四日でも奧樣の傍にゐて見給へ、自然と其間に奧さんの機嫌も直つて、家庭の樂みといふものが出て來るよ」

賺したり宥めたり嚇したり諫めたりして、春吉は無理遣りに甚三を一先づ自宅へ歸らしめた。

生みの母への回向を終つて、自分の部屋から出て來た途端、良人の甚三が飄然と歸つて來たので、小夜子は飛立つやうに喜んだ、玄關へ走り出て手を執らんばかりに迎へ入れた。

「マアよくお歸り遊ばして」

と心から莞然笑つた愛らしさ、甚三は心中に初めて春吉の言の虛ならざるを悟つた。

四

愛語能く廻天の力あり、お經の文句に感奮して、覺悟を新にした小夜子は、今迄と打つて變つた勤め方、自ら心を愉快に持つて、何事も良人の意を迎へ何時も機嫌好く愛想好く、滿身の愛情を傾けて良人の心を包むやうに仕向けた爲め、甚三の心も次第に打解けて、義理にも以前のやうに家を明ける事が能きなくなつた。

三の宮の妾宅へは二日目か三日目に泊るけれども、花柳の巷に流連して歸る事を忘れるやうな狂態は全く無くなつた、氣分も次第に落着いて、店の仕事にも身を入れる、殊に可愛がるのは娘の光子、自分の傍を離さないで、玩弄にしたり、調戯つたりするから、子供の方でも父ちやま父ちやまと、頻に跡を追ふやうになつた。

此の光景を見て悦んだのは甚三の母親、友達に頼んで異見して貰つた甲斐あつて、倅も全く眼が覺めたやうだ、是れといふのも一つには嫁の仕向が良い爲めだと、愈よ小夜子を大切にする。

但此上の望みには早く一人男の子を産んで欲しい、今迄の心勞で小夜子も身體が弱つてゐるから、溫泉へでも伴れて行つて悠悠養生させるが宜いと、母は頻に甚三を勸めた。

甚三も豫ねての旅行好き、それでは別府の溫泉へ伴れて行つて、その序に九州見物を爲て來ようと、急に旅裝を調へて、大勢の男女を供に伴れ、日の麗き春の央に、都の花を跡にして九州へ赴いた。

別府溫泉に滯在すること殆ど一ケ月、小夜子の身體もめきめきと强健になり、娘の光子も目立つやうに肉が付いたので、是れから愈よ九州の各地を見物しようといふ事になつた時、

「小夜子や、おまへは九州で一番といふ名物は何だか知つてゐるかえ、九州一番ぢや無い、日本で一番といふ名物があるんだよ」

甚三が斯ういふ風に打解けた口を利くやうになつたのも、全く愛語のお蔭だと小夜子は心中に嬉しく思つた。

「存じませんネ、何でせう、耶馬溪ですか、太宰府ですか」

「イイエ、そんなものぢやない、到底もおまへには當るまいが、今九州には肥後の熊本に日本一の三味線の名人の永谷大撿挍といふ人がある、今の世の名人ぢや無い、古今にも珍らしい程の名人で、苟も音樂に志すものが、永谷撿挍の三味線の音色を識らなければ恥だといふ位なもんだ」

三味線や音曲は甚三の得意とする所だけに、其道の事は特に詳しく知つてゐる、小夜子は音樂趣味が深くないから、それ程に興味を催さないけれども、良人の趣味は我が趣味と、今は何事にも同情を寄せようと努めてゐる際なれば、珍らしさうな顏して、

「そんな名人が九州なんぞに有りますか」

甚三は微笑んで、

「九州なんぞといふけれども、昔九州には天下の三名人と云はれた宮崎勾當が久留米にあつて、その流れを汲む人が皆な名人になつてゐる、何にしろ宮崎派の三味線は一曲に一萬遍の稽古を積まなければ許しを出さないといふ程嚴重な敎へ方だから名人も出る譯さ、永谷撿挍は二十四五の時分から天稟の名人と云はれて、得意の玉川でも奏ると、近國から泊りがけに聽衆が來たといふ位なもんだ、その名人が一曲に何萬遍といふ稽古を累ねて、今では七十歲以上になつてゐるのだから、藝の巧さ加減が察しられる」

說明を聞くと小夜子も頻に心が動いて來る。

「そんな名人の三味線なら是非一度聽き度いものですネ、あなたは今迄にお聽きなすつた事がおありですか」

甚三は頭を振つて、

「イイエ、まだ一度も聽かないから、九州へ來た序に是非熊本へ行つて聽かうと思ふんだ、永谷さんの三味線を聽くと、巧いとか面白いとかいふのでは無くつて、唯モー難有くなるといふ評判だ、三味線の神樣と云はれるんだからネ」

二人は相談を決して、別府から博多に轉じ、箱崎八幡宮や、太宰府の天滿宮に參拜した後、永谷撿挍の三味線を聽くのが第一の目的として

肥後の熊本へ乘込んだ。

熊本の旅館に投宿すると、甚三は何より先に永谷撿挍の都合を訊いて、翌日の午後から熊本第一の旗樓に聘し、得意の名曲を奏して貰ふ事にした、金滿家の癖として天下の事は貨幣で自由になると思ふから、翌日の朝の內、隨從てゐる若者の某に、立派な音物と多額の禮金とを先へ持たせて遣つて、今日は一つ十分の技倆を揮つて貰ひ度いと賴んだ。

永谷撿挍は子供のやうに無邪氣で、金錢には至極冷淡な人だから、家人より其事を聞くと急に腹を立てた。

「ナニ、貨幣を澤山遣るから今日は巧く奏つて吳れろと、乃公の三味線は貨幣の多寡で音が違ふと思つてゐるのか、馬鹿め、そんな人に聽かせる三味線ぢや無い、謝絕つて吳れ、謝絕つて吳れ、乃公はモー何と云つてもそんな處へ行かないから」

竹を割つたやうな日頃の氣質、一旦斯うと云ひ出したからには、頑として容易に聞入れさうも無い、家人は其由を若者に告げた、若者は驚いて種種に分疏したけれども、永谷撿挍の眼中には富豪も無く、顯貴も無い、氣に入れば貧人の爲めにも彈いて聽かせるし、氣が進まねば何人に賴まれても決して撥を把らない。

若者は走り歸つて此事を甚三に告げた、甚三は失望落膽、何とかして撿挍の怒を解くべき工夫は無いかと、旅館の番頭を呼んで相談した、番頭は眉を顰めて、

「それは何うも飛んだ事になりました、前に伺つてゐれば私の方で宜いやうに取計らひましたものを、永谷撿挍は何千人の聽衆の前で彈く時も、自分一人で慰みに彈く時も、決して氣分の變らない人です、夜半に眼が覺めると、直ぐに三味線を把つて彈き出すといふ面白い癖がありますが、臥床の上で彈く時でも一曲每に三本の絃を必ず新しく取換へます、或時家の者がそれを見付けて、無駄な事ぢやありませんか、誰も聽いてゐる人が無いのにと申しましたら、撿挍は乃公が聽くのだ、絃が古いと乃公の耳に氣持が惡いと斯う云つたさうです、だから撿挍の三味線は人に聽かせるのでは無くつて、自分が聽く爲めに彈くやうなものです、一度何厭だと言ひ出したら何うしたつて彈く事ぢやありません」

甚三は愈よ當惑した。

「それを何うかして彈かせるやうにし度いものだ、誰か極く仲の好い人に賴んで話し込ませたら何うだらう」

番頭は不承顏に、

「誰から話しても無駄でございませう、外の事なら人の云ふ事は何でもハイハイと聞きますが、藝の事にかけると誰の云ふ事も聞きません。」

甚三は全く望みを失つて、如何にせばやと小夜子に相談した、小夜子も此儘に中止しては良人の恥辱と頻に心を痛めたが、外に好い思案も無く、

「何うでせう、わたくしがモー一度自分で行つて賴んで見ませうか」

甚三は斯る時こそ妻の資格を誇り顏に、

「おまへが行けば必然承知するよ、鳥海男爵の姪で栗山少將の娘だと云つたら……」

「アレ爾ういふ事を力にするのではありません、今迄の無禮を詫びて、只管に賴んで見るのです」

小夜子の賴みは愛語の力、怨敵を降伏し君子を和睦ならしむるとは今此時にこそあるなれと、先程の若者に案內させ、自ら撿挍の家を訪うて、いと懇に來意を告げた、恭謙なる態度、熱心なる語調、遂に撿挍の心を動かして、初めて怒を解く事が能きた。

午後の定刻になると、甚三夫婦は從者と共に旅樓に赴いて、萬事手落の無いやうにと、上段に演奏の席を設け、撿挍の好める酒や肴を用意して待つてゐた。

やがて撿挍は女の門弟に手を曳かれ、樓婢の案内にて設けの席に着いたが、一應座上に會釋したまま茶の代りにと樓婢の侑めた洋盃の酒を美味さうにぐつと飲んで、二つ三つ舌打ちし、愉快さうに莞然と笑つて、門弟から三味線を受取つた態度は、眼中更に人の有無に頓着しないらしい。

七十餘歳の老翁とは云へない程、血の氣が皮膚へ溢れさうに澤澤した猛い顏の大坊主、太棹に胴廣の大三味線を抱へ込んで、先づ絃巴の位置を少し斜めに据ゑ直し、襟を抜き、背骨を撿め、掌へクワッと唾を吐きかけて象牙の大撥を取上げた、人も無氣なる振舞、如何なる絶音絃聲がその身邊より出づるかと思はれた、然るに白い眸を轉じて客の方を向き、丹田に力を籠めて、トーンと一撥最初に當てたる絃の音は、純潔玲瓏として宛ら仙家の銀寶鈴を轉ずる如く、滿場忽ち寂として行く雲さへも停まるかと思はれた。

―アレが三味線の音か知らん―
―三味線から何うして彼樣な音が出るだらう―

口にこそ出さねど聽く人の心にはその刹那に皆な此の感が發つて、甚三と小夜子は思はず顏を見合せた、やがて宛轉たる前彈と共に、

―獨り思ひを枕に語り、せめて慰みの夢さへも、儘の狭衣うちそへて―

と若い少女の咽から出るやうな愛らしい聲が此の魁偉的の撿挍の口から轉び出でた、曲は得意の狭衣の艶曲、愈よ氣が乘り興が進むと、撿挍は獨りで樂むやうに恍然として思ふ儘に搔き鳴らす、弓手の爪音、馬手の撥捌き、高き音には襖も障子も共鳴して、滿堂宛ら濤の上に浮ぶが如く、低き響きには春雨夜に落ちて、簷に滴る音を聞く、幽かなる、行雲流水春月秋雨、四季を一曲に縮め、萬象を指撥に攫む、奏者の前に聽衆も無く、聽衆の前に奏者も無く、我も人も皆な天界に入つて歡喜の菩薩に圍繞せられたやうな心地がした。

音樂に趣味淺き小夜子も、夢と現の境を忘れたやうに、身も心も恍然として、

「ホントに難有いと申しても可い三味線でございますネー」

甚三は自分の手柄のやうに得意顏。

―何うだネ、驚いたらう、斯うなると巧いとも拙いとも上手とも下手とも評の爲樣が無いネ、三味線は初心の内に皮の音ばかりして板を叩くやうに聞える、それから次は撥の音がバタバタと騒騒しく聞える、上手になつて來ると皮も撥も鳴らないで絃だけがビンビンと鳴つて來る、それから上の名人になると絃が鳴るのぢや無い、三味線全體が鳴るのだ、ところが永谷撿挍のは三味線が鳴るのでも無し、人が鳴るのでも無し、此の座敷全體が鳴つてゐるのだ、その證據には背後を向くと背後から音が聞えるし、横を向くと横から音が聞える、是れは少少魔法に近いなあ―

―お母樣にお聽かせ申したら嘸お悦びでせうにネー

と小夜子は國許の姉を想起した、甚三はまだ外にも聽かせ度い人がある。

―チョッ、彼に聽かせたらなあ―

思はず口に出して、忽ち外の事に紛らした、三の宮に圍つてある女は三味線把つて京の祇園にその技倆を鳴らしたものである。

五

小夜子は幼い時父の任地たる久留米に住んでゐた事があるから、甚三に請うて熊本より久留米に廻り、舊知の山川を遊覽して、それより唐津

に出で、長崎に遊び、名物の大枇杷の滋味津津と熟したるを土産物に買ひ込んで、杜鵑の諏訪山に啼き初むる頃、神戸の家に歸つて來た。

此の旅行ほど小夜子の身に取つて愉快に感じた事は無い、初めて人生の幸福を讀り得た心地がして、神戸へ歸つてからも、良人や、姑に心を盡して事へたが、姑は此程俗に五十手と云ふ筋肉僂麻質斯に罹つて、左右の手が背後へ廻らず、獨りで帶を結ばれぬやうになつた、殊に梅雨に入つてから、腕から肩の痛みが一層烈しく、夜も安らかに眠られぬ事が多いので、醫者よ藥よと十分に手當したけれども容易には效が見えない、或人の勸めに斯る病は温泉療法が何よりも有效だと云はれ、丁度芳野谷吉の母親が毎年夏になると加賀の山中温泉へ避暑に出かけるを幸ひ、今年は同行を約して、七月の初めに老いたる女中を供に伴れ、番頭の一人を宰領として山中温泉へ出發した。

姑が不在になつてから最初の内は甚三も以前と變る事が無かつたが、十日二十日と過ぐるに從ひ、三の宮の妾宅へ外泊する事が多くなつた、以前は十日二十日に往つたものが、今では隔日位に家を明ける事もある、時には二日も續けて歸らない事もある。家へ歸つても何と無くそはそはして落着かず、酒も飲まぬに口三味線など吟じてゐるやうな事もある。小夜子は窃に心配して、人を頼んで樣子を探らせると、甚三は此程から三の宮の妾宅へ三味線の師匠を呼び、妾と一緒に三味線の稽古で夢中だとの噂、それでは九州の名人を聽いてから、急に三味線熱が強くなつたのか、あの撿校の藝を聽いては自分さへ三味線が好きになるものを、寧そ旦那に願つて、是れから三味線を習はうか知らん、爾うしたら少しは旦那のお對手が能きるかも知れない、とは云へ奉公人の手前もあり、光子も段段大きくなるに、此の年齢になつて今つから三味線の稽古でもあるまいなんぞと思ふやうな氣もして躊躇した。

三の宮の妾といふは人の噂に隨分名代の手取者、京都にゐた時分から、幾多の富豪を飜弄して、その妻や子を泣かしめた經歴もある、家の旦那もあんな者に引掛つては、將來に碌な事はあるまいと、奉公人の蔭口も折折小夜子の耳に入る、小夜子は再び深き愁に陷つて、愛語の力も次第に淡くなつて來た。

或時甚三は三の宮へ泊りに行つてから三日も四日も歸らなかつた、是程長く家を明けた事は近頃に珍らしいので、もしや御病氣でもなさりはせぬかと小夜子は使ひを遣つて動靜を聞かせたが、何れ歸るといふ甚三の返事があつた切り、その後二三日過ぎてもまだ歸らない、小夜子は心配して夜も碌に眠られなかつた、光子までが父の長い不在を怪んで、父ちやまは何うしたらうと訊くやうになつた、十日程過ぎて小夜子は愈よ堪へ難く、手紙を書いて再度の使者を遣ると、今夜歸るといふ返事があつた、

主人の好きな酒肴を用意し、風呂も沸かし、座敷も清め、殘る隈無く心を盡して、今にも歸るかと待つてゐたが、夕暮に過ぎても歸らない、夜に入つても歸らない、今夜は父ちやまのお歸りだと晩くまで起きてゐた光子も、遂に睡氣を催して寢て了つた、朝の早い臺所の女中も寢かした、中働きや腰元は自分の部屋で坐睡をしてゐる。

十二時近くなつた頃、甚三は突然俥に乘つて戻つて來た、取次の女中が玄關から、旦那樣のお歸りと呼んだので、ヤレ嬉しやと奥から走り出た小夜子は、日頃よりも愛想好き態度して、ニコニコと良人を迎へたが、甚三は鼻向けのならぬほど酒臭い息を口から吹いて、足元も危いやうに醉つてゐた。

—マア大層御機嫌で、お苦しさうでございます

こと、直ぐにお寢室へいらしつてお就寢遊ばせ、お床も展べてございますから」
　小夜子は手を執つて誘はうとすると、甚三はその手を拂ひ除けた。
「うんにや、わたしはおまへに用があつてちよいと來たんだ、用が濟みや直ぐに行くんだ、コラ誰か、車夫に茶でも遣つて置け」
　左右へ蹣跚けながら、自分の居室へ入ると、いきなり蒲團の上にドカリと胡坐をかいた。
「水を一杯、水を一」
　聲に應じて腰元が洋盃に水を持つて來た、甚三はぐつと一息に飲干して、
「アー美味い、おまへ達は彼方へ行つてゐな、用がありや呼ぶから」
　腰元や仲働を去らしめて、大切な用事でもありさうに、眼を圓くして四邊を見廻しながら、少し前へずり寄つた、小夜子は良人の態度の事事しさに、何を言出すかと安からぬ顏して眺めてゐる、甚三は平生酒に醉つても斯程までに調子の變る事は無いが、今日の態度は故意と醉つた振りするやうに思はれる。苦しくも無きに苦しさうな息をプープーと吹いて見たり、出もしないゲーツプを努めて無理に吐き出したり、舌なめずりをしたり、首をくるりと廻して見たり、さも醉つてゐるといふやうな風に、
「小夜子や、おまへはえらいよ、實にえらいよ、アハハー」
　意味も無く笑つたと思ふと、忽ちケロリとした顏してきよろきよろ小夜子を眺めた。
「よく今迄猫を冠つて、そんなにしらばつくれてゐられたネ、ゲーツプ、わたしは馬鹿だよ、實に馬鹿だよ、栗山少將の娘だの、鳥海男爵の姪だのと正直に思つてゐたから隨分馬鹿の骨頂だ、アハハハハ、そのおまへが棄兒たあ驚いちやつた、酒匂在の百姓の子たあ呆れ返つて物が言へない、此の春も東京の歸途に、其村へ寄つて捨てた親に會つたといふぢやないか、惡い事は出來ねえもんで、其村の者が三の宮の家へ奉公に來て、悉皆おまへの事を喋つちまつたよ」
　斯う言つたら小夜子が嘸狼狽へて顏の色まで變るだらうと思つたが、小夜子は愁然と首を垂れたばかりで、別に騷げる色も無い、その心中には斯る事の何時か一度は發つて來るものと豫期してゐたのである、其時の良人の心次第で我身の運も定まるものと覺悟してゐたのである、三の宮の妾宅から事の發りしは心外なれど、それとて誰をか怨むべき、斯うなるのも皆な前の世からの約束事であらうと、いかにも落着いた態度で良人の前に兩手を突いた。
「お母樣には其事を申上げてございますけれども、今迄あなたにお話し申さなかつたのは何とも相濟みません」
　甚三はフフムと鼻で應接つた。
「ナニ、お母樣に申上げたあ、アハハハハ、おまへは亭主よりお母樣の方が大事だと思つてゐる、お母樣にさへ氣に入れば亭主なんぞは何うでも宜いと思つてゐる、お母樣が御承知なすつても、肝腎な亭主が承知しなかつたら何とする、華族の親類だと思へばこそ、支度金も出したり金圓も貸したりして貰つて來たんだ、見合の時おまへの阿母さんが何と云つた、妹の豐子とは年子だつて、アハハ、拾つた兒まで年子にすりや、幾人でも年子が出來らあ」
　母の事を言はれて小夜子は慌てたやうに、
「それには事情があつての事でございます、母はわたくしの爲めを思つて實子として育てたので、全くわたくしへの慈悲でございます」
　甚三は輕蔑したやうに、
「おまへにや慈悲だらうが、此方には些とも慈悲ぢや無い、わたしも阿父さんも欺されて、家の名譽だなんと思つたのが好い面の皮だ、名譽

の事を言へば三の宮の女の方が藝者こそ爲たけれども、親は京都の諸侍、由緒正しい家柄で、棄兒や百姓の子より餘つ程身分が高いや、アハハー

　酒が言はせるのか、本心で言つたのか、此時小夜子は覺えずビリビリと眉を擧げた、今迄は何事も愼んでゐたけれども、妾風情に比較されて、無念の色が顏に顯はれた。

「それでは何うしたら可いのでございます」

　自暴の意を含んだ語氣で投げ出すやうに言つた、甚三は最早醉中の人で無い、いかにも眞面目に、

「斯うなつたらおまへだつて身を引かずにゃゐられまい、わたしの方から難癖を付けて離縁するの追出すのとは言はないが、おまへの方から明日にも東京へ歸つて、離縁して呉れろと云つて來りや、おまへの實家へ貸した金圓も棒を引いて帳消しにして遣るし、おまへにも相當の手當はして進げる、それより外に仕方があるまいがなう」

　小夜子は思はず、

「ハイ」

　と前に泣き倒れた、その途端に甚三は飛ぶやうに表へ出て行つて了つた。

訣別

一

　良人の立去つた後、小夜子は暫く其場に泣伏してゐたが、小間使や腰元が良人を送り出して戻つて來たので、急に身を起して髪を掻上げ、心の激動を知らせぬやうに故意と言葉を落着けて、

「旦那は今夜モーお歸りにはならないから、よく戸締りをして、火鉢の火を消してお了ひ」

　小間使も腰元も豫ねて小夜子の身を氣の毒に思つてゐる、斯んな優しい奥様がありながら、何うして旦那は他所へばかりお泊りになるだらうと、今も門口から歸りに、その噂を爲て來たのであつた。

「奥樣、旦那樣はお酷いぢやございませんか、折角お歸りになつたと思ふと、直ぐに復た出ていらしつてお了ひなさるんですもの」

　十八九の腰元が我が事のやうに憤慨する、年増の小間使はさも眞相を知つてゐるといふ顏して、

「あの三の宮の奴が惡いんですよ、旦那樣を自分の方へばかり引附けて、可い氣になつてゐるんですもの、今度若し何處かで會つたら、わたしや喰付いて遣りますわ」

　小夜子は寂し氣に微笑んで、

「オホホ、けんのんだネ、だけどもおまへ達は決して人を怨むのぢやない、皆んなわたしが行屆かないからだよ、旦那だつて今夜は大層醉つていらしつたから、家も外もお判かりにならないのだらう」

　小間使は尚ほ悔しさうに、

「だつても憎らしいつてつちゃありません、將來に奥樣を追出して自分が跡へ直るなんて言ふさうでございますもの、奥樣は餘つ程確りなさらないといけません」

　小夜子は心に成程と頷いたが、さあらぬ體で、

「そんな人の蔭口を取上げるものぢやありません、何うならうとも神樣のなさる事だから」

　小間使は座敷を片付けてゐる、腰元は毎夜の通り含嗽の水と受水瓶とを持つて來た、小夜子は努めて冷靜の態度を裝つて、悠悠と口を嗽ぎながら、深き心を言葉に籠めて、

「毎晩遅くなつてお氣の毒だネ、ホントにおまへ達には隨分世話になつたよ、モー此方の事は可いから、おまへ達は寝てお呉れ」

　それとなく今迄の禮を言ひ、其身は奥の寢室

へ引取つた、婆やは洋盃に水を容れて盆に載せ、小夜子の床の枕元へ置いて行つた、二つ列べた臥床の中央に光子は先に寢入つてゐる、主人の床には此も疾に布かれた夜具が新しい儘で電氣が白く光つてゐる、小夜子は平生に變らぬ態度にて、寢衣を着換へ帶を拔き、脫いだ衣服を自分で疊んで巾箱の中に納れ、我子が夜被から乘出してゐるのを見て、その夜被を掛けてやり、良人の臥床をちよいと睨みながら、自分もそつと床の中に這入つた、

心に萬斛の愁ある身は、枕に就いても眠る事は成り難く、夜の闌け人の靜まるを待つて、竊ろに行末や越方を考へ、人知れず袂を絞つて、身の運命の幸無い事を歎息した。

ああ是非が無い、斯うなるのも因緣だ、いつか一度は斯んな事が發つて來ようと思つてゐた、全體最初から我身の人格といふものは些つとも認められてゐないのだもの、男爵の姬よ少將の娘よと、肩書ばかりが虛榮心を唆つて、我身は此へ貰はれたのだ、その肩書が無くなつて、百姓の子よ棄兒よと判かつたら、嘸や良人も我身に愛想が竭きたらう、良人が今まで我身の爲めに騙されてゐたと思ふのも無理は無い、良人は好人物だ、お坊樣育ちの善人だ、良人には何の罪も無い、斯うなつたのは我身の運だ、前の世からの約束だ。

我身は何うしても身を引かねばならぬ、良人の言葉に從つて、今夜限り此家を立退かなければならぬ、斷然と身を引きませう、思ひ切つて立退きませう。

斯う思つて側と傍を見ると、何にも知らない光子は懸念も無くすやすやと眠つてゐる。

小夜子は思はず身を顫はせた、此の可愛い光子を置いて、我身は何處へ身を引かう、此子を一人殘して行つたら、後で何んな目に逢ふだらう、エイ悲しい、情け無いと、覺えず身體を拔き出して、懷かしさうに我子の顏を覗いた。

看れば看るほど愛らしい我子の寢顏、今迄は憂きにつけ辛きにつけ、此子の顏を見て我が心を慰めた、此子があればこそ何事も辛抱が出來たのだ、良人には飽かれるとも、此子さへ守立てて立派なものに仕上げれば末は樂みだと思つてゐた、將來に此子が學校へ上るやうになつたら、我身が手を把つていろはの文字から敎へませう、昔習つたお手本で書の稽古もさせませうと、思つてゐた甲斐も無く、今を限りに別れなければならないか。

ああ可哀想だ、我身が急に居なくなつたら此子は何んなに歎くだらう、病氣にでもなりはしないか。

我子の事を思ふと、小夜子は容易に身が引けない、最愛の子を一人殘して此儘立去る氣にはなれない、姑は我身の素性を御存知だから、明日にも加賀の溫泉へ行つて、今度の事をお話し申さうか知らん、さうしたら良人に執成して無事に治めて下さるに違ひ無い、よしや今迄通りにならないでも、我身は此子とさへ一緒に居られれば、外へ別居しても關はない、何んな身分になつても厭はないなんぞと思つても見たりした。

イヤイヤそれも未練だ、良人があつての子供だのに、良人の心が我身より離れたものを、今更子供の愛に惹かされるのは女女しい心だ、矢つ張り素直に身を引いた方が可い。

そんなら何處へ身を引かう、何ういふ風に身を引かう、今更東京の實家へ、泣歸り度くない、一旦生みの親に會つた身の、再び栗山家へ歸つて母や妹の厄介になる氣は無い、鳥海の伯母は未然を察して、いつでも世話をすると言はれたが、斯んな身になつてから伯母の家へも行き度くない。

小夜子の胸中には端無くも勇の事が閃電のや

うに浮かんで來た、あの親切、あの熱心、今も昔に變らなければ、悅んで我身を救つて下さるだらう、此の奈淸句の別莊で逢つた御樣子では、昔も今もその心が變るまい、なれど我身は既に一旦人に嫁して子まで設けた身の上だ、何でおめおめと再び勇さんの親切を受けられよう、それに今更勇さんの處へ走つては、前前からの罪あるやうに、銀野家の人に疑はれよう、良人にさへ未練の無い身だから、勇さんの事も忘れなければならぬ。

ああ今迄の事は夢だ、全く一場の夢だ、生みの親に捨てられた身が、餓ゑても死なないで栗山の父に拾はれ、女一通りの敎へまで受けて、家もあらうに神戶屈指の財產家へ嫁入したのは、我れながら奇しき運命、恰も廿年の夢にも似てゐる。

その夢はモー覺めた、世中に對する自分の務めはもう濟んだ、此上は昔の百姓に還り度い、生みの親が生きてゐたら、その田舍へでも引込み度い。

浮世には何の望みも無い、生きてゐるといふ樂みも無い、良人には捨てられ、我子には離れ、此儘何處へ行かれよう、全く此の浮世には我身一つを置く處も無い：

考へれば考へるほど悲しくなる、寧そ死……と思つて我子の顏を見ると、死ぬより辛い心の切なさ、覺えずワッと一聲泣いて、枕に顏を伏せて了つた、その聲に驚いたか、光子は忽ち眼を開いて、

「母ちやま、何うしてゐるのう」

二

世間の富豪の家庭では、多く子供を奉公人任せにするから、兎角親子の情愛が薄いけれども、小夜子はその弊に陷るまいと、最初から我子の事は成るたけ自分の手に掛けるやうにした、その癖乳母もあり腰元も居て、人の手は多いけれど、日中だけは乳母に託しても、夜分は自分の傍へ寢かして、何から何まで世話をした、あまり子供の事を大騒ぎするので、自然と世帶染みて來て、それも良人の氣に入らぬ原因の一つになつてゐる。

子供の方でも他人から何で斯んなにお母さん子だらうと言はれる程、母に懷き、母を慕ひ、母の跡ばかり追つてゐた、况して此頃は自分を可愛がつて吳れるお祖母樣も不在であり、父親は滅多に歸つて來ず、母親一人を神とも佛とも賴つてゐたのに、その母親が思ひ掛け無く、悲しさうに泣いてゐるので、自分も急に心細くなつた。

「母ちやま、おぽんぽんが痛いのう」

小夜子は顏を揚げ得ない、顏を揚げると愈よ泣顏を見られるから、急に夜被を引冠つて、

「ああ然うだよ」

子供は心配さうに顏を前へ寄せて、

「おつくを服んだの」

と優しく尋ねる、母は愈よ堪へ難く、そつと手巾を出して涙を拭き、

「おつくは服まないが、モー直き癒るよ」

母親の聲は涙に潤んで沈痛の色を帶びてゐる、子供心にも何と無く尋常の態度でないと怪まれて、悲しいやうな氣味の惡いやうな感じがした、斯る時には父親がゐると、いかばかり心强いだらうと思つて、父の臥床を振返つたが、父の姿の見えないので、一層心寂しくなつた。

「母ちやま、父ちやまは」

此の一言は小夜子の胸を刺すやうに感じた、何と答へよう、歸つたと言はうか、歸らないと言はうか、そのお父樣は最早我身の爲めの父樣で無いものを。

「父ちやまはね、先刻お歸りになつたけれども、復た御用でお他所へいらしつたの、明日こそ必

然お歸りになりますよ」

夜被から顏を出して、前よりも判然した聲となつた、明日こそ我身が居らぬものを、良人は必ず家へ歸るだらうと思つてゐる、光子は父の不在を聞いて愈よ心細い、今夜に限つて何か怖い者でも襲つて來るやうな心地がして頻に恐ろしくなつて來た。

忽ち天井で鼬が鼠を追駈けるらしい大きな音がした、光子は慌てて、

「母ちやまー」

と母の方へ身を寄せた、小夜子は自分の夜被の袖を高く揚げて、

「サア此へお這入り、今夜は一緒にねんねしようネー」

日頃は同衾を害ありとして別の床に臥かしてあれど、今は一生の別れとて、我子をぐつと引寄せた。

光子は嬉しさうに母の身體へ抱付いたが、母の身體は日頃にも似ず冷えてゐる、筋も肉も硬ばつてゐる、眼を看ると涙が一杯溜つてゐる、子供心にもその態度の平日に異つてゐる事を感じて、

「まだおぽんぽんが痛いのう」

母は我子の頭を二つ三つ撫でながら、

「イイエ、モー癒つたよ、だから坊もねんねおし」

光子は眼が冴えて睡られない、久振で母の臥床へ入る事が何より嬉しく、頻に甘えるやうな調子で、

「母ちやま、今度はいつ須磨へ行くの、須磨へ行つたら濱へ出て復た貝を拾ひ度いことネー」

別府温泉から歸つた後父と母とに伴れられて須磨の別莊へ兩三日逗留し、潮の干た間に海へ出て樂しく遊んだ事を想出したのである。小夜子は其頃の一時なりとも良人と睦まじかりし事を憶ひ、今の身に較べて今昔のやうな感がある。

「近日にお祖母ちやまがお歸りになつたら、お祖母ちやまに伴れて行つてお戴き」

子供は其意を解し得ず、

「お祖母ちやまと母ちやまと」

小夜子はホツと歎息して、

「イイエ母ちやまはモー行けないの」

その聲の細く悲しきに子供は驚いて、

「アラ何故」

と母の顏を見上げた、母は復た泣いてゐる、今は隱すに隱されない、寧そ事實を明かして子供心にも覺悟を極めさせようと、沈痛な聲で、

「なら光坊や、母ちやまはネ、明日からお不在になるから、坊やは從順しくしてゐるんですよ」

子供は吃驚した聲で、

「何處へ行くのう」

小夜子は漸く、

「遠くへ」

と微かに答へた、子供は急に悲しくなつてベソをかきながら、

「坊も一緒に」

小夜子は隕つる涙を拂つて、

「一緒に行けるやうなら可いけれども、何うしても一緒に行けないんだよ、坊はお怜悧だから、母ちやまが居なくつても從順にしてゐますネー」

子供は急に身を踠いて、

「イヤよイヤよ、何處へも行つちやイヤよ」

母の衣服を一生懸命に握つた。今にも母に逃げられるやうな氣がして放さじと押へてゐる。

「ヨー母ちやま、坊はモー玩具も何も要らないから何處へも行つちやイヤよ、ネー母ちやま」

子供の心血は此の言葉に籠つてゐる、もしも母に逃げられたら、小さい命も絶えんばかりの悲みを表してゐる、母は無言、再び其事を言

出すべき勇氣が無い、子供はまだ安心がならぬやうに母の顏を覗いて、
「母ちやま、ホントに行つちやイヤよ」
母は凝乎と我子を抱き締めた。
「モー行かない、おまへが爾ういふからモー何處へも行かないよ」
子供は念を押すやうに、
「きつと」
小夜子は眞實らしく、
「ああ、ホントに行きませんよ」
欺くも罪なれど、實を告げるも罪作りと、母は頻に我子を宥めた、光子も漸く安堵したといふ風に、
「坊はモー須磨へもどつこへも行かないで可いのよ、坊はモー是れから何でも從順しくするのよ」
さも自分が惡い事を爲たから母が何處へか行くとでも思つたやうに、子供ながらも頻に詫入るやうな口振、あゝ罪も無い子供にまで斯んな心配をさせるかと思ふと、小夜子は身も世もあらぬ心地、何うしてもその傍を離れるやうな氣になれない。
兎も角も我子に安心させて快く寢かさねばならぬと、小夜子は氣を落着けて心を鎭め、每晩光子を寢かし付ける時のやうに、お伽話をして遣つたり、頭を撫でたり背を擦つたりして速く眠るやうに骨を折つた、そこは子供の頑是無く、母の言葉を眞として漸く安心した爲めか、次第に氣も倦み眼も疲れて、遂にとろとろと眠りに就いた。
子供が寢入つてから小夜子は再び深い思案に陷つた。

三

思案に思案を累ねた末、深く心に決する所あつた小夜子は、やがて我子の寢息を窺つて、そうと片足づつ夜被の下から拔け出でて、出た跡の夜被を風の入らぬやうに押付けて靜に立上つたが、手を伸ばして電氣燈の光力加減器を轉し、五燭に下げてあつた燈光を二十四燭に戾した。
室内が俄にパッと明るくなつたので、人に見られはせぬかと四方へ心を配つたが、何人の覗いてゐる樣子も無い、小夜子は手速く寢衣を脫いで、日中着てゐた衣服に着換へた、柱鏡の前で髮の亂れを直した後、襖をそつと開いて、次の間なる自分の部屋へそつと入つた。
小じんまりした六疊間、簞笥も列べてある、机も置いてある、花も生けてある、小夜子は先づ電燈を點じて、机の近邊を片付け初めた、立つ鳥は跡を濁さぬ譬へ、室内を取亂して笑はれまじと、大抵なものは簞笥に藏ひ、生みの親の戒名や伯母から來た手紙なぞは懷中物に納れて帶に挾んだ。
室内を思ひ通りに片付けた後、小夜子は机の前に坐つて、抽斗から透かし模樣のある卷紙を取出した、硯箱の蓋を除つて、硯に水滴の水を注ぎ、墨を手にして音せぬやうに徐徐と磨りながら、頻に感慨を催して、
「あれ程お世話になつたお母樣に、一日でもお目に懸らないのは何より殘念だ、お母樣も後で此事をお聞きになつたら嘸吃驚なさるだらう、近頃は倅の樣子も善し、是れなら當分不在にしても安心だと仰しやつて、山中の溫泉へいらしつたが、そのお不在中に斯んな事が發らうとは夢にも御存じあるまい、世間では姑といふと、必ず氣むづかしくつて機嫌の取り難いやうに言ふが、家のお母樣はホントにお優しいお方で、わたしを實子のやうに可愛がつて下さつた、お母樣はわたしの肩書を彼是とお思ひなさるのではない、全くわたしといふものを心から愛して下さつたのだ、わたしはその御恩返しに何處までも孝行して、お母樣の御生涯を氣樂にお過ごさ

せ申し度いと思つたが、斯ういふ事になつては仕方が無い、せめては心のお禮を細細と此へ書き殘して行から、そして光子の事もよくお願ひ申さなければならない、わたしが居なくなつたら、あの子の頼りにするものはお祖母様ばかりだ、お祖母様がいらつしやるからわたしも少しは氣が安い、どうぞ二度目の母樣が來ても、あの子を窘めないやうに氣を付けて戴き度い、ああ何よりも案じられるのはあの子の身の上だ」

墨を磨り終つて筆を採り、心の熱情を詳細に書綴つて、二たびまでに讀返した、淡色の花模樣ある封筒にその手紙を堅く封じ込み、御母上樣小夜子より、書置の事と表書して机に載せ、水晶の文鎭を其上に置いた。

神經の働く人は斯ういふ場合に却て氣の落着くもの、小夜子は慌てて去つたと思はれぬやう、使つた筆を管洗でよく洗ひ、硯の中も配置良く片付けて蓋をした、硯箱の中には端溪の硯、支那の墨、繪筆までも納れてある。

「斯うして置けば光子が大きくなつた時、わたしの形見としてお祖母様からあの子に渡して下さる、あの子がそれを使ふやうになつたら、わたしの事を憶出して呉れるだらう」

小夜子は再び室内を隈無く見廻して、モー是れで思ひ殘す事は無いと、電燈を消して襖を締め、以前の寢室に戻つて我子の枕邊に寄添つたが、煌煌たる電燈の光に一入照添ふ我子の顔をそつと覗いた。

光子は熟く眠つてゐる、母に添寢の心持で安らかに寢入つてゐたが、何んな嬉しい夢でも見たか、圓い頬へちよいと笑靨を見せてニコニコと無意識に笑つたかと思ふと、忽ち口をもごもご動かした、その瞬間の愛らしさ美しさ、小夜子は思はず抱付かうとしてハッと手を停めた。

斯んな可愛い子がありながら、モー是れが一生の別れかと思ふと、小夜子は身體を二つに裂かれるやうな心持がして、急には其場を去るに去られず、名殘惜し氣につくづくと其顔を眺めて、寢てゐる心にも通じるやう、

「さらば光坊や、母ちやまはモー行くからネ……坊やも達者で、煩はないやうにしてお呉れ」

聲は途切れて、息のみ反跳んで來るのを強ひて押へるやうにして、

「違つたお母ちやまが來てもネー、何でも言ふ事を聞いて從順しくおしよ、此の母ちやまはモー歸つて來ないからネ、坊やは大きくなつたら勉強して立派な娘になつてお呉れ、そればつかりがお願ひだよ」

心血を絞り出したやうに言つた、その時光子は無心に寢返りした、小夜子は眼を覺まさせじと急に電燈を以前のやうに暗くした。

いつまで斯くてあるべきぞと小夜子は漸く氣を取直し、そつと障子を開いて縁側に出で、猿を外して雨戸を一枚開けた。

薄曇りの空も何處かに月が殘つてゐると見えて、庭の飛石が白く見える、小夜子は庭下駄を穿いて二足三足前へ出たが、氣の所爲か我子の聲が聞えるやうだ、ハテ眼を覺ましたかと、立戻つて雨戸に耳を寄せたが、寂として何の音も無い、小夜子は再び出ようとすると、何者にか後ろへ引戻されるやうな心地がして、庭先を暫く行きつ戻りつしてゐたが、最後に思ひ切つて庭を通り拔け、裏口の小門を開いて忍びやかに外へ出て行つた。

諏訪山の森の茂みで、ホーホーと寂し氣に啼く梟の聲が、人を闇い處へ呼ぶやうに聞えてゐる。

一　再會

朝北夕南、初秋の日和の漸く定まつた徵に、

山から吹卸す朝の北風が可なりに強く、潮風と潮を吹渡つた、池の如な灣内にも波先が白くなつて見える、昧爽に松島を出た乗合舟は追手に帆を一杯揚げて、島蔭を縫ひ縫ひ、宮戸島へ向つて駛つてゐる。

「どうだらう船頭さん、今日のお天氣は一日保つだらうか」

「大丈夫ですよ、今は少し曇つてゐますが後に必定霽れるから、大鷹森へ登りや金華山の方まででよく見えます、大鷹森の景色は日本一だと云ひますが、今日のやうな日でなくつちや、日本一の景色は見られませんや」

艫に坐つてゐる老人の船頭は胴の間の客人に返事をしながら、帆に受ける風の方向を見て、押へてゐる綱をギーッと直した。

「ぢやマア好い鹽梅だ、今日こそ大鷹森の景色が悠悠見られるね、今迄三度も松島へ來ながら、天氣都合が悪くつて、一度も大鷹森へ登つた事が無い」

縞の衣服に縞の羽織で、旅商人らしく見える四十恰好の小作りな、顏に愛嬌のある男は、前路に鬱然と群島の間に聳えてゐる大鷹森を望んで、樂しさうに卷煙草を喫つてゐる。

最前までは舟が隨分揺れたので、胸の悪さうな態度して、船緣へ身を靠れて折折生唾を海へ吐いてゐた若い女は、良人らしい洋服の、でつぷり肥つて口髭の濃く長く生えてゐる赭顏の男を顧みて、

「まだ却却着きませんか、もつと近いと思つたのに、隨分手間が取れますねえ」

「だつても松島から三里もあるもの、先刻迄は一番廣い水道を通つてゐたから波も荒かつたが、今は甲の浦へ乗込んだから大層靜穏になつた、モーそんなに苦しくはあるまい」

「樂にはなりましたが、二度と斯んな處へ來るのは御免ですよ」

「その代り大鷹森へ登りや非常の絶景で、途中の苦みも忘れて了ふよ」

と妻に談しながら、眼は頻に隣席の男のスケッチブックに注がれてゐる。

濃い髮の毛を長く肩まで垂らして、其上に色の褪めた麥藁帽子を淺く載せてゐる四十前後の、神經質らしい顏の色の淺黑い男は、垢染みた紺絣の單衣に小倉の袴で、もし畫を描いてゐなかつたらば、誰の眼にも老壯士の成れの果とより思はれさうもない。

「實に巧いものだ、名ある大家でも是程の技倆の人は滅多にあるまいが」

と聞いてゐた洋服の男は、中學校邊の先生か何ぞで美術趣味もあると見えて、窃に驚嘆してゐたが、

「失禮ですがあなたは大鷹森へ初めてお登りですか」

と敬意を表して慇懃に尋ねた、長髮の男は別に振向きも向きもせず、頻に畫面を眺めては鉛筆を紙の上に走らせながら、

「イヤ、ずつと以前にも來た事がありますよ」

「あなた方の眼から御覽になつて、大鷹森の景色は何とお思ひになります、矢張り日本一の絶景と評しても差支が無いでせうか」

美術家の風景論こそ面白からうと若い女も良人の方に身を寄せてその答を待つてゐる、商人風の男は最前まで此の長髮漢を老書生かと輕蔑してゐたが、此の問答を聽いて不思議さうに、じろじろと其顏を眺めてゐた、長髮先生はスケッチに身が入つて、談話の方には氣乗りせぬ語調で、

「さうですね、趣味の深い點から言つたら恐らく全國無比でせうね」

言葉を切つて鉛筆を二三度動かしたが、復た思出したやうに、

「江見の龍華寺とか、鳥羽の日和山とか、上總

の鹿野山とか、壯大莊嚴の景は他にもありますが、半日も一日もその景に對してゐては倦厭て來ます、此の大鷹森は一方が外海に臨んで金華山の邊まで見渡せるやうな雄大の景もあり

復た暫く默つて了つて、筆も動かさないで前面に現れた奇岩を凝視と看てゐたが、忘れた時分に言葉を繼いで、

一方は松島灣內の群島を脚下に控へて、所謂る奇景も絶景も勝景も、あらゆる種類の風景を一眸の下に蒐めてゐますから、一日看てゐても饜きません、二日看てゐても饜きません、其點を以て日本一の風景と稱しても差支はありますまい

艫の老船頭は雁首の大きな眞鍮の煙管を咬へて、半分灰になつた刻煙草をスパスパと吸込んでゐたが、我が土地の自慢を裏書されたやうに喜んで、

「だから異人さんのお客でも伴れて行くと、一日山の上で遊んでゐて、風が出るからと云つて催促しても、急には降りて來ねえで困る事があります、西洋にも斯んな景色は無いつてネ」

舳にゐて帆の一番綱を舵木に結び直してゐた若い船頭も口を出した

「去年の秋よ、俺が伴れて行つた女連れの異人なんか、あんまり近くなつて西風が出ちやつたから遂う遂う歸る事が出來ねえで、仕方無く庄屋さんへ賴んで一晩泊めて貰つたが、若い綺麗な娘さんなんか、オイオイつて泣出したぜ、異人さんの女は綺麗だけど、泣出されるとお座が醒めちまふなあ」

「お座が醒めたつて醒めねえつて、てめえにや用はねえから大丈夫だアハヽ」

正面に受ける風の强さに舟は早くも小鍋崎へ近よつた、艫の船頭は帆の身繩を胴枕の蛇木から外して手に持つた

「三太、帆を下せ」

舳の若い船頭は五番の帆綱を手速く解いて、下から帆を手繰り込む、身繩が延びて桁棒がずるずると下りて來るのを帆と一緒に摑んで胴の間へ置いた途端、老船頭は速くも舵を引揚げた。

「三太、速く突張れ」

風に押されて舟が廻ると、三太は水棹を把つて戻さうとしたが、棹が遲かつたので、舟は少し横に流れた。

「ナニ馬鹿あするた、傍視でもしやかつたらう、別嬪の尼さんでも通るかと思つて」

老船頭も棹を把つて舟を岸へ寄せると、三太は長い板子を艫から砂へ橋に架けた、眞先に商人が舟から降りた、續いて若夫婦が互に手を執合つて危なさうに板子を渡つた、長髮の畫家は容易に立たうともしないで、

「モシ船頭さん、別嬪の尼さんと云ふのは此島にそんな人がゐるのかえ」

「アハヽ、あなたも却却油斷がありませんネ、大鷹森の景色が佳いか、尼さんの容色が佳いか、秤に懸けて見度い位なもんでさあ」

「此の土地の者かえ、外から來たのかネ」

「何でも二年程前から此島へ來てゐるつていふ事です、深い事は知られえが、折折此の濱路で見かけると、三太なんざあ腰を拔かして動かれえんで」

舟の外へ出て長髮漢の下りるのを待つてゐた三太はどうま聲で、

「謔を吐くなよ、おめえぢやあるめえし、サアあんた、早くいらつしやい、わしが今皆さんを案內するから」

畫家は傍にあつた扁平い匣と信玄袋を手拭で結んで肩に掛けながら、

「僕は山へ行かん、僕は一旦月濱の漁夫の家へ行つて暫く此に逗留するんだ」

「成程あなたの切符は片道でしたつけネ」

老船頭は氣が付いたやうに最前舟の出る時受取つた切符を檢めてゐる。

「ナンだ、そんなら待つてゐなくつても宜かつた、あの客人は既うあんたに行つちやつた」

二人は後れ馳せに山の道へ駈け登つて、二人の先に立つて行つた。

二

浮世に遠き離れ島、斯んな處に人棲む家のあらうとは思はれねど、島の南端、磯清く、波静なる處に月濱といふ漁村がある。

昔秀衡に驕せられて陸奥へ下つた都の商人、毎年秋になると松島に遊び、此の宮戸島の南端に夜を明かして、終宵海上の月を眺めたといふ勝地である。

昔ながらの一漁村、潮の風、海の波には馴るれど、世間の風波に袖も濡れねば、人情の敦き、風俗の優しさ、太古の民も斯くやらんと思はれる。

今日は日和が好いので、働ける男子は皆な海に出て家にゐない、村外れの漁夫の家では女ともが昨日釣れた名物の大鯊を串に刺して爐の火で燒いてゐる。

「ヤア、今日は、久闊」

いきなり表から土間へ入つて來た長髪の老書生は、蝙蝠傘を框に立てかけ、肩から袍と信玄袋を板の間に卸して、興醒したやうに突つてゐた、爐の前に鯊を燒いてゐた白髪交りの婆さんは吃驚したやうな顔して、

「誰だつけかナ」

と急に憶ひ出せない、土間で頻に鯊の腸を拔いてゐた若い女は鯊を潰したやうにその顔を守てゐる。

「忘れたかなア、何にしても既う十六七年になるからなあ、前年暫く厄介になつて、毎日大貝森へ、繪を描きに行つた鳥海だよ」

婆さんは合點したと

「ウム、あの書生さんかネ、マア悉皆見違へちまつた、尤もわしだつて斯んな白髪になつた位だからなあ、お前や、早く湯を沸かしてお茶を上げろや、鳥海さん、是れは嫁ですよ、あのソラあなたに可愛がられて畫なんぞ描いて貰つた小僧兒の嫁よ」

若い女は羞かしさうに會釋しながら、庖丁を俎板に置いて、急いで裏の方へ立つて行つた、男は爐に腰をかけて、開いた障子で表の路を見つゝ媚ぎながら女の姿を見送つて、

「ほう、明ちやんはそんなになつたかネ、尤もあの時十三だつたから、モウ[illegible]になるネ、なあ、生れてからまだ馬といふものを見ないから馬の繪を描いてくれろと云つて、島を描いてやつた事があつたつけネー、外の子供も父さんも皆な強健かネ」

婆さんは少し沈んだ聲で、

「阿爺は去年死亡つてネー」

「オヤ、あの強健な人が、何うして」

「病氣なら仕方もないが、此の近所の海の事を知つてゐるからつて、鯨獵の船に頼まれて行つて、金華山沖で難船したまつてネー」

「ヤレヤレそれは氣の毒な事をしたネ、親切で好い人だつたが」

婆さんは縁に積んであつた燒薪を片寄せて、

「マア此方へお上んなさい、今度も矢つ張り繪を描きにござらしつたの」

「復た暫く厄介になり度いんだが、併し僕はまだ何うなるかよく分らん」

話しかけてゐる處へ、若い女は茶碗に茶を注いで鋼けたお盆で持つて來た、男は茶碗だけ受取つたが飲まうともしないで下に置いた、

「時に少し訊き度い事があるがネ、今此へ來る船の中で此島に近頃若い尼さんがゐるやうな事を話してゐたが、そんな人がゐるのかネ」

「ハア、ゐるですよ、若い綺麗な尼さんでネ、

皆な知れてゐるし、山に猛獸毒蛇が居る譯で無し、何にも心配する事は要らない、風景も佳し、氣候は良し、最初此地に居をトした妙善尼とかいふ人は、餘程の風流人であつたらう―

磬の音を尋ねて尚ほ深く進んで行くと、松原の漸く盡きんとする處、籠るやうに内海の方へ突出でた松樹の此方に、極めて小さな庵室らしいものが見える、花園の背か、彼岸櫻に圍石を載せてあつて、樹木の柱に額も掛けないのは却て風流に思はれる、玄關も無く、入口も無く、廂の下に障子が二枚閉てゝあつて、障子の内から女の讀經の聲が洩れてゐる、勇は胸が躍いた、身體が急に熱くなつた、なれど自分で氣を鎭めて、中の勤行を妨げぬやう、障子の外に佇んで、耳を澄まして聽いてゐた、

「願くは弟子等、命終の時に臨んで、心顛倒せず、心錯亂せず、心失念せず、身心に諸の苦痛無く、身心快樂にして禪定に入るが如く、聖衆現前したまひ、佛の本願に乗じて阿彌陀佛國に上品往生せしめたまへ、彼の國に到り已つて、六神通を得て十方界に入つて苦の衆生を救攝せん」

銀鈴を鳴らすやうな冴えた美しい聲は正しく小夜子である、紛れも無い小夜子である、四年以來尋ね歩いて今迄知れなかつた小夜子である。

外に聽く人のありとも知らず、純潔無垢の至心を以て佛に仕ふる比丘尼、今はもう浮世の事も忘れてゐる、身の素性も忘れてゐる、神戸の事も忘れてゐる、東京の事も忘れてゐる、幸も不幸も苦も悲みも、人生の事は皆な忘れてゐる、願ふは往生安樂國、頼むは彌陀の本願力、至心歸命西方阿彌陀佛と、立つて拜し、坐つて拜し、其身も心も怠り無く、諸天善神の佛菩薩も皆な此の庵室に影向したまふ氣色である。

やがて勤行も濟んで、比丘尼は經机を片寄せて立上つた、靜かに佛前の御燈を消して頸にかけた袈裟を外した様子、最う丁度好い時分と、勇は低聲に、

「もし、御免なさい」

障子の外から聲かけた、何氣無くハイと答へて障子を開いた比丘尼、

「アッ勇さん」

驚いて立つた二人とも言葉が出なかつた、勇もその變り果てた姿を見て寧ろに哀れを催した、さりながら氣を落着けて熟く視ると、忍び姿の相好に圓頂黒衣の品の好さ、娘時代の小夜子よりも、妻時代の小夜子よりも、今の姿が最も良く似合つてゐる、浮世の塵波を離れ、心の變を忘れて、此の閑天地に何の顧慮も無く佛に仕へてゐるから、身心よく融合して自ら天眞の美が現はれるのであらう。

庵室の中は、六疊間の半分が佛壇になつてゐて、人一人の外には住めさうも無い狹い座敷である、障子の内が直ぐ疊、その疊も色が茶色になつてゐるけれども、流石に佛壇は光彩燦爛としてお打敷には錦の帛が用ゐてある、勇は閾越しに疊へ腰かけた、比丘尼は夏にも冬にも變りない煎餅のやうな薄い座蒲團を取つて勇の前へ押し進めた。

「マアこれをお敷き下さい」

勇は別に敷かうともせず、頻に四邊の様子を丁寧に眺めて、

「佳いね、實に佳いね、全く理想的だ、よくこんな佳い處が見付かりましたね」

勇の心には小夜子の尼姿と此の庵室と眼前の風光とが自然の一大畫面になつて浮動してゐるのである、最前此處へ來る途中ではまさか小夜子に會つたら何と云はう、斯う云はうなぞと思つて來た事もすつかり忘れて了つたのである、

小夜子は臺所の火鉢に掛けてあつた土瓶の澁茶を茶碗に汲んで持つて來た、

「勇さんは何時此の島へお入來になりました」

勇は漸く我に歸つて、其儘思想の宮殿の中に入つて、自分の心に戻つた。

「先刻着いたばかりです、舟の中であなたの噂を聞いたから月濱へ行つて實否を確めて、直ぐに此へ飛んで來たのです」

「矢つ張り御遊歴にお出なすつて――」

何氣無いやうに言つた言葉は勇の心を激動させたか、勇は身體を固くして、小夜子の顏を怨めし氣に眺めた。

「小夜子さん、イヤ今は條寶尼さんですか、佛門に入つたあなたに斯ういふ事を言つては惡いかも知れない、あなたは僕が氣樂に遊歴してゐられると思つてますか、あなたの事を忘れて了つて花晨秋宵を樂しんでゐる人間だと思つてすか、今迄の四年間にはあなたの行方を尋ねる爲め、實に何程苦勞を爲たか知れませんよ」

聽いてゐた小夜子は心の惑ひを隱すやうに俯いて默つてゐる、勇は總身の血液を言葉に罩めた語調で、

「小夜子さん、あなたの行方が知れなくなつてから眞に心を痛めたものは恐らく僕が第一でせう、栗山の叔母樣からあなたの事の御通知があつた時、僕は直ぐ小田原の大導寺老人へ駈付けたら、一ケ月前に九十三歳で歿くなつたといふところでした、それから東京へ行つて各處の易者や人相見に見て貰つても、死んだといふものもあり、生きてゐるといふものもあり、一向判斷が付きません、叔母樣も其事で神戸へ行かれたが、歸つての話に、一向手懸りが無いと言はれます、そしてあなたの失踪した原因に就ては叔母樣から何の説明も無いので僕は分りません、唯良三君の放蕩に愛想を盡かしたと云つてゐたすつたが、それだけではどうも腑に落ちないと思つてゐたら、今井村へ行つて調べた時、同じ村の女が神戸の三の宮へ奉公に出てゐると聞いて、もしやそれから事が發つたのではあるまいかと推測したのです、兎に角あなたの生死を確かめなければ、僕は第一栗山の叔父樣に申譯がありません、そこで母にも僕の心を告げて、あなたの行方を搜すのが第一の目的、その序でに書の材料も蒐める心算で、全國行脚と出かけたのです」

浮世を忘れた條寶尼も、當年の事を語られると、心が昔に戻つて恩愛の情が忍び難く、愁然として男の談話を聽いてゐる。

「僕はよもやあなたが此の東北の地に來て居ようとは思はないから、最初の三年間は關西地方ばかり廻つてゐましたよ、山陰山陽から九州四國、或は紀州路へ出て吉野山へも行つたり、或は熊野へ參詣したり、又は無[illegible]の方まで搜しましたが、何うしても手懸が知れないので、今年の春から方針を變へて、上州野州常陸の邊から段々東北へ向つて來たのです、僕は生涯かかつてもあなたの行方を搜して歩く所存でした、設令骸の土となつてもあなたの行方の知れない内は滅多な事で家へ歸らないと言置いて來ました、今聞けばあなたは何うして[illegible]家を出て、何うして此へ來たのです」

外ならぬ勇に質問されて小夜子も今は隱すに隱されない、漸く顏を少し揚げて、往事を語るも心苦しさうに、自分の家出したのはお察しの通り、今井村の女から我身の素性が良人の耳に入つた故である、家を出た折は決死の覺悟であつたけれども、死處を得ないで心を飜し、丹波國の尼寺へ行つて髪を剃したのである、それより三年程佛道を修行してゐる中に、此の宮戸島に先住の殘した庵室のある事を聞いて、若い尼僧が世を避くるには屈強と二年前から此地に來た事を搔摘んで物語つた。

されど小夜子が常住不退の地と定めたのに、世を避くる爲めばかりであつたらうか、外には深い意味が無かつたらうか。

勇は十七年前に此の松島灣の舟の中で、また紅いリボンを下げてゐた小夜子達に、大鷹森の形勝を物語つた事を憶出した、スケッチも見せた、描き上げた畫も見せた、其時の印象が今の小夜子を此島へ引寄せたのではあるまいかと思ふやうな氣もした。

四

身體こそ世を遁れにも、小夜子の心は未だ全く、恩愛の絆を脱し得てゐないのである、孤衾寂しき霜の夜、春の雨の徒然に、神戸の我が兒は何うしてゐるかと憶出す事もある、大鷹森の峯に登ると、前年の舟遊が心に浮かんで、昔の娘時代が戀しくなる事もある。

家を出て寺に入つてから、新聞といふものを手にした事が無かつた、新聞に接する機會が無いのではないが、新聞を手に取つて讀まうといふ氣も無かつたのである、浮世の事は更に何事も聞かなかつた、神戸の銀野家がその後何うなつたか、東京の實家や鳥海家の人人が何うしてゐるか、そんな消息は耳にも入れた事が無かつた、自分の頭には四年前の浮世ばかりが映してゐて、我が兒の事を想ふと、??した前髪がその額に蓋るやうな白い額にバラリと下つて、人形抱いてちよこちよこ駈け歩く小さな愛らしい姿が何時でも見えて來るけれども、オホホ今では既う前髪を揚げてリボン結んで學校へ通つてゐるだらうと氣の付くやうな事もあつた、知り度いのは其後の消息、今の銀野家の動靜である

「勇さんは神戸へおいでになつた事がおありですか」

耐へ兼ねて談話の緒を引出した、勇もその胸中を察してゐる、問はれずとも話つて聞かせようと思つて來たのである、

「神戸へは二度も出たが、銀野さんへは一度も顏を出しませんでした、もしや痛くない腹でも探られるやうな事があつてはならんと思つて、甚三さんにも御老母さんにも會ひませんでした、併しお家の近所でよく訊質して知つてゐます、あなたの跡へは三の宮に圍つてあつた女が入込んでゐますけれども、御老母さんがお嚴格しいので奧樣とは呼ばせない、御新造さんと呼ばせてゐる、聞きました、あなたのお子さんは御老母さんと一緒に今では須磨の別莊へ別居してお在ださうです」

それを聞いて小夜子は始めて安堵した、我子が祖母の手に保護されて、本宅と離れてさへゐればそれほどの苦痛はあるまいと、今迄堅く閊へてゐた胸が漸く下つたやうに感じた。

「そこで小夜子さん、イヤ俊瓊尼さん、どうもあなたの事に就ては僕の母が何程心配してゐるか知れませんよ、今では栗山の叔母様の念頭にあなたの事があるか何うかは疑問ですけれども、僕の母は今でもあなたの事を心配して、僕の旅行先へ手紙を呉れる時にも、必ずあなたの行方はまだ知れないかと尋ねて來ない事はありません、最初あなたが家出をなすつた時には、母はあなたを恨んでゐましたよ、あれ程後の事を托して熟く談して置いたのに、是程の事があるなら、何故わたしの方へ相談でもして呉れなかつたらう、何故家へ逃げて來ないだらうと、頻に不平を言つてゐました、母はあなたが見付かれば、直ぐに家へ引取る氣でゐるのです、今ではモー公然とあなたを引取つても差支がありません、神戸の方は今言つた通りですし、栗山の叔母様だつて最早あなたに干渉する事はありますまいから、今度こそ何の遠慮も何の斟酌も要りません、あなたの行方の知れた事を通知したら、母は死んだ子に會ふやうな氣で喜びませうよ、必ず自分であなたを迎ひに出て來ますよ、その方が萬事都合の好い事もありますから」

勇は此の世捨人を自分達が手中のものと思

つてゐるのである、小夜子の春瓊尼は身體を少し後方へ退つた、牢乎たる決心を面に現はして、
「勇さん、何卒その事は少しお待ちなすつて下さい、斯うやつてお目に懸つて見れば、東京へ御通知なさるのは致方もありませんが、此上のお情けには、何卒此儘わたくしの身がいつまでも此に居られますやうにお取計ひなすつて下さい、わたくしはモー再び浮世へ顏を出し度くはありません、皆樣の御親切は能く熟知て居りますけれども、今から東京へ歸つて皆樣に顏を合はせる氣はございません、わだくしは死んだものと思召して、何卒此儘に打捨つて置いて下さい、それが何よりのお願ひでございます」
言ふも心の苦しさうに、衣の袖を顏に當ててゐる、小夜子が佛門へ入つたのは自分一身の爲めでは無い、有緣無緣の人人の爲めにその冥福を禱らんが爲めである、亡りにし人の追善供養は更にも言はず、現世の人人の爲めにも福壽無量と祈念して、日も怠らないのである、去られた良人甚吉の身の上までも、その幸福を佛に祈願してゐるのである。
勇は小夜子の決心の牢いを見て、再び強ふる氣にもならなかつた、折角浮世を離れて行ひ澄ましてゐるものを、突然俗界へ引戻さうとは無理である、今は事を急がずとも、軈て機會が來る事もあらうと思案した。
「成程、その御決心であつて見れば、僕も東京へ通知する事は當分見合せませう、僕はどうせ暫く此島に逗留して、再び大鷹森の景色を寫す心算ですから、後にお目に懸る折もありませう」
思ひ立つたやうに急に身を起した、小夜子は流石に名殘惜しく、
「マア宜いではございませんか」
「イヤ、僕も是れから自分の庵室を造らなければなりません、左樣なら」
用ありさうに立上つて、とつかはと急ぎ脚で歸つて行つた、春瓊尼はその姿が松原の彼方へ見えなくなるまで見送つてゐた
勇が庵室を訪ねて來てから半月程も過ぎると、木食さん、木食さんと人の呼ぶ聲が狹い島の内に擴がつた
大鷹森の中腹、東に面して清泉の湧き出づる溪間の奧へ、粗末な藁小屋を建てて、其中で毎日繪ばかり描いてゐる仙人のやうな男は、木の實や草の根を常食として、一切米の飯も魚類も喫べないといふので、それで島人が木食さんと呼んでゐるのである。

雪山

一

昨日の朝から降出した雪は一日一夜降り徹して、今朝になつてもまだ歇まない。
大鷹森から吹下す山風に吹廻されて、霙が浦は島の内でも雪が殊に深い、野にも積もつた、濱にも積もつた、松原にも積もつて根上りの松の根も隱れた、春瓊尼の庵室は屋根の撓む程に積もつて、今朝は雨戸を開けるに纖弱い女の渾身の力を要した。
今日は午後から日濱の漁夫の家へ年回の法要に招かれてゐるが、どうかして早く歇んで呉れは可いと、春瓊尼は障子を開いて戸外の景色を眺めてゐた。
水嚢の目からでも漉されたやうな細い雪が音もしないでシトシトと降つてゐる、折折松の枝から葉に積もつた雪塊がドサリと地に落ちる、海の水も雪で濃くなつて波が立たない、遠くに見える島島は雪の帽子を冠つて、岩も松も美しい白い化粧を施してゐる。
松原の間から蓑笠に身を堅めた二人の男が、各人に長い除雪器を擔いで、藁沓で雪を蹴立て

て、庵室の前へ進んで來た。

「春瓊さんお早う、えらあ雪が降りましたね、今日一日樂まなきや此の屋根が保つめえと思つて、雪を卸しに來ましたよ」

先に立つた老人は此の潟が浦の西の濱で、十二軒ある漁師の頭取だ。

「傳次、てめえは屋根へ上つて背後の方を落しねえ、俺あ前の廂から始めらあ」

春瓊尼が頻にその親切を謝する言葉を耳にも掛けないで、息子を促して氣忙しさうに屋上の雪を拂つてゐる。

「佛樣の番をする尼さんだもの、不自由させちやお參り仲間の耻にならあ」

口癖の樣に息子を戒めて、何事があつても第一番に庵室の世話をして吳れるのは此の老人である、老人はお參り仲間の有力者、信心深い島人の間には、道德も法律も慣例も皆な此のお參り仲間の不文律に維持せられて來たのである、自治や平和の眞相は都會の地よりも却て此の孤島に存するのである。

言葉や姿の荒くれて雄雄しきに似ず、島の男女は佛法に歸依して心は優しく親切であるから、春瓊尼はその親切を力として、此島を終焉の地と定めたのである、よしや如何なる事情が發ればとて、再び此島の外には出まいと決心してゐるのである。

二人の男の働きで屋上の雪は概略に卸された、庵の廂も輕くなつて、庵室の內も明るくなつた、春瓊尼は急いで茶を沸かし、先程焚いた飯を鹽握飯にして、香の物を添へて上り端へ出した。

「何うも難有うございます、サアお茶でも一つ服つて下さい、嘸お寒いでございませう」

老人は庵室の前通りを掻いてゐたが、除雪器を柱に立てかけて上り端に腰を掛けた。

「是れは御馳走さまで、斯んな心配をなさらなくつても宜かつたのに、傳次、此へ來てお茶を一杯御馳走になれや、斯う寒くつちや手が凍縮んで遣り切れねえ」

屋根から卸した雪が庵室の傍に堆くなつてゐるのを、少しづつ突崩して濱の方へ投げ遣つてゐた息子は、手の雪を叩いて拂ひながら廂の下へ入つて來た。

「今年の樣に寒い事は滅多にないなあ」

「まだ十二月だといふのに、斯んな大雪が降るだもの」

「下でさへ斯んなに寒いから、山の上は何んなだらう」

「あの木食さんなんか、凍えてでも死ななきやいいがなあ、何にしろ火の氣つていふものは一つも無えんだから」

「だけんど洞穴の中にありや割合に溫暖いもんだよ」

頻に噂をしてゐるのを、春瓊尼は何氣無いやうに、土瓶の茶を二人の茶碗へ注ぎながら、

「その木食さんといふ人は此の寒いのに火の氣無しですか」

老人は喫べかけた握飯を手に持つて振返つた。

「エイ、火の氣つたら夜になつて燈火も點けやあしません、その癖日中は一日畫ばかり描いてゐるが、湯を沸かすぢや無し、茶を飲むぢや無し、木の實や草の根を食つて、よくマアあれで生きてゐられたもんでさあ」

春瓊尼は物案じ氣に、

「雪が降つたら木の實も草の根もありますまいに何うするでせう」

若い傳次は茶碗を下に置いて、

「ナーニ、折折は月濱の村へ出て、蕎麥粉を二三升づつも買つて行きますから、木の實が無けりや蕎麥粉を食つてゐるでせう」

「何でも生で食ふ人だからなあ、曩日俺が見た

時なんか、松の葉を生でムシャムシャと食つてゐたぜ」
　老人も驚いたやうに談してゐる、依瓊尼は飽くまで他所事のやうに、
「不思議な人もあつたものですね、此の裏山だと聞きましたが、何處に棲んでゐるのです」
　山の案内は老人よりも息子が詳しいと見えて、
「あのソラ、法螺の貝が尻出したといふ洞穴がありませう」
　老人は微笑みながら、
「いきなりそんな事を言つたつて、依瓊さんに解かるもんか、依瓊さんは用も無いからあんな處へ行つた事はありますまいが、此の松原を通り抜けて、裏山の道を左へ左へと傳はつて行くと、山の上から良く見える大きな谿がありませう」
「ハア、有ります、夜になると大きな山櫻がたつた一本上の方に咲いてゐる谿でせう、わたくしは毎度佛樣へ上げるお花をあの谷まで取りに行きますよ」
「その谿を越すと復た小さい谿があつて、その先にモ一つある其の谷の上の處に、此の家より廣い位な洞穴がありますよ、洞穴の下から清水が流れて下へ行くと小さい川になりますが、その洞穴の前へ掛小屋を建てて棲んでゐるのが木食さんです、たつた一人であんな山の中に、よくマア辛抱してゐられたもんだが、必定何か心願でもあつて、大した畫でも描き度いといふんでせう」
　息子の傳次は多少その消息を聞知つてゐると
「何でもあの畫師は二十年も前に此島へ來て、月讀の清六さんとこへ泊つてゐて毎日大鷲森の繪を描いてゐたんだとよ、ところが生來畫が下手で、二十年經つてもまだ一人前の畫師になる事が能きねえから、錢の要らねえやうに木の實を食つて、あの山で繪の稽古を爲てゐるんだとよ」
「氣の毒なもんだなあ、今度山へ行く時に酒の一本も持つて行つて飲ませて遣れ」
「何うして何うして、人が何か遣らうなんて言つたら怒り付けられるよ、餘つ程風變りな變人なんだからなあ」
　勝手な推測を下してゐるのは、斯る噂が島の内に擴がつてゐるものと見える。

二

　親切な島人は屋根の雪も丁寧に卸した、庵室の周圍も綺麗に掃除した、臺所で使ふ水まで汲んで置いて復た晩に來ると云つて歸つて行つた、島人の心には此の年若い美しい尼さんが、外に手助けの人も無く、只一人庵室に棲んで水仕の業まで自ら爲る事の痛々しく氣の毒に思はれるのであらう。
　依瓊尼は今に始めぬ島人の厚意を感じながら、茶碗小鉢を片付けて佛壇の前を掃き出したが、氣になるのは今聞いた勇の噂である、此の大雪に若しや病氣にでもなられたら何うだらうと、自分の身の頼り無きに思ひ較べて、山上の人の身の上を一入氣懸りに思つた。
　依瓊尼は彼の時以來、再び勇と顏を合せた事が無かつた、勇の方からは訪ねては來ず、自分の方からも行つた事は無し、木食の噂は聞いてゐたが、それはホンの一時の事で、スケツチが濟んだら程無く東京へ歸られるだらうと思つてゐた、然るに秋が過ぎても、勇は山を降らない、冬になつても島を出ない、いつまで此の山に棲む氣だらう、何を目的として木食生活を續けるのだらうと、此程から窃に其事を疑つてゐたのであつた
　畫題を索める爲めならば大鷲森の風景にも限りがあらう、もしや我身の此に居る爲めに、勇さんは深い心があつて、永久不退の草庵を結ば

れたのではあるまいかと思ふと、自分の背に重い物でも載つてゐるやうな心地がする。

此處でさへ身體が凍える程の大雪に、あの山の上で火の氣が無かつたら、何うして無事に過ごされよう、倒れたとて凍えたとて、外に助ける人は無し、もしや勇さんの身に變事でもあつたら、我身が斯うしてはゐられない、同じ島に居りながらいかにも實意の無いやうに、島海家の人達に恨まれよう。

兎も角も勇さんの安否を探らない内には、何うしても安心がならぬ、誰か村の人を頼んで山の上まで見に行つて貰はうか、イヤイヤ生中に人を頼んだら、我身の昔や勇さんとの關係まで外の人に洩れないともいへぬ、人を頼むよりも寧そ思ひ切つて自分が山へ行つて見ようか。

春瓊尼は障子を明けて大鷹森の方を望んだ、雪と雲とに隔てられて山の姿は薄くも見えない、雪はまだ降つてゐる、風が出たと見えて折々、さらさらと雪を吹付ける音がする。

此の大雪に女の身であの山へ登るのは命懸けだ、何うしよう、往かうか往くまいかと、降る雪を眺めて春瓊尼は暫く躊躇した。

往きませう、何うしても往きませう、若し途中で仆れるまでも行ける處まで往つて見ませう、勇さんは恩人だ、我身を拾ひ上げて下さつた大恩人だ、我身の幼い時分から今日の今迄我身の爲めに何程心を盡して下さつたか知れない、その勇さんの安否を知る爲めだもの、此の位な雪を懼れて何うしよう、世尊が雪山の苦行を想へば雪も嵐も何の物かはと、頻に心を勵まして急に登山の支度を始めた。

昔の少女時代には父の任地たりし青森に住んだ事があるので、雪には多少慣れてゐる、それに此の島へ來てから既う二年、雪降る中を村人に賴はれて、回向や追善に往く事も幾度あつたから、雪路の用意は一通り揃つてゐる、蓑もある、網代に編んで澁を塗つた笠もある、脚絆甲掛ては藁の雪沓もある、雨の日や雪の道の方にと、村人が寄進して呉れた竹の杖は、福浦島の名物として都の人の賞翫する無孔竹、今迄滅多に使つた事が無いから、邪魔物の樣に臺所の隅へ薦と一緒に立かけてあつたが、春瓊尼は急にそれを取出して、塵を拂つて雜巾で拭つた。

風が出てから好い鹽梅に雪は段々小降になつて來た、是れなら登山も氣遣は無いと、春瓊尼は嚴重に身支度を整へて、戸を鎖して庵室を立出でた。

戸外へ出て見ると、家の中で思つたよりも道は樂だ、先程の島人が藁沓で踏付けて行つた足跡が松原の中に細い筋を曳いてゐる、春瓊尼はその筋を傳はつて進んだ、松の下とて雪は少ないが、枝から吹落される雪が折折笠の上を不意に撲つ。

島人の足跡は松原の中程から濱の方へ曲つてゐる、春瓊尼は道を左に取つて、新に雪を蹈分けたが、松原を過ぎて麓の野に出ると、膝まで沒する雪の深さに、杖を力として一歩一歩脚を拔く、日頃は花を摘みに來て、通り馴れたる道ながら、今は一面の雪に蔽はれて、孰れが道、孰れが草とも分ち難い。

降る雪は寡けれども、颯と山から吹颪す吹雪に、道も急に暗く、呼吸さへ停まるかと思ふ程の苦しい時もある、笠を傾けて顏を蔽ひ、蓑を振つて雪を拂ひ、十歩に息ひ、五歩に停まつて、春瓊尼は辛くして藪、藪を離した

藪の籬を過ぐる頃には雪も全く歇んで、東の空の雲が淡くなつた、木木の枝に白玉を纏れたやうな雪の花、脚下に現はれる島島の雪景色、春瓊尼は思はず其の風光の麗しきに見惚れたが、是れより先は道險しく、雪が凍つて足が滑り、幾度か雪の中に轉げて、這ふやうにして登つて行つた。

三

「アラ小夜子さん、よくマア斯んな處へ訪ねて來て下さいましたね」

雪が谷へ着いたので、小屋の扉戸を開いた途端、下から登つて來た尓瓊尼を見て、勇は心の喜悦を包み切れなかつた。

「唯途中がお難儀でしたらう、下方からでも呼んで下さればお迎へに行つたものを、此の下の坂は急ですから登るのにお困りでしたらう、衣裳も笹も雪で大變です、マアそこへお腰をなさい、僕が今拂つて進げますから」

愛子の遊園からでも歸つたやうに傍へ寄つて頻に世話を燒く、その元氣の平生に變らないのを見て尓瓊尼は先づ安心した。

「マア御無事で何より結構です、わたくしはあなたが此の大雪に火の氣も無くつて、もしや御病氣でもなさりはしないかと心配しましたよ」

勇は小屋の奥から枯木の枝を一束ほど小屋の前へ持出した、小屋の前は椎の大木が枝を傘のやうに擴げてゐるのでその下には殆ど雪が無い、勇は枯木の枝を組むやうに立てかけて、燐寸を摺つて火を點けた。

「火の氣の無いのは不食生活をすると全く火が要らないからですよ、必要があれば斯ういふ風に焚火もしますから、マアよく身體をお溫めなさい」

再び小屋の中から藁の束を取出して來て腰掛に薦めた。

尓瓊尼は藁沓を外し、脚半甲掛や足袋の濡れたるを脱いで火氣の傍に置きながら、小屋の中を覗いてその生活の原始的なるに驚いた。

小屋と云つても天然の洞穴の口へ、丸木を組んで差掛けたものであるから、口は狹いが洞の中は廣く、疊の十四五疊も敷けるだらうと思はれる、されど疊らしいものは無く、奥の方に藁束の厚味に積んであるのは、夜もその中に寢ると思はれる、書の道具も紙も筆も皆な板の上に置いてあつて、書に用ゐる机は天然の巖の上に立てかけてある、鐵の鞄と鍬力鎌と飯茶碗と洋盃と小さい瓶に載せて片隅に置いてある、其外には鍋も釜も無い、夜の燈火の用意も見えなければ入浴すべき道具も見當らぬ、何うして此に棲んでゐられようと、尓瓊尼は不思議でならない。

勇は珍客への御馳走に焚火を盛に燃して置いて、小屋の傍から流れ出す清泉の水を洋盃に汲んで來た。

「小夜子さん、山をお登りで咽喉がお渇きでせうが、此處にはお茶もお湯もありませんから、その代りに天然の水を上げます、マアよいと飲んで御覧なさい、甘味があつて美味しい水ですよ」

地中から湧出した水は微温くして、薄い蒸氣が陽炎のやうに立昇つてゐる、尓瓊尼は快く一口に飲干した。

「マア何といふ結構な水でせう、濱の方には迚も斯んな美味しい水はございませんよ」

勇は復た小屋の中から、先刻剝いたばかりの鬼胡桃を紙に載せて持つて來た。

「不食生活をしてゐますから何にもお愛想は能きませんが、生の胡桃でも一つ召上つて下さい」

小夜子は直ぐにも喫べようとしないで、手に持つた儘眺めてゐた。

「勇さんは平生斯んなものばかり召上りますか」

「生のものなら何んでも喫べます」

「松の葉まで召上るといふ事を聞きましたよ」

「松の葉は腸蟲の爲めに食べるのです、生の野菜なぞを喫べてゐると、寄生蟲の卵を嚥下しますから驅蟲の爲めと云つて木食行者は松の葉を用ゐます」

「では平生何を常食となさいますか」

「春は草木の若芽、夏は草の實や野菜の類、秋は

木の實草の實、冬は草木の根といふ風に、四季折折の食物に自然の季節に應じたものを用ゐますが、その間に生大豆を嚼つたり生の蕎麥粉を水で溶いて毎日少し宛喫べたりしてゐます」

「全體何時頃からそんな事をお始めになりました、以前は一向伺つた事もありませんのに」

「僕の木食生活を始めたのは全くあなたのお蔭ですから、あなたに向つて深く感謝しなければなりません」

「それは何ういふ理由です」

と手に持つた胡桃を藁の上にそつと置いて、案外な顏して身體を向け直した、勇は心中に小夜子が思ふ壺に嵌まつて來るのを悦んで、前にあつた藁束にやをら腰を卸した。

勇は最初から小夜子を一度此處まで惹寄せ度かつたのである、木食生活の噂を聞いたら、小夜子が必ず不審を起して自ら訪ねて來るだらうと豫期してゐたのである。小夜子の方から出て來るやうなら、我が望みは達し得られるが、今日來るか、明日來るかと、今迄竊に俟つてゐたのであつた。

「小夜子さん、僕があなたのお蔭で木食生活を始めたと言つたら、嘸不思議にお思ひでせうが、その由來は斯ういふ次第です、あなたも御存知の通り僕はまだ一枚の書も世に出しませんから、今日までも父や兄より學資を貢いで貰つてゐます、然るにあなたの行方を尋ねる爲め、全國行脚と出掛けましたところが、何んなに儉約して木賃宿へ泊るやうにしても、却却入費が掛かります、最初は母の手元からその入費を出して貰ひましたけれども、何年で濟む事か見當が付きません、僕は何うにかして入費の要らない行脚法は無いかと工夫しました、勿論書を賣物にすれば何でもありませんが、他日成業の後になつて、未熟な物の世に存するのを悔いる事になりませうから、それは一切遣らないとして、外に名案は無いかと心懸けてゐたのです、その内に大和の大峯で木食行者と道連れになりましたが、木食行者の生活をして歩けば何處を廻つても僅少の入費で濟むといふ事を知りました、その行者は、年中諸國を歩いてゐますが、衣服は木綿の白衣ですし、食物は蕎麥粉と野生の草や木の實ですし、山へでも行くと大抵野宿で、樹の下なら枯葉を聚めて褥としますし、洞があれば其中へ寢ますし、旅店なぞへは滅多に泊りませんから殆ど入費が掛かりません、僕等が一ケ月の費用を以て優に一年以上の生活を支へて行きます、僕も是れこそ屈強の方法と思ひましたから、暫くその行者に就て木食生活を教はりました、最初の内は幾多の失敗もありましたけれども、此の兩三年以來は全くその生活法に慣れて、今では旅費を多く費はずに何處へでも行脚して行ける樣になりました」

仔細を聞いて春瓊尼は氣の毒さうに、

「それでは全くわたくしを搜す爲めに、斯んな苦行をなさいましたのですネ、何ともお詫の申し樣がございません」

勇は快然として元氣よく、

「イヤ苦行と云つても、ナニも態々好んで身を苦めるのではありません、最初の内こそ慣れないで苦しいと思ふ事もありましたけれども、段々慣れるに隨つて身體の工合は日増しに良くなつて來ます、今になつて考へて見ると以前は好んで血液の汚れるやうな食物ばかり食べてゐた爲め、常に身體や腦髓を刺戟されたのでせうが、木食をしてゐると血液が自然と清潔になつて、所謂鬱血といふものが溜りませんから、殆んど病氣に罹る事もありません、僕が今日の如き強壯な身體に成り得たのは全く木食の結果で、あなたのお蔭だと感謝してゐます」

斯う言はれて春瓊尼は熟く注意して見ると、勇の顏の色は以前の陰鬱なりし痕も無く、日に

焦けて黒くはなつてゐれど、皮膚には鮮紅の色を存してゐる、筋骨も堅まり、手足も肉づいて、以前よりも若返つた、此の寒天に衣服も薄く、足も跣足で藁草履を穿いてゐるのは強ちに痩我慢ばかりとも思はれない。

「御入浴なんぞは何うなさいますか」

「別段に湯を沸かさないでも、此の天然の清泉が夏は冷たく冬は温かで、自然と温度を調節しますから、毎日一度づつ此水で身體を洗ひます」

「夜被も蒲團も無くつて、夜分お寒い事はありませんか」

「それも矢つ張り自然の恩惠で、此の洞穴の中に寢ると、夏は冷しく冬は温暖ですから別に不自由を感じません、然しそれは木食生活に慣れて身體の抵抗力が強くなつたからです、普通人が急に此の眞似を爲たら却つて害がありませうが、木食生活を長く續けてゐると、身體の抵抗力が非常に強くなつて、夏も暑さを多く感ぜず、冬も寒さに負けません」

「夜は燈火をお用ゐになりませんか」

「決して用ゐません、人間は朝早く起きて一日働けば、夜になつて燈火まで使ふ必要が無い譯です、無理に人造の燈火を用ゐて眼ばかり疲らせるから、それで人の精力が衰へるのです」

「では夜になると何をなさいます、早くからお就寢ですか」

「イイエ、夜は闇中に端坐瞑目して深く三昧に入ります、天地我に入り、我れ天地に入り、所謂入我我入、神人一如の境に遊ぶ心持は何とも言はれません」

徹頭徹尾風變りなる珍說に、もしや勇の精神が少し狂つてでもゐはせぬか、命瓊尼は新しい不安を感じた、奇矯偏屈も程こそあれ、他日世界に名を揚ぐべき美術家なるに、今から横道へ外れては前途の成功覺束ないと心配になつて來た。

「勇さん、世を捨てた仙人ならば木食生活も結構でせうか、あなたは美術を以て世界に貢献すべき大切なお身體ですのに、今からそんな極端な事を遊ばしては、肝腎なお事業のお邪魔にはなりませんか」

勇は默つて焚火へ新しい枯木を插し込んだ、容易な事では我說を理解されまい、何ういふ風に說き出さうかと、心で頻に思案しながら、

「小夜子さん、最初はあなたを捜す爲めに始めた木食生活ですけれども、今では自分の藝術を磨く爲めに最善最良の方法となりましたから、僕は生涯此の生活法を改めません、先づ考へて御覽なさい、藝術を磨く爲めに何が最も必要だと云つたら、衣食住の爲めに心を勞はれない事でせう、もし藝術家が衣食住の奴隷となつて、作品は自分の心に滿たないけれども、今月中に仕上げて賣出さなければ月末の勘定に困るといふ風であつたら、精神の籠つた作品は出來ますまい、今の世にも大美術家は澤山ありますが、その割合に世界的の作品が現れないのは、その多數が衣食住の奴隷となつてゐるからでせう、衣食住の奴隷たる事より免れるには僕の如き木食生活を行ふのに限りますが、よしや木食で無くとも天然に近い簡易な生活を行つてゐれば、何人も衣食住に囚はれないでも濟みませう、ですから僕の木食生活は僕をして將來に大成せしむる所以だと思つて、自分で天の賜物だと悦んでゐます」

此の一言に命瓊尼は深く感ずる所があつた。

「成程、さう伺つて見れば、あなた方ばかりでは無く、わたくしの樣な佛に仕へる者も衣食住の奴隷となつてはなりませんか、隨分佛門の中にも衣食住の奴隷となつてゐる人か衆いやうでございます」

勇は輕く頷いた。

一佛教であれ耶蘇教であれ、苟も世人を濟度すべき宗教家が自ら衣食住の奴隷となつては、如何にして社會を感化することが能きませう、元來宗教の社會に必要なるは、國民の品性の墮落せんとのするのを濟ふ事にあります、國民の品性は何が爲めに墮落するかと云ふに、古今東西、世界萬國、何れの國民の墮落するのも、その大原因は國民の多數が衣食住の奴隷となるからです」

「全く左樣に違ひありませんネ」

と春瓊尼は覺えず贊成の意を表した、勇は鬱勃せる胸中の慷慨を披瀝するやうな語氣で、

一政治家が節を售つたり主義を變じたりして私利私慾にのみ是れ走るのは、衣食住の奴隷となるからではありませんか、官吏や公吏が賄賂に惑かされて失脚するのも、衣食住の奴隷となるからではありませんか、銀行員や會社員が不正を働いたり詐欺に陷つたりするのも衣食住の奴隷たるが爲めでせう、盜賊の流行するのも犯罪の行はれるのも、皆な衣食住の奴隷たる事に原因しないものはありません、醫者が衣食住の奴隷となつたら患者に對する親切が無いでせうし、學者が衣食住の奴隷となつたら學問の權威が失墜しませう、商人が衣食住の奴隷となつたら、不正行爲を行つて顧客の信用を害しませうし、工業家が衣食住の奴隷となつたら、その製品は粗製濫造に流れませう、國の興る時には國民の多數が衣食住の上に超越して働きますし、國の亡ぶる時には國民全體が衣食住の奴隷となつて働きますから、その國民を救ふべき宗教家や教育家は、自分が親ら衣食住の上に超然として、人間には衣食住以上の大切なものある事を國民に知らしめなければなりません、如何です小夜子さん、あなたも一つ木食生活を試みて御覽になりませんか、最初は少し苦痛ですけれども慣れて來ると心身共に愉快になつて、モー再び廢める事が能きませんよ」

勸告を受けずとも春瓊尼の心は既に動いてゐた。

「わたくしなんぞこそ斯ういふ生活を致しますと、御飯を焚いたりお副食物を煮たりする世話もありませんから、村人の厄介にもなる事が寡くなりませう、ですが急に始めては身體に障りませうネ」

一急激では却て害がありますから、少しつつ生食に慣らして行くのが安全です、併し早く實行しようと思ふなら、最初に一週間でも二週間でも斷食をして、それから生の蕎麥粉なんぞから少し宛食べ始めても構ひません、斷食をすると始めて食物の眞の味といふ事が解かります、それまでの味といふものは鹽とか砂糖とかいふ刺戟物の舌を刺戟する感じだけの事です、天然の物の眞の味は斷食して見なければ解かりません」

一斷食は修行の爲めに二夜三日も、七日も行つた事がありますから何でもありません、それなら一つわたくしもあなたのお弟子になつた氣で木食生活を始めて見ませうか」

一是非お始めなさい、必ず意外な功能を發見なさいますよ」

睦まし氣なる長物語に、いつしか蒼空は全く霽れて斷雲の間から日光を洩らしてゐる、焚火は消えた、燒殘りの枝から細い烟がちらちらと立昇る、春瓊尼は是れより山を降つて月濱へ赴くべしと、半ば乾いた脚半甲掛を足に着けながら、

一勇さんは何時頃まで此山に御逗留なさいます、まだ急には東京へお歸りになりませんか」

と事の序次のやうに手輕く訊ねたが、其の實は此事が大なる懸念の一つであつた、勇は即答しなかつた、春瓊尼が脚絆の紐を結び了つて

自分の方へ身體を向けるまで待つてゐた。

「小夜子さん、それに全くあなた次第です、あなたが何時までも此島にゐるとお言ひなら、僕も此山に籠つてゐますし、あなたが島を去るとお言ひなら僕も山を降つてあなたの行く處へ尾いて行きます、僕は決してあなたの成道を妨げませんけれども、僕の身體をあなたの影として何時までもあなたの近所に置く事だけは容して下さい」

沈痛な語調で迫へるやうに答へた、春瓊尼は何と感じたか、愁然として俛れたが、熱い涙が足の甲にホロリと隕ちた。

四

北國の長い冬も漸く去つて山の上には春風が吹いて來た。

久しく雪に閉ぢられて居た勇の小屋も今は蓆戸が引捲くられ、勇は冬の中にスケッチした雪の松島を仕上げようと、獨りで毎日忙かしさうに繪を描いてゐる。

昔馴染の月濱の漁師の婆さんは、折折東京から消息便を持つて來たり、新しい蕎麥粉を碾いて來て呉れたりするが、或日勇が草の嫩芽を美味さうに喫べてゐる態を見て感心したやうに、

「木の實や草の芽なんぞを喫べるのはあんたばかりだと思つたら、潟が浦の尼さんも此頃は火斷の行だと云つて、火で煮たものは何にも喫べないつてネー」

勇は其事が聞き度いのであつた、去年の雪の日に別れてから、嘗て小夜子の消息を聞かなかつたから、斷食は實行したらうか、木食生活は始めたらうかと、心に懸けてゐたのであつたが、自分との關係を悟られぬやうに、故意と何にも知らぬ態で、

「さうかネー、火斷の行なんていふ事があるのかネー」

「前の妙齡さんは、屢く鹽斷だい、茶斷だいといふ事を爲ましたがネ、火斷つていふのは聞いた事がありません」

勇は尚ほ詳しく訊き度い。

「いつからそんな事を始めたのかネー」

「何でも去年の歳暮に七日ばかり斷食をして、それから火斷になつたと云ひますよ」

「身體が弱つたらうネ」

「ナーニ、初めの内は少し痩せなすつたさうだが、此頃は顔の色も前より良くなつて、二三日前に途中で逢つた時なんか、なんぼ綺麗に見えたでせう、尼さんにして置くのは惜しいやうでさあ」

勇は漸く安堵した、普通人が木食を始めても三月や半年で體質が變化する迄にならぬけれども、小夜子は數年來の尼僧生活で困苦を凌ぐに慣れてゐるから、それで結果が良かつたのであらう、此上は折を見て一度小夜子の庵室を訪れ、親しくその實況を觀ばやと思つた。

何日の後勇は雪の松島を思ふ存分に描上げた、全紙八枚孰れの畫も今迄の生涯に嘗て覺えぬ會心の作である、勇はそれを壁にかけて獨りで嬉し氣に眺めてゐたが、何と思つたか急に卷いて紙筒に納めた、勇は其畫を潟が浦の庵室へ持つて行つて春瓊尼に示し度いのである。

朝の内に吹いてゐた風は午時から歇んで、春の日の麗らかに温かく、山も靜に霞が罩めて鳥の聲さへ樂し氣に聞えてゐる、勇は例の通り鐵の無地木綿の衣服に小倉の袴、黒木綿の紋付の羽織で、帽子も冠らず足袋も穿かず、粗末な藁草履を足の先に突かけて、紙筒を手に携へて飄然として小屋を立出でた。

大鷹森の裏山道、三の谷から二の谷を超えて第一の谿に差しかかると、谿の向うの雜木の中に枝を四方に擴げた大きな山櫻が一本美しく咲いて、近傍の木までがその美しい色に映じて

ゐる、深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはるると、古歌の心もその儘に、咲かねば誰も此山に櫻があるとは思ふまじ、されど木樵ならでは通はぬ裏山の細徑、我身の外に此の花を賞翫する者はあるまいと、勇は足を停めて悠然と眺めてゐた。

忽ち麓の方から、竹で編んだ花籠を左手に提げ、右手に珠數を爪繰つて、佛の名號を口の内に唱へつつ、緩斜な坂をしづしづと登つて來たのは春瓊尼である、勇はそれを見て足疾に谿を踰して春瓊尼の傍に近寄つた。

「小夜子さん、花を採りにおいででしたか」

「ハイ、今日は大切な佛の日ですから、佛前に花を捧げようと思つて、此の櫻を採りに參りました」

「此の櫻は以前から御存知で」

「裏山に唯一本の山櫻で、毎年一枝づつ採りに參ります」

「では僕より前に、櫻の知己があつたのですネ、あの下は道が急ですから、僕が登つて折つて進げませう」

春瓊尼が遠慮して躊躇するのを、山に慣れた木食道人の、猿のやうに雜木の中を滑り拔け、花の下に立寄つて、姿の佳い枝を二つ三つ折つて來た、春瓊尼は花籠に插して見て嬉し氣に、

「難有うございます、わたくしでは迚も斯んな佳い枝は採れません、時にあなたは何うして此へおいでになりました」

「小夜子さんの處へ往かうと思つて此まで來たのです、あなたは愈よ木食をお始めになりましたとネ、大層顔の色が良くおなりですよ」

「ハイお蔭樣で此頃漸と木食に慣れました」

「お心持は何うです」

「それはそれは良い心持で、頭痛がするの氣が塞ぐのといふ事は全くありません、物心を覺えてから今の樣に氣分の良い事は始めてでございますよ」

「それは全く血液が清淨になつたからです、それに就て木食生活の功德がいかに大なるかを證明する爲めに、僕が此頃描上げた雪の松島をお覽せし度いと思つて、今持つて來ましたよ」

「それは是非拜見致し度いもので」

「では向うの芝山へ行つて、花を觀ながら悠悠談話を爲ませう、あなたの庵室へ行つて村の人にでも見られると口が煩いと思つてゐたが、此處なら滅多に人の來る氣遣もありません」

二人は谿の彼方に大きな土饅頭の如になつてゐる芝山へ登つた、勇は紙筒の中から八枚の畫を引出すと、春瓊尼は絕えて久しく勇の畫を見なかつたから、いかにその技術が進歩したかと、一一勇に紙の端を持つて貰つて、芝の上に展げて丁寧に眺めた。

「失禮ですがあなたのお繪が是程迄に美しくなつてゐようとは存じませんでしたよ、進歩ではありません、別のお人におなりですネ、人の描いたもので無く、神樣の手に成つたやうですネ」

「僕自身でも全く豫想外ですよ、それに就てはあなたも何か自分で氣の付いた事はありませんか、此頃は少しも繪なんぞはお描きになりませんか」

「繪は全く描きませんが、字の方は村の人に頼まれて戒名や過去帳を書く事もあります、さう仰しやれば此頃字を書くと、大層手が樂に動いて、いつでも良く出來るやうに思ひますが、それは木食の爲めでせうか」

「無論木食の結果です、僕なぞも以前は血液が汚れて濃くなつてゐましたから、自然と筋肉の彈力が減じてゐて、頭では斯う描かうと思つても、手が言ふ事を聞かないで困りました、然るに木食をして血液が淸潔になると、不思議のやうに手足が柔軟で、思ふ通りに動きますから、

木食の一年は、以前の十年よりも一時に技倆が進歩しました、あなただつても試みに繪を描いて御覧なさい、今迄書かずにゐた手でも必ず以前より上手に描けますよ」

「わたくしの心持でも、必定然うだらうと思はれます」

勇は八枚の畫を巻き收めて紙箱に納めた、春瓊尼はまだ眼中に寫る松島が見えてゐる。

「勇さん、此のお畫こそモー世中へお出しなすつても、必ず世界的の名作になりませう」

勇は冷やかに笑つた。

「世には出しません、僕はあなたと共に此島に埋もれる身ですもの」

それを言はれると春瓊尼は心の縮まん程に悲しくなる、されど慰むべき言葉も無いので、唯愁然として竊に歎息するばかりであつた、勇は急に態度を改めて、

「小夜子さん、復たしても妙な世界觀を言出すやうですが、何卒公平に僕の意見を批評して下さい、元來今の世の文明を稱するものは人類の闇黒な方面が進歩したものです、飛行機が天を翔り、潜航艇が海を潜るのも、戰爭といふ殺人事業が進歩した事ではありませんか、法律が進み、裁判が整ひ、警察が行屆き、監獄が改良されると云つても、畢竟人が罪惡を犯すからです、人は天然の生活を行つてゐれば決して病氣に罹るものでありませんけれども、不自然な生活を爲て衣食住の奴隷となるから、その刑罰として病氣に罹るのです、今の世人は醫術が開けたの病院が完全だのと云つて誇りますが、人が病氣に罹らなければ醫術も病院も入要のものでありますまい、人類の闇黒面から生じた産物を以て、文明だの進歩だのと稱してゐるのは、寧ろ人類の恥辱とすべき事で、誇りとすべきものではありません、然らばそれと反對に人類の光明方面から生じた産物で眞に人類の誇りとすべきものは何でせう、是れは天地自然の美を發揮すべき、美術とか、文藝とか、音樂とか、人間の平和な生産物でなければなりません、然るに戰爭の道具は百年前に比して幾百倍の進歩を證してゐますけれども、美術文藝音樂其他美に關した方面は百年前も同じ事です、今日になつても更に進歩の跡を示さないのみか、寧ろ或る時代より退歩してゐると云つて差支が無いでせう、如何です小夜子さん、僕の言ふ事はお解かりになりましたか」

春瓊尼は半ば煙に卷かれたやうな心地でゐる。

「あんまりお談が大きくつてわたくしなんぞには克く解かりませんけれども、考へて見ると全くあなたの仰しやる通りですネー」

勇は一段調子を高くした。

「そこで、人類の光明方面を進歩せしむるには、純正高潔なる眞の美術といふものを發展せしめなければなりません、それを發展せしめるのは、衣食住の上に超越したる木食者でなければ到底成し能はぬ事ですから、男子として僕、婦人としてはあなたより外にありますまい」

春瓊尼は輕く笑つた。

「オホホ、わたくしなんぞは何にも能きませんけれども、あなたがその天職を帶びていらつしやる事は申す迄もありません」

「あなたにも能きますよ、能きるやうに僕が仕込んで進げます、あなただつて天才ですもの、御自分にその自信の無い事はありますまい」

斯う言はれて春瓊尼は心が忽ち動いて來た、最前の畫の松島を覽てから美術に對する感興が油然として湧いて來たのに、勇の大議論を聞いて心に新しい活氣を生じたのであるが、自分の姿を顧みて躊躇するやうに、

「でも一旦世を捨てた身ですものネー」

勇は前に乘出して、

「それが惡い、佛門の人は兎角世を捨てると云ひますが、釋迦でも彌陀でも決して世を捨てた事は無い、一切衆生を濟度すると云ふ大慈悲心を發して世の爲めに身を捨てたのです、あなただつて自分一身の榮辱を忘れて、世界人類に美の光明を與へると云ふ大慈悲心を發したら、それが即ち佛の心にも契ひませう、世界人類は扨置いて、第一に此の僕があなたに救つて貰はなければなりません、あなたが此島を出なければ、僕までが天職を抛つて此島に葬られなければならん場合ですものネー」

戲言らしく笑つて言つたが、春瓊尼の耳へは須彌山が墮ち懸るやうに響くのであつた。

昇天

一

何れの歳にも春はあれど、春瓊尼は今日の今迄春の心を識らなかつたのである、花は咲き、鳥は謳ひ、山は霞み、蝶は舞ひ、眼の前の景色は面白けれども、浮世の風波に饜き果てた身は、人生を哀れに悲しく感じて、何時も秋のやうな淋しい心持で過ごして來た。

然るに最前から勇の風變りな人生觀や世界觀を聽いてゐる中に、自分の心に言ひ知れぬ溫氣が生じた、美術が平和の產物であつて、人間の誇りとすべきものならば、自分にも美術の嗜みがある、勇さんの言葉に從つてその美術を磨いて行つたら、他日は世界に貢獻すべき技倆にならんとも言へない、昔から自分は繪の稽古が何よりも好きであつた、將來は畫を以て身を立てようと思つた事もあつた、亡き父上もその心で繪を學ばせて下さつた、勇さんもその心で一生懸命に敎へて下さつた、繪を離れては自分の價値が亡くなつて了ふ、美術は自分の生命である、美術に滿身を傾けてこそ此世に生れた甲斐があると、始めて人生の意義が解かつた。

斯う思ふと春瓊尼は現在の境遇を忘れて、昔の小夜子時代に復歸つたやうな心持になつた、勇の畫室に籠つてその指導を受けながら、筆を染めたり意匠を凝らしたりした時の感興が、今更の如に憶ひ出された、あの時から今日が日まで繪の稽古を續けてゐたら、今頃は餘つ程進歩した技倆になつてゐたらうなんぞと、過ぎた歳月が恨めしく思はれた。

兎に角我身が此島を出なければ勇さんも此處に朽果てると言はれる、勇さんの如き天才を空しく此に葬つては、天下に對して我身が濟まない、斯うなるのも矢つ張り運命であらう、あまりに自分の我意を通して、勇さんの身に害があつては却て自分の罪が大きくなると、心は次第に動搖して來た。

「それでは勇さん、わたくしもお言葉に從つて繪の稽古を始めませう、それに就ては何うか此儘の姿で畫を描くものに成り度いと思ひますが何うでせう」

女心のしかすがに今更黑髮を伸ばさんも後ろめたいのであらう。

「アハヽ、あなたが其姿で畫家になれば、僕も頭を剃つて坊主にならなければなりませんネー」

勇は輕く笑つたが暫く考へて、

「併し東京へお歸りになるのはその姿の方が便利ですネ、東京へ歸つて諸方の關係を片付けてから還俗なすつても遲くはありません」

春瓊尼は敢てその言葉を否定しようともしなかつた。

「勇さんは直ぐに東京へお歸りになりますか」

「あなたの心がさうと極まれば明日にも東京へ引揚げませう、あなたも一緒と言ひ度いが、それも少少工合が惡いから、あなたの迎ひには僕の母に來て貰ひませう」

「それはあんまり恐入りますネー

「ナニ、あなたの迎ひにならば僕の母は外國までゞも出掛けますよ」

鳥海家には以前から小夜子の爲めに空席が設けてあつたのである、勇の嫁といふ空席は小夜子の外に占める事が能きなくなつてゐたのである、勇の熱心はさる事ながら、勇の母の熱心も昔に變つてゐない事は勇の言葉で察し得られる、春瓊尼は何となく自分の身體が鳥海家に吸ひ寄せられる心持がした。

海から吹いて來る風は筋骨を弛めるやうに溫い、霞んだ天から射して來る日光の軟かく身體に當る心地好さ、何處から舞つて來たか、黃い翅のまだら若い蝶が二羽、追ひつ追はれつして花籠の櫻を繞つてゐる。

二

大鷹森の麓から潟が蒲の松原へ通ずる一帶の雜木林は、木の芽が膨らんで、冬の眠りから覺めたやうな葉色である、柳の枝も青くなつてゐる、櫨子の花も紅く咲いてゐる。

勇に別れて此の雜木林へ降つて來た春瓊尼は、心が新しくなつてゐるので、今更のやうに途上の風物が春の光を浴びてゐるのに氣が付いた、雜木林を通り抜けると、山の裾に青青とした麥畠が見える、その間に黃い菜の花や白い蘿蔔の花が紋形を置いたやうに彩どつてゐる、道の端には菫も咲いてゐる、蒲公英も咲いてゐる、野蒜も葉が伸びて、勿忘草も淡い化粧を施してゐる、何處を見ても春だ、野も山も海も島も淡く暈した春色の間に浮上つてゐる。

春瓊尼は何となく心が融融として甦つたやうな氣になつた、遠き未來を想像したり、過去の境遇を憶出したり、嬉しくなつたり、羞かしくなつたり、半ばは昔のやうな心地で、長い松原を歩いてゐたが、日頃にも無く松の根に躓いたり、遠い方角へ迂回つたり、何か外のものが自分の頭を占領したやうな心地がしてゐる。

軈て庵室へ着いた、春瓊尼は直ぐ裏口へ廻つて、花籠の花を一旦水桶の中へ插し込んで置いて、表の障子を開いて座敷へ上つた、此時までも心の中では未來の閨秀書家と成り澄ましてゐたが、思はず前の佛壇を瞻上げると、阿彌陀樣の御尊像から光を放つて自分を射たやうに感じた。

ハッと思つて春瓊尼は兩脇から汗が出た、重い罪でも犯したやうに自分の氣が咎めて恐ろしくなつた、一旦佛樣の御弟子となつた身が、今更俗に還るのは申譯の無い心持がする、師匠が聞かれたら何と思ふだらう、島の人が後に知つたら甲斐無い女と笑ふだらう、それに銀野家の人人がもしや東京に來て我が事を知つたら、最初から勇さんと相談でもした樣に疑はれる事はあるまいか、娘の光子が大きくなつて顏でも合せたら愧かしい。

斯んな事を考へ出すと、春瓊尼の心は忽ち沈んで來た、再び世中に乘出して荒い風波を受けるより、此儘庵室を守つて佛に仕へた方が氣樂かも知れないといふやうな心も生じた、さうかと思ふと眼底に先刻覽た雪の松島の名畫が歷歷として現はれて來る、美術の感興が鬱勃として湧いて來る、勇の世界觀が再び耳に聽えて來る。

春瓊尼は思ひに堪へかねて、佛壇の前に身を伏せて了つた。

峯の嵐か濱風ならでは訪ふものも無き庵室に、松原の彼方から人の聲がガヤガヤと聞えて來た、軈て障子の外から、

「御免下さい」

と何處やら耳に聽覺えのある男の聲がした、春瓊尼は漸く身を起して障子を開くと、其顏を見るなり、前に立つてゐる若い男の背後から、

「お母さまあ」

と走り寄つて縋り付いたのは光子である、今は脊丈も高く伸びて、長い下髮にリボンを結んでゐる美しい少女である。

前に立つてゐるのは以前から靑戸の背にゐた新藏と云ふ若者である、今の聲はその男が謗うたのである、その後方に銀野家の姑も立つてゐる、昔の良人甚三も面伏せな顏して佇んでゐる。

春璦尼はあまりの驚愕に茫然として爲さんやうを知らなかつた、嬉しいのか、悲しいのか、懷かしいのか、憎かしいのか、自分の心には矛盾した感想が一時に湧出して、何と挨拶すべきかも解からなかつた。

「これはこれは、斯んな處へ何うしてマアー

兎も角も此方へと三人を庵室へ迎へ入れた、若者は獨り濱邊の方へ退いた。

狭い庵室の内ながら親子四人が五年以來の邂逅に、人人は唯顏を見合つて急に言葉も出なかつた、中にも光子は戀しと慕つて來た母親の變り果てた姿を見て、頻に悲しく、又心細くなつて來た、姑も同じ想ひである、嫁よ嫁よと可愛がつた昔の小夜子の花の如な姿に較べると、墨の衣の尼姿の痛はしさ、手さへ足さへ水仕の業に荒れてゐる。

「マア小夜子や、おまへを斯んなに爲たのはネ、全くわたしが惡いんだよ、わたしが長く家を明けたのが惡かつたんだよ、今迄に嘸辛い思ひを爲たらうネー、ホントに氣の毒とも何とも言ひ樣が無いよ」

以前に變らぬ優しい調子で手を執らんばかりに前へ摺寄つた。

「何う致しまして、皆んなわたくしの我儘からでございます」

と春璦尼は沈んだ聲で答へながら、心を注けて姑の顏を見ると、以前の艷艷しい色は失せて、急に十年も歳を老られたやうに、額には小皺が殖えて髮の毛も半ば白くなつてゐる、嘸五年の間に御苦勞をなさつたらう、嘸御心配を遊ばしたらうと、銀野家の家庭の動搖した事が察せられた。

併し春璦尼の眼には姑の變つた事よりも、昔の良人甚三が顏も態度も一變して、思慮分別もあるやうな男らしくなつたのに驚いた、以前の甚三は何處とも無く泛泛してお坊さん育ちの若旦那であつたのに引換へて、眼前にある甚三の重重しく、引緊つて何となく貫目の付いた不思議さよ、以前は弛んでゐた口元も、今は智慧ある人のやうに緊まつてゐる、以前はきよろきよろと落着かなかつた眼光も、今は眸が据つて幾分か鋭くなつた、身體の坐勢にも中心が取れてゐる、色も日に焦けて黑くなつてゐる、皮膚も筋骨も充實して昔のやうな道治郎とは見えない、是れも僅の間に浮世の風波を凌いだ爲めか、苦い經驗でもして心が新しくなつたのかと、竊に銀野家の前途の多幸なる事を想像した、その甚三は母の言葉を打消して、

「イイエお母さまのお惡いのではありません、皆んなわたくしが惡いのです、わたくしが狐に魅れたからあんな事になつたのです、モシ小夜子や、今更おまへに會ふのは面目無いが、何卒光子に免じて容してお呉れ、わたしはおまへを忘れた事もあつたけれども、光子は一日だつておまへの事を忘れた日は無いよ、光子はおまへの噂ばかり言つてゐて、ホントに可哀想でならなかつたよ」

その光子は自分の熱心よりも、父の心の改まつた事を知らせ度さに、

「お母さま、お父さまはネ、お母樣が知れます樣につて此の寒中は毎日水をお浴びでしたよ、ネーお祖母さま」

と祖母を顧る、祖母は光子が善い事を言つて呉れたと頷いた。

「小夜子や、いきなり備んな事を言つてもおまへには解かるまいがネ、おまへの居なくなつた跡で、二の宮の女といふものが家へ來るやうになつたから、わたしは光子を伴れて須磨の家へ別になつてゐたが、その女が散散家を攪廻した上に、去年の春不埒を働いて店の者と一緒に家を逃出して了つたのさ、その時になつて甚三は初めて眼が覺めたよ、今になつておまへの難有い事が熟熟と判かつたよ」

　甚三は慚愧に堪へぬ態で頭を下げた、母親は我子と春瓊尼の顏の動搖する色を見較べた。

「其時から甚三は生れ變つたやうな氣になつて、何うかしておまへを搜し度いといふから、それならはまだ身代が半分に減つたといふ譯でも無し、何萬圓掛けても金に飽かして搜せない事はあるまいと、以前からおまへの顏を知つてゐる者ばかり六人撰り出して、おまへを見付けたものに壹萬圓の褒美を與ると云ふ約束で、去年から日本中歩かせてゐたんだよ、だけれども今年になつてもまだ行方が分からない、もしひよつとかしたらおまへは最う此世に生きてゐないか知らんと、心細く思つたがネ、甚三が伏見のお稻荷樣で伺つたのでは、必然此世に生きてゐるといふし、光子もおまへが家へ歸つた所を夢に見たといふんだよ」

　聽いてゐる春瓊尼は我子の心を察して哀れに堪へなかつた、自分も今迄に幾度か光子を夢に見たものを。

「ところがネ、東北を廻つてゐるあの新藏から、おまへが見付かつたといふ電報の來た時は、夢ぢやないかと思つた位だよ」

　姑の語る所に據れば、此の新藏といふ若者は東北の諸縣を廻つてゐる中に、松島へ立寄つて宮戸島に美しい尼さんがゐるといふ事を聽込んだのである、もしやそれかと直ぐに島へ渡つて、他所ながら春瓊尼の庵室を窺つたら、紛ふ方無き小夜子であつた、されば自分の顏を見られて、もしや逃げられでもしてはならぬと、何處までも内密に島人から春瓊尼の近狀を詳しく聽いた上、松島の旅宿へ戻つて神戸へ電報を打つたのである。

「わたし達はその電報を見ると、取るものも取敢へず夜汽車に乘つて直ぐに神戸を發つて來たがネ、汽車が遲いやうで遲いやうで、何んなに待遠だつたらう、光子なんぞは昨夜も一昨日も汽車の中で碌に寐やあしなかつたよ」

　光子は振返つて、

「お祖母さま、わたしはまだ些つとも睡くないのよ」

　旅の疲れは顏に見ゆれど、母に逢つた嬉しさに、唯いそいそと悦んで、春瓊尼の傍へ頻に身體を摩り寄せて行く。

三

　百萬長者の家庭に育つた光子の眼から見ると、此の庵室は我家の爐邊を飾る小座敷よりもまだ小さい、荒削りの柱に燻けた屋根裏の黑くむさ苦しき、斯んな處に母樣一人が棲んでゐられるかと思ふと、頻に情けない感じがする。

「お母さまはたつたお一人で此にいらしつたの、御飯炊も女中も居ないで」

　春瓊尼は笑つて頷いた、姑は四邊を見廻して、

「五年が間に嘸種種な難儀も爲たらうネー、何時から此へ來てゐるの」

　此の質問に對しては春瓊尼も默つてゐる譯にならず、尼寺へ入つた時から、三年前に此島へ來た事まで概略を物語つた、姑は一一同情して、

「ホントにわたし達の不行屆から、飛んだ苦勞を掛けたネー、その代りモー是れからは安心してお在よ、神戸へ伴れて歸つて、今度こそお前に心配をさせないよ」

春瓊尼は驚いて眼を瞠つた、伴れて歸るとの一言に心の不安を生じた顏色である、姑は深く思ひ入つた態度で、

「ネー小夜子や、以前の事があるからおまへに今更家へ歸れと云つても、直ぐに承知をしまいけれども、マア一通りわたしの言ふ事を聞いてお呉れよ、おまへが居なくなつてから、東京のお母さんも來なすつて種種面倒な事をお言ひだつたけれども、それはわたしが仲に立つて、お母さんの御滿足なさる樣に爲て進げたがネ、おまへの籍は何處までも其儘にして置いて、甚三の妻と云ふ肩書を取らなかつたよ、甚三が三の宮の女を引入れる時にも、わたしは何處までも強情張つて、決して本妻らしく奥樣とは言はせない、ホンの妾分にして御新造さんと言はせたんだよ、だけどもその女が光子に向つてお母さん顏をしたり、お母さまと呼ばせようとしたりするから、わたしは滅多に神戸へ光子を遣らず、もしも餘儀ない時にその女を呼ぶには小母さんと言はせるやうにして置いたのさ、その位に苦心したのはネ、もしやおまへの行方が知れたら、設ひ甚三の心は何うであらうとも、わたしの眼の黑い中は、何處までもおまへをわたしの嫁、銀野家の妻として取扱ふ所存でゐたんだよ、好い鹽梅にその女が逃げて行つて甚三も眼が覺めたから、今度はモー天下晴れておまへはわたしの嫁、光子の爲めには紛れ無いお母さまに違ひ無いよ、おまへの方に言分があらうけれども、何卒わたし達の心を察して、直ぐに神戸へ歸つてお呉れ、おまへに望みがあるなら何んな事でも叶へて進げるから、何卒今迄の事は水に流して、以前の通りに家へ戻つてお呉れよ」

　熱誠を籠めた姑の言葉に、春瓊尼はその心情を察して氣の毒には思つてゐれど、今は再び銀野家へ戻り得べき身の上で無い。

「不束なわたくしをお見捨も無く、御親切に仰しやつて下さいますのは何より難有うございますけれども、一旦佛門に入りました身でございますから、何卒此儘お見遁し遊ばして、お家の方は他所からお嫁さんをお迎へなすつて下さいまし」

　姑は言下に、

「イイエ小夜子や、甚三はおまへが歸らなければ生涯獨りで生活すと言つてゐるよ、モーモー外の女を見返りもしないと云ふ決心でゐるよ」

　母の言葉を機にして甚三は初めて前へ進み出た、今迄は母や光子を前に置いて、自分は一段引下がつてゐたけれども、一世の大事と春瓊尼の前に膝を進めて、悔悟の情を顏に露はしてゐる。

「小夜子や、わたしが一旦おまへを追出して置きながら、今更再び戻つて呉れと言へた義理では無いがネ、あの時は全くわたしの氣が狂つてゐたのだから、何うかモー其事は根に持つてお呉れでない、是れから先は決しておまへの心を無にしないから、何卒家へ歸つてお母さまや光子を安心させてお呉れ、おまへの事に就てはお母さまと光子が是迄何んなに心配したか知れないよ、お母さまはそれが爲めにお身體まで惡くなすつた位だ、今もしおまへが歸らないとわたしがお母さまや光子に申譯が無い、何事もわたしが惡いのだから何卒モー勘忍してお呉れ、此の通り手を突いて謝罪るから」

　良人は詫入る、姑は頻に口說く、光子はお母樣が歸らなければ自分を尼にして此の庵室へ置いて呉れろと言出した、春瓊尼も今は再び謝絶する言葉が無い。

「それでは何卒明日までお待ちなすつて下さい、今日は大切な佛樣の日で、是からお勤めを致さなければなりませんから、今夜熟く考へて置きまして、明日お返事を申上げませう」

　姑は半分聽いて早呑込に頷いた。

「ナニ、明日になれば歸るつて、そりやモーおまへの都合が一日位延びたつて誰方も無いが、その代り明日の朝は早く迎ひに來るよ、マアマア是れでわたしも安心した」

と自分では既う春瓊尼の承諾を得た心持でゐる、光子は子供だけに祖母の言葉を信頼にして嬉しさうな顏色。

「今夜は何處へ泊るの」

「さうさネー、松島へ歸つて明日の朝來るのは大變だし、此の近所に泊めて貰ふ處はあるまいかネー」

と春瓊尼に相談した、春瓊尼は當惑さうに、

「斯んな島でございますから、旅宿は一つもありませんが、月濱の庄屋さんの家が廣いので、往往泊めて貰ふ人があるやうでございます」

「ぢやその家へ往つて見ようか」

甚三はちよつと考へて、

「併し、突然押掛けて行つて差支があると困りますから、先づ新藏を遣つて樣子を見て貰ひませう」

濱邊に佇んでゐる若者を呼んで、月濱の庄屋へ宿の無心を賴みに遣つた。

四

新藏が月濱へ赴いた後、姑は初めて四邊の景色の佳絶なるに氣が付いた。

「ホントに佳い處だネー、松原の樣子は須磨や明石に似てゐるネ、わたしは餘つ程以前に先の旦那と松島見物に來た事があつたけれども、此の宮戸島へは來なかつたよ、甚三や、おまへは此へ來た事があるかえ」

「イイエ、わたくしも鹽竈から松島へ來て富山へ登つた事はありますけれども、此へは渡りませんでした、その鄰宮戸島の大鷹森は松島第一の景色だとは聞きましたけれども、風が惡くつて舟が出ませんでしたから」

光子は物珍らし氣に、

「大鷹森つて、此の前の山なの、そんなに佳い景色だつて」

姑は春瓊尼を顧みて、

「ネー小夜子や、此の山の上は佳い景色かえ」

「ハイ、一口に日本一だと申しますが、いかにも絶景でございます」

「是れからちよいと往つて來られないかネ、あんまり高くも無ささうだから、晩までに見物して來られるだらう」

「ハイ、山へお登りになつてお歸りには月濱の方へお降りになつてもおよろしうございます」

「ぢやちよいと往つて見て來ませう、新藏が歸つたら後から來て貰ふ事にして、山の上で待つてゐませう、ネー光子や、おまへに日本一の景色を覽せて進げませうネ」

斯う言つたら光子が嘸悦ぶだらうと思つてゐた、子供ながらも母の遺傳か風流に富んでゐて、景色や花が何よりも好きであるから、必ず勇んで出掛けるだらうと期してゐたのであつた、然るに光子は更に氣の進まない顏して、

「お祖母さまとお父さまとで往つてらつしやい、わたしは此に待つてゐる方が可いのよ、お母さまのお傍に居た方が可いのよ」

姑は其心根を感じた。

「オー爾うであらう、爾うであらう、あんなにお母さまを慕つてゐたのだから、少しでも餘計にお母さまの傍に居度いだらう、大鷹森の見物なんぞはこの次回に來た時悠悠能きる、それこそお母さまに案内して貰へば、島の中は何處でも詳しく見られる、ネー小夜子や、爾うぢやないか」

春瓊尼は默つて下を向いてゐる、深い感じを見せないやうに顏をば袖に隱してゐる、姑は想出したやうに、

「小夜子や、おまへの書置に光子の事を呉呉も賴んであつたが、此の兒ばかりはわたしが骨を

折つて育てたから、おまへに逢つても自慢が能きるよ、身體も蟲氣が無くつて強健だし、學校は今度三年になつたが、今迄何時でも一番だつたよ、それにおまへの血統といふものは爭はれないもので、圖畫やお習字は上の級の人よりも善く出來るつて、先生が大層褒めていらつしやるよ、今度おまへが歸つて來て、自分で何でも敎へて呉れるやうになつたら、何んな偉い娘が出來るだらう、わたしはそれが何よりも樂みだよ」

獨りで未來を想像してゐる、光子は最早馴馴しく、自分の綴り方が學校から出る雜誌に載つた事や、圖畫ではいつも甲上ばかり取る事や、以前は毎朝汽車で兵庫の學校まで通つた事なんぞを春瓊尼に物語つた、春瓊尼は光子に何か言はれる度に、心が一一強い電氣に打たれるやうな感じがする。

姑は最う以前の通りなお嫁さんの氣で、五年以來自分が苦勞した事を、今は昔話のやうに笑ひながら語つて聽かせた、獨り甚三は春瓊尼の本心を測り兼ねて、迂濶な事も言出さない。

軈て新藏が月濱から戻つて來て、庄屋の家は泊るのに差支が無いと報告した、それならば復た明日と、三人は暇を告げて庵室を立出でた、光子は暫しの別れにも名殘が惜しまれて、幾度か母の顏を振返つた。

春瓊尼は庵室の外に立出でて、人人の姿の松原の間に隱れ去るまで見送つてゐたが、忽ち庵室へ驅戻ると、障子を締切つて疊の上にパツタリ倒れた。

五

朝暾は昇つた、渺茫たる太平洋上に靉靆く横雲を破つて燃える焰を高く中天に放つかと見る間に、眞紅の大圓盤が光り眩く旋轉して水平線を離れた。

小屋の蔀戸を跳上げて崖の端へ立出でた勇は、毎朝の例の如く、朝暾に向つて新鮮なる山の靈氣を吸入したが、今日は此の山を離れて東京へ歸るかと思ふと、眼前の風物に轉た名殘の惜しまれて、平生よりも長く崖の上に立つてゐた。

昨日の内に荷物は大抵片付けた、小屋の始末は月濱の婆さんに賴んで行く事にして、最早下山の準備は出來たが、今の間にちよと瀧が浦に赴いて春瓊尼に暇を告げて來よう、日高けて人の眼の繁くなりては場合も惡いと、勇は飄然として裏山の道から麓へ降りて行つた。

三の谷から二の谷を踰えて一の谷に差し掛かると、昨日小夜子の爲めに折採つた山櫻が、朝の霞にほんのりと色を暈して一際美しく見えてゐる、小夜子と共に語り合つた芝山も、今は旭日を浴びて葉末の露が光つてゐる、勇は心の愉快に獨り微笑んで、樂しい未來を腦裡に描きつつ、麓の雜木林を過ぎて、長い松原に懸ると、向うから土地に見馴れぬ商人風の若い男が頻に四邊を見廻しながら歩いて來た。

勇は心の中に何者だらうと不審に思つた、今頃松原の奧から來たのは、春瓊尼の庵室より外に出て來る處は無い、何の用があつて庵室へ往つたのか知らんと、疑はし氣にその男の顏を眺めた、若い男も勇を見て吃驚してゐる、髮は蓬蓬と後ろへ垂れ、髭も伸びた儘の凄い顏、木綿の紋付に木綿の袴で、何さま仙人か行者か、唯人とは思はれない、しかもまだ朝まだきに裏山から降つて來るのは、今迄山に何を爲てゐたのだらうと、心に十分の危殆を抱いたが、併し斯ういふ人こそ尙ほ調べなければなるまいと、勇氣を鼓して傍に進んだ。

「モシ、失禮ですが、あなたはその邊で美しい尼さんをお見かけになりませんでしたか」

勇は驚いて立停まつた。

「ナニ尼さんを、尼さんと云へば春瓊尼さんの外にないが、春瓊尼さんは庵室に居ませんかえ」

「今朝まだ薄暗い内から庵室へ參りましたが、尼さんの姿が何處にも見えません」

と聽くより勇は矢庭に進み寄つて若者の胸倉を執つた。

「コレコレ、おまへは何の用があつて夜の明けない内から女一人の庵室へ出かけて行つた、春瓊尼さんの美貌に迷つて良からぬ心を發したな、ウヌ春瓊尼さんに危害でも加へて見ろ、生かしては置かんぞ」

と鬼を拉ぐ權幕で掴み殺さん勢ひ、勇は全く小夜子の爲めにはそれほどの意氣組を有つてゐるのである、若者は驚いて苦しさうに、

「御免なすつて下さい、決してそんな譯ではございません、旦那樣や御隱居樣の御供をして參つたのです」

「旦那樣や御隱居樣のお供だト、全體おまへは何者だ、何の用があつて春瓊尼さんの處へ往つた」

「わたくしは神戸の銀野家にゐる若い者でございます」

「ナニ銀野さんの店の者か」

と勇は初めて手を放したが、心は一層懸念が深くなつた。

「銀野さんの人が何うして此處へ來なすつたか、その仔細を話してお吳れ、場合に依つては僕も力になつて進げるから」

若者は此の人物こそ春瓊尼の行方を知つてゐるに違ひ無いと思つた。

「實はあの尼さんは、以前わたくしどもの家の奥樣であつたのを、仔細があつて今迄行方が知れませんでした、それがやつと此島にゐなさる事が判かつて、御隱居樣と旦那樣とあの奥樣のお子樣とお三人で、昨日お迎ひにいらしつたところが、明日の朝まで待つて吳れろといふ御返事ですから、昨夜は庄屋さんの家へ泊つて、今朝薄暗い内からお迎ひに行きましたら、尼さんの姿は何處にも見えません、濱邊の方から松原の中を搜しましたけれども、何うしても見當りません」

松原を吹渡る風に伴れて、

「お母さまあー、お母さまあー」

と女の兒の狂ほし氣に叫ぶ聲がけたたましく聞える、勇は若者に返事もしないで、默つて聲ある方に驅けて行つた。

「モシモシ、あなたは光子さんぢやないか、僕ですよ、怖いものぢやない、鳥海の勇ですよ」

光子は傍へ馳寄つた。

「小父さん、お母さまを御存知ありませんか」

六

搜した、搜した、島中搜した、銀野家の人人も搜した、勇も搜した、溜が浦の漁夫に頭取も手傳つて搜して吳れた、月濱の清六の婆さんも搜して吳れた、溜が浦から小鍋崎、里の浦から月濱の岬まで津津浦浦を搜したけれども、春瓊尼の姿は何處にも見えなかつた。

一同は尋ねあぐんで一旦溜が浦へ引上げた、主の在らぬ庵室に寄り集つて、彼是と評議を凝らした、勇は頻に沈吟して、

「銀野さん、斯んなに搜して見付からなければ此島に居ないものと思はなければなりませんが、まだモ一つ尋ね殘した處がありますから、此上は其處を搜すより外に途方がありませんネ」

「それは何處です」

と甚三は不審顏に訊いた。

「裏山になつてゐる鰐が淵です、其處へ行くには道が非常に惡いから、光子さんには到底も歩けますまい」

「イイエ、わたしは何んなに道が惡くつても往

けますから伴れてつて頂戴」

光子は母を尋ねるのに一生懸命である、先程から足は疲れて棒のやうになつてゐるけれど、母親を捜し出さない内は死んでも休まない決心である、漁夫の老爺は眼を細くして傍へ寄つた。

「嬢つちやんは俺が背負つて進げませう、斯んな良いお兒さんがありなさるのに、春瓊さんはマア何處へござらしつたらう、その癖昨夜に限つて夜半の二時頃までお勤めの聲が聞えてゐましたつけが—」

勇は心中に頷いた、終夜の勤めの聲、それを最後の勤行として夜半に庵室を抜け出したか、それならてつきり鰐が淵と、自ら先に立つて松原から裏山の麓へ出て、樵夫の道さへ痕も無き、野棘や灌木の茂れる中へ分け入つた。

谷を降り坂を登り、二の谷の裾の海に臨んだ岸へ來ると、その先は海岸が削つたやうに百尺餘りの高さに屹立つてゐる、此の懸崖の上を一町餘も登つた處が宮戸島の魔所と稱せられる鰐が淵である。

鰐が淵とは大鷹森の山脚が幾千萬年の昔から、太平洋の荒波に削り去られ刳り去られて一大深淵をなしたものである、虎の頸が海へ突出たやうな大きな岩の下に、深さ幾千仞とも知れぬ潮水が紺碧の色をなして、溶けた鉛のやうに重く静かに大きな渦を巻いてゐる、上から蔽ひかかる樹の影を水に映して、葉でも枝でも塵でも砂でも、落ちて来るものを永久に渦の中へ吸込んで了ふ、風が無ければ此の淵は悪魔の眠つたやうに物凄く沈默してゐる、一たび風が起ると、渦巻く水が速さを増して水柱が高く騰がるのである、毎年三月十五日には島人が大きな白木の箱に赤飯を一杯盛つて、水神様に供へると云つて、岩の上から此の淵へ投げ込むが、直ぐ水の中へ巻き込まれて、箱の破片一つも水の上に出た事が無い、鰐が棲んでゐるか、鮫が棲んでゐるか、此の近傍で難船した船人の身體は一つでも浮上つた例も無い、漁夫も懼れる、牧者も懼れる、山の樵夫も懼れて此の上の樹は斫らないことになつてゐる。

懸崖の上の斧鉞を入れない昔ながらの樹木が鬱蒼として日光を漏らさない。蔦や葛が岩に絡らんで、進むべき道も無いのを、山に慣れた勇は樹の根に取付き岩角を傳はつて、險しい處へ來ると、光子の手を執つて引上げて遣つた、光子は野棘の棘で白い足から血が流れてゐるけれど、痛さも忘れて勇の後から随いて來たが、忽ち眼敏く向うを視て、

「アラ、彼處の樹に何か書いてあつてよ」

勇も光子も樹の下へ走り寄つた、遅れて來た人人もそれを聴くと急に氣が張つて飛ぶやうに登つて來た。

岸に茂んだ柳の木の皮を白く削つて、筆勢麗はしく一聯の文字が記してある、勇は高聲に讀下した。

流轉三界中　恩愛不能斷
棄恩入無爲　眞實報恩者

姑は問ひ返した、

「何ういふ譯でございます」

勇は語氣も沈痛に、

「三界の中に流轉して、恩愛斷つ事能はず、恩を棄てて無爲に入るは眞實の報恩者なりと云つて、つまり僧になる時の偈文です」

「ぢや小夜子は……」

と言つた切り急に眼を閉ぢて了つた。光子は絶え入るやうな聲で、

「お母さまは此へお入りになつたのう」

地上へバタリと身を伏せた、甚三は柳の枝に手を懸けて延上つて下の淵を覗いた、誰も彼も無言、凄絶の氣で沈默の間に徹つて行く、

勇は暫し深淵を睨んでゐたが、看る中に鐵の

色が變つて、髮の毛がざわざわと動いた、忽ち懐中へ手を入れて急いで取出した卷物は、肌身離さず持つてゐた小夜子孃の肖像畫、卷いた紐を解くより速く、パッと披けて兩手に捧げ、深淵臨んで投込んだ、

「オーイ、小夜子どのー、春瓊尼どのー、日頃讀まれる發願文に僞り無く、彼國に到り已つて六神通を得給はゞ、我等の爲めに願くば姿を此に現はし給へ、此世の名殘に今一度御身の姿を觀せしめ給へ、春瓊尼どのー、小夜子どのー」

全身の血を絞り出すやうに叫んだ聲は、山と海とに反響して物凄まじい。

颯と吹來る山風に煽られてヒラヒラと舞下つた卷物が、二つ三つ輪を卷いて水の中に沈んだ刹那、海水俄に沸立つて、中央から太い水柱が岩角の前まで高く噴上つた、水柱の尖頭が珠のやうに碎けて四方へ颯と飛散つた烟の中に、春瓊尼の姿が悠然と現はれた。

墨染の衣に五條の袈裟、片手には珠數を持ち、片手には花籠を携へて、姿は以前に變らねども、既に十方界に入つて正定不退の覺位に登られた圓滿眞如の御粧ひ、花にも優る御顔に心身快樂の瑞相を顯はし、珠を連ねた眼より攝取の光明を放つて徐ろに人人を照し給ふ、その美しさ氣高さは復た是れ人間界のものならず、淨穢境を異にして寂光の都より出現し給ふと思はれた。

それを見ると勇は岩の上に跪いて一心に禮拜した、光子は何にも言はないで神妙に掌を合せて拜んでゐる。姑も拜んだ、甚三も拜んだ、漁夫も、婆さんも、我を忘れて合掌した。

鰐が淵の魔所も春瓊尼の光明に照らされて、菩薩の淨土と變じた、海中には玉を聯ね、樹樹の梢に花の吹いた景色である。

良あつて春瓊尼の姿は眼に見えぬ守護神に囲繞せられて次第に高く昇つて行つた。人人は顔を揚げてアレよアレよと觀てゐる中に、春の霞に包まれて大鷹森の峯の上から、行方も知らず雲の中へ光を殘して隱れ去つた。

* * *

春風秋雨十餘年、光子が立派な娘となつて父と共に再び此の島を訪問れた頃、全世界の美術家を驚動せしむべき一大名畫が大鷹森の藁小屋にて漸く仕上げられた、筆者は木食仙人の鳥海春帆、畫題は春瓊尼が鰐が淵より昇天の圖であつた。

年譜

文久三年
十二月十八日、三州豐橋に生る。村井家はもと松平伊豆守の藩士なり。祖父、父、ともに儒者にして砲術に長ず。

慶應元年
家人に伴はれて初めて江戸に出づ。年齒わづかに五歳。

明治二年
小學校に入る。家貧しくして婢僕を傭ふの資なきを以て、朝夕家事の手助けをなしつつ通學す。

明治七年
外國語學校露語科に學ぶ。

明治十年
極度の勉强のため健康を害したると、學費の乏しきとのため、同校を退く。爾來、小新聞の校正係、銀行員、煙草の行商業をなして、江湖に放浪すること數年。

明治十八年
志を立てて渡米、サンフランシスコ、オークランド等に遊ぶ。

明治二十年
母の病篤しと聞き、倉皇として歸朝す。

明治二十二年
當時の報知新聞社長矢野文雄氏に識られ、報知社の客員となり、餘暇を以て東京專門學校に文學を學ぶ。

明治二十三年
『處女作』『小說家』を「報知新聞」に連載す。ついで『大福帳』執筆。

明治二十四年
『小猫』を出す。文名漸く高し。

明治二十五年
『紀文大盡』『近江聖人』『飛乘太郎』『新橋藝者』『芙蓉峰』『關東武士』『衣笠城』を出す。

明治二十六年
『寫眞術』『櫻の御所』『譽の兜』『小弓御所』『雨美人』『深山美人』『鎧の風』『松が浦嶋』

明治二十七年
『渡守の娘』『傳書鳩』『風船緣』『川崎大尉』『町醫者』『桑の弓』『夜の風』の諸作を出す。

明治二十八年
報知新聞社長箕浦勝人氏より同紙編輯長に任ぜらる。當時同社は社業の衰微その極に達し、わづかに三千五百部の紙數を出すに過ぎざりしが、紙面改革の結果、一年の後には發行部數二萬を超ゆるに至る。

明治二十九年
『朝日櫻』『血の涙』『鷹の羽風』
『沖の小嶋』『西鄕隆盛傳』

明治三十年
『日の出島』を發表す。年を閱すること六年、千二百回、卷を分つこと十一卷の多きに及ぶ。蓋、希有の長篇小說なり。

明治三十三年
七月五日、尾崎多嘉子を迎へて室となす。夫人は故大隈侯の再從姉妹にして故後藤伯夫人の令姉なり。

明治三十五年
『釣道樂』を出す。

明治三十六年
『酒道樂』『女道樂』を公にし、次いで『食道樂』をあらはして大好評を博す。續いて『小僧讀本』『下女讀本』の著あり。

當時小田原に閑居して悠々著作に耽りゐたるが、會々日露戰爭勃發するや、再び聘せられて出でて報知新聞の編輯を主宰す。

日本人の特質を廣く外國人に知悉せしむるの目的を以て英文小說『花』『兩古屋』の二篇を公にす。

明治三十九年

『婦人世界』編輯顧問となる。爾來同誌にのみ掲載す。

五月『婦人の日常生活法』を執筆す。

明治四十年

『婦人一代の生活法』『男女戀愛論』

明治四十一年

『結婚論』を公にす。

明治四十二年

『夫婦情愛論』

明治四十四年

『人情論』

明治四十五年(大正元年)

小說『子寶』執筆。大正二年に至る。

大正三年

『家庭日常生活法』

大正五年

伊豆長岡の別邸に三十五日間にわたる長期の斷食を實行し、その結果を公表す。

大正六年

小說『小松嶋』を發表す。

大正七年

食鹽の人體に有害なることを知り、一切の火食を斷ち、蕎麥粉を主食として、生水、果實の外、何物をも口にせず。この實驗は六ケ年の長きにわたれり。

『難病の治療法』を公にす。

大正九年

九月、武州御嶽山に穴居生活をはじむ。翌年五月に至る。

『感興錄』の稿を起す。

大正十年

『武州御嶽山中生活の實驗』を公表す。

大正十二年

『支那研究』『健康と食物の研究』を公にす。

直腸癌を病む。一元同化力によりて全く治癒す。

大正十三年

肋膜炎を病む。木村博昭國手の漢方薬によりて治癒す。

大正十四年

『一元同化力』

大正十五年

冬、動脈瘤を病む。

昭和二年

病漸く重きを加へ、七月三十日、遂に平塚の別邸に歿す。行年六十五歲、谷中永久寺に葬る。

三男三女あり。

昭和三年五月二十五日印刷
昭和三年六月　一　日發行

現代日本文學全集　第三十四篇

版權
所有

著作者代表　中村吉藏

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番
一一二二番
一一二三番
一一二四番

株式會社秀英舍印刷